ネギドラ！　ネギパーティー＋α　異世界へGO！？

カゲシン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ネギドラ！　ネギパーティー＋α　異世界へＧＯ！？

【Ｎコード】
Ｎ１６１８Ｋ

【作者名】
カゲシン

【あらすじ】
麻帆良祭最終日、未来へと帰ろうとした超だったが突如魔方陣が暴走！？　その場にいたネギ達は全員光に飲み込まれ、その場から姿を消してしまった。そして気づいたとき広がっていた光景は……
魔法先生ネギま！とＤＲＡＧＯＮＢＡＬＬＺのクロス小説、私カゲシンの処女作となります。どうか応援よろしくお願いします！

２月２日より人気投票開催、３月１９日をもって受け付けを終了いたしました。皆様、投票ありがとうございます。

プロローグ（前書き）

プロローグということもあってかなり短いことをご了承ください（本編も短くなるかもですが）前半の台詞回しはネギま！１８巻をそのまま使ってます、スイマセン

プロローグ

埼玉県麻帆良市　麻帆良学園

麻帆良祭最終日

「では……私はそろそろ行くとするネ」

「超さん」

学園内のとある一エリア

そこにそびえたつ石柱の上に、

少年、ネギ・スプリングフィールドと

その生徒、超鈴音含む数名が立っていた

その下では、超が先ほど取り出した家系図をめぐっての争奪戦が未だ続いていた

「どうしても……なんですか？」

「いや……楽しい別れになたヨ、礼を言うネギ坊主。私には上々ネ」

今、一人の生徒が元いた世界、帰るべき世界へと帰ろうとしていた

「でも……本当にこれでいいんですか！？　超さん、あなたは何一

つ……」

そうしようとする超を止めようとするネギ

ここに残っていてほしい、自分の、大事な生徒として

「いや……案ずるなネギ坊主。私の望みは既に達せられた」

超はネギの言葉に笑顔を返す

「え……そ、それはどういう……」

「わが望みは消えた、だが私はまだ生きている」

超の周りから魔力があふれ出す

その超の頭上には巨大な魔方陣

それに吸い寄せられるかのように、超の身体が浮き上がっていく

「ならば私は、私の戦いの場へと戻ろう。ネギ坊主、君はここで戦い抜いていけ」

「超さん……」

すると

「な、なにごとネ?」

突如、超の頭上の魔方陣がおかしな光を放ち始めた

超の驚きようからして、もともとこういう仕様というわけではない

「超さん、どうしたんですか！？」

「ネギ坊主！古！みんなここから離れるネ！」

超は直感した

マズい！

このままネギ達がここにいると危ない、と

「ネギ坊主！」

「ネギ先生！」

「ネギ！」

そんな時、超らに近づく三人が

「楓さん！龍宮隊長！コタロー君！」

「さっきからすごい光がするので、何事かと思って来てみたんでござるよ」

「なんや！？超姉ちゃん浮いとるで！」

空中の超を指差すコタロー

「早く！早くここから逃げ……」

超が言い切る前にそれは起こった

魔方陣から、まるで破裂した風船のように光が飛び出した

閃光弾の何倍もあるようなとてつもない光が

すぐ近くにいたネギ達八人（超は数に入れてない）はいうまでもなくそれに飲み込まれ、

石柱の下にいた明日菜達も、気づくやいなや走り出したが同じようにすぐ飲み込まれていった

光はネギ達を飲み込むと、ほんの数秒で収まった

「な……ネギ君達は一体……」

現場にタカミチが急行したがもう遅かった

先ほどまでネギ達がいたその場所には、既に誰もいなかった

プロローグ（後書き）

どうも、実はまだ学生だったりするカゲシンです。

あらすじにも書いたとおり処女作ですので、ご指摘などあったらよろしくおねがいします。

ちなみに、飲み込まれたキャラをリスト化すると

ネギ　アスナ　このか　刹那　のどか　夕映　ハルナ

龍宮　茶々丸　葉加瀬　五月　朝倉　さよ　コタロー

楓　千雨　古　まき絵　いいんちょ　超となります

結構大人数です（汗）

全員登場させられるように頑張ります

では、次回またお会いしましょう！

第1話　パオズ山の超戦士（前書き）

二回目の投稿です。やっぱり短くなってしまいました……スンマセン。今回出てくるＤＢキャラはタイトルの通りです。安直なタイトルですね、アハハ。

第1話　パオズ山の超戦士

「うーん……ここは……」

少年、ネギ・スプリングフィールドの両目が開いた

身体を起こし、手の甲で両目をこする

（そうだ、さっきの僕はあの光に飲み込まれて……）

だんだんと意識がはっきりとしてきたネギ

そして、あることが頭をよぎった

（他のみんなは！？）

ネギは辺りを見回す

「コタロー君！いいんちょさん！」

少し離れた場所にコタローとあやかがいるのを見つけた

すぐさま二人のそばへ駆け寄り、それぞれの身体をゆする

「んあ、ネギ？」

「ネギ……先生？」

二人はすぐに目を覚ました

どうやら先ほどまでのネギと同じく、気を失っていただけのようだ

そのことに安堵するネギ

意識がはっきりしてきた二人は身体を起こし、服に付いた砂埃を払いながら立ちあがった

「なあネギ、ひとつ訊いてもエエか？」

「何？コタロー君」

「ここ何処や？」

そう、三人がいたのはさっきまでの場所ではなかった

周りは木々が生い茂り、鳥がさえずり

近くの川からは綺麗な水が流れていた

「僕もそれが気になってて」

「少なくても、俺はこんなとこ麻帆良じゃ見たことあらへんな」

「やっぱり？」

「ああ、十中八九ここは学園外やな」

「ということは、誰かがここまで運びこんだってことですの？」

「いや、運び込んだっちゅーよりは、あんときの光におそらく転移魔法の作用が……」

「コタロー君コタロー君！」

「ま、魔法？」

「しもうた！」

いつの間にか二人の会話に入り込んでいたあやか

あわてて口をふさぐコタローだがもう遅い

「魔法って……どういうことですの！？ネギ先生！」

「いやあの、これは、その」

ただあたふたとするネギ

隣でコタローも回避法を考えるが浮かばず

ネギは、初めて麻帆良に来た時と同じ感覚を覚えた

明日菜に魔法を見られ、言い寄られた時と同じ感覚を

モウ、話スシカナイ……

「いいんちょさん、実は……」

ネギは覚悟を決め、あやかに全てを話した

自分が魔法使いであること

その修業のために麻帆良に来たこと

それをあやか以外にも何人か知っていること

その中でもエヴァンジェリンは自分の師匠であること

超が未来人であることｅｔｃ．．．（仮契約のことは伏せておいた）

あやかはそのことを素直に信じてくれた

「魔法使いだろうと何だろうと、ネギ先生はネギ先生ですわ」

「いいんちょさん」

すると、

ガサガサッ

「確かこの辺だと思ったんだけど……あれ、君たち誰？」

生い茂る木々の中から一人の少年が現れた

歳はネギやコタローと同じ程

黒髪で、紫の道着をまとっていた

「ひょっとして、さっきの光の正体って君たち？」

「そ、そっちこそ誰や！」

突然の出来事に驚き逆に、怒鳴りながら聞き返すコタロー

少年はおびえることなくコタローの質問に答えた

「僕？僕は悟飯、孫悟飯っていうんだ。君達は？」

さらに聞き返され、一瞬たじろぐコタロー

「い、犬上小太郎」

コタローに二人も続く

「ネギ・スプリングフィールドです」

「雪広あやかですわ」

偉大な父を持つ、二人の少年が初めて出会った瞬間であった

第1話　パオズ山の超戦士（後書き）

ついに悟飯登場！今後もＤＢキャラはどんどん出してくつもりです。

ちなみに、ネギ達がいる世界は時間軸で言うと、

「セル編からもうじき一年」頃となっています

なぜ「もうじき一年」にしたか？

分かる人はすぐに分かるはずです

ではまた次回！

第2話　地球だが地球じゃない？（前書き）

前回よりはだいぶ長くできました。反動で次回はまた短くなります。
今日は時間に余裕があるので、今日中にもう一話投稿可能っぽいです。ではどうぞ！

第2話　地球だが地球じゃない？

「ところで話は戻るけど、さっきの光の正体って……」

「えと、その……」

ネギは答えるのをためらった

本当のことを言えば、魔法のことを言う必要があるからだ

「ネギ、喋っても問題ないと思うで」

隣からコタローが囁いてきた

「え！どういうこと？」

「あいつ、かなりできる、相当の腕や。表の世界じゃ考えらんほどな。ちゅーことは……」

「僕らと同じく、裏の世界に通じてる人ってこと？」

「恐らくそうや」

コタローの言葉には説得力があった

ネギは悟飯に全てを話すことにした

「はい、実は……」

グーーーーー

「へ？」

間の抜けた声を出すネギ

突如鳴った腹の虫、出所はネギとコタローだった

「そういえば何も食べてなかったね」

苦笑するネギ

「せやったな……腹減ったー」

腹を押さえるコタロー

「あの、よかったらウチで何か食べる？」

この悟飯の言葉に真っ先に飛びついたのはコタローだった

「エエんか！？」

「うん、話はご飯が済んでからでいいから」

三人は悟飯の言葉に甘えることにした

家は二、三分ほど歩くと到着した

「お母さん、おじいちゃん、ただいまー」

すると奥の部屋から一人の女性が現れた

彼女が悟飯の母親なのだろう

「悟飯ちゃんお帰り。おや、後ろの三人はどなただ？」

「あ、さっき森で道に迷ってるところを見つけたんだ」

ネギ達をチラリと見る悟飯

先ほどと同じように自己紹介をする三人

「お腹が空いてるみたいなんだけど、お昼ご飯余ってたっけ？」

「ああ、まだ少し残ってるだぞ。ちょっと待ってろ」

悟飯の母はネギ達を家へ上げてくれた

お礼を言いながら、上がらせてもらう三人

座ってろと言われ、イスに座る三人

「おや、ずいぶん賑やかかと思ったらお客さんか？チチ、悟飯」

「あ、おじいちゃん」

「おっ父」

「「「！！」」」

奥から出てきた大男に驚く三人

ゆうに二メートルはあろう背丈

また、縦もでかければ横もでかい、正に大男である

ショックで最初声も出なかったネギ達だったが、

すぐ落ち着きを取り戻し、同じように自己紹介を行った

「お待たせしただ、お昼の残り温めなおしてきただぞ」

自己紹介も終わり、ちょうどいいタイミングでチチがキッチンから戻ってきた

手に持った皿をテーブルに並べていく

「さ、遠慮せずに食うだぞ」

「「「いただきます」」」

料理を食べ始めるネギたち

ものの数分で完食してしまった

「ごちそうさまでした」

「いやーホンマ美味かったわ」

「とっても美味しゅうございました」

「ところでネギ君」

悟飯に話しかけられ、そっちの方を向くネギ

「さっきの話、いいかな？」

「はい、悟飯の言う光の正体は恐らく僕達です」

「俺ら、麻帆良学園っちゅーとこから飛ばされて来たんや」

コタローも会話に加わる

一方悟飯は首をかしげていた

「えっと、その麻帆良学園っていうのはどこなの？」

「はい、埼玉県にある私立学校です」

この質問は予想していたネギ

あれほどの強大な力を秘めた光なら

埼玉県外に飛ばされていてもおかしくないと思ったからだ

しかし、ここから先は完全にネギの予想の範疇を超えていた

「サイタマケンって？」

「え？」

「埼玉県は埼玉県や、日本の関東にある……」

「ニホンって？」

その時、ネギの頭に嫌な予感が走った

「チチさん、世界地図か何かありませんか？」

「え？」

「地球儀だったらそこにあるけど」

悟飯が本棚の上を指差す

ネギはイスから降り、本棚に駆け寄り地球儀を取って見た

「なっ！」

ネギの驚きようが気になり、コタローとあやかもイスを降りる

「どないしたんやネギ」

「ネギ先生」

「二人とも、これ……」

地球儀を二人のほうに向けた

「んなアホな！」

「そんな……」

その地球儀は、ネギ達の知っている地球儀ではなかった

どこを探しても日本なんて島国は描かれておらず

また、ほかの大陸を見ても知っているのは一つもなかった

「つまりここは……」

「俺らがいた地球とは違う、別の地球……」

二人の言葉に頷くネギ

本当はネギだって、こんな事実は認めたくはない

「それじゃあアスナさん達は……」

「わかりません。僕らと同じくこの世界に飛ばされたか、それとも違う世界へ飛ばされたか……」

表情が険しく、暗くなる三人

「ってことはネギ君達、別世界から来たってこと?」

「悟飯さん!」

いつの間にか話を聞いていた悟飯に驚くネギ

「それならいい方法があるよ」

「いい方法？」

「ドラゴンボールを使うんだよ」

「「「ドラゴンボール？」」」

ネギたちは口をそろえて言った

「うん、この世界にはどんな願いでも叶えてくれる不思議なボールがあるんだ」

「どんな願いもやて？そんじゃあ不老不死にしろとか……」

「うん、できるよ」

驚愕する三人

この後さらに詳しいことを悟飯から聞いた

ドラゴンボールは七つあり、全部そろえてようやく願いが叶うこと

その際、神龍〈シェンロン〉という龍が出てくること

知り合いがそのレーダーを持っていること

願いを叶えると世界中に飛び散り、一年間は石になっていること

そして、願いは全部で二つ叶えられるということ

「なるほど、ということは一つ目の願いでみんなを一箇所に集めて……」

「二つ目の願いで、みんなまとめて元の世界へ戻そうってわけやな」

「そういうこと」

「それでしたら早速、それを探しに参りましょう」

「待ってあやかさん。実はまだ前の願いを叶えてから一年経ってないんです」

「あとどれくらいなんですの？」

「ちょうど三週間です」

三週間

日数で言えば二十一日、かなり長い

三週間と聞き、それまで寝泊りをどうするかと考えていたネギだったが

「だったらそれまで、ウチにいればいいだ」

「チチさん！」

「いいんですの？」

「家族が三人増えたと思えばいいだ」

「ありがとうございます」

チチの厚意により、なんと三人は居候させてもらえることになった

早速空き部屋に案内された

「三人一部屋で狭いかもしれねえけどエエだか？」

「はい、お部屋を貸していただけるだけで充分ですから」

チチに感謝の言葉を述べるネギ

一方あやかは

（ああ、ネギ先生と同じ部屋……）

前々からの夢であったネギとの同室に、ただただ喜んでいた

するとネギがあることに気づく

「あれ？コタロー君は？」

辺りを見るがコタローの姿はない

「ああ、さっき悟飯ちゃんと一緒に外に出てっただぞ」

「悟飯さんと外に？」

悟飯の自宅から少し離れたところにある平地

先ほどまで悟飯が修行をしていたその場所に二人はいた

「話って何？コタロー君」

「悟飯、お前武道家なんやろ？」

「え？うん、そうだよ」

「俺と勝負や！」

「え！？」

コタローは拳を握りしめ、気を開放した

第2話　地球だが地球じゃない？（後書き）

いよいよ次はバトル！

なのですが、あまり期待しないでくださいね？

駄文ですし、短いですし

あと、訂正が若干

ＤＢ世界にはカモも飛ばされてます

リストから完全に忘れてました、スイマセン

ではまた次回！（恐らく今日中にですが）

第3話　ようやくバトル！悟飯ＶＳコタロー　（前書き）

本日二本目です。こんなこと春休み中しかできないと思うのでやっちゃうことにしました。僕は投稿する前に一旦、原稿用紙に書いてから打ち直すのでまとめ投稿は楽なんです。三月中にあと2，3回できたらいいなあなんて思ってます。それでは本編へどうぞ！

第3話　ようやくバトル！悟飯ＶＳコタロー

「勝……負？」

「せや！この世界のやつの強さ、肌で感じたいと思ってな」

コタローはすでに準備万端

だが悟飯は乗り気ではなかった

「でも、ケガとかしたら」

「アホ！武道家が対戦相手のケガ心配してどないすんねん」

コタローはやれやれと言わんばかりの顔をし、その直後

「こんのやったらこっちから行ったる！」

悟飯に向かって突っ込んでいった

気のこもった右パンチを放つ

「わわ、ちょっと！」

それを手で受け止める悟飯

「まだまだ！」

コタローは攻撃の手を緩めない

胴体や顔をめがけて、さっきよりも速いパンチを連続で放っていく

だが悟飯はそれを難なく受け流す

「くっそお！これなら……」

攻撃に蹴りも混ぜてきたコタロー

だがそれでも事態は好転しない

悟飯は反撃することなく、ただただ受け流していく

コタローは一種の苛立ちと焦りを覚えていった

「せやったら……」

バックステップでいったん距離をとるコタロー

（遠距離攻撃で体勢崩させて、その隙を狙うしかあらへん！）

コタローの周りにあった気が黒く染まり

狼へと形を変えていく

コタロー得意の狗神である

コタローが指示を出すと、それらは何匹にも分裂し悟飯に飛び掛っていく

「疾風黒狼牙！」

飛んでそれらを回避する悟飯

（な、何今の？気が狼へと形を変えた？）

それを待っていましたとばかりに悟飯に近づくコタロー

さっきと比べ段違いに速い

足に気をため、地面を蹴ることで移動する技、瞬動である

（もうこれに賭けるしかあらへん！）

コタローの拳に、さっきと同じ黒い気（狗神）が集まっていく

「狗音爆砕拳！」

今のコタローにできる最大の一撃だった

空中で交錯する二人

そしてその直後

「ぐあっ！」

コタローの背中に鈍痛が走り、地面に叩きつけられた

立ち上がろうとするコタローだが、腹にもダメージが及び上手く立てない

（んなアホな……あれを手で受けながらもう片っぽで肘打ちやと？）

コタローの元へ駆け寄る悟飯

「大丈夫コタロー君？」

「平気や、そこまでヤワにはできとらん」

悟飯が差し出した手をはじき、なんとか自力で立つコタロー

「完敗や、お前すんごい強いんやな」

「そ、そんな……」

「でもうれしかったで」

「え？」

「最後の俺の一撃のとき、あんときは本気で戦ってくれたからな」

最初の攻防で攻撃を受け流され続けていたとき

コタローの胸の中には苛立ちと焦りだけでなく

本気で戦ってこないという悔しさもあった

だが最後のガードと攻撃、悟飯は本気だった

「だってコタロー君の狼攻撃、初めて見てびっくりしたんだもん。

本気にもなっちゃうよ」

「よう言うわ」

互いに笑いあう二人

すると、木の陰からネギが出てきて二人の元へやってきた

「コタロー君大丈夫？あんなすごい一撃喰らって」

「ネギ、見とったんか？」

「うん、邪魔しちゃいけないと思って」

ネギは先ほどの戦いを途中から観戦していた

拳を交えずとも、悟飯の強さを知るには充分だった

「でもコタロー君は強いよ。そうだ、コタロー君も天下一大武道会に出てみない？」

「天下一大武道会？」

「うん、二週間後にとっても大きな武道大会が行われるんだ。僕も出るんだよ」

「それって、俺らみたいなのでエエんか？」

「うん、年齢、性別、出身地に関係なく出れるんだ」

「面白そうやな。俺は出る、ネギは？」

ネギのほうを向くコタロー

「僕も出る！それに……」

「それに？」

「そこで古老師や楓さん達に会えるかもしれないしね」

なるほどと思い、手のひらをポンと叩くコタロー

世界中から強いやつが集まると聞けば、古は間違いなく参加するだろうし

楓や刹那ならそれに加え、ネギと同じようなことを考えるかもしれない

「よーし、そうと決まれば早速修行や！」

「うん、悟飯さん、よければご指導のほうお願いできませんか？」

すると悟飯が苦い表情をしてきた

「さっきから気になったんだけど、敬語はやめようよネギ君。大体僕ら同い年なんだし」

「え……えーと、悟飯君、指導お願いできるかな？」

悟飯の表情が明るくなった

「うん！」

そして笑顔で頷く

こうしてネギ、コタロー、悟飯は親友となり

天下一大武道会へ向け修行することとなった

ちなみにその日の夜

（ネギ先生と同じ部屋、ネギ先生と同じ部屋、ネギ先生と同じ部屋）

あやかが興奮し、一晩中寝れなかったのは言うまでもない

第3話　ようやくバトル！悟飯ＶＳコタロー　（後書き）

初めてバトルを書いたのですがどうだったでしょうか？

この話で一旦ネギｓｉｄｅは終わりです。

次回から別キャラｓｉｄｅで数話やります。

これをローテーションっぽく繰り返します。

ネギたちが再会するまでは当面この方式となると思います

あとコタローの狗神、もし間違ってたらご指摘のほうお願いします

ではまた次回！

第４話　緑の融合戦士（前書き）

第４話投稿です。またタイトルで丸分かりになってます、アハハ。
最近は感想も貰えるようになって、うれしい限りです。ではどうぞ
！

第４話　緑の融合戦士

とある山の中

突然の光と共に、少女らは姿を現した

長瀬楓

桜咲刹那

近衛木乃香の三人であった

三人ともネギらと同じく、気を失っていた

そんな彼女らに、近づいてくる一つの影があった

「何だ今の光は……む？」

その人物の体は全身緑色で、

白いターバンとマントをまとっていた

「行き倒れか？いや、それだとさっきの光の説明がつかん」

突如現れた三人に興味を持ったようで、

何か素性がわかる物はないかと、あさり始めた

「む？何だこいつは」

木乃香のポケットから一匹の小動物が出てきた

ネギの使い魔、アルベール・カモミールである

身体をつかまれたことで、カモは目を覚ました

「んあ？どこでい此処は……てぎゃあ！」

目の前の人物の容姿を見て、驚きの声をあげるカモ

向こうもカモが喋ったことで僅かながら驚いていた

「ほう、喋るオコジョか、珍しい」

「お前さん何者だ！」

声を震わせるカモ

「俺の名はピッコロ。安心しろ、別に取って喰おうというわけじゃない」

心のそこからは安心できていない様子のカモ

証拠に、身体はまだ震えていた

「ところで小動物、お前らは何者だ？話してもらおうか」

「だ、誰がお前なんかに……」

身体を握る力が強くなる

「答えろ、捻り潰すぞ」

「はいっ！わかりました！」

睨みを利かせるピッコロ

カモにはその睨みが、エヴァンジェリンのそれとかぶって見えた

しかたなく、これまでの経緯を話すカモ

信じてもらえるかは別として、魔法のことなども包み隠さず喋った

一通り話し終えるとピッコロは

「そうか、わかった」

ただこう一言言った

「し、信じてくれるのか？」

半信半疑のカモ

「ああ、ただ……」

「ただ？」

「本当だとすれば、お前らに言わなきゃならんことがある」

「何でぇそりゃ？」

「とりあえずこいつらを起こせ、まとめて言ったほうが楽だ」

ようやく手を離すピッコロ

カモは逃げるように刹那達の元へ走っていく

「三人とも！起きてくだせぇ！早く！」

最初に目を覚ましたのは木乃香だった

身体を起こして目をこすり

そのまま何がなにやら分からぬまま

残り二人を起こすのも手伝わされる

「せっちゃん、起きて」

「楓姉さん！」

すぐに二人も目を覚ました

「ここは、何処でござる？」

「カモさん、私達はいったい……」

「全員起きたか、では話すとしよう」

聞きなれぬ声に反応し、三人は同時にその声のほうを向く

ピッコロの容姿に、カモと同じ反応をする三人

「な！妖(あやかし)の類か！？」

夕凪に手をかける刹那

だが、カモが手にしがみつき剣が抜けない

「刹那の姉さん待ってくれ！ピッコロの旦那は敵じゃねーよ（たぶん）」

「カモさん？」

カモの必死さを見て、何かあると思った刹那

柄から手を離し、ピッコロの方を再び向く

「お前らのことは大体この小動物から聞いた。麻帆良学園という所から飛ばされたこともな」

（！やはり此処は学園外なのか……）

「結論から言おう、お前らはこの世界の人間ではない」

刹那を始め、その場にいた者全員が、ピッコロの言葉に驚愕した

カモに至っては、アゴが外れそうなほど大口を開いている

「この世界には麻帆良学園はおろか、日本という国自体存在していない」

表情が険しくなる一同

「小動物の話を総合すれば、その光に飲み込まれこの世界に来たと考えるのが妥当だろうな」

「元に世界に帰れる方法はないんでござるか？」

「今はない、だがじきに可能になる」

「？」

ピッコロの意味深な発言に首をかしげる楓

「来るべき時が来たら教えてやる、ところでそっちのデカい女」

「……楓でござるよ」

「楓、小動物の話によれば、向こうの世界では相当の腕らしいな」

「それがどうしたでござるか？」

ピッコロの口がクッと上がる

「興味がある、俺と戦え」

「！！」

「テストをしてやる、合格したら俺の修行相手として側においてやる」

「それで、どうするでござるか？」

「修行相手としてしばらくいたら、帰れる方法を教えてやる」

ということは、と思う楓

「合格できないようなら拙者達を見捨てる、と」

「物分かりがいいじゃないか」

さらにピッコロの口元が上がる

「その勝負、受けるでござる」

「楓！」

ピッコロは楓達に背を向けた

「ついてこい、近くに広い岩場がある。そこでテストだ」

ピッコロに連れられ、三人と一匹は岩場へと到着した

対峙するピッコロと楓

「武器の使用は？」

「ダメだ、あくまで肉弾戦のみ」

「あいあい」

もっていたクナイを地面に落とす楓

「合格基準は？」

「俺を満足させられたら合格にしてやる」

「あいわかった」

構えを取る楓

（ずいぶん余裕でござるな……ハッタリか、それとも……）

手足に気を集中させる楓

「参るでござる！」

「来い！」

楓は地面を蹴った

第４話　緑の融合戦士（後書き）

またバトル直前で切っちゃいました。

次回の分もすぐ投稿できると思います。

一応前回の悟飯ｖｓコタローよりは長くなる予定です。

ではまた次回！

第5話　実力診断テスト！？ピッコロＶＳ楓（前書き）

タイトルどおり、ピッコロＶＳ楓です。前回よりはうまく書けたつもりです。でもそこまで過度に期待は勘弁です。前回よりは一応長くなってます。
ではどうぞ！

第5話　実力診断テスト！？ピッコロVS楓

瞬動により、楓は高速でピッコロに接近した

スピードはコタローのそれより速い

そのまま手刀をピッコロに叩き込む

「甘いな」

「！！」

ピッコロはそれを右腕で軽々とガードし

残った右でボディブローを放った

「ぐっ！」

続けて右のハイキックを放つが、何とか上体を反らしてかわした

そのままバックステップで距離をとる

（どうやらさっきの余裕はハッタリではなかったようでござるな…

…となれば……）

一方の刹那は、ピッコロの一連の動きを見て愕然としていた

「そんな、あの楓が……」

「ピッコロの旦那、相当の腕だな」

「あ、楓さんが増えたえ！」

木乃香が指差す先には五人の楓

四人は楓が作り出した影分身である

（残像拳か？いや違うな、どの楓にも気を感じる）

四人の楓がピッコロに向かってきた

先ほどとは打って変わり、手数の多さでピッコロを攻める

残った楓（本体）は、右手の平に気を集中させていた

しだいに、手の上に浮かぶ気弾が大きくなっていく

（分身達、もうしばらく時間を稼ぐでござる）

ピッコロは、楓四人を相手にしながらも、互角以上の戦いをしていた

このままいけばいずれ片がつくだろう

そう思っていたピッコロだったが、どんどん膨らむ楓の気を感じ取った

（悠長に闘ってはいられないようだな）

次の瞬間、四人の楓が吹っ飛ばされた

ピッコロは気を爆発させ、本体の楓への道を空けた

「しまったでござる！」

猛然と突っ込んでくるピッコロに、手にある気弾を放った

まだ溜まりきってはいなかったが、このまま攻撃を喰らうよりはマシだ

「無駄だ！爆力魔波！」

走りながら左手を右腕に添え、爆力魔波を放つピッコロ

ＭＡＸパワーではないが、楓の攻撃を相殺させるには充分すぎた

二人の間で爆発し、視界を奪われる

「くっ！一旦空中へ……」

再び足に気を集中させる

（虚空瞬動！）

軽くジャンプした後空気を蹴り、空中へと飛び上がる楓

空中にいる時間を利用して、影分身を作り直そうと試みる

だが、

「今のは舞空術とは違うな、気のこもった足で空気を蹴ったといったところか……」

ピッコロはすでに上空で待ち構えていた

思考を巡らす間もなく、楓はピッコロに、組んだ両手で背中を強打された

「ぐあっ！」

落下していく楓

ようやく思考が追いつき、手から気を放ち落下の衝撃を緩和させた

「これで終わりだ」

「！！」

またもや先回りされていた楓

ピッコロは右の回し蹴りを繰り出す

左腕でとっさにガードしたが、それもろとも吹っ飛ばされる

受身も取れず、そのまま仰向けにダウンする楓

「どうする、まだやるか？」

「合格をもらえるまでは、やめられぬでござるよ」

ゆっくり立ち上がる楓

だが、足はがくがくと震え、息も荒くなっている

楓が限界であることは、誰が見ても明らかだった

（この一撃が最後になるでござるな……）

楓の両眼が開いた

それと同時に楓の人数が増える

それも、四人や五人でなく、十六人に

右手に気をまとわせ、全員がピッコロに飛び掛る

「喰らうでござる！」

十六人の楓の気功波が、ピッコロに叩き込まれた

激しい光が刹那たちの視界を真っ白にさせる

手で目を覆う二人と一匹

すぐに視界は戻り、刹那達は楓らを再び見やった

そこには、腕を交差させ楓の攻撃を耐え抜いたピッコロと

気を使い果たし、分身も全て消え地に伏している楓の姿があった

「楓！」

「楓さん！」

そんな楓を見て思わず叫ぶ二人

そのまま本人の元へ駆け寄る

一方ピッコロは、腕の交差を解き、楓を見やる

そして閉じていた口が開く

「合格だ。お前の素質、気に入った」

意識が朦朧としていた楓も、その言葉だけはとてもハッキリと耳に入った

ピッコロから合格をもらい、

現在楓は、木乃香のアーティファクトで治療を受けていた

この世界でも効果は健在で、楓はものの数秒で全快した

すると今度は、ピッコロの腕にあるケガを見つけた木乃香

「ピッコロはんもほら、腕少しケガしとるえ」

「お、おい！」

了承の返事を聞くより前に、木乃香はピッコロの腕も治療する

アーティファクトは一日一回のため、通常の治癒魔法である

治った腕を不思議そうに眺めるピッコロ

(治癒術か……デンデの様なナメック星人でなければ出来ないと思っていたが……)

「それにしてもピッコロ殿、さっきは完敗だったでござるよ」

「私も感服しました。格闘術、気の練り方、どれを取っても私達より数段上です」

「十五人も分身を作るなんて芸当は、オレには出来んがな」

フッと笑うピッコロ

「ところで、そっちの刀使いの女も、テストを受けたいような顔を

しているが？」

心を読まれ、ドキッとする刹那

ピッコロの強さを、すでに彼女は認めていた

ゆえに、楓同様ピッコロの元で修行し、強くなりたいと思った

愛しのお嬢様、木乃香のためにも

「はい、私もあなたの元で強くなりたい」

いいだろう、とピッコロ

「ありがとうございます！」

「だがテストの必要はない」

「え？」

「お前と楓は同等の強さのようだ、なら受けるまでもないだろう？」

それはつまり、と刹那

「明日から、二人まとめて使ってやる」

表情が明るくなる刹那

「ただし、テスト同様肉弾戦のみ。つまりお前の刀は使わせん、いいな？」

強くなれることには変わりはない

刹那力強く頷き、楓はいつもの糸目でニッコリと笑った

（フッ、天下一大武道会までの二週間、退屈することはなさそうだな）

ダイヤの原石を見つけ、

悟飯同様に磨いてやろうと思うピッコロであった

第5話　実力診断テスト！？ピッコロVS楓（後書き）

いかがだったでしょうか？

悟飯＞ピッコロ　　古＜楓ということで前よりはいい勝負にしてみました

といっても差が開いてるのには変わりないんですが

これで楓ｓｉｄｅは一旦終了です

次は誰が出てくるか楽しみにしててくださいな

それとひとつお知らせが

書き溜めていた分を一通り消化したため、

次回の更新が遅れるかもです

遅くても四日以内には次回の投稿はしてみせます

それではまた次回！

第６話　最強の地球人戦士（前書き）

お待たせしました第６話です。タイトルでまたまた丸わかりになってます。あと、文章中にある「娘」は「こ」と呼んでくださいね。
ではどうぞ！

第6話　最強の地球人戦士

妙な音が聞こえてきた

よくよく耳を澄ましてみると、それは呼吸音だった

だがそれはやけに速く

まるで舌を出した犬のようだった

しかも身体に悪寒が走る

古はゆっくりと目を開けてみた

目の前には、仰向けの自分の胸を触ろうとするサングラスの男がいた

「うわわわわあ！」

「ぶげえ！」

反射的に手が出てしまった古

右パンチが男の顔に直撃し、男はぶっ倒れる

「あービックリしたアル。って、此処はどこアルか？」

自分の状況を確認する古

自分がいた場所はベッドの上

どうやら家の中にいるようだ

隣ではまだ、四葉五月が眠っていた

「武天老師様！どうしました！」

すると、古達がいる部屋に一人の青年が入ってきた

頭はツルツルで額に六つの点

また山吹色の道着を着ていた

「老師？」

老師というフレーズに反応し、古は自分が殴った男を再び見やる

「アイヤー！おじいちゃんだたアルか！？」

殴ったことを少し後悔しはじめた古

武天老師と呼ばれた老人は、鼻を押さえながら起き上がってきた

「いたたた、ちーっと寝てる隙にツンツンしようとしただけじゃったのに……」

「それは武天老師様が悪いですよ」

横目でジトーっとみる青年

次に古のほうを向き、話しかけてきた

「えっと、大丈夫？何もされてない？」

「平気アルが……一体誰アル？」

「あ、ごめんごめん。俺の名前はクリリン、君は？」

「古アル、隣で寝てるのはサツキ」

その後クリリンは、先ほどの出来事を古に話した

突然の光と共に現れ砂浜で倒れていた、とのことだった

そんな古達を家まで運んでくれたのである

「いやー、なんかすまなかたアルなー」

手を後ろにやる古

「いいよいいよ、だから教えてくれないか？」

「ハイ？」

「君達はどこから来たんだ？それにあの光は一体……」

「……信じてもらえるかはわからんアルが……」

古はクリリンにこれまでのことを話した

話の流れで魔法使いや未来人のことも話した

クリリンはすべてを信じてくれた

「両方実際に知り合いがいるから」

とのことだった

だがその直後、衝撃的な事実を古は知ることとなった

「でも日本なんて国、この地球にはないぜ？」

「え！？」

目を丸くする古

地球なのに日本がない

そんなキテレツな事態に頭がついていけなくなる

考えれば考えるほどこんがらがり、ついには頭痛までする始末

「うむ、つまり古ちゃん達は別次元の世界から来た、ということかもじゃな」

霧が晴れるかのように頭痛が消えた古

「別世界！そゆことアルか！えっと……」

「ワシの名は亀仙人、武天老師とも呼ばれておる」

「亀じい！じゃあ私達帰れないアルか？」

うーん、とうなる亀仙人

そんなことはないよ、とクリリンが会話に入ってきた

「ドラゴンボールを使えばいいのさ」

なるほど、と膝を打つ亀仙人

当然古は、？な状態なわけで、詳しく説明するクリリン

ドラゴンボールがどういうものかということ

それを使えば古達が元の世界に帰れること

そして、あと三週間で石から元に戻ること

「行くあてが無いんじゃったら、ウチに三週間おるかの？」

「ええ！？」

亀仙人の提案に、顔がこわばる古

先ほどの出来事が脳裏をよぎった

（うーん……どうするアルか？）

古はこめかみに指を当てた

だが、見ず知らずの古達を三週間も置いてくれる所などまず無い

それに、今から探すとなれば五月に迷惑がかかってしまう

クリリンの真面目そうなところを信用することにした

「それじゃあ、ご厄介になるアル」

ニカーっとする亀仙人

すると、先ほどのクリリンの言葉を思い出した

「そういえば亀じい、老師いうことは何かの師匠アルか？」

「え？ま、まあ一応な……」

「武天老師様は、武術の神様と呼ばれたすごいお方なんだ」

「武術の神様！」

目を輝かせる古

「亀じい、私と手合わせするアル！」

「え！？わしと？」

突然の古の要求に戸惑う亀仙人

「私も武道家ネ、強い者と戦いたいのは本能アル」

古はこぶしを握り締め、気を込める

「ま、待て。ワシはすでにこんなジジイじゃ、それに弟子のクリリンのほうがワシより強くなっとる」

神様を超えたアルか！と驚く古

まあね、と言葉を返すクリリンだが

（その俺より強いのもわんさかいるんだけどな……）

悟空達サイヤ人やピッコロの顔を浮かべ、苦笑する

「ならクリリン、勝負アル！」

今度はクリリンの方を向き、ビシッと指を差す古

「ええっ！？」

「クリリン、勝負してやれ。ワシも古ちゃんの強さ、見てみたいしのう」

「武天老師様まで！？」

そこまで言うなら一回だけ、とクリリンは渋々了承した

三人は階段を下りて外に出る

「うわー、ここ島だたアルか！」

辺り一面海という光景に驚く古

そのあと二人は、五メートルほど距離を開けて向かい合う

「あークリリン、ちゃんと構えるアルよ！」

やる気の無いクリリンの態度にプンプンと怒る古

「あ、ごめんごめん」

一応構えを取るクリリン

このやる気の無さには理由があった

（あの古って娘、さっきの気を見る限り武天老師様よりは強い。けど……）

自分よりは下である

本気を出せばアッサリと勝ててしまうだろう

クリリンはそう踏んだのだ

「来ないならこっちから行くアルよ」

「おーう」

だがこのあとクリリンは知ることになる

中国武術研究会部長、古の実力のほどを

第6話　最強の地球人戦士（後書き）

次回はクリリンＶＳ古です

本文中からわかるとおり、次回のバトルは今までで一番好勝負となります

ぜひ楽しみにしててくださいね

ご意見ご感想もお待ちしております

あと、古がフルネームで一回も表記されてないのは

使ってるパソコンに「フェイ」の字が入ってないからです

ではまた次回！

第7話　やっと好勝負！？クリリンＶＳ古（前書き）

更新が遅くなってしまってすみません。お詫びもかねて、以前も告知した2話投稿をやりたいと思います。まず一本目です
どうぞ！

第7話　やっと好勝負!?クリリンＶＳ古

「アイヤッ！」

「！」

ほんの一瞬だった

中国拳法の移動法、活歩でクリリンの懐に入り、腹部に拳を打ち込む

（馬蹄崩拳〈マーティポンチュアン〉！）

本来のクリリンなら、この攻撃もガードするなりの対処はできていたはずである

だが、クリリンはあまりにも古をなめていた

吹っ飛ばされたクリリンは、手で受身を取りすぐに立ち上がった

（な、嘘!?何で!?）

構えをとると同時に古が接近してきた

右の手刀を、首筋めがけて振り下ろす

（やっぱり……気は俺のほうが勝っているのに……）

クリリンは左腕を上げ、それを防ぐ

（硬開門！）

だが古は右腕を折りたたみ、潜り込むように右肘を打つ

「ぐっ！」

徐々に焦るクリリン

一転し攻めに移る

右拳を古に打ち込もうと試みる

「さすがクリリン、攻撃力は私より上のようアルな、けど」

左手でクリリンの右手首をつかみ、受け流す

「当たらなきゃゼロと同じアル」

「なっ！」

（八極拳　六大開「頂」……）

開いた懐めがけ、またも肘を打つ

（攪打頂肘〈かくだちょうちゅう〉！）

カウンターこそは、中国拳法得意中の得意

以前古がネギに言った言葉である

これは正にこの勝負においては的を射ていた

このあとクリリンはさらに数回、攻撃を試みるが

どれも古のカウンターを代わりに喰らってしまう

この様子を、亀仙人は静かに見ていた

隣には、先程まで昼寝をしていたウーロンの姿もあった

「なあ亀仙人のじいさん、どうしてクリリンのやつあんな負けてんだ？」

「うむ、クリリンは気の大きさ、つまり攻撃・防御・移動時の出力は完全に古ちゃんに勝っとる」

「だったら何で……」

「彼女の持つ体術は、完全にその差を埋めきっておるのじゃよ」

クリリンは古のようにちゃんとした拳法ができるわけではない

亀仙人の元での修行は主に、基礎力の向上を中心においていた

ゆえに、クリリンの格闘術自体は我流といっても差し支えない

多林寺で修行していたこともあったが、極めるには至らず

「その上、クリリンはああも焦っておる。気では勝る相手に負けていることでな」

クリリンが冷静さを取り戻せば、決して負ける相手ではないと亀仙人は語る

そうこうする間にまた一発、クリリンに拳が入る

「ぐああっ！」

吹っ飛んだ先は今度は海

ドボンと音を立てて着水するクリリン

「どうしたアル？もうおしまいアルか？」

水面に姿を見せないクリリン

すると次の瞬間

「わわわ！何アルか！？」

水面から無数の気弾が、古めがけて飛んできた

「真名の羅漢銭より速いアルー！」

必死にかわす古

だがやはり全部は無理だった

「ぐっ！」

右足に一発当たり、体勢を崩す

残りの気弾が襲い掛かる

腕を交差させてガードする古

顔や胴体に当たるはずだった気弾は、すべて腕へと当たる

（すごい衝撃アル……）

防ぎきったものの、腕が痺れてしまった古

「でやっ！」

「！！」

突如古の左横から、クリリンが姿を現した

そのままミドルキックを放つ

腰にヒットし、吹っ飛ぶ古

痺れている腕に鞭を打ち、何とか受身をとり体勢を整える

「さっきとキレがまるで違うアルな、クリリン」

「海に入ったら頭が冷めてな」

互いにニッと笑う

「長引くと厄介だ、これで決めてやる。かーめーはーめー……」

腰に両手をやり、気を込めていくクリリン

徐々に青白い光がともっていく

「波ーーー！」

それは光線状となり、クリリンから古へと放たれた

だが両者の間には距離がありすぎた

古はそれを横へ飛んでかわす

「またまた隙ありアル！」

そのままクリリンに突っ込む

「それはどっちかな？」

「え？」

クリリンは口元を上げると、かめはめ波を放っている両手をクイっと動かした

それに合わせてかめはめ波が曲がり、古の方へ

「な、曲がったアル！」

それにすぐ気づいた古

だが、かわすことはすでに不可能な距離

(防御に回れば、後ろからもろに攻撃を受けるアル、だったら……)

古は覚悟を決めそのままクリリンの元へ

当然だがかめはめ波は古に直撃、箇所は背中

「よし！」

ガッツポーズをとるクリリン

「まだアル！」

古は倒れることなく、むしろかめはめ波に押される様にして接近してきた

背中に気を集中させ、ダメージを緩和したのだ

「なっ！」

古の足が高々と上がった

虚を突かれ、それはクリリンのアゴに見事に当たった

尻餅をつくクリリン

古はそこを狙い拳を打つ

「え？」

だが拳はクリリンの目の前で止まった

「これで、勝負あったアルな」

「ああ、俺の負けだ」

古はニコッと笑い、拳を下ろした

「でもすごいぜ古、かめはめ波を喰らったまま攻撃してくるなんてよ」

「いやいや、前半クリリンがダメージを受けてたから弱くなてたアル。ＭＡＸだたら即ダウンネ」

それに実はまだ背中痛いアル、と古は背中を指差す

現在二人は家、カメハウスの中でくつろいでいた

入ろうとした際、ウーロンの存在に驚いた古だったが、すぐに慣れた

すると二人の間に、亀仙人が割って入る

「それにしてもよかったのうクリリン」

「え、何がです？」

「天下一大武道会までの良い修行相手が見つかったではないか」

「武道会アルか！？亀じい」

目を輝かせる古

「う、うむ、今から二週間後にな。古ちゃんも出たいじゃろ？」

「もちろんアル！」

「じゃあ決まりじゃな、クリリン」

「よろしくアル！クリリン」

クリリンに手を差し出す古

クリリンはそれを握って返した

「ああ、よろしく古！」

「クリリンは体術を磨けばもっと強くなれるアル。できる範囲で教えるアルよ」

「じゃあ俺も、気に関することなら指導するよ」

両方師匠で弟子アルな、と古

辺りが笑いに包まれた

「あれ？ここどこ？」

その一方で、

五月のことをすっかり忘れていた一同であった

第7話　やっと好勝負！？クリリンＶＳ古（後書き）

いかがでしたでしょうか？

ちょっと古が強すぎではないか、と思った人もいるでしょう。

でもこの位にしないと、武道会でネギ達がカスになっちゃうので……

古ｓｉｄｅは終了して次回から別キャラｓｉｄｅに移ります

話は変わりますが、

筋斗雲ネタを若干考えているんです。

ネギまキャラだと誰が乗れますかね？

自分の中ではネギ、木乃香、まき絵は確定なんですが……

このキャラも乗れる！と思ったら、ぜひ感想のほうにお願いします。

ではまた次回！（今日中ではありますが）

第8話　一児の母と元ハイエナ（前書き）

二本目です。タイトルからわかるように、今回のｓｉｄｅで主になるＤＢキャラは二人です。
ではどうぞ！

第8話　一児の母と元ハイエナ

「……どか、のどか」

「うーん……ハルナ？」

親友、早乙女ハルナの声を聞き

少女、宮崎のどかは目を覚ました

「ここどこ？」

寝ぼけ眼で辺りを見るのどか

「私だって訊きたいわよ」

二人は部屋の中のベッドの上にいた

当然部屋に見覚えはない

するとドアが開き、一人の女性が入ってきた

「あら、目が覚めたのね、よかった」

二人の知人ではない

気になりハルナが尋ねてみた

「えっと、どちら様ですか？」

「私の名前はブルマ、あなた達がウチの庭園で気絶してたから運び込んだの」

「ど、どうもありがとうございます」

のどかがペコリと頭を下げた

「いいのいいの、のどかとハルナだっけ？よろしくね」

自分らの名前を言われ驚く二人

「「どうして私達のことを？」」

「そこに寝てたもう一人のお友達から聞いたの」

ブルマが二人の横を指差す

そこには二人のとは違う別の枕があった

「そこの娘だけ一足速く起きたのよ。同級生なんだって？ずいぶん賢そうな感じだったわね」

二人の頭に親友、綾瀬夕映の顔が浮かぶ

「い、今どこにいるんですか？」

「あ、私も会いたい！」

付いてきてと言われ、二人はベッドを降りる

そのままブルマに連れられ部屋の外へ

（うわー、デッカイ家だねー）

あやかや木乃香の家に負けず劣らずの家の広さに感心するハルナ

それはのどかも同じだった

三十秒ほど歩いて、一同は鉄製の扉の前まで来た

「この研究室の中よ。父さん？入るわね」

ノックをし、返事も聞かずにドアを開けるブルマ

研究室の中には、ブルマの父親と思わしき白髪の男性と

「あ、早乙女さん宮崎さん。起きたんですね」

「ハカセ！？」

「葉加瀬さん！？」

ハカセこと、葉加瀬聡美の姿があった

「この娘、『この世界の発明品は革命的だ、すばらしい』なんていうから見せてあげてるのよ」

「へー、葉加瀬さんらしいですね……ってあれ？」

何かブルマの言葉に引っかかった様子ののどか

「この世界？」

「あ、そうか。まだ話してなかったわね」

二人ともよく聞いて、とブルマ

「あなた達はどうも、別世界から来たらしいのよ」

一瞬理解できなかった二人

すぐ我に変える

「え！？」

「どゆこと！？」

葉加瀬が地球儀をのどか達の所へ持ってきた

「これを見てください」

言われるままに見る二人

すぐさま目が丸くなった

「日本がない……」

「しかも何この大陸!?全然見たことない……」

「どうやら私達は別次元の地球に、あの光によって飛ばされてしまったようなんです」

葉加瀬が険しい表情で話す

「ネギ先生や夕映は!?それに他のみんなも……」

わかりません、と葉加瀬

「ここではさらに別次元へ飛ばされた可能性もあります」

「そんな……」

その場にへたり込むのどか

「大丈夫よのどか」

「ブルマさん?」

「ドラゴンボールを使えばみんな帰れるから」

「え、帰れる?」

「そうよ」

「ちょっと待ってブルマさん、ドラゴンボールって何なの?」

待っていましたとばかりに、ブルマは解説した

ドラゴンボールがどんなものか

それを使いどうやって帰るのか

いつそれが可能になるか

そして、レーダーの存在

「それまでの三週間はウチにいていいから」

「「いいんですか!?」」

「広い家だから問題ないわよ」

ありがとうございます、と同時に頭を下げる二人

「でもその代わり……」

ズイッと顔を近づけるブルマ

「あなた達の魔法、見せてくれない？」

「「え!?」」

二人は同時に葉加瀬を見た

話したとすれば彼女しかいない

「すいません話の流れで……でもブルマさんの知り合いにもいるよ

うですよ」

「というわけで、見せて見せて」

さらに二人に近づくブルマ

泊まり賃と考えればいいか、と思い二人は、ポケットからカードを取り出した

「「アデアット」」

カードは輝きを放つと同時に、

それぞれ一冊の分厚い本とクロッキー帳に形を変えた

「おお！それが魔法のアイテムね！」

「私達の世界ではアーティファクトと呼んでます」

そういうとのどかは自身のアーティファクト「いどのえにっき」を開く

「ブルマさん、ずいぶん若々しいですけど今おいくつなんですか？」

のどかがそう尋ねると、本に絵と文章が浮かんできた

絵ではブルマがモジモジしており、文章には

“あら、そんなに若く見える？そう言われると照れちゃうわね。実はもう３２なのに……”

と書かれていた

「３２！？」

「若っ！」

覗きこんでいたハルナともども驚くのどか

「え！なんでわかったの！？何も言ってないのに」

「この本を使うと、相手の表層意識を読み取ることができるんです」

「へー」

感心するブルマ

「じゃあハルナのは？」

「私のはこのペンを使って……」

一緒に出てきた羽ペンで何か書こうとするハルナ

すると、

「おーいブルマ、やっぱここにいたか。重力室貸してくれ」

若い男が研究室へと入ってきた

顔には複数傷跡があり、山吹色の道着を着ていた

「ヤムチャ、また来たの？」

「いいだろ、どうせベジータは最近使ってないんだし」

「どうせ修行したって無駄よ。優勝なんてできっこないんだから」

「なっ！ク、クリリンや天津飯とかだけだったらまだ可能性はあるぞ！」

二人だけで会話がどんどん進んでいく

これはマズイと思い、ハルナが会話に入る

「あのブルマさん、この人は？」

「私の古い友人のヤムチャ、一応武道家なの」

「一応って何だよ一応って……っていうか、そっちこそ誰だ？」

「あ、ごめんヤムチャ。彼女達は……」

ブルマはヤムチャにこれまでの経緯を話した

ヤムチャも信じてくれ、さらに魔法のことにも興味を持ったようだ

「俺にも見せてくれないか？」

いいですよ、とハルナ

「じゃあさっそ……あ、ここじゃちょっと狭いか。ちょっと場所変えますね」

どこか広い場所はないかとブルマに訊くと、一同は庭園に案内された

始めにハルナ達が倒れていた場所だ

ちなみに、ブルマの父ブリーフと葉加瀬は研究室に残った

「ここでいい？ハルナ」

「ＯＫです！それじゃあ……」

羽ペンでクロッキー帳に描きこむハルナ

「落書帝国！出でよ……」

クロッキー帳が激しく光った

第8話　一児の母と元ハイエナ（後書き）

二本目終了です

二話投稿いかがでしたでしょうか？

次回の投稿は水曜日前後になりそうです

あとブルマの年齢、間違ってたらスンマセン

ではまた次回！

第9話　パルとヤムチャと召喚ゴーレム（前書き）

第9話投稿です。お気に入り登録件数が二桁までいくとやっぱりうれしいですね
タイトルは某ラノベの作品名をいじっちゃいました。ファンの人すいません。
ではどうぞ！

第9話　パルとヤムチャと召喚ゴーレム

「出でよ、炎の魔人〈インフェルノ・アニキ〉！」

クロッキー帳から、輝きとともに赤い魔人が出現した

大きさは悟飯の祖父、牛魔王をはるかに凌ぐ

「ファファファファファ」

不気味な笑い声を上げる炎の魔人

ヤムチャ、ブルマ共々これには驚きを隠せなかった

「す、すげー……」

「描いた絵を実体化させる能力ってこと？ハルナ」

「その通り！この炎の魔人はお気に入りでね、並の人間なら軽々ぶっ飛ばせるわ」

「ファファファファファ」

「ほう、だったら俺もぶっ飛ばせるのか？ちょっと攻撃させてみろよ」

「え！？」

自信満々のヤムチャ

いいの？とハルナが確認をとると

ヤムチャはいいともと答えを返した

「じゃあ……攻撃」

ハルナがヤムチャに指をさすと、炎の魔人は右ストレートを放つ

「ふんっ！」

ヤムチャはそれを両手で受け止めた

ぶっ飛ばされはしなかったが、力に押されどんどん下がっていく

「うおおお！」

五メートルほどの所でようやく止まった

炎の魔人が腕を手元に戻した

「はあっはあっ……驚いたな、予想以上のパワーだぜ」

「私も驚いちゃった、あれを正面から受け止めるなんて。ヤムチャさんすんごい強いわね」

「そ、そうか？」

『強い』

ここ数年、ヤムチャと全く縁の無かった言葉である

倒したと思った敵に自爆され道連れにされるわ

戦い開始早々胸を貫かれるわ

腕を折られボコボコにされるわ

とにかく無縁だった

だが今日久々に、この言葉と縁を持つことができた

感無量このうえなしである

「ヤムチャ、いつまで浮かれてんの？重力室使うんでしょ？」

我に返るヤムチャ

「そ、そうだった、大会まであと二週間しかなかったんだ！」

「大会って、そういえば何のこと？ヤムチャさん」

研究室でも大会と言っていたことを思い出すハルナ

「天下一大武道会のことさ。二週間後に大きな武道大会が開かれるんだ」

「それでウチにある重力室を借りて、大会まで修行しようってわけ。どうせ無駄なのに」

「うるさいな……！」

すると、ヤムチャが何か思いついたような顔をする

そしてハルナに近づき、肩に手を乗せる

「なあブルマ、ちょっとこの娘借りていいか？」

「「え！？」」

口をそろえ驚く三人

「うっそヤムチャ、あんたこんな十四十五の女の子にまで手を出す気なの？」

「やっぱ見た目通り、プレイボーイだったんだ……」

「あわわわわ……」

ブルマはドン引き

ハルナはそのブルマに乗るような口ぶり

のどかは赤面

三人のそれぞれの反応に対し、違う！と断固否定するヤムチャ

「随分前にプーアルにも言ったが、俺はそういう趣味はない！ただ……」

ヤムチャは、ハルナの後ろの炎の魔人を指差した

「この娘の能力が修行に使えると思っただけだ！」

なーんだ、と言わんばかりの表情のブルマとのどか

ハルナはやっぱりそうかと思っていたようだ

「別にかまわないわよ。ハルナ、あんた自身はどうなの？」

ヤムチャはハルナの方を向く

「いいですよ。どうせやること無くて暇ですし」

「すまないな、今日から早速いいか？」

「はーい」

庭園から外に出る一同

「ここから東へ数キロ辺りに広い荒野がある。そこでやろう」

「了解」

ハルナはクロッキー帳をめくり、ストックさせておいたゴーレムを召喚した

以前、超家家系図争奪戦の際に乗っていたやつだ

わからない人は、魔法先生ネギま！１８巻を買って読んでいただきたい

「あれ？なんか今宣伝っぽいのが聞こえたような……」

「ヤムチャさん何言ってんです？早く乗ってください」

ハルナは脇に寄り、もう一人分のスペースを空ける

だが

「いや、俺は自分で飛べるから」

ヤムチャは舞空術で浮いてみせた

驚愕するハルナとのどか

何も道具を使わず宙に浮く人間を見るのは、これで二人目である

「俺が先に飛んで先導するから付いてきてくれ」

「え、あ、はい」

「ヤムチャ、夕方には返しなさいよ」

「わかってるよ」

「ハルナ、気をつけてね」

「了解のどか」

ヤムチャが飛んで行き、ハルナがすぐそのあとを追う
すぐに二人の姿は見えなくなった

夕方六時ごろ

ハルナは出発の時と同じゴーレムで帰ってきた

本人曰く、結構楽しかった、とのこと

また、これから毎日ヤムチャが迎えに来るらしい

そのあと、夕食でブルマの旦那のベジータにビックリしたり

入浴時、葉加瀬からホイポイカプセルという、この世界の万能収納アイテムの話を聞いたりした

現在は、ブルマから与えられた部屋（三人が寝かされた部屋）の中でくつろいでいる

「ねえ、ハルナ」

「何？のどか」

「ネギ先生や夕映達、元気だよね？」

「元気に決まってんじゃん！みんなならどんな世界でもやっていけるって！」

「そ、そうだよね……」

それに、と葉加瀬が二人の会話に入ってくる

「別次元の世界にと始め言いましたが、この世界にいるという可能性も充分あります」

二人の言葉に励まされたのどか

ちらりと窓の外を見る

（きれいな星空……ネギ先生や夕映も、この空を見てたらいいな）

しばらくして、三人は眠りについた

その日ののどかの夢には、笑顔のネギが出てきた

第9話　パルとヤムチャと召喚ゴーレム（後書き）

はい、これでのどか（ハルナ）ｓｉｄｅ終了です。

ヤムチャとハルナの修行風景は二順目で書きます。

はしょっちゃってすいません（汗）

次回は一話でそのキャラのｓｉｄｅを終了させます

そのため過去最長の長さになってます

どしどし感想の方ください！ホント読んでてうれしくなります

ではまた次回！

第１０話　武術の神様の姉（前書き）

読者の皆様にご注意
・Ｚのクロスですがこの話には元祖のキャラが数人出てきます
・独自の設定（ＤＢキャラの過去）が少し入ってます
以上を理解したうえでお読みください
ではどうぞ！

第１０話　武術の神様の姉

「朝倉さん！朝倉さん！」

「さ、さよちゃん？」

親友の幽霊、相坂さよの声を聞き

少女、朝倉和美は目を覚ました

「ねえさよちゃん、ここどこなの？」

「占いババさんの館ですよ」

首をかしげる朝倉

報道部所属で情報通の彼女も、そんなところは聞いたことがない

辺りを見ると、なにやら怪しい薬や壷がいくつも並んでいた

「その占いババっていうのは？」

「ワシじゃよ」

「うわっ！」

突如朝倉の背後に、浮いた水晶玉の上に乗る老婆が現れた

いきなりの登場と、浮いているという事態に驚きを隠せないでいた

「え?何?どゆこと?他のみんなは?」

すると、朝倉達がいる部屋の扉が開いた

「さよさん、朝倉さんは起こしたですか?」

「ゆえっち!」

「あ、起きてるようですね、じゃあ早速話すとするです」

少女、綾瀬夕映は部屋へ入ると朝倉の元へ歩み寄り、近くのイスに腰掛ける

手には地球儀らしき物を持っていた

「こちらは占いババさん。気を失っていた私達をここまで運んでくれたです」

「実際運んだのはミイラ君やドラキュラマンじゃがな」

「ミイラ君?」

「それを話すとややこしくなるので飛ばすです。良いですね?」

少し気になったが、同意する朝倉

「ここに運び込まれた後、私は朝倉さんよりも先に目を覚まして占いババさんに会ったです」

「さよちゃんは？」

「透けて運べなかったそうなのでその場で起こしたそうです」

「そっか」

「そして、さよさんと二人で占いババさんと話してたら、とんでもないことがわかったのです」

「とんでもないこと？」

間をおき、夕映の口が開く

「ここは私達のいた地球とは違う、別次元の地球なのです」

一瞬固まった朝倉

すぐさま我に返る

「ええ！？」

「これを見てほしいです。この世界の地球儀です」

手に持っていた地球儀を朝倉に渡す夕映

やっぱり地球儀かと思いつつ、朝倉はそれを眺める

見て一秒で目を丸くした

「え！何これ！？」

「地球であるにもかかわらず、日本を始めとする私達が知っている国がすべて存在しないのです」

「じゃあ私達、あの光に飲み込まれて……」

「別次元であるここに飛ばされたことになるです」

「他のみんなは！？」

「少なくとも、この辺りで倒れていたのは我々三人だけのようです」

「探す方法はないの！？」

「そ、それは……」

苦い表情をする夕映

「ワシなら、お主らの仲間を簡単に探せるぞ」

一斉に占いババのほうを向く一同

「本当ですか！？占いババさん！」

「ああ、ワシのこの水晶で占えば百発百中じゃ」

「じゃあじゃあ、早く占ってよ！」

朝倉は占いババの方へ身体を寄せる

「待て待て、ワシは占いを商売にしとるんじゃ。タダな訳なかろう」

「というと？」

「いつもなら一千万ゼニー取るんじゃが、お主らはゼニーなど持っとらんしのう……」

ゼニーとはどうもこの世界の共通通貨らしい

一千万という言葉を聞き、日本円換算でも無理だと思った一同

第一、日本円を持ったところで占いババに特はない

「ワシの元で二週間働く。どうじゃ？破格の条件じゃろ」

「に、二週間ですか？」

「ついでに、その間居候させてやる」

今の夕映達に断るという選択肢はなかった

「それじゃあ、よろしくです」

「うむ！」

早速その日から、夕映達三人は働くことになった

「いらっしゃーい、列になってお待ちくださーい」

朝倉は占いババの側近のお化けと一緒に接客

「うう、ホコリくさいです……」

夕映はあちこちの部屋掃除

「そうなんですー、もう死んでから六十年もたっちゃってー、アハハハ」

さよは待ち時間の間のミイラ君達の話し相手

それに加え夕方前には、あの世に用事のある占いババのお供もさせられた

始めミイラ君達を見たとき顔を青くした朝倉だったが

すぐに打ち解けることができた

「ねえゆえっち、この人（？）達どうしてお客さんと戦ってるの？」

「一千万とは別に、彼らを五対五の団体戦で倒すという条件でも占ってもらえるそうです」

「ふーん。ま、私達じゃ無理か」

「せめて古さんレベルの人が一人でもいればよかったのですが……」

いないならしょうがないです、と割り切る夕映

「夕映さんー、朝倉さんー、サボっちゃだめですよー」

「あ、すいませんですお化けさん」

「すぐやるすぐやる」

そしてあっという間に日は沈み、夜になった

「それにしてもビックリしましたー。あの世ってああなってたんですねー」

「どんなだったの？さよちゃん」

現在一同は長テーブルを囲み、夕食をとっていた

占いババの見た目からして、ゲテモノ料理も覚悟していた夕映と朝倉だったが

普通の料理が出てきて胸をなでおろしていた

またそこには、先ほどまで戦っていたミイラ君達の姿もあった

「閻魔様とか鬼さんとかがいてー、針山や血の池があったんですー」

「結構イメージ通りなんだね……」

苦笑する朝倉

ちなみにさよは食べられないので、席につくだけ着いてみんなと話しているだけである

「ところで占いババさん、ちょっといいですか？」

「なんじゃ？夕映」

手に持っていたナイフとフォークを置き、夕映は占いババの方を向いた

「占いババさんは魔女、つまり私達の世界で言うところの魔法使いなのですよね？」

「うむ、占うときや水晶玉を浮かすときは魔法を使っておるのう」

茶をゆっくりすする占いババ

「私を、弟子にしていただけないでしょうか」

ぴたっと止まる占いババ

湯飲みをテーブルの上へと戻す

「なんじゃと？」

「もちろん仕事もちゃんとするです。仕事外の時間、空いてるときだけで良いですから……」

必死に懇願する夕映

占いババが凄腕の魔法使いであるということは今日一日で充分にわかった

強くなってネギ先生の役に立ちたい

そんな思いを今、夕映は占いババにぶつけていた

「ワシは弟子を取る気は……」

「お願いです！」

しばしの沈黙

「ちょっと待っておれ……」

そう言うと占いババは水晶に乗り奥の部屋へと入っていく

数分後、ポットとグラスを持って部屋から出てきた

「そこまで言うなら試験じゃ」

「試験ですか？」

占いババはポットの中身をグラスに注いでいく

どろどろとした青紫色の液体だった

「これを飲み干してみろ」

「え？」

「それが出来たら朝夜それぞれ三時間、弟子として面倒見てやるわい」

「本当ですか？」

このやり取りをテーブルの反対側で見ていた朝倉達

「ったく、占いババのばあさんも人が悪いぜ」

見たまんま悪魔な男、アックマンが口を開いた

「どういうこと？アックマン」

気になり、朝倉がたずねる

「あれはな、あの嬢ちゃんみたく弟子志願するやつを追っ払うための飲み物なんだよ」

「え？」

「占いババのような力がほしく、弟子志願するやつがいっぱいいた……」

語り始めるアックマン

「過去何十人もあれを飲み干そうとしたがみんな、吐き出すか目眩を起こしてぶっ倒れるかのどっちかだった」

つまり達成者は０

また、レシピは占いババしか知らない秘密である、とアックマンは語った

「で、でも……」

「なあに、あの子はまだ若い。充分伸びる可能性がある」

ワインを口に含むアックマン

「ゆえっち普通に飲んでるんだけど……」

「！！」

ワインを吹き出すアックマン

向かいにいたドラキュラマンにかかる

「な、何すんだアックマン！」

「あ、あれ……」

「ん？……！！」

アックマンの指差す先を見るドラキュラマン

あごが外れそうな大口を開いた

よく見れば、ミイラ君達も同じ反応をしている

無理もない

長年誰も飲めなかったあの飲み物を

涼しい顔をしてマイストローで飲む少女が目の前にいるのだから

これには占いババもビックリ

（な、なんと……）

数秒して、夕映は完全に飲みきった

「どうもごちそうさまです」

「お、お主、なんともないのか？」

「？はい、なかなかクセのある味でよかったですが」

「……」

絶句の占いババ

「これで弟子にしていただけるんですよね？」

「え、いや、その……」

しどろもどろの占いババ

出来るわけないと思っていたため無理もないが

「今夜から早速やるですか？それとも明日からですか？」

目を輝かせ近づく夕映

「じゃ、じゃあ明日から……」

「はいです！」

意気揚々と返事をすると、すっくと立ち上がる

「ごちそうさまです！あ、ちょっとお手洗い……」

尿意を催し、そそくさと退室する

シーンと静まり返る部屋

「仕方ないのう……二週間という限定つきじゃし……」

明日は早いからもう寝ると占いババ

朝倉に、

「明日は四時から始める、やるからにはビシビシやるゾイ！」

と夕映に伝言するよう頼み、部屋を出て行った

その後すぐ夕映がトイレから戻り、お化けに寝る部屋を案内される

すぐさま布団にダイブする夕映

「うー、疲れたです……でも……」

小さくガッツポーズをとる

「これで、強くなれる。ネギ先生のお役に立てるのです！」

決意を新たにした夕映だが、睡魔には勝てなかった

ほんの数十秒で眠りへと落ちた

第１０話　武術の神様の姉（後書き）

はい！どうだったでしょうか？

占いババとの修行風景は、二巡目でやります

またもやこんな感じですいません（汗）

さて、次回はいよいよアスナ登場！（もうこの際言っちゃいます）

いったい誰と出会うのか？

ではまた次回！

第１１話　第三の目を持つ戦士（前書き）

今月最後と思われる二話投稿です。お気に入り登録１５件……ホントうれしいです、ハイ。一本目です。
ではどうぞ！

第１１話　第三の目を持つ戦士

「うーん……あれ？」

とある北部の山の中

冷たい北風に吹かれ

少女、神楽坂明日菜は目を覚ました

「ここどこ？」

場所はどうやら屋外

辺りにはわずかながら雪

周りは森に囲まれ、側には焚き火がたかれており

さらには毛布までかけられていた

「いったい誰が……まきちゃん！」

また、隣にはクラスメート、佐々木まき絵の姿もあった

自分と同じく、毛布をかけられスヤスヤと眠っていた

「起きてまきちゃん！まきちゃん！」

「ふにゃ？アスナ……」

ゆっくりと体を起こすまき絵

どうやら元気であることに、とりあえず安堵するアスナ

「ここどこ？それにこの毛布や焚き火は？」

アスナ同様、今置かれている状況に疑念を抱くまき絵

すると

「あ、見て天さん！二人とも起きてるよ！」

「本当だ、よかった」

林の奥から、二人組の男が現れた

一人は楓に負けず劣らずの身長を持つ青年

もう一人は逆に、かなり背の低い少年（？）であった

「あなた達はいったい……ってうわ！目が！」

青年の顔を見て驚愕するアスナ、まき絵も同じ反応

青年の額部分にもう一つ目があったのだ、つまり三つ目

「ああコレか、生まれつきなんだ。あまり気にしないでくれ」

「あ、すいません……」

失礼なことを言ってしまった……そう思うアスナ

別に謝らなくていい、と青年

「俺の名は天津飯、こっちは餃子〈チャオズ〉」

「神楽坂明日菜です……」

「さ、佐々木まき絵……」

お互い自己紹介をしあう一同

「この焚き火や毛布はあなた達が？」

アスナが青年に尋ねてみた

「ああ、餃子が倒れている君達を見つけて、俺に知らせてきたんだ」

「そうだったんだー。ありがとう、餃子君」

まき絵が笑みを餃子に向け、赤いほっぺをプニプニとつつく

対する餃子はムッとした表情

「あれ？どしたの？」

首をかしげるまき絵

「まき絵とか言ったか……餃子はすでに成年だ。ハタチを超えている」

「「ええ!?」」

これには二人ともびっくり

「うっそ!?だって餃子君こんなに小さくてかわ……あ」

まき絵は、餃子の表情がさらに険しくなっていることに気づいた

「ご、ごめん!いや、ごめんなさい!私が悪かった!ホントごめん!ね?」

あたふたするまき絵

「……いい、気にしてない」

プイッとそっぽを向く餃子

見てわかるが、気にしていないわけがない

完全にすねている

「……ところで、話を戻すがいいか?」

「え?あ、はいどうぞ、天津飯さん」

まき絵と餃子のやり取りを見ていたアスナだったが

すぐさま天津飯の方へと顔を戻す

「君たちはどこから来たんだ？北の都か？」

「（北の都？）いえ、埼玉県の魔帆良学園から来たんです」

「埼玉県？どこなんだそこは？」

「どこって日本の……」

「日本というのは？」

「え？」

首をかしげる天津飯に目を丸くするアスナ

日本語が通じる相手が日本を知らないという事態に困惑していた

そんなアスナの様子を見て、天津飯の頭を何かがよぎった

（ま、まさか……）

天津飯は近くにあった小枝を拾う

「アスナ……だったか？ちょっとこれで世界地図を描いてもらえるか？」

「は、はあ……」

小枝を受け取り、地面に書き出すアスナ

数秒してその手が止まった

（あれ？オーストラリアってどこにあったっけ？）

ネギが担任する３－Ａ屈指のバカ五人衆、バカレンジャー

その中でも一番のバカが彼女、神楽坂明日菜である

『世界地図を描け』という課題は、彼女には荷が重すぎた

「うーん……まきちゃーん、ちょっと来てー」

助け舟を求めるアスナ、だがそれも焼け石に水

まき絵もまた、バカレンジャーの一員なのだから

「まきちゃん、オーストラリアってどこだっけ？」

「えーと……どこだっけ？とりあえず下の方だよね？」

「そうそう、下の方下の方」

『南』という単語が出ない辺りも流石である

話し合うこと五分

結局進展はなかった

これは無理だとようやく気づき、天津飯は二人から木の枝を奪う

「もういい、俺が書く」

「「す、すみません……」」

小さくなる二人

天津飯はテキパキと世界地図を描いていった

ものの十数秒で描き終える

「これが、俺の知る地球の世界地図だ」

「え！」

「なにこれ！？」

それぞれ驚きの声を上げるアスナとまき絵

バカな二人でも、目の前の地図が自分らの知るそれとは違うことはすぐにわかった

「その驚き様……やはりそうか」

「やはりそうか、って何がなんですか？天津飯さん」

「どうやら君達は、別次元の地球から来たようだ」

「「ええ！？」」

どういうことですか？とアスナ

「互いの知っている地球、それが食い違っているということはそうとしか説明がつかないんだ」

アスナは、気を失う直前のことを思い出す

「じゃああの時、魔法陣から出た光のせいで……」

「……詳しく話してもらえないか？安心しろ、俺は口は堅い」

何か信頼できるものを感じたアスナは、そのまま真実を天津飯達に述べた

一通り話終えると、天津飯は口を開く

「そうか……嘘を言ってる様には見えないな。信じよう」

「本当ですか？」

「ああ、魔法使いや未来人なら、俺の知り合いでもいるからな」

それにしても、と天津飯

「魔法か……興味深いな……ん？どうした？」

天津飯はアスナの横の少女に目をやる

「ネギ君って……魔法使いだったんだ……」

ポカーンと口を開け呟くまき絵

（あ！し、しまった！）

後の祭り状態のアスナ

ああも天津飯に話した今、ごまかすのは不可能

それはアスナでもわかった

「ま、まきちゃん！このことみんなに内緒！いいわね！？」

まき絵の両肩に手を乗せ、揺さぶるアスナ

「何で？」

「ネギがオコジョになるの！」

理解してないまき絵のため、さらに話していくアスナ

魔法使いは秘匿の存在であること

それがばれてしまったらオコジョにされてしまうことｅｔｃ……

「わかった？」

「う、うん……」

ところでアスナ、と天津飯

「これから、どうしていくつもりなんだ？」
「決まってます！ネギ達を探すんです！」
「あてはあるのか？」
「うっ……」
黙りこむアスナ
あてなどあるはずがない、ここは自分たちがまったく知らない地球なのだから
「……仲間には、アスナ以外にも武道家が何人かいるんだったな？」
「は、はい……」
天津飯は懐から、一枚の紙を取り出す
「こんな大会が行われるんだ」
差し出してきたポスターを受け取るアスナ
ゆっくりとそれを開いていく
「こ、これは……」
ポスターには、黒アフロの武道家がVサインをし
大口を開けて笑っている写真が写っていた

「天下一大武道会、全世界から武道家を集めて行う武道大会だ。俺も出ようと思ってる」

参加資格のところには、性別、プロアマ問わず誰でも可と書かれていた

「アスナ達の仲間だったら、この大会に興味を持つんじゃないか？」

「確かに……古ちゃんなら絶対出たがる……」

「大会は二週間後行われる。当日受付だ」

「二週間……（ううん、けっこう先だなー、それまで寝泊りどうしよう……）」

「それまでの間、ここに置いてやってもいいぞ？」

「いいんですか！？」

「ただし、ひとつ頼みがある」

左の人差し指を立てる天津飯

「な、なんです？」

「俺と、手合わせしてもらえないか？」

「え！？」

第１１話　第三の目を持つ戦士（後書き）

いかがだったでしょうか？

話の始まりがワンパターンですがご容赦ください（いまさらですが）

他にも気になる点がありましたら、お手数ですが感想のほうにぜひお願いします

五時までには、もう一本も投稿できると思います

では！

第１２話　感卦法発動！天津飯ＶＳアスナ（前書き）

二本目投稿です。やっぱり四月に入ったらきつそうです。入学式とかテストとかで。でも止まらないように頑張ります。
ではどうぞ！

第１２話　感卦法発動！天津飯ＶＳアスナ

「手合わせ……ですか？」

「ああ、そっちの世界の武道家がどれほどの強さか興味がある。魔法のこともな」

「で、でも……」

「やってあげなよアスナ」

「ま、まきちゃん」

二人の間にまき絵が割ってはいる

そのままアスナの耳元へ顔を近づける

「アスナなら楽勝だよ。桜咲さんと武道会で互角だったじゃん」

まき絵の言う武道会とは、アスナ達の所の学園祭で行われた麻帆良武道会のこと

それの初戦にてアスナは刹那と戦い、好勝負の末敗れたのだ

もっとも、あの時は念話によるアドバイスがあったのだが

「そりゃそうだけど……」

アスナは自分の強さに自信を持ち始めてはいた

現にアスナは強くなった

それこそ、並の武道家では敵わないほどに

だが目の前の男、天津飯は違った

普通の武道家とは違う、何か別のオーラをアスナは感じていた

そのため手合わせをためらっているのだ

「僕からもお願い」

「チャ、餃子さん!?」

いつの間にか立ち直っていた餃子

「天さん最近、僕としか組み手してなくてつまらなそうなの。お願い」

ぺこりと頭を下げる餃子

「ちょっ、頭を上げてください。わかりました、やりますから!」

外見は子供でも、自分より年上の相手に頭を下げられ、困惑するアスナ

しぶしぶ了承することとなった

「すまないなアスナ、感謝する」

「いいですいいです、それより早く始めましょうよ」

先ほどの場所から少し離れ、広い平野で対峙する二人

「そっちの腕を見てみたい。かかってきてくれ」

「わかりました」

大きく深呼吸をするアスナ

構えを取る天津飯に向かい、ダッシュするアスナ

「行きます！」

（実力が未知数な以上、まずはとりあえず……）

天津飯の腰めがけてまわし蹴りを放つ

腰なら頭や胸より、モロに入ったとき致命傷となる危険性は低い

とアスナは判断した

「でやっ！」

「ふんっ！」

天津飯はそれを左腕でガードする

（なるほど、女にしてはかなりのパワーだ）

（うっそ！ビクともしてない……）

いったん距離をとるアスナ

続いてとび蹴りをみぞおちめがけ躊躇なく放つ

相手は自分より格上、それを今の一撃で感じ取っていた

「甘い！」

だが天津飯はアスナの蹴りをいとも簡単に受け流し

「え！うそ！？」

そのまま、がら空きの背中に右肘を打ち込む

地面に倒れこむアスナ

（だがレベルはヤムチャ以下か……もう少しできると思ったのは思い違いだったか？）

アスナがゆっくりと立ち上がってくる

（お、防御力はそれなりにあるようだな……）

だが勝負が長引いたところで、こちらの優勢に変わりはない

これ以上はやっても無駄か……

そう思った天津飯、だが

「右手に魔力……左手に気……」

「！！」

アスナの体外にあふれ出るエネルギーに、思わず固まってしまった

（な、何だ!?左手から感じる気はともかく、右手から出る感じたことのないあの「力」は……）

その力とはすなわち魔力

天津飯は体験したことがない、未知なる力

それと気を手のひらに集め、アスナは混ぜ合わせていく

アスナが愛する教師、高畑・T・タカミチが得意とする究極技法のひとつ

『感卦法』である

一気にアスナのパワーが上がるのを、天津飯は感じとる

（す、すごい……なんという技だ）

明らかにさっきのアスナとは違う

そのことに驚きを隠せない天津飯

その一瞬の隙を突き、アスナは高速で接近してきた

「でいっ！」

「ぐっ！」

左頬に、アスナの右ストレートが炸裂した

そのまま追撃の右のハイキック

「くそっ！」

天津飯は右手から気弾を撃ち牽制する

数発の気弾がアスナを襲う

バシュ

「何！？」

だがその気弾は、アスナに当たることなく消滅した

「ごめん天津飯さん、私そういうの効かないの」

アスナの固有スキル『魔法無効化能力〈マジックキャンセル〉』

敵性放出系の技を完全に無力化する能力である

これは気攻波に関する攻撃も例外ではない

面食らった天津飯に、結局ハイキックが直撃する

「ぐあっ！」

地面に手をつき倒れこむ天津飯

「もらった！」

チャンスとばかりに、アスナは右の拳を振り上げる

これで勝負は決したかと思われた

しかし

「太陽拳！」

「きゃあ！」

天津飯が両手のひらを額に持っていき、技名を叫んだとたん

まさに技名通り、太陽のような光が額から放たれた

直視してしまったアスナは、思わず手で目を覆う

離れたところで見ていた餃子とまき絵も、同じ行動をとる

しかしアスナの方が、近い分より効いている

「目、目が……うっ！」

アスナの首筋に衝撃が走る

そしてそのまま倒れてしまう

天津飯が背後に回りこみ、手刀を打ち込んだのだ

あまりの刺激で天津飯の気配に気づけなかったアスナ

真っ白だった視界は、一転して真っ黒になった

「すまない、不意討ちの様なまねをしてしまって……」

「私も感卦法のこととか言ってなかったですし、お互い様ですよ」

天津飯の手刀で気を失ったアスナ

ものの数分で目を覚まし現在、天津飯らと談話していた

「その感卦法というのもすごいが、気攻波の類を無効化するあの能力にも驚いた」

「私達の世界でも、結構レアな能力らしいんです」

そうなのか、と天津飯

「だが体術はまだ荒削りだな。こんなすごい能力があるだけ残念だ」

すると餃子が、二人の会話に入ってくる

「ねえアスナ、大会まで天さんの修行相手してくれないか？」

「え？」

「餃子！」

「僕と修行するより、アスナとやった方がもっといいと思う」

餃子の頼みを聞き、考え込むアスナ

天津飯は相当の腕だ

確かに彼の元で修行すれば強くなれるかもしれない

そうすれば前よりも守ってやることができる

ネギ・スプリングフィールドのことを

「……やる」

「アスナ！いいのか？」

尋ねる天津飯

「どうせ二週間やることないですし。それに、私もっと強くなりたい」

決意のこもった表情だった

「そうか……それじゃあ、よろしく頼む」

「こちらこそ」

右の握り拳をぶつける両者

グーーーー

と同時に腹の音が

「……そういえば私達何も食べてなかったわね」

「お腹すいたー」

アスナ、まき絵の両名が、腹を押さえてその場にへたり込む

「もう夕方か……じゃあとりあえず夕食にするか」

「「お願いします」」

口をそろえる二人

「修行は、その後からでいいな？」

「はい！」

アスナは元気よく返事をする

（ネギ、待ってなさいよ……絶対前より強くなって、大会で会ってやるんだから！）

天津飯の元での修行

そして天下一大武道会への出場を決意するアスナであった

第１２話　感卦法発動！天津飯ＶＳアスナ（後書き）

アスナｓｉｄｅ終了です

お気づきの方もいると思いますが、「感卦法」↑これ、字が違います

これも古のとき同様、パソコンに入ってないためです

流石に「かん」の字だけ平仮名というわけにはいかないので「感」の字に……

何で入ってないんでしょう……トホホ

さて、次回は誰が出てくるのか（といっても出てないキャラあと四人）？

ちなみにそのｓｉｄｅが終わったら、キャラ紹介のやつとかする予定です

司会は、麻帆良に残ってるキャラを何人か使うつもりです

リクあったら感想のほうにお願いします（ただし魔法関係者限定で）

できる限りは出したいと思います

ではまた次回！

あ、そうそう

次回は元祖のやつ出ます、知らない人すいません

第１３話　ちう茶々放浪記？砂漠編（前書き）

この話で一巡目終了です。この話（というかｓｉｄｅ）は、ネギｓｉｄｅとかとは少し違う内容（ストーリーの進み方）になってます。出てくるネギまキャラはタイトルの通りです。

ではどうぞ！

第１３話　ちう茶々放浪記？砂漠編

とある砂漠のど真ん中

そこをヨロヨロと歩く少女がいた

側にはもう一人、涼しい顔の少女がいて彼女に合わせて歩いている

「千雨さん大丈夫ですか？かなりの汗ですが……」

「暑いからだよボケロボ。つーか、お前が見つけた村はまだなのか？」

「あと約六キロメートル、このペースですとあと二時間弱で到着します」

「二時間弱か……まだかなりあるな畜生」

少女、長谷川千雨は隣にいるクラスメート、絡繰茶々丸の言葉に悪態をつく

目覚めたとき、二人は砂漠の上だった

最初事態が理解できずにパニクっていた千雨

だか茶々丸に、転移魔法の類で飛ばされたのであろうと言われ納得する

すでに魔法を知り関わった彼女、否定材料はなかった

しかし自分らはどこに飛ばされたか、茶々丸でもよく把握できていない

そのため彼女は、内蔵のジェット噴射で上空から辺りを見た

すると遠くに村らしきものが見えたのだ

その村を目指し、二人は今こうして歩いているというわけだ

「千雨さん、やはり私に乗って飛んだほうが早いです。何故そうされないのですか？」

千雨がバテバテであるというのは、茶々丸も容易にわかった

「お前のエネルギーが切れると後々面倒だからな、それに……」

茶々丸をちらりと見る

「今お前に触れたらぜってー熱いから」

茶々丸のボディはこの灼熱によって、近づくだけで熱気を感じるほど熱くなっていた

「そうですか、すみません千雨さん」

「気にすんな、こっちが少し頑張ればいいんだからよ……」

そう言うと、千雨は自分の身体に鞭を打ち、移動速度を速める

早く着かねば、水分不足でこちらが先に参ってしまう

「ですが千雨さん、無理はなさらないでくだ……？」

「何だこの音？」

するとどこからか、翼の音が二人の耳に入ってきた

どうやら空から聞こえてきているようだ

上を見る二人

「おうおう姉ちゃん達、あるもの全部置いてきな」

「は！？」

やってきた、というより飛んできたのは、腹が出ていてメタボ気味な竜らしき生物三匹

黒のサングラスを着けていたり、ピアスを耳にしていたり

とにかくガラの悪いのばかりだった

二人の目の前へ、二本の足で着地する

「な、何なんだこいつら……」

「私のデータベースにもありません。未知の生物です」

「んなこたぁわかってるよ！」

千雨が茶々丸につっこんでいると、メタボ竜の一匹がナイフを取り出した

「悪いことは言わねえ、怪我したくなかったら、さっさとある物全部よこしな」

切っ先を千雨たちに向けるメタボ竜

（ちっ、要するにこいつら追い剥ぎの類か……）

この場をどうやって回避するか模索する千雨

そんな千雨の目の前を、高速で移動するものがあった

「前方の三匹、危険であると断定。排除を開始します」

腰まで届く、緑のロングヘアーをなびかせて

茶々丸は回し蹴りを、ナイフを持ったメタボ竜に直撃させる

「ぶべらっ！」

喰らったメタボ竜は数メートル吹っ飛び、白目を剥いて気絶

その事態に驚愕する二匹

「このアマ！」

一匹が茶々丸に殴りかかる

「無駄です」

茶々丸は難なくそれをよけ、腹に一発パンチを叩き込む

「ふごっ！」

倒れこみ、最初の一匹と同じく白目を剥いて気絶

残りの一匹は、自分の状況に恐怖を覚えた

「ひ、ひいい！」

翼を広げ空を飛び、逃走をはかる

しかしそれは無駄に終わる

「ターゲットロックオン、ファイヤー」

左手を右腕に添え、ロケットパンチを発射する

見事に命中し、撃墜に成功した

「これにて排除完了」

「容赦ねーなーおい」

「では参りましょう、千雨さん」

「ああ……そう…だな……」

「千雨さん？」

千雨は急にふらつきだす

元からフラフラしていたがレベルが違う

言葉は重く、目の焦点が定まっていない

（畜生……こんな……ところで……）

「千雨さん！」

足の力までもが抜け、千雨はそのまま地に伏せる

自分を呼びかける茶々丸の声が、どんどん遠くなるのが千雨にはわかった

「……あれ？」

千雨は布団の中にいた

「千雨さん！よかった、気がつかれたんですね」

目が開いて、真っ先に入ってきたのは茶々丸の顔

「茶々丸……ここは？」

「ナムさんの自宅です」

「ナム？」

千雨は身体を起こし、辺りを見回す

すでに外は、日が沈みかけ夕方

場所はどこかの家の中、石の壁でできている

どうやら、当初の目的地だった村には着いたらしい

また、茶々丸の隣には一人の男がいた

褐色肌でターバンを巻き、インドの僧のような服装だった

「あんたが……ナムか？」

「いかにも、こちらの方があなたを抱えてここへ飛んできたのだよ」

「文字通り、ジェット噴射で飛んできました」

それにしても、とナム

「ずいぶん高性能なロボットのようだな。異世界から来たというのも頷ける」

「正確にはガイノイドです、ナムさん」

「ちょっと待てボケロボ！」

「何でしょう？」

「ロボだとこいつにバレたのはまだいい、異世界ってどういうことだ！」

「はい、どうも私達はあの光の影響で、異世界であるここへ飛ばされたようです」

「はあ！？」

さらに詳しく話していく茶々丸

村に着いて最初に会ったのが彼、ナムだった

ご厚意で家に入れてもらい、千雨を寝かすことができた

そのあと、自分達がいるところを確認しようと地図を借りた

それを見た瞬間、自分達の世界ではないことを茶々丸は確信した

それをナムに話してみたところ、彼は疑いの片鱗さえ見せずに信じてくれた

そして会話を進めていくうち千雨が目を覚ました

ということらしい

「そういうことか……にしても、ナムさんだっけ？よく信じられたな」

「彼女の目が、嘘をついている者の目ではなかったからな」

（こいつロボだぞ！？）

心の中で突っ込む千雨

「それで茶々丸さん、今後どうするおつもりで？」

「この世界にいると思われる仲間と合流、その後帰還方法を検討しようかと」

それでかまいませんか？千雨さん、と茶々丸が千雨に同意を求めてきたので

まあそれでいいだろ、と千雨は同意の返事を返した

「それじゃあ茶々丸、出発するぞ」

ベッドから降り始める千雨

「もう行くのですか！？千雨さん」

「ああ、気温が低い夜のうちに移動したほうが私にとっても楽だ」

「……わかりました」

「それでは、村の入り口のところまでお送りしましょう」

ナムに連れられ、二人は家を出て村の入り口へ向かう

村の入り口まで到着すると、ナムは水筒らしき物と小袋を二人に手渡した

「ナムさん、これは……」

「水と、この世界の通貨のゼニーです、茶々丸さん。旅のお役に立ててください」

「ですが……」

「いえいえ、これはお礼ですから」

「……お礼といいますと？」

首をかしげる茶々丸

「ここに来るまでの途中、メタボの竜を倒したと言いましたよね？」

「はい」

千雨が目覚める前、茶々丸は会話でこのことも話していた

「あの竜はギラン族という竜の一族で、よく乱暴をしていて困っていたのです」

茶々丸さんのおかげで当分おとなしくなるでしょう、とナムは笑って言った

「ですからそれは感謝の気持ちです、どうぞ受け取ってください」

「……わかりました、ありがたく使わせていただきます」

ペコリと頭を下げる茶々丸

「千雨さん、体調のほうは……」

今度は千雨のほうを向くナム

「心配ご無用、あんたんトコの家で休んだら全快した、あんがとよ。ほらボケロボ、行くぞ」

「はい、千雨さん」

ナムに背を向け、村から遠ざかる二人

ナムは二人が見えなくなるまで、入り口で立っていた

「ところで茶々丸、ここから一番近い人里は？」

「ここから歩いて二日ほどの小さな町です。地図をナムさんの家でインプットしておきました」

「二日っておい……」

これからの旅に、いきなり不安を覚える千雨であった

第１３話　ちう茶々放浪記？砂漠編（後書き）

これにて一巡目何とか終了です

次回はキャラ紹介のやつをやります

楽屋ネタも混ぜながらやりますので、両方のキャラを知ってる人もぜひ！

司会キャラのリクがなかったため（少悲）当初予定していたキャストでやります

文の長さが未定なので、ひょっとしたら更新が遅れるかもです

そのときはご容赦ください

感想のほうドシドシお待ちしています

返信は遅くなっても基本全部しますので、ハイ

ではまた次回！

あと、ナムとギラン知らなかった人、本当にすいません

番外編　登場人物紹介＋α（前書き）

注意
・これは物語本編ではありません
・楽屋ネタが少々あります

ではどうぞ！

番外編　登場人物紹介＋α

クウネル
「クウネル・サンダースと」

エヴァ
「エヴァンジェリンの……」

クウネル
「登場人物紹介＋αのコーナー！」

エヴァ
「……」

クウネル
「ここでは、ネギまやＤＢＺを知らない人たちの為、簡単な紹介及び私達のトークをお送りします」

エヴァ
「……」

クウネル
「ちなみにこれは番外編なので、本編の（といってもまだ出てませんが）私達とは干渉しません
のであしからず」

エヴァ
「……」

クウネル
「おや、どうしたのですエヴァンジェリン？ムスッとして……」

エヴァ
「……出せ」

クウネル
「はい？」

エヴァ
「私も本編に出せーーー！！ぼーや達だけ出ていてずるいではないか！」

クウネル
「ああ、そのことですか……」

エヴァ
「タカミチでさえプロローグに出てるのだぞ！なのに私が出てないというのはどういうわけだ！？」

クウネル
「それはですね……作者曰く『扱いづらいから』だそうです」

エヴァ
「はああ！？」

クウネル
「クリリン＝古とした場合、エヴァンジェリンの強さをどのあたりに位置づけるか散々考えた結果、

『出さないのが一番楽じゃん』という考えに行き着いたそうです」

エヴァ
「ふざけるなー！！単に作者の力量不足なだけではないか！第一この作者は、お気に入り登録件数が増
えるたびに喜びすぎだ！一件増えただけでも兄弟に自慢してるし！」

クウネル
「それを言っちゃ駄目ですよエヴァンジェリン。そのお詫びもかねて、こうして番外編に出させてもら
ってるんですから」

エヴァ
「まったく……まあしかたない、こうなったからにはここで、目いっぱい目立ってやる」

クウネル
「その意気ですよ、キティ」

エヴァ
「その名で呼ぶな！」

クウネル
「では、本編での登場順に紹介していきます」

エヴァ
「まずはぼーや達だ」

ネギ・スプリングフィールド（ネギま！）
「魔法先生ネギま！」の主人公で、チビッ子先生兼見習い魔法使い。出身はイギリスのウェールズで、
魔法学校を首席で卒業している。担当科目は英語で、得意魔法は風・雷・光。自分の生徒である古から
中国武術の教えを受けている。また、英雄であった父親、ナギ・スプリングフィールドは彼の永遠の憧
れである。本編では現在、悟飯（後述）の家に居候し、彼と共に修行に励んでいる。

犬上小太郎（ネギま！）
人間と狗族のハーフで、ネギの永遠のライバル。一方のネギは年が近いこともあってか、どちらかと
いうと親友として見ている。また、狗神を操る狗神使いで、我流の格闘術を組み合わせた戦闘スタイル
で戦う。本編ではネギと同じく、悟飯の元で居候し、修行している。

雪広あやか（ネギま！）
ネギの担当する３－Ａの委員長で、通称いいんちょ。かなりのショタコンで、ネギを心から愛してい
る。合気柔術の使い手で、低級妖怪なら倒すことができるほどだ。
魔法の存在は今回の事件をきっかけ
に知ることとなる。前述の二人と同じく悟飯の元で居候中。

孫悟飯（ＤＢＺ）
「ＤＲＡＧＯＮＢＡＬＬＺ」の主人公、孫悟空の息子。さきのセルとの戦いでその父を失っている。怒
ると見境がなくなり、とんでもないパワーを発揮する。また、戦闘民族「サイヤ人」のハーフでもあ
る。向学心も旺盛で、ネギたちと修行に励む傍ら、ネギに勉強を見てもらっているらしい。

クウネル
「……とまあ、ネギ君ｓｉｄｅはこんなものでしょうか」

エヴァ
「一部出てない者がいるが、主要人物ではないため省いた」

クウネル
「御了承ください」

エヴァ
「……にしても、悟飯とぼーや達とじゃ差がありすぎないか？修行になるのか？」

クウネル
「なあに、ネギ君達のことです、どんどん強くなっていくでしょう。作者の都合もありますし」

エヴァ
「結局そこかよ！」

クウネル
「クリリン＝古も、ホントはかなり無理があったんですよ？」

エヴァ
「そんなこと感想のたどたどしい作者の返事を見れば分かるわ！」

クウネル
「ハハハ……では気を取りなおして、刹那（楓）さんｓｉｄｅです」

長瀬楓（ネギま！）

ネギの生徒にして甲賀忍者中忍。忍術及び体術に優れ、３－Ａきっての武闘派である。中でも影分身を得意とし、十六人にまで分身が可能。本編ではピッコロ（後述）のテストに合格し、刹那と共に彼の元で修行中である。

桜咲刹那（ネギま！）
京都神鳴流の剣士で、人間と鳥族のハーフ。木乃香（後述）とは幼馴染で、現在木乃香の父から護衛を命じられている。本編ではピッコロのテストをパスし、楓と共に修行中。また、ネギとの仮契約者の一人でもある。

近衛木乃香（ネギま！）
ネギの父、ナギの戦友を父に持つサラブレッド。出身は京都、そのため刹那とは幼馴染で、彼女を唯一『せっちゃん』と呼ぶ人物である。ネギと仮契約を結んでおり、また回復魔法を使うことができる。そ

のため、ピッコロ達の修行では重宝されている。

アルベール・カモミール（ネギま！）
通称カモ。オコジョ妖精でネギの使い魔。かわいらしい外見とは裏腹に、中味はかなりのエロオヤジ。

ピッコロをエヴァンジェリンと重ねて見ることもしばしば。また喫煙者である。

ピッコロ（ＤＢＺ）
地球から遠く離れたところにあるナメック星の戦士。孫悟飯の師匠でもあり、彼からはとても尊敬され

ている。かなり頭が切れていて、頭脳的な作戦をとることも多い。本編では現在、楓と刹那を自分の修行相手（実質弟子）にして修行している。

クウネル
「こんなところですね。今度は全員出しましたよ」

エヴァ

「このｓｉｄｅはサブキャラが一人も出てないだろうが……」

クウネル
「そういえばこの作品、当初の段階では木乃香さんの代わりにネギ君が入る予定だったそうです」

エヴァ
「ほう、ピッコロがぼーやを悟飯と重ねて見るわけだな。何故やめたんだ？」

クウネル
「木乃香さんを刹那さんと離すと、彼女が空を飛んで捜しに行ってしまいそうだから、というのが一つ。もう一つは……」

エヴァ
「もう一つは？」

クウネル
「某小説掲示板のＳＳに、まったく同じ展開の（ネギがピッコロの弟子になる）作品があったから、だそうです」

エヴァ
「それは確かに書きづらいな……色々と」

クウネル
「要するに作者の意地ですね。ではお次は、問題になったあのｓｉｄｅです」

古菲〈クーフェイ〉（ネギま！）
中国武術の達人の武闘派。中国武術研究会の部長で、ネギの師匠でもある。強いものと戦うことが何よ
り大好きで、そのため楓とも仲がよい。本編では現在、クリリン（後述）の元で居候しながら、互いに
腕を磨きあっている。

四葉五月（ネギま！）
ネギたちが通う麻帆良学園内にある屋台『超包子〈チャオパオズ〉』のコック。学生の身でありながら
その腕は一流で、教師生徒問わず評価されている。古と同様にクリリンの元で居候している。

クリリン（ＤＢＺ）
孫悟空の一番の親友で亀仙人（後述）の弟子。地球人の中では一番の実力者である。気のコントロール

がうまく、それを活用した技も多い。結婚願望があるがいまだ独身。本編では古と共に修行中。クリリンが気、古が武術に関してそれぞれ教え合っている。

亀仙人（ＤＢＺ）
別名武天老師。亀仙流の師で、昔は武術の神様と呼ばれていた。だが悟空らとどんどん差が開いていき、今は前線から身を退いている。かなりのスケベじじいで、本編では寝ていた古の胸をつつこうとした（結局失敗し、古に殴られる）。住んでる家はカメハウスと呼ばれている。

エヴァ
「今回、『菲』の字がちゃんとあるな」

クウネル
「知り合いのパソコンを使って今回は打ってるそうです。作者のパソコン古いですから」

エヴァ
「ふーん」

クウネル
「また余談ですが、『亀仙人に胸をつつかれそうになり殴る』ことになっていたのは当初アスナさんの
予定だったそうです」

エヴァ
「まあそっちの方がキャラ的には合ってるわな」

クウネル
「ですが、そうしようとしていたら突如、クリリン＝古の図式が浮かび上がり入れ換えたそうです」

エヴァ
「そこを読者に突っ込まれたわけだがな」

クウネル
「続いて、のどか（ハルナ）さんｓｉｄｅです、どうぞ」

宮崎のどか（ネギま！）
通称本屋。ネギのことが大好き（一人の男性として）な、引っ込み思案の図書委員。夕映（後述）やハルナ（後述）とは部活つながりで親友。ネギと仮契約をしており、それにより読心術が可能。本編では

現在、ブルマ（後述）の家で居候中の身である。

早乙女ハルナ（ネギま！）
のどか達のクラスメートでトラブルメーカー。漫研にも所属しており、ペンネームは『パル』。ネギと
の仮契約者の一人で、それによって描いた絵を実体化できる能力を得た。本編ではその能力を活かし、
ヤムチャ（後述）の修行相手として奮闘中である。

葉加瀬聡美（ネギま！）
通称ハカセ。学年二位の頭脳を持つ天才で、ロボット工学研究会に所属している。非常に研究熱心で、
マッドサイエンティストと呼ばれることも。本編ではカプセルコーポレーションの科学技術に感激し、
その技術をブルマの父、ブリーフから学んでいる。

ブルマ（ＤＢＺ）

カプセルコーポレーションの一人娘で、天才的頭脳の持ち主。現在は一児の母である。のどか達の世界の魔法に、とても興味がある様子。

ヤムチャ（ＤＢＺ）
地球人の中ではトップクラスの実力の戦士の一人。だがいつも不運に見回られている。ブルマの元カレだったが、自らの浮気性が原因で別れて今に至る。本編ではハルナの能力を活用し、修行に励んでいる。また、クリリンと同じく亀仙人の弟子である。

ベジータ（ＤＢＺ）
サイヤ人の王子で悟空のライバル。ブルマの家に住んでいて、子どもも一人できている。悟空が死んだことで気力を失い、ふさぎ込む毎日である。のどか達にはそこまで興味がないようだ。

エヴァ
「ベジータまで書く必要あったか？」

クウネル
「メインキャラですし、本編にも出てますからね」

エヴァ
「あれは出たに入るのか？」

クウネル
「ちなみに作者のイメージでは、ヤムチャ≧ハルナのゴーレム達（平均）位のようです」

エヴァ
「まあそんなもんか。次は綾瀬夕映ｓｉｄｅだ」

綾瀬夕映（ネギま！）
哲学者を祖父に持つ、論理的な少女。前述した楓と古、後述するアスナとまき絵に自分を加えた五人で

バカレンジャー（３－Ａバカ五人衆）を結成しており、そのリーダーを努めている。本編では占いババ

（後述）に弟子入りする一方、館の掃除といった雑用をしている。
ネギとの仮契約者の一人。

朝倉和美（ネギま！）
報道部所属のスクープ大好き少女。昔ネギの魔法のことをばらそうとしたことがあったが、今では秘密を守るエージェントとしてネギの味方についている。さよ（後述）の数少ない親友。本編では占いババの館で接客などを行っている。

相坂さよ（ネギま！）
六十年以上前に死んだ麻帆良学園の地縛霊で、死ぬ前の記憶がまったくない。朝倉とは二年間隣の席で、今では大親友。あまり人には見えない筈なのだが、この世界ではけっこう見えている模様。本編では占いババのお供などをしている。側近のピンクお化けとは既にマブダチ。

占いババ（ＤＢＺ）
特技の占いで商売を行う老婆。亀仙人の姉でもある。あの世とこの世を行き来することができ、あの世

の武道家を金でスカウトし、金のない客と戦わせたりするバトルマニアでもある。本編では、仲間の場所を占うという条件で、三人を館で働かせている。夕映の弟子入りはある意味事故。

クウネル
「ここからですよね、元祖ＤＢのキャラが出てきたのって」

エヴァ
「ドラキュラマンとかマニアック過ぎるぞ……」

クウネル
「ここの弟子入りテストの部分は、結構作者も気に入っているそうです」

エヴァ
「その内あいつ、超神水も飲めるんじゃないか……？」

クウネル
「次はアスナさんｓｉｄｅです」

神楽坂明日菜（ネギま！）

ネギの魔法を最初に知り、最初に仮契約を行った生徒。頭脳はクラス最下位でオッドアイの持ち主。魔

法無効化能力〈マジックキャンセル〉を持ち、咸卦法（気と魔力を融合させる）を用いて戦う、使う武

器はハリセン（大剣）。本編では天津飯（後述）と修行中（武器未使用）。

佐々木まき絵（ネギま！）

新体操部所属のネギ大好き少女。頭脳は下から二番だが運動神経はそれなりによく、新体操のリボンで

遠くのものを取ることができる。魔法のことは今回の事件で初めて知ることになる。本編では現在ヒマ

人。

天津飯（ＤＢＺ）

地球人の中ではトップクラスの戦士。亀仙流と対極の存在の鶴仙流の一派であったが、考えについてい

けず辞めている。今は弟弟子の餃子（後述）と山に篭り日々修行をしている。本編ではアスナの素質を

見抜き、共に修行中である。

餃子〈チャオズ〉（ＤＢＺ）
元鶴仙流で天津飯の弟弟子。キョンシー風のかっこうをよくする。
背は小さいが、超能力を使って戦う

ことが出来る。天津飯を実の兄のように慕っている。作る料理はそれなりに美味い。

エヴァ
「……神楽坂明日菜のマジックキャンセル、ここだと結構ずるいな」

クウネル
「気攻波系全部無効ですからね」

エヴァ
「元気玉も消えるんだろ？」

クウネル
「消えますね」

エヴァ
「チートレベルだな……ん？次の紹介で最後か」

クウネル
「ちう茶々放浪記と残りのキャラの分ですね。ではどうぞ」

長谷川千雨（ネギま！）
影でこっそりネットアイドル活動を行っているメガネ少女。そのメガネも伊達メガネで実際は視力はよく、ネットアイドルをやっているときは外している。魔法のような非現実的なことは受け入れないスタンスを取っていたが、麻帆良祭での事件やネギとの仮契約を通し、完全に足を踏み入れている。本編では茶々丸（後述）と共に、仲間を探して放浪中。

絡繰茶々丸（ネギま！）
ネギのことを密か（？）に愛するロボ（ガイノイド）少女。葉加瀬と超（後述）によって製作され、ネギの師匠、エヴァンジェリンとドール契約を結び彼女の従者になっている。ジェット噴射、ロケットパンチ等を搭載し戦闘能力も高い。本編では千雨と共に、仲間を探し

て放浪中。

超鈴音〈チャオリンシェン〉（ネギま！）
自称ネギの子孫&火星人。今回の事件のある意味元凶を作った生徒である。運動、勉強、料理と何でもござれの完璧超人。古、葉加瀬、五月と仲が良く、また『超包子』のオーナーでもある。本編では未だ行方不明。

龍宮真名（ネギま！）
バイアスロン部所属の銃の名手。『魔眼』なる特殊な眼を持ち、退魔の仕事をよく行っている。刹那とは仕事仲間で、楓とはライバル関係にあるようだ。金の為なら何でもやる仕事人である。本編では超同様まだ行方不明。

クウネル

「……見事にナムさん達を省きましたね、作者」

エヴァ
「というか、茶々丸達のｓｉｄｅは元祖のやつしか出てないぞ……」

クウネル
「ちなみに、次回（二順目）のちう茶々放浪記でも、元祖のキャラを出すつもりらしいです」

エヴァ
「読者はついていけるのか……？」

クウネル
「とまあ、ついにこの番外編も終わりなわけですが、エヴァンジェリンは何か思ったことはあります
か？」

エヴァ
「やっぱり本編出たい」

クウネル
「それですか……でも次回の番外編にも出れるそうですから焦ることはないですよ」

エヴァ
「……次はいつなんだ？」

クウネル
「天下一大武道会終了後だそうです」

エヴァ
「随分と先だな……」

クウネル
「学園長達よりはマシですよ」

エヴァ
「それもそうだな……」

クウネル&エヴァ
「「ハッハッハッハッハ」」

エヴァ
「コホン、では読者の諸君」

クウネル
「次の番外編でお会いしましょう」

番外編　登場人物紹介＋α（後書き）

いかがだったでしょうか？

今週から新学期のため、春休みのような更新ペースはもう難しいです

下手すると週一ペースくらいになりそうです

何とか続けていきますので、応援よろしくお願いします

第１４話　この七日間は伊達じゃない！（前書き）

やっぱり間が空いてしまいました。やっぱり学校と両立は大変です、ハイ。今回の話は、冒頭にもあるんですがトリップしてから一週間後ということになってます。もう少し一日一日を濃く書こうとも思ったのですが、さっさと武道会編に行った方が良いかと思い、グッと進めてみました（さらに言えば、ネタがそんなにないんです）ネギ達のすんごいパワーアップぶりを、どうぞごらんあれ！

第１４話　この七日間は伊達じゃない！

ネギ達がこの世界にやってきて、一週間がたっていた

「おーいネギ、悟飯、早よ始めようやー」

今ネギ達は、パオズ山にある孫悟飯の自宅にいた

丁度ネギが、悟飯の勉強を見ていたところらしい

大学卒業相当の頭の持ち主のネギだ

社会などは無理にしても、数学などを教えることは容易なことであった

「ちょっと待ってコタロー君、これが最後の一問だから」

机に向かっていた悟飯が振り向き、後ろにいたコタローへ返事を返す

「ったく、修行前に勉強なんかよーやれるな」

「コタロー君は嫌いなの？」

「嫌いに決まっとるやろ。こーゆーのをやると頭が痛くなんねん」

「そっか……」

残念そうな顔をする悟飯

再び机に向かい、問題を解いていく

ものの数十秒で、悟飯は最後の一問を解いてみせた

「できた！」

「うん、正解」

横にいたネギが赤ペンで丸をつける

「じゃあ行こうか、ネギ君、コタロー君」

「うん！」

「おう！」

三人は意気揚々と部屋を出て、ある場所へと向かう

いつも修行場として使っている平地である

そこで毎日、彼らは欠かさず修行を行っていた

来たるべき天下一大武道会のために

そうこうしてる間に到着した三人

に加えもう一人

「何でまたあやか姉ちゃんも来るねん……」

「あら、来たら悪かったですの？」

いいんちょこと雪広あやか

彼女もまた、三人の修行に参加していた

「二週間修行して、今度こそアスナさんを倒してみせますわ！」

「またそれかいな……」

ネギと悟飯は彼女の参加は賛成していたが、コタローだけは反対していた

「そんなこと言っといて、本当はネギ目当てなんやろ？」

「なっ、そんなことはありませんわ！」

顔を赤くして否定するあやか、もちろん嘘である

あやかの修行には基本、悟飯かネギのどちらかが付いていた

つまり彼らの修行に参加すれば、約半分の時間はネギといられるのだ

あやかとしても、悟飯の家で待っているよりはずっと良い

といっても、アスナを倒したいという思いも嘘というわけではないのだが

「まあまあ二人とも」

ネギが止めに入る

「いいんちょさん、最初三人で組み手をしますのでアレの自主練をして待っててもらえますか？」

「了解しましたわネギ先生！」

ネギの指示を受け、あやかは喜んでそれに従う

その後すぐネギ達は組み手の準備に入る

一対二（悟飯対ネギ＆コタロー）に分かれ構えを取る

悟飯とコタローは気を全身にまとわせ

ネギも魔力供給を自身の身体に行なう

「いつでもいいよ二人とも！」

「よっし、行くでネギ！」

「うん！」

悟飯の言葉を受け、ネギとコタローの両名が瞬動で悟飯に突っ込む

そしてそれぞれがパンチやキックのラッシュを放っていく

だがその攻撃を悟飯が喰らうことはない

上体を反らしたり、腕でガードをしたりして攻撃をかわしているのだ

「くそっ！やっぱ一筋縄にはいかへんか……」

「でも初めての時と比べてすごく速くなってるよ。それにネギ君も」

「そう？でもまだまだだよ」

激しい攻防を繰り広げながらも会話を交わす三人

悟飯の言ったことは嘘ではない

伊達に二人も、悟飯の元で修業していたわけではない

一週間という短期間ながらも、悟飯の指導を受け吸収していった

それこそ、水を吸うスポンジのように

現に悟飯も、初日のコタロー戦の比でないほど真剣に攻撃をさばいている

「それならこれでどうや！」

「！」

悟飯の目の前で、いきなりコタローの数が増えた

その数合計五人、そのうち四体はコタローの影分身だ

合計六人の攻撃に、これは防ぎきれそうにないと悟った悟飯

気による飛行術、『舞空術』を使っていったん空中へと退避する

一週間前のネギ達ならたいそう驚いていただろう

しかし今のネギ達は違う

「逃がすかい！」

コタロー五人が悟飯の後を追い、空へと飛び上がる

それは、悟飯が使う舞空術とまったく同じであった

もともと気のコントロールは上手かったコタロー

ものの数日で出来るようになっていた

また、今あやかがしている自主練も舞空術の練習である

「さすがだよコタロー君、一週間でここまで出来るようになるなんて……でも」

ニッと笑みを浮かべる悟飯

その笑みを崩すことなく、最初に殴りかかってきたコタローのパンチをかわす

「みんな一方向から来たのは失敗だったね」

手刀を斜めに振り下ろし、コタローの身体へと命中させる

「ぐあっ！

そのまま地面に向かって斜めに吹っ飛んでいく

第二第三と殴りかかるコタロー達も、同じようにやられていく

「一対複数と、一対一を複数回やるのとじゃ全然違うよ」

先ほど地上では、前方百八十度を囲むようにして攻めていたネギたち

しかし空中ではそうではなかった

早く攻めようという焦りから、多方向に分かれずに攻めてしまっていたのだ

そのため、コタローの影分身が全員やられるという結果になった

空に残るは本体のコタローと悟飯のみ

「ちっ、全部おじゃんになってしもうた……」

「これで勝負あったかな？」

「へっ、まだに決まってるやろ！うらららららら！」

今度は両手から気弾攻撃を仕掛けるコタロー

次々と気弾が悟飯めがけて放たれていく

だが、それらを悟飯は左手だけで難なくはじいていく

ネギ達二人の攻撃に対処するよりは断然容易なことだ

そうする中、悟飯はある疑念がわいた

(弾かれちゃうことくらいコタロー君はわかってる筈なのに、どうしてこんな無駄なことを?)

これには何か別の目的があるのか?

そう思った矢先のことだった

「雷の暴風!」

「し、しまった!」

そう、悟飯は肝心なことを忘れていたのだ

空中へ退避したとき、追ってきたのはコタローとその影分身のみ

ネギは地上に残っていたのだ

ネギも修行により、上級魔法使いの飛行法『浮遊術』を会得していた

舞空術に用いる気のコントロールの仕方を、魔力でネギなりに応用したのだ

つまり、ネギもコタローと共に悟飯を追うことができた

だがそれをネギはしなかった

自らが持つ最強呪文の詠唱を行なうために

「いけえええ！」

悟飯のちょうど右下辺りから巨大な、竜巻を帯びた雷が放たれる

「くっ！」

空いていた右手を使い、悟飯はとっさにかめはめ波を放つ

青白い帯状の気攻波が、ネギの最強呪文とぶつかり合う

本来なら両手で撃つ技であるかめはめ波

しかし、左手は気弾をはじくのに使われていた

当然コタローは攻撃の手を緩めない

（そうか、コタロー君はそのために気弾攻撃を……）

すると、悟飯のかめはめ波が少しずつ押され始めてきた

悟飯達との修行で威力が増してるとはいえ、普段ならこんなこと

はありえない

だが悟飯は気が練りきれていないうえに片手撃ち

対してネギは万全の状態で放ったのだ

ふたりの力量差はこれにより完全に埋まっていた

「ぐううううう……」

どんどん雷の暴風が悟飯へと迫ってくる

「こうなったら……」

意を決し、悟飯は大きく息を吸う

「やあっ!!」

自らの身体に気を込める悟飯

すると悟飯の髪は金色に染まり、瞳も緑へと変わる

また、悟飯を包んでいた気のオーラも髪と同じく金色に

サイヤ人の変身形態の一つ、『超〈スーパー〉サイヤ人』である

二人との修行において、今まで一回もなっていなかった悟飯

だが今日、ついにその姿を現すこととなった

超サイヤ人へ変わったとたん、悟飯に気が一気に膨れあがる

「な！？」

雷の暴風が、一気にかめはめ波に押し返される

このパワーアップしたかめはめ波をどうにかすることは、今のネギでは不可能であった

「うわーーーー！」

「ネギーー！」

かめはめ波に飲み込まれるネギ

コタローは思わずネギの方を向いて叫ぶ

その隙を悟飯は見逃さなかった

「ぐふっ！」

かめはめ波を撃ち終わった右手を戻し、左手で弾きながらコタローの懐に入った悟飯

瞬時に腹に一発を入れた

「やあっ！」

そして背中にハンマー打ち（両手を組んで叩くやつ）を続けざまに放った

「ぐあああ！」

垂直に地面に降下し、激突するコタロー

とっさに気を放って衝撃を緩和をしたようなので大怪我には至っていない様だ

悟飯が後を追いように降りてくる

「大丈夫！？二人とも！」

「平気平気、たいしたことあらへんわ」

コタローはゆっくりと立ち上がり

「僕も大丈夫……」

ネギも立ちこめる土煙の中から姿を現した

「障壁である程度防いだから……」

だがダメージがあるのは明らかで、実際コタローより大きい

「ネギ先生！」

ボロボロのネギを見て、自主練中だったあやかも駆け寄ってきた

「本当に大丈夫なんですの！？」

「平気ですってこのくらい……」

あやかを心配させまいと、無理して元気に振舞うネギ

だがそれを見破れない一同ではない

「全然平気じゃありません！少しお休みになってください！」

「で、でも……」

「そうやでネギ！大会前に無理して大怪我にでもなったらしゃれにならんで！」

「コタロー君の言うとおりだよネギ君、ここは少し僕達と休憩にしよ？」

「……わかった、そうするよ」

悟飯の提案を受け、ネギ達は一時休憩を取ることとなった

「にしても、ようやく悟飯を超サイヤ人にさしたわ！」

「うん、ここまでホント長かったよ……」

少しずつ疲れが取れてきたネギ

今はみんなと談笑していた

超サイヤ人のことは、ネギ達がやってきた次の日に悟飯から聞かされていた

さらに強くなるということに最初驚いていた一同だったが

「せやったら超サイヤ人にならなあかん位、俺らも強くなったる！」

と、コタローがすぐさまこのような目標を立てていた

一対二だったとはいえ、達成できたのは事実

今日の組み手の成果に大満足する二人だった

「本当にすごいよ二人とも……あ、そうだ！」

何か思いついた悟飯

ネギ達三人に顔をズイッと近づける

「今から、ピッコロさんに会いに行かない？」

「「「え？」」」

一同に声を上げる三人だった

第１４話　この七日間は伊達じゃない！（後書き）

はい、いかがだったでしょうか？

パワーアップしすぎだろ等、突っ込み所満載になっちゃいました（汗）

ちなみに言っておくと、一巡目の話は全部同じ日の出来事です

説明が遅れてすいません

さて次回は、ついにネギまキャラたちが合流！

楓や刹那もネギ達並に強くなっちゃってます（笑）

次の更新も週末になりそうです

感想ドシドシ待ってますのでそちらの方もどうぞ

ではまた次回！

あと今更なんですが、

「修業」と「修行」ってどっちが合ってますかね？

クウネル

「本当に今更ですね……」

第１５話　ついにコンタクト！使うは二人の主従の証（前書き）

土曜日くらいにしようと思ってましたが、学校のパソコンが使えたため今日投稿します。前回に比べ量が少なめです、ご了承ください。

ではどうぞ！

第15話　ついにコンタクト！使うは二人の主従の証

一方そのころ、ピッコロ達はというと……

「でやあああ！」

一対一の組み手を行っていた

現在はピッコロと楓

場所は初日にテストを行ったのと同じ場所

全力で向かってくる楓に対し、ピッコロは右手を使わずに相手をしていた

「どうした！最初より動きが鈍いぞ！」

それでも、ピッコロは完全に防ぎきっていた

顔からは汗一つ出ていない

そんな様子を、少し離れた場所で座って見ている刹那達

よく見ると、刹那の傷を木乃香が治療していた

「しかしピッコロの旦那、やっぱただモンじゃねーな」

木乃香の肩に乗っていたカモがつぶやく

「はい、ああして我々と何時間も続けているというのに……」

「疲れへんのやろか……はいせっちゃん、治療済んだで」

治療が終わり、杖を手元に戻す木乃香

「ありがとうございます、お嬢様」

「ええって、ウチも練習になっとるし」

二人が仲良く会話しているのもつかの間

「ずああっ！」

「ぐっ！」

ピッコロの手刀が楓を捉え、こちらに吹っ飛んできた

二人（十一匹）の目の前でダウンする楓

「うーん……」

「次！刹那！」

「は、はい！」

ピッコロの声を聞き、刹那はすぐさま立ち上がり、向かっていく

「さてと、次は楓さんの番やな」

「すまぬでござる木乃香殿……アタタ」

驚く様子もなく、楓に近寄り治療を始める木乃香

すでに日常茶飯事となっているようだ

一方の刹那も、ピッコロとの組み手をとっくに始めている

ようするに現在ピッコロ達は

ピッコロＶＳ楓（その間刹那を治療）

←

楓がダウン

←

刹那とバトンタッチ

←

ピッコロＶＳ刹那（その間楓を治療）

←

刹那がダウン

←

楓とバトンタッチ

を、数時間延々と続けているのだ

ただし木乃香の治癒魔法がないと成り立たないため、魔力が切れると一旦休憩となる

最初はすぐ魔力が切れていた木乃香だったが、毎日続けたことで

大分もつようになった

楓の治療もすぐ終わり、二人はピッコロと刹那の組み手に目を移す

「ふむ、刹那殿の体術も大分向上したでござるな……」

普段は剣でしか戦うことのない刹那

そのため、始めの数日は楓にかなり遅れをとっていた

しかし日数をこなすにつれてメキメキ上達し、今では楓に追いつきそうな位だ

また夜中こっそり、腕を鈍らせぬよう剣の修行も欠かしていないようだ

「でやあっ！」

刹那が右拳を放つが、ピッコロは左手で難なく受け止める

「まだ動きが甘い！」

「ぐふっ！」

右の膝蹴りが刹那の腹を捕らえる

思わず腹を押さえようとする刹那だが、そんな時間をピッコロは与えない

刹那の拳を止めていた左手で、横へとなぎ払う

「ぐっ！」

倒れ込む前に何とか受身を取った刹那

「まだまだぁ！」

鋭い目でピッコロを捉え、再びピッコロに飛びかかる

「ふんっ！」

だが刹那の攻撃はピッコロには届かなかった

左掌を突き出し、その空気圧で刹那を吹き飛ばしたのだ

すでにダメージが溜まっていた刹那、モロにそれを喰らってしまった

木乃香達の少し横で、仰向けに倒れた

「くそ……またダメだったか……」

「よし次！かえ……」

「どうしたでござる？ピッコロ殿」

楓を呼ぼうと口を開けたピッコロだったが、すぐにそれを閉じ、空を見上げた

「悟飯の気だ……悟飯がこっちに向かっている……」

「悟飯殿というと、ピッコロ殿の一番弟子の？」

「ああ」

悟飯の話はよく聞かされていた楓達

楓と刹那はすぐさま、神経を集中させて辺りの気を探ってみる

半径数十キロ程度なら、二人もそれが可能になっていた

「確かに、凄まじい気を感じるでござる……」

「それだけじゃないぞ楓、他にも複数の気が……」

「なんと！」

刹那の言葉を聞き、楓はさらに神経を研ぎ澄ませる

「本当でござる、他にも小さい気が三つ……悟飯殿の知人でござろうか？」

「少なくとも、俺の知ってる気ではないな……」

「ピッコロさんも知らないとなると……！」

刹那に衝撃が走った

三つの内の一つの気に、とても覚えがあったのだ

（この気を持つ相手と、私は戦ったことがある……）

記憶をたぐり寄せる刹那

すると、数日前のある出来事に行き着いた

その者と拳を交え、刹那は敗北した

麻帆良祭、麻帆良武道会準決勝にて……

「！！」

「どうした刹那？」

「刹那殿？」

「だとすれば……」

おもむろに、刹那は懐からある物を取り出した

それは一枚のカードだった

時間はほんの少し遡る

「なあ悟飯、まだ着かへんのか？」

悟飯達四人は、ピッコロの元を目指して飛んでいた

あやかはまだ飛べないため、悟飯におぶされてるという形だ

本当はネギの背中に乗りたかったあやかだったが

「ネギ君はまだ上手く飛べないから危ないですよ」

と言われ、しぶしぶ悟飯の背中に乗ることとなった

「もうすぐだよコタロー君、あと数分だから」

悟飯が先導し、その後ろを二人が並んで飛ぶ

「にしても、悟飯の師匠ちゅう位なんやから、すんごいんやろーな」

「そうだね、どんな人なんだろう……」

ネギ達はピッコロに会うのを心待ちにしていた

ピッコロのイメージをどんどん膨らませていく

そんな時

“ネギ先生！”

「うわっ！」

突如ネギの脳内に、覚えのある声が響いてきた

“私です！刹那です！”

「刹那さん！？」

急いで空中で静止する

「どないしたんや？ネギ」

「ネギ君？」

“今仮契約〈パクティオー〉カードで念話をしています、聞こえていたら返事を！”

ネギは慌てて、上着のポケットから一枚のカードを取り出す

そこには翼を生やし、剣を持つ刹那の姿が描かれていた

それを額に当てる

「刹那さん！ネギです！今どこにいるんですか？」

カードを使っての念話には距離制限がある

つまり二人は、念話が可能な近い距離にいるのだ

“やっぱり！ネギ先生、今悟飯さんと一緒にいるんですか？”

「え！？」

刹那から出てきた悟飯の名に、ネギは目を丸くする

「どうして悟飯さんのことを！？」

“今私達、私とお嬢様と楓とカモさんは、訳あって悟飯さんの知り合いの所にいるんです”

「ちょっと待ってください！それってピッコロさんのことじゃないですか！？」

“はい、やはり悟飯さん達とこちらに向かっているんですね？”

「そうです」

「おいおいネギ！」

「！」

念話の最中だったネギだが、顔前にいきなりコタローの顔が現れる

そっちのけだったことでややご立腹の様子

「いったい何やってんねん！」

「ご、ごめん。今刹那さんと念話を……」

「何やと!近くにおんのか!?」

「うん、ピッコロさんと一緒だって」

「ホンマかいな!?」

“ネギ先生、とりあえず合流しましょう。詳しい話はその後で”

「そ、そうですね。急ごう、コタロー君」

「おう!」

意気揚々と答えるコタロー

少し離れた場所にいた悟飯とあやかは、二人の会話をちゃんと聞けなかったようだ

「ネギ先生?さっき刹那さんとおっしゃいませんでしたか?」

「はい、ピッコロさん達の所にいるんです!」

「まあ!」

あやかの表情が明るくなる

悟飯も、ネギの仲間がいるという概要は理解でき、笑顔を浮かべる

「じゃあ早く行こうネギ君!」

「うん!」

「あやかさん、しっかり捕まっててくださいね……」

「はい！」

気（ネギは魔力）をまとわせ、再び飛行を始める三人

さっきよりもずっと早く進んでく

目指す先には刹那らがいる

ネギらの、大切な仲間達が

第１５話　ついにコンタクト！使うは二人の主従の証（後書き）

前回の後書きで合流と書いたのに、ちゃんと合流できませんでした（汗）

そこまで書くと文量が多すぎ（皆さんからしたら少ないんでしょうが）になった
ので区切りました、スイマセン。

次回は合流したところから話を始めます。

ドシドシ感想もお待ちしています。

返信も、来てから二、三日以内には返しますので。

ではまた次回！

第１６話　やっぱり似ている二人（前書き）

つい最近になって初めてアクセス解析を見ました（今まで存在を知らなかったんですｏｒｚ）。なんとアクセス数が７万超えてるとは！　といっても、ほかの作品とか見たら６ケタ７ケタとかかなりありましたが（笑）。とにかくうれしい限りです。

ではどうぞ！

第16話　やっぱり似ている二人

「アニキーーー！」

「カモ君！」

ピッコロ達の所へと到着したネギ達

ネギを見るやいなや、カモは滝のような涙を流して飛びついてきた

「ご無事でなによりっス！」

「カモ君こそ！」

「ネギくーん！」

お次は木乃香

「わ！こ、このかさん！」

「一週間も会えんくて寂しかったわー」

ネギを抱き寄せ、ギューッと自らの体に押しつける

木乃香の行動に、ネギは顔を赤らめあたふたと慌てだす

「く、苦しいですよー」

そんなネギを遠くから眺める刹那達

「楓」

「うむ、ネギ坊主も無駄に一週間を過ごしていたわけでは無い様でござるな」

ピッコロとの修行を通し、舞空術を会得していた二人

ネギ達も同じ技で（ネギは少し違うが）こちらへ来たことから、一週間の修行の成果が伺える

ネギの実力が格段に上がっていたのは明らかであった

無論コタローの同様である

「楓さん、刹那さん」

「いいんちょさん！」

声を聞いて横を向くと、あやかとコタローの姿がそこにあった

「本当に、ご無事で何よりでしたわ」

「ホンマや、ここはさらに別次元の世界に飛ばされてるかと思ってたわ」

「それは拙者らも同じだったでござるよ」

楓が笑って答える

「しっかし、悟飯から予備知識もらっといて良かったわ」

コタローがちらりとピッコロの方を見る、現在悟飯と会話中

悟飯はネギ達が驚かぬよう、あらかじめピッコロの外見上の特徴を教えていた

緑色で触角があり、宇宙人であると

最初面食らっていたネギ達だったが、

別次元の世界ならありなのだろう、と解釈することにした

さらには絵まで描いてもらい、おかげでさっき会った時も極端に動揺することは無かった

「何もなしで会っとったら魔族と間違うとったで……」

「昔はそう名乗っていたころもあったそうです」

「ふーん」

コタローは刹那の説明に相槌を打つ

「そうそう、楓姉ちゃん達に言わなあかん事があったんや」

「何でござる？」

親指を立て、あやかの方へ向けるコタロー

「あやか姉ちゃん、魔法のこと知ってもうたから」

「「え!?」」

二人がいっせいにあやかの方を向いた

「本当でござるか!?」

「はい、私、ネギ先生への協力は一切惜しまないつもりですわ」

あやかは真剣な眼差しで二人を見据える

「あやか姉ちゃん、俺らに混ざって修行までしてるんやで」

「ほう、確かに以前より気が上がっているでござるな」

元々武術の心得があったあやか

舞空術はまだ会得できていないものの、実力は格段に上がっていた

それでも、楓達にはまだ遠く及ばないのだが

「そういや楓姉ちゃん達」

「「ん?」」

「ピッコロさんてどんな人なんや?」

「「え？」」

「悟飯があんだけ尊敬してるんや、さぞすごい人なんやろ？」

コタローからの突然の質問

二人は腕を組み、上手い言い方はないかと考えている様子

「そうでござるなー」

「しいて言うなら……」

「うんうん！」

「『鬼軍曹』、でござるな」

「……ああ」

額から冷や汗を流しながら、二人は両者納得の答えを出した

彼女達の脳内に、これまでの厳しい修行風景がフラッシュバックされていく

ピッコロが上空から放つ無数の気弾をかわし続けたり

さっきのように数時間延々と組み手をしたり

さらには、重りをつけた状態で日々の生活を強いられたりしていた（修行時は外す）

「拙者が山奥にいた頃とは桁違いでござる」

「私も。京都での修行の比ではないですね……」

苦笑する三人

その『鬼軍曹』はというと

「……ということでいいな？」

「はい、ネギ君たちも喜びますよきっと」

「うむ」

悟飯との話をようやく終えたようだ

ネギ達の方へ顔を向ける

「ネギ、コタロー、あやか、楓、刹那。話があるからこっちへ来い」

「は、はい！失礼します木乃香さん」

「あーん、ネギくーん」

ネギは木乃香のハグから抜け出し、ピッコロの元へと駆け寄る

「何でござろうか？」

「知らんわ、んなこと」

「私達の今後の修行についてでしょうか？」

「おそらくそうですわね……」

楓達四人もすぐにやって来た

「よし、五人とも来たな。今悟飯と話し合ったんだが……」

五人の視線は全て、ピッコロに向けられていた

「これから毎日、合同で修行を行うことにした」

「え！？」

「ホンマか！」

「悟飯殿とも修行でござるか……」

「さらに良い修行になりそうだな……」

上からネギ、コタロー、楓、刹那の順

「実力が近いもの同士でやったほうが効率が良かろう、それに……」

「ピッコロは悟飯をチラ見し、次にネギ達に目を向ける」

「悟飯は、師とするには厳しさが無さ過ぎる」

邪悪な笑みを浮かべるピッコロ

ネギ達の背筋に寒気が走った

「俺は悟飯のように甘くは無い。ビシビシしごくから覚悟しとけよ」

「は、はい！」

「やったるわい！」

「わかりましたわ！」

不安を振り払いながら、何とか言葉を返すネギ達

すると、ピッコロが今度はあやかだけを見てきた

「ただしあやか、始めはお前は参加するな。舞空術をものにしてからにしろ」

今のままで参加してもただの足手まといだ、とあやかに言い放つ

「……わかりましたわ。なんとしてでも会得してみせます！」

ピッコロの言葉は間違ってはいない

本当は悔しいが、指示に従うしかないあやか

「基本は自主トレ、わからなくなったら俺達の組み手を見てろ。刹那達もそうして覚えた」

「はい」

「いいんちょさんならすぐ出来ますよ、頑張ってください！」

「ネギ先生……はい！」

ネギから激励を受け、あやかの顔に笑顔が戻る

それを見てにこりと微笑むネギだったが

ガシッ

「では早速始めるぞ」

ネギの頭をピッコロがつかむ

「ええ！？もうですか！？」

「言ったろ？俺は悟飯のように甘くはないと、今から耐久組み手六時間だ」

「「六時間！？」」

これにはネギだけでなく、コタローもびっくり

「木乃香！準備をしておけ！今日から数が多くなるぞ！」

「はいはーい、こりゃ大変そうやわ……」

組み手の人数が増えれば、回復魔法の使用回数も増えるだろう

当然木乃香の負担も大きくなる

手際よく準備を進める木乃香を見て、ネギは恐る恐る刹那にたずねた

「あの刹那さん？ひょっとしてこんな修行を……」

「はい……毎日やってます」

「！！」

申し訳なさそうに答える刹那

ふとネギの脳裏に、元の世界での修行風景が浮かんできた

一時間が二十四時間になる空間を利用し、睡眠と食事以外はほぼ修行

師匠の教えもスパルタそのもの

なにかそれに近いものを感じた

「何をしてるネギ！さっさと構えろ！」

「は、はい！」

すぐさまピッコロのほうを向き直り、構えを取る

ピッコロはすでに準備万端で、身体中から気があふれ出ている

「まずはお前からだ……今までの修行と同じだと思うなよ」

（ひーーーーー！！）

心の中で絶叫するネギ

ネギが感じたものは間違いではなかった

修行に対する厳しさ

ドスの効いた声

威圧感抜群の睨み

（やっぱりピッコロさん、師匠〈マスター〉とおんなじだーーー！！）

その日から、山から聞こえる爆音がいっそう激しくなったという

「アニキ、ご愁傷様っす」

カモがネギに向け合掌した

第１６話　やっぱり似ている二人（後書き）

ネギグループと刹那（楓）グループ、合流完了です。

この話でいったん切って、次からまた別ｓｉｄｅになります。

ローテーションに従って、あのキャラ達です。

突っ込み、リクエスト等は感想のほうでぜひお願いします。

ではまた次回！

第17話　飛べ飛べクリリン（前書き）

なんか週二回ペースで投稿できそうです。月~金に二回みたいな感じで。週一と週二じゃえらい違いですからね。ペースを崩さずがんばります。

ではどうぞ！

第17話　飛べ飛べクリリン

「うまーーーーーーーーーーい！」

海のど真ん中に浮かぶとある島

そこに一軒だけ建つ家、カメハウスから大きな声が響き渡る

声の主は、この家の主でもある亀仙人

「やっぱりさっちゃんの料理は最高じゃわい！」

「ホントホント、クリリンのなんかとは次元が違うぜ」

「悪かったな……まあ俺のより美味いのは本当だけど」

「当たり前アル！」

テーブルを古、クリリン、亀仙人、ウーロンで囲み、昼食をとっている

元の世界に返るまで、台所を任されることになった五月

初日からその腕を存分に発揮し、亀仙人達から絶大な支持を得ていた

今日のメニューは、エビピラフに卵スープ

「五月の料理は私達の世界でも大人気アル！」

「やっぱりそうか……それにしても毎日すまんのー」

「いえ、喜んでもらえて私も嬉しいですから」

調理器具を片付けていた五月が振り返って答える

この優しい人柄も、人気の理由のひとつである

「本当にさっちゃんはいい娘じゃのー、ブルマとは大違いじゃ」

ブルマとの出来事が、次々とよみがえっていく

グーで殴られるわ、罵詈雑言を吐かれるわ

そういえば一回、銃で撃たれたこともあった（サイヤ人編にて）

「ただ、もうちっとだけ痩せてたら最高なんじゃがのう……」

「何か言ったアルか、亀じい」

「い、いや！何でも！」

ポツリと呟く亀仙人を、古がギロリと睨みつける

亀仙人は首を、これでもかというくらい横に振って否定する

幸い五月には聞こえていなかったようだ

「わかってると思うアルが、もし五月を傷つけたりしたら……」

「わかっとる！わかっとるから！」

拳をギュッと握るしめる古

古のパンチの威力はすでに体験済みの亀仙人

もう二度と喰らいたくはないだろう

「わかってるならいいアルが……」

「おい古、早く食って修行の続きしようぜ」

「そうアルな」

クリリンの言葉を聞き、再び料理を口の中に入れていく

五月の作った特製料理だ、早く食べながらも味わって食べていく

数分ほどして二人は食べ終わり、イスから立ち上がる

「ごちそうさまアル！」

「よく、行くぞ古！」

「了解ネ！」

修行を再開しようと外へ向かう二人

「あ、クリリンさんちょっと待って」

「え？」

ピタッと止まるクリリン

振り返ると、買い物かごを持った五月が立っていた

「食材が切れてきたので、買い物に行ってきてもらえますか？」

「クリリン、五月の料理が食えなくなるぞ、さっさと行ってこーい」

蓮華を口に咥えながら、ウーロンが言う

買い物は基本、クリリンが舞空術で港町まで飛んでいって買いに行っている

確かにそれは困るな、とクリリンは五月から買い物かごを受け取る

「買うもののメモとお金は中に入ってますから」

「オッケー。てわけで古、ちょっと買い物行ってくるから待ってろ」

「えーーー、その間ひまアルよーーー」

口を3の字にする古

「私もついてくアルー」

「ええ！？だって俺今から舞空術で行くんだぜ！？」

この一週間、気に関することを色々と教えていたクリリンだったが、舞空術はまだであった

せいぜい気攻波の扱い方くらいであった

舞空術は今日か明日あたりから教える予定である

「フッフッフ」

クリリンと共に家の外に出る古

すると、古の身体がふわっと浮き上がった

「ええ!?」

目を丸くするクリリン、亀仙人やウーロンも同じ反応

「な、何で!?」

「クリリンを驚かそうと、こっそり夜中練習してたアルよ」

「はーーー、こりゃたまげたわい。クリリン、飛べるんじゃったら連れてっても良かろう」

「まあ、そうですね」

「本当アルか亀じい!」

亀仙人がにっこりと微笑む

「楽しんでくるとよいぞ」

「やったアル！」

満面の笑みを浮かべ、さらに高く上昇する

「クリリン！町はどっちアルか！」

「え？ああ、あっち」

入り口から見て右にある水平線を指差す

「じゃあ、どっちが速いか競争アル！」

「へ？」

「よーい、どん！」

全身に気をまとわせ、古は全速力で飛び出した

強風が起こり、カメハウスの周りの木々の葉が揺れる

すぐに古の姿は見えなくなる

「す、すごいのう古ちゃん……」

「お、おい！待てよ古！」

クリリンも慌てて飛び出す

さらに葉が大きく揺れた

「ふはははははー！ジェット機になった気分アルー！」

周りはすでに海しか見えない

そんな上空を、古はまっすぐに飛んでいた

夜中の練習では島の周辺しか飛んでいなかった古

こうして一直線に全力で飛ぶのは初めてのことだった

「おーい！古ー！」

「アイヤー！もう来たアルか！」

声がしたので後ろを向くと、買い物かごを持ったクリリンの姿が見えた

「むー、負けないアルよー！」

古はさらにスピードを上げる

クリリンとの距離が少し遠のく

「待ってってオイ！」

だがそんなことで振り切られるクリリンではない

舞空術の飛行スピードはクリリンが断然上

気をさらに使って、古との距離をすぐに縮めた

「古！スピードを落とせ！」

古の横につき、クリリンが叫ぶ

「嫌アル！そんな簡単に負けられないアルよ！」

「そうじゃない！今のお前がそんなペースで飛んだら……」

プスンッ

「ありゃ？」

突如、古からガス欠のような音が聞こえてきた

次の瞬間、身体をまとっていた気も小さくなり

「わわわわーー！」

スピードも落ち、フラフラと高度が下がっていく

「途中で気を使いはた……って早速かよ！」

「クリリーーン！」

急いでブレーキをかけるクリリン

自らも、落ちるように降下して古に接近する

「つかまれ！」

「あわわわわ……」

差し伸べられたクリリンの手を、古は必死の思いでつかむ

宙ぶらりんの状態となる古

「ふー、助かたアルよ……」

「ったく、ちょっと考えればわかることだろ？」

クリリンは古を引っ張りあげると、そのまま背中に乗せる

「町まで乗せてやるから、ちゃんとつかまっとけよ」

「すまんアル……」

古をクリリンがおぶり、二人は再び町へと向かっていく

本当は古をカメハウスに戻し、一人で買い物に行っても良かったのだが

（やっぱ、古に色々と楽しませてやりたいしな……）

さながら、妹を想う兄のような心境であった

古は落ちないよう、クリリンにギュッとつかまっている

するとふと、そのつかんでいるクリリンの服に目をやる

「……クリリンのその服、私も同じのが欲しいアルなー」

「え？亀仙流の道着がか？」

顔だけ後ろに向けてたずねるクリリン

「亀仙流のクリリンから教えを受けたのだから、私も立派な亀仙流アル！」

うーん、と考え込むクリリン

彼女の言うことも一理ある

事実、亀仙人がクリリンに

「そろそろ古ちゃんに『あの技』でも教えてやったらどうじゃ？」

と言ったこともあった

『あの技』とは、亀仙流に伝わる必殺技、かめはめ波のことをさす

亀仙人の弟子、悟空、クリリン、ヤムチャなども使うなじみ深い技だ

それを、古に教えたらどうかと薦めたということは……

(武天老師様は、古のことを認めている……)

ということだろう

「頼むアルよー、クリリーン」

それに、残念そうにする古の顔を見たくない

「……わかった、今から行く町にある呉服屋で、注文してやるよ」

「まじアルか!?」

「ああ、大事にしろよ」

「もちアル!ん?」

元気よく答える古

それとほぼ同時に、あるものが目に入ってきた

「クリリン!あれアルか!?」

古は前方を指差す

ずっと続いていた水平線から、建物の屋根が顔を出していた

「そうそう、あの町だな」

「早速道着の注文アル！」

「いや、それより先に買いも……」

「注文アルーーーー！」

クリリンが言い終わるより先に、古が後ろ襟をつかんでがくがくと揺らす

まさに駄々っ子そのもの

「わかったわかった！わかったから止めろ！」

了解の返事をもらうと、古は動作をピタッと止める

とたんに、表情がさっきよりもご機嫌になる

「ならいいアルよ」

「ったく……町に降りるから高度下げるぞ」

「了解アル！」

古はクリリンに、より一層ギュッとつかまる

（ふふふふ……一生の思い出にするアル）

（道着代、高くつかなきゃいいんだけどなー……）

それぞれの思いを胸に秘め、二人は町に降り立った

第17話　飛べ飛べクリリン（後書き）

いかがでしたでしょうか？

後半、かなり古が甘えん坊になってしまったような……

道着を着た古は、武道会でお披露目となりますのでお楽しみに。

次回、またまた元祖キャラ登場です。

知らない方、ご容赦ください。

ではまた次回！

第１８話　飲め飲めクリリン（前書き）

最近勉強のため、あちこちのネギまのクロス小説を読み漁っています。やっぱりどの人もうまいですねー。自分も見習いたいもんです。うまくなるコツって何でしょう？やっぱたくさん書くことですかね？頑張ります。

ではどうぞ！

第１８話　飲め飲めクリリン

「んーーーー！どの世界でも、肉まんはおいしいアルなーー」

「さっき昼飯食ったばっかだってのに……太っても知らないぞ？」

「飛んだときに全部消化しちゃったアルよ」

無事に目的地に着いた二人

着いてすぐに、呉服屋に行って古の道着の注文をした

それを済まし、現在はメモにある食材を買うため市場を回っていたのだが……

「おじさん！ソフトクリーム一つアル！」

「ってまだ食うのかよ！」

行く先々で、古はどんどん食べ物を買っていた

古はこの世界の通貨、ゼニーを持っていない

となれば当然

「……いくらだ？古」

「２５０ゼニーアル！」

「はいよ（うーー、俺の財布がどんどん寂しくなっていく……）

払うのはクリリンということになる

しかも、道着の代金も彼の財布から出ており、その出費はすさまじいものがあった

クリリンから小銭をもらい、古は注文したソフトクリームを受け取った

肉まんと並行し、どんどん口に入れていく

「さてと、さっきの店で買ったので全部だな」

クリリンは古から、持っていたメモに目を移す

豚肉、人参、コショウなどが書かれていたところには、すべてバツがつけてあった

これで本来の目的は無事達成したことになる

「古、それ食ったら帰るぞ」

「ふぇ（え）ー！？ふぉうふぁふふぁ（もうアルか）！？」

「……とりあえずそれ飲み込め」

口いっぱい食べ物が詰まっている古を見て、クリリンが突っ込む

古は言われたとおりに、すぐゴクンと飲み込んだ

「もっと楽しみたいアルよー！」

とたんに不機嫌になる古

「もう十分楽しんだだろ？」

「もっとアルー！」

やれやれ、と額に手を当てるクリリン

「大会終わったらまたどっか連れてってやっから。かえって修行の続きしようぜ？」

「……」

黙りこむ古

（確かに、今は修行のほうが大事かもアル……）

大会が終わっても、最低一週間はクリリンといられる

その間に一回位は行けるだろう

「……約束アルよ？」

納得し、横目でクリリンを見る

クリリンは笑顔で返した

「ああ、約束だ」

古の顔に明るさが戻る

「じゃ、帰るアル！」

手に持っている残りをすぐさま食べ終え、帰路につくクリリンについて行く

（こういうのもいいアルが、クリリンとの修行も楽しいアルしね）

古が思っていたその時だった

バアンッ！

「「！？」」

突如、銃声が響き渡ってきた

音からしてかなり近い

「こっちだ！」

音のした方へ走るクリリン、古も後を追う

ほんの数秒ほどして、クリリンは建物の前で止まる

そこは酒場だった

屋根には、銃弾によって空いた穴が一つ

「ここアルか？」

「ああ……」

「ひーーーーー！」

「「！！」」

今度は男の悲鳴

もう一刻の猶予もない

そう思った二人は、蹴破るように扉を開けて中に入った

「大丈夫アルか！？」

店を見渡す二人

「ああっ！」

すると、クリリンが前方の女性を指差す

カウンターに突っ伏し、左手にグラス、右手に銃を握っていた

銃声の原因は間違いなく彼女だろう

だがクリリンが驚いているのはそんな理由ではなかった

ウェーブのかかった金髪頭で、オレンジ色のバンダナ

それはクリリンのよく知るあの人物と、まったく同じ容姿だった

「ら、ランチさん！？」

「あん？クリリン？」

女性は不機嫌そうに振り返り、クリリンの方を見る

天津飯を追いかけ行方不明になっていた、元カメハウスの住人のランチだった

「やっぱり！ランチさんじゃないですか！」

顔を見て確信するクリリン

やや年をとっていたものの、間違いなくランチだった

「ランチって誰アル？」

「昔カメハウスに住んでた仲間だよ」

古にそう言うと、クリリンはランチへと近づく

「どうしたんですか？こんな昼間からやけ酒なんて……」

「天津飯が……」

「え!?天津飯がどうかしたんですか!?」

セルとの戦いから一年弱

その間天津飯とまったく会っていないため、クリリンはランチの言葉に興味を示した

「……女連れてたんだよ」

「へ?」

「ようやく見つけたと思ったら……」

グラスに入った酒をグッと飲み干すランチ

空になったグラスをダンッとカウンターに叩きつける

「あたしっていう女がいながら……チクショーーーー!!」

ダンッ!ダンッ!

「ら、ランチさん!落ち着いて!」

さらに銃を屋根に発砲するランチを、クリリンが必死に止める

すると今度は、クリリンの肩に右手を回してきた

「クリリン、お前も飲め」

「ええっ！？」

「オレの酒が飲めねーってのかよ！？」

ランチはクリリンに怒鳴り散らす

その迫力に、クリリンは思わずビクついてしまう

こうなったランチは、よほどのことがないと止められない

それをクリリンはよく知っていた

「わ、わかりました……」

仕方なくランチから酒を受け取るクリリン

空いた手を使い、クリリンは古に手招きをする

古は近づき、クリリンの口元に耳を近づけた

「お前かご持って先に帰ってろ。ペース配分間違えるんじゃないぞ？」

「ええっ！？」

「俺もすぐ追いつくから、な？」

「わかったアルよ……」

渋々、古は酒場を後にする

泥酔気味だったランチは古の存在に気づくことなく、どんどん酒をあおっていく

「おらクリリン！お前もどんどん飲め！」

「は、はい……」

ああは言ったが、こりゃすぐには終わらないなーと思うクリリンであった

「ただいまアルー」

クリリンの言うとおりペース配分を考えながら飛び、古はカメハウスに無事帰宅した

「おお、お帰り古ちゃん。ん？クリリンはどうした？」

「昔の知り合いと会ったから、飲んで遅くなる言てたアル」

「なんじゃ、しょうがないのう……」

「サツキ、これ」

「あ、ありがとうございます」

古が差し出す買い物かごを、五月は笑顔で受け取る

買い物かごを渡すと、古はソファに座り込む

（クリリン、早く帰ってこないアルかなー）

「ただいまー」

時は深夜一時

ランチからようやく開放され、クリリンはようやく帰宅することができた

電気は付いてはいるが、リビングには誰もいないようだ

「古のやつ、怒ってるだろうな……」

翌朝古から文句を言われることを想像しながら、クリリンは自分の部屋に戻ろうとする

すると、

「うーん……クリリーン……」

「え!?」

ソファの方から声が聞こえてきた

驚いてその方向を見るクリリン

「く、古!?」

そこにいたのは、ソファでスヤスヤと眠っている古だった

起こさないようにゆっくりと近づく

「もしかして、ずっと待ってたのか?」

クリリンは小さく呟く

古はそのソファで、クリリンのことをずっと待っていた

食事を済ました後もずっと

亀仙人に、もう寝たらどうかと言われてからもずっと

零時を回ってもずっと
限界が来て、今は眠ってしまっているが
「……しょうがないな」
クリリンはフッと笑うと、少し腰を落とした
そのまま古の身体の下に手を入れて持ち上げる
はたから見ればお姫様抱っこに見えるだろう
「ここままじゃ風邪引いちゃうじゃないか……」
クリリンは古を抱えたまま、古がいつも寝ている部屋へと歩を進めていく
歩きながら古を寝顔をチラッと見る
「ありがとな、古」
翌朝、目を覚ました古が驚いたのは言うまでもない

第１８話　飲め飲めクリリン（後書き）

いかがだったでしょうか？

これで古ｓｉｄｅはいったん終了、再び別ｓｉｄｅになります。

次もローテーション順です。

次回の投稿は木曜日を予定しています。

感想のほうもどんどんよろしくお願いします

ではまた次回！

第１９話　ハルナの新しきしもべ？（前書き）

すいません、言ってたより一日遅れました。次はないようにしますので、ハイ
ではどうぞ！

第19話　ハルナの新しきしもべ？

「「狼牙風風拳！！」」

二人のヤムチャが拳を交わしている

ここは西の都から少し離れたところにある荒野

そこで、ヤムチャとハルナは毎日修行を行っていた

今は、ハルナの描いたヤムチャゴーレムと一対一の組み手中

ハルナの絵の腕は一流で、二人の区別をするのは難しいほどだ

「はいっはいっはいーー！」

だが、強さまで一緒とは限らない

一瞬の隙を突き、本物のヤムチャが必殺技『狼牙風風拳』をどんどん叩き込んでいる

締めの一発を喰らい、ヤムチャゴーレムはぶっ飛ばされる

近くの二メートルほどの岩に激突、その岩は音を立てて崩れた

ヤムチャゴーレムは完全にのびてしまい、そのまま消滅した

「なんだ、もう終わりか……」

消えたのを確認すると、ハルナの方を見やる

「ハルナ、次の相手を頼む」

「はいはい」

ハルナはクロッキー帳のとある一ページを開く

光とともに一体の魔人が現れた

初日にヤムチャを驚かせたゴーレム、炎の魔人〈インフェルノアニキ〉である

「ファファファファファ」

「またそいつか？もうかれこれ三十回は倒してるんだが……」

「他にヤムチャさんと戦えそうなのがもういないんですよー」

不満そうな顔をするヤムチャに、ハルナも同じような顔で言葉を返す

この一週間、ヤムチャの修行相手のゴーレムをハルナはどんどん創作していた

だがどれも力不足で、ヤムチャに一蹴される始末

結局、使えそうだと判断したのがさっきのヤムチャゴーレムと炎の魔人の二体

一応剣の女神〈ツルギタン〉も炎の魔人並みの強さだが、あくまで武道大会の修行なので外された

「私のアーティファクトって、ただ描けばいいってもんじゃないんですよねー」

落書帝国〈インフェリウムグラフィケース〉で強いゴーレムを作るためには画力だけではだめなのだ

もちろん画力も大事なのだが、それと並ぶほどに大事な要素がある

それは描く物の明確なイメージ

突発的なものではなく、深く細かいイメージ

表面上からだけではわからないような部分

そのゴーレムの性格、能力等がそれにあたる

そういった細かいことをページの端に書き込むことで、ハルナのゴーレムは数段力を増す

ヤムチャゴーレムがそれなりの強さを持っていたのはそのためだ

イメージも何も、実在する本人を描いたのだから

「創作するのが難しいとなると……あ！」

突如、ハルナの頭の電球に光がともった

「これだったらイケるかも……」

「ど、どうしたハルナ？」

ニヤリと怪しい笑みを浮かべるハルナに、ヤムチャが尋ねる

ハルナはヤムチャと目を合わせ、口を開いた

「ヤムチャさん、今まで戦ってきた敵の姿って明確に思い出せる？」

「え？大丈夫だとは思うが……うまく口では言い表せないようなのばかりだぞ」

ヤムチャの言うとおり、今まで戦ってきた敵は人外の者も数多くいた

それらを言葉だけでハルナにイメージさせるのは至難の業だろう

「俺、絵心もないし……」

絵となればなおさらである

しかし、ハルナは笑みを崩すことはない

「大丈夫、いい方法があるの」

「？」

「ちょっと待っててもらえます？すぐ戻るんで」

首を傾げるヤムチャをよそに、ハルナはクロッキー帳から別のゴーレムを召喚する

いつも行き帰りに使用している飛行型のゴーレムだ

それに乗り込み、ハルナは西の都の方角へ一直線に飛んでいった

「何だ？一体……」

二十分ほどたった頃だろうか

仕方なく一人で修行して待っていたヤムチャの耳に

「お待たせーーー！ヤムチャさーーーん！」

ハルナの声が入ってきた

さっきと同じゴーレムに乗っており、ヤムチャの目の前で着陸させる

「何やってたんだ?って、君は……!」

ハルナの後ろに乗っている少女に目を向けるヤムチャ

「ど、どうも……」

ハルナの親友、宮崎のどかの姿がそこにあった

両手で一冊の本を抱えたまま、ヤムチャにぺこりとお辞儀をする

「何でのどかをここに?」

「まだヤムチャさんには、のどかの魔法見せてなかったでしょ?のどか」

「う、うん」

のどかは手に持っている本をゆっくりと開いた

そこからは、ハルナのクロッキー帳と同じような光が漏れていた

「のどかはね、相手の表層意識をこの本に映し出すことが出来るの」

「ええ!?読心術ってことか!?」

「は、はい……」

「今までの敵で戦いたい奴を頭にイメージして。本に映ったのを私が描くから」

なるほど、とヤムチャ

確かにこれなら、ヤムチャの頭にある明確なイメージをそのまま使うことが出来る

ハルナの会心のアイデアであった

「できれば、その敵の技とか能力も一緒にイメージして」

「おう、わかった」

目を閉じて腕を組み、ヤムチャは過去の記憶を掘り起こす

（うーん、誰にしたもんだか……）

一番自分にとって苦い思い出があるのは栽培マンだ

五年前サイヤ人との戦いにおいて、油断した隙を突かれて自爆され、命を奪われた

（だけど、折角だし骨のあるのとやってみたいよな……）

次に浮かんできたのはギニュー特選隊の一人、リクーム

巨体を生かした攻撃で、一度はベジータを苦しませた相手だ

以前界王星において一度戦って勝利している

（けど一回勝ったわけだし、もう少し強い奴でもいいかな……）

次に浮かんだのは、悪の科学者Ｄｒゲロ

一年前の人造人間との戦いにおいて、ヤムチャを瀕死の目にあわせたことがある

最終的には自分の作った人造人間に殺されてしまったが

（ちょっと欲張りすぎたか？あいつより少し弱いとなると……）

「ちょっとちょっとヤムチャさん！」

「ん？」

熱心に考えていたヤムチャだったが、ハルナの大声で思考を中断して目を開けた

「ちゃんとイメージを一つにまとめてよ！なんか絵の部分がすごいごっちゃになってる！」

「す、すまん」

「強さの基準は私の画力とイメージの明確さなんだから、元の強さは極端には影響しないのよ！」

「え？そうなのか？」

なんで元の強さのことを考えてるとわかったのだろう？

そう思ったヤムチャだったが、本で見たのかと納得する

「わかったら早く相手を絞ってイメージして」

「わ、わかった」

再びヤムチャは目を閉じる

(だったら、悟空達を苦戦させた相手がいいな……)

対象を一人に絞りイメージをどんどん明確にしていく

「おっ！出てきた出てきた、じゃあ早速描くわね」

耳からは、ハルナがペンを走らせる音が聞こえてくる

数十秒ほどすると、その音はピタリとやんだ

「出来たわよヤムチャさん！」

ハルナの声を聞き、ヤムチャは再び目を開けた

「もう出来たのか？」

「私のペン速を甘く見ないで欲しいわね」

ふふんと鼻を鳴らしながら、クロッキー帳を高く掲げた

「出でよ！修行用ゴーレム最新作……」

一段とまばゆい光を放ちながら、帳面から一体のゴーレムが頭から現れる

白をベースにした身体

そこに所々組み込まれている機械的な部分

そして冷酷な目つき

「宇宙の帝王フリーザ！！」

ハルナが声を荒げ、光が収まるとそのゴーレムはすたっと着地する

かつては宇宙の王として君臨し、ベジータをも支配下においていた時代もあった

だが五年前、悟空によって瀕死の重傷を負わされ

その一年後、機械の身体を得て復活したが、妥当悟空の夢は叶わず死んだ人物

フリーザそのものの姿であった

「おおーー！すごい！そっくりだ！」

ハルナの会心のできに感激するヤムチャ

ヤムチャがフリーザを直接見たのは四年前に一度きり

だがあまりの迫力に、そのイメージは明確に残っていた

さらには、悟空から何回かフリーザと戦ったときの話を聞いてお

り、技のイメージも完璧

セルと二択だったのだが、やっぱりコツコツ行こうとこちらを選んだ

強さは極端に影響しないものの、セルの後にフリーザと戦うのも何か後味が悪い気がした

「さすがに声は無理だけど、それ以外は全部再現したつもりよ」

「よし！早速やってみよう！」

意気揚々とするヤムチャ

「フリーザ、ヤムチャさんと勝負してあげて」

ハルナが指示を出すと、フリーザはこくりと頷き構えを取る

両手の平を上に向ける妙な構えだ

フリーザはニヤリと微笑み、気を手の平に集中させていく

すると徐々に、円盤状のものが出来上がっていく

イメージとしては、チェーンソーの歯が一番近いだろうか

「お、おい、まさか……」

ヤムチャの嫌な予感は的中

フリーザゴーレムはその円盤、デスソーサーを躊躇うことなくヤムチャに投げつけた

二つのデスソーサーがヤムチャに迫る

「わわわわ！！」

とっさに舞空術で飛び上がって回避するヤムチャ

ヤムチャの後ろにあった五メートルほどの大岩が、豆腐のようにスパッと切断される

もし命中していたら、ヤムチャの命はなかっただろう

しかもそれで動きを止めることはない

フリーザゴーレムの動きにあわせて、デスソーサーは追い続けていく

必死に逃げるヤムチャ

「お、おいハルナ！やめさせろ！これはちょっと予想外だ！」

ヤムチャとしては、フリーザゴーレムと肉弾戦のような勝負をイメージしていた

だがフリーザは真っ先に、当たれば即死の技を仕掛けてきたのだ

ヤムチャでなくてもこれは焦る

「りょ、了解、フリーザ！一旦ストップ！」

フリーザに指示を出すハルナ、だが

「おい！どうなってるんだ！？」

フリーザはハルナの命令を聞こうとしない

それどころか、さらに楽しそうにデスソーサーを操っている。

「やっべ、暴走してる」

自分のゴーレムの様子を見て呟くハルナ

こうなったハルナのゴーレムはなかなか止められない

再生時間が過ぎるか、攻撃して止めるかの二つに限定される

「ごめんヤムチャさん！ちょっと無理っぽい！」

「ええ！？」

「何とか時間切れまで逃げ切って！」

「いや無理だって！もうすでに当たりそうぉっと！」

迫ってきたデスソーサーを上体を反らしてかわすヤムチャ

だが僅かに掠り、山吹色の道着に赤い色が浮かび上がる

また、スタミナも尽き始めていた

「ま、まずい・・・・・・」

「ハルナ、他のゴーレムで攻撃したらいいんじゃ・・・・・・」

「おお！ナイスアイデアのどか！」

のどかの名案を聞き、急いでページをめくるハルナ

早くしなければ、ヤムチャがバラバラになってしまう

ハルナはすぐに目的のページに行き着いた

「出でよ！炎の魔じ・・・・・・」

ギュオンッ！！

ドガーーーン！！

「あり？」

ほんの一瞬の出来事だった

どこからか巨大な光球が飛んできた

それはフリーザゴーレムを完全に飲み込み爆発を起こした

同時に、ヤムチャを追いかけていたデスソーサーも消滅する

つまり、フリーザゴーレムの敗北を意味していた

「ハ、ハルナ、何が起こったの？」

「私に訊かれてもわかんないわよ・・・・・・」

呆然とする二人、すると

「ヤムチャさーーん！」

一人の若い青年がヤムチャへと近付いてきた

ヤムチャと同じく、舞空術で空を飛んでいる

「大丈夫でしたか！？」

その青年を見て、ヤムチャは驚きの表情を浮かべた

「お、お前は・・・・・・」

第19話　ハルナの新しきしもべ？（後書き）

変なところで切ってすいません

だいたいの人は想像がつくでしょうが彼です

次はちゃんと喋らせます

ではまた次回！

第２０話　孤高の未来戦士（前書き）

遅くなってすいません！たくさんの課題に追われ、ＧＷ中に一回も投稿出来なかったとは……しかも今回やや少なめですし（汗）今後こういうことがない様気をつけます！

ではどうぞ！

第２０話　孤高の未来戦士

「トランクス！」

「お久しぶりです、ヤムチャさん」

彼こそが、先ほどフリーザゴーレムを粉砕した張本人

父はサイヤ人の誇り高き王子、ベジータ

母は美人天才科学者、ブルマ

そして一年前、悟空らと共に戦った未来の戦士

トランクスであった

「本当に久しぶりだなぁ、今回は何の用でここに？」

「こっちの人造人間を無事倒したので報告に、それより……」

トランクスは下の地面を見下ろす

「何でフリーザがここに？」

「えっと、それはだな……」

「ヤムチャさーん！」

「ん？」

ヤムチャが下を見てみると、ハルナが両手を口に当てて大きめの声を出していた

「その人誰ー？知り合いなのー？」

トランクスもハルナ達の方を見やる

「ヤムチャさん、あの子達は？」

「ああ、今紹介するから。一旦下に降りよう」

「は、はい」

二人はスーッと降下していく

ハルナ達の丁度目の前で着地した

「右の子がのどか、隣の子がハルナだ」

「は、はじめまして……」

「さっきはどうもねー、あたたた」

照れながらおじぎをするのどか

一方のハルナは気さくに話すが、様子がおかしい

どうも痛がってる様だ

「どこか痛むの？」

気になり、やや近づくトランクス

「（うお、けっこうイケメン！）いやー、さっきのフリーザのダメージがかなりあったみたいで……」

「？」

ハルナの召喚するゴーレムは、完全独立をしているわけではない

術師のハルナも、ダメージの１％を受けるのだ

そのため現在、全身に少々の痛みが走っている

「そうだフリーザ！ヤムチャさん、さっきのフリーザは……」

肝心なことを忘れかけていたトランクス

ヤムチャはハルナをスッと指差す

「彼女がやったんだよ」

「え！？」

「描いたものを実体化出来るのさ、魔法の力でな」

「ええ！？」

そのあと、ヤムチャは大まかな事情をトランクスに説明した

二人が異世界から来たこと
魔法、未来人のこと
ドラゴンボールで帰ろうとしていること
「なるほど……まあそうじゃないとフリーザの説明がつきませんからね」
あっさりと納得するトランクス
母のブルマから占いババの話を聞いたことがあったので、割とすんなり受け入れられたようだ
「ヤムチャさん、私達のことはいいから、そっちの彼を紹介してよ！」
「あ、ああ、すまんすまん」
ハルナがトランクスを指差し文句をたれるので、思わず謝るヤムチャ
トランクスの肩にポンと手をやる
「こいつの名前はトランクス。一年前の戦いで共に戦ってくれた仲間さ」
「へー、やっぱりお仲間さんか……ん？」

「トランクス？」

ハルナ、のどかがそれぞれ首をかしげる

ヤムチャの言ったことに、どうも引っかかることがあった

「のどか、ブルマさんとこの赤ちゃんの名前、トランクスだったわよね？」

「う、うん、前に抱かせてもらったよね。ちゃんと覚えてるよ」

そう、名前だ

二人はブルマの赤ん坊、トランクスを頭に浮かべた

ブルマの家に居候させてもらっている二人（＋葉加瀬）

当然トランクス（赤ん坊）のことは何度も見て覚えている

「おんなじ名前ねえ……まさか未来から来たとか？って、んなわけないか……」

「いや、その通りだぞ」

「え？」

冗談で言ったことがヤムチャに肯定され、思わず固まるハルナ

隣にいるのどかも同じくである

「こいつはタイムマシンで、十数年後の未来から来たんだよ」

「「ええ！？」」

二人はさらに、ヤムチャからトランクスのことを聞かされた

人造人間襲来による悲劇

それを繰り返さぬための、こちらの世界での活躍

そして、現在は彼によって平和になった彼の世界

二人はしみじみとこれを聞いていた

「大変だったんですね……」

「お父さんとか、周りの仲間みんな亡くしちゃったんでしょ？」

まあそうだけど、とトランクス

「悟飯さん以外は物心がつく前だったから……それに」

「「それに？」」

「みんなに代わって平和を取り戻すことができた。そのことが嬉しいんだ」

フッと笑うトランクス

（トランクスさんってすごい……）

（あんな過去を背負ってても、こんな前向きに生きていけるなんて……）

二人がトランクスに感心していると

「そういえば、ブルマにはもう会ってきたのか？」

とヤムチャがトランクスに尋ねてきた

「はい、とても喜んでくれました。けど……」

とたんにトランクスの表情が暗くなる

「父さんが……」

数十分ほど前の記憶がよみがえる

部屋に閉じこもっていたベジータは、トランクスの知る一年前のベジータではなかった

トランクスを見ても、大して驚きも喜びもしなかった

久しぶりに会ったのだから、と手合わせをを頼んでみたが

「俺はもう……戦わないんだ……」

こう言われ却下される始末

「やっぱり、悟空さんの死を今でも引きずってるようなんです……」

トランクスの世界では、すでにベジータは殺されこの世にはいない

そのため、こちらの世界のベジータは本当に大切な存在なのだ

元気のない父の姿を見て、心配しない者はそうはいないだろう

急に場の空気が重くなる

すると

「そ、そういえばさ！」

何とか打開させようと、ハルナがトランクスへ向けて口を開いた

「トランクスさんは出場しないの？天下一大武道会」

「え？天下一大武道会？」

「バ、バカ！」

あせるヤムチャをよそに、ハルナはどんどん話を進めていく

トランクスが大会のことを知ると、非常に厄介な事態になりかねない（ヤムチャにとって）

「一週間後にある大きな武道大会よ、知らなかった？」

「初耳だね、だからさっきあんなことを？」

「そういうこと。ブルマさん何も言わなかったの？」

「修行しに街外れの荒野に行ってるとしか言われなかったから……」

「トランクスさんも相当強いんでしょ？出たらいいじゃん、せっかく来たんだし」

「お、おい！」

トランクスの出場、それはヤムチャにとって最も避けねばならないことだ

ヤムチャの参加目的、それは地位や名声などでは決してない

金だ

天下一大武道会は、優勝賞金として一億ゼニーが与えられる

副賞の世界温泉めぐりツアーもあるが、それはそこまで欲しがってはいない

一番欲しがっているのは金である

だが、天下一大武道会には二位三位の賞金などない

あくまで、優勝者一名のみだ

すなわち、トランクスの参加確定＝ヤムチャ賞金絶対ゼロの図式が成り立つ

無論トランクスが出なかったところで、悟飯やピッコロが出ればそこまでなのだが

「え？でも大会までここに長居するのは……」

「そ、そうそう！ブルマに迷惑かかっちゃうもんな！」

トランクスが乗り気でないのをいいことに、どんどんあおるヤムチャだが

「優勝したら世界温泉めぐりツアーだって。こっちのお母さんにも親孝行したら？」

「親孝行か……」

ハルナの言葉で少し考え込んでしまうトランクス

このままではまずい！と思い、ヤムチャは

「ブ、ブルマん家は金持ちだし、世界温泉めぐりなんて普通に行けるんじゃないか？」

と、参加目的を否定してみるが

「でも、トランクスさんがプレゼントして行ったほうが、ブルマさん喜ぶと思いますよ」

「やっぱりそうかな？」

のどかの意見に阻まれる

「おいのどか！」

トランクスの答えは決まった

「それじゃあ……出てみようかな、俺も」

「！！」

ヤムチャの時が止まった

「三人でやったほうが修行の効率いいからねって……あり？」

「トランクスさん、ヤムチャさんが……」

「ヤムチャさん？」

三人の前で動かなくなるヤムチャ

声をかけたり、目の前で手を動かしたりするがまったく反応がない

よほどショックだったのだろう、一攫千金のチャンスをつぶされて

再び動き出すのに、五分ほど要したという

（お、終わった……）

第２０話　孤高の未来戦士（後書き）

いかがだったでしょうか？

本編ようやく２０話突破です！

この調子だと、大会終了までに何話かかることやら（汗）

何とか大会編突入までのストーリーは出来たので、問題はその大会なわけです。

予選と準決勝の対戦カードが決まらない！

もちろん、ネギま側ｖｓＤＢ側のカードを多くするつもりですが、組み合わせのパターンが多すぎるんです！

決勝に進む四人は大まかには決まってるんですが、それ以外が全然なんです（焦）

というわけで、読者の皆様に『読みたい対戦カード』を募集したいと思います

リクがありましたら、感想版にぜひ書いてください

大体は実現させたいと思ってます

もちろん、同じ側同士でも大歓迎です

締め切りは大会突入ぎりぎりまでです

お待ちしています

というわけでまた次回！

クウネル

「これで、何のリクも来なかったら悲惨ですね」

第２１話　ちう茶々放浪記？街編（前書き）

ついに総合アクセス１０万突破！まさかここまでいくとは思ってもみなかったです……読者の皆様、ありがとうございます。
さて、本来ローテ順なら次は夕映達の番なのですが、時間軸のずれすぎた話をしたくないため、ちう茶々放浪記を入れさせてもらいます。
前にも書いたとおり、元祖のキャラが出ますのでご容赦くださいではどうぞ！

第２１話　ちう茶々放浪記？街編

時はやや遡る

「だーーー！だめだぁ！」

ナムの村を出て約二日

無事目的の町についた千雨達

早速、ネギ達の情報はないかとあちこち聞いて回ったのだが……

「手がかりゼロですね、千雨さん」

「ああ……」

収穫はまるでなし

代わりに空腹と疲れが募り、現在オープンカフェにて一休み中である

「一刻も早く、他の皆さんと合流しなくては……」

ちなみに、茶々丸は飲食が無理なため、ただ座っているだけ

「しっかし、どんなファンタジー世界だよここは……」

頼んだアイスティーをストローで飲みながら、千雨は悪態をつく

この町に着いて、千雨が最初に驚いたこと、それは

「獣人が何で普通に生活してんだよ……」

ということである

「マスターが言うには、魔法世界にもそういう類の人たちは結構いるそうです」

「あっそ」

若干やけくそ気味に返事をする千雨

ここまでファンタジー過ぎると、自分に言い聞かせるのが大変なようだ

「それで千雨さん、これからどうしましょうか？」

「どうするって、ここでこんなに聞き込みしても何もなかったんだぞ？」

「つまり、別の場所へ向かうと？」

「それしかねえだろ？」

ですが千雨さん、と茶々丸

「次の街はここから離れているようです。歩きだと千雨さんにはか

なり厳しいかと」

「だったらどうしろってんだよ？」

二人が今後について話していたそんな時だった

「ドロボーーーー！」

「「！？」」

突如耳に入った男の声

その方向を向く二人

するとその目の前を、三人組が走って通り過ぎていった

背がかなり低い、全身水色の男

ロングの黒髪の、やや年を取った女性

そして、紫の忍装束を着た柴犬っぽい獣人

その内水色の男は、右手に高価そうなネックレスを握っていた

「だ、誰かそいつらを……」

最初の声の主の男がようやく姿を現した

ゼエゼエ息を荒げながら、両手を地につきへたり込む

「千雨さん」

「ん？」

茶々丸は席を立ち、走って逃げる三人組に視線を合わせる

「ちょっと待っていてください」

「おい！まさかあいつら追いかけるってのか！？」

「そのまさかです」

千雨を残し、茶々丸は三人組を追い始めた

「ピラフ様、見事成功ですね」

「わっはっは！ピラフ様の実力思い知ったか！」

「実力というか、ただ逃げ足が速いだけのような……」

高級ネックレスを盗み、現在逃走中の三人組

彼らはピラフ一味

十数年前、悟空達からドラゴンボールを奪い、世界征服をしようとした悪党である

だがその目論見は二度にわたって失敗

さらには融合前のピッコロの父、ピッコロ大魔王の封印を解いたこともある

しかしそれも、力を借りようとしたが彼に裏切られたことで失敗

それ以降ズルズルと落ちぶれていき、今に至っている

「この高級ダイヤモンドネックレスを売り飛ばし、世界征服のための資金にしてやる！」

「そうはいきません」

「「「え？」」」

三人の目の前に、一人の少女が舞い降りる

背中のジェットをコントロールし、三人の頭上からくるっと一回転して着地した

ピラフ達は思わずその足を止める

「そのネックレス、返していただきます」

「な、何だお前は!?そこをどけ!」

四人がいるのはちょうど町の入り口

ここを突破できれば、後はどうとでも逃げられる

しかしそれを目の前の少女、茶々丸が許すはずがない

「それは出来ません、ネックレスを返してください」

表情一つ変えず、淡々とピラフ達に言い放つ

それによって逆に、彼らのほうがひるんでしまう

「ピ、ピラフ様、いかがいたしましょう!?」

「し、しょうがない……これを使って追っ払うしかあるまい」

そう言うとピラフは、懐から何かを取り出し二人に見せる

それに反応し、二人も同じ行動をとる

右手には万能収納カプセル、ホイポイカプセルが収められていた

「出でよ!ピラフマシン!」

三人は同時にカプセルのスイッチを押し、目の前に放り投げる

ボンという音と共に出てきた物、それは

「!?」

青、緑、ピンクの三体の巨大ロボだった

三人はすぐさまそれぞれのマシンに乗り込み、スイッチを入れる

「ピラフ様!準備できました!」

「こっちもです!」

「ようし!ピラフマシン、合体!」

ピラフの掛け声と共に、三体のマシンがそれぞれ飛び上がる

一番大きいピンクのマシンを中心として、三体が一体のマシンへと組みあがっていく

組みあがるといっても、緑の上にピンク、ピンクの上に青という単純な合体なのだが

合体を完了させ、茶々丸の目の前にズーーンと着地する

やや風が起こり、茶々丸の髪の毛が軽くなびく

「どうだアンテナ女!怪我をしたくなければそこをどくがいい!」

てっぺんの青のマシンに乗るピラフが、マシン内で茶々丸をビシッと指差す

だが茶々丸は

「どきません、ネックレスをこちらへ」

どくことはない

「……ええい！だったら力づくだ！マイ！」

「はい」

ピンクのマシンに乗っている女、マイは自身のマシンを操作し、右腕を茶々丸に伸ばす

そのまま捕まえてしまおうという考えらしい

「無駄です」

しかし茶々丸はこれをジャンプして楽々とかわす

そのまま落ちた勢いを利用し、右腕にパンチを一発

真ん中から先が木っ端微塵に砕けた

「「「何！？」」」

三人が驚くのもつかの間、茶々丸は次なる行動に移る

動きを止めるために、合体ピラフマシンのひざ部分を両方破壊

肘打ちで左腕部分を肩から粉砕

そして、胴体に回し蹴りをして仰向けに転倒させる

「あわわわわ……」

一連の動きを、茶々丸は表情をまったく変えずに遂行していった

それがある意味、ピラフ達を恐怖させていた

続いて茶々丸は、ピラフの乗る青マシンのハッチの上に立つ

ちょうどピラフを見下ろす形となる

「返してください」

「だ、だからこれは……」

ビュン！

「ひぃっ！」

声を震わせながらも最後の抵抗を見せたピラフ

しかし、ついにはその気力さえも喪失してしまった

茶々丸が目から発射したレーザーが、ピラフの顔の両隣にそれぞれ命中したのだ

強化ガラスのハッチはなんの意味も成さず、穴が二つ空いていた

茶々丸はひざを折り、さらに近距離でピラフを見据えた

「返していただけますね？」

「は、はひ……」

弱々しい声でピラフは答えた

「いやーー、本当にありがとう！」

場所は変わって宝石店の中

ピラフから取り返したネックレスを返しに来た茶々丸

店長の男性からとても喜ばれ、今に至る

ちなみに、千雨とは店に向かう途中で合流した

「何かお礼をさせてくれないかい？」

「え？そんな……私は当然のことをしたまでですから」

「そんなこと言わずに、ね？」

「ですから……」

お礼をしたいという店長に対し、遠慮し続ける茶々丸

別に茶々丸はお礼がしたくてやったわけではない、純粋な善意からやったことだ

普段学園でも、野良猫に餌をあげたり、お年寄りをおぶってあげたりしているほどである

そのためご近所では、結構茶々丸は人気者だったりする

「別にいいじゃねえかよ茶々丸、折角お礼してくれるって言ってんだしよ」

「千雨さん……」

このまましばらくは続きそうかと思われたが、そこに千雨が割って入ってきた

どうもいいことを思いついたらしい

「店長、ここから一番近い街まで、私らを連れてってくんないか？」

「え？」

千雨が考えたこと、それは次の目的地までの移動

歩きがつらいんだったら、乗り物に乗せてってもらえばいい

こうして目の前にしてくれそうな奴がいる

使わない手はなかった

「別にかまわないけど……お嬢ちゃん達、こんな年で旅してるのかい？」

「ちょっと人を探しててな、少しでも速く色んな所を回りたい。無理か？」

「千雨さん、それでは店長さんにご迷惑が……」

「他の奴らと一刻も早く合流しなきゃって言ったのは誰だ？」

「それは……」

言いよどむ茶々丸

「はい決まり」

返事も聞かず、話をまとめる千雨

茶々丸の手をつかみ、千雨は店の外へと向かう

「店長、今からでもかまわないか？」

「ち、千雨さん……」

「ああいいよ、他の奴に店番やらせるから」

そう言って店長も店の外へ

店長がホイポイカプセルで出した四人用の車に乗り込む（茶々丸やや無理やり）

「ここから一番近いところだよね？」

「ああ、よろしく頼むわ」

そしてエンジンをかけ、全速力で発進した

「そういえば茶々丸」

「何ですか？千雨さん」

「次の街、なんて名前なんだ？」

「ナムさんに見せていただいた地図によれば……」

記憶ドライブに検索をかける茶々丸

「『サタンシティ』という名前だったかと」

「ふーん、〈悪魔の街〉か……」

三人を乗せた車は、次なる街へ向けてまっすぐに進んでいった

第２１話　ちう茶々放浪記？街編（後書き）

はい！どうでしたでしょうか？

店長は完全なモブキャラです、念のため書いておきます。

次のちう茶々放浪記は、明日菜達の後ということで（本来のローテ順）

次回はローテを戻し、夕映達の番ですのでお楽しみに。

ただし、また元祖キャラが一人出ますのでご注意を。

感想も随時受付中ですのでどうぞよろしく。

ではまた次回！

第２２話　折れることのない物（前書き）

どうも！夕映ｓｉｄｅ投稿です。前回の後書きにもありました通り、また元祖キャラが出ます。といっても以前も出た奴ですが。
そのキャラのセリフがかなり多いうえ、またオリ設定を作っちゃいました。
以上のことに注意してお読みください。
ではどうぞ！

第２２話　折れることのない物

バシュ！バシュ！

バシュ！バシュ！

「うーん……何の音？」

どこからか音がしてくる

しかも単発的にでなく、継続的にだ

その音を耳にして、朝倉はベッドから身を起こした

時刻はもうすぐ七時を回ろうとしていた

隣のベッドに夕映の姿は見えない

「どっからしてんの？この音」

ベッドから降りると、そのまま部屋から出る朝倉

音のする方へと歩を進めていく

歩いてほんの十数秒すると

「ここからかな？」

その場所に到着した

その場所とは闘技場

占いババの戦士達と金の無い客が戦っている所である

彼らと五対五の団体戦で勝てば料金がタダということもあって、そっちで来る客のほうが多い

その中央に立ち、なにやら行っている者が一人

「あれ？アックマンじゃん」

見たまんま悪魔な男、アックマンであった

占いババの戦士達の中ではトップクラスの実力を誇り、大将を務めている

そんな彼が上空に向かって気弾を撃ちまくっている

音の正体もこれで間違いない

「おらおらおらおら！」

「どこに撃ってんだろ？」

疑問に思い、上空へと朝倉は視線を移す

するとそこには

「夕映っち！？」

箒に乗って空を飛び、その気弾を懸命にかわしている夕映の姿があった

「ほれほれどうした！最初より動きが鈍いゾイ！」

「はいです！」

よく見ると、夕映から少し離れた場所で監督している占いババの姿もあった

「ねー夕映っちーー！何してるのーー？」

朝倉が呼びかけると、夕映がそれに気づき振り向く

「あ、朝倉さん、見ての通り修行でうわっ！」

まさに油断大敵

朝倉のほうに顔を向けた瞬間、アックマンの気弾の一つが箒に命中してしまった

夕映はその衝撃でバランスを崩し

「わわわわわーーー！」

箒から落下

「夕映っちーーー！！」

ザップーーン！

闘技場を囲んでいたプールへと着水した

「へっぷし！ううう……」

「ごめん！私が話しかけちゃったせいで……」

水からなんとかあがってきた夕映

全身をブルブル震わせながらも、持っていた初心者用杖で炎を出し、身体を温めていた

朝倉もその場に駆け寄り、すぐさま謝罪した

「いえ、声がしたからといってよそ見をした私が悪いですから……」

「まったくじゃ！たわけ！」

「あ、占いババさん……」

二人が話していると、占いババからゆっくりと上空から降りてきた
今の出来事にかなりご立腹の様子
「ようやく飛べるようになったと思ったら……なんじゃ今のは！集中力が足りん！」
「はい……すみません」
占いババに叱咤され、思わずシュンとなる夕映
「ちょっと待ってババさん！今のは私が悪いよ」
「お主は黙っとれ！これはワシら二人の問題じゃ！」
かばおうとした朝倉を怒鳴ると、占いババは再び夕映を睨む
「次もこんな体たらくじゃったら破門させるぞ！わかったか！」
「！……はいです……」
ショックを受けながらも、何とか返事を返す夕映
「今朝はもう終了じゃ。さっさと着替えて飯の支度をしろ、以上」
占いババは背中を向け、館の中へと入っていった
夕映は細い声で

「……はいです」

とだけ答えた

「……はあ」

深いため息をつく夕映

すでに食事を終え、仕事に入っている

現在、地下闘技場を掃除中である

その動きは重々しく。元気の無さが伺えた

（占いババさんに叱られてしまったです……破門……）

『破門』、この言葉が今でも夕映の胸に残っていた

（やっぱり私では、占いババさんの弟子としてふさわしくないのでしょうか……）

ネガティブな思考をめぐらせていたそんな時だった

「おい」

「っ！す、すみませんです！ちゃんと今から仕事するで……あれ？」

突然の後ろからの声

夕映はとっさに振り向いて頭を下げるが、そこにいたのは

「アックマン……さん？」

「よう」

占いババやオバケではなく、今朝修行に付き合ってくれたアックマンだった

「どうしてここに？」

「大将だから出番無くて暇なんだよ。それで適当にこっちへ来てみたらお前を見つけた、それだけだ」

「そうですか……」

「元気ねえな、どうした？」

「それは……」

このまま胸の内に溜めておくのもなんだと思い、夕映は話してみることにした

「ふーーん……」

一通り話し終えるとアックマンは少し、考えるような仕草を見せる

「お前さんは、何で弟子になろうと思ったんだ？」

「それは……少しでも強くなろうと思って……」

「何で強くなりたいんだ？」

「え？」

この質問に、夕映は僅かながら紅潮する

頭に浮かぶのは、自分の先生であり想い人

ネギ・スプリングフィールド

「その……好きな人の役に立ちたくて……」

目をそらし、それぞれの人差し指の先端を合わせる

「なんだ、ちゃんと目標があるんじゃねえか」

「まあ……一応……」

「……ちょっと話聞いてもらっていいか？」

「え？……ど、どうぞ」

突然の展開に戸惑う夕映だが、とりあえず聞くことに

手のひらをアックマンに向けて差す

アックマンは遠い目をすると、ゆっくりと口を開いた

「十数年前、俺は衝撃的な敗北を喫した」

「……」

「その相手は、お前よりも小さいガキだった」

アックマンは大きさを示すように、水平にした手のひらを夕映の胸辺りにまで持ってきた

「え！？」

夕映は目を丸くする

アックマンの実力は、修行で見る限り相当なものだ

一般人の域をはるかに超える、超人級の強さであろう

そんなアックマンが

（私より小さい子供に負けた？）

さっきのジェスチャーを見る限り、ネギやコタローの方が大きい

これには夕映も驚きを隠せないでいた

「地上最強と思っていただけ、そのショックも一層強かったさ……」

完敗だったんだ、と小さく呟く

「それから地獄に戻り、ひたすら修行したさ。そいつにリベンジし、失ったプライドを取り戻すためにな……」

その修行は文字通り、血の滲む様な修行だったという

「それで、リベンジは出来たのですか？」

「……出来てねえよ」

「え？」

「しようと思ったことは何回もあった。だが自分から止めたんだ」

ずっと地獄にいたから、そいつの噂は嫌というほど聞いた

そいつは正義のために、悪党共と幾度となく戦ってきた

やっと追いついたと思ったら、その俺をはるかに超える悪党が地獄にやってくる

中には世を騒がせた大魔王や、宇宙の帝王と呼ばれていた奴もいた

あいつら、口を揃えて言いやがったんだ

孫悟空にやられた、ってな

直接殺されてはいないものの、事実上奴に敗北した者ばかりだった

ビックリしたさ、常にあいつは俺の上に居続けてるんだからよ

俺はそういう奴らが来るたび、そいつらを超えることをまず目標にした

あいつ、孫悟空に近づき、いつか越えるために

何度でも、何度でも、何度でも

「……辛くはなかったのですか？」

「辛かったさ、いつ俺はあいつと同じ舞台に立てるのか。そう考えたことはもう数え切れねえ位だ」

「ひょっとして今でも？」

「ああ、こうしてるとき以外はずっと地獄で修行さ」

夕映は両手に握り拳を作り、わなわなと震えだす

「……どうしてですか？」

「ん？」

「どうして、そんな辛い思いを十数年耐えられるんですか！？嫌にならないんですか！？止めたくならないんですか！？」

自分はたった一週間でこんな始末だ

だが、目の前の人物はその数百倍

しかも、そうにも関わらずこのようにまるでへこたれずにいる

この差は何だというのだ

こんな自分と、何が違うというんだ

悔しさや、その他様々な感情が駆け巡る

いつの間にか夕映の目には、一滴の雫が浮かんでいた

「……言ったろ？あいつにリベンジし、プライドを取り戻すためだって」

アックマンは夕映の頭にポンと手を乗せる

そして、彼なりの笑顔を向けた

「俺はこの目標を自分に言い聞かせ、今まで生きてきたんだ」

「……」

「お前さんの目標は、こんな一週間ぽっちで折れちまうような物なのか？」

「……（フルフル）……」

黙って首を振る

「だったら、自分の持ったその目標に自信を持て。絶対折れることのない、鋼のような物なんだってな」

（！！）

それは、夕映の胸にこれほどかという位に響いた

占いババの言った『破門』がかき消されるようなほどに

そこまで、今の夕映には強烈な言葉だった

「お前さんならきっと、いや絶対出来る。俺はそう信じるぜ、」

「……はいです」

その言葉を聞くと、アックマンは手を離して後ろを向き、元来た道を戻っていく

「目標に自信を持つのも大事だが、仕事のほうもちゃんとしろよ？
じゃないと、またババにどやされても知らないぜ」

「はいです！」

面を上げ、夕映は満面の笑みをアックマンに向けた

「……そんだけ元気に言えれば大丈夫だ」

背を向けたまま手を振ると、アックマンはその場から立ち去った

「アックマンさん……私、頑張るです」

もうへこたれない、絶対に

諦めたりなんかしない、彼のように

やり遂げてみせる、辛くても必ず

そう固く誓う夕映であった

第２２話　折れることのない物（後書き）

はい、スミマセン（汗）

アックマンを知らない人は、何がなんだかという感じになったかと思います。

しかもいつもと違ってシリアス面が異常に強いですし。

アックマンのキャラ変わりまくりですし。

ただ、自分としてはアックマンにかなり思い入れがあったため、書いてしまいました。

元祖キャラ出すと、アクセス数がいつもより落ちるのはわかってるんですけどね。

次は明日菜達の出番ですのでお楽しみに。

一応、完全に元祖のキャラは出てきません。

ではまた次回！

第２３話　登れアスナ！目指すは塔の頂点へ（前書き）

どうも、テスト勉強で忙しい日々のカゲシンです。何とか両立させていこうと思いますので応援よろしくお願いします。
さて、明日菜ｓｉｄｅは前後編でお送りします。今日はとりあえず前編だけ投稿です。
ではどうぞ！

第２３話　登れアスナ！目指すは塔の頂点へ

「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ」

ある日の昼下がり

アスナは懸命に、とある建物を登っていた

ゴール、すなわち建物の頂上はまだ見えてこない

それほどまでこの建物は高いのだ

「いつまで登ればいいのよ……」

かれこれ数時間はこの調子である

普通だったら止めたくなるところだが、アスナは登り続ける

聞くところによると天津飯を含め、多くの戦士がここを登りきったらしい

ならば自分だってやってやる

そしてもっと強くなってやる

そう思い、今こうやって登っている

聖地カリンにそびえ立つ試練の塔

『カリン塔』を

事の起こりは数時間前に遡る

「でやあああ！」

「ずあああっ！」

上空でアスナと天津飯、二人の攻撃がぶつかり合う

修行を始めてからほんの数日で舞空術をものにしてしまったアスナ

体術も著しい上達速度を見せ、天津飯を驚かせていた

（天性の才能というやつか……まったく、たいしたもんだぜ）

かくいう天津飯もアスナに刺激され、確実に腕を上げていっている

この一週間は両者にとって、実に充実なものだったといえよう

しばらく組手を続けていると、餃子が二人のところまで飛んできた

「天さーん、アスナー、ご飯できたよー」

二人は動きを止める

「そうか、もう昼になっていたか」

天津飯が空を見ると、既に太陽が真上まで昇っていた

「朝からずっとやってましたもんね……あー、お昼だってわかったらおなか空いてきたー」

「二人とも、早くしないとご飯冷めちゃう」

「わかったわかった。アスナ、一旦飯にしようか」

「そうですね」

餃子にせかされ、二人はすぐさま下に降りる

そのまますぐに昼食をとった

ここでの食事は基本、山菜や近くの川で取れる魚だ

また、時たま山を下りて買ってくる米などを炊くこともある

今日のメニューは、キノコご飯と菜っ葉の味噌汁

朝から修行漬けだったせいか、二人の食は進む

餃子とまき絵の料理が美味いということもあるが、それ以上に

（これ食べたら修行の続きね、早く食べないと……）

という気持ちも強いようだ

そんな二人の様子を見て、やや不機嫌そうな顔をする者が一人

「……いいよねぇ、二人はこの後やることがあって」

まき絵だった

「どうしたのまきちゃん？急にそんなこと言って」

「だってぇ、私食事作るとき以外暇なんだもん」

一層不機嫌な表情が強まる

テレビも漫画もないこんな山奥で一週間

アスナのように日夜修行に励むならともかく、そうでない者にはかなりつらい

一応餃子と共に食事を作ったりしているが、それも一日の内のほんの数時間に過ぎない

たまに二人の修行を見ることもあるが、それも数十分もしたら飽きてしまう

「天津飯さん、どっか面白いところ連れてってよー」

「面白いところ？」

「私達の地球じゃ見れないような凄い所。せっかく来たんだから行ってみたいなー」

「そう言われてもな……」

考え込む天津飯

見れないような所と言われても、そっちに行ったことが無いため皆目検討がつかない

だが、まき絵の気持ちもわからなくはない

「あ、そうだ！」

「どうした？餃子」

突然餃子が何かひらめき、天津飯の方に顔を向ける

「カリン塔とかどう？」

「「カリントウ？」」

同時に声を上げる二人

二人の頭には、日本古来の砂糖菓子が浮かんでいた

「なるほどな、それなら同時にアスナの修行にもなる」

天津飯も餃子の提案に賛成のようで、うんうんと頷く

「（修行？）あの、天津飯さん、何ですそれ？」

「カリンという場所に建っている塔のことさ」

「「ああーー、『塔』ね」」

納得する二人

「そうと決まれば、早く食事を済ませて行こう」

「は、はい、わかりました」

すぐに食事の残りを口に入れる一同、数分もすると食べ終えた

「では行くとするか、こっちだ」

天津飯、餃子、アスナの三人は舞空術で上昇する

まき絵は出来ないためアスナがおぶり天津飯を先頭にして向かっていく

すぐに、先ほどまでいた場所が小さくなる

「わーー！すごーーい！」

見える景色に歓喜するまき絵

こんな風に上空から景色を眺めるのは初めての経験だった

「ちょっとまきちゃん、あんまり動かないでよ？危ないから」

「わかってるって」

そう言いながらも、まき絵はウキウキして周りをキョロキョロと見渡す

さっきの暗い表情が嘘のような笑顔でだ

アスナはしかたないと思いながら、まき絵を落とさぬよう慎重に天津飯について行く

そんなこんなで数十分も飛んでいると

「お、見えてきたぞ。アスナ、まき絵、あれがカリン塔だ」

「ん？どれどれってええ！？」

「何あれ！？」

アスナ、まき絵、共に開いた口が塞がらない

天津飯が指差した先にあったもの

それは天高くどこまでも伸びていそうな凄まじい塔だった

頂上は雲より上にあるらしく、見ることが出来ない

「こんな塔は流石に、お前達の地球には無いだろう？」

「は、はい……」

「東京タワー何本分なんだろ？」

面食らったままの二人

そのまま飛ぶことさらに十数分

「そろそろ下りるぞ」

カリン塔を守りし聖域、聖地カリンが見えてきた

住居らしきものが数軒あり、村のようになっている

高度を下げ、一同は入り口辺りで着地した

「ちょっと待っててくれ、ここの者と話をつけてくる」

そう言うと、天津飯と餃子は二人を残して村の中に入っていった

「アスナ、話って何だろう？」

「中入っての見学許可とかそういうんじゃないの？」

「かなー」

二人が話しているのもつかの間、天津飯達がもう戻ってきた

隣には、村の者と思われる青年が一人

「ようこそ、聖地カリンへ」

「えっと、あなたは？」

「申し遅れました。僕の名前はウパ、この聖地カリンを守りし者です」

どうぞこちらへ、とウパという青年が先導する

天津飯達がついていくので、アスナ達も同様に後を追う

（話っていうのは、この人にガイドを頼むって意味だったのかしら？）

カリン塔へは一分もかからず到着

「ここがカリン塔です」

「うわーーー、やっぱ高いわねーー」

「アタタタ、首が痛くなっちゃうよ」

顔を真上に向け、カリン塔を眺める三人

すると

「えっと、登られるのはこの方だけなんですよね？」

「ああ、残りの俺達は飛んで先に行く」

（ん？）

アスナは、天津飯とウパの妙な会話を耳にした

今、ウパはアスナに向けて指を差した

そして、こう言ったのだ

『登る』と

アスナはやな予感がして、辺りをキョロキョロと見回す

この辺りどこを見ても、登れそうな物は一つしかない

（ま、まさか……）

アスナは再び、目の前の壮大な建築物に目を向けた

確かにでっぱりが規則的に付いており、登れそうにはなっているが……

「あ、あのー」

「ん？どうしたアスナ？」

予感が的中しないことを願いつつ、アスナは天津飯に恐る恐る尋ねた

「私が登るのってひょっとして……」

ああ、と天津飯

カリン塔に近づき、軽くパンパンと叩く

「これだよ」

「えええええ!?」

信じたくなかった

だが天津飯はそう言った

ここを登るのだと

「いやいやいやいや、こんなの絶対無理ですって!」

「無理じゃないさ、俺も登り切った。それに餃子もな」

「えええええええ!?」

アスナは高速で餃子に顔を向けた

餃子はただこっくりと頷く

「地球のほとんどの戦士はここを登ったんだ、お前でも出来るさ」

「で、でも……」

やはり抵抗を見せるアスナ

だが

「登り切った戦士はみんな、確実に前よりも強くなっていった……お前だって例外じゃないさ」

「！！」

天津飯の言葉に、アスナは天津飯と修行している理由を思い出す

（そうよ、私は強くなるために、こうして今まで頑張ってきたんじゃない……）

カリン塔を再び見上げる

（こんな塔の一つや二つ、登りきってやろうじゃないの！）

アスナの心に完全に火がついた

「……わかりました、私やります！」

その言葉を聞き、天津飯はニッと笑った

「そう言うと思ったぜ。先に行っているぞ」

「はい」

天津飯はまき絵を抱え、餃子と共に浮上する

「アスナーー！頑張ってねーー！」

「わかったーーー！」

まき絵が顔を下に向け、アスナにエールを送る

それにアスナは元気よい返事を返す

すぐに天津飯達の姿は見えなくなった

それを確認すると、アスナはゆっくりと深呼吸

それを終えると

「よーーし！いっちょやりますか！」

右手で作った拳を左の手のひらにパンとぶつけ、気合を入れる

そして、カリン塔に手をかける

「すぐに追いついてやるんだから！」

地面に唯一付けていた右足を蹴り上げ、アスナはカリン塔を登り始めた

そして今に至る

「ううううう、手が少し痺れてきた……」

弱音を吐きながらも、アスナは確実に上に登っていく

吐いたからといって、それだけで上に進めるわけではない

自分から登らなくてはダメなのだ

それはアスナ自身がよくわかっていた

無論、舞空術で行くなどもってのほかだ

「まったく、こんなバカ高い建物誰が造ったんだか……ん？」

アスナは目を凝らす

さらには目をこする

そしてもう一度見る

「あれって……てっぺん？」

間違いない、アスナはそう確信した

目の前のあれは、今まで登ってきたのとは違う

球体の様な物が先端にくっついている

あれがてっぺんでなくて何だというのだ

アスナの手に力が戻る

手だけではない、身体全身に元気がわいて出る

「よーーし！もうひと頑張り！」

ペースを前よりも上げてよじ登る

アスナの目には、熱い炎が宿っていた

第２３話　登れアスナ！目指すは塔の頂点へ（後書き）

すいません、ウパを出してしまいました（汗）

カリン塔のことを書くとなると、なんか自動的に登場させてしまいました。

前回の後書きと違うことになってしまい、本当に申し訳ないです。

察しがつくとは思いますが、次回はあの仙猫様やクリリン声のあいつも出ますので。

感想のほうもドシドシお待ちしています（返事は出来るだけ早めに返します）

ではまた次回！

第２４話　仙猫様とメタボ気味剣士（前書き）

ユニーク２万突破＆お気に入り登録５０件になりましたー！
これもひとえに読者の皆様のおかげ、ありがとうございます。
さて、明日菜ｓｉｄｅ後編投稿です。
ではどうぞ！

第２４話　仙猫様とメタボ気味剣士

時間は、アスナがカリン塔を登り始めてからすぐのところまで遡る

天津飯、餃子、まき絵の三人は、ほんの数分でカリン塔の頂点が目に入ってきた

「まき絵、あれがてっぺん」

「へーー、こうなってたんだー、最初全然わかんなかったよ」

餃子の指差す先を見て、まき絵が感心する

「ところで天津飯さん、ここのてっぺんって何があるの？」

まさか登るためだけの所ではあるまい

流石にそれはまき絵でも察しがついていた

「ああ、あそこにはカリン様という仙猫様がいるんだ」

「せんびょう？」

「要するに猫の仙人だな」

「へーーー」

ようやく納得するまき絵

『猫』という字が『びょう』と読めることを、まき絵は知らなかった

「仙人ってことは偉いの？」

「ああ、その方の下で修行した者はとてつもない強さを得られると言われているんだ」

カリン塔を登り切った者は前より一段と強くなる

つまり、そのカリンの下で修行でき、強くなることを意味する

現に、武術の神と称された亀仙人も、カリンの下で修行をしたことがある

「まあ俺もアスナも、さらに言えば餃子も、すでにカリン様の強さは超えているんだがな」

「ってことは、てっぺんに行けばその猫ちゃんに会えるんだね！」

「（ね、猫ちゃん……）まあ、そういうことだ」

一段と目を輝かせるまき絵

すでにまき絵の心の中は、カリンに対する期待でいっぱいだった

そして、てっぺんに到着

球体部分の下の方にある穴から入る

壷やタンスといった、生活用品のようなものが置かれていた

「へーー、ここがカリン塔のてっぺんかーー」

天津飯から下ろされたまき絵は、興味津々に辺りの物を眺める

どれもまき絵にとっては新鮮そのものであった

すると、まき絵は肝心なことを思い出す

「そういえば天津飯さん、猫ちゃんどこ？」

カリンの所在である

「こっちだ、ついてこい」

それを聞くと天津飯は、まき絵を部屋の外へと連れていく

下の穴とは違う、横の穴から部屋を出ると、上へややカーブを描いて階段が伸びていた

「カリン様はこの上だ」

天津飯が先に階段を上る

そこをまき絵と餃子がついていく

ふとまき絵は、自分の横に目をやった

この階段は、てっぺんの球体の外側に張り付くような形で伸びている

そのため、そこからは外の景色が一望できた

「わーーー！すごーーい！下が雲で見えなーーい！」

食い入るようにそれを眺めていると

「カリン様、お久しぶりです」

「おお、天津飯、久しいのう」

「！！」

すでに上に上がった天津飯と、誰かとの会話が聞こえてきた

まき絵はその相手の声には全く聞き覚えがない

「ね、ねえ、あの声って……」

「うん、カリン様」

「やっぱり！」

餃子の答えを聞くと、まき絵は急いで階段を駆け上がる

上がってまず見えたのは天津飯の背中

そこから顔を横にずらし、相手を確認する

「！！」

「ん？天津飯、その娘は……」

まき絵の顔を見て、そっちのほうを向く白猫

「か、か、か……」

「はい、今俺の所で居候している……」

「可愛いーーーー！！」

まき絵が飛び掛る様にその猫に抱きつく

彼こそがカリン塔に住む仙猫、カリン

「わわわ！何じゃい何じゃい！？」

「毛がモフモフだーー」

突然の事態に慌てふためくカリンだが、まき絵はお構いなし

さらには頬ずりまでする

可愛い物好きのまき絵には、カリンはかなりストライクゾーンだった模様

「家に持って帰って飼いたいくらいだよーーこの猫ちゃん」

「カリンじゃカリン！名前で呼ばんかい！それに離れろ！」

「ほーら、ゴロゴロゴロゴロ……」

「おおうっ！」

まき絵はカリンの喉元に手を伸ばす

ゴロゴロと喉を鳴らされ、カリンは思わず声が出る

完全にまき絵に翻弄されるカリンだが、それに終止符を打つものが一名

グイッ

「ああっ！」

「おい天津飯、この小娘誰だぎゃ？」

全体的に肥えた身体

ぼさぼさの黒髪で、腰には刀を差している

彼は、襟を掴んでまき絵をカリンから引き剥がすと、天津飯の方に掲げて尋ねた

「あーーん、猫ちゃーん」

未練がましくバタバタと暴れるまき絵だが、決してその手が離れ

ることはない

「一週間前に異世界からやって来た少女だ、名はまき絵という」

「ほう、やはりその子がそうじゃったか……」

「知っておられたのですか？」

天津飯が紹介すると、カリンは分かっていたような口ぶりで話す

「同時刻に何箇所も次元の歪みがあったんじゃ、ワシが気づかぬわけなかろう」

カリンは時たま、ここから下界を眺めることがある

そのため、こんな高い所に住み続けていても、地球の状況はちゃんと確認できるのだ

カリンが言うには一週間前、彼は次元の歪みを感じた

それも一箇所や二箇所ではない

そこで慌てて下界を見下ろした

するとその場所からまばゆい光が放たれ、数人の人間が気絶した状態で現れたのだという

「全部は無理じゃったが、それでもいくつかは確認出来た。そのうちの一人がお前さんじゃ」

カリンは脇にあった杖でまき絵を差す

「じゃあ、他のみんなもこの世界に来てるの!?」

「うむ、全員かどうかはわからんがな」

振り向いて尋ねるまき絵にカリンが答えると、まき絵の顔にさらに笑顔が浮かぶ

「そっかー!ってことは私達がこの塔に向かっていたことも……」

「全部見とった、橙色(だいだい)の髪の子が今ここを登っとることもな」

「すごーーい!」

「流石カリン様です、何でもお見通しだ」

天津飯とまき絵が感心していると、未だまき絵を掴んでいる男がカリンの方を向いた

「でもよー、何でその時俺には何も言わなかったんだよ?」

「お前は寝とったじゃろうがヤジロベー。それに言ったところで大して興味を持たんかったじゃろ?」

「まあ、そうだわな」

「あたっ!」

納得し、思わずまき絵の手を離すヤジロベー

そのままま絵は床に落ちた

「それで天津飯」

カリンは再び天津飯の方に向く

「ここに来た目的は単なる観光や、今登っとる子の修行のためだけじゃないんじゃろ？」

「はい、実は……」

「やったーー！勝ったーー！」

「ああ、また負けてしもうた……」

「おみゃー相変わらずトランプ弱いなー」

「猫ちゃんこれで何連敗だっけ？」

そして現在、一同はトランプに興じていた

たった今、餃子がカリンの持つ二枚のうちの、ババでない方を引き当てた

カリン、未だババ抜き勝ち無しである

「うるさい！それに猫ちゃんじゃなくてカリンじゃ！」

「まあまあ、ほーらゴロゴロゴロゴロ……」

「おおうっ！」

やや逆切れ気味で怒鳴るカリンを、まき絵はまた喉に手をやって治めた

このやり取りもかれこれ十数回に及んでいる

「カリン弱くてつまんねーからよー、他のしねーか？」

「うん、僕もそれがいい」

「私もー、それでいい？」

「う、うむ……」

ヤジロベーの提案に、餃子とまき絵は快く賛成してトランプを一束に集め始める

一人だけやや不服そうなカリン、勝ち逃げされた感じがするのだろう

だが、この流れを壊すような真似はしたくないのでしぶしぶ了承

「……じゃあ、神経衰弱でもするかのう」

「えーやだー、私それ嫌ーい」

反対するまき絵

バカピンクの彼女は、当然これも苦手なのだ

「おめー見た目からしてバカっぽいもんな」

「あーー！それどういう意味！？」

鼻をほじりながら言葉を漏らすヤジロベーに対し、まき絵が大声をあげる

そのまんまだよ、とヤジロベーは鼻くそを飛ばしながら言う

頭にきたまき絵は、ヤジロベーを指差し一言

「そっちだってバカっぽいじゃん！」

プチッ

「何だと？俺がバカ？」

「そうだよ！絶対私のほうが頭いいもんね！」

プチプチッ

「こんにゃろー！言わせときゃおめー！」

「だったら勝負しようじゃん！」

「上等だ！」

完全に火がついた二人

台に身を乗り出し互いをギラギラと睨み合う

「まき絵のやつ楽しめてるみたいだな、よかった」

そんな様子を遠くから眺める天津飯

今いる部屋の柵の所から、下のアスナの様子と交互に座って見ていた

天津飯は目がいいので、アスナの様子を途中から見ることが出来た

「さて、そろそろこっちは終了か」

チラリと下の方を見ると立ち上がり、はじめに登った階段を下りる

下の部屋に下りると、ほんの数秒ほどで

ガシッ

穴から手が現れ、淵を掴んだ

「なかなか早かったな、アスナ」

次に頭と上半身が顔を出す

最後に足をひっかけて、全身を穴から出した

「お、終わったーー」

アスナはばたんと床にうつ伏せで倒れ込むと、そのまま動かなくなる

「……アスナ？」

天津飯が近づき確認すると、

「うーん、むにゃむにゃ……」

「……寝てるのか？おい、アスナ」

アスナはすでに夢の世界へと入っていた

人生最大のハードトレーニングは、アスナの体力をこれでもかというほど取っていたらしい

少々体を揺すってみたが、全く起きる気配を見せない

「高畑せんせーい……」

「まいったな……」

頭をかく天津飯

当初の予定では、アスナが登りきったらすぐにカリンに合わせるつもりだった

そうしたら少し休みを取り、夜のうちには帰ることにしていたのだが……

「ちょっとエロネギ……どこ触ってんのよ……」

アスナがこれでは無理のようだ

「……仕方ない、カリン様に頼んで一泊させてもらうか」

とりあえず穴から落ちたら大変なので、アスナを抱えて部屋の隅へと運ぶ

「ここならまあ落ちないだろう」

「うーん、昇〇けーん……」

「……何の夢を見てるんだ？」

アスナの寝言に疑問を抱きつつも、天津飯は許可をもらいに再び上に上がる

それを聞くとカリンは、二つ返事で了承

まき絵は、やったーと歓喜してカリンに再び抱きついた

結局その日はカリン塔で一泊し、翌日ここを出ることとなった

天津飯、餃子、ヤジロベーは上で眠り

（う、動けん……）

「わーい……フカフカだぁ……ムニャムニャ」

「待ってぇ……高畑せんせーい……」

まき絵はカリンを抱き枕のように抱きしめながら、アスナの隣で寝た

第２４話　仙猫様とメタボ気味剣士（後書き）

はい、いかがでしたでしょうか？

なんか中途半端な感じになってスイマセン、後半グダグダですし

前後編と申しましたとおり、これで明日菜ｓｉｄｅは終了です

次回はちう茶々となりますのでお楽しみに

いつも一話きりで切っていたちう茶々ですが、今回話の尺が長くなりそうなのでひょっとしたら前後編になるかもです

あくまで「なるかも」なので、そうならなくてもご了承ください

ではまた次回！

第２５話　ちう茶々放浪記？メイド編（前書き）

ちう茶々放浪記です。といっても、もう放浪はしなくなりますが（笑）今回、また元祖（といってもＺに出たこともある）のが出てます。でもまあ、ナムとかよりは知名度があるキャラなので多くの方に分かってもらえると思いますが。

ではどうぞ！

第２５話　ちう茶々放浪記？メイド編

「サタン様ー、ジュースお持ちしましたーー！」

「お、ありがとう」

ここはサタンシティのサタンの屋敷

その名の通り、格闘技世界チャンピオン（一応）ミスター・サタンが住む豪邸である

そこのプールサイドで日光浴しているサタンに、笑顔を向けながら近づく者が一名

メイド服を着用しており、持ってきたジュースをサタンに手渡す

サタンはそれを受け取ると、口をストローの先端につけてチューチューと飲んでいく

「うん、美味い！えーっと、君は確か二、三日前に入ってきた……」

「ちうでーす！早く覚えてくださいね！」

ちうこと長谷川千雨は、普段からは考えられないような口ぶりでサタンと会話する

さらには、いつもしている眼鏡もない（伊達眼鏡なので不自由は

ない）

「わかったわかった、ちうちゃん可愛いからすぐ覚えちゃうぞ」

「やだー、サタン様ったらー！」

反応もまるで違う

だがそれは表向きでのこと、実際は

（ったく、何でこんなおっさんのメイドなんかやんないといけねーんだよ……）

かなり毒づいていた

こうして長谷川千雨が、ちうとして働くことになったゆえんは、ほんの数日前……

「千雨さん、所持金が底をつきました」

「はあ！？」

サタンシティに到着した二人は、夜ということもあってカプセルホテルで一泊した

そして翌日、あちこち聞き込みに回り、

それぞれの報告もかねてファミレス内で昼食を取っていた時の茶々丸の一言だった

「この食事の代金を払うと、残金は残り１２ゼニー。駄菓子すらろくに買えない状況です」

「何で注文の前にそれを言わねえんだよ！」

「言おうとしたのですが、千雨さんが……」

“ ああ！？話なら後にしてくれよ、こっちはお前と違って空腹なんだよ！”

「とおっしゃったため、言いませんでした」

「そういやそうだった……すまん、茶々丸」

頭を抱え後悔する千雨だが、覆水は盆に返らない

「いえ、よく考えれば私もあの時、千雨さんの言葉を無視してでも言うべきでした」

千雨に責任を感じさせまいと、茶々丸も精一杯のフォローを入れる

「せっかく行くあてが見つかったってのに……」

千雨は脇に置いていたポスターに目を移す

『天下一大武道会開催！君もチャンピオンに挑戦だ！』と、でかでかと書かれていた

「そこに行くどころか、次食う飯にも困ることになるとは……」

このポスターを見つけたのは千雨

二手に分かれて、聞き込みに回ったすぐのこと

ネギ達の直接的な情報は掴めなかったものの、十分な収穫だった

古の性格やネギ達の思考傾向を統合すると、まず間違いなく何人かは来ると推測できた

「ここでどうにかして、旅費を稼がなくてはなりませんね」

「ああ……」

覚悟はしていた千雨

いつになるかは別として、いずれはそうなることは容易に想像がついていた

「つっても、こんな素性が知れない私達を雇う所なんてあんのか？」

「聞き込みのついでに探してみたところ、一箇所発見できました」

「マジか！？」

茶々丸も、いつかはこうなることを予測していたようだ

「どこだよそこ！？」

「あちらのお屋敷です」

茶々丸がファミレスの外をスッと指差す（二人の席は窓際）

一般住宅のさらに向こうに、豪華な屋敷が見えた

「住み込みのメイドを募集中で、『若くて可愛ければ誰でも可』だそうです」

「おい茶々丸、あそこってこの……」

千雨は、ポスターの中央に写るアフロヘアーの男を指差した

チャンピオンベルトをし、高々と両手を掲げている

「はい、この世界の格闘技チャンピオン、ミスター・サタンのご自宅のようですね」

見た時間は別にしても、二人とも屋敷のことは認識していた

なんせあれほどの豪邸だ、始めて見た者は誰でも目に止まるだろう

チャンピオンの家と聞いたときはさらに驚いた

「お給料もそれなりのうえに住み込みですから、今の私達には最適かと」

「確かにな……」

「それに千雨さんは、私生活でもメイド服を着たことがありますし」

「まあな……ん？」

なにやら引っかかる言葉を聞いた千雨

確かめないわけがない

「ちょっと待て、今なんつった？」

「ですから、千雨さんもメイド服を着たことがありますし、と」

「そこだそこ！」

眉を吊り上げ、茶々丸を千雨はビシッと指差す

茶々丸の言ったことは嘘ではない

事実、ネットアイドル活動の際に何回か、メイド服姿を披露したことがあった

だがそれは、『ネットアイドルちう』としてやったことだ

「私のメイド姿なんてどこで見た！？」

「千雨さんの、正確にはちうさんのホームページで」

「何でそれを知ってる！？」

「以前ネギ先生に、『オシャレの参考になるかもしれないから見てみるといいですよ』と言われて」

（あのガキーーーー！！）

時期的には茶々丸が、髪を上げたのを葉加瀬に怒られた頃だろうか

ネギが茶々丸に声をかけてきた

「髪を上げなくてもオシャレは出来ますよ。そうだ！知ってるいいサイト教えましょうか？」

たってのネギの申し出だ、当然茶々丸はそのサイトのアドレスを聞いた

「それでそのサイトを見たところ、千雨さんによく似た方がいたので……」

私のコンピュータで解析したところ、９９，９％千雨さんであるという結果が出ました

と、茶々丸は淡々と言ってのけた

「もちろん口外はしていません、ご安心を」

「ならまだいいけどよ……（ま、あのガキよりは信用できるか）」

「では千雨さん、さっそくお屋敷へ参りましょう」

「わかったよ、ったく……」

ガタっと席を立つ二人

レジで会計を済ませ、店外へと出た

そのまま、サタンの屋敷へと歩を進める

「それと千雨さん」

「ん？」

「千雨さんではなく、ちうさんとして受けられたほうがより採用されやすいかと」

「うるさいな！わかってるよそんくらい！」

こうして二人はあっさり採用された

採用されたといっても、サタンが二人を見て

「可愛いから合格！」

と言っただけという、なんともアバウトな採用の仕方であったが

（まあ、こうしてこのおっさんに気に入られれば、タダで大会へ行けるかも知れねーし……）

全ては元の世界へと帰り、普通の生活に戻るため

ちう、いや千雨は、耐えることを決意していた

その頃茶々丸は

「さて、ここの掃除も終わりましたね……」

庭の掃除に励んでいた

その広いうちの一角の掃除し終え、次の場所にしようとしていた

そんな時、少し遠くの方から声がした

「なによあんた！変な奴ね！さっさとどっか行きなさいよ！」

茶々丸は、その声の主をすぐに特定した

「あれは……ビーデル様？」

ミスター・サタンの一人娘、ビーデル

年齢はネギと同じくらい

働き始めの初日にサタンに紹介され、千雨も含めて二人はすぐに覚えた

気が強くて負けず嫌い

どこかネギの幼馴染、アーニャに似た雰囲気があった

そんな彼女が屋敷の外で大声を上げている

何があったのだろうと、茶々丸は声のした方、つまり屋敷の入り口の方へと向かってみた

そこでは、ビーデルがちょうど入り口の所で一人の男を通せんぼしていた

男の両目にはスコープのようなゴーグル

頭頂部も密着式のヘルメットのようなもので覆われている

さらに服は全身桃色

その中央には『殺』という文字が、血のように真っ赤な字で大きく書かれていた

見るからにその男は怪しく、茶々丸でも通すのを躊躇ってたであろう

「ビーデル様、いかがなさいました？」

「あ、茶々丸！この男がいくら言っても帰らないのよ！」

茶々丸が傍まで来ると、ビーデルは前の男を指差す

もう茶々丸の名前を覚えているようだ（サタンはまだ）

男は不気味に口元を吊り上げる

「だから、おじさんは君のパパに用事があるんだ。通してもらえるだろう？」

声からして、若い男ではない

「ダメに決まってるでしょ！あんたみたいな変なおっさん！」

「失礼ですが、サタン様にどのような御用事で？」

茶々丸が尋ねると、男は一本だけ立てた右の親指を、首の前で右から左へ通過させた

それは、首切りのジェスチャーだと容易に分かった

「ミスター・サタンを、殺しに来た」

「「！！」」

第２５話　ちう茶々放浪記？メイド編（後書き）

はい、どうでしたでしょうか？

名前は出してませんが、おっさんはモロあいつです。

少女時代のビーデルは原作でも出てなかったので、性格はこれでいいのか？といささか気になっています（パンをかなり参考にしてますね、ハイ）

次回は久々の本気戦闘なので、ちゃんと書けるか不安です（汗）

部活の大会等の都合で、次回の更新は遅めになるかと思われます。

感想は携帯ですぐに返事できるので、お待ちしております。

ではまた次回！

第２６話　ちう茶々放浪記？ＶＳ殺し屋編（前書き）

更新遅くなりました！すいません！前回の後書きで一応書いてましたが、まさかここまで空いてしまうとは……
何とか週二回に戻せるよう、原稿執筆頑張ります。
ではどうぞ！

第２６話　ちう茶々放浪記？ＶＳ殺し屋編

「サタン様を……殺しに？」

「いかにも」

自分の主人（仮）に対する殺人宣言

茶々丸の質問、というよりは確認に、男は短く答えた

「私の名は桃白白〈タオパイパイ〉、プロの殺し屋だ。今日はとある人物から仕事を依頼され、ここに参上した」

つまりサタンの殺害である

「ここを黙って通してくれれば、私は君達に危害を加えるつもりはない。殺せと言われたのはミスター・サタンだけだからな」

「ふざけんじゃないわよ！」

ビーデルは桃白白をキッと睨み、大声を上げた

さらには拳をぎゅっと握り締め、今にも殴りかかりそうな体勢だ

「そんなことするわけないでしょ！私がやっつけてやるんだから！」

「ビーデル様、いけません」

「茶々丸は下がってて！」

茶々丸の手を振り払い、ビーデルは地を蹴った

そのまま桃白白の顔面めがけて拳を突き出す

「でやああ！」

ピト

「え？」

「はっはっは、おてんばなお嬢さんだ」

だがその一撃を、桃白白は左の人差し指一本で受け止めた

「そ、そんな……」

「ふん！」

右肘がビーデルの鳩尾を捉えた

「ぐえっ！」

当たった箇所を押さえ、ビーデルはその場にうずくまる

表情はかなり険しく、よほどのダメージであると分かる

「ビーデル様！」

「言ったはずだ、黙って通せば危害は加えない、とな」

桃白白は視線を、ビーデルから茶々丸に移す

「そちらのお嬢さん、この子の様な目には会いたくないだろう？通してもらえるかな？」

「……ません」

「ん？」

「絶対に……あなたを許しません」

茶々丸が桃白白を見据える

「ほう、この桃白白様にたてつく気か？」

「実力行使で、この場から消えてもらいます」

「ふん、やれるもんなら……」

右手の拳を手前に引く

「やってみろ！」

桃白白は躊躇なく、茶々丸の顔を狙った

そのスピードはビーデルの比ではない

並の人間なら、反応すら出来ずに直撃するだろう

が、

「何!?ぐふぇ!」

茶々丸は別

身体を横にずらして拳を受け流し、がら空きの腹部に一撃

膝をガクガク震わせながらも、その場に踏ん張る桃白白

「な、なかなかやるじゃないか……この桃白白様に一撃を与えるとは……」

「今ので分かったはずです。あなたに私は倒せない」

「ほ、ほざけ!」

淡々と言い放つ茶々丸に逆上し、桃白白は猛然と飛び掛る

そして、さっきと段違いの速さのラッシュを放つ

適確に人体の急所を狙うその攻撃だが

「な、何故当たらん!?」

一向に茶々丸が喰らうことはない

全て紙一重でかわされるか、手のガードで軽く防がれる

「あなたが常人を逸した強さだとは分かりました。ですが私には勝てません」

「うるさい！」

頚椎を狙ったハイキック

しかしそれも当たらず、足首を掴まれる

「ぬおっ！？」

そのまま庭の壁めがけてぶん投げられる

「なにおう！」

このままぶつかるかと思いきや、その前に空中で体勢を立て直す

両足を揃えて壁につけ、水泳選手のターンのように蹴り出して再び茶々丸へ向かう

茶々丸は驚くことなく普通に構える

「喰らえ！」

桃白白がこう言うと、彼の左手首が突如外れた

そこから仕込み刀がシャキッと飛び出す

そして茶々丸に切りかかる

パキーーーン

「ふへ？」

桃白白から間の抜けた声が漏れた

普通なら信じられない光景

腕によってガードされた刀は、真っ二つに折れた

折れた方はヒュンヒュンと宙を舞い、茶々丸のすぐ横の地面に刺さった

「私には勝てないと言ったはずです、ここから消えてください」

「うるさいうるさいうるさい！こうなったらとっておきを見せてやる！」

桃白白はバックステップで急いで距離をとる

明らかに焦りが感じられた

今度は右手首を外し、茶々丸に向ける

「この桃白白様にスーパーどどん波まで使わせたことを後悔させてやる！」

外れた所から見える穴へ、どんどん光が集中していく

「ふはははは、どうだ！これは貴様も受けきれまい！しかも追尾シ

ステム付だぞ！」

桃白白は徐々に自信を取り戻していく

これならあの無表情女も怯えを見せるだろう

そう思っていたのだが

「……」

眉一つ動かさないその態度に、桃白白の怒りのボルテージが上がる

「避けるのは無理だと言ってるんだ！わかってるのか！」

「……撃つのでしたら、どうぞ」

最高点に到達し、頭の中で何かが切れた

「あの世で後悔しろ！死ねぇ！」

ドォォォォウ！

桃白白全力の一撃が放たれた

ごんぶとの光線が茶々丸を襲う

「わはははは！ざまーみ……げげ！？」

パッシーン

ビーー

ボン！

「……私には、効きません」

またもや疑いたくなるような事態

茶々丸はスーパーどどん波を、いとも簡単に対処してみせた

バック宙をして蹴り上げたのだ

真上に高く高く飛んで行ったスーパーどどん波は、追尾システムで再び茶々丸に向かったが、

あっさりとアイビームで消滅、フルパワーの半分も使っていない

ちなみに、わざわざ空中にやってから消滅させたのは、爆発による芝生の被害をなくす為

「どうします？今のが最後の手だったとお見受けしますが」

「ぐ……ぐぐぐ……」

後ずさりをし、さらに距離をとる桃白白

そうしながら、後ろのポケットから何かを取り出した

（あれは……ホイポイカプセル？）

そう、万能収納アイテムホイポイカプセルだった

ホイポイカプセルの詳細は、千雨が寝ていたときにナムから聞いていた

その後千雨にも話したため、彼女もちゃんと把握している

桃白白はスイッチを入れると、下に投げつけた

ボンッと煙があがってくる

何か別の武器を出すのかと、一応警戒した茶々丸

「え？」

しかし、現れた物は全くの予想外

長さ二、三メートルほどの柱だった

思わずあっけにとられた茶々丸をよそに、桃白白はそれを掴み

「そいっ！」

茶々丸とは反対の方向へ、斜め四十五度にぶん投げた

「？？」

目の前で行われている行動の意味が分からず、茶々丸はただただ困惑するのみ

その次の瞬間

「ぴょっ！」

「！」

桃白白はその柱に向かって、同じく斜め四十五度で大ジャンプ

追いついてそこに乗っかり、そのまま柱と一緒に飛んで言った

「お、覚えてろよー！」

ベタな捨て台詞と共に

（……普通に自分で飛んでも良いのでは？）

すでにこの場から消えた桃白白に突っ込んでみる茶々丸

まあ何はともあれ、『桃白白をこの場から排除』はできたのだ

そのまま何事もなかったように掃除に戻ろうとする

が、

「茶々丸すごーい！」

ビーデルがばっと飛びついてきた

「ビ、ビーデル様……もうお身体は大丈夫なのですか？」

「うん！」

すっかり回復したようで、元気よく答えた

「それよりさっきのよ！茶々丸ってすっごい強いのね！」

「いえ、そんな大したことは……」

「ねえ、私に戦い方教えて！いいでしょ？」

「え！？」

ビーデルからの突然の要求

思わず茶々丸は訊き返す

「それはいったいどういう……」

「そのまんま！私も茶々丸みたいにもっと強くなりたいの！」

「ですが、ビーデル様にはサタン様というお父様がいらっしゃいますし……」

（一応）サタンはこの世界の格闘技チャンピオン

表の世界ではトップクラスの実力者だろう

しかも父親となれば、教えてもらうにはうってつけなのだが……

「茶々丸じゃなきゃ嫌！それにパパに頼んでも、最近ぜんぜん教え

てくれないし……」

ビーデルは茶々丸にかなり入れ込んでしまった様子

「お願い！」

茶々丸はやや困った表情をみせるが、ふとあることを思いつく

膝を折り、目線をビーデルに合わせた

「どうしても、強くなりたいのですか？」

ビーデルはコクリと一回、顔を縦に動かした

「……わかりました」

それを聞くと、ビーデルの顔がとたんに明るくなる

「では、こちらからもお願いをしてよろしいですか？」

「うん！言ってみて！」

そうすれば茶々丸に教えてもらえる

快くビーデルは了承した

「まず、今回起きたことやこれからの練習のことは、ほかの人に一切内緒にしておくこと」

うんうんと頷くビーデル

「そして、私と千雨さんをビーデル様の専属メイドとして、今度の大会に同行させていただくこと」

出来ますか？と確認を取る茶々丸

すると、ビーデルは親指を立て、グッと突き出してきた

「もちろん！」

「……では、よろしくお願いいたします」

「じゃあ早速始めるわよ！」

「え？」

茶々丸の袖を掴み、ビーデルはグイグイと引っ張っていく

「私専用のトレーニングルームがあるの！そこでやりましょう！」

たしかにそれならバレることはない

が、茶々丸は今出来ない状態にあった

「ま、待ってください、まだ庭の掃除が……それに……」

ちらりと目をやった先には、桃白白の仕込み刀が芝生につき立てられていた

流石にあのままでは誰かに気づかれる

そうなると後々面倒だ

「じゃあさっさと抜いちゃって。庭の掃除は私が他のメイドにさせるから」

「は、はあ……」

茶々丸は刺さった刀を掴むと、ズボっと引き抜いた

そこまで深く刺さっておらず、抜いた跡もほとんど目立たない

「早く早く！」

「あ、お待ちくださいビーデル様」

すでに屋敷へ歩を進めているビーデルを、茶々丸は急いで追いかけた

（武道会、ネギ先生達に会えればいいのですが……）

一週間後、その願いは現実となる

ただ、その再開が思わぬ形でなることは、茶々丸もネギもまだ知る由はなかった

第２６話　ちう茶々放浪記？ＶＳ殺し屋編（後書き）

いかがでしたでしょうか？

これでちう茶々放浪記も終了となります。

さて、次回はいよいよ三巡目、大会前日の様子を書きたいと思います

ただ、一部のｓｉｄｅをはしょります（汗）

ネギ達と夕映達はちゃんとやりますが、他のがどうも……

でも、ちょっとは出しますよ、ちょっとは（焦）

一話とするには文字数が足りないだけなんです。

次回は来週の頭を予定しております。

感想のほうもドシドシお待ちしてますのでそちらもよろしく。

質問とかでも良いですので。ちゃんと答えたいと思います。

ではまた次回！

第２７話　大会前日！楓達は何処に？（前書き）

今回は予告どおり投稿できました。いやーよかった。さて、ネギ達三巡目です。今回やや分量が少なくなっておりますがご了承ください。

ではどうぞ！

第27話　大会前日！楓達は何処に？

「それじゃあお母さん、行ってきまーす」

「「「行ってきまーす」」」

「行ってらっしゃーい、気をつけて行くだぞー」

早朝六時、朝食を食べ終えたネギ達三人は悟飯の家を出発した

刹那たちとの合流から約一週間、一同は合同の修行を毎日続けていた

朝早くからピッコロ達の下へ集合

そして深夜までみっちり修行し、帰宅

このタイムテーブルを毎日こなしていた

修行の厳しさは悟飯の比ではなかったが、確実に強くなることを実感できていた

こうして現在、ピッコロの所目指して舞空術（ネギは浮遊術）で飛行中である

ちなみにあやかも舞空術を会得し、スピードはネギ達に劣るものの飛行できていた

「それにしてもネギ、ついに明日やな」

「うん、天下一大武道会。今日が大会前の最後の修行になるね」

「頑張ってくだせーよ兄貴」

肩に乗っていたカモが話しかける

あの件以降カモは刹那達とは離れ、ネギ達と同じく悟飯の家で居候していた

刹那達もどうかと誘ってみたが、悟飯の家に迷惑がかかると言って遠慮してしまった

実際のところ、可能な限りピッコロの傍にいて色々学びたいのだとか

「それにしても兄貴、昨日の修行の終了はやけに早かったッスね」

カモは昨日のことを思い出した

いつもは九時十時まで続いていたのをなんと六時で切り上げさせ、ネギ達を家に帰したのだ

「うん、確かにいつもならありえないよね」

「大会が近いから、無理して怪我をしないようにという配慮ではありませんの？」

あやかが自分の考えを述べるが、カモは首を横に振った

「あやか姉さん、ピッコロの旦那に限ってそれはねえって。あの人のスパルタは身をもって経験済みだろ？」

「まあそうですけど……」

確かに、と悟飯は心の中で頷いた

ピッコロのスパルタぶりは彼が一番よく知っている

思えば六年前、サイヤ人襲来に備えての修行がその始まりだった

両親である悟空とチチの了承も取らずに拉致

そこから野獣だらけの場所へ連れて行かれ半年間放置

その後の合流しての修行も鬼の様であった

多少の怪我などどこ吹く風といった感じだった

そんな彼が怪我を心配して修行時間を減らすなど考えられない

第一木乃香がいるのだから、怪我をしてもすぐ治せる

何か別の狙いがあると考えるのが普通だろう

そんなこんなで飛行を続けていると、一同はピッコロの気を察知した

もうすぐ到着ということだ

だが、すぐに一同はその異変に気づいた

「あれ？ピッコロさんの気だけだ」

真っ先に気づいたのは悟飯

「え？あ、ホントだ」

「おっかしーなー……」

続いてネギ、コタロー

「……うーん、そういえばそうですわね」

やや遅れてあやかも気づいた

木乃香も含め、楓達三人の気が近くに感じられないのだ

気を消しているのではと考えたが、それだと木乃香の説明が付かない

二人は可能だとしても、修練を積んでいない木乃香には絶対不可能なことだ

「ピッコロさーん」

「おお悟飯、待ってたぞ」

いつもの場所に降り立ってみると、そこにいたのはやはりピッコ

ロ一人

腕を組んでじっと、悟飯達のことを待っていた

一同は辺りをきょろきょろと見回すが、やはり姿は見えなかった

「あのピッコロさん、他の皆さんはどこです？」

「あいつらは特別な場所で修行中だ、木乃香は付き添いみたいなもんだがな」

代表してネギが尋ねると、ピッコロは腕を組み続けたまま答えた

「特別な場所？」

「ああ」

ピッコロは腕組みを解き、指一本で空を指した

「天界だ」

「デンデ、久しぶりー」

「悟飯さん！」

ピッコロと悟飯の先導のもと、一同はカリン塔のさらに上の天界、神様の神殿へとやってきた

カリン塔自体にも驚いたが、その上で浮遊している神殿にはさらに度肝を抜かれた

到着すると、そこでは木乃香を含め三人の人物が出迎えてくれた

もう一人は全身真っ黒の肌をしたやや太めな人物

はるか昔から神殿を守りし者、ミスター・ポポ

そしてもう一人は、ピッコロによく似た外見の少年

肌の色や触覚からして、ピッコロと同じ種族であることは容易に分かった

一年前からなった地球の神、デンデである

久しぶりの再会だったようで、悟飯、デンデの双方は共に喜びの表情を見せた

そのあと、ポカーンとするネギ達に気づき、詳しいことを説明した

「か、神様なの？」

「うん」

「ちゅーことはドラゴンボール作ったんも……」

「デンデだよ」

一通りの事を聞くと、一同は感心したようにデンデを見た

デンデは少し照れ、頬を人差し指で掻く

「ん？そういや木乃香姉ちゃんだけやん。楓姉ちゃん達は？気すら感じんで」

コタローの言葉にネギも、ホントだ、と続く

「ピッコロさん、ホンマにここにおるんか？」

「いるさ、気が感じないのは遮断されているからだ」

「遮断？」

「来れば分かるさ、ついてこい」

疑問を残しながら、一同はピッコロの後をついていく

ほんの少し歩くと、ピッコロはとある扉の前で立ち止まった

「ここだ、楓達はこの中にいる」

「何なんですの？このお部屋は」

「精神と時の部屋、いうなれば時の異次元世界だな」

「時の異次元世界？」

尋ねてきたあやかの質問に答えたピッコロ

しかしまだ完全には分かってないようで、さらに説明を続けた

「この扉を隔てて、時間の流れが違っているんだ。浦島太郎の逆といえばわかるか？」

なるほど……とあやか

すると、ネギがポツリと呟いた

「師匠〈マスター〉の別荘と同じだ……」

「ほう、お前たちの世界にも似たような物があるのか」

ピッコロはそれを聞き逃さなかった

「はい、もといた世界の師匠が持ってて、中での一日が外では一時間になるんです」

これと同じ仕組みなら、二人が入ったのも頷ける

入り始めたのは、おそらく合同の修行の終了直後

それから今までちょうど半日、かなりの修行が出来たはずだ

だから昨日は修行を早く切り上げたのかと、ネギは納得した

が、

「二十四倍か、ずいぶん能率が悪いんだな」

「え？」

「この精神と時の部屋の場合、外での一日が中では一年だぞ」

「「「……ええ！？」」」

ネギだけでなく、コタローとカモも同じく大声を上げた

二人もエヴァンジェリンの別荘のことを知っているだけ、その驚きはネギと同じだった

スケールが明らかにネギ達のそれを超えていた

同じくらいの物かと思っていたら、その約十五倍

「ということは、お二人は半日入っているわけですから……」

「半年だな」

あやかも言葉を失った

「そろそろ時間なんだがな……」

ピッコロがちらりと扉に目を移す、すると

「ふん、ようやく出てきたか」

目の前のドアがゆっくりと開いた

ギィィッと音を立て、そこから白い光が漏れ出す

そして、それを遮るように二つの影が現れる

「「！！」」

「お待たせしたでござる、ピッコロ殿」

「ほう、お前ら随分頑張ったようだな」

「はい、それはもう……あ、ネギ先生達も来てらしたんですか」

（す、すごい……）

（なんやこれ……こないにすごなるんか……）

動揺を隠せないネギとコタロー

ネギ達の目の前に現れたのは、半年の修行を通し、昨日とは桁違いの気を有した楓と刹那だった

第２７話　大会前日！楓達は何処に？（後書き）

いかがだったでしょうか？

ついに登場し（させ）ました精神と時の部屋！あとデンデとポポ。

楓達二人はどこまで強くなっているのか！？大会編をお楽しみに！

次回はネギ達も入ります。

感想、質問、突っ込み、お待ちしていますのでどうぞよろしく。

ではまた次回！

第２８話　いざ総仕上げ！精神と時の部屋（前書き）

何とか文字数、前より増やせました。字数を減らすと投稿ペースが（やや）早くなりますが、やっぱり一話一話濃い内容でいきたいですしね。

他のネギま×ＤＢＺ作家さんに負けないよう頑張ります！

ではどうぞ！

第２８話　いざ総仕上げ！精神と時の部屋

「半年ぶりでござるな、ネギ坊主」

「は、はい……」

「まあ、皆さんからしたら半日ぶりなんですけどね」

半年の修行は伊達ではなかった

昨日の段階では、あやかを除いた四人の力量はほぼ横並びで極端な差は見られなかった

だが、今の二人から発せられる気は、ネギ達のそれをはるかに凌駕していた

これを戦闘で爆発させたらどれほどになるのか

今のネギ達にはまだ想像がつかなかった

「驚いたかお前たち、これが精神と時の部屋の効果だ」

ピッコロは楓達の気を感じ取っても、動揺一つ見せない

（予想を上回るパワーアップだ……だが、まだまだだな）

ピッコロも以前、この精神と時の部屋で修行を積んだことがある

その時の期間は、楓達の倍の一年

当然ながら、二人はまだピッコロの域には届かないでいた

しかし、

（にしても、こいつらのこの顔は何だ？）

部屋から出た彼女たちの表情はすがすがしいものだった

無論、ピッコロや悟飯に実力は及ばないことは分かっているはず

元々勝てるはずがない、と割り切っているなら話は早い

が、始めに二人があの部屋に入る時の心情はそんなものではなかった

ここで強くなって追いついて、絶対彼らに全力を出させてみせる

そんな決意のこもった心情だった

つまりは二人の顔がすがすがしいのは開き直りではなく……

（気では及ばずとも、何か勝算が出来たということか……）

そういう考えに行き着く

（面白い、大会で見せてもらおうじゃないか）

明日に控える天下一大武道会に、更なる期待を抱くピッコロ

（今日の修行で、二人の強さを少しでも知ってしまうのはつまらんな……）

楽しみは最後まで取っておきたい

そう思ったピッコロは、二人にある提案を出した

「楓、刹那、今日の修行は互いに別々にしないか？手の内は晒したくあるまい」

「いいんでござるか？」

「ああ、俺はここにいるからお前らは下界の方で修行してくれ」

「あいあい」

「ではまた、ここに戻ってきますね」

ピッコロの意図を理解したようで、二人はすぐに了解した

楓はいち早く舞空術で下界へと下り、刹那も木乃香を抱えてすぐ後を追った

「……さてと」

楓達の姿が見えなくなったのを確認すると、ピッコロはネギ達の方へ向き直る

「お前たちもこの部屋で修行してもらおうか。あいつらと同じく半年間だ」

「「はい！」」

「おう！」

すでに覚悟はできていたネギ達

自分達も修行させるためにここへ連れてきたというのは、とうに見当が付いていた

「よし、では中に入れ」

ピッコロはドアノブに手を掛け、先ほど閉まった扉を再び開けた

「ここが精神と時の部屋……」

「真っ白やな……」

「不思議な感じですわね……」

ドアの向こうに見えるのは、どこまでも続く純白

ネギ達はそこに魅了されながら、足を踏み入れようとする

「それとネギ、カモは連れて行かないほうがいいぞ」

「え？何でやねんっ！」

「ぐおっ！」

「きゃっ！」

突如全身に降りかかる重量感

ネギを始め中に入った者はみな、それに押し付けられて膝をつく

ネギの肩に乗っていたカモも例外ではない

ネギの体勢が崩れたことで滑り落ち、床にへばりついている

「ぐべぇ！あ、兄貴ーー！」

「カモ君！」

カモのピンチに気づいたネギ

右手を伸ばして胴体を掴み

（う、重い……）

何とか部屋の外へとほおり投げた

部屋から脱出したことで、重量感から開放されるカモ

ゼエゼエと息を荒げながらも、ピッコロの方をゆっくりと向いた

「だ、旦那ぁ……何ですかいあれは？身体がこう……鉛みてぇに……」

「初めての奴にはつらいだろうな。なんせ中の重力は地球の十倍だからな」

「「「「十倍!?」」」」

ピッコロの発言に、中にいたネギ達も含めて全員が声をあげた

これもまた、ネギ達の世界にはないすさまじい物であった

今の彼らに、「三百倍にも耐えられる奴がいる」と話したらどんな顔をするのだろう

「まずはその重力に慣れることだな」

「な、慣れろと言われても……」

「無茶やてこんなん……」

何とか立ち上がることはできた一同

だがそれもかなりギリギリ、慣れるまではイバラの道であろう

「楓達みたいになりたくないのか?おそらくあいつらはすぐに慣れたと思うぞ」

「「「!!」」」

ピッコロの言葉に、ネギ達はハッとした

確かに、あれほどのパワーアップをした楓達だ

すぐに十倍の重力に慣れ、本格的な修行に入ったのだろう

さっきの楓達を見て、ネギとコタローは関心とは別に、こうも思っていた

あそこまで自分達も強くなれるのか、と

ならば重力に慣れることなど修行以前の問題

そこで音をあげてどうする

あやかもまた、妥当アスナの思いは変わっていない

他のみんなには及ばずとも、強くなれるのだと確信した

「どうする？何ならやめるか？」

ピッコロがネギ達に問いかける

といっても

「やめるわけありません！」

「この重力に慣れろ？半年間？上等や！」

「やってみせますわ！」

「……そう言うと思ったぜ」

誰一人として辞退することは無いと、ピッコロは初めから分かっていた

「一応食料と風呂、トイレにベッドは用意してある。好きに使え」

それと、とピッコロは付け加える

「修行の時に勢い余ってこの扉を破壊するなよ、二度と出られんくなるからな」

何気に恐ろしいことを言うので、ネギ達はそのことを肝に銘じた

「扉が閉まれば時間の流れは変わり始める。では半年後にまた会おう」

「兄貴！頑張ってくだせえ！」

ピッコロはバタンと扉を閉めた

それと同時に外の気が一切感じられなくなる

感じるのは他の二人だけとなった

「……さてと、そんじゃネギ」

「修行開始ですわね」

「うん！」

決意を新たにし、三人は早速修行（重力慣れ）にとりかかった

「ピッコロさん、僕も下で修行してきます。楓さん達とは別で」

「ああ」

僕もうかうかしてはいられないな、そう思った悟飯

じゃあねデンデ、とデンデに別れを告げると、悟飯は下に下りていった

「……では、俺もするとするか」

ピッコロは座禅を組むと、スーッと舞空術で一メートルほど浮き上がる

「さて、あいつらもどこまで化けるのか……楽しみにさせてもらうぞ」

そう呟いた後目をつぶり、瞑想に入るピッコロ

三人が出てくるのは今夜の七時前

それから一晩寝れば、身体の休息もばっちりだろう

楓達も、木乃香がついているので怪我の心配はない

今頃はもう修行に入っているだろう

来たるべく天下一大武道会に向け、それぞれが総仕上げにとりかかっていた

～余談～

（べ、ベッドが二つだけ！？）

あやかは心の中で歓喜の声をあげた

中での一日が終了し、眠りにつこうとしたネギ達

寝室に入ったとたん、あやかの表情が一変した

元々この部屋は、最大二人での修行を想定して作られている

過去の戦士達も、二人もしくは一人で修行をしていた

ネギ達のように三人で入るというのは、イレギュラーな事態であった

（ということは……ネネネ、ネギ先生とご一緒のベッドで！？）

悟飯の家では同じ部屋で寝るものの、布団は別々に与えられた

ネギの布団に潜り込もうとしたことは数多くあった

が、その度コタローの寝相の悪さに阻まれ、涙を呑んでいた

（ですが、今回は初めから同じ……邪魔はされませんわ……）

フフフフと不気味な笑い声を漏らす

まもなくやって来るであろう至福の一時を心待ちにしていると、

「なんや？ベッド二つしかないやん」

「ホントだ、じゃあ一緒に寝る？コタロー君」

（な！？）

あやかの考えとはまるで別の方向へ進もうとしていた

「あ？別にエエけど」

「よかった、それじゃあ……」

「ま、待ってですわ！ネギ先生！」

「うわっ！」

このままでは自分のバラ色タイムが無に帰してしまう

そうはさせんとばかりに二人の間に割って入った

「ネギ先生、ぜひ私とご一緒に寝てください！」

「ええ！？でも僕とコタロー君で寝たほうが狭さとかだと……」

言うまでもなく、ネギとコタローはあやかより小さい

ならばその二人が一緒に寝たほうが良いだろう、そうネギは考えていた

「私は全然構いませんわ！さあ、早くお布団に入りましょう！」

「ちょ、ちょっと！いいんちょさん！？」

半ば強引にベッドに連れ込もうとするあやか

ネギはあたふたと慌てふためく

「ちょっと待てやあやか姉ちゃん」

そんなネギの服の袖を、コタローが掴んであやかの進行を妨げた

「ネギに変なことする気やろ？」

「な！」

「口元にやけてよだれ出とるし、目はなんか怖いし」

「！」

慌てて口元をぬぐうあやか

「なんかネギと一緒に寝さすの、危ない気してきたわ、やっぱ俺が寝る」

「そ、そんなことありませんわ！」

「さっきのよだれ見ると、説得力感じんなー」

「な、何ですってー！」

引っ張り返してくるコタロー

あやかも負けじと引っ張る

「い、痛い痛い！」

「ほら御覧なさい、ネギ先生が痛がってますわ！その手を離しなさい！」

「そっちが離せや！このショタコン！」

「ななな！」

あやかの中で何かが点火した

「言わせておけばーー！」

「痛い痛い痛い！」

さらに力強く引っ張り、コタローから引き剥がそうとする

「俺は事実を言ったまでや！」

「痛い痛い痛い痛い！」

コタローも負けずに力を入れる

ネギのほうもかなり限界が来ており、何か解決法はないかと模索していた

「（そうだ！）い、いいんちょさん、コタロー君、クジは？」

「「クジ？」」

パッと手を離す双方

「まあそれなら、確かに公平やな」

「わかりましたネギ先生！私、絶対ネギ先生と一緒になってみせますわ！」

「ははは……」

キラキラと目を輝かせるあやかに苦笑するネギ

腕の痛みと二人の喧嘩が収まったことにホッとしつつ、早速クジを始めた

「それじゃあ、おやすみなさい」

隣のベッドに挨拶をして、ネギは布団に潜り込んだ

その隣のベッドには

（ううう……ネギ先生……）

（何でよりによってこの組み合わせやねん！）

自分のクジ運を呪いつつ、ギリギリまで離れて寝るあやかとコタローがいた

第２８話　いざ総仕上げ！精神と時の部屋（後書き）

どうでしたでしょうか？

余談と書きつつ、結構字数がいってしまったような……

さて、次回は以前も書きましたとおり、一気に飛んで夕映ｓｉｄｅになります。

今度はアックマンは出ませんので（たぶん）、元祖知らない人はご安心ください

それにしても、デンデとポポ全く喋らなかったなぁ（笑）

ドラゴンボールが集まった時にでも喋らせますか、可哀想ですし。

あと、感想は随時募集中ですので（対戦カードのリク全然来ないなぁ）。

特に質問には答える気満々ですので、お待ちしております。

次回は来週の頭、もしくはその翌日くらいかと。

何とか週二回投稿、このまま続けていきたいです。

ではまた次回！

第２９話　頑張れ夕映！ババからの最終試験（前書き）

夕映ｓｉｄｅはこの一話で終了です。あと、読者の皆様にお詫びせねばならんことが……本編読んだ後、後書きをご覧ください。

ではどうぞ！

第２９話　頑張れ夕映！ババからの最終試験

ネギ達が総仕上げに入ったその日の夕方

占いババの館にて

「終わったーーー！」

カレンダーに十四個目のバツ印をつけ、朝倉が両腕を掲げた

「やりましたね、朝倉さん」

隣にいたさよも同じく、喜びを露わにしていた

「いやー、ここまで長かったー……さてと」

くるりと後ろを振り向く朝倉

そこには、占いババが水晶玉に乗ったまま佇んでいた

「ババさん、約束通り二週間キッチリ働いたよ」

「……うむ、そのようじゃな」

コクリと頷く占いババ

仲間を占うのと居候のために出された条件、二週間の館での労働

本日をもって、十四日間全てが終了したのだ

「早速私達の仲間の場所、占ってもらえる？」

「いいじゃろう、じゃがその前に……」

「占いババさん、魔法薬の整理ただいま終わったです」

何か言おうとした占いババ

しかしそれを、仕事を終えて帰って来た夕映にかき消される

「おお夕映か、ちょうど良かった。早くこっちに来い」

「あ、はいです」

トテトテとやや早足でこちらへやって来た

「ではわが弟子夕映よ、これよりワシからの最終試験を受けてもらう」

「え！？」

驚きを見せる夕映

前からすることが決まっていたわけではないようだ

「よいしょっと」

浮かぶ水晶玉の高度を下げ、占いババはそこから降りた

「この水晶玉を使って、自分達の仲間の場所を占ってみい」

「「ええ!?」」

今度は朝倉も共に驚いた

「ちょっとちょっとババさん!約束が違うじゃん!ババさんが占うはずでしょ!?」

「それとこの最終試験は別じゃ、失敗したらワシがちゃんと占ってやるわい」

それなら文句はあるまい?と、朝倉の抗議を突っぱねた

そして再び夕映のほうへと向き直る

「これができたら、お前を一人前と認めてやる。どうじゃ?」

「……はい、やらせていただくです」

決意を込めた表情で、夕映は頷いた

「では、準備はよいな?」

「はい」

椅子に座り、水晶玉と向かい合う夕映

水晶玉は専用の台に置かれ、紫の布をかぶせた小テーブルにそれごと乗せられている

最後にスーハーと深呼吸を行い、少しでも緊張を抑えようとするが、なかなかそう上手くいかない

事実、夕映を手には汗がびっしり浮かんでいた

その様子を、少し離れた場所から見守る朝倉とさよ

最初は、「どうせ失敗しても占ってもらえるんだし、気楽にやりなよ」とでも言ってやりたかった

しかし、夕映と占いババのあまりにも真剣な顔持ちに、それは喉の奥で止まってしまった

これまでの二週間、夕映は占いババの修行に耐え続けた

それこそ、まさに血の滲むような修行にだ

一時諦めかけたこともあった

自分は弟子としてふさわしくないのではないか、と

だがとある出来事を通し、夕映は強い自信を持つことができた

自分の決意は、このようなことで折れるものではない

耐え、強くなり、ネギ達の力となってみせる

その想いを胸に、夕映は頑張り続けたのだ

そしてこれは、その集大成

「気楽にやれ」などとは、とても言えなかった

（夕映っち……）

「では……」

手の汗を拭い、夕映は水晶玉に手を伸ばす

「プラクテ　ビギ・ナル……」

まずは始動キーを口に出す

本当は自分用の始動キーを作りたかったのだが、いかんせんこちらの世界では準備が不可能だった

「我の求めし者・場所よ　精霊の力によりて今ここに示さん……聖玉の導き！」

唱え終わると、水晶玉から淡い光が放たれる

（おおっ、成功！）

心の中でそう声をあげた朝倉

しかし、

（ぐぐぐぐぐ……）

肝心の中身が映ってこない

精一杯魔力を注ぎ込むが、これでも進展なし

この事態に夕映が焦りを覚えているのは、表情や顔の汗で容易に分かった

（……やはり、まだ早かったか）

悪戦苦闘する目の前の弟子を見て、占いババは小さくため息をつく

これ以上やっても無理だろう、無駄に魔力を消費するだけ

そう思い、声をかけようとする

「おい夕映、もうえ……」

その時だった

「夕映っち頑張れ！」

「ファイトです夕映さん！」

朝倉とさよの声が占いババの声をさえぎった

本当は最後まで、無言のまま見守ろうとしていた二人

だが、目の前にいる夕映の姿を見てその真情は変わった

このまま黙って見ているだけで良いのか

何か自分達でも、彼女にしてやれることはないのか、と

そこで行動を起こしたわけだが、占いババは軽く鼻で笑った

（ふん、そんなもので上手くいったら苦労せんわ……！？）

「うおおおおおお！」

占いババは目を疑った

僅かながら、水晶玉の中に影が映りだしてきたのだ

夕映から注がれる魔力も、より洗練されたものとなっていく

（バカな……さっきの応援のせいとでもいうのか！？）

（も、もう少しです……）

「もうちょいだよ夕映っち！」

「頑張ってください！」

さらに応援を続ける二人

それを受け、より一層魔力が高まる

「でやあああ！」

水晶玉の輝きが最高点に達した

あまりの眩しさに、一同は反射的に手で目を覆う

すぐに光は収まり、再び水晶に視線を移した

「な、なんじゃと！？」

真っ先に声が出たのは占いババ

「ああっ！」

「ゆ、夕映さん……」

続いて朝倉とさよも声を漏らす

「え？え？……あああっ！」

最後に夕映本人が、事の起こりに気づいた

そう、水晶玉には鮮明に映っていたのだ

夕映が求めし者の一人

大親友、宮崎のどかの姿が

「のどか！」

「やったね夕映っち！」

「おめでとうございます！」

二人の祝福の言葉に、夕映は笑みを浮かべた

「ありがとうです、二人とも」

だが、うかうかしてはいられない

「で、本屋はどこにいるわけ？他のみんなもいるの？」

「そ、そうでした、ちゃんと確認しなくては……」

映っていたのは、のどかの顔のアップのみ

これではいる場所までは分からない

魔力切れを起こす前に、きちんと確認する必要があった

今映っている映像をズームアウトにしようとするが……

「あ、あれ……なん、ですか……これは？」

夕映が急にふらつきだした

頭がボーっとして視界はぼやけ、瞼が重くなり下がっていく

何とか瞼だけでもと頑張るが、それもむなしく

「ふにゅーーーー」

バタンとテーブルに突っ伏した

「夕映っち！？」

「大丈夫ですか！？」

慌てて駆け寄る二人

そのまま顔を覗き込むと

「スーー、スーー」

「……ねえババさん、これってどういうこと？」

「無茶苦茶な魔力の送り方をするもんだからスッカラカンになったんじゃろ」

魔力を使い果たし、半分気絶のような感じで寝ている夕映がいた

「まあ、映ることは映ったわけじゃし……仮免合格かの」

魔力が送られていない今、水晶玉には何も映ってはいない
それでも、さっきまでちゃんと映っていたのだ
夕映自身の力で
この二週間がなければまず出来なかった
魔力のコントロールが課題としても、充分に評価できる内容だった
「さて、とりあえず部屋に運んでやらんとな」
夕映の眠りは深く、少し揺すった位では起きそうにない
「アックマン、そこにおるんじゃろ？運んでやれ」
「……ちっ、何だよ婆さん気づいてたのか」
「「ええ！？」」
朝倉達の後ろにあるドアの陰からアックマンが現れる
突然の登場に面食らう朝倉とさよ
「い、いつからそこにいたんですか？」
「試験の始めからおったぞ」
さよの問いに、占いババが代わりに答えた

これまでずっと修行に付き合ってやった身だ

やはり合否が気になったのだろう

だが、朝倉達と一緒は恥ずかしかったらしく、ドアの陰に隠れてそっと見守っていた

結局、占いババに看破されることになったのだが

「しょうがねえな……幽霊の嬢ちゃん、こっちの嬢ちゃんの部屋まで案内してくれるか？」

「あ、はい」

俗に言うお姫様抱っこで夕映を抱えあげたアックマン

夕映の部屋に向かって移動するさよを追って部屋を出た

そして、さっきまで試験が行われていた部屋には、占いババと朝倉の二人だけ

「……おぬしは行かんでいいのか？」

「いやほら、まだちゃんと占ってもらってないし」

「……一応夕映は成功したぞ？ならもうワシに占う義務はない」

「ええ！？」

元気なのどかの顔のアップ映像

それだけで満足出来るわけがなかった

朝倉（＋他のみんな）が求めていたのはもっと有力な情報

現在いる場所、今の状況

そういったものを当然ながら所望していた

「……冗談じゃよ、ホレ」

「ん？何これ？」

朝倉が占いババから受け取ったのは一枚のポスター

そこには、明日行われる武道大会のことが書かれていた

「……天下一大武道会？」

「おぬしらの仲間はそこにやって来る、夕映に箒にでも乗せてもらって行ってくるといいじゃろう」

すると、朝倉に一つ疑問がわいた

「……今こうして自信持って言ってるってことは、もう占っててそう結果が出たわけ？」

「そうじゃよ」

「てことは、夕映っちが失敗するだろうと思ってやったってこと？」

自分の弟子を信用してなかったのか？

そう疑念を抱いた朝倉だったが、返ってきた答えは意外なものであった

「いや、あの時は夕映を弟子に取るなんて微塵も思ってなかったゾイ」

「え？」

ちょっと待てよ、と頭を整理する朝倉

夕映が占いババの弟子になったのは初日の夜

自分達が働き出してから夜までは、占いババはずっと仕事をしていた

ということは……

「……占ったのは、私達が気絶してた間？」

「ご名答」

ニヤリと笑って占いババは答えた

「館の手伝いが足らなくてのう、助かったわい」

「……」

絶句の朝倉

（初めから全部、分かってたわけね……）

苦笑し、そう思う朝倉であった

「フォッフォッフォッフォ」

第２９話　頑張れ夕映！ババからの最終試験（後書き）

すいません！またアックマンです！！

出番は極力減らした（つもり）ものの、出さないと書きながら出すとは……

どうもアックマン好きが治りそうにありません（汗）

このままだとまた出してしまいそうです……

わかってるんですよ？アックマン出すとＰＶの伸びが落ちるってことは。

でも、どうにも止まらない自分がいますｏｒｚ

とりあえず大会には出しません！これだけは本当です！

……さて次回ですが、他のキャラ達の大会前夜の様子を、全部まとめて一話にいたします。

ネギ達や夕映達みたく文字数ないんですよね、以前も書きましたが。

次回は週末になるかと。

感想、質問、その他、ドシドシお待ちしています。

前回の話の後に水竜さんがくれた質問とか良かったですね、答え

がいありました。

ああいうの大歓迎ですのでホントに。

読んでて（返信してて）力が沸いてきます。

ではまた次回！

あ、そうそう、本編で夕映が使った呪文は作者のオリジナルです。

第３０話　それぞれの夜　ようやく出たぜ主人公！（前書き）

なんか思ったより早く原稿があがったので投稿します。書き溜め？そんなことはしませんよ、出来たらすぐ投稿が最近の主義です。

ではどうぞ！

第３０話　それぞれの夜　ようやく出たぜ主人公！

いよいよ明日は天下一大武道会

皆それぞれ、大会前の最後の夜を過ごしていた

～古達の場合～

「ごちそうさま」

「ごちそうさまアル！」

「お粗末さまでした」

五月の特製料理をほぼ同時に食べ終えた古とクリリン

綺麗に完食されており、五月は嬉しくて笑みを浮かべた

「それで古、今夜はどうする？」

「うーん、そうアルなー」

いつもならこの後、組手などの修行を再びみっちり行う二人

「……やめとくアルか？」

「そうだな、明日はいよいよ大会だし」

しかし、身体の休息を優先させ、やめることとした

「じゃ、風呂入ってもう寝るアルね」

「わかった、俺は後でいいから先入れよ」

「了解ネ！あ、あといつもの頼むアルなクリリン」

「おう」

振り向きざまにこう言うと、古は奥へと消えていった

そして、こう言われたクリリンは

（ジーーーッ）

「……クリリン、ワシちょっとおしっこ」

「ダメです、っていうか少し前に行きましたよね？」

「頻尿じゃよ頻尿、ほらワシもう齢じゃし」

「嘘はやめてください」

「うっ！」

「古が風呂から出たら好きなだけどうぞ」

「……クリリンのケチ」

「ケチじゃないです」

「ちょっと位エエじゃろ？減るもんじゃないし……」

「犯罪ですよ」

風呂へと続く廊下の前で通せんぼし、亀仙人の監視を行っていた

～のどか達の場合～

「それじゃあおやすみ、のどか、ハルナ」

「お、おやすみなさい」

「おやすみなさーい」

バタンと閉まるドア

ブルマに寝る前の挨拶を済ますと、部屋にはのどかとハルナの二人のみ

葉加瀬はブリーフと共に研究室に篭り、まだ出てこない

下手すると部屋には戻らず、研究室の方で寝るだろう

トランクスの方も、明日に備えてもう睡眠中だ

「じゃ、私達だけで先に寝とこっか」

「う、うん」

部屋の電気を消してベッドに入り、天井を見上げた

「あたたたっ！」

「ハルナ、まだ痛むの？」

「ちょっとだけね、一晩寝れば回復するから心配しないで」

「そ、そう？」

身体を寝かす際声が漏れたハルナ

以前も説明したが、ハルナはゴーレムがダメージを受けると1%だけ本人も喰らってしまう

トランクスが修行に加わったことでそれはより激しくなり、最近では湿布が必需品になっている

「ヤムチャさんはまだしも、トランクスさんあれで手抜いてんだもんねー」

「すごいよね……」

先週からのどかも、アーティファクトを使って修行の手伝いをしている

それとの連係で生み出したハルナのゴーレムは、どれもかなりの出来であった

「……ハルナ、明日ネギ先生達に会えるかな？」

「……」

「私は絶対会えるって信じてる。根拠は無いんだけど、そんな気がするの」

「……」

「ハルナ？」

返事が返ってこず、顔を横に向けてみるのどか

「グガーー」

（あ、もう寝ちゃったんだ……）

今日は大会前日で気合入ってたからなー、と心の中で納得する

（ハルナ見てたら、私も眠くなってき……スーー）

後を追うようにして、のどかも夢の世界へと入っていった

「むにゃむにゃ、ネギせんせー……」

～アスナ達の場合～

ビュッ！ビュンッ！

風を切る音

それと共に放たれる拳と蹴り

真っ暗な森の中、延々とそれを続ける少女がいた

「フッ！フッ！」

口からこぼれる短い呼吸音

額からは健康的な汗が流れていた

「アスナ、まだ起きてたのか……」

「フッ！あ、天津飯さん」

少女、アスナの元へ近づく天津飯

そんな彼の表情は、やれやれと言わんばかりのものだった

「いい加減もう寝ろ、明日は大会だぞ」

「すいません……でも全然寝れなくって」

既にまき絵と餃子は就寝、毛布にくるまってスヤスヤと眠っている

「……仲間達に会えるかどうか不安なのか？」

「それもあるんですけど……その、ワクワクしちゃって」

「ワクワク？」

「はい、その大会って天津飯さん達の知り合いも参加するんですよね？」

「ああ、多分だがな」

「なんていうか、他の強い人達とも戦えるんだなぁって思っちゃったら……」

なんだか古ちゃんみたいになったな、と心の中で呟いてみるアスナ

フッ、と天津飯から笑みがこぼれた

「そうか、なら怪我しない程度にやれよ。俺はもう先に寝る」

「あ、はい、おやすみなさい」

アスナに背を向け、天津飯は餃子達の所へと戻っていった

再び一人になったアスナ

拳を強く握り締め、空を見上げた

(ネギ、絶対来なさいよ……そんでもってビックリさせてやるんだから!)

その後、アスナは自主トレを小一時間ほどして眠りについた

ちなみに、

「う、うーん……」

「へへへー、ネギくーん……」

その夜餃子は寝ぼけたまき絵に抱き枕にされ、寝苦しい夜を送ったという

～千雨達の場合～

「では千雨さん、おやすみなさい」

「ああ」

ここは住み込みの千雨達二人に与えられた、サタンの屋敷の離れの寝室

今日の仕事を終え、千雨は布団の中で眠りにつこうとしていた

「で、そっちはまた稽古か？」

「はい」

「茶々丸ー！早くー！先行ってるわよー！」

ドアの入口で茶々丸を呼ぶ少女、ビーデル

あの日以降、茶々丸はビーデルに毎日稽古をつけていた

茶々丸の教えがいいのか、ビーデルの才能なのか、腕はみるみる上達していった

そのことがかなり嬉しいようで、最近では深夜でも稽古をするようになっていた

『他の人にバレないようにする』という点ではピッタリの時間帯なので、茶々丸としても苦ではない

また、千雨に稽古のことは初日の段階で話していた

「はい、ただいま参ります」

ビーデルの後を追う茶々丸

千雨の方に振り返って一回お辞儀をすると、バタンとドアを閉めた

閉めた後は早足ですぐに追いついた

「……茶々丸、あの件だけどいいわよね？」

「え？ですからそれは無理だと昨日から……」

「いいからしなさい、命令よ命令」

他の使用人に気づかれぬよう、こっそり言葉を交わす二人

「大丈夫、私にちゃんと考えがあるから」

「……大丈夫なんですよね？」

「任せなさい」

不安そうにする茶々丸

それに対して、ビーデルは自信満々の顔で言い放つ

「先にまず稽古よ、どんどん頑張って茶々丸みたいになってやるんだから」

「そうですね」

にっこりと微笑む茶々丸

（ですが、本当に大丈夫なのでしょうか？ビーデル様を疑うわけではないのですが……）

一抹の不安を残しつつ、茶々丸はビーデルの後を追ってトレーニングルームへと向かった

～孫悟空の場合～

「おんや、もう寝るのか？」

あの世のとある一エリア

そこでいつも夜遅くまで修行しているある親しい戦士の様子を見ようと、やって来た者がいた

全身水色でサングラスをかけた、ゴキ〇リのような触角を持つ人物

地球を始めとする北の銀河を統括する者、北の界王である

だが既にその戦士は修行を切り上げ、自らの寝床へと戻ろうとしていた

山吹色の道着に青の帯

髪の毛はツンツンとしていて、黒髪だった

「いつもならもっとしてるじゃろ？悟空」

ようやく本編初登場

忘れかけられていた主人公、孫悟空であった

「だって界王様、明日はいよいよ天下一大武道会じゃねえか」

「じゃが、お主は出られんのだぞ？」

一年前、セルの自爆によって生を奪われた悟空（＋界王とバブルスとグレゴリー）

死人である悟空はもう、この世に戻ることは許されない

「わかってるさ。でもよー、寝坊しちまって見逃しちまうのはオラやっぱやだぞ」

あの世からでも専用のテレビなどを使って、この世の様子を見ることができる

トランクスが未来から再びやって来て、大会に出ることももちろん知っていた

「悟飯とトランクスの戦いは、きっとスゲーもんになるからな」

「ホッホッホ、悟空らしいのう」

「それに、別次元の地球から来たっていうあいつらもかなりのもんだ。悟飯やトランクスには勝てねーにしても、おもしれー戦いになるはずだ」

きっとオラの知る中じゃ、この世で最高の武道大会になるな、と胸を躍らせていた

界王もウムウムと同意する

「悟飯達もあやつらに刺激され、頑張っとるからのう」

「そういや界王様、最近パイクーハンとこで修行してるあの子はどうすんだ？出んのか？」

パイクーハン、あの世での悟空のライバルである

西の銀河では英雄と称えられ、あの世でもかなりのベテランの戦士だ

一年前行われたあの世一武道会では、決勝戦で悟空と互角の勝負を見せ、引き分けたほどだ

「いや、出んみたいじゃぞ。パイクーハンがそう言っとった」

「え！？何でだよ！？」

「勝ち目がない大会に出るくらいならこっちで修行してたほうがいい、みたいなことを言ったそうじゃ」

「そっかぁ……」

やや残念そうな顔をする悟空

だが、

「ま、あいつがそう言うならしょうがねえか！」

と、すぐに気を取り直して舞空術で浮上した

「界王様、もしこれでも早く起きれなかったら起こしてくれよな」

「わかったわかった、安心して眠れ」

「サンキュー！じゃ、おっやすみー」

ビューンと飛んでいく悟空

すぐにその姿は見えなくなった

あと半日もしないうちに始まる天下一大武道会

悟空がこの世最高の武道大会と評するこの大会で、いったいどんなドラマが待ち受けるのか

それは、悟空を始め誰一人として知る由はなかった

第３０話　それぞれの夜　ようやく出たぜ主人公！（後書き）

ちょっと短めでしたがいかがだったでしょうか？

はい、ついに出ました主人公！

ホントは大会編に入るまで登場させない予定だったんですけどね。

文字数があまりにも足らなかったため急遽登場です。

あと、今回かなり伏線を出しましたね、今までにない位。

回収しますよもちろん、ちゃんと考えてますから。

さて、次回からいよいよ大会編に突入です！

ちょうど３０話になったのは偶然です、狙ってはいません。

それに伴って、募集していた対戦カードのリクも締め切ります。

結局一件も来ませんでしたが……まあ覚悟はしてましたよ、一応。

ちゃんと決めましたから、自分で。

だからご心配なく、それを考えてペースが遅く……にはなりませんので。

感想、質問、突っ込み等々随時お待ちしています。

ではまた次回！

第３１話　ついにこの日がやって来た！再会する仲間達？（前書き）

なぜか原稿のペースが速くなってきました、テスト前なのに。こんなペースの投稿は連載初期以来ですね、流石に二話同時掲載は無理かと思いますが。

さて、今回いつもの原稿用紙方式（原稿用紙に文章を書いたあと、パソコンで校正しながら打ち直す）をしなかったせいか、文量がかなり多くなりました。番外編を除けばおそらく最長です、中身は相変わらずですが。

ではどうぞ！

第３１話　ついにこの日がやって来た！再会する仲間達？

海上に浮かぶ一つの島

カメハウスが建っている島とは比べ物にならないほどの大きさ

天下一大武道会が行われる会場、『バトルアイランド』である

今日はいよいよその天下一大武道会の開催日なのだ

といっても、島には多くの人は見られない

予選のスタートまではまだかなりの時間があった

来ているのは大会の役員等の関係者が殆どだ

そんな閑散としている島に、二人の男女が降り立った

両者とも身長は同じくらいで一五〇センチ程

また、胸に亀の字が入ったお揃いの山吹色の道着を着ていた

「アイヤー、やぱりまだ人少ないアルなー」

辺りを見渡す少女、古

「やっぱり早く来すぎたかな？」

そんな古の横で、同じく確認するクリリン

「まあ早いにこしたことはないアルよ、それより早く受け付けアル！」

「そうだな」

島に来たことで、さらにテンションが上がる古

会場の受付まで歩を進める二人

しかし、本当に早く来すぎてしまったようだ

辺りには選手らしき者は一人も見当たらない

ひょっとして自分達が一番乗りしてしまったのだろうか、と思ったほどだ

行ってみると既に受付は開いており、すぐに済ませた

「クリリン選手と古選手ですね、では予選番号カードをお受け取りください」

受付の男はそう言うと、二人にそれぞれ一枚づつカードを手渡した

「予選番号カード？」

「何アルかそれ？」

受け取ってカードを見ると、白い紙に赤い字で『３』、『４』と数字が書かれていた

「大会の予選の際に必要なカードですので、なくさないようにお願いします」

「ふーん……あれ？この数字ってひょっとして来た順？」

「ホントだ、続き番号アルね」

「そうですよ。あなた方の少し前に二人、受付した方がいらっしゃいます」

一番乗りではなかったか、と少し残念がる二人

と同時に、その先にやって来た二人というのに興味が沸いてきた

「その二人って、もう控え室に入りました？」

「いえ、島を少し廻ってみると言って連れの方とあちらへ」

受付の男が、向かって左を指差す

「俺達も行ってみるか？古」

「面白そうアルね、私も観光したいアル！」

まだ予選まで時間はかなりある

亀仙人達は少し遅れてから来ると言っていたから、それまで楽しむのも一興だろう

「時間までには、控え室に入るようにしてくださいよ？」

「了解了解、行くぞ古」

「らじゃアル！」

男の指差した方へ向かって、やや駆け足で向かう二人であった

「わー、綺麗なところアルなー」

「ほんとほんと、カメハウスの島とは大違いだぜ」

会場から離れた所で観光を楽しむクリリンと古

辺りは自然に囲まれており、二人の心を癒していた

「でも受付の人が言てた二人、見つからないアルなー」

「だよなー、どこにいんだろ？」

かれこれ十数分は辺りを歩いているが、まだそれらしき人物には

出会えていない

もう会場に戻っているのだろうかと思ってきた

でもまあ、辺りを見て回るのも悪くはないので、そのまま進んでいく

すると

「ん？何アルか？」

前方から声がしてきた

声からして少女のようだ

「……ナー、……さーん、どこー？」

「あの声は！」

「お、おい！古！」

声のほうへ駆け出す古

声に聞き覚えがあった

授業のとき、補習のとき、かれこれ二年以上この声を聞いている

間違いない、あの声は……

「まき絵！」

「く、くーふぇ!?」

バカピンク、佐々木まき絵だ

見事に的中

まき絵は突然の古の登場に面食らっている

「やっぱりまき絵だたカ!」

「くーふぇも来てたの!?」

「おい古ったら!ん?誰だその子?」

古に追いついたクリリン

すぐにまき絵の存在に気づき、古に尋ねた

「クラスメイトのまき絵アルよ!」

「ああ!お前が話してた……」

うんうんと頷く

「えっと、そっちの人は?くーふぇ」

「クリリンアル、私とサツキがお世話になてるアルよ」

「そうなんだー、え?さっちゃんも一緒なの?」

「少し遅れて来るアル。というかまき絵、さっき誰か探してなかたアルか？」

ハッ！となのかを思い出すまき絵

「そうだったそうだった！私アスナ達とはぐれちゃったんだ！」

「ナヌ、アスナも来てるアルか！」

「うん、ちょっと離れてたらいつの間にか見失っちゃって……」

探しているうちにここが何処かも分かんなくなったの……とやや半べそ気味になる

「私もアスナ達みたいに、空とか飛べたら楽に探せたんだけどね」

「え！？」

まき絵の言葉に驚くクリリン

アスナ（古の知り合い）が空を飛べる？

「古、アスナっていう子は元々空が飛べたりとかするのか？」

古に確認を取ってみたが、フルフルと首を振った

まあ、大方そんなことだろうとは予想はついていた

だが、それはそれで別の疑問が浮かび上がる

誰が飛び方を教えたかだ

クリリンなどが使う舞空術は、一般人では習得はまず不可能

地球内で飛べる者がいたら、まずクリリンの知ってる奴である

「えっと、そのアスナって子に飛び方を教えたの誰？」

まき絵に訊くクリリン

このとき同時に、彼はある心配をしていた

教えたのが悟飯やピッコロだったらどうしよう、と

ここに来ているということは、まず間違いなく参加が目的だろう

そうすれば優勝は絶望的、賞金や温泉旅行が露と消える

（あいつらじゃありませんように！あいつらじゃありませんように！）

「天津飯さんって人、目が三つあるんだけど知ってる？」

「天津飯！？」

これはクリリンにとって予想外の回答

彼の考える可能性としては悟飯かピッコロかヤムチャ、この三人が濃厚だった

ベジータは悟空が死んでから塞ぎ込んでるし、第一天津飯は

『もう、みんなに会うことはないだろう』

とまで言っていたのだ、可能性からは消去するのは当然だ

「天津飯がこの大会に!?」

「う、うん、アスナと一緒に参加するみたい」

そうと決まればすることは一つ

「……あった!」

天津飯の気を探り、すぐに発見した

また、彼の以外にも二つの気

一つは餃子、残った一つがアスナの気だろうと推測した

「というか、始めから気を探って探したほうが良くなかたアルか?」

古の突っ込みにギクリとしつつも、クリリンはある一方向を指差した

「あ、あっちだ!行こう!」

「無視アルか……」

「あ！待って待って！」

そのまま指差した方向へ向かうクリリンを、古、まき絵の順で追っていった

「やっぱりまきちゃん、会場のほうにも戻ってませんね」

「ああ、いったいどこに行ったんだか……」

「まき絵の気、小さくて探すの難しい」

場所は変わって大会会場の入口

まき絵の不在に、大分時間が経ってから気がついた一同

近くを探してみたが見当たらず、元の会場方面に足を運んでいた

アスナがはぐれたのだったらまだ楽だが、まき絵の場合はやや大変

餃子が言うように、まき絵の気はアスナのそれと違って微量

より神経を研ぎ澄ませて探さなくてはならない

「ひょっとして、まださっきの所にいるんじゃ……」

「十分有りえるな……よし、餃子はここに残れ、俺達二人でさっきの場所を探してみる」

「わかった」

ここにやって来ることを想定し、餃子を残らせる天津飯

早速向かおうとしたその時

「アスナーー！天津飯さーーん！」

探そうとしていた人物の声が耳に入った

「もうまきちゃん、心配したじゃ……ああっ！」

「どうしたアス……！」

その方へと顔を向け、アスナと天津飯は驚きの表情を見せる

「くーちゃん！」

「ク、クリリン！」

やって来たのはまき絵一人ではなかった

アスナにとっては、まき絵とは違う意味で捜し求めてた人物

天津飯にとっては、『うわ、やっぱり来てたよ』みたいな感じの人物であった

まき絵と共にその二人も、アスナ達の前まで来ると立ち止まった

「久しぶりアルなアスナ」

「くーちゃんこそ！今までどこで何してたのよ！」

「私はこの大会へ向けてミッチリ修行だたアル、見たところアスナもそうみたいアルね？」

以前とは違うアスナの雰囲気を察知した古

もし大会で拳を交えることになったら……

そう思ったら、何だか胸の内からワクワクしてきた

「何だよ天津飯、もう会うことはないとか言っといて」

「いや、みんなに会うのが目的で出たわけじゃない。ただ純粋に、修行の成果を試したくてな」

「それって結局、俺らが出てなきゃ試せないじゃん？」

「……まあそういうことだな。やはり今一度、お前達の顔が見たくなった」

そっか、とクリリンは嬉しそうに答えた

「そういや、今回餃子は出ないみたいだな？」

「今回は僕、天さんとアスナの応援に専念する。天さん達に変な心配掛けたくない」

「そっか」

「そういえばクリリン、他のみんなは来るのか？」

天津飯の質問にクリリンは、さあね、とジェスチャーで示す

「最近そこまで俺も会ってないからな、出来ればヤムチャさん以外は来てほしくない」

「ということは、そっちは賞金目当てか」

言うまでもない事実

クリリンは、そりゃそうだろと答えを返した

「じゃあそっちは狙ってないってのかよ？」

「あくまで腕試しのために参加したんだ、賞金は二の次さ」

「へーー」

自分もそんな頃があったなー、と思い出す

思えば、過去に参加した天下一武道会もそんな感じだった

自分の腕を試したい、そして勝って心の底から喜びたい

純粋に強さを求め続けていた

だが徐々に戦いを重ねるにつれ、心の片隅で『諦め』という感情が出来ていた

出来る限りの鍛錬はした、でも報われない

時には仲間の足を引っ張ったりもしていた

今回の参加だって、悟飯達が出てなかったらラッキー、という優勝賞金目当てのもと参加した

断じて腕試しなどではなかった

つまりは、あいつらには絶対勝てっこないんだという諦めである

一応修行したのは、実力の近いヤムチャ等の参加を見越してのことだが古と修行を重ねるうちに、それはやや改善されつつあった

まだ強くなれる余地はある、まだ頑張れる、と

それでもまだ、悟飯達が出ませんようにと消極的なことを願ったりはしていた

ところが天津飯は違った

ただ純粋に腕試し

ただ自分の強さを試したい

あの若き頃のまま、強さをただただ求め続けたあの頃のまま

変わっていなかったのだ

（こいつは生涯、武道家として生き、武道家として生を全うするんだろうな……）

「どうした？クリリン」

「……いや、なんでもない」

「？」

首をかしげる天津飯

すると、静かだった島内から少しずつ賑やかな声が聞こえてきた

彼らがこのバトルアイランドに来てから、それなりの時間が経っていた

「天さん、人が増えてきた」

「そうみたいだな……クリリン、積もる話は中でしないか？」

「おう」

「私たちも入るアルか」

「そうね。まきちゃん、今のうちに餃子さんと席取っといたら？」

「うん、そうするよ」

アスナに言われ、まき絵は一般者入り口へと走っていく

「あ、まき絵待って！」

餃子も飛んであとを追った

四人は、まき絵達とは別の選手用の入口から入っていった

係員にカードを見せて名前を言い、奥の控え室へと通された

クリリンと天津飯は控え室Ａに

古とアスナは女性ということで控え室Ｂに

「ありゃ？誰もいないアルね」

案内された控え室Ｂに入った古とアスナ

中はかなり広く、ロッカーや椅子などがたくさん用意されていた

また作って間もないのか、どこもかしこもピカピカになっていた

しかし、他の選手の姿は見られない

「女性での参加って私達だけなのかしらね？」

　考えてみれば、全世界から腕に覚えのある者達ばかりが集まるこの大会

アスナ達のように、女性が参加というのは珍しいことなのであろう

「まあ、予選開始までそれなりに時間はあるわけアルし、まだ来るかもしれないアル」

「そうね。でも、何だか貸切みたいでいい気分よね」

「全くアルな……あ！飲み物アル！」

何かに気づき、古が奥を指差す

そこには、ファミレス等によくあるドリンクバーの機械が数台設置されていた

「ホントだ、飲めるのかしら？」

近づいて確認してみる二人

よく見るとどの台にも、『選手の方はご自由にお飲みください』と貼り紙がしてあった

「へー、気前いいわねー」

「飲んでみるアルか」

近くのテーブルに置かれていたプラスチックのコップを手に取り、飲み物を入れた

ちなみに、アスナはオレンジジュースで古は烏龍茶

ゴクゴクと飲んでいき、ほぼ同時に飲み終えた

「プハーー、美味いわねーこれ」

「私もう一杯飲むアル」

再びコップに烏龍茶を入れ、口に当てて飲んでいく

そんな時、アスナはふと思った疑問を口に出した

「ねえくーちゃん、何でさっきのクリリンとかいう人とペアルックなんかしてんの？」

「！！」

ブーーーー！！

口に入っていた烏龍茶が凄まじい勢いて噴出した

顔を赤く染め、ゲホゲホとむせあがった

その古の反応に、アスナは驚きを見せた

「だ、大丈夫!?」

「ゲホッゲホッ……へ、平気アル……それと、これペアルックと違うアルよ」

すぐに呼吸を整え、古はアスナの発言を訂正する

「これは、この世界にある武術の流派の道着アルよ……」

「へ？あ、そっかー！よく考えたら普通そうよね」

「全く……も少し頭使うアルよアスナ」

そう言いながら古は、控え室に置いてあったタオルで床を拭いていく

くーちゃんには言われたくないんだけど、と思いつつも、アスナも拭くのを手伝う

（ペアルックアルか……まあ、お揃いといえばお揃いアルが……）

そういえば、この道着に初めて袖を通した三日前

クリリンとお揃いアルー、とキャイキャイはしゃいでた自分を思い出す

あの時は、ペアルックなんて単語は頭に出てこなかった

（でも、そう思われるのも……悪くはないかもアル……）

「え？なんか言った？」

「な、何でもないアル！」

首をブンブンと振って否定し、そのまま拭くのを続けた

古は顔は床の方に向けていたので、アスナはこのときの彼女の表情が見えなかった

そのとき、古の顔はもうむせてはいなかったのに、やや赤くなっていた

第３１話　ついにこの日がやって来た！再会する仲間達？（後書き）

いかがでしたでしょうか？

受付とかカードとか控え室とか、全部作者の想像です。

だって映画に描写がないんだもん（笑）！

あと、まき絵はアスナがおぶって運びました、カリン塔の際と同じく。

残りの疑問は感想の方でお答えしたいと思います。

エヴァ
「ようするに作者は感想や質問が欲しいんだよ、たくさん」

……そういうことなんです。

やっぱり二、三週間に一件は寂しいんです（涙）

基本、半日以内には返事を返したいと思ってます。

感想とか質問とかリクエストとか、あと突っ込みやご指摘なども大歓迎なので。

送っていただけると嬉しいです、お待ちしています。

ではまた次回！

あ、そういえば古の声優さん代わるそうですね。

ちょっと寂しかったりする作者です。

エヴァ

「本編関係ねえし！」

第３２話　ついにこの日がやって来た！再会する仲間達？（前書き）

やっぱり反動来ちゃいました……一日空け一日空けで次が四日空けとは……まあまた中身は多めに出来ました。その点だけが唯一の救いかと。

ではどうぞ！

第３２話　ついにこの日がやって来た！再会する仲間達？

「なあ悟飯、バトルアイランドってとこにはまだ着かへんのか？」

「もうちょっとのはずなんだけど……」

天下一大武道会会場、バトルアイランド目指して飛ぶ者が七名

悟飯、ネギ、コタロー、あやか、ピッコロ、刹那、楓である

カモはいつも通りネギの肩に乗り、木乃香は刹那の背中の上

精神と時の部屋の修行を終えたネギ達は、戻ってきた悟飯と合流

そのまま家に帰り、休息に入った

一方のピッコロ達も、ネギ達の修行が終了すると共に元の寝床へ帰還

修行と呼べるようなことは何一つせず、就寝した

そして今日の朝、再びピッコロ達の所に集合し、こうして会場へと飛行している

「大勢の気が前方に感じられる、この方向で合ってるだろう」

つまりは、このまま飛んでいればいずれは着くのだということ

ピッコロの言葉に、一同は同意する

「あ、そういえばいいんちょさん、もうお身体は大丈夫ですか？」

「ご心配なくネギ先生、もうすっかり良くなりましたわ」

「にしても情けないなーあやか姉ちゃん、たった一月半でリタイヤやもん」

「コタロー君！」

コタローの言い方にネギが叱咤する

ネギ達が修行に使った精神と時の部屋

その部屋の特徴は、時間の流れの遅さや高重力だけではない

酸素濃度の低さも外の比ではなく、内部の気温は炎天下から氷点下まで著しく変わるのだ

ネギとコタローは、魔力や気のコントロールで何とか凌ぐことが出来た

だが、あやかにはまだ早すぎた

初期の頃は何とかネギの笑顔から力を貰って頑張ったが、流石にそれだけではもたず

結果、環境変化に耐え切れず一月半でダウンしてしまった

ネギ達に部屋の外まで運んでもらった後は、ミスター・ポポに神

殿内のベッドまで連れてもらった

本当はデンデの治癒能力で治してもらった方が早かったのだが、
あやかはそれを拒否した

彼女曰く、自分のふがいなさの結果なのだからお気遣いは無用、
とのこと

まあ命に関わるほどではなかったので、デンデとポポはそのまま
寝かせることにした

そしてネギ達の修行が終了後、何とか自力で飛んで家まで戻り、
一晩寝て今に至る

「いいんですわネギ先生、本当のことですもの」

「いいんちょさん……」

「それに、私なりには充分な修行が出来ましたもの」

今回あやかも、大会への参加を表明している

打倒アスナの思いもそうだが、やはり自分でも知りたかった

どこまで強くなれたのかを

「兄貴兄貴！バトルアイランドってあれのことじゃねぇですかい？」

すると、カモが突然前方を指差した

そこには巨大な島が見えた

「あ、ホントだ！」

「よっし、どっちが先に着くか競争や！ネギ！」

コタローはスピードを上げ、ネギ達を突き放す

それに慌てて、ネギも追いかける

「ま、待ってよコタロー君！」

「あ、兄貴兄貴！これ以上速いのタンマ！落ちる落ちる！」

「あ、ごめんカモ君」

カモの声に気づき、ネギは自身の服のポケットにカモを突っ込む

「待ってったらーー！」

そしてすぐさま気を取り直し、コタローを追った

「ったく、やっぱりまだまだガキだな」

「ネギ君達僕と同い年ですよ？ピッコロさん」

ピッコロと悟飯もスピードをやや上げ、二人を追う

「ああ、ネギ先生お待ちになってーー！」

あやかもネギを見失わないよう、全速力で飛ばす

「いいんちょ殿、あんなに飛ばして大丈夫でござろうか？」

「お嬢様、しっかり？まっててくださいね」

「了解や」

ギュウウウウッ

「！！」

刹那と楓はやや加速して、悟飯達の後ろにつくような形で飛行した

「うわーー、たくさん人が来てるわねーー」

バトルアイランド島内

古達が来たときとは違い、既に多くの人で賑わっていた

選手として来る者、観客として来る者、取材に来る者

そのうちの観客として来た者、ブルマが先ほどのように感想を述べた

「あ、あの、ブルマさん……」

「どうしたの？のどか」

ブルマがのどかの方を見ると、のどかはある一点を震えながら見ていた

「二足歩行の犬さんが服着て歩いてるんですけど……」

そんなのどかの言葉に、ブルマはきょとんとした表情になる

「え？そんなの普通のことじゃない。のどか達の地球にはいないの？」

「いませんよそんなの……」

喋る動物がいるというのは、ヤムチャのとこのプーアルに会って知っていた

しかし、ああして人間のように普通に歩いている動物のことはまだ知らなかった

「へー、そうなの……あら、ハルナは全然平気みたいじゃない」

見ると、ハルナは普通に辺りをキョロキョロと見渡していた

ブルマの声を聞くとハルナは振り返り、

「え？ああ、私は前に一回見てますから」

と、一言答えた

どうもヤムチャと修行していた最初の頃、修行場所を通りかかった獣人に会っていたらしい

「ふーん」

「では母さん、僕達は受付を済ませて控え室に入ってますから」

「頑張ってね、トランクス」

「はい。さ、ヤムチャさん、行きましょう」

「おう！」

ブルマの激励を受け、一層やる気が上がるトランクス

ヤムチャを呼びかけ、受付に向かった

ヤムチャの方もやる気は充分の様子

「……それにしてもヤムチャ、トランクスが来たばっかりの頃とは大違いね」

「それはまあ、ブルマさんのあの言葉がありましたから……」

のどかはちょうど六日前のことを思い出す

トランクスの参加が決まったことによって、完全にヤムチャはやる気を無くしてしまっていた

ハルナやトランクスが『修行しましょうよ』と呼びかけても、まるで意思を見せないでいた

ハルナとしてはヤムチャが加わってくれないと、一人でトランクスの相手をすることになってつらい

トランクスとしても、やはりゴーレムだけでなく生身の相手とも戦いたい

そこで二人はブルマに相談すると、彼女はヤムチャにこう言った

「もし修行に参加して、トランクスとあんたが大会でワンツー取ったら賞金の方はやるわよ」

効果はてきめんだった

すぐさまヤムチャは目を輝かしてハルナ達の方を振り向き、

「おい、何やってんだ！早く修行を始めるぞ！」

と、さっきとは打って変わってやる気を見せるセリフを言った

その場にちょうど居合わせていたのどかも、この光景は目撃していた

「ま、あいつの参加目的は金だったわけだしね」

「ブルマさん、ヤムチャさんのこと随分分かってるんですね……」

「そりゃそうよ、あいつの元カノだもの」

「あはは……」

苦笑するのどか

このことは二日目か三日目辺りに、既にブルマの口から聞かされていた

受付に向かう二人の背中を見るのどかとブルマ

すると、のどかの身体を反射的に動かす出来事が起こった

「のどかさん！」

「え？」

後ろからの声に、のどかは反射的に後ろを振り返った

突然聞こえたからというよりは、その声自体に原因があった

しばらく直接聞けていなかったあの声

寝る前にはいつも思い出していたあの声

夢にも何回か出てきたあの声

聞き間違えるはずがない

第一、その声は自分のことを呼んだのだ

彼でなければ誰だというのだ

そう思って向いたのどかの目には予想してた通りの、待ち望んでいた者の姿が映しだされた

「ネギ先生！」

のどかの想い人、ネギ・スプリングフィールド

彼は間違いなくのどかの名を呼び、こちらへ走ってきていた

涙腺という名の涙のダムが決壊し、

「やっぱりのどかさんだ！良かった、無事だったんでうわわっ！？」

「ネギ先生ーー！」

ぽろぽろと大粒の涙を流したまま、目の前で立ち止まったネギに抱きついた

「本当に、本当に良かった……私、先生のこと、ずっと心配で心配で……」

さらに腕の力を強め、ネギを抱きしめていく

それは、彼女の全力をもった抱きしめだった

ネギは顔を赤らめつつも、何とかのどかに言葉を発した

「あの、の、のどかさん？お気持ちは嬉しいんですが、その……」

「？」

「みんなが見ていて、恥ずかしいです……」

「え？……！！」

顔を上げて辺りを確認したとたん、のどかの顔はとんでもなく紅潮した

彼女の後ろではハルナとブルマが、ニヤニヤしながら二人の様子を見ており

ネギの後ろでは楓、刹那、コタロー、木乃香、あやかの五人が同じく見ていた

ただしあやかだけは一同と違い、ネギにいきなり抱きついたのに対する嫉妬の念が感じられた

さらには名も知らぬ一般観光客にも何人か見られており、ようやく自分がした大胆さに気がついた

慌ててのどかは身体を離した

「す、すみません先生！いきなりこんなことしちゃって……」

「いえ、気にしてませんから。でも本当によかったです、ハルナさんも一緒だったんですね」

ネギは顔から純粋な笑みを浮かべ、今度はハルナに視線を移した

「まあね、あと葉加瀬も来てるのよ」

「葉加瀬さんも！？」

「今は一足先に客席の確保に行ってるわ」

ちなみに、それにはプーアルも同行している

「そっちはその六人で全員？」

「はい、親切な人に会ってそこで居候を……」

「へー奇遇ね、私達もそうなのよ。このブルマさんって人にお世話になってるの」

ハルナの言葉を受け、ネギはハルナの隣にいたブルマにぺこりと頭を下げた

「二週間もの間、僕の生徒達をありがとうございます」

「あら、随分礼儀正しい子ね……ん？僕の生徒？」

ネギの言葉に引っかかったブルマ

そういえばのどかが彼のことを『ネギ先生』と言ったのを思い出す

「あれ、言ってなかったっけ？ネギ君私達の先生なのよ、十歳だけど」

ハルナの説明に、ブルマは目を丸くした

「ええ！？こんなに可愛いのに！？」

「初めてネギ先生に会った人は、大体同じこと言いますよ」

へーー、と感心するブルマ

自分も天才少女と呼ばれていたが、流石に自分より年上に勉強を教えたりしたことはなかった

興味がないのもあったし、第一教えられる方も不満になるのが普通だ

しかし見たところ、彼女達はネギをちゃんと先生として受け入れているようだ

よほど努力しなければこうはなるまい

「へー、小さいのに頑張ってんのねー」

「ど、どうも……」

ブルマに頭をなでられ、照れるネギ

「ところでネギ君、そっちの居候先の人は？来てないの？」

「えっと……あ、来た来た、あの人達です」

走ってこちらにやってきたネギ達に遅れ、悟飯とピッコロもようやく到着した

と同時に、

「何だか随分賑やかだな、どうした？」

「あ！ひょっとしてあの子達が例の……」

受付を済ませたトランクスとヤムチャが、ブルマ達の辺りが賑やかなのが気になって戻ってきた

「他のみんなに会えたんだねネギ君、良かっ……ああっ！」

「ト、トランクス！」

「悟飯さん！それにピッコロさんも！」

「げげげっ！」

対面する四人、反応はそれぞれ違っていた

悟飯とトランクスは再び合えたことに対し喜び

ピッコロはトランクスの存在に驚きを隠せないでいた

驚きを隠せないという点ではヤムチャも同じだが、中身としては完全に別

会いたくなかったのに、という思いが全面に出た驚きである

さらには心の中で、ガーーーンという効果音まで響き渡る

「いつからこっちに？」

「一週間ほど前からです。今日まで大会に備えてヤムチャさん達と修行を」

「あの戦いが終わってからも、鍛錬は欠かしていないようだな」

「はい」

悟飯とピッコロのそれぞれの言葉に、トランクスはハキハキと答えた

「僕のいる未来では、戦士はもう僕だけなんですから」

彼のいる未来を守れるのは、彼一人のみ

ならば、より強くならなくてはならない、一人でも守れるために

トランクスの未来の悟飯が死んでから、ずっと心に決めていたことだ

それは人造人間達を倒してからも変わることのない、鋼のような決意

その決意が真(まこと)であるというのは、感じ取れる気で明らかである

セルとの戦いのときと比べ、格段に上がっていた

「俺達だけで上位を独占してやろうと思ったが、どうもそうはいかんらしいな」

「……その子達はピッコロさんが？」

続いてトランクスは、ネギ達に視線を移した

すぐにその、常人をはるかに超越した力を感じ取った

「まあな、だが単に基礎を叩き込んでやったに過ぎん。残りはこいつらの努力の成果だ」

「……この武道大会、面白くなりそうですね」

「同感だ」

互いに同じような笑みを浮かべる二人

すると、

『えー、受付締め切りまであと五分とさせていただきます、まだの方はお急ぎくださ い』

島全体に、係員からのアナウンスが流された

ネギ達が来た時間は、それなりにギリギリだったようだ

「ピッコロ殿、そろそろ受付をせねばまずいでござるよ」

「そのようだな」

ピッコロは楓に同意すると、一同を引き連れて受付へと向かう

ただし木乃香とカモだけはのどか達の方に合流した、選手でないからまあ当然なのだが

「兄貴、ファイトだぜ！」

「うん！」

握りこぶしを作って答えるネギ

「せっちゃん頑張ってな、ウチ応援しとるで」

「お嬢様……はい！頑張ります！」

木乃香に向かって力強く頷く刹那

心の中では歓喜のあまり、ちびせつながワーイワーイと飛び跳ねていたという

「先に控え室へ行っててくれトランクス、すぐに俺達も向かう」

「はい。じゃあ行きましょうか、ヤムチャさん」

「おおぅ……」

既に魂が抜けかけているヤムチャ

あららと言わんばかりにトランクスは苦笑する

「じゃあ母さん、僕達はこれで」

「優勝頂いちゃいなさいよ！」

「はい」

再び激励を受け、トランクスはヤムチャを引っ張りながら控え室へと向かった

「賞金が……賞金が……」

「……本当に来ないわね」

「そうアルな……」

控え室Bでは、アスナと古が暇をもてあそんでいた

締め切り五分前のアナウンスは控え室の中にも届いていた

しかしそうなっても、未だに女性参加者は影も形も見せない

「暇だし、クリリン達のとこにでも行ってみるアルか？」

「いや、それはやめとくわ。というか多分無理だし」

アスナは丁重に、古の提案を却下した

流石に知らない者もいる男だらけの控え室に乗り込むほど、アスナの神経は太くなかった

「でもやっぱり暇アルよ……ん？」

カツ　カツ　カツ　カツ

「足音？」

複数の足音がこちらに向かっていた

既に隣の控え室Ａはいっぱいで、それ以降の男性選手は控え室Ｃや控え室Ｄを使うはずである

ところが、それらはここや控え室Ａとは反対の方向にある

扉の目の前でその足音は止まり、係員と思われる人物の声が聞こえてきた

「では、こちらの控え室Ｂをお使いください。それではごゆっくり」

今度は一人分の足音が遠ざかっていく、係員が戻っていったのだろう

だが遠ざかっていったのは一人分、始めに聞こえたのは複数

（ということは……）

（私達以外にも女性選手が来たアルね！）

両者の予感は的中

ガチャッ

「さて、時間までゆっくり……ああっ！」

「あああああっ！」

しかもその人物は、

「アスナさん！」

「いいんちょ！」

アスナ達が探していた仲間達であった

第３２話　ついにこの日がやって来た！再会する仲間達？（後書き）

いかがでしたでしょうか？

なんか葉加瀬の出番全然なくね？と思った方スイマセン！

葉加瀬を中心としたストーリー作りはなかなか難しくて……

一応、大会終了後に出番はちゃんと設けておりますのでご勘弁を。

さて、次回はいよいよ予選に突入です。

といっても、予選ステージの選手の割り振りとルール説明が主ですが。

あと、総アクセス数２０万、ユニーク３万突破です！

本当にありがとうございます！感激です！

これからも頑張っていきますので、応援どうぞよろしく！

ではまた次回！

第３３話　ついにスタート！波乱の予感の大予選（前書き）

テスト勉強の合間を縫って、何とか書き上げました。文字数若干減りましたがご勘弁を。まあ、今までのを考えたら充分多い方ですがね。

ではどうぞ！

第３３話　ついにスタート！波乱の予感の大予選

「アスナさん！」

「いいんちょ！」

天下一大武道会　選手控え室Ｂ

今ここで、五人の同級生が二週間ぶりの再会を果たしていた

「アイヤー！いいんちょ来てたアルか、それに楓と刹那も」

「久しいでござるな、古」

「互いに無事で何よりだ」

楓や刹那から、僅かに笑みがこぼれる

「……古、腕を上げたでござるな」

「やっぱりわかたアルか？」

「それだけじゃないぞ楓、アスナさんも……」

「うむ」

対面してすぐ、楓と刹那はアスナ達の格段に上がった気を感じ取った

少なくとも、この世界に来たばかりの自分達をはるかに超えていた

「これは拙者達も油断できぬでござるな」

「よく言うアル、そっちはもっと強くなたみたいアルが？」

「おろろ？バレたでござるか？」

古もまた、楓達の気を感じ取ってそう確信した

おそらく真っ向から勝負したら勝ち目は薄いだろう

だがそれ以上に、ここまで強い相手と戦える機会があるのだ、と心を躍らせていた

「実は、こっちの世界で良い師に巡り合えたのでござるよ」

「その方も私達と同じく、この大会に参加している」

「アイヤー！もっと強いのが来てるアルか！？」

さらに胸の内から期待感があふれる古

「そっちも良い師に巡り合えたのでござろう？」

「まあそうアルな、といっても師匠兼弟子アルが」

「「？」」

古の言葉の意味が分からず、思わず首をかしげた二人

聞くところによると教えてもらっているのは気に関することで、体術は古の方が教えているらしい

また、一緒にこの大会にも参加しているとか

「……今着ている道着は、その御仁がくれたでござるか？」

「そうアル！亀仙流という流派の名誉ある道着アルよ！」

「亀仙流？悟飯さんが着ているのと同じだな……」

刹那がポツリと呟く

今回悟飯はピッコロがくれた魔族の服ではなく、亀仙流の道着で参加していた

出られないお父さんの分も頑張ってやるぞ、という気持ちの現れであった

「古、その人の名はなんというんだ？もしかしたら知ってるかもしれない」

「ありゃ？刹那達は亀仙流のこと知ってるアルか？」

「私達の師も亀仙流の者と密接な関係にあってな」

「時々話を聞いていたでござるよ」

ふーん、と古は納得し、自分の師匠兼弟子の名を口にした

「クリリンというアル」

「ほう、クリリン殿でござるか」

「やっぱり知ってたアルか？」

「うむ、気のコントロールにとても秀でた戦士だと申してたでござるな」

それを聞いて、思わず古の顔がにやけた

クリリンのことを褒められると、なぜだか自分も嬉しくなってくるようだ

そんな感じで三人が会話していると突然、

「えええええ！？魔法のことを知ったですって！？」

あやかとこれまでのことを話していたアスナが驚きの大声を上げた

三人もそちらへ顔を向ける

「ええ、ネギ先生から直接。さらには一緒の部屋で寝たり、共に修行をしたり……」

誇らしげにあやかは答える

一方のアスナは憤慨し、ひそめた眉を戻さぬまま懐からカードを取り出した

「あんのバカ……」

～控え室D～

「そうか……ネギ君も大変だったんだね」

「いえ、トランクスさん程ではないですよ。僕の場合は、お父さんが助けに来てくれましたから」

もうじき行われる予選の開始まで、中にいる選手達は最後の時間を過ごしていた

備え付けのジュースを飲んでくつろぐ者

瞑想して精神を統一する者

既に勝ち目のない大会だと分かり、戦意を喪失してボケーッとする者

知り合いと会話する者

ネギとトランクスは会話する者に該当した

先ほどの、『僕しか戦士は残ってない』というトランクスの言葉が気になり、ネギの方から話しかけた

初めは言うのをためらったトランクスだったが、ネギの真剣な眼差しを見て、結局は話すことにした

未来から来たというのはすぐに受け入れられたネギだったが、その後の話は想像を絶するものだった

Ｄｒ．ゲロが造り出した人造人間

それによって死んでいく仲間達

その中には、悟飯やピッコロの名までも上げられた

それを聞いて驚愕としたネギ

しかしそのあとすぐ、自分の身に起きた事件のことも包み隠さずトランクスに話した

自分も話さなくてはならない、ここまでつらいことを話させてしまったからには

そういった自責の念がネギの胸の内には起こっていた

ネギの経験した悲劇も、トランクスのそれに近いものがあった

突然の予期せぬ敵による襲来

自分が無力であるため役に立てず、ただただやられていく仲間達

こんな悲劇を経験しながらも、こうして元気に今を過ごしている

そんな二人もまた、近い者同士であった

「でも、ネギ君は強いよ。その時はまだ四歳だったんだろ？」

「はい、まあ……」

「僕は、物心がつく前と十四歳のときだった。君の方がよほどショックだったはずさ」

四歳といえば、物心がついて間もない頃

そんなネギの目には、あのときの悲劇はとても衝撃的だったはずだ

少なくとも、敵と戦う決心がとっくについていた十四歳のトランクスよりは

「……ありがとうございます、トランクスさん」

「いいんだよ別に。ネギ君が気にすることはないさ」

「……はい」

コクリと頷き、近くにあった椅子に座ろうとする

“こらっ！バカネギッ！”

「うわわっ！」

ところが、突如とてつもない大声が頭の中へと流れ込んできた

その大音量に驚き、椅子から転げ落ちるネギ

と同時に、その声の主にも驚いた

「ア、アスナさん！？」

“聞こえてんでしょ！返事しなさい！返事！”

ネギは慌てて、アスナのカードを取り出して額に当てた

「は、はいネギです」

“はいネギです、じゃないわよ！どんだけ心配したと思ってんの！？”

「ひっ！」

更なるアスナの怒号に、ネギは余計縮こまる

“しかもいいんちょに魔法のことバラして、色々巻き込んでるんですって！？何考えてんの！”

「すみません！すみません！」

電話越しで謝るサラリーマンのように、ネギはペコペコと頭を下げ続ける

この一連のことに、事情を全く知らないトランクスは首をひねるばかり

見るに耐えかね、近くでジュースを飲んでいたコタローが彼に近づき、説明した

「あれはな、カード使って自分の従者と連絡取ってんねん」

「従者？」

「ようするにパートナーやな、魔法使いの」

「あのカードでそんなことが出来るのかい？」

「そうみたいやで、俺は一枚も持ってへんけど」

「ふーん」

再びネギに視線を移す

「ですから、これにはちゃんと訳があって……」

“関係ないの！”

「はうっ！」

アスナの声はトランクス達には聞こえていない

だが、大声を上げてこの上なく怒っていることは容易に分かった

いつまで続くんだろうと、ネギに同情しながら見ていると

ピンポンパンポンピンポンパンポーン

『えー、ではただ今より、天下一大武道会の予選をとり行います』

全控え室を始めとして、会場全体にアナウンスが流れ始めた

『これよりルールの説明をいたしますが、一度きりしか言わないのでよく聞いていてください』

「あ、あのアスナさん、今からルール説明なので……」

恐る恐る念話を終わらせようとするネギ

“……わかったわよ。ただし、後でちゃんと話してもらうんだからね”

「は、はい……」

ネギは額からカードを離し、ホッと息をつく

「そんでネギ、アスナ姉ちゃん何やて？」

タイミングを見計らって、コタローがネギに話しかける

「いいんちょさんに魔法のことバレたの、すんごい怒られちゃった

……」

「あらら、そのことかいな……」

コタローもネギと同じく、ばつの悪そうな顔になってしまう

思えば、この件についてはコタロー自身にもかなり責任があると言わざるを得ない

『まず、予選の方法ですが……』

そんな二人に構わず、アナウンスはどんどん流れていく

聞き逃しては大変と、二人はすぐに気持ちを切り替えてアナウンスに耳を傾けた

『予選は八つのバトルステージを使ったバトルロイヤル形式です。今回の参加者は全部で二百八人、よって二十六人づつに分かれて戦っていただきます』

つまりは、本戦出場者はたったの八人ということだ

さらに、詳しいルールが述べられていく

『場外に落ちたり、気絶したり、降参した場合に負けとみなされます。また、武器を使用したり、相手を殺したりしてはいけません、即座に失格となります』

「ふーん、麻帆良武道会と大体同じやなー」

「そうだね、でもどうやって僕達を八つのブロックに分けるんだろう？」

いまさら選手全員を集めてくじを引くというのは、流石に効率が悪すぎるだろう

そう思っていると、さらに追加の説明が加えられる

『なお、選手達のブロックの割り振りですが、始めにお渡ししたカードを使います』

それを聞いて控え室の選手は皆、自分のカードを取り出した

『近くにあるスクリーンをご覧ください』

すると、壁にはめ込まれる形で設置されていた巨大スクリーンがいきなりパッと映った

選手達は一斉にそこへ近づいていく

出遅れてしまったネギ達だったが、選手達の後ろで舞空術を使って何とか見ることが出来た

ちなみに一般選手はスクリーンに釘付けのため、そのことに気づいてない

スクリーンには、八分割されたそれぞれの枠の中に所狭しと並ぶ数字が映し出されていた

数字は１から２０８、参加人数と同じである

また枠の上部にはそれぞれ、ＡからＨまでのアルファベットが書かれていた

『自分の数字がある所が、予選で戦うブロックとなります』

すぐさまネギ達は、自分達の数字を確認した

「……よかったー、予選でいきなりみんなと当たることはないみたい」

「俺もそうみたいや」

「僕も」

安堵するネギ、コタロー、悟飯

（ほう、予選でいきなりか……面白い）

ピッコロは一人、にやりと笑う

「トランクスさんは何番ですか？」

「１８８番だよ」

ネギがトランクスから番号を聞くと、三人は再び確認する

トランクとも当たることがないと分かると、三人は改めて安堵する

『ではこれより、係員がそれぞれのバトルステージへご案内いたし

ます』

ガチャ

「では選手の皆さん、こちらへどうぞ」

扉が開き、係員数名が一同を呼びかけた

ある者はやる気を露わにし、

またある者は胸の高まりを内に押さえ、

またある者は重い足取りで、控え室を出て行った

～控え室A～

ネギ達と同じく、スクリーンに映った番号を確認した二人

「とりあえず、古や天津飯達とは当たらないみたいだな」

「そのようだな、全員本戦へ進めればいいんだが……」

悟飯達が出ていたら厳しいだろうな、と天津飯は声を漏らした

それはクリリンにも聞こえ、顔をやや苦くさせた

「おいおい、それを言うのは無しだってば」

「はは、すまんすまん、では行くか」

「ああ」

拳をガツッとぶつけ、二人は意気揚々として控え室を出て行った

～控え室B～

「ワクワクしてきたでござるな、刹那」

「ああ、少し武者震いがしてきたよ」

腕をぐるぐる回しながら尋ねる楓に、刹那は拳を震わせながら答える

「さーて、いざ出発アルな！」

「そうね、予選なんかサクッと突破してやるわ」

「まあアスナさん、随分余裕ぶった物言いですわね？」

やる気を見せる二人

その内のアスナに、あやかはジトーッとした目で視線を向けた

「そりゃそうよ、あんたは知らないと思うけど、私すんごい特訓したんだからね」

「それは私も同じですわ。……学園祭での借り、今日こそ返して見せますわ！」

ビシッとアスナに指を差すあやか

スクリーンには、Ｆと書かれた枠にアスナの『２』とあやかの『２０５』の両方が映し出されていた

『ではご会場の皆様、お待たせいたしました！』

ワーーーーッと沸く会場

円を描くようにして設置された客席の中心には八つのバトルステージ

既に全二百八名の選手がそれぞれのブロックについていた

全員臨戦態勢

開始の合図を、今か今かと待っていた

それは観客もまた同じ

そして今、それが実況の口から告げられる

『天下一大武道会予選、スターーーーート！』

第３３話　ついにスタート！波乱の予感の大予選（後書き）

いかがだったでしょうか？

タイトルにスタートと書きながら、始まったのは正確にはラストから……

スイマセン（汗）

次回から一ブロックずつ、バトルの模様をお送りいたします。

一話丸ごとバトルというのは本当に久々なので、書けるか心配です（焦）

ご期待に沿える内容になるように頑張ります！

感想、質問、ご意見、お待ちしています。

ではまた次回！

第３４話　真の狼〈ウルフ〉はどちらだ！？決めろ！必殺の狼牙風風拳（前書き

いよいよ予選スタートです、タイトルで分かりますが今回はヤムチャです。彼の脱ヘタレはあるのか！？それは本編を読んでのお楽しみということで。

ではどうぞ！

第３４話　真の狼〈ウルフ〉はどちらだ！？決めろ！必殺の狼牙風風拳

ついに、開始の言葉が告げられた

一斉にぶつかり合う選手達

その迫力に歓声を上げる観客達

中でも、複数人を相手にしても次々となぎ倒していく一部の選手達の姿には、さらに歓声が上がった

それは言うまでもなく、ネギや悟飯達のことである

彼（彼女）らにどんどん倒されていき、どのブロックも残りは数名を残すのみとなっていた

～Ａブロック～

「よっし、あと一人やな」

残っていた三人のうちの一人を場外に吹っ飛ばし、コタローは残った一人を見据えた

その一人を倒せば、晴れて本戦出場となる

「ちゅーわけで本戦へ進ませてもらうで、ヤムチャさん」

コタローは余裕の笑みを崩さず、目の前にいるヤムチャに話しかけた

そのヤムチャはというと、コタローのような余裕は微塵も感じられない

構えもせず突っ立っているコタローに対して、構えを崩さず臨戦態勢である

「……随分余裕だな、まるでアッサリ勝ってしまうと言わんばかりじゃないか」

「ん？そのつもりやけど？」

あっけらかんと言うコタローに、ヤムチャは怒りを覚えた

確かにコタローは強い、気を感じ取れば分かる

ピッコロや悟飯の下で修行したと言われれば納得だ

だが、まだ十歳の少年なのだ

悟飯のように最強戦闘民族の血を引いているわけでもない

そんな彼に、『アッサリ倒す』と言われれば、そりゃあカチンとくるだろう

「……その余裕、今すぐ後悔させてやるぜ」

今まで基本、格上と分かっている者との対戦は避けていたヤムチャ

しかし先ほどのコタローの言葉で、その考えは振り切られた

全力を持ってこいつを倒し、本戦に行ってやる

そんな、眠っていた真の武道家魂が目覚めた

「でやあああああ！」

右腕を振り上げ、ヤムチャはコタローへ突っ込んだ

そしてそのまま、鋭い右スレートを顔面めがけて放った

「よっと」

上体を反らしてそれをかわすコタロー

まだ余裕の笑みは崩さない

それに屈せず、ヤムチャはさらに攻め立てる

連続の突き、肘打ち、跳び蹴り、回し蹴り

トランクスやハルナとの特訓の甲斐あり、以前よりもスピード、キレは格段に上がっていた

だが、コタローはそれ以上の修行を自らに課していた

十倍の重力を克服し、空気の薄い部屋の中で半年間

ヤムチャも十倍の重力特訓はしたことはあるが、その修行期間は半年にも満たなかった

それに、今のコタローはその重力特訓を遂げた直後

身体はかなり軽く感じられているはずだ

上体だけ動かすか、一本の腕で軽くガード

最低限の動作でヤムチャの攻撃をかわしていた

「く、くそっ！」

「ヤムチャさん充分強いで？たぶん来たばっかの俺より強いはずや」

攻撃の手を緩めないヤムチャだが、それでも当たらない

そしてついに、コタローが動いた

「そろそろ決めさせてもらおうかいな……よっ！」

ヤムチャの左の突きを右手で手首を掴んで防ぎ、懐に潜り込む

鳩尾に左肘を叩き込んだ

「ぐおっ！」

そこから数発の打撃を浴びせ、完全にひるんだ隙を突いて足払い

前方に倒れようとするヤムチャの顎を

「せいっ！」

「ぐふえええぇ！」

コタローの肘が完璧に捉えた

「いっちょあがりや！」

ヤムチャは放物線を描いて舞い上がり、ドサッと床に背をぶつけた

コタローはクルリと背を向けた

顎先に自身の会心の一撃

これで終わったろうと確信していた

そのまま予選通過のアナウンスを待つ

「……ん？」

が、それは一向に聞こえてこない

気絶すれば失格、残っていたのは自分とヤムチャの二人

ならば聞こえてこなければおかしい

（ちゅーことは……）

ここでコタローの脳内に、一つの仮説が浮かんだ

「おい……待てよ……」

「！！」

それを肯定するかのように、背後からの声

（ま、まさか……）

振り返り、先ほど倒したはずの敵の方を向く

「まだ……負けちゃあ、いねえぜ……」

「驚いたわ……まだ立てるんや」

軽く脳震盪を起こしたのか、ふらつき気味でヤムチャが立ち上がっていた

「ハイエナヤムチャの名は……伊達じゃねえぜ」

これで勝ったと確信してただけに、コタローは驚きを隠せなかった

それと共に、そんな驚かせてくれるような相手がいることに喜びを感じた

「アッサリ倒すっちゅうんは言い過ぎやったかな……撤回するわ」

「そう言ってもらえて嬉しいぜ……言っとくが、俺はまだ勝つ気でいるからな……」

その言葉に見栄は感じられなかった

コタローはしばらく思考し、ある結論に達した

「まだ奥の手を、残してるんやな?」

「ご名答」

ヤムチャはニヤッと笑い、肘を曲げて右の手の平を上へ向けた

「はあああああああああ……」

手の平を震わせ、気をそこへ集めていく

瞬く間に、バレーボールほどの大きさの気弾が完成した

普段撃つようなのとは違い、多くの気が凝縮された特製品である

「たしかに、喰らったら結構効きそうや……」

「喰らえ!繰気弾!」

コタローめがけて、それは一直線に放たれた

凄まじいスピードで接近してくる

「でも、こんな距離からじゃ当たらへんで！」

ジャンプをして、余裕を持って避けるコタロー

繰気弾はコタローの後ろへ通り過ぎていく

ところが

「何やと！？」

突如それは向きを変え、再びコタローに襲い掛かった

少しびっくりしたコタローだったが、すぐに舞空術で横に移動して回避した

「あっぶなー、追尾機能付きかいな……」

「そらそらそら！まだ終わりじゃないぞ！」

右手を人差し指と中指だけを立て、素早く動かすヤムチャ

その動きに合わせて、繰気弾は止まることなくコタローに襲い掛かり続ける

「よっ、よっ、よっ」

しかし、コタローはスイスイとそれをかわしていく

軌道を見極め、どれも紙一重でかわしている

先ほどの焦りも全くない

「なんや、避けよう思ったらそこまで大変じゃないみたいやな」

避けながらコタローが余裕ぶってヤムチャに話しかける

ところが、そのヤムチャはまだ笑みを崩していない

そのことが、コタローの心中に違和感を感じさせた

(何でや?接近戦じゃ無理ってわかってるなら、この技で決めなきゃ向こうは勝てんはず……)

他にもとっておきの遠距離技を隠し持っているのか?

そう思った矢先のことだった

「一つだったら避けられる、これはある程度想像がついたさ……」

ヤムチャがようやくコタローに言葉を返してきた

(一つ?……!)

「なら、二つだったらどうだ?」

垂らしていた左手をバッと上げ、先ほど繰気弾を作った右手と同じ形を作る

ここからはまるでさっきと同じ

左手を震わせながら気を集中させ、バレーボールサイズの特製気弾を完成させた

無論その間も、右手の動きは止めてはいない

「もう一個やと!?」

「喰らえ新必殺技!W〈ダブル〉繰気弾!」

最初の繰気弾をかわし続けるコタローへ、その第二号は放たれた

これはマズイと思い、コタローは急いでさらに空中へ退避した

両方が近距離から迫ってきたら、流石に絶対避けきれる自身はない

「逃がすか!」

左手も右手と同じように二本の指だけを立て、ヤムチャは二つの繰気弾を同時に操り始めた

それぞれ別方向から、上空のコタローを追う

「くっそ!どないしたら……そうや!」

気弾で撃ち落とそうとしても、おそらくかわされてしまう

どうしたもんかと考えながら空中へ退避していたコタローだが、
ここで一つアイデアが浮かんだ

上昇をやめてピタッと上空で静止、下にいるヤムチャを見据える

そこへ猛然と向かう二つの繰気弾

「よしっ！当たれ！」

期待をかけるヤムチャだったが、ぶつかる直前、コタローは考えたことを行動に移した

「それっ！」

真下へと急降下

遠くだった床へぐんぐん近づいていく

当然それを追いかけ、二つの繰気弾も急降下

後ろを見て、繰気弾がちゃんと追いかけていることを確認すると、
コタローはにやりと笑う

「かかった！」

「何！？」

コタローは急遽方向転換、再び上昇した

しかし、あまりにもタイミングがギリギリだったため、繰気弾はそれが出来なかった

ボゴンッ！ボゴンッ！

そのまま二つの繰気弾は床へと衝突

床に大穴を空けて姿を消した

「へっへー、どうや、これは読めんかったやろ？」

ニッと笑い、コタローは着地した

上空でヤムチャに視線を向けたのはフェイク

下に急いで降りた後、ヤムチャ自身を攻撃するのではないかと思わせるためのだ

しかし狙いは別

ヤムチャ自身に攻撃したとしても、その直後に二つの繰気弾が攻撃してくる可能性は否定できない

ならば、繰気弾自体を先に始末しよう

その考えのもと実行した急降下である

目論見どおり、両方が床に激突したわけだ

「もうそんな隙は作らせへんで。見たところあれ一個作るのに最低

でも三秒近くはかかる、俺のスピードとヤムチャさんまでの距離ならその前に潰せる」

これで詰みやな、とご満悦の様子のコタロー

しかし、

「ふっふっふ……」

「な、なんや!?勝機を失って開き直ったんか!?」

ヤムチャは落胆するどころか、逆に薄ら笑いを浮かべた

「もうそんな隙は作らせない、か……確かにそうだ、俺はもう繰気弾は作れない」

「?」

「もう両手が塞がっているからな」

「!?」

見ると、ヤムチャの両手は繰気弾操作時の構えを崩していない

下に向けていたそれらを

「はいいいいっ!」

ビッと勢いよく突き上げた

「なっ！？」

それと同時にコタローの足元から飛び出す二つの繰気弾

最初に穴を開けた場所ではない、全くの別箇所

「俺の繰気弾は、まだ生きている」

完全に虚を突かれたコタロー

避けることはおろか、ガードさえも出来なかった

二発のうち一発がコタローの顎を捉え

舞い上がった身体をもう一発が叩き落した

背を強く打つコタロー

すぐに体勢を立て直そうと起き上がる

「なっ！？」

しかし、いつの間にか目の前には接近したヤムチャがいた

「喰らえ！狼牙風風拳！」

両手を、爪を立てた猛獣のようにし、次々と打ち込んでいく

一発一発の間があまりにも短く、コタローはガードの体勢も取れず喰らい続ける

「はいいいい！」

そして締めの一発

両手首を合わせ、掌底を同時に叩き込んだ

「ぐへっ！」

今度は、舞い上がるというよりは吹っ飛ぶコタロー

再び背が床に付き、ダウンする結果となった

「はあ……はあ……はあ……どうだ！」

息を切らしてふらつきながらも、自分の前方に倒れるコタローに向かってヤムチャは言い放った

長時間に及ぶ繰気弾の操作、それも二つ

さらには、ダメージが蓄積してフラフラの身体に鞭を打っての狼牙風風拳

もうこれは二度とないチャンス、そう思って全精力をかけた攻撃だった

（今のはかなり効いたはず……頼む！このまま起きないでくれ！）

でなければ、もう勝機はほとんど残っていない

心の中でそう強く願うヤムチャ

しかし、

「あいたたた……さっきのは流石に効いたわ」

「！！」

最後の攻撃を喰らった部位をさすりながら、コタローはゆっくりと上体を起こしてきた

「ほいっと！」

身体を大きく揺らし、その反動でスタッと立ち上がった

ダメージは、一見してほとんど無かった

「そ、そんな……ほとんど効いてないなんて……」

「そんなことあらへんで？さっきも言うたけど、それなりに効いたわ」

コタローは首や指をポキポキと鳴らすと、ヤムチャへ向けて構えを取った

「さてと、せやったら俺もちょっとは本気出さなあかんな」

「く、くそ……来るなら来やがれ！」

全力の攻撃がさほど効かず悔しがっていたヤムチャ

しかし、そんなことをいつまでもしているわけにはいかない

まだ試合の途中

勝つ術をどうにかして模索しなければならないのだ

同じく構えを取ってコタローの攻撃に備える

少しでも多く、考える時間を作るために

「ほな、行くで！」

コタローが地を蹴った

こちらにまっすぐ向かってくる

「なっ！？は、速い！」

ヤムチャが目視できたのはここまでだった

コタローのあまりの速さに姿を見失い、ヤムチャは焦った

「ど、どこだ！」

「こっちや！」

「！！」

次にヤムチャがコタローを確認できたのは、自分の身体の右横

聞こえた声の方へ顔を向けたが、それと同時に右の回し蹴りが脇腹を捉えた

「ぐふおっ！」

構えが崩れ、さらに隙が出来るヤムチャ

当然ながら、コタローは攻撃の手を緩めない

その隙を逃さずどんどん打撃を打ち込んでいく

「よっしゃ、次で終いや！」

そう言うとコタローはバックステップで一旦距離をとり、構えを取り直す

「な！？それは……」

その構えを見て、驚きを隠せないヤムチャ

コタローの構えは、自らが使うそれと全くの瓜二つであった

両手を爪を立てた猛獣のようにするあの構え

先ほどもとっておきとして使った、あの技の構え

「折角やからあんさんの技、使わせてもらうわ……ほな行くで！」

まっすぐヤムチャへと飛び掛る

そのままガードする暇さえ与えず、次々とヤムチャに喰らわせていく

少し前、逆に自分が喰らっていたのと全く同じ攻撃

いや、

（け、桁違いのスピードだ……俺のと、まるで違う……）

一手一手の速さが完全に、ヤムチャのそれを上回っていた

故に、その技を知り尽くしているはずの彼でさえ、全く対処できない

「どないや！これが……」

フィニッシュはヤムチャのと一緒

双方の手首を合わせ、同時に二つの掌底を打ち込むもの

だが、その両手にはガチガチに密集させた狗神

威力は、本家のをはるかに超越していた

「犬上小太郎流　狼牙風風拳やあああ！」

見事にフィニッシュが決まった

ヤムチャは、自分がやったときの比でないほど吹っ飛ばされた

すでに意識は混濁

意識が消えそうになる中で

（へへ、負けちまったぜ……でも、こんなに熱くなれたのは本当に久しぶりだったな……ありがとよ）

胸の内でコタローに感謝の言葉をかけた

嘘偽りのない、真の感謝だった

吹っ飛ぶスピードが落ち、ズザーーッと床に擦れながら倒れこむ

今はもう完全に、気を失った状態だった

『犬上小太郎選手、通過！』

「よっし！」

会場全体に、スピーカーで響き渡る実況の声

待ち望んでいた実況のその言葉に、思わずコタローはガッツポーズをとった

そして、そのまま舞空術で直接で帰還しようとするが

「……しゃーないなー、ったく」

もうしばらく目を覚ましそうにないヤムチャを見て、コタローは

そちらへ近づいた

軽々とヤムチャを持ち上げ、肩に担いで共に帰還した

「でも、サンキューなヤムチャさん。あの技、大事に使わせてもらうわ」

ヤムチャの耳には入っていない、当然それはコタローも分かっている

だが、どうしても言っておきたかった

飛行しながらポツリと、コタローはそう言葉を漏らした

第３４話　真の狼〈ウルフ〉はどちらだ！？決めろ！必殺の狼牙風風拳（後書き）

いかがでしたでしょうか？

この組み合わせは、自分の中では結構の自信作だったりします。

当初の予定ではもう少しアッサリと勝負が付く予定だったんですが（狼牙風風拳習得は一応有り）、Ｗ繰気弾を突然思いついたせいで随分中身を濃くしちゃいました。

でもまあ、久々のオールバトルの話にしては上手く書けたので良しとします（あくまで主観ですが）。

さて、次回はネギのいるＣブロックのバトルをお送りします。

予選のネギの対戦相手とは！？

そして、ネギは無事に予選を突破できるのか！？

次回をお楽しみに！

それと感想、質問、突っ込みも待ってまーーす！

あと、今日でようやくテスト終わりました、ワーイ。

エヴァ
「だからこの小説と関係ないだろ！」

第３５話　ローブに隠れしその素顔　放て！魔法の射手（前書き）

えー、週の頭と言いながら、火曜日に投稿になってしまいました。週の最初の方と書くべきだったか……あ、スイマセン、結局悪いのは自分ですから。お気に入り登録７０件です、嬉しいですねー。

ではどうぞ！

第３５話　ローブに隠れしその素顔　放て！魔法の射手

～Ｂブロック～

『犬上小太郎選手、通過！』

「あ、コタロー君勝ったんだ」

迫り来る対戦相手を次々蹴散らしながら、悟飯はそう声を漏らした

「僕もこれで……お終い！」

「ぎゃふっ！」

最後の一人にほんの軽く手刀を当て、バタリと気絶させた

ここＢブロックには、悟飯以外は全てただの一般選手ばかりだった

よって悟飯は苦戦一つすることなく

『孫悟飯選手、通過！』

予選を突破した

「さてと、ネギ君の方はどうかな……」

様子が気になり、悟飯はネギのいるＣブロックの方へと目を向けた

～Cブロック～

「でやっ！」

「ぐあああ！」

「な、なんだあのガキ！？」

ネギの攻撃に吹っ飛ばされる屈強そうな男

それに目を疑い、ひるむ他の選手

まるで麻帆良武道会の予選の再現である

しかし、その時と違って決定的にあることが違っていた

（すごい！やっぱり僕、格段に強くなってる！）

ネギの力量〈レベル〉である

文字通り桁違いに上がっていたそれは、ネギを喜びに満ち溢れさせていた

（よし！僕もコタロー君や悟飯君に続くぞ！）

自分の周りを見渡し、状況を一瞬で判断して整理する

（残ってるのは……僕以外であと七人！）

一気にスパートをかけるネギ

瞬動で一気に敵に近づき、各個撃破を図った

（まず一人！）

「ぐふぇえ！」

脇に軽く蹴り

（二人！三人！）

「あうっ！」

「ほぶっ！」

首に手刀、腹に弱パンチ

三者共に地に伏せる

（あと四人！）

バッと後ろを向き、残りの四人を見据えようとする

「あ、あれ？」

思わず声が出たネギ

最初見たとき四人だったのが、今はもうたった一人になっていた

よく見るとその残った一人を中心にして三人、バタリと倒れこんでいる

唯一立っているあの人物によって倒されたと見て、ほぼ間違いなさそうだ

全身をローブですっぽりと覆い、顔や姿形が確認できない

麻帆良武道会でのクウネルの姿と言えば分かりやすいだろうか

ただ、かなりの長身であることだけはわかった

（残り全員倒そうと思ってたんだけど……まあいいか）

さっきの三人と同じような調子で、ネギは瞬動でローブの人物に接近した

そのまま打撃を一発、軽く入れてやろうと試みる

「やっ！」

パシッ！

「……え？」

しかし、その腹をめがけた拳はいとも簡単に、手のひら一つで受け止められた

バキッ！

「ぐぷっ！」

そしてそのまま、上から肘打ちを浴びる結果となる

「（え、何？止められた？普通の人じゃ止めれないような速さだったのに……）うわっ！」

思考回路を働かせ、状況を再び整理するネギ

そこを狙い打つかのように拳が飛んできたので、上体を反らしてすぐにかわした

とりあえず、バックステップで一旦離れた

（あの人、かなり出来る……常人をはるかに超えた強さだ）

そう考えていると、ローブの人物が構えを取り、こちらへと襲い掛かる

「くっ！」

ネギはその一撃一撃を見極めて次々とかわしていく、反撃はまだしていない

目の前の人物は確かに強い

だが全力でやればまず勝てる、そう推測できる強さだった

かといって、本当に全力で攻撃をしたら間違いなく大怪我を負わせてしまう

力を抑えすぎても駄目、全力を出しても駄目

その加減が分からず、ネギは困惑しながら戦っていた

そうやって凌ぐこと十数秒

(何でだろう?この人こんなに強いのに、全然気を感じない……)

ネギはこう疑問を覚えた

加減が把握できないのなら、気の大きさを感じ取ってさらに明確にすればよい

このように考え、攻撃を防ぎながら探ってみた

ところが、目の人物からは気の片鱗すらも感じられなかったのだ

まだネギも、気を探ることに関しては上手いとはとても言えない

しかし、ここまでの腕前の人物なら間違いなく感じ取れるはずだ

ネギは再びローブの人物の気を探ってみる

すると、

（え!?これって……）

気とは違う、別の力が目の前の人物から出ていることに気づいた

（魔力!?）

そう、自分がいつも用いる力、魔力である

そのことにネギはやや驚きを見せた

この世界にも、概念は大分異なるが魔法が存在することは悟飯から聞いていた

現にピッコロも、物質具現化という高度な魔法を用いていた

だが、ピッコロ以外で魔法を使える凄腕の戦士はこの地球にはいないはずなのだ

そうは言っても、目の前にこうして魔力を用いて戦っている者がいるのは紛れもない事実

（だったらこんなに強いのも納得だ……魔力による身体強化は、気によるそれと勝るとも劣らない。でも、何でこんな強い人を今まで悟飯君達は知らなかったんだ?）

確かに気を感じ取ってその強さを知ることは不可能だ

しかし、ここまで強いのなら噂の一つや二つを聞いていてもおかしくないはず

第一彼らは魔力を、気とは違う別の『力』として感じ取ることが可能なのだ

ならば一度くらいは、それを感じ取っていてもなんら不自然はない

攻撃をよけながら思考をめぐらすネギ

（ん？この攻撃は……）

ここで、ネギはある事実に気が付いた

確かに自分はこの人物よりは強い、攻撃など軽く凌げることが出来るのだから

だがそれにしても、あまりにも凌げ過ぎている

始めて会った者でこの強さなら、もう少し防御に気を向けなければならないだろう

（まるで以前、どこかで見たような……）

そうだとすれば納得が出来る

前に拳を交えてその攻撃を見て、自分だけが大幅にパワーアップを果たした

ならば、頭に刻み込まれているその攻撃を凌ぐことは容易い

最初は半信半疑だったネギ

ところが、ここで最初に自分が気づいた事実に目を向けた

（感じられない気に魔力？待てよ！？だとすれば……）

ネギの脳裏に浮かぶ一人の人物像

丁度背丈も一致する

顔を確認しようとローブの中を覗き込む、しかし

（くっ、見えない！）

顔には赤と黄を縦で半分に分けた仮面を装着しており、それは出来なかった

（だったら……）

足に魔力を込めるネギ

グッと床を踏み込んだ瞬間

（え？一体何処に……！！）

ネギの姿がローブの人物の目の前から消えた

しかしそれも一瞬のこと

すぐに後ろから気配を察し、ローブの人物は振り返る

気（魔力）を用いた高速移動術『瞬動』

レベルはここに来る前とはまさに桁違いだった

振り返った視線の先では既にネギが

「魔法の射手〈サギタ・マギカ〉連弾〈セリエス〉・光の三矢〈ルーキス〉！」

移動を完了し、自らが得意とする光の魔法を無詠唱で唱えていた

（しまっ……）

背後を取られ、しかも無詠唱

回避は不可能だった

三本の矢はそれぞれ、ローブの人物めがけて放たれた

当然ながら、この者は身体へのダメージをした

ところが

（え……？）

一本として、魔法の矢はローブの人物の身体を捉えなかった

捉えたのは、三本ともローブの頭頂部

しかも命中というよりは、ただ掠っただけ

（よし、当たった！）

そしてこれを成功とするネギ

そう、これが今のネギの狙い

この距離で魔法の矢なら、普通に狙えば百％命中する

しかしそれでは普通に殴ったのと変わりない、当たり所によれば大怪我だ

ならば身体でなくローブを狙おう

しかも正確に操作できるよう、撃つ矢は三本に留めて

そう考え、今に至っているのだ

（僕の予想が正しければ……）

攻撃が掠ったことでできたローブの穴から、サラリと髪の毛が現れる

ネギが予想したのと相違ない、黄緑色のロングヘアー

そしてもう一つ

これによって、ネギの考えは完全なる確信へと変わった

上斜めに伸びる、二つのアンテナ

こんな者をつける人間などまずいない、まるで自分はロボットだと言わんばかりの代物

そう、目の前の人物はロボット、正確に言えばガイノイド

知っているかとネギに聞けば、彼は『当然です』と間違いなく答えるだろう

ある時は、自分の大切な生徒

またある時は、自分の師匠の従者兼修行相手

麻帆良学園中等部３－Ａ　出席番号１０番

「やっぱり！茶々丸さん！」

絡繰茶々丸その人であった

「……ばれてしまいましたね」

観念したかのように、仮面に手を掛けそれを外す

そしてもう片方の手でローブの肩部分辺りを掴み

バサッ

脱いで脇へと投げ捨てた

これによって見えたその顔も、間違いなく茶々丸のそれであった

「お久しぶりですネギ先生、お会いできて大変嬉しく思います」

「それは僕も同じです……でも、何でそんな格好で大会に!?」

予想通りローブの人物は茶々丸、それはネギにとってもちろん良かった

だがそれによって、こうして新たな疑問がネギに沸き起こった

「……この世界の格闘技チャンピオンのお名前、先生はご存知ですか?」

「確か、ミスター・サタンさんでしたっけ?」

悟飯にポスターを見せてもらった際、それも確認していた

「そのミスター・サタン様に私と千雨さんは今、お屋敷でお仕えしているんです」

「ええっ!?それに千雨さんも!?」

これには、ネギも目を丸くするしかなかった

「そして、そのサタン様の一人娘のビーデル様に、こう言われたのです」

“茶々丸の強さでパパーッと優勝して、そんでもってパパをぎゃふんと言わせてちょうだい！”

「ネギ先生は知らないかもしれませんが、サタン様はアスナさんでも倒せるほど弱いのです」

「……知ってます」

これも悟飯から聞いていた、ピッコロに至っては馬鹿の世界チャンピオンとまで言っていた

また、それを聞いたコタローがひどくガッカリしていたのも思い出す

「当然私も勝てるわけですが、そのことにビーデル様は感づいてしまったらしく……」

“そうなったらきっと、昔みたいに真面目に武道に励んでいたパパに戻るはずよ。お願い！”

「とまあこういうわけで、この大会に参加することになったんです」

「さっきまで付けてた仮面とローブは？」

「正体がばれると後々面倒だろうと、ビーデル様のご配慮で」

ちなみに登録名も偽名にしているとのこと

本名でサタンの屋敷で働いているので、当然といえば当然だが

ようやく納得し、うんうんと頷くネギ

「ネギ先生、この二週間でずいぶんお強くなられたようですね。恐らく今の私では、勝率は１％にも満たないでしょう」

先ほどまでの攻防で、ネギの異常なまでのパワーアップに気づいた茶々丸

今の自分ではほぼ勝てない、それも自覚していた

「ですが、私はビーデル様のため最後まで戦います。ネギ先生もどうか、本気でお相手をお願いします」

しかし、茶々丸はそれでも戦う意思をネギに向けて表明した

構えをとってネギを見据える

「え、でも……」

「観客席にハカセがいるのを少し前に確認しました。多少の損傷なら問題ありません」

ネギが本気で相手をしなかったのは、相手への大ダメージを危惧してのこと

それも茶々丸は見抜いていた

しばらく考えたのち、ネギは

「……わかりました。僕も茶々丸さんの気持ちに、全力を持って応えます！」

再び構え、茶々丸と同じく目の前の相手を見据えた

「ありがとうございます、ネギ先生」

「行きます！」

こう言うとあの時のように、ネギの姿が茶々丸の視界から消えた

（同じ手は、もう喰らいません！）

それを見て茶々丸は瞬時に、身体を後ろに向けた

それと同時に、ガードのための腕を出す

バシンッ！

茶々丸の予想は見事的中、ちょうど上腕部にネギの拳がぶつかってきた

（よし、防い……！）

その喜びもつかの間

「うらららららら！」

第一撃に続いて二撃三撃と、ネギは怒涛のラッシュを放ってきた

そのスピードは茶々丸も目で追いきれず、次々とそれらを浴びる形となる

（くっ！は、速い……）

数撃喰らってよろめいたところを

「はあっ！」

古直伝の崩拳で吹っ飛ばす

一、二度地面を跳ね、仰向けにダウンをとられる

もちろん、ここで攻撃の手を緩めるネギではない

「魔法の射手〈サギタ・マギカ〉戒めの風矢〈アエール・カプトゥーラエ〉！」

捕縛効果のある魔法の射手を茶々丸向けて放った

ダウンしていた茶々丸に巻きつき、動きを拘束する

「くっ！」

そしてネギは瞬動ですぐさま接近し

「でやああ！」

茶々丸の顔面目掛けて拳を振り上げ

ピタッ

「……これで、勝負ありましたね」

目の前一センチのところでその拳を止めた

「はい……まいりました、完敗です」

茶々丸は清々しい表情で自らの負けを認め、今ここに宣告した

『ネギ・スプリングフィールド選手、通過！』

実況のアナウンスを聞くと、ネギは戒めの矢を解除して茶々丸の身体を起こした

「だ、大丈夫ですか茶々丸さん！？」

「はい、多少ボディに陥没等が見られますが、深刻なダメージではありません」

ネギを制し、自ら立ち上がる

だが、やはりどこか悪いらしく、うまく歩を進めることが出来ないて行きますよ」

「こんなにフラフラじゃないですか！僕葉加瀬さんの所までおぶっ

こうなったのは他でもない自分の攻撃によるもの

ネギは茶々丸の足を止めさせ、背中に乗るように促す

「え、でも私重いですし……生身の身体でなく機械なわけですから……」

恥ずかしそうにモゴモゴと言う茶々丸

「僕なら平気ですから！さ、早く！」

「は、はい……」

顔を紅潮させながらも、茶々丸はネギの背中に乗る

そして腕を回し、ネギの背全体に体重をかけた

「じゃ、飛びますよ」

「は、はい……」

フワッと浮上し、ネギと茶々丸は予選のバトルステージを後にした

（ああマスター……私、作られて初めておんぶされています……しかも、ネ、ネギ先生に……）

頭から文字通り湯気を吹き出しながら、茶々丸は胸の中でそう呟いた

第３５話　ローブに隠れしその素顔　放て！魔法の射手（後書き）

どうでしたでしょうか？

ちなみに、茶々丸はビーデルから個人の控え室を与えられたので、控え室Ｂでアスナ達とは会っていないんです。ご都合主義で申し訳ない（汗）

次回はＤブロックのバトルをお送りします。

出るのは、最近声優が交代になってしまったあのキャラです。

たぶん投稿は金曜日くらいでしょうか？お楽しみに

感想、質問、突っ込み、お待ちしています。

ではまた次回！

第３６話　行け古よ！クリリン直伝かめはめ波（前書き）

……まずはお詫びを。金曜日と言いながら三日も遅れて、本当に申し訳ありませんでした！なぜかこの数日間スランプになってしまいまして……予想以上に原稿の進みが遅れてしまいました。本当に申し訳ない！

おかげで愛想をつかされたのか、お気に入り登録が一件減る始末……自業自得ですね、ハイ。

でも何とか書き上げました、ご覧ください。

ではどうぞ！

第３６話　行け古よ！クリリン直伝かめはめ波

ネギが茶々丸と交戦していたほぼ同時刻

～Ｅブロック～

「おいおい、悟飯が出てるのかよ。あいつは超サイヤ人じゃないか……」

向かってくる相手を軽くあしらいつつ、クリリンは悟飯のいるＢブロックに目を向けていた

さっきまでは、誰と世界温泉巡り旅行に行こうかなー等と考えていたクリリン

しかし悟飯が目に入ったことで、その考えはフリーズされた

「ヤムチャさんや天津飯だけなら何とかなると思ったのに……」

すると

「だだだだだあ！」

上の方から聞き覚えのある声

それと同時に選手数名が、その声のしたブロックから落下してきた

天下一大武道会の予選のバトルステージはどれも水平に並んでいるというわけではない

趣向を凝らしたステージもいくつかあるため、高低差がかなりあったりする

落ちてきたのはHブロックの選手達のようだ

全員見事に気絶している

「ひょっとして……げ！」

クリリンは恐る恐る上を向く

そこには、マントをたなびかせ、敵をどんどん倒しているピッコロの姿があった

「ピッコロまで……」

さらに落胆するクリリン

ここまでくると、さらにもう一つ不安がクリリンの頭をよぎった

キョロキョロと他のステージを見渡してみる

「まさかトランクスは来てないよな……ああっ！いた！」

嫌な予感的中

同じ高さで隣に位置するDブロックのステージ上に、彼は立って

いた

言うまでもなく次々と相手選手を倒していき、残りは彼を含めて二人

「ん？待てよ、Ｄブロックってことは……あああっ！」

何か思い出したクリリン

もう一人の選手に目をやって確認し、それは確信へと変わった

そう、そのもう一人の選手とは

「古！」

クリリンの師匠兼弟子、古であった

～Ｄブロック～

（むむむ……）

予選通過まで、残りはあと一人

その最後の一人を前にして、古は眉をひそめ、額から一筋の汗が流れ出ていた

（何アルか……このピリピリと感じる凄まじい気は……）

クリリンや自分を始めとして、楓や刹那すらも上回る巨大な気

内に秘めたるそれを、古は敏感に感じ取っていた

（ひょっとして、楓達が言てた師匠いうのはこの人アルか？）

ならばより一層、気を引き締めてかからねば

そう心に命じ、気を集中させていく

もっともトランクスは楓達の師匠ではなく、古の勘違いだったりするのだが

それに対しトランクスは

（かなり出来るなあの子、強い気を感じる。それにあの服は……）

古の常人を超えた強さに気づくと共に、着ている服に目が行っていた

山吹色の上下の道着に、左胸の亀マーク

これは、知っている者が見れば誰でも

（亀仙流の道着……）

と気づくであろう

（僕の知っている未来ではこんな子はいなかった……とすると）

ネギ君達の仲間？

そういえば、自分の拳法の師匠もおそらくこっちに来ている、とネギが話していたのを思い出す

（だとすればあの道着は誰から？ヤムチャさんと悟飯さんではないってことは……クリリンさん？）

こっちの考えは大当たり

「行くアルよ！」

「！」

「アイヤー！」

ついに二人の戦いの火蓋が切って落とされた

仕掛けてきたのは古

猛然と正面から突っ込み、腹目掛けて崩拳を打ってきた

「よっ」

それをトランクスは片手で受け止める
しかし、それだけでひるむ古ではない
「まだまだあ！」
トランクスの頭ほどの高さまで跳躍
腰を捻らせ、回し蹴りを顔を側面狙って繰り出した
「ふん！」
だがそれも、腕によるガードで阻まれる
「ぬぬぬぬ……これでどうアル！」
お次は、手数で攻める連続攻撃
クリリンの教えで、気のコントロールを格段に上達させた古
気を手足に集中させ、昔の比でないほどの速さで攻め立てる
が、やはりトランクスの前では無力
汗一つかかず、全て見事に凌いでいた
（あ、当たらないアル……）
双方の実力差が如実に現れてきたのを、古は分かってしまった

自分は相手に対して格下、それは当然承知のこと

だがここまであるとは思わなかった、いや、思いたくなかった

おそらく目の前の青年は、全力の十分の一も出してはいない

しかも、一度としてこちらに攻撃してこない

ちょうど、初めて悟飯と拳を交えたコタローと同じような心境に、古はなりかけていた

（やぱり、私の力じゃ無理だたアルか……）

心の片隅で僅かながら諦めが芽生え、戦意がしぼんでいくように古は感じた

そんな時だった

「頑張れー！古ー！」

戦意が完全にしぼみかけそうになった古の胸にこの一言が響く

「え？クリリン？」

古の正面、つまりはトランクスの後ろの方から聞こえる師匠兼弟子の声

聞き間違いではなかった

「クリリン！」

「最後まで諦めるな！お前ならまだやれる！いけえ！」

こちらに向かってエールを送っているクリリンの姿が、古の目へと入ってきた

その姿は、トランクスも攻撃を凌ぎつつ、後ろを振り返って確認していた

（やっぱりクリリンさんだったか。じゃあやっぱりこの子は……！）

それは一瞬の油断だった

クリリンのエールによるものか、古の拳のスピードが僅かながら上がった

古の姿を目視していたならば、ちゃんと対処できただろう

クリリンの姿を見るため後ろを向いてしまったトランクスは、それが僅かながら遅れてしまった

直撃とはいかなかったまでも、その拳はトランクスの頬を掠った

（やたアル！）

初めての攻撃の命中

ダメージは与えられなかったものの、このことに古は歓喜していた

（油断しすぎたか……だがもう喰らわないぞ！）

古の過小評価を撤回したトランクス

続けざまに迫る古の追撃を全て完璧にかわし

「はっ！」

古の身体目掛けて気合砲を放った、この勝負が始まって初めてのトランクスの反撃である

超スピードで繰り出された拳によって発生した衝撃波

古は、くの字になって飛ばされてしまう

しかしすぐに受身を取って体勢を立て直し、トランクスを再び見据えた

（今のも全力じゃないみたいアルが……ようやく攻めてきたアルね）

それは、向こうもそれなりに戦いの意思を示したきたということ

古の戦意が再び、沸々と沸きあがる

（そうアル、私は最後まで戦うアルよ！クリリンのエールに応えて……）

最初トランクスを見据えたとき以上に、古の心は燃え上がっていた

そして、構えを崩さぬままじっとトランクスを見つめる

さっきとは打って変わって、猪突猛進に攻める考えは完全に捨て去っていた

（自分から攻めて駄目なら……向こうの攻撃にカウンターするしかないアル！）

その意図をトランクスは察したようで、

（なるほど、来るならそっちから来いってことか……よし！）

戦い始めの古と同じく、正面から向かってきた

（落ち着くアルよ私……そう、カウンターこそは……）

トランクスの動きを視覚だけでなく、他の感覚まで使って感じ取る

「やっ！」

トランクスは右手で握り拳を作り、古の鳩尾を狙って放つ

（中国拳法得意中の……）

その時のトランクスのパンチは、全力とは程遠いもの

古でもその動きを捉えることができた

両手を使って受け流し、身体を反転させて懐へ

「なっ！？」

（得意アル！）

逆にトランクスの鳩尾目掛け、古の肘が打ち込まれた

このカウンターは、クリリンも未だに攻略できていない

古必殺のカウンターと言えよう

結果は……

パシンッ！

（そんな！）

（ふー、危ない危ない）

肘が入ったのはトランクスの左の手の平

またもや直撃には至らずだ

古の一連の動きを見て、思わず最初は驚いたトランクス

しかし、彼の動体視力をもってすれば、防げないものではなかった

トランクスはそのまま、勝負を決めさせようと手刀を振り下ろす

（まだアル！）

（え！？）

古の意地が起こした偶然だった

ガードされたすぐ直後、古にこのような考えが浮かんだ

ならば距離をとってあの技を使おう、と

そしてすぐにトランクスから離れたのだ

もちろん、トランクスが手刀を使ってきたことなど分かってはいなかった

一方、古と違って少しの間があってから繰り出されたトランクスの手刀

この僅かなタイムラグが、直撃を回避させた

僅かに前髪を掠るのみであった

古は下がりながら、既にあの技の構えをとっていた

両手を腰の右側にやり、気を収束させるあの構え

「（これが最後の手アルよ！）かぁ……めぇ……」

足を止め、両方を地に付けてグッと腰を落とす

「はぁ……めぇ……」

古の両手で造られた僅かな空間に、青白く、それでもって強い光

が集まる

これこそ、クリリンから伝授された亀仙流の技

「波ーーーーーー！」

かめはめ波である

両手を一気にトランクスに突き出して放たれたそれは、猛烈な速さで彼へと向かう

（かめはめ波だって!?クリリンさんはこの技まであの子に!?）

古が放った、自らもよく知る目の前の技に驚き、トランクスは一瞬面食らってしまう

そのため僅かだが回避が遅れた

「くっ！」

慌てて右に跳んでかわすも、さっきとは逆の左頬にほんの少し掠った

思わず頬に手を触れたトランクス

すると

「アイヤーーー！」

「！！」

トランクスの背後に、いつの間にか古がいた

既に拳は引いている

そして

「馬蹄〈マーティ〉……」

古に残っていた全ての気を結集させたその拳を

「崩拳〈ポンチュワン〉！」

がら空きのトランクスの背中に放った

これが事実上、古の最後の一撃

こんなチャンスは二度とない

そう確信しての全力攻撃

その一撃はトランクスを……

シュン！

捉えることはできなかった

「ええ！？」

空を切る古の拳

トランクスが視界から姿を消した

そんな目の前の事態を理解できずにいた古の背に

ピタッ

トランクスの手の平が触れた

「なな!?」

「はあっ!」

ゼロ距離の気合砲

古に回避する術はなく直撃、さっきの比でないほどぶっ飛んだ

地に一回大きく跳ね、そのあとズザザザーと倒れこんだ

「……し、しまった!やりすぎたか!?」

加減は一応したが、前より強くしてしまったのは言うまでもない

攻撃した後急に心配になったトランクスは、古のところへ駆け寄った

「ご、ごめん!大丈夫だった!?」

「うーーん……」

うつ伏せになっていたのをひっくり返し、安否を問いかける

目をグルグルにさせ、古は気を失っていた

「……よかった、大怪我はどこもないみたいだ」

確かめた後、安心して胸を撫で下ろすトランクス

『トランクス選手、通過！』

古の気絶が確認され、実況がトランクスの予選通過を宣言

そしてその直後に

『クリリン選手、通過！』

クリリンの予選通過も告げられた

「クリリン！？あっちは勝たアルか！？」

「うわわっ！」

クリリンという単語に反応し、古が突然パチリと目を覚ました

がばっと身体を起こし、キョロキョロと彼を探す

「あ、いたアル！クリリーン、やたアルなーー！って、なぜに宙ぶらりんになてるアルか？」

すぐにクリリンを見つけて手を振る古

それと同時に、クリリンの今の状況に疑問を抱いてしまった

クリリンは今、傾いたステージの端に掴まり、一人ぶら下がっていた

「……古がこっち方向にかめはめ波を撃つからだ」

やや不機嫌にクリリンは答えた

古が撃ったかめはめ波は、トランクスに掠った後そのまま直進

Eブロックのステージの支えの部分を抉ってしまった

故にステージはガクンと傾き、選手達はズルズルとずり落ちる

真っ先に端に掴まったのがクリリンだった

その後他の選手達は、落ちてたまるかとばかりクリリンをつかもうとした

だが、それは叶わなかった

選手は揃いも揃って皆、クリリンの頭に手をかけてしまったのだ

クリリンはツルツルのスキンヘッド

まさに掴み所のない頭だったため全員落下、そして着水

結果、一人残ったクリリンが通過となった

勝った理由が自分のツルツル頭というのは、やはりいい気はしなかった

「ニャハハ、すまなかたアルー」

後頭部をポリポリと掻き、笑いながら古は謝る

「ったく……つーか本当に大丈夫なのか？あんな攻撃喰らっといて」

クリリンは掴んでいた手を離し、舞空術で二人のところへ

「平気アルよこのくらい、負けたのはちょと悔しかたアルが……フニャ？」

「あ、危ない古！」

立ち上がろうとした古だったが、身体がふらつきバランスを崩す

それを、丁度Ｄブロックへ到着したクリリンが受け止めた

「無理すんなって。少しここで休んでから戻ろう、な？」

「そ、そうアルな……」

クリリンに促され、古はクリリンと共にしゃがみ込んだ

他のブロックの戦いに目を向ける古の横で、クリリンはトランクスに渋い表情を見せていた

「トランクス、何でお前まで出てるんだよ……俺優勝しようと思ってたのに……」

「未来の人造人間を倒した報告に来たんですが、その時にこの大会のことを聞いて……あの古って子はネギ君達の仲間なんですよね？」

この時代に来た経緯を話すとともに、トランクスは古の素性について確認をとった

「ああ、そうみたいだぜ」

クリリンはそれに対し肯定

ネギのことは古に、『私の自慢の弟子』としてちょくちょく話を聞かされていた

「そのネギ君達の他の仲間の人から、優勝して親孝行したら？って言われたもので……」

「優しいなトランクスは。ああ、一億ゼニーと世界温泉巡り旅行が……」

優勝の望みがほぼ無くなったことで、クリリンはやや落胆を露にした

すると

「クリリンクリリン！見るアル！アスナや天津飯が戦ってるアルよ！」

古がワクワク顔で、少し離れた場所にあるブロックのバトルステージを交互に指差した

どれどれとクリリンが顔を向けると

「うおっ！何だあの子達！？」

あの二人とまともにやりあっている少女を見て、驚きの表情を見せた

～Fブロック～

「やるわねいいんちょ……まさかここまで凄くなってるなんて」

「……どうですのアスナさん、これでもまだ私を下に見るおつもりで？」

クリリンが驚きの対象として見ていた内の一人、あやか

彼女は現在、アスナとほぼ互角の勝負を展開していた

第３６話　行け古よ！クリリン直伝かめはめ波（後書き）

いかがだったでしょうか？

お分かりかとは思いますがこの対戦カード、予選編で書く戦いで一番実力差が離れているカードなのです。

スランプで進まなくなったのもこの影響がかなり……

何とか古の見せ場も作りつつ、トランクスが弱く見られないような戦いを、四苦八苦しながらずっと考えてました。

まあ、この内容がそれにちゃんと当てはまってるかと言えば、自信を持って『はい』とは言えませんが（汗）

さて、次回はアスナｖｓあやかをお送りします。

スランプさえ回復できていれば、次回は木曜日頃かと。あくまで回復できていればですが。

応援、よろしくお願いします。

意見、質問など、ありましたらお気軽にどうぞ。

ではまた次回！

第37話　これはアスナも予想外！使うっきゃない威卦法（前書き）

自分でもビックリしてます。前回、良くて木曜と書きながら水曜日に投稿可能になるとは……どうも筆の進みにムラがありすぎるカゲシンです。

ではどうぞ！

第37話　これはアスナも予想外！使うっきゃない咸卦法

Fブロック　アスナVSあやか

この二人の戦いは、少し前まで遡る

「……残ったのは私達二人だけですわね、アスナさん」

「そうみたいね」

ここFブロックのバトルステージ上では、彼女ら二人だけが唯一立っていた

あとは地に伏せ、気絶した者が十二人

いずれも、あやかが倒した者達ばかりである

残りの十二人は、アスナが全て場外へぶっ飛ばしていた

お互いをギラギラと睨みつける両者

それぞれ既に臨戦態勢に入っていた

「じゃあいいんちょ、どんだけ強くなったか見せてもらおうじゃないの」

上から目線で、アスナがやや威張りながら言い放つ

天津飯との修行で格段に腕を上げ、自信満々になっていたアスナ

さらにはカリン塔もクリア

彼女本人からすれば、あやかに負けることはまず無いと自負していた

一方のあやかは、アスナの発言に眉をひそめていた

「そのへらず口、すぐに叩けなくして差し上げますわ！」

「やれるもんならどーぞ」

完全にあやかをなめきっているアスナ

そのため、あやかの内に秘めたる気を感じ取れなかった

「では、こちらから参りますわよ？」

「はいはい」

「でやっ！」

「！！」

アスナは目を見開いた

自分の予想を何回りも上回るスピードで、あやかは接近してきた

襲い掛かる右の肘打ちを、左手で掴んで何とかガード

だが

「まだですわ！」

あやかはここから身体を左に反転

アスナの首筋目掛けての手刀を叩き込もうとする

「わわっ！」

上体を反らし、アスナは何とかかわす

外れたと分かると、あやかはすぐに下がって距離をとり、構えを取り直す

そして再び接近する

「次は外しませんわよ！」

「ああもう、だったらこれよ！」

次の瞬間、アスナの姿が前方から消えた

それとほぼ同時に、あやかの背後へ

（もらった！）

背中のど真ん中へ向けて、アスナの掌低が放たれた

しかし

ガッ！

「え！？」

「甘いですわアスナさん。いつものあなたなら、ここはグーパンチじゃありませんこと？」

あやかは分かっていたかのように身体を回し、腕でそれを防いだ

いや、分かっていたかのようにではない、あやかは完全に分かっていた

今のは、そんな者の動きだった

（な、何で！？何で今のが分かっちゃうわけ！？）

アスナは今のに心底驚いていた

まださっきのは全力ではない

それでも、かなりそれに近づけた移動と攻撃を行った

が、見抜かれてしまった

（どんだけあっちもパワーアップしてんのよ……）

悔しさに、奥歯をギリッと噛み締める

それが一瞬の隙を生んだ

「今ですわ！」

「あ、しまった！」

アスナの服をガッと掴み

「雪広あやか流合気柔術……」

下へ投げるように叩きつけた

「雪中花！」

流れるようなその一連の動きに、アスナはそのままダウンを奪われる

さらに続けて追撃を図るが、流石にアスナは許さなかった

「いつまでも調子に乗ってんじゃ……」

「！」

床をガッと蹴って身体を移動、即座にかわす

そのまますぐに舞空術で飛翔、技の構えに入った

「ないわよ！」

引いた右手をビシッとあやかに突き出す

唯一立てていた人差し指から光線が飛び出した

それが気による攻撃だとすぐさま悟り、あやかは横に跳んで避ける

ボゴッという音と共に、床が若干粉砕された

「どう？ここからだったら手出しできないでしょ！もう一発……」

再び同じ構えを取る

指先に光が集まり、発射された

「どどん波！」

そう、アスナが今使っている技、それはどどん波だ

天津飯と餃子が昔いた、鶴仙流の必殺技である

アスナがカリン塔に登る一日か二日ほど前、彼女は天津飯に頼み込んでいた

自分も何か天津飯の使う技を覚えてみたい、と

思えば、アスナは気功波系の技を何一つ持っていなかった

いくら魔力無効化で遠距離戦は最強でも、一つくらいはあったほうがいいだろう

そう思って天津飯は教えることにしたのだ

流石に気功砲を教えるのは危険すぎると判断し、消去法でどどん波となった

今では憎き鶴仙流の技だが、使える技であることに変わりはない

現にその内の一つの気功砲は、天津飯の代表的な技となっている

「そう簡単には当たりませんわ！それに……」

再び避けるあやか

そして

「私が飛べないとでもお思いでしたの？」

「なななっ！？」

アスナと同じく舞空術で飛翔

全身に気をまとい、猛スピードで迫る

そのスピードを活かし、凄まじい勢いの右の回し蹴り
これにはアスナもビックリ
「くっそ！」
何とか左腕を縦にしてガードする
予想以上の威力に、アスナの腕がビリビリと痺れた
そこからさらに、あやかは怒涛の連続攻撃を見せる
「そらそらそらそらそら！」
今ので完全に確信したアスナ
生半可な戦いをしたら負ける、と
このラッシュをまともに喰らうわけにはいかない
両手両足を全力で動かし、それらに対応した
何発か当たったものの、そこまで大きなダメージではない
むしろ、こちらも対抗して何発か当ててやった
一通りの攻防が終わると、いったん離れて両者は距離をとる
互いの顔に、何発分かの打撃の跡ができていた

そして今に至る

「……そっちも随分頑張ったみたいね」

「ええ、この雪広あやか、血の滲むような修行を自らに課しましたから。そう簡単には負けませんわよ」

キッとした視線をアスナにぶつける

アスナも同じくである

「そうね、確かに今のままじゃ勝てるかどうか分からないかも」

「……今のままじゃ？どういうことですの？」

アスナが言った意味深な言葉

それを聞き逃すあやかではなく、当然アスナに問いかけた

「そのまんまよ、ホントはあんたには使わないつもりだったんだけど……」

両手の平を広げて上向きに

それらを腰辺りまでもっていき、気と魔力をそれぞれ片方の手に込め始めた

「右手に魔力……左手に気……」

それぞれ目に見えるほどのエネルギー量になると、胸の前まで両手を上げる

「……やっ！」

気と魔力

異なる二つの力が今、アスナの手によって混ぜられた

それによって生み出された『もの』は、あやかを驚愕させるには十分すぎた

「な、これは……」

アスナの両手に覆われるような形であったそれは、アスナの全身に行き渡る

やがてそれは、気でも魔力でもない別のオーラとしてアスナを包んだ

当然これには、様子を見ていたクリリン達三人も目を見開いた

「な、何だあれ!?」

「僕達が使う気でも、ネギ君やのどかちゃん達が使う魔力でもない……別の『力』を感じます」

クリリンとトランクスは、始めて見たあの技そのものに対する驚き

一方の古は

「ううむ、前に見た時よりハンパなくパワーが上がってるアル……」

麻帆良武道会の比でないほど上がっていた、その技の質に対する驚きだった

「古!何なんだあの技!?急にアスナのパワーをグンと上げやがったぞ!」

正体を古が知ってるのが分かると、クリリンはすぐさま問いかけた

「どうも気と魔力を混ぜる技らしいアル、詳しくはよく知らんアルが……」

「混ぜるだって!?それだけであんなに強くなるのか!?」

おそらく、単なる攻撃出力では自分や古を軽く超えてしまう

クリリンはそれを肌で感じ取っていた

「そうみたいアル……あれじゃいいんちょが勝つのは……」

「でやあっ!」

「ぐっ!」

背中に叩き込まれる強烈な打撃

いつの間にか背後に回られてしまったあやか

今度は防ぐことはできなかった

真下へと急降下する

しかし気を込めた手で床を叩き、ダメージを何とか軽減させた

すぐに持ちなおし、上にいるアスナを見上げる

だが

「い、いない！？」

「こっちよ！」

既にアスナの姿はなかった

そしてまたもや、あやかの気づかぬうちに背後を取っていた

「やああっ！」

背中に向けて一発

今度は掌底ではなく、正真正銘のグーパンチだった

「きゃああっ！」

猛烈な勢いで、あやかは横に飛ばされる

ついにはステージの外まで

「くっ！」

舞空術を使い、場外への落下を阻止する

そんなあやかの正面に

「これで決めるわよ！」
アスナが迫っていた
あやかの胸元をガッと掴むと
「そりゃあああっ！」
共に急速落下
下は場外で落ちた選手の安全を考慮され、海面が露出している
アスナはあやかをそこへ
ドッパーーーーン！
思いっきり叩きつけた
途端に大きな水柱が上がる
『神楽坂明日菜選手、通過！』
着水した時点で場外とみなされるため、このタイミングでアスナの勝利が宣告された
「よっし！あ、いけないいけない」
アスナは勝利を喜ぶとすぐに、掴んだままのあやかを引き上げた
水面から、全身ずぶ濡れのあやかが現れる

「アースーナーさーん……」

目はギロリと光り、真っ直ぐアスナの目を見ている

その迫力に、思わずアスナも顔を引きつらせた（咸卦法も解除）

「何てことしてくれますの！居候先の方からいただいた服が水浸しじゃないですか！」

「ご、ごめんごめん。つい勢いで……」

「つい勢いで……ではありません！」

「だから悪かったって……」

「今日はこの一着しか持ってきてませんのよ！？」

自分に非があるのは明白なので、謝っていたアスナ

しかし、いつまでたっても向こうが怒ったままなので

「……じゃあ言わせてもらうけど、一着しか持ってきてないあんたも悪いじゃない！」

手の平を返したようにこっちも怒り始めた

もちろん立派な逆ギレである

「何ですって！？言うに事欠いて何を言い出すんですの！」

「だってそうじゃない！このくらいの事態想定しときなさいよ！」

「まあ！強くなってもやっぱりお猿はお猿ですわね！」

「なにおーーー！」

ギャーギャーと口喧嘩を始めだした二人

いつそれが、拳によるものに変わってもおかしくなかった

「おいおい、急に喧嘩し始めたぞあいつら」

「普段からやってるって感じですね……仲が悪いんでしょうか？」

「いやいや、普段からやてるいうのは本当アルが、ああ見えて二人は仲良しアルよ」

「「そうかなあ……」」

古の言葉に、首を傾げるクリリンとトランクス

アスナ達の光景に目を奪われていた三人
そのせいですっかり忘れてしまっていた

「まさか、ここまで強いのがアスナ達の仲間にいたなんてな……」

「いやいや、そちらもかなりの手練、拙者も気は引けぬでござるよ」

天津飯有するGブロックの、もう一つの激戦を

第37話　これはアスナも予想外！使うっきゃない咸卦法（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、クウネルです」

エヴァ
「エヴァンジェリンだ……」

クウネル
「今回から後書きに私達のコーナーができました」

エヴァ
「内容はそこまで変わらんぞ？単に作者の考えとかをこいつが代弁するだけだ」

クウネル
「大会編終了後まで出番がないと思っていただけに、私的にはかなり嬉しいです」

エヴァ
「たまに後書きに出てたけどな、私もお前も」

クウネル
「さて、今回はネギ君達の服についてです」

エヴァ
「まあ確かに、今までそういった描写は全然無かったな。バカイエローの以外」

クウネル
「今まで全く触れずに書いてきた作者なんですが、友人から『ネギ達二週間も同じ服？汚くね？』と誤解されたので、このような形で紹介することになりました」

エヴァ
「第一、いいんちょはドレスだから修行なんて無理だしな」

クウネル
「現在所存が分かってるメンバーの衣服状況です、どうぞ」

ネギ＆コタロー⇒悟飯宅から拝借、大会には初めの服で出場

あやか⇒悟飯宅から拝借、大会もその服で出場

楓⇒ピッコロに具現化魔法で用意してもらう、大会には初めの服で出場

刹那⇒ピッコロに具現化魔法で用意してもらう、大会もその服で出場

木乃香⇒ピッコロに具現化魔法で用意してもらう、大会にもその服で

古⇒クリリンに買ってきてもらった、大会では亀仙流の道着で出場

五月⇒クリリンに買ってきてもらった、大会にもその服で

のどか&ハルナ&葉加瀬⇒ブルマ宅から拝借、大会にもその服で

夕映⇒占いババの持ってた服から拝借、大会には初めの服で

朝倉⇒占いババの持ってた服から拝借、大会にもその服で

さよ⇒必要なし

アスナ⇒天津飯に町まで買いに行ってもらった、大会もその服で出場

まき絵⇒天津飯に町まで買いに行ってもらった、大会にもその服で

千雨⇒屋敷からメイド服支給、大会にもその服で

茶々丸⇒屋敷からメイド服支給、大会には初めの服（＋仮面とローブ）で出場

クウネル
「……といった感じです」

エヴァ
「何で占いババがあいつらに合う服を持ってるんだよ……」

クウネル
「そこは永遠の謎にしておきましょう」

エヴァ

「何でそうなる！」

クウネル
「さて、次回はセリフでも分かるように天津飯ｖｓあの人です」

エヴァ
「次回の更新は月曜辺りだそうだ。あまり真に受けんでいいと思うぞ？」

クウネル
「ご意見、ご質問、ありましたら気楽にどうぞ」

エヴァ
「それでは」

クウネル
「また次回」

エヴァ
「なあ、このコーナーって次回の後書きでもやるんだよな？」

クウネル
「やると思いますよ、たぶん」

エヴァ
「たぶんって何だ！たぶんって！」

第３８話　一人が二人で二人が四人！？影分身と四身の拳（前書き）

何とか予告どおりに投稿です。前話と比べ、べらぼうに文字数が増えてしまいました。予選でこんだけになるんですから、本戦書いたらいったいどんだけ増えるんでしょう？うーん、初期の頃の文字数がとんでもなくミクロに見える……

ではどうぞ！

第３８話　一人が二人で二人が四人！？影分身と四身の拳

Gブロックでの天津飯の戦い

これもやはり、少し前まで遡ることとなる

「ずあああっ！」

「ぐひぇぇ！」

「せやああ！」

「うごふっ！」

次々と倒れていく選手達

天津飯は当然のことながら、一般選手相手に圧倒的実力差を見せ付けていた

「これで大分倒したな……それにしても悟飯やピッコロ、さらにはトランクスまで出場していたとはな」

予選が始まってすぐに、天津飯は彼らの存在に気づくことができた

勝ち目が薄い大会になったと思ってしまうが、それ以上に

「アスナとの修行で俺はどれだけ強くなれたか……あいつら相手なら思いっきり確かめられるぜ」

強者と戦えること、自分の力を試せること

それに対する思いのほうが大きかった

「そのためにはまず……」

「ぐべらあああっ！」

無謀にも襲い掛かってきた男の腹に、天津飯の肘打ちがヒット

もの一つ言わずに崩れ落ちた

「さっさとこの予選を突破しないとな」

悟飯を始めとした戦友や、アスナはこのブロックにはいない

天津飯は、予選を勝ち抜いた先での彼らとの戦いにしか目が向いていなかった

「ぐへあああ！」

「ふんぎゃあああ！」

「ひでぶううっ！」

「なっ！？」

宙を舞い、天津飯の目の前に落ちてくる男達を見るまでは

全員急所を的確に狙われ、一発の攻撃で気絶させられている

「おっと、すまなかったでござるな。勢い余って飛ばしすぎたでござるよ」

「！！」

男達が飛んできた方向から声

天津飯は迷わずそちらへ顔を向けた

「どうやら、残ったのは拙者とお主だけのようでござる」

そこにいたのは一人の少女

いや、少女と呼んでいいものなのかと天津飯は一瞬悩んだ

身長は自分より少し低いくらいで、充分長身

糸目で、のんびりした印象を感じさせる

だが、それはあくまでも外見だけを見たときの印象

（な、なんて気だ……こんな気を俺は今まで気づかずにいたのか……）

少女の全身から溢れ出る気は、のんびりとはかけ離れたものであった

今の今まで感じ取れていなかった自分を怒ってやりたくなったが、そんな場合ではない

（とにかく、今は目の前の戦いの集中しよう。反省するのはその後でいい）

予選で初めて、天津飯は本気の構えを取った

目の前の少女は、それに値する強者

そうであるのは言うまでもなかった

「うむ、では拙者から……」

少女も構えを取り、天津飯を見据え

「参る！」

まっすぐに向かってきた

「は、速い！」

瞬く間に少女は天津飯に接近

「せえりゃああ！」

連続攻撃を雨のように仕掛けた

天津飯は三つある目を使ってそれらの全てを追う

辛くも防ぐことに成功した

逆に彼の方も、負けてたまるかとラッシュを浴びせる

少女は焦ることなく、待っていましたとばかりに対応した

そのあとは、互いに攻め合い守り合う状態がしばらくの間続いた

ほぼ差が無いように思われたが、徐々に天津飯の方がダメージを蓄積していく

天津飯が一発当てるまでに、少女は二発か三発当てていた

「はああっっ！」

これではいかんと悟った天津飯は、全身から気を放出させて少女を下がらせた

その隙に後ろへ移動して距離をとる

それなりの量の気を消費してしまったが、あの状態がずっと続く

よりかはマシだ

続いて右手の平に気を集め、気弾を放つ

「せやあっ！」

「ふんっ！」

それを少女は片手で弾いた

弾いた気弾は、斜め上に天へと昇る

その一瞬の間に、天津飯は少女の背後へと移動した

「だりゃああっ！」

渾身の正拳突き

今まで他の男に使ってきたのとは全くの別物

並みの者なら骨が砕け、内臓に刺さって致死傷になりかねない一撃

腰の中央目掛けて放たれたそれを

バシィィィッ！

腰を捻らせ、少女はガッシリと片手で掴んだ

「……さっき気弾が本当の狙いの攻撃でないくらい、当然お見通しでござるよ」

「でやああっ！」

「うおっと！」

天津飯へ話しかける少女

そこへ容赦なくハイキックを仕掛けてきた

これには虚を突かれたのか、ギリギリでそれをかわす

身体は正面で、片腕と顔だけが後ろにあるという無理のある体勢

少女は流石に無理があると感じ、すぐに全身を天津飯へと向けた

そのままやや下がって構えを取り直す

天津飯も同じくである

互いに相手をジッと見て、様子を伺ったまま動かない

「……名を聞いてもいいか？」

そんな時こう言ったのは天津飯

そういえば、まだ互いに名乗っていなかったことを思い出した

ただの予選ならばそんなことをする必要はない

しかし、これは自分の記憶に永遠に残る戦い

天津飯はそう確信していた

ならば、やはり聞いておきたかった

そうであると思わせた、この者の名を

「俺の名は天津飯……お前は？」

うむ、と一回頷くと、少女は自身の本名を彼に明かした

「甲賀中忍、長瀬楓と申すでござる」

「あ、あの人強い……天さん大丈夫かな」

「ううむ……」

場所は変わって、ここは大会会場の屋内に位置するロビー

飲み物を買いにここまでやって来た餃子

そこで、ちょうど亀仙人達と偶然再会していた

そのまま、ロビー内にあるモニターで予選の様子を一緒に見ていた

亀仙人達は来るのが遅すぎて、屋外にある観客席を取ることが出来なかったらしい

どうも、ギリギリまでおげれつビデオを見ていた亀仙人が原因のようだ

「ううむ……」

「さっきからどうしたジイさん？腹でも痛いのか？」

そんな亀仙人は、天津飯と楓の戦いが始まった辺りからモニターを見て唸っていた

かなり真剣な表情である

気になったウーロンは、亀仙人に話しかけてみた

「違うんじゃ、ただあの娘が……」

それに亀仙人は、モニターをジッと見たまま答え始めた

「楓さんがどうかしたんですが？」

クラスメイトの楓のことと分かると、五月も気になり問いかける

「あの娘が……」

「「あの娘が？」」

とたんに亀仙人の口が緩み、にやけだす

「……すんごいパイパイじゃと思ってのう」

一同揃って勢いよくずっこけた

その場にクリリンやウミガメがいたら、彼らも間違いなく同様の行動をとっただろう

「そ、そんなことでうんうん唸ってたのかよジイさん！」

「そんなこととは何じゃ！ウーロンも見てみい！あんなお宝、めったに見れんぞ！」

すぐに起き上がり、亀仙人に詰め寄って怒鳴るウーロン

対する亀仙人も楓の映るモニターを指差し、大声で言い返した

「あ、あの、こういう所で喧嘩は……」

「こんな所まで来て乳観賞かよ！どうせクリリンや古のもロクに見てなかったんだろ！」

「何を言うか！ちゃんと見たわい！あと他にもスタイル抜群の金髪姉ちゃんのとか！」

「結局乳目当てで他のも見てるじゃねえか！」

五月の声にも耳を貸さず、二人は口喧嘩を続ける

そんな三人をよそに、餃子はただモニターを見つめ

（天さん、頑張って！）

天津飯の勝利を強く願っていた

そして現在に至るわけである

（今の状態では、近距離遠距離どちらでも勝ち目は薄い……だったら！）

天津飯は突如構えを変えた

身体全体を正面に向け、両腕を胸の前でクロスさせている

小指と薬指を折りたたみ、残りの三本をかぎ爪のように曲げていた

「はあああああ……」

（む、何か技を仕掛けるようでござるな……そうはさせぬ！）

天津飯が何かやってくることは明白

正体は掴めていないものの、その前に潰すのが得策

そう思った楓は、天津飯の方へと駆ける

「むむっ！？」

しかし、一歩遅かった

その場にいた天津飯が、一人から二人に

これがただの影分身なら、楓もさして驚かない

自分が使うのと同じものであったなら

（両方とも実体！？影分身とは違うでござるか！？）

そう、楓の前に現れたのは両方とも天津飯本人

実体と影分身が一人ずつでなく、本人が二人

純粋に、彼は一人から二人に分かれていた

楓がすぐ傍まで来ると、それぞれが行動を起こした

一人は交差させていた両腕を解き、両方の手の平を額に

「太陽拳！」

「うおおっ！」

強烈な光が天津飯の額から突如発生

細い楓の目にも、それは容赦なく入り込んでいった

眩しいを通り越し、痛みまで感じるそれに思わず歩を止め、手で目を覆う

奇襲攻撃にひるむ楓

そんな彼女の横から

「せやあっ！」

「うぐっ！」

もう一人の天津飯が回し蹴りを繰り出し、鈍痛が楓に走る

このまま続けざまに喰らえば危ない

楓は脇腹を押さえながら下がり、攻撃してきた天津飯から距離をとる

まだ視界は戻らないが痛みは引いた

構えを取り直し、ピタッと動きを止めた

気を感じ取り、それによって攻撃に対処しようと試みる

（よし、今のうちだ）

一方の天津飯は、楓がそういう考えに至ったことを察し、再び構えに入った

二人だったのが、今度はさらに倍で四人に

気の数が増えたので、察知していた楓も理解できた

（くっ、分裂はあれで終わりでなかったのでござるか！）

「行くぞ！四身の拳！」

四人の天津飯が一斉に、楓の方へと走る

瞬く間に楓の四方をそれぞれが取り囲み、連続攻撃を叩き込む

楓は気の動きを頼りに攻撃を防いでいくが、さすがに四方を囲まれては全部は無理であった

しかし、ここで楓はあることに気付いた

（一撃一撃の攻撃が軽い……それにスピードもやや落ちたように感じるでござる）

それでも、このまま喰らい続けるのはダメージを蓄積させるだけ

そう悟った楓はその場で空高く飛翔、四方からの攻撃を回避した

当然四人の天津飯も後を追う

この僅か数秒のタイムラグで、楓は仕掛けてきた

「忍！」

「何だと！？」

天津飯は、その目の前の光景に驚愕した

自分がやるのとは比べ物にならない速さで、目の前の少女は四人に増えた

（俺と同じ技！？いや違う……あれは分裂ではなく、一人から三人が出てきたぞ）

まあ勝手は違えど、自分の人数を増やすという点では同じだ

そう思った天津飯に、それぞれ別の楓が迎え撃つ

一対一だった戦いが、四対四へと発展した

「何だ何だ!?向こうも四人に増えたぞ!?」

「しかも、天津飯さんのときとは比べ物にならない速さで……」

「楓得意の影分身アル」

さきほど放たれた太陽拳で、ようやくそっちの勝負を思い出したクリリン達

天津飯に続いて楓も増えたことで、クリリンとトランクスは天津飯と同様に驚いていた

「影分身!?じゃああれは、本人じゃなくてただの分身だってのか!?」

クリリンはアスナのとき同様、古に更なる説明を求めた

「うむ、気を練って自分と同密度の分身を作る楓の得意技アル」

「同密度……どうりで……」

トランクスは古の説明を聞き、うんうんと頷いている

「どういうことだ!?トランクス」

「よく感じてみてくださいクリリンさん。天津飯さんは分裂したことでパワー等が減っていますが、あの子は……」

「ほ、ほとんど変わってない！」

（な、なぜだ……なぜここまで一方的になる……）

戦況は、明らかに天津飯が劣勢

自身をそのまま分裂させた天津飯と、自身はそのままで別に分身を作った楓

個体の戦力差が顕著になってしまった

天津飯の攻撃は難なく避けられ、逆に楓の攻撃は楽々とヒット

この事態に天津飯は困惑する

何とかこの状況を把握しようと、防御に専念しながら頭を働かす

（急に楓の方が強く……いや、強くなったんじゃない！変わっていないんだ！ただ、俺がパワーダウンしただけ……）

僅か数秒間の思考

天津飯はすぐに、この結論にたどり着いた

思えば、楓の技は自分のとは全然違う

先ほども思った通り分裂、つまり分かれるというよりは一人の身体から分身が出現した

そう考えるのが無難、いや、そうとしか考えられない

（随分厄介な技だぜ……流石に少しは一体の時よりパワーは落ちてるみたいだが、このまま四対四ではまず勝てん、かといって一人になっても……！）

ここで思考は中断

天津飯の腹に、楓の拳がめり込んだ

それによろめく天津飯を

「せやっ！」

肘打ちで下へ叩き落した

抵抗もできず、背を叩きつけられる

苦痛の声を漏らした天津飯

そこから続けざまに、残りの天津飯も同じようにやられていく

「これで……終わりでござる！」

とどめを刺そうと、それぞれ楓はさっきまで相手にしていた天津飯に向かって降下していく

手の平には球状の気弾が出来ており、それをぶつけるつもりらしい

（駄目だ、避けれない……迎撃しようにも、今の一人ひとりの力では……待てよ！？）

自身のダメージ量、実力差を理解し、もう無理だと諦めかけた天津飯

だがここで、一つの策が浮かんできた

（もし奴のあの技が、実体と分身とでハッキリ区別されているのだとしたら……）

あくまでも仮定での話

しかも、そうだとしても成功率は低い

ただ、自分の気を無駄に消費するだけかもしれない

（だがあの攻撃を喰らえば、俺は間違いなく負ける……やるしかない！）

この攻撃に全てをかける

そう言わんばかりに、天津飯は四人とも残りの気を身体中から搾り出す

そして

「戻れ！残りの俺よ！」

四人のうちの一人が残りにそう叫ぶ

すると、彼らは吸い寄せられるように一人の下へ

重なるようにして消えていき、最後には一人の天津飯へと戻った

気力が一人一人の四倍となって

「なぬ！？」

突然の事態に戸惑う楓

気を集中させていたのはもちろん分かっていた

しかし、その量の少なさに甘く見てそのまま突撃していた

四人が即座に元に戻るなど、予想だにしていなかった

その天津飯は既に技の構えに入り、一人に狙いを定めていた

両手の平を九の字に曲げ、指を互いに合わせる

カイト型の四角形が完成、それはスコープのような役割も果たし

ていた

その中心には

「喰らえ！」

驚きの表情を隠せないでいる、四人のうちの一人の楓の姿があった

先ほど搾り出した気が全て、天津飯の手に集中されている

天津飯はそれらを全て

「気功砲！」

最後の望みを賭けて放った

自身の最大最強の技に使って

「ぬおおおっ！」

それに思わず目を見開く楓

作っていた気弾を投げつけたが焼け石に水

あっさり打ち消されてしまった

「うわあああああっ！」

気功砲は、楓を全身から覆った

本人は両腕をガードさせて耐える

巨大な爆音が会場全体に響き渡り、煙が上がった

「な、なんですの!?」

「て、天津飯さん!?」

近くで未だ喧嘩を続けていた（太陽拳は死角だった）アスナ達二人も、思わずその動きを止めた

爆音も収まり、徐々に煙が晴れていく

（頼む、効いていてくれ……そして今撃ったあいつが……）

本物の楓であってくれ

そう強く願った天津飯

そして煙がついに全て消えた

「……くそっ！」

そこには楓の姿はなく

「惜しかったでござるな、天津飯殿」

天津飯のすぐ横にその姿はあった

無傷の状態で立っており、仰向けの天津飯を見下ろしていた

「いやいや、拙者の分身をあそこまで見事消し去るとは……感服したでござる」

天津飯が狙った楓は、残念ながら分身のうちの一体だった

本体に当たるのは四分の一

元々成功する方が少ないのは、天津飯も分かっていた

「もしあれが本物の拙者だったら、勝負は分からなかったでござるよ」

「……まだ全力を出さないでおきながら、よくそんなことが言えるな」

「およよ？気付いてたでござるか？」

「あの分身、その気になればもっと作ることが出来た……違うか？」

ううむ、と頭をポリポリと掻く楓

「悪いことをしてしまったでござるな……」

「いや、そんなことはない。アスナとの組み手の時以上に熱く戦えた、感謝する」

天津飯は楓にニッと笑みを向ける

楓も、同じく笑みを向けて返した

「拙者もでござる、天津飯殿。お主のことは一生忘れぬでござるよ」

「嬉しいぜ……そうだ、すっかり言い忘れてたな」

「ん？」

「参った、俺の完敗だ」

何のことかと思った楓に、天津飯は自らの敗北を宣言した

それのすぐ直後に

『長瀬楓選手、予選通過！』

楓の予選通過の宣告が、会場全体に響き渡った

それを聞いて、楓は戻ろうとしたが

「……天津飯殿は戻らぬでござるか？」

仰向けのまま動かない天津飯に、再び目をやった

「あの技……気功砲を全力で使うと、気と生命力を爆発的に消耗してしばらくは動けないんだ」

「おやおや、それは大変でござる。ほれ」

楓は膝を曲げてしゃがみ込むと、天津飯の手を握る

そこから、自らの気を少し分けてやった

少しはマシになったのか、天津飯はゆっくりと起き上がり、そのまま立ち上がった

「すまないな楓、こんなことまで……」

「いやいや、こういう時は助け合うのが普通でござるよ」

ではお先に、と楓はバトルステージを去っていった

「長瀬楓、か……アスナ、いい仲間を持ったな」

ポツリとそう呟くと、天津飯もゆっくりとそこを後にした

～Hブロック～

「やはり楓が勝ったか……もっとも、そうでなくてはお前を相手にするのはつまらんからな」

ピッコロは目の前にいる、楓と同格の強さを持つ少女に目を向けた

あれで楓が負けるようであれば、必然的にこの勝負はつまらないものとなる

だが楓は全力を発揮することなく、天津飯を打ち破った

故に、まだ彼女達の強さは未知数

だからこそ楽しめる

「残るは俺達のブロックだけだ。みんなの結果が分かったんだ、これで心置きなく戦えるだろ？」

「……はい」

どうやら、他の全ブロックが終わるまで互いに待っていたらしい

それらが終わった今、両者は互いに正面を向いて構えた

「来い！刹那！」

「はい！ピッコロさん！」

天下一大武道会予選

最後の試合が、ついに幕を開ける

第３８話　一人が二人で二人が四人！？影分身と四身の拳（後書き）

クウネル
「クウネル・サンダースと……」

エヴァ
「エヴァンジェリンの……」

クウネル
「後書きトークコーナー！というわけで、無事二回目ですね」

エヴァ
「作者の気まぐれであれっきりかと思った……」

クウネル
「さて、今回は……何にしましょう？」

エヴァ
「えええええ！？無いのか！？」

クウネル
「ぶっちゃけて言うとそうです」

エヴァ
「じゃあこのコーナーの意味は何なのだ！？」

クウネル
「次も多分書くと宣言した、作者の意地です」

エヴァ
「中身が無ければ結局駄目だろ！」

クウネル
「そうですよね……たまに感想で質問が来ても、その返信で全部答えちゃいますし……」

エヴァ
「そんな無計画だから、この話の更新までに三人にも見捨てられるんだよ！」

クウネル
「お気に入り登録が三件減ったって意味です」

エヴァ
「もういい！こうなったら私にも考えがある！」

クウネル
「ほう、その考えとは？」

エヴァ
「毎回ゲストを呼び、その話についてトークをするのだ！」

クウネル
「何か随分ありがちな考えですね……」

エヴァ
「うるさい！そうでもしなければもたないだろ！このコーナー！」

クウネル

「まあ確かに、反論のしようがありませんね」

エヴァ
「だがありがちというのも一理ある……そうだ！」

クウネル
「どうしました？キティ」

エヴァ
「だからその名で呼ぶな！リクエストだ、リクエスト！」

クウネル
「え？」

エヴァ
「このコーナーでやるトーク以外の企画のリクを、読者達に募集するんだ！感想で！どうだ、いいアイデアだろう！」

クウネル
「なるほど、ですが……」

エヴァ
「ん？」

クウネル
「この作者、同じ様なことを過去二回やってどっちも失敗してます」

エヴァ
「え！？」

クウネル
「番外編の司会と予選&準決勝の対戦カード、どっちも募集したものの、それに関する書き込みはゼロでした」

エヴァ
「うっ！」

クウネル
「だからおそらく、今回もリクは来ないかと……」

エヴァ
「う、うるさいうるさいうるさい！募集するったらするんだ！」

クウネル
「募集するのは構わないと思いますが、来ませんよ？きっと」

エヴァ
「そんなこと言うな！来るったら来る！」

クウネル
（そこまでして出たいんですか……）

エヴァ
「というわけでこのコーナーの企画を募集する、いつでも感想に書き込んでくれ」

クウネル
「期限はこのコーナーが終わるまでです」

エヴァ

「だから終わらせんと言ってるだろうが！」

クウネル
「ハッハッハ……ではみなさん」

エヴァ
「また次回会おう！

第３９話　喰らえ私の新必殺技！飛翔する翼の戦士（前書き）

この話で予選編は終了です。いやー、あっという間でしたねー…
…何とか夏休みの講習の間を縫って書き上げました、寝不足です。
多分明日は一日中寝てます、ハイ。
ではどうぞ！

第３９話　喰らえ私の新必殺技！飛翔する翼の戦士

～観客席（屋外）～

本戦の残りの枠はあと一つ

予選がラストスパートに近づいていることで、会場全体がより一層盛り上がっていた

そんな観客席の一角で、心配そうに見守る者達がいた

「あとは刹那さんの所だけか……」

「勝てるのかな？刹那さん……」

「相手はあのピッコロだからね……かなり厳しいと思うわ」

のどかとハルナの呟きに、ブルマが言葉を返した

一行は無事、全員分の席を取ることに成功していた

「ピッコロさんはせっちゃん達のお師匠さんみたいなもんやからなー、めちゃくちゃ強いんやで」

「え！？つまり師弟対決ってわけ！？」

木乃香の言葉に、朝倉が身を乗り出した

朝倉達が一行と出会ったのは、席を取るのに成功してすぐのこと

飲み物を買おうとして一時席を離れたのどか
そんな彼女の目の前に、箒に乗った朝倉達がやって来たのだ
魔法秘匿の必要がこの世界には無いと知っていた夕映
そのため会場内まで普通に箒で飛んで入ってきていた
彼女曰く、「あまりに人が多くて鬱陶しく感じたから」らしい
よって上空からのどかを発見できたのだ
二週間ぶりの親友との再会に、のどかと夕映は歓喜
そのままのどかに連れられ、一緒に客席まで来たというわけだ
その夕映も朝倉の隣に座っており、一緒に予選を一から観戦していた
また、ハルナや木乃香との再会にも同様に歓喜したのは言うまでもない
「そういうことやなー、でもせっちゃんも沢山修行したさかい、まだ分からんで」
「ふーん……ねえ夕映っち、そのピッコロさんっていうのはどんくらい強いわけ？」
木乃香の答えに納得すると、朝倉は次に夕映へと問いかけた

「悟飯さん達サイヤ人に次ぐ実力で、以前はお父君の悟空さんと対等の実力を持つライバル関係にあったとか。あとエヴァンジェリンさんと同様に、再生能力を持っていると聞いています」

朝倉の問いに、夕映はペラペラと言い放つ

「夕映すごーい！」

のどかが賞賛の言葉を浴びせる

「いえ、こっちの居候先で色々と話を聞いていたので……」

夕映は嬉しかったのか顔を赤らめながら、のどか含め一同に説明した

ちなみに、それらのことを話してくれたのはアックマン

地獄にいる悪人とも交流が深く、随分とこういうことには詳しいらしい

彼が話すたびに、夕映は目を輝かせながら聞いていたという

「じゃあ、トランクスさんのことも？」

ハルナが試してみるかのように、夕映に尋ねる

「サイヤ人の王子のベジータさんの一人息子で、母親はブルマさん。かつての敵のセルと同様に未来からタイムマシーンでやって来た別次元の未来戦士で、剣の達人。こんなところでしょうか？」

「すっご……」

思わず言葉を失うハルナ

この夕映と言う少女、興味のあることならば優等生顔負けの向学心でその知識を吸収していく

そのため、バカレンジャーの中ではある意味異質な存在である

本当に、こういう向学心を普通の勉強に向けられないのだろうか？

のどか共々成績が上位に位置するハルナは、心の中でこう呟いたという

すると

「もう予選終わっちゃいました？」

「あ、ネギ君お帰りー」

ネギが観客席へと近づいてきた

ついさっき茶々丸を、のどか達と一緒に座っていた葉加瀬の所まで運んできていたネギ

流石にここでは修理は無理と葉加瀬に言われ、彼女共々席を外していた

本当は修理が終わるまでいたかったネギだったが

“後は一人で大丈夫ですから、戻って私の分まで予選見ててくださーい”

と葉加瀬に言われ、こうして戻ってきたのだ

現在茶々丸は、ブルマ達が乗ってきた飛行機の中で葉加瀬に修理されている最中である

手を振って迎えたハルナの隣に、ネギはよいしょと腰を下ろした

ちなみに、その席はハルナの隣であると共にのどかの隣だったりする

「終わってないわよ。あと刹那さんの所のHブロック」

「ピッコロさんとですか……」

「何か、ああして見合ったまま動かなくて……」

戻ってきたばかりのネギに、ハルナとのどかが現状を説明する

「仕掛けるタイミングを、互いに見計らっているんだと思いま……あ！」

「せっちゃんが動いた！」

「やあああああっ！」

足にグッと気を込め、地を思い切り蹴った

刹那はピッコロへと猛然と突っ込む

（どこまで戦えるかは分からない……だが、私は全力を尽くすのみ！）

今度は両拳へと気を集めていく

「だだだだだだだあっ！」

繰り出されるラッシュ

それをピッコロは、一撃一撃丁寧に凌いでいく

以前の修行のときとは違い、両腕を使ってだ

刹那の格闘術の腕が格段に上がっているのを、如実に示していた

「フン、流石だと言いたいが……甘いぞ刹那！」

「なっ！？」

ピッコロは刹那の拳を見抜き、右手首をガシッと掴んだ

そのまま横へと放り投げる

受身を取った刹那の元へ

「ずああっ！」

ピッコロの拳が迫る

前の刹那なら、抵抗も出来ずにこの攻撃を喰らっていただろう

しかし、今の刹那は違う

「くっ！」

バシィィィ！

「ほう」

両手を重ね、その中心でピッコロの攻撃を受け止めた

以前の数倍の動体視力がなければ、到底出来ない代物だ

ピッコロは感心の声をあげるが、当然当然攻めの手を止めることはない

「だだだだだだだだだだだだだだだだだあっ！」

体勢を即座に立て直した刹那へ、猛ラッシュを浴びせる

それに対し刹那も、必死に防御を試みる

攻撃を見極めて、上半身の移動や腕によるガード

懐に潜り込まれぬよう、互いの距離を一定に保つ足裁き

これらもまた、以前より一段と動きに磨きがかかっていた

何発かは喰らっているが、それらも全てダメージは少量だ

「ここまで腕を上げていたとはな……だが！」

すぐにピッコロは戦法を切り替える

バッと後ろに下がり、両手を前に突き出した

「爆力魔波！」

強烈なエネルギー波が放たれる

溜めがほとんど無かったため、威力はマックスには程遠い

だが、奇襲とも言えるその攻撃に刹那は判断が一瞬遅れた

（くっ！避けれない！）

回避は無理と判断した刹那

両腕を交差させ、防御に回った

爆力魔波は刹那の腕に触れた瞬間、煙と共に爆音をあげた

外傷はほとんど見られないものの、その衝撃に刹那の腕はビリビリと痺れた

「がら空きだ！」

「しまっ……」

既に刹那の前方にピッコロの姿はなかった

後ろからの声と同時に、背中へ肘が打ち込まれた

勢いよくうつ伏せで倒れこみ、身体の前半分にもややダメージが与えられる

「ぐ……」

「まだまだあっ！」

痛みをこらえ、再び立とうとする刹那

そこへ容赦なく、ピッコロは攻め入った

再び両手を重ねてガードを試みたが、今度は堪えきれず吹っ飛ばされてしまった

今度は倒れこむ前に舞空術で空中静止、何とか上空へと退避する

（地上戦ではやはり分が悪い、空中戦だ）

「逃がすか！」

当然ピッコロはそれを追う

全身を気で覆わせ、刹那を追い抜きそうな速さで迫ってきた

そのままパンチキックパンチキックと連続で放っていく

（空だったら……まだ分からない！）

刹那は最初同様、ピッコロの攻撃を懸命に防いでいく

やはり防ぎきれず何発かは貰ってしまうが、その回数は地上と比べ激減した

その事実に、ピッコロは当然ながら疑念を抱いていた

（やっぱりだ、刹那は空中戦が上手すぎる……）

刹那の空中での動きは、地上よりさらにキレが増していた

空中での動きが良すぎる

それは舞空術習得直後の実践訓練で、既にピッコロは感じていた

普通はよほどの鍛錬を積まない限り、地上戦同様の戦いを空中でするのは難しい

覚えて半年程度ならなおさらだ

（まるで、前々から空が飛べていたかのような動き……なぜなんだ？）

「でやあっ！」

「ぐおっ！（し、しまった！）」

あまりにもそのことに思考が行き過ぎた

刹那は隙を見つけ、ピッコロに一撃を与えることに成功した

捉えたのは腹部のど真ん中

刹那の右肘がめり込む

いや、めり込むとまではいかなかったようだ

（あそこから瞬時に身を引いてダメージの軽減……流石です、ピッコロさん）

そこから追撃の左の裏拳を繰り出した刹那だが、これは防がれてしまった

空いた背中に攻撃が来る前に、刹那はすぐにピッコロから離れた

これも、地上ではこうは上手くいかなかっただろう

仕掛けるか、仕掛けてきたのを迎え撃つか

両者は空中で静止し、互いを見合っていた

「……刹那、どうやら俺に隠していることがあるみたいだな？」

「！！」

ピッコロがポツリと言ったこのセリフ

刹那は不覚にも、動揺を顔に出してしまった

「その反応……やはりそうか」

「……いつから、ですか？」

「違和感を感じ始めたのはお前が舞空術を覚えてすぐ、確信に変わったのはついさっきだ。お前は空中戦の順応さがやはり異常すぎる、気のコントロール能力は楓に劣っているのにだ」

刹那は、バツの悪そうな顔を隠せないでいる

「ここからは俺の推測だが、お前は元々舞空術以外の手段で自由に空中戦が可能で、そのため楓以上にそれに関する飲み込みが良かった。そしてそれを利用、もしくは応用した技を精神と時の部屋で新しく習得した。どうだ？」

「……仰るとおりです」

ピッコロの推測、それは見事に正解であった

その洞察力に感服し、刹那はコクリと頷いた

「なぜ始めから使ってこなかった」

「ギリギリまでとっておきたかったんです。これを破られてしまったら、私に勝ち目はもうありませんから……」

「なるほど、そしてあわよくば奇襲として仕掛けようとしたと」

「はい……今となってはもう無理ですが」

「……面白い」

「え？」

刹那から一連の事情を聞き、ピッコロはニヤリと笑った

「そこまでしてギリギリまで残しておき、俺に仕掛けようとした技か。興味深い、やってみせろ」

「ええ！？」

これには刹那も目を丸くした

相手のほうから、自身のとっておきの技を使えと言われるなど予想だにしていなかった

そのピッコロは、腕組みをしたまま後ろへ下がっていく

「技の初動を邪魔するなどはせん、思い切りやれ」

「……本当にいいんですか？」

「いいと言っているだろ。それとも、自分の技に自信がないのか？」

「そ、そんなことは……」

「ならば出し惜しみなどするな！お前の全力を俺にぶつけて来い！」

「は、はい！」

刹那が返事をすると、ピッコロは下がるのを止めて再び静止した

そして、いつでも来いと言わんばかりにじっと見つめている

刹那は、ピッコロの気持ちが本当のものなのだと確信した

深呼吸をし、心を落ち着かせる

「では……行きます！」

刹那は気を全身に纏わせ、さらに空高く飛翔

技に入ったのが分かると、ピッコロは刹那の方に顔を向けて構えを取った

（一体どんな技を……！）

ピッコロは目を見開いた

刹那の技自身にではない

加速しながら上へ昇っていく彼女に突如生えた、純白の翼にである

気で生成した物でもない、正真正銘彼女自身の翼

(純粋な『ヒト』ではなかったというのか……だからあそこまで空中戦に……)

未だ驚きを隠せないピッコロ

そんな彼を刹那は上からバッチリと見据え、技の最終段階へと入った

「これが私の新必殺技……」

ピタリと上昇を止めると、自らの翼を最大限にまで広げ

「はあああああああ……」

気を集中させていった

気の光に包まれ、刹那の翼はさらに光り輝く

そして両翼を一旦引き

「五月雨　流星羽気嵐！」

全力を持ってはばたかせた

その瞬間羽一枚一枚から、ゴルフボール大の気弾が無数に放たれた

ピッコロがいる場所から半径数メートルに渡って放たれたそれは、

まるで流星群のようであった

「ぬおおおおおおっ！」

回避は難しいと判断したピッコロ

気弾一つ一つのスピードが、どれも半端なく速いのだ

腕をクロスさせ、防御に回った

次々と被弾していき、爆音と煙が上がる

現在ピッコロが動けない状態と分かると、刹那はさらに追撃する

「もう一発……だあっ！」

再び翼に気を集め、第二弾を放つ

今度はさらに発射範囲を狭め、攻撃を集中させていく

続けざまにやってくる気弾の流星群

被弾率が上がるのを身体で感じ、ピッコロはこの技の本質を見抜いた

（くっ、なるほどな……こうやって動くに動けない状態を作り出し、範囲をどんどん狭めてダメージを与えていく技……しかも気功波で反撃しようにも、気付いたときには撃つに撃てない状態って訳か）

やはり始めに無理をしてでも回避をすべきだったか

そう思うピッコロに、ついには第三弾が放たれる

（今の俺のスピードではやはり回避は無理か……フッ、やはり俺の目に狂いはなかった）

こんな状況にもかかわらず、ピッコロは笑みを浮かべた

（一年ぶりに、こうも俺を熱くさせたんだからな！）

ピッコロは自らが纏うマントに手をかけ

バッ！

肩パットごと下へと投げ捨てた

そして次の瞬間

「ずあああっ！」

「な、なんだって！？」

ピッコロは迫り来る気弾の流星群へ、正面から向かっていった

普通なら問答無用で直撃

そこからさらに連続で当てられ大ダメージ

そうなるのが関の山だ

だがピッコロはそれを

「よ、避けている！？」

今までとは比べ物にならないスピードでそれらをかわし、次々と
掻い潜っていく

あまりにも密集した部分は、流石に手などで弾いているがそれも
充分凄い

よほどのスピードがなければ、こんな芸当はてんで不可能だ

（ばかな！何故あそこまでスピードアップを……そうか！あの肩パ
ットとマント！）

あまりのピッコロのスピードに面食らっていた刹那だったが、す
ぐに理解できた

思えば、自分と楓に重量装備を強いらせていたピッコロ

ならば、彼自身が着けていてもおかしくないではないか

（あのスピードで接近戦に持ち込まれれば、確実に負ける……）

再び翼へと気を集める

その量は、過去三回の比ではなかった

「だったら……これでどうだーー！」

残りの気を殆どかき集めた第四弾、それをピッコロへと撃ち放った

この至近距離だったら間違いなく当たる

そう信じての最終攻撃

目の前に迫るそれらをピッコロは

「きえええええっ！」

「何！？」

右手に威力最大まで溜めていた気功波で相殺させた

弾くのに使っていたのは左手のみ

刹那へと接近する時間を利用し、しっかりと溜めていた

「やはりな……気功波系の技と撃ち合いになれば、数で攻める技の分不利になるようだな」

そのまま刹那の背後へと回り込むとピッコロは

ガシッ

刹那の両翼を鷲掴み

「え！？え！？」

翼を動かして抵抗しても、ピッコロの力の前には無意味

もちろん、手を回そうとしても届かない

ピッコロは翼を掴んで刹那ごと

「でりゃあああああっ！」

「うわあああああっ！」

下へと投げ下ろした

悲鳴を上げて落下する刹那

気をあまりにも使いすぎたため、急停止が上手く出来ない状態でいた

このまま下へと激突すればただでは済まない

何とかゆっくりでもと、刹那は減速を試みるが

「俺がそんなことを許すと思っていたのか？」

「……いえ」

すぐにピッコロが追いつき

「せえりゃあああっ！」

手刀を胴体に打ち込み、落下を斜めへと軌道修正

真下にHブロックのステージがあったのだから、当然刹那は

ドッポーーーーーーーーン！

水面へと大スプラッシュ

あやかの時の比でないそれは、観客席まで飛び込んできていた

『ピッコロ選手、通過！』

実況のアナウンスが流れ、会場が大歓声に包まれる

そして水面ギリギリまで降りてきたピッコロ

しばらくすると

「……ぷはあっ！」

刹那が水面から顔を出してきた

とりあえず、上がってきたことに安心するピッコロ

「自分で飛べるか？手を貸してやってもいいぞ」

「大丈夫です、お構いなく……」

差し出したピッコロの手を制し、刹那は再び舞空術で浮上した

「ううぅぅ、ずぶ濡れになってしまいました……」

全身から海に入ってしまった刹那

当然ながら、今の彼女は水浸しである

「このままの格好でいるのも辛かろう、また服を用意してやる」

「すいません……」

「付いて来い」

ピッコロの後を、刹那が追って飛んで行く

どうやら、選手控え室の方まで行くつもりのようである

「……あそこまで強くなってたとはな、正直驚いたぞ」

「ありがとうございます、ですがピッコロさん」

「ん？」

「楓は、私よりもさらに強いです」

「ほう……」

刹那から告げられたこの言葉

先ほど同様、ピッコロは笑みを浮かべた

『これで、予選全てが終了しました！一時間の休憩ののち、準決勝を開始いたします！』

波乱の大予選は、こうして幕を閉じたのであった

第３９話　喰らえ私の新必殺技！飛翔する翼の戦士（後書き）

エヴァ
「ハッハッハ！読者の諸君、エヴァンジェリンだ！」

クウネル
「クウネルです。今回は随分とご機嫌ですね」

エヴァ
「当たり前だ！ちゃんとこのコーナーのリクエストが届いたのだぞ！しかも二通も！」

クウネル
「作者もビックリしてたみたいですからね……」

エヴァ
「さあ、早速今回のゲストを紹介だ！」

クウネル
「はいはい。えー、今回のゲストは占いババさんと……」

占いババ
「フォッフォッフォ」

エヴァ
（ん？占いババさん『と』？）

クウネル
「アックマンさんでーす」

アックマン
「よう」

エヴァ
「待て待て待て待て待て待てーーー！」

クウネル
「どうしました？ちゃんと新井さんのリクエスト通り、占いババさんを呼びましたよ？」

エヴァ
「その隣だ！何でこいつまで出すんだよ！」

クウネル
「アックマン好きですからね、作者」

エヴァ
「いいかげんにしろ作者ーーー！こいつが出ると毎回読者の何割かがついていけなくなるだろーが！」

アックマン
「おいおい吸血鬼の嬢ちゃん、そんなに怒ると体に毒だぜ？」

エヴァ
「お前が原因だろうが！とっとと退場し……ん？私が吸血鬼だと知っているのか？」

アックマン
「こっちで修行しているデコの嬢ちゃんから、話は色々聞いてるぜ」

エヴァ
「綾瀬夕映か……随分頑張ってるそうじゃないか」

占いババ
「まあな、なんせワシが教えとるんじゃからのう」

エヴァ
「（ムカッ）戦闘魔法もろくに使えずによくもまあそんなことが言えるな」

占いババ
「（ムカッ）ロリばばあなんぞに言われたくないわい」

エヴァ
「な！？ロリばばあだと！？」

占いババ
「思ったことを言ったまでじゃよ」

エヴァ
「こ、このーー！」

クウネル
「落ち着いてくださいエヴァンジェリン。一番の年長者であるあなたが、ここで冷静にならないでどうするんです」

エヴァ
「そ、そうだったな……こういう時こそちゃんと落ち着き、威厳を保たなくては……」

占いババ
「見た目十歳程度のロリばばあに、威厳なんぞあるのかのう」

エヴァ
（ピキッ！）

占いババ
「弟子のネギという子も大変じゃのう……」

エヴァ
（ピキピキッ！）

占いババ
「こんなのを師匠にして……夕映の話も頷けるわい」

エヴァ
（ピキピキピキッ！）

占いババ
「よほど、人を見る目が無かったんじゃろうのう」

エヴァ
「（ブッッッチン！）貴様ーーーー！」

占いババ
「何じゃ？」

エヴァ
「ぼーやのことは悪く言っても構わない……だが！私のことを悪く

言うのは絶対に許さん！もう我慢の限界だ！」

アックマン
（あれ？普通逆じゃね？）

エヴァ
「真祖の吸血鬼の力、とくと見せてくれるわーー！」

占いババ
「ドラキュラマンと同類のくせして……」

エヴァ
「あんなのと一緒にするなーー！くびり殺してくれる！」

占いババ
「……おいアックマン、帰るゾイ」

アックマン
「へいへい（占いババを抱えて全速力で飛翔）」

エヴァ
「ま、待て！逃げる気か！」

クウネル
「そりゃあ、ここで死人や重傷者が出たらまずいでしょうしね（ガシッ）」

エヴァ
「お前もその手を離せ！私も行かせろ！」

クウネル
「丁重にお断りします」

占いババ
（あっかんべーーーーー）

エヴァ
「ムキーーーーー！」

クウネル
「では皆さん、今日のところはこの辺で。また次回お会いしましょう」

エヴァ
「離せーーーーーーー！」

第４０話　感動の再会！？アスナの怒りとネギの涙（前書き）

本編４０話目投稿です。それに伴って、以前修正したところのお知らせをしたいと思います（今更になってしまいましたが）

ドリームアイランド⇒バトルアイランド　に修正しました。

予選編に入った辺りから、ＨＤＤに録っていたＤＢＺの映画版を資料として見てたら、見事に記憶違いだったようで（汗）

一週間前ほどに全部直しておきました、ハイ。ただそれだけです。

ではどうぞ！

第４０話　感動の再会!?アスナの怒りとネギの涙

（な、何であいつらが……それに訳のわからんガキや女までいるし……）

ここは、会場内に建てられた特別展望塔の特別展望室

上から試合を絶景な状態で観戦することが出来る、ＶＩＰ用の部屋である

そこには今大会のプロデューサーを務めるギョーサン・マネー一家に加え

（どどどどど、どうしよう……）

（茶々丸負けちゃった……私と同じくらいの男の子に……）

全世界格闘技チャンピオンのミスター・サタンと、その娘ビーデルが招かれていた

サタンは彼らが出場していた事実にひどく絶望し

ビーデルは茶々丸の敗北にややショックを受けていた

ちなみにその横には、ビーデルの専属メイドとして千雨も入室していたりする

（麻帆良武道会のメンツはほぼ全員……あといないのは龍宮くらい

か）

観客席は見てないが、他の奴らも結構来てそうだなーと主人達そっちのけで思考をめぐらせていた

「あ、すいませーーん！」

「うおっと！」

そんな千雨の肩に、ドンと何かがぶつかった

部屋の入り口から入ってきた、カメラマンと女性レポーターだった

二人は、部屋の窓際にいたサタンへと近づいていく

「ミスター・サタン！予選の様子をご覧になっていかがですか？」

「うおおおおっ！？」

ドガッシャーーン！

サタンにマイクを向け、笑顔で問いかけるレポーター

突如現れた彼女にビックリし、椅子からすっ転げたサタンだったが

「あ、ああ……ぜ、全員まだまだ修行が足りないなー、トリックなんぞに頼りよってからに……ハッハッハッハッハ！」

すぐに起き上がって見栄を最大限に張りまくり、カメラに向かって大口を開けて笑った

顔に冷や汗をガンガン流して
その理由を知っている千雨とビーデルは
（（あーあ、無理しちゃって……））
と、ほぼ同時に心の中で呟いたという

～会場内のロビー～

「ネギッ！」

「わわっ！あ、アスナさん！」

休憩時間だということで、ネギは一同と共にロビーまで飲み物を買いに来ていた

コタローはどうも悟飯と一緒に舞空術で高い所から観戦していたようで、その時ちょうど合流した

そんな時、後ろから聞き覚えのある声が聞こえて振り向いてみたところ

眉を吊り上げたアスナがいたわけである

「ちょうどよかったわ、じゃあ話を聞かせてもらおうかしら……」

両手の指をボキボキと鳴らし、一歩一歩近づいて来る

その迫力に、思わずネギは涙を浮かべた

「あわ、あわわわ……」

「別にいいじゃんアスナ、この世界って別に魔法秘匿の義務とかないんだよ？」

「そうそう、私達だって居候先の人に教えちゃったし」

プルプルと震えるネギに同情してか、事情を聞いていた朝倉とハルナがフォローに入ったが

「あんた達は黙ってて！」

たった一言で切り捨てられた

「私達側であるいいんちょにバレたことが問題なの！だいたい何！？一緒に寝て一緒に修行とか！」

「へへへ、姐さん嫉妬ですかい？兄貴が自分とは違う女と寝たからって」

「握りつぶすわよ?エロガモ」

「すすす、スイマセン！」

ネギの方に戻っていたカモがヒョッコリと顔を出し、ニヤニヤしながらちょっかいをかける

しかしながらアスナの鋭い眼光に、全身を震わせて敬礼

すぐさま自らの発言を謝罪した

「だいたいあんたは昔からうっかりしすぎなの！どうせいいんちょにばれた時だって、自分のうっかりのせいで起こったんでしょ！」

「ち、違います！今回のはコタロー君も……」

（げっ！）

「はああっ！？」

バッとコタローに視線を向けるアスナ

コタローは目を合わさぬよう、そっぽを向いて口笛

「どういうこと！？」

「いや、俺は知らんで？」

「嘘付けーーー！」

アスナはコタローをむんずと掴むと、ズルズルとネギの隣まで引っ張ってくる

そして二人に正座を指示

こんな場所でそこまでしなくてもと一同は思ったが、それを口に出す者はいなかった

従って正座をした二人に、アスナは人の目など全く気にせずガミガミと怒鳴り散らす

（何でここまで怒られなあかんねん……そりゃ確かに俺も悪かったけど）

コタローは無愛想な顔で黙って聞き

（ううう、アスナさん怖いよー）

ネギは今にも泣き出しそうな顔で、深々と反省しながら聞いていた

「にしてもアスナ、随分ご立腹だねえ……私の時はここまで酷くなかったよ？」

「私も私も、何であそこまで怒るんだろう？」

アスナの説教絵図を横目で見ながら、朝倉とハルナはこそこそと会話を交わす

今回のアスナの怒りっぷりは、自分達の時より遥かに凄い

それが確かなことと分かると、やはり疑問に感じて首を捻っていた

いくら考えても結論に達しないので

「ねえ夕映、何でだと思う？」

困ったときの夕映頼み

いつの間にかジュースを購入しており、チューチューとストローで吸っていた

ストローから口を離し、口を開く

「おそらくですが……いいんちょさんにバレてポジションを取られるのが嫌だったのではないかと」

「「ポジション？」」

すぐには夕映の言うことが理解できなかった二人

即座に夕映は解説を入れる

「私達のクラスでリーダーシップの持ち主と言えば、アスナさんといいんちょさんですよね？」

「「うんうん」」

二人はこくこくと頷く

黒百合とのドッジボール戦やそれ以前のさまざまなイベントでも、彼女達の行動性はリーダー的と言うに相応しいものだった

「現にこれまでの魔法関連の出来事で、いつもアスナさんは私達にリーダー的な姿を見せてくれました」

ですが、と夕映は続ける

「ここまでアスナさんだけがリーダーシップを発揮できたのは、なぜだか分かりますか？」

「「……いいんちょが魔法関係者じゃなかったから」」

そうです、と夕映は頷く

「いいんちょさんが魔法関係者になれば、当然あの人もアスナさん同様私達に対してリーダーシップを発揮するでしょう。そうなった場合……」

「「アスナがネギ君に前みたいに干渉できない……」」

「そういうことです。いいんちょさんにちょっかいをかけられない唯一のこと、それがネギ先生の魔法関連のことでしたから」

なるほどねー、と二人はコクリコクリと頷く

「つまり、ヒーローごっこでリーダー役をやりたがる子が自分以外にも現れちゃって、おかげで前みたいに独占してできなくなっちゃった……みたいな感じ？」

「大方そんな感じかと」

ハルナの出した例えに、夕映が正解の判を押した

「つまりはアスナの怒りって……」

「はい、ネギ先生のことを思っての怒りではなく、アスナさん個人の怒りです」

夕映は三人の様子をジーっと見ながら、朝倉の言葉を返した

「わかった!?」

「ふーい……」

「ごめんなさい……」

ようやく説教も終わりに近づいているようだ、既にネギは半泣き

「わかったなら元の世界に返り次第、いいんちょの記憶を消しなさい、以上!」

「ええ!?消すんですか!?」

「ば、ばかっ!」

アスナの言葉に反応して大声を上げたネギ

コタローが即座にふさごうとしたが、当然聞こえてしまった

「当たり前でしょ！第一、バレたら記憶を消すのが普通なんじゃないの！？」

あの時、別にネギは記憶を消すことにイエスともノーとも言う必要はなかった

だがここで、ネギの悪い癖が出てしまった

思ったことをそのまま意見したことで、収まりかけていたアスナの怒りが再び噴火

ネギはまたもや縮み上げることとなる

「でも、アスナさんはともかくのどかさん達は……」

「本屋ちゃん達は仮契約しちゃったでしょ！」

「じゃあ楓さん達は？」

「……ああもう五月蝿い！とにかく消しなさいったら消しなさい！」

「ひいいいっ！」

ついには拳を振り上げるアスナ

このままゲンコツを喰らわすのではないかと一同が思ったその時

ガシッ！

アスナの手を何者かが掴んだ

「一体何をやっているんですのアスナさん!?ネギ先生を泣かせて!」

何度も聞いたその声は、顔を見なくともそれが誰かをすぐにアスナを理解させた

「ちょっ、離しなさいよいいんちょ!」

そう、言うまでもなく雪広あやかである

服を刹那のついでにピッコロから貰い、着替え終わったところでちょうどこの事態を目撃した

「ネギ先生を泣かせるようなお猿さんに、離す手はありません!」

「あんたねー、いいかげんにし……!!」

怒り全開の顔をあやかに向けたアスナ

だがその顔は、振り向いて即座に決壊した

「アスナー、何があったの?ネギ君涙目だよ?」

そう、あやかの隣にはもう一人いた

自分と二週間を共に過ごしたバカレンジャー仲間、佐々木まき絵だ

彼女を目視した瞬間、アスナはようやく自分がしでかしたことを思い出した

（しまったーー！そ、そういえば私もバラしてたんじゃない！忘れてたーーー！）

自分のことをすっかり棚に上げて怒りまくっていたアスナ

バカなアスナでも、この状況は非常にまずいことに気付いていた

もし一同に、私もバラしてしまっていたことが分かったら……

先ほどのサタン同様に、冷や汗をダーラダラと滝のように流していた

（お願いまきちゃん！余計なことは言わないで！）

まき絵に強く願ったアスナ

が、

「アスナが泣かせたの？ネギ君」

「は、はい……ちょっと怒られちゃって……でもアスナさん言ってることが理不尽で……」

「ネギ君強いんだから、得意の魔法でぶっ飛ばしちゃいなよ！」

「「え！？」」

（ば、ばかーーーーー！）

まき絵の言葉に、ネギはコタロー共々目を丸くした

そのことで自分よりバカの親友にバカと言われたことを、彼女は知る由はなかった

「まき絵さん、魔法のこと知ってるんですか!?」

「え?うん」

ネギはあやかの方を見る

あやかは首を横に振った

それを確認するとネギは、そのまま流れるように

「……な、何よ?」

アスナをジーッと見つめていた

彼女の方に顔を向けたまま、ネギはまき絵へと尋ねる

「まき絵さん、魔法のことを教えたのってひょっとして……」

「うん、アスナだよ」

「「「「「「「はあああっ!?」」」」」」」

何じゃそりゃ、と一同は大声をあげ

(いやーーーーーー!)

両手を頬に当て、心の中でアスナは絶叫した

「……つまりアスナさんは、自分のはお構い無しにネギ先生の非のみを責めたと？」

「……そうよ、忘れてたの、悪い？」

「当たり前です！」

逆に正座させられたアスナは現在、一同に取り囲まれていた

代表してあやかがアスナに叱咤する

「そんなこと言ったって……バラしちゃったのはお互い様なわけじゃない」

「一方的にあなたが怒ったから問題なんです！」

「そうだよ！ネギ君泣かせちゃったりして……大丈夫？ネギ君」

「はい、何とか……」

いつの間にかまき絵も一同の輪に加わっている

涙を拭うネギの頭を優しく撫でていた

現時点において、アスナの味方をする者は誰一人いなかった

「と・に・か・く！この落とし前ははっきりとつけておくべきですわね！」

そう言うと、あやかは両手をボキボキと鳴らしてアスナへ近づく

「な、何する気よ！？」

「十発殴らせなさい」

「はああっ！？」

本気顔でスッパリと言い放つあやかに、アスナは思わず正座を解いて後ずさり

ネギをこんな所で正座させて辱めたこと（しかも理不尽）に、あやかは今までにない怒りを覚えていた

「ちょっとちょっと！私このあと試合があるのよ！？」

「木乃香さんがいるから心配ないでしょう？単にこの場で痛みによって反省してもらいたいだけですわ」

ずんずんと迫るあやか

アスナも後ずさりで距離を保とうとするが、背中に誰かがぶつかり

ガシッ

「え！？」

両脇に腕を通されて羽交い絞めにさせてしまった

「あやか姉ちゃん、今回ばかりは俺も賛成やわ」

ネギと共にアスナの理不尽な説教を受け、あやか同様怒りを覚えていたコタローだった

「ちょっとあんた！女を殴るのは主義に反するんじゃなかったの！？」

「『強く』て『敵』やったら別や、第一殴るのはあやか姉ちゃんやし」

アスナは必死に抗議したが、難なく跳ね除けられた

何とか外そうと試みるが、両者の力の差は歴然

咸卦法を使えば何とかなったかもしれないが、羽交い絞めによってそれは叶わず

あやかはコタローのナイスフォローに、ニヤリと不気味な笑みを浮かべて感謝の念を示す

「悪かったって！ホント反省してるから！マジで勘弁してよ！ねえ！」

アスナの悲痛の叫びもあやかには届かず

「ねえいいんちょ、やっぱそれはやりすぎな気が……」

流石にマズイと思ったか、ハルナが割って入ってみたが

「な・に・か？」

「いえ、何でも……」

あやかにガンを飛ばされ、そそくさと自分のいた場所へ戻ってしまった

被害者であるはずのネギも、これは駄目な気がするとは思っていたが

（い、いいんちょさん怖いよぉ……）

あやかの凄みに気圧され、注意できずにただ見ることしか出来なかった

「では、まず一発目……」

殴る相手を見据え、あやかは拳を振り上げた

「い、い、い……嫌あああああっ！」

「ん？クリリン、今さっきアスナの声がしなかたアルか？」

「気のせいじゃないか？」

「そうかもアルね」

会場内に設置された特設カフェ（屋外）で、クリリンと古はくつろいでいた

クリリンはコーヒー、古はオレンジジュースとケーキを注文し、その一時を満喫していた

ちなみに、代金は全部クリリンの自腹である

「それにしても古、予選残念だったな」

「強い相手と戦うのが目的だたから悔いはないアルよ、それに……」

古は照れくさそうに、クリリンから視線を外して頬を掻く

「あの時クリリンが応援してくれて、嬉しかったアルし……」

「古……」

「クリリン、本戦は私の分まで頑張るアルよ！」

「おう！」

古の言葉に、クリリンは握り拳を作って答えた

そんな明るい雰囲気の二人の様子、を少し離れた席から

「クリリンさんと古ちゃん、ホントに仲がいいんですね……」

「そうだな……」

トランクスとヤムチャがこっそりと見ていた

「そういえばヤムチャさん、神龍〈シェンロン〉の二つ目の願いのとき言っていた彼女とは……」

「もう別れたよ」

「……すいません」

こちらは正反対に、重苦しい雰囲気となっていた

「お、探したぞアスナ……って、どうしたんだその顔？」

「頼りにしていた親友がいなくて……」

みんなと別れてしばらくして、天津飯と合流したアスナ

顔は、見るも無残な……とまでは至ってないが、それなりにボコボコであった

あのまま止める者も出ず、あやかの制裁を受ける羽目になったアスナ

気分をスッキリさせてあやかがその場を去ったあと、アスナはすぐさま一同の中から木乃香を探した

しかし

『あれ!?木乃香は!?』

肝心の木乃香がその場にいなかった

実は刹那がピッコロと共に選手控え室に向かった際、木乃香も気になって後を追っていた

その後控え室から出てきた刹那を連れ、ネギ達とは別行動
そのため木乃香の治癒魔法は受けられず
『まだまだ未熟ですが私のでよければ……』
と、夕映の治癒魔法を受けることとなった
あやかの恨みの込められたパンチのダメージは深く、全快には届かずであったのだが
「……何のことかはよく分からんが、モニターはもう見たのか？」
「モニター？」
「準決勝戦の組み合わせがもう発表されているぞ」
「え！？ホントですか！？」
アスナは慌てて駆け出し、一番近くにあったモニターへ向かった
会場の至る所に設置されているため、探すのには苦労しなかった
「ええっと、私は一試合目か……相手は……」
すぐさま自分の相手を確認する
その行為を他の七人も同様に、それぞれ別のモニターの前で行っていた

「よし、頑張るぞ！コタロー君もだよ！」

「当たり前や！」

ネギとコタローは決意を新たにし

「ほうほう、これは楽しみでござるな……」

楓は糸目のままニコッと微笑み

「あいつらとやる前に当たるとはな……面白い」

ピッコロもニヤリと笑みを浮かべる

「よーし！やってやるぜ！」

（うーむ、この組み合わせになてしまたアルか……）

クリリンは高揚し、古はやや複雑そうな表情

（悟飯さんとは決勝戦じゃないと戦えない、か……何が何でも勝つ！）

トランクスは自らの勝利を強く誓い

「あの人大丈夫なのかな……」

悟飯は対戦相手のことをどうも気にかけている

そしてアスナは

「え？この人って天津飯さんが話してた……ええっ！？」

優勝候補筆頭との対戦だと知り、心の底から驚愕していた

第一試合　孫悟飯ｖｓ神楽坂明日菜

第二試合　犬上小太郎ｖｓ長瀬楓

第三試合　クリリンｖｓネギ・スプリングフィールド

第四試合　トランクスｖｓピッコロ

『では、ただ今より準決勝戦を行います！第一試合の選手はバトルステージへお願いします！』

予選以上の大激戦が、今始まる

第４０話　感動の再会!?アスナの怒りとネギの涙（後書き）

ピッコロ大魔王
「はっはっは！読者共！後書きコーナーを始めるぞ！」

エヴァ
「こら待て！いきなり出てくるな！読者が混乱するだろ！」

クウネル
「えー、今回のゲストは紫鏡さんのリクエストでピッコロ大魔王さんと……」

ピッコロ大魔王
「占いババとか言うババアが一日だけってことで連れてきてくれたぞ」

エヴァ
「あのババア、めんどくさい奴を……」

クウネル
「麻帆良学園の学園長でーす」

学園長
「なあなあエヴァンジェリン、何か人外な奴がいるんじゃけど……魔族？」

エヴァ
「確かに魔族だが心配するな、ジジイも立派に人外だ」

学園長
「酷っ！」

クウネル
「さて、最初はこの第４０話の内容についてトークをしたいと思います」

エヴァ
「前回グダグダだったからな」

クウネル
「あなたがブチ切れたからですね」

ピッコロ大魔王
「このジジイの後頭部が異様に長いからな」

学園長
「それって関係無くね！？」

エヴァンジェリン
「えっと、まず聞きたいことがあるのだが……」

クウネル
「何です？」

エヴァ
「いいんちょ無駄に酷くないか？何かキャラ変わってるぞ？」

クウネル
「ああ、それですか」

エヴァ
「文章から察するに顔面にグーパンチを十発だろ？流石にせんだろ、普通」

学園長
「おかげで殴る最中の描写は全面カットじゃしのう」

クウネル
「どうも『可哀想なアスナさん』を強く書きたかったということで、こういうキャラ描写になってしまったとか」

エヴァ
「キャラ崩壊はあまり望ましいことじゃないんだがなあ……」

クウネル
「作者も自覚はしているみたいなので、たぶんもうしないかと」

エヴァ
「自覚してるなら文章直せよ……」

クウネル
「さて、それは別としてついに次回から準決勝戦がスタートですね」

ピッコロ大魔王
「私の息子は勝てるのかのう……」

クウネル
「実際はもう息子ではありませんがね、神様と同化して」

エヴァ
「あ、そうそう、『息子ではありません』で思い出したが、近衛木乃香ってこいつ（学園長）の孫なんだぞ」

学園長
「何その思い出し方!?」

ピッコロ大魔王
「はっはっは！冗談はほどほどにしておけ、同じ魔族であるあのジジイの孫が人間なわけなかろう」

学園長
「ワシれっきとした人間じゃよ!?」

エヴァ
「どうも本当らしいんだよな。ようするに突然変異ということだ」

ピッコロ大魔王
「ううむ……ということはワシも千匹くらい卵を生めば人間の子が出来るのかもしれんなぁ……」

学園長
「ワシは人間！哺乳類！卵じゃないから！」

エヴァ
「いや、たぶん一代では無理だな。何代にもわたって人の血肉を喰らわなくては、ああはなるまいて」

学園長
「人の話聞いとる!?」

エヴァ
「さて、次回は準決勝戦第一試合をお送りするぞ！」

ピッコロ大魔王
「次の更新予定は金曜日、後書きのリクは随時募集中だ」

エヴァ
「ではまた次回」

ピッコロ大魔王
「このコーナーで会おう！」

クウネル
「あなたはこれっきりですけどね、一緒に来た魔族さんも」

学園長
「だから人間ーーーーー！」

クウネル
「学園長先生、今回の後書きのいじられ役お疲れ様です」

学園長
「そんな役でワシって呼ばれたの!?チクショーーー!」

第４１話　準決勝のスタートだ！悟飯ＶＳアスナ（前書き）

えーーっと、またまた予告より早めの投稿です。金曜日まで書き溜めにしとこうか、とも若干考えましたが、やっぱりすぐに見てもらいたいですしね。あとユニーク４万突破しました！ありがとうございます！

ではどうぞ！

第４１話　準決勝のスタートだ！悟飯ＶＳアスナ

『第一試合は、孫悟飯選手対神楽坂明日菜選手です』

少し前に行われた予選ステージの内の一つに、二人の人物が立っていた

その二人に、全観客の視線が注がれる

（うわー、緊張するわねぇ……）

そんな雰囲気に呑まれてしまいそうな少女、神楽坂アスナ

先ほどは一斉に二百人以上の選手が戦っていたが、今回は自分を含めてたったの二人

麻帆良武道会でも同様であったが、その時とは観客の数がまさに桁違い

今までにない緊張が彼女を襲うが

（いやいや、こんな時こそ落ち着かなきゃ……なんせ私の相手は……）

深呼吸をして、目の前の少年を見る

（天津飯さんですら足元に及ばない、優勝候補筆頭なんだから……）

アスナの視線に気付いたのか、悟飯はぺこりと頭を下げる

「あ、よろしくお願いします」

「よ、よろしく（何よ、随分礼儀正しいわね……）」

悟飯の反応に思わずたじろぐアスナ

だがすぐに気を取り直し、構えを取った

それに合わせて、悟飯も同様の行為をする

（とにかく、天津飯さんのアドバイスを信じて戦うしかないわ……）

アスナの脳内に、少し前の天津飯との会話が蘇る

「て、天津飯さん、この孫悟飯って……」

「ああ、俺が前に話した地球最強の男のことさ」

「やっぱり……」

この大会までの二週間、アスナは色々と天津飯から話を聞かされていた

これまで地球を襲った、数々の凶悪な敵達

それに対抗して戦った、天津飯を始めとする地球の戦士達

その中で一番彼が話していたのが、今は亡き親友孫悟空とその息子悟飯であった

ネギやコタローとさして変わらぬ年齢で、父を超えて地球で最強の座に着いたことには目を丸くした

そんな少年が自分の対戦相手

この事実に、アスナは肩を落とすしかなかった

「ネギ達と当たって、強くなったのを見せてやろうと思ったのに……」

「だがアスナ、ほんの僅かだがお前にも勝機がある」

「え!?」

天津飯の言葉を聞き、アスナは伏せていた頭を上げた

「本当ですか!?」

「ああ、お前には俺達には無い技や能力がある。それをうまく使え

ればあるいは……」

『では、スタート！』

「うらららららら！」

「わわっ！」

実況が開始を宣言し、ついに準決勝が始まった

それと同時に、アスナは悟飯へ向けて気弾を連続でガンガン放ってきた

虚を突かれた悟飯は、慌ててそれらをかわしていく

“いいかアスナ、まず試合が始まると同時に気弾を連射しろ。接近戦に持ち込ませるな”

（よしっ！まずは予定通り！）

接近戦に持ち込まれれば、咸卦法を使ったアスナでもまず相手に

ならない

故に序盤は気弾攻撃による遠距離戦、天津飯はこう指示していた

その通りに実行し、今こうして悟飯を寄せ付けないでいる

だが、当然悟飯もそんなことでいつまでも攻め倦むわけが無い

（……よし！見切った！）

試合が始まって僅か十数秒、悟飯はアスナの気弾攻撃の速さを完璧に把握していた

その場で回避するか弾くかのどちらかを行っていた悟飯だったが

（……来たわね！）

ついに仕掛けてきた

雨あられの如く迫る気弾をかわしながら、アスナへと接近していく

ピッコロも出来たことだ、悟飯に出来ないわけがない

（だったら……）

それに対してアスナは、右手の気弾攻撃を中止させて気を集中していく

“だが悟飯なら、すぐにお前の気弾スピードについていってしまうだろう、そうなったら……”

「どどん波！」

“速度の違う別の技で牽制するんだ”

こちらに向かう悟飯目掛けて、アスナは全力でどどん波を放った

こうなることも天津飯は事前に予測し、アスナに対策を伝授していた

通常の気弾よりも早い速度を誇るどどん波

アスナの気弾攻撃の速度に慣れていた悟飯は

「うわわっ！」

思わず足を止めて回避

（今だ！）

これをアスナは待っていた

“もし、それで悟飯が足を止めて避けるようであれば……”

（咸卦法！）

“そこを狙って一気に攻めろ！”

「でやあああああっ！」

「！！」

瞬時に咸卦法を発動させながら、アスナは悟飯へ接近

自身が得意とする回し蹴りを繰り出した

「くっ！」

悟飯は左腕を出してガードする

ぶつかり、交差する脚と腕

咸卦法によって瞬時に上がった攻撃力に、悟飯は驚きを見せずにはいられなかった

（す、すごい……ここまでパワーアップするものなのか……）

コタローに次いで二番目と、比較的早く予選を突破した悟飯

一緒にコタローと上空で観戦した際、アスナの咸卦法も当然目にしていた

この予想外のパワーアップぶりから、対あやか戦ではまだ全力じゃなかったことが伺えた

体勢が悪かったため、押し返しきれなかった悟飯

そこをすかさず、アスナはもう片足で膝打ちをして追撃するが

（……やっぱ一筋縄じゃいかないか）

今度は完璧に右手でガードされてしまう

アスナは即座に攻撃の手を止め、すぐに後ろへ下がる

これ以上の攻撃は無駄でしかない

それを完璧に理解した上での行動だ

距離を取ると再び

気弾攻撃の連射を始めた

「うらららららららぁっ！」

悟飯も次はどどん波を警戒し、アスナの行動に注意を向けながらかわしていた

そしてそれを実行し続けた上で、彼女へゆっくりと近づいていく

（来た来た来た、これも天津飯さんが言ったとおり……）

“この戦法は、おそらく二度も通用しない。二回目に入ったら当然警戒される、だから次は……”

悟飯が天津飯の言うとおりの行動を取ったのを確認すると、アスナは気弾攻撃を中止

突然の行動に、悟飯はアスナを注視

そんな彼の両目へ

“その警戒を逆手に取るんだ！”

「太陽拳！」

「わあああっ！」

アスナの額からの光が注ぎ込まれた

彼女を正面から見据えていた悟飯には、効果てきめんだった

天津飯戦の楓同様、手で目を押さえる悟飯

そこへアスナは猛然と駆ける

「そおおおりゃあああああっ！」

「くそっ、ぐっ！」

ひるんでいた悟飯に、ドロップキックが見事ヒット

一気にステージギリギリまでもっていかれる

「まだまだあっ！」

アスナは続いて気功波を放つ

ただし、悟飯本人でなくステージに

舞空術を使用していなかった悟飯は、突如起こった足場の崩壊に慌ててしまう

「これで……決まれ！」

咸卦法を最大出力にし、アスナは両手を組んでハンマー打ち

これで場外にして勝つのが、天津飯の言った僅かな勝機

全力で振り下ろしたそれは悟飯に……

ガッッ！

「……あービックリした、今のはちょっと危なかったですね」

直撃は出来なかった

目が利かなくなっていても、気の動きからこちらへ攻撃してくるのは理解できた

問題はこのまま自分に攻撃してくるとしたらどこか

左？　右？　上？　下？　正面？　背後？

言うまでもなく上からだ

自分をステージの端に追いやったことから、場外勝ちを狙っていたのは明白

そのため他の箇所に気を配ることなく、悟飯は迷わず両腕を上へ

やって攻撃をガードしたのだ

そして視力が回復した悟飯と目が合い、こう言い放たれてしまった

（くっそーーー！もう少しだったのにーー！）

そんな悔しがるアスナの両腕を跳ね除ける悟飯

そのまま一撃を加えようとしたが

「……こうなったら最終手段！」

アスナは意を決して空高く飛翔、それを事前に防いだ

何をするんだ？と上を見上げる悟飯

遥か上空で静止するアスナ

どうやら、また気弾連射や太陽拳をするわけではなさそうだ

両者の間には、流石に距離が開きすぎていた

真下にいる悟飯を目で捉えるとアスナは

「聞こえるーーー？今からお互い最強の技で勝負を決めましょうよーー！」

「え？」

大声で悟飯にこう言ってきた

この発言に、思わず悟飯はキョトンとなってしまった

自分と彼女との実力差は明白

だからこそこうして奇策を用いて戦ってきたのではないか

なのに、互いの最強技で勝負？

意図が読めない悟飯へ、アスナは技の構えを取った

「避けるんじゃないわよ！かぁ……めぇ……」

「ええ！？」

遠くからでもよく分かるその構えに、悟飯は目を見開いた

腰に両手をやり、気を集中させるあの構え

「はぁ……めぇ……」

アスナの場合、気ではなく咸卦の力を集中させているが結局は一緒の技

そう、悟空やクリリンが愛用するあの技の構えである

「そ、そんな……なんであの技を？……っていうか！」

その技を使うこと自体にも驚いていた悟飯だったが、それ以上に

「この向きじゃマズイって！」

アスナの技を放つ方向に焦っていた

放つ向きは、このままいったら完全に垂直

もし自分が避けたら間違いなく正面から海面へ直撃

下手すると海底が大崩壊を起こし、この辺り一帯が大きな被害を被る

避けるなと言われたが、そもそも避けられない状態にあったのだ

急いで悟飯も、同じ技の構えを取る

言うまでも無く、押し返すためである

それとほぼ同時に、アスナの方は溜まりきったようで

「波ーーーーー！」

思いっきり降下しながら、溜まった咸卦の力を全力で放った

「波ーーーーー！」

対する悟飯もアスナ目掛けて放つ

両者の技、かめはめ波が真正面からぶつかった

「おいおいおい！アスナってかめはめ波まで出来んのか！？」

「そのようじゃのう」

「ウッホウッホ」

こちらは所変わってあの世

この世の様子が見れる特別なテレビを使って、悟空達は天下一大武道会を始めから観戦していた

ちなみに、悟空はやっぱり時間通りに起きれなかったようで、界王に起こされたらしい

今はこうして界王、バブルス、グレゴリーと共に悟飯の試合を見入っていたわけだ

「でもどうやってかめはめ波を……あ、そうか！天津飯もそういえば使えた！」

亀仙流の者の所にいたわけではないアスナがかめはめ波？

そう思っていた悟空だったが、突如十四年前のある戦いを思い出した

第二十二回天下一武道会準決勝第一試合、天津飯ｖｓジャッキー・チュンである

あの時天津飯はかめはめ波を、何回か見ただけで完全にコピーして使用していた

それをアスナに教えたということだろう、と悟空は納得した

「でも、舞空術、どどん波、太陽拳、かめはめ波をたった二週間であそこまで……」

そして同様に、アスナがこの二週間で習得した技の数々に舌を巻いていた

その習得スピードは異常なものが感じられた

「クリリンの所で修行しておる古という子も、舞空術とかめはめ波でやっとじゃからのう」

「ひょっとしたらあいつは、ネギ達以上に戦いの天才かもしれねえな……」

「ウッホウッホ」

感心しながら話す二人の横で、バブルスは未だウロチョロと踊っていた

「ぐぐぐぐぐ……」

咸卦の力を駆使して放ったアスナのかめはめ波

さらには降下スピードも加わり、威力としては自身の中では最高と言えた

だが、悟飯のそれには遠く及ばなかった

最初こそはある程度拮抗していたものの、次第に押し返されていた

無論、悟飯はフルパワーではない

ギリギリ押し返せる位のパワーで、手加減して撃っていた

負けてたまるかと根性を振り絞るが、結局は焼け石に水

それに合わせて、悟飯も威力を少し上げてきた

次第に自分へと迫るかめはめ波

（うーん、やっぱ撃ち合いで勝とうってのは到底無理よね……）

こんな状況に関わらず、アスナはさほど焦っていなかった

（ま、こうなることも分かってたんだけどね）

というか、こうなることを完全に予測していた

（そろそろ……かしらね……）

ゆっくりとこちらへ来る悟飯のかめはめ波を見つつ、アスナは気を伺う

天津飯が話した、もう一つの作戦の

「え！まだ他にも作戦があるんですか！？」

「今言った太陽拳のでも成功率は二割以下だろう。あの悟飯を相手にするんだ、策はいくつあっても足りないくらいさ」

「で、どんなのなんです？それ」

「咸卦法に加え、お前のあの最強能力を使うのさ。つまり、まず撃ち合いに持ち込んで……」

（……今だ！）

「ええ！？」

アスナは意を決し、行動に移った

手に集めていた咸卦の力を全身に戻し、かめはめ波を即中断

降下の勢いはそのままに、真っ直ぐ悟飯へと突っ込んだ

正面からぶつかり合っていた両者のかめはめ波で、その様子は見れなかった悟飯

だが、自分のかめはめ波に対する抵抗感がなくなったことで理解することが出来た

それに悟飯は当然ビックリ

いきなりの事態で、こちらのかめはめ波の中断が間に合わなかった

このままいけば、アスナは正面からかめはめ波をモロに喰らってしまう

元々相手への大ダメージを危惧して戦っていた悟飯にとっては、かなりの焦りを生むことになった

（ま、マズイ！向こうのエネルギーがもう尽きちゃったのか！？）

今は技を止めたがもう遅い

完全にアスナさんを飲み込んでしまった

ネギ君に何て言えばいいんだ

そう思っていた矢先のことだった

「……ん？え、えええええっ！？」

「こーーんなろーーーっ！」

目の前で、悟飯にとっては信じられない光景が映し出された

自身が放ったかめはめ波が、パッと魔法のように消えてしまったのだ

そしてそこを突き破るかのように、アスナが無傷な状態で急接近

「でいやあっ！」

隙だらけの悟飯に、再びハンマー打ちを繰り出してきた

急激な降下の勢いもプラスされ、悟飯は下へと吹っ飛ぶ

（な、何で？……あ！これってネギ君が前に話してた……）

落下しながらも、悟飯はここであることを思い出した

この二週間、悟飯はネギやコタローから様々な話を聞いていた

その内の一つ、『魔法無効化〈マジックキャンセル〉能力』だ

敵対魔法の類を完全に無効化する、遠距離戦においては最強のスキル

最初の方に聞いてそれっきりだったため、すっかり忘れてしまったいた

（もし、気功波系の攻撃も無効化できるとしたら……）

その予想はずばり的中

これによって悟飯は、事態を完璧に把握した

（ネギ君やコタロー君より弱いからって、甘く見すぎてたな……）

自身の甘さを反省すると共に

（よし！こっちも思いっきりやるぞ！）

気を全身から放出させてブレーキをかけ、アスナを見据えて猛然と向かっていった

「や、やった！……って嘘！？」

作戦の成功にアスナはガッツポーズを作っていたが、下の悟飯の様子を見て急変

場外負けには至らず、しかもこちらへやってくるではないか

慌てながらも、最初のときのように気弾を連射したが

「え！？どこ行ったの！？」

すぐに悟飯が視界から消えた

慌てるアスナの背後にすぐさま

「せやっ！」

「！！」

悟飯が現れ拳を振るう

なんとか第一撃は防ぐアスナだが

プスンッ

「えええ！？こんな時に！？」

直後に咸卦法が解除された

気弾連射等であまりにも多用したため、気が底をついて魔力とのバランスが崩れてしまった

こんな状態で悟飯の攻撃を防ぎきれるはずはなく

「やあっ！」

「ぐっ！」

「せいっ！」

「ぐふっ！」

全撃ヒットである

脇に一発、腹に一発

その二撃でよろめいたところへ

「でいやっ！」

お返しとばかりにハンマー打ち

悟飯の（それなりに）全力のそれに、アスナは抵抗一つもできずに

ドッポーーーーン！

大スプラッシュを引き起こすこととなる

予選から数えて本日三回目である

『孫悟飯選手の勝ちーーー！』

実況のアナウンスを聞き、悟飯は軽く笑みを浮かべて降下していく

「やったな悟飯ーー！」

「あ、コタロー君！」

観客席から自分を呼ぶ声を聞いて振り返ると、そこには笑顔で手を振るコタローの姿が

悟飯も手を振って応えた

「コタロー君も次の試合頑張ってーー！」

「あったり前やーー！絶対勝ったるでーー！」

『第二試合は、犬上小太郎選手対長瀬楓選手です。両選手はバトルステージに……』

「おっし！行くで！」

実況が言い終わる前に、コタローは観客席から一気に飛び移ってきた

スタッと着地すると、上を見上げ

「楓姉ちゃんもはよ来いやー！さっさと勝負しようでーー！」

特別展望塔のてっぺんに立っていた楓を大声で呼んだ

「あいあい。そう慌てずとも、拙者は逃げも隠れもせぬでござるよ」

上から見下ろしながらコタローにそう言うと、楓はそこからジャンプ

「ほいっと」

クルクルと縦回転をしながら、コタローの目の前へ着地した

「ではでは、見せてもらうでござるかな」

「へっ、前の俺と同じと思ったらアカンで！」

既に悟飯は退場しており、あとは開始の合図を待つだけ

両者構え、互いに自分の相手をジッと見つめていた

そして

『では、スタート！』

修学旅行以来になるコタローのリベンジ戦が、ついに始まった

「え!?何!?もう次の試合なの!?」

ようやく水面から顔を出したアスナを、そこに残したまま

第４１話　準決勝のスタートだ！悟飯ＶＳアスナ（後書き）

クウネル
「どうもみなさん、クウネル・サンダースです」

エヴァ
「エヴァンジェリンだ、今回も早速後書きコーナーを始めるぞ！」

クウネル
「今回のゲストは私やナギのかつての戦友、そしてアスナさんと同じく咸卦法の使い手の……」

タカミチ
「高畑・Ｔ・タカミチです。読者のみんなとはプロローグ以来かな？久しぶり」

エヴァ
「ちっ、今回はタカミチか……出番はプロローグのでもうお終いかと思ってたのに……」

タカミチ
「拗ねるなよエヴァ、僕みたいに本編で出番がないからって」

クウネル
「そうですよ」

エヴァ
「うるさい！その上から目線やめろ！ムカつく！」

タカミチ
「わかったわかった」

クウネル
「さて、今回はアスナさんが悟飯君相手に大分健闘しましたね」

エヴァ
「最後はギャグ的な終わり方だったがな」

タカミチ
「でも僕もビックリしたよ、あそこまで強くなってたとはね……僕も本気を出さなきゃ危ないかもな」

エヴァ
「……ほう、ということは今の神楽坂明日菜と戦っても本気ならまず勝てる、と？」

タカミチ
「作者はそう考えてるみたいだよ」

エヴァ
「どんだけこっち側のレベルに補正入れる気なんだよ作者……」

クウネル
「まあまあ、今に始まったことじゃないですし、古＝クリリンとか」

エヴァ
「それをまた出すのはやめろって……思い出した読者から突込みが来るかもだろ、第一なあ……」

タカミチ
「でも、それによってエヴァにも活躍の場があるかもなわけだろ？」

エヴァ
「え？」

クウネル
「たしかに……もしエヴァンジェリンが本編に登場したら、凄いことになるでしょうね」

エヴァ
「そ、そうか？」

タカミチ
「ああ、前に作者が感想の返信で書いたみたいに、ボス級キャラもアッサリなぎ倒しちゃったり……とかね」

エヴァ
「う、うむ……考えてみればそうだな……」

クウネル
「ですから、これに深く突っ込むのはやめましょう、ね？」

エヴァ
「そ、そうだな……よし！そうしよう！」

クウネル
（よかった……これに延々突っ込まれてたらコーナーの進行に差し支えますからね、ナイスでしたよ！）

タカミチ
（いやいや、困ったときはお互い様さ）

クウネル
「さて、次回は準決勝第二試合、コタロー君と楓さんの試合をお送りします」

エヴァ
「お互い精神と時の部屋で半年も修行してたわけだからな……第一試合以上の戦いになりそうだな」

タカミチ
「ああ、それに楓君はまだ新必殺技を予選では見せていない。それにも期待したいね」

クウネル
「次回の更新は、明後日の金曜日か再来週の月曜日です」

エヴァ
「え!?何だそのものすごい間は!?」

クウネル
「作者が諸事情で一週間合宿に行くので、原稿の執筆および投稿が出来ないそうです」

タカミチ
「このコーナーのゲストキャラは随時募集中」

クウネル
「ちゃんと返信は携帯を使って出来ますので、合宿中もお気軽にど

うぞ」

エヴァ
「おい待て！携帯使えるならそっちで送れよ！」

クウネル
「パソコン投稿にこだわりたいそうです。それにどうせ、書く時間も無いですし」

エヴァ
「そういうことな……」

タカミチ
「では、次回のネギドラも……」

クウネル
「お楽しみに」

タカミチ
（で、実際エヴァは本編で出番はありそうなのかい？）

クウネル

（今のところリアルに予定は無いそうです、エピローグ以外）

第４２話　今度は互いに全力勝負！楓ＶＳコタロー（前書き）

読者の皆様、大変お久しぶりです。つい先日帰還して、原稿を死ぬ気で書き上げました。八月に入ってようやく最初の投稿です、ハイ。

ではどうぞ！

第４２話　今度は互いに全力勝負！楓ＶＳコタロー

「先手必勝！」

最初に仕掛けたのはコタロー

早くも気を全身にたぎらせ、攻める気満々である

「そりゃそりゃそりゃそりゃそりゃあ！」

さらには影分身で数を増やし、四方から逃げ場の無い連続攻撃を繰り出した

「拙者も負けぬでござるよ」

対する楓も、影分身で同数まで増やして攻撃を防ぎ、反撃する

予選Ｇブロックと同じく四対四

ただし、両者の攻防は見事に互角だった

「……腕を上げたでござるな」

「へっ、まだこんなもんやないで！そら！」

コタローがこう言うと、新たに作った四体の影分身が飛び出した

上空へと移動したその四体は、下にいる楓達を見据え

「かぁ……めぇ……はぁ……めぇ……」

「！！」

「波ぁ！」

同時にかめはめ波を撃ち込んだ

威力は影分身が撃ったもののため、最大というわけではない

しかし、それでも直撃すれば戦局は大きく傾いてしまう

回避、もしくは迎撃を試みようとするが

「そうはさせへんで！」

「くっ！」

初めから攻めていた四人に阻まれ、それは叶わず

四人共がかめはめ波を直撃することとなった

すぐ直後に後ろに下がったため、コタロー達は巻き添えを喰わなかった

「よっし！」

作戦の成功に喜ぶコタローだったが

「甘いでござる！」

「なっ！？」

背後から楓の声

慌てて振り返るが既に遅し

ステージの四隅に位置していた四人の楓が猛然とダッシュ

一人に一発ずつ回し蹴りを放ち、四人を別方向へバラバラに飛ばした

「ぐあああっ！」

それは四人ともにクリーンヒット

本体はダメージ、影分身の三体はボンと音を立てて消えてしまった

すぐに上空の四体が降り立ち、本体のコタローの周りを囲む

楓の追撃を想定しての行動だった

しかし楓は攻めてこず、様子を伺っているだけである

「ふっふっふ、影分身で拙者を出し抜こうなどとは笑止千万でござるな」

（くそっ！いつの間に四体出したうえにすり替わってたんや！？気づけへんかった……）

自分も半年間磨きに磨きをかけたつもりだったが、楓には及ばず

コタローは目の前の相手の予想以上のレベルアップに焦りを覚えていた

「では……お次はこちらから」

「！」

「参る！」

楓四人が一斉にコタローへ向かってきた

コタロー側は全員構え、それを迎え撃とうとする

と同時に思考

（現在の状態は五対四……楓姉ちゃんはそれを五対五にするため、間違いなくもう一体影分身を出すはず……）

そこを見切って、本体を叩く！

このコタローの考え、ピタリと的中

（五対四……いささか不利でござるな、なら……）

その結論に至ってすぐ、楓は四人から五人へ

常人の目では、誰から新たに出たかを目視するのはまず不可能

だが、コタローなら別

（見えた！影分身が出てきたのは右から二番目や！）

自身をその右から二番目の楓、残りをそれぞれ一体ずつ担当させる

五人が五人とも、まずは第一撃の防御に成功

続く二撃目三撃目も、当てさせはしなかった

すると今度は逆に、コタロー側も反撃をし始める

再び熱い攻防が始まった

互いに一歩も引かないこの状況

しかしここで、コタローは考えていた策を用いた

「ずあああっ！」

（む！横から！？）

コタローの影分身のうちの一体が、捨て身覚悟で援護射撃

本体のコタローと攻防中の楓めがけて、片手でエネルギー波を放ってきた

その隙を突かれ、その影分身は一撃を貰う羽目となる

だがこれもコタローの計算のうち

それでもお釣りが来るくらいのチャンスが舞い込んできたのだから

「くっ！」

楓は虚を突かれたことにより、避けるのに困難をきわめた

身体を無理にひねらせ、僅かに服を掠らせながらの回避

その現在の体勢は、どうぞ攻撃してと言わんばかりのもの

当然コタローはそれに応えた

「今やっ！」

まずジャブ程度に一撃

続けざまに、威力とスピードを上げながら二撃三撃四撃五撃……

全て完全にヒット、楓も防ぐに防げない

（さ、さっきよりも、ずっと速い！）

「狼牙風風拳！」

連撃中に手に集めていた狗神、それがついにＭＡＸまで溜まる

両手とも合わせ、思いっきり楓の腹へ掌底を打ち込んだ

「ぬわああっ！」

ヤムチャと同様に、真後ろへぶっ飛ばされる楓

「よし！今度こそ決まっ……ええ！？」

コタローの視界に、ありえない光景が入ってきた

目の前の楓が、ボンと音を立てて消えたのだ

そう、コタローが攻撃したのは本体でなく影分身

「嘘やろ！？さっきはちゃんと見切ったは……！まずいっ！」

混乱してしまったコタローは、判断が一瞬遅れた

理由はどうあれ、あれは本体じゃない

だとすれば本当の楓は……

「隙だらけでござるよ」

コタローの影分身と交戦中だった誰か

そしてその本人は、コタローへ背後から迫っていた

「はああっ！」

右手から気功波が放たれる

それをコタローは、腰をひねらせて片腕で受け止めた

防ぎきれず、腕を含めた右半身に痛みが走る

そんな彼の正面へ楓は瞬時に移動し

「せえやっ！」

鳩尾へ肘打ちを喰らわせた

「うぐっ！」

気功波以上の痛みで、コタローは苦痛の表情を浮かべる

だが、続く顔面へのストレートは何とか避け、急いで下がった

「はあっ、はあっ、はあっ」

「どうしてあれが影分身だったか不思議でござるか？」

「！！」

ズバリ思っていたことをそのまま言われたコタロー

思わず動揺が顔に出た

「なあに、いたって簡単な理由でござるよ」

人差し指をピンと立てた

「さっきの五人目は、影分身から出した影分身なのでござる」

「はああっ！？」

楓の口から飛び出した言葉を、コタローはすぐには信じられなかった

「んなアホな！そんな芸当できるわけ……」

「では、さっきのはどう説明するでござるか？」

「うっ……でも、そないなこと出来たとしても……」

「そう、その影分身は他と比べて極端に弱くなるでござる」

楓やコタローが使う影分身は、身体にある気を練ることによって作り出している

そのときの気の量が、その影分身の容量となるわけだ

そこからさらに作るとなれば、事実上の半減である

正確に言えば新たな影分身と、それを作った影分身が他より極端に弱くなるということだ

「だから拙者は、コタロー殿に突っ込む直前に……」

残りの四本も全て立ててパーを作る

その周りに、淡い気の光が灯った

「囮の影分身に触れて気を追加補充したのでござるよ、影分身一体分の気を」

「くっ……」

つまりは全て楓の計画通り

影分身を出したのはどれか見切られるのも

それに標準を合わせ、狙って攻めてくるのも

（駄目や！やっぱり影分身を使った戦術じゃ、楓姉ちゃんには通用せえへん！）

「……本気を出すでござるよ、コタロー殿」

「！！」

ポツリと楓から出た言葉に、コタローは目を見開いた

「お主にはまだ、修学旅行の時から隠していた奥の手があるでござろう？」

「……やっぱ覚えとったか」

苦笑するコタロー

「麻帆良武道会でも見れずじまいだったでござるからな」

「そっか、まだ楓姉ちゃんには見せたことあらへんかったもんな」

知っているのは、仲間の中ではネギとアスナとのどかと刹那だけ
（＋カモ）

ピッコロやあやか、親友の悟飯にまでも一度も見せていない
それほどまで、コタローはそれを奥の手としてとっていたのだ

「……しゃーない、確かにあれ使わんと勝ち目無いみたいやし」

コタローは残りの影分身を自身へと戻し、気を補充する
それを見て楓も、同じく戻す
互いに戻したのは三体ずつ

コタロー側の消えた一体は、援護射撃をしたあの一体のようだ

「ほな、いくで」

「うむ」

上に着ていた学ランとTシャツを脱ぎ、パサリと下に落とす
そして両手をギュッと握り締め、全身に力を込め始めた

「はあああああああああああああ……」

「な、なんと！」

楓は両目とも見開き、驚きを露にした

髪は黒から白銀へ

それと同色の毛が腕などから生えてくる

さらには自身の体格も、前より大きいそれへと変貌

そして何より、彼から発せられる気が爆発的に上昇してた

「獣化、完了や」

「あ、兄貴……」

「うん、ついに使ってきたね」

「す、すごい……変身した途端、あんなに気が膨れ上がって……」

始めてみる親友の変身した姿に、悟飯は驚きを隠せないでいた

いや、悟飯だけではない

初めて見た者は誰もが、それに対して驚きを見せていた

それはもちろん、ピッコロとて例外ではなかった

「刹那だけじゃなく、あいつまであんな奥の手を……まあ、あの耳からして何かあるとは思っていたが……」

観客席の端っこの方でひっそりと、壁に背を預けて観戦していた

「あの変身で、パワーは完全に楓を上回った……さて、どうなることやら」

「はっはっは！どうや楓姉ちゃん！」

（なんと重い攻撃……それに速さもかなり上がってるでござる）

獣化してすぐに、コタローは楓へと攻めたてた

パワー、スピードが共に上昇しており、楓を圧倒している

スピードはまだ楓が上であるものの、ピッコロの言う通りパワーは楓のそれを見事に越えていた

楓は持ち前のスピードを生かして凌ごうとするが、力の面で押し負けてしまう

（このままではジリ貧……何とか策を考えねば……）

「ずあああっ！」

「しまっ……」

ここでコタローは気合砲を放った

先ほどから肉弾戦のみの攻防だったため、楓はとっさに反応できなかった

腹に受け、思わずそこを手でかばう

その隙を見てコタローはさらに

「せいやあああっ！」

「ぐあああああっ！」

真上へ楓を蹴り上げた

空へグングンと昇る彼女に、コタローは瞬時に舞空術で追いつき

「これで……しまいやっ！」

ハンマー打ちで叩き落とした

上昇の際の比でない速さで急速に降下

チュドーーーーン！

「よっしゃ！」

大きな音を立てて激突

砕けた床の石材が、粉塵で辺りを包み込んだ

今度こそ！今度こそは決まったはず！いや決まった！

絶対的な自信を胸に、コタローは一点を注視する

そして警戒を解くことなく、粉塵が晴れるのを待つ

「しっかし我ながら派手にやったなー、まだ姿見えへんわ……ってうおっ！」

すると、その直後に事態は急変

いまだ消えない粉塵のドームを、突如無数の気弾が突き破った

「くっそ！やられてへんかったか！」

自分へと飛んでくるそれらを、コタローは弾きつつかわしつつで対処する

気弾は一つとして、コタローに命中することはなかった

（でも流石に堪えてるみたいやな……何発か完全に俺から軌道が外れとった）

そしてついに粉塵が晴れ、楓が姿を現した

全身傷だらけで服はボロボロ、口元には血を拭った跡が見られた

「うーむ、やはり当たらなかったでござるか……」

「楓姉ちゃん、さっきみたいな気弾やったら獣化前でも余裕やで？」

満身創痍の楓を見て、コタローは思わず笑みを浮かべた

影分身なら、ああなるまえに消滅してしまう

つまりは本物！今度こそ完全に命中！

勝負の流れは完全に自分にあると強く確信していた

だが、楓の表情に動揺や焦りは片鱗すら見られない

「まあ良いでござる、当てること自体は目的ではなかったゆえ」

「何やと？」

「周りをよく見てみるでござるよ」

楓の意味深な言葉を受け、首を横に回す

「げげえっ！」

このとき初めて、コタローは現在自分が置かれている状況を把握した

あの気弾らが消えることなく空中で静止し、周りを取り囲んでいた

丁度、楓を注視していた彼の視界に入らないギリギリの範囲で

そこからさらに、楓が両手をグッと動かして気弾を何個か操作

３６０度完全にコタローを包囲した

「さて、どうするでござる？」

（逃げ場がなくなった……ダメージ覚悟で突破を図るか？それとも……）

困惑するコタロー、そして打開策を模索

この僅かな間が、楓に更なる絶好の機会を与えた

「忍！」

残りの気力の大半を用いて、影分身を十五体作り出す

これこそ、ピッコロをも唸らせた十六分身

「まだこの技は、終わりではない！」

影分身が全員、本体とまったく同じ行為を行った

大量の気弾発射、そして空中静止

気づいたコタローだったがもう遅い

「なななあっ！？」

単純計算にして十六倍

そんな密度で、気弾はコタローの周りに存在していた

これでは腕一本すら通らない

（しまった！さっさと行動してれば……）

「せやっ！」

楓は目の前で両手をガッと組む

気弾は瞬く間に接近、そして

「な、何やこれ！？」

くっつき合って一つの球となり、コタローを包み込んだ

さらには大きさが小さくなっていき、どんどん圧迫していく

「く、くそ！出れへん！」

必死に抵抗を試みるが、力で押し返そうにもビクともしない

気功波を撃とうにも、ここまで密閉空間では危なくて撃つに撃てない

「あ、あがが……」

ついには、直径数十センチ程にまでその球は小さくなった

「ふむ、そろそろ頃合か……」

もうコタローがギリギリの状態だと推測した楓

「ではこれで、終わりでござる！」

技のフィニッシュに入った

組んでいる両手に一層力を込めた

「はあああっ！」

すると

（こうなりゃ自爆覚悟で気功波撃つしか……ってええ！？何や何や！？）

球がピカーッと黄色に発光

次の瞬間

カッ！

「う、嘘！？」

ボゴーーーーーーーン！

「ほげぁーーーーーーーーー！」

轟音と共に爆発を引き起こした

「これぞ新技、忍空密爆球」

超至近距離から爆発を喰らったコタロー

意識はすっかり飛んで気絶状態

なにやら白い煙のようなものが出つつ、獣化が解けながら落下していく

それを楓は慌てることなく落下地点まで移動し、下から両腕で受け止めた（影分身は解除済み）

「よっと、大丈夫でござるか？コタロー殿」

当然ながら返事はない

（む？思ったより傷が浅い……あの獣化は防御力も随分上がるみたいでござるな）

長期戦だったらまだ分からなかったかもしれない

そんなことを思いつつ、楓はコタロー本人と彼が脱ぎ捨てた服を回収

木乃香の所へ真っ直ぐ飛んでいった

「痛たた、これは拙者も治療してもらわねばマズいでござるなー」

『第二試合は長瀬楓選手の勝ちーー！続いて第三試合です！』

「じゃあ悟飯君、行ってくる！」

「うん、がんばってネギ君！」

「古、見ててくれよな！」

「う、うむ……」

いよいよ準決勝も折り返し

波乱の第三試合が今、始まろうとしている

第４２話　今度は互いに全力勝負！楓ＶＳコタロー（後書き）

クウネル
「後書きコーナー！皆様お久しぶり、クウネルです」

エヴァ
「エヴァンジェリンだ、ついにこのコーナーも五回目だな」

クウネル
「そうですね、あの作者がよくやったものです」

エヴァ
「さてクウネル、今回のゲストは誰なんだ？」

クウネル
「はい、今回は影分身が出てきたということで……懐かしのあのキャラです」

エヴァ
「あのキャラ？」

ムラサキ曹長
「わっはっは、ついに俺もこの小説に登場でき……」

エヴァ
「せえええええいっ！」

ムラサキ曹長
「ぶべらっ！」

バタッ

エヴァ
「おいクウネル、何度も言ったよな？あまりにマニアックなキャラを出すと読者の何割かが確実に……」

クウネル
「冗談ですよ冗談、そんなに怒らないでください」

エヴァ
「なら始めからするな！」

クウネル
「えー、気を取り直しまして、今回のゲストはまたもや私やナギの戦友……」

ラカン
「ジャック・ラカンだ！随分本編は熱い展開になってんなオイ！」

エヴァ
「こいつ時系列的に出して大丈夫なのか？」

クウネル
「それともう一人、ＤＢＺでは屈指の筋肉キャラ、一時はあのベジータさんをも苦しめたフリーザ軍のエリート戦士」

リクーム
「ギニュー特戦隊、リクーム！とおうっ！」

クウネル
「以上のお二人です、なおリクームさんは例の如く占いババさんが連れてきました」

エヴァ
「あーもう、何でこんな暑苦しいキャラを二人も……」

ラカン
「筋肉キャラ繋がりってことらしいぞ」

リクーム
「そうそう、だからそんなに怒るなよ、エヴァンジェリンちゃん」

エヴァ
「お前なんぞにちゃん付けされたくないわ！やめろ！」

リクーム
「えーーーー」

エヴァ
「えーーーー、じゃない！腹立つんだよお前に言われると！」

クウネル
「まあまあ。さて、話は変わりますが、ついに楓さんの新必殺技が登場しましたね」

エヴァ
「ああ、随分作者は技名を悩んだらしいぞ」

ラカン

「その割にはパッとしないネーミングだなー」

リクーム
「そうそう、俺があの技を使うんだったらもっとかっこいい技名にするな」

ラカン
「俺も同じくだぜ」

クウネル
「……嫌な予感がしますが、どんな名前ですか？」

リクーム
「リクームボールダイナマイト！」

ラカン
「エターナルラカンバクレツボール！」

クウネル
「……」

エヴァ
（ああ……こういう意味での繋がりもあるのな……）

ラカン
「ん？どうした二人とも、急に黙り込んで」

リクーム
「なあなあラカンちゃん、あいつらなんか放っておいて俺達だけで続きやろうぜ！」

ラカン
「あ、そうだな。さて、次回のネギドラ！は準決勝第三試合だ！」

リクーム
「更新予定日は木曜か金曜だ！見逃すなよ！」

ラカン
「この後書きコーナーのゲストキャラもまだまだ大募集中だ！みんなのリクエストを待ってるぜ！」

リクーム
「じゃあ次のネギドラ！を……」

ラカン
「楽しみに待ってろよ！」

クウネル
「最後乗っ取られちゃいましたね」

エヴァ

「お前があんなこと振るからだろ！」

第４３話　年齢真逆の兄弟弟子　クリリンＶＳネギ（前書き）

予告どおりに投稿できました、かなりギリでしたが（汗）。さて、今回はネギの新技も登場したりしちゃいます。どんなのかは本編で、ちなみに刹那みたくオリ技じゃありません、スイマセン。

ではどうぞ！

第４３話　年齢真逆の兄弟弟子　クリリンＶＳネギ

『第三試合は、クリリン選手対ネギ・スプリングフィールド選手です！』

既に両者共にステージに上がり、向かい合っている

（確かあの人は、古老師やトランクスさんと一緒にいたな……随分親しかったようだけど……）

ここでネギは、予選でのことを思い出す

刹那ＶＳピッコロが始まった辺りでようやく観戦に入ったネギ

その際、Ｄブロックのステージ上で腰掛けている彼らを目撃していた

終了後すぐに会いに行こうと思ったが、飲み物でも買おうとブルマ達が提案

そのままアスナと出くわしてしまい、結局会えずじまいで終わっていたのだ

ちなみに古はネギの存在を、予選で通過のアナウンスを聞いてその段階で認識していた

（ちゃんと古老師と会って、話しておかないとな……）

そんなことを思いながら、ネギは構えをとって臨戦態勢に入った

一方のクリリンは、ネギの姿を見て一層警戒を強めていた

（古の一番弟子、ネギか……悟飯と親しかったってことは、まさかあいつと二週間修行を！？）

だとしたら勝つのは難しいかもなー、と内心思ってしまったがすぐに首を横にブンブンと振った

（いやいやいや！古とあの時誓ったじゃないか！あいつの分まで精一杯戦うって！）

そんな後ろ向きな考えでどうする！と自らを叱咤

キッとした目つきでネギを見た

（自分を信じて思いっきり戦う！そして何が何でも勝つ！）

自分も構え、ネギと同じく臨戦態勢へ

あとは、試合開始が告げられるのを待つだけ

すると、ネギがある反応を起こす

（え？構えが僕と同じ？）

目の前の相手、クリリンの構えは自分とまったく同じ、まるで鏡のよう

そのことにネギは疑問を抱いてしまった

彼と同じく、クリリンも古から体術を教わったのだから言わずもがな

しかしそれをネギは知らない

一方のクリリンは知っていたため、先にネギの構えを見てもなんとも思わなかった

ほんの僅かな差

しかし、これが意外にも大きかった

（古老師と一緒にいたってことは……まさか……）

『スタートです！』

「でやあっ！」

「し、しまっ……」

さっきまで半分をクリリンの動き、半分をアナウンスに意識を向けていたネギ

だが、クリリンの構えの理由の究明に意識を少し向けてしまった

そのため刹那だが出遅れた

右ストレートがネギの右頬を捉える

「ぐふぇっ！」

（イケる！このまま速攻……）

よろめくネギへと追撃するクリリン

次は左でボディーブロー

（させるか！）

ネギは両腕を縦に円を描くように回し、体重を乗せつつ掌で攻撃を叩き落した

そのまま一歩踏み込み、両掌を打ち込む

（双撞掌！）

以前、悪魔ヘルマンのしもべのスライムにも見せた技である

「うおっ！？」

クリリンにそれは見事的中

真後ろに吹っ飛ばされるが、それをネギは見逃さない

「雷華……」

地を蹴り、右手に雷の魔法の射手を集め、

「崩拳！」

自身の接近戦の必殺技を放った

その拳はクリリンの身体に入り

「え！？」

手応えなく通り抜けた

そしてクリリンの姿が陽炎のように揺らめく

「こっちだ！」

「！」

横からの声、そして鈍痛

本物のクリリンがドロップキックを繰り出してきていた

（残像拳か！油断した……）

素早く左手で受身を取り、ダメージを最小限に回避

両者共に、再び同じ構えで向かい合った

（この人、かなり実戦慣れしている……楽には勝たせてもらえないみたいだ）

（痛ってー、まださっきのがズキズキしやがる……攻撃出力は向こ

うが上、か……）

互いにニッと笑う

（（面白くなりそうだ（ぜ）！））

その次の瞬間、二人は一斉に駆ける

ステージの中央で、両方の右腕が交差する

（戦いの歌、出力アップ！）

押し合いになったところで、ネギはさらに魔力を右腕に集め

「ぐぐぐぐぐ……」

クリリンを押していく

（よし、このまま……！）

何かを察知し、ネギは突如飛び上がる

先ほどまでいたネギの場所に

ドゴーーーン！

「くそっ！気づかれたか」

クリリンの気功波が炸裂した

浮遊術で飛翔するネギを、クリリンが全力で追う
白熱する第三試合は、空中戦に突入した

「二人とも、頑張ってるアルな……」

古は一人、離れた所で舞空術を使って屋外から観戦していた

亀仙人達と一緒にロビーのモニターで見るという手もあったが、生で見たかったためこうした手段をとっている

「本当ならもう少し近づいて応援したいアルが……私はそれが出来ないアルしね」

今回の試合は、両者共に自分の弟子

どちらか片方だけなら、迷うことなくもっと近づいて大声で声援を送っていただろう

だが、この試合ばかりはそうはいかない

師匠として、黙って二人の戦いを見届ける義務がある

ここからさらに近づいたら、自分は我慢できなくなってしまうだろう

（でも、やっぱりちょっともどかしいアル……）

「おい、もう少し近くで見たらどうだ？」

「いやいや、二人の師匠としてこれ以上……って誰アルか！？」

突然の横からの声

古は思わず素っ頓狂な声を上げた

「ほう、ということはやはりお前が古菲か……」

「あ！刹那と戦てた緑の！」

声の主はピッコロだった

「この試合が始まったとほぼ同時に飛んでいくお前の姿を見てな、少し気になったんだ」

「そ、そうだたアルか……」

「さっき二人の師匠と言っていたが、つまりクリリンもなのか？」

「ま、まあ……そうアル」

なるほどな、とピッコロはネギ達の戦いに目を向けながらそう呟いた

「確かにクリリンは格段に強くなっているようだ……流石はネギの師匠、教え方が上手いな」

「いやいや、クリリンは素質が十分にあたからアルよ……」

古の言葉は決して謙遜ではない

クリリンは、古が教えてた技術をどんどん会得していった

それこそ、ネギを上回るような勢いでだ

ネギと違って、元々武術の心得があったというのもある

だがそれ以上に、素質の面も強く出ていた

「そっちもクリリンに色々教わったようだな」

「ああ、コレ（舞空術）アルか？そうアルな、気に関しては逆にクリリンが師匠ネ」

「互いに師匠で互いに弟子か、面白い関係だな」

「他の人にもよく言われたアルよ、それ」

古から笑みがこぼれた

「……応援できないならちゃんと見ていてやれ、二人の師匠として

な」

「うむ！」

いつの間にか、古の胸の内にあったもどかしさは消えていた

「馬蹄崩拳〈マーティ・ポンチュワン〉！」

気弾の連射を対処するネギの隙をつき、クリリンは接近して崩拳を打ち込んできた

「くっ！」

何とかガードするが、勢いを殺しきれず吹っ飛ばされる

「もらった！」

そのまま突っ込んで回し蹴り

ところが

「げっ、あっちも残像拳かよ」

ネギの姿は消えてなくなる

「魔法の射手〈サギタ・マギカ〉連弾〈セリエス〉・光の十七矢〈ルーキス〉！」

「上か！」

声のした方を向くと、そこではネギがお得意の光の魔法を発動させていた

それをクリリンは、腕をクロスさせて防ぐ

その間に、ネギはさらに戦いの歌の出力をアップ

「でやああっ！」

「い、いつの間に後ろに！？」

上がったスピードでクリリンの背後に回りこんだ

そして背中に崩拳

有無を言わさずぶっ飛ばす

「（よし！このまま決める！）魔法の射手〈サギタ・マギカ〉……」

クリリンに手をかざす

「戒めの風矢〈アエール・カプトゥーラエ〉！」

お次は風の魔法

光のとは違って緑がかった魔法の射手は、真っ直ぐクリリンへと向かい

「な！？う、動けねえ！」

巻きついて拘束した

（このまま叩き落として場外だ！）

ネギは既に両手を組んでハンマー打ちの構え

そのまま何も出来ないクリリンを

「やああっ！」

下へと叩き落とし、その後を追う

クリリンは何とか着水の一歩前で静止

（ガードは出来ない、もう一発叩き込んで今度こそ場外！）

これを計算に入れてのことだった

再び組んだ両手を振り上げる

だが

「……このおおおお！」

「え！？もう！？」

自らを縛っていたネギの魔法の射手を、自力で引きちぎって振りほどいた

この風の矢は本人が魔力を込め続けない限り、時間の経過によって捕縛効果は落ちる

クリリンはそれに何とか間に合った

だが、その速さはネギには予想外だったようだ

大振りのネギの攻撃を横に回って避け

「お返しだ！」

逆にこっちがハンマー打ち

決まれば場外、そして勝ち

クリリン渾身のカウンターはネギに……

「風楯〈デフレクシオー〉！」

コンマの差で当たらなかった

「矢の次は盾かよ……ん？」

ここで、ある仮説がクリリンの頭に浮かぶ

（待てよ……ってことはもしかして……）

そして、閃く

（……やってみるか！）

思い立ったら即実行

クリリンは急上昇して空へ逃げる

それをネギはもちろん追う

（よし、来た来た……）

ネギが来るのを確認すると、クリリンは途中停止して向き直る

（チャンスは一瞬……）

そしてネギをじっと見据える

そのネギは、右手の魔法の射手を集めて雷華崩拳を完成させていた」

「喰らえ！雷華崩け……」

（今だ！）

クリリンは両手を額へ

「太陽拳！」

「わあああっ！」

炸裂する閃光

技の正体を知っていたネギは、即座に左手で目を隠した

だが、光とは言うまでもなく速い

いかにネギの反応が早かったとはいえ、それは目に入り込んでしまった

視界が奪われたネギへクリリンは接近し

ガシッ！

「え？え？」

右手でネギの左手首を掴み

「そらっ！」

左手でその手からあるものを無理やり奪った

「あ！駄目！」

そう、魔法発動体の指輪である

「よしっ！作戦成功！」

クリリンはそれを服の中へとしまいこむ

ネギが魔法を使うのを何回か見て、クリリンはあることに気づいた

魔法は全て左手から出ていて、そこには指輪

ひょっとしたら、ネギの魔法に関係あるのではないか？

ならば、あれが無ければこちらが有利になるのではないか？

ズバリ正解だった

ネギの慌てぶりからも、そうであるのは確信できた

「さて、これでまだわかんねえぞ……」

「や、やべえ！兄貴、あのハゲ頭に指輪を取られちまった！」

「カモさん、あの指輪は確か……」

夕映の言葉に、カモは大きく頷く

「そうだよ！エヴァンジェリンから貰った魔法発動体だよ！」

「それってマズくない！？だってネギ君あれが無かったら……」

「そうさ悟飯の旦那、今の兄貴は手持ちの魔法がほとんど使えねえ……」

浮遊術と戦いの歌以外は全部な……とカモは重苦しい表情になる

つまり遠距離技は皆無

気の扱いに長けているクリリンが相手では、勝ち目が薄くなってしまった

それを聞いて、一同も不安な表情になる

いや、一人だけそうではなかった

「それは違うで、悟飯、カモ」

「……コタロー君？」

木乃香の治癒魔法を受け、すっかり元気になったコタローだった

「『指輪を盗られる、もしくは紛失』、そうなったら大会でメチャ

クチャ不利になるくらい、ネギは想定しとったで」

「ってことは兄貴、あの部屋の修行で……」

「ああ」

他とは対称的に、コタローの顔は自身で満ちていた

「覚えたで、発動体なしで使える遠距離技」

「ばっ！」

「わわわっ！」

上から降り注ぐ無数のエネルギー波

先ほどクリリンは、超巨大のエネルギー波を放った

速度は遅く、ネギは楽々横へかわした

するとクリリンはそれを操作して上にあげ、いくつにも分散させて落としたのだ

懸命にかわすネギだが、ついに一発命中してしまう

「痛っ！」

「そらそらそらそら！」

そこを狙い、今度は通常の気弾を連射する

あくまでも、遠距離技に重点を置いて戦うつもりのようだ

それらを全て、ネギは腕を交差して何とか防ぐ

（戦いの歌、さらに出力アップ！）

身体能力を上げ、接近戦へと持ち込もうとする

「させるかよ！」

再びクリリンは、両手からエネルギー波

大きさはさっきほどではないが、スピードは速かった

急いでネギは横へ

しかし

「やっ！」

「わっ！」

クリリンが腕を広げるとエネルギー波がＹの字状に分かれ、その
一方が移動したネギに
それも慌ててかわすと、その二つが途中で止まって挟み撃ち状態に
「喰らえ！」
手を正面から合わせると、それらがネギへ向かう
だがネギは、上へ飛んで回避
（気ってあんなふうに操ることも出来るのか……まあ、スピードが
上がっている僕には通じな……！？」
「まだだあっ！」
ネギは下を見て目を見開く
互いにぶつかり合って対消滅したと思っていたエネルギー波
ところがそんなことはなく、逆に合体して最初の大きさに
「ずあああっ！」
両手をバッと上へやるクリリン
その動きに従って、エネルギー波がネギへと迫る
「くそっ！」

ネギは避けられず、またもやガード

単なる気弾とはわけが違い、腕にビリビリと衝撃が走った

（このままじゃ勝てない……しかたない、悟飯君やピッコロさんとやるまでは隠していたかったけど……）

「次はこいつだ！かぁ……めぇ……はぁ……めぇ……」

クリリンはかめはめ波の構え

みるみるうちに気が溜まっていく

「（避けたら曲げてぶつけてやる！）波ーーーーー！」

向こうは避けるかガードしか術が無い

そう思ったクリリンだったのだが

「え！？」

ネギはそうしなかった

かめはめ波の直線上に立ち、両手を重ねて前方へ

その手からは、魔力により光が

「ま、まさか……嘘だろ！？」

「魔閃光！」

かめはめ波と似たような、黄色のエネルギー波が撃ちだされた

色以外で違いを挙げるなら、使っている力

ネギは、魔力を正真正銘そのまま搾り出してこれを放った

通常の魔法では、精霊などの力を借りるものが多いが、これは本当に自力のみ

ネギのように魔力容量が大きいからこそ出来る芸当である

「ぬ、ぬおおおおお！」

予想外のことに困惑するクリリン

中央でぶつかったかめはめ波と魔閃光

しだいに、攻撃出力で勝るネギの魔閃光に押され始めてきた

「ま……負けて……たまるかーっ！」

さらにクリリンは気を爆発させ、威力を上げる

一度は押し返したように見えたが

「はあああああっ！」

フルパワーのネギには遠く及ばなかった

「う、う、うわあああああああっ！」

クリリンの全身を、魔閃光はかめはめ波ごと飲み込んだ

しばらくしてそれが収まった

そのときそこにクリリンの姿は無く

「あ、危ない！」

ステージへ頭から落下していた

ネギはすぐに降下して追いかけ、足を掴んだ

「だ、大丈夫ですか！？」

抱えなおし、ステージの上へゆっくりと降りる

「う……な、何とかな……」

「よ、よかったー」

安堵するネギ

なんせあの技はコタロー以外の相手に始めて使ったのだ

他の人にどれほどのダメージがあるかは把握していなかった

「とりあえず僕の知り合いのところまで運びます、彼女の治癒魔法

ならすぐ治りますから」

「ちょ、ちょっと待ってくれ」

「え？」

クリリンに言い止められ、ネギはその足を止めた

「まだ一応試合は続いてんだぞ……最後にちゃんと言わせてくれよ」

クリリンは口元を上げた

「まいった、俺にしては清々しい負け方になった、ありがとな」

「……はい！」

『クリリン選手ギブアップ！よってネギ・スプリングフィールド選手の勝ちーーー！』

（古……俺、精一杯戦えたかな？お前の分まで、思いっきりやれたかな？）

クリリンは心の中でそう呟き

「……うむ、よくやったクリリン。そして、ありがとアル……」

古はそれを第六感で感じ取り、肯定と感謝の念を示した

第４３話　年齢真逆の兄弟弟子　クリリンＶＳネギ（後書き）

クウネル
「毎度おなじみ後書きコーナーの時間です。今回もメインパーソナリティーは私クウネルと」

エヴァ
「エヴァンジェリンの二名でお送りするぞ。さてクウネル、今回のゲストはどうなっている？」

クウネル
「はい。今回のゲストは、あなたのクラスメートの春日美空さんと」

美空
「いやーー、いいっスね後書きコーナー、ついに私も出演できました！」

エヴァ
「お前絶対本編出られないもんな」

クウネル
「同じくスピード関係ということでこの人をお呼びしました」

エヴァ
「ま、まさか……」

バータ
「ギニュー特戦隊の青いハリケーン、バータ！キエーーー！」

エヴァ
「やっぱり……」

美空
「ちょっとエヴァちゃん！なんスかこの青い宇宙人みたいな人！」

エヴァ
「そのまんまで宇宙人だよ」

バータ
「はっはっは、お嬢ちゃんもスピードに自身があるんだって？」

美空
「もちろん！なんなら競争してみるかい？」

バータ
「いいだろう！俺に挑戦したことを後悔させてやる」

美空
「じゃああっちで勝負だ！」

エヴァ
「おいおいクウネル、止めなくていいのか？」

クウネル
「そのうち疲れて戻ってくるでしょうし、いいんじゃないですか？」

エヴァ
「そういう問題か？」

クウネル
「さて、今回はネギ君の熱い戦いが見れましたね、新技も見せてくれましたし」

エヴァ
「それ以前に、指輪を盗られるなんて甘すぎる。魔法使いは数々の魔法を使いこなしてこその魔法使いだろうが……」

クウネル
「まあ確かにそうですね、あれって魔力の消費量が半端無さそうですし」

エヴァ
「まさに、ぼーやでこその芸当だな」

クウネル
「あ、二人が帰ってきましたよ」

バータ
「はあっ、はあっ、お嬢ちゃんなかなかやるじゃねえか……」

美空
「はあっ、はあっ、春日美空っス……いやいやこっちも驚いたって、まさか私のアーティファクトとタメ張れるなんて……」

バータ
「美空！次に会うときは、ぶっちぎりで突き放して勝ってやるぜ！」

美空
「望むところっス！」

ガシッ！

エヴァ
（友情芽生えてるーーーーー！）

クウネル
「ていうか、美空さんの足ってバータさんとタメなんですか……流石ドラゴンボール寄りになっているだけのことはありますね」

エヴァ
「絶対突っ込まれそうな気がする……」

クウネル
「……えー、では気を取り直して次回予告です」

エヴァ
「次回は準決勝戦第四試合、ついにピッコロとトランクスが激突するぞ」

美空
「楽しみっスねこりゃあ、次回が待ち遠しいぜい……」

バータ
「次回更新予定は来週の木曜だ。あくまで一番遅くて木曜だから、ひょっとしたらもう少し早いかもだぜ」

クウネル
「後書きコーナーのゲストのリクエストもお待ちしています、最近まったく来ないのでキティが若干拗ねてます」

エヴァ
「拗ねてない！っていうかキティって言うな！」

美空
「じゃあ皆さん」

バータ
「次回のネギどら！も……」

クウネル
「お楽しみに」

エヴァ
「シカトするなーー！」

バータ
「ところで聞きたいんだが、ひょっとして次回のゲストも俺やリクームみたいな感じで……」

クウネル

「さあどうでしょう？少なくとも、読者からリクエストが来たらそっちを優先させますよ」

第４４話　超戦士と超戦士　トランクスＶＳピッコロ（前編）（前書き）

初めて前後編でバトルの話になりました。といってもこの前編はバトルほんのちょっとですが（汗）。バトルに入るまでが長くなっちゃいまして。

そのうえかなり全体が短くなっちゃいましたし……本当にスイマセン。

では、どうぞ！

第４４話　超戦士と超戦士　トランクスＶＳピッコロ（前編）

「はい、終わったでー」

「おおっ！治ってる！」

「よかたアルなー、クリリン」

身体を隅々まで見回し、完治を実感するクリリン

それを古が心から喜んでいた

ここは、予選前に古達が使用していた控え室Ｂ

最初木乃香がいた観客席では、クリリンを寝かせられないということでここへ移動していた

ピッコロの鬼特訓の回復役を二週間に渡って務めてきた木乃香

アーティファクトを使わずとも、通常の治癒魔法であの怪我を充分に治せるほどにレベルアップしていた

「しかし驚きましたよ古老師、いきなり目の前に出てくるんですから……」

同行していたネギが少し前のことを思い出す

ここへ駆け足で向かう彼らの目の前へ、古は突然上から降り立っ

てきたのだ

「いやー、木乃香連れてくいうことは、大怪我したのかと心配したのアルよー」

「でも……古老師が無事で本当に良かったです」

「私だけじゃないアル、五月も来てるアルよ」

「本当ですか！？」

「ウム」

他の連れと一緒に屋内ロビーで観戦中アル、とさらに付け加えた

「やったなネギ君、これで大分揃ったんとちゃう？」

「そうですね、あの時近くにいた人全員が飛ばされたとすれば……」

残っているのは……とネギは脳内で状況を整理し始める

茶々丸の話によれば、千雨もここに来ているとのこと

それも含めて今まで出会えた者全員と、あの時石柱周辺にいた者全員とを照らし合わせ、

状況整理が終わった

「あとは龍宮さんと……超さんの二人。何か危ないことに巻き込まれてなければいいんですが……」

「超……」

親友の名を聞き、とたんに古の表情が明るいそれではなくなる

それを見て、ネギはしまったというような顔をする

「す、すいません古老師、そんな根拠もないこと言っちゃっ……」

「大丈夫だって、古」

謝ろうとするネギの声を、別の声が遮る

その声の主クリリンは、ポンと古の肩に手を置いた

「クリリン……」

「こうして他のみんなと無事会えたんだ、その超って子ともきっとなるさ。な？」

「……そうアルな、ありがとアル」

クリリンの言葉を聞き、古は柔らかい笑みを見せた

すると

『準決勝第四試合は、トランクス選手対ピッコロ選手です』

「あ、マズイ！試合始まっちゃう！」

アナウンスが流れ、ネギは慌てて駆け出した

この試合だけは見逃すわけにはいかない

モニターで準決勝のカードを見た時から、既にそう心に決めていた

「あ、私も行くアル！クリリンと木乃香も！」

「お、おう」

「ま、待ってーなー」

すぐに四人は控え室Ｂを後にし、観客席へと向かった

「トランクス、始めから全力で来い。手加減など無用だからな」

ステージ上でトランクスを見据え、こう言い放つピッコロ

そして重量装備を脱ぎ、バッと投げ捨てた

「はい！」

そう元気よく答えると、トランクスは気を込めていく

「はあああああっ！」

トランクスの気の質が変わる

その直後、トランクスの外見が著しく変化した

髪は逆立って紫から金色、瞳も緑へと変わる

全身を覆う気も、髪と同じく金髪へ

「……そうだ、そうでなくてはつまらん」

ピッコロはその変貌ぶりに何一つ驚かず、逆に軽く笑みを浮かべた

極めたサイヤ人にしか出来ない必殺の変身

トランクスはいきなり、この『超〈スーパー〉サイヤ人』で試合へと臨む

「行きますよ、ピッコロさん」

「お前とは一度やってみたかった。来い、トランクス」

「カ、カモ君！し、試合は！？」

「お、兄貴ナイスタイミング！ちょうど今から始まるところでさぁ」

それと時を同じくし、ネギ達は仲間達のいる観客席へと到着

朝倉の肩に乗るカモの言葉を聞き、ネギはひとまず安堵する

「あ、古ちゃん！」

「くーふぇさん！」

「古！」

「おお！朝倉に本屋に刹那、それに他のみんなも……」

また古は、一同との再会に歓喜

その後すぐに

「ってアイヤー！？何アルかトランクスのあれは！？」

トランクスの変わりまくった姿にひどく驚いた

「超サイヤ人、あれがトランクスの本気の姿さ。なんせ相手はピッ

コロだからな」

「感じる気がまるで違うアル……」

クリリンの解説を聞いてなお、古はその表情を崩さなかった

（十分の一どころじゃなかたアルか……すごすぎアル）

上には上がいくらでもいる、自分はまだまだなのだ

それをさらに心から実感した古

だがそれと共に、ワクワクも胸の内ににじみ出てきた

（だからこそ、強くなるための修行はやめられないアル……）

クリリンとの出会い以上に、古の中はそれで満ちていた

「でさでさ夕映っち！夕映っちとしてはこの試合どうなると思う？」

「あ、それ私も聞きたい！」

一方、朝倉は夕映にこの試合の意見を仰ぎ、ハルナもそれに乗る

そうですね……と言った後少し間を置き、夕映は口を開く

「一年前はトランクスさんの方が強かったらしいですが、現在に関しては何とも言えないです。ただ戦闘経験は長年戦ってきたピッコロさん、成長の速さはサイヤ人のトランクスさんの方がまさっているので、そこら辺がポイントになるかと」

「ふーん」

「で、夕映としてはどっちが勝つと思うわけ？」

「うーん……これだ！と言えるような答えは私は出せな……」

『では、スタートです！』

ワーーーーーー！

夕映の喋りを、実況と観客の声がかき消した

「あ、始まっちゃったですね」

夕映も言うのを諦め、皆と共に観戦に入ろうとする

が、その直後彼女は目をパチクリとさせてしまった

よく見れば朝倉やハルナ、その他大勢も同じくである

「あ、あれ？お二人はどこへ行ったですか？」

会場から忽然と、両名の姿が消えていたのだ

目をゴシゴシと擦り、もう一度見てみようとすると

ドウンッ！　ドウンッ！　ドウンッ！

「わっ！何事ですか！？」

何かが強くぶつかり合う音が聞こえてきた

しかも一点ではなく、あちこちから

それによる衝撃波が、今にもこちらへ襲いかかろうとしていた

「ネギ先生！これはいったい……」

何か分かるのではないかと思い、夕映はネギの方に目を向ける

するとネギ含め数名が真剣な表情で、目をしきりに動かしていた

動き回る何かを目で追う様にだ

夕映は会場を一瞬見た後、すぐにまたネギ達へと顔を戻す

（ま、まさかあの音の正体は……そしてネギ先生達はそれを……）

夕映の洞察力は、見事正解を導き出していた

（どないや？ネギ）

（あ、コタロー君、うん、ちゃんと目で追えてるよ）

傍まで近づいてきたコタローが、ボソボソとネギと会話を始める

（といっても結構ギリギリだけどね、気を抜いたらすぐに分からなくなりそう）

（俺や刹那姉ちゃんも同じくや、あそこまで本気のピッコロさんは始めてやな）

（うん、悟飯君は？）

（言うまでもないやろ？俺らよか全然余裕や）

（だよね、向こうはかなり苦戦してるみたいだけど……）

ネギは苦笑し、ほんの僅か一瞬だけ古達を横目で見た

（ううう、ぶつかってる瞬間くらいしかよく分からんアルー）

（俺だってそんなもんさ、しかたないって）

悔しそうにする古に、クリリンが微妙なフォローを入れていた

この場で現状を自分の目で理解していた者は僅か六名

ネギ、コタロー、悟飯、古、クリリン、刹那だけ、あやかは見れていなかった

また、楓、天津飯、ヤムチャ、茶々丸といった他の場所にいた戦士達も、見えていたのは言うまでもない

ただし、楓以外の者達はやはり見れてもギリギリであった

そう、この音と衝撃、原因はあの二人

ピッコロとトランクスに他ならない

両者は瞬間的な速さで高速移動

戦いの舞台を上空とし、激しくぶつかり合っていた

お互いが、全力の攻撃に対して全力の防御

つまりは二人の全力の攻防が、この事態を作り出していた

これは、準決勝の過去三試合のどれとも比べられない代物だった

（さすがピッコロさんだ……セルとの戦いのときより遥かにパワーアップしている）

（トランクスめ、ここまで強くなっていたとはな……正直予想以上だ）

攻防を続けながら、二人は互いのパワーアップぶりに感心していた

少なくとも、最後に会った時の彼ならまず確実に倒せる

そんな自身が両者共々あった

そして結果はご覧の通り

（このままずっとこれを続けても埒があかない……こっちから仕掛けるか！）

意を決し、トランクスは行動を起こす

「はあああああっ！」

「！」

ピッコロとぶつかった瞬間、トランクスは片手で気功波を顔めがけて撃った

何とか顔を横に動かし、回避するピッコロ

そこへトランクスは

「うらららららあっ！」

高速のラッシュを放つ

「ぐおおおっ！」

数発がボディに直撃

だがそこからすぐに持ち直し、ピッコロはなんとか残りを防ぐ

転じてピッコロもラッシュで攻めるが、トランクスは全てガード
ラッシュ対ラッシュの激しい攻防戦
それに突入してようやく、人々は二人を捉えることができた
（ちっ、先制されちまうとはな……だが！）
ピッコロは目をカッと見開き
「ぜえええやあああっ！」
「くっ！」
全身から気を爆発させてトランクスをたじろがせ
「せりゃあああっ！」
「ぐはっ！」
腹に一発ボディブローを入れてぶっ飛ばした
すぐにトランクスは体勢を立て直し、構えをとり直す
（す、すごいパワーだ……僕と同じでピッコロさんもまた、平和になった今でも修行を昔同様、めいっぱい続けているのか……）
「トランクス、戦いはまだまだこれからだ。俺は、お前に勝つ」
ピッコロはキッとした目でトランクスを見つめ、こう言い放った

第４４話　超戦士と超戦士　トランクスＶＳピッコロ（前編）（後書き）

クウネル
「あとがきコーナーのお時間です、司会はいつもどおり私クウネルと……」

エヴァ
「エヴァンジェリンでお送りするぞ！さあクウネル、早速今日のゲストを紹介だ！」

クウネル
「いきなりテンション高いですね……」

エヴァ
「それはそうだ！なんせ久々にリクエストが届いたんだからな！」

クウネル
「えー、というわけで今回は水竜さんのリクエストで、このお三方をお呼びしています」

千鶴
「あらあら？ここはいったいどこかしら？」

ネカネ
「ネギ、ちゃんと帰ってこれるのかしら……」

チチ
「あ、ネギ君とコタロー君の保護者の方だか？」

クウネル
「千鶴さん、ネカネさん、チチさんの保護者トリオです」

エヴァ
「おい、那波千鶴は呼んで大丈夫なのか？現状を理解しきってないぞ？」

クウネル
「ここはパラレル的なところですし問題ないかと」

エヴァ
「まあ、他のリクエストにも魔法関係者じゃない麻帆良の奴とかいたしな……」

千鶴
「まあ、ウチのコタロー君がネギ先生やあやかとそちらでお世話に？」

ネカネ
「御迷惑かけたりとかしてませんか？」

チチ
「全然全然、コタロー君は元気いっぱいだし、ネギ君とあやかさんは礼儀正しいし、言うこと無しだべ」

千鶴
「まあ！」

ネカネ
「それはよかった」

チチ
「おまけにネギ君は悟飯ちゃんの勉強とか見てくれるし、オラとしても大助かりだ」

ネカネ
「いえいえ……」

クウネル
「では、今回の話を我々五人で振り返ってみましょう。みなさん、どうでしたか？」

千鶴
「チチさんやネカネさんのところは良いわねえ、私のところなんかもう大変」

ネカネ
「十歳なんですからそのくらいが普通ですよ」

クウネル
「あのー、感想を……」

チチ
「でもちゃんと勉強はさせたほうがええだぞ、千鶴さん頭良いんだから家で教えてやればエエだべ」

千鶴
「あら、やっぱりそうかしら？」

クウネル

「あのー……」

エヴァ
「諦めた方がいいぞクウネル、あいつらをゲストで呼んだのがそもそもの間違いだ」

クウネル
「……私達だけでやります？」

エヴァ
「そうだな。というわけで今回の話はだな……短い」

クウネル
「作者も前書きで書いてますよ、それ」

エヴァ
「なんか投稿予告に無理やり間に合わせたような印象が……」

クウネル
「はいストップです、これ以上はやめておきましょう」

エヴァ
「しかたないな……他に言うことないし、次回予告だな」

クウネル
「次回のネギドラ！は引き続き準決勝第四試合、中身は完全にバトル一色です」

エヴァ
「投稿予定は来週の火曜日だ。……なんか最近週二回投稿出来てな

くね？」

クウネル
「それも突っ込まない方向でいきましょう」

エヴァ
「そうか？……では来週のネギドラ！も」

クウネル
「お楽しみに」

チチ
「へー！ネギ君飛び級で首席卒業だかー！おらんとこも負けてられねーだ！」

ネカネ
「悟飯君も充分すごいですって」

千鶴
「『勉強しなかったらお尻にネギ』とか言ったらちゃんとしてくれるかしら……」

エヴァ
「お前らいい加減世間話やめろーーー！」

千鶴
「あら？そういえば何で私達ここへ来たのかしら？」

エヴァ
「帰れーーーーーーーー！」

第４５話　超戦士と超戦士　トランクスＶＳピッコロ（後編）（前書き）

異常なまでに反比例して、分量が前回の倍になりました。中身はバトルでギッチギチですのでお楽しみに。

あと遅くなりましたが、総アクセス数三十万突破です。ありがとうございます！これからも頑張ります！

ではどうぞ！

第４５話　超戦士と超戦士　トランクスＶＳピッコロ（後編）

「行くぞ！」

先ほど以上に気を全身にみなぎらせ、ピッコロはトランクスへと突っ込んだ

さらにスピードの上がったラッシュを繰り出す

トランクスはその一手一足を確実にガード

だがピッコロも、反撃させる隙を与えない

「どうだトランクス！」

「やりますね……だが！」

トランクスの左腕と、ピッコロの右手刀が重なる

その瞬間、トランクスはそこに気を集中して爆発させた

思いっきり弾き返され、ピッコロの右脇が空く

「しまっ……」

「せやああっ！」

返す刀で、左手からそこへ気合砲を放った

攻撃に全力を注いでいたピッコロは、その防御に間に合わず

「ぐおおっ！」

後ろへと飛ばされる

そのまま肘打ちを喰らわそうと、ピッコロの真上へトランクスは瞬時に移動

勢いよく肘を落とす

しかし、それをピッコロは身体を捻らせ

「くそっ！」

「惜しかったな」

何とか回避

両者一旦下がる

「撃ったのが左手だったから助かったぜ、まだまだ甘いな」

「次は……こうはいきません！」

トランクスはさらに気の量を上げる

全身を覆う金色のオーラが、一段と激しく燃え上がり、輝く

そしてその直後、トランクスの姿が消える

「そこかっ！」

それを見てピッコロは反射的に、身体を反転させて腕を出した

ピンポイントでトランクスが現れ、互いの腕が力強くぶつかる

しかしこれでは終わらない

「だだだだだだあっ！」

トランクスはピッコロにラッシュを放ち続ける

その速さはピッコロのそれを、さらに上回っていた

（く、くそっ！ここまでとは……）

懸命にガードしていくピッコロ

だがついに防ぎきれなくなり

「ぐふっ！」

腹に一発入れられる

そこから、上へ向けての蹴りもヒット

上へと勢いよく昇っていった

「はあああっ！」

無防備なピッコロめがけ、すぐにトランクスはエネルギー波を撃つ
髪と同じく金色のそれは、狙いを外すことなく真っすぐ向かった
これが直撃すれば、ピッコロもただでは済まない
形勢は完全にトランクスに傾いてしまうだろう
そんな期待のこもった攻撃だったのだが
「きえええええっ！」
ピッコロには惜しくも当たらず
上空で即座に体勢を立て直し、気を込めた右手刀で弾いたのだ
すぐに攻撃したので気が練りきれず、威力が不十分だったのがその原因だった
「勝負を急ぎすぎたなトランクス、俺にはあんな一撃は通用せん」
ピッコロは余裕ぶった笑みをトランクスに向ける
だが、内心そうではなかった
（マズい……パワー、スピード共に押し負けている。真っ向からでは厳しいな……）
さっきのエネルギー波や肘打ちの回避は、あくまでトランクスの

ミス

だが全体的にはラッシュなどの接近戦でわかるように、ピッコロは押されているのだ

トランクスに近い実力者ということは変わりないが、それでもこうして差が出てきてしまった

（トランクスはもうあんなミスはしないだろう……そうなってきたらかなり……）

勝ち目は薄くなる

ピッコロは表に出さずにいながらも、焦りを覚えてきていた

（だとすれば短期決戦……それも向こうの虚を突くような攻撃で、だ）

やるしかない、とピッコロは意を決してトランクスを見据えた

だが構えは取らず、棒立ちのままじっと見つめている

（な、何だ？ピッコロさんは何を……）

行動の意図がつかめないトランクス

攻撃を仕掛けてみるか？

そう考えてもみたが、明らかにあれはおかしい

何か罠なのかもしれない

だとすれば、下手にこちらから向かうのは得策ではない

トランクスは構えをとり続け、ピッコロを注視した

(ピッコロさんが動きを見せるまでは、こちらも動かないほうがいいな)

しかし、このトランクスの判断は完全に間違い

ピッコロの作戦、術中

様子見と決め込んだその直後に、それをトランクスは理解した

「カアアアアアッ!」

「えええっ!?」

突如放たれたエネルギー波

トランクスは思わず目を見開いた

それの出た場所が普通に手の平であったなら、ここまで驚くことはない

今のピッコロがそれを放つためには、下に向けている手を前方に出す必要があるのだ

そんな行動を見せれば、トランクスは即座に対応しただろう

だが、出た個所は断じて手の平などではなかった
口だ

ピッコロは実に五、六年ぶりとなる技、『爆裂魔口砲』を撃ってきたのだ

過去に実戦で使ったのはたったの二回

天下一武道会の悟空戦と、その六年後の栽培マン戦だけである

故にその技を、トランクスは知らずにいた

未来の世界の悟飯から、ピッコロの話は聞いてはいた

だが悟飯も、この技のことはすっかり忘れていた

口は言うまでもなく前方を向いている

そのためほとんど目立った動きなしで発射

完全にトランクスの虚を突けた

「くっ！」

あわててそれを避けるトランクス

その背後には、既にピッコロが移動していた

「でえええやあああああっ！」

「ぐおおおっ！」

背中の中心に、渾身のパワーの右拳をめり込ませる

すぐさま拳を引き、今度は脚に気を込める

「ぜえええええいっ！」

背中の同箇所に、強烈な回し蹴りが炸裂した

「ぐわああああっ！」

クリーンヒットし、トランクスは横に飛ばされる

そこへピッコロは気弾を連射した

全て背中に命中し、トランクスの顔を歪ませる

それに耐えて身体を元に戻すと、ピッコロは次の技に入っていた

「だだだだあっ！だだだだだあっ！だあっ！」

両手から素早く発射される気弾

今度は完全な球状タイプのものだ

トランクスへと迫り、囲むようにして空中静止

これが、楓の『忍空密爆球』の元にもなっているピッコロの必殺技

「魔空包囲弾！逃げ場はもう無いぞ！」

あの気弾一発一発の威力は、楓とは段違い

それら全てがピッコロの合図により

「ずあああっ！」

一斉にトランクスに襲いかかった

回避は不可能

それをトランクスはすぐに認識する

ならば、とこれを防ぐ術を講じて、実行に移した

グッと全身に力を込め

「がああああああああっ！」

怒号とともに、超巨大な爆発波を全身から放った

気弾はそれに当たると跡形もなく消滅

一つとして当たることはなかった

「何だと！？」

これにはピッコロも驚きを隠せない

（今だ！）

そんなピッコロへ、トランクスは一気に距離を詰めた

「だだだだだだあっ！」

「しまった！またこれか……」

再び接近戦へと移行する

ピッコロは焦りながらも、トランクスのラッシュをガードしていく

だがそのうちスピードが追い付かず、一撃を貰ってしまうのだろう

そう思っていたピッコロ

ところが、今度はしっかり防ぎきれていた

（どうやら、さっきの爆発波でかなりの気を消費したみたいだな……）

スピードが、ほんの僅かだが下がっている

反撃に移りづらい不利な状態には変わりないが、それでもこれはかなり大きかった

（気が戻る前に、決着をつける！）

そう考えるとピッコロは、攻撃を防御しながらある一点に気を集めていた

激烈魔口砲のため、口にである

気が溜まると、ピッコロは即座に口を開いた

口の奥から、黄色の気功波が光って見える

（また口から気功波か！）

それにトランクスが気付かないわけがなかった

攻撃を中止し、ピッコロから急いで離れる

だが、ピッコロは撃ってこなかった

「え？」

（かかった！）

これはピッコロの作戦

爆裂魔口砲はこの試合で既にもう使った技

二度も簡単に通用するとは端から考えていなかった

だが脅しとしては使える

こうも考えていたピッコロは、この技を使うかのように見せかけた

そうすれば、一度あの技を見たトランクスは警戒し

（距離を取ることが出来る！）

喉の奥まで来ていた気を全身に散らし、ピッコロは別の技に入った

（本当は、楓やコタローを相手に試してみたかったんだがな……）

楓と刹那が精神と時の部屋に入っていた半日間、ピッコロは何もしていないわけではなかった

その短い時間を利用し、ピッコロは会得してしまっていた

「かあああああっ！」

「なっ！？」

東洋の神秘、『影分身』を

「ほう、流石ピッコロ殿……いとも簡単に自分の物としたでござる

か」

先ほどと同じく、楓は展望塔の上で観戦していた

（おそらく会得に掛けた時間はあの半日間……我流でここまで仕上げるとは驚きでござるよ）

拙者はあの域まで数年を要したというのに……とポツリと呟いた

元々の土台がまるで違うとはいえ、やはり少し悔しいようだ

「まあ、出せる数はまだ拙者の方が多いようでござるし、良しとするか」

そうクスリと笑うと、楓は糸目を両方開く

（ピッコロ殿……勝つでござるよ）

こう強く願う楓であった

（ま、まさかコタロー君達と同じ技をピッコロさんが使えるなんて

……）

現在、トランクスは三人のピッコロと格闘していた

今のピッコロの技量では、同密度の分身は最大二体

楓は四体出せるため、その点ではまだレベルは下である

同密度にこだわらなければ、一応全部で七体ほどは出せるピッコロ

しかし、それは強者との接近戦では無意味

そのことをピッコロは完全に理解していた

密度の低さを狙われてその影分身から消されれば、ただの気の無駄遣い

一部の技や戦法の際、要所要所で使うのが最もベターなのだ

故に、今はこうして攻撃密度を考慮した三人攻めを行っているわけである

トランクスはそれに完全に押されており、いつ防御が決壊してもおかしくなかった

（対多人数戦はヤムチャさん達との修行でしたけど……あれとはまるで違う！）

それは当然のこと

トランクスが修行でした多人数戦は、かけ離れすぎた双方の戦闘力を少しでも補うためのもの

自分に近い実力を持つ者数名のそれとは、天と地である

（ひとまず、距離をとって態勢を立て直さないと……）

そう思った次の瞬間

「ぜやああっ！」

「ぐはああっ！」

ピッコロ（本体）の右拳が左頬に命中した

さらに影分身の一体が蹴り上げ

「きえええええっ！」

高速で移動した二人が、背後から手刀で狙いをつける

（さ、させるか！）

トランクスは後ろに手を伸ばし、手刀を作っていたピッコロ達の手首を掴む

「何！？」

「せやああっ！」

その両腕を外側から円を描くように前方へ

二人のピッコロはそこで勢いよく衝突した

「ぐおおっ！」

ひるむピッコロを、トランクスはそのまま下へ投げ下ろし

「はあああああああっ！」

印を切るように両手を高速で動かし、気を練り上げる

「バーニングアタック！」

そのまま両手を突き出し、大きく強力な光弾を放った

それに気づいたピッコロは、すぐさま両腕をクロスさせてガード

爆発し、轟音が辺りに響いた

「よし、今度は当たったぞ……これで大分ダメージをってわわ！」

爆発の煙で姿が見えなくなっていたピッコロ

気の動きに注意を払いつつ、トランクスはそこをジッと見つめていた

すると、煙の中からあるものが顔を出したのだ

計四本の伸びる腕だ

今にも掴みかからんとトランクスに迫る

（こ、これは……捕まったらマズい！）

そうなれば動きを拘束され、本体からの強力な一撃を無抵抗で受けてしまう

トランクスはそれらを懸命にかわしていく

すべてを振り切ると、そのままある場所へ全力で飛んだ

未だ煙に隠れる、腕の伸ばし元へだ

腕を使えない状態なら、こちらの攻撃は容易に当たる

そして影分身は消滅、形勢逆転

だがここで、トランクスはある疑問が浮かぶ

（待てよ……あのピッコロさんがこんな単純なミスをするのか？）

あの戦法の弱点は誰でも、それこそヤムチャでもわかりそうなもの

そんな行動を起こしたピッコロに、些か疑念がわいてしまった

しかし、それはあまりにも遅すぎた

「！？」

新たに煙から伸びる腕
その数、実に十本
虚を突かれたうえ、この量と近さだ
なす術なく拘束されてしまった

「く、くそっ！」

腕ごと身体をグルグル巻きにされる
遅れて戻ってきた最初の四本も加わり、完全に身動きが取れなくなってしまった
煙が晴れ、そこを見たトランクスは目を見開いた
そこには初めの二体に加え、新たにピッコロが作り出した五体の影分身がいたのだ

（出せるのは二体だけじゃなかったのか……何てことだ！）

自らの油断を叱咤するトランクス
その直後、真上から強力な気を感じた
首は動かせるため、急いでトランクスは見上げる
とどめの一撃を放つため、気を溜めて集中している本体のピッコロの姿がそこにあった

（影分身ごと攻撃する気か！は、早く脱出しないと……）

腕に力を込めるが、まったくほどけそうにもない

このままでは、負ける

（『アレ』しかないのか？まだ上手くコントロールできないんだが……）

トランクスの頭の中に浮かぶ一つの策

（もつ時間も短いうえに気を大量に消費する……だけど、『アレ』でないとピッコロさんは倒せない！）

贅沢は言ってられない

そう決心すると、トランクスはそれを実行した

「うおおおおおおおおおおおおっ！」

「な、何だ！？」

その様子を上から見て、ピッコロは思わず動揺する

トランクスの一帯の空気が明らかに変わった

気がさらに高まり、全身からあふれ出す

それを実感した直後だった

「ぜえええええやあああああああああああっ！」

「なんだと！？」

トランクスをガチガチに巻いていた影分身の腕が、突如彼によって引きちぎられた

パワーが段違いにさっきより上がっているのを如実に示していた

慌てて取り押さえようとする影分身達

しかし、それらをトランクスはいとも簡単に撃破した

手刀は楽々貫通し、気功波は跡形もなく粉々にさせる

あっという間に七体の影分身は全滅した

「バカな！？いったい何が……」

突然の事態に困惑するピッコロ

「『超トランクス』でもない……あの変身は一体何なんだ！？」

そう、トランクスは新たに変身を行っていた

ただし、セルとの戦いで見せた『超トランクス』とはまるで違う

あれは異様に筋肉が膨張するが、今のトランクスは断じてそうではない

超サイヤ人からの筋肉量の増加はあまり見られない
だがパワー、スピード共に異常に上がっていたのは、影分身を倒した動きですぐに分かった
トランクスは再びピッコロを見上げ
「たああっ！」
正面から向かってきた
（は、速い！）
ピッコロは急いで両腕を前に
「爆力魔波ーーーーー！」
予選の刹那戦と違い、今度は溜めに溜めた最大出力
比べ物にならない程の大きさである
そしてそれは、そのままトランクスを飲み込んだ
「ど、どうだ！？」
避けられてはいない、ちゃんと命中した
ピッコロは確信した

だが

「な、何!?」

「でやあああああっ」

少ししかトランクスにはダメージがなかった

両腕を、当たる直前に顔の前で交差

ピッコロの爆力魔波を、正面から見事に突き破った

交差を解いて右拳を引き、未だ愕然とするピッコロへ

「ぐおわあああああああっ!」

真っすぐ突き入れた、箇所は腹部のど真ん中

そこから両手をガッシリと組み、ハンマー打ち

「だあああああああっ!」

振り抜くと、ピッコロはグングンと降下した

次にトランクスは両手を頭の上へ

瞬く間に、バーニングアタックより巨大な光弾が出来上がった

これで勝負を決めるつもりだ

「フィニッシュバスター！」

振り下ろし、ピッコロへとそれを飛ばした

（ま……まだだあっ！）

ピッコロは最後の力を振り絞り、身体をトランクスの方へ反転

両手の五指の先端を合わせ、そこにできた空間に気を集めた

「激烈光弾！」

フィニッシュバスターが届く前に、その技は完成した

向こうと同じく、巨大な光弾を発射する

中央で激突、激しい音が辺りに響く

（もう影分身は出せない……これが俺の残りの気を全部かき集めた、最後の攻撃だ！）

無論、無謀な行動であることは自覚している

真っ向からぶつかれば、勝ち目は皆無である

だが、ピッコロにも意地があった

（元大魔王を……舐めるなあああああっ！）

（むっ、ピッコロさんの気がここに来てさらに上がった……）

ピッコロ側から来る抵抗が強くなったのを、トランクスは感じた

しかし、それももうじき限界

このままフルパワーでなくても、押し勝ててしまう

だがトランクスは

（……ピッコロさん！僕も全力をもって応えます！）

気を完全に解放した

この戦いを、そんな失礼な終わり方にしたくなかった

フィニッシュバスターは激烈光弾を完全に飲み込み

「ぐ……ぐ……ぐおおおおおおおおおおおおおおっ！」

さらにはピッコロをも飲み込んだ

猛烈な光が辺りを包む

それが晴れるのには数秒を要してしまった

トランクスは急いでピッコロの安否を確認する

「ピッコロさん！大丈夫ですか！？」

変身を解き、水面ギリギリまで降下した

そこには、顔を上に向けて水に浮かぶピッコロの姿があった

服はボロボロ、全身は傷だらけという痛々しい姿

『ピ、ピッコロ選手場外！よってトランクス選手の勝ちー！』

その様子を確認でき、実況がトランクスの勝利を告げた

「負けちまった……流石はベジータの息子だ」

意識はあったようで、ピッコロが小声でそう呟く

「よかった……さ、掴まってください」

トランクスは安心した様子で手を差し伸べる

しかし、それをピッコロは払いのけた

「余計なお世話だ、飛ぶくらいはまだ出来る」

身体に鞭を打ち、ピッコロはゆっくりと浮かび上がる

「本当に大丈夫なんですか？」

「ああ……しかしトランクス、あの変身はひょっとして……」

「……はい」

「やはりな……」

ピッコロは納得の表情を浮かべた

よくよく思い出してみると、あのトランクスの変身はどこかで見たことがあった

髪がさらに逆立ち、全身からバチバチと稲妻状の火花が散る

一年前、セルと戦った自分の弟子の姿と酷似していた

「あんなギリギリまでとっていたということは……」

「はい、まだコントロールが完璧じゃないんです」

「だがあのパワーアップ……悟飯がセルを倒したのも頷けるぜ」

話し続ける二人

すると

「ピッコロはーーーん！」

観客席から聞き覚えのある声が

そこを見ると、黒の長髪の少女がブンブンと手を振っていた

「……木乃香？」

「治したるさかい、はよ来てやーー！トランクスはんもー！」

よく見れば、トランクスもかなりのダメージ

そんな両者を見れば、木乃香が心配するのも無理はなかった

「……行きますか？」

「ああ、ああなると木乃香はうるさいんだ」

二人はクスリと笑うと、木乃香の所へ一直線に飛んでいった

『これで準決勝戦はすべて終了です。一時間の休憩ののち、次は決勝戦を開始いたします』

こうして、波乱の準決勝戦は終わったのであった

第４５話　超戦士と超戦士　トランクスＶＳピッコロ（後編）（後書き）

クウネル
「あとがきコーナーのお時間です。司会は私クウネルと……」

エヴァ
「エヴァンジェリンでお送りするぞ。さて、今回のゲストは誰なんだ？」

クウネル
「前回があれだったので、今回はちゃんとした人を呼びましたよ」

エヴァ
「ほう」

クウネル
「今回も水竜さんのリクエストで……」

エヴァ
「しばらくはこのリクエストシリーズが続くぞ」

クウネル
「３－Ａクラスメイトの大河内アキラさんと、仙猫カリン様でーす！」

アキラ
「どうも……」

カリン

「よろしくな」

エヴァ
「人と言いつつ片方猫じゃん」

カリン
「ただの猫ではない！仙猫じゃぞ仙猫！」

エヴァ
「……で、そんな仙猫様が何で女子中学生に抱きかかえられてるんだ？」

カリン
「え？……べ、別にいいじゃろ！」

アキラ
「抱かせてもらってもいいか聞いたら、ＯＫしてくれたんだ……」

エヴァ
「ほーーう」

カリン
「しょ、しょうがないじゃろ！こんなかわいい子のお願いなんじゃし！」

エヴァ
「ほーーーーーーう」

カリン
「う、うるさいうるさいうるさい！それよりコーナーを進行させん

か！」

クウネル
「そういえばそうですね。というわけで今回の話の内容ですが……」

エヴァ
「この小説で最長の長さになったな」

カリン
「影分身やトランクスのあの変身を急遽詰め込んだらしいからのう」

アキラ
「あ、そうなんだ……」

エヴァ
「まあトランクスはあの戦いから三年経ってるわけだし、なれてもおかしくはないわな」

クウネル
「私としては影分身の方が驚きましたね」

エヴァ
「ああ、あれな……一応長瀬楓の顔を立てて、分身可能数は少なくしたみたいだが……」

カリン
「充分凄すぎじゃよな」

クウネル
「さて、続いて次回予告です」

エヴァ
「次回は決勝戦までの休憩時間の話だ、ようするに第４０話みたいな感じのだな」

アキラ
「ひょっとして二話続いちゃうかも、だって。まき絵の出番、あるといいな……」

クウネル
「次回の更新は一応金曜日を予定していますが、ひょっとするとまた遅れそうかもです」

エヴァ
「……今度は何なんだ？」

クウネル
「作者の学校の学園祭の準備だそうです」

エヴァ
「……言い訳じゃないんだよな？」

クウネル
「言い訳ではありません、以前の合宿も含め全部事実です」

エヴァ
「今月これでまだ四本目だぞ……実質週一になりかけてないか？」

クウネル
「学園祭が終わったらフルスロットルで頑張るそうです」

カリン
「『一周年&百話記念!』みたいのをやりたがっとるそうじゃしな」

エヴァ
「今、半年弱で45話だろ?かなり危ないな……」

アキラ
「まあ、百話行く前にストーリーが尽きて完結したらそれまでだけどね」

エヴァ
「……何気にズバッと言うんだな、大河内アキラ」

アキラ
「え!?私何か変なこと言った!?」

クウネル
「では、次回のネギドラ!も……」

エヴァ&アキラ&カリン
「お楽しみに!」

エヴァ
「……ところで大河内アキラ、いつになったらそいつ放すんだ？」

アキラ
「……もう少しだけ」

カリン
（いやーーー、ワシって女の子にモテるんじゃのう、ムフフ……長生きしてよかった）

エヴァ
「今何か邪(よこしま)なこと考えなかったか？」

カリン
「（ギクッ！）い、いや全然！」

第４６話　それぞれの約束　剣と料理とセクハラと（前書き）

何とか予告通りにできました。でも今月はこれが最後ですね……
結局五本しかできませんでした……
来月こそは八本、いや十本くらいはやりたいです。
ではどうぞ！

第４６話　それぞれの約束　剣と料理とセクハラと

「……（キョロキョロ）」

マンホールから顔を出し、辺りを見回す男が一人

ここは、バトルアイランドの出口への通路である

現在人影は見られない

（……よし！）

そのことに男は心から歓喜した

蓋を頭の上からどかして、縁に手をかける

（まったく……やってられるかっての！あいつらと戦うなんて……）

黒のアフロに、カラフルなコスチュームとチャンピオンベルト

世界チャンピオンのミスター・サタンであった

実はこの天下一大武道会、優勝者が得るのは賞金と世界温泉旅行だけではない

このサタンへ、世界チャンピオンの座をかけた挑戦権も与えられるのだ

つまりサタンはあの四人のうちの一人と、どうしても戦うことになってしまうのだ

彼らが化け物レベルであることは重々承知

準決勝の途中で、数が増えたり変身したのはどういうわけかとアナウンサーに尋ねられた際は

『ト、トリックだトリック！歌舞伎の早変わりとか、影武者とかあるだろ！あれだあれ！』

と、動揺丸出しで怒鳴っていたりもした

そうこうする間に、全身がマンホールの中から出る

（さて、あとはこっそり逃げるだけ……）

忍び足で出口へ向かおうとするサタンだったが

「あれ？ミスターサタン」

「ギックウウウウウウウウ！」

後ろから一人の男が呼びかけた

それはサタンもよく目にしていた男だった

「どちらへ行かれるんですか？そっちは出口です」

この天下一大武道会のプロデューサーである

突然サタンが展望室から姿を消したのに気付き、探していた模様

「ちょ、ちょっと腹が痛くてな……」

サタンはとっさに腹を押さえ、苦しそうな声と表情になる

言うまでもなく演技である

「そ、それは大変だ！さあ、すぐに医務室へ！」

腕をつかむプロデューサーだが、サタンは力強く払いのけた

「だ、ダメだダメだ！この腹痛は、かかりつけのドクターに診てもらうのが一番いいんだ！」

片手を腹に当てたまま、サタンは出口へと歩を進める

「しかし、それではスポンサーのマネー氏が……」

「知るか！とにかく私は帰る！」

制止を振り切り、サタンは外へと出た

逃げてしまえばこっちのもの

ところが、サタンはそれができなかった

「あ、あれ？……足場が……無い！？」

来た時にはあったはずの足場が、既にそこには存在していなかった

残っているのはほんの数十センチ部分だけ

すると

「おい！ミスター・サタンだ！」

「本当だ！」

「サーターン！」

「サーターン！」

「サーターン！」

少し離れた場所から声援

「え！？え！？え！？」

サタンは下に向けていた顔を上げる

同時に、その顔は驚愕のそれへと変わった

多くの人達が、こちらに無い方の足場の上に立っていたのだ

どうも、こちらとあちらで切り離されたようである

しかも、どんどんその間の距離が離れていくではないか

「ど、どゆこと！？」

「決勝戦は会場を、バトルアイランド2に移動して行うんです」

「へ？」

このバトルアイランドは人工の島

ほんの少し前から決勝会場へと移動を開始していたのだ

島の一部を切り離したのはスピードを上げるため

あそこにいた人々は、収容人数の関係上乗れなかったわけだ

サタンが乗ってきたジェット機はあちら側

こちら側は大会終了後、特別イベントを交えながらゆっくりと元の場所へ戻ることになっていた

つまり、サタンを含めてこちらに残った者達は大会が終わるまで帰れない

「えええええええええええええええええええっ！？」

このサタンの絶叫は、辺りに響き渡った

「それにしても凄かったな……あれが魔法か……」

「えへへー、すごいやろー」

場所は変わってこちらは屋外カフェ、少し前にクリリン達がくつろいでいた場所である

先ほど切り離されたのは主に試合会場周辺部分

ここは残されており、普通に行くことができた

現在テーブルを四人の男女が囲んでいた

トランクス、木乃香、刹那、ブルマである

試合終了後すぐに、木乃香の治癒魔法で全快したトランクスとピッコロ

お礼がしたいとトランクスが言ったので、こうしてここに足を運んでいた

ちなみにブルマはトランクスの、刹那は言うまでもなく木乃香の付添いだ

ピッコロは治療後、すぐにどこかへ行ってしまっていた

「しかし本当に驚きました、ピッコロさんにあれほど見事に勝ってしまわれるとは……」

本当にお強いんですね、と刹那はトランクス賞賛する

「いや、でもかなり紙一重だったよ。影分身達に捕まった時は、実際詰んでいたようなものだったからね」

流石は悟飯さんの師匠だ、とトランクスは謙虚に言葉を返した

すると、トランクスは刹那のある一点に目をやった

「あれ?君が提げてる物って……」

「ああ、これですか?夕凪といって、私が愛用している野太刀です」

刹那は予選が終わって控え室に戻った際、置いておいた夕凪を回収していた

精神と時の部屋にも持ち込み、格闘術同様に腕を磨いていた刹那

木乃香の護衛として傍にいるときは、やはり手放せない存在らしい

「へえ、君も剣術を使うんだ」

「こっちが元々の戦闘スタイルなんですよ……え?君『も』?」

そうだよ、とトランクスは頷く

「僕も一応心得があるんだ」

「そうなの！凄いのよトランクスったら！」

「わわっ！」

トランクスの言葉の直後、いきなりブルマが声をあげて入ってくる

それにおもわず、刹那はやや身を引いた

「フリーザのことはピッコロや悟飯君から聞いてる？」

「はい、ある程度は……」

かつて一同を苦しめた宇宙の帝王フリーザ

以前ピッコロが話してくれたことを思い出す

「それを倒したのは、何を隠そうこのトランクスなわけよ！」

「え！？そうだったんですか！？」

刹那は目を丸くした

フリーザがもう死んでいるというのは知っていた

だが、どのような死だったかは詳しく聞かされていなかったのだ

「こう、剣をスパパパッてやって細切れにして、最後に気でボーンッてね」

ブルマは自分の右手を剣に見立て、素早く動かして表現する

動きは刹那から見て速いと言えるものではなかったが、話し方からしてかなり凄かったのだと刹那は理解した

「いやいや、せっちゃんかて凄いで。うちらの世界じゃせっちゃんの腕は天下一品や！」

「へー」

「お、お嬢様、そんな大げさな……」

するとお次は木乃香が刹那を褒めるので、思わず刹那は赤面

トランクスは感心の表情

「大会が終わったら、ぜひ手合わせしてみたいな」

「ええっ！？そ、そんな……私なんかが恐れ多くもトランクスさんとだなんて……」

「僕の剣術は我流だからね、ちゃんとした使い手とも戦ってみたかったんだ。ダメかい？」

「……わかりました」

長い沈黙の後、刹那は口を開いた

「私なんかでよろしければ……お受けしましょう」

「ありがとう」

よく考えればあの半年間の修行後、一度も人と刀を交えたことがなかった

楓が少しは特訓に付き合ってくれたが、楓は剣術使いではない

試せるいい機会なのかもしれないと刹那は思った

「では、日時と場所はどうしましょうか？」

「明後日の午前十時、場所は……西の都の外れの荒野。これでいいかな？」

「はい、わかりました」

刹那は力強く頷いた

この約束通り、二人は後日激しい剣術戦を繰り広げることになる

だがそれは、もう少し先のお話

「おおクリリン、ここにおったか」

「あ、武天老師様！」

「亀じい！」

再び場所は変わり、ここは屋内ロビーにあるカフェの入口

軽食（クリリン自腹）を済ましたところで、ちょうどクリリンと古は亀仙人と合流していた

「二人とも姿を消しとったから、こっちは一生懸命探しとったんじゃぞ」

「……その頭にある凄まじい大きさのたんこぶは何なんですか？」

見ると亀仙人の頭頂部に、とてつもない大きさのたんこぶが出来上がっていた

自身の顔の大きさの半分以上はあるだろうか

「え！？これのことか！？」

「まあ大方見当はつきますが……どうせスケベなことしようとして痛い目に会ったんでしょ？」

「ギクッ！」

「図星みたいアルね……」

古が苦笑する

「ちょっと後ろからパイパイを触っただけじゃったのに……こんなの頭に作らすんじゃもん」

亀仙人は人差し指の先端をツンツンと合わせた

反省の色は無い模様

「……ちなみにどんな子だったんですか？」

「オレンジのツインテールの元気っ子で……バストサイズはわしの見立てで大体８３センチくらいじゃったかのう……」

「「あ……」」

クリリンの問いに亀仙人が答え、それに同時に二人は反応した

後半はどうでもいいが、前半で一人の人物がハッキリと頭に浮き上がったのだ

「アスナだ……」

「アスナアルな……」

暫く見てないと思っていたら、原作メインヒロインはいつの間にかセクハラ被害を被っていた

「まったく！何なのよあのスケベジジイは！」

「まあまあアスナさん、あれでも一応私や古さんの居候先の家主なわけですから……」

一方その本人は、未だにひどく憤慨していた

控え室で着替え終わり、さて試合を見に戻るかというところで胸を後ろから鷲掴み

とっさに打ち付けた右肘がクリーンヒットしたわけだ

普通の女性ならば簡単に避けられた亀仙人だったが、んかんせん相手が悪すぎた

相手が老人とわかり、一時かなり焦ったアスナだったが、その直後に五月＆ウーロンと出会った

再会に喜んだアスナと五月

その後亀仙人のことを聞かされると、先ほどの焦りなど吹っ飛んでしまった

亀仙人はウーロンが引きずりながら回収し、五月はアスナと行動をすることになり今に至る

「よくあんなジジイの家に二週間もいれたわね」

「クリリンさんが常にブレーキをかけてくれましたから」

「あ、そうか、あの人も一緒に住んでたのよね」

アスナは、古とクリリンが一緒にいた時のことを思い出す

「大会が終わった後の残り一週間も、あちらでお世話になるつもりです」

残り一週間とは、ドラゴンボールが復活するまでの期間

ドラゴンボールの存在をそれぞれが知っていたのは、すでに確認済み

「ふーん……あ！」

するとアスナはあることに気付いた

「ひょっとしてそっちのご飯って、三食全部さっちゃんがやってんの！？」

「はい、みなさん美味しく食べてくれるので、私としても作り甲斐がありますね」

「いいなー、私も食べたーい！」

五月の料理は、麻帆良学園内で普通にお金が取れるほどの人気とおいしさ

それを二週間毎日食していたとは、クリリンや古はなんと幸せ者だろうか

彼らが美味しそうに五月の料理を食べる光景が、頭に浮かんできてしまった

「カメハウスに直接来てくれれば、いつでも御馳走しますよ。場所はわかりますか？」

「天津飯さんが知ってるはずだけど……でもあの人がいるわけだしなあ……」

次に浮かんだのは、乙女の貞操と五月の料理が天秤にかけられる光景

ハッキリ言って、あれ以上セクハラをされるのは勘弁願いたい

（ただでさえネギにも、たまにそういう目に遭わされてるわけだし……）

「……アスナさん？」

五月は、腕組みをして黙り込むアスナに声をかける

すると

『えー、選手の方及びお客様にお知らせです』

「ん？何かしら？」

屋根にあるスピーカーからアナウンスが流れてきた

アスナは腕組みを解き、そちらへと顔を向けた

『決勝戦会場、バトルアイランド２に到着いたしました。決勝戦はそちらで行いますので、係員の指示に従って移動してください』

「あ、もう着いたんですね」

「ホントね、じゃあ行きましょうか」

「はい。それでアスナさん、結局どうするんですか？」

ウーンとしばらく唸り、アスナは大きく頷いた後口を開いた

「行く！よく考えたらセクハラされる前に、こっちから叩きのめせばいいんだしね！」

「アハハ……」

またあんな大きなたんこぶが出来るのだろうかと、五月は想像した後苦笑い

「それでは、お待ちしてますね」

「うん！さ、そうと決まったらさっさと移動よ！」

アスナは五月と共にバトルアイランドの出口、そしてバトルアイランド２へと歩を進めていった

そしてそれは、他の者達も例外ではない

「夕映ーー、私も箒に乗せて連れてってーー」

「ちょっハルナ！流石に四人は無理です！」

「ほ、箒折れちゃうよーハルナー」

「ふっふっふ、ここの席は譲らないよ」

図書館探検部メンバー＋朝倉は、夕映の箒を巡って一騒動を起こし

「じゃあ行くアルか」

「おう」

古とクリリンは、亀仙人を置き去りにして仲良く舞空術で飛行

「ネギ！悟飯！俺の分まで頑張れや！」

「うん！悟飯君、僕負けないからね！」

「こっちだって！」

少年三人は熱い決意を見せ

「悟飯殿、トランクス殿、そしてネギ坊主……フフフ、楽しみでござるな」

楓は決勝戦で起こるであろう激しい戦いに思いを馳せ

「じゃあ母さん、先に行ってますね」

「いってらっしゃいトランクス、すぐ私達も向かうわ」

トランクスは若き母ブルマに見送られ

「お嬢様、私にしっかりとお掴まりください」

「うん」

刹那は木乃香を抱えて一気に飛翔

その他の仲間達も、空を飛ぶなり地を歩くなりして向かっていった

天下一大武道会決勝戦、間もなく開幕

第４６話　それぞれの約束　剣と料理とセクハラと（後書き）

クウネル
「さてみなさん、あとがきコーナーのお時間です」

エヴァ
「今日のゲストは過去最多の人数らしいな」

クウネル
「はい、今回のゲストは水竜さんのリクエストで、喋る動物トリオとアーニャさんです」

カモ
「でよでよ、俺っちとしては姐さんの他に、朝倉の姉さんのとか……」

ウーロン
「うんうん！」

プーアル
「ちょっと二人共！もうコーナー始まってる！」

アーニャ
「そうよ！さっさとスケベ話はやめなさい！」

エヴァ
「これはまた随分と異色なメンバーだな……」

クウネル

「はい、アーニャさんなんか時系列的に先の人物ですしね」

アーニャ
「何よ！私の登場に文句あるっていうの！？」

エヴァ
「いや、だってお前こいつらと共通点ないじゃん」

アーニャ
「ツッコミ役として呼ばれたの！これなら文句ないでしょ！」

エヴァ
「いや、だから……」

カモ
「ほれ写真、これで朝倉の姉さん１４だぜ？」

ウーロン
「すげーー！初めて会ったブルマ（１６歳）よりもスタイルいいぜ！」

プーアル
「いい加減にしてってば！その写真、ハサミに変身して全部切っちゃうよ！」

エヴァ
「プーアルとかいう飛び猫がちゃんとやれてるし、ツッコミ」

アーニャ
「……う、うわーーーーん！」

クウネル
「あ、逃げましたね」

エヴァ
「しかもマジ泣きしてたぞ……」

クウネル
「……どうします？追いかけますか？」

エヴァ
「しかたない、幸い今回はあいつ以外にもゲストが三人（匹）もいる。我々だけで進めよう」

クウネル
「何気に酷いこと言いますね、まあいいですけど……それではみなさん、今回の話はいかがでしたか？」

カモ
「あーーーっ！返してくれよ！」

ウーロン
「そうだぞプーアル！それは男のロマンだ！」

プーアル
「知りません！せっかくコーナーに出れたんだから真面目にやりなさい！」

クウネル
「あの……感想を……」

カモ
「俺っち達普通に本編出てるから、そこまで執着心無いんだよ！」

ウーロン
「俺も俺も！だから返せ！」

プーアル
（……プチン）

エヴァ
「おい、今何か変な音したぞ」

クウネル
「そうですね」

プーアル
「シュレッダーに変化！」

ウーロン
「げっ！」

カモ
「や、やめてくれえええええっ！」

プーアル
「こうしてやるーーーーっ！」

カモ&ウーロン
「「あーーーーーーーーっ！」」

クウネル
「ハサミどころじゃなかったですね」

エヴァ
「……本編出れてないの、あんなに気にしてたんだな」

クウネル
「そうみたいですね、なんせ出番はおろか名前だって二回くらいしか出てませんし」

カモ
「うわあああああああああああんっ！」

エヴァ
「あいつはあいつでやかましいし」

カモ
「こっそり盗撮して貯めこんでた兄貴の生徒のマル秘写真達があああああっ！」

エヴァ
「お前はなんて写真を持ってきてるんだあああああっ！」

カモ
「ぎゃあああああああっ！」

クウネル
「……さて、エヴァンジェリンがああしている間に我々だけで次回予告やりますか」

プーアル
「……グスン、うん……」

ウーロン
「おいプーアル悪かったって、もう泣くなよ」

クウネル
「さて、次回のネギドラ！は……」

ウーロン
「ついに決勝戦が開幕だぜ！四人で決勝戦ってどういう風にやるんだろうな……」

プーアル
「そういうわけで、決勝戦のルール説明が主な内容になります」

クウネル
「次回更新は次の金曜日、来週作者の学園祭があるそうです」

ウーロン
「それ以降は本気で週二回に取り組むんだとさ」

プーアル
「それではみなさん、次回のネギドラ！も……」

クウネル&ウーロン
「お楽しみに！」

エヴァ

「おいプーアル！もう一回シュレッダーに変身しろ！こいつを放り込んでやる！」

カモ
「お助けーーーーーー！」

アーニャ
「……ヒック、ヒック、今度こそ……今度こそちゃんと出てやるんだから……ヒック」

第４７話　マシンへ乗り込め！向かうは地下のバトルゾーン（前書き）

どうもお久しぶりです、カゲシンです。無事学園祭も終了したので、こっちに本腰を入れていこうと思います。

八月の総ＰＶ数が、三月に次ぐワースト二位に……やっぱり話数を稼がなくちゃだめですね、今月はガンガン書きましょう！

ではどうぞ！

第４７話　マシンへ乗り込め！向かうは地下のバトルゾーン

バトルアイランド２

こちらは正真正銘の自然の島

バトルアイランドを遥かに凌ぐ大自然が広がっていた

そんな島の中央に、巨大なドームが一つ

東京ドーム数個分もあるそれに、次々と人が入場していく

そう、ここは決勝戦の試合会場

天下一大武道会最後の戦いが、間もなく行われようとしていた

『えーみなさん、大変お待たせいたしました！』

内部ではすでに、観客席が寿司詰め状態

アナウンスが聞こえ、そこから歓声が沸き起こる

その中には、悟飯やネギの仲間達のも含まれていた

『ただ今より天下一大武道会、決勝戦を始めます！』

一層声援は激しさを増した

「いよいよ始まるですね……」

「うん……」

観客席の一角では夕映達一行が席をとり、ワクワク顔で開始を待っていた

「てゆーか夕映ひどーい、結局私乗せてくれないんだもん」

夕映の右隣に座っていたハルナが、ジト目で夕映を見つめる

結局夕映の箒乗り騒動は、ハルナ以外の三人が乗るという形で収

まった

理由としては、ハルナ自身がゴーレムを使って飛べるという要因が大きかった

といっても彼女自身は納得したわけではなく、未だ自分をのけ者にしたことを根に持っていたりする

「しょうがないじゃん、だってパル重いんだし」

「なっ！？」

右隣にいた朝倉の言葉に、ハルナは少しながら動揺する

確かに自分は夕映やのどかよりは重い、自覚はしていた

身長やスタイル（主に胸）のことがあるからそれは当然のこと

だが、今の言われ方だとやはりグサッとくるものがあったようだ

「な、ならそっちはどうなのよ！あんただって重いはずでしょ！」

「え、私？」

ハルナはやや眉を吊り上げ、朝倉をビシッと指差した

「そうよ！あんた以外に誰が居んのよ！」

「ハ、ハルナ……他のお客さんに迷惑だよ……」

のどかが止めようとするが、ハルナはそんな気は全く起こしそうもない

「胸や身長は私よりあるじゃん！」

いつの間にか論点が夕映の箒のことから、自らの体重のことへと移っていた

「さっきからうるさいですわねハルナさん、以前私も言ったでしょう？あなたは少しお太り気味だと」

「ううっ！いいんちょまで……」

ハルナの後ろからこう言ったのはあやか

まき絵を抱きかかえて舞空術で飛行し、夕映達とほぼ同じ時間帯に到着していた

そのまき絵も、あやかの左隣に着席している

思わぬ方向からの攻撃に、ハルナは顔をしかめた

そういえば二年の時に言われたことがあった、と思い出す

確かに身長は朝倉が高いが、ウエストは自分のほうが太い

というか自分より背が高いクラスメイトの内、楓と真名以外はみんな自分よりウエストは細い

（千鶴よりウエスト太いのは前々からマズいと思ってはいたけど…

…いざ太り気味って言われるとショックかも……）

元の世界に戻ったら少しダイエットしてみようかな、とか心の中で呟くハルナ

すると

『それでは、四人の選手に登場していただきましょう！』

会場中央の床が割れるように開き、下から新たな床がせり上がってきた

そこには言うまでもなく

「あ、ネギ君ネギ君！」

ネギ、悟飯、楓、トランクスの四名が立っていた

まき絵がはしゃぎながらネギを指差す

「ああっ、ネギ先生……なんて凛々しいお姿……」

あやかは頬を紅色に染め、真っすぐネギを見つめていた

『それでは、決勝戦のルールを説明します』

『まず選手の皆様には、四台あるマシンの中から一台を選んでもらいます』

「あ、これか」

下から上がってきたネギは、自分達の近くにあるマシンに目を向けた

一人用ジェットコースターのような形状で四隅にそれぞれ置かれており、1～4までの番号が正面にふってあった

『その後選んだマシンに乗り込み、スタートと同時に地下にあるバトルゾーンへ向かいます』

ネギ達が上がってくる前から元々あったそれらはレール上に乗せられており、それぞれ別の入口へと伸びていた

『バトルゾーンは全部で四つ、選手の皆様はその内のどれか一つに到着します』

（ふむ、どこへ行くかは運次第……このマシン選びにかかってるでござるか）

楓はマシンを一台一台ゆっくりと見渡す

『バトルゾーンには一人ずつ、今大会に招かれた東西南北の銀河戦士達が待ち構えています』

（ああ、あの普通の人間が変装した……）

トランクスは説明を聞いて苦笑する

大会の受付をする前、彼らがジェット機に乗ってやって来たのを目撃していたトランクス

特殊メイクのようなものをされ、いかにも宇宙人かのように見せていたがバレバレ

気を探れば、地球人のかそうでないかの区別は簡単につく

といっても、ピッコロのような異星人と会っていなければ出来ない技術でもあるのだが

実は彼らの正体はミスター・サタンの弟子で、てんで弱いのだ

『その銀河戦士を倒していち早くここへ戻ってきた選手が優勝、賞金と世界温泉巡り旅行と、ミスター・サタンへの挑戦権が与えられます』

「あれ？ってことは悟飯君と直接戦わなくてもいいんだ……」

ネギはすぐさま、この決勝戦の特殊性に気付いた

悟飯と戦って、強くなった自分を限界まで試してみたいと思っていたネギ

だがそれとは別に、大会の優勝にも興味が湧いてきていた

（でも全員地下に行くってことは、下で繋がってるかもしれないわけだし……でもそうと言い切れるわけじゃ……）

『ではマシンを選び、乗り込んでください』

ネギが深く思考に入ると、アナウンスから指示が入る

他の三人はすぐに乗り込んでいったが、ネギは一瞬出遅れてしまった

「あ、しまった！」

慌てて行動に移すが既に遅し

もう三人共マシンを選んで乗り込み、残りは一台となっていた

ネギは渋々それに乗り込んだ

といってもマシンは数字以外は相違ないので、そこまで後悔することではないのだが

マシンの中はいたって単純な構造になっていた

座る部分にシートベルト、あとは緊急時脱出するためのものかボタンが一つ

どうも会場へ戻る際はこのマシンは使わないらしい

（まあ僕達は自分で飛行できるわけだから、そこまで深刻なことじゃないな）

おそらく戻る道を探すのも試合内容の一つだったのだろう

そう考えていると、開いていたマシンの扉が動き出した

強化ガラスで出来たハッチが、四人のマシンを完全に閉めた

『では、カウントダウンに入ります！』

１０！

アナウンスと観客席全体から、決勝戦開始のカウントダウンが大きく響く

９！

また、テレビ放送から見る者も同じくカウントダウンをとる

８！

悟空達はあの世から

７！

カリン様はカリン塔から

６！

アックマン達は占いババの水晶から

5！

戦い好きの悪人は地獄から

4！

そして

3！

ついに

2！

戦いのときが

1！

訪れる

0！！

四台のマシンが勢いよく発進した

並のジェットコースターでは比べ物にならない速度で、地下へと

通じる入口へと進む

ほぼ同じタイミングで四台のマシンは入口に入り、会場から姿を消した

『決勝戦の模様はモニターを通してお客様にお見せいたします』

天井付近から超巨大モニターが四台、四方に向けられてゆっくりと降りてくる

そしてすぐに、バトルゾーン内の様子が映し出された

『さあついに始まりました、天下一大武道会決勝戦！果たして優勝はだれの手に渡るのでしょうか！？』

第47話　マシンへ乗り込め！向かうは地下のバトルゾーン（後書き）

クウネル
「みなさん一週間ぶりですね、クウネルです」

エヴァ
「エヴァンジェリンだ……で、作者の学園祭はどうだったんだ？」

クウネル
「『麻帆良祭には全然及ばないけど、すごい楽しかった』そうです」

エヴァ
「比べちゃ駄目だろ、比べちゃ……」

クウネル
「さて、では今回のゲストを呼びましょうか」

エヴァ
「そうだな、で、今回は誰が来てるんだ？」

クウネル
「はい、今回のゲストも水竜さんのリクエストで……」

茶々丸
「どうもマスター、お久しぶりです」

ハッチャン
「ここ……どこだ？」

クウネル
「絡繰茶々丸さんとハッチャンさんをお呼びしています」

エヴァ
「出たな元祖キャラ……でもまあ、茶々丸を呼んだのはナイスだぞ」

ハッチャン
「ソンゴクウ……いないのか？」

エヴァ
「あれ？こいつ孫悟空が死んだこと知らないのか？」

クウネル
「初期の人造人間なんでパワーレーダーが付いてないみたいです」

エヴァ
「ふーん……ていうか状況を把握してないのはマズくないか？保護者トリオみたいなのはもうゴメンだぞ？」

クウネル
「わかりましたわかりました、ちゃんと説明しますから。少しお時間よろしいですか？」

ハッチャン
「……かまわない」

クウネル
「では、こちらへ……」

エヴァ

「おいおい、二人ともどっか行っちゃったぞ……」

茶々丸
「では、私達だけで進行しましょうか」

エヴァ
「そうするか……で、今回の話なんだが……」

茶々丸
「はい」

エヴァ
「かなり短かったな、ピッコロＶＳトランクス戦を読んだ後だとビックリするくらい」

茶々丸
「あくまで決勝戦への導入回だから、だそうです」

エヴァ
「確かにこの話はルール説明以外、やることがほとんど無かったわけだが……でもなあ……」

茶々丸
「ですがマスター、ハルナさんのくだりが無ければもっと短くなってましたよ」

エヴァ
「書いてる最中に短すぎだと流石に気付き、急いで詰め込んだって感じか？」

茶々丸
「ほぼ正解です、少なくともプロット段階ではこのくだりは書かれていませんでした」

エヴァ
「次は長くなるんだろうな？」

茶々丸
「それは大丈夫かと、次はかなり内容を詰めるそうなので」

エヴァ
「そうか、ならいいんだが……」

茶々丸
「ただ、『一周年&百話』を達成するため、今後無理矢理話を途中で切る可能性も……」

エヴァ
「こらーーーーー！」

茶々丸
「あくまで可能性です、マスター」

エヴァ
「この作者はマジでやりかねないんだよ！」

茶々丸
「それは否定しませんが……」

エヴァ

「まあ、『話数より文量』か『文量より話数』かは読者の好みに分かれてしまうからな……一概に悪いこととも言えないか……」

茶々丸
「ではマスター、次回予告に」

エヴァ
「そうだな……さて、次回のネギドラ！は衝撃の新展開！」

茶々丸
「映画版を見た方は分かると思いますが、ついに彼らが登場です」

ハッチャン
「ソンゴクウも……登場するらしいぞ」

エヴァ
「うおっ！いつの間に来たんだ！？」

クウネル
「ついさっきです、私達そっちのけでコーナー進行とはひどいじゃないですか」

エヴァ
「動物トリオの時お前もやったろ……」

ハッチャン
「感想、意見、リクエストは随時募集中……来たらソンゴクウもきっと喜ぶ」

茶々丸

「ではみなさん」

ハッチャン
「次回のネギドラ！も……」

エヴァ&クウネル&茶々丸
「お楽しみに！」

エヴァ
「ところで茶々丸、お前今本編でどうなってるんだ？描写が皆無なんだが……」

茶々丸
「ハカセに修理されていたら島が切り離されてしまったので、バトルアイランド２へは現在飛行して向かっています、ハカセを抱えて」

クウネル
「それはまた難儀ですね……」

第４８話　対戦相手は予想外　現れたのはどこの誰？？（前書き）

どうもカゲシンです、前回投稿予告を書き忘れちゃってました、スミマセン。
さてさて、ついに決勝戦スタートです！ＤＢＺ劇場版を見た方も、そうでない方もぜひぜひお楽しみください。
ではどうぞ！

第４８話　対戦相手は予想外　現れたのはどこの誰？？

「わーーー！すごーーーい！」

バトルゾーンに移動中の現在、ネギはとても興奮していた

幼い頃から勉強漬けだった彼は、遊びというものにほとんど縁がなかった

そのため元の世界で行われていた麻帆良祭では、童心に帰って（今でも充分子供だが）様々な乗り物を心ゆくまで満喫していた

そして今乗っているこのマシンも同様

自分の世界にはない科学技術で作られたそれは、今まで感じたことのないワクワク感を与えたのだ

しばらくトンネルをくぐっていたマシン

すると正面から光が差してきた

「あ、バトルゾーンに着いたぞ！」

ネギがそう口にするや否や、マシンは勢いよくトンネルから飛び出す

噴射口から出ていたジェットは収まりつつ、飛行スピードは低下

「あ、あれ？」

放物線を描きながら高度は下がっていき……

「わ！わわわっ！」

ガン！　ゴン！　ガゴン！

近くの岩壁に激突

あちこちに何度も何度もぶつかって落ちていく

かなり頑丈に作られているのか、マシン自体に陥没などはさほど見られない

だが、中にいるネギはたまったものではなかった

「だ、脱出を……」

ネギはマシン内のボタンに手を伸ばす

すると

ドボン！

「え？止まった？」

押すより先に、マシンはその動きを止めた

先ほどの音からして、川か何かに着水したのか？

一瞬そう考えたが、すぐにそれは撤回された

「……あ、あちっ！あちちっ！あちゃちゃちゃちゃちゃちゃっ！」

焼けるような凄まじい熱さがネギを襲う

ガラスのハッチを蹴破り、急いで脱出

「火！火！火が頭に！」

次は髪の毛に燃え移った火の鎮火に努めた

魔力によって耐熱処理を施した手で、パンパンと火の周辺を叩く

幸いすぐに火は消せ、少々髪が焦げただけに終わった

ホッとしつつ、ネギは辺りを見渡す

「あービックリした、ここはいったい……って溶岩！？」

ネギの目の前には、火山の噴火地帯のような光景が広がっていた

周辺の岩は全て赤系の色に染まり、マグマが川の水のように流れる

「そういえばこの島には、とても大きな火山があったな……」

それと繋がっているのだろうと考えつつ、ネギは移動を開始した

目的は当然、このバトルゾーン内にいる対戦相手の捜索

（早く見つけないと、悟飯君や他の二人に先を越されちゃうよ…）

周囲の暑さに耐えつつ、そうやって歩き回ること数十秒

「……あ！見つけたぞ！」

ついにネギは目的の人物を発見した

どこからか出る煙のようなもので隠れ、姿はよく見えない

だが、人影があることはわかった

（よし、早速当て身か何かで……ってええ！？）

構えをとって相手を見据えるネギ

しかし煙が晴れた途端、表情は一変した

そこにいた人物は、ネギの予想とはまるで違っていた

（お、女の人！？それに肌が……）

そう、相手は男でなく女、しかもかなり器量がいい

ウェーブのかかったオレンジのロングヘアーで、肌は全身水色

また両耳と胸元に、同じ素材で作ったと思われるアクセサリーが付いていた

異様な肌の色は、ネギにある種の動揺を与えた

（ただの人じゃ……ない？）

そして次の瞬間だった

「……フッ」

女は低空飛行をし、高速でネギにいきなり接近してきた

（舞空術！？それにかなり速……）

事態を整理しきる前に、女の拳がネギの腹へ

「ぐぶっ！」

見た目からは想像できないスピードとパワー

ネギは完全に虚を突かれてしまった

いや、ひょっとしたら警戒をしっかりしてても喰らってたかもしれない

それほどこの女は強いと感じた

「……」

女は無言のまま、次の攻撃へと移る

身体を左に回転させ、腰へ思い切り回し蹴り

先ほどの一撃から立ち直りきれていなかったネギは、またもやまともに喰らってしまった

横に蹴飛ばされ、地面に一度ぶつかって跳ねる

二度目の激突は、受け身をとって何とか回避

そこへ女が追い打ちをかけに突っ込んできた

（た、戦いの歌！）

それを横目で捉え、ネギは魔力で即座に身体能力を強化

とたんにスピードは上がり

ガッ！

「……へー、やるじゃないボーヤ」

腕で女の攻撃をしっかりとガードした

ネギの動きに対し、女も感心したような声を上げる

そのまま力強く地を蹴り、ネギは女と距離をとった

「あなたは……一体何者なんですか！？」

予選で戦ってきた選手達とはまるで違う

根本的に何かが異なっている

目は氷のように冷たく、気も悪のそれで満ちている

それをネギは感じ取り、そして危惧していた

焦りの篭った声からも、それは明らかである

「……いいわ、ボーヤには特別に教えてあげる」

女は軽く口元を吊り上げた

「私の名はザンギャ、誇り高き正真正銘の銀河戦士さ」

ザンギャは髪を左手でかきあげ、そう答えた

「ここが、バトルゾーンか……」

トランクスも既に、バトルゾーンへと到着していた

ネギのいる場所とは打って変わって、こちらは花畑

蝶が舞い、爽やかな風がどこからか吹いてくる

また、マグマではないちゃんとした川が流れ、さらには湖までもあった

そののどかな風景に、トランクスは思わず微笑んでしまう

「僕のいる未来じゃ、こういう所はほとんどないからな……」

人造人間襲来による壊滅的被害

それは人の命だけでなく、植物のそれにも及んでいた

森は焼き払われ、草原は荒野へと変貌

トランクスが人造人間を倒して平和になり、少しずつ戻りつつはあった

だが奴らがやってくる前の状態までにするには、まだまだ月日がかかる

そのためこういう場所は、トランクスに安らぎの様なものを与えてくれた

しゃがみ込み、花の周辺を飛び回る蝶へと指を伸ばす

蝶はピタリとそこにとまり、羽をパタンを閉じた

「ふふっ……！」

そんな時、トランクスは何かを察知
即座に上へと飛びあがった
下では、すぐさま爆発が起こった
「な、何だ!?」
トランクスが察知したのは巨大な気
事実、トランクスは背後から強力なエネルギー弾を撃たれていた
もし少しでも反応が遅れていたら、直撃していただろう
「誰があんなことを……」
気を感じたほうへ顔を向ける
そこには一本の木
そしてその枝の上に
「だ、誰だお前は!?」
「ただの銀河戦士じゃ不足か?」
攻撃した本人が寝そべっていた
オレンジの髪の毛を紫のバンダナで束ね、肌はやや濃いめの青

両耳と胸元には、ザンギャと同じものがあった

ただ、こちらは女ではなく男

撃ったと思われる右手は、まだトランクスの方に向けられている

（あ、あんなやつはいなかったはずだ……すると本当の僕の対戦相手は……）

「でやああっ！」

「！」

トランクスが思考を巡らせていると、またもや男は攻撃を仕掛けた

さらに威力の込めたエネルギー弾を、続けざまに二つ

トランクスはすぐさまそれを回避する

一発は避け、もう一発は手刀で弾き飛ばした

「ほう、それなりの腕はあるみたいだな」

「……何か勘違いしてないか？これはゲームなんだ、殺し合いじゃないんだぞ」

トランクスは眉をひそめ、男を睨みつける

二回の攻撃両方に、明らかな殺気が感じられていた

「あいにく、俺はゲームをしに来たわけじゃないんでな」

男は木から飛び降り、スタッと着地

「俺を楽しませてくれよ?さっきのやつはあまりにも雑魚過ぎた」

「！」

男の言葉を聞き、トランクスの嫌な予感は確信へと変わる

「ま、まさか……」

「ああ、勢い余って殺しちまった。俺は手加減は苦手でね」

「何てことを……」

トランクスは歯をギリリと鳴らし、両拳を力強く握りしめた

罪のない人間が、悪の手によって殺される

人造人間やセル

彼ら以降、二度とあって欲しくないとトランクスは強く願っていた

だが起こってしまったのだ、目の前の男によって

「このおおおおっ！」

右腕を大きく振り上げ、トランクスは男へと突進する

トランクスの表情は、怒りのそれへと大きく変わっていた

ストレートを顔面めがけて放つ

しかし男は半歩下がって身体をずらし、攻撃を回避

そのまま両腕で、トランクスの腕を絡め取る

「く、くそっ！」

「そらああっ！」

男は背負い投げの要領で、トランクスを高く放り投げる

このままだと危ない姿勢で地面へとぶつかるが、そこは流石トランクス

クルクルと身体を縦に回転させ、無傷で着地した

「くそおおっ！」

再び男を睨みつけ、勢い良くダッシュ

今度は身体の中央めがけての飛び膝蹴り

これならさっきのように絡め取られることはない

そう考えての攻撃だった

すると男は腰に手をかけ、あるものを取り出した

西洋風の長剣である

柄に手をかけ、鞘から刀身を引き抜く

といっても、全て抜き切ってトランクスに切りかかるほどの猶予は今はない

半分ほど抜き、平らな部分を盾代わりにして攻撃を防いだ

剣にはヒビ一つ入らない

男はそのままトランクスを押しのけると、剣を完全に抜き切り

「だあああああっ！」

脳天からトランクスに切りかかった

「ふんっ！」

これに対しトランクスは、両手を使って完璧なタイミングで挟み込んだ

俗に言う真剣白羽取りである

「ぬ、ぬぬぬぬぬぬぬ……」

このままゴリ押しで叩き切ってやろうとする男だが、剣はピクリとも動かない

トランクスの抑えつけている力は、攻撃している男以上に強大だった

トランクスはそのまま剣を横に倒し、男の脇を空けた

「せやあああああっ！」

「ぶぼおおおっ！」

そこへすかさず蹴りを打ち込んだ

ひるむ男を、さらに気合砲で迎撃する

蹴りによるダメージで、剣にかかっていた力はなくなっていた

背中から倒れこみそうになる男だが、何とか手をついて即座に体勢を立て直した

「へっへっへ、そうこなくっちゃ……こうじゃねえとやっぱり面白くねえな……」

男は笑いながら剣を構えなおし、トランクスを見る

まだそこまでダメージは深くないようだ

（くそっ、何がどうなってるんだ……この男は何者なんだ!?それにあの強さはいったい……）

トランクスは全身から気を開放させた

未知なる存在であるこの男を警戒するが故の行動だ

だがトランクスは、さらに言えばネギもまだ知らなかった

未知なる存在は、彼らだけではないことを

第４８話　対戦相手は予想外　現れたのはどこの誰？？（後書き）

クウネル
「どうも皆さん、あとがきコーナーのお時間です」

エヴァ
「このコーナーもだいぶお馴染になってきたな」

クウネル
「そうですね、では今回のゲストをお呼びしましょう」

茶々丸
「どうもマスター、また来ちゃいました」

エヴァ
「ちゃ、茶々丸！？」

アラレ
「んちゃ！アラレだよ！」

田中
「田中デス……」

クウネル
「今回はこのロボット三人組でお送りします」

エヴァ
「ちょっと待てクウネル！どういうことだこれは！？」

クウネル
「と言いますと？」

エヴァ
「茶々丸だ茶々丸！なんで二連続で出してるんだよ！一巡するまで二度目は無い筈だろ！？」

クウネル
「ああ、それですか……」

エヴァ
「他に何がある！」

クウネル
「実は前回のこのコーナーで、作者が不手際をやらかしまして……」

エヴァ
「不手際？」

茶々丸
「これをお読みくださいマスター、水竜さんからの感想のコピーです」

エヴァ
「どれどれ……茶々丸とアラレ……フランケンシュタインなのと田中さん……ってええっ！？」

クウネル
「作者がうろ覚えで書いてしまったため、組み合わせを間違えてしまったんです」

茶々丸
「そのため帳尻合わせということで、この三人が同時出演に……」

注・これはノンフィクションです、マジで間違えてました。水竜さんスミマセン……

エヴァ
「何度ヘマをやれば気が済むんだ作者ーーーー！」

アラレ
「あはははは！怒ってる怒ってる！」

田中
「怒ッテル……」

エヴァ
「くそガキとポンコツは黙ってろ！」

クウネル
「まあまあ、でもそのおかげでこうしてまた自分の従者と共演できたわけですし」

茶々丸
「結果オーライと考えるほうが良いかと」

エヴァ
「ま、まあお前らがそう言うなら……」

茶々丸

「それにこのまま怒られ続けてますと、コーナーの進行に差し支えますし」

エヴァ
「それが本音か！」

クウネル
「では、今回の話を振り返ってみましょう」

エヴァ
「勝手に進めるなよ！まあ、ちゃんとコメントはするが……ついにボス一派が登場したな」

茶々丸
「劇場版を見ていない方でもある程度わかるよう、外見的な説明がちゃんとされてますね」

エヴァ
「確かにな……過去の話を振り返ると結構省いてるところもあるようだし……」

クウネル
「ぶっちゃけ、原作の両作品を完璧に把握している人なんてそうはいませんからね」

エヴァ
「それを言っちゃダメだろ……」

茶々丸
「ですが足洗さんの作品は同じクロスにも関わらず、普通に我々の

より人気ありますよね」

エヴァ
「それも言うな、っていうか勝手に名前出しちゃダメだろ」

注・足洗さん、勝手に名前出してスミマセン

クウネル
「さて、次回予告です」

茶々丸
「次回は悟飯さんと楓さん、お二人をスポットに当てててのお話となります」

エヴァ
「さてさて、原作がどこまで変貌するのやら……」

クウネル
「というか今でもだいぶ変わっちゃってますよね、細部の設定とか」

エヴァ
「そういう関係にはもう触れてやるな……」

注・本当にスミマセン、『投稿した後確認したら全然違う』という事態が多発しちゃってます

エヴァ
「……さっきから気になってたんだが、この『注・』って何だ？」

クウネル

「今回から始めた新しい手法のようです」

茶々丸
「作者が自身の言葉として呟きたいということで作られました」

エヴァ
「なんだよそれ……てゆーか謝ってばっかだな」

クウネル
「次回は金曜日の投稿を予定しています」

エヴァ
「感想、ゲストのリクは随時募集中だぞ！」

茶々丸
「では皆さん、次回のネギドラ！も……」

エヴァ&クウネル
「お楽しみに！」

エヴァ

「ってあれ？あの二人はどこ行った？」

クウネル
「つまらないから帰っちゃったみたいですね」

茶々丸
「正確にいえば、アラレさんが田中さんを引っ張ってどこかへ……」

エヴァ
「それは一番ダメだろ！」

第４９話　対戦相手は予想外　現れたのはどこの誰？？（前書き）

第４９話投稿です。そういえば連載してもう半年になるんですよね、長かったような短かったような……こうして続けられているのも皆さんの応援のおかげです、ありがとうございます。

ではどうぞ！

第４９話　対戦相手は予想外　現れたのはどこの誰？？

「随分不思議なところに来ちゃったなあ……」

ネギやトランクスと同様に、悟飯もバトルゾーンへと到着していた

現在、辺りを歩きながら散策中

ここは、ネギ達のいる場所より輪をかけて異質な空間だった

床はピンク色、上もピンク色、辺り殆どがピンク色

そして、子供が使うおもちゃらしきものが散乱していた

しかも大きさが並みではなく超巨大

まるで自分が小人になったかのようだ

そこを悟飯は、対戦相手を見つけるため歩き回っていた

「ネギ君達が行ったところもこんな感じなのかな……！」

探しながら他の三名のことを考えていた悟飯

その直後に、自分の真上から迫ってくる物に気付いた

いや、正確には迫ってくる物ではなく、落ちてくる物

アルファベットが大きく書かれた立方体のブロックだった
これも周辺に散らばるおもちゃと同様、大きさは凄まじい
小さく見積もっても、一辺二メートルは普通にあった
悟飯は横に跳び、ブロックとの激突を回避するが
「……っ！」
落ちてくるのは一個だけではなかった
避けた先避けた先へピンポイントに、同じようなブロックが落下してきた
悟飯はさらにスピードを上げ、一つも当たることなく全てを回避
「だ、誰がこんな危ないことを……」
そして、これが意図的に起こったことだと瞬時に把握した
辺りをキョロキョロと見回し、人影がないか探してみる
「フッフッフ、まあこのくらいは避けてもらわなければな」
「！」
すると、上空から聞き覚えのない声
即座にそちらへ顔を向ける悟飯

「お、お前か！こんなことをしたのは！」

舞空術で浮遊している男が、上下逆さまの状態でゆっくりと降下してきた

トランクスと戦っている男と同じく、濃いめの青色の肌とアクセサリー

悟飯と同じくらいの小柄で、紫のターバンを頭に巻いていた

「お次はどうしてやるかな……」

「や、やめろ！武道大会なんだぞ！」

悟飯は右手の平をバッと出し、ターバンの男の行動を制止しようとする

だが彼は、止める気などさらさらなかった

「ゲームだと言うのか？」

両手を突き出し、淡い光を灯らせる

それと同時に、悟飯の背後からギギギギッと鈍い音

「なっ！？」

振り返ると、そこにあったのは巨大な時計

その短針と長針がグルグルと回りだしていた

そして二本の針は本体から外れ

「はあっ！」

ターバンの男の意思に従って悟飯へ襲いかかった

「こ、今度は時計の針かっ！」

悟飯は何とかそれを避けていく

だが、ブロックの時のように簡単にはいかない

今度は垂直落下ではなく、ターバンの男の意思によって自由自在に追いかけてくる

ギリギリまで目で追い、かわす必要があった

その悟飯の動きを見て、ターバンの男は思わず感心の声を上げる

「驚いた、想像以上の動きだ……地球人がここまでやるとはな」

そしてこう続けた

「さっきの男はあっけなく死んでしまったが、お前ならなかなか楽しめそうだ」

「な、何だって！？」

ターバンの男は顎をクイッと動かし、ある一方向を悟飯に示す
そちらへほんの一瞬振り向いてみると、さっき落ちてきたのと同じようなブロックが数個
「！」
そしてそこの下部の隙間から、血のついた人の脚が一本見えた
「ひ、ひどい……」
おそらくあの人物が、自分の本来の対戦相手だったのだろう
それを、乱入してきたこの男が弄ぶかのように命を……
「いつまでよそ見をしているんだ？」
いつの間にか、二本の針は悟飯の両脇へ挟み打ちの態勢に入っていた
ターバンの男が両手をバッと中央に寄せると、それらは同時に悟飯の元へ
これで串刺し、ゲームオーバーだ
ターバンの男はそう信じて疑わなかった
だが
「……だあああああああああああっ！」

「ほう……」

そうなることはなかった

悟飯は怒りとともに気を全身から爆発

その爆発波は悟飯を包み込むように、針からの攻撃を防いだ

針はその爆発波に触れた先から消滅

気づけば二本の針は、どちらも跡形もなく消えてしまっていた

だがターバンの男は、驚きはしたものの動揺はしていなかった

（かなり強力な気だな……だがあの方に比べれば……）

まるで悟飯の勝利は無いと確信しているかのようだった

（だがこのまま一対一は厳しい……ひとまず皆と合流するのが得策か）

そう考えるとターバンの男は、再び両手を前方へ向け

「はあっ！」

先ほどと同じく淡い光を灯らせる

（つ、次は何をする気だ！？）

悟飯は警戒し、ターバンの男を見据えたまま構えをとる

すると

「な、何だ何だ!?」

辺りの様子が著しく変化した

ドロドロと泥水が垂れるかのように、一面が暗い色へと染まっていく

気づけば風景が、ファンシーなそれから険悪なそれへと変貌を遂げていた

(魔術か何かの類なのか!?)

悟飯がその変化に思わず動揺する

その僅かな隙を突き

(今だっ!)

ターバンの男はある場所へ向かって一直線に飛んだ

「あ、待てっ!」

それに少しして気づき、悟飯も遅れて後を追う

ターバンの男が向かった先

そこはのちに、超大戦の地と化すことになる

「ど、どこにいるでござるかぁ……」

それの少し前、楓は汗を流しながら対戦相手を探していた

その汗の量は尋常ではなく、歩きながらたびたび手の甲で額のそれを拭っていた

楓にあてられたバトルゾーン、そこは砂漠地帯だった

辺り一面砂

砂

砂

とにかく砂

地下なので太陽が照りつけているわけではない

しかしそこはとてつもなく暑かった、同じ地下とは思えないほどにだ

おそらくこの辺り一帯だけ、強力なヒーターや加湿器が仕掛けられているのだろう

（拙者としたことが、ハズレを選んでしまったでござるよ……）

自分のしたマシンのチョイスに、今更ながら後悔してしまう楓

想像通り、このバトルステージはいわゆるハズレ

灼熱の暑さに耐えつつ、対戦相手を探さなくてはならない

かなり広いことを悟った楓は、着いた直後に影分身を展開

十六分身をして捜索に当たっている

他の楓達も本体の彼女同様、文字通り額に汗して探しているわけだ

（だがおかしい……ここまで人海戦術を駆使して探しているというのに全く見つからない……）

広いといっても、十六人が同時捜索すれば見つけるのは容易いはず

なのに全くと言っていいほど成果がないのだ

（どこかに隠れているのでござろうか……！）

すると何かを感じ取った楓

とっさに後ろを振り返る

だがそこには、自分足跡以外何一つなかった

（……気のせいでござるか？背後に人の気がしたと思ったのでござるが……）

暑さのせいで色々鈍ってしまっているのだろうか？

汗を拭うと、再び歩を進め始める

だが、楓としてはスッキリしなかった

このモヤモヤを払うがために、口元に手を当てながら思考に入る

（だがおかしい、いくら暑いとはいえ拙者がこんな失態をするなんて……なにか嫌な予感がするでござるな）

そうやってしばらくしていると、楓は進めていた足をとめた

右足のつま先が、何かにコツンとぶつかったのだ

（およ？何でござるか？）

ぶつかった先へ視線を下ろす

そしてすぐさま、表情は驚愕のそれへと変わった

「ななっ！？」

ぶつかったもの、それは人の腕だった

砂の表面から右腕が一本、手首より少し下あたりから顔を出していた

楓は慌ててその腕をつかみ、グイっと引っ張り上げる

するとそこから、牛魔王並みに太い巨漢の男が姿を現した

（……だめだ、既に息が無い）

寝かしたあと首に手を当て、脈をとってみたが反応は一切なし

完全に死亡していた

（だがどうして……この暑さにやられたでござるか？）

長時間いれば、熱中症になってもおかしくない環境

それが原因かと推測した楓だったが、男の一部分を見て撤回した

（いや違う！これは暑さのせいではござらん！）

見た場所は首

人によって絞められた跡がハッキリと残っていたのだ

つまりこれは殺人、人の手によるものだった

（誰がこんなことを……）

その直後のことだった

「ん？ぐ、ぐほおおっ！」

片膝をついて男を診ていた楓

地との差は一メートルもなかった

そこから新たなものが顔を出したのだ

もう一本の別の腕が

反応が遅れた楓は、その気味の悪い青色の腕に首を掴まれてしまう

（こ、こいつが犯人……）

振りほどこうと、すぐに両手を腕にかける

（なっ！？す、凄い力でござる……）

ところが、腕は楓から離れることはない

影分身の大量行使と暑さのせいでやや力が落ちてるといっても、

楓の力は並の人間では到底敵わない

なのに、この腕はその力に耐えきっていた

すると今度は、楓の身体が持ち上げられていく

砂の中から、腕の持ち主がゆっくりと姿を見せ始めていた

オレンジ色のモヒカンヘアーと、同色の濃い髭

ザンギャ達と同じアクセサリーを付けた体格のいい男だった

「へっへっへ……これで二人目だな」

男は軽く笑いながら、楓の首をさらに締め上げる

（ま、マズい……）

その楓は、ほんの僅かに腕の力を緩めさせることで精いっぱい

徐々に脳内の酸素が減少していく

（このままでは……）

楓の死は、目前まで迫ってきていた

「界王様！何なんだあいつらは！？」

あの世でこれらの光景を見ていた悟空は、切羽詰まった顔で界王に問いかけた

明らかに彼らが常軌を逸しているのは、あの世から見ている悟空でも容易に分かっていた

しかも、自分の息子や仲間の知人が殺されかけているのだ

焦らないはずがなかった

「……」

「界王様！」

一方の界王も、別の意味で焦りの表情を見せていた

額からは冷や汗が一筋、サングラスの奥では目が見開いたままだ

界王は、あの者達が誰かを知っていた

そして彼らが、ああしてあそこにいる理由が分からないでいた

「界王様！」

（な、何故じゃ……何故あやつらが地球に……）

悟空の声もロクに耳に入らず、界王はただただこの世を映すテレビに目を向け続けていた

第４９話　対戦相手は予想外　現れたのはどこの誰？？（後書き）

クウネル
「どうも皆さん、クウネル・サンダースです」

エヴァ
「エヴァンジェリンだ、というわけで今回も後書きコーナーを始めるぞ。まずはゲストの紹介だ」

クウネル
「はい、今回のゲストは……」

史伽
「うわーーーーーん！楓姉死んじゃいやですーーーー！」

風香
「バカ！楓姉が死ぬわけ……う、うわーーーーーん！楓姉ーーーー！」

ウミガメ
「あ、あの二人とも、落ち着いて……」

クウネル
「……鳴滝ツインズのお二人とウリゴメさんです」

ウミガメ
「あのスイマセン、ウリゴメじゃなくてウミガメです」

エヴァ

「お前はバカか！何でこんなタイミングであのチビ双子を呼ぶんだ！」

クウネル
「……と言いますと？」

風香
「びえーーーーん！」

史伽
「ふえーーーーん！」

ウミガメ
（オロオロ、オロオロ……）

エヴァ
「長瀬楓が死ぬか死なないかって時に呼んだら、間違いなくこいつら泣くだろ！現に今泣いてるし！」

クウネル
「……ああ！ホントですね、いやー私としたことがついウッカリ……」

エヴァ
（絶対狙ってて呼んだなクウネル、っていうか作者）

注・はい、そうです

エヴァ
（認めやがったし……）

クウネル
「しょうがありませんから、ウミガメさんを含めた我々三人で進行しましょうか？」

エヴァ
「何か最近このパターン多いな……」

ウミガメ
「あのー……あの子達放っておいて大丈夫なんですか？」

クウネル
「大丈夫ですよ、以前もこういう処遇を他キャラにさせましたが、苦情は一件もなかったですし」

ウミガメ
「いや、そういう意味じゃなくて……」

エヴァ
「さて、今回でぼーや達四人の全員の状況が把握できたわけだな」

ウミガメ
（あれ？私の意見無視？）

クウネル
「原作にはなかった、サタンの弟子達の死体の描写がありましたね」

エヴァ
「あのまま四人が四人ともガチ勝負したら、観客が普通に決勝戦と解釈しちゃうからじゃないのか？」

クウネル
「そういえば原作では、関取みたいなキャラが楓さんと同じ所に行って殺されてましたね、カメラの目の前で」

エヴァ
「カメラか……そういえばあるって説明があったな、４８話４９話共に描写ゼロだが」

注・スイマセン、忘れてました

エヴァ
「ここで謝るくらいなら直せよ……っていうか、４８話には悟空が出るって予告があったのにこの話にズレ込んだよな」

注・それもスイマセン、二人づつで話を切っちゃったんでこうなりました

ウミガメ
「えっと、エヴァンジェリンさん？もうそれくらいに……」

エヴァ
「あとウーロンとかいう豚、原作ではカメハウスに在住してなかったはずだよな？」

クウネル
「あ、それ言っちゃいますか……」

エヴァ
「言ってやるさ、なんせこのことを作者は完全に放置してたからな」

注・スイマセンスイマセン、気づいた時は既に３０話くらいに入ってて修正が困難に……

クウネル
「エヴァンジェリン、ストップです。それ以上やると作者が心労で倒れます」

エヴァ
「……ふん、まあ今回はこのくらいにしてやるか」

クウネル
「まだやる気なんですか？」

エヴァ
「当たり前だ」

ウミガメ
（こ、この子、怒ったブルマさんより怖いなあ……）

クウネル
「……コホン、気を取り直して次回予告です」

風香
「楓姉ーーーーー！」

史伽
「死なないでですーーーーー！」

風香＆史伽

「びゅえええええええええんっ！」

エヴァ
「やかましいわ！……というわけで、長瀬楓のところから第５０話は始まるぞ」

クウネル
「そういえば次で５０話目でしたね」

エヴァ
「ようやくな。しかしこのペースだと、『連載一周年＆百話』はまず無理だよな」

クウネル
「何とか週三本の週を作りたいとは考えてるみたいですが……」

注・なかなか難しいんですよね、これが

エヴァ
「ここで言っちゃダメだろ……」

クウネル
「次回の更新予定は火曜日」

ウミガメ
「感想、リクエストはいつでも大募集、だそうです」

クウネル
「では皆さん、次回のネギドラ！も……」

エヴァ&ウミガメ
「お楽しみに！」

ウミガメ
「ほら二人とも泣かないで、はいハンカチ」

風香
「グスン……ありがと亀さん」

ウミガメ
「いえいえ……」

史伽
「お姉ちゃーーん、このハンカチ湿ってて生臭いですー！」

風香
「うわっ、ホントだ！」

ウミガメ
「え！？ス、スイマセン……」

エヴァ

「……何をやってるんだあいつらは？」

第５０話　思いがけないこの強さ　倒れ地に伏す二人の戦士（前書き）

ついに５０話目です。さらにプロローグと番外編含めると５２本目です、本当に応援ありがとうございます。
それと今回あとがきコーナーが最長になりました、そちらも是非読んでくださいね。
ではどうぞ！

第５０話　思いがけないこの強さ　倒れ地に伏す二人の戦士

酸素欠乏による意識混濁

自分がそれに陥っているというのを、楓はハッキリと理解していた

すでに目は霞み、手に込めていた力も抜け始めようとしている

（こ、これまでなのでござるか……）

男の死体を発見する直前、感じた気配は本物だった

思えばあの時、もっと警戒をしていれば……

（せ、拙者としたことが……最大の不覚……）

そのことに、悔やんでも悔やみきれないでいた

「ちっ、結構しぶといな……そらっ！」

「かはあああああっ！」

予想以上に粘る楓を見て、モヒカンの男はさらに力を込める

楓は息を吐くかのようなか細い声を上げた

「へっへっへ……そろそろかな」

（も、もうダメでござ……）

思考することもままならなくなり、さらに視界が霞む

意識が切れ、死に至るまであとほんの数秒

そんな時だった

「ん？ぐぼおおおっ！」

何かを察知し、モヒカンの男が首だけ後ろに向ける

その直後、頬を力強く何者かに殴られた

すると、楓の首を掴んでいた腕の力が緩む

（い、今でござる！）

微かに残っていた意識は、チャンスは今しかないと察して全身に指示

「ぬおおおおおっ！」

身体を揺らして、両足をモヒカンの男の胸板へつける

そして思いきりそこを蹴り、反動で脱出に成功した

「げほっ、げほっ、げほっ……あ、危なかった……」

咳き込みながらも体内に空気を入れ、脳や全身に酸素を送っていく

そして、今起こったことを完璧に把握した

「何とか間に合ったみたいでござるな……比較的近くに一体いて助かった……」

モヒカンの男を殴った者の正体は、楓の影分身の内の一体だった

首を絞められ、自分の力では逃れられないと悟った時、楓は影分身達に集合をかけていた

十五体も作っているため、スピードはオリジナルよりもだいぶ劣る

しかも影分身達は、本体の意識が切れると自動的に消滅してしまう

自分が堕ちる前に来れるかどうかは、楓自身も確証はなかった

だが何とか先行して一体、こうして間に合ってくれたのだ

そうこうする間に、残りの影分身達も次々と到着

モヒカンの男の周りを取り囲んだ

「ほう……面白い技を使うじゃねえか」

口元についた血を指一本で拭き取り、十六人の楓を見渡す

「……これで形成は逆転した、おとなしく降参するでござる」

呼吸も整い、楓はまっすぐモヒカンの男を見据えた

いくらパワーでは劣るとはいえ、戦えない相手ではない

それにこの人数差もある

楓は自らの側を優勢と判断し、こう言ったのだ

だが男はというと、余裕の表情を崩さない

「ほーう、この俺に勝てる気でいるのか？」

「そうじゃなければこのようなことは申さん。お主ほどの腕なら分かるでござろう？」

「まあな……」

モヒカンの男は右手を後頭部に回し、ボリボリと掻き毟る

この行動には、やはり焦りの一片も見えない

「確かに負けちまうかもな……今の俺のままじゃ」

「……何？」

楓に向けて放たれた不可思議な発言

それに対して疑問符を浮かべた直後、ことは起こった

「はあああああああっ！」

いきなり両拳を握りしめ、モヒカンの男は全身に力を込める

それに合わせて、耳と胸にあるアクセサリーが緑色の光を放ち始めた

「ななっ！？」

そして全身から気が溢れ、モヒカンの男は著しくその容姿を変化させた

全身の肌は何か塗ったかのようにライトグリーン

髪の毛も紅蓮の赤へと大きく変わる

そして筋肉が膨張し、より力強く、巨体と化したのだ

（変身！？気が爆発的に上がったでござ……）

「がああああああああああっ！」

「！！」

またしても楓はミス

いきなりパワーを上げた目の前の敵に気圧され、対応が一瞬遅れてしまった

モヒカンの男の全身から、強力な爆発波が炸裂したのだ

急いで十六人の楓は防御の体制をとるが、ダメだった

今回出した楓の影分身は、戦闘を前提としたものではない
あくまで対戦相手の捜索が目的で急いで出したため、どれも充分に気を練りきっていなかった
そのため皆防御力が低く、この攻撃に耐えきれず消滅した
そうなる前に本体へ戻し、気の全体量を上げていればまだ分からなかったかもしれない
だが、それは叶わなかった
「せえええやあああっ！」
「くっ！」
全身に力を漲らせ、次にモヒカンの男は楓に突っ込んでくる
楓は構えをとって迎え撃つが、それは無意味に終わった
「ふんっ！」
体力と気を大幅に消耗したままだった楓には、力は半分以下しか残っておらず
「しまっ……」
防御に使おうとした両腕を、片手でパシンと簡単に弾かれ

「だあああああっ！」

「ぐぼおおっ！」

腹部に思いっきりボディーブローを打たれた

身体の中に入っていた空気が無理矢理絞り出され、楓の口から漏れる

そして痛みを感じる間もなく、視界は一瞬にして霞み

（む、無念……）

意識を刈り取られることとなった

「まったく、手こずらせやがって……」

自分の方へと倒れ込む楓を、モヒカンの男は肩で受け止める

当初の予定では変身までするつもりはなかったようで、やれやれといった表情

（だがこの女、かなりの実力者だな……）

ほんの一瞬とはいえ、変身前の自分を劣勢へと持ち込んだ

最初に殺した奴とは天と地ほどの差があることは、容易に理解できた

（殺すには惜しいな、さてどうしたものか……）

まだ息がある楓を見て、モヒカンの男は暫く思考
そしてある結論を出した
（とりあえずこいつを連れて、他のみんなと合流するか……その時決めたって遅くはない）
目が覚めたとしても、逃げられないよう拘束するだけのこと
そう考えると楓を持ち上げ、肩にしっかりと乗せる
そしてフワリと舞空術で浮上し、ある方向へと飛び始めた
その方向は、ターバンの男と悟飯が向かっているそれと同じだった

「そらそらそらそら！もうお終いか？」
「く、くそっ！」
一方トランクスは、バンダナの男相手に苦戦を強いられていた

最初は相手の剣技を見切り、勝負を優勢に進めていたトランクス
だがしばらくして、バンダナの男は勝負に出た
全身から気を放ってトランクスを下がらせると、そのまま変身を行ったのだ
モヒカンの男と同じようにアクセサリーを光らせ、全身の容姿を変化させた
髪や肌の色の変化、筋肉の膨張、そして大幅なパワーアップ
全く同じ変身だった
それによって速く、そして力強くなった剣技はトランクスを翻弄
さらにはそこから体術や、気功波系の攻撃なども繰り出してトランクスを押し始めていた
場所は現在花畑から大きく移り、『廃墟と化した街』の様なステージで戦っている
そこは西洋風で、ヨーロッパの街並みとどこか重なっていた
壁や段差などを利用し、トランクスは何とか攻撃を凌いでいく
だがそれも、長くはもちそうになかった
（しかたない……向こうも変身していることだしな）

そこでトランクスは、今まで相手に見せていなかったアレをすることを思いつく

そうするに値する相手であることを認め、移動をやめて向かい合う

「（勝てないと分かって諦めたか？）死ねえええええええっ！」

バンダナの男は、剣を上から力強く振り下ろした

今度は真剣白羽取りはできそうにない

これで勝負あった

そう胸の内で強く思ったその時だった

ガキイイイインッ

「な、何！？」

剣が何かと強くぶつかったような音

相手をぶった切ったと感じられる様な手ごたえは何一つない

トランクスは、自らの右腕でその剣を受け止めていた

「ば、バカな！俺の剣を止めただと！？しかも貴様……」

「そうさ、さっきまでの俺は全力じゃない」

トランクスは腕を出す前に、バンダナの男と同じく変身を行った
超サイヤ人となり、全身が黄金色の気で包まれていた
特に今は腕辺りのそれが顕著で、強度は向こうの剣と同等以上までとなっている
「はあああああっ！」
そのままトランクスは脚で、バンダナの男の剣を持つ方の手を蹴り上げた
力を加えていたのと全く違う方向からのそれは、いとも簡単に剣を手から離れさせる
「だあああっ！」
剣が無くなり自由になった右腕は相手の身体に狙いを定め
「ぐおおおおおっ！」
鳩尾にストレートが見事入った
拳を引き抜くと、バンダナの男はバタリと前方に倒れ込む
そして変身も解かれ、最初の姿へと戻る
まだ生きているようだが、完全に気を失っていた
トランクスは安心した様子で変身を解き、元の状態で見下ろす

「だが何者なんだこいつは……明らかに地球人じゃないぞ」

だとすれば異星人か

でも何故この地球に？

そうやって考えを巡らせるトランクス

既に攻撃に対する警戒は皆無となっていた

だがトランクスはそれを続けるべきだった

なぜなら

「……！！」

まだ敵はすぐ近くにいたのだから

「ぐわあああああっ！」

気配を消して潜伏していたその男は、トランクスが変身を解いたと同時に背後から接近

気づいて振り返ったがもう遅い

構えも取れていないトランクスへ、回し蹴りが炸裂した

箇所はピンポイントで顔の側面

一瞬にして脳が揺すぶられ、トランクスは気絶する

「ふん、他愛もない……」

トランクスを気絶させたその男は、このあっけなさに鼻で笑った

髪や肌の色は、変身前のバンダナの男と全く同じ

ただ髪はバンダナの男より長髪

また胸元のアクセサリーは、他の者よりやや装飾が多かった

「おいゴクア、起きろ」

バンダナの男、ゴクアを掴み上げると軽くゆする

「おい、ゴクア」

「……んー」

暫くそうしていると、ゴクアはゆっくりとまぶたを開けた

そして目の前の人物を見て、一瞬にして我へと帰った

「ああっ！」

「ようやく起きたか、ったく」

掴まれていた手を離され、ゴクアはフラフラと体勢を崩す

だがすぐに持ち直し、しっかりと両足で地を踏んだ

「近くまでお前が来てたんで様子を見に来たら……」

「も、申し訳ありません……」

「だがこの男、使えるかもしれんな」

「え!?」

そう言うと男はトランクスを担ぎあげ、舞空術で浮上

「元の場所に戻るぞ、ついて来い」

「こ、こいつをどうするおつもりで?」

「殺すには惜しいじゃないか、あわよくば新しい部下として使う」

そうならなければ殺すだけだ

邪悪な笑みを浮かべ、男は飛び始める

「どうした、早く来んか」

「は、はい!ボージャック様!」

慌ててゴクアも剣を拾い、ボージャックの後を追う

彼らが向かうところもまた、他の皆と同じであった

第５０話　思いがけないこの強さ　倒れ地に伏す二人の戦士（後書き）

クウネル
「さて、毎度お馴染みあとがきコーナーです。本編がついに５０話ですね」

エヴァ
「前回も言ったが『ようやく』な。丸々一週間空けとかやったらまあこうなるわな、連載初期に作った猶予分が全部消えたぞ」

クウネル
「当初の予定では多少の連載ペースの乱れを含めても、何とか６０話前後は行きたかったみたいなんですけどね」

注・ここから半年は気合入れて頑張ります、何とか

エヴァ
「最後の何とかは余計だろ……まあいい、早速ゲストの紹介だ」

クウネル
「はい、今回は祝５０話を兼ねて、かなりすごいゲストをお呼びしました」

エヴァ
「ほう」

クウネル
「フェイト・アーウェルンクスとフリーザさんです、どうぞ！」

フェイト
「やれやれ……本編の出番がないかと思ったら、こんなところでの登場になったか」

フリーザ
「記念すべき５０話目のゲストに私ですか……まあ当然ですね」

エヴァ
「うわ出たっ、作者が出すのを躊躇してたこのコンビ」

クウネル
「フリーザさんはともかく、フェイトの方は今原作で色々佳境に入ってますからね」

フェイト
「僕の本編入りが没になったのもそのためなのさ。一緒に巻き込まれてのトリップ案も、一応ながらあったらしい」

エヴァ
「まあ連載始めた時期が時期だったしな……」

クウネル
「逆にフリーザさんは本編に登場しましたよね、早乙女さんのゴーレムでですが」

エヴァ
「そういえばあったなそんな話……１９話くらいだったか？」

クウネル
「はい」

フリーザ
「そうだ思い出したぞ！あの忌々しいサイヤ人め……一度ならず二度までもこのオレを！」

クウネル
「あれ、地雷踏んじゃいました？」

エヴァ
「てゆーかあれは本人じゃないんだから、そこまで怒らなくていいだろ」

フェイト
「やれやれ、宇宙の帝王が聞いて呆れるね」

フリーザ
「……何だと？」

フェイト
「僕だったら、君みたいな無様な姿は晒さないと言ってるのさ」

フリーザ
「き、貴様！誰に口をきいてるか分かっているのか！？」

フェイト
「もちろんさ、宇宙の帝王（笑）のフリーザさん」

フリーザ
（ブッッッッッッッッチン！）

エヴァ
「あーあ、やっちゃった……」

クウネル
「そういえばこの小説の強さ補正だと、フェイトはフリーザさんと比べてどれくらいなんでしょう？」

注・絶対現実的にはおかしいと分かってますが、フェイトが勝ちます

エヴァ
「あーあ、作者もやっちゃった……」

クウネル
「多分こういうメチャクチャ具合が、読者の幅を狭めてるんでしょうね」

エヴァ
「だよな」

注・スイマセンスイマセン、ジャ○プ・アル○ィメットス○ーズみたいな感じってことでご勘弁を……

エヴァ
「これもかなり問題発言だよな？」

クウネル
「ですよね」

フェイト

「それはそうと、感想コーナーとかはしなくてもいいのかい？」

エヴァ
「うおっ、いつの間に！」

クウネル
「一応聞きますが、フリーザさんは？」

フェイト
「あそこで大人しくしてもらってるよ」

クウネル
「わー、見事に石化してますね……」

フェイト
「暫くしたら元に戻るからご心配なく」

エヴァ
「そ、そうか……えーと、今回の話ではついに奴らの親玉が登場したな」

フェイト
「あと、ゴクアっていう剣士が死ななかったね。確か原作では、あのままトランクスに殺されていただろう？」

クウネル
「ネギ君達が加わるので敵の人数も多めに確保しておこう、ということらしいです」

エヴァ

「なるほどな……あと、あのモヒカンって変身できてたか？」

クウネル
「原作ではしてませんね、ただ『折角だからやっちゃおう』ってことでしたみたいです」

エヴァ
「おいおい……まあさらに盛り上がりそうだからいいけど」

フェイト
「もう話すことはこれくらいだよね？」

クウネル
「ですね、では次回予告です」

エヴァ
「次回は一同が一箇所に集結だ」

フェイト
「そして界王から明かされる奴らの正体……期待してもらえると嬉しいかもね」

クウネル
「次回の更新は木曜日を予定しています」

エヴァ
「お？いつもより一日早いじゃないか」

クウネル
「金曜日に用事があるらしく、頑張って仕上げるつもりのようです」

フェイト
「てことは、出来なかったら来週まで先延ばしか……」

注・出来る限り頑張ります！

エヴァ
「まあ、期待するしかないわな……」

クウネル
「感想、ご意見、いつでもお待ちしていますよ」

エヴァ
「では諸君、次回のネギドラ！も……」

クウネル&フェイト
「お楽しみに！」

フリーザ
「まて白髪のクソガキーーーーーー！ぶっ殺してやるーーーーーー！」

エヴァ
「うおっ！復活早っ！」

エヴァ
「ところで、ホントにあいつの登場予定はないのか？」

クウネル
「残念ながらないみたいですね（あなた同様）」

エヴァ
「ん？何か言ったか？」

クウネル
「いえ、何も」

フリーザ
「ぐあああああああっ！また身体が石にいいいいっ！」

エヴァ
「あ、またやられてる」

注・水竜さん、おそらく予想外の内容になったかと思います。スイマセン

第５１話　今界王から明かされる　彼ら銀河戦士の真実（前書き）

どうもカゲシンです、今回久々に朝投稿になりました。本日予告通り投稿出来て、本当によかったです。このペースでずっとやれたらどんなにいいことか……『連載一周年&百話』目指して精進いたします。

ではどうぞ！

第５１話　今界王から明かされる　彼ら銀河戦士の真実

「はっはっは！どうしたのボーヤ、このまま逃げる気かい？」

（くそっ、やっぱり向こうも速い……このままじゃ追いつかれる）

トランクスと達と同じく交戦中だったネギ

だが今はそれを急遽中断

多数の気が感じられる方へ急いで飛んでいた

ネギも最初はザンギャのことを、ただの対戦相手として戦っていた

しかしその考えは、一分もしないうちに撤回された

ザンギャの攻撃には一撃一撃に殺意が感じられ、ネギの第六感が危険と察知

なかでも、溶岩の池に投げ込まれそうになった時はかなり危なかった

そこでネギはこう考えた

目の前の人物は、本当にバトルゾーンの対戦相手なのか？

もしそうでなかったら、本当の自分の対戦相手は？

そして、他の三人は大丈夫なのか？と

そこで急いで、辺りに他の気があるかを察知

するとここにいる二人以外で、大きな気が全部で五つ

この時点で頭数が合わない

それに加え、その五つのなかで知っている気は悟飯のだけだった

ネギは小さな気の察知が著しく苦手である

そのため、この時点での楓とトランクスの安否は不明

かなり消耗しているか気絶しているか

もしくは、既に死んでいるか

ネギに一抹の不安がよぎった

そして、五つの気がどれも同じ所へ向かっていることに気づいた

そこへ行けば何か分かる

そう瞬時に判断し、隙を見てその方向へ

こうして現在に至るわけである

「魔法の射手〈サギタ・マギカ〉戒めの風矢〈アエール・カプトゥーラエ〉！」

「おっと」

後ろに左手を向け、少しでも時間を稼ごうと拘束呪文を放つ

だがそれはザンギャに見切られ、難なく避けられてしまう

「今のは当たるとヤバそうだったね……なかなか楽しませてくれるじゃない」

ニヤリと笑みを浮かべ、ザンギャはさらにスピードを上げる

（く、くそっ！戦いの歌、さらに出力アップ！）

それに対してネギも、魔力をフル稼働させて逃げ続ける

この鬼ごっこも、じきに集結を迎える

「待て！どこまで逃げるつもりだ！」

「フッフッフ、さあな」

時を同じくし、悟飯もまた鬼ごっこ

ただし、立場はネギとまるで逆である

ひたすら一方向に飛び続けるターバンの男を、全力で追っていた

「そら！」

「くっ！」

単純にスピードだけなら、すぐに悟飯が捕まえてしまう

だがターバンの男は魔術で辺りにある物を操り、悟飯の動きを上手く抑えていた

今後は石造の建物の壁を壊し、その破片を一斉に飛ばす

悟飯はやむなくその足を止め、狙いを定めて気弾で撃墜した

その間にターバンの男は、悟飯との距離を離す

「逃がすか！」

石片を全て破壊すると、悟飯は再び追い始めた

（何だ？大きな気が一ヶ所に集まっているぞ……それにトランクスさんと楓さんの気が……）

ネギとは違い、二人の気を察知できた悟飯

小さくはなっているが、とりあえずは安定している

気絶してしまっているのだろうと悟飯は推測した

（そうか！あいつ、他の仲間と合流する気か！）

そして残りの知らない気の存在で、ターバンの男の意図を見抜いた

（とにかく二人が心配だ、急がなくちゃ）

こちらもまた、もうじき鬼ごっこは終了する

「ほいっと」

モヒカンの男の手から投げ捨てられる楓

既にうつ伏せで置かれているトランクスの上へドサリと乗った

「そっちも一人持ってきたのか、ビドー」

「はい、ボージャック様」

モヒカンの男、ビドーはボージャックの問いに答えた

「こっちも一人連れてきた。下にいるそいつは、変身したゴクアを倒したほどの強さだ」

「ほう、それはそれは……」

ビドーは横目でゴクアを見る

やや口元が緩んでいた

「ゆ、油断していただけだ！次に本気で戦えば絶対に勝てる！」

ゴクアは声を荒げてビドーに言い返す

やはり先ほどの敗戦は、ゴクアのプライドに大きく傷をつけるものであった

「しかし、ザンギャとブージンは遅いな……」

未だ戻って来ない二人の部下に気付き、ボージャックは腕を組む

ターバンの男の名はブージンというらしい

「お、こちらへちゃんと向かっているな……」

気になって辺りの気を探り始めるボージャック

すぐにこちらへ向かう二人の気を感じ取った

そして同時に

「……俺達と同じく、あいつらも連れてきたか」

残る二人の存在にも気がついた

そして数秒もしないうちに、四人は姿を現す

まず最初にブージン

続いて悟飯とネギがほぼ同時に

「あ、ネギ君！」

「悟飯君！」

そして最後にザンギャ

（ははーん……このボーヤ、単に逃げてたってわけじゃなかったのね……）

ブージンとザンギャは即座に、ボージャックたちの傍へ

悟飯とネギは横に並ぶようにして、一同と向かい合った

「界王様！」

「や、やっぱりボージャック一味じゃ……」

親玉であるボージャックをも目にし、界王はさらに焦りを露わにする

「界王様ってば！」

「おおおっ！？あ、ああ、すまんな悟空……」

痺れを切らした悟空は、界王の肩に手をやり、思い切り揺さぶった

するとようやく気がついたのか、界王は振り返る

「だからあいつらは何者なんだよ！？」

「うむ、あいつらはボージャック一味と言ってな……」

やや落ち着きを取り戻し、界王は話し始めた

「はるか昔四つの銀河を渡り歩き、あちこちの星を荒らしまくった悪者じゃよ」

「ピッコロ大魔王みてーなやつか？」

悟空は自分が幼き頃の最大の敵、ピッコロ大魔王を思い浮かべる

人も命を何とも思わず、次々と容赦なく殺していった彼のことは今でも強く記憶に残っていた

「ピッコロ大魔王より悪の気がずーっと強い、正に悪の化身じゃよ。そのため以前、東西南北四人の界王で何とか封印したんじゃが……ああ！」

ここで界王はあることに気づく

「そうか……だとしたら奴らが出てきても何ら不思議は……」

「ど、どういうことだ!?界王様」

「……悟空、お前がいけないんじゃぞ、セルとの戦いで界王星をメチャクチャにしよってからに。ワシが死んでしまったことで封印の力が弱まり、あいつらに自力で解かれてしまったんじゃろう……」

「そ、そうだったのか……」

話を聞き、悟空は表情を苦々しくしてしまう

自分のした行動が、今の事態を招いてしまった

しかも、自らの手によってけじめをつけることすら出来ないのだ

「すまねえ界王様……でもあの時は本当に……」

「わかっとる、あの爆発で跡形もなく消えてしまうよりは全然マシじゃ」

セルが命を賭して行った自爆は、地球を丸ごと消してしまうほどの威力だった

悟空が決死の瞬間移動をしなければ、今の地球は無かった

「しかし、まさか地球に目をつけてくるとは……」

「……でも界王様、地球には悟飯がいる！」

父である自分の強さを超え、一年前地球を守ってくれた悟飯

あいつならきっと、今回も守ってくれる

悟空はそう信じるしかなかった

いや、信じるしかないという消極的なものなんかではない

絶対に守れる

そう心から信じていた

「そ、そうじゃな……」

「ああ、ぜってえ大丈夫だ！」

悟空と同じく、悟飯の強さは重々分かっているはずの界王

だが、それでも一抹の不安は取り除けないでいた

（な、なんじゃこの感じは……いやな予感がする……）

それを口にはせず、黙って再びテレビへと視線を移した

「か、楓さん！」

「トランクスさん！」

場所は再びこの世へと戻る

ボージャック一味と向かい合った二人

その直後に、倒れこんでいる二人に気がついた

「お前達！二人に何をした！」

悟飯が怒りを露わにし、向こうへ怒鳴り散らす

「なーに、ちょっと眠ってもらってるだけさ、死んじゃいない」

臆することなく、ボージャックは答える

それを聞き、ネギは心の中でホッと胸を撫で下ろした

死という最悪の事態には至っていない

そのことにとりあえずは安心した

だが、いつまでもそうしてはいられない

「あ、あなた達の目的は何なんですか！」

次はネギが悟飯に続き、眉をひそめ声を荒げる

「俺達は銀河を渡り歩き、次々と星を奪っていった銀河戦士」

「そしてこの方こそが我らの主、ボージャック様だ」

ボージャック、ゴクアが順に言葉を述べる

「ボージャック様は銀河で敵無し」

「最も美しい北の銀河、そのなかでも最高級の地球に目を付けられたというわけさ」

続いてビドーとザンギャ

「そんなことはさせない！」

「そ、そうだ！」

悟飯とネギはボージャック達をキッと睨みつけ、構えをとって臨戦態勢に入る

今にも飛びかからん勢いである

「ほう、俺達と戦うつもりか？」

「当たり前だ！」

ボージャックの余裕の入った言葉に、悟飯は神経を逆撫でされる

「だがそこの二人はすでに戦闘不能、五対二で勝てるとでも思っているのか？」

「くっ……」

地に伏す楓とトランクスを指差すボージャック

確かにこのままでは分が悪い

そのことを悟飯はすぐに理解した、ネギも同じくである

敵全員の強さは把握していない

だが、少なくとも楓やトランクスを倒せるほどの強者がいるのは事実

勝ち目はかなり薄いといえよう

（くそっ、あいつらの言うとおりだ……どうすれば……）

下唇を噛みしめ、必死に打開策を練る悟飯

「「悟飯ーーーーー！！」」

「「ネギーーーーー！！」」

「「え！？」」

すると、突如上から四人の声

一同は一斉に、その方向へ顔を動かした

瞬く間にその声の主達は、地面へと着地

悟飯とネギの前方に立ち、二人と同じくボージャック一味の方へ身体を向けた

「天津飯さん！ヤムチャさん！」

「アスナさん！コタロー君も！」

二人は彼らの登場に、驚きの表情を見せる

「悟飯、役に立てるかはわからんが助太刀に来た」

「あいつらがバトルゾーンの四人を殺したってわけか……」

「つまり大会とは関係ないわけだから、私達が加わっても問題無いと」

「楓姉ちゃんの仇、取らせてもらうで！」

その四人は、悟飯達がよく知る四人だった

第５１話　今界王から明かされる　彼ら銀河戦士の真実（後書き）

クウネル
「あとがきコーナーです、さて今回のゲストは……」

エヴァ
「随分いきなりだな、おい」

クウネル
「喋ることが特にないんです」

エヴァ
「あっそ……」

クウネル
「バカピンク、佐々木まき絵さんと……」

まき絵
「わーい！出番が貰えたーーー！」

エヴァ
「本編あんまり出番ないからな」

クウネル
「バクテリアンさんでーーす」

バクテリアン
「へっへっへ、ようやく登場だぜ」

まき絵
「ぎゃあああ！何この全身不潔男！？」

エヴァ
「くっさーーーーー！」

クウネル
「今回はこの二人をゲストにお迎えしています」

エヴァ
「おいバカ！さっさとこいつを追い返せ！」

クウネル
「何故です？水竜さんから頂いた、ありがたいリクエストの一つですよ？」

エヴァ
「こいつは色々とマズイ！私の怒り以上にコーナーの進行に差し支える！」

クウネル
「あ、自覚してたんですね」

エヴァ
「別にそこは今いいだろ！」

バクテリアン
「お嬢ちゃんどこから来たの？」

まき絵

「来ないでーーーー！」

エヴァ
「わっ、バカ！こっちに連れてくるな！」

まき絵
「いやあああああああっ！」

バクテリアン
「ぐへへへへへへへへ」

しばらくお待ちください

クウネル
「えー、お待たせいたしました。コーナーを再開します」

エヴァ
「まさか鼻栓なんかをすることになるとはな……」

まき絵
「それでもやっぱりこの人嫌だよぉ……」

バクテリアン
「ぐへへへへへへ」

クウネル
「さて、今回の話ですが……」

エヴァ
「今回はちゃんと前回の次回予告に忠実になったな」

まき絵
「そうだね、でも私本編で出番少ないんだよね……」

エヴァ
「おい、それは私に対する嫌味か？」

まき絵
「え！？ち、違うって！」

クウネル
「いいじゃないですかエヴァンジェリン、このコーナーも合わせれ

ばまき絵さんよりも出番はうんと多いんですから」

エヴァ
「まあ、確かにそうか……」

まき絵
「そうそう！」

クウネル
「今回は原作の映画のシーンと被るところが多々あったので、書く時楽だったそうです」

エヴァ
「若干台詞は変えているみたいだがな……まあ流石に丸々使い回しはダメだろ」

まき絵
「あれ？でも確かプロローグの序盤のセリフって……」

クウネル
「突っ込まない方向で」

エヴァ
「またそれか……じゃあ次回予告いくか？」

クウネル
「そうですね、さて、次回のネギドラ！は……」

まき絵
「ピンチのネギ君達のところへ、天津飯さんやアスナが駆けつけて

きたね！」

エヴァ
「あいつらの戦闘力で、助太刀が務まるかどうか……」

クウネル
「そして、来ていない刹那さん達は一体……」

バクテリアン
「あのさーー、俺にも何か喋らせろよ……」

エヴァ
「貴様は一言も喋るな！吐息が鼻栓通り抜けて入ってくるんだよ！」

バクテリアン
「そんなひどいこと言うなよぉ……」

エヴァ
「ぎゃあああああああっ！こ、この私に触れるなあああああっ！」

まき絵
「ご意見ご感想、いつでも待ってまーす！」

クウネル
「さて皆さん、次回のネギドラ！も……」

まき絵
「お楽しみに！」

エヴァ

「わあああああああっ！は、ハエが寄ってくるーーーーー！」

バクテリアン
「ふげえええええええっ！こ、凍るうううううううっ！」

エヴァ
「死をもって償え！そしてバクテリアに謝れ！」

バクテリアン
「ぎゃあああああっ！」

クウネル
「あーあ、後始末が大変ですね……」

まき絵
（合掌……）

第５２話　それぞれの決意　戦う者と探す者（前書き）

五日も空けてしまってすいません、今度からは気をつけます。あと、お気に入り登録が９９件に……もう少しで大台です！頑張ります！

ではどうぞ！

第５２話　それぞれの決意　戦う者と探す者

「ほう、援軍のご到着ってわけか」

ピンチに陥っていた悟飯とネギ

そこへ突如駆けつけてきた四人

天津飯、ヤムチャ、アスナ、コタロー

ボージャックはそんな彼らをジロリと見る

（気をまだ開放していないからハッキリとまではわからんが……）

そして各々の気の大きさを探っていた

（どいつもたいしたことはなさそうだ……せいぜい獣混じりのあのガキが少し出来るくらい、か）

ボージャックからの指示がないため、他の四人も動こうとはしない

もっとも、向こうから攻めてくれれば当然反撃はするのだが

その間に、ネギはコタローへぼそぼそと話しかけた

「ね、ねえコタロー君、来てくれたのは嬉しいんだけど……」

「ん、何や？」

コタローは横目でネギを見る

「どうしてこの四人が？刹那さん達はどうしたの？」

「ああ、それな……」

ネギの問いを受け、コタローは表情を苦くする

刹那がバトルアイランド2に来ているのは紛れもない事実

ならばコタロー達の中に入っていても何ら不思議ではない

少数精鋭で来たという考え方もできたが、それはすぐに却下

刹那の実力は現在、ヤムチャより断然上

『四人で行こう』ということになっていたならば、ヤムチャの代わりに刹那がいるはずなのだ

「じ、実はやな……」

～数分前・地上の会場内～

「あ、天津飯にヤムチャさん！」

「刹那達もいるアル！」

人波をかき分けるクリリンと古

その先で、彼らの仲間達の姿を捉えた

少し前に楓が引っ張り出した男の死体

バトルゾーン内にあるカメラによって、会場のスクリーンに映し出された

それによって人々は恐怖、たちまちパニックに陥ってしまう

人殺しが現れ、自分達の近くにいる

こんな状況に耐えきれず、多くの者が会場の外へと一斉に駆け出した

しかし、クリリンと古はそうしなかった

戦友、クラスメイト、そして弟子の危機

見逃せるはずがない

同じことを考える者がいると信じ、会場の中央へと向かっていった

そしてその思惑は的中

地下へのトンネルの近くには、六人の人物が立っていた

のちにネギ達の所へ向かう四人に加え、刹那とあやかの六人である

人込みを抜け、二人は一気に加速

すぐ六人の下へ到着した

「古ちゃん！それにクリリンさんも！」

「アスナ！一体あれは何事アルか！？」

「私だってよく分かんないわよ！」

「……これで、戦えそうなものは全員か」

天津飯は腕を組み、アスナと会話する古とクリリンをそれぞれ見た

それを聞きクリリンは、ちょっと待てよとメンツを確認

すぐにここにいない人物に気付き、天津飯に向かって口を開いた

「おいおい天津飯、どこが全員だよ？ピッコロがいないじゃないか」

そう、ピッコロがいないのだ

悟飯、トランクスに次ぐ地球ＮＯ．３の実力者
彼を入れずして、戦える者全員というのはあまりにもおかしい
単純にそう考えて口にしたクリリン
しかし、事態は彼が思っていたよりも厄介であった
「……いないんだよ、ピッコロが」
「え!?どういうことですか!?ヤムチャさん!」
「そのまんまだよ」
ヤムチャのこの発言は、クリリンを驚かせるには充分すぎた
こう言ったヤムチャ本人も、焦りの表情を隠せない
「先ほどこの六人で会場内を探し回ったんですが、影も形も……」
「どちらかお見かけになって……そうだったら一緒に来てますわよね」
ヤムチャの後を引き継ぐように話す刹那とあやか
その二人の顔も、決して余裕があるものではなかった
「……つまりは、この八人でなんとかしなきゃってことアルか?」
「そういうことだ」

天津飯は古の発言を肯定すると、腕組みを解いて右手を前方へ

そして指を二本だけ立てた

「俺の考えとしては二手に分かれようと思う。悟飯達の所へ助太刀に行く方と、会場外へ出てピッコロを探す方」

一同はそれに同意

闇雲に全員で突っ込むのは得策ではない

むしろその中の数人分に匹敵する強さを持つピッコロ

彼の存在がかなり重要だ

ならば何人かをそちらに割いたとしても、その方がずっと良い

すぐにそう理解できた

「俺はもちろんネギ達の所や！」

こう言ったのはコタロー

その熱い眼差しは、固い決意で満ち溢れていた

天津飯は彼を即任命

自分を倒した楓と好戦したコタロー

充分な戦力になるであろうと判断出来た

「私はピッコロさんを探します、本当はネギ先生をお助けに参りたいところですが……今の私では役に立ちそうにないですしね」

次いで口を開くのはあやか

逆にネギの足を引っ張ってしまう

これだけは絶対にしたくないが故の、彼女の苦渋の決断だった

「私はネギの所へ行くわよ！」

「ア、アスナ！？」

次に地下行きを表明したのはアスナ

天津飯はこれに驚くが、アスナはさらに言葉を続けた

「私ピッコロさんの気とか全然わからないですもん。だったら捜索班からは外す方が無難じゃないですか？」

この八人の中で唯一、ピッコロと対面したことがないアスナ

探すとなれば必然的に、自らの視力のみに頼った捜索となってしまう

一分一秒を争うこの状況で、このタイムロスは避けたい

その旨を天津飯に伝えた

「……わかった、それにお前の能力は何かと役に立つかもしれんしな」

「ありがとうございます！」

「だが俺も一緒に行こう、それでもやはり心配だからな」

天津飯はそれを了承

さらに自分も同行を決め、地下行き班が三人決定した

「敵の数を考えると、あと一人といったところか……」

「普通に実力から考えたら刹那さんじゃないですか？」

アスナは天津飯にこう言うと、刹那の方へと顔を向ける

「刹那さんどう？行くでしょ」

「はい、では私も援軍に……」

「いや、刹那はピッコロを探しに行ってくれ」

「「え！？」」

提案するアスナと、それに同意しようとした刹那

しかしこれを、天津飯が間に入ってとめた

「何でや天津飯さん！どう考えたって刹那姉ちゃんは俺らと一緒やろ！？」

コタローが食って掛かるが、天津飯はそれを制す

「今は一刻を争う事態だ、だとすれば少しでも早くピッコロには来てもらいたい」

刹那の飛行スピードはかなりのもの

舞空術に自らの翼を併用させれば、この中では一番のスピードである

「それに刹那は今日ピッコロと対戦している。ピッコロの気を一番敏感に察知できるはずだ」

駄目か？刹那、と天津飯は刹那に尋ねる

すると刹那は首を横に振り、それを否定

「いえ、確かにその通りです……ピッコロさんを探しに向かいましょう」

そう言うと刹那は踵を返し、外へと走っていく

「アスナさん！ネギ先生を頼みます！」

「あったり前よ！」

最後に首だけを後ろに向け、アスナに一言

アスナの返事を聞くと、すぐに刹那は一同の視界から消えた

「わ、私も行きますわ！」

続いてあやかも慌てるように外へ

「俺達も行くぞ！古」

「ちょっ、クリリン！」

クリリンも、古に呼びかけた後走り出した

「ま、待つアルよーーーーー！」

初めオロオロした古だったが、離れていくクリリンを見てすぐ後を追った

「お、俺も行くぜ！」

「待てヤムチャ」

外へ行こうとするヤムチャの肩を、天津飯がガッシリと掴む

「な、何だよ！一刻を争うんだろ！？」

「周りを見てみろ」

「え？」

見ると、ヤムチャの近くにいるのは天津飯達三人だけ

つまり四人目は必然的に

「……俺？」

そういうわけである

「よし！そうと決まれば行くで！」

「おおっ！」

「お、おい待てって！」

意気揚々にトンネルの方へ向き直るコタローとアスナ

それをヤムチャが呼び止める

「やっぱりこのメンツじゃおかしいだろ！せめて俺の代わりにクリリンとか……」

「ヤムチャ、もう時間がないんだ。行くぞ」

「ちょっ、天津飯！」

半ば無理やりに決められた自分の地下行き

自分より強い者がいるのだからと必死に抗議する

だが天津飯はそんなことを許さず、その背を右手でグイグイと押す

「今度こそ、悟飯の助けになりたいと思わんのか」

「！！」

それでもまだ抵抗を見せたヤムチャ

しかし天津飯のこの言葉に、ヤムチャはハッとする

一年前の戦いの最終局面、セルゲーム

そこで天津飯やヤムチャ、さらにいえばクリリンは瀕死の状況に陥った

セルが新たに生み出した個体、セルジュニアに手も足も出ずボコボコに

さらには自らの友、孫悟空を見殺しにしてしまった

そして悟飯とセルとのかめはめ波対決では援護に回るものの、まるでセルには効かず

この時彼らは、自分たちの力の無さを悔やみに悔やんだのだった

「少なくとも俺はそう考えている。たとえ捨て石のようになってしまったとしても、それで少しでも援護できたなら、悟飯の助けになれたなら、悔いはない……」

「天津飯……」

「お前はどうなんだ、ヤムチャ」

「……」

しばし黙り込むヤムチャ

だが数秒もしないうちに、答えは返ってきた

「……前の俺だったら答えはＮＯだったな、けど今の俺は……」

コタローを一見し、すぐに天津飯の方へ振り向く

「……ＹＥＳ、どうやら覚悟を決めれたみたいだ」

いつの間にか彼の右拳は、硬く硬く握り締められていた

（あいつと戦ってなけりゃあ、振り払ってでもピッコロを探しに行ってただろうぜ）

ヤムチャは予選の時に続いて、コタローへ二回目の感謝

自分の保守的で、ことなかれ主義になっていた精神を打ち破り、くすぶっていた魂を目覚めさせてくれた

そのことがやはり、たまらなく嬉しかった

（それに天津飯……お前の言葉もかなり効いた、ありがとな）

そして、最後の後押しの言葉をくれた天津飯にも、同等の感謝

数年前の、最も輝いていた頃のヤムチャが、今ここに復活した

「……よし、行くか！」

「「「おう！」」」

一斉に気をみなぎらせ、四人はトンネルの中へと猛スピードで入って行った

とまあ、こういうことがあったわけだ

だが流石に、全部言うには時間が足りないことはコタローも承知

ネギには簡潔に

「どっか行ってもーてるピッコロさんを、あやか姉ちゃん達と外へ探しに行っとる」

とだけ説明した

もう少し聞きたそうな表情のネギだったが、そんな余裕はないと

こちらも理解

改めて、ボージャック一味へと視線を戻した

どうやらボージャックの方も、大体の品定めはついたようで

「じゃあそろそろ、勝負開始と行くか？」

指をボキボキと鳴らし、ネギ達を見据える

だがあくまでも、目線の先にいるのは悟飯とネギ

他の四人は眼中にない

「お前達、とりあえず雑魚掃除を頼む」

「「「「はは っ」」」」

部下に命令を下すと、その四人は天津飯達へと視線を向ける

彼らも大方の力量は察したのか、構えもとらず棒立ち姿勢である

「あ、あいつら……舐めやがって……」

ヤムチャは憤慨し、ワナワナと身体を震わせながらも構えをとる

他の者も同じく、それぞれの構えを見せた

（今の俺達に出来ること……それは少しでもあの四人を足止めすることだ……）

（悔しいけどあの親玉は、悟飯に任せるしかないみたいや……ネギ、悟飯のサポート頼むで！）

（とにかく天津飯さんの教え通り、精一杯やるしかない！）

それぞれの思いを秘めた超大戦

それが今、始まろうとしていた

第５２話　それぞれの決意　戦う者と探す者（後書き）

クウネル
「はい、あとがきコーナーのお時間です」

エヴァ
「今度はまともなゲスト呼べよ」

クウネル
「まだ気にしてたんですか？」

エヴァ
「当たり前だ！あの匂いを落とすのがどれだけ大変だったと思っているのだ！」

クウネル
「ですけど、あの仕打ちは少々やりすぎたような……」

エヴァ
「そんなことないな、ていうか生かしてやったんだからむしろ感謝すべきだ」

クウネル
「あの後大変だったんですからね？臭さに耐えて治癒呪文をかけて……ああ、思い出しただけでも臭い」

エヴァ
「ほら見ろ、やっぱりお前も後悔してるじゃないか」

チャチャゼロ
「マアマア、イイジャネエカゴ主人」

エヴァ
「ん？なんでお前がここにいるんだ？チャチャゼロ」

チャチャゼロ
「コンナ奴モ来テルゼ」

ドラキュラマン
「お！お前が婆さんの言ってた、俺様の仲間か？」

クウネル
「あーあ、紹介も無しで出てきちゃいましたね……」

チャチャゼロ
「気ニスンナ、今カラヤレバ一緒ダロ」

ドラキュラマン
「そうそう」

クウネル
「コホン、今回のゲストはエヴァンジェリンの従者チャチャゼロさんと、エヴァンジェリンのお仲間のドラキュラマンさんです」

チャチャゼロ
「ソユコトダ」

ドラキュラマン
「よろしくな」

エヴァ
「待て待て待て待て！前にあのババアにも言ったが、仲間扱いは絶対やめろ！」

クウネル
「いやいや、だって同じ吸血鬼じゃないですか」

ドラキュラマン
「そうそう」

エヴァ
「違うと言ってるだろーが！」

チャチャゼロ
「ジャアドコガ違ウッテンダヨ？ゴ主人」

エヴァ
「私は誇り高き真祖の吸血鬼だ！どう見てもこいつとは別格だろうが！」

ドラキュラマン
「え、真祖？俺もだよ俺も」

エヴァ
「嘘をつけぇっ！」

クウネル
「まあその辺りは彼、まったく設定がされてませんからね」

チャチャゼロ
「嘘カホントカ分カラネエッテコッタ」

エヴァ
「それに私にはチャチャゼロや茶々丸と言った頼もしい従者達がいる！お前にはそんな奴はいるまい！」

ドラキュラ
「いいよ別にいなくたって、お前と違って友達多いし」

エヴァ
「な、なにおーーーーー！」

クウネル
「友達と言うと、アックマンさんとかですか？」

ドラキュラマン
「それもあるが、他にも怪物仲間で十数人」

クウネル
「へーー、聞きました？キティ」

エヴァ
「黙らんか！いいからさっさとコーナーを進めろ！」

クウネル
「はいはい、さて今回の話ですが……」

チャチャゼロ
「回想シーン中心ノ話ダッタナ、ツマンネーノ。血ヲ見セロ、血」

エヴァ
「お前はホントそればっかだな……まあそれはともかくとして、かなり天津飯とヤムチャが目立っていたな」

ドラキュラマン
「俺もあんくらい本編で出番が欲しいぜ」

エヴァ
「絶対ないな、一生」

クウネル
「確かアックマンさんにワインをぶっかけられただけでしたっけ？あなたの出番」

ドラキュラマン
「そうなんだよな……」

エヴァ
「てゆーか、この作者は脇役キャラにスポット当てすぎじゃないか？今回目立ったあの二人にしろ、アックマンにしろ」

クウネル
「本人曰く、『脇役が目立って輝くシーンはすごく好き』だそうです」

チャチャゼロ
「特ニアノ三ツ目野郎ノ気功砲シーントカお気ニ入リラシイゼ」

エヴァ

「だから万人受けしないんじゃないか？この小説」

注・ちゃんとこの後の話では、主役級のキャラも目立たせますのでご勘弁を

クウネル
「では続いて次回予告です」

チャチャゼロ
「サテ、次回ノネギドラ！ハ……」

エヴァ
「ついに敵味方入り乱れての超大戦が始まるぞ！」

クウネル
「果たして天津飯さん達は、悟飯君達の力になれるのか？」

エヴァ
「ってあれ？それ前回でも私が似たようなこと言わなかったか？」

チャチャゼロ
「実ハコノ５２話、本来ナラモウ戦闘シーンニ入ッテタンダッテヨ」

エヴァ
「何だと！？」

クウネル
「ところが回想シーンの内容が思った以上に多くなり……」

エヴァ

「……次回に持ち越されたと？」

チャチャゼロ
「ソユコトミタイダ」

エヴァ
「おいおい……」

注・すいませんすいません、次回はちゃんと戦闘シーンをギッシリ書きますので……

ドラキュラマン
「次回の投稿予定は金曜日だ」

エヴァ
「明後日か……まあ５１話と５２話とで一週間近く経ってしまったからな」

クウネル
「出来なかったら週明けになります」

エヴァ
「そうなったらもう本当に絶望だな、連載一周年＆百話」

注・テスト前ですが、頑張ります！

チャチャゼロ
「ソウダソウダ、ソンデモッテ赤点取ッチマエ、ケケケケ」

エヴァ

「シャレにならんことを言うなよ……」

ドラキュラマン
「感想、リクエスト、いつでも待ってるぜ」

クウネル
「ではみなさん、次回のネギドラ！も……」

エヴァ＆ドラキュラマン＆チャチャゼロ
「お楽しみに！」

エヴァ
「あれ？そういえば今回のゲストって順番的にこいつらじゃなくね？」

クウネル
「『チャチャゼロのセリフがめんどくさそうだから、今のうちにやっておいてしまおう』ってことらしいです」

エヴァ
「まあ確かにめんどいが……」

チャチャゼロ
「デモマア、ソノオカゲデコウシテ早メニ出番ガ貰エタンダ。コッチトシテハＯＫダゼ」

注・書くのスンゴイ大変でした、もうこりごりかもです

エヴァ
（次もまた出番貰えるのか？チャチャゼロ）

第５３話　命を賭けた大作戦　天津飯決死の気功砲（前書き）

間に合いましたーーー！それとお気にいり１００件突破しましたーーー！まあ１００件突破の方は活動報告でも書きましたが。
最近活動報告も書き始めたんですよね、もし時間がありましたらそっちも是非。
ではどうぞ！

第５３話　命を賭けた大作戦　天津飯決死の気功砲

「では、こちらから行かせてもらおうか」

「いいぜ、かかってきな」

「どっちでも一緒だけどね、あんた達が負けるのは」

天津飯の言葉を、ビドーとザンギャがそれぞれ返す

やはり、相手を舐めるその態度は変わっていない

ビドーはほくそ笑み、ザンギャは髪の毛を掻きあげた

ブージンやゴクアも、ビドーと同じような状態である

「はあああああ……」

両拳をギュッと握り、天津飯が全身に力を込める

「「「はあああああああああああ……」」」

それに合わせるかのように、アスナ達三人も

何を仕掛ける気だ？と四人は少しながら警戒

構えこそロクにとらないものの、真っすぐ彼ら四人を見据えた

それを天津飯は確認

（かかった！）

そして、『してやったり』と笑みを浮かべた

「新気功砲！」

「「「「！？」」」」

「はああっ！」

直後、ボージャック一味の真上から声

「ぐおおおっ！」

そのまま降り注ぐ、衝撃波状の広範囲にわたる気功波攻撃

ギリギリの場所にいたトランクスと楓はその爆風で、ダメージこそ受けないものの横に吹っ飛ばされる

上からの攻撃には無警戒だった彼ら

ガードすら間に合わず、まともに喰らってしまった

いや、一人だけ例外がいた

ボージャックだ

「ちっ、まだ仲間がいたのか……」

戦闘力は親玉だけあって、他の四人より群を抜いている

そのためあの奇襲攻撃に瞬時に反応し、回避することができた

次にボージャックは、攻撃を仕掛けた男を見やる

「なっ!?さっきいた三つ目野郎!」

「はああっ!」

そう、上空にいたのはもう一人の天津飯

額に血管を浮かばせ、いまだ部下達に攻撃を続けていた

「どういうことだ?やつはずっとあそこにいたはず……」

実はトンネル間を移動中、天津飯は四身の拳を発動

そして三体だけを再び合体させ、力の違う天津飯を二人作っていた

７５％のパワーを内蔵した天津飯は気配を消し、隠れて待機

残りの２５％のパワーの天津飯が、他の三人と共に一同の下へ降り立ったというわけだ

そして隠れていた天津飯は、一同の戦闘態勢を合図として上空から奇襲

２５％の天津飯はその隙に入り込み、元のフルパワーの一人へと戻る

見事作戦は成功した

「どういうことなんだ……！！」

「だあああああああっ！」

そんな事とは露知らず、事態を必死に整理しようとするボージャック

そこへ、超サイヤ人に変身した悟飯が猛然と向かってきた

（くっ、それより今はこのガキか……）

思考をすぐに切り替え、攻撃を迎え撃つ

顔面に向かって放たれた右ストレートを左手で受け止める

そして即座に回し蹴りを仕掛ける

だがそれを悟飯は左腕でガード

次に互いが高速のラッシュを放ち合う

「だだだだだだだだだだあっ！」

「そらそらそらそらそらあっ！」

今にも火花が飛び散りそうな攻防

そこから少し離れた所からはネギが

「ラス・テル　マ・スキル　マギステル……」

援護射撃の攻撃魔法に備え、詠唱を行っていた

～地上　バトルアイランド2会場内～

「な、何よこれ！？」

「地震！？」

突如地下から湧き起こる振動

それによって人々はさらにパニックになっていた

会場内に残る観客達もそれは同じ

その理由が分かるものを除いては

「ちょ、ちょっと夕映！これってどういうわけ！？」

「チャ、餃子君！」

ハルナとまき絵がそれぞれ、近くに座る夕映と餃子（途中で合流）に問いかけた

それに夕映は眉をひそめ、餃子は困惑した表情をとる

「そう言われましても……モニターの映像だけじゃ死角がありすぎて、全然状況が把握できませんよ……」

夕映の反応は、状況理解が未だ出来ていないことによるもの

一方の餃子はまるで逆で、事態を把握してるが故の反応だった

「て、天さん……」

「天さん？……ま、まさか！」

だが餃子が発したこの言葉で、夕映は瞬時に仮説を打ち立てる

やや下に向いていた顔をガバッと上げ、餃子の方へ振り返った

「まさか天津飯さんが、あの技を使っているのですか！？」

「し、知ってるの？」

餃子がオドオドしながらも訊き返すと、夕映はコクリと頷く

「……天さんの気の減り方があの時と同じ、間違いない」

「やはりそうですか……」

これで夕映の考えは確信へと変わった

「ちょっとちょっと！二人だけで話を進めないでよ！」

「そうだよ！一体天津飯さんが何なの！？」

慌ててハルナ、まき絵の両名が会話に入り込む

「す、すいませんハルナ。その……この振動の原因は、天津飯さんが今使っている技にあるのです」

「技？」

さっきよりも深刻な表情で、夕映はハルナを含め、この場にいる仲間達に話し始めた

「予選で天津飯さんが使った最後の技、覚えていますか？」

「んーと……あ！あのすんごい爆発起こして楓さんの分身消したやつ！」

「そうです。あれは『気功砲』という技なのですが、気と生命力を大量に使って放つあの人の必殺技なのです」

「生命力！？つまりは命削って撃ってるってこと！？」

次に反応したのは朝倉、夕映は顔を縦に動かし肯定

「一回や二回の使用なら、多少威力をコントロールすることでリスクは軽減できるのですが……」

話しながら夕映は、チラリと餃子の方を見る

困惑の表情は、さらに顕著なものとなっていた

「今使われている技はその強化版の『新気功砲』といって、気功砲をリスク無視で連続で放つ技なのです」

「えええっ!?それってかなりマズいんじゃないの!?」

「はい、以前敵の足止めとして使った際は生命力を極限まで削り、死にかけるほどだったと聞きます……」

「ま、まさか今回も……!」

ここまで言って朝倉は、餃子の今にも涙を流しそうな表情に気がついた

それは、今彼女が抱いてる疑問を肯定しているかのようだった

「はい、おそらく今回もギリギリまで使うつもりでしょう、新気功砲を」

(……天さん、死なないで)

徐々に減っていく天津飯の気を感じ取りながら、餃子は心から強く願った

「はああっ！」

「ぐおおっ！」

場所は再び地下へ

地面に四角形の巨大な穴が出来上がっている

中にいるのは、四人の銀河戦士

「はああっ！」

「がああっ！」

その上空には、舞空術で浮上している天津飯

悟飯達のところへ行かせまいと、懸命に撃ち続けていた

文字通り、命を削っての攻撃

穴から出ようとする四人を必死に、何度も何度も押し戻す

「はああっ！」

「くっそおおっ！」

そしてその周囲では、アスナ達が同じく浮上して待機

周りの状況を観察し、すぐに対応ができるようにである

すると早速、コタローが何かに気づく

「あ！あのモヒカン、このままやと脱出しそうや！」

「マズい！行きましょうヤムチャさん！」

「お、おう！」

コタローを残し、アスナとヤムチャは急いで地上へと降りる

気功砲の攻撃範囲は、天津飯の意志で自由に決めることができる

そのため、二人に当たることはない

見るとその攻撃範囲の境界線部分から一本の腕が

「はあっ、はあっ、あの三つ目野郎め……今すぐぶっ殺してやる……」

部下四人の中で一番パワータイプのビドー
新気功砲による衝撃に耐え、無理矢理よじ登ってきていた
そうこうする間に両腕が淵にかかり、顔も出て今にも脱出寸前
だが、次に身を乗り出そうとしたその瞬間
「「波ーーーーー！」」
「なっ!?」
アスナとヤムチャのかめはめ波が炸裂
真正面からモロに喰らう
「ぐへえっ！」
ダメージ自体は彼からすれば、そこまで大きくはない
しかし、両腕を淵から引き剥がすには充分な威力だった
「し、しまっ……」
「はああっ！」
そこへ間髪入れず天津飯のこの攻撃
「ぐぞおおおおおっ！」

ビドーは再び、深い大穴の奥へと叩き込まれた

「どうだ！ざまー見やがれ！」

「……」

ヤムチャは穴の底へと、新気功砲が当たらない距離からビドーへ向かって罵声を浴びせる

一方のアスナは、成功したことに安心するのがやっとという状態

「……よし、それじゃあ持ち場に戻るぞ」

（天津飯さん……）

「おい！アスナ！」

「は、はい！すみません！戻りましょう！」

ヤムチャに大声で呼ばれてようやく我に返り、アスナは慌てて言葉を返す

この態度に、ヤムチャはムッとした表情

「……今俺達に出来ることは、こうやって天津飯をサポートしてやることだけだ」

「……」

「俺だって……俺だって本当は、天津飯にこんなことはさせたくない」

「はい……わかってます」

アスナは、数分前のことを思い返す

「……以上だ。この作戦でいこうと思う」

「そんな！危険すぎます！」

「そうだぜ天津飯！」

トンネルに入ってすぐ、天津飯は自身の四身の拳と新気功砲を用いた作戦を三人に話した

当然皆は反対

天津飯一人だけに、こんなリスクを背負わせるのは我慢ならなかった

「……これが一番時間を稼げて、なおかつ悟飯達の最大の援護になるんだ」

単純に一対一で彼らを相手にした場合、結果は火を見るよりも明らか

コタローを除く三人は、持ち前のスペックの差で即座にＫＯ

残ったコタローも、数人がかりで攻められてやはりＫＯ

おそらく何分と時間を稼ぐことも出来ないだろう

だが先ほど話した作戦なら、一度に四人をまとめて確実に足止めできる

これが自分達に出来る最善の策

天津飯はそう改めて説明した

「……わかった」

「ヤムチャさん！？」

言い終わるとすぐに、ヤムチャは苦い表情でこう言った

アスナはそんなヤムチャに食らいつく

「昔からの仲間じゃないんですか！？そんな危険な目に遭わせても……」

「……天津飯の決死の決断なんだ、黙ってやらせてやろう」

「けど！」

「アスナ姉ちゃん、ヤムチャさんの言う通りや」

「コタローまで！」

そんな二人の会話に入ってきたのは、先ほどから黙って話を聞いていたコタローだった

一人ならず二人までも賛成

アスナは頭に血が上り、振り返ってコタローを睨みつける

「なんなのよ二人して！」

「……じゃあアスナ姉ちゃんは、このまま真正面から行って全員死ぬのがエエんか？」

「！！」

「そんなのはみんなが嫌なことくらい、アスナ姉ちゃんかて分かるやろ？」

「……」

徐々に、上っていた血が下がるような感覚

そこからアスナは黙って、コタローの話を聞いた

「この作戦が一番マシなんや。悟飯達が親玉を倒せれば良し、出来なくてもその間にピッコロさんが間に合えば良し、そうならなくても四人のうち三人が無傷なら、まだ逃げる算段は撃てる……」

「……」

「この作戦が実行できるのは、天津飯しかいないんだよ……」

ヤムチャも会話に戻り、悔しそうな声で言う

「分かってくれ、アスナ……」

「……」

天津飯が最後に、重苦しい声でこう言った

「……約束してください」

「え？」

しばらく黙っていたアスナだったが、ボソリと口を開く

よく聞こえず、天津飯が聞き直す

「約束してください……天津飯さんも絶対に死なないって……じゃなきゃ、私……」

「アスナ……」

「私だけじゃないです、餃子さんやまきちゃん……それに他のみんなだって……」

「……」

しばし沈黙する天津飯

「……わかった、約束しよう。俺は絶対に死なん」

「！」

そしてその後放った言葉は、アスナとの約束を肯定するものだった

「……絶対ですからね！」

「ああ、絶対だ」

指切りの代わりなのか、互いに拳をガッとぶつけ合う

アスナの表情が、暗いそれから元へと戻った

「天津飯を……信じてやろう」

「……はい」

こう言うと、二人は舞空術で浮上

再び持ち場へと戻ろうとする

その際アスナは首を上に向け、天津飯を見やった

「はああっ！」

「くぬうううっ！」

（天津飯さん……絶対なんですからね！）

心の中でそう呟くと、アスナは完全に持ち場へと戻った

超大戦はまだ、始まったばかり……

第５３話　命を賭けた大作戦　天津飯決死の気功砲（後書き）

クウネル
「あとがきコーナーのお時間です、では今回のゲストを紹介しましょう」

エヴァ
「前回みたいにまともにしろよ？」

クウネル
「もちろんです。今回のゲストはこの人、初期ＤＢを支えた数少ない女性キャラ、ランチさんです！」

エヴァ
「待てバカ！あの凶暴女を呼んだら……」

ランチ
「どうもみなさん初めまして、ランチって言いまーす！」

エヴァ
「……あれ？」

クウネル
「エヴァンジェリンがこう言うと思って、ちゃんと大人しい方のランチさんにしました」

エヴァ
「そ、そうかそうか、ならいいんだが……」

ランチ
「えーっと、ここでは一体何をするんですの？」

クウネル
「簡単なトークと、この小説の感想を言っていただければそれが構いません」

ランチ
「まあ、それなら私にも出来そうですね」

クウネル
「でしょ」

エヴァ
「じゃあそれすら出来なかった保護者トリオは何なんだよ……」

クウネル
「気にしない方向で」

エヴァ
「またそれか……」

クウネル
「では早速、今回の話についてですが……」

エヴァ
「ヤムチャに続いて今度は天津飯かよ、って感じだな」

ランチ
「天津飯さんですか、そういえば最近まったくお会いしていませんね

わ……お元気かしら？」

エヴァ
「いや、だから命張って今戦ってるじゃん……」

ランチ
「あら！そうなんですか！？」

エヴァ
「本編の内容見てないのか？」

ランチ
「すいません……ついうっかり」

エヴァ
（これだから天然系は苦手なんだ……）

クウネル
「そう言えばランチさんは一回、本編に登場してますよね。古菲さんｓｉｄｅの時に」

ランチ
「あら？そんなことありましたかしら？」

エヴァ
「そういえば、もう一方の人格の記憶は本人には無いんだったな」

クウネル
「人生を半分損してるってことですよね、つまりは」

エヴァ
「嫌な言い方だな……」

ランチ
「あら？もう終わりですの？」

クウネル
「いえ、この後最後に次回予告が……」

グ～～～～

ランチ
「す、すみません……なんかお腹空いちゃって」

クウネル
「それはいけませんね、何か用意しましょうか？」

ランチ
「お願いしますわ……」

エヴァ
「用意するって……こんな短時間で何を作る気だ？」

クウネル
「お待たせしました」

エヴァ
「早っ！」

クウネル

「以前タカミチがゲストで来た時にくれた、彼の大好きなインスタントラーメンです」

エヴァ
「出たな、『ネギま!?』のオリジナル設定……てゆーかそんな物を置いていったのかあいつは」

クウネル
「さっき出来たばかりですから、伸びないうちにどうぞ」

ランチ
「ありがとうございます」

エヴァ
（ん？待てよ……インスタントラーメンとはいえ、こんなに早く出来るか？）

クウネル
「お好みでコショウもどうぞ」

エヴァ
（コショウ!?）

ランチ
「あ、いただきます」

エヴァ
「ま、待て！やめろ！」

パッパッ

ランチ
「ふあっ、コショウが鼻に……はっ、はっ、はっ」

エヴァ
「クウネルそいつを止めろーーーー！」

ランチ
「はっくしょん！」

エヴァ
「……」

クウネル
「……」

ランチ
「ん？どこだここは？刑務所の中じゃなさそうだな……」

エヴァ
「凶暴な方になってしまった……」

クウネル
「いやー、ついウッカリ」

エヴァ
「嘘つけ！絶対狙ってやったろ！」

クウネル
「あ、バレました？」

エヴァ
「当たり前だ！あのラーメンだってコーナー始まる直前に作ったんだろ！」

クウネル
「流石キティ、何でもお見通しというわけですか……」

エヴァ
「その名で呼ぶなと何度も……」

ランチ
「おいてめえら、ここは一体どこなんだよ？」

エヴァ
「お前は黙ってろ！」

ランチ
「あぁ？誰に向かって口きいてんだこら！」

エヴァ
「わ！バカ！銃を乱射するな！」

ランチ
「うるせえ！こちとら天津飯のことでまだ傷心中なんだよ！」

エヴァ
「まだ気にしてたのかそれ！？」

ランチ

「ちっきしょおおおおおっ！」

エヴァ
「や、やめろーーーーー！」

クウネル
「さて、二人が追いかけっこしている内にコーナーを進行させますか」

注・今回一人になっちゃいますよ？

クウネル
「あ、ホントですね……まあいいでしょうたまには。さて、次回のネギドラ！はさらにバトルが白熱です！」

注・今回バトルが少なくなってスミマセン、次こそはたくさん書きます

クウネル
「更新予定は来週の火曜日です」

注・週末はテスト勉強と交えて、下書きを大体は完成させたいと思います

クウネル
「感想、リク等お気軽にどうぞ」

注・お待ちしています

クウネル

「ではみなさん、次回のネギドラ！もお楽しみに！」

ランチ
「うわーーーーん！」

エヴァ
「クウネル！さっさとこいつを戻せーーー！」

エヴァ
「はあっ、はあっ、はあっ……助かった……」

ランチ
「あのー、私何か悪いことでも……」

クウネル
「お気になさらずに」

エヴァ
「てゆーかさっきお前、コーナー実質二人で進めたよな、作者と」

クウネル

「初の試みでしたね」

注・面白かったです

エヴァ

「貴様は黙ってろ！」

注・スミマセン……

第５４話　子供コンビは大苦戦！？策士ボージャックの罠（前書き）

今回はさらに珍しく、昼投稿になりました。執筆ペースが最近好調で嬉しい限りです、テスト前で部活に出る必要がないというのもありますが。

予告通りバトル多めにしました、何とかその通りに書けてよかったです（汗）

ではどうぞ！

第５４話　子供コンビは大苦戦！？策士ボージャックの罠

覚悟を決めた天津飯が、新気功砲で部下達の足止めをしていたころ

「ぬぐううっ！」

「はああっ！」

今では彼らと大分離れた位置にまでいた

そう考えた悟飯は、空中戦を続けながら誘うように移動

ボージャックが気功波を放ち、天津飯を撃ち落とす可能性がある

天津飯達の近くで戦うのは危ない

悟飯、ネギの両名はそのボスと交戦していた

「このおおおおっ！」

さらに詳しく言えば、トランクスがゴクアと交戦していた廃墟の町エリア

「魔法の射手〈サギタ・マギカ〉戒めの風矢〈アエール・カプトゥーラエ〉！」

「ちっ、またそれか！」

悟飯のちょうど真後ろから放たれた、ネギの援護射撃

ボージャックは気功波を右手から撃ち、相殺させる

その隙を縫って悟飯が、悟飯がボディブロー

「せやああっ！」

「させるかっ！」

だがボージャックは、撃ってない方の左手でガード

お返しとばかりに腹へ膝蹴りをぶち込んだ

「ぐはああっ！」

そのまま、気功波を撃ち終わった右手を手元まで戻し

「くたばれえええっ！」

「くっ！」

顔面めがけてストレートパンチ

何とか横に避ける悟飯だが、このままでは危険と判断

急いで後ろに下がり、ボージャックと一旦距離をとった

「ちっ、もう少しだったんだが……」

（な、なんて強さなんだ……）

「悟飯君、大丈夫!?」

後ろからネギが心配そうな声で呼びかける

「大丈夫だよネギ君。それよりまた、援護よろしくね」

「う、うん……」

悟飯はネギの方を向かずこう言う

自分が焦っている顔を見せたくなかった

だが、薄々ネギも気付き始めていた

このままでは悟飯でも勝てないかもしれない、と

現在悟飯達は、前衛後衛に分かれて戦っている

悟飯が前に出て直接戦い、ネギはその後ろで魔法による援護射撃

ちょうど、一般的な魔法使いとそのパートナーがする戦闘スタイルだ

しかし、ネギは本来魔法戦士

魔力による身体強化などを駆使し、今の悟飯のように前線で戦うのが基本スタイルだ

本当は悟飯と一緒に前に出て戦いたかった

だが、それは無理なのだとすぐに悟る

最初に悟飯がボージャックと見せた攻防

この時点で、ネギはもう付いていけなかった

故に戦闘スタイルを魔法使いのそれに移し、ひたすら援護に回ることに努める

それが一番足手まといにならず、悟飯のための最善のサポートにもなる

コタローに言われたことを思い出しつつ、ネギは再び詠唱へ

「ラス・テル　マ・スキル　マギステル……」

始動キーをまず口にし、続いて発動する魔法の固有の詠唱

「来たれ雷精風の精（ウェニアント・スピリトゥス・フルグリエンテース）……」

次にネギが発動しようとしているのは、今の彼に出来る最大呪文

（生半可な攻撃じゃ奴には通用しない、これだったら……）

現状を打破できるかもしれない

徐々に魔力発動体の指輪に、それが集まっていく

その間に悟飯は、ボージャックとの戦いを再開

ラッシュを互いに打ち合い、互角の戦いを展開させていた

するとボージャックが、ネギの異様な雰囲気に気付く

（あのガキ、今度は何をする気だ……）

ボージャックは少し前のことを思い出す

始め彼は、ネギを軽く見ていた

確かに強いことは強いが、一緒いた悟飯には遠く及ばない

そう思って油断し、ネギの最初の攻撃をマトモに喰らってしまった

喰らったのは冒頭と同じく戒めの風矢

拘束されて身動きが取れなくなり、この後悟飯の気合の入ったパンチを数発浴びることとなってしまった

クリリンの時よりうんと早く振りほどいたが、それでもこの攻撃は危険視

そのため先ほどの二回目となるそれは、しっかりと対処した

それ以外にも精霊召喚や、光の魔法の射手といった未知の技を目にしたボージャック

今ではすっかり、最初のように甘く見ることなど無くなっていた

（縛りつける緑の矢とは違う攻撃のようだが……いずれにせよ厄介になりそうだ）

このまま援護を続けさせれば、どうなるか知れたものではない

なにしろ相手の使う技は、自分が知らぬ未知の技

何かさらに奥の手を隠しているとも分からない

（ああいった芽は、早めに摘んでおくのが得策……）

長年宇宙を旅し、戦って得た経験測

それは彼を、次のような行動へ駆り立てた

「ふんっ！」

悟飯の一撃をガードし、ニヤリと笑うボージャック

普通なら攻撃をし返すところだが、そんなことはしない

気を用いた高速移動で、即座に後退
そして滑るように真横へスライド
「だだだだあっ！」
「くっ！」
前方へまっすぐ飛びながら、悟飯へ気弾を連射
悟飯は動きを止められ、そのまま抜き去られてしまった
「し、しまった！」
すぐに敵の思惑に気付く悟飯
振り返って見てみれば、まさに予想通り
「ネギ君！危ない！」
「え？」
「ぶるあぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
片腕を振り上げ、視線はネギを完全にロックオン
魔法使いは通常、呪文詠唱中は無防備となる
それが高位呪文ならなおのこと

そして前衛に悟飯がいる

これによってさらに、安心感という名の油断まで生まれてしまった

詠唱を中断し、防御に入る間もなく

「ぐほっ！」

「ネギ君！」

ボージャックの攻撃が直撃した

凄まじい威力のラリアットが、ネギの首へピンポイント

手に集まっていた魔力が四散する

「せやあああっ！」

腕を振り抜かれると、ネギは下斜めにぶっ飛ばされた

キーーーンと音まで聞こえてきそうなその速さ

ネギは空中静止や受け身すら出来ず

チュドーーーーーン！

「ネギくーーーーん！」

建物の一角へと大激突

粉塵が上がり、数秒すると晴れる

そこにはボロボロのネギがいた

「く、くそ……」

「ほう、まだ意識があるのか……タフな奴だ」

壁にめり込むような状態でいるネギ

多大なダメージを喰らったのは間違いなさそうだ

それでもなお意識を保っている耐久力に、ボージャックは再び感心

「一応聞いておこう！これでもまだ俺達に逆らうつもりか？」

今度はネギに聞こえるよう、顔を下に向けたまま大声で言う

「俺達に忠誠を誓うというのならば、命だけは助けてやってもいいぞ！」

一拍の間すら置かず、ネギは口を開いた

「だ、誰がお前達なんかに……」

「そうか、残念だ……」

ネギはここにきてまで、ボージャックに対し抵抗の意を示し続ける

ここで寝返る様なほど、ネギは腐ってなどいない

『正義の魔法使い』として、最後まで貫く意志は揺るがなかった

戦いの歌で力を上げ、無理矢理壁から脱出する

足下こそおぼつかないものの、しっかりと敵を見据えていた

「では……死ね！」

「！！」

そこへボージャックが猛然と迫る

気を全身に纏い、先ほどよりもさらに速いスピードで向かってきた

使えそうな者でも、逆らうならば絶対に殺す

これは彼らが長年宇宙を渡り歩いてきて、一度として例外はない

「ネギ君！」

悟飯はそんなボージャックを全力で追いかける

（そんなこと……そんなことさせるもんか！）

だが、今の悟飯とボージャックのスピードはほぼ互角

出遅れてしまった悟飯は、追いつこうにもなかなか追いつけない

（くそっ！気功波を使おうにもネギ君が……）

悟飯から見てボージャックの位置は、ちょうどネギと直線上

避けられたらネギに当たってしまう

（どうする、どうする……）

「おい、目の前をちゃんと見ろよ」

「え？」

追いかけながら必死に考えを巡らせていた悟飯

一瞬だけ、目の前の事態に対する反応が遅れた

ボージャックが突如

悟飯の方へ振り返ったのだ

「だあああああああっ！」

「ぐぼおおおおっ！」

「ご、悟飯君！」

ボージャックの拳が、悟飯の腹のど真ん中へフルパワーで命中

悟飯は目を見開き、腹から絞り出されるような声を上げた

そのまま首根っこを掴み、締め上げていく

「へへ、やっぱり追いかけてきやがったぜ」

「お、お前……初めからそれが目的で……」

「まあな、お前がお友達思いだったんで見事成功した」

ボージャックがネギを先に狙ったのは、あくまで援護射撃を封じるため

悟飯との戦いを一対一に持ち込み、より勝利を盤石とするためだ

そしてネギを重傷に追い込んだボージャック

するとここで、この策が思い浮かんだのだ

一対一になれば確かに、こちらはさらに有利となる

だが、やはり念には念を入れておきたい

ならば重傷にしたあいつを餌にしよう、あれならいつでも殺せる

あいつを殺しにかかれば、間違いなく阻止しにこいつ（悟飯）は向かう

自分を追いかけに来たところへ、振り向いて奇襲をかければまず攻撃は当たる

そして、自分のペースへ持ち込める

重傷の方は、助けようにもロクに動けない

仮に助けに向かわなかったとしても、本当に重傷の方を殺せばいい

それでもなんら自分側に不利は働かない、と

そしてこの作戦は、ボージャックの考える最高のケースに当てはまったのだ

「そらっ！そらっ！そらっ！」

「ぐほっ！ぐはっ！ぐぼっ！」

片手で締め上げ続け、もう片方の手で拳を作って殴り続ける

その一撃一撃が、悟飯の体力を著しく奪っていく

「や、やめろーーーー！」

ネギは身体に鞭を打ち、ボージャックへ飛びかかる

「ふん！」

「ぐわあああっ！」

だが、今のネギはボージャックの敵ではない

殴る手を一時中断し、ネギをいとも容易くはじき返した

ネギは再び地につき、仰向けに倒れ込む

「ご、悟飯君……」

「さて、そろそろトドメといくかな……」

殴るのをやめると、首の代わりに悟飯の襟首を掴み

「そらあああっ！」

勢いよく下へ投げつけた

ネギとは違ってある程度は受け身を取れたものの、ダメージは避けられず

「く、くそ……」

悟飯もネギと同じく、かなりのダメージを負ってしまった

そんな悟飯へ、ボージャックは手の平を向け

「はあああああああ……」

緑色の巨大な光球を作り出す

「死ね！小僧！」

そしてそれは撃ち出された

今の悟飯の体力では、避けようにも避けれない

「悟飯君！」

ネギは叫ぶ

それしか今は出来ない

満足に動くことの出来ない身体

それに加え悟飯のいる場所は、ボージャックを挟んで正反対

あと出来るのは、行く末をただ見ることのみ

「そっちもすぐに殺してやる、あの世で再会するんだな！」

「悟飯君ーーーーーーーー！」

光球は、今にも悟飯を飲み込もうとしていた

第５４話　子供コンビは大苦戦！？策士ボージャックの罠（後書き）

クウネル
「あとがきコーナーのお時間です」

エヴァ
「今回もちゃんと予告通りに投稿か……なかなか調子いいじゃないか、作者」

注・どうもです

クウネル
「さて、早速ゲストの紹介です」

アスナ
「あれ？どこよここ？」

鶴仙人
「ほっほっほ、亀仙人より先に出てやったぞ。ザマー見ろ」

クウネル
「鶴仙人さんと、その孫弟子にあたる神楽坂明日菜さんです」

アスナ
「え！？なんでこんなジイさんと！？」

エヴァ
「まあ確かに、鶴仙人の弟子（天津飯）の弟子だからな」

アスナ
「ああっ！ていうか天津飯さんからこの人の話聞いたことある！」

鶴仙人
「ほう、何と言っとったんじゃ？」

アスナ
「元師匠だけど、今となっては武道家の風上にも置けない奴だって！」

鶴仙人
「あの裏切り者め……そこまでワシをコケにするか！」

クウネル
「すいません、そろそろコーナーを進めてもいいですか？」

アスナ
「こんな奴としたくない」

鶴仙人
「ワシも」

エヴァ
「おいおい、どうするんだ？クウネル」

クウネル
「さて、今回の話ですが……」

エヴァ
（無視して進行かよ！）

クウネル
「ネギ君悟飯君、両方ともボスにボロボロにされちゃいましたね」

エヴァ
「ぼーやめ、敵の作戦に利用されおって……」

鶴仙人
「ふん、裏切り者の仲間達などみんな死んじゃえばいいんじゃ」

アスナ
「なんてこと言うのよ！」

鶴仙人
「うるさい！天津飯達が鶴仙流を抜けてこっちは色々大変なんじゃ！弟とも最近会えとらんし！」

クウネル
「そういえば弟の桃白白さん、ちゃっかり本編に登場してましたね」

エヴァ
「だったな、ちう茶々放浪記の時に一回だけ」

鶴仙人
「そうなんじゃ……あいつめ、ワシを差し置いて一人だけ出演しおって……」

クウネル
「まああなたと桃白白さんとでは、人気に天と地ほどの差がありますからね」

鶴仙人
「何じゃと！？」

エヴァ
「確かにな、『柱を思いっきり投げて、飛んでそれに追いついて乗って移動』は今でも有名だ」

アスナ
「そうよそうよ！あんたなんか何も出来ないじゃない！」

鶴仙人
「う、うるさいうるさいうるさい！何じゃ何じゃ！みんな揃ってワシばっかりイジメおって！」

エヴァ
「いや、だってお前悪役だし」

鶴仙人
「他の奴らはもっと扱いがマシだったじゃろ！あの戦隊もどきの変人とか！」

クウネル
「こちらのキャラと普通に仲良しになってましたね、そういえば」

エヴァ
「あいつらはまだいいだろ、こいつより何か許せるし」

鶴仙人
「何かって何じゃ！何かって！」

クウネル
「それはまあ、さっきも言った通り人気が……」

鶴仙人
「チクショーーーー！」

エヴァ
「あ、逃げた」

鶴仙人
「こんなコーナー、もう二度と出てやるものか！へーんだ！バーカバーカ！」

エヴァ
「いや、もう多分出す気ないし、作者」

注・鶴仙人は書くの難しいです

クウネル
「まあ、出番もあんまりないですからね」

エヴァ
「その割にアックマンとか書きまくってるがな」

アスナ
「そんなことどうでもいいじゃない、あのムカつくジジイが消えちゃって清々したんだし！」

エヴァ

「まあ確かに、あのジジイは私も嫌いだが……」

クウネル
「では次回予告行きましょうか」

アスナ
「さて、次回のネギドラ！は……」

クウネル
「あ、私のセリフ取られた」

エヴァ
「時は少し遡り、再び天津飯達の方へ舞台が移るぞ」

クウネル
「新気功砲を放ち続ける天津飯さん、しかしそれにももう限界が……」

アスナ
「天津飯さんもう止めて！このままじゃ死んじゃう！」

エヴァ
「そしてそんな天津飯に、銀河戦士の一人が襲いかかる！」

クウネル
「次回ネギドラ！第５５話、『奮闘神楽坂明日菜！　そこへ現る救世主』」

アスナ
「天津飯さんは……絶対に死なせない！」

エヴァ
「って何だこれは!?」

クウネル
「いやー、せっかくアスナさんが今回ゲストで出てるのでやってみようかと……」

エヴァ
「まるっきり本家のパクリじゃないか!」

クウネル
「ちょっとはイジってますよ?作品タイトルは略称使ってますし、悟空さんが『おっす!オラ悟空』って言ってませんし」

エヴァ
「長すぎるんだよこの小説!元々のタイトルが!それに孫悟空はここにいないんだから当たり前だろ!」

クウネル
「あと次回が第何話か言ってますし。まあそれは語呂の関係上です

が」

アスナ
「ていうか、エヴァちゃんだってちゃんとセリフ言ってたじゃない」

エヴァ
「うっ……あ、あれは場の雰囲気にそのまま流されてだな……」

クウネル
「まあまあ、次もやるかやらないかは読者の反応次第ってことで」

エヴァ
「結局そこに行きつくか……」

注・ご意見お待ちしています

アスナ
「次回の投稿予定は金曜日」

エヴァ
「上記の意見以外にも、感想、質問等々いつでも待ってるぞ！」

クウネル
「ではみなさん、次回のネギドラ！も……」

エヴァ&アスナ
「お楽しみに！」

エヴァ
「てゆーかその方式使う場合、呼べるゲスト限られてくるよな」

クウネル
「あ」

注・あ

エヴァ
「気づいてなかったのか……」

注・出来るゲストだったらやるということで……

エヴァ
「おいおい……」

注・また大雑把でスイマセン

第５５話　奮闘神楽坂明日菜！　そこへ現る救世主（前書き）

今回も昼投稿です。学校が定期考査で午前中で終わるため、ノビノビと校内（図書室）で書いております。それとユニークが５万突破しました、本当はかなり前からだったんですがスッカリ忘れていました。

ではどうぞ！

第５５話　奮闘神楽坂明日菜！　そこへ現る救世主

ボージャックが巨大光球を悟飯へ放つ少し前

場所をアスナ達の所へ移し、そこまで時間は遡る

「はああっ！」

「くううっ！」

「はああっ！」

「ぬぬぬぬ……」

悟飯達がボージャックと戦い始めて数分

そこから一度として休むことなく、天津飯は新気功砲を上空から一点に撃ち続けていた

理由は言うまでもなく、発射対象の部下四人の足止め

一同を長時間、かつ確実に足止めする方法

それがこの、広範囲に渡って衝撃波状の気功波攻撃を繰り出す新気功砲なのだ

だがこの技は一発一発に、技主の命を込めていく

断じて、『一発一発に誠心誠意を』というような意味での比喩ではない

言葉の通り本当に命、すなわち生命力を削っていくのだ

現に過去、天津飯は全生命力を捧げた一撃を撃ち、死亡したことがある

またその数年後にも命を賭して、今のように敵の足止めを買って出ていた

無論、天津飯は死にたがりというわけではない

ただ、命を危険に晒してでも自分に出来る精一杯のことをしたい

その強い武道家魂の所以であった

「はあああっ！……はあっ、はあっ、はあっ」

だが、そんな彼にも限界が近づく

初めと比べ、一発一発の間が長くなる

また息も上がり、大きく肩で呼吸をし始めてきた

「はああっ！」

「マズいで……そろそろ天津飯さんが限界や」

「天津飯さん……」

その様子を、同じく上空で見守るアスナ達

内の一人であるコタローが、眉をひそめて言った

アスナは不安そうな表情で、ただ天津飯をずっと見る

「結局、ピッコロは間に合わなかったか……」

次に言ったのはヤムチャ

三人の中で一番悔しそうな表情で、拳をギュッと握る

この間に悟飯達が親玉を倒せなかったとしても、ピッコロが来れば話は別

刹那も戻ってきて、戦力的にかなり頼もしくなるはず

そういった二段構えの作戦だったのだが、こちらも実りそうにはなかった

「……私、天津飯さんを止めてきます！」

耐えきれなくなったアスナは、勢いよく天津飯の所まで飛ぶ

天津飯が限界で援軍が来ない以上、もう退却しかない

これは、作戦決行前に一同で決めていたこと

動けないであろう天津飯をヤムチャかコタローに担がせ、アスナは敵の気功波攻撃の盾となる

そういう取り決めだった

すぐにアスナは天津飯の横まで移動し、声をかける

「天津飯さん、退却しましょう！もう限界のはずです！」

「はああっ！……まだだ、まだ撃てる……」

「そんな！もう無茶です！」

だが天津飯は止めるそぶりを全く見せない

依然として、新気功砲を撃ち続けた

「はああっ！……この命が果てる、ギリギリまで……」

「天津飯さん！」

「はああっ！」

この退却という第三の選択肢、確実な手というわけではない

気功波攻撃はアスナの能力で防げたとしても、接近戦になればどうしようもない

それは一応、新気功砲によるダメージもある程度は計算に入れている

ダメージによってスピードが落ちていれば、逃げおおせる可能性は充分にある

だがアテになるかと言われたら、自信を持って首を縦に振れない

セルの足止めの際は動きこそ止められたものの、殆どダメージを与えられなかったこの技

この銀河戦士達にも同じことが言えるのではないか

その不安は振り払えるものではなかった

もちろんその時よりも、修行により断然威力は上がった

これは天津飯も自信はある

だが、それを確実な否定材料には決して出来なかった

「はああっ！」

「天津飯さんもう止めて！このままじゃ死んじゃう！」

ならば悟飯達が倒すかピッコロが来るまで、可能な限り撃つ

これが天津飯の出した結論

アスナと約束した通り、死ぬつもりは毛頭ない

だが、天津飯は始めから限界まで撃つつもりだった

それこそ命が果てるギリギリ、一歩手前まで

しかし、見ているアスナにとっては耐え難いものであるのには変わりない

「天津飯さん！」

「はああっ！」

声を荒げるアスナと、それに構わず撃つ天津飯

すると、ここで事態は急変した

「どけえええっ！雑魚が！」

「ぐわあああっ！」

「「！！」」

二人の下、地上からの二つの声

片方の声の主はヤムチャ

だがもう片方は仲間の、コタローのではない

殺意に満ちた、思わず恐怖すら感じそうになる声

そしてその声が再び、二人の耳へ

「三つ目ヤロオオオオオ！ぶっ殺してやる！」

「アスナ姉ちゃん！一人逃げられてもうた！」

「え！？」

続いて入ってきたコタローの声に、アスナは驚愕

慌てて下を見ると、そこには

「死ねえええええええっ！」

服をボロボロにし、鬼のような形相に変わったゴクアが目の前まで来ていた

アスナが天津飯と話していた時、ゴクアは脱出寸前まで崖を登っていた

そこへすかさずヤムチャとコタローが止めに行ったのだが、結果はご覧の通り

二人の攻撃をかわし、脱出を成功させてヤムチャを殴り飛ばした

そして事態の元凶である天津飯へ怒りを露わにし、向かってきたのである

「はあああああっ！」

ターゲットを天津飯へ一点に絞り、気功波を放つ

「くっ！」

速い、避けれそうにない

直撃を覚悟する天津飯

しかしそんな彼とゴクアとの間に

「危ない！」

彼女が、神楽坂明日菜が割って入った

「何！？」

ゴクアは、起こった光景に目を見開いた

天津飯の代わりにアスナに当たった気功波は、爆発一つ起こさず消滅

自身の能力である魔法完全無効化能力〈マジックキャンセル〉で、アスナは身を呈して天津飯を守った

それにさらに怒りを覚えたか、ゴクアはさらに顔を歪めて自分の剣を引き抜いた

「だったらこいつだ！二人まとめて串刺しにしてやる！」

「ア、アスナ！逃げろ！」

アスナのさらなる危機に、天津飯は叫ぶ

だがアスナは、その場から離れる様子は何一つ見せない

「天津飯さんは……」

いつの間にか、アスナの手には一枚のカード

「だあああああっ！」

ゴクアは剣先をアスナの胸部に定め、声をあげて真っすぐ突き入れた

本来なら、ここで次にゴクアが感じるのは獲物を捉えた手応え

剣が肉体に突き刺さり、ズブズブと貫いていく感触

かつて何百人、何千人にもわたって自らの剣で数々の星の原住民を殺してきたゴクア

それは、長い時を経た今でも忘れてはいない

それゆえ今感じたものと、耳に入った音にゴクアは驚きを隠せな

かった

キィィィィィィン！

「なん……だと？」

硬い物を突いた手応えと、高音の金属音

決して、人の身体を剣で貫いた時に味わうものではない

ゴクアは目を凝らし、剣の先にあるものを見た

そこには

「天津飯さんは……絶対に死なせない！」

アーティファクト『ハマノツルギ』で攻撃を受け止めるアスナの姿があった

「だあああああああっ！」

ゴクアの剣を弾き返し、逆にアスナが攻撃を仕掛ける

バットのスイングのように、横へ力強くなぎ払う

身の丈以上の大きさの刃から繰り出されるそれは、正に圧巻であった

「俺と剣で勝負だぁ？舐めるな！」

だがゴクアはたじろぐことはない

素早く剣を戻し、そのまま腰へ持っていって攻撃を受け止めた

同じような金属音が両者の間に響く

「ふん、他愛もない……次はこっちからやってやるぜ！」

一度アスナから離れて剣を構え直すと、ゴクアは再び突進

一撃必殺となりえる突きは使わず、手数を増やしてアスナへ切りかかった

「うっ！」

変身こそしていないものの、今のゴクアはかなり本気

身体能力、剣の腕、経験

全てにおいてアスナを圧倒していた

何撃かは防げたがその後が追いつかず、アスナは右肩を大きく斬られてしまう

血が流れ服は滲み、痛みに顔を歪ませた

「そらそらそら！まだ終わらんぞ！」

お構いなしとばかりに、ゴクアはさらにアスナを攻め立てる

手負いとなったアスナがこの動きについていけるわけがなく、次々と剣撃を浴びた

脚、脇腹、腕、頬

服は彼女自身の血で、どんどん赤く染められていく

構えもまともにとれず、荒い呼吸

「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ……」

「どうした？もうお仕舞いか？」

距離を離し、アスナの傷ついた姿をニヤつきながらゴクアは言った

ゴクアは殺そうと思えば、いつでもアスナを殺すことが出来た

喰らった刀傷はどれも、即死しない程度に急所を外している

痛みと出血で、苦しみが徐々に増していくように

それにはアスナも流石に気がついてしまった

（か、完全に遊ばれてる……）

下を見るとコタローが獣化をしてパワーを上げ、残り三人の脱出を必死になって食い止めていた

ヤムチャは先ほどのゴクアの一撃で気絶

「はああっ！」

後ろにいる天津飯もまた、気力を振り絞って新気功砲

これ以上脱出されたら自分達は終わり、確実に全滅

例え攻撃を中止してアスナを助けようにも、疲弊している自分ではまず不可能

そのためアスナのピンチである今も、こうすることしか出来ない

これがアスナに、他の三人に対して出来る彼の最大の行為だった

「（アスナ、みんな……すまん！）はああっ！」

「ふっふっふ、お仲間さんも全員手一杯みたいだな……」

アスナの視線の先を追ったゴクアは、彼女と同じく周りの状況を理解

邪魔者が入ることのない、純粋な一対一

「だが、そろそろ飽きてきたな。いい加減ブージン達も出してやりたいことだし……」

ゴクアの笑みが、極悪なそれへと変貌

「二人仲良く、あの世に送ってやるよ！」

気をさらに開放し、攻撃力は大きく上昇

アスナを真っ二つに切り裂かんとばかりに、猛然と向かってきた

「くっ！」

アスナは力を振り絞り、剣を身体の正面へ

だがそれはとても弱々しく、容易くゴクアの第一撃で弾かれるだろう

そして続く二撃目でトドメ

このイメージがアスナの脳裏に焼きついて離れない

それほどまでに、二人に間には力量差がありすぎた

（ごめん、天津飯さん……ネギ……それにみんな……）

「くたばれえええええええっ！」

「っ！」

男の怒号に気圧され、死を覚悟したのか目をつぶるアスナ

だが次に彼女が感じたのは、イメージとは遥かにかけ離れたものであった

キイィィィィィィィィィン！

「……え？」

まず感じたのは、肌に触れる柔らかい何か

ちょうど、鳥の羽毛のような感触

そしてそれとほぼ同時に、剣と剣がぶつかり合った金属音

だが、剣を持つアスナの手には衝撃など一切来ない

まさか、とアスナは恐る恐る目をゆっくりと開いた

真っ先に目に入ったのは純白の翼

そしてそれを背から生やす、一人の少女の後ろ姿

その少女は僅かだが顔を横に向け、こちらを見てこう言った

「遅くなりました、アスナさん」

「刹那さん！」

翼ある剣士、桜咲刹那

今、この戦場に颯爽と参上した

第５５話　奮闘神楽坂明日菜！　そこへ現る救世主（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーのお時間です」

エヴァ
「今回のゲストは誰を呼んであるのだ？」

クウネル
「はい、今回のゲストはこのお二人……」

ミスターポポ
「……よろしく」

ザジ
「……」

クウネル
「神殿の番人ミスターポポさんと、ネギ君の生徒の一人ザジ・レイニーディさんです」

エヴァ
「……なあクウネル」

クウネル
「何でしょう？」

エヴァ
「このコーナーは『トーク』中心なわけだよな？」

クウネル
「はい、ていうかあなたがそう言ったんじゃないですか」

エヴァ
「だったらなぜこいつらを呼んだ！」

クウネル
「何かご不満でも？」

エヴァ
「不満以外に何がある！だってこいつら全然喋らないだろ！」

クウネル
「前にハッチャンさんとかも呼んだじゃないですか、同じく無口の」

エヴァ
「あれはまだいいんだよ！茶々丸が一緒にいたし！二人揃って無口とかどういうつもりだ！？」

クウネル
「エヴァンジェリン、それを言ったら餃子&ココネのお二人も今後呼べなくなるじゃないですか。折角水竜さんがリクエストしてくださったのに……」

エヴァ
「だったらあと一人喋る奴を加えろ！」

注・それでもいいでしょうか？水竜さん

クウネル
「落ち着いて落ち着いて、とりあえずコーナーを進めましょう」

エヴァ
「だからこの四人でどうしろと!?」

クウネル
「……しかたありませんね、リクエストを許可なく捻じ曲げてしまうことになりますがもう一人呼びましょう」

エヴァ
「茶々丸の時もやったけどな」

クウネル
「ザジさんの唯一無二の通訳役、雪広あやかさんです。どうぞ!」

あやか
「あら?エヴァさんじゃありませんの」

ザジ
「……」

あやか
「まあ!私があとがきコーナーのゲストに?でもどうしていきなり……」

ザジ
「……」

あやか

「確かに、ザジさんとポポさんだけでは荷が重いですわね」

エヴァ
「前々から思うが、何で分かるんだろうな」

クウネル
「私に訊かれても……でもこれで文句はないでしょう？」

エヴァ
「まあな」

クウネル
「では、今回の話ですが……」

ザジ
「……」

あやか
「そうですわね、アスナさんったらもう……」

エヴァ
「えーっと、今こいつは何と？」

あやか
「『神楽坂さんは無茶をしすぎ』と言ったんですわ」

クウネル
「確かにそうですね、刹那さんが来なかったらあのまま死んでましたからね」

エヴァ
「っていうか、タイトルの割には奮闘してなかった気もするしな。一撃も与えられず満身創痍だし」

ミスターポポ
「……多分そこ、突っ込んだらダメ」

クウネル
「あとヤムチャさんが、一撃でノビて戦線離脱しましたね」

ザジ
「……」

あやか
「『あの時のカッコいいセリフは何だったんだろう』ですって」

エヴァ
「だよな、一回かめはめ波で敵を押し返したくらいだけだし」

クウネル
「やっぱりヤムチャさんはヤムチャさんだったと」

エヴァ
「もしかしてあいつ、あれで出番終わりとかだったりするのか？」

注・ちゃんとありますよ、ご心配なく

エヴァ
「いや、別にあいつの出番を望んでるわけではないのだが……」

クウネル
「では続いて、次回予告です」

エヴァ
「結局あの方式は続けるのか？」

クウネル
「とりあえず保留の方向で行くそうです。まったく意見が来なかったですし」

あやか
「その代わりと言わんばかりに、総合評価が少し下がりましたわよね？」

エヴァ
「６ｐｔな、まあそのせいかどうかはハッキリと言えんが」

クウネル
「まあどっちにしろ、今回のゲストでは出来ませんしね」

エヴァ
「ほう、ってことは次回は委員長の出番はないわけか」

クウネル
「そういうことです、もう数話先にはちゃんと出番があるみたいですが」

あやか
「仕方ありませんわね……その分こちらで頑張りますわ」

ミスターポポ
「……では、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「こいつが言うのか！？」

クウネル
「（またセリフ取られちゃいました……）ついに刹那さん達が参戦、戦いが大きく動きます」

ザジ
「……」

あやか
「『刹那さんが来たってことは……』ですか？そうですわ！ということはあの人も……」

エヴァ
「『あの二人がどこまで戦況を変えるか』が見所だな」

クウネル
「次回の更新は来週の火曜日、週二ペースは未だ続行中です」

あやか
「感想、リクエスト、質問は随時募集中ですわ」

エヴァ
「特に質問に関しては答える気満々らしいぞ、極端なネタバレに繋がるものは除いてだが」

クウネル
「いっそのことこのコーナーで答えてみるのも良いかもしれませんね」

エヴァ
「ある程度数がないと無理だけどな」

あやか
「ではみなさん、次回のネギドラ！も……」

エヴァ＆クウネル＆ミスターポポ
「お楽しみに！」

ザジ
「……次も見てね」

第５６話　頼もしき援軍　後は任せろ俺達に（前書き）

もうじき総ＰＶが４０万に！この話を投稿したので今日中にはいきそうです。あと今回のあとがきコーナーにはご注意を、意味は読めば分かります。

ではどうぞ！

第５６話　頼もしき援軍　後は任せろ俺達に

時を同じくして、悟飯達の方では

「……誰だ貴様は」

先ほどの笑みから一転

ボージャックはやや怒りの表情を見せながら、悟飯から少し外れた方向にいる人物を見やる

悟飯にトドメを刺さんと、巨大光球を撃ち出したボージャック

だがそれは、思わぬ方向からの攻撃で阻止されてしまった

紫色で螺旋状の気を纏った光線が横から激突

いかに強力な攻撃でも、正面からでなくてはその威力はすべて発揮することは出来ない

よって光球は弾き飛ばされ、悟飯に当たることはなかった

この予想外の出来事に、ボージャックだけでなく悟飯達も、その方向へ顔を向けた

そしてそこにいたのは、既にターバンとマントを外して臨戦態勢のあの人物

「「ピッコロさん!!」」

ピッコロだった

「待たせたなお前達、遅くなってすまん」

悟飯、ネギの方へそれぞれ顔を向けてこう言うと、ピッコロは再び顔を戻す

当然その先にあるのは、悟飯達を痛めつけた張本人ボージャック

「次は俺が相手だ、覚悟はいいか?」

「ほう、俺と戦おうってのか?」

「そうだ」

この言葉に、ボージャックは思わず笑みをこぼす

(どれほどの奴かと思ったら、あの強い方のガキとそこまで変わらないじゃないか……)

むしろ、こいつのほうがやや劣るくらいか?

あのガキ達がまともに戦えないことを考えたら、まず勝てる

気を探って大体の力量を測ったボージャックは、こう判断を下したのだ

「……いいだろう、殺す順番が変わっただけだ。お前の後はすぐ、

あのガキ二人を殺してやろう」

「やれるもんならやってみやがれ！そう簡単にはいかんぞ！」

ピッコロは全身に力を込め、気を開放する

そして、それと共に

“悟飯、聞こえるか”

（ピ、ピッコロさん？）

自身の能力であるテレパシーで、ボージャックに伝わらぬよう悟飯へと話しかけた

頭から直接入り込んでくるピッコロの声に、悟飯は思わず目を見開く

ピッコロは悟られぬようボージャックを睨みつつ、そのまま会話を続行した

“かなりダメージを負ってしまったようだが、飛ぶことくらいは出来るか？”

（は、はい、何とかそのくらいは……）

“なら話は早い、ネギを連れて一旦離脱しろ”

（ええ！？そんな！僕も一緒に戦いますよ！）

ここで自分達が離脱すれば、ピッコロはボージャックと一対一の戦いを余儀なくされてしまう

自分の尊敬する師を危険に晒すことに、悟飯は抵抗を示した

“今のお前達を加えてもあいつには勝てん、木乃香に治療してもらってから戻って来い”

（だ、だったらネギ君のカードで召喚してこの場で……）

“バカかお前は！そんなことをしてみろ！自衛手段を持たない木乃香は、たちまち奴に殺されるぞ！”

（うっ……）

“俺が心配だと思うんだったらさっさと行け！皆揃って死にたいかっ！”

（ピッコロさん……）

顔を伏せ、悟飯は右拳を強く握り締める

このままズルズルとここに残れば、ピッコロの覚悟をふいにしたことになる

非常に悔しかったが、悟飯は決断する

（……分かりました）

“よし。俺が奴へ攻撃するのと同時にお前も移動しろ、いいな”

（はい……）

「だだだだだだだだだだだだだだだだだだだだあっ！」

「無駄だ無駄だあっ！」

悟飯の返事とほぼ同時に、ピッコロはボージャックへと猛攻を見せる

両手から気弾を高速で、次々と放っていった

それをボージャックは、ピッコロの動きを注視しながら難なく手で弾いていく

その間に、悟飯はピッコロの言葉通りにネギの下へ

気配を極力消しながら、こっそりと近づいて身体を起こさせる

「ネギ君、大丈夫？」

「な、何とか……」

ふらつきながらも、ネギはゆっくりとそのまま立ち上がった

そんな彼に肩を貸し、悟飯は先ほどのピッコロの言葉をネギに伝える

最初は悟飯同様懸念の表情を見せたネギだったが、すぐに了承

そうすることが一番ピッコロのためになるのだと理解した

「じゃあ行くよ」

「うん」

二人は急いでこの場から退避

ある程度低空飛行で距離をとった後高度を上げ、今自分に出来る全速力で飛翔した

だが、それにボージャックはすぐに気付く

一応彼らの援護射撃を警戒し、気の察知で位置を把握していた

「ばあああああああっ！」

「くうっ！」

見逃すほどボージャックは甘くない

全身から強烈な爆発波を出し、気弾攻撃をまとめて処理

同時に、その爆風でピッコロをたじろがせた

「逃がすかあああああっ！」

気を全身に纏いながら、ボージャックは二人を猛スピードで追いかけようとする

ちょうど位置的には、彼から見て十一時の方向

「このおおおおっ！」

ピッコロは慌てて、ボージャックの進路へ入り込む

「どけえええっ！雑魚が！」

「ぐおおおおっ！」

だが、ボージャックはそれでは止まらなかった

右手刀で一振り

急いでいたピッコロはその防御に間に合わず

たちまち弾き飛ばされてしまう

「ははははは！やはり大したことな……」

「きえええええっ！」

「何！？」

そんなピッコロを、顔だけ横にして見て笑うボージャック

しかし、直後に違う方向から入った声に彼は顔色を変えた

聞こえてきたのは自分の斜め前

そこへ顔を向けるとそこには

「ぐほおおっ！」

影分身で作ったもう一人のピッコロがいた

見るや否や、そのピッコロから繰り出された拳が直撃

頬を抉るようにして、ボージャックをぶっ飛ばした

「な、何だこれは！？」

ブレーキをかけてボージャックは空中静止

目の前に立ちはだかる二人のピッコロに、思わず我が目を疑ってしまった

（そういえば、あの三つ目野郎も同じような技を……）

「言っただろ、そう簡単にはいかないと」

そう言いながら、ピッコロは二体目の影分身を生み出す

たちまちボージャックは、悟飯達への進路をふさがれた

「さて、続きといこうか」

「ふざけやがって……後悔させてやる！」

ボージャックの気が、より一層高まる

（ちっ、もう少し後までこれ（影分身）はとっておきたかったが……）

とっておきの手を開始数十秒で晒すことになったピッコロ

それほどまでに、目の前の敵は強敵なのだと実感する

表面上は平静を保っているが、内心焦りと不安とが渦巻きつつあった

（悟飯、ネギ、頼むぞ……）

（な、何だこの小娘……俺の剣を真正面から受け止めやがった）

時を戻しアスナ達の方

突如参上した白き翼の剣士、刹那

そんな彼女に、同じく剣士であるゴクアは少しながら驚きを見せた

実力はさっきまで戦っていたのとは桁違い

それを理解し、ゴクアは警戒を強める

未だ両者の刀は、つばぜり合いを続けていた

「あれ!?刹那さん、ピッコロさんは!?」

最初、刹那の登場に歓喜だったアスナだが、少ししてピッコロがいないのに気付く

「ネギ先生達の方へ行っています、あちらもかなり苦戦中のようなので」

刹那は既に顔を正面に戻しており、そのままアスナへと説明した

「そんな!刹那さん一人じゃ……」

(せ、刹那……よかった、間に合った……)

刹那を目にし、天津飯は安堵の表情

自分の使命が全うでき、それが結果として繋がってくれた

二人の会話は耳にはもう入っていない

刹那が来たという一事実に緊張の糸が切れ

「て、天津飯さん!」

そのまま気を失ってしまう

地面に落下しそうになる天津飯を、一番近くにいたアスナは慌てて受け止めた

（よ、よかった、息がまだある……ってマズイ！）

アスナの顔から血の気が引き、すぐに下に目をやる

見えるのは、新気功砲によって空けられた四角形の大穴

そこからゆっくりと、三人の銀河戦士が姿を現した

服はボロボロで、脱出しようとして疲労したのか少し息が荒いだがそれはすぐに収まり、今は首を左右に回して辺りの状況を確認している

近くにいたコタローは思わず硬直

今向かっていったとしても間違いなくやられる

横たわるヤムチャに目をやりつつ、この事態を悔しいながらも理解

「刹那さん！一旦逃げましょう！このままじゃ私達全滅よ！」

今自分達側で、まともに戦えそうなのは二人

さっき来てくれた刹那と、下にいるコタローのみである

自分は出血多量の満身創痍、天津飯とヤムチャは気絶

どう考えても勝てるはずがない

「大丈夫です、ここは私達だけで戦います。アスナさんこそ早くお嬢様の所で傷の手当てを」

だが刹那はその提案を蹴る

それどころか自分達だけが残ると言い出した

「ダメよそんなの！刹那さんやコタローだけじゃ……」

確かに自分は重傷だが、友を残してまで逃げるほど腐ってはいない

その気がないなら自分も残ると言わんばかりに、アスナは刹那へ抗議を続けた

するとついに、三人の銀河戦士が動き始める

「「「たあああああああっ！」」」

ビドーとブージンは、コタローを確実につぶしに二人まとめて突っ込み

ザンギャは上空へ、ゴクアの援護へ向かってきた

「刹那さん！」

さらに焦りが募り、アスナはさらに大声で刹那へ

「ご心配なくアスナさん、残って戦うのは二人じゃありません」

「え？」

その直後のことだった

「「ぐおおおおおおっ！」」

「な、何！？」

下から聞こえてきた唸り声

その声の主はブージン

何事かと、アスナは反射的に視線を下へ

見ると金色の気功波が、コタローへ迫る二人を飲み込んでいた

ちょうど真横からの攻撃で、コタローには当たっていない

さらにこれと同時に

「てやあああああああっ！」

「キャアアアアッ！」

何者かがザンギャを空中ドロップキックで蹴り、勢いよくふっ飛ばした

アスナと同じく下へと目を向けていたザンギャ

反応が遅れ、直撃してしまっていた

「あああああっ！」

そしてその人物を見て、アスナは刹那の言った意味を理解する

下でも既に、気功波を撃った本人がコタローの横に姿を現していた

「そう、あの二人も加えて四人です」

「いやいや、待たせてしまったでござるな」

「大丈夫だった？コタロー君」

長瀬楓、そしてトランクス

戦線を離脱していたこの二人がついに復活

今、この超大戦へと参戦した

第５６話　頼もしき援軍　後は任せろ俺達に（後書き）

クウネル
「はい、あとがきコーナーです。今月二本目ですね」

エヴァ
「今日でテストも終わったらしいし、今まで以上に頑張ってもらいたいところだな」

注・頑張ります

クウネル
「さて、今回のゲストはこの方です」

ヤムチャ
「あーあ……俺今回セリフなしかよ」

美砂
（お、結構いい男）

クウネル
「Ｚ戦士ヤムチャさんと、３－Ａ生徒の一人柿崎美砂さんです」

エヴァ
「ああ、これがウパ＆チア三人組を後回しにした例のリクエストか」

クウネル
「そうなりますね」

ヤムチャ
「結局あの時の俺って何だったんだよ……」

美砂
「ねえねえエヴァちゃん、さっきからヤムチャさんの表情が暗いんだけど」

エヴァ
「今回まるっきり出番なかったからな」

クウネル
「しかも気絶してますしね」

ヤムチャ
「俺ってやっぱしこういうのばっかりなのかな……」

エヴァ
「ていうか、そのネタは前回も触れたんだからこれ以上するな」

ヤムチャ
「だってよお……」

美砂
「そうよエヴァちゃん、ヤムチャさん可哀そうよ！」

エヴァ
「うるさい面食い女」

美砂
「なっ、どういう意味よ！」

エヴァ
「そのまんまだよ、彼氏持ちのくせしてぼーやに手を出してるじゃないか」

美砂
「ち、違うわよ！あれはほら……その……そう！ネギ君と今まで以上に仲良くなりたいなあーって……」

エヴァ
「そんな奴が普通色仕掛けするか？」

美砂
「うっ！」

クウネル
「ちなみにヤムチャさんは私としてもオススメできませんよ、浮気症が原因で十数年付き合ってた彼女と別れましたから」

エヴァ
「いや、逆にいいんじゃないか？浮気者同士気が合うかも知れんぞ」

クウネル
「なるほど」

美砂
「ちょっとちょっと！」

エヴァ
「ではコーナーを進めるか」

クウネル
「そうですね、さて今回の話ですが……」

エヴァ
「終わり方が前回とかぶったな」

美砂
「突然助っ人が登場して、セリフ言ってお終いってところが？」

エヴァ
「そうだ」

注・スイマセン、文量の関係上あそこで切ってしまいました

ヤムチャ
「だったら調整したらいいだろ……ていうか俺にも出番よこせ」

注・ちゃんとありますよ、次回

ヤムチャ
「ほ、ホントか！？」

注・はい、担がれて地上まで運ばれます

ヤムチャ
「そ……それだけか？」

注・はい、それだけです

ヤムチャ
「……」

美砂
「だ、大丈夫よヤムチャさん！まったく本編に出られない私よりかは全然マシよ！」

ヤムチャ
「出れても情けない目にしか遭わないんだったら出たくない……」

クウネル
「でも、コタロー君との試合では最後までカッコよかったですよね」

エヴァ
「あれ以降は堕落の一途だけどな、出発前のあのセリフも結局意味なしに近かったし」

クウネル
「まあ確かに……」

エヴァ
「前回もクウネルが言ったが、ヤムチャはやっぱりヤムチャなわけだな」

ヤムチャ
「俺って何のために戦ってるんだろう……」

美砂
「エヴァちゃん言い過ぎ！ヤムチャさん地面に『の』って書き始めたし！」

エヴァ
「では次回予告行くか、クウネル」

美砂
（プチッ）

クウネル
「そうですね、では……」

美砂
「無視するんじゃないの！」

ゴン！

エヴァ
「痛っ！な、殴ったな！」

美砂
「殴って何が悪いのよ！エヴァちゃんは良いわよ！そうして人をバカにしてれば、気分が晴れるんですものね！」

エヴァ
「私が……そんなに安っぽい奴だとでも言うのか！」

美砂
「口答えしないの！」

ゴン！

エヴァ
「あいだっ！に、二度もぶった……」

ヤムチャ
「親父にもぶたれたことないのにーーーーー！」

エヴァ
「……」

美砂
「……」

クウネル
「……えーっと、なんで殴られてもないあなたが？」

ヤムチャ
「いや、なんか言わなきゃだめな気がして……」

エヴァ
「妙に作為を感じたのは気のせいか？」

クウネル
「まあいいでしょう、では今度こそ次回予告を……美砂さんもいいですよね？」

美砂
「いいわよ、何か少しスッキリしたし」

クウネル
「わかりました、さて次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「長瀬楓とトランクスが加わり、部下達四人との戦いはさらに白熱するぞ！」

ヤムチャ
「頼むぜ二人とも！俺や天津飯の分まで頑張ってくれ！」

クウネル
「そして木乃香さんの所へと戻るネギ君達」

エヴァ
「そこで神楽坂明日菜達と合流し、思わぬ事態が！」

美砂
「次回ネギドラ！第５７話『頑張れ！頼れる仲間達　地上は地上で大騒ぎ』

ヤムチャ
「俺の出番、担がれるとこだけなんだよな……」

クウネル
「……どうです？若干テイストを変えてみましたが」

エヴァ
「どこがだよ！前と一緒じゃないか！」

クウネル
「いえいえ、次回出番がロクにないヤムチャさんが喋ったじゃないですか」

エヴァ
「それ以外はさして変わらんだろ！」

クウネル
「だったら最初にセリフ入れてみます？『オッス！おらエヴァンジェリン』とか」

エヴァ
「さらに本家に近づくだろうが！ていうか誰が言うかそんなセリフ！」

クウネル
「じゃあ読者の皆さんに訊いてみます？」

エヴァ
「やめろ！『やってみてください』とか感想で書かれたらマジでシャレにならん！」

注・それはまあともかく、普通に感想や質問等お待ちしています

ヤムチャ
「次回の更新は金曜日らしいぞ」

美砂
「じゃあ読者のみんな、次回のネギドラ！も……」

クウネル&ヤムチャ
「お楽しみに！」

エヴァ
「書くなよ！書くなよ読者！書かれたらマジでこの作者はやりかねんのだからな！」

エヴァ
「しかしそれはそれとして、やはり今回殴られたのは凄く作為が……」

注・スイマセン、初めて声優ネタに走ってしまいました（しかも中途半端）

第５７話　頑張れ！頼れる仲間達　地上は地上で大騒ぎ（前書き）

第５７話投稿です。終わった定期テストが返ってきたのですが、かなり微妙な点になってました。まあ、ちゃんとこちらの投稿ペースを守れたので悔いはないですが。

やってる部活も活動が再開しますし、より一層気合を入れなくては……頑張ります！

ではどうぞ！

第５７話　頑張れ！頼れる仲間達　地上は地上で大騒ぎ

「斬岩剣！」

師から譲り受けし愛刀『夕凪』を振り下ろす刹那

足元の大地は砕かれ、岩の破片が衝撃波と共にゴクアへと迫る

「おっと！」

それを横に跳んで避けるが、そこへすぐに刹那が接近

「たあああっ！」

「このおっ！」

キィィィン！

一太刀浴びせようと切りかかったが、ゴクアはしっかりとガードした

（やはりこの人……出来る！）

まだ刃を交わしてほんの数分

しかし、ゴクアの剣の腕を知るには充分すぎる時間だった

現在、刹那とゴクアは地上戦を繰り広げている

同じくその近くでは、トランクス&コタローがビドー&ブージンとそして上空では、楓がザンギャと空中戦を展開していた

既にアスナ達はこの場から退避

アスナは自力で何とか飛び、残りの二人は楓の影分身に担がれ運ばれた

少量の気で作った簡易的な影分身のため、楓の負担は僅かである

「斬空閃！」

一旦距離をとり、刹那は再び攻撃

三日月状の気の刃が、まさに空気を切り裂きながら進んでいく

「当たるかああっ！」

それに対しゴクアは真っ向から突進

気を込めた剣を縦に振り下ろし、二つに分断

さらにそのまま、刹那へと駆けていく

「くそっ！」

同じく剣に気を込めた刹那は、ゴクアの一閃を何とか受け止めた

その後何撃か交わしあうと、また最初と同じくつばぜり合いへ

それを続けながら、ある人物の気を探ってみた

（……ピッコロさんの気がどんどん減ってきている、マズい！）

悟飯の気やネギの魔力が近くにないことから、今は親玉と一対一

傷を負った彼らを逃がすために戦っていることがすぐに分かる

そして、非常に劣勢であることも

（やはりアレは私でなく、ピッコロさんが持っておくべきだったんだ……くそっ！）

ここへ来る数分前

刹那とピッコロとの間に、このようなやり取りがあった

「ピッコロさん！やっと見つけましたよ！」

「おお、刹那か」

ピッコロの捜索のため、会場から飛び出した刹那

しばらくあちこちを飛び回り、ついにピッコロの気を察知した

そしてその方向へ急いだところ、正面から鉢合わせ

互いにブレーキをかけ、向かい合っていた

「刹那か、じゃありませんよ！今までどこにいたんですか！？」

ピッコロの反応に、刹那は思わず声を荒げる

しかしピッコロはひるむ様子もなく

「悟飯達の所へ行きながら話そう、ついて来い」

こう言って刹那を抜き、猛スピードで飛行を再開した

「ピ、ピッコロさん！」

慌てて刹那も後を追う

スピードをやや抑えてくれたのか、彼女のスピードでもすぐに追いついた

ちょうど横並びになったところで、ピッコロは話し始める

「俺はさっきまでカリン塔にいたんだ」

「カリン塔？神様の神殿に下にあるあれですか？」

「そうだ、悟飯達が戦い始めてからすぐ違和感を感じてな、ある物を取りに行っていた」

違和感というのは、対戦相手であった銀河戦士の異質さのことだろう

それに加え、少し前に四つの気が消えたのもピッコロは感じ取っていたという

「……ある物とは？」

「今の内に渡しておいたほうがいいな、受け取れ」

ピッコロはどこからか何かを一粒取り出し、刹那へと軽く投げた

それをパシッと手で掴むと、すぐに開いて確認する

目に入った粒は、直径一、二センチ程の緑色

「これは……豆？」

「そうだ、だがただの豆ではない。仙豆という特別な豆だ」

どういった所が？と尋ねる刹那に、ピッコロは詳しく説明する

「まあ要するに回復薬だ。これを一粒食べるだけであらゆる傷は癒え、体力も全快する」

まあ例外として古い傷跡や病気は治せんがな、とさらに追加で述べた

これには刹那も驚きの表情である

「す、凄いじゃないですか！」

「ああ……だが結局、出来てたのはその一粒だけだった。前の戦いで当時あったのを全て使ってしまったからな」

つまりこれは、一度限りのとっておき

重要性を理解し、刹那は仙豆を返そうとするが

「さっき『渡しておく』と言ったろ、お前が持っておけ」

「ええ！？」

ピッコロに所持を命じられ、刹那は目を丸くした

「簡潔に説明しよう。今から俺達は到着次第、二手に分かれる」

「二手に……ですか？」

「悟飯達もどうやら、二手に分かれて戦っているようだ。悟飯とネギが敵の親玉と、残りのみんなが部下達とな」

気と魔力の察知のみでの推測の域だが、と一応ながら最後に補足

しかしこれにはそれなりの自信はあり、事実この予測は当たっている

「そして部下達と戦っている方……コタロー達の方はかなり危ない、戦力差がかなりある」

そこでだ、と一旦切ってまた話す

「刹那はそっちでコタロー達と共に戦い、もし死にかけの奴がいたらその仙豆で回復しておいてやってくれ」

そろそろトランクスや楓も目を覚ます頃

戦力的にはそれで充分事足りるはずだ

そこまでピッコロの話を聞き、刹那は一つ気づく

「じゃ、じゃあピッコロさんは……」

「ああ、悟飯達の方へ行く。あっちはあっちでそれなりにヤバそうだ」

「なら、なおのことこれは……」

「こっちの敵は一人だ、負傷者が出ても他の奴が引きつけでもすれば、木乃香の所へ逃がすのはそれほど難しくはない」

だがそっちは違う

おそらくアスナ、天津飯、ヤムチャの三人はのちにリタイヤ

そいつらを逃がすのはまだ出来るとしても、次はそうはいかない

予想通り二人が目を覚ましても四対四で、一人として戦線離脱は避けたいところ

だから刹那が持っておくのが賢明

そういう考えがピッコロにはあった

「心配するな、俺もそう簡単には死なんさ」

「……わかりました」

信じてますからね、と一言漏らすと刹那はスピードを上げる

それに合わせるようにピッコロも

二人の前方に、バトルアイランド2が見えてきた

（いくらネギ先生達を逃がせても、肝心のピッコロさんが危ないん

じゃ……）

「このおおっ！」

「し、しまった……」

気を取られすぎたか、腕の力が僅かに緩む

そこを見逃すほどゴクアは甘くなかった

グイグイと押されていき、刃が顔前まで近づく

押し返そうにも、体勢も崩れてしまったので出来そうにない

（なんのっ！）

「なっ！？」

この状況を打破すべく、刹那はここで奇策

逆に剣を引き、即座に下へしゃがみ込んだ

コンマの差で、ゴクアの剣が頭上を通る

「たああっ！」

そして左脚を伸ばし、右回りに弧を描いて回し蹴り

「ぬおっ！？」

綺麗に決まり、ゴクアは転倒

だがこれだけでは終わらない

足払いに使った左脚を、勢いをそのままに身体ごと回転

ゴクアが地面に倒れ込むその前に

「せいやあああっ！」

「ぐふうっ！」

強烈な右の回し蹴りを放った

頬を捉え、横に蹴り飛ばす

「喰らえーーー！」

刹那は身体の向きを正面まで戻し、地面を蹴った

刀に再び気を込める

いや、それだけではない

その刀身からは刹那の気に加え、バチバチと電気が帯電していた

「雷光剣！」

「ぐおおおおおっ！」

斜めに切りにかかったこの攻撃

ゴクアに剣で紙一重に防御される

しかし電撃まではそうはいかない

剣を介して、全身へ伝う電流

ゴクアは唸り声を轟かせる

電撃は数秒すると収まった

重ねていた剣を離し、刹那は少し下がって様子をうかがう

立ってはいるものの、その姿は痛々しかった

新気功砲でボロボロになっていた服は、さっきの電流でさらにボロボロに

青い肌も、それにより黒が入った部分が所々

今もなお、少量の煙が立ち上っていた

「や、やったの……か？」

動きを見せないゴクア

それを見て、思わずこう言葉を漏らす

とんだ勘違いだと気づくのは、その直後だった

「……ずあああああああああああああああっ！」

「！！」

カッと見開かれる両目

響き渡る怒号

その大きさと迫力に、他で戦っていた六人も視線がこちらに向いてしまう

そして一番近くにいた刹那は

（な、何なんだこれは……まだここまで気が上がるのか！？）

ゴクアは、トランクスとの戦いと同じく変身をしていた

初めて見る姿、そこからピリピリと伝わる気

戦慄が走り、本能的に一歩後退した

退いてはいけない

分かってはいるのだ、頭では

だが怒りと憎悪にまみれたこの気は、退魔が専門でもある彼女すらおののかせた

「今のは効いちまったぜ……こりゃこっちも本気出さなくちゃな」

（や……やるしかないのか……）

他の三人は、自分の相手で手一杯

個人で逃げようにも、成功率はかなり低いだろう

仮に成功しても、残った者達を危険に晒すことになってしまう

これでは、何のために来たのかも分からない

（そうだ……やるしかないんだ！）

退路はもう自分にはない

そう言い聞かせ、退いていた足を再び前へ

恐怖心は完全には消えていない

それでも、ここに来て戦うからには使命を全うするのみ

脳裏に浮かぶ、木乃香の悲しそうな表情

頭を左右に振り、すぐかき消した

「死ぬ覚悟はできたか？小娘」

剣を握りなおし、ゴクアは構える

「……来い！私は……私は、お前なんかに決して屈しない！」

「あ！ネギ先生達が来たです！」

「ホンマや！」

一方こちらは地上待機組

木乃香達は今も客席に残り、モニターから仲間達を見守っていた

そこへ、トンネルを抜けたネギと悟飯が登場

真っ先に夕映が発見し、次に木乃香

そのままその他のみんなも見上げた

ネギ達もそれに気づき、ゆっくりと降りてきた

「あ、アスナさん！？」

「天津飯さんにヤムチャさんも！」

二人は次に、彼女達の近くで横たわる三人に驚きの表情

まだ部下達と交戦中と思っていただけに、それは一層強かった

「心配ないで、ちゃんとウチが治療したさかい。今は眠ってるだけや」

空いた客席で横にされて眠るアスナ、天津飯、ヤムチャ

三人はネギ達より少し前に、無事ここへ到着していた

木乃香はアスナのその傷に慌てふためき、すぐさま治療

三分以上経っていたので、通常の治癒魔法

それでも何とか傷は塞がったが、アスナはそのままポテッと気絶

同時進行で夕映も天津飯の体力を回復

安静にしておかないと、と横にさせられていた

ヤムチャは一発喰らって気絶しただけなので何もせず寝かせた

楓（影分身）は片道分のエネルギーしかなかったのか、運び終わるとすぐ消滅したらしい

「と、とにかく治療するからこっち来てや！」

「悟飯さんも早く！」

「わわっ！木乃香さん！」

「どうしたんですか！？そんなに慌てて」

一通り説明すると、木乃香と夕映は二人をグイっと引き寄せる

当然二人はそれに驚き、何事かと尋ねた

「どうしたかじゃないわよ！早くしないと大変なことになるの！」

「ハルナ……さん？」

二人に代わって、ネギ達に答えようとするのはハルナ

よく見ると、周りの仲間達皆が焦りの表情を浮かべている

ただ事ではないのがすぐに理解できた

そして次にハルナが言った言葉で、二人は驚愕の色に顔が染まる

「地下に向かって行っちゃったのよ！くーふぇとクリリンさんが！」

「「ええっ！？」」

第５７話　頑張れ！頼れる仲間達　地上は地上で大騒ぎ（後書き）

クウネル
「えー、コーナーを始める前に読者の皆様へお詫び申し上げます」

エヴァ
「また例を見ない始まり方だな……」

クウネル
「前回このコーナーで、作者がかなり悪ふざけなネタを使ってしまいました」

エヴァ
「そのためだけに私は殴られたんだったな……」

クウネル
「予想以上に反応が悪く、作者もすっかり懲りたとのことです」

エヴァ
「そりゃお気に入り登録が１００件切っちゃったらそうなるわな」

クウネル
「以後このようなことはせず、真面目にコーナーを作っていこうという考えのようです」

エヴァ
「あれ以前のコーナーの中身は真面目だと言えるのか？」

クウネル

「どうも読者の皆様、申し訳ありませんでした」

注・申し訳ありませんでした

エヴァ
「これやったところで、読者が戻る保証はないわけだがな」

クウネル
「ではコーナーに戻りたいと思います」

エヴァ
「やけにしんみりした空気になってしまったな……ここで変なゲストとかやめろよ？」

クウネル
「ご心配なく、今回は普通に明るい方をお呼びしております」

エヴァ
「ほう」

クウネル
「このお二人です、どうぞ！」

アナウンサー
「どうも読者の皆様、お初にお目にかかります」

朝倉
「やっほーー、久しぶりエヴァちゃん！」

クウネル

「実況者コンビ、朝倉和美さんと天下一武道会のアナウンサーさんです」

エヴァ
「これってかなり後半の方で出たリクエストだよな？」

朝倉
「作者が随分気に入ったらしいよ、このリクエスト」

クウネル
「ちゃんと喋るゲストの方がコーナーもスイスイ進みますしね」

朝倉
「じゃあさっそく進めようか、なんか私達の登場より前で文字数使っちゃったみたいだし」

クウネル
「そうですね、では今回の話は……」

エヴァ
「『四対四で白熱』の割には、今回戦闘描写があったのは刹那だけだったな」

朝倉
「……今までの見てて思うんだけどさ、エヴァちゃんってそういうことしか言わないわけ？」

アナウンサー
「そういえば、いつも作者さんに文句言ってばっかりですよね」

エヴァ
「いや、だって事実だろ？」

朝倉
「たまには褒めてあげてもいいんじゃないの？」

エヴァ
「いや、そうしたら事実上自画自賛になるし……」

クウネル
「つまりエヴァンジェリンがやってるのは自虐ネタってことですね」

エヴァ
「確かにそんな気がしてきたな……コホン、まあとりあえず話を戻すか」

朝倉
「私としては、他の三人やピッコロさんの戦いも早く見たいかな」

アナウンサー
「そうですねぇ、天下一武道会実況の私としても是非見届けたいところです」

クウネル
「そういえばこの天下一大武道会、あなたが実況しているわけではないんですよね」

アナウンサー
「はい、そうです」

朝倉
「天下一武道会専門ってことじゃないの？」

エヴァ
「逆にお前はどんな実況や司会でもやるよな」

クウネル
「それと、ついに仙豆が登場ですね」

エヴァ
「刹那がまだその一粒を持っているという解釈でいいんだよな？」

クウネル
「そうみたいですね、アスナさんはあのまま自力で退却したようですし」

アナウンサー
「ヤバい血管とかが切れてなかったので、死ぬことはないと刹那さんが判断したそうです」

エヴァ
「その一粒がいつ使われるかが重要なところだな……」

クウネル
「では次回予告行きますか」

朝倉
「よ！待ってました！」

エヴァ

「いきなりテンションが上がったな……前々から高い方だが」

朝倉
「だってこれ私、前からやりたいってずっと思ってたんだ！」

アナウンサー
「あ、私も」

エヴァ
「クウネル、今回の形式はどっちなんだ？一応本編キャラの朝倉和美がいるが……」

クウネル
「朝倉さんがやる気満々ですし、本家に近いほうの形式で」

エヴァ
「やっぱりそっちか……」

アナウンサー
「では、次回のネギドラ！は……」

朝倉
「やっほー、私朝倉和美。急いで木乃香！夕映っち！早くネギ君達を治さないと、古ちゃん達があいつらに……」

エヴァ
「おい！マズいのはあの二人やピッコロだけじゃない！」

クウネル
「あの人も、かなり限界です……」

エヴァ
「このままでは殺されるぞ！」

朝倉
「ええ！？」

アナウンサー
「次回ネギドラ！第５８話『急げ悟飯！そしてネギ！限界を迎える大親友』」

朝倉
「みんな！二人が来るまで、もう少しだけ頑張って！」

クウネル
「……というわけで次回の更新は」

エヴァ
「こらーーーーーーー！」

朝倉
「何？エヴァちゃん」

エヴァ
「何？じゃない！もうこれは本家そのものだろ！ついに初めの挨拶まで入れちゃったし！」

朝倉
「別にいいじゃん、苦情だってこれまでに一件もないし」

エヴァ
「賛成意見もゼロなんだよ！」

クウネル
「というわけで次回の更新は金曜日です」

エヴァ
「勝手に流すな！」

アナウンサー
「皆様からのご意見ご感想、お待ちしています」

エヴァ
「だーかーらー！」

朝倉
「じゃあみんな、次回のネギドラ！も……」

クウネル&アナウンサー
「お楽しみに！」

エヴァ
「人の話を聞けえええええっ！」

エヴァ
「てゆーか次回予告の仕様変更も、人気下落の原因かもなんだぞ」

朝倉
「まあ確かにそうなんだけどね」

クウネル
「でもあの声優ネタよりはマシですけどね」

注・ご意見、本当にお待ちしています

第５８話　急げ悟飯！そしてネギ！限界を迎える大親友（前書き）

この前計算したんですが、今のペースを守り続ければちゃんと『連載一周年＆百話』は出来るみたいです。ペースを崩さないように頑張りますね、何とか冬休みには週三投稿を一度くらいは……

ではどうぞ！

第５８話　急げ悟飯！そしてネギ！限界を迎える大親友

「どういうことですかハルナさん！？」

「どうしてあの二人が……っ！」

ハルナの言葉に驚いたネギと悟飯

すぐさま彼女へと詰め寄ろうとするが、直後に顔が歪む

ボージャックからのダメージが、今になってさらに痛み始めた

「ほら、傷に障るえ！」

「ひとまず私達の治療を、そうしながらでも事情は聞けるのですから」

「「……はい」」

木乃香と夕映に諭され、二人は客席の一角に腰を下ろす

その両隣に彼女達も座った

ネギの隣に木乃香、夕映の隣に悟飯

「「プラクテ　ビギ・ナル……」」

詠唱を始めると、二人の杖の先端から光が

「「治癒〈クーラ〉！」」

光が飛び、ネギ達の身体を薄く包んだ

彼らの表情が少しだけだが和らぐ

「あ、ありがとうございます……それでハルナさん、さっき言ったのは……」

木乃香に一言こう言うと、ネギは顔を再びハルナの方へ

「う、うん、実はね……」

それが起こったのは少し前

ピッコロと刹那が到着し、地下へ向かってすぐのことだった

「みんなーーーーー！」

クリリンと一緒に古が帰還

走っていたのを、一同の前で止める

「ピ、ピッコロは来たのか？」

モニターを横目で見てすぐに戻し、クリリンが尋ねた

それに対し、答えたのは五月

「はい……さっき刹那さんと一緒に戻ってきて、そのままネギ先生達の援護へ……」

「やっぱりそうか……ピッコロと刹那の気がこっち方向に移動してるのが分かって、俺達も急いで戻ってきたんだ」

「あ、ヤムチャさん！」

「え！？」

すると、モニターを見ていたのどかが突如声を上げた

クリリンは慌てて振り返る

そこには、ゴクアに殴り飛ばされ気絶するヤムチャの姿があった

「マズい、天津飯もかなり限界だ……それにアスナのレベルじゃ、あいつらとまともにやっても勝てっこないぜ！」

それに、別画面に映る悟飯達もかなり劣勢

「おい！ピッコロと刹那は別々に地下へ行ったのか？」

「そ、そうです……それぞれ別のトンネルから」

（やっぱりか！）

夕映の答えに、クリリンはさらに表情を苦めた

（多分ピッコロはアスナ達の所へ刹那を行かせて、自分は悟飯達の下へ向かったんだ！）

そしてあわよくば手負いの二人をここまで逃がし、それの足止めを買って出る

ピッコロがそういう奴であるというのは、長年一緒に戦ってきたクリリンはよく分かっていた

（このままじゃ……ピッコロが危ない！）

一同の方へ向けていた身体を、一転して反対へ

そこから真っすぐ先には、地下へのトンネルが

「……クリリン？」

「古、お前はここで待ってろ。今からピッコロの援護に行ってくる」

「ええ！？ま、待つアルよクリリン！」

今にも飛び立とうとするクリリンの腕を、古は焦り顔で掴んだ

クリリンは顔だけ振り返ると、真剣な表情で古をジッと見つめる

「あいつらがどれだけ強いのか……古なら分かるだろ？」

「だ、だったらなおさらアル。クリリン一人じゃ……」

「遠くから気功波で攻撃する、それだけでも大分違うはずだ」

「でも！」

「ピッコロは大事な仲間なんだ……悟空みたいに見殺しにしちまうのは、もうしたくない」

それにな、とさらに言葉を続けた

そのまま顔をグイっと近付けてくる

思わず古は赤面

「今のお前も俺にとっては、ピッコロと同じ位大切な存在なんだ。危ない目には遭わせたくない」

大切な存在

このフレーズに、古は顔を一層赤らめた

無論クリリンが言ったのは、『師匠兼弟子』と『二週間生活を共にした家族』という意味

しかし、フレーズ自体の破壊力がありすぎた

「分かってくれ、古」

（うっ……）

返す言葉がすぐには浮かばず、古は言いよどむ

（ま、またこれアル……頭がポーっとなって、他にも色々変になって……）

（ん？これって……まさか、ね……）

その時ハルナの頭部に存在する、あるレーダーがわずかに反応

しかしそれは微々たるもの

気のせいかな、とハルナは一瞬解釈した

が、直後にそれは撤回を余儀なくされる

「それじゃあ、行ってくる」

「だ、ダメ！」

「！？」

（なっ！？）

制止の言葉とほぼ同時に、古の身体は動いた

今度こそ飛び立たんとするクリリンを

ガシッと後ろから腰へ腕をまわし、抱きしめるように動きを止める

「古！何度言ったら……」

「……私もアルよ」

「え？」

次に古の口から出たのは、今にも泣きそうなほど震えた声

驚いてクリリンが聞き返すと、古はさらに言葉を続ける

「私も……私もクリリンのこと、大切って思てるアルよ……同じ、くらい……だから……」

腕に入る力が強くなる

「クリリン一人だけなんて絶対ダメアル！思てること一緒なら、私だってクリリンと行く！」

「古……」

ワガママとも取れかねない古の言葉

だが、そうでないことをクリリンはすぐに理解した

本当に古はクリリンのことを大切だと思い、そして心配なのだ

それこそ彼女の言うとおり、クリリン本人と同じくらいに

いや、さらに上なのかもしれない

クリリンはほんの数秒沈黙する

時間がないのは分かっている

だからこそ、ちゃんと決断を下さなくてはいけない

そして、古にかけた言葉は

「……危なくなったらすぐに逃げろよ、俺に構わずだ」

「クリリン……」

「俺のことを思ってくれるのは嬉しい。けど、自分のことだってそれ以上に大切にしろ」

優しく、温かく

「古のことは、俺が守るから」

そして、決意の籠った言葉だった

「……私だって、クリリンの助けになるアル！」

それを聞いた古は、泣き顔からもとのそれへ

いつの間にか腕を解き、クリリンと同じ目線で言葉を交わしていた

「ああ、頼む。けど本当に、無理はするなよ？」

「ウム！」

（う、嘘！？これってやっぱり……）

これにはハルナも、レーダーの反応を気のせいとは到底考えられなかった

「……行くぞ、古！」

「了解アル！」

二人の全身から気があふれる

視線の先は、超大戦の戦場へと続く入口

そしてそこへ向け、超スピードで飛行

周辺で大きく風が起こった

「……ちょっ！くーふぇ！」

呆気にとられていたハルナが我に返り、自らのクラスメイトを慌てて呼びかけるが

「い、行っちゃった……」

既に彼女を始め、一同の視界から二人は消えていた

「それでその後、二人が入ったのとは別のトンネルからネギ君達が……」

「そんな！僕今すぐ止めに……」

ズキイイッ！

「痛っつ……」

ネギは立ち上がろうとするが、またもや痛みが襲いかかる

「ネギ君あかん！骨折れとるんやで」

「ほ、骨！？」

木乃香が座り直させてこう言うと、ネギは顔を青くした

木乃香の治癒魔法がレベルアップしたのは事実

しかし、骨折となるとまだ難しいレベル

ちゃんと繋いで完治させるには、数分を要してしまう

ピッコロ達との合同の修行で同じようなケースが数回あったため、ネギは分かっていた

「そうや、鎖骨と背骨が一本づつ。夕映ー、そっちはどうなん？」

木乃香とほぼ同じタイミングで、ネギも悟飯の方へ顔を向ける

せめて悟飯が先に治れば、彼一人で二人を止めに行くことも可能

そんな期待も込めて振り返ったのだが

「だめです……骨折こそないものの、どうもあちこちにヒビがあるみたいで……私のレベルでは治しようがないです」

悟飯もやはり重傷

レベルの劣る夕映では、完治に向かわせることすら出来ないほど

今は自分に出来る範囲で、内出血等を必死に治療していた

「木乃香さん、夕映さんと代わってください！悟飯君を先に治した方がずっと速いです！」

「う、うんわかった。夕映、交代や」

「はいです！」

席から立ち上がると、急いで二人は席を交換

木乃香は悟飯、夕映はネギの治療を試みる

「ネギ先生、失礼するです」

「は、はい」

ヒビが治せない夕映は、骨折を治すなどもちろん不可能

それでも、自身の魔力を懸命に注ぎ込んで治療にあたる

悟飯を治した後、ネギを治す木乃香の負担を少しでも減らすために

「木乃香さん、悟飯君の治療はどのくらいかかりそうですか？」

身体を極力動かさず、首だけ稼働させて隣を見たネギ

そこには、やはり眉を潜めている木乃香が

「やっぱり数分は掛かってまう……悟飯君は負傷箇所が多くて……」

「そうですか……」

「ウチも出来るだけ頑張って急ぐわ」

「お願いします」

ネギや悟飯と会話を交わしながらも、木乃香は治療の手を休めない

この場にいる一同は皆、ネギ達の全快を今か今かと待ちわびていた

(ピッコロさん、クリリンさん、それに古老師……)

(僕達が向かうまで、どうかご無事で……)

「はあっ、はあっ、はあっ……」

しかし、安否を危惧すべき存在は三人だけではなかった

「へっへっへ、どうしたボーズ?もうお終いか?」

ネギ達が地上で見ているモニター

それは、地下に複数あるカメラを通して映し出されるもの

故に、現状全てを把握出来るわけではない

「う、うっさい!んなわけあるか!」

カメラが近くに一台もないこの場所

そこで四人の戦士が拳を交えていた

しかし、その内の一人が限界を迎えつつある

「まだ充分……戦えるで……」

身体にいくらかの負担をかけてしまう変身

それに加えその状態で、援軍到着まで敵の足止めに奮闘

二対二が始まる時点で、彼が一番スタミナを消耗していたのだ

最初はパートナーの援護や気合いで何とか善戦していたものの、

それももう限界

動きに精細さがなくなり、ビドーの攻撃を次々と喰らい始めている

息も上がり始め、膝は今にもガクンとなりそうなほど震えていた

「そうかそうか、それじゃあもう少し楽しませてくれよな」

指をバキバキと鳴らし、ビドーは不気味な笑みを見せる

ちょうど、ゴクアが少し前にアスナへ向けていたそれと極似していた

「危ない！くそっ！」

「ほっほっほ、あっちへは行かせんぞ」

「喰らえええええええっ！」

拳を振り上げ地面を蹴り、やや離れていた距離を一気に詰める

援護しようにも、トランクスはブージンの魔術に阻まれて自由に動けない

鋭く尖らせた岩の破片が浮遊し、魔空包囲弾のように辺りを囲んでいた

「ね、ネギ達かてあいつらの親玉と戦ってるんや……」

鋭く睨みつけ、全身から残りの気を絞り出す

その気をこの場からの逃走に使おうなどとは、微塵として思っていない

「俺だってやってやるんや！舐めるなあああああ！」

犬上小太郎は咆哮し、身体に鞭を打って突っ込んでいった

「コタロー君！」

「うおおおおおおおおおおおっ！」

第５８話　急げ悟飯！そしてネギ！限界を迎える大親友（後書き）

クウネル
「はい、あとがきコーナーのお時間です」

エヴァ
「どうも作者はすっかり懲りたようだな」

クウネル
「そうですね、三話連続で総合評価を落とされるというまさかの事態だったわけですし」

エヴァ
「ようやく今回からコーナーが元通りというわけか……安心したよ」

注・どうも調子こいててすいませんでした

クウネル
「では、今回のゲストをお呼びしましょう」

エヴァ
「次回予告の縛りも無くなったわけだしな、今回は誰なんだ？」

クウネル
「この方々です、どうぞ！」

千雨
「どうも」

界王
「読者のみんなとは久しぶりじゃのう。お久しブリーフ、なんつって……ププッ、ワシって天才」

クウネル
「北の界王さんと、ちうさんこと長谷川千雨さんです」

千雨
「ちうって言うな！ちうって！」

エヴァ
「てゆーかこのゴキブリオヤジ殴ってもいいか？」

界王
「何じゃ何じゃ、シャレのわからん奴じゃのう。下手なシャレはやめなシャレ……ププッ、ワシってやっぱり天才」

エヴァ
「殴る！」

クウネル
「まあまあ、エヴァンジェリン落ち着いて」

エヴァ
「うるさい！あんな奴のギャグコーナーにされてたまるか！」

千雨
「コーナーの進行に差し支えちまうぞ、いつまでも怒ってると」

エヴァ

「あいつのギャグだって充分差し支えるだろうが！」

界王
「わかったわかった、やめればいいんじゃろ？」

エヴァ
「わかればいいんだよ、わかれば」

界王
「でもコーナーの最後にもう一個だけ言わせてくれんか？」

エヴァ
「まだ言うか！」

クウネル
「別にいいんじゃないですか？一個くらい」

千雨
「そうそう、ちょっとは大人になれよ、６００歳以上のくせして」

エヴァ
「うっ……い、一個だけ言ったらさっさと帰れよ」

界王
「ほいほい」

クウネル
「ではコーナーを進めましょう、今回の話ですが……」

エヴァ

「サブタイとそこまで内容が合ってなかったな」

千雨
「コタローのシーンが少なかったってか？」

エヴァ
「そうだ」

クウネル
「まあ原因はハッキリしてますがね」

界王
「クリリン達のシーンか？」

クウネル
「思ってた以上に内容が膨らんじゃったらしいです」

エヴァ
「てゆーか、アレはありなのか？」

千雨
「まあ前々から、それらしき予兆があるにはあったが……」

界王
「ほんとワシもビックリじゃよ」

クウネル
「作者は連載初期の段階から考えていたらしいですよ」

エヴァ

「……マジでか？」

クウネル
「はい」

注・マジです

千雨
「ここまでぶっちゃけちゃっていいのか？読者から文句来ないといいけど」

クウネル
「最近は文句の類は一件も来てませんよ」

エヴァ
「……見捨てられたわけじゃないよな？」

クウネル
「……」

千雨
「おい、そこで黙るなよ。何か私まで不安になってきた」

クウネル
「……まあそれはさておき、次回予告行きますか」

千雨
（流すのかよ！）

エヴァ

「あれはもはやあいつの得意技だ、諦めろ」

千雨
「人の心を読むな！」

界王
「では、次回のネギドラ！は……」

クウネル
「コタロー君が現在、本編であったようにスタミナ切れで限界になってきました」

エヴァ
「それが次々と、他の三人へも影響していくぞ」

クウネル
「そんな時、突如一同の前へあの人が登場です」

千雨
「次回の更新予定は金曜日、私の登場予定も一応あるらしいぞ」

エヴァ
「意見、感想、リク、質問、どれでも大歓迎だ」

クウネル
「この作者は投稿はパソコンですが、感想の返信は基本携帯を使っています」

界王
「じゃからいつでも出来るらしいし、気軽に送ってよいぞ」

エヴァ
「というわけで読者の諸君、次回のネギドラ！も……」

クウネル＆千雨＆界王
「お楽しみに！」

エヴァ
「今回は普通に次回予告がやれたな」

クウネル
「これでも反応が悪かったらどうするつもりでしょうね、作者」

千雨
「このコーナーが迷走するかもだな」

界王
「迷走するの？めえ（ええ）そうですよ……プププッ！ワシって神かも……あ、一応それに近いか」

エヴァ

「最後の最後でこれかよ……」

第５９話　茶々丸いざ発進　それを抜き去る黄金の戦士（前書き）

朝にしようと思ったのですが、ギリギリあとがきコーナーが間に合わず……というわけで学校のパソコンで昼投稿です。
あとどうでもいい話かもですが、最近タッグバーサス買っちゃいました。ＰＳＰのクオリティは流石ですね、執筆ペースが微妙になった時に気分転換でやってます。
ではどうぞ！

第５９話　茶々丸いざ発進　それを抜き去る黄金の戦士

「……がはっ！」

互いの頬に繰り出された拳

それぞれ見事命中

だが、それを喰らって立っていられたのは

「……へっ、そんなパンチ一発でくたばってたまるかよ」

ビドーだけであった

コタローは耐え切れずにまともにブッ飛ばされ、仰向けで倒れ込む

「く、くそったれ……」

自らの意志とは別に、獣化が解けていく

白い煙のようなものをあげ、元の黒髪少年の姿に

体力が既に皆無であるコタローは、それに抗うことは叶わなかった

この姿で戦おうにも、やはり身体が動かない

「コタローさん！」

それに気がついたのか、刹那が振り向いて叫んだ

そのまま急いで駆け寄ろうとする

（仙豆で早く回復を……）

「逃げようったってそうはいかねえぞ！」

「！！」

しかし、それを変身したゴクアが阻んだ

瞬時に移動し、刹那とコタローとの間へ

「そらあああっ！」

「くっ！」

そして、首元目掛けて突きを放つ

刹那は身をよじらせ回避したが、これだけでゴクアの攻撃は終わらない

「はあああっ！」

刃を横向きにし、手元に戻すことなく横へ払った

その先には当然、突きを避けたしたばかりの刹那の首

キィィィィィィン！

（う、動きが桁違い……付いていくのがやっととは……）

何とか夕凪を入り込ませ、刹那は攻撃を防御

けれども、表情は焦りが混じったそれ

事実、変身されてからここに至るまで、刹那はゴクアに押され続けていた

アスナ程ではないにしろ、二、三ヶ所に刀傷

最初の善戦とはうって変わって劣勢

こうして今はつばぜり合いをしているが、それも話にならない

パワーが格段に上がったゴクアが相手では到底敵わず

「ずあああああっ！」

「うわあああっ！」

いとも簡単に押しのけられる

気を剣に込めて一気に放出

刹那は跳ね飛ばされ、コタローのように仰向けでダウン

「死ねーーーーー！」

そこへゴクアがトドメとばかりに、刹那の胸を突き刺しにかかった

「ま、まだだああっ！」

だが、刹那は横へ転がってギリギリで回避

それは本当にギリギリだったようで、代わりに右肩を抉られる

剣は地面に突き立てられ、ゴクアはすぐに引き抜く

そのほんの一秒弱を使い、刹那は起き上がって距離をとった

まだ体力はコタローより大分残っており、充分戦うことは可能

しかし大きく開いた両者の力量に、こちらもある意味で限界を迎えつつありそうである

（地上がダメなら、空だ！）

「面白い、その誘い乗ってやるぜ！」

そこで刹那は翼を広げ、一気に上空へ飛翔

空中戦ならまだ分からない

そんな僅かな望みに期待をかけた

ゴクアもそれに便乗し、同じく飛翔し後を追う

（まだ、まだ戦えるんだ！こんなところで諦められるか！）

歯をギリッと鳴らし、刹那は静止してゴクアと向かい合った

「ミスターサタン！お願いです！出てきてください！」

「や、やかましい！今は腹が痛くてトイレ中なんだ！せかすんじゃない！」

場所は再び地上に戻り、会場の一角にあるトイレの前

そこで大会のプロデューサーが大声をあげ、ドンドンと懸命にドアを叩き続けていた

中にいるのは、さっきも怒鳴り声があったミスターサタン

会場が大騒ぎになった後、サタンはすぐさまここへ駆け込んでいた

無論、本当に腹が痛かったわけじゃない

ああなった以上、チャンピオンである自分が向かわなくてはならないのは必然

しかしながら、自分じゃ絶対に勝てない化け物であることは明白故にこうして、事が終わるまでこの中で粘ると決めていた

（ここでこうしていれば、あいつらがやってくれる！あのセルだって倒したんだから！）

「ミスターサタン！」

そんな事とは露知らず、プロデューサーは叫んでドアを叩く

そしてこの一連の出来事を、遠くから見ていた二人の少女

「ど、どうしよう千雨……」

「どうしようって言われても……このままみんなが敵を倒すのを待つしかないんじゃないですか？」

娘ビーデルと、そのメイド千雨

サタンが部屋を退出したので気になって後を追ったところ、結果はご覧の通り

今に至るまで、廊下の角に隠れてずっと様子をうかがっていた

「多分サタン様も同じことを考えて、ああしてるんだと思いますよ？」

茶々丸の大会出場の経緯などから、既に大方の事情は把握してい

る千雨

それもビーデルは承知済み

「で、でも……もしあのままあの人達が負けちゃったら……」

ビーデルの表情は重い

このまま最悪の事態になれば、無理矢理にでもサタンは引きずり出されるだろう

そして敵うはずもなく、あえなく死亡

絶対にそんなことはさせたくなかった

「……私達じゃどうしようもないですよ」

「そんな！」

千雨は悔しそうに言葉を漏らす

ビーデルは食ってかかるが、これは紛れもない事実

現状のままでは、勝率は低いと言わざるを得ない

何かイレギュラーな事態

そう、例えば突然の助っ人等が来ない限りは

「……私が応援に向かいましょう、私なりにも何か出来ることがあ

るはずです」

「「え！？」」

すると背後から声

二人は同じタイミングで振り返る

そこにいたのは二人もよく知る

「「茶々丸！」」

絡繰茶々丸その人である

「到着が遅くなり、申し訳ありませんでした」

葉加瀬に修理を受け、バトルアイランドに残されていた茶々丸

その後修理が終わると、取り残されてしまったことを把握

葉加瀬を抱えて飛行し、ここバトルアイランド2にようやくたどり着いたのだ

「ってゆーかおい！今何つった！？」

いきなりの登場に驚いた二人だったが、すぐに冷静さを取り戻す

千雨が慌てて問いかけた

「私が及ばずながら皆様の応援に向かいます、しばしお待ちを」

淡々とそう返すと、茶々丸は前方へ歩き始める

そこにはプロディューサーが

「サタン様がわざわざ行かれる必要はありません」

「だ、誰だね君は！って、確か予選にいた……」

最初話しかけられ、驚いた様子だったプロデューサー

しかし茶々丸の容姿を見て、すぐ誰なのかを理解する

「サタン様の弟子の、チャチャと申します」

この名は、大会用に用意した偽名（ビーデル命名）

また、サタンの弟子というのも方便

所在も知れない無名選手を名乗るよりは、こうした肩書きが有効だと判断した

「ミ、ミスターサタンの弟子だって！？」

「はい。ですから私が行けば充分、サタン様が行かずとも事は片付きます」

「だ、だが君は予選で敗退して……」

それでもプロデューサーは難色を示す

茶々丸をいとも容易く倒したネギが、今ああして敗れた

彼女が行ったとしても大丈夫なのだろうか？

そんな疑念が湧いて出てきた

「本気になった私の実力はあんなものではありません。ただ、あの時は少々体調が悪かっただけでして……」

（おいおい、そんなこと言っても信じるわけないだろ……）

二人の会話をこっそり聞き、千雨が心の中でツッコむ

こんなの小学生でも信じないだろと悪態を突いたが

「……そ、そうだったのか！なら安心だ！」

（はあああああっ！？）

プロデューサーは即納得

よくよく考えれば、セルを倒したのがサタンだと信じられているくらいだ

そのサタンもああいう風なことをよく言っていたわけで

（なんつーバカ正直なんだよこの世界の奴らは！）

千雨はこの別次元の地球を心底異質に感じた

すると、ペコリと一度頭を下げた茶々丸が再びこちらへ
二人の間を通り抜ける
「では、行ってまいります」
「ま、待って茶々丸！」
すれ違いに際にこう言った茶々丸へ、ビーデルが呼び止めた
「……大丈夫なのよね？」
「……はい、大丈夫です」
恐る恐る尋ねるビーデル
茶々丸は振り返ると、笑みとともに言葉を返した
「で、でもよ茶々ま……」
「では」
前方に障害物が無いのを確認し、背中からジェットを噴射
千雨の言葉を遮り、茶々丸は勢いよくこの場から飛び去った
「おいボケロボ！」
「茶々丸！」

（千雨さん、ビーデル様……確かに大丈夫なんて保証は出来ません）

実力差は歴然、戦力になることは難しい

危険と判断して退避しようとしても、それすら失敗に終わる可能性もある

（ですが私は……このまま皆様が傷つくのを黙って見ているほど、情けない思考プログラムは持ち合わせていません）

自身のマスター、エヴァンジェリンが同じような事態に陥っていたらどうするか

言うに及ばず、一直線に助けへ向かうだろう

たとえその対象がネギ達に移ろうとも、今の茶々丸にとっては問題にならない

エヴァが第一優先には変わらないが、今はその彼女がいない

二人からの制止を振り切り、今はトンネル内を飛行中である

（このルートからだと、確か一番近いのは刹那さん達の場所……）

ネギが木乃香達の治療を受けていたのは目視して確認済み

その時彼らも制止の言葉をかけたようだったが、止まる気などさらさらなかった

（残り約十五秒でバトルゾーンに到着……いよいよですね）

刹那達の戦況の悪さも概ね把握

少しでも力になれればと願いつつ、前方を真っすぐ見据える

そんな時だった

（ん？後方から高速で何かが接近、追い抜かれてしま……）

「どけえっ！邪魔だアンテナ女！」

（！？）

高速で迫ってくる何か

空気を切り裂くようにして進んでくる音に気付き、茶々丸は後ろを見た

そこからコンマ数秒で、その何かが一気に通り過ぎて行く

茶々丸は速度こそ落とさぬものの、それに心底驚いていた

「い、今のは一体……ネギ先生達よりもずっと速い……」

茶々丸の持つ高性能のアイカメラですら、捉えられたのはほんの僅か

理解できたのは、その何かが自分を抜き去ったという事実

そして、その何かとは『黄金色の光を纏った人間』ということだけであった

「くそっ！何なんだこれは!?」

「お仲間さんの所には行かせないぜぇ」

「ふっふっふ……」

コタロー、刹那に連鎖し、トランクスも大ピンチとなっていた

変身したゴクアに対し、刹那は酷く劣勢であった

見るに見かねて、援護へ行こうとしたのだ

コタローが離脱し、ビドー&ブージンを一度に相手にしていたトランクス

何とか抜き去って猛スピードで向かったが、そこで二人に捕らえられてしまう

二人の両手から放たれ、トランクスの身体に巻き付く糸のような何か

引きちぎろうとするのだが、そうなりそうな気配はまったくない

しかも、そこから力を吸い取られていくかのようであった

「ど、どうなっているんだ……」

「俺達の魔術で作り出した結界だ……もがけばもがくほど、お前のパワーは減っていく」

だがそうしなくても、自分のパワーは奪われ続けていく

必死に脱出を試みるが、やはり出来そうにない

（ま、マズい……）

全身を包む黄金色の気がどんどん減少

ついには、髪の色も元のそれへと戻ってきていた

「へっへっへ、もうそろそろかな……」

ビドーが不気味な笑みを見せる

この時彼は、微塵として思っていなかっただろう

自分の所へ突然に

ギュウウウウンッ！

「なっ！？ぐわあああああああっ！」

超巨大な気弾が飛んでくるなどとは

「ビドー！」

ビドーがそれに飲み込まれ、ブージンは思わず叫ぶ

そんな彼へも、思いもよらぬ一撃が

「だあああああっ！」

「ぐべらっ！」

気弾を撃った主であろう男が、突如接近

横から渾身のストレートパンチ

右頬にクリーンヒットし、ブージンは奇声をあげてブッ飛ばされた

それによって、トランクスを苦しめた結界は解除

「情けないぞトランクス！それでも誇り高きサイヤ人の一員か！」

「え！？と……と……」

男は憤慨した様子で、トランクスへ向けて大声で怒鳴った

そのトランクスは、目の前の男にただ驚愕するのみ

現状をひっくり返してくれるようなイレギュラーな事態

突然の予期せぬ助っ人が、いまここへと現れた

第５９話　茶々丸いざ発進　それを抜き去る黄金の戦士（後書き）

クウネル
「どうも皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「今回のゲストはどうなっているのだ？」

クウネル
「はい、もう早速ですがお呼びしちゃいましょう……どうぞ！」

桃白白
「はっはっは！兄者には遅れを取ったが、ついに私も出演出来たぞ！」

真名
「やあ読者の諸君、プロローグ以来になるかな」

クウネル
「桃白白さん&龍宮真名さんの殺し屋コンビです！」

エヴァ
「両方とも本編出演キャラだったな、今は出番全くないけど」

クウネル
「でも龍宮さんの方は、近々出番があると作者がコメントしてますよね」

真名

「そういうことらしい、まあ期待して待っててくれ」

エヴァ
「その近々がいつになるかってのがあるがな」

真名
「少なくとも、十二月に入るまでには出れるみたいらしい」

エヴァ
「話数換算だと十二話前後以内か……この大会編いつまで続くんだろうな」

桃白白
「まあそれは、実際に書き進めてみないと分からないんじゃないか？」

クウネル
「確かに、プロットにはなかった内容を急遽投入するというのを何回かやってますしね」

エヴァ
「でも一応、お前の本編出演の大まかな時期の目処は立ってるんだな」

真名
「まあな」

クウネル
「ではコーナーを進めましょう、今回の話なんですが……」

エヴァ
「ついにあの男が登場か……そういう点はちゃんと原作準拠なんだな」

クウネル
「登場のシチュエーションはちょっと違いますけどね」

真名
「映画を観てない人は、何のことか分からないんじゃないか？」

桃白白
「いや、でもセリフとかで大体誰かくらいは予測できるだろ」

クウネル
「『乱暴口調』で『黄金色の気』ですからね」

エヴァ
「さて、そろそろ次回予告いくか」

真名
「おや？ずいぶんペースが速くないか？」

エヴァ
「書く内容が特にないんだよ」

クウネル
「確かにそうですけど、何か少し物足りませんね……」

桃白白
「あ、そうそう。作者のやつ、この前アニメのサブタイを見て少し

驚いたらしいぞ」

エヴァ
「急に話題をねじ込むなよ……」

クウネル
「アニメというと、『ドラゴンボール改』のことですよね？それのサブタイといいますと……あ」

真名
「天津飯のアレか」

エヴァ
「ん？何だ？」

クウネル
「作者は地方局なので最近知ったらしいですが、『改』のサブタイがこちらのと少し似ていたんです」

エヴァ
「というと？」

クウネル
「まずこちらが、この小説第５３話のサブタイです」

命を賭けた大作戦　天津飯決死の新気功砲

エヴァ
「だな」

桃白白
「それでもって、これが『改』の第７６話のサブタイだ」

天津飯、決死の新気功砲！　戦友（とも）を救え、孫悟空

エヴァ
「……え、マジかこれ？」

真名
「因みに、この小説の第５３話は投稿されたのが九月二十四日。対する『改』の第７６話は、次回予告すら十月三日だ」

エヴァ
「少し似たっていうか……ワンフレーズがまんますぎだろ……」

クウネル
「でも真似したわけじゃないんですよね……こちらの小説の投稿は、それの一週間以上前にされたわけですし」

エヴァ
「後から変更したわけじゃないんだろ？」

桃白白
「そうだ、というかむしろ『似ちゃったから変えようかな』とも考えたことがあったらしい」

注・こんなことってあるんですね

エヴァ
「多分もう、二度と起こらんがな」

クウネル
「では今度こそ、次回予告いきますか」

真名
「さて、次回のネギドラ！は……」

クウネル
「あの人が参戦、またまた戦局は大きく動きます」

エヴァ
「遅れて茶々丸も到着だ。……というかあいつが出てきた今、茶々丸は出ていく意味があるのか？」

真名
「まあそれは、次回にならないと分からないんじゃないか？」

エヴァ
「そうだな……」

クウネル
「そしてついにピッコロさんの所へあの二人が……果たしてどうなるのでしょう？」

エヴァ
「次回の投稿予定も、例によって火曜日だ」

桃白白
「では、次回のネギドラ！も……」

エヴァ&クウネル&真名
「お楽しみに！」

クウネル
「ところで小耳に挟んだんですが、桃白白さんの再登場の予定があるってホントですか？」

桃白白
「らしいぞ、あの女（龍宮）より随分後になるらしいが」

エヴァ
「えええっ！？」

第６０話　俺は王子だ舐めるなよ！復活のエリート戦士（前書き）

どうもカゲシンです、前回の終わりからそのまま繋がってこの話は始まります。前回の描写やタイトルで分かる通り、悟空以上に忘れ去られていた彼です。セリフをそれらしくするのにかなり苦労しました。

ではどうぞ！

第６０話　俺は王子だ舐めるなよ！復活のエリート戦士

「父さん！」

間違いない

最初半信半疑だったトランクスも、今は確信へと変わっていた

目の前にいるのは、自らの父

一年前、自分達と共に人造人間と戦った父

だがライバルの死によって、すっかり変わり果てていたはずの父

今は無きサイヤ人の惑星の王子、ベジータだった

戦闘服を身に纏い、超サイヤ人へと変身している

その姿は、一年前のそれと何ら違いはなかった

「何をボサッとしてやがる！さっさとあの雑魚どもを蹴散らすぞ！」

「は、はい！」

本当に久しぶりに聞いた、猛々しいその声

トランクスは素早く頷いた

(悟空さんが死んでから、全く戦う意思を見せなかった父さんが……)

それと同時に、二方向から気が高まるのを感じる

「ふざけやがって!てめぇ何様のつもりだ!」

「返事によっては殺すぞ」

ベジータから手痛い一撃を喰らったビドー&ブージン

元のように横へ並び、怒りによって気が上がっている

当然ダメージはあり、やや呼吸の荒さと身体への傷があるのが分かった

(僕や悟飯さん、それにみんなのピンチに駆けつけてくれた……)

「ほう、死んではないと思っていたが……思ったよりタフみたいだな」

「ざけんな!俺達は誇り高き銀河戦士だぞ!」

ベジータは余裕ぶった顔で、やや下に位置する二人を見下す

ビドーは激昂するが、本人は態度を改めるつもりは毛頭なかった

「それがどうした?そんなこと俺様には関係ないんだがな」

「だったら……これでも喰らいやがれ！」

ビドーは声を上げると共に、両手を前へ突き出す

同時にブージンも

その構えを見て、トランクスはすぐさまベジータへ叫ぶ

「父さん気をつけて！あの手から出てくる糸のようなものは……」

「余計な心配などいらん！」

だがベジータは一蹴

手へ即座に気を集め、前方へと放出

結界の元となる糸は、それに飲み込まれた

威力は即席で撃ったもののため、たいして高くはない

だが、目晦ましには充分だった

「くっ！」

目の前で爆発した気功波は、ビドー達の視界を遮る

それは一秒にも満たない、言うなれば刹那の瞬間

しかしその間に、ベジータは拳を振り上げ向かってきた

「だあああああっ！」

「ぐぼおおおっ！」

反応出来ず、その拳はブージンの腹を捉えることに成功

隣にいたビドーがそのことに気付いたのは

「ふんっっ！」

「ぐわあああああっ！」

ハンマー打ちでブージンが叩き落とされた後だった

直後に、チュドーンという音が耳へと入る

「次は貴様だ、木偶の坊」

ベジータは身体を横に向け、ビドーを見てこう一言

（全く変わっちゃいない……一年前のあの時の……俺のあこがれの父さんだ！）

「俺達を……舐めるなあああああああっ！」

ついにビドーはキレた

両耳、胸元のアクセサリーが輝き、本日二回目となる変身

楓を瞬殺した時と同じく、緑の肌と紅蓮の髪になったビドーがそ

こにはいた

「変身してパワーを上げてきたか……」

「ぬおおおおおおおおっ！」

やや関心したベジータへ、容赦なくビドーは拳を振るう

そのストレートは真っすぐ鳩尾へ

「危ない！父さん！」

トランクスも目を見張るほどのスピード

慌てて声をあげるが、ベジータは焦る様子一つなく

「だが俺には……効かんぞ！」

両手を重ね、正面から受け止めた

しかし、ビドーもこれでは終わらない

「ふんがあああああああっ！」

全身の気のほとんどを腕一本に集め、グイグイとベジータを下がらせていく

パワーの上昇は、ベジータの予想を思いのほか上回っていたようである

「なるほどな、確かにただの雑魚ってわけじゃなさそうだ……」

それでもベジータは、この余裕ぶった態度を変えなかった

それもそのはず

「だったら俺も……」

ベジータの今の状態は、普通の『超サイヤ人』

「ちょっとは本気を……」

一年前、ベジータもまた悟飯達とは違った意味で

「見せてやるか！」

超サイヤ人の壁を超えていた

「なっ！？」

ベジータの気が一層高まり、全身から溢れ出す

それに伴い全身の筋肉も、スピードに影響が出ない範囲でグッと膨らんだ

「だあああああっ！」

格段に上がったパワーでビドーを押し返す

それには変身したビドーも敵わず、のけぞってしまった

「うおおっ！？」

「俺は、超ベジータだあああああっ！」

そしてそのまま、右ストレートが顔面へ炸裂

左頬にめり込み、ギューンと地面に水平で一直線に飛んでいく

すぐに、近くにあった建物へと大激突した

「ぬぐふぉっ！」

「ふん、他愛もな……」

「バカめ！隙だらけだ！」

あっけなく倒してしまったビドーを、鼻にかけて笑うベジータ

そこへ、真下から突如ブージンが顔を出した

先ほどの攻撃で少々参っているようだが、結界を発動させるのには何も支障はない

両手に力を込め、バッとベジータへ向けて突き出そうとする

が

「隙だらけはどっちかな？」

「し、しまっ……」

トランクスはそれを許さない

ある程度体力が戻ったのか、再び超サイヤ人に変身

ベジータしか視界になかったブージンを、横から勢いよく蹴り飛ばす

「ぐがああっ！」

吹っ飛ぶブージンだが、威力はベジータのそれよりは大分弱い

地面に手を着き、体勢をすぐに立て直した

「おのれ……どこまで私達の邪魔を……」

「お前達なんかに……」

気がさらに溢れ、トランクスは固く拳を握る

「お前達なんかに……地球の未来を壊されてたまるか！」

「……計算以上としか言いようがありませんね」

気づけば、そこは凄まじい戦場と化していた

遅れて到着した茶々丸は、ただその光景に愕然とする

こうして既に何十秒と経っただろうか

自分を颯爽と抜き去ったベジータは、まだ体力が大きく残るビドーと激しい接近戦

トランクスもその近くでブージンと

楓と刹那はそれぞれ、彼らとはやや離れた場所で空中戦

どの戦いも皆、茶々丸が干渉出来るような代物ではなかった

それこそ、計算結果から桁違いにかけ離れてだ

下手に突っ込んでしまえば、仲間達の大きな足枷となりかねない

私には何が出来る……と空中静止して考えを巡らすのみ

するとベジータ達からやや離れた場所で、うつ伏せに倒れている一人の人物が目に入った

いや、よく見れば這っている

「あれはもしや……やはりコタローさんです」

茶々丸はその人物を一点に捉え、記憶ドライブから同一人物を洗い出す

コタローだと判明し、すぐさまそこへ向けて移動した

「コタローさん、大丈夫ですか？」

「ちゃ……茶々丸姉ちゃん？」

横へ降り立つと茶々丸は膝を折り、姿勢を低くしてコタローに話しかける

コタローは動きを止めると顔を横に向け、虚ろな目で茶々丸を見た

「かなり疲弊しているとお見受けしますが……」

「平気や……それより俺も、はよ戦いに戻らな……」

顔を戻して身体を動かし、ゆっくりとトランクス達の方へとまた進み始める

だがそれを、茶々丸が手で肩を押して制した

「いけません、今のコタローさんが満足に戦えるとは到底思えません」

「離してや茶々丸姉ちゃん、ネギかて一生懸命戦ってるんや……俺やって……」

茶々丸の手を払おうとするが、それが出来るほどの力は既にない

「ネギ先生は現在悟飯さんと共に戦線を離脱、木乃香さんの所で治療を受けています」

「なん……やて？」

すると彼女が放った言葉に、その微々たる動きが止まった

「重傷だったお二人を、ピッコロさんがやって来て逃がしてくださったようです」

「ピッコロ……さんが……」

「お二人はピッコロさんを信じ、地上へと戻ってきました」

「……」

コタローは沈黙

「コタローさんも、トランクスさんやあの方を信じてあげてください」

「……」

「今のあなたが戦いに戻ることは、決して彼らは望んでいません」

無論、刹那さんや楓さんも

「ですから、ここは一旦地上に戻って回復を……」

ここまで言葉を続けると、コタローは閉じていた口を開いた

「……そうやな、今のままじゃアカンわ」

彼もまたネギ達と同じく、仲間を信じようと決断

前に進もうとしてかかっていた力が、全身から抜ける

茶々丸が肩から手を離すと、再び顔を向けた

「けど茶々丸姉ちゃん……実は俺、もう飛べる力すらロクにないんや」

「……地上までお運びします」

初めから分かってたかのように、茶々丸は素早くコタローを抱え上げる

事実、コタローが這って進んでいた時点でそれは明らか

ジェットで浮上すると、そのまま元来た道を戻り始めた

（結局、私に出来ることはこれくらいだけだったようですね……）

こんなことを思う茶々丸の腕の中で、コタローはゆっくりと首を傾ける

そして、戦いのさなかであるトランクス達へ視線を移した

（スマンみんな……でも、すぐまた戻ってくるからな！）

激しい疲弊で朦朧としながらも、このことは力強く心から誓ったのだった

「く、くそったれ……」

バタリと地に伏せるピッコロ

いや、正確にはピッコロの影分身

地に伏した直後、そのピッコロはボンと音を立てて消滅

残っているピッコロはただ一人

「どうした？もうそいつらは出さないのか？」

腕を組み、ただ一人残るピッコロを笑いながら見下ろすボージャック

数発打撃の跡が見受けられるが、大したダメージではなさそう

一方彼以上に傷だらけのピッコロは、悔しそうに表情を歪めていた

（マズい、影分身を出せる程の気がもう無い……）

何とか出せないことはないのだが、出したとしても密度がかなり低くなる

奴の攻撃にはロクに耐えきれず、一撃ですぐ消滅

気の無駄遣いになることは目に見えていた

（やはり一人で足止めは無理があったか……くそっ！）

だがこうでもしなければ、悟飯達を逃がすことは出来なかったのも事実

ピッコロはボージャックをキッと睨み、まだ残っている戦意を示す

（悟飯、ネギ……まだなのか……）

「今度は出さずに一人でか、もう限界が近いようだな」

ようやく組んでいた腕を解くと、ボージャックは気を滾らせた

「そろそろ終わりにしてやる……覚悟しろ！」

（……やってやる！一分一秒、俺に出来る限り精一杯の戦いを！）

ピッコロも、残り少ない気で全身を覆う

両者が再び、動き出す時は近い

「……そろそろだぞ、古」

「……ウム」

そしてまた、ここにも動こうとする者が

「もう一度言っておく、絶対に無理はするな。いいな？」

「分かってるアルよ、クリリン」

ついさっき到着し、やや離れた場所で瓦礫に隠れるクリリンと古

二人は気配を消し、そこでジッと待機

奇襲をかける好機を、今か今かと窺っていた

それがついに、もうじき訪れる

「奴がピッコロへ気功波を撃とうとする瞬間、そこで一気に仕掛けるぞ」

「移動中にした打ち合わせ通りに……アルな？」

ああ、とクリリンは小声で頷く

これがピッコロに出来る、自分達なりの援護射撃

絶対に成功させてやろう

言葉に出さずとも、流石は二週間を共にした師弟

両者の持つ気持ちは、全く同じだった

第６０話　俺は王子だ舐めるなよ！復活のエリート戦士（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「この話で本編が６０話突破だな」

クウネル
「ええ。週二投稿がしっかり続いてることに、作者自身もかなりビックリだそうです」

エヴァ
「ではクウネル、今回のゲストはどうなってるんだ？」

クウネル
「はい、今回のゲストはこの方々です」

餃子
「……よろしく」

ココネ
「……そういえば美空は、もうとっくに出てた」

クウネル
「あまり喋らないコンビの、餃子さん＆ココネさんです」

エヴァ
「ついに出たな、無口コンビ第二弾」

クウネル
「補助的に誰か出そうにも、美空さんはもう出しちゃいましたもんね」

エヴァ
「だったな、あの青いハリケーンと一緒に」

クウネル
「というわけで、今回は餃子さんの方の相方をお呼びしました」

天津飯
「よう餃子、こうやって会話するのも久しぶりだな」

餃子
「天さん！」

エヴァ
「天津飯か……まあ妥当なところだな」

クウネル
「ていうか本当に久しぶりですよね、お二人の会話シーンって」

エヴァ
「大会編の初めに一回あってから、それ以降はサッパリだもんな」

ココネ
「天津飯さん……神楽坂さんとばっかり」

天津飯

「今回餃子は選手として出てなかったからな……逆にまき絵と一緒にいた方が多かったか？」

餃子
「うん」

エヴァ
「すっかりあのバカピンクのお気に入り状態だからな」

クウネル
「一応作者の中では、『ネギ＞カリン＞餃子』の図式が出来上がっているそうです」

エヴァ
「……そういえば前々から思ってたんだが」

クウネル
「何ですか？」

エヴァ
「委員長も含めてなんだが、孫悟飯はあいつらのストライクゾーンには入らんのか？描写が皆無だぞ」

餃子
「そういえば確かに……」

クウネル
「ああ……それについては既に、お二人からお答えをいただいていますよ」

エヴァ
「そんなのいつ訊いた！？」

クウネル
「以前お二人がそれぞれゲスト出演されたときにこっそりと」

天津飯
「なんでもありなんだな、このコーナー……」

ココネ
「……突っ込んだら多分負け」

クウネル
「まき絵さん曰く、『え、悟飯君？私まだあの子と話したこと無いんだよね、ちゃんと会ってお話ししてみないとよく分かんないかな』だとか」

エヴァ
「そういえばあの二人は会話ゼロだったな……委員長は？」

クウネル
「はい、あやかさん曰く『確かに悟飯さんも可愛らしいですけど、やっぱりネギ先生が一番ですわ！それに悟飯さんにそんな態度を見せたら私、ネギ先生に対して浮気どころじゃ済みませんもの』だそうです」

エヴァ
「浮気っておい……」

ココネ

「……気が早い」

クウネル
「まあそんなとこです、ではコーナーを進めましょうか」

エヴァ
「そういえばまだ次回予告すら到達してなかったな、もう千字突破してるのに」

クウネル
「というわけで今回の話ですが……」

天津飯
「ついにベジータが登場したか……トランクス達にとってはこれ以上のない助っ人だな」

エヴァ
「で、茶々丸は怪我人運搬でお役御免と」

クウネル
「しょうがないんじゃないですか？こちら側の戦闘メンバーでは彼女だけですから、修行してないの」

エヴァ
「そういえばあいつ、ずっとメイドしてたな……」

天津飯
「強さ的にはどのくらいに位置してるんだ？」

クウネル

「だいたい、あやか≦茶々丸＜ヤムチャ　程らしいです。作者の考えだと」

天津飯
「ヤムチャより下か……確かにキツいな」

エヴァ
「ていうか、委員長は茶々丸に追い付いているのか……」

クウネル
「それでは次回予告です」

餃子
「さて、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「場面の初めはピッコロ達の所からだ」

天津飯
「あいつらは本当に大丈夫なのか？俺ですら部下の足止めで精一杯だったのに……」

ココネ
「……クリリンさんの『あの技』がカギ」

クウネル
「そういえば、準決勝でも使いませんでしたね」

エヴァ
「そりゃまあ、命中したらただじゃ済まんしな」

餃子
「次回の更新は金曜日」

天津飯
「感想、質問等はいつでも募集中だ」

クウネル
「それではみなさん、次回のネギドラ！も……」

エヴァ＆天津飯＆餃子＆ココネ
「お楽しみに！」

エヴァ
「……しかしあれだな、ゲストの補助メンバーをこれからも認めるとするぞ？」

クウネル
「はい」

エヴァ

「『イノシカチョウ&ボンゲボンゲ』を補助出来るキャラがいるのか？」

クウネル
「……ボンゲボンゲは制御不能ですね、あとイノシカチョウも相手が……」

餃子
「あ、そういえば僕も天さんも登場しちゃった」

天津飯
「大丈夫なのか？この作者は……」

注・回すだけ回して、何とか考えてみます

ココネ
「……この先かなり不安」

第６１話　ボージャック怒る　切り裂け！クリリンのとっておき（前書き）

朝投稿です。昨日の晩には出来てたんですが、一応予告は金曜にしてたのでこの時間に。執筆ペースが波に乗ってきたかもです。

ではどうぞ！

第６１話　ボージャック怒る　切り裂け！クリリンのとっておき

「「だあああああああああっ！」」

ボージャックとピッコロが動いたのは、ほぼ同時だった

中央の位置で、両者の右腕が重なる

「ぐぐぐぐぐ……」

そこから力と力の押し合いとなったが、やはり優勢はボージャック

グイグイと相手を後退させていく

「たああっ！」

これはいかんと悟ったか、そこでピッコロは一気にバック

そのまま高々と飛翔した

「だだだだだあああっ！」

無数の気弾の雨を降らすが、当然ながらそれらは

「無駄無駄無駄無駄ぁっ！」

全部弾かれる結果となる

そこでその隙を狙い、ピッコロは気弾と共に突っ込むが

「だから無駄なんだよ、お前が俺様に一人で挑むなんざな」

（なっ！？速い！）

瞬時に背後をとられてしまった

疲弊して集中力が無くなってきたか、それともさっきまでは向こうが手加減していたのか

どちらが正解かはハッキリしなかったが、それでも分かることが一つ

現在両者の力量差は歴然だということ

「そらあああっ！」

「ぐおおおっ！」

背中に拳がめり込み、痛みが走った

そのダメージはいかにピッコロといえども、顔を歪まさずにはいられない

早くこの位置関係を解消せねば、と慌てて身体を反転しようとするが

「もう一発！」

「ぐふおおおっ！」

そこを狙い撃ちされ、振り返り際の顔にストレートパンチ

殴られたのは左頬の下部

顎に比較的近いそこを打たれ、ピッコロは脳に軽い振動を覚えた

「な、なにおう……」

揺らめく目の前の光景

その間すら、ボージャックは休む隙を与えない

「これで……」

顔面を無理矢理アイアンクローで掴み

「仕舞いだ！」

全力で下の地面へと投げつけた

頭を下にして、ピッコロは凄い勢いで降下

このまま頭から激突すれば、待っているのは死

だが残る力を振り絞り、ピッコロは体勢を立て直す

そのままスタッと着地

「ぬぐふっ！」

とまではいかなかった

頭から落下という最悪の事態は避けられたが、それでもう限界

背中を強く打ちつけ、口から紫の血液が少量こぼれる

「ちっ、往生際の悪い奴め」

それに軽く舌を打つボージャックだったが、すかさず攻撃を仕掛ける

右掌をピッコロに向け、気を集束

少し前、悟飯に撃った時のと同じ光球が出来上がった

「もうロクに動けまい、くたば……」

自らの勝利を確信していたボージャック

今彼が目に映しているのは、苦痛の表情を浮かべるピッコロのみ

それ故にギリギリまで気付けなかった

「波ーーーーー！」

「何！？」

背後にいた伏兵の存在に

「ぐううううっ！」

気付いて振り返ったときにはもう遅く、かめはめ波はボージャックに命中

ダメージこそ屁みたいなものだったが、問題はそこではない

「し、しまった……」

手の平にあった気が四散

光球はその形を無くし、消滅した

「お、おのれえっ！誰だ！」

鬼のような形相で、飛んできた方向を見やる

そこにいたのは二人組の男女、クリリンと古

「古！」

「らじゃアル！」

ボージャックの注意がこちらに向いたことを確認

二人は次なる行動を開始した

「アイヤアイヤアイヤアイヤーーーー！」

古は手に集めていた気で、高速で気弾を連射

威力、スピード共に、ボージャックからすればヘナチョコ同然

命中したとしてもほとんど効きはしない

なのでそのまま突っ込んで行っても良かったのだが

「そんなもん、俺様に当たるかーーーー！」

不意打ちを喰らって激昂しているボージャックは、自らのプライドからそれは許せなかった

その場にどっしりと構え、全ての気弾を力強く弾き飛ばす

その一回一回の腕の動きに、怒りが滲みだしていた

「アイヤアイヤアイヤアイヤーーー！」

それでも、古は気弾を放ち続ける

撃てども撃てども、命中は一発たりとも無し

次第に、ボージャックから笑みがこぼれてきた

「はっはっは！そんなショボイ攻撃、屁みたいなもんだぜ！」

一方の古はこう言われながらも、全く動揺などしない

さも、弾かれて当然という表情だ

この気弾は、自分に当てることが目的ではない

ボージャックがそれに気づいたのは

「ばっ！」

「なっ！？ぐおおおおおおっ！」

上から降り注ぐエネルギー波を喰らった後だった

古の気弾がボージャックの注意を逸らしている隙に、クリリンは別の技を準備

準決勝戦でもネギに使った、拡散エネルギー波だ

気をギリギリまで溜め込み、ボージャックの上空へバレないよう射出

そして古の気弾の弱さに油断しきったその瞬間、狙い撃ち

最初の不意打ち攻撃で、冷静さを失っていたからこそ出来た作戦だった

気の扱いに長けているクリリンの気功波攻撃は、古のそれとはまるで別物

そのうえ無防備だった上部からというのも重なり、少しはダメージを与えられたようである

「ぬぐぐぐぐ……またしても猪口才な真似を……」

再び怒りが強く表れ、ボージャックに額には青筋が

「まとめて吹き飛ばしてやる！」

右手をバッと掲げ、すかさず光球を生成

クリリン達を真っ直ぐに見据え

「そらあああああああっ！」

勢いよくぶん投げた

ギュイーンと音をたて、二人へと迫る

「まずっ！」

「避けるアルよ！」

距離がわりかし離れていたこともあり、真横に跳んで即座に回避

クリリンが右、古が左へ

チュッドオオオオオオオオン！

その間を光球が通り抜け、はるか遠くでは爆発が起こった

「ふー、危なかたアルねクリ……」

「死ねええっ！ハゲ頭！」

「！」

気弾を投げるのと共に、ボージャックは二人の下へ高速で接近

そしてターゲットをクリリンに絞り、今にも殴りかかろうとしていた

逆方向に跳び、相棒の古も援護が追いつかない

またクリリン本人も、とっさの出来事に反応出来ない

全ては作戦通り

策士ボージャックは光球を生成する段階で冷静さを取り戻し、ここまで考えていたのだ

「クリリン！」

だがこれには、一つ穴がある

反応出来ないというのは、ボージャックの攻撃が『とっさの出来事』という前提のもと成り立つ

もし攻撃が来ることを、クリリンが初めから予測していれば

「太陽拳！」

「！！」

なんてことはない

カウンターを決められればそこまでなのだ

「ぐわあああああああっ！目！目があああっ！」

そしてクリリンはそれを看破し、見事成功させた

避ける時点で、既に構えは太陽拳

万全の対策だった

問題はボージャックがどちらに攻撃するかなのだが、これも予想がつく

初めにかめはめ波を撃ったのは自分

そして上空からエネルギー波を落としたのも自分

二度の攻撃は、全てクリリンが行い命中させたもの

ボージャックからすれば、一方的にそっちへ怒りが強く出るのも頷ける

ならば十中八九、先に攻撃するのは自分

ここまでクリリンは考えていた

長年に渡る実践経験なら、クリリンも充分得ているのである

「く、くそおおっ！」

ボージャックは激しい痛みに目を片手で押さえ、もう片方の手で攻撃

といっても、ただブンブンと振り回すだけのヤケクソのそれ

当の本人はとっくに離れており、掠らすことすら叶わなかった

古の隣にまで移動すると、クリリンは右腕を上げる

そのパーになっている手の平に、急いで気を集中

「はあああああああ……」

そこへ現れたのは、黄色の円盤状の気

音をたてて高速で回転しており、チェーンソーの刃を連想させる

以前、ハルナのフリーザゴーレムが見せたものとそっくりであった

そう、言うなればこれは、あの技の大元といえる技

宇宙の帝王フリーザですら、一度は苦汁を舐めさせられた技

クリリンの、最高最大の必殺技

「気円斬！」

さらにそれは大きくなり、回転音がより唸る

そしてクリリンはボージャックを一点に捉え

「当たれーーーーーー！」

致命傷にも成り得るそれを、思い切り投げつけた

攻撃は逸れることなく、真っすぐボージャックのもとへ

（な、何だこの音は……マズい！）

「あ！避けられたアル！」

本能のまま、ボージャックは横へと移動

視界を失っていた彼は、確かに気円斬を目で捉えることは出来ないだが一方で聴覚は、逆に研ぎ澄まされていた

自分に迫る高速の回転音

それは、自らの身体を切り裂きしもの

ここまで理解出来たボージャックは、避けるという術をとるほか無かった

横を通り過ぎる気円斬

しかし、回避が完全だったかといえば、そうは言えない

「ぬぐううっ！」

右脇腹から出る血しぶき

ほんの数センチだが、気円斬はボージャックの身体を抉ることに成功していた

「お、おのれ……！！」

視界が徐々に晴れ、クリリン達を睨みつけようとしたその瞬間

「そらそらそらそらあっ！」

ボージャックの目の前に、新たに放ってきた四つの気円斬が映る

走った痛みに気を取られ、回転音を聞き逃していた

技の危険性は、身をもって体験済み

全力で回避にあたった

「く、くそったれーーーー！」

次々に切りかかるそれらを、身をよじらせて懸命に避けていく

一つだけだったら視界を取り戻した今、避けるのは容易だっただろう

しかし、直前まで存在に気づけず四つなら話は別

「くううううっ！」

「やたアル！」

再び気円斬はボージャックを切り裂いた

箇所は胸板

しかも脇腹よりも少々深い

「ぐ、ぐぞおおおおおおおおお……」

右手で脇腹、左手で胸板を押さえてボージャックは唸る

大事な血管は切れてないが、出血はそれなりにしている

時間と共に、ボージャックの顔は歪みを増していった

「……よし、今のうちだ。古」

「ウム」

二人はピッコロの方へと目を向ける

少しは体力が戻ってきたのか、ゆっくりと身体を起こし始めていた

相手の動きが鈍っている今、退却するには絶好のチャンス

本当は自分達だけのつもりだったが、ピッコロもかなりの重傷

先ほどの攻防で、一同の位置関係はやや変わっていた

クリリン達を挟んで前にボージャック、そして後ろにピッコロ

この位置なら、ピッコロと共に逃げるのも不可能ではない

早速実行に移そうと、全身を気で覆う

ボージャックとは距離があり、全力で飛べば何とかなるだろう

そう思って飛び去ろうとしたその瞬間

「ぐぞっだれえええええええええええええええええええええええ
ええっ！」

「「！！」」

ボージャックの凄まじい怒号が全身を突き抜けた

空気が揺れ、大地も振動を起こす

二人は動けなかった

全身が痺れるような感覚

脳は動けと命令するが、身体がいっこうに従ってくれない

その様子はまるで、蛇に睨まれた蛙

いや、蛇なんて生優しいものではない

それはもはや鬼神

そしてその鬼神とは言うまでもなく

「お前達は……俺様を完全に怒らせた……」

「あああ……」

怒りの沸点を遥か高く通り越した、ボージャックだった

ゴクア、ビドーと同じく変身

外見の変化は彼ら同様あったが、気の上がり方がまるで違う

辺りに起こる揺れも、クリリン達を動けなくしているのも、全ての原因はそのデタラメな気

「何だよアレ……そんなのありかよ……」

「しかも……さっきまでの傷が……」

また、さらに特筆すべきはその回復力

気円斬で与えた二つの傷

その両方が、ほぼ完全に塞がっていた

ボージャックはそれらに軽く触れ、治癒したことを実感

「まだ軽く違和感は残るが……お前達をぶち殺すには充分だ」

殺人鬼のような邪悪な笑み

というよりボージャックは元々、数々の星の原住民を殺してきた
正真正銘の殺人鬼

その面が完全に、表に出ただけのこと

「覚悟しろよ……ジワジワと苦しませながら殺してやる……」

肩に手を乗せ、腕をグルグルと回す

その間も、二人は逃げることは出来なかった

（何やってんだよ俺……早く、早く古と逃げなきゃ……）

クリリンはこうして自分に言い聞かせるが、身体は全然動いてくれない

（それが無理でもせめて古……古だけでも、俺があいつの気を引きつけてる間に……）

彼は言った、古のことは俺が守ると

ここで自分が動かなくては、それは絶対に出来ない

やらなくてはいけない、そう古に誓ったからには

なのに

なのに

（どうして……どうして動いてくれないんだよっ！）

まるで身体は言うことを聞かず

その悔しさにクリリンは顔を歪ませるが、それでも現状は変わらなかった

「さて、どっちからにするかな……」

腕を回すのを止めると、ボージャックは二人を交互に見る

そして最初の獲物を決めたか、口元を一層釣り上げた

「よし……お前だーーーーー！」

二人に向かって猛然と突進

（くそおおおおおおおおっ！）

敵に対する恐怖か、それとも自分に対する情けなさか

クリリンは歯をギリリと鳴らし、両目を閉じる

次に自分達に待っているのは、紛れもなく死

そう思うしかなかった次の瞬間

ドン！

「……え？」

クリリンの身体は横へ突き飛ばされた

ボージャックと接触したわけでもなく横へ

まるで、自分をその場から遠ざけさせるために横へ

（ピッコロが……飛んできたのか？）

いや違う

突き飛ばしてきた手は、ピッコロのそれより断然小さかった

大きさはちょうど、年頃の少女程の……

（まさ……か……）

クリリンは、恐る恐る首を横へ

自分を突き飛ばしたのはやはり

「なんで……なんで……」

「……クリリンの助けになる、私そう言ったから」

初めから自分の隣にいた古菲

古がクリリンに答えた直後

ドゴッ！バギャベギッ！

「……がはっ！」

ボージャックの拳は古の脇へ

「く、古！」

鈍い音を立て、古の口からは鮮血がこぼれ落ちた

第６１話　ボージャック怒る　切り裂け！クリリンのとっておき（後書き）

クウネル
「どうも皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「大分本編はハラハラな展開になってきたな、本格的に……」

クウネル
「それはとりあえず後でやりましょう、今はまずゲストの紹介を」

エヴァ
「そうだな、で今回のゲストは？」

クウネル
「今回のゲストは、この方々です」

ブルマ
「やっほーー！」

刀子
「出番が全くないと思ったら、こんなコーナーに呼ばれるなんて……」

クウネル
「ブルマさん＆刀子さんの、血の気が多い女性コンビです」

ブルマ＆刀子
「なんですって？」

クウネル
「いえ、なんでも……」

エヴァ
「本人の前でその呼び方はダメだろ……」

クウネル
「しかしそれにしても、ブルマさんは本当に久しぶりですよね」

ブルマ
「そうなのよね、なんだかんだで二か月近く出てなかったもの」

エヴァ
「確か、決勝戦始まる前に刹那達と話して以来か？」

ブルマ
「そうそう」

刀子
「私は出番すら貰えていませんがね」

エヴァ
「まあしょうがないだろ、この小説だと私達側の登場人物は新期参入ほぼ不可能だし」

クウネル
「一応エピローグで登場という線も、あると言えばあるんですけどね……」

ブルマ
「まあいいじゃない、それよりコーナー進めましょうよ」

エヴァ
「お前はいいな、気楽で……」

クウネル
「では、今回の話なんですが……」

ブルマ
「一話丸ごとクリリン君達だったわね」

エヴァ
「うむ、いつもなら最低一度は場面切り替えがあるんだがな」

クウネル
「本当は場面を移そうって思ってたらしいんですよ、ラストで刹那さん達に」

刀子
「……まあ理由は、今回の話の文量で見当はつきますが」

注・思いのほかクリリン達の尺が長くなっちゃいました

クウネル
「五千字オーバーなんて準決勝以来ですもんね」

エヴァ
「そりゃ刹那達には移せんわな、これ以上になったらバランスがとんでないことになるし」

クウネル
「最近は、四千字前後を一話分の目安にしてるらしいですよ」

ブルマ
「まあ確かに、毎回毎回長さが極端にバラバラじゃ違和感残るわね」

刀子
「特に準決勝第四試合の前後編が、その典型的なパターンだと」

注・はい

エヴァ
「あれは凄かったな」

ブルマ
「普通に倍以上違ってたわよね」

クウネル
「では、そろそろ次回予告行きますか？」

エヴァ
「こっちはこっちでペースがバラバラだよな……前回は次回予告突入時で千字とっくに超えてたし」

クウネル
「まあそれは、ゲストさんによって内容がかなり変わってきますし……」

エヴァ

「普通にちょっと前は作者の心境報告やってたしな、本家のアニメとサブタイかぶった件で」

ブルマ
「ねえねえ、早く次回予告やりましょうよ」

エヴァ
「話すことも特にないしな……しかたないか」

クウネル
「では、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「場面は引き続き、あいつらの所からだな」

ブルマ
「あのボージャックって奴が反撃を開始してくるわ」

刀子
「今までのうっぷんを晴らすべく、古菲さんに猛攻を仕掛けるようです」

クウネル
「それに対しクリリンさんやピッコロさんは……そして彼女の運命や如何に？」

エヴァ
「次はちゃんと場面転換あるのか？」

クウネル

「一応ネギ君達のと刹那さん達のを予定してるそうです」

ブルマ
「次回更新予定は火曜日！」

刀子
「ではみなさん、次回のネギドラ！も……」

エヴァ&クウネル&ブルマ
「お楽しみに！」

エヴァ
「そういえば、お前は会場内にいることになってるのか？」

ブルマ
「そうよ。のどか達とは入場した時間が違うから、席は随分離れちゃったけどね」

クウネル
「だから出番が貰えないんですね……」

第６２話　逆襲の変身ボージャック　そしてついに悟飯が立つ！（前書き）

また朝投稿です。投稿予定日に入る前に原稿が完成したという前回と同様のパターンですね。あ、そういえば先日買ったタッグバーサス、昨日あたり全キャラ出しました。こっちも精を出して頑張ってます。

ではどうぞ！

第６２話　逆襲の変身ボージャック　そしてついに悟飯が立つ！

何故自分は動けなかったのだ

動きさえすれば、こんなことには

自分を突き飛ばした少女を見た瞬間から、この言葉が高速で頭の中を、何度も何度も何度も何度も

目の前で起こった光景は、クリリンをそうさせるのには充分すぎただってそうだろう

出来なかった自分の代わりに、彼女はそれを実行に移したのだ

十四、十五の少女が出せるような勇気ではない

なのに少女、自らの師であり弟子である古菲はしたのだ

そして彼女の身体から鈍い音がしたと同時に、口から真っ赤な血

嘘だと思いたい

だが嘘ではない

自分の頬にほんの僅かだけ付いた血液

それが物語っていた

「く、古！」

「ちっ、あっちからやろうとしてたのによ……邪魔しやがって」

攻撃が当たった相手を見て、ボージャックは悪態をつく

彼は最初の獲物をクリリンに定めていた

傷こそ治っているものの、ここまで怒らせた張本人は間違いなくクリリン

どうしても最初に仕留めておきたかった

ところが、古が動いたことで事態は予定外

順番を変更することとなってしまった

「まあいい、どっちにしろ皆殺しにするんだ……いくぜえええっ！」

ボージャックはさらに力を入れ、拳を振りきる

古は当然ながら、そのまま真っすぐ吹っ飛ばされた

「ぬぐうっ！」

全身を突き抜ける痛みに、古は涙目になって眉をしかめる

音や吐血から考えて、間違いなく肋骨が数本イッた

空中静止しようと痛みに耐え、向き直ろうとするが

「そおらっ！まだだまあっ！」

既に先ほどの場所にはボージャックはおらず

体勢を何とか立て直した古の背後に、瞬時に回り込んでいた

言い終わるより先に、背中へ右ストレート

「ぐわあああああっ！」

再び古は殴り飛ばされる

（こ、ここまでとは……）

また数本骨がイッた

それを古が自覚するや否や

「どうだ？痛かろう、苦しかろう……」

またボージャックは飛んだ先へ移動

今度は体勢を立て直す暇すらなく

「お次は、こいつだ！」

「ごあああっ！」

腰へ回し蹴りをマトモに喰らった

また内部から嫌な音が聞こえ、喉の奥から血がこみ上がる

だが向こうが加減してきたのか、ふっ飛ばされはしなかった

ボージャックは古の襟首を掴むと

「そら！そら！もう一発！」

「ぐふぇ！ごはっ！ごばあっ！」

悟飯にしたのと同じように、腹へパンチを次々と打ち込んでいく

しかし、それとは少々違って威力は抑えめ

古の意識を刈り取らない程度に留めていた

それ故古は一撃一撃に酷く苦しみ、血を吐いていく

「こ、このやろーーーーー！」

そんな光景を、クリリンは黙って見ていられなかった

ボージャックへ向かって怒鳴りながら、半ばヤケクソに突っ込む

今になってようやく動いた身体を、クリリンは恨んだ

この少し前に動ければ、と後悔の念が収まらない

「フン……」

ボージャックはそんなクリリンを鼻で笑うと

「雑魚はすっこんでろ！」

「ぐわああっ！」

古の腹に打たんとしていた拳で、クリリンを殴りつけた

振り返りもせずに背中を向けたまま、ただ一発

地面に一度跳ね、横向きに倒れこむ

「く、くそおおお……」

今の一撃だけで、クリリンはかなりの大ダメージ

ムリに動こうとすると、殴られた箇所が悲鳴を上げる

もう最初のようには動けないだろう

「このガキが終わったらゆっくりと料理してやる！それまで大人しく待ってるんだな！」

「……くそおおおおおおおっ！」

あの時動けなかったことに

そして己の非力さに、クリリンは大声で叫んだ

「ダメですネギ先生！」

「離して！離してください夕映さん！」

地上では一組の男女、ネギと夕映が互いに大声を上げていた

ネギは今にも泣きそうな顔で暴れ

夕映は必死にネギを押さえつけ、説得を試みる

「今のネギ先生のお身体では無理です！まだ骨折すら治ってないのですよ！？」

「だって！だって老師が！古老師が！」

古達の戦いをモニター越しで、ハラハラしながらも黙って見守っていたネギ

だがモニターであの光景を目の当たりにした途端、表情は一変

すぐさま立ち上がり、彼らのもとへ行かんと行動を起こそうとした
そこへ何とか夕映がしがみつき、今に至る
「ですから助けに行くとしても、まずはその怪我を治さないことには！」
「こんな怪我くらい、何てことあり痛っっ！」
無理にでも行こうと、夕映を振り払おうとしたネギ
が、骨折した箇所に痛みが走り、思わず声を漏らした
「ほら御覧なさい！今行ったとしても、くーふぇさんと同じ目に遭うだけです！」
「……」
「ひとまず座ってください、落ち着くです」
「……はい」
夕映に言われ、ネギは渋々ながら席へと着く
だが両手はガクガクと震え、顔も青い
落ち着けと言われても出来るわけがなかった
それは、言った本人の夕映も同じこと

無論、周りにいる他の仲間全員も

ネギ程ではないにしろ全員が全員、どこか不安が外に表れていた

「木乃香さん、悟飯さんの治療はまだ終わらないですか？」

焦りが含まれた声色で、夕映は木乃香の方を向く

「も、もうちょいや……あと数十秒……」

木乃香は額に一筋の汗を垂らし、悟飯を懸命に治療中

いざ始めてみるとその傷は予想以上に深く、箇所も多いため困難を極めていた

悟飯もソワソワした表情でモニターを見上げている

「ピッコロさん……クリリンさん……」

早く助けに行ってやりたい

その気持ちでいっぱいだった

だが今は、こうしてじっとしていることしか出来ない

あと数十秒と言われたが、その一秒一秒がひどく惜しいのだ

「……ねえパル、アスナ達はまだ起きないの？」

「ダメ……三人とも気を失ったまま」

見るに見かねて朝倉が尋ねてみたが、答えはこの通り

寝かせている三人の一番近くに座るハルナは、首を横に振った

「朝倉さん、仮にアスナさん達が目を覚ましてたとしても、行かせるのは無謀です」

その会話を聞き、夕映は治療を続けながらも話に入る

「アスナさん達が三人まとめて向かっても全滅がオチ、全員が全員逃げるなど到底無理です」

だからこそこうして、三人より力量が上のネギ先生達の回復に努めているのですからと続けた

現に少し前に戻ってきたあやかも、ここでの待機を命じられている

「あ、そうだ！ハルナのゴーレムを行かせれば囮くらいには……」

こう言ったのはのどか

ハルナのゴーレムならば、やられてもそこまで痛くはない

それに何体も召喚すれば、それだけ戦力にもなってくれる

そう考えたのだが、結果は……

「……無理なのよ、のどか」

「ええっ！？」

ハルナにそう言われて終わる

「な、何で！？」

「距離よ。ここから地下までが離れすぎてて、ゴーレムの使役が出来ないの」

「じゃ、じゃあギリギリまで近づいて……」

「そんな距離まで接近したら、間違いなく敵に察知されてハルナはやられます。残念ながらその案は却下です、のどか」

「そ、そんな……」

再び話に加わってきた夕映にまで否定され、のどかは消沈

「ん？あれって……」

すると、トンネルの入り口から何者かが飛び出してくる

真っ先にそれを見つけた朝倉は、目を細めて確認

すぐに、自分がよく知るクラスメイトの一人だと分かった

「あ、茶々丸さん！」

「「「「「え！？」」」」」

朝倉がそう言って指差すと、一同も視線を一斉に向ける

ボロボロになったコタローを抱え、こちらへ飛びながら近づいてきた

「コタローさん、到着しました」

「……お、おう……」

茶々丸はネギ達の目の前で着地

それと同時にコタローへ呼びかけると、弱々しい返事が返ってきた

「こ、コタロー君!?大丈夫なの!?」

カメラの死角の関係で、一連の様子を見ていないネギ達

ネギが思わず声をあげた

「へ、平気や……ちょっと体力のうなっただけやし……」

「いえ、それに加えて全身打撲も見受けられます。かなり重傷で、早めの処置が必要かと」

コタローは苦笑いで返すが、茶々丸は淡々と否定

そのまま彼女は辺りを見渡し、状況を把握

「……まだお二人の治療は済んでないようですね」

「はい……もうじき悟飯のが終わりますが、その次は僕が」

「困りましたね……」

ネギの言葉を聞き、茶々丸の顔がやや下に傾く

「どなたか木乃香さんの他に、治癒魔法が扱える方は？」

「私が一応出来ますが……たぶん完治させる分まで魔力が持ちません」

顔を上げて一同に訊くが、返事が返ってきたのは夕映一人

しかも、完治は難しいと思わせる答え

「あ、デンデならすぐに治してもらえます！神様の神殿まで行けば！」

そこへ、悟飯が突如提案する

大半の人物は何のことか分からず？を浮かべる

しかしデンデと会ったことがあるネギ、コタロー、木乃香、あやか、餃子

それとアックマンから話を聞いたことがある夕映は、すぐにその意味を理解した

「そうか、デンデ君の力を使えば！」

「……分かりました、すぐそこへ搬送しましょう」

茶々丸は天界の位置を知らないため、だれか案内をお一人と頼む

コタローも知ってはいるが、この状態でお願いするのはやはり酷

そのため、手の空いている餃子が案内役を請け負うこととなった

あやかも行けるといえば行けるが、餃子の方がより詳しい

また万が一の非常時を考え、この場に残ることにした

「それでは皆さん、失礼します」

ペコリと頭を下げると、茶々丸は先に飛んで行った餃子を追っていく

「コタローくーん、早く怪我治してねー」

ネギが顔を向けてこう言うと、コタローは無言でサムズアップ

治してもらったらすぐに戻ってくる

そう伝えてるかのようだった

そして姿を消すとほぼ同時、ついに

「……よし！終わったで悟飯君！」

「ホントですか！」

待ちわびていた悟飯の治療が完了した

悟飯はバッと跳ね起き、すぐに気を開放

周辺に強風が起こり、思わず傍にいたハルナ達はそれにおののく

「それじゃネギ君、行ってくる」

「……お願い、悟飯君」

さらなる強風を巻き起こし、悟飯はその場から飛び立った

瞬く間にトンネルへと吸い込まれ、見えなくなる

「さてと、次はネギ君やな」

それを見届けると、木乃香は顔をネギの方へ

まだ木乃香には、もう一件大事な仕事が残っていた

「すみません、こういう時いつも木乃香さんに頼ってばっかりで……」

「ええんよ、早く古ちゃん助けに行くんやろ」

「……はい」

木乃香がネギのいる席へと向かい、夕映が自分の場所を空ける

「内出血や打撲はあらかた私が治しておいたので、あとは骨をくっつけるだけです」

「うん、ありがと」

一言礼を述べると、木乃香はそこへ急いで座った

「行くでー、プラクテ　ビギ・ナル……」

杖を持ち直し、始動キーを口にする

そのまま治療を始めようとしたのだが

「治〈クー〉……！！」

手から杖がポトリと落ちる

どうしたんだ？とネギは木乃香を見上げた

顔は青く、ネギの方などまったく見ていない

ただワナワナと震えるのみ

よくよく見ると、目線の先はモニターの方

まさか古がと思い、ネギも慌てて同じ方向を見た

「！！」

そして、ネギも同じ顔

さらには、他の皆も

しかし彼らに衝撃を与えたのは古ではなく、同じく隣のモニターに映る

「せ……せ……」

大量に血が流れる右腕を左手で押さえ

「せ、せ、せ、せ……」

あまりの痛さに雄叫びをあげている

「せっちゃんっ！」

桜咲刹那の姿に他ならなかった

第６２話　逆襲の変身ボージャック　そしてついに悟飯が立つ！（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「さてクウネル、今回のゲストは誰なんだ？」

クウネル
「はい、今回は賑やかにしようとこの方々をお呼びしています」

ピアノ
「我々もついに登場ですな」

シンバル
「げっへっへ」

タンバリン
「出来ればピッコロ大魔王様と共演したかったがな」

ドラム
「まあ仕方あるまい」

クウネル
「ピッコロ大魔王さんの部下四人組です」

エヴァ
「四人ゲストとは随分久しぶりだな……喋る動物トリオ＆小娘以来か？」

クウネル
「ですね、実はリクエスト上は四人の内の誰かとあったんですが…
…」

タンバリン
「折角だからと全員出してもらえたぞ！」

シンバル&ドラム
「ナイス作者！」

エヴァ
「やっぱり大人数はうるさいな……」

ピアノ
「でもなんか、ゲストが五人のリクエストもあると聞きましたけど
……」

クウネル
「そういえば一件ありましたね」

エヴァ
「あれは確かに厄介だ……いっそのこと登場と同時に何人か消すか」

クウネル
「怖いこと言わないでください」

エヴァ
「ではコーナーを進めるか」

クウネル
「はいはい、さて今回の話ですが……」

エヴァ
「結局刹那への場面転換はなかったな」

タンバリン
「思った以上に地上でのやり取りが長くなってしまったらしいぞ」

クウネル
「まあ刹那さんの描写は若干書けたわけですし、ギリギリセーフってことで」

エヴァ
「そういうことにしてやるか……」

ドラム
「しかしあの古って小娘は大ピンチだな」

ピアノ
「ですな、向こうのボスから執拗にリンチですし」

エヴァ
「だが刹那も猛烈にピンチだろ、おそらくあれは右腕をゴクアとやらに……」

クウネル
「はい、そこは次回の冒頭で詳しく説明されるのでストップです。ネタバレはいけません」

シンバル
「次回予告の存在はネタバレじゃねえのか？」

クウネル
「あれは話してもいい範囲でやってますから、作者の主観で」

タンバリン
「結局作者か……」

エヴァ
「しかしアレだな……綾瀬夕映は博識すぎだろ」

クウネル
「これまた随分いきなりですね……」

エヴァ
「いや、前々から思ってたんだよ。ぶっちゃけＤＢキャラ並みにあっちの世界に詳しいわけだし」

クウネル
「確かアックマンさんが教えたんですよね」

エヴァ
「で、そのアックマンは地獄の悪人から色々話を聞いてたと」

タンバリン
「俺も昔、話してやったことがあるぞ」

エヴァ
「『Ｚ』以前の奴らからもか……」

ピアノ
「多分あの娘が一番詳しいですよ、貴方達側の人間だと」

クウネル
「そうですよね、ＤＢ側で一番詳しい悟空さんはあの世にいるわけですし」

エヴァ
「次に詳しいブルマやクリリンは……あそこまであいつらに教えてないだろうな」

ドラム
「だな」

タンバリン
「では次は次回予告だな」

クウネル
「はい、さて次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「冒頭は刹那の所からだ、まあ本来ならこの話に入るはずだった部分だしな」

タンバリン
「おそらく前半がそれ、後半がクリリン達の場面になるようだな」

ピアノ
「あと、あのネギとかいう少年達の場面も若干入るっぽいです」

クウネル
「あくまでも予定ですので、少し変わるかもしれませんがあしからず」

ドラム
「次回の投稿予定は……あれ？」

エヴァ
「どうした？」

ドラム
「……これ間違いじゃねえの？」

クウネル
「いえ、カンペにある通り事実です」

エヴァ
「カンペ持ってたのかこいつ……んで、どうしたんだ一体？」

ドラム
「次回の投稿予定は……火曜日」

エヴァ
「え？だって今日が火曜日だろ？」

タンバリン
「次回分のじゃないのか？」

クウネル

「違います、今回の分です」

エヴァ
「……今度は作者に何があった？」

クウネル
「所属する部活の関係で二泊三日の大会に出掛けます」

エヴァ
「……前みたいに木曜投稿は？」

クウネル
「『一応頑張ってはみるが、この前みたいに保障は出来ません』とのことです」

エヴァ
「……つまり、もし出来たなら木曜で、間に合わなかったら火曜ということか？」

クウネル
「そうなります」

エヴァ
「まったく……」

ピアノ
「えー、それでは読者の皆様」

タンバリン
「次回のネギドラ！も……」

エヴァ＆クウネル＆シンバル＆ドラム＆ピアノ
「お楽しみに！」

クウネル
「あ、それとネタの本数が大分減ってきたので、ゲストリクをどうぞよろしく」

エヴァ
「今までゲストに出てないキャラなら、即使ってやるぞ」

第６３話　奪われし戦いの牙　刹那無念の撤退（前書き）

何とか原稿を仕上げ、一週間空けることなくこうして投稿が出来ました。やはりこのまま週二回投稿は守っていきたいです。週三回や二話同時は……ちょっとやっぱり厳しいですかね、多分こんな感じの一日空け投稿は心身共にもちそうにないので。

でも一回くらいはやってみたいですかね、冬休みとかに。……どうかあまりご期待はなさらずにお願いします（焦）

ではどうぞ！

第６３話　奪われし戦いの牙　刹那無念の撤退

「刹那殿！」

「……う、うあああああああああああああっっ！」

楓が叫ぶと、その後すぐに刹那が雄叫びをあげる

銀河戦士の一人、ザンギャと空中戦の真っ最中だった楓

戦いの内容としては、現在ほぼ拮抗

基本スペックは上である敵を相手に、楓は得意の影分身で応戦していた

ザンギャは影分身という未知の技に翻弄され、序盤は劣勢

しかし戦いが長引くにつれ、次第に攻撃の命中回数が増してくる

少しづつだが楓の動きを見切ってきていたのだ

さらにそれと並行して、ゴクアの変身とコタローのダウン

もはやこれまでかとあの時は思ってしまった

だがそこへ、強力な助っ人ベジータが登場

ピリピリと伝わってくる強靭な気

そしてわけなくブッ飛ばされる銀河戦士

この戦い、乗り切れるかもしれない

その光景を横目で見て、楓はそう感じ始めた

そこから一気に戦意を盛り返し、楓は反撃

こうして現在は、互角に近い戦いまで持ち込んでいた

ところが、ふと目に入った物に楓は驚愕

たちまち顔を強張らせてしまう

それは夕凪を握り締めたまま、切断面から血を出して回転しながら落ちていく

桜咲刹那の右腕だった

「はっはっは！これだ！この感触だ！」

「ぐ、ぐぐぐうううう……」

血に染まる自らの剣

そして耐えがたい絶大な痛みに、苦痛の表情を浮かべる刹那

両者を交互に見てゴクアが、不気味に笑う

「人の肉、そして骨をぶった斬るこの感触！久々に味合わせてもらったぜ！」

（な、なんてことだ……しかも利き腕の方を……）

出血を最小限に留めようと、刹那は左手で切断面を必死に抑える

だが、血は未だに流れ続けていた

縛って止血しようにも、斬られたのは腕のかなり根元

一人ではとても出来そうにない

しかも夕凪は、斬られた右腕と共に落下

（拾いには……行かせてもらえそうにないな）

「さて、次はどこがいい？左腕か？それとも脚か？」

付着した血をひと舐めすると、ゴクアは切っ先を刹那へ向ける

人肉をさらに切り裂きたいという衝動に、既に彼は駆られていた

（でも幸い、私にはまだ武器が残っている……）

左手を傷口から離すと、刹那はそのまま懐へ

「よし、決めた……」

そして一枚のカードを取り出す

「左右のバランスを良くしてやる……左腕だあああっ！」

距離は狂人のような目で、刹那目掛けて突っ込んだ

「……アデアット」

「そおらあああっ！」

その場から動かない刹那へ、ゴクアは剣を力強く振り下ろす

刃は弧を描き、刹那の肩へ

丸ごと斬り落とさんとばかりに迫ってきた

キィィンッ！

「……何？」

だがそれは、小気味いい金属音と共に阻まれる

何事かと、ゴクアは剣の先を注視

そこにあったのは、空中に浮かびながら攻撃を受け止める一本の短刀

この世界に来てからは初のお披露目となる

（匕首〈シーカ〉・十六串呂〈シシクシロ〉！）

刹那のアーティファクトだった

「驚いたな……普通腕一本飛ばされりゃあ、戦う気なんて無くなっちまうぜ」

「お生憎様、私は普通じゃないのでな……」

ゴクアの言葉に、刹那は僅かながら笑みを見せる

大分血が抜けてしまったのか、その表情は酷く青い

少しは気のコントロールで出血を抑えてみたが、やはり完全には無理だった

こうしてる間にも、ポツンポツンと血は流れ落ちていく

長引かせれば間違いなく死ぬ

そう悟った刹那は、アーティファクトの残りの十五本も急いで展開させた

「喰らえ！」

刹那がそう叫ぶと、短刀達は一斉にゴクアを突き刺しに向かう

狙う箇所は頭部や胸部、一撃で殺せる人体の急所

「当たるか！」

しかし、ゴクアは瞬時に移動してそれらを回避

一発くらいは当たりそうなものだったが、見事無傷

驚異的なスピードである

「まだまだああっ！」

後ろへ下がったゴクアへ、刹那は攻撃の手を緩めない

一本を左手で握ってその場で待機しつつ、十五本は刹那の指示で再び攻撃を始めた

上下左右前後から満遍なく、ゴクアを囲んで直進

「当たらねえって言ってんだろ！こんなヘナチョコ！」

だがそれを、ゴクアは避けつつ剣で弾きつつ回避し続けていく

予想以上の動きに、刹那は額に汗を浮かばせた

（くっ、ダメだ！まったく隙がない……あいつ、私の動きにまで目を配っている……）

連続攻撃で一瞬でも隙が出来たところで、刹那が接近

気を目いっぱい込めた左手の刀で、本命の一撃を与える作戦だったのだが……

（へっ、そっちの考えなんざお見通しだぜ！）

ゴクアはそれを見抜き、避けながらも横目で刹那の動きを警戒

そこまでする余裕が、彼にはまだあった

（どうする……いっそのこと、このまま気功波を撃ってみるか？いや、体力が残り少ないこの状況では……）

何か策はないかと、思考を巡らす刹那

いくら考えてみても、全く良い案は浮かばない

（ならアーティファクトが奴の動きを止めている間に、夕凪を拾いに行って……）

「隙有りいいいっ！」

そこへゴクアがいきなりの奇襲

ガキィィィンッ！

（し、しまった！）

攻撃してきた短刀を一本、剣で力強く横に弾き返す

それは刃先を向け、刹那に向かって飛んできた

「くそっ！」

背中を反らしてギリギリで回避

さっきまで刹那の顔があった所へ、短刀が空気を切って通り抜けた

「ばあああああっ！」

当たらなかったのが分かると、ゴクアは咆哮して気を爆発

周りを球状に覆った爆発波で、残った十四本を吹き飛ばす

短刀が再び襲いかかるより先に

「今度こそ……腕もう一本いただきーー！」

刹那へまたもや切りかかった

左手に握る最後の一本で立ち向かうが

「無駄ぁぁっ！」

「あっ！」

一撃受け止めると、それは刹那の手から離れた

失血の影響で、既に彼女の手先には痺れが

ゴクアのパワーにはとても耐えきれなかった

「そおおおいっ！」

（く、くそっ！）

もはや術は残されていない

刹那はキュッと目を閉じ、左腕に襲ってくるであろう痛みを覚悟した

「刹那ちゃん危ない！」

「ぐおおおっ！」

「……え？」

ところが、その痛みはやって来なかった

聞こえてきた声に反応し、慌てて目を開く

「トランクスさん！」

「こいつとは僕が戦う……今の内に逃げるんだ！」

近くで起こった気の大きな乱れで、刹那のピンチに気付いたトランクス

急遽こちらへ助けに向かい、ゴクアを横からタックルでぶっ飛ばしていた

さっきまで対戦中だったブージンは、腹に強い一発を入れて瓦礫の中へ放り投げている

「ですが……」

「早くするんだ！」

「！！」

トランクスは刹那に、今まで見せたことのない形相で睨みつけた

同時に放たれた怒鳴り声は、辺りの空気を大きく震わせる

「君がこのまま戦っていたら、誰が一番悲しむか分からないのか！？」

「……」

刹那の脳裏にはたちまち、木乃香やネギといった仲間達が映し出された

しかも皆の表情は見るに耐えがたい、悲しみに溢れたそれ

「僕のことは構うな！行くんだ！」

「……すみません」

「またお前かあああああああっ！」

トランクスよりもさらに大声で、ゴクアの唸り声が響き渡る

「こうなったらお前から先にやってやる！リベンジといこうじゃないか！」

「……いいだろう」

超大戦の勃発前、トランクスに倒された屈辱

その本人が目に入った瞬間、一気にフラッシュバックで蘇った

こうなったらもう、ゴクアの視界にはトランクスしか映らない

自分が倒れるか、向こうが倒れるか

そのどちらかになるまで、収まりそうにはないようである

「だあああああああっ！」

「はあああああああああっ！」

（トランクスさんすみません……こんな、私のために……）

トランクスとゴクアの戦いを横目でチラチラと見ながら、刹那はゆっくりと地面に降り立った

そして、切り落とされた自分の右腕を拾い上げる

切断面から多くの血が抜け落ちており、既に真っ青

（お嬢様のアーティファクトは……間に合いそうにないな）

三分こそ経っていないものの、既に二分近くが経過

ここから時間内に戻るのは不可能だった

（だが通常の治癒魔法でも、今のお嬢様なら時間をかければ何とか……）

とにかく早く完治させて戦線復帰し、万全の状態でトランクスの援護

それをとにかく考え、刹那は行動していく

「……あれ？夕凪はどこに？」

では行くか、と飛ぼうとしたその時

刹那は自分の愛刀の存在がないことに気づく

切り落とされるその時まで、ずっと握り締めていた筈なのだが……

「落ちた際に手から離れてたのか？……あ、あんな所に！」

敵に拾われてはたまったものじゃない

慌てて辺りを見回すと、すぐに数メートル先に落ちている夕凪を発見出来た

「急いで拾わねば……？！」

視界が歪み、立ち眩み

駆け足で取りに向かおうとする刹那へ、それ突如として襲いかかる

「くそ、こんな時に……うわっ！」

失血量はもう本当に限界

体勢を立て直そうとするが逆に崩れ、刹那は横に倒れ込んだ

「イタタタ……ん？何か服から落ちて……ああっ！」

側面を土で汚し、痛みを堪えながらも立ち上がろうとする

そんな時懐から飛び出し、少し先に転がる小さな粒に目がとまった

直後、それ何なのかを完全に思い出す

「せ、仙豆！すっかり忘れていた！」

腕を落とされるというまさかの事態で、頭が回っていなかったか

こうして目にする今の今まで、完全に忘却の彼方にあった

「私としたことが、ピッコロさんから頂いた貴重な回復薬を……だ

がこれで！」

持っていた右腕を顎の下に置いて押さえつけ、空いた左手を仙豆へと伸ばす

立ち上がって取りに行くのが一番いいのだが、いかんせん脚が上手く動いてくれない

「まだ、戦える……」

グイグイと伸ばすが、もう少しのところで掴めない

「あ、あとちょっと……」

プルプルと腕を震わせ、さらに伸ばす

取って、食べて、戦う

トランクス達と共に敵と戦う

その一心で、仙豆を掴みにいく

だが、掴みそうになったその瞬間

パアアアアアアッ！

「え？え？これって……」

刹那の全身を淡い光が包み始めた

何が起こったのだと思わず混乱するが

「……そうか！ネギ先生がパクティオーカードで！」

ネギがカード機能の一つ、『従者召喚』を使ってきたのをすぐに把握

恐らく地上まで戻し、木乃香のアーティファクトで治療するつもりなのだろう

しかし、そのタイミングは最悪

「ってマズい！まだ夕凪と仙豆が！」

このまま戦場に置き去りになってしまう

どちらも間違いなく、敵の手に絶対渡ってはならない物

せめて仙豆だけでも、と思ったのだが

「あっ……」

すんでのところで間に合わず

淡い光と一緒に、刹那の姿はこの場から消えた

さっきまでいた所の周辺に、自らの愛刀と仙豆を残して

第６３話　奪われし戦いの牙　刹那無念の撤退（後書き）

クウネル
「どうも皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「なあクウネル、ひとつ言いたいことが……」

クウネル
「ではゲストの紹介です」

エヴァ
「おい……」

トランクス
「あ、君もひょっとしてネギ君の生徒かい？」

円
「（お、ちょっとカッコいいかも）はい、そうですよ。……ネギ君のこと知ってるんですか？」

トランクス
「まあね」

クウネル
「くぎみーこと釘宮円さんと、トランクスさんのお二人です」

円
「あの、くぎみーは言わないでもらえます？」

クウネル
「はいはい、では早速コーナーを進行させまして……」

トランクス
「もうですか？」

クウネル
「今回作者時間無いんですよ、このあとがきコーナー書き始めの時点で今日の夕方ですから」

円
「なんせ間一日で本編書き上げたからね、投稿予定日守るために」

クウネル
「なのでこのコーナーもスイスイ進めちゃおう、という考えなわけです」

トランクス
「はあ……」

クウネル
「さて、今回の話ですが……」

エヴァ
「作者は有言実行という言葉を分かっていないな」

クウネル
「……え？だってちゃんと投稿予定日守ったじゃないですか、しかも早い方」

エヴァ
「私が言ってるのは内容だ、前回の予告がどうなってたか忘れたわけではあるまい？」

クウネル
「えーっと、『前半は刹那さんの場面で、後編は古菲さん達の場面』みたいな感じでしたっけ？」

エヴァ
「そうだよ」

円
「うわ、全然違うじゃん……」

トランクス
「この話全部、刹那ちゃんのとこだけですね」

エヴァ
「結局ぼーや達の場面もないし、予告内容と半分以上食い違ってるのは明らかに駄目だろ」

クウネル
「これはですね、今回も執筆中に作者が突如内容を追加してしまったようで……」

楓が叫んで刹那が雄叫び
←
ゴクアが左腕も斬りに向かう
←

刹那大ピンチにトランクス登場
←
離脱したところでネギがカードで召喚

クウネル
「このように上記の分だけを書くつもりだったんですが……」

エヴァ
「匕首〈シーカ〉・十六串呂〈シシクシロ〉の場面を急遽入れたと」

クウネル
「そういうことです」

エヴァ
「なんというか……『Z』みたいにどんどん引き延ばしていくんだよな、作者」

円
「でもいいんじゃない？内容が充実していくし、話数も増えるし」

トランクス
「それにあの武器を使ったのも、流れとしてはごく自然だと思います」

エヴァ
「いや、それ自体はとやかく言うつもりはないんだが、やっぱり次回予告と違ってくるのはな……」

注・気をつけてみます

トランクス
「とりあえず出来ることといえば、次回予告そのものの内容紹介の濃さを薄くするとか……」

円
「あ、いいですねそれ」

クウネル
「それ以外としては、ごく前半部分しか予告しないとかいうのも考えられますね」

トランクス
「じゃあ、それらを踏まえて早速……」

円
「次回予告、いってみよう！」

クウネル
「はい、さて次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「バッドタイミングでぼーやに召喚されてしまった刹那」

トランクス
「果たして、木乃香ちゃんのアーティファクトは間に合うのか？」

円
「そして、戦場に残された夕凪と仙豆は……」

クウネル

「次回の投稿予定は火曜日です」

トランクス
「このコーナーのゲストのリクエストはまだまだ募集中」

円
「みんなからの意見、待ってるよ！」

エヴァ
「では読者の諸君、次回のネギドラ！も……」

クウネル&トランクス&円
「お楽しみに！」

円
「そういえば、少し前に美砂も登場してたわね」

エヴァ
「ああ、あのＭｒ．ヘタレと一緒にな」

クウネル

「チア三人まとめて登場のリクもあったんですけど、バラバラも面白そうってことで分けて出してますね」

円

「桜子のリクはないの？私と美砂のはあったのに」

クウネル

「……あ、そういえばないですね」

注・ありましたらどうぞよろしく

トランクス

「普通の質問とかもお待ちしてまーす」

第６４話　予期せぬ窮地　動けぬ者と動かぬ者（前書き）

どうも皆さんお久しぶり、カゲシンです。前回諸事情で木曜日に投稿したため、かれこれ五日ぶりになっちゃいました。しばらくはそういった予定もないので、今週から火金投稿にちゃんと戻ります。万が一何かあったらあとがきコーナーに書きますのでご安心を。

ではどうぞ！

第６４話　予期せぬ窮地　動けぬ者と動かぬ者

「せっちゃん！」

「刹那さん！大丈夫ですか！？」

「お嬢様……ネギ先生……」

辺りの景色が一転し、上から降ってきた声

自分はネギに召喚され、地上に戻ってきてしまったのだと刹那は理解する

左手の中には、ギリギリで仙豆が握られずにいた

「急いでください木乃香さん！もうすぐ三分経つです！」

「う、うん！」

夕映にせかされ、木乃香はあらかじめ出しておいたアーティファクトを急いで使う

モニターに映った刹那の姿に、当初一同は大混乱

すっかり困惑し、どうしようどうしようと慌てふためいてしまっていた

そして、カード召喚の方法が思い浮かんだのがついさっき

本来ならすぐにネギや夕映が言いそうなものだが、事態が事態である

古に次いで続けざまにということもあり、二人ともかなり精神的に疲弊していた

「お願い！間に合って！」

扇子を振り、木乃香が涙目で叫ぶ

右腕は切断面に合わせて、既にネギが元の場所に付けている

あとは時間の問題だけ

怪我をしてから三分以内なら、その対象を完治

それが木乃香のアーティファクト『コチノヒオウギ』の能力

「お願い！」

魔力による光が、刹那の全身を覆う

もし三分過ぎていたなら、それらはこの後たちまち飛散

失敗に終わることとなる

「う、ううう……」

だが光はその場に留まり続け

「せ、せっちゃん！」

刹那の体の傷を次々と治癒させていく

それに木乃香は歓喜の表情

すんでのところでネギ達は、アーティファクトのタイムリミットをクリアした

そして当然

「う、動く……私の右腕……」

一番の重傷だった右腕も完全回復

痛みが無くなり表情が和らぐと共に、顔を横に向けて手の平をグーパー

刹那は視覚と触覚の両方から、腕が繋がってくれたのを実感した

「あ、ありがとうございます……お嬢様」

右手を地に付けて力を入れ、身体を起こす

動きは全くと言っていいほどスムーズ

数秒前まで重傷だったようには、到底見えなかった

「ううん、ええんよせっちゃん……ウチの方かて、遅くなってゴメンな？」

「いえ、こうなったのも全ては私の未熟さゆえ……お嬢様は決して悪くありません」

凛とした笑みを木乃香に返すと、刹那はすっくと立ち上がる

（こうしちゃいられない……）

「待ってせっちゃん！またあそこ行くん！？」

すると笑顔がたちまち急変

再び戦地に赴こうとする刹那を、木乃香はひどく焦った様子で呼び止めた

「……傷もこうして完全に癒えました、戦える身体なら行くに決まっています」

「でも次はウチ、あんな簡単にせっちゃんの腕治せへん！」

完全治癒は一日一回

それもまた、木乃香のアーティファクトにかけられた縛り

刹那ももちろんこのことは分かっている

「構いません、それでも私は……」

しかし、それや相手との実力差を理解したうえでも

「……あの人、トランクスさんと共に戦いたいんです」

意志が揺らぐことは断じてなかった

このまま借りを作ったままには出来ない

それは神鳴流剣士としての意地

そして、彼女自身の決意

「……ネギ先生だって戻られるおつもりなのでしょう?私も同じなんです」

ネギを一瞥し、視線はもう一度木乃香へ

「必ず生きて帰ってきます」

「……絶対やよ?」

「はい」

「……そか」

ここにきて木乃香は、もう彼女は止められないのだと悟った

しがみついたとしても、向こうはそれをふりほどいて飛んでいくだろう

ならば、と木乃香は自分なりに出来る精一杯のこと
「気を付けてな、せっちゃん……」
笑顔で刹那を送り出すことを、止めたい気持ちを押し殺して実行した
「……分かっています」
木乃香の心境を察する刹那だが、曲げることは出来ない
生きて彼女の下へ帰ることを心から誓うと、自身の翼を大きく広げ
「では、行ってまいります！」
猛スピードで飛翔
（まずは夕凪と仙豆……この二つは急いで回収しないと！）
最初入ったのと同じトンネルへ、すぐに突入していった
刹那がいなくなると、木乃香はアーティファクトを解除
通常の治癒に用いる杖を、ネギの方に向ける
「じゃあネギ君、そっちのもさっさと治すで」
「木乃香さん……本当に良かったんですか？」
「うん……ウチ、せっちゃんを信じる」

ネギのただそう答えると、杖を患部へと振った

先程の騒ぎで中断していたネギの治療が、今再開する

（早く……早く古老師の所へ！）

刹那のことについては、あらかた心の整理がついたネギ

そうすれば当然、次に考えが行くのは古達のこと

今もこうしてモニターには、ボージャックの非道なリンチに苦しむ古の姿が映っている

それにネギは背を向けて動かずにいた

もう一度あの光景を見たら、自分はどうなるか

今度は痛みすらお構い無しで、我を失って飛び出すかもしれない

故に自分を抑えるため、こうしてジッと動かず

だが、すぐにでも助けに行ってやりたいという意志も消えない

『今行ってはいけない』と『今すぐに行きたい』

反する二つが、ネギの中で激しく対立していた

両手もズボンをギュッと握り、手首周辺の血管が青く浮き出る

一同もその様子を見てか、映像に対する反応を極力抑えた
でなければ、それ一つでネギに対するとんでもない起爆剤と成りかねない
朝倉やハルナは口を手で覆い、声が漏れるのを阻止
夕映とあやかは下唇を噛みしめ、懸命に堪える
のどかとまき絵に至っては見てられなくなり、目を閉じて顔を伏せていた
そんないつ決壊するかも分からない状態で、ネギは席に着いたまま耐えているのだ
（せめて悟飯君！悟飯君が間に合ってくれれば！）
今は、先に行ってくれた悟飯を信じるしかない
ネギは耐えながら、悟飯の到着を祈った
だが、よくよく考えればこの状態はおかしい
悟飯が地下へ向かったのは、ネギ達が刹那の負傷を知る数秒前
つまり現在、あの時から三分はとっくに経っている
地上～地下の移動は一、二分もあれが容易
なのに、悟飯は姿を見せないでいた

これは薄々、既に何人かが気付いている

(何故まだ着かないのですか……遅すぎます！)

(悟飯さんに一体何が……)

夕映、あやかがそれに該当

他の者より比較的に冷静さが残っており、何とかそこまで頭が回っていた

しかし、分かっていてもこれは口に出せない

悟飯が何らかのアクシデントに見舞われてるのは明白

だとしても、ここでそれをみんなに言って何になる？

それこそ、ネギの抑えている気持ちが暴走するやも分からぬ

そのため夕映達はただ沈黙

事情を把握する者と把握しない者

どちらも、こうして機が来るのを待つしかなかった

「く、くそっ！ほどけない！」

「ほっほっほ、まんまと引っ掛かりおって」

そしてその頼みの綱、悟飯

彼は怒りと悔しさ、そして焦りを露わにして暴れていた

場所はちょうど、トンネルの出口

「まさかと思って結界を作って待っていれば……どうやら私の行動は正解だったようだ」

それを銀河戦士が一人、ブージンが両手を突き出しながら笑う

手から放たれた、魔術による結界

悟飯はそれにより、身動きを封じられていた

本来これは多人数でやる技で、こうしてブージン一人で作ると格下を止めるので精一杯

悟飯の実力を持ってすれば、瞬時に脱出が可能だ

だが、ブージンはそれを補うべく策を用意していた

そもそも、事の始まりはトランクスとの戦闘のラスト
トランクスに腹を殴られ、瓦礫へ投げ飛ばされていたブージン
しかしトランクスの焦りからか、ブージンはすぐに意識を取り戻したのだ
すぐに他の三人の誰かを援護しても良かったのだが、この時あるものを察知した
地上から戻ってくる悟飯の気だ
自らの主、ボージャックの方へと向かっていることも確認
ここで、ブージンは少々考えてみる
現在ボージャックは、辺りの気から察するに格下相手三人と戦っている
このまま戦えば全滅は容易いだろう
だが、悟飯が乱入してきたらどうなるか
自らの主が負けるとは到底考えられないが、万が一のこともある
一対一ならまだしも、他の三人が距離を取って援護射撃をすれば厄介になることは間違いない
また、せっかく痛めつけたその三人を逃がすことにもなりかねない

そこでブージンは、仲間三人の援護を後回しにして移動
地上～地下を繋ぐトンネルの位置は把握済み
ボージャックのいる場所に一番近いトンネルの出口へ先回りした
そして、その出口を覆いつくすように結界を展開
魔力を大量に込めて時間を掛け、蜘蛛の巣のような形状の強力なそれが完成した
束縛効果としては、数人分に何ら劣らない
自身の負担が大きいという欠点はあるが、悟飯を足止めできるなら安いもの
ブージンはトンネル内から死角になる場所に隠れて待機
結界の素である魔力の糸は半透明
ピッコロ達の所へ急いでいた悟飯は、その存在に気付けず
こうして今に至るわけである
「仲間を助けに行くつもりだったようだが、残念ながらそれは不可能だ」
「くそーーーっ！くそーーーーーっ！」

減っていく仲間の気を感じ、悟飯はさらに焦って暴れる

だが、いくら力を込めてもビクともしない

「下手に抗うと力を吸い取られる、大人しくしてるんだな」

「くそーーーーーーっ！」

「うわあああっ！」

「ぬぐうううっ！」

地面に叩き落とされるクリリンとピッコロ

何度受けたか分からぬその痛みに、苦しい表情

ボージャックが古にリンチを始めてから、クリリンは幾度となく攻撃を仕掛けた

気功波では、古を盾にされるのは明らか

そのため無謀と分かりながらも、ひたすら突進
そして、何度も何度も逆にやられてしまう
ピッコロもしばらくして加わってくれたが、結果はほとんど変わらず
変身したボージャックの片腕のみの攻撃に、難なくあしらわれていた
「あ、あいつめ……舐めやがって……」
「ピッコロ……まだやれるか？」
悪態をつきながら、ピッコロが何とか立ち上がる
少々遅れてクリリンも
「当たり前だ……このまま終わってたまるか」
既に影分身を出せる気すら残っておらず、疲弊しきっているピッコロ
にも関わらず、戦う気力は尽きてはいなかった
上空に浮かぶボージャックを両者共に見据え、再び構えをとる
「ちっ、しつこい奴らだぜ……」
それにボージャックは舌打ち

あの二人を腕一本で殴り飛ばし、追い返すのは容易い

だが、その度に古への攻撃を中断するのが面倒だった

（大人しくさせるか……）

「行くぞクリリン！」

「おう！」

何か良いことを思いついたのか、ボージャックは微笑

そして、クリリン達がまたもや突っ込もうとしたその瞬間

「お前らいいかげんにしろ！動くんじゃねえ！」

ボージャックが二人の方へ振り返り、思いっきり怒鳴り声をあげた

それに臆せず行こうとした二人だったが、突如その足を止める

「あがっ、あがががががが……」

「これ以上近づいてみろ！このガキの頭を砕いて今すぐぶっ殺すぞ！」

「く、古！」

「くそったれ……」

目の前には片手で頭部全体を掴まれ、宙ぶらりんのまま呻き声を上げる古の姿があった

第６４話　予期せぬ窮地　動けぬ者と動かぬ者（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「さてクウネル、今回のゲストは誰なんだ？」

クウネル
「はい、今回はこの方々です」

悟空
「おっす、オラ悟空！」

クリリン
「悟空！久しぶりだな！」

悟空
「そういやそうだな、クリリンも元気でやってっか？」

クウネル
「ＤＢ世界屈指の親友コンビ、孫悟空さん＆クリリンさんです」

エヴァ
「そういえば今回のリクは、いつもの水竜シリーズではなかったな」

クウネル
「はい、今回はさくらさんのリクエストにお応えしました」

エヴァ
「それぞれの側から一人づつみたいなパターンが多かったしな、なかなか良いんじゃないか？」

悟空
「あれ？でも二つくれー前に、四人まとめてピッコロ大魔王の子分が……」

クウネル
「まああれは例外にしておきましょう」

エヴァ
「一応二人組出演ではこれが初めてなわけだしな」

クリリン
「ついにおれも出演か……天津飯やヤムチャさんが先に出ちゃって焦ってたんだよなぁ」

エヴァ
「確かに随分遅れて登場になったな……このリク以前にあいつは二件貰ってたはずだろ？」

クウネル
「どうも作者が、どちらとも書きづらいってことでこれを採用したらしいです」

エヴァ
「えっと……三角関係のと狼コンビのだよな？」

クウネル

「はい、まず三角関係のは『今の状況が状況なので、非常に書く内容に困ります』ってことらしいです」

エヴァ
「第５８話のアレとかな、もう少し整理が必要ってことだろ？」

クウネル
「はい、次に狼コンビなんですが……」

注・男狼あんま見たことないんで、書くのが大変と判断いたしました

クウネル
「というわけなんです」

エヴァ
「アックマンを散々書いといて何をぬかすかあいつは……」

クウネル
「でもアックマンさんは、ゲームに使用キャラとして出演してますよ」

エヴァ
「だったな、そういえば……」

クリリン
「なあなあ、俺達もいい加減混ぜてくれよ」

悟空
「オラ何だか腹減ってきたぞ……」

エヴァ
「お前は食うことばっかりか！」

クウネル
「でもまあ、放置していたのはいけませんでしたね……コーナーを進めましょうか」

エヴァ
「うむ、今回の話は……まあ前回よりは次回予告の内容を守ったな」

クウネル
「真っ先に出るのがそれですか……」

エヴァ
「前回の大外れぶりを考えればお前も分かるだろ？」

クウネル
「まあそうですけど……」

クリリン
「今回はどのくらい次回予告と一緒だったんだ？」

クウネル
「えっとですね……『刹那さんが治るか否か』の点では当たりです」

エヴァ
「ただし、『仙豆と夕凪は一体どうなるのか？』の点ではやや外れのようだな、まったく……」

悟空
「つまり半分は合ってたんだろ？ならいいじゃねえか」

エヴァ
「次回予告は全部合っててこその次回予告なんだよ！お前だって今まで嘘の予告なんてしたことないだろ！」

悟空
「まあそうだけどよ……」

クウネル
「はい二人ともストップ、これ以上話すとややこしくなります」

クリリン
「それにしても悟空、お前出番少なくて残念だよな」

エヴァ
「いきなり話を変えたな……」

クウネル
「まあ時間軸がセル編直後のですからね」

悟空
「ん？別にオラ気にしてねえぞ、まあネギ達と戦えねえのはもったいねえとは思うけどな」

クリリン
「そっか、ならいいんだけどよ……」

悟空

「それに、この大会編が終わったらあの世で……」

クウネル
「すいません悟空さん、その話は後でお願いします」

悟空
「え、何でだ？」

クウネル
「そろそろ時間が押してますので次回予告を……」

エヴァ
「別に時間の概念はこのコーナーにはないだろ」

クウネル
「作者の時間の方がです」

エヴァ
「……はいはい」

クリリン
「ってわけで、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「今すぐこいつを殺すぞと脅され、動けなくなったピッコロ達」

クウネル
「それに対し、二人がとった行動とは……」

悟空

「トランクスの方も大分白熱してくるみてえだぞ」

クリリン
「でもトランクスは前に一回勝ってるじゃないか、今度も向こうが負けるに……まさか！」

クウネル
「というわけでネギドラ！第６５話、投稿予定は金曜日です」

エヴァ
「では読者の諸君、次回のネギドラ！も……」

クウネル＆クリリン
「お楽しみに！」

悟空
「ぜってー見てくれよな！」

エヴァ
「で、あの時何て言おうとしたんだ？」

悟空
「大会編が終わったら、あの世での話も何話かやるみてーなんだよ」

クリリン
「なるほどな、その時に悟空が活躍するわけか」

クウネル
「やる内容は今のところ秘密です、ですがヒントを言うならば……」

注・パイクーハンや四人の界王、その他大勢が大集合です

エヴァ
「大ヒントすぎだろ……」

第６５話　クリリンの決意　俺はあの時守ると誓った！（前書き）

一日遅れです、すいません。風邪は治ったんでご心配なく（活動報告参照）。来週からはちゃんとやります。

ではどうぞ！

第６５話　クリリンの決意　俺はあの時守ると誓った！

「あがっ、あがががが……」

「ほれ、大事な仲間がアッサリと死んでもいいのか？」

「古！」

ボージャックがとった行動に対し、クリリンとピッコロは動けない

敵の右手はガッシリと古の頭を掴んでいた

そして僅かに力を入れるだけで、断末魔の一歩手前のような悲痛な声

「き、きたねえぞ！」

「きたない？俺のことを言ってるのか？」

「他に誰がいるんだ！」

クリリンはその場から動かず、ボージャックへと声を荒げる

ボージャックは涼しい顔で言葉を返し、それが神経を逆撫でさせた

「古は重傷で戦うのはもう無理だ！そんだけすりゃ充分だろ！？」

「ダメだな。こいつも含めお前達は俺をコケにした、その罪はこんなもんじゃ済まされやしない」

「ががががが……」

クリリン達から受けた奇襲を思い出したのか、ボージャックの顔にピクリと青筋

力がもう少々加わり、古をさらに苦しめる

「や、やめてくれ！」

「動くんじゃねえって言ってんだろ！」

思わず一歩踏み出たクリリンを、ボージャックは大声で怒鳴った

さらに古を前に突き出すと、加える力をまた増す

「ごっ、ごがががががが……」

「お前達はそこから一歩たりとも動くな！こいつの命は俺が握っているのを忘れるな！」

「く、くそ……」

クリリンは足を止めざるを得ない

進めた足を戻し、拳をワナワナと震わせた

一方のピッコロもクリリン程ではないが、酷く焦りを見せている

（マズい……奴は本当に、あの古とかいうガキを殺すつもりだ）

そして向こうがとってきた行動に、十数年前の記憶が呼び戻された

（あいつがやったのと同じことをされるとはな……皮肉なもんだぜ）

神との融合する前の自分の父、ピッコロ大魔王

彼もかつて敵に対し、同様に人質をとって殺すと脅しをかけたことがあった

人質は疲労困憊だった天津飯、そして敵は幼少期の孫悟空

悟空は当然動けず、そのまま激しく痛めつけられることとなる

最終的にピッコロ大魔王は敗れはしたが、あの作戦自体は絶対的な効果を持っていた

そして目の前で起こってるのは、まさにそれ

かけ離れた実力差や、殺す優先順が古からである等少々の違いはあるにはある

だが、目的そのものは変わらない

（俺達がどう動こうが関係なく、結局ここにいる全員は皆殺しにするつもりだ……）

当時の大魔王の記憶を持つからこそ、これには確信があった

もしあのまま孫悟空に勝っていたら、間違い無くそうするから

（悟飯、ネギ……まだなのか！）

未だ戻ってこない二人

ピッコロは気を探ってみるが、近づいてくる様子がない

（ネギはまだ地上、悟飯は……誰かと交戦中か、くそっ！）

「ががががががが……」

「このまま仲間が苦しむ姿を、指をくわえて見てるんだな」

「古！古！」

向こうは少々力を抑えたようだが、それでも威力は絶大

古は抵抗すら出来ず、ただただ苦しんでいた

（今出来るのは……こうして大人しくしていることだけか）

ヘタに動かなければ、しばらく向こうは古を殺しはしないだろう

理由は簡単、自分達が苦しむ様子を楽しんでいるから

その気になればアッサリと古を殺し、こちらへ牙を向けてくるのは簡単なこと

だが奴はそうしてこない

そのことから、推測は容易に出来た

(悟飯達が来てくれればまだ分からない、それまではこうするしか……)

全員が助かる道はない

無論、そうなる可能性は決して高くはない

ボージャックが気まぐれで、この後すぐに古を殺すことも

悟飯達が結局来れないことも

来たとしても、ボージャックがそのまま人質をとり続けることも

全て否定は出来なかった

(耐えるしか……今は耐えるしかないんだ!)

悔しさを押し殺し、ピッコロはその場に踏みとどまる

クリリンも無駄だと悟ったのだろうか?

叫ぶことをやめて沈黙、俯いてしまった

古の苦しむ声だけが辺りに流れる

「あが、あがががががが……」

「……になる」

「ん？今何つった？」

だが、そこへクリリンの呟きが入り込んできた

聞き取れなかったボージャックは、眉をひそめて聞き直す

「……俺が」

クリリンは顔をガバッと上げ

「俺が古の代わりになる！だから古を放せ！」

「なっ！？」

隣にいたピッコロも、これには仰天

（ク、クリリン……）

古も、声は出ぬものの思わず目を見開く

「そいつは殆どお前に何もしちゃいねえ！やるんだったら俺のはずだろ！？」

「……」

「だから！だから古を！古を解放してくれ！」

クリリンが言ってきたのを、ボージャックは無言のまま聞いていく

これにはピッコロもたまらず

“おいクリリン、何考えてやがる！バカな真似はよせ！”

テレパシーでクリリンへ叱咤した

（俺は、あいつを守るって誓ったんだ……）

だが、クリリンの意志は揺るがない

“あいつは、最終的に俺達全員を殺すつもりでいるんだぞ！”

（分かってるさ……でも今俺が代わってやれば、古の助かる可能性は少しだが上がる）

クリリンも、ボージャックの目論見は承知

そして悟飯の到着が、何者かによってひどく遅れていることも

（俺が奴にやられている間、少なくともその間は古は安全だ……あとは悟飯達が来れば問題ない）

“分かってるんだろうなクリリン……悟飯が遅れた時、真っ先に死ぬのはお前なんだぞ”

（代わらなかったら、それこそ古が一番に殺されちまう）

“もしそうなってもあいつはドラゴンボールで生き返る、だがお前

は……”

地球のドラゴンボールは、同じ願いを再び叶えることは出来ない

過去に生き返ったことのあるクリリンは、もう死んだら蘇生は不可能

そのことを忠告するピッコロなのだが……

“そん時はナメック星のドラゴンボールで頼む、あれなら俺でも大丈夫だ”

やはりクリリンの決意は変わらない

確かに本場ナメック星のドラゴンボールを使えば、自然死でない限り何度でも生き返れる

二度目の死を迎えたクリリンと餃子も、これによって生を取り戻せた

“だがその場合、ナメック星へ行くのにドラゴンボールの願いが必要だぞ”

（古達を元の世界へ帰した後になるから、一年先だな）

現在ナメック星人は、前とは違う新ナメック星での生活を営んでいる

元あった本来のナメック星が、フリーザの手によって消されたためである

これにより地球にある宇宙船では、新ナメック星のデータが入ってないため行くことが出来ない

ドラゴンボールの願いで移動させてもらうほか無いのだ

“お前はそれでいいのか？”

（その間は悟空と、仲良くあの世で暮らしとくさ）

それに、とさらにクリリンは続けた

（『死』なんておそろしいもの、古には絶対味合わせたくない）

もう一度言うが、クリリンは既に二回『死』を経験している

だからこそ、この言葉にはとてつもない重みが感じられた

（俺が絶対死ぬって決まったわけじゃないしな、心配は無用さ）

“……そうか”

ピッコロはクリリンの気持ちを汲み取り、テレパシーを切る

クリリンは改めてボージャックを見上げ

「頼む！俺を代わりに！」

大声で懇願した

しかし返ってきたのは

「やだね」

「「！！」」

提案の拒否

「こっちからやるってもう決めたんだ、順番は守らないとな」

「がっ、ごがががが……」

また力が強まり、古の言葉にならない声

「た、頼む！頼むよ！」

クリリンはひどく焦った様子で、再び懇願

ここでボージャックが応じてくれなければそこまで

古はこうして、死に一番近い位置にあり続けてしまう

「お願いだ！俺を古の代わりに！」

「しつこいぞ」

「古を！古を……」

いつしか両目には雫が溢れ

「いいかげんにし……」

「古を放してやってくれよーーーーーーっ！」

泣きの入った声で、クリリンは声を荒げていた

「このおおおおおおっ！」

振り下ろされる両刃剣

そのスピードは、目の前の相手と最初に戦った時よりずっと上

銀河戦士ゴクアは、怒りに満ちた攻撃を次々と繰り出してきていた

『怒り』

それは、人を強くも弱くもする諸刃の感情

ゴクアの場合は後者

パワーは限界まで解放され、それでいて戦いにおける最低限の自

我は維持

目の前の相手、トランクスとの力量差はかなり縮まったと言えよう

しかし

「当たるか！」

トランクスが上に位置することは変わりない

高速で横へ移動し、瞬時に回避

攻撃はただ空を切るのみ

「はあああああっ！」

「ぬぐっ！」

ゴクアの左横に位置したトランクスは、即座に気合砲

横腹への衝撃とともに、ゴクアはぶっ飛ばされる

トランクスはそのまま飛んだ先へ回り込み

「せやあああ！」

「ぐぬううっ！」

ガードに使ってきた右腕ごと、ゴクアの胴体へ回し蹴りを決めた

走る痛みをゴクアは堪え、右手に握る剣は死守

「舐めるなあああああっ！」

トランクスの脚を押しのけ、ゴクアは反撃

身体を真っ二つにせんとばかりに、剣を横へと薙ぎ払う

「無駄だっ！」

「なっ！？」

が、そこにはトランクスの姿は既に無く

「お前の攻撃はもう……」

頭上へと移動していた

「見切ったんだ！」

「ぐわあああああっ！」

両手を組み、叩き込まれるハンマー打ち

トランクスの姿を目視すると同時に、それは炸裂

直撃し、猛スピードで真下へ叩き落とされた

チュドーーーーーン！

立ち昇る土煙

その量や音の大きさから、かなりの落下速度だったと分かる

（よしっ！今のはかなり効いたはず……）

これで死んだとは到底思えないが、大ダメージは必至

向こうの攻撃、剣の太刀筋や気功波攻撃は完全に見切っている

（この勝負、もらった！）

トランクスは勝利を確信した

「とどめだ！バーニング……」

手に気を集め、必殺技でフィニッシュを決めようと試みる

だが、そんな時土煙から突如

「お前なんかに、負けるかあああああっ！」

ゴクアが気を全身に纏って復活

右手に持った剣を振り上げ、猛進してきた

「何！？もう起き上がってきたのか！」

敵のタフさに思わず感心するトランクス

「だが構うものか……バーニングアタック！」

その直後、出来上がった光弾をすぐに射出した

（さあどうする？考えられる方法は三つ……）

横へ避けるか、気功波で相殺するか、その剣で両断してそのまま来るか

（どれを選ぶにしろ、その直後には致命的な隙が生まれる……そこへ重い一撃を喰らわせてやる！）

トランクスは身構え、右手に力を込めていく

そしてゴクアの選択は

「避けるまでもねえええっ！」

『剣で両断』

振り上げていた刀で、バーニングアタックを縦へ半分に切り裂いた

（今だ！）

トランクスはそれを確認しながら、高速でゴクアへ接近

剣が届かない左横へ

（喰ら……！！）

拳を打ち込もうとするが、突如中止
ある物を目にし、慌てて後退した
「きえええええええっ！」
「くっ！」
攻撃していた場合、トランクスの首があった空間
そこへ弧を描いて一閃が通り抜ける
当たりはしなかったが、トランクス手には大量の汗が
「ちっ、ギリギリで気付きやがったか……」
ゴクアは舌打ちし、それぞれに持つ『二本』の刀をそれぞれ構え直した
「な、何故それを……」
「これか？さっき落ちてたのを拾ったんだ、今日の俺はツイてるぜ」
右手には、自らが使いこなす両刃剣
左手には、桜咲刹那の愛刀『夕凪』
ゴクアの心に合わせたかのように、それぞれの刃が妖しく光る
「二刀流なら、そっちも見切れないんじゃねえか？あ？」

超大戦の戦局は、再び揺らぎ始めていた

第６５話　クリリンの決意　俺はあの時守ると誓った！（後書き）

クウネル
「どうも皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「今回久しぶりに投稿予定が狂ったな」

クウネル
「まあ作者も人間ですからね、たまにはあってもおかしくないんじゃないですか？」

エヴァ
「だがここ最近ずっと守り続けてただけに、やはりマズい感が私には……」

クウネル
「ちゃんと活動報告には書いてありましたよ？」

エヴァ
「あれを見る奴なんか殆どいないだろ……活動報告書いたの自体一ヶ月ぶりだし」

注・体調管理に気をつけ、次からはちゃんと守ろうと思います

クウネル
「守るも何も、作者が勝手に取り決めを作ってるだけなんですがね」

エヴァ

「それは置いとくとしてだ、今回のゲストはどうなってる？」

クウンル
「今回は水竜さんのリクエストで、出すの躊躇してたシリーズから……」

エヴァ
「そんなシリーズいつ作った？っていうか、もしかしてあの……」

クウネル
「イノシカチョウさん&ボンゲボンゲの珍獣コンビです！」

イノシカチョウ
「ど、どうもです」

ボンゲボンゲ
「……」

ズシーンズシーン

エヴァ
「今すぐ帰らせろ！」

クウネル
「え？ゲストがいなきゃコーナーが……」

エヴァ
「今回は私達だけでいい！さっさと追い返せ」

クウネル

「そこまで酷いこと言わなくても……ねえ？」

イノシカチョウ
「そうですそうです！僕ちゃんとトークしますもん！」

ボンゲボンゲ
「……」

ズシーンズシーン

エヴァ
「そこの合成動物はまだいい！問題はお前だ！」

ボンゲボンゲ
「？」

ズシーンズシーン

クウネル
「まあ出し渋っていた一番の原因ですからね」

エヴァ
「こいつなんかでコーナーが成り立つか！っていうかさっきから『ズシーンズシーン！』って何だよ！」

イノシカチョウ
「えっとほら、ボンゲボンゲさんって喋らないでしょ？」

クウネル
「鳴き声があったかすら作者的に記憶が微妙なので、動いた時に発

生する地響きを導入しました」

エヴァ
「ＤＶＤ借りて見直せ作者！」

クウネル
「というわけで今回の話ですが……」

エヴァ
「ああもう！結局やるのかよ！」

イノシカチョウ
「１００％予告に忠実でしたね、ああ良かった」

エヴァ
「合ってて当然だからな、普通」

ボンゲボンゲ
「……」

ズシーンズシーン！

クウネル
「ボンゲボンゲも喜んでるみたいですね」

イノシカチョウ
「ホントホント」

エヴァ
「三点リーダと『ズシーンズシーン！』だけで分かるか！読者は文

字だけだぞ！」

クウネル
「まあまあ、そこは穏便に……」

エヴァ
「出来るか！」

イノシカチョウ
「あ、そういえばトランクスさんって原作の映画とは違いますね」

エヴァ
「ん？どこがだ？」

クウネル
「剣を持ってないところですね、本来ならベジータさんが登場と同時に渡すはずだった」

エヴァ
「ホントだな、ベジータ登場のくだりでも出てこない……作者のミスか？」

クウネル
「いえ、違うみたいです」

注・結局原作でも剣で攻撃しなかったんで、無くても一緒かなーと思って出しませんでした

イノシカチョウ
「そういえば装着してそれっきりでしたね……」

エヴァ
「でも相手は剣術使いだぞ？やっぱりあったほうが良かったんじゃ……」

クウネル
「『それだと、二刀流に対する苦戦度が低くなりそうなので』とのことです」

エヴァ
「結局作者の都合なわけか……」

イノシカチョウ
「では、次回予告行きましょうか」

クウネル
「はい、さて次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「二刀流相手に丸腰のトランクス、突然の大ピンチだ」

クウネル
「そこへ刹那さんが戦線復帰、果たしてトランクスさんの助けになるのか？」

イノシカチョウ
「それと、クリリンさん達の方も大変なことになっちゃいます！」

エヴァ
「次回投稿予定は火曜日、今度こそ守れよ作者」

注・頑張ります！

クウネル
「感想、リクエスト、質問は大募集中」

イノシカチョウ
「では皆さん、次回のネギドラ！も……」

エヴァ&クウネル
「お“ズシーンズシーン！”に！」

イノシカチョウ
「あ……」

クウネル
「あーあ」

エヴァ
「……こらあああああっ！」

ボンゲボンゲ
「！！」

エヴァ
「やっぱり帰らすべきだったんだ！ていうかいますぐこの場で消してやる！」

ボンゲボンゲ
「！！」

ズシーンズシーン！

エヴァ
「逃がすかあああああっ！」

イノシカチョウ
「結局補助メンバーいらなかったですね」

クウネル
「ですね」

注・実はイノシカチョウの口調に自信が持てません、違ってたらご指摘の方よろしくお願いします

エヴァ
「最後の最後でこれかい！っていうか待てーーーー！」

ボンゲボンゲ
「！！　！！」

ズシーンズシーンズシーンズシーン！

第６６話　戻ってきたぞ翼の剣士　そしてボージャックが古を！（前書き）

どうもカゲシンです。体調管理は先週の風邪に懲りてしっかりとやってます。学業と両立させながら頑張りますのでどうぞ今度ともよろしく。

ではどうぞ！

第６６話　戻ってきたぞ翼の剣士　そしてボージャックが古を！

「そらそらそらそらそらあっ！」

「く、くそっ！」

迫りくる二つの刃

その変則的な動きに、トランクスは完全に翻弄されていた

一本の時と違い、太刀筋が全く読めない

そのため迂闊に近づくことも出来ず

「はあああっ！」

「そんなもん効くか！」

かと言って気功波で攻撃しても、簡単に剣で凌がれてしまう

するとそこから一気に、ゴクアは距離を詰めてきた

「だあああああっ！」

右手の剣で斜めに切りかかる

喰らってたまるか、とトランクスは左腕でガード

最初と同じく気を集めて防御力を上げたため、斬られることなく攻撃を阻止

このまま、残る右腕でパンチの一発でも喰らわせてやりたいところ

しかし、そうは言っていられない

トランクスはすぐさま剣を撥ね退けて後退

そう、ゴクアにはもう一本

「せいいいっ！」

左手に持つ夕凪の攻撃が残っていたのだ

腰辺りに狙いを定め、横に振り抜く

「っ！」

すんでのところで直撃は回避

あとコンマ数秒遅ければ、確実に胴体を両断されていただろう

「ちっ、上手いこと避けやがって……いや、そうでもねえな」

「ぐぐぐぐ……」

しかし、あくまで避けたのは直撃

数センチに渡り、夕凪の刃はトランクスの横腹を抉っていた

右の脇から血が溢れ、上下の服をそこから赤くさせる

刹那ほどでないにしろ、出血はかなりの量だった

「次は外さないぞ、覚悟しやがれ」

（このまま戦ってたんじゃ勝機はかなり薄い、やはりアレしかないのか……）

自らの劣勢を把握し、次なる手を思い浮かべる

それは準決勝でピッコロ相手に使った、超サイヤ人を超える超サイヤ人への新たな変身

だが今のトランクスでは、これはかなりリスクが高い

その原因は、残っている気の量

まだ制御が完全でないその変身は、気を大量に消費してしまう

下手に攻撃中に尽きてしまえば、それこそ変身が解除されて一巻の終わり

あの時ピッコロ相手に使ったのも、かなりの博打だった

しかも現在は長時間に渡る連戦により、ピッコロの時よりも気を消耗している

変身時間は、おそらく一分持つかどうか

それに脇腹の傷もある

仮に勝てたとしても、変身後の残った体力で無事帰れるかどうか

保障は出来ない

地上の木乃香の所へ戻る前に、出血多量でダウンも充分あり得た

（だが今のままじゃ勝つのは厳しい、どうする……）

変身するか否か

じっくり考えたいところだが、生憎そんな時間は残されていない

「ぜやあああああっ！」

ゴクアがフィニッシュを決めようと、猛然と襲いかかる

（……やるしかない！父さんだったら間違いなくそうする！）

ようやく腹を決めたトランクス

ゴクアを真っ直ぐに見据えて構え

「はあああああああああ……」

気を上げ、変身を行う

超サイヤ人をさらに超えた超サイヤ人

『超サイヤ人2』へ
ところが
「流星　羽気嵐！」
「「！？」」
変身が完了する前にそれは起こった
「ぬ、ぬおおおおおおっ！」
ゴクアの右横から突如やって来た無数の気弾
流星群を思わせるそれらは、次々とゴクアに命中していく
何事かと思って横に顔を向けた直後のこと
流石に防ぎようがなかった
「こ、この技は……まさか！」
思いもよらぬ事態に、トランクスは変身を中断
慌てて気弾が飛んできた方向へ目をやった
「せ、刹那ちゃん！？」
ここから大分離れてはいるが、あの純白の翼が何よりの証拠

復活した桜咲刹那がそこにはいた

「な、何だ今のは？しかもあの声は……って！？」

攻撃を耐えきり、もしやと思って攻撃者を確認しようとするゴクア

しかし、そんな暇すら刹那は与えない

「ぐおおおおおっ！」

間髪入れずに第二陣の気弾を放ち、ゴクアへまたもや命中させた

それらをガードされる間にも、さらに刹那は第三陣を準備

「ぐっぞーー！どこの誰がやりぬごおおおおおっ！」

防ぎきったところへ、またもや連続で放たれていく

刹那が精神と時の部屋で会得した必殺技『流星　羽気嵐』

自身の翼全体に気を込め、羽の一枚一枚から気弾を放って大量に浴びせるというもの

予選のピッコロ戦でも用いられたこの技は今、ゴクアの動きを完全に止めていた

「凄い……け、けどダメージが全然……」

思わず感心するトランクスだが、すぐにこれには気付いた

ゴクアが変身している時点で、既に両者の力量差は明白

確かに動きこそは止めているものの、ダメージというダメージは全く見受けられない

「そうか！今の内にこっちが奴に攻撃をすれば……」

有無を言わさず直撃、そして勝てる！

刹那の行動の意図を理解し、トランクスは早速行動に移ろうと試みる

「うっ！こ、こんな時に……」

ところが、ここへ来て脇腹の傷が一層痛み出してきた

普通、剣先数センチで腹を抉られれば致命傷

どうも内臓の一部もやられたようで、それがここに来て効き始めていた

「しまった……奴が喰らった後すぐにでも攻撃していれば……」

これでは気も充分に練れず、トドメになるような攻撃は不可能だろう

（刹那ちゃんが危険を冒してまで、ああしてくれてるというのに……くそっ！）

けど、やれるだけのことはやってやる

そう決意したトランクスは、不充分なままの威力で気功波をぶつけようとするが

「待って！待ってくださいトランクスさん！」

「え？」

そこへ近くから刹那の声

初めから視界にあるゴクアは、未だ気弾の嵐を喰らい続けている

そして刹那はもちろん、最初の場所から動かずに攻撃中

一瞬どういうことか理解出来ず、トランクスは混乱

「ここです！トランクスさん！」

再び呼ばれ、トランクスは声の方向へ恐る恐る振り向く

「……え？刹那ちゃん？」

「ちびせつなとお呼びください」

そこには、全長十センチ程しかなく、デフォルメされた二頭身の刹那がいた

「頼む！頼む！頼むよ！」

時をほぼ同じくし、クリリン達

自分が古の身代わりとなり、古の助かる可能性を少しでも伸ばす

死をも覚悟したクリリンの案だったが、ボージャックは拒否

未だ彼の右手には古の頭が握られ、ジワジワと痛めつけていた

それでもクリリンは諦めず、こうしてずっと声を荒げながら懇願している

「古が死ぬところなんか見たくないんだ！やるなら俺を先にやれ！」

「いい加減静かにしないと、今すぐこの頭ぶち砕くぞ！分かったら黙りやがれ！」

何度言っても聞かないクリリンに苛立ちを覚え、ボージャックは叱咤

古の頭を、さらに強く締め上げてみせる

「ぐがっ、ごががががっがが……ク、クリリン……」

「く、古……」

その後黙り込み、クリリンはペタンとその場に膝をついた

（やはり、無理だったか……）

隣のピッコロは、苦々しい顔で両者を交互に見る

あのボージャックに、弱者の要求を受け入れる程の器があるかどうか

答えはノー

大量殺戮を繰り返してきた彼に、そんな慈愛の精神など欠片もない

ピッコロも薄々そんな気はしていたが、やはりこうなってしまった

（しかたない、いざとなったら何とか俺達だけでも逃げ……！）

次なる最善策を考えようとするが、クリリンの姿が目に入って思わずその思考が止まる

膝を地に付けていたクリリンは、そのまま姿勢を低くして手と頭も地面へ

「……頼む、古を放してくれ」

ボージャックに向かって土下座したまま、クリリンは声を絞り出

した

「何をやってるんだクリリン！そんなこと奴にしなくてもいい！」

「頼む……いや、お願いします……」

我に返ったピッコロがすぐに止めようとするが、クリリンはその行為を続ける

何としてでも古を

あの時誓ったのだから

そのためには手段は選ばない

クリリンの堅い意志が、こうしてそこに形となって存在していた

「さっきのを見て分かっただろ！奴に古を解放する気なんて微塵も……」

「ハッハッハッハッハッハ！」

それでも止めさせようとするピッコロ

そこへ、ボージャックの笑い声が大きく響き渡ってきた

そのあまりの大きさに、ピッコロは顔をクリリンからそちらへ

「まさか土下座までしてくるとはな、こりゃ傑作だ！アッハッハッハッハ！」

「あ、あいつ……」

奥歯をギリリと鳴らし、両拳を力強く握り締める

今すぐ飛び掛かってやりたいところだったが、ピッコロはそれを必死になって抑えた

そうしたとしても勝ち目はない

それに

（ここでそんなことをすれば、あいつは……）

古は即座に殺されてしまうだろう

そうなれば、ピッコロはクリリンに顔向け出来ない

せめてもの抵抗とばかりに、殺気を込めてボージャックを睨みつける

「面白い、そこまで死にたがりなら交代させてやる！」

「何！？」

が、このボージャックの言葉にその殺気は消滅

たちまちその目は見開いてしまった

（今奴は何と言った？『交代させてやる』だと？）

「……ほ、本当なのか？」

これには当然、クリリンも驚きを隠せない

地につけていた頭を上げ、ボージャックと目を合わせた

「ああ、こいつはどうせ逃げることも出来まい。だったら死にたがってるお前からさっさと殺ってやる」

「あ……」

クリリンは再び涙をこぼすと、もう一度頭を地面へ

「ありがとう……」

自分の要求を通してくれたボージャックへ、心から礼を述べる

「本当に、すまない……」

「手渡しなんて面倒なことはせんぞ。俺の真下まで来い、今からこいつをそこへ落とすから受け止めろ」

「わ、わかった！」

言われるがままに、クリリンは立ち上がって移動

ボージャックの真下まで急いで走り出した

（お、おかしい……何故いきなり奴はこんなことを言う？）

そんな中、ピッコロ一人は硬直

ボージャックのこの言動がとても信じられず、ただただ頭を働かせていた

（クリリンがああして近づいてきても、奴は古を殺してない……ということは……）

「古！」

「ダメ……クリリン死んじゃうの嫌アル……」

（クリリンを接近させるのが目的！？）

見てみると、既にクリリンはボージャックの真下へ

真上にいる古と会話を交わしている最中だった

（そして、俺とクリリンの離れた距離……しまった！）

「落とすぞ、そら」

「古！」

「ク、クリリン……」

ボージャックは古をクリリンの所へと落とす

舞空術をする力すら、今の古には皆無

ただ重力に身を任せた自由落下

クリリンはそれを受け止めようと、落ちてくる古だけをジッと見据えていた

「クリリン！そこから今すぐ離れろ！」

すぐさまピッコロは叫んだが、もう遅い

ギュオオオオオオン

「はあああああああああっ！」

バッシュウウウウウウウッ！

「……え？」

丁度両者の間に位置する古の身体を壁にし、ボージャックは右手に気を集中

強烈なエネルギー波を、真下へと一直線に発射した

クリリンはというと、何が起こったのか頭で整理出来ずフリーズ

古を飲み込み、次に自分へと迫るエネルギー波を棒立ちでそのまま見ているのみ

「くっそおおおおおおっ！」

ピッコロは反射的に飛び出していた
距離的にはかなりギリギリ
下手をすれば、自分も一緒にあれの餌食
ピッコロはそれでも、クリリンを助けに駆ける
「だあああああっ！」
ズキズキと痛む全身に鞭を打ち、残っていた気を身体能力の強化にあてる
それによって何とか、エネルギー波よりも先に間に合った
飛び掛かるようにして、両腕でクリリンを確保
凄まじい勢いで、地面へズザザザと擦れながら倒れ込む
チュッドオオオオオオオオオオンッ！
その次の瞬間、後ろでは大きな爆発音
少しでも遅ければ、自分達もあれに巻き込まれていたのだ
「バカかお前は！何ボサッとつっ立ってやがる！」
冷や汗を一筋流し、その後すぐに激昂
未だ放心状態のクリリンへ、大声で怒鳴り散らした

「……」

そのクリリンは、さっきまで自分がいた場所へ顔を向ける

爆発による煙は徐々に晴れていき、次第にその中にいる一人の人物が目に入ってきた

「……く、古！」

直後、クリリンは覚醒

ピッコロの両腕をどかし、すぐさま立ち上がる

「おいクリリン！今行っては……」

「古ーー！」

そして爆発が起きた中心へ、有無を言わさず走り出した

「古！古！」

しゃがみ込み、目の前の少女へと声を荒げながら呼びかける

そこには全身ボロボロと化し、うつ伏せのままほとんど動かない古の姿があった

「古ーーーーー！」

第６６話　戻ってきたぞ翼の剣士　そしてボージャックが古を！（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「今回はちゃんと締め切りを守れたな、作者」

クウネル
「まあそう何度もしくじれませんからね」

エヴァ
「さて、今回のゲストはどうなってるんだ？」

クウネル
「はい、今回はこの四人です」

月詠
「どうも読者の皆さん、おはつにー」

クウラ
「まさかフリーザなんかに先を越させるとはな……まあいい、あいつみたいな無様な姿は晒さんぞ」

サウザー
「こうしてクウラ様と共演できるとは……クウラ機甲戦隊サウザー、大変嬉しく思います」

ナッパ

「へっへっへ、ベジータよりも先に出演出来たぜ……」

エヴァ
「……えっと、ちょっといいか？」

クウネル
「はい、なんですか？」

エヴァ
「こんな組み合わせリクエストにあったか？」

クウネル
「ありましたよ、ちゃんと水竜さんシリーズで」

月詠
「これですー、八月十三日に送ってきてくれはりましたー」

エヴァ
「三か月近く前って……リクエスト募集始めた最初の頃のやつだよな、えっと……」

クウネル
「すっかり作者も忘れてたみたいです」

エヴァ
「『月詠と地獄にいる悪人の強い奴と雑魚　（バトッてもらいましょう）』……それでこのチョイスか？」

クウネル
「強い奴（クウラ）と雑魚（ナッパ）、あと剣繋がりでサウザーさんもついでにお呼びし

ました」

ナッパ
「何！この俺様が雑魚だと！？舐めてんのかコラ！」

エヴァ
「いや、だって雑魚だろお前」

クウネル
「この作品のパワーバランスの場合、普通にトリップ直後のネギ君達で勝てますよ」

ナッパ
「ふざけんじゃねえ！俺様があの時のままだとでも思ってんのか！？」

月詠
「じゃあ強いんどすかー？」

ナッパ
「当ったり前よ！お前みたいな小娘には絶対負けねえぞ！」

月詠
「じゃあ、勝負してみますー？」

ナッパ
「上等だ！」

クウネル
「というわけで、お二人が戦っている間にコーナーを進行させまし

よう」

エヴァ
「前にもあったな、こんな展開……」

クウネル
「さて、今回の話ですが……」

サウザー
「どうも若干、いつもより文量が増えたようだな」

エヴァ
「だな、前半と後半で文字数に大分差がある」

クウネル
「最初はそれぞれ同じくらいにするつもりだったみたいなんですけどね……」

エヴァ
「やはりクリリン達のところか……この作者はどんだけそこに力を入れるつもりなんだよ」

クウネル
「別に他キャラと贔屓してるつもりはないそうなんですがね」

注・一番書きたかった場面なので、つい長くなっちゃいました

エヴァ
「……それがいわゆる贔屓じゃないのか？」

月詠
「でも今回のセンパイ、カッコよかったですー」

エヴァ
「ってうおっ！？」

クウラ
「いつからそこにいたんだ！」

月詠
「少し前からいましたー」

クウネル
「あ、向こうでナッパさんがズタボロになってます」

サウザー
「やはり戦闘力数千のままか……雑魚め」

月詠
「あのおじさん弱くてつまんないわー、他で誰か相手お願い出来ますー？」

クウラ
「サウザー、やってやれ」

サウザー
「ははっ！」

ブウウウンッ！

エヴァ
「おお、気で作った刀か」

クウネル
「エヴァンジェリンも出来ますよね、『断罪の剣』っていう同じようなのが確か」

エヴァ
「まあな」

サウザー
「言っておくが、私はあんな雑魚より何十倍も強いぞ」

月詠
「フフフフ、楽しみやわー」

サウザー
「いざ！」

月詠
「勝負！」

クウネル
「というわけで、お二人が戦っている間に次回予告を……」

エヴァ
「またそれか！」

クウラ
「では、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「話の始めはクリリン達のところだ」

クウネル
「ボージャックのエネルギー波をまともに喰らってしまった古菲さん」

クウラ
「次の話は、そいつとあの地球人とのやりとりが中心になるようだな」

エヴァ
「あいつ生きてるのか」

クウネル
「『ほとんど動かない』って書いてあったでしょ？」

エヴァ
「だったな」

月詠
「すいませーん！センパイの出番はあるんどすかー？」

サウザー
「隙有り！」

月詠
「くっ、負けへんでー」

エヴァ
「あっちはあっちでまだ戦ってるし……」

クウネル
「刹那さん達のところは未定です、ネギ君の描写が次回は入ってくるので」

エヴァ
「それの文字数次第ってことか？」

クウネル
「そのようですね」

クウラ
「サウザー！そんな小娘にいつまで手間取ってるんだ！」

サウザー
「申し訳ありませんクウラ様！しかしこの小娘、思ったよりも強いようで……」

月詠
「ざんがんけーん！」

サウザー
「くそっ！」

クウラ
「ええい下がれ！このクウラ様自らが蹴散らしてくれるわ！」

月詠

「三人の中で一番強そうな人（？）どすなー、うちワクワクしてきたわー」

クウラ
「行くぞ！覚悟しろ！」

月詠
「よろしくお願いしますー」

エヴァ
「おいおいおいおい、ついに三人ともあっち行っちゃったぞ」

クウネル
「まあ『バトッてもらおう』っていうのがあのゲストの招集理由なわけですし」

エヴァ
「結局二人で締めるんだな……」

クウネル
「というわけで、次回の更新は金曜日」

エヴァ
「感想、質問、リクエストはいつでも待っているぞ、特にリクエストは大歓迎だ」

クウネル
「出来るだけ、以前にやったのとカブらぬようお願いします」

注・一応カブってても、ちゃんと二巡目には出しますけどね

エヴァ
「では読者の諸君、次回のネギドラ！も……」

クウネル
「お楽しみに」

クウラ
「はっはっは、俺は弟よりも一段階多く変身できるのだ！」

月詠
「ウチかて、まだとっておきのこの刀がある！」

エヴァ
「……いつまでやるんだろうな、アレ」

クウネル
「さあ？」

注・一応言っときますけど、最終形態にならなくてもクウラは月詠に勝てます

エヴァ
「わざわざ言わんでもいいだろ……」

注・あと月詠の喋り方って書くの難しいですね、結構そのせいで完成がギリギリでした

クウネル
「心中お察しします」

エヴァ
「しかし久しぶりに二千字越えしたな、このコーナー」

注・ぶっちゃけこのコーナーがなければ、完成は毎回一時間半は早くなります

エヴァ
「ぶっちゃけすぎだろ！」

クウネル
「もちろんこのコーナーは最終回まで続けるつもりです。リクエスト常連の水竜さん含め、楽しみにしている読者の皆様はご安心を」

注・ではでは、また次回お会いしましょう

第６７話　古菲凶弾に散る　クリリン涙の大絶叫（前書き）

もうサブタイで分かる方も数多くいらっしゃるでしょうが、今回はそういう内容です。古ファンの方々すみません。

ではどうぞ！

第67話　古菲凶弾に散る　クリリン涙の大絶叫

「古！古！」

うつ伏せに倒れ込んでいる古へ、クリリンは泣き叫ぶ

しかし、何度叫んでも返事が返ってこない

「古！」

クリリンは古の肩を掴んで反転

身体の向きを表にし、抱きかかえながら前後へと揺すった

「古！古！古！」

「……ク、クリリン」

「古！」

すると、閉じていた古の目がゆっくりと開く

そして細々とした声でクリリンの名を口にした

そのことに喜びを覚えたが、それも一瞬のこと

目は虚ろで、顔からは全く生気が感じられない

思わず手を取ってみると、脈もひどく微弱

ある漢字一文字が、考えたくもないのに頭をよぎってきた

「古！しっかりしろ！」

「クリリン、ごめん……」

古はクリリンへ悲しそうな表情を真っすぐに向ける

「せっかくの道着……こんなに、ボロボロにして……」

この日の初めから、古がずっと身に纏っていた亀仙流の道着

今はあちこちがズタボロ破け、さらには自らが吐いた血も付着していた

「そんなのいいだろバカ！また俺が……また俺が新しいのやるから！」

「それに、こんな足手纏いになてしまって……怒(おこ)てるアルよね？」

「んなわけないだろ！俺が、俺があの時……」

動いていればこうはならなかった

変身直後のボージャックに気圧され、身体が硬直なんてしなければ

いや、出陣前に古を地上に何としてでも残していれば

その前に突入班と捜索班との分担で自分が捜索班に回ったのも、
元々の理由はそれ

古を危険な場所には極力行かせたくなかったからだ

大事な存在だからこそ、守ってやりたいと思ったからだ

なのに、なのに、なのに……

「俺が……俺が……」

「クリリン、もういいアル……」

クリリンの両目からさらに零れ出す涙

その内の一滴が古の頬に落ち、それに合わせて古が言った

「悪いのは、全部……力不足だた……私だから……」

「違う！悪いのは俺だ！俺が！俺がお前をこんな……古！？」

開いていた古の両目

それが徐々に、また閉じようとまぶたがゆっくり下がりだす

「古！死ぬな！古！」

「む、無理アルよ……いくらバカの私だって……自分の身体がどう
なってるかくらいは……」

絶叫するクリリンだが、古のまぶたは下がるのをやめない

「ダメだ！そんなこと俺が許さねえ！古！古！」

初めに起こしたとき以上に、古を身体を激しく揺する

「あの時言っただろ！？またどっか連れてってやるって！」

「そういえば約束、してたアルな……」

一週間前、港町へクリリンと一緒に買い物に行った時

肉まんとソフトクリームを両手に持ち、その約束を古は確かにクリリンと交わした

その出来事がまるで、走馬灯のように古の頭へ再生される

「……ごめん」

「ごめんじゃねえ！謝るくらいなら……謝るくらいなら約束守れ！」

クリリンは叫ぶ、とにかく力の限り叫ぶ

握った手首から感じる古の脈は、刻一刻とその力を失っている

「生きろ！生きろ古！死ぬなーーーー！」

「……私だって……ここでクリリンとお別れなんて嫌アル……」

顔が少し歪み、古の両目からもボロボロと涙が零れ出す

ギリギリまで抑えていたそれは、ついに堪えきれず決壊した

「クリリン……ごめん……」

「古！」

「一緒にいた二週間……本当に楽しかたヨ……」

「古！古！」

「超と再会はできなかたが……でも……」

古は自分の泣き顔を必死に、今クリリンに向けたいそれへと変える

「クリリンが最後に……こうして目の前にいてくれて……良かった……」

「古！古！古！」

呼ぶたびに声の大きさを上げるが、クリリンの思いは届かない

「死ぬな！死ぬなよ古！」

「クリリン、……」

「何だ？何て言ったんだ！？古！」

聴き取れない大きさで、古の口からボソボソと漏れた言葉

クリリンは顔を近づけ、慌てて訊き返す

「……え？」

それに合わせて、古は最後の力を振り絞った

上半身を懸命に起こし、顔をクリリンの頬へ

昔修学旅行でネギにしたのと同じように

いや、それよりもずっと本気で真剣な気持ちで

「……古？」

そこへ自らの唇をギュッと押し当てた

「クリリン……」

力が抜け、身体はクリリンの腕の中へ落ちる

ボスっという音と共に、古は笑った

痛く苦しい筈なのに、酷く辛い筈なのに

「……大好き」

満面の笑みでクリリンを見つめ、そう口にした

そして

「古……！？おい！おい古！」

両まぶたはついに、完全に閉じ切った

「目を覚ませ古！おい！おいったら！」

嗚咽を必死に堪え、クリリンは古の耳元で泣き叫ぶ

何度も身体を揺すり、呼びかけた

だが、古はピクリとも動いてくれない

「古！古！古！お願いだ古！起きろ！」

既に古の呼吸は止まっていた

握っている手首からも、もう脈は感じない

しばらくしてクリリンも、このことには気付いてしまった

「く、古……古……」

手が、腕が、全身が

認めたくない事実に遭遇し、ガクガクと震えていた

「う、嘘だ……嘘なんだろ？な？」

現実逃避と知りながらも、クリリンは古の顔へ手を伸ばす

右手の五指で感じた古の頬は

「……冷たい」

初めから出血多量だったのもあってか、思っていた以上に冷えてしまっていた

「……」

現実へ一気に引き戻され、顔を伏せて沈黙

溢れる涙と、震える全身は収まる様子を見せない

“クリリン、勝負アル！”

“よろしくアル！クリリン”

“フッフッフ……クリリンを驚かそうと、こっそり夜中特訓してたアルよ”

“……クリリンのその服、私も同じのが欲しいアルなー”

“早速道着の注文アル！”

“……約束アルよ？”

二週間を共に過ごした記憶が、鮮明に次々と蘇る

古の顔が、そして声が

“クリリン、本戦は私の分まで頑張るアルよ！”

“よかたアルなー、クリリン”

“私も……私もクリリンのこと、大切って思てるアルよ……同じ、くらい……”

“クリリン一人だけなんて絶対ダメアル！思てること一緒なら、私

だってクリリンと行く！”

“……クリリンの助けになる、私そう言たから”

“クリリン……大好き”

「……く、」

もう自分を止められず、クリリンはいきなりガバッと天を仰ぎ

「古ーーーーーーーーーーーーーー！！うわあああああああああああっ！！」

喉を潰さんとばかりに、辺りに大絶叫を響かせた

「何で！何でなんだよ！」

右手で拳を作り、ただただ地面を殴る

怒りと、悲しみと、そして悔しさから

「古が！何で古が！死ななきゃなんないんだよおおおおおおおおおっ！！」

拳の痛みなど関係無い

爆発する感情を、地面へ激しくぶつけ続けた

そして、その光景を離れて見るピッコロも

（ネギに、刹那に、そして他の皆に何と言えばいい……くそおおおっ！）

地面にあたったりはしてなかったが、噛み締めた奥歯と両拳からその心境が伺える

「畜生ーーーーーーーーー！」

「ハッハッハッハッハ！」

そこへ、ボージャックがゆっくりと降下

腕を組んだ状態でクリリン達を眺め、大きく笑い声をあげていた

「なかなか楽しませてもらったぞ！お前達でいうところの、お涙頂戴ってやつか？俺達にとっちゃ最高に笑える見せ物だぜ！」

「……そんな理由で古を……」

クリリンはすぐさま顔を上げる

今までにないような怒りの表情で、ボージャックをこれでもかと睨みつけた

「そんなんで！そんなんで人の命弄んで！お前らは何とも思わねえのかよ！」

「……ふん、知ったこっちゃないな。利用出来なければ殺す、それだけだ」

「……さねぇ」

「あ？」

「……絶対、絶対お前を許さねえ！」

立ち上がり、残った気をこれでもかと開放

「ぶっ殺してやる！」

「やれるもんならやってみろ、雑魚が」

「よせクリリン！」

「うるせえ！」

またもピッコロの制止を怒号で撥ね退け、クリリンは無謀にも駆け出した

「うおおおおおおおおおおおおおおおっ！」

目の前にいる古の仇、ボージャック

「これは絶対外さねえ！気円斬！」

今度はそこへ、全ての感情をぶつけに向かって行った

「そ、そんな……」

「ふっふっふ、残念だったな」

顔を青ざめさせる悟飯と、不気味に笑うブージン

クリリン達に気を配っていた二人は、どちらも向こうでの事態に気が付いてしまった

「古菲さんが……まさか……」

「まああんな雑魚の小娘、ボージャック様にかかれば造作もないこと。残りの二人も、じきに同じ末路を迎えるだろうな」

「ピッコロさん……クリリンさん……」

このまま自分は動けぬまま、大事な仲間を失うのを耐えねばならないのか

否、そんなことは断じて認めない

「ぬあああああああああああっ！」

自分の周りを取り巻く、魔力によって作り出された結界の糸

それを引きちぎろうと、全力で力を込めた

が、最初と結果は同じ

「無駄だ無駄だ、貴様はあの時よりもパワーが減っているんだぞ？」

結界はビクともせず、それどころか余計にパワーを奪われる結果になる

「何でだ！何でこんな糸が切れない！」

それでも、悟飯は抗い続けた

焦りから冷静さは欠け、我武者羅に全身に力を入れる

（いいぞ……このまま無駄な足掻きを続けて、パワーを最後まで使い果たしてしまえ）

そうすれば、一番の難敵を倒した手柄が自分の物に

（四人の中では一番非力だった私だが、ボージャック様もこれで一目置いてくださる筈）

近い内にやって来ると予想した未来を、ブージンはニヤリと笑いながら思い浮かべる

その中ではビドーやゴクアァ、そしてザンギャが自分に敬意を示して地に膝を付けていた

（ふっふっふっふっふ……）

しかし、そのことと目の前の悟飯のみにしか意識が無かったブージン

そのため近づいてくる一人の存在に気付くのが、悟飯よりも数テンポ遅れをとることになる

（き、来た！）

「魔法の射手〈サギタ・マギカ〉連弾〈セリエス〉・光の十七矢〈ルーキス〉！」

何度も感じたことのある魔力

悟飯が確信したと同時に、その人物の声は耳に入った

「しまっ、ぬわあああっ！」

そして、ブージンに直撃する十七本の光の矢

弾みで魔力の糸は切れ、悟飯の拘束は解除

すぐに振り返ると、やって来るのはやはり自らの親友

「大丈夫!?悟飯君!」

「ネギ君!」

回復を終えたネギ・スプリングフィールドだった

「く、くそ……まさか新手が来るとは……」

攻撃を受けたブージンは、かなり疲弊

トランクスと戦っていた時のも重なり、かなりのダメージを負っていた

(しかたない、ここは一時撤た……)

「だあああああああああっ!」

「!?」

逃げる算段を打とうとするが、その前にネギの拳が

「ぶぼあああああああああああっ!」

左頬を殴りつけ、斜め下へぶっ飛ばした

「悟飯君、今だ!」

「え!?あ、うん!」

（ば、バカな……なぜあの小僧にあれほどのスピードとパワーが……！！）

「波ーーーーーーーー！」

見定めていたのとはまるで段違い

そんな攻撃を受けたブージンは、最後まで思考が完了する前に

「う、うおわあああああああああああっ！」

悟飯のフルパワーのかめはめ波に飲み込まれ、消滅した

その直前ブージンの目に入ったのは、かめはめ波を撃つ悟飯と

「……」

無言で自分を睨みつける、顔全体を怒りで染めたネギだった

第６７話　古菲凶弾に散る　クリリン涙の大絶叫（後書き）

クウネル
「どうも皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「本編では、ついに出てしまったようだな」

クウネル
「はい、古菲さんですね。前回のラストで予想できた方もいるでしょうが、ネギドラ！初の死亡者になってしまわれました」

エヴァ
「まさかあのバカイエローとは……てっきり私は、あんなに無理しまくる刹那とか有り得るんじゃないかと思ってたぞ」

クウネル
「でも彼女も現在、結構修羅場ですよね」

エヴァ
「まあな……っていうか、やっぱり刹那達の場面は次回か」

クウネル
「そうみたいですね、ネギ君達の場面終了時で大体いつもの文量に到達しましたから」

エヴァ
「これはぼーやの場面のせいというより、あいつらの場面が長すぎたのが原因だろ」

クウネル
「まあ、確かに」

エヴァ
「四分の三近くをあいつらが占めるって……前回のよりも比率が凄いぞ」

注・頑張りました！

エヴァ
「だったらちゃんと他キャラの分も頑張れ！ここ最近数話、あいつらだけで全体の何割出たと思ってる！」

クウネル
「まあまあキティ落ち着いて、それに私達大事なこと忘れてますよ」

エヴァ
「だからその名では呼ぶ……あ、ゲスト」

クウネル
「そうです、あちらですっかり待ちくたびれておいでです」

エヴァ
「そうか、それは悪かったな。では遅くなったが、クウネル」

クウネル
「はい、今回のゲストはこのお二人です」

楓

「やあやあエヴァ殿、久しぶりでござる」

クウネル
「本編でも大活躍中、甲賀中忍の長瀬楓さんと……」

ムラサキ曹長
「今度こそ！今度こそちゃんと出れたぞ！どうだ見たか！」

クウネル
「同じく忍者で、レッドリボン軍幹部のムラサキ曹長さんです」

エヴァ
「性懲りもなくまた出てきたか、雑魚忍者」

ムラサキ曹長
「何！？今回はちゃんとリクエストを貰っての出演だぞ！ていうか雑魚ってどういう意味だ！」

注・第４２話のあとがきコーナー参照

エヴァ
「いや、まんまだよ。長瀬楓と並ぶとそれがより顕著だぞ」

ムラサキ曹長
「ふ、ふざけるな！こんな小娘如きに遅れを取る私ではないわ！」

エヴァ
「だそうだ、見せてやったらどうだ？」

楓

「あいあい、ではまず手始めに……ほいっと」

ムラサキ曹長
「うおおおっ！？小娘が一気に五人に！」

楓
「おや、随分な驚きようでござるな？」

ムラサキ曹長
「当たり前だ！まさか、私以外で五つ子の忍者がいるとはな……」

楓
「……は？」

エヴァ
「こいつ影分身と称して、自分の兄弟使ってるんだよ」

クウネル
「今回その四人はお呼びしてないですけどね」

楓
「……え～～」

ムラサキ曹長
「うわっ！すっごい嫌な顔された！ていうか貴様だって同じだろ！」

エヴァ
「いや、こいつの影分身は本物だよ」

ムラサキ曹長

「何だと!?そんなバカな!本物の影分身なんて普通無理だろ!」

クウネル
「あなた昔悟空さんのやつ見ましたよね?まあ楓さんのとは理屈が異なりますけど」

ムラサキ曹長
「た、確かにそうだが……で、でもそんな、まさか……」

エヴァ
「要するにお前は雑魚忍者決定なんだ、以上」

ムラサキ曹長
「……く、くそーーーーー!覚えてろーーーーーー!」

クウネル
「あ、逃げました」

エヴァ
「このパターンこれで何度目だよ……」

ムラサキ曹長
「今度はもっと凄い忍術を覚えて、お前達を見返してやる!それまで首を洗って待っていろ!うわーーーーーん!」

クウネル
「……見えなくなっちゃいましたね」

エヴァ
「多分もうあいつリクエスト来ないだろ、忍者以外呼べるような材

料ないし」

楓
「……でござるな」

クウネル
「コホン、では気を取り直して次回予告を……」

楓
「おや、本編についてのトークはせぬでござるか？」

クウネル
「初めの方で大方やってしまったので」

エヴァ
「そういうことらしい」

楓
「そうでござるか、あいわかった」

クウネル
「では、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「場面は急転換、刹那とトランクスのところから始まるぞ」

クウネル
「トランクスさんの前に突如現れたちびせつなさん、彼女が呼び止めた理由とは一体……」

楓
「あと、久しぶりに拙者の出番もあるでござる」

エヴァ
「そういえば最近無かったな、刹那が腕飛ばされて以降」

クウネル
「まあ、あると言ってもベジータさん主体なんですけどね」

楓
「次回の更新予定は……火曜日でござるな」

クウネル
「ではでは皆さん、次回のネギドラ！も……」

エヴァ&楓
「お楽しみに（でござる）！」

エヴァ
「しかしあれだな……最近ゲストの登場順が完全にランダムだな」

楓
「そうでござるな、古い方だとまだネギ坊主とかのがやってないでござる」

クウネル
「まあ、それだけ新規のリクエストもどんどん受け入れてるってことじゃないですか？」

エヴァ
「確かに、そういう考え方も出来るが……」

注・理由はまあ、完全に存在を忘れてたり、書き易そうなのを優先的に選んでしまったり色々と……

エヴァ
「それはここで言っちゃダメだろ！」

第６８話　剣士タッグここに結成！復活のトランクス（前書き）

すいません、ネタ出しが上手くできず内容が中途半端になってます。あ、本編は大丈夫です。問題はその後の……

で、ではどうぞ！　　１１／１７　あとがきコーナー追加

第６８話　剣士タッグここに結成！復活のトランクス

「……ち、ちびせつなちゃんだって？」

「はい、桜咲刹那を本体とする分身。それが私です」

トランクスの目の前に、突如現れたちびせつな

いきなりの事態で思わず困惑してしまったが、本人がしてくれた説明ですぐ納得

「なるほど……コタロー君達が使う影分身と違って、偵察等に特化している分身なわけか」

「そういうことです。今の私は半自律型で、本体とは意識を切り離しています」

「それで、僕に一体何の用が？」

目の前の存在が無害であると分かると、トランクスは再び焦りの色を見せ始める

こうしている間にも

「うがあああああああっ！次から次へとおおおおおっ！」

ゴクアが刹那の技から抜け出そうと、雄叫びを上げながら暴れているのだ

「出来れば早めに言ってもらえるかな、今大変なのはちびせつなちゃんも分かるだろ？」

「そうでした！こ、これを！」

慌ててちびせつなは、着ていた和服の懐からあるものを取り出した

そして両手で持ってトランクスに差し出すと、本人は目を丸くする

「これは……仙豆じゃないか！」

「はい、ピッコロさんを連れて戻ってきた際に受け取ってたんです」

刹那はゴクアに攻撃を仕掛ける前、落ちていた仙豆を無事発見していた

残念ながら既に夕凪はゴクアに拾われていたが、これが残っていただけでも不幸中の幸いである

またゴクアはその時、トランクスへ攻撃することのみで頭が一杯

下にいた刹那に気が付かなかった（トランクスもだが）のもかなり幸運だった

気を抑えていたとはいえ、直接視界に入れられてはどうしようもないのだから

「とにかくありがとう、助かるよ！」

トランクスはちびせつなから仙豆を受け取り、急いで口にした

ポリポリと小気味いい音を鳴らし、ゴクンと飲み込む

するとたちまち、仙豆の効果が全身へ現われ始めた

傷口は嘘のように塞がり、痛みも完全に消失する

そして体力が、気が、全て元通りに回復した

「よし、一気に決めてやる！はあああああああああっ！」

トランクスは再度、超サイヤ人２へ変身を行った

今度は邪魔する者もいない

瞬く間に、気はさらに膨れ上がっていった

バチバチ鳴る火花のような気が、全身に出始める

「ち、近くで見るとここまで凄いなんて……ビックリです」

あの時客席で見たのとは、まるで迫力が違う

ちびせつなは思わず、それにおののいて少々後退

「喰らえええええええええええええっ！」

気を練りに練り上げ、十二分に収束させた両手

それをバッと目の前に突き出し、強力なエネルギー波を撃ち出した

ギュオオオと唸りながら、ゴクアへと一直線

この威力なら、一撃で勝負が決する

当たれば飲み込まれて完全消滅、それは確信できた

だが、当たればの話である

「ずあああああああっ！」

「そ、そんな！」

ゴクアは、トランクスのエネルギー波を避けきった

いや、ゴクア本人には避けたという自覚はない

あくまで彼の頭には、『刹那の技からの脱出』があったのみ

奴がやったのはこういうことだ

まず始めに刹那の、つまり技が向かってくる方向へと完全に身体を向ける

動きを止められていたとはいえ、このくらいは何とか可能だった

そしてほんの僅かに出来る、気弾の嵐が一時的に止む一秒弱の間

その瞬間、ゴクアはこの短時間の内に考案した策を実行した

無論、その間に移動するのは無理な話

刹那のあの技は、気弾の軌道修正がある程度効く

結局は当てられるのが関の山だ

そこで、ゴクアは両手に持つ剣を目の前で交差

両方に気を目一杯込め、腕を前に伸ばして直進した

これなら、向かってくる気弾が当たるのは殆どが剣の部分

刹那とゴクアの気の大きさの違いは、言わずもがな

当たる気弾は全て強化された剣で防がれ、前進を許してしまうというわけだ

「くそっ！遅すぎた！」

「す、すみません！私がもっと早く仙豆を渡していれば！」

全力を込めた攻撃が避けられたことに、拳を握り締めて悔しがるトランクス

そしてそのことに罪悪感を感じたのか、ちびせつなが腰を九十度曲げて謝った

「いいんだ、ちびせつなちゃんが悪いんじゃない……それより今はあっちだ！」

ちびせつなへ優しく言葉を返すと、トランクスは急行
ゴクアの後を追う形で、刹那の所へとすぐさま向かう
その刹那は、既にゴクアと刃を交えている最中だった
「ふんっ、性懲りもなくまたやられに来たのか」
「うるさい！今度はそう簡単にはいかないぞ！」
技が破られたのが分かると、刹那はすぐに匕首・十六串呂を展開
十六本の内の二本を出し、それぞれを両手に持ってゴクアの剣撃に対応する
他の十四本を周りに出さずにいるのは、また弾かれでもして自分へ襲い掛かってくるのを防ぐため
「ほう、これのどこがそうなんだ？」
「ぐ、ぐぐぐぐぐぐぐ……」
しかし、いくら自分に出来る最善のことをしても、実力差は覆らない
グイグイと押され、姿勢も崩されていく
（き、気の込め方がまるで違いすぎる……こ、ここまで私は奴より弱いというのか！）

さらには、つばぜり合っているのが長刀と短刀という差があるというのも大きい

上からの攻撃を受け止めるには、あまりにも分が悪すぎた

「そういえば、俺が斬った筈の腕が元通りだな……どうやったんだ？」

「お前なんかに教えることなど、何一つない！」

余裕を持った笑みでゴクアに尋ねられ、刹那は怒り

切羽詰まった顔ながらも、鋭く睨みつけて答えを返した

「へっ、強情なガキだぜ……ん？」

「はあああああっ！」

そろそろまた腕一本ほど斬り落としてやるか

そう考えたゴクアへ、気弾が一発飛んできた

言うまでもなく、トランクスのそれである

ゴクアを刹那から離れさせようと、牽制気味に少々弱めのを一発

万が一刹那に当たったとしても、これならそこまで大事には至らない

「そうそう、こいつとの決着もまだだったな……はああっ！」

「うわっ！」

少々冷静さが戻ったゴクアは、これには流石に気づいた

一瞬気を全身から爆発させて刹那を吹き飛ばし

「ふんっ！」

右手の剣でアッサリと縦に切り裂いた

「刹那ちゃん！」

その間に、トランクスはすぐさま吹き飛ばされた刹那の横へ

「すまない、君がくれたせっかくのチャンスを……」

「いえ、仙豆を受け取って貰えただけでも充分です……これで、奴とも二人でちゃんと戦える」

刹那は体勢を立て直し、短刀を再び構えて視線をゴクアへ

「え!?こ、これ以上は君には危険だ！回復したんだから、奴は僕一人で……」

「夕凪を奪われたのは私の責任です、ならば私にだって戦う義務がある」

そうでしょ?と刹那はトランクスを横目で見ながら口にする

「それにトランクスさん、私にだって意地があるんです」

刹那はさらに気を開放し、全身を包ませる

「我が愛刀を悪の剣に使われたんです……そんなことをした奴に、一矢報いてやりたいっていう意地が」

「刹那ちゃん……」

「もし今奴が持ってるのが、夕凪でなく御自分の剣だったら……トランクスさんも、同じことを思うんじゃないですか？」

トランクスに、刹那の言葉は否定出来なかった

それに、今の彼には時間がない

「……分かった、援護を頼む。だがあくまで正面とは、僕が一人で奴とやる」

「はい」

危険が比較的少ないであろう役割を刹那に与え、トランクスはゴクアに目を向ける

「どうした？今度はどっちが相手だ？」

そのゴクアは両剣の刃を合わせ、ジャキジャキと金属音を鳴らしていた

だがトランクスの強烈な視線に気付くと、すぐそれを解いて構えを見せる

「俺だ！時間がない、すぐに片をつけさせてもらうぞ！」

「へっ、やれるもんならやって……」

「はあああああああああっ！」

「！！」

途端にゴクアは、余裕の笑みを崩して表情が強張った

極力気の消耗をせぬよう、刹那の横に来てから気を抑え気味にしていたトランクス

その気の大きさは、まだゴクアにとっては想定の範囲内

充分相手に出来ると思える程のものだった

しかし、本気で気を開放したトランクスだとそうはいかない

『超サイヤ人』と『超サイヤ人２』

両者の強さの違いが格段にあるというのは言うまでもない

（バカな、何だあれは……さっきのとまるで桁違いじゃないか！一体どうなってやがる！）

その全力を気を見せる超サイヤ人２のトランクスに、焦りを覚え

ていた

「行くぞ！」

（だ、だが奴は丸腰……こっちにだってまだ勝機はある！）

トランクスは一気に接近

ゴクアもより一層警戒を強め、ほぼ同時に突っ込む

「「うおおおおおおおおおおおっ！」」

両者の戦いが、また再開した

「そおらっ！」

「ぬぐっ！」

背後に回り込まれ、腰へ回し蹴り

「くそっ！」

「遅いよ！」

反撃とばかりに腰を捻らせて右肘を打つが、高速で後退してかわされ

「ぐわっ！」

再び突っ込まれて顔面に頭突きを喰らってしまう

そのまま胸元を掴まれ、少女長瀬楓は

「たあああああっ！」

銀河戦士ザンギャに、空中から下へ投げ落とされた

「ぬおおおっ！」

凄まじい速さで目の前に迫る地面

激突すればたまったものではない

楓は急いで右手に気を集中

「くぬうっ！」

その手の平で地面を叩き、無理矢理だが受け身をとった

衝撃を逃がした関係上、身体が横に跳ねる

そこからダウンせぬよう両足を地に着けて踏ん張り、体勢を立て直した

「はあっ、はあっ、はあっ……」

だが息は荒く、落ち着かぬ呼吸のまま上空のザンギャを見上げる

「あのボーヤよりはやるみたいだけど、所詮私の敵じゃないようね」

（くそっ、まさかこんな事態になろうとは……）

少し前まではほぼ互角の戦いをしていた楓

しかし、その拮抗はついさっき崩れた

戦いの最中、楓は感じ取ってしまったのだ

古の気が、完全になくなるその瞬間を

それによって出来た隙

当然ザンギャは見逃さず猛攻した

たちまち影分身は消され、本体にも強力な一撃

楓はその威力を殺しきれず、左腕の骨にヒビを入れられてしまう

そこからは冒頭の通り、次々と攻撃を受ける羽目になってしまった

（だがあれが無かったにしろ、奴相手に勝つのは拙者の力では不可

能……）

事実古のことを察知する直前、楓はどちらかと言えば劣勢に近かった

影分身という奇策だけでは、やはり実力差を覆しきるには無理があったようだ

（それにしても古が……何故でござるか、ピッコロ殿！）

古のことが気になって仕方がない楓だが、今はそう言ってはいられない

「さあ、そろそろ終わりといきましょうか！」

（今は、戦うしかないでござるか……）

対峙しているザンギャは、自らを倒す気満々

ここから撤退するのは叶いそうにない

そう考える楓へ、左腕の痛みがズキンと走る

（左腕抜きで、どこまで戦えるでござろうか……）

勝率、さらには生存率

そのどちらも、今の楓はかなり低いだろう

（だが幸い、まだ影分身を出せる気は残っている……）

それでも楓は、今自分に出来る精一杯の戦いをせねばと腹をくくった

気を練り、新規の影分身を三体作る

（この状態では本体がすぐ見破られてしまうが……ないよりはマシでござる！）

キッとザンギャを正面から睨み、意を決して地面を蹴った

四人の楓は舞空術で一気に飛翔

「でやあああああっ！」

一斉にザンギャへと向かっていく

そんな時だった

「無駄よ、私に勝てるわけ……なっ！？きゃあああああっ！」

「……なぬ？」

横から何かが飛んできて、ザンギャに激突

思わず楓は動きを止め、空中で静止した

よく見ると、ぶつかってきたのは一人の男

「ビ、ビドー！？」

変身も解除され、完全にノビているビドーだった

下へそのまま落ちそうになるビドーの服を、ザンギャは慌てて掴む

「ちょ、ちょっと！ビドー！」

「おい女、さっさとそのゴミを片づけておけ」

「「！！」」

ビドーが飛んできた方向から一人の声

ザンギャと楓はほぼ同時にそちらへ振り向いた

「まったく、雑魚のくせに手こずらせやがって……」

「そんな……変身したビドーを……」

「ふん！セルが生み出したあのガキと比べれば、てんで大したことは無い」

そこには、同じく上空に舞空術で浮かび腕を組む一人の超サイヤ人

いたって余裕な顔のベジータの姿があった

「ついでだ、次は貴様もこいつみたいにぶちのめしてやる」

第６８話　剣士タッグここに結成！復活のトランクス（後書き）

クウネル
「読者の皆様、大変申し訳ありません」

エヴァ
「作者が今回、このコーナーのネタが上手く思いつかないというまさかの事態が起こってしまった」

クウネル
「作者はこのあと諸事情で出掛けるため、この日までに間に合わせるのは不可能となってしまいました」

エヴァ
「で、作者はこの事態をどうやって処理するつもりだ？」

クウネル
「はい、完全にこの話の分を休載するのは嫌だそうなので、今回のあとがきコーナーは一日延期にするという方法をとりました」

エヴァ
「ん？延期？」

クウネル
「翌日までにはネタ出しをして、昼の内には編集をしてちゃんとあとがきコーナーを追加させます」

エヴァ

「そろそろ週二投稿に限界が来たんじゃないか？作者」

注・だ、大丈夫です！

エヴァ
「そう言われてもな……」

クウネル
「そういえばこの小説の感想、今日からフリーで受け付けるらしいですよ」

エヴァ
「ほう、ユーザー登録してない者からも感想を貰えるというわけか」

クウネル
「そういうことです。というわけで、ユーザー登録してない方も是非是非どうぞ」

エヴァ
「では読者の諸君、中途半端で悪いが……」

クウネル
「また明日、ここでお会いしましょう」

クウネル
「というわけで、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「今回は上記のとおり、一日延期した今からお送りするぞ」

クウネル
「かなり分かりづらいですけどね、ページ的には一緒の場所なわけですし」

エヴァ
「まあ全部、原因は作者なわけだがな」

注・すいません

クウネル
「さて、今回のゲストはこの三人です」

バーダック
「カカロット！カカロットはどこだ！」

ターレス
「ちっ、あの時のお返しをしてやろうと思ってたのにま……」

ベジータ王
「こら下級戦士共！私を差し置いて先に登場するんじゃない！」

エヴァ
「サイヤ人三人組か……」

クウネル
「さくらさんのリクエストですね、これでさくらさんのリクエストは二本目になります」

バーダック
「どこだ！どこにいるんだカカロット！」

エヴァ
「おい、あいつならもうとっくにここにはいないぞ」

バーダック
「何！？俺はカカロットがここにいると聞いてわざわざ来たんだぞ！」

クウネル
「かれこれ二週間前になりますよね、これの四話前のゲストですから」

ターレス
「やっぱり遅すぎたか……」

エヴァ
「まあ過ぎたことなんだから諦めろ、さっさとコーナーを進行……」

ベジータ王
「では早速、今回の話についてだ！」

エヴァ
「っておい！勝手にお前が仕切るな！」

ベジータ王
「王である私が仕切って何が悪い！まずバーダック、お前から意見を言ってみろ！」

エヴァ
「だーかーらー！それは本来私とクウネルの……」

クウネル
「まあまあエヴァンジェリン、たまにはいいじゃありませんか」

エヴァ
「良くない！今までこういうことになって成功した試しは……」

バーダック
「そうだなぁ、やっぱり前半後半のバランスがまた崩れちまった感じだ」

ベジータ王
「うむ、確かにベジータの出番がほぼ皆無だったしな。次、ターレス」

ターレス
「ちょっと最近、地上に奴らの描写がないっていうのが気になるな」

ベジータ王
「そうだな。あの古とかいう小娘の死を見て皆はどうなっているのか、そこは今後の執筆に大きく関わるだろうな」

エヴァ
「……あれ？ちゃんと成立している」

クウネル
「流石滅びたとはいえ一国の王、こういうことはお得意のようですね」

エヴァ
「ていうか普段の私達よりまともにやってないか？」

ベジータ王
「おいそこのガキ！お前は何か言うことはないのか！」

エヴァ
「えっ！？あ、えっと……」

ベジータ王
「もうよい！では続いて次回予告だ！」

エヴァ
（か、完全に乗っ取られた……）

ベジータ王
「ガキの隣のお前！」

クウネル
「はい、さて次回のネギドラ！は……」

ベジータ王

「冒頭はベジータＶＳザンギャだ、まあ勝負は目に見えているがな」

ターレス
「そしてあの楓とかいうノッポ、あいつがどう動きを見せるのかにも注目だ」

バーダック
「そしてボージャックに突っ込んだあいつの運命は一体!?あの世からカカロットも登場だ!」

エヴァ
「（いかん!何か喋らねば……）じ、じか」

ベジータ王
「次回の投稿予定は金曜日だ!」

エヴァ
「（くっ、まだだ!）か、感そ」

クウネル
「感想の受け付けが前述の通りフリーになったので、より一層皆様のご意見をお待ちしています」

エヴァ
「（ク、クウネルにまで……）で、では読ｓｙ」

ベジータ王
「読者の諸君!次回のネギドラも……」

クウネル&バーダック&ターレス

「お楽しみに！」

エヴァ
（わ、私がこのコーナーの主役なのに……）

エヴァ
「ふう、やっと帰ったか。ああいうのも逆に勘弁だな……」

クウネル
「エヴァンジェリン、あなたへお便りですよ」

エヴァ
「は？誰から？」

クウネル
「はいどうぞ」

アーニャ&鶴仙人&ムラサキ曹長
『やーいやーい！ざまーみろバーカ！』

クウネル

「よほど今回のあなたの姿が嬉しかったんでしょうね」

エヴァ

「あ、あいつらーーーーーーー！！」

第６９話　帰ってきた子供コンビ　残る仲間を危機から救え！（前書き）

今回やや執筆が難産でした。ベジータが大変で大変で……まあ、他のキャラに比べて全然書いてなかったのが大きいんですけどね。

今後少しづつでも改善していきたいです、何とか終盤の話までには確実に！

ではどうぞ！

第69話　帰ってきた子供コンビ　残る仲間を危機から救え！

「さっさとしろ！俺の本来の目的は、お前達雑魚なんかじゃないんだ！」

「くっ……」

気絶しているビドーを掴んだまま、ザンギャはゆっくりと降下

それに合わせてベジータも降りていく

両者共に地面へ着地すると、ザンギャはパッと手を離した

ドサッという音を立て、ビドーはうつ伏せのままその場に置かれることとなる

「それと誰かは知らんが、そこにいるデカ女はとっとと消えろ。いてもただ邪魔なだけだ」

「なっ！」

一方のベジータは、楓に顔を向けてこの一言

楓はその言われように一瞬カチンときたようだが、すぐこの場の状況を見直してみる

目の前にいるベジータ

ピッコロから幾度となく聞かされた、凄まじい実力を持ったサイ

ヤ人である

しばらく戦いから身を退けていたようだが、その力は殆ど健在

変身したビドーを大したダメージも無しに倒したことからも、それは明らかだった

対する自分はどうだろうか？

確かにピッコロとの稽古や精神と時の部屋での修行で、前とは見違えるほどの力を手に入れはした

しかし、それでもこの世界の実力者達には及ばない

変身したビドーには一撃でのされ、今はザンギャとの戦いで左腕を負傷

ビドーの件については油断も少々はあった

だがあの一撃にやられずとも、そのまま本気で戦い合っていたら間違いなく負けている

（……仕方あるまい、それにこの場は拙者がいずとも充分）

楓は影分身を解除し、本体の自分へと気を戻す

そして全速力で飛ぶべく、気を全身へと包ませた

「了解したベジータ殿、後は頼むでござる！」

「さっさと行け、俺は気が短いんだ」

「あいあい」

楓がかけた言葉に対し、ベジータは無愛想な返事

それをさらに返すと、楓はこの場から飛び去った

ザンギャもそれを思わず目で追う

「二対一にはならずに済んだか……」

「一対一でも同じこと、貴様が俺にやられることに変わりはない」

「くそっ……」

ベジータの方へと顔を戻し、苦々しい表情のザンギャ

勝ち目がまず無いであろう戦い

それが今、目の前に迫ってきているのだ

何か打開策は無いかと、必死に考えを巡らせる

（どうする……何とか隙を見つけてここから逃げ出し、ボージャック様と合流するのが一番妥当か……）

あちらの戦況はかなり優勢

自分達二人が乱入しても、何とかなるであろう

変身した自らの主なら、この男を倒すのも容易いこと

そうザンギャは結論に達した

（よし、なら話は早い……ダメージを最小限に抑えて、奴に隙ができるを待……）

「はあああああっ！」

「って！？」

だが、そんな彼女にいきなりの奇襲

右手を前方に突き出し、ベジータは有無を言わさずエネルギー波を撃ち出した

ザンギャは慌てて横に飛び退く

動きは非常に荒く、背後には絶好の隙

「でやあああああっ！」

「うごっ！」

そこへ瞬時に移動し、勢いよく回し蹴り

背中の中心を捉えられたザンギャは、身体を仰け反らせてぶっ飛ぶ

その移動先にはまたもやベジータ

膝を曲げ、足の裏をこちらへ向けて舞空術で空中静止

「ふんっ！」

「ぐわあっ！」

タイミングを合わせ、フルパワーで斜め上に蹴り上げた

「そ、そう何度もやられてたまるか！」

さらに追撃しようとするベジータに、ザンギャは奮起

飛ばされながらも手に力を集め

「やああっ！」

結界の糸を前方へ広範囲に放つ

（これで少しは時間が稼げ……なっ！？）

「効くかこんなもの！」

完全なる拘束は不可能なものの、少しは動きを止められるはず

そんな期待を込めたザンギャの攻撃の結果はご覧の通り

全身から気を爆発させて突っ込むベジータは、そのまま強行突破

糸はたちまち千切られ、接近を簡単に許してしまう

「そおらっ！」

「ぐぼおおっ！」

そのまま腹に一撃

痛みのあまりその箇所を押さえたザンギャへ、ベジータは容赦なく

「だあああああっ！」

両手を組んでハンマー打ちで叩き落とす

垂直にザンギャは落ちていき、その数秒後

チュドーーーーンッ！

大きな音と膨大な砂煙が下の地面から発生した

「以前他の奴にも言ったが、俺は女だからといって手加減はせん。相手が悪かったな」

「く、くそおおお……」

下へ向かってベジータがザンギャへと言う

フラフラと立ちあがり、ザンギャは声を絞るように吐き出した

「ふむ、やはりベジータ殿が圧倒的でござるか……」

舞空術で飛行しながら、楓は気の動きで戦いのおおよそを把握していた

今は木乃香の治癒魔法を受けるため、地上へ戻ろうとしているところである

「それはいいとしても、参ったでござるな……」

しかしながら、楓は戻れずに迷っていた

理由は簡単、ここがどこなのかよく分かってないから

ビドーによって意識を奪われ、気付いた時にはあそこに運ばれていた

そのため、ここ周辺にある地上へ戻るトンネルの場所は当然分からない

そして初めにいた砂漠の場所もまた、ここから遠すぎて分からない

実質、ただ闇雲に飛び回っているとも言い表わすことが出来た

「今からベジータ殿に訊きに行くのも野暮でござるし……む！？」

すると楓は、ある一人の人物の気の著しい変化を察知

その場所は、古の気が消えたのと同一箇所

「クリリン殿の気でござるか？どんどん減っている……まさか！」

古による怒りによって、無謀にも敵と戦っているのか？

楓はそう直感し、両目を見開く

古と非常に親しかったことを思えば、考えられないことではない

「だとすれば、悠長に出口を探してる暇はないでござるな」

楓は急遽進路変更、クリリン達の所へ

（手負いの身ではあるが、影分身を囮くらいには出来るでござる）

なにより、戦況がベジータの所とはわけが違う

圧倒的劣勢、死が間近に迫っているそんな状況

見逃せるはずがなかった

（それにやはり、古が何故ああなってしまったのかも気に……！？）

直後、楓は背後から強力な何かを感じ取る

一つは気、そしてもう一つは魔力

また、とんでもない速さでこちらへ近づいていた

「これは、悟飯ど……って!?」

確認しようと振り返ったが、その二つは即座に楓を抜き去る

こちらへ一瞥すらせず、ただ真っすぐ自分が向かうのと同じ方向へ

僅かに目視出来た情報から、その二人は悟飯とネギだと確認

「は、速い、あれが超サイヤ人の悟飯殿……いや、それよりもネギ坊主でござる」

悟飯のスピードに驚きを見せるが、それ以上にネギにも驚いた

かなり本気に近いであろう悟飯に、殆ど遅れを取らずついてきていたのだ

「何故ここまで力が……もしや、以前も見せた魔力の暴走!?」

前にも楓は、あんな状態のネギを見たことがあった

時は遡ること一月半ほど前、学園内でのあの戦い

幼少時、自分の故郷を地獄絵図と変貌させた悪魔、ヘルマンとの戦い

怒りで魔力が限界まで爆発し、普段からは考えられないようなパワーアップ

遠くからエヴァンジェリン達と見ていたが、その凄まじさはそこからでもビリビリと伝わってきた

「あんな状態のネギ坊主では、どんな無茶をするかも分からぬ……拙者も急ぐでござる！」

また何か嫌な予感を感じ、楓はさらにスピードを上げた

「そおおらっ！」

「ぐわあああああっ！」

ボージャックに殴り飛ばされ、地面に叩きつけられるクリリン

「クリリン！もうやめろ！」

「ま、まだだ……ピッコロ、手を出すなよ……」

ピッコロの言葉など耳も貸さず、再びフラフラと立ち上がる

これで一体、何度目になるのだろうか

「しかしお前も諦めが悪いな……これだけされてもまだやるつもりか」

「あ、当たり前だ……古の……古の仇を取るまでは……」

絶望的な力の差

それを目の前にしてなお、クリリンはまたも向かおうとしていた

最初に放った気円斬は、ボージャックに傷一つすらつけられず粉々に

その後は肉弾戦やかめはめ波で応戦したが、結果はズタボロ

いくら殴ってもボージャックは涼しい顔のまま

かめはめ波もただボージャックの周りに土煙を上げるだけ

「意地を張るのはやめて、そこの奴と一緒に戦ったらどうだ？ま、どうせ同じことだろうがな」

それとも命乞いをして奴隷にでもなるか？

ボージャックはクリリンを完全に舐めきった様子で、不敵に笑い続ける

「んなこと……してたまるかあああああっ！」

咆哮し、クリリンは拳を振り上げて突っ込む

「だだだだだだだだだあっ！」

ボージャックの身体へひたすらラッシュ

だがやはり、ダメージはまるでない

ただ空しく打撃音が響くのみ

「はっはっは、効かん効かん！」

「こんなろおおっ！」

それでも、クリリンは殴り続ける

「ちくしょおおおおっ！」

怒りを、悲しみを

全てを自分の拳に乗せて

「だあああああああああっ！」

「さっきから言ってるだろ……雑魚がいくらやろうと無駄なんだよっ！」

「ごはあああっ！」

が、その想いはやはり届かず

ボージャックの反撃の一撃は、またもクリリンへクリーンヒット

腹の中心へ捻じり込むように右拳が入る

そのまま服の襟を掴み

「いい加減分かりやがれ！雑魚は雑魚らしく、なっ！」

「ぐおおっ！」

力いっぱい投げ飛ばし、地面へ斜めに叩きつけた

「……く、くそおおおお」

「もうさっきまでみたいに手加減はしないぞ、力の差をはっきりと教えてやる」

そのまま続けて、ボージャックはさらにこう言う

「貴様自身の死によってな」

「ク、クリリン！クリリン！」

その様子をテレビで見て、孫悟空は大声で叫ぶ

「ま、まずいのう……このままではクリリンまでも奴に殺されてしまう……」

「界王様！本当にオラ何とかならねえのか！？」

ひどく焦った様子で、悟空は後ろにいる界王へ振り返った

界王は俯き気味のまま首を横に降る

「ダメじゃ、お主はもう死んだ身……こうして見ているしか今はできん」

「そんな……く、くそっ！」

眉をひそめ、両拳を強く握る

『ち、ちきしょおおおっ……』

「クリリン……」

声がし、悟空はバッとテレビの方へ視線を戻す

そこに映っていたのは、必死にその身を起こそうとするクリリン

の姿

さっきの一撃はかなり効いていたようで、起き上がる力はもうゼロが、それでもクリリンは起き上がろうとし、ボージャックへ立ち向かおうとしていた

そして両目からはまだ、大粒の涙がポロポロと

（クリリン、おめえそんなになってまで……）

『く、古の仇を……取るんだ……』

（悔しいんだよなクリリン……大事な仲間を、目の前で何も出来ずに殺されてよ……）

『はっはっは！死ぬ間際になって何をぬかすかと思えば！』

（オラだって……オラだって同じで悔しいんだ！こうやっておめえ達を見てることしか出来ねえっ！）

「ご、悟空……」

「……」

ついには悟空までも、そのまま黙り込んでしまう

『そこまであの小娘のことを思うか……よし、ならば同じ技で殺してやる』

「！！」

悟空は再び顔を上げる

「クリリン！」

テレビに接近し、食い入るようにその映像を凝視

ボージャックが右手をクリリンに向け、気を収束させている最中だった

『させるかあああっ！』

『てめえはそこで寝てやがれ！』

『ぐおわあああっ！』

「ピ、ピッコロ！」

ピッコロがすぐに飛び掛かるが一蹴

左腕で殴り飛ばされ、近くの瓦礫に激突した

『さて、これで邪魔者はもういない……』

「や、やめろっ！やめてくれっ！」

自分の声が届かない相手へ、悟空はひたすら叫ぶ

当然、ボージャックはやめたりはしない

例えこの悟空の声が聞こえていたとしても、結局は同じなのだろうが

『死ね、雑魚……』

「やめろおおおおおっ！」

『『やめろおおおおおっ！』』

「！？」

テレビからボージャックとは別の声

悟空よりほんの僅かに遅れて、ボージャックへ叫んでいた

まさかと思った直後、その声の主達はテレビの画面へ映し出される

『ほう、ノコノコとまたやられに来たのか……小僧共』

クリリンとボージャックとの間に降り立つ二人

それを見てすぐ、悟空の顔に希望の光が灯された

「悟飯！それにネギも！」

「おおっ！二人が間に合ったのか！」

自分が最も信頼する息子と、その親友

『もうこれ以上、勝手な真似はさせないぞ！』

『……古老師……』

その二人が、すんでのところで参上した

第69話　帰ってきた子供コンビ　残る仲間を危機から救え！（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「今回はちゃんと本編と同時に掲載だ、安心しろよ」

クウネル
「まあそれが普通なんですけどね」

エヴァ
「さてクウネル、今回のゲストはどうなっているのだ？」

クウネル
「はい、今回はこの方々です」

ピラフ
「よぉしお前達、久しぶりの登場だ！とことん目立ってやるぞ！」

シュウ&マイ
「おーーー！」

ガンドルフィーニ
「まったく、何で私達がこんな悪人なんかと……」

高音
「そうです、そんな奴らなんて出す必要ありません！」

クウネル
「ピラフ軍団の三人、そしてガンドルフィーニさんと高音さんの計五人です」

エヴァ
「ついに最多ゲスト人数のリクか……」

クウネル
「かなり出すタイミング迷ったらしいですよ、作者」

エヴァ
「で、何でこのタイミングなんだ？」

クウネル
「『やっぱ古いやつもちゃんと消化していかなきゃな』と思ったからだそうです」

エヴァ
「確かに一巡目で使えるのはこの時のが一番古いな……まだ情報不足で出せそうにないザジ姉妹のを除いて」

クウネル
「また、同時期に出たネギ君達のは次回か次々回くらいを予定してるらしいです」

エヴァ
「……五月のもあったよな？」

クウネル
「一緒に出るアンニンさんがどんなのか知らないそうなので、ＤＶ

Dを借りて確認次第検討を始めるとか」

エヴァ
「だったら返信の時に言っとけよ、アンニンよく知らないって……」

クウネル
「まあそれはともかくとして、今回の話ですが……」

高音
「ですから！世界征服なんてバカな真似を考えてるくらいなら、もっと世の中のためになることをしなさいと言ってるんです！」

ピラフ
「なにおう！？貴様このピラフ様に指図するというのか！」

シュウ＆マイ
「そ、そうだそうだ！」

高音
「指図も何も、人として至極当然なことを言ったまでです！」

エヴァ
「うわ、やっぱり予想通りの展開……」

クウネル
「おや、ガンドルフィーニさんは加わらないのですか？」

ガンドルフィーニ
「……ああいうバカは何を言ったって聞きやしないよ。どうせ無理なんだから放っておいても問題ないだろう？」

クウネル
「まあ確かに」

エヴァ
「お前はあっちと違って大人だな、それに比べて……」

高音
「とにかく！やめなさいと言ったらやめなさい！」

ピラフ
「うるさいうるさいうるさい！貴様こそそんなこと言うのやめろ！」

エヴァ
「あれはウチの委員長よりタチが悪いな」

クウネル
「見つけた悪は全て制裁主義ですからね、ところかまわず」

エヴァ
「いわゆる丸尾タイプだな、あいつクラスに友達いるのか？」

クウネル
「どうでしょうね、ではしょうがないので三人で進行しますか」

エヴァ
「だな」

クウネル
「今回の話ですが、久しぶりに悟空さんが本編出演しましたね」

ガンドルフィーニ
「前出たのはかれこれ二か月以上前じゃないか？第５１話で」

クウネル
「ですかね」

エヴァ
「しかしアレだな、一緒に見てるはずなのにゴリラと虫の描写が全然ないな」

注・あ

エヴァ
「『あ』って何だよ『あ』って……」

クウネル
「まあ大したことしてないってことじゃないですか？」

エヴァ
「いや違うだろ、絶対作者今の今まで忘れてたろ」

注・すみません

エヴァ
「まあ確かに、いてもいなくても一緒な気はするがな」

クウネル
「続いては、次回予告です」

ガンドルフィーニ
「さて、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「ついに孫悟飯とぼーやが復活して参戦、再びボージャックと戦いを繰り広げるぞ」

クウネル
「そして、ネギ君の怒りは戦いにどう影響していくのか」

ガンドルフィーニ
「その辺りが次回の見どころだな」

クウネル
「次回投稿予定は火曜日」

エヴァ
「感想はフリーで受け付け中だ、読者の諸君からの意見等を待っているぞ」

ガンドルフィーニ
「ではみんな、次回のネギドラ！も……」

エヴァ&クウネル
「お楽しみに！」

ピラフ&シュウ&マイ
「合体！ピラフマシン！」

高音

「操影術！」

ピラフ&シュウ&マイ
「ぎゃあああああああっ！」

エヴァ
「お前らはいつまでそうしている！」

エヴァ
「そういえば思ったんだが……大人数のゲストだと、必ず何人かはその場から席を外させるよな、作者」

注・うっ！

ガンドルフィーニ
「離れたところで戦ったり、逃げ出したりとかか？」

エヴァ
「そうだ」

クウネル

「例外は今のところ、ピッコロ大魔王の部下四人組くらいですからね」

注・こ、今後は全員ちゃんと喋らせるよう頑張ります！

エヴァ
「まあしばらくは大人数のゲストはないみたいだがな」

クウネル
「次にいつかあった時は、一応期待しておきましょうか」

第７０話　開戦第2ラウンド！ネギの怒りは吉か？凶か？（前書き）

久しぶりに一日予告より早く投稿してみました、活動報告とかで連絡も無しにスミマセン。土日の時点で原稿が完成したため（いつもなら月曜の夜くらいまでかかるんです）、じゃあやろうかなって感じでやりました。

ではどうぞ！

第７０話　開戦第２ラウンド！ネギの怒りは吉か？凶か？

「来いボージャック！今度は僕達が相手だ！」

「一度負けて逃げた奴が何を言う、また同じ様にしてやるぜ！」

悟飯、ボージャックの両名

相手を威嚇せんとばかりに、互いに気を目いっぱい開放する

一瞬即発の空気

その一方、ネギはボージャックをよそに別の者へ目を向けていた

変わり果てた姿となった、古菲である

「古……老師……」

クリリンの数メートル横で、仰向けで寝かされていた

目はピッタリと閉じ、眠っているかのような安らかな顔

血に染まった服や傷だらけの身体からは、とても想像がつかなかった

「ネ、ネ……ギ……」

「……クリリンさん」

古を見ているのに気付いたのか、クリリンは首だけを動かして顔をネギの方へ

話し掛けると、ネギもそれに反応した

「お前の……師匠、だったんだよな……」

体力を著しく奪われ、クリリンの声は弱々しい

それでも、近くにいるネギには何とか聞こえる大きさだった

「はい……古老師は、僕の尊敬する師匠で……」

ネギは握っていた拳をさらに強く握り締め

「大切な……大切な、生徒の一人でした……」

「絞り出すように声を発する」

いくら気の察知が苦手なネギでも、ここまで近くにいる者なら確実に分かる

気が本当にゼロなのか、そうでないのか

死んでいるか、そうでないのかは

だからあの時も、まだ信じきれてはいなかった

（急げ！とにかく急ぐんだ！）

地下へのトンネルを移動中のこと

治療がついに終わり、すぐさま飛び出したネギ

その際確認したモニターの映像では、ボージャックが古を下へ落としていたところであった

そしてトンネルへ入ってすぐ、大きな震動

その凄まじさから、ボージャックが撃ったものだと容易に推測は出来た

そう推測したとたん、ネギの焦りは一層高まる

どう考えても、古がそれに被弾した可能性が大きいのだ

（急げ！急げ！急げ！）

その思いは、自然とネギの潜在的な魔力までも引き出していった

本人も無意識の内に、スピードは急上昇していく

（悟飯君のと銀河戦士の気が一つ……動いてないってことは足止めをされてるのか！）

それと共に理性を総動員させ、周囲の現状把握に努める

（魔力反応も感じるってことは、おそらく捕縛効果のある結界か何か……）

到着していなかったのはこのせいか！と今になってようやく理解

そのまま、飛行しながら呪文詠唱に入った

「ラス・テル　マ・スキル　マギステル……」

悟飯達を確認次第、すぐ自分の手で結界を壊せるようにするためである

使うのは破壊に特化した、光属性の魔法の射手

始動キーが済み、続いて魔法の射手そのもののスペルに入ろうとしたのだが

“ネ、ネギ君！ネギ君！”

（こ、木乃香さん！？）

その瞬間、頭の中で木乃香の念話が響き渡ったのだ

酷く涙声で、喋るのだけでも精一杯なのだと分かる

“古ちゃんが！古ちゃんが！”

（え！？）

こちらも念話しようと懐から木乃香のカードを探すネギに、次いでこの一言

ネギの顔が一層青みを増す

“古ちゃんが！く、古ちゃんがし……あ、夕映何するんっちょっ手ぇ離して、きゃっ！”

プツン

「木乃香さん！？木乃香さん！？」

そしてカードの念話はいきなり切られた

最後の言葉から察するに、夕映がカードを木乃香から取り上げたのだろう

ネギが木乃香へ逆に念話を送るが、返事はなし

（古老師が……古老師がどうしたって！？）

古の身に何かが起きた、これは間違いない

問題はそれが何かだ

（夕映さんが無理矢理木乃香さんの発言を止めた……てことは、少なくても良いことじゃない……）

余程、今の僕が知ってはいけないこと？

あの時、木乃香さんは何て言った？

古ちゃんが！く、古ちゃんがし……

く、古ちゃんがし……

古ちゃんがし……

し……

し

し

死

『死』

（……死！？そんなバカなことがあるか！）

想像したくないものが浮かび、ネギは狼狽

だが他に心当たりのある『し』で始まる言葉がない

慌ててネギは、古の気を探る

（……無い）

反応は無し

（いや、でも……まだそうと決まったわけじゃ……）

自分は気の察知がまだ下手くそなのだ

遠く離れた距離だと、弱い気を感じ取ることがまだ出来ない

（だから……古老師は気絶してるか、単に弱っているだけ……）

必死に言い聞かせようとするが、どうしても納得しきれない

『死』という一文字がどうしても、イメージから拭えない

（嘘だ……嘘だ……嘘だ！）

『死んでない』ということに確信が、持ちたくても持てない

逆に、『死んだ』ことばかり考えが向かってしまう

いくら持ち前の頭を駆使しても、それが覆らない

（……古老師……古老師！くそおおおおっ！）

ネギはそんな事態、事態に起こることしか出来なかった

そして今は、確信に至ってしまったのだ

「……古老師……」

古は、あのボージャックの一撃で死んだのだと

「すまない、ネギ……俺は……俺は……」

「クリリンさん……」

「古を、守って……やれなかった……」

堪えきれず、クリリンは顔をネギから背ける

右手は握り拳のままで、左手は地面に

土をギュッと掴み、また両目から大粒が

「……」

ネギの両拳はワナワナと震え

「よくも……よくも……」

顔はブージンの時の比ではない程、より怒りに染められていく

ここまでネギが、本気で怒ったことがあっただろうか？

否、これはヘルマンの時とも比べ物にはならない

六年前と違い、救えたかもしれない命

それがこうして、潰えた状態の姿で目の前に倒れている

許せなかった

「ネギ君、最初と同じで後衛でサポ……ネギ君!?」

「うわあああああああああああああっ！」

そうさせた敵、ボージャックが

「ぐぼおおっ！」

そして、守れなかった自分が

「ずあああああああああああああああっ！」

ネギは踵を返し、無意識のままボージャックへ突っ込んでいた

悟飯が止めるより速く、拳はボージャックへ到達

腹のど真ん中へ直撃

そのまま全力をもって振り抜いた

悟飯はそのスピードとパワーに、信じられないといった表情

（あ、あのガキから一発を喰らうだと！？）

さらには、喰らった当人のボージャック

彼も殴り飛ばされながら、それに目を白黒させる

（油断してたとはいえ、まさかこの俺が……って！？）

「このおおおおおおおおおおおっ！」

「ぬごおおっ！」

ネギはもちろん追撃を止めない

ボージャックが体勢を立て直す前に、瞬動で急接近

その速度も、いつものネギでは想像もつかないもの

勢いそのまま、右脚で高々と蹴り上げた

天へ昇るボージャックへ、これまた追撃のため飛んで接近

「はああっ！」

「そんなもので……」

瞬時に向こうが撃ってきた気弾を、魔力を込めた右手でバシンと弾き

「やられるかあああああああああああっ！」

「ぐごおおおおおっ！」

返す刀で左頬へ、右ストレートを思いっきり叩き込んだ

「だだだだだだだだだだだだだだだだだだだあっ！」

「ぬごごごがぐがっ！」

ひるんだところへ、さらに身体へ連続でラッシュ

無数の拳の雨が、ボージャックへ注がれていく

「こ、これが……あのネギなのか？」

瓦礫の中からフラフラと身を起こしたピッコロも、驚きを隠せない

さらには悟飯も、この光景を棒立ちで見上げていた

「凄いネギ君……一気にパワーが爆発した……」

「しまった、遅かったでござるか！」

「「！」」

そこへ、ようやく楓が息を切らせながら到着

悟飯達を見つけると、ピッコロの隣辺りに降り立った

「か、楓……」

「楓さん！どうしてここに！？」

「拙者を追い抜いたネギ坊主とお主を、そのまま追いかけたのでござるよ……その口ぶりだと、本当に拙者のことは気付いてなかったみたいでござるな」

そう口にしながら楓は、倒れているクリリンと古を見やる

「そうか、やはり古は……」

「……ああ、ついさっきな。お前もあの爆発は分かっただろ？」

「……うむ」

「すみません！僕がもっと早く来れていれば、こんなことには……」

悟飯は二人に近づき、頭を下げながら申し訳なさそうにこう口にする

事実ブージンに拘束されていなければ、古が頭を締めつけられる段階で悟飯は到着していた

「済んだことはもう仕方がない……それより今はネギ坊主でござる」

楓は即座に印を結び、影分身をもう一度三体

「悟飯殿、この影分身達と今すぐネギ坊主の援護を！」

「ど、どうしたんです楓さん？そんなに慌てて……」

楓の急ぐ様子に、悟飯は首をひねる

「だだだだだだだあっ！」

「ぬおおおおおおおっ！」

現在、ネギはボージャックを圧倒していた

攻撃を次々と繰り出し、ことごとく命中

向こうは反撃一つしてこない

「今のネギ君なら、援護の必要性はそこまで無いんじゃ……確かに、戦う数は多いに越したことはないですけど」

「いや、あのままではネギ坊主は確実に負ける」

「えっ！？」

しかし楓がこう言い、悟飯の考えは否定される

「楓、それはどういうことだ？どうもあのネギのパワーアップに問題があるような言い草だが……」

「そう、あのネギ坊主のパワーアップは、魔力の暴走によって引き起こされたものなのでござる」

「魔力の暴走？」

「暴走……そうか！」

楓の説明に悟飯は「？」だが、ピッコロは何か感づいたようだ

納得したような表情で、続きを聞こうとしている

「ネギ坊主が潜在的に秘めている莫大な魔力、それがとあることを機としていきなり爆発するのでござる」

「とあること、ですか？」

「うむ」

「『怒り』　違うか？楓」

「……流石ピッコロ殿」

つまりは、悟飯と極似しているのである

「ああなったネギ坊主はパワーこそ上がるが、それによる戦闘面のメリットは初めだけ……」

怒りで我を失うとはすなわち、戦いにおいて重要な要素の一つ、冷静さを欠くということ

そうすれば戦い方は、今のネギのように強引に力のみでゴリ押しに限定される

それもいずれは見抜かれ、限界が来るというわけだ

「奴が反撃に移らぬ内に、全員でさっさと仕留め……む？」

そこまで言ったところで、ネギはボージャックへ大技をかけにいっていた

さらに膨らむ魔力に、一同の視線はそこへ注がれる

「魔法の射手〈サギタ・マギカ〉連弾〈セリエス〉・光の五十九矢〈ルーキス〉！」

下へ叩き落としたボージャックへ、多数の魔法の射手

全てがボージャックのみに狙いを定め、次々と向かっていく

「来たれ雷精風の精（ウェニアント・スピリトゥス・フルグリエンテース）……」

その間に、これでトドメを刺さんと自分の最強魔法の詠唱を始めた

前に一度試みたが、失敗に終わったあの魔法

（今度は、必ず当てる！）

それを再び、今度は万全の状態で

「雷の暴風（ヨウィス・テンペスタース・フルグリエンス）！」

ボージャックへ向けて全力で放った

悟飯たちとの修行で撃ったのとはまるで桁違い

倍はあろうかという大きさ、そして激しく唸る轟音

着弾したとたん、その雷が大スパークを引き起こした

周囲を完全に飲み込み、爆音と煙がその空間を支配する

それに思わず、悟飯達三人（＋クリリン）も目を覆う

「うわっ！ネ、ネギ君凄い……」

「まさかこれほどの威力になっていたとは……これはひょっとするとネギ坊主、奴に勝」

「いや、それはおそらくないだろう」

「え！？」

もしやと思った楓へ、ピッコロの重々しい声

楓はピッコロの方へ振り返る

「あんなもんでくたばるタマじゃない、さっきまでずっと戦ってい

たから俺には分かる……確かにネギの技は凄い威力だが、俺や悟飯も本気になればあれくらいは撃てる」

しかも奴は変身して、身体能力を格段に上げているんだとピッコロは続けた

「つまりその上がった防御力で、あれに耐えきれるとでもいうのでござるか！？」

喰らったのがボージャックでなく自分なら、間違いなくあれで死んでいる

予想をはるかに超える次元

「ああ」

「確かに、僕もガードさえ出来ればあれくらいなら何とか……」

「そんな……」

楓は驚愕するしかなかった

「でも、かなりダメージは与えられたはずです。だから楓さん、早くネギ君の援護に……ああっ！」

視線をネギへと戻した悟飯だったが、直後硬直

「ピ、ピッコロさん！楓さん！」

「どうした悟は……何だと！？」

「ば、バカな……」

二人もそれを見て、悟飯と同じ反応

ネギの背後には一人の人物

ダメージが少ししか見受けられないボージャックだった

「さて、そろそろ攻守交代の時間だ」

「!?」

ネギも背後のそれに、声がしてからようやく気付く

「な、何で!?ネギ君のあの技なら、倒せなくたってそれなりのダメージは与えられる筈なのに!」

「まさか、あれを避けて後ろへ回り込んだというのか……俺達にも感付かれず瞬時に……」

「……あんな化け物、反則でござるよ」

ボージャックに三人はその場で驚愕

「少し調子に乗りすぎたな、クソガキ……」

ネギの優勢など、瞬く間に消え失せていた

「ここから先は、俺がやらせてもらうぜ」

第７０話　開戦第2ラウンド！ネギの怒りは吉か？凶か？（後書き）

クウネル
「どうも皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「今回のゲストはどうなっているのだ？」

クウネル
「はい、今回は第７０話突破を記念し、作者が考えた組み合わせのゲストをお呼びしてみました」

エヴァ
「はあっ！？何だそれ！」

クウネル
「あとがきコーナーの初期って、リクエストが来なかった時は作者が自分でゲスト考えていましたよね？」

エヴァ
「だな」

クウネル
「『ゲストのリクなんてそうそう来ないだろうし、十本くらい今のうちから用意しておこう』って考えてたんですよ、当時」

エヴァ
「で、そのお蔵入りのを一本今やってしまおうと？」

クウネル
「はい、作者の息抜きも兼ねて」

エヴァ
「やるならせめて１００話の時とかにしろよ……なんでこんな中途半端な……」

クウネル
「ではお二方、どうぞ！」

エヴァ
「聞いてないし……」

ギニュー
「ギニュー特戦隊隊長！ギニュー！」

夕映
「バカレンジャーリーダー！バカブラック！」

ギニュー
「二人」

夕映
「合わせて」

ギニュー&夕映
「両作の戦隊ものリーダーズ！」

バババーーーーン！

エヴァ
「こいつらか……そういえば一時期、作者が特戦隊シリーズをやっていたな」

注・４２話、４３話のを参照

クウネル
「そういうことです」

夕映
「あのギニューさん……打ち合わせの通り一応やりましたけど、やっぱり今のポーズは恥ずかしいです」

ギニュー
「何を言う！リーダーたるもの、ポーズ一つ恥ずかしがらずに出来んでどうする！」

夕映
「いや、別に私は望んでリーダーになったわけでは……」

エヴァ
「おいクウネル、ポーズといっても読んでいる読者にはどんなのかサッパリだぞ？」

クウネル
「あ、ホントですね」

注・読者の方々のご想像にお任せします、ちなみにギニューの今の身体は蛙じゃないです

エヴァ
「ポーズ考えてなかっただろ作者……」

クウネル
「さてさて、ではコーナーの進行をしましょうか」

エヴァ
「まあいいか……今回の話はあれだな、大バトルと豪語してた割にはバトルが半分も占めてなかったな」

夕映
「確かにそうですね、ちょっと悟飯さん達の会話やトンネル内のシーンが長かったかもです」

ギニュー
「だが次回は、見たところ本当にバトル一色なりそうな予感がするぞ」

エヴァ
「そうなればいいがな」

注・頑張ります！頑張りますから！

エヴァ
「あと、あの親玉（ボージャック）なんだが……映画版より断然強くなってないか？」

クウネル
「そういえば、ネギ君のあの雷の暴風を普通に避けてましたからね」

ギニュー

「まあ、あの少年の強さが実際どのくらいなのかも重要なんだがな」

夕映
「作者の考えでは、『変身前、もしくは変身しない銀河戦士＜魔力暴走ネギ＝変身後の銀河戦士』くらいの見立てだとか」

エヴァ
「随分引き上げたな……まあこれくらいなら辻褄は合うか」

夕映
「ただし、これはあくまで部下四人と比べたもので、ボージャックはあの中にはカウントしてないそうです」

エヴァ
「まああいつは親玉で異質なわけだしな」

クウネル
「続いて、次回予告です」

ギニュー
「さて！次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「ぼーやの攻撃もなんのその、ボージャックが猛反撃を開始するぞ」

クウネル
「悟飯さん達の援護は、上手くいくのでしょうか？そこも注目ですね」

ギニュー

「次回は今回よりも、バトル描写がうんと増えるぞ！」

夕映
「そしてついにあの人が登場です！誰とまでは今は言えませんが……」

エヴァ
「次回の更新予定は金曜日だ」

クウネル
「皆様の感想、お待ちしています」

ギニュー
「では読者のみんな！次回のネギドラ！も……」

エヴァ&クウネル&夕映
「お楽しみに（です）！」

ギニュー
「何！？君のところのには、ちゃんとしたファイティングポーズが無いだと！？」

夕映
「はい、別にその五人で誰かと戦うとかじゃないんで」

ギニュー
「それはいかんな……よし！この私が特別に、ギニュー特戦隊で使っているスペシャルファイティングポーズを伝授してやる！」

夕映
「え゛！？べ、別に教えていただかなくても結構です！だってアックマンさんから聞くところによれば、そのポーズってさっきやったのよりもさらにダサ……って、人の話を聞くです！」

ギニュー
「はっはっは、遠慮はいらんぞ！みっちり教え込んでやるからな！」

夕映
「は、離すですーーーーー！」

ズルズルズルズル……

エヴァ
「……なあクウネル」

クウネル
「はい、なんですか？」

エヴァ
「この『お蔵入りのやつ解放企画』は成功したのか？」

クウネル
「さあ？」

エヴァ
「さあ？っておい……」

注・８０話でまたやるかは検討中です

第７１話　一転大ピンチのネギ　予期せぬよく知る者参上！（前書き）

実は来週から期末考査です。でも週二ペースは変わりません、ちゃんと両立させてはいるので。

『一周年＆百話』に向けて、テストにもめげず頑張りますのでどうぞ応援よろしく。

ではどうぞ！

第７１話　一転大ピンチのネギ　予期せぬよく知る者参上！

「……よし、ありがとなデンデ！」

ほぼ同時刻、神様の神殿

餃子の案内により、無事到着したコタロー達

すぐさまデンデが治療にあたり、怪我は完治した

腕をグルグルと回し、コタローは身体の具合を確認する

「そんじゃ俺、もう戻らなアカンから」

「……また戦いに？」

デンデは心配そうな表情でコタローへ問い掛けた

あそこまでの大怪我を負わせるような相手だ

不安になるなというのが無理であろう

「ああ……まだ他のみんなが戦ってるんや、行かな男やない」

コタローは回復した気を開放

そしてデンデから視線を切ると、続いて茶々丸と餃子を見やる

「そんじゃ、お先にな」

こう言うと、そのままコタローは飛び出した

ギュオオオオと気を全開にして元来た道を戻る

「では餃子さん、私達も」

「う、うん」

「それでは、失礼します」

「み、皆さんお気をつけて！」

少し遅れて、茶々丸と餃子も後を追った

コタローの飛行速度はかなりのもので、二人の全速力でも到底追いつけそうにもない

それでも少しでも早く着けるよう、とにかく急ぐ

「……餃子さん、デンデさんを一緒に連れて行った方が良かったのでは？」

そして、茶々丸が飛行を続けながら餃子へと尋ねた

あの治癒能力があれば、かなり自分達の助けになると彼女は思ったのだが……

「……デンデは地球の神様、もし万が一のことがあって死んだら誰も生き返れなくなっちゃう」

「行く途中で話されていた、ドラゴンボールのことですか？」

「そう」

ネギ達と違い、ドラゴンボール等の情報については皆無だった茶々丸

デンデのもとへ向かう際に、餃子から大まかな話は聞かされていた

「だから危険な場所へは極力行かせちゃいけないの、僕達だけで何とかしなくちゃ……」

「……古菲さんのためにも、ですね？」

「うん……」

そこまで話すと、二人の会話が止まる

「……もう一度お伺いしますが、それは間違いではないのですよね？」

「気が完全に消えた、間違いじゃない」

会話が再開されるも、すぐまた沈黙

行く途中で知らされた、餃子からの宣告

耳を疑った茶々丸とコタローだったが、コタローは自身で確認して確信

気に関するサーチは高性能じゃない茶々丸は、あの時ただ聞き入れるしかなかった

（コタローさんはああして平静を装っていましたが、実際かなり精神的にきているはず……）

敵を目の前にして冷静さを失えば、それこそ第二の被害者となりかねない

（そうはならないと信じたいですが、コタローさんはまだ少年ですし……）

口にはせず、ただ頭の中で思考を重ねる茶々丸

出てくるのは、コタローに対する不安要素のことばかり

（ですがまず至急、会場へ戻らなくては……話はそれからです！）

「あ、待って待って！」

自然とジェット噴射の出力を上げ、茶々丸はさらに高速で飛行していった

「あ……あ……」

後ろからの声に、ネギは硬直した

今の自分に出来る最大限の攻撃

古直伝の格闘術

そして父親譲りの魔力を目一杯注ぎ込んだ攻撃魔法

どれもかなりの自信はあった

事実、ボージャックはあの時反撃一つ出来なかったのだ

なのに最後の技、雷の暴風

あれをうって変わって難なく避けられ、背後を取られた

「さっきの攻撃は大したもんだった、俺も最初は思わず焦っちまったぜ」

「く、くそおおおおっ！」

咆哮し、ネギは身体を左に回転

その勢いで右拳を、ボージャックの顔面へとフルパワーで放つ

まだ魔力の暴走は収まりを見せておらず、パワーとスピードはなんら変わっていない

バシィィィッ！

「なっ！？」

しかし、ボージャックはそれを左手で正面から受け止めた

押し切ろうとさらに力を入れるが、拳は前に進まない

「確かにこのパワーアップぶりは見事だ、変身した俺の部下とも普通にサシでやりあえる位にまでなっている」

「このおおおおおおおっ！」

ボージャックの言葉に耳も貸さず、ネギは左拳で第二撃

バシィィィッ！

「！？」

だが、これもボージャックは右手でガード

「な、何でこんな……」

再び力を込めるが、やはり結果は同じ

「しかしながら、戦い方がお粗末すぎる。てんでその力を使いこなせていない」

少し喰らってやれば動きを見切るくらいわけないぜ、とボージャックは続けた

「そんなこと……そんなことあるもんか！」

逆上し、ネギの身体からさらに魔力が噴き出す

パワーが増され、それをさらに拳へつぎ込んだ

「はっはっは！そんな力任せの戦法じゃ、俺には一生……」

ここまで言っても全く変わらないネギへ、ボージャックは高笑い

両拳をしっかり止めながら、そのまま頭を後ろに引き

「勝てないんだよっ！」

「うがっ！」

ネギの顔面へ思い切り、自らの額で頭突きをかました

両手が塞がったネギに回避する術はなく、直撃

痛みに顔を歪ませ、鼻からも出血する

同時に拳に入っていた力も緩み

「そおおおおらっ！」

「ぐばあああああっ！」

ガラ空きの腹へ右ストレートを叩き込まれる

身体の奥から、空気と共に血液が口からこぼれた

「どうだ？さらにもう一発お見舞いし……」

「ネギくーーーーん！」

「ちっ！まだあいつらがいたか……」

ボージャックはネギへ猛攻していくが、ここでいきなり悟飯の声

ネギの服を掴みながら下を見ると、悟飯が楓の影分身達とこちらへ突っ込んで来ていた

「鬱陶しい奴らだ、順に片づけてやる……」

彼らを邪魔者と判断したボージャックは、不満からこう口に漏らす

早速やってやるか、とネギの服を一層強く掴み

「そおおらよっ！」

「う、うわあああああっ！」

「ネギ君！」

悟飯目掛けてネギを投げつけた

いきなりの敵の行動に、悟飯も仰天

現在の位置関係を単純に言えば、ボージャックが上で悟飯が下

そのボージャックが悟飯へネギを投げたということは、つまり地面へ一直線ということでもある

変身したボージャックのパワーは未知数

そんな奴に投げられたネギが地面へ直撃したらどうなるか

どう考えても重傷、箇所によっては最悪の事態もあり得る

当然悟飯もそれは把握できており、避けるという非情な選択肢は

「うぐっ！……だ、大丈夫？ネギ君」

取れるわけがなかった

が、もちろんボージャックはそれを狙っており

「バカめ！またかかったな！」

「！！」

ネギを正面から受け止め、動きを止めた悟飯の後ろへ瞬時に回り込み

「ふんっ！」

「うわあああああああっ！」

背中をハンマー打ちで、抱き止めたネギごと真下へ叩き落とす

「「「はあああああああっ！」」」

そこへ近くにいた楓の影分身三体が特攻

気を込めた右手で、囲むように三方向からパンチを放つが

「んなもん当たるかあああああっ！」

ボージャックには無意味

正面の楓の腕をガッシと片手で掴むと、そのまま横へと一回転

その楓をあたかもバットのように使い、残りの二体に攻撃する

二体はそれぞれが攻撃を喰らった直後、あまりのダメージに耐え切れずにボンと消滅

掴んでいた楓も、二体を撃破するとブンと放り投げ

「はあああっ！」

気功波で簡単に消し去った

「ふん、他愛もな……ん？」

鼻で笑うボージャックだったが、周囲の光景を見てその笑いを解く

気弾、気弾、気弾、どこもかもが気弾

いつのまにか自分の周囲３６０度が、無数の気弾によって包囲されていた

（気弾のせいで下がよく見えんが……やったのはこの気からして、さっきの分身の本体の女みたいだな）

ボージャックの予測は的中

悟飯と影分身三体が向かった後、即座に楓は追加で影分身を十二体作成

そして機を見計らい、一気に十三人で気弾を発射した

準決勝で見せた楓の新必殺技、『忍空密爆球』

コンディションこそ最高ではないが、楓は再びこの技を使ってきた

「（これで少しは時間稼ぎをせねば……）はあああっ！」

気弾が包囲しつくしたのを確認すると、楓はすぐさま両手を組む

それを合図に、気弾らは一つの球になってボージャックを包み込んだ

そしてそこから圧縮させるため、さらに力を込める

左腕がズキンと痛むが、そんなことは構っていられない

「ピッコロ殿、この隙に二人のところへ……今拙者は動けぬ」

「いや、駄目だ。効いていない……」

「……え？」

「があああああああああっ！」

ボガァァァァンッ！

「な！？」

ピッコロの言葉を聞くとほぼ同時に、楓の耳にボージャックの雄叫びが入る

そして巨大な爆発音、楓はまだあの球を爆発させていないのにだ

「そ、そんな！」

爆発したのはボージャック自身、正確に言えば彼の気

爆発波を使い、内側から一気に楓の技を破った

「そこの女！あんなチャチな技一つで俺を止められると思うなよ！」

楓の方を向いてこう言葉を吐くと、ボージャックは高速で下降

「い、いかん！ネギ坊主達が！」

しかしもう無理な話

満身創痍で、戦闘は既にほぼ不可能なピッコロ

怪我は左腕のヒビのみだが、さっきの技で影分身が全部力尽きて気も殆ど無い楓

立つことすら叶わず、ただ地に伏せるのみのクリリン

三人の中で、今のボージャックを止められる者はいなかった

「おらあああっ！」

「ぐわあああっ！」

起き上がろうとしていた悟飯の背中を、勢いそのまま垂直にニードロップ

着地してそのまま蹴り飛ばし、ネギの周囲の邪魔者を排除

「攻撃再開だクソガキーーー！」

悟飯の隣にいたネギへ、拳を振り下ろす

「く、くそっ！」

悟飯が抱き止めてたせいか、ダメージは悟飯ほど無かったネギ

何とか身体を動かし、ギリギリで回避する

ネギがさっきまでいた地面に、ボージャックの拳が当たってクレーターが出来た

「そらそらあっ！まだ終わらないぞ！」

（うっ、マズい……）

そこからさらにボージャックは攻め立てる

高速で連続攻撃を仕掛け、ネギはそれを必死に避け続けた

だが、それも長くは持ちそうにない

（やらなきゃ、やられる……）

ネギは反撃を決意

避けながら右手に、光の魔法の射手を集束

「桜花崩拳！」

半ば玉砕を覚悟で、ボージャックへその拳を放つ

「少しはマシになったか、だがな……」

「なっ！？」

が、結果は空振り

拳が当たるよりも早く、ボージャックの姿がネギの目の前から消えた

「ど、どこだ！」

「ネギ！後ろだーーーー！」

ピッコロが叫び、ネギは即座に振り向くが

「それじゃ遅いんだよっ！」

「ごぼおおっ！」

そこへストレートが完璧に入った

ぶっ飛ばされるネギを、さらにボージャックは追撃

「そらあああっ！」

「がはあああっ！」

飛んだ先へ回り込んで回し蹴り

「ふんんっ！」

「ぐおおっ！」

また回り込み、拳を腹に打ってネギの動きにブレーキ

続いて顔を右手で掴んでアイアンクローをかますと

「おらあああああああああっ！」

「が、ががががあっ！」

そこから下に叩きつけ、押しつけながらガリガリと地面を削る

「これで……仕舞いだあああっ！」

「ぐわあああああっ！」

そして、近くの廃墟の建物目掛けて投げ飛ばした

抵抗も出来ず、ネギはその壁に背中を強打する

「「はあああああああああっ！」」

そこへ接近しようとするボージャックに、楓とピッコロが残る力を振り絞った気功波で妨害に入るが

ボシュウウッ

「そう慌てるな、順番に殺してやるからよ」

「か、片手で……」

「奴はやはり、化け物でござる……」

ボージャックは落ち着いた様子で、右手で難なく受け止めた

二人の気が著しく減っていたこともある

しかしそれを差し引いても、大きすぎる力量差を感じずにはいられなかった

「うおおおおおっ！」

「お前はもう少し寝てやがれ！」

「がはあああっ！」

続いて起き上がった悟飯が背後から飛びかかるが、これも一蹴

ただ真っすぐに突っ込んで来たところを、左の裏拳で殴り飛ばされた

「さて、これで……」

ボージャックは右手に気を集め、気を取り直してネギに接近

ダメージ多量のネギは、そこから逃げることも出来ない

「く、くそ……うっ！」

その目の前十センチに、気を集めたボージャックの右手

ネギの顔が恐怖に歪む

「あ、あああああ……」

「今度こそトドメだ、クソガキ！」

そこに集まる気が、一層輝きを強める

「ネ、ネギ君！」

「ネギ！」

「ネギ坊主！」

「ウハハハハ！死ねえええええっ！」

チャキッ

「……ん？」

このまま気功波を撃とうとしたボージャック

しかしそんな彼のこめかみに、突如ある物が押し当てられた

先端が筒状に近い形体で、無機物特有の冷たさ

（な、何だ？さっきまでこんな気配は……）

無かった筈だ、なのに何故？

真相を確かめようと、横目で見ようとするボージャックだが

バンッッッ！

「ぬおおおっ！？」

それより先に、押し当てられていた物から何かが飛び出した

当然直撃

あまりの威力にボージャックは、身体ごと浮き上がって横に飛ばされる

そしてネギのとは別の廃墟に、回転しながら大激突

その中に身体を埋まらせた

「ふう、何とか成功したか……大丈夫かい？ネギ先生」

「あ……あああっ！」

突如目の前に姿を見せた人物は、黒のロングをたなびかせながらネギへと顔を向ける

目の前の事態に対しパニック状態のネギだったが、その人物の顔を見た途端我に返った

前述した黒のロングに加え、褐色肌と両手の銃器

これに該当するのは、ネギの中ではただ一人

また、楓も同様に驚きを見せており、ピッコロが横で何者なのだ

と尋ねている

「遅くなってしまって本当にすまない……あともう少し早ければ、古も……」

「た、龍宮さん！」

「真名！」

それは、本当に久方ぶりの再会

現れたのは３－Ａ出席番号１９番、龍宮真名その人であった

彼女の思いもよらぬ登場に、ネギはアワアワとした口ぶりで言葉を続ける

「な、何でいきなり転移魔法符も使わずパッて……それに今まで一体何処に……」

「それについては後で話す、今はそんな時じゃない」

仕事人としての顔を崩さぬまま、真名は銃口を瓦礫の方へ

「流石親玉、お早い復活だ」

「舐めた真似してくれるじゃねえかよ……」

頭から僅かに血を流し、瓦礫の中からガラガラと音を立ててボージャックは出てきた

「お生憎さま、そんなオモチャじゃ俺の脳天は撃ち抜けないぜ」

「ヘッドショットキルはやはり無理、か……でも、少しは効いてるみたいだが？」

「へっ、ほざけ！」

血を軽く拭うと、ボージャックは再び戦闘態勢

「雑魚が一匹増えたところで、俺の勝ちには変わりないんだよ！」

「私を……ただの雑魚とは思わないことだな」

真名は気圧されることなく、左手に持つ銃の銃口も前へ向けた

第７１話　一転大ピンチのネギ　予期せぬよく知る者参上！（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「さてクウネル、今回のゲストはどうなってるんだ？」

クウネル
「はい、今回のゲストはこの第７１話にも登場したお二人……」

ネギ
「どうも師匠〈マスター〉、お久しぶりです」

デンデ
「か、彼女がお師匠さん？」

クウネル
「ネギ君＆デンデ君の努力家コンビです」

エヴァ
「デンデは本当に久しぶりだったよな、本編に出てくるの」

クウネル
「最後に出たのが第２８話、かれこれ五ヶ月は出てなかったですもんね」

エヴァ
「まあ、バトルシーンにおいては介入が難しいキャラだしな。それ

以前に普段地上にいないし」

クウネル
「でも本当は、物語終盤まで登場予定無かったみたいですよ？ほら、第２８話のあとがき」

エヴァ
「『ドラゴンボールが集まった時にでも喋らせますか』……あ、ホントだ」

デンデ
「でも結局、今回もそこまでセリフは貰えませんでしたけどね」

クウネル
「では、早速コーナーを進めましょうか……」

エヴァ
「そうだな……さて、ぼーや」

ネギ
「は、はいっ！」

エヴァ
「あの体たらくは一体何だ？」

ネギ
「え、えっと……その……」

エヴァ
「力任せのゴリ押し戦法……敵にまで言われてたよな？」

ネギ
「す、すいません……」

エヴァ
「お前はそんなんで恥ずかしくないのか？」

ネギ
「……」

エヴァ
「挙句の果てには、また孫悟飯に迷惑をかける始末……」

ネギ
「……はい」

エヴァ
「大体ぼーやは、私の弟子になった当初からだな……」

クウネル
「はい、ストップですエヴァンジェリン」

エヴァ
「何故止めるクウネル！もっとこいつにはお灸を据えて……」

クウネル
「それはこのコーナーの主旨と違いすぎます、とりあえず落ち着いてください」

エヴァ

「元々このコーナーには主旨もクソも無かろう！毎回ゲストがメチャクチャに掻き回すし！」

クウネル
「それについては否定はしませんけど、こうやって今回はマジメなゲストが来たんですから……」

デンデ
「そうですよ！」

エヴァ
「ちっ……おいぼーや、今回は大目に見てやるが、次こんなことがあったら覚悟しておけ」

ネギ
「は、はいっ！」

クウネル
「というわけで話を変えますと……ついに龍宮さんが本編に登場しましたね」

エヴァ
「一応以前言ってた通り、十二月に入る前に登場出来たようだな」

ネギ
「でも結構ギリギリでしたよね……本当は十一月の初めくらいには出すつもりだったそうです、当初」

エヴァ
「まあ、随分途中が長引いたからな……特にクリリンのが」

クウネル
「話を書き進めながら、『間に合わなかったらどうしよう』と作者もかなり焦ってたみたいです」

デンデ
「間にまたトランクスさんのを入れてたらもっと危なかったですね」

エヴァ
「だな」

クウネル
「では続いて次回予告です」

ネギ
「さて、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「突如助っ人に参上した龍宮真名、次回は奴が主に活躍するようだ」

クウネル
「圧倒的なパワーとスピードを誇るボージャック」

デンデ
「一体どう立ち向かうんでしょうか？」

ネギ
「そして龍宮さんの二週間の動向、いきなり現れた秘密が明らかに！」

エヴァ
「次回の更新予定は火曜日だ」

クウネル
「感想ページへの書き込みは、随時受付中です」

デンデ
「では皆さん」

ネギ
「次回のネギドラ！も……」

エヴァ&クウネル&デンデ
「お楽しみに！」

クウネル
「そう言えば今更なんですが、ネギ君って杖はどうしたんですか？」

ネギ
「元いた方の地球に置きっぱなしにしちゃったんです、だから浮遊術覚えるまで大変で大変で……」

エヴァ
「確かにこれまで描写ゼロだったな、魔法も全部指輪からやってたし……」

注・本当に今更ですみません

第７２話　真名の必殺銃炸裂！それを天から見守る戦士（前書き）

一日遅れてしまいました。一応活動報告には書いておきましたが、すいませんでした。読んでる人いるんでしょうか？とか思っちゃったりする今日この頃です。

こういう時以外にもチョコチョコ書こうとは思ってるので、もしよければご覧ください。

ではどうぞ！

第７２話　真名の必殺銃炸裂！それを天から見守る戦士

「ネギ先生、ここは私が何とか食い止めておく。その間に重傷の奴を連れて近衛の所まで戻れ」

「ええ!?だ、ダメですよ!龍宮さんじゃあいつを食い止めるなんて……」

身体に鞭を打ち、ネギはよろよろと立ち上がりながら真名へ反論した

先程のようにピッコロならまだしも、真名では実力差がありすぎる

精神と時の部屋で半年修行した自分達を、さらに凌駕するピッコロ

それに近い実力は、どう考えても今の真名には無いとしか思えなかった

「そうだな……確かに純粋な力じゃ、今の私は楓や刹那の足元にも及ばない」

「だ、だったらみんなで戦って……」

「だが私だって二週間を無駄に過ごしてきたわけじゃない、行け」

真名は会話を一方的に切ると、ボージャックへ完全に意識を集中

右手にはデザートイーグル、左手には六発リボルバー式の拳銃

両手の銃の銃口をそれぞれ、ある一点に定める

「へっ、だから雑魚が俺の足止めなんて……」

そして即発射した

バンバンとボージャックへ、弾が計十発ほど放たれていく

「無理に決まってんだろーが！」

だが、ボージャックはそれらを全て手で掴み取っていった

正確には、自分へ当たりそうになる弾を全部

約半分は的が外れ、足元の地面に着弾する

「どうだ！さっき不意打ちで当てたからっていい気になるんじゃねえぞ！」

「なるほど、確かに実力差は明白のようだ……」

真名は裏世界関係の敵と戦う際、通常の銃は用いない

何かしら弾丸に術式、または自らの気などを込めて発射する

そのため、銃そのものに改造が加えられているのも言うまでもない

気を込めた弾丸を、銃で発射する

そうなれば当然、真名本人が持つ気の大きさが大きく関わってくる

こうしていとも簡単に防がれている点からも、やはり彼女の力量不足が伺えた

「た、龍宮さん！やっぱり無理です！」

「クソガキの言う通りだぞ女！ハッハッハ！」

「しかし私はお前を足止めするとは言ったが、純粋な戦いでそうするなんて一言も言ってないぞ？」

「え？」

「何！？」

さらに焦りが顕著に出るネギと、笑い声をあげるボージャック

しかし真名が淡々と言ったこの言葉に、思わず表情を一変させた

「気付かないのか？私は撃った弾を半分ほど地面に当てたが、それは狙ってやったことさ」

そう言うのとほぼ同時に、ボージャックの足元が突如緑に光りだす

「な、何だこれは！？」

光る箇所は全部で五つ、外れた弾が着弾したところ全て

まず真正面に一つ

そしてそのやや手前に、左右に分かれて斜め前に一つづつ

最後に、後方へ左右一つづつ

それらは同じ光の一本の曲線に繋がれ、一つの円に

さらに円の内側でも、点と点とを光りが結んで一つの星を形成した

「ご、五芒星……結界か！」

「ご名答」

真名がニヤリと笑みを見せる

気を込めた弾を右手の銃で、術式を込めた弾を左手の銃で

それぞれ、全て狙い通りに放っていたのだ

「ふん！こんなもの正面からぶち破って……」

ボージャックは肩を前に出して突進

ショルダータックルをかまして、周囲をドーム状に覆う結界を破ろうとする

ドガッ！

「何だと！？」

だが逆にボージャックは、光の壁に弾き返された

これは流石に驚かざるを得ない

「驚いたろ？なんせそれは特別製の結界弾だからな」

「ふ、ふざけるな！こんなもんでこの俺を閉じ込めておけるとでも思ってんのか！」

「現にお前はさっき、出ようとして出れなかった」

「う、うがあああああっ！」

逆上し、ボージャックは光の壁へラッシュ

バシンバシンと凄まじい打撃音が周囲に響き渡る

「というわけだネギ先生、安心して回復しに行ってくれ」

「ど、どうやったんですか！？あんな化け物を閉じ込められる結界、龍宮さんの力で作るなんて……」

ネギもボージャック同様驚愕し、慌てて真名へ尋ねた

真名は軽く振り返ってクスリと笑うと、ネギへ簡潔に説明

「そうさ、私じゃ到底作れない。別の人に急いで術式を込めてもらってね……」

「だ、誰があんな凄いのを！？」

真名の右手人差し指が、まっすぐ上方向に向く

「昔奴を封印した本人、あの世にいる神様達にさ」

「……え？」

ネギの目が点になった

「何をしているネギ！さっさと地上へ戻るぞ！」

すると直後にピッコロが、ネギへ向けて声を荒げてくる

そちらへ顔を向けると、クリリンを肩に担ぐ楓と当人の姿が

「え？え？」

ピッコロの聴覚は、他の皆とはまるで比べ物にならないほど優秀

離れたあの場所からも真名達の会話を完全に聞き取り、状況を把握したのだろう

「確かに真名の言う通り、奴は今あそこから動くことは出来ぬようでござる！真名を信じて拙者達も退却を！」

続いて楓も、クリリンを落とさぬよう気をつけながらネギへ大声を出す

「あと出来るなら、そこにいる古の回収も頼む！一緒に地上へ運び

出すぞ！」

「え？え？え？」

「早くせんか！」

「は、はいっ！」

ピッコロの達の方と真名の方を交互に見ながら困惑のネギ

しかしピッコロの怒号が耳に入り、すぐさま駆け出した

「じゃ、じゃあ龍宮さん！すみません！」

「ああ」

ネギは疑問を残しつつも、真名へ一言告げて走り去る

真名は短く返事をすると、顔の向きを結界の中のボージャックの方へ

（さて、あれはどれほど持つのやら……）

ネギと会話を交わしていた最中に、弾の詰め替えは完了

警戒を崩すことなく、ジッと目の前の敵を凝視

その間にネギは、直線状にいた古を抱きかかえてピッコロと合流

ボージャックを一瞥すると、地上へのトンネルへ向けて飛んでい

った

（さっき豪語はしたが、やはりこれはあくまで足止めが限界……じきに破られる）

「そらああっ！そらああっ！」

ボージャックは壁の一点を、ただひたすら殴る

そして、さっきまで全くビクともしていなかったそれは

ビシィィッ！

（……思ってたよりもずっと早い！）

彼の剛拳に耐え切れず、ついに大きな亀裂が走った

「ううむ……やはりそうなってしもうたか……」

この光景を悟空の後ろからテレビで見ていた界王

その事態に、思わず眉をひそめて声を漏らす

「直接かけるならともかく、弾に込めての間接的な結界じゃったからのう……」

「ですが界王様、結界の術式を込めた弾はまだ大分残っているのでは？」

すると、その横にいるついさっき来た一人の男がそこへ話し掛けた

事実あの結界弾は、真名の左手の銃のマガジンに

「確かにそうじゃが、かなり厳しいぞ……次はボージャックも警戒をするから、そう簡単にはさせてもらえないじゃろう」

「そうですか……」

悟空よりもやや高い背丈で、緑の肌のこの男

界王の言葉を聞き、やや落胆の表情を見せる

「すまんのうパイクーハン、お前の愛弟子をあんな戦場に駆り立てるような真似をして……」

「あれは真名が自らの意志で行ったんです。それにあいつは単なる修行仲間で、何度も言いますが弟子ではありません」

界王の隣にいた男、その名はパイクーハン

あの世に数多くいる武道家の中でも、その実力はトップクラス

一年前の武道大会では決勝戦までコマを進め、あの世でその名を知らぬ者はいない

そしてなお、更なる高みを目指して修行に励むストイックな武道家

そんな彼なのだがつい最近、正確には二週間前ほどからこんな噂があの世中で飛び交った

あのパイクーハンが一人の少女を弟子に取った、と

パイクーハンの強さに心酔し、弟子を志願した者は数多くいた

しかし長年、彼は一人として弟子を取ったことがなかった

彼曰く

『同じあの世で修行に励む仲間達なんだ、師弟関係とかそういうのは堅苦しくて好かん』

とのこと

そうまで言っておきながら、彼のもとで修行する一人の少女が現れた

それが彼女、龍宮真名だ

共に修行しているのを数多くの者が目撃し、噂は確信へ

勇気を出してある者が尋ねてみると

『こいつが勝手に言ってるだけで、俺はただの修行仲間としか思ってない』

という風な答えが返ってきた

しかしその頃から、パイクーハンはほぼ真名とばかり修行

たまに悟空やオリブー、西の銀河の武道家が合同で何人か加わるくらいだ

そのためやはり、一同はとても信じられずにいた

「ですから界王様、責任を感じる必要はありません」

「じゃ、じゃがのう……」

パイクーハンは続いて、悟空の方へと歩を進めていく

そして隣まで来ると、その足をピタッと止めた

「隣、いいか？」

「……ああ」

悟空にそう言われ、パイクーハンはその位置から再び、テレビに視線を移す

横から顔を悟空が見ると、額には汗が一筋

顔もどこか強張っており、不安を含む表情であるとすぐ分かった

「真名……」

自分も悟空と同じくもう死んでいる身

あの世にしか留まれず、現世へと干渉することはもう出来ない

そのため現世へと戦いに向かった彼女が、真名が酷く心配だった

「……パイクーハン、真名はこの二週間でうんと強くなった」

「悟空……」

見るに見かね、悟空は話し掛けながらパイクーハンの肩に手をポンと置く

「一緒に修行したこともあるオラが言ってんだ、だからそんな顔すんじゃねえ」

それにオラが教えたあの技もあるしな、と軽く笑ってみせた

この自らのライバル、そして親友とも言える悟空からの言葉

「……そうだな、確かにこんなのは俺らしくない」

それは、パイクーハンを励ますのには充分すぎるものであった

強張っていた表情は崩れ、いつものキリリとしたそれへと戻る

「ここから、ちゃんと見守っててやるか」

「そうさ、真名にあれを託して、オラ達に出来ることはもうしたんだ……後は真名を、悟飯やネギ達を信じてやろう」

「……ああ」

二人は顔を正面に戻し、真っ直ぐテレビの方へ

『だあああああああっ！』

そこにはちょうど、結界を粉砕したボージャックの姿があった

悟空と共に、パイクーハンはそれをただ黙って見つめる

（真名……頑張れ）

彼女を、龍宮真名の無事を信じて

第７２話　真名の必殺銃炸裂！それを天から見守る戦士（後書き）

クウネル
「どうも皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「また作者は遅れてしまったな、しかも文量いつもより少なめだし」

クウネル
「まあそこはテスト期間ということで、大目に見てあげてください」

エヴァ
「はいはい……で、今回のゲストは誰なんだ？」

クウネル
「今回はこの方々をお呼びしています、どうぞ」

牛魔王
「いやー、この小説に出るのも久しぶりだべ」

亀仙人
「くそー鶴仙人め、あいつなんぞに先を越されるとは……」

悟飯
「おお！武天老師様、お久しぶりでございます、それに牛魔王も」

クウネル
「亀仙流の礎を築き上げたお三方、亀仙人さんと孫悟飯さん、それに牛魔王さんです」

エヴァ
「つい最近もらったリクエストのやつだな」

クウネル
「はい、今回は桜木葵さんのリクエストでお送りいたします」

亀仙人
「おや？金髪のグラマラスな姉ちゃんはどこじゃ？」

孫悟飯
「そうですな、ここの司会をやっていると聞いて来たというのに……」

クウネル
「このエヴァンジェリンがそうですよ、亀仙人さんと悟飯さん」

亀仙人&悟飯
「ええ！？嘘！？」

エヴァ
「そこまで驚かんでもいいだろ……」

クウネル
「魔法によって幻術を使うと、先ほど仰ったような姿に変身します」

亀仙人
「これこれ君（きみ）、そんな嘘は言っちゃイカンぞ」

悟飯

「そうですぞ、か弱い老人を騙すなんてとんでもない」

エヴァ
「嘘ではない！本当にそうなるんだ！」

亀仙人
「またまたー、残念ながらワシに幼女趣味はないぞ」

エヴァ
「ええいっ！ナギの呪いが無ければこんなエロジジイ！」

クウネル
「まあまあ、とりあえずコーナーを進行させましょう」

エヴァ
「……ちっ」

クウネル
「さて、今回の話ですが……どう思いますか？牛魔王さん」

牛魔王
「ええ！？オラ！？」

エヴァ
「随分といきなりだな、おい」

クウネル
「最近本編でまったく出番が無いですからね」

エヴァ

「それを言えば孫悟飯はゼロだろ……」

牛魔王
「えっとえっと……あ、そうだ！悟飯の描写が一回も無かっただ！」

クウネル
「確かにそうですね。悟飯君を除けば、あの場にいた人の描写は全部ありましたし」

エヴァ
「ということは、孫悟飯はあの時ぼーやと一緒に退却してないのか？」

悟飯
「え、ワシ？」

エヴァ
「違う！本編レギュラーキャラの方の孫悟飯だ！」

悟飯
「あ、スマンスマン」

エヴァ
「第一その表記は紛らわしいだろ！何か区別出来るように変えろ！」

悟飯↑その表記
「やっぱりそうかの？」

エヴァ
「そうだよ！」

注・では変えてみます、えい

悟飯（爺）
「……これでいいかの？」

エヴァ
「まあそれで良しとするか」

クウネル
「あと、龍宮さんがいた場所があの世だったとついに判明しましたね」

亀仙人
「大方の読者は気付いとったんじゃないかのう？」

エヴァ
「だな、第３０話からとっくに伏線はあったわけだし」

クウネル
「ちなみにこの話のラスト、本当は二週間前の龍宮さんのストーリー（回想）の頭を入れる予定だったそうです」

牛魔王
「なんで作者はそれをやめただ？結構面白そうな気がするだが……」

エヴァ
「……理由はアレだろ？」

クウネル

「はい、アレです」

エヴァ
「ついに感想で指摘されてしまったからな……」

クウネル
「『多分その回想だけで丸々一話以上はかかっちゃいそう』とのことでしたので」

エヴァ
「まさにＤＢアニメの常套手段だな……まあ、やめたのは確かに正解だ」

亀仙人
「それだと、そのストーリーはお蔵入りになってしまうのか？」

クウネル
「いえ、大会編が終了してあの世編に入ったらそこでやるつもりのようです」

エヴァ
「これまた大分先だな……」

注・ちゃんとやりますので、見たかった方はそれまでどうかお待ちください

クウネル
「では、続きまして次回予告です」

悟飯（爺）

「さて、次回のネギドラ！は……」

クウネル
「結界を破壊された龍宮さん」

亀仙人
「再び奴を閉じ込めるべく、大奮闘するぞ！」

牛魔王
「そして、悟空さから教えてもらった技の正体とは！？」

エヴァ
「……あれ？確かこの話で一応全部明らかになるんじゃなかったか？前回の予告だと」

悟飯（爺）
「どうも書き損なったみたいじゃのう」

クウネル
「『いきなり現れた秘密＝悟空から教えてもらった技』ということでご理解ください」

エヴァ
「……これは大半の読者が気付くんじゃないか？」

亀仙人
「じゃよな、だってこれどう考えてもｓｙ……」

クウネル
「はいストップです、分からない読者もいるかもしれませんからそ

こまでお願いします」

牛魔王
「次回の投稿予定は金曜日、もしくはその翌日の土曜日だ」

エヴァ
「あ、作者が逃げの一手をうった」

クウネル
「そこは許してあげましょうよ」

亀仙人
「では読者のみんな、次回のネギドラ！も……」

エヴァ&クウネル&悟飯（爺）&牛魔王
「お楽しみに！」

エヴァ
「ところで貴様ら、司会が『金髪のグラマラスな姉ちゃん』と言ったのはどこのどいつだ？」

亀仙人&悟飯（爺）
「姉ちゃん（占いババ様）」

クウネル
「あなたに恥をかかせるつもりで言ったんでしょうね、きっと」

エヴァ
「あのババアーーーー！」

第７３話　敵に暴かれし真名の技！これには悟飯も驚きだ　（前書き）

何とか金曜日投稿出来ました。一応保険に、『金曜日又は土曜日』としておきましたが、金曜日中に間に合ってよかったです。

ではどうぞ！

第７３話　敵に暴かれし真名の技！これには悟飯も驚きだ

「だーっはっはっは！どうだ女ぁ！」

「……ちっ、まさかここまで早いとはな」

結界は、ボージャックの連続ラッシュに耐え切れず崩壊

その様子を正面から見届け、真名は表情を苦めた

こうなってしまった原因は、大きく分けて二つ

まず一つは、術式の装填が不完全であったこと

真名はこの結界弾を完成させるため、出陣前にあの世中を急いで駆け回った

四人の界王に一人一人会い、理由を説明

そして当時ボージャックを封じ込めた術を、そのまま弾に込めてもらう

それを四人分繰り返して完成という手順だった

しかし界王達は、『銃の弾に自らの術を込める』という試みは今回が初めて

そのためそれぞれ上手く術を全パワー込めきれず、結界の精度はオリジナルの数割ほどに下がってしまった

そしてもう一つが、跳ね上がっていたボージャックのパワー

界王達が彼と部下四人を封じ込めたのは、彼らが変身していない時のこと

戦い（という名の原住民大量虐殺）を終えたところへの奇襲だったそのためあの時は何とか封印出来たが、今回はそうはいかなかったのだ

これまでの戦いを見ても分かるように、変身したボージャックのパワーは以前より遥かに上昇

部下がいないたった一人のこの状況でも、結界を壊すためのパワーはお釣りが返ってくるほどのものであった

「さあて、覚悟しろよ……あんなことしたんじゃ、何されても文句は言えないぜ？」

（もうさっきの手は使えない……今後は奴も、足元に来る弾へ警戒をしてくるはずだからな……）

真名はボージャックをジッと見つめながら思考

（だとすれば次はあの手だな……正直言ってかなり危険だが）

そして次なる策の手順を、頭の中で組み立てていく

「行くぜえええええっ！」

そこへボージャックが猛然と向かってきた

両方の銃にそれぞれ注意を払いつつ、腕を振り上げて突進

それに対し真名は、なんとその場から動かない

立ち向かうべく前へ進む様子も

距離を詰められぬよう後ろへ下がる様子も

何一つ見られない

（出来る限り引き付ける……じゃないとこれは意味を成さない！）

「だあああああああっ！」

（もう少し……もう少し……）

両者間の距離を確認

次なる策が実行出来るところまで、その場でその機を待つ

そして

（……今だ！）

それは来た

「死ねえええええええっ！」

ボージャックの拳が自らに当たるそのほんの一瞬前

真名はそれを待っていた

そんな事とは露知らず、ボージャックは勢いそのままに右ストレートを真名の胴体へ真っすぐ

少し前に古からしたのと同じような、骨肉がひしゃげる音

それがまた聞こえてくるのだと、ボージャックは疑わなかった

（いくら銃の名手でも、距離を詰めりゃあお仕舞いよ！）

しかしそれは、次に目の前に映った光景によって消し去られることとなる

（な、何!?消えた!?）

ブンという音のみで、拳の先に人は無し

そう、一瞬の内にその場から真名の姿が消えた

ボージャックが放ったストレートは、空を切るだけに終わる

（バカな！こんなことがあるわけ……まさか！）

思わず目を丸くしてしまったボージャックだが、直後何かに感づく

少なくとも、高速移動で避けた可能性はまず無い

ボージャックが捉えられないほどの速さで移動するなど、今の真名の力量では出来ないのは当然分かる

だとすればなぜ消えたのか

そこで、最初のあの一撃が思い出される

あの時真名は突如この超大戦の戦場へと参上、無防備だったボージャックの脳天へ攻撃を命中させた

その時点でもう異常なのだ

気配をまったく感じさせず、あそこまで接近して一撃を与える

普通ならそんなこと、ボージャックが許すはずもない

だが事実、それは起こった

そう、まるで別の場所からワープしてきたかのような……

「残念、少し遅かったな」

バンバンバンバンバン！

「く、くそおおおおおっ！」

後ろへ振り返ってみたが、時すでに遅し

そこにはやはり、銃を向けた真名の姿

迎撃するより先に、足元へまた五発の結界弾が撃ち込まれた

そこから形成された結界は、ボージャックを再び中へと閉じ込めることに成功

「危ない危ない、コンマ数秒でもズレがあったらどうなってたことやら……」

弾の詰め替え作業をしつつ、後ろへと下がってとりあえず距離をとる

真名の額からは冷や汗が一筋垂れ、冗談でなく本当にそうであったというのが分かった

（この眼には本当に感謝しなくちゃな……）

そう心で呟き、パチパチと瞬きを数回

真名の類稀なる動体視力をもってこそのさっきの策

でなければ、あそこまで実力差がある敵相手に上手くいくはずもないのだから

「……女、一つ訊かせてもらうぞ」

「……なんだい？」

ボージャックの方を見やると、また破壊すべくラッシュを叩き込むのかと思いきやそうではなかった

両拳を壁に押し当て、真名を睨みつけながらこう口にする

「最初に出てきたのとさっきの……あれはヤードラット星人の技だな？」

「……何のことかな？」

「とぼけるな！全宇宙を股に掛ける銀河戦士のボスなんだ、その位のことは知っている！」

ヤードラット星人

その名の通り、ヤードラット星に住む宇宙人である

個体ごとの戦闘力はかなり低い

しかしそれを補うかのように、不思議な技をいくつも会得している

その内の一つが、真名の使用したあの技

「さっきの技は瞬間移動……どうだ？図星だろ」

「……そこまで確信があるんじゃ、隠してても意味は無いな」

見事言い当てられ、真名は素直に口を開く

「ただし教えてくれたのはヤードラット星人じゃなく、ある別の知

り合いにだがね」

顔には出さないようにしながらも、内心かなり焦っていた

（あいつがヤードラット星人のことを、しかも技についてまで知識があったとはな……これまマズいことになった）

さっきと同じ『ギリギリまで引き付けて、瞬間移動で背後に回る』策はもう実行不可能

次もしてしまえば、即行ボージャックは後ろへと迷いなく攻撃をしてくるだろう

これが瞬間移動だと既に確信し、どんな技かというのも理解してしまっているのだから

（折角師匠の知り合いから教えてもらったというのに……こうも簡単に看破されるとは）

もうお分かりであろう

この瞬間移動、真名に伝授したのは孫悟空その人

きっかけはほんの些細なこと

パイクーハンが弟子をとったという噂を耳にし、悟空が同じ北の銀河出身のオリブーと一緒に瞬間移動で見に来た時だった

最初はそれを見て、転移魔法符のような道具によるものと勘違いした真名

しかし実際悟空に聞いてみてビックリ

『道具なんかじゃねえよ、瞬間移動っちゅーオラの技を使ってここまで来たんだ』

この時から、真名の修行メニューに瞬間移動の習得特訓が加わった

真名が用いる転移魔法符は、一枚八十万という超高額品

だが瞬間移動なら、移動箇所にやや制限が入るが値段はタダ

真名の性格からして、覚えないという手はなかった

一日一回ほどだけ悟空に見てもらい、それ以外の際は自主練習

そうしてこの二週間で、不完全ではあるものの何とか習得

いくつか課題が残されているものの、とりあえず出来るようにはなったのだ

そしてあの世から仲間の気を探ってここへ

こうして今に至るというわけだ

（まあ、策が尽きたというわけではないが……それでも、さらに厳しくなったことに変わりはない）

「そうと分かりゃあどうってことねえ、おらおらおらおらおらおらあっ！」

ボージャックは拳に力を込め、結界の壁へ連続パンチ

さっきよりも一層激しい打撃音

また結界が破壊されるのも時間の問題だった

（いっそのこと、この隙に私も瞬間移動で近衛のところまで戻るか？いや、それはかなり危ない……）

そうすれば、この場でボージャックを止める者がいなくなる

ボージャックはその後どうするか

ここで大人しく待機しているなどまずない

周囲の気を探って、他の仲間のところへ戦いに行くか

もしくは、地上まで自分らを追ってくるか

この二択に大体は絞られる

（後者が一番最悪……ネギ先生達の治療もすぐには終わらないことを考えれば、上では戦力になるのが殆どいない……）

非戦闘要員を、どう考えても守りきれない

真名は奥歯をギリッと噛み鳴らした

バキバキッ！

「はっはっは！どうだ！逃げるなら今の内だぞ？」

結界の壁に大きくヒビ

（今ので確定、あいつは絶対私のことを追いかけてくる……じゃなきゃあんな言い方はしない）

もう後がない

（やはりこいつ相手に一人じゃ、やはり無ぼ……いや、一人じゃない！）

が、真名の目にあるものが留まった

バッキャーーーン！

「今度こそぶち殺してやる！」

と同時に、結界はついに崩壊

ボージャックは笑みを見せながら、真名との距離を早急に詰めていく

「そらあああああっ！」

両手の銃はもちろん警戒

さらに、瞬間移動してきた時も考慮して背後にも

真名がしてくる行動に対して、今度こそ死角はない

そう、真名に対しては

真名に対して“だけ”は

「波ーーーーーーー！」

「！？」

突如横から飛び込んできたかめはめ波

「しまった！まだあいつがいたか！」

ボージャックは足を止め、すぐさま守勢に回る

かめはめ波の方へ向き直り、両腕を出してガード

そんなボージャックを、かめはめ波は飲み込んでいった

「ぬおおおおおおっ！」

「……助かったよ、流石は孫悟空の息子といったところか」

「あなたがネギ君の言っていた龍宮真名さんですね、ってお父さんのことを知ってるんですか！？」

そのかめはめ波を撃った悟飯は、舞空術で低空飛行しながら真名の横へ

ボージャックに殴り飛ばされていた悟飯だったが、ついさっき復活

所々に傷はあるが、戦う分にはまだ問題は無さそうである

「ちょっとあの世で世話になってね、修行ついでに瞬間移動まで教えてもらったよ」

やや離れていた場所にいたためか、先ほどの真名とボージャックの会話を悟飯は聞きそびれていたようだ

簡潔に真名はそのことを話す

「え!?ってことは真名さん死んじゃってるんですか!?」

「いや、生きた状態のままあの世に飛ばされたらしい。ほら、頭に輪が付いてな……」

「またお前かクソガキ!いい加減さっさとくたばりやがれ!」

真名が頭の上を指差そうとすると、鼓膜にビリビリと響くボージャックの怒号

かめはめ波を防ぎ切り、ダメージを負いながらもしっかりと両の足を地に着けていたままだった

「……この話の続きは後だ、どうも向こうは待ってくれそうにない」

「そうみたいですね……」

「前衛を頼む、強さは君のお父さんからよく聞いている。私は後衛

で援護射撃に回ろう」

「……はい」

「もうこれ以上は逃がさねえぞ！まとめてあの世へ送ってやる！」

三者がそれぞれ、気を開放する

超大戦は最終局面へ、着々と近付きつつあった

「ちっ、雑魚を片付けるのに手間取っちまったぜ……」

そしてまた一人

「悟飯の近くに、知らない馬鹿デカい気が一つ……あいつか！」

黄金の戦士が戦いにそこへと向かう

「倒すんじゃないぞ悟飯！そいつはこの俺様がぶっ殺してやる！」

第７３話　敵に暴かれし真名の技！これには悟飯も驚きだ　（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「さてクウネル、今回のゲストは誰なのだ？」

クウネル
「はい、今回はこの方々です」

シャークティ
「どうも読者の皆さま、お初にお目にかかります」

神様
「まさかワシなんかがこのコーナーに呼ばれるとはのう……」

クウネル
「シスター　シャークティーさんと神様のお二人です」

エヴァ
「まったく本編とは関わりそうにないコンビだな……」

クウネル
「ですね、ちなみに今回は水竜さんのリクエストです」

エヴァ
「というかこいつは既にもう神ではないだろ」

神様
「確かにそうじゃな、ワシはもう神の座を退いた身……あのデンデという子はようやってくれておる」

エヴァ
「さらに言えば、もう存在すらどこにも無いわけだしな」

クウネル
「ピッコロさんと同化しちゃってますからね」

エヴァ
「ん？じゃあこいつは一体どこから連れてきたんだ？」

神様
「ワシもよう分からん」

シャークティ
「作者のご都合主義でしょうね、きっと」

エヴァ
「……それで片付けていいのか？」

注・大目に見てください

クウネル
「さて、ではコーナーを進めましょうか。今回の話なんですが……」

エヴァ
「結局そこまでストーリーが進まなかったな」

クウネル
「まあ今回は、龍宮さんの技の正体が話の大きなポイントだったわけですしね」

エヴァ
「だっておおまかに今回の内容を言えば、『龍宮真名の技の正体が明らかになり、バレてピンチのところに孫悟飯が戦線復帰』しただけだろ？」

クウネル
「言葉にすれば確かにそれだけですけど……」

エヴァ
「『ピンチのところへ助っ人参上の繰り返し』も意見が来てたよな？」

クウネル
「でもまあ、悟飯君は初めからあの場所にいたわけですし……」

注・本当にすみません、次以降からは無いように精進いたします

エヴァ
「やっぱり作者も思ってるじゃん」

神様
「しかし、あの技は瞬間移動じゃったのか……」

シャークティ
「多分ですが、分かってた読者はかなりいたと思います」

エヴァ
「私も同感だ、あれで『実はかめはめ波でした』とかなったら読者が黙っちゃいないぞ？」

クウネル
「まあ前回のこのコーナーで、ほぼ正解言ってたようなものですしね」

エヴァ
「ちなみにだが、『残された課題』というのはちゃんと考えてあるんだろうな？」

クウネル
「そうみたいですよ、それについては後々本編で説明されるそうです」

エヴァ
「ふーん」

クウネル
「では続いて、次回予告です」

シャークティ
「さて、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「場面は大きく変わって、ベジータやトランクスの方を書くらしいぞ」

クウネル

「大分間が空いちゃってましたからね」

神様
「ボージャックの部下との戦いも、ついにクライマックスじゃ」

シャークティ
「あれ？でも明らかに一キャラ、戦いが終わっているような描写がこの話の最後に……」

クウネル
「ですから一部は、少し前の時間軸の話みたいですね」

注・テキパキと話を進めるべく、頑張ります！

エヴァ
「次回の投稿予定は来週の火曜日だ、今度こそ守れるといいがな」

注・頑張ります！

神様
「感想は随時受付中、フリー受け付けじゃからサイト未登録の者も是非書き込んでくれ」

シャークティ
「というわけで皆さん、次回のネギドラ！も……」

エヴァ&クウネル&神様
「お楽しみに！」

エヴァ
「ところで最近、作者はバトンというものを受け取ったらしいな」

神様
「バトン？なんじゃそれは」

クウネル
「簡単に言うとリレー式のアンケートですね、非強制の」

シャークティ
「この小説の読者の一人の水竜さんから受け取って、活動報告を利用して回答したみたいです」

注・もしお時間がありましたら是非どうぞ、しょうもない答えとかあるかもしれませんが

第７４話　対手下戦決着！ベジータ親子の猛攻（前書き）

はい、第７４話を投稿いたします。あとついに、ＰＶが５０万を突破いたしました！読者の皆様ありがとうございます！
しかも、ユニークも７万突破目前！こういうのも多大に励みとなります、これからもどうぞよろしく！
ではどうぞ！

第７４話　対手下戦決着！ベジータ親子の猛攻

「はあっ、はあっ、はあっ……」

「しかし貴様もしぶといな……まあ、それでも流石にもう限界か」

時はやや遡る

地上で互いに向かい合う二人

ベジータは銀河戦士ザンギャを相手に、圧倒的優勢を見せていた

ボージャックを除く銀河戦士四人は、かつて戦ったセルジュニアによりも格下

ベジータもそう公言しており、事実このようにまるで負ける気配を見せない

そのセルジュニアがようやくベジータと互角だったのだから、それは言わずもがな

しかも、ザンギャのパワーはビドーよりも大分劣る

変身したビドーでさえ押し負けてしまうほどのベジータのパワー

ザンギャが太刀打ち出来るわけがなかった

「これで仕舞いだ……」

ベジータはそういうと、掌を前方に突き出して気を集束

青い気の球体がたちまち出来上がった

「冥土の土産だ、この技でトドメを刺してやる」

数ある必殺技の一つ『ビッグ・バン・アタック』

それを今まさに、ザンギャへ放たんとしていた

「もう避ける程の力も残ってはいまい……覚悟しやがれ！」

ザンギャはその場に立ってはいるものの、既に多量のダメージで疲労困憊

両足はまるで生まれたての小鹿のごとく、ガクガクと震えを見せていた

ベジータの技のスピードからして、避けるのは多大に困難

また、正面から気功波で対抗するなど酔狂そのもの

ザンギャにもう逃げ場はない

「喰らえ！これが超ベジータの……」

青い球体が、さらに気を込められることによって一層輝く

「ビッグ・バン・アタッ……」

そして、発射しようとしたその刹那

「うおおおおおおおおっ！」

両者にとって、思いもよらぬ事態が発生した

「何！？」

「ビ、ビドー！」

「早くしろザンギャ！攻撃だ！攻撃するんだ！」

ビドーが目を覚まして突っ込んできたのだ

ベジータの手によって意識は彼方へと飛ばされていたのが、今しがた覚醒

丁度背後にいた位置関係を利用し、ベジータの虚を突いて奇襲

そのまま羽交い絞めをかけ、ビッグバン・アタックの阻止に成功した

「こいつめ！もう目を覚ましやがったか！」

「急げ！俺もそう長くはこいつを止められない！」

再び変身してパワーも上げたが、元々の力量差がかなりあることはビドーも承知

だからこそ彼は、唯一自分達の中で動けるザンギャへと大声で叫んで命令した

「わ、分かった！」

千載一遇のチャンス

これがそうであることは、ザンギャも疑いようがない

残るパワーを全て振り絞り、攻撃を試みる

「でやあああああああっ！」

右手に気を集中させ、突進

その右手は手刀を形作っており、指の先をベジータに向けたまま後ろへ引いていた

（普通の気功波じゃ殺せないが、これで急所を突き刺せば私でも殺（や）れる！）

ベジータを正面に見据え、その狙うべき急所に手刀の方向を合わせる

その箇所は首

急所と言えば他にも胸等が挙げられるが、ベジータは防御性に優れた戦闘服を装備

そのため胸では致命傷は難しいと判断し、首へと狙いを確定させた

「死ねえええええええっ！」

「……ふん、バカめ」

だがそれが、果たしてベジータに通じるかどうか

答えは、ＮＯ

「ふんっ！」

「うごっ！」

この攻撃は、ベジータがその場から動けないというのが絶対条件

つまり、ビドーの羽交い絞めによる拘束が続いているということ

勿論ベジータは、そんなことをいつまでもさせる程甘い男ではない

頭を勢いよく振り、自らの後頭部をビドーの顔面へ叩き込んだ

ビドーの力は緩み、たちまちベジータは羽交い絞めから脱出

「だああっ！」

「ぐふぇっ！」

続けて、自由になった右腕を使って腹部へ肘を打ち込む

ここまで密着していた状態では、ビドーも対処のしようがなかった

そこからベジータは、さらに隙だらけとなったビドーの服を掴むと

「そらよっ！」

「ぬおおおおっ！？」

自分へ突っ込んでくるザンギャ目掛けて投げ飛ばした

攻撃しか頭に無かった彼女はそれを避けられず、飛んできたビドーの背中に直撃

さらにベジータはそんな二人へと距離を詰め

「でやああっ！」

「ぬごおおっ！」

ビドーの腹へ蹴りを入れる

密着していたザンギャと共に、そこから斜め上に蹴飛ばされた

「二人とも最後には殺すつもりだったんだ、おかげで手間が省けたぜ」

再びベジータは掌を向け、技の準備に入る

今度はもう、邪魔者は一人もいない

「まとめて塵になって消えやがれ！」

ベジータがそう叫ぶと彼を覆う黄金の気は、より一層勢いと輝きを増す

「ビッグ・バン・アタック！」

そしてそれは、二人目掛けて真っすぐに射出された

以前人造人間１９号に対して撃ったのとはまるでわけが違う

スピードも技の威力も、あの時とはまるで比べ物にはならない

その絶大なパワーが存分に込められたビッグ・バン・アタックは、飛ばされる二人へすぐさま追いつき

「きゃ、きゃあああああああっ！」

「く、くそったれえええええっ！」

触れると瞬く間に飲み込んで大爆発を引き起こした

その爆発による轟音は、直前彼らが発した断末魔もたちまち揉み消すほど

空中でモクモクと煙が上がり、ベジータは腕を組みながらそれを見上げる

「……さて、これでようやく済んだか」

煙が晴れるとそこにはもう、既に何も存在してはいなかった

ビッグ・バン・アタックは二人を、文字通り完全にこの世から消し去ったのだ

さも当然のようにその光景を見届けると、ベジータは舞空術で浮上

そのまま本来の目的を探すため、この場から飛び去っていく

「ちっ、雑魚を片付けるのに手間取っちまったぜ……」

その直後ベジータはとある気を複数、敏感に察知

「悟飯の近くに、知らない馬鹿デカい気が一つ……あいつか！」

それがその目的のものであることだと分かるのに、さほど時間は掛からなかった

「倒すんじゃないぞ悟飯！そいつはこの俺様がぶっ殺してやる！」

そして舞台は、元の時間へと戻る

「はあっ、はあっ、はあっ……」

「はあっ、はあっ、はあっ……」

（トランクスさん……）

息をゼエゼエと切らしながら、空中で向かい合う二人の男

それをやや離れた場所から見守る、一人の少女

剣士三人を交えたこの戦いも、もう終わりを迎えようとしていた

超サイヤ人2となって戦ったトランクスの強さは、文字通り桁違い

目の前の敵をまるでものともしなかった

そのゴクアも二刀流で必死に応戦するが、トランクスのスピード

の前には歯が立たず

一時、トドメを刺す直前まで追い込むことが出来た

だがその時、トランクスにとって最悪の事態が起こる

超サイヤ人2の変身が解けたのだ

コントロールがまだ完全に出来ておらず、短時間で気を使い果た

してしまうこの変身

予想していた以上にそれは早く、トランクスも思わず攻撃の手を

止めてしまった

超サイヤ人の形態すら保てず、通常の状態にまで退行

焦るのも当然のことと言えよう

そこをゴクアが、『しめた！』とばかりに猛反撃を開始

刹那も積極的に攻撃に加わるが、それでも変身したゴクアには及ばず

今度は逆に、二人が窮地へと追い込まれた

しかしお次は、ゴクアも変身が解除される

トランクスや刹那と違い、回復を一切挟まずの連戦

こちらも体力は既に限界だった

そして戦いは、一対一の殴り合いに移行する

トランクスとゴクア

両者が正面から最後の力を振り絞り、ひたすら拳を放ち続けた

一方の刹那は、ゴクアの変身が解けるまでの戦いで体力気力共に殆ど消耗

そして二人の激しい闘志に圧倒され、彼女の介入する余地は全く無かった

「だあああああっ！」

「でやあああああっ！」

また二人が一発づつ、互いの頬へ拳を叩き込む

ゴクアの持っていた剣二本は、超サイヤ人2の時のトランクスに叩き落とされてもう手元にはない

純粋に、拳と拳の勝負

「このおおおおっ！」

「ずあああああっ！」

防御等の小細工など頭には無し

ただひたすら接近戦での殴り合い、猛烈なインファイト

「これで、終わりだあああああっ！」

そこへトランクスが、一気に勝負を決めにかかる

握り締めている右拳に、気をさらに力強く集中

それを迷うことなく、ゴクア目掛けて繰り出してきた

「てめえこそ、くたばれえええっ！」

無論、それにゴクアが応じないわけがない

トランクス同様、身体に残る気を全て右拳へ

こちらも躊躇する気など微塵も無く、最後の攻撃に入った

「「うおおおおおおおおおおおおおおおっ！」」

それぞれの右腕が、両者の間で交差

どちらの拳も一点の狂いもなく

「ぐ、ぐぐう……」

「ぬ、ごごご……」

「と、トランクスさん！」

相手の左頬へ叩き込み、それを目一杯めり込ませた

そのまま動かず、膠着状態を見せる二人

どちらもこの攻撃は完璧に決まった

あとは、どちらの力と気力が優っているかだけの勝負

「ぐ……」

その軍配があがったのは

「ぐおぉぉ……」

「や、やった……」

僅かにトランクスだった

「トランクスさん！」

ゴクアはパワーを使い果たし、下の地面へ力無く落下

それを見てぎこちなく笑みを見せたトランクスのもとへ、刹那は即座に近づいてきた

「勝ったんですね！勝ったんですよね！」

「う、うん……かなりギリギリだったけどね……」

事実、トランクスの体力はもう限界

気が抜けたのか、そのまま刹那の方へ身を預ける

「だ、大丈夫ですか！？」

「な、何とか……でも、このまま肩を貸してもらえるとありがたいかな」

「分かりました。ではこれから一緒に、地上にいるお嬢様のところまで戻りましょう」

そう言うと刹那は、トランクスに自らの肩を貸したままゆっくり

と飛行

自分が通ってきたトンネルの出入り口へ向けて進み始めた

（父さん、悟飯さん、あとは頼みます……）

尊敬する父、そして自分のいる未来での師

その二人を心から信じ、この場を後にするトランクスであった

第７４話　対手下戦決着！ベジータ親子の猛攻（後書き）

クウネル
「どうも皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「さてクウネル、今回のゲストはどうなっているのだ？」

クウネル
「はい、今回のゲストはこの方々です」

悟飯
「どうも読者のみなさん、こんにちは」

ビーデル
「よろしく！」

クウネル
「さくらさんのリクエストで、悟飯君とビーデルちゃんのお二人です」

エヴァ
「今回孫悟飯の描写はゼロ、ビーデルに至ってはここ最近全然出番が無いな」

悟飯
「まあ今回は内容が内容でしたし」

ビーデル

「確かに私全然出番無いのよね……」

クウネル
「最後に本編に登場したのが第５９話なので、だいたい二カ月弱ですね」

エヴァ
「仕方ないんじゃないか？今の話の流れが流れだし」

クウネル
「さて、ではコーナーを進行させましょうか。今回の話なんですが……」

悟飯
「今回はテンポよくお話が進みましたね」

エヴァ
「だな、てっきりベジータとトランクスで合計二話くらい使うと思ったぞ」

クウネル
「当初はそうなるつもりだったみたいですが、何とか頑張って一話に詰め込んだとか」

ビーデル
「随分頑張ったわね、作者」

エヴァ
「多分トランクスの場面の始めでやったアレが大きいんだろうな」

悟飯
「アレってなんですか？」

エヴァ
「ダイジェストっぽく戦いの流れを説明したアレだよ」

クウネル
「確かにあの部分をまんま描写していたら、絶対一話分に収まりきれませんからね」

ビーデル
「だったら一話分の文量を増やせばいいじゃない」

クウネル
「そうしたら週二投稿が不可能になっちゃいますから。この量が色々と丁度いいんです」

注・そういうことなので一つよろしく

エヴァ
「しかしこれで、ボージャック以外の銀河戦士は全滅か」

クウネル
「ですね、それを内訳してみますと……」

悟飯　一人（ブージン）

トランクス　一人（ゴクア）

ベジータ　二人（ビドー、ザンギャ）

クウネル
「上記のようになってますね」

エヴァ
「半分がベジータだな、あいつはボージャックを倒す目的で戦いに来たんだろ？」

悟飯
「やっぱりベジータさんは凄いや！」

エヴァ
「お前の方が実際はずっと凄いがな、実力的に」

クウネル
「では、続いて次回予告です」

ビーデル
「さて、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「残す敵はついにボージャックただ一人」

悟飯
「僕と真名さんが協力して、奴を相手に戦いますよ！」

クウネル
「二人のコンビネーションがボージャックに通用するかどうか、そこがポイントですね」

ビーデル
「それと久しぶりに地上での描写もあるみたい、そっちも見どころね」

エヴァ
「次回の投稿予定は金曜日だ」

悟飯
「皆さんからの感想も待ってますね！」

ビーデル
「じゃあみんな、次回のネギドラ！も……」

エヴァ＆クウネル＆悟飯
「お楽しみに！」

エヴァ
「あれ？そういえば二人ってまだ本編じゃ面識無いよな？」

クウネル
「ですね」

ビーデル
「私はちゃんと知ってるわよ、だってあんなに大会で活躍してるんですもの」

悟飯
「あ、やっぱりですか？」

注・本編で絡ませるかどうかは未定です、スミマセン

第７５話　ボージャックは焦り怒る　急造コンビ華麗な連携　（前書き）

昨日の内に完成したので朝投稿です。このペースで毎回出来たらいいんですが、中々難しくて……

ストーリー的にはさほど進みませんがご了承ください（汗）

ではどうぞ！

第７５話　ボージャックは焦り怒る　急造コンビ華麗な連携

「だだだだだだだだだだあああっ！」

「おらおらおらおらおらああっ！」

そこから火花が散りそうなほどの高速なラッシュ

超サイヤ人の孫悟飯と、変身した銀河戦士ボージャック

その両者による戦いは、上空で白熱した展開を見せていた

「だあああああっ！」

「ふんっ！」

片方が拳を繰り出せば、もう片方は即座にガード

「そらあああああっ！」

「くっ！」

そしてすかさず反撃

どちらもまだ決定打は与えられぬまま、戦いは進んでいく

（く、くそお！この俺が苦戦を強いられてるだと！？）

（よし！これならまだいけるぞ！）

その中でボージャックは、この戦況に苛立ちと怒りを覚えていた

方や悟飯は、希望に満ちた笑みを浮かべる

そう、本来ならこの勝負、ボージャックが確実に圧倒的であるはずなのだ

現在の悟飯の形態は、通常の超サイヤ人

一年前に見せた超サイヤ人のさらなる形態

トランクスも変身が可能である超サイヤ人２へは、変身していなかった

いや、変身出来なかったと言ったほうが正しいか

セルとの戦いを境に、悟飯は再びあの形態への変身が出来ないでいた

ピッコロに相談してみたこともあった、すると

『あの時の変身はおそらく、怒りのパワーが最大限になっていたことで出来たんだろう。お前は怒りによる力の浮き沈みが激しいからな』

と答えが返ってきた

そういえば自分の父も、超サイヤ人をコントロールするのに少々手間取ったと昔言っていた

事実自らが超サイヤ人になるための訓練をした時も、かなりの時間を費やしたものである

そしてピッコロは、訓練次第ではコントロールもおそらく可能だろう、とも続けた

しかし、悟飯はその訓練にさほど執着はしなかった

もう自身の手によって平和になった世の中だ

これで心置きなく出来る、と勉強の方に熱を入れ始めてしまっていた

将来の夢でもあった、学者へなるための勉強

平和を脅かす敵との戦い

この縛りが消え、悟飯は安心してそちらへ打ち込んだのだ

そのため、今悟飯が自力で出来る変身はこの通常の超サイヤ人までだがこの状態では、変身前のボージャックと同じくらいの力しかない

ネギの仲間の死によってその時より怒ってはいるが、２への覚醒にまでは至らず

まだ力量的な面では、ボージャックより劣っていると言わざるを得なかった

なら何故、ここまで互角の戦いが出来ているのか

バンッ！

「ぐぐうっ！」

「だあああああっ！」

「く、くそ！」

それは彼女、龍宮真名の影響が非常に大きかった

「女！てめえいい加減にしろ！」

「やはり痛みくらいは感じるようだな、被弾時僅かに動きが鈍る」

「黙れええ！」

ボージャックは顔を一瞬、下へと向けて大声で怒鳴り散らす

真名は戦いの開始直後、両者から離れて援護射撃を開始

悟飯へ当らぬよう狙いを定め、一発一発を正確にボージャックへ命中させていた

（まさかここまで厄介になるとは……だがまず目の前のこのガキを倒さなきゃ話にならん！）

真名の射撃の腕は、ボージャックにとってかなりの計算外

ここまで接近して拳を交えている中で、片方のみを正確に狙撃している

第一、二人が戦いの最中どう動くかなんて殆ど予測不可能

撃った後に自分らが大きく動くことがあれば、味方に被弾してもおかしくない

（……人間業じゃねえだろ！）

だが、ボージャックは真名を先に倒すことは出来なかった

本来ならネギの時と同じく、悟飯を抜き去って瞬時に距離を詰めて潰せば何も問題はない

『援護射撃を務める＝接近戦はそれほど強くはない』という図式があてはまるからだ

ところが、真名相手だと接近しても逆効果

彼女にはとっておきの技、瞬間移動がある

仮に接近しようとしても、すぐに向こうは悟飯の方へその技で移動

背後を取られ、また結界弾を撃たれるのが関の山だった

故にボージャックは、真名を先には倒せない

かといってこのままでは、悟飯を先に倒すことも難しい

（くそおっ！くそおっ！こんな雑魚ごときに！）

ボージャックは現在、大きなジレンマを感じながら戦っていた

「く、古ちゃん……ホンマに……」

場所は変わって地上

真名の登場によって、無事地上へと帰還を果たした一同

その中の一人、ネギが抱えていた人物を見て木乃香は言葉を失った

「……」

「……」

「見ての通り、古はもう死んでいる。そこのモニターにも映っていたのだから、お前達も観たはずだ」

上手く言葉が出せないネギと楓に代わり、ピッコロが木乃香へと言う

木乃香は顔を俯かせ、そのままコクリと首を縦に振った

「ねえ！ホントに古ちゃん死んじゃったの！？今から木乃香の魔法を使えばまだ……」

「……無理です、ハルナ」

「夕映まで何言ってんのよ！」

ハルナは慌てた様子で席を立ち、ネギ達のところへ近づく

そこへ夕映がボソリと呟き、思わず振り向いて声を荒げた

「もう手遅れだと言ってるんです。そんなことをしても、木乃香さんの貴重な魔力を悪戯に消費するだけ……」

「同じクラスメイトでしょ！少しの可能性にでも賭けて助けようとは思わないわけ！？」

「ですから、その少しの可能性すら皆無だと私は……」

「夕映！」

ハルナは踵を返し、一転して夕映のいる席へ

そのまま襟首を右手で掴み、ギリリと締め上げた

夕映はそれに臆さず、真っすぐハルナと目を向き合わせる

「あんたそんな奴だったの！？」

「正論を言ったまでです。そうするくらいならまだ、ネギ先生達の回復にあてる方が良いと私は……」

感情的なハルナと対照的に、夕映は冷静な面持ちで言葉を返していった

「あんたねえ……」

それによって一層苛立ちが増されたのか、ハルナの左手が高々と上がる

「反論出来ないから暴力ですか？随分と単細胞な思考回路ですね、それで気が済むんでしたらどうぞ」

「！」

それでいてなお変化を見せぬ夕映

親友といえど、ハルナも我慢の限界だった

「いい加減にしなさいよ！」

「やめて二人とも！」

夕映の頬へ思い切り平手を放つ

が、それは腕ごと第三者によって止められ、命中せずに終わった

「……のどか」

「ちょっとのどか！離しなさいよ！」

「ハルナだって！ハルナだって分かってるんでしょ！」

もう一人の親友の宮崎のどか

彼女が涙を流しながら絡める両腕を、ハルナは必死に振りほどこうと力を込める

そこへ、いつものどかなら考えられない程の大声

耳へズキンと響き、思わず腕に入れてた力が緩んだ

「……これ見て」

のどかは自分から両腕をほどき、ある一冊の本を開いてハルナへと手渡す

ハルナも夕映をもうぶとうはせず、そこに視線を落とした

「のどかのアーティファクト……」

「真っ白で何も映ってないでしょ？これ、くーふぇさんの心の中を覗いてみたやつなの」

「……」

そして沈黙

のどかのアーティファクト『いどのえにっき』

名前を言った人物の表層意識を、本の中に映し出すアイテムである

そのことはハルナも知っていた

問題はその中身

普通心の中をこのアーティファクトで覗けば、何かしら絶対に映し出される

意識がはっきりしている状態なら、そのまま今思っていることが

寝ている状態なら、その夢の中が

気絶して意識が無い状態でも、ページが一面真っ黒に染められる

しかし、今の状態はどのケースにも当てはまっていない

文字も絵も何一つ出てこない、完全な無反応

「これって、もうくーふぇさんが生きてないってことでしょ？」

「……」

「私だってこんなこと思いたくないし、言いたくもない……他のみ

んなだって同じだよ」

見ればあやかも、まき絵も、朝倉も

皆が酷く辛いこの状況に、歯を食い縛って堪えようとしていた

また全員が、その目元から涙をいくらか零れさせている

「でも私達の中で、それを誰かが言わなきゃいけない……それを夕映は、辛いと分かってて言ってくれたんだよ!?私達の代わりに!だか……ひっく、夕映も……」

と言ったところで、のどかももう限界

続けて喋ろうとしても、嗚咽が入り混じってちゃんとした言葉が出ない

だが、『夕映だって本当は、皆と同じくらい古の死を悲しんでいる』

そう言おうとしていることだけは何とか伝わった

「夕映……」

ハルナは再び夕映の顔を見る

夕映の両目からはいつの間にか、小さな雫が一つずつ顔を出していた

「古菲さんはドラゴンボールで生き返ります、ですから……」

「もういいわよ……ごめん、あんたの気も知らないで」

「ハルナ……はいです」

抑えようとしていたのに

皆に見せてはならないと心に決めていたのに

彼女の目は、さらに大粒の雫を零れさせた

「向こうも話が纏まったようだな……楓」

「……」

この様子を見届けたピッコロは、隣にいる楓に目線で指示

その旨を理解した楓は無言で頷くと、担いでいたクリリンを木乃香の隣へ寝かせた

「まずはクリリンの回復をやってくれ、かなり危険な状態だ」

「……うん」

木乃香は声を絞り出すと、始めから握っていた杖を改めて持ち直す

「そっちのデコチビ、お前もどうやら心得があるようだな。ボケっとしてないで手伝え」

「……はい！」

ボージャックと戦ってた際、地上で魔力反応を感じ取っていたピッコロ

無論、悟飯やネギを治療していた木乃香達のもの

一つは木乃香の魔力と分かっていたが、もう一つは知らない者のそれ

しかし近くにまで来て魔力を探り、それが夕映のものと認識

すぐさま声をかけた

その夕映は涙を拭いながら返事をし、席を立ってクリリンのところへ駆け寄る

「とりあえずは死ぬ危険の無いところまで治しておけ、そうしたら次は俺達だ。回復次第すぐ悟飯達の援護に戻る」

「「はい（うん）！」」

杖を振り上げ、始動キーを詠唱

「プラクテ　ビギ・ナル……治癒〈クーラ〉！」

早速クリリンの回復へと移った

「……楓、気付いたか？」

「うむ」

その一方、ピッコロは楓へ顔を向けて話し出す

「奴の部下四人の気が、全て感じられなくなってるでござる」

「そうだ、おそらくベジータやトランクスがやってくれたんだろう」

また、トランクスと刹那がこちらへ戻ってきているのも把握

どちらもかなり疲弊しているのが気の大きさから分かった

「つまり残る敵は奴一人、でござるな」

「ああ、だが少々厳しいかもしれん」

「え？」

しかし楓が述べたこの事実に、ピッコロはさほど嬉しそうな表情は見せない

楓は思わず眉をひそめ、おそるおそる訪ねた

「……どういう意味でござるか？」

するとピッコロは『少し近くに来い』と指を動かしてその意図を伝える

その通りにした楓へ、彼女のみに聞こえる声でボソッと呟いた

「木乃香の魔力が……そろそろ完全に尽きる」

!!

第75話　ボージャックは焦り怒る　急造コンビ華麗な連携　（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「さてクウネル、今回のゲストは誰なのだ？」

クウネル
「はい、今回はこの方々です」

ブラック将軍
「部下に先を越されるとはな……あ、どうも」

千草
「あ！あの時の吸血鬼！」

クウネル
「天ヶ崎千草さんとブラック将軍さんのお二人です」

エヴァ
「おー、ただ利用されただけコンビ」

千草
「その言い方はやめなはれ！」

エヴァ
「だって事実だろ」

千草
「だいたいあんたが来なければ京都での作戦は成功してたんや！あん時は何してくれとんねん！」

エヴァ
「いや、『そうしたらついでに修学旅行へ行けるぞ』ってジジイが……」

千草
「ムキーーー！関東の魔法使いめ！」

クウネル
「ですがエヴァンジェリン、お二人をそんな風に括るのは私としてもどうかと思いますよ」

エヴァ
「何？」

千草
「おお！よう言った兄さん！」

クウネル
「ここにいるブラック将軍さんは、千草さんより幾分かマシじゃないですか」

千草
「え？」

ブラック将軍
「……私がか？」

クウネル
「はい、互いに利用されていたのは同じですけど、あなたはちゃんとその相手に報復をしたでしょ？」

エヴァ
「あ、そういえばそのレッド総帥とかいうチビボスを銃で殺してたな」

ブラック将軍
「まあ、確かにそうだが……」

エヴァ
「なるほど、これは確かに天ヶ崎千草よりも断然格上だ」

クウネル
「でしょ？彼女がフェイト相手に報復なんて絶対出来ませんもん」

千草
「ぐぐぐぐ……言わせておけば……」

エヴァ
「さて、格付けが済んだところでコーナーを進めるか」

千草
「ちょい待ち！格付けってなんや格付けって！」

クウネル
「はい、さて今回の話ですが……」

千草
「人の話を聞かんかい！」

エヴァ
「久々に地上の奴らに出番が回ってきたな」

ブラック将軍
「そのようだな」

クウネル
「感想の返信でも『ちゃんと出番は作る』って回答してましたもんね」

エヴァ
「だがセリフがあったのは四人だけだよな。図書館探検部の四人」

クウネル
「まあ全員が全員だとかなり労力を使いますから……」

注・ちゃんと近い内に喋らせますから！朝倉もあやかもまき絵も！

エヴァ
「まあそれも確かに大事ではあるんだがな……」

ブラック将軍
「まだ他に何かあるのか？」

エヴァ
「そうだよ、お前達誰か肝心な奴を忘れてないか？」

クウネル
「千雨さんやサタンさん達ですか？」

エヴァ
「違う、あいつらはまだマシな方だ」

ブラック将軍
「葉加瀬や五月とかいう子のことか？」

エヴァ
「あれもかなり酷い扱いだが違う」

千草↑しぶしぶ参加
「……ほなら一体誰やねん？もったいぶらずに言いや」

エヴァ
「……相坂さよ」

クウネル&ブラック将軍&千草
「……ああっ！！」

注・ああっ！！

千草
「って、作者まで『ああっ！！』かい！」

クウネル
「これ書いてる途中で気が付いたみたいです」

エヴァ

「大会編に入ってから登場回数ゼロ、かれこれ半年も出てないんだぞ？」

千草
「あの子幽霊やから、会場で誰にも気付いてもらえへんのか？」

クウネル
「いえ、それでもせめて朝倉さんとの会話はあるはずです」

ブラック将軍
「（読み返し中）おい……あの夕映という子達と会場に来た描写が本編中に無いぞ」

千草
「何やと！？」

エヴァ
「そこまで書き忘れてるのか作者は……」

クウネル
「てことは、占いババさんの館に放置されてるんでしょうか？」

注……じゃあそれで

エヴァ
「じゃあってなんだよ！じゃあって！」

クウネル
「まあ今更編集して、さよさんの登場シーンとセリフを捻じ込むのも無理がありますしね」

注・すいません、ホントに忘れてました。大会編が終わったらちゃんと出番をあげます

エヴァ
「作者にさえ忘れられるほどの地味さか……相坂さよおそるべし」

千草
「なに言っとんねんあんたは」

クウネル
「では続きまして、次回予告です」

ブラック将軍
「さて、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「近衛木乃香の魔力が尽きかけで、もう後がないぼーや達」

千草
「そこへ、あの犬っころがようやく戻ってくるみたいやな」

クウネル
「そして悟飯君達の戦いの方にも、ついにあの人が到着です」

ブラック将軍
「期待したいところだな」

エヴァ
「次回の投稿予定は来週の火曜日だ」

千草
「皆様からの感想も、お待ちしとりますえ」

クウネル
「では、次回のネギドラ！も……」

エヴァ＆ブラック将軍＆千草
「お楽しみに！」

クウネル
「しかし、大会編終わるまで出番無しっていうのは可哀想じゃないですか？さよさん」

エヴァ
「まあ確かにそうだな……じゃあこっちにでも呼ぶか、ゲストで」

千草
「でもあの子のリクエスト、一本も来てないみたいやで？」

ブラック将軍

「そのようだな」

エヴァ

「おいおい……」

注・さよのゲストリク、いい案がありましたらどうぞよろしく

第７６話　超ベジータ見参　そいつを倒すのはこの俺だ！（前書き）

そろそろ冬休みが近くなってまいりました。何気に課題が多かったり、冬季講習に行かなきゃならなくなったりと、大変な毎日になりそうな気がしますが執筆頑張ります！

ではどうぞ！

第７６話　超ベジータ見参　そいつを倒すのはこの俺だ！

「木乃香殿の魔力が尽きる？」

「そうだ」

ピッコロから告げられたこの事実

楓は額から冷や汗を一筋流すと、改めて訊き直す

「……本当でござるか？」

「ああ、おそらく治せるのはあと一人が限界だろう。クリリンを除いてな」

やや違いがあるものの、ピッコロも魔法（魔術）の心得を持つ者

そのため魔力に対する感性は、ネギ達側を除けば一番良い

また、同じく魔法を使う木乃香やネギと共に修行していたことで、それは一層磨かれていた

だからこそ、今の木乃香のコンディションの把握がほぼ完璧に出来ているのである

「この短時間の内に、かなり魔力を使ってしまったようだな……」

出血多量のアスナ、気を使い果たして衰弱状態の天津飯
ヒビ多数の悟飯、そして二箇所骨折のネギ
アーティファクトで治療した刹那をノーカウントとしても、その数四人
しかもそれぞれがかなりの重傷
木乃香が普段修行の際に治療したのは、殆どが打撲や軽い疲労
たまに骨折などもあったがそれは稀で、一日に一回あるかどうか位
つまり、ここまで重傷の者を連続で治療することは今までに無かったのである
「とすると、残り一人分の治療は誰を？」
「総戦力で考えれば俺か、今刹那と一緒にここへ向かっているトランクスだろうな」
もしくは悟飯かベジータ、負傷したどちらかを治すか
どちらかになるだろう、とピッコロは言った
「となると拙者達は……」
「悪いがここで離脱してもらう、もうお前達がどうこう出来る戦いじゃない」

部下の相手ならまだどうにか戦うことは出来た

だがあの親玉、ボージャックは別格

楓の影分身をものともせず、さらには必殺技『忍空密爆球』をも完全に撃破

激怒して魔力暴走を起こしたネギでさえ、ほんの数十秒で全ての動きを見切られる始末

「あの状態のネギの強さは凄まじかったが、それでもまだ俺の全力には及ばない。お前も同様だ、さっき奴に手の内を全部明かしてあのザマなんだからな」

「そうで、ござるな……」

楓は悔しそうな表情をし、俯いて拳を震わせる

これ以上ピッコロ達の役には立てそうもない

今の己の力不足が酷く悔しかった

「それに真名とかいうお前の知り合いも早く退却させた方がいい、これ以上は危険すぎる」

「でも、真名にはあの結界弾が……」

「確かにかなり強力だ、しかしそれもいずれ奴に攻略されてしまうだろう」

これはピッコロの経験則

真名がボージャックに対してとっているのは、言うなれば小細工

力量差を補うために弱い側が講じる、戦闘手段の一つである

使いようによっては、力量差を埋めきることも可能といえば可能

だが、あまりにもかけ離れすぎていたらどうか

始めは仮に上手くいったとしても、いつかは絶対に破られるのが目に見えている

過去に幾多の敵と戦ってきたピッコロだからこそ、それには一層説得力が感じられた

「俺の見立てじゃ結界弾を除いたあいつの強さは、せいぜいクリリン前後くらいしかない」

そのクリリンはあの通り、死にかける程の重傷である

「早いところ手を打たなくてはな……ん？そういえばネギはどうした」

ここまで楓に話したところで、ピッコロはネギのことを思い出す

周囲を見渡してみたが、どこにも姿は見えない

「ネギ先生ならさっき、古菲さんの遺体を別の場所へ移しに行かれたです」

そこへピッコロの様子に気がついた夕映が、手を休めぬまま説明した

どうもクリリンの治療が始まったあたりから既に移動していたらしい

『古老師をこのままここに置いていると、皆さんも色々辛いでしょうし』とのことだった

なら私が、とあやかが怪我をしているネギを気遣うが、彼はこれを拒否

少し一人にもなりたい、と口にするとそのまま行ってしまったそうだ

「それよりお二人もこちらまで来てください、もうすぐクリリンさんのが終わります」

「あ、夕映殿、そのことなのでござるが……」

木乃香の残り魔力のことを説明しようとする楓

幸い主な怪我は左腕の骨のヒビのみ、命の心配はない

なので自分の治療はまだしなくてもよい、と言いかけたのだが

「木乃香殿は今、残りのま……！」

何かを察知し、即座に会場出口の方へ振り返る

見ればピッコロやあやかも察したようで、同様にそこへ顔を向けていた

よく知る気が一つ、こちらへ向かってきている

「コ、コタロー殿！」

楓がその名を言った直後

「遅なってすまん、楓姉ちゃん！他のみんなはどないや！？」

狗族のハーフの少年は姿を現し、慌ててそこへ駆けてきた

（これはマズいな……）

同時刻、ボージャックと交戦中の龍宮真名は酷く焦っていた

（……もう弾があまり残っていない）

理由は簡単、弾切れ寸前なのである

といっても、愛銃デザートイーグルの方はまだ大丈夫

問題は、左手に握る結界弾の方のそれ

東西南北四人の界王に、急遽術を込めてもらって作ったこの結界弾

早い話、時間の関係上多く作れなかったのだ

その数合計八十発

地面に五発撃ち込んで結界を形成するため、十六回分という計算である

それだけ聞けばかなりあるように思えるが、実際はそうではない

結界弾が結界として成立するためには、上述の通り五発を撃ち込む必要がある

つまり、一発でもしくじれば不成立となるのだ

しかも結界弾を撃つ銃は五発式のリボルバーのため、すぐ追加して撃ち直すというのも不可能

このことにボージャックは途中から気付いてしまった

そのため結界弾を撃っても、その中の一発だけを狙ったように防がれる

全て撃ち落とすか完全回避しかないと思ってただけに、これは正

に天啓

五発の内一発だけで良いなら、ボージャックの実力を持ってすれば余裕なことだった

（しかし不幸中の幸い、向こうはまだ気付いてはいない）

真名は上空を見上げ、悟飯とボージャックの空中戦に目を向ける

無論、援護射撃のためのデザートイーグルは構えたまま

（悟られたらそれこそ一巻の終わりだ、何とか気付かれぬようこのまま戦闘を続けなくては……）

神経を集中し、ボージャックを狙い撃つべく凝視

左にある魔眼が妖しく光を見せた

（今だ！）

そして、気を込めた弾を発砲

「ぐっ！」

横腹に被弾、やはりダメージは殆ど無いようだが

「やああっ！」

「ぐぼおっ！」

悟飯へチャンスを与えるのには充分

拳がボージャックの頬を抉った

「こなくそおおおっ！」

「ぐわああっ！」

しかしすぐに立て直されると、今度はお返しに悟飯へ拳が飛ぶ

こちらも頬を見事に捉えた

（畜生……あの女の厄介な結界を対処出来るようになったのはいいが、まだこの援護射撃が残ってやがる……）

こちらもかなり厄介

戦いが始まってから、真名は全くと言っていいほど撃ち損じを見せていない

早いところあっちも何とかせねば、と思わざるを得ないボージャック

（とにかくあの女の排除だ、あいつさえいなくなって一対一になればこんな奴ら……ん？）

するとどこからか強い気と、空気を切り裂きながら高速で移動する何かの音

かなり速いうえ、こちらへ向かってきていた

（何だ？ビドー達の気じゃ……！？）

それに気付いた直後、ボージャックは目を見開いてさらに上空へ飛翔

合わせるように悟飯も慌てて飛ぶ

ギュオオオオオオオンッ！

そのすぐ後に、さっきいた場所へ強力な気功波が轟音をあげて通り過ぎた

「あ、危ないじゃないですかベジータさん！」

「ベジータ？」

悟飯は感じた気によって、見る前から正体を把握

気功波が飛んできた方向へ振り向き、思わず大声をあげる

「今のをお前達が避けれんわけがなかろう、ほんの挨拶みたいなもんだ」

気功波を撃った当人、ベジータ

彼は既にこうして、目視出来るところまで接近していた

「で、でも助かりました！早く一緒に戦ってこいつをやっつけましょう！」

（また別の奴が来やがった……くそ！ビドーやザンギャは何をしている！）

次から次へと自分のもとへやって来る邪魔者

それを阻止する役目でもあった自分の部下達に対し、ボージャックは憤慨する

（……四人の気が無い！？まさか全員死んだというのか！？）

が、直後に彼らの気が全く感じられないことに気付いた

（お、俺達は銀河戦士だぞ！？それをこんな地球の奴らどもに……）

気の大きさから察するに、新たにやって来た男はかなりの強者

一対一ならまだ問題無いが、さっきまで戦っていた二人も加えれば三対一

敗色が濃厚になるであろうことは、まさに自明の理である

（くそおっ！くそおっ！一対一ならわけないこいつらなんかに……）

「ふざけるな！そいつは俺一人で倒す、お前達と共闘なんてまっぴらゴメンだ！」

（……何だと？）

しかし、ベジータの放った言葉にボージャックは耳を疑った

（こいつは今何と言った？俺を一人で倒すだと？）

ベジータは基本、自分が戦うに値する強者とは一対一の純粋な戦いを求める

サイヤ人の王子として兼ね備える高いプライドからなのだろうか

デンデに回復してもらい、とてつもないパワーアップを果たしてフリーザに挑んだ時も

精神と時の部屋での修行を終え、セルと戦った時も

そしてボージャックへ戦おうとしている今も

「そこの女もだ！手に持ってるそいつで邪魔しやがったら承知しないからな！」

「なっ！？」

何を言ってるんだお前は！

そう言いたくなる真名だったが、その言葉を喉に留めてすぐ飲み込んだ

ベジータの目は本気だった

それこそ、邪魔をすれば痛い目くらいじゃ済まさんぞと威嚇せんばかりのもの

事実、ベジータは過去に一度似たような経緯で息子トランクスに牙を向けている

真名をそれを知る由も無かったが、本気であることは確かだった

「べ、ベジータさん！今はそんな場合じゃ……」

「お前は黙っていろ！こっちはさっきからずっと、格下ばかりを相手にしてたんだ！カカロットの息子といえど容赦はせんぞ！」

悟飯が説得しようとするも一蹴

怒号を浴びせ、ボージャックの方へと向き直った

「さて、じゃあ早速始めるとするか」

「……俺の部下を殺したのはお前か」

「ああ、だがいいウォーミングアップにはなったぞ。貴様と戦うためのな」

「なるほど……」

いつの間にか両者は、それぞれが正面から向かい合う形に

「「はあああああああああああああっ！」」

ベジータとボージャックは、全身から気を放出して身に纏う

「いくぞ！サイヤ人の王子、ベジータが相手だ！」

（バカめ……こいつを利用して、あの二人も一気に潰してやる！）

そしてボージャックは不気味な笑みを浮かべた

第７６話　超ベジータ見参　そいつを倒すのはこの俺だ！（後書き）

クウネル
「大変ですよエヴァンジェリン！」

エヴァ
「どうしたクウネル？いつもなら『どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です』って言ってこのコーナーを始めてるだろ？」

クウネル
「リクエストがついに底を尽きました！」

エヴァ
「何！？」

クウネル
「前回の分でもう、出来るのは全部消化しちゃったようなんです！」

エヴァ
「アンニン＆五月とかはどうしたんだよ！」

クウネル
「作者がまだＤＶＤを借りて観てません！」

エヴァ
「いい加減観ろよ作者！ってか、それじゃあ今回はどうするんだ！？また作者が考えてたお蔵入りをやるのか！？」

クウネル

「それは８０話までやらないと豪語しちゃいましたから……」

エヴァ
「じゃあ何か！？私達二人でひっそりとやれと！？」

クウネル
「いえ、そこで今回は思い切って……」

エヴァ
「……思い切って？」

クウネル
「……二巡目に突入させることにしました！」

桜子
「やっほーエバちゃん！」

プーアル
「やったー！また出れたー！」

エヴァ
「ってそれだけのためにあんな前フリか！？そこまで深刻そうになる必要なかっただろ！」

クウネル
「まあまあ、というわけで今回のゲストは桜子さんとプーアルさんのお二人です」

桜子
「いえーーーい！」

エヴァ
「椎名桜子はチアの他二人と比べて随分出演が遅れたな」

クウネル
「ビーデルちゃんを悟飯君と組ませたいというのもありましたが、一番の理由は……」

桜子
「プーアル君可愛いーーー！」

プーアル
「あわわわっ！」

エヴァ
「猫のあいつか」

クウネル
「そのようです、この共演が一番作者としてもしっくりきたとか」

プーアル↑桜子の腕の中
「く、くすぐったいですよー！」

桜子
「この毛並み最高ーー！」

エヴァ
「……何か本編でのカリンとほんの少し被ってないか？セリフ的に」

クウネル

「突っ込まない方向で、というわけで今回の話ですが……」

エヴァ
「ようやくベジータＶＳボージャックに突入だな、描写からして結果は大方予測がつきそうだが」

クウネル
「まあそれでもちゃんと見せ場は作ると思いますよ、作者の主義的に」

エヴァ
「だな、けどまた引き伸ばしが顕著になるのも勘弁だぞ？」

プーアル↑桜子の腕の中
「そこは作者もしっかり自覚してるみたいで……わわわわっ！？」

桜子
「ほーら、猫じゃらしだよーー」

エヴァ
「……おい、お前も少しはトークに加われ」

桜子
「えー？もっとプーアル君と遊んでたーい」

エヴァ
「何をしにここへ来たんだお前は……」

クウネル
「では続きまして、次回予告です」

プーアル↑桜子の腕の中
「さて、次回のネギドラ！は……」

クウネル
「ベジータとボージャックの戦いがついに開戦です」

エヴァ
「圧倒的強さを誇るボージャックを相手に、ベジータがどう戦うかが次回のポイントだな」

クウネル
「あと、二人も潰す発言が気になるところです」

エヴァ
「だな、おいお前も少しはやれ」

桜子
「ふーい……えっと、その戦いだけで丸々一話使う予定みたいなんだって」

プーアル↑桜子の腕の中
「それだけ熱い戦いが展開されるってことですね！」

エヴァ
「またストーリー進行が遅くなってしまうな……」

クウネル
「まああくまで予定ですし、変わる可能性も大いにありますよ」

エヴァ
「それはそれで問題だろうが……」

桜子
「あ、あと！次回の更新予定は金曜日だよ！」

クウネル
「要するにいつも通りです」

プーアル↑桜子の腕の中
「では読者の皆さん！次回のネギドラ！も……」

エヴァ&クウネル&桜子
「お楽しみに！」

クウネル
「さて、二回目の出演はいかがでしたか？プーアルさん」

プーアル
「はい！すごく楽しかったです！また機会があれば是非呼んでください！」

桜子
「私もまたプーアル君と出たいーーー！」

エヴァ
「いや、それは多分無理だろ」

桜子
「えーーーー」

エヴァ
「というかそっちの猫は、むしろ本編登場を目指した方がいいだろ。出番欲しいなら」

プーアル
（ガーーーーーーーン！）

注・ちなみにゲストのリクエストはまだ募集中です、初出演キャラのみの組み合わせも勿論ＯＫです

エヴァ
「というわけなのでよろしくな」

第７７話　ぶつかり会う闘志と策士　激昂するベジータ（前書き）

また朝投稿です、やや前回より短いですがご了承ください
ではどうぞ！

第77話　ぶつかり会う闘志と策士　激昂するベジータ

「だあああああああっ！」

先に動いたのはベジータだった

背を反らして両手を頭上へ

気を凝縮させた黄色の光球を作り、すかさず力強く投げつける

（むっ、思ってた以上にパワーが大きい……）

対するボージャックは、そんな事を思いながらもいたって冷静

腕を前で交差してガードするという、無難な策をとった

光球が当たり、響く爆発音と立ち上る煙

「だだだだだだだだあああっ！」

そこへすかさずベジータは追加攻撃を仕掛ける

両手から気弾を次々と放ち、煙の中のボージャックへと浴びせていった

「どうしたどうした！もう終わりか！」

ベジータは手を休ませることなくボージャックを挑発

「んなわけあるかよ！」

ボージャックはそれに答えながら、上へさらに飛び上がって気弾の雨をかわした

そしてお返しとばかりに、こちらも光球を右掌から生成

「そらあああっ！」

勢いよく投げおろす

しかしそれはベジータには被弾せず

「当たるか！」

高速移動で避けられる結果に終わった

その高速移動したベジータは、ボージャックへ接近

「ずあああああっ！」

気を込めた拳を真っすぐに突き出す

「ずあああああっ！」

だが、ボージャックもそれにすぐ反応

向こうと同様、右拳に気を込めながら打ち出した

拳と拳は、両者の間の丁度真ん中で激突

そこから大きく空気が揺れ、ビリビリと衝撃波に近いものまで起こる

「やるじゃないか、予想以上だ……」

「へっ、まだ全力を出してない奴が何をぬかす！」

拳を接点にしながら押し合う二人は、それと同時に会話までも交わしていた

力は現在拮抗しているのか、大きく動くような様子は見えない

「さっさと本気になりやがれ！言っておくが、俺だってまだまだこんなもんじゃないぞ！」

「ほう、そいつは楽しみだ……な！」

が、ここでボージャックが気をさらに爆発

「ぬおおっ！？」

ベジータは押しのけられ、拮抗状態は簡単に崩れた

「そら、お前も来いよ」

「そうこなくっちゃな……上等だ！」

ここから戦いは一気に、激しいインファイトへと突入

「そらそらそらああっ！」

「うらららららああっ！」

さらにパワーを高めた二人の両手両脚が、火花を散らすかのように交わされていく

その激しさは、悟飯との時のそれを軽く上回らんかのごとく

「だあああああっ！」

「ごふっ！」

ベジータがボージャックの腹を捉えれば

「このおおおおっ！」

「ぐおおっ！」

すかざすボージャックがベジータの頬を抉る

ベジータは口内の血をすぐにペッと吐き出すと怯むことなく戦闘を続行

ボージャックも同様、戦意は全くもって揺るがない

「「ずあああああああああああああっ！」」

両者の戦いの激しさは、衰えることなく増し続けていく

そしてそれを、地上から見届けている者が二人

「しかし彼があのベジータ……あの世で聞いたとおりの人物のようだな」

「そのこともお父さんから？」

「ああ」

龍宮真名と孫悟飯

ベジータに『一対一の勝負の邪魔をするな』と一喝され、こうして援護へ加わらずにいた

「『死ぬ前にもう一度、本気で勝負したかった奴』とも言ってたかな」

「そんなことをお父さんが……」

「だがすごいな彼は、君以上にあのボージャックと戦えている」

真名は再び顔を上げ、二人の空中戦に視線を移す

ややボージャックが押しているようだが、かなりの好勝負と言っていいだろう

現在のボージャックのパワーが全力かといえばそうではないようなのだが、それでも充分賞賛に値する内容である

「何というか彼は、自分の全力をどんな時でもいかんなく発揮出来る。そういうタイプだな」

「え？」

真名はベジータに対する感想を素直に述べる

すると悟飯が、その言葉にほんの少し動揺を見せた

無論、それを見逃すような彼女ではない

「……君とは違ってね」

「！！」

「図星か……これも君のお父さんから聞いた通りというわけだ」

悟空とあの世では、パイクーハンに次いで二番目に長く会話を交わしていた真名

内容としては主に今までの敵や、共に戦ってきた仲間達の話

敵の話ではフリーザやセル、仲間の話ではベジータや悟飯のが一番多かった

その悟飯に関する話で、悟空はこう口にしていたことがある

『あん時の悟飯は凄かったな、それこそオラやベジータよりもずっとだ。ここでこうして一年修行した今のオラでも、本気のあいつと

勝負したら勝てるかどうか分かんねえ』

あん時とは言うまでもなく、セルとの最終決戦

怒って本気になった悟飯の強さは、自分をも遥かに凌ぐ

悟空はそれを認め、悟飯に地球の未来を託した

そして幾らか予想だにしない事態があったものの、確かに悟飯は勝った

悟空やベジータでさえも勝てなかったセルに、勝利を収めたのである

また、悟空は続けてこうも言った

『でも悟飯は今でも、自分のパワーをコントロールしきれてねえんだよな。どこか無意識の内に自分の中で押さえ込んでる節があんだ』

それはつまり、自分の意志で上手く全力を出せないということ

事実、悟飯がセルとの戦いで怒りを開放して本気を見せたのは、戦い始めてから大分後である

「本当に本気の中の本気を出すことが出来れば、今ああして戦っている彼よりも強いんだろ？」

「……」

「いや、それ以上にあのボージャックとかいう奴も倒せる筈だ」

真名は身体を悟飯の方へと向け、肩に手をかけた

「怒るんだ今以上に！そして全力を奴にぶつけろ！」

「そんなこと言っても、あの時みたいには……」

悟飯は表情を苦め、握り拳をワナワナと震わせる

自分だって、出来るものなら今すぐにでもそうしたい

だがいくらやっても、あの時のように怒ることが出来ない

怒りたいのに怒りきれない

そのジレンマは悟飯の中で、多大な圧力をかけていたのだ

これを察した真名は、声を少し抑えて言葉を続ける

「……これは、君のお父さんからの伝言なんだ」

「お父さん……から？」

「そうだ」

悟飯の表情が和らいだのが分かると、真名は肩から手を離す

そのまま服のポケットから、一発の弾を取り出した

大きさからして、リボルバー銃の方に装填して撃つ弾のようだ

それを真名から見せられ、悟飯は疑問を抱かずにいられない

「……それは？」

「あの世で界王様に作ってもらった弾でね、中に気や術以外の“あるもの”を込めることが出来るんだ。これ一発限りの特別品さ」

「あるもの？」

「そう、この中に入っているのは……」

「ぐわあああああああああああああっ！」

「「！？」」

そんな悟飯へ説明しようと真名が再び口を開く

が、言い終わるより先に、ある人物の叫びがそれを遮断した

ボージャックに殴り飛ばされたベジータだ

猛烈な速度で斜め下へ下降していき、こちらの比較的近くへ飛んでくる

チュドオオオン！

そして次の瞬間、ベジータはなす術も無く激突

「べ、ベジータさん！」

十メートルも離れてない場所から土煙が上がる

悟飯と真名は急いでベジータのもとへと駆け寄った

幸い殴った本人のボージャックは、その様子を上空から高みの見物にしゃれこんでいる

「大丈夫ですか！？」

「うるさい、そこをどけ……ま、まだ勝負は終わっていないんだ……」

パラパラと音を立てて砂が落ちる

ベジータは悟飯の手を払いのけてゆっくりと起き上がった

既に身体のあちこちに傷

息もやや荒くなっているのが分かる

二人が会話を交わしていたあの僅かな時間

それだけでここまでのダメージをベジータは負わされていた

「やはり一人で戦うのは無謀すぎる、三人で戦えば充分勝機が……」

「黙れ！さっきも俺は言ったぞ！共闘なんてまっぴらゴメンだとな！」

フルパワーになったボージャックを、ベジータが単独の力で撃破するのは確実に不可能

さらにボージャックのパワーが上がっているのを感じ取った真名は、そう判断するしかなかった

しかしベジータは断固これを拒否

自分一人で倒すと決めたこの意志を曲げるなど、彼からすれば到底考えられなかった

「だが今の状況じゃどう考えたって無理だ！勝てるわけがないだろ！」

「黙れと言ってるのが分からんのか！」

真名は声を荒げるが、ベジータはそれでも反発した

息を何とか整え、再びボージャックに飛び掛かろうと戦闘態勢を取り直す

「ベジータとか言ったか？俺は別に構わないぜ、来るなら来いよ三人で」

「野郎……」

そこへたたみ掛けるように、上からのボージャックの言葉

ただでさえ劣勢に立たされ、いい気分では決してないベジータ

頭へさらに血が昇っていった

「おい、冷静にならなくてはダメだ、それこそ奴の思う壺に……」

「やかましい！大人しくそこで見てやがれ！」

「べ、ベジータさん！」

助言にも一切耳を貸さず、苛立ちそのままに真名を突き飛ばす

悟飯は彼女を受け止め、代わるようにして制止の言葉をかけた

「行くぞおおおおおおっ！」

が、ベジータが止まることはない

全身から気を炎の様に燃え上がらせ、猛スピードで突撃した

「来い！このまま終わらせてやるぜ！」

「俺を、舐めるなあああっ！」

ボージャックはそれを正面から迎え撃つ

「はっはっは！どうしたどうした！」

身体目掛けて立て続けに数発のストレートが飛んでくるが、どれも余裕を持ってガード

「ずあああああっ！」

次に右脇へ回し蹴りが迫るが、これも右腕で阻止

ダメージはおろか、体勢すら崩させない

「何故だ！何故俺の攻撃が効かん！」

ベジータは焦りを見せながらも、さらに攻撃を続けた

しかしどれもボージャックには通用しない

避けられるか防がれるか

それは戦いが進むにつれ、徐々に顕著になって表われてきた

「俺は！俺はサイヤ人の王子だ！こんな奴ごときに負けるものか！」

感情をさらに露わにするベジータだが、それでも戦況は変わらず

ボージャックは迫りくる攻撃を凌ぎながら

（よしよし、確実に冷静さを失ってきているな……）

ことが自分の思惑通りに運んでいるのを確信していた

（それに気付かない様じゃ、この勝負は決まったも同然……次に移るとするか）

「うおおおおおおおっ！」

（こいつに加えて下にいるガキと女、三人まとめてこれで叩き潰す！）

策士ボージャックは、またも不気味な笑みを浮かべる

第７７話　ぶつかり会う闘志と策士　激昂するベジータ（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、ゲスト二巡目に突入のあとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「わざわざそこを強調して言うってことは、今回もゲストは既出の奴か」

クウネル
「そうなりますね、追加のリクも来てないですし」

エヴァ
「作者はＤＶＤ借りてないし」

クウネル
「まあ、そういうわけで今回のゲストは……」

カリン
「……はぁ」

ヤジロベー
「おみゃーはいつまで溜息ついとんだぎゃ」

カリン
「じゃって折角ゲストに呼ばれたのに、共演するのがいつも顔を合わせまくっとるお前なんじゃもん……向こうの地球のおなごとも話をしたかったのう……」

ヤジロベー
「悪かったな共演者が俺で」

エヴァ
「おい、なんか既にムードが険悪だぞ？」

クウネル
「カリン塔コンビということで、カリン様とヤジロベーさんのお二人です」

エヴァ
「……カリンは二回目の出演で、そっちのデブは初登場だったな」

クウネル
「はい、そうなりますね」

ヤジロベー
「おい待てチビ、デブって何だデブって」

エヴァ
「お前のことだよ、他に誰がいる。というか私に向かってチビだと？」

ヤジロベー
「そうだよ、どう見たってチビだろうが」

エヴァ
「（プチッ）貴様、人が気にしていることを……」

ヤジロベー
「お、何だ?やる気か?」

エヴァ
「五秒だ、五秒もあれば貴様を片付けるなど容易いことだ」

クウネル
「はい、ストップですエヴァンジェリン。またこのコーナーで負傷者を出すのはホントやめてください」

エヴァ
「別にいいだろ、今まで過去に何度も起こってることだ」

クウネル
「だからです、毎回その人達の治療するのは私なんですからね?」

エヴァ
「……ちっ、本編で会った時は覚悟しろよ」

ヤジロベー
「無理無理、おみゃーどうせ出番ねーんだろ?」

エヴァ
「(プチン)いーやある!絶対ある!だからその時は容赦なく貴様をくびり殺……」

クウネル
「ではコーナーを進めましょうか」

カリン

「そうじゃな……はぁ」

エヴァ
「おいクウネル！貴様も何とか言え！」

クウネル
「というわけで今回の話ですが……」

エヴァ
「スルーするな！」

カリン
「うむ、ベジータの戦闘と悟飯達の会話が主な内容じゃったな」

ヤジロベー
「つーかそれだけだろ？話全然進んでねーじゃんよ」

クウネル
「しかもベジータさんの戦闘が次話まで延ばされちゃいましたしね」

エヴァ
「でもまあ、伏線の回収が出たといえば出たな」

クウネル
「あれ？ご自分の本編出演のことについてはもういいんですか？」

エヴァ
「どうせこのままスルーされて終わるくらいなら、追求は諦めてコーナーに戻る」

クウネル
「まあそれが妥当でしょうね」

エヴァ
「お前がちゃんと言ってくれれば丸く収まるんだがな」

カリン
「しかしあの弾には何が入っとるんじゃろうか？」

エヴァ
「孫悟空があの世で言ってた『あれを託して』の『あれ』だろ、おそらくな」

注・そうです

クウネル
「あ、作者も認めましたね」

カリン
「ということは近いうちに詳細が明らかになるんじゃろうな」

クウネル
「そういうことでしょうね」

ヤジロベー
「でも何話までにかは分かんねーんだろ？あの作者のことだし」

注・出来る限りテキパキ進められるよう頑張ります

エヴァ

「まあそうしてもらわないとダメだわな」

クウネル
「というわけで、続きまして次回予告です」

カリン
「さて、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「悟飯達との共闘を頑なに拒み、一人立ち向かうベジータ」

クウネル
「策士ボージャックの罠とも知らず、スタンドプレーを続けてしまいます」

カリン
「そして三人の運命や如何に！？」

ヤジロベー
「つーわけで、次回の投稿予定は来週の火曜日な」

エヴァ
「リクエスト、感想等はまだまだ募集中だからな」

クウネル
「リクエストは特にですね、ぶっちゃけネタ切れの危機が迫ってきてます」

カリン
「ではみんな、次回のネギドラ！も……」

エヴァ&クウネル&ヤジロベー
「お楽しみに！」

エヴァ
「ところで今更なんだが、原作のボージャックは『策士』だって設定あったか？」

クウネル
「ないですね、『まあ部下を束ねて親玉やれるくらいだから頭も良いだろう』という作者の創造です」

カリン
「じゃがおかげで戦いの内容を練りやすいらしいぞ、複雑なのも出来るから単純なのだけを使い回さずに済むし」

ヤジロベー
「じゃなきゃこんな長々と同じ奴の戦闘描写書けねーわな、作者も」

注・ラストはちゃんと考えてあるんです！ホントすみません！

第７８話　さらに怒れ悟飯！またもや敵の策炸裂　（前書き）

年末年始に物凄く忙しくなることが判明。投稿出来るのか非常に怪しくなってきました（汗）。そこらへんの状況報告は、活動報告もしくは最近始めたＴｗｉｔｔｅｒに書いていこうと思いますのでもしよろしければご覧ください。

ではどうぞ！

第７８話　さらに怒れ悟飯！またもや敵の策炸裂

「そおおおらっ！」

「ぐぼおおっ！」

攻めることなく、ただ攻撃を凌いでいただけのボージャック

そこから一転し、ベジータの腹へ自らの右拳を力強くねじ込ませた

見事直撃し、ベジータは顔を歪ませる

ボージャックが今の今まで攻撃をしてなかった理由は二つ

一つ目は、そうすることでベジータからさらに冷静さを奪いため

反撃一つせず、ただただ飛んでくる攻撃に対処をするだけ

悟飯と戦ったコタロー然り、トランクスと戦った古然り

そうされれば誰でも、どこか精神的に参ってしまうものである

ベジータの場合は特に怒りの面が顕著に出て、こうして頭に血が

どんどん昇っていった

そして二つ目は、こうしていきなり放った一撃を確実に決めるため

ベジータは一撃を貰ったあの時まで、攻撃することしか頭に無かった

敵から来る攻撃の防御など一切頭に無し

攻めてくる気が全く無いのだからそれも当然のこと

だが、だからこそ虚を突かれ、手痛い一撃を喰らってしまったのだ

「こ、このおおおっ！」

ベジータは負けじとボージャックの顔へ拳を振るう

しかしボージャックは身体を反らして難なく回避

そのまま笑い混じりにこう口にした

「はっはっは！動きが鈍ってきてるぞ！」

挑発の意味も含まれてはいるが、これは紛れもない事実

ベジータはこれまでの戦いで体力を多大に消耗

一年間のブランクにより、格闘センスこそ衰えはなかったがスタミナはやや減衰

また、怒りと苛立ちから普段とは違った非効率的な攻め方をしたのも大きかった

既に動きは精細さを欠き、見切って避けるのもボージャックにと

っては容易いこと

落ち着いて戦況を立て直そうにも、冷静さを持たぬ今のベジータではまず無理

「くそったれえええええええっ！」

激昂し、吼え、またもボージャックへ正面から攻めかかっていく

「当たるか当たるか！そんな攻撃！」

当然ボージャックを捉えるには至らない

動きも怒りに任せた単調なもので、見切るのはより容易いものだった

「そらああっ！」

「がはああっ！」

ボージャックはお返しに、今度は頬へ右ストレート

これも避けられずど真ん中を抉られる

「ベジータさん！やっぱり僕も戦います！」

見るに見かね、悟飯が援護をせんと舞空術で浮上したが

「何度も言わせるな！こいつは俺が一人でぶっ殺すんだ！」

ベジータがそんなことを受け入れるはずも無く、怒鳴り声を浴びせられて思わず動きを止める

「でもこのままじゃ！」

「黙れ！まだ勝負は終わってない！」

負けじと食い下がりはするものの、またも撥ね退けられた

「だあああああああっ！」

ベジータは攻撃を再開

殴るような動きで、右掌から気功波を至近距離で放つ

「甘いんだよ！」

「何！？ごばあああっ！」

しかしボージャックの前では無力

避けられながら右手首を掴まれ、動きを制限されたところへ容赦なく腹へアッパー

威力は先ほどよりも、格段に上がっていた

「次はこっちから、ガンガンいかせてもらうぜえええっ！」

「ぐわっ！ぐがっ！ぬごおおっ！」

そこからボージャックは猛攻撃を開始

「はっはっはっは！さっきの勢いはどうした！」

ベジータをあざ笑いながら、己が拳を全力で次々とふるっていった

それらは全て、ベジータへ会心の一撃を与え続ける

「このおおおおっ！」

「おっと危ない」

苦し紛れに飛んできたカウンターパンチもあっさりとかわし

「ほらよもう一発！」

「ぐごあああああっ！」

鳩尾へ右ストレートを決めた

「ベジータさん！」

「行くぞ、もう四の五の言ってる場合じゃない」

「は、はい！」

ひどく焦る悟飯とは対照的に、真名は冷静に銃の再準備

手に持っていた『特別製の弾』を再びしまい込み、両方の銃に弾が入っているのを確認する

もうベジータが何を言おうと関係ない、とにかく救援最優先

そう二人は決心して飛び出した

「だりゃあああああああああっ！」

「のわあああああああああっ！」

「「！！」」

が、ほんの僅か遅かった

ボージャックが二人の方向へ、ベジータを思いっきり蹴り飛ばしたのだ

今度は近くとかいうレベルではなく、避けねば間違いなくどちらかに直撃する

「危ないベジータさん！」

「ば、バカ！」

悟飯は真名を腕で制すと一人、飛んでくるベジータと向かい合う

そしてネギの時と同じように、真名の制止も聞かず正面から抱き止めた

しかしベジータはネギより重いため、衝撃は予想以上に大きくかかる

「ぐっ、わあっ！」

踏ん張りきれず、後ろへバランスを崩した

そのまま背中から倒れ、軽く打ちつける

「今だあああああああっ！」

ボージャックは正に、このタイミングを狙っていた

三人の方へ気をたぎらせて突っ込む

「来るぞ！早く起きて体勢を立て直せ！」

この絶好のチャンス、放っておかないはずがない

悟飯を潰しに来ると推測した真名

事実ネギを抱き止めた際も、彼はそのような目に遭わされているのだ

即座に後ろの悟飯へ振り返って叫ぶ

「距離を詰められたらおわ……！」

だが真名は、視線を元に戻した直後戦慄した

ボージャックの目線の先が悟飯に向いてない

（……私？）

そうであることを真名は確信する

つまり彼の狙いは元々

「お前が先なんだよ女！だりゃあああああっ！」

（くっ、間に合え！）

あれをまともに喰らえば、骨一本位じゃ到底済まされない

真名は反射的に瞬間移動を行った

そして攻撃が当たる前に、何とか悟飯の横へ移動する

（よし、このまま結界弾を撃ち込……）

「計算どおおおりいいいいいっ！」

（し、しまった！）

続いて結界弾を撃とうと銃口を向けた

奴の動きを封じ、その隙にこちらも態勢を立て直す

そのプランが既に頭に浮かんでいた

ところが、撃つより先にボージャックは方向転換して急速で接近

彼の拳が、届く届かないのギリギリまで迫ってくる

（距離が近すぎる！これでは撃てない！）

そもそもの問題は、真名が悟飯の傍にいすぎたこと

これでは瞬間移動で避けたとしても、近くにいるためまた攻撃が飛んでくる

（これも見越してのことか！）

ボージャックの背後へはもう無理、すぐ裏拳か何かをしてくるに決まっている

遠くにいるピッコロ達のところも、時間が無さ過ぎてこれも無理

いざという時の保険になっていたベジータも、今は悟飯の腕の中で何の意味も成さない

苦肉の策と分かりながらも、真名はあの世で習得した舞空術を使って真上に飛翔

ボージャックとの距離を離しにかかったのだが

「逃がすかよ！」

左手で足首を力強く掴まれる

そこから一気に引き寄せられ、真名の表情からは確かな焦りが見てとれた

「くそおっ！」

バアンッ！バアンッ！

結界弾は攻撃性能そのものは皆無

なので右手のデザートイーグルから二、三発、ボージャックへ気を込めて撃つ

が、正面から気でガードした彼にそれは無意味

目潰しも兼ねて両目を狙ったのだが、僅かに動かれて当たった額に全て弾かれた

「残念、チェックメイトだ」

ボージャックは不気味にニッと笑い

「だあああああああああっ！」

「ぐぼおおおおっ！」

直後顔を鬼のように豹変させ、真名の胴体へ拳を叩き込む

あまりの威力に、内部では鈍い音が数か所

さらにはその勢いで足首はボージャックの手から離れ、身体全体が水平にぶっ飛ばされた

「ま、真名さん！」

起き上がった悟飯が叫ぶがもう遅い

「ぐがああっ！」

真名は廃墟のコンクリの壁に激突

（こ、近衛達のところ……へ……）

瞬間移動での退却を試みるが、頭を強く打ちつけたのか意識混濁

気を満足に探ることも出来なかった

（くそ……こんな、ところで……）

そしてついには、完全に意識を失う

死んでこそいないが、この戦いからの退場を余儀なくされてしまった

「はっはっはっはっは！ようやくあのうざったらしい女を片付けられたぜ！」

ボージャックはもう真名に見向きさえもしない

頭をあれだけ強打してそのままにされていれば、何もせずともいずれ死ぬ

そのことを彼は把握していた

悟飯へと踵を返し、勝利確信の笑みをこれでもかと見せつける

「そっちも戦闘不能で、残るはお前ただ一人……一人で一体何が出来る！んー？」

ベジータも先ほどの猛攻を受け、意識こそ残っているもののボロボロ

プライドを捨てたとしても、到底悟飯と共闘が可能な身体ではなかった

「さっきのガキや緑のが戻ってくるかも分からん、一気にケリをつけさせてもらうぞ！」

（……やるしかないんだ！僕一人で！）

『怒るんだ今以上に！そして全力を奴にぶつけろ！』

真名の、正確には父からの言葉を思い出し、悟飯は覚悟を決める

「ほう、気がここにきてさらに大きく……まだ俺と真っ向から戦う気か、諦めの悪い奴め」

それに気付いたボージャックだが、自分が上なのをいいことにまだ余裕の表情

しかし、彼は肝心なことを見過ごしていた

……パチッ

「行くぞ！ボージャック！」

一年前のあの悟飯

彼が再び覚醒する一歩手前、すぐ近くにまで迫っていることを

第７８話　さらに怒れ悟飯！またもや敵の策炸裂　（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「しかしまたゲストリクが届いて、とりあえずはこのコーナーも一安心だな」

クウネル
「ですね」

エヴァ
「ところで今回のゲストは誰なんだ?新たに来たリクの中には未出キャラ同士のもあったが」

クウネル
「はい、今回はその中からこの方々をお呼びしました」

エヴァ
「ということは、今回のは厳密には二週目とは言えないわけか……」

夏美
「あ、読者のみなさん始めまして。村上夏美です」

スケさん
「透明人間のスケです」

エヴァ

「地味コンビか、どちらも本編未登場だよな」

夏美
「まあ私はエヴァちゃん達と同じく置き去り組だからね」

スケさん
「それに比べて、何で私は出てないんでしょう……」

エヴァ
「え？お前はあのババアの所で働いてるじゃないか、綾瀬夕映ｓｉｄｅで出てないのか？」

スケさん
「出てませんよ一回も……名前すら出してもらえない始末で……」

クウネル
「あ、ホントですね。それに仲間のドラキュラマンさんやミイラくんは普通に出てます」

エヴァ
「物凄い空気ぶりだな」

スケさん
「私の存在意義って何なんでしょう……」

夏美
「そ、そんなに落ち込まなくても大丈夫だよ！きっといつかちゃんと出番貰えるって！」

スケさん

「夏美さん……ありがとうございます、何だか元気が出てきました」

クウネル
「良かったですねスケさん」

エヴァ
「ていうかその透明な身体は何とかならんか？こちらとしても表情が読めんから会話がしにくい」

スケさん
「そんなこと言われても……これが私の本来の姿なわけですし」

クウネル
「確か色つきの液体をかければ、姿がハッキリと分かりますよね」

エヴァ
「なら血でもぶっ掛けてやるか、原作でも変態亀ジジイの鼻血をかぶってたことだし」

夏美
「……その血はどこから調達するわけ？」

エヴァ
「そんなの決まってるだろ？」

夏美&スケさん
「？」

エヴァ
「お前達二人からだよ」

夏美＆スケさん
「！？」

エヴァ
「余った血は私が貰うから安心しろ、一滴たりとも無駄にはせん」

夏美＆スケさん
（ヒィィィィィッ！）

クウネル
「エヴァンジェリン」

エヴァ
「……分かってる、冗談だよ冗談。仕方ないからこのままで我慢してやるさ」

夏美＆スケさん
（いやいや、さっきの眼はかなりマジだったよね！？）

クウネル
「さて、この話はこれくらいにして、そろそろコーナーを進めましょうか」

夏美
「あ、そういえばまだ本編内容のトークにも入ってなかった！」

エヴァ
「今回のは長くなりそうだな、本編とは逆に」

クウネル
「さて、今回の話ですが……」

スケさん
「一気に仲間がやられちゃいましたね」

エヴァ
「だな、結局龍宮真名も戦線離脱か」

クウネル
「でも悟飯君に例のフラグが立ちましたよ」

エヴァ
「それはまあ私的にも結構楽しみだ、今後の展開に期待だな」

夏美
「だよね、私も一度でいいからあんな風に目立ってみたいな……」

スケさん
「ですよね、私もアックマンみたいにかっこいい出番が欲しいです……」

エヴァ
「いや、お前達の地味キャラ払拭は無理だろ。普通に考えて」

夏美&スケさん
「酷っ！」

クウネル
「では続きまして、次回予告です」

夏美
「さて、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「ボージャックと一対一で対峙する孫悟飯」

スケさん
「白熱勝負が展開ですね！」

クウネル
「……といきたいんですが、次回は一旦地上へ舞台を移します」

エヴァ
「何だよそれ！」

クウネル
「実は作者が今の今まで、原作に存在してたある一シーンを書き忘れてたんですね」

夏美
「そのシーンを次回書くってこと？」

クウネル
「そういうことです」

エヴァ
「こんだけ内容を改変しといて何で今更……しかもまた決着まで延びるし」

スケさん
「そのシーンは一話中でどのくらいの割合を占めるんですか？」

クウネル
「だいたい四割前後になるかと」

エヴァ
「ほら見ろ」

クウネル
「いっそのこと、小説が完結したら編集特別版でも作ります？題して『ネギドラ！改』なんてのは……」

エヴァ
「駄目に決まってるだろ！馬鹿か貴様は！」

クウネル
「冗談ですよ冗談」

注・マジで冗談ですので、読者の皆様も本気にしないでください

エヴァ
「なら初めから書くなよ！」

夏美
「……えっと、次回の投稿予定は金曜日だよ」

スケさん
「皆さんからの感想、お待ちしてますね」

エヴァ
「……コホン、では読者の諸君、次回のネギドラ！も……」

クウネル&夏美&スケさん
「お楽しみに！」

エヴァ
「そういえば作者の奴、最近Ｔｗｉｔｔｅｒを始めたらしいな」

夏美
「あ、そういえばユーザーページの自己紹介にも追記されてた！」

クウネル
「小説の宣伝とか執筆状況のために始めたそうですよ、先週あたりから」

スケさん
「それで、何か成果はあったんですか？」

クウネル
「未だＴｗｉｔｔｅｒ内ではコメント０です」

エヴァ
「って、それじゃ意味無いだろ！」

クウネル
「ですからこうしてこのコーナーでも宣伝してるんじゃないですか」

エヴァ
「じゃあ何か？『読者の皆様、是非是非見てくださいね』的なことなのか？これ」

クウネル
「ぶっちゃけるとそうです」

エヴァ
「絶対成果上がらん気がする……」

注・まあそういうことですので、暇な方はもしよろしければどうぞ

第７９話　我慢出来るかそんなこと！意を決し飛び出す黒髪（前書き）

諸事情で金曜日にパソコンが使用不可になったため、急遽前倒しで本日（木曜日）投稿します。年末年始に向けて書き溜めしてて良かったです（汗）

ではどうぞ！

第７９話　我慢出来るかそんなこと！意を決し飛び出す黒髪

「ミスターサタン！お願いですから出て来てください！」

ところ変わって、会場内のトイレの前

そこでドンドンとドアが激しく叩かれている

叩いている大会プロデューサーの顔は焦りで満ちており、彼の周りを取り巻く報道者達も同様

中からはカラカラと、トイレットペーパーを取り出す音が

「ちょ、ちょっと待て！今拭いてるところだ！」

ミスターサタンは未だトイレへ籠り続けていた

腹痛を偽って急いで入り、かれこれ数十分は経過しているだろうか

流石に痛い痛いだけじゃもう無理があると悟ったか、少し前からこうしてカラカラと鳴らしている

幸いここのトイレは豪華仕様で、一部屋にいくつものトイレットペーパーが配備

紙が無くなるたびにすぐ別の物と交換し、時間を稼いでいた

また、便器の中へは実際に破棄出来ていないため、床の上が使用

済み（？）のそれらで現在溢れかえっている

「早く！早くしてください！ミスターサタンがいないと我々の地球が！」

「うるさい！落ち着いて尻が拭けんだろうが！」

サタンは外にいるプロデューサー以上に焦り、カラカラ鳴らす手を休めぬまま大声で怒鳴った

そうしてる間にまた紙が尽き、次の物と交換する

（あいつらは何をやっているんだ！セルを倒したくらいなんだから、さっさと終わらせてくれ！）

トイレの中にずっといるため、サタンは現在の状況を殆ど把握していない

しかし、いつまで経ってもプロデューサー達からの催促が終わりを見せないこと

また、少し前からより一層、焦りと不安を大きく混在させた声になってきたこと

この二つから、まだ決着が着いておらず、むしろやられ気味になっていることは想像がついた

（じゃなきゃ私の身が……って！？か、紙がもう無い！）

すると、棚にあったトイレットペーパーがもう一個も無いことに

気付く

サタンは頭を抱え、必死に思考を巡らせた

（まずい！まずい！どうする！？）

「ミスターサタン！終わったんですか！？」

「ち、違う！な、流すレバーがどこにあるか分からんのだ！」

だがいくら考えても良策が出てこない

とりあえずああ言ってはみたが、長くは持たないだろう

（だ、だったらいっそのこと、『腹が痛すぎて中で気絶した』と装うのはどうだ！？いや、多分それも無理だ……）

どうしようどうしよう、とうんうん唸り続けるサタン

すると

サーターン！

サーターン！

サーターン！

（……ん？何だあれは？）

どこか離れた場所から、自分を呼ぶ声が聞こえてきた

サタンは伏せていた顔を上げ、そのままその方向を向く

サーターン！

サーターン！

サーターン！

（確かあっちは、観客席がある方向……）

「聞こえますかミスターサタン！会場にいる人達は皆、あなたが出て来るを待っているんです！」

「！？」

それに合わせたかのように、プロデューサーが一層声を張り上げた

サタンは思わず目を見開く

「ですから！ですから早く出て来てください！ミスターサタン！」

サーターン！

サーターン！

サーターン！

（ぐ、ぐぐぐぐぐ……）

そして顔を歪ませ、さらには歯を食いしばった

（ダメだダメだ！客席の奴らが何と言おうと、私はここから絶対に出……）

サーターン！

サーターン！

サーターン！

サーターン！

（ぐぐぐぐぐぐぐぐ……）

会場からの声援と、自らの中で一度は固めた決意

反する二つが胸の内で大きくぶつかり、酷く苦しませる

（私は、一体どうすればいい……くううっ！）

“か、格闘技の世界チャンピオンらしいからな……”

“ミスターサタンは人間の世界チャンピオンなんだ！お前達化け物と一緒にするな！”

“うるさい！名前も知らない奴らまで闘っているんだ、チャンピオンが逃げたんじゃ笑い者だ！”

（！？）

そんな彼の脳裏に浮かんできたのは、セルゲームでのあの会話

チャンピオンとしてのプライド、使命感が、あの時一握りの勇気を与えてくれた

では今回はどうだろうか？

こうして全く出てこない自分を心から信じ、ああも呼び掛け続けているのだ

（……くそおっ！）

無視してトイレの中にい続けるなど、サタンは出来るはずもなかった

すっくと立ち上がり、壁のフックに引っ掛けていたチャンピオンベルトを荒々しく掴み取る

そのまま腰に巻きつけ、トイレのドアへと歩を進めた

「ミ、ミスターサタン……」

ノブに手をかけてドアを開ける

そこには床にへたり込み、涙目で見上げてくるプロデューサーの姿が

「ま、待たせたな……たった今拭き終えたところだ……」

サタンは平静を装いつつトイレから出た

そこからその足で、ゆっくり会場の方へと進んでいく

（か、観客を安心させるために、とりあえず行くだけだ！倒すのはあいつらなんだから！）

「ち、地球は救われた……」

サタンの心の内など露知らず、プロデューサーを含めそこにいた一同は全員胸を撫で下ろした

「会場の皆さん、ご安心ください！我らがヒーローミスターサタンが、悪人退治に乗り出してくれました！」

情報を聞いた実況の男が、マイクを通して会場全体へ報告

直後にそこら中から大歓声が沸き起こる

そんな一般人達はさておき、コタローは仲間達と大いに揉めていた

「はあっ!?悟飯の所へは行くなやて!?」

「そうだ」

神様の神殿から帰還してすぐ、一通りの状況を聞き終えたコタロー

だが、ピッコロが最後に言った事だけは納得出来なかった

「何でや!今悟飯は苦戦中やないか!」

「確かにそうだが、お前一人が加わった所であいつの助けにはならん。ここで大人しくしていろ」

悟飯の援護には俺か、じきにここへ戻ってくるトランクスが行く

そこまで言ったところで、コタローは我慢の限界を迎えた

「……んなことやってみなきゃ分からんやろ!俺は行く!」

「おいコタロー!」

地下へのトンネルへ目を向け、一気に走り出す

ピッコロの制止など、耳に入れる気は毛頭無い

が、その足は別の者によって進行を止められた

「っ!何すんねん楓姉ちゃん!」

ピッコロの横にいた楓だ

コタローが着ていた学ランの裾を、負傷していない左手で掴み取る

「コタロー殿、ピッコロの殿の言う通りでござるよ」

「楓姉ちゃんまで何やねん！俺かて獣化してパワー上げればあいつとも少しくらい……」

「拙者のあの技が、全く通用しなかった……」

「！？」

今度は楓へ食って掛かってきたコタロー

だが次に楓が放った言葉で、目を見開いて息を飲む

「せめて足止めにでもと思って使ったが、ものの数秒で破られたでござる。それも無傷で……」

「でも、楓姉ちゃんは左腕に怪我……」

「それでもまだ気は充分に残っていた、技自体の質は準決勝の際とさほど変わっておらぬ」

「……」

獣化してパワーを上げた自分を、ああも完全に押さえ込んだ楓の忍空密爆球

それを敵は、軽々と無傷で破ったというのだ

ショックを隠しきれず、俯いて黙り込む

「分かったかコタロー、今お前が行ってもただの足手纏いなんだ」

「……」

ピッコロにまたも言われ、コタローは両拳を悔しそうに握り締めた

返事はしてないが、地下へ行こうとするその足はもう止まっている

楓も裾から手を離してみるが、やはりそこから動こうとはしなかった

「ピッコロさん、クリリンさんの処置が終わったです」

そんな時、丁度いいタイミングで夕映がピッコロへと呼び掛ける

コタロー達が口論してる間にも、彼女と木乃香はしっかり治療を続けていた

「よし、それじゃあ他の客席にでも寝かせておけ」

「それなら私が運びますわ」

ピッコロは振り返って指示を出すと、あやかが席を立ってクリリンを抱き上げる

ヤムチャ達の近くの客席へ、彼ら同様ゆっくりと横に寝かせた

その三人は未だ、目を覚ましていない

するとあやかは、元の場所へ戻りながらこう口にした

「それにしても、刹那さん達はまだ着きませんの？」

そう、トランクスと刹那がいつまで経っても姿を見せないのだ

トランクスがピッコロを大きく凌ぐ実力をつけたというのは周知の事実

『出来れば援護は自分よりトランクス』

そう考えていたピッコロは、あやかが言ったのを耳にして改めて気を探ってみた

「……近づいてはいるが、さっきより大分遅いな。刹那の方も随分体力を消耗しているようだ」

「じゃあどないするん？ピッコロさんから先にした方がええかな？」

「いや木乃香、お前の魔力はもうかなり少ない。トランクスをやはり優先したい」

ピッコロは数秒ほど思考し、終わるとそのままあやかへと顔を向ける

「あやか、トランクス達を迎えに行ってきてくれ。お前が担いでここまで運ぶ方がずっと早い」

「わ、分かりましたわ！」

二つ返事であやかは了承すると、すぐに舞空術を使ってその場で浮上

一気に地下へのトンネルへ飛んで行こうとするが

「……待ってやあやか姉ちゃん、俺も行く」

「え？」

さっきまでずっと黙っていたコタローが口を開き、声をかけて呼び止めた

「向こうは二人いるんやから、こっちかて二人の方がええやろ？せめてこれくらいはしたいんや……」

「そういうことでしたら私は構いませんが……」

あやかはチラリをピッコロに目配せ

無言のまま頷く彼の姿が目に入った

今いる面子の中で五体満足かつ飛行＆運搬出来るのは二人だけ

夕映も飛べると言えば飛べるが、魔力をそれなりに消耗していて人を運ぶのにはやや心もとない

ならば確かにその方が都合が良い、と彼も判断したようだ（ハルナの能力をピッコロはまだ知らない）

「……では参りましょう、あまり時間がありませんわ」

飛翔するあやか、改めてトンネルへ飛んでいく

それを追うようにしてコタロー

二人は吸い込まれるようにして、トンネルの中へ姿を消した

「なああやか姉ちゃん、刹那姉ちゃん達はホントにこのトンネルを通っとるんか？」

「木乃香さんのアーティファクトで治療を受けた後、刹那さんは地下へ行く時このトンネルへ入りましたわ。だから帰りもここのはずです」

「そっか……」

もし間違えていたら大きなムダ足になってしまう

そのことを危惧したのかコタローが尋ね、あやかがこうして返答していた

それを聞くとコタローは、しばしそのまま黙り込む

何か思いつめたような、そんな表情をしていた

「どうしたんですの？そんな顔をし……あ、刹那さん達ですわ！」

気になったあやかは事情を訊こうと口を開くが、視界に刹那達が入って急遽中断

「刹那さーーん！トランクスさーーん！」

大きな声で二人の名を呼び、目の前まで来た所でブレーキをかけた

コタローも同じくその場で止まる

「いいんちょさん！」

「コタロー君も……」

「二人でお迎えに参りましたわ、地上ではピッコロさんや木乃香さんがお待ちです」

あやかは簡単に、自分達が来た目的を説明した

二人ともそれを聞き、思わず安堵の表情

「助かりました、もう気が限界に近かったので……」

「ありがとう、二人とも」

「こうしちゃいられませんわ。さ、私達に掴まっ……ちょっと、何をしてますの？」

あやかは早速運ぼうと、二人へさらに近づいていく

だがコタローが動かないのを目にし、目を吊り上げて叱咤した

コタローは首だけあやかに向けると、静かにこう言葉を漏らす

「……今のあやか姉ちゃんなら、二人同時くらい何とかなるやろ？」

「は？」

「それが無理でも刹那姉ちゃんはまだ飛べるんやから、先にトランクスさん一人でも問題はない……」

「ちょ、ちょっと！一体何を言ってますの！？」

慌ててあやかは詰め寄るが、コタローは力を加減してトンと突き飛ばした

「きゃっ！」

「ゴメンあやか姉ちゃん……でもやっぱ俺、親友苦しんどるのに何もせえへんっちゅーのは無理や」

コタローは力を込め、気を出して全身に纏う

あやかを視線から切り、地下への方向を真っ直ぐ見据えた

「……悟飯のとこ、行ってくる」

最後にこう一言

「ちょ、待ちなさい！きゃああっ！」

大風を起こし、目にも止まらぬ速さで飛び出していった

一秒もしないうちに、コタローの姿は彼方へ

残されたあやかは、ただ唖然とするばかり

「そ、そんな……」

“何が起こったあやか！コタローの気が突然デカくなって遠ざか…
…おい！聞いてるのか！”

テレパシーで飛んできたピッコロの言葉も、暫く返すことが出来
なかった

第７９話　我慢出来るかそんなこと！意を決し飛び出す黒髪（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「さてクウネル、今回のゲストは誰なんだ？」

クウネル
「はい、今回はこのお三方をお呼びしています」

ジャッキーチュン
「やあやあ諸君、始めましてじゃな」

古
「むむ？誰アルかこのおじいちゃん」

アスナ
「あれ？古ちゃんも知らないんだ」

クウネル
「一週目にも登場しましたアスナさん、あと初登場のジャッキーチュンさん&古菲さんです」

エヴァ
「いや、バカイエローはともかく、そこのジジイは初登場じゃないだろ……」

アスナ

「え？何言ってんのよエヴァちゃん、ジャッキーチュンさんなんて今まで一回も出たこと無いじゃない」

古
「そうアルよ！」

エヴァ
「……お前達、こいつが誰か分からんのか？」

アスナ&古
「？」

エヴァ
（うわ、やっぱりこいつら真性のバカだ……）

クウネル
「最近古菲さんは、本編では出番がありませんね」

古
「いやー、ある意味完全離脱しちゃたアルからなー」

アスナ
「え、何？古ちゃん何かあったの？」

エヴァ
「頭の上を見ろ、頭の上」

アスナ
「ん？……え！？なにこれ！古ちゃんが天使みたいになってる！」

クウネル
「本編中でお亡くなりになったんですよ」

アスナ
「私が気失ってる間にそんな大事件が起こってんの!?」

ジャッキーチュン
「よくよく考えればアスナちゃんの方が全然出番無いのう」

エヴァ
「ホントだな、本編じゃかれこれ二ヵ月半は出てない」

アスナ
「まあ、その代わりにここへ出れたからまだマシだけど……あーあ……」

古
「元気出すアルよアスナ、死んだ私と違ってまたいつか出番は来るアル」

アスナ
「古ちゃん……」

クウネル
「古菲さんは今後もちゃんと出番ありますよ、大会編が終わったらあの世編やるので」

エヴァ
「ああ、作者が言ってたなちょっと前。孫悟空もメインで出るんだったか?」

クウネル
「ですね」

アスナ
「……何よそれ、古ちゃんばっかり優遇されてさ……いいないいなー」

エヴァ
「おい、こんな場所で拗ねるな」

アスナ
「しかも私なんか、いいんちょからリンチ受けるし……」

エヴァ
「座り込んで指で『の』を書くな。ていうかあれはお前が原因だろ、確かにやりすぎた感はあるが」

アスナ
「私達の中で一人だけそっち系のフラグ立てるし……」

エヴァ
「仮に天津飯と立ってもお前は全然嬉しく無いだろ」

アスナ
「そりゃそうだけど……」

クウネル
「ほらアスナさん、コーナーを進めますから立ってください」

アスナ
「へいへーい……」

エヴァ
（こりゃしばらくはダメだな……）

クウネル
「というわけで今回の話ですが……」

エヴァ
「サタンのあれ、やる必要あったのか？」

クウネル
「……ちゃんとやっておきたかったらしいです」

エヴァ
「まあコタローのはまだいいとして……孫悟飯側の描写が今回０だったんだぞ？」

注・次回はたっぷり書くのでご了承ください

古
「でも今回は文字数が大分多かたアル」

エヴァ
「前回が少なめだったしな、ちょうど釣り合いが取れたって感じだな」

クウネル
「では続きまして、次回予告です」

ジャッキーチュン
「さて、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「超サイヤ人２への覚醒の片鱗を見せ始めた孫悟飯」

クウネル
「しかしあと一歩、もう少しだというのになることが出来ず苦戦を強いられます」

古
「そんな悟飯のもとへ、無謀にもコタローが援護に駆けつけるアル！」

ジャッキーチュン
「果たして悟飯、コタローの運命は！そして悟飯は覚醒なるのか！？」

アスナ
「乞うご期たーい……あーあ……」

エヴァ
「まだ拗ねてるのかよ……ていうかいい加減元に戻れ」

クウネル
「次回の投稿予定は来週の火曜日です」

ジャッキーチュン
「日時変更等があった場合、活動報告及びＴｗｉｔｔｅｒでお知ら

せするぞ」

古
「感想どしどし募集中アル！」

エヴァ
「では読者の諸君、次回のネギドラ！も……」

クウネル&ジャッキーチュン&古
「お楽しみに！」

アスナ
「あーあ、なんで私だけ……そりゃ葉加瀬とかよりはマシと思うけど……」

エヴァ
「ところでちょっと気になったんだが」

クウネル
「何ですか？」

エヴァ
「相坂さよはいつ出るんだ?リク貰っただろ?」

ジャッキーチュン
「もうちょい先みたいじゃよ」

注・先にやりたいネタ（リク）が幾つかあるので……

古
「出たらさよ坊、きっと喜ぶアル」

アスナ
「私、原作じゃメインヒロインなのに……何でこんな扱い……」

エヴァ
「ええいっ！いい加減黙らんか！」

第８０話　またも突入二対一　ボージャックは何を思う（前書き）

今年もあと僅かですね、自分も色々と大忙しです。これかこの次が２０１０年最後の分になるかと思います、ハイ。
これからもよろしく、ではどうぞ！

第８０話　またも突入二対一　ボージャックは何を思う

「だあああああっ！」

「ふんっ！」

空中で肉弾戦を行う二人

悟飯のストレートが飛び、それをボージャックが正面で受け止める

そのまま次々と放たれてくるラッシュも、全て防御に成功

「せやあああああっ！」

「当たるか！」

今度は一転して右の回し蹴りが来るも、左腕でこれまた防御に成功した

そこからボージャックは空いている右手を引き

「攻撃ってのはこうやんだよ！」

「くっ！」

握り拳を作って悟飯の顔面目掛けて放つ

悟飯は辛くも避けるが、そこで体勢が崩れた

「ばあああああっ！」

「うわあああっ！」

ボージャックは左腕で受け止めていた脚を押しのけると、すぐに気合砲

腹の中心へ当たり、悟飯は数メートルほど飛ばされた

迎撃されてはたまらんと即座に体勢を立て直し、再び戦闘態勢へ

「楽しませてくれるじゃないか、さっきとは大違いだ」

ボージャックは笑いを見せながらも、不意を突かれぬようしっかりと構えをとる

目の前の相手のパワーアップは、決して間違いじゃない

少なくともさっきまで戦闘していたベジータより、実力は一回り二回りも上まで来ている

それを彼は感じ取っていた

（が、まだフルパワーの俺には及ばない……せいぜい楽しませてもらうぜ）

既にボージャックは、己の全力間際までパワーを開放している

そうでもしなければ、この勝負は到底面白いものには成り得ないと理解したのだろう

もっとも悟飯はそれに対し、決して嬉しくは思っていないのだが

（くっ、ダメだ……このまま戦い続けてもジリ貧、勝ち目は薄い……）

パワーが上がった感覚は悟飯にもあった

しかし、これではまだ足りないと不満を抱いてもいた

（セルとの時のようになれば、勝てない相手じゃないのに……）

悔しいあまり、顔をしかめて奥歯を鳴らす

（もう少し、もう少しなのに……）

無論、長々とそんなことを許すボージャックではない

「来ないんなら……こっちから決めてやる！」

真っすぐ目の前にいる自らの敵、悟飯を見据えて正面から殴りかかった

再び顔面を狙って飛んできた右拳

悟飯は瞬時に後退してギリギリでかわす

「おらおらおらおら！どうしたどうした！」

攻めの手は止まらず、悟飯以上に激しいラッシュを今度は繰り出してきた

何とか対応していく悟飯だが、ボージャックほど綺麗な防御ではない

「ぐっ！うぐっ！」

何発かに一発は、しのぎ切れず当てられてしまう

急所にこそ喰らわずに済んでいるが、着々とダメージが蓄積していた

「くそおおっ！」

このままではマズい、と悟飯は意を決して反撃

攻撃が当たるのを覚悟で防御を放棄、捨て身のカウンターパンチを放つ

「ぬ！？ぐふぇっ！」

奇襲は成功、ボージャックの頬を拳が捉えた

「ごはあっ！」

しかしながら、悟飯も腹へ一撃を貰う

攻撃力はやはりボージャックが上であり、ダメージに大きく差が

あった

悟飯は一旦、さらに上空へ退避

距離を稼いでこの状況の打開を図ろうとする

だがボージャックの反応は速く、ぴったりとその後を追ってきた

「はああっ！」

「無駄無駄ぁっ！」

威嚇的な意味を込めて気弾を数発撃ってみるが、やはり難なく弾かれる

「そらあああああっ！喰らえええええっ！」

「力で負けてても……」

距離はみるみる詰められ、ボージャックは勢いよく拳を振るった

それを見て急に、何か考えたのか悟飯は動きを止めて向かい合う

そしてタイミングを見計らい

「ぬ！？しまっ……」

ボージャックの攻撃をすんでのところで避け

「勝つ方法はある！」

両腕を使い、その太く隆々をしたボージャックの右腕を絡め捕った

この行動は予想していなかったのか、向こうも反応が遅れる

その一瞬の隙を突き、悟飯は両腕に思い切り力を入れた

「だりゃあああああっ！」

「ぬおおおおっ！？」

誰かに教えられたわけでもないというのに、綺麗に決まる一本背負い

背負い投げは、小さな者が大きな者を投げるのにはうってつけの技

これは悟飯とボージャックとの体格差に、見事なまでに当てはまっていた

投げ飛ばされたボージャックは、無防備な自らの姿を悟飯へと晒す

「今だ喰らえ！魔閃光！」

そこへ間髪入れずに、悟飯の必殺技の一つが撃たれた

威力は流石オリジナル、準決勝でのネギのそれを遥かに凌ぐ

ボージャックはそれを避けることは出来ず

ドグオオオッ！

「ぬぐわあああああっ！」

魔閃光は直撃、爆発音と共に煙が上がった

悟飯はそれに歓喜するも、すぐにまた気持ちを引き締める

警戒は一切緩まさず、注意を辺り全体に張り巡らせた

あれではまだ、ボージャックを倒せてはいない

ダメージはあるだろうが、充分戦うことが可能であろう

相手の優れた耐久力から、悟飯はそう推測した

想像通り、数秒もすると煙の中から

「はあっ、はあっ、はあっ……」

ボージャックが五体満足のまま姿を現した

ダメージは確かにあるようだが、大きく目立った損傷はそこまで見られない

息の乱れをやや見せたが、これもすぐに収まった

「今のは結構効いたぜ……気でガードしなけりゃ危なかったかもな」

あの時、避けるのは無理と咄嗟に判断を下したボージャック

ならば仕方ない、と気を全身に覆わせてダメージをある程度軽減させたのだ

「面白くなってきたじゃないか、なあ？」

（さっきみたいなのは、もう通用しないだろう……次は向こうも完全に警戒してくる）

ならば次はどう戦う？

悟飯は持ち前の頭を使い、必死に策を考える

が、良い方法がまるで浮かばない

「どうした小僧？もう手の内を無くしたのか？」

対するボージャックは、自分から攻めては来ずに様子をうかがっている

それでも、再び拳を交わすことになるのは時間の問題だった

（くそっ！でも、僕がやるしかな……え？）

すると悟飯は突然、ある気を一つ感じ取る

ベジータや真名の気でもない

比較的大きいその気は、どこからかこちらへ真っすぐ向かってきていた

（ピッコロさん？それともトランクスさん？いや、それにしては気がそこまで大きくない……まさか！）

悟飯は慌てて、その気を感じた方向を向く

直後

「波ーーーーーー！」

「……む？」

かめはめ波がそこから飛んできて、そのままボージャックに襲いかかった

ボージャックは横目でそれを確認し、少々浮上

最低限の動作で直撃を回避する

「くそ！もうちょいやったのに！」

撃った本人はそれを見て悔しそうな表情

「また援軍か……ん？確かあいつはあの時の……」

「大丈夫か悟飯ー！俺も戦いに来たでー！」

「コタロー君！」

自分へと呼びかけてきたその声と、目に入った姿

獣化したコタローと分かり、悟飯は思わず叫んだ

「き、来ちゃダメだコタロー君！逃げてーー！」

（これは……ひょっとして使えるか？）

それを見てボージャックはまた、悪しき笑みを浮かべる

「あの馬鹿野郎っ！」

「ひっ！」

一方地上では、あやかからようやく事情を聞いたピッコロが激昂していた

その凄まじい怒号に、のどかやまき絵は怯えを見せる

「ただの足手纏いにしかならんと、あれほど言っただろうが……」

ぶん殴ってでもあそこから連れ戻したい

そう思うピッコロなのだが、今の身体じゃ無理なことは目に見えている

「……木乃香さん、大丈夫ですか？」

「うん、平気やよ夕映……もっとペース上げな……」

あやかに運ばれたトランクスは現在、木乃香と夕映から治療を受けている最中

完治まではあと二、三分ほど要しそうだった

「ごめんね木乃香ちゃん、僕なんかのために無理をさせて……」

「ええんよ、無理なんてしてへんから……このくらいの傷なら、治すのなんてラクチンや」

そうは言う木乃香だが、実はもうかなり限界である

声に最初ほどの明るさがなく、額にも汗

さらには、治癒魔法による回復速度まで減速を見せていた

「木乃香さん、この際もうカードでネギ先生から魔力を……」

「ダメや、ネギ君かて疲れとるもん……これはウチ自身の力だけでやらな……」

「木乃香さん……」

木乃香の目には、未だ決意の炎が灯る

（守られたり、助けられたりばっかりは嫌や……ウチもこうして、みんなを……）

ブワッ

「え？」

どこからか風が巻き起こった

夕映は思わず声をあげたが、すぐに理由は判明

その風は、木乃香の身体から溢れ出た魔力のそれ

「木乃香……さん？」

「ピッコロさん！トランクスさんの治療、終わるまであと一分！」

声にも明るさが少々戻り、治療を続けながらピッコロへ木乃香は言う

（木乃香の魔力が戻った？いや、正確には『どこからか新たに出てきた』か？）

魔法使いのサラブレッドとして、奥底に眠っていた潜在的な魔力

それがここにきて、僅かながらも体面的に現われてきた

ピッコロもそれを肌で感じ取る

「……よし！急げ木乃香！魔力が持つようなら、その次は俺も回復させろ！」

「了解や！」

杖から出る光は、より優しく、より暖かく

見る見るうちに、トランクスの外傷が消えていった

（悟飯、コタロー……俺とトランクスもすぐに行く、だからそれまで持たせろ！）

ピッコロは強く願い、彼らの姿をモニターで見つめる

（死ぬな！絶対に！）

「がはあっ！」

「コタロー君！」

腹へは拳、口からは血

瞬く間に接近され、強烈な一発をコタローはぶち込まれた

（じゅ、獣化して防御上げてもこれか……）

予想を遥かに上回る一撃

驚愕の表情のコタローを見て、ボージャックは確信する

（やはり……戦闘力はあのベジータとかいう奴よりかなり下、しかも……）

「このおおおっ！」

そこへコタローが拳を顔面目掛けて振るうが、難なく横へ回避

（銃女のような変わった技も使えそうにない……もらったな！）

拳を引いてコタローの顔を鷲掴みにし

「だあああああああっ！」

「おわあああああっ！」

真下へ力いっぱい投げつけた

「はあああああっ！」

そのまま追撃の気弾を撃ち出す

「コタロー君危ない！」

「くっそ！」

しかしコタローは身体を捻らせ、何とかギリギリで回避

下の地面で気弾は爆発した

「ほう、あれをかわしたか……褒めてやるぞ、犬ガキ」

（よく言うわ、わざとよけやすく撃ったくせして……）

コタローは手の甲で口元の血を拭い、ボージャックを見上げる

（さて、こっからどう悟飯を援護すっかな……）

両者の間にある、この多大な力量差を目の当たりにしながらも

（今あいつと戦えるのは俺と悟飯だけや……やるだけやったる！）

コタローの闘志は消えてはおらず、激しく燃えていた

第８０話　またも突入二対一　ボージャックは何を思う（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「今回で本編は８０話突破だな」

クウネル
「はい、頑張って週二ペース継続中です」

エヴァ
「んで、今回のゲストはどうするんだ？例のお蔵入りシリーズか？」

クウネル
「いえ、今回は普通に水竜さんからのリクエストを採用します」

エヴァ
「そうか、で、今回のゲストは誰なんだ？」

クウネル
「はい、今回はこの四名です」

亀仙人
「うほおおっ！ぴちぴちの子の写真ばっかしじゃ！」

カモ
「そうだろそうだろ、なんたってオレっちが兄貴の生徒の中から厳選したんだからな」

ブルマ
「ちょっとあんたら！何こんなところまで来て盗撮写真見てんのよ！」

アーニャ
「そうよ！このおっぱい星人！」

クウネル
「スケベコンビの亀仙人さん&カモさんと、ツッコミとしてお呼びしたブルマさん&アーニャちゃんです」

エヴァ
「待て待て待て待て待てーーー！」

クウネル
「どうしました？別にメンツを間違えたりはしてないですよ、茶々丸さんの時みたく」

エヴァ
「そういえば朝倉の時も何気に間違えてたよな……ってそうじゃない！このジジイだ！」

亀仙人
「ん？わし二回目じゃよ」

エヴァ
「どこの口がそれを言うか！思いっきり前回も出て、これで合計三回目だろうが！」

亀仙人
「いやいや、だってあれはジャッキーチュンじゃろ？わしじゃないし」

エヴァ
「同じだ！」

カモ
「いいじゃねえかよエヴァンジェリン、『亀仙人』としては二回目なんだから」

クウネル
「そうそう、二連続なら茶々丸さんもやったことですし」

エヴァ
「あーはいはい、分かった分かった。さっさとコーナー進めろって言うんだろ？」

クウネル
「まあそういうことです」

アーニャ
「というわけで早速行くわよ！」

エヴァ
「やけにテンション高いな、あいつ」

カモ
「まあ前回出た時があんなのだったしな、リベンジ的なのをしたいんだろうぜ」

クウネル
「さて、今回の話ですが……」

アーニャ
「予告通りボージャックとの戦闘描写が多かったわね、あとちゃんとコタローも参戦したし」

エヴァ
「おい、いきなりお前から入るな。最初にコメントするのは形式上私だぞ」

アーニャ
「文字数は若干減ったけど、まあ充分許容範囲だと私は思うわ」

エヴァ
「おい」

アーニャ
「あとネギが全然出てきてないのよね、まあどうせ一人でメソメソ泣いてるんでしょうけど」

エヴァ
「おい」

アーニャ
「ねえカモ、ネギの様子とか本編で見てないの？あんた描写が完全に無くなってるけど」

カモ

「客席にいっぱなしだから見てないけどよ……アーニャ嬢ちゃん、も少し大人しくしてた方が……」

エヴァ
「おい」

アーニャ
「何言ってんの！私にとってこれはリベンジなのよ、この中で一番目立ってやるんだから！」

エヴァ
「おい」

アーニャ
「あと強いて言えばそうね……そうそう、あのボージャｋｋ」

エヴァ
「おい」

ガシッ

アーニャ
「ちょっ、なに人の頭掴んで……ひっ！」

エヴァ
「身分をわきまえろ、アンナ・ココロウァ。これは私のコーナーなんだぞ」

アーニャ
「は、はいっ！」

ブルマ
（うっわ、エヴァちゃん怖……）

カモ
（やっぱりあのドスの効いた睨みは、ピッコロの旦那のとなんら見劣りしないぜ……）

亀仙人↑エヴァ達のやりとりを見てない
（この泣きボクロの子とか最高じゃのう、特にパイパイ）

エヴァ
「そこをどけ、お前はもうしばらく喋らんでいい」

アーニャ
「わ、分かりましたっ！」

エヴァ
「というわけでクウネル、次回予告だ」

クウネル
「はいはい。さて、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「再び二対一になったボージャックとの戦い」

クウネル
「はたしてコタロー君は悟飯君の役に立つんでしょうか？」

カモ

「厳しいよなやっぱ、早くピッコロの旦那やトランクスの兄さんが復活してくれなきゃ！」

ブルマ
「トランクスが加わればあんな奴、ちょちょいのちょいよ！」

亀仙人
「未だ戦場に放置されたままのベジータ達も気になるのう……」

アーニャ
「……」

エヴァ
「一応次回の更新予定は金曜日なんだが……」

クウネル
「年末年始ですからね、大幅に変わってしまう可能性大です」

ブルマ
「前回のにも書いたけど、そうなったら活動報告やＴｗｉｔｔｅｒで知らせるわ」

カモ
「感想等もよろしく頼むぜ！」

亀仙人
「というわけで読者のみんな、次回のネギドラ！も……」

エヴァ&クウネル&ブルマ&カモ

「お楽しみに！」

アーニャ↑小声
「……しみに」

エヴァ
「ところで小動物、貴様まだそんな写真持ってたのか？」

カモ
「おうよ！オレっちの秘蔵写真は百八枚までぁ……」

ビリッ！ビリッ！

ブルマ
「処分ね」

カモ＆亀仙人
「あああああああああっ！」

エヴァ
「またこのパターンか……」

カモ
「オレっちの魂の結晶がーーー！返せーー！」

亀仙人
「もしくはわしを、こいつ（カモ）の世界のぴちぴちギャルと共演させろーーー！」

エヴァ
「貴様はどさくさに紛れて何を言っている！ていうかしばらく来るな！」

第８１話　さらに倒れ伏す仲間　戦いは最佳境へ突入（前書き）

カゲシンです。こんなに遅くなりまして、大変申し訳ありませんでした。二〇一一年、ようやく一本目の投稿です。

ではどうぞ！

第８１話　さらに倒れ伏す仲間　戦いは最佳境へ突入

「やっぱり無茶だよコタロー君！君だけでも逃げて！」

突然悟飯の目の前に参上した親友、犬上小太郎

共に戦おうとする彼を、悟飯は声を張り上げて止めようとする

先程のでも分かるとおり、力の差は歴然

超サイヤ人へと変身したベジータでも勝てないのだから、それは当然なこと

これ以上無意味に仲間が傷ついていくのが耐えられなかった

「アホ、このままじゃあいつに絶対勝てへんやろ」

だったらこうするしかない

コタローはそう言って悟飯の抗議を棄却すると、再び構えて戦闘態勢に入る

「心配すんなって、俺はネギよか頑丈やからそう簡単にはくたばらん」

「で、でも！」

「俺が弱いっちゅーんやろ？」

「！」

「もちろん自覚はしとるで？けどな……」

身体はボージャックに向けたまま、目は横に流して悟飯へ

「五体満足のまま何もしないのは性に合わんねん、親友のピンチに手を貸さへんこともな」

「コタロー君……」

「時間稼ぎくらいはやったる……その間に少しでも気ぃ溜めて、どデカいのぶちこんだれ！」

「……分かった」

悟飯もコタローの想いを汲んだのか、眉をひそめながら小さく頷いた

「ほな、行かせてもらうで！」

コタローはさらに全身から気を放出

今にも飛びかからんとするような気迫がボージャックへ向けられる

（気功波の類は、楓姉ちゃんの話を聞く限りやっぱり厳しい……となればリスク覚悟で接近戦！）

しかも時間稼ぎが目的となると、たんなるパンチやキックじゃ話にならない

（手数の多さで攻める！狼牙風風拳や！）

ボージャックへと放つ攻撃を決めると、いきなりこの段階で両手に狗神

両手がそれらでガチガチに固められ、黒く染まった

「狼牙ふ……ん？」

だが、コタローは動きを止める

ボージャックの様子が少し変

両掌をそれぞれ別方向の斜め下に突き出し、気を集中させている

その向きが悟飯やコタローならまだ分かる

しかし、それらはまるで見当違いの方向に向けられていたのだ

（何や？地面に当てて目くらましにするにも、ここから地面までの高さは……）

かなりあるため、目くらましとしての役には立たない

それが分かっていたコタローは、余計疑問を感じずにはいられない

悟飯も同じくで、ボージャックの動向に気を配りながらも思考した

（発射直前にこっちへ狙いを合わせても、そのタイムラグがあればコタロー君でも何とかかわせ……）

「それじゃあ、もう戦えないゴミ二人にはご退場願おうか」

「「！？」」

が、この一言で全てが氷解

二人とも振り返り、確信に至る

ボージャックのそれぞれの掌の先には、その二人がいた

気絶した龍宮真名と、満身創痍で動けないベジータがそれぞれ

「ばあああああっ！」

そして悟飯とコタローの横を、気功波が高速で通り抜ける

寸分狂わず、戦えぬ二人を捉えんと真っすぐ

「あああっ！」

「しもうた！くそっ！」

少年二人は迷わず飛び出した

無防備な彼らがあれを喰らえば、即死したっておかしくない

悟飯はベジータを

コタローは真名を助けんと、それぞれを狙う気功波を急いで追った

「く、くそったれ……」

意識があるベジータは当たってたまるかと抗うが、やはり身体が
動いてくれない

「……」

真名に至っては、近づいてくるその存在に気付きさえもしていない

「「間に合えーーーーー!!」」

二人は叫び、気合いで飛んで気功波を追い越す

「ベジータさん!」

悟飯はベジータを高速で抱き上げ、すぐによけた

それにやや遅れてコタローも

「たつみー姉ちゃん!大じょ……」

が、僅かに間に合わず

ボガアアンッ!

「コタロー君!」

「ぬがあああああっ！」

真名への命中は回避出来たものの、代わりに自分の左脚を直撃

爆発音を聞いて振り返った悟飯は叫び、コタローはそれ以上に苦痛の雄叫びをあげる

飛び去ろうとしたのだが痛みに耐え切れず、さっきまで真名がいたすぐ近くへ墜落した

コタローの腕の中にいた真名はその際、弾みで彼のもとから離れて数メートル転がる

「そおおおおおらっ！」

ボージャックはそんなコタローへ即座に接近

というより撃ってすぐ、既に彼はコタローのあとを追っていた

ニードロップの体勢で急直下

その落下地点にあったのは

「ぐわあああああああっ！」

コタローの右腕

バギャンと音をあげ、二の腕がＶの字にへし折れる

「もう一本！」

ボージャックは体勢を戻すと、続いて狙うは左腕

右足を高々と上げ、踏みつけにかかった

「くそおっ！」

が、身体を横に転がせてこれは何とか回避したコタロー

そのまま立ち上がって反撃を試みようとする

「うぐっ！」

しかし左脚が言うことを聞かず、立てない

見れば膝から下は多大に焼けただれ、ロクに動いてはくれなかった

逆にさらに体勢を崩したコタローへ

「おらあああっ！」

ボージャックの拳が飛んでくる

「ぐぼおおっ！」

殴り飛ばされたコタローは数回地面を跳ね、真名の上へ覆いかぶさるようにして倒れ込んだ

（よし、もうこれで奴に援護は出来まい）

気功波が左脚に当たってから、この間僅か三秒

悟飯はコタローと位置を離されており、こっちの救出は間に合わず

自らの策そのままに、ボージャックはコタロー潰しを完遂した

「さて、今度こそ追いつめたぞ」

ボージャックは悟飯を見据え、ニヤリと不気味に笑う

その悟飯は既に、ベジータを別の場所に隠して臨戦態勢に入っていた

さっきよりもさらに、己の怒りでパワーを上げて

「コタロー君にまで、そんな酷いことを……」

(さらにパワーが上がったか？ふん、まあ気にするほどではないな)

まだ互いの優劣を覆すほどじゃない

そう分かるとボージャックは、握っていた両拳をパッと開く

そこへ気を込め、集束し

「ずあああああっ！」

即座に悟飯の前へ突き出して気功波を発射した

一点に集まる気を感じ取っていた悟飯は、難なくそれを避ける
舞空術で飛翔し、地面と平行して真っすぐ飛ぶ二筋の光線は通り過ぎていった
だがボージャックも、あれが当たるとは微塵も思ってない
「まだまだあああああっ！」
さっきの攻撃は、空中戦への誘導
飛び上がった悟飯に合わせ、自らもすぐに舞空術で飛んだ
（お、いたいた……）
そして空中という高位置から、悟飯が隠していたベジータをすぐに発見する
確認すると再び右拳を作り、ストレートを悟飯目掛けて放った
それを悟飯は両腕を交差して防ぐが威力は殺しきれず、骨が軋むような痛みを覚える
これにはたまらず、やや後退して距離を取った
「だだだだだだだあああっ！」
続いて左拳も作り、ボージャックはさらに猛攻
一撃一撃がとても重いそれらを、お構いなしに次々と打っていく

「だだだだだだあああっ！」

対する悟飯は後手に回らず、こちらもラッシュを繰り出して対抗

パワーと同様にスピードも上がっているのか、前と比べると充分やり合えていた

「やはり流石だな小僧、本当に俺の部下にならなくていいのか？」

「お前の部下になんか、死んでもなってたまるか！」

悟飯はさらに怒り、パワーとスピードが上がる

それでもまだ、フルパワーのボージャックを劣勢に追い込むまでには至らず

しかしながら悟飯の実力には、ボージャックは本当に感心していた

（あと数年したら肩を並べられてもおかしくなかった……だからこそ、今ここでその芽を摘み取る！）

ボージャックの攻撃に、より一層力が込められる

「だだだだだだあっ！」

「だだだだだだあっ！」

それを悟飯が迎え撃つ

だがやはり、戦況はボージャックの優勢へどんどん傾いていった

勢いに押され、徐々に悟飯は後ろに下がっていく

「ごばあっ！」

そして悟飯の腹へ、ボージャックの会心の一撃がついに決まった

「おらおらおらおらあっ！」

そこからはもう、ボージャックの独壇場状態

決壊したダムの水の如く、彼の怒涛の連続攻撃が押し寄せる

「ぐあっ！ぐがっ！うがあっ！」

「そりゃあああっ！」

そして次に気合砲で吹っ飛ばし

「ふんっっ！」

「ぐわあああああっ！」

最後に背中に回りこんで背中へハンマー打ちを叩き込んだ

これもさっきの腹への一撃同様、会心の当たり

痛みに顔を歪ませ、悟飯は真下へ垂直に落下

下には無数の瓦礫

まるで誰かを突き刺さんとするかのように、鋭く尖った部分が幾つも天を向く

「ぐ、ぐぐぐうううううっ！」

その状況を目視出来ていた悟飯は、気を操って懸命にブレーキ

突き刺さる数メートル先のところで、何とか停止した

「！！」

直後、悟飯は後ろから何かを感じて横に飛びのく

そこへボージャックの光球が、コンマ数秒の差で通り抜けた

コタローに撃ったのと比べ、段違いの速さ

「小僧、やはりお仲間がいなけりゃ戦うのは無理か？」

「黙れ！」

ボージャックの言葉ですぐにそちらへ向き直し、悟飯は吼える

（分かるぜ、俺には……お前は明らかに焦っている、俺達二人の間にあるこの実力差に）

その様子を見て、ボージャックの口の端がクイッと上がった

（このままじゃ勝てないと、薄々感じ始めたな……確かにそうだ、このまま戦ってればまず俺が勝つ）

それに、とボージャックは悟飯から視線を外す

（万が一に備えての”保険”もまだ三つもある……）

見やったのは、コタロー達戦線離脱者三名

戦えず、動けずという格好の的

そんな彼らは、ボージャックにとって正に保険そのもの

何かあったとしても、彼ら目掛けて気功波の一つでも放ってやればいい

自分の敵はこんな時、何が何でも助けに飛び出していくのだから

（その隙を突けばなんてことはない、楽にぶっ潰せる……）

コタローを追撃して殺さなかったのも、理由はそれ

死なせれば保険になり得ないのは、当然彼も分かっていた

（これで盤石、俺の勝利は決して揺るがない……）

「うおおおおおおっ！」

ボージャックは、この戦いでの勝利を確信

そこへ、悟飯が猛然と突っ込む

「はっはっは！来い小僧！」

「負けて、たまるかあああああっ！」

両者は再び、遥か上空で拳を交わし始めた

しかしこの、二段構えであったボージャックの勝利の方程式

これには一つ、重大な穴が

「う、うう……」

「……た、たつみー姉ちゃん？」

「奴は……奴と孫悟飯は、今どうなっている？」

再び開かれた三白眼

それとほぼ同時に、口から声が漏れる

そしてそんな少女の上に倒れていた少年

彼はさっきの一撃で気絶はしておらず、声を耳にして顔を傾ける

さらに、そこからやや離れた場所でも一名

「どいつもこいつも、俺を舐めやがって……」

サイヤ人の王子が身体に鞭を打ち、ゆっくりとその身を少しづつ起こしていた

そう、彼ら三人はまだ

「た、頼みがある……聞いてもらえるかな？」

「……頼み？」

「こ、このままでは……このままでは終わらせんぞ……」

ボージャックの利用対象、即ち”保険”へ完全になってはいなかった

第８１話　さらに倒れ伏す仲間　戦いは最佳境へ突入（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「おい、普通に進めるな」

クウネル
「あ、やっぱりここでダメ出しするんですか？」

エヴァ
「当たり前だ、今回は明らかに酷すぎる」

クウネル
「……読者の皆様もお分かりでしょうが、今回作者が大幅に更新を遅らせてしまいました」

エヴァ
「大晦日に更新予定だったというのに、何で一週間半も後になるんだ……まったく」

注・すいません、まさかここまで遅れるとは自分でも思わなくて……

エヴァ
「一応理由を聞いてやる、一体何がここまで事態を最悪にした？」

注・活動報告にも書きましたが、年末年始の用事が……

エヴァ
「それでも三日四日には何とか出来るだろうが」

注・大雪の影響で電話線が切れまして……

クウネル
「確かに今冬の雪は凄かったですね」

注・あとは、その……冬休みの課題を片付けてたらこんなに日が経ってたというか……

エヴァ
「なるほど……つまり計画的に課題を片付けていれば、あと二、三日は早く投稿出来たと」

注・はい、本当にすいませんでした

エヴァ
「しかしこれで、連載一周年&百話はほぼ絶望的だな」

クウネル
「そこは作者も自覚してるみたいです、ペースを守れてたらあと二話は投稿出来たわけですしね」

注・自分が情けないです……

エヴァ
「だからってさらに更新ペースがグダグダになるのは流石にアレだぞ？」

注・そこは何とかここから立て直したいと思います、というかします！

クウネル
「ではコーナーに戻りましょうか」

エヴァ
「あ、そういえばまだゲストすら紹介してなかったな」

クウネル
「そういうことです」

エヴァ
「で、今回のゲストはどうなってるんだ？」

クウネル
「はい、今回はこの方々です」

高音
「また呼んでいただき、光栄です」

占いババ
「ふぉっふぉっふぉ、久しぶりじゃのう」

エヴァ
「げっ！」

クウネル
「それぞれ二回目のご出演、占いババさんと高音さんのお二人です」

エヴァ
「おい、またノコノコ出てくるとはいい度胸じゃないか、ええ？」

占いババ
「なんじゃ、まだアレのことを根に持っとるのか？」

エヴァ
「当たり前だ、あの時から早五ヵ月半……忘れたことなど一度もない」

クウネル
「詳しくは、第３９話のあとがきコーナーをご覧ください」

エヴァ
「連れの悪魔も今回はいないようだし、今度こそ縊り殺してや……」

高音
「ちょっとエヴァンジェリンさん！お年寄りに乱暴はいけません！」

エヴァ
「なっ！？何でそこでお前が邪魔をする！高音・Ｄ・グッドマン！」

高音
「弱気を助け強気を挫く、立派な魔法使い〈マギステル・マギ〉を目指すものとして当然のことです！」

クウネル
「ちなみに占いババさんも魔法使いなんですよ、ご存知でした？」

高音
「え?そうなんですか?」

占いババ
「うむ、一応な」

エヴァ
「お前とはやってること正反対だぞ、人から大金せしめて占い業やってるし」

高音
「なっ!」

占いババ
「なんじゃ、文句でもあるのか?」

高音
「大有りです!魔法とは本来、人を助けるためのものじゃないですか!」

占いババ
「ちゃんと人の役には立っとるぞ、探し物は百発百中で当てとるし」

高音
「お金儲けに利用してることが問題なんです!」

クウネル
「あなたが言った途端豹変しましたね、高音さん」

エヴァ

「だな……しかしこのままだと、前回あいつが出たのと展開がかぶるな」

クウネル
「まあ、お二人の喧嘩が狙いのリクエストですからね」

エヴァ
「仕方がない、同じ展開になるのは癪だが私達だけで次回予告をするか」

クウネル
「ですね、大分文字数を使ってることですし」

エヴァ
「さて、次回のネギドラ！だが……ついに戦いはクライマックス」

クウネル
「激しく拳を交える二人、そして……」

エヴァ
「下にいる三人、か」

クウネル
「ですね、特に龍宮さん達に注目したいところです」

エヴァ
「次回の更新は水曜日……って、いつもは火曜日じゃないのか？」

クウネル
「最近ずっと書いてなかったせいか、執筆速度が少々遅くなってる

そうです」

エヴァ
「それで保険をかけて一日先か……」

注・早く勘を取り戻せるように頑張ります

エヴァ
「そうしてもらわなきゃ週二は無理だしな」

クウネル
「感想はもちろんのこと、リクエストもまだまだ募集中です」

エヴァ
「では読者の諸君、次回のネギドラ！も……」

クウネル
「どうぞお楽しみに」

高音
「とにかく！そんな風に魔法を使うなんて絶対にいけません！恥ず

かしくないんですか！？」

占いババ
「……ふん、脱げてばっかりの脱げ女が何を言うか」

高音
（グサッ！）

占いババ
「おぬしの方が人としてよっぽど恥ずかしいわい」

高音
「脱げ女……また脱げ女って言われた……」

クウネル
「エヴァンジェリン、高音さんがトラウマモードに入ってますけどどうしましょう？」

エヴァ
「ほっとけ」

第８２話　残された最後の一手　当たれ！狙うは彼ただ一人（前書き）

本編は昨晩、あとがきコーナーは今朝に完成させて朝投稿です。
次回もこんな感じで出来るよう頑張ります。
ではどうぞ！

第８２話　残された最後の一手　当たれ！狙うは彼ただ一人

「ま、待て待て待て！まずはシートベルトをだな！」

同時刻地上では、ある一人の男が酷く慌てふためいていた

「おい、早くマシンを発進させろ！」

その近くにいる男が、どこかへ向けて大声で指示を飛ばす

（ひーん！やっぱり怖いーーー！）

会場のファンからの声援に応え、戦う気はないもののトイレから出てきたサタン

出来る限りゆっくりと向かっていたのだが、調子を良くしたプロデューサーに背を押されてかなり早めに会場中央へ到着

次にそのまま突き飛ばされ、新たに用意されたマシンの中へ押し込められていた

ウイーーーン

「ま、待って待って待って！シートベルトが！」

必死に時間稼ぎを試みるサタン

しかしその努力実らず、非情にもマシンのハッチが閉じられていく

「発進！」

プロデューサーがそう叫ぶや否や

「シートベルトがあぁぁぁぁぁぁっ！」

サタンを乗せたマシンは、絶叫と共に超大戦の戦場へと飛び出した

そしてそれにほんの僅か遅れて

「終了や！もう完治したで、トランクスさん」

「ありがとう木乃香ちゃん、よし！」

トランクスの治療がようやく完了する

「はあああああああっ！」

即座に超サイヤ人へ変身

「トランクス！悟飯達を頼むぞ！」

「はい！行ってきます！」

ピッコロからの激励を受け、こちらも超大戦の戦場へ舞い戻ろう

としていた

「……頼み？」

「そうだ」

コタローの問い、というよりは確認に真名は頷く

「けど、そんなん言われても今の俺じゃ……時間稼ぎもロクに……」

現在使い物にならない、自らの右腕と左脚

それぞれを見やり、コタローは苦言を漏らした

「そんなことはしなくてもいい、やってもらうことはただ一つ……」

真名は自分の手に銃が握られたままであると確認し、ポケットから弾を取り出す

「今から向こうへ狙撃する私の身体を、銃の反動でブレないように支えてもらいたい」

「たつみー姉ちゃんの銃で！？そんなん絶対効かへんって！」

真名の銃が特別製であることはコタローも承知

しかし自分より力の劣る彼女が、戦況を覆せるような威力の一撃を放てるとは到底思えなかった

真名はその弾を左手の銃に込めながら、説明を簡単に行う

「単に攻撃するわけじゃない、この弾は特別製で目的は別にある」

「……特別製？」

「それについての詳しい説明は、する時間がもう無い。早速だが頼む」

「……分かった」

少なくとも自分では、もう悟飯の危機を救ってやることは出来ないならば今は一縷の望みにかけるしかないだろう

そう覚悟を決めたコタローは、真名の言葉を信じてその身体を支えた

右腕がアレな状態なので、背中合わせの体勢を取る

少しでも踏ん張れるよう、左足で溝を掘ってそこへ踵を引っかけた

（弾は一発、チャンスは一度きり……）

真名はコタローの背へ身を預けながら、銃口をボージャックの方

へと向ける

そのボージャックは、やはり悟飯相手に圧倒的優勢であった

（幸い奴は、まだこちらの様子には気づいていない……その隙に決めてやる！）

左手にあったリボルバー銃は、現在右手の中

初めにあったデザートイーグルは手放し、脇に置いてある

（命中率はさほど違わないが、それでも利き腕の方がまだ精度は高い……）

僅かに震える右腕を左手で抑え、狙いを定める

ズキンッ！

（ぐっ！やはりあの時に頭を強く打ったか……おそらく軽い脳内出血……）

が、頭部に走る鈍い痛みでそれが大きく狂った

「どないしたんや？たつみー姉ちゃん、やっぱりどっか痛むんか？」

「……心配無い、少々疲れているだけだ」

顔だけこちらへ向けてきたコタローへやんわりと返答し、再び的を絞る

（このままじゃ、いつまた気を失ってもおかしくない……早く決めなければ……）

真名の顔に、如実に焦りが見え始めてきた

しかし何とか腕の震えと頭痛に耐え、照準を合わせることに成功する

その辺りは流石、麻帆良一のスナイパーといったところであろうか

（よし、あとはこのまま引き金を引くだ……！）

続いて息を殺し、気配を極力抹消

最後はただ、人差し指に力を少し込めるのみ

そこまで差し掛かった真名だったのだが、ここで思わず息を呑んだ

（しまった！やはり時間が掛かり過ぎた！）

彼女の視線の先にある、悟飯とボージャックの二人

両者がひどく密接してしまっていたのだ

「ぐ、ぐわあああああああっ！」

詳しく言えば、ボージャックが悟飯に対してベアーハッグを仕掛けているのである

両腕ごと胴を締め上げられ、悟飯は抵抗すらまともに出来ない

そのうえボージャックの凄まじいあのパワー

襲いかかる激しい痛みに、悟飯は大声で叫び声をあげた

「ほおれ、どうしたどうした！早く抜け出さないと、このまま腰骨をへし折っちまうぞ！」

「く、くそおおおおっ！」

二人の声は嫌でもこちらへ届いてくる

「たつみー姉ちゃん早く！はよせんと悟飯が！」

「分かってる、分かってるからこれ以上大声を出すな。気づかれたらそれこそ全てがパーなんだぞ」

なるべく声を張り上げずにコタローを叱咤し、真名は必死に集中する

（いつもならあれくらい普通に当てられるが、この身体では絶対的な自信が持てない……）

下手をすれば、もう片方に被弾して作戦は台無し

その可能性が、真名の右人差し指に力が入るのを邪魔する

（せめて、二人が少しでも離れてさえいてくれたら……）

だが、悟飯が脱出しそうな気配は微塵もない

また、ボージャックが自分から技を解くことも

（瞬間移動で近付けば一発でバレる……最悪の場合、撃つことすら出来ずに殺されることだって……）

それに今の自分では、ちゃんと瞬間移動が出来るかさえも危うい

（ならばやはり、ここから狙って撃つしか……）

ズキンッ！ズキンッ！

（くそっ、どんどん痛みが増してくる……もうかなり、限界が……）

歯を食いしばり、銃の照準と自らの意識を必死に繋ぎ止める

しかし、それも長くは続きそうにないと真名は嫌でも悟った

（こうなったら……賭けるしかない！）

密接する二人の内、片方のみを正確に狙撃

それの成功率のアップは、もうこれ以上望めない

むしろ下がる一方であるが、今ならまだ五分近くはある

意を決し、右人差し指に力を込める

「うぎゃあああああああああああああああああああっ！」

「「！？」」

「！？」

（！？）

が、突然の叫び声にその動きは一旦止められる

断末魔と形容するのが一番正しいであろうその声は、悟飯のものではなかった

無論、ボージャックのでもない

それはどこか別方向からこちらへ飛んでくる

「いたあああああっ！お助けえええええええええっ！」

一台のマシンの中から轟いていた

「な、何だあれは！？」

「サタンさん！」

サタンを乗せたマシンが悟飯達の方へ、横から一直線に突っ込んでくる

「くっ！」

猛スピードで向かってきたマシンに、ボージャックは思わず回避行動をとった

悟飯に回していた両腕を解き、後ろに少し後退

「ひょえええええええええっ！」

空いた二人の間を、マシンはスピードを落とすことなく通り抜ける

「感じる気からして雑魚か……ふん、小賢しい」

邪魔をされたボージャックは少々だが苛立ちを見せ、片腕を上げて掌をマシンへ

「堕ちろ」

軽く気弾を一発、マシンの後ろからぶつけてやった

ボガン

「ふ、ふぎゃあああああっ！落ちるううううううっ！」

「サタンさーん！」

気を抑え過ぎてしまったか、マシンは大破せずに原形をギリギリでキープ

しかしながら当然失速し、フラフラと地へ落ちていく

「あんな奴が一体何しに来たってんだ、ったく」

その様子を悟飯だけでなく、ボージャックも目を向けていた

（……い、今なら当てられる！）

そこで丁度、動きを止めていた真名が我に返る

密接していた二人は離れ、片方のみを正確に狙撃するにはうってつけの状況

（当たれっ！）

バンッ！

ついに真名は、その引き金を引いた

銃の反動はコタローの協力により抑えられ、しっかりと発射される

と同時に、首を回してそれを見ていたコタローは咄嗟に口を開けた

「ちょっ、どこ狙ってんねん！そっちは……」

コタローが目にしたのは、いつもの真名を知る彼にとって信じられない光景

真名が撃った弾はボージャックにではなく

「うわあっ！」

その隣、充分に距離が離れていた悟飯にへと命中したのだ

いくら本調子でないとはいえ、あまりにも狙いを外し過ぎている

そう思わざるを得なかった

「いや、あれでいいんだ」

「……え？」

しかし真名はいたって冷静

自分のした仕事は、決してしくじってなどいない

そう感じさせる声色と表情

そして次に真名が言い放ったこの言葉は、コタローを大いに驚かせた

「私の狙いは初めから彼……孫悟飯だったんだからな」

「ええっ！？」

また、悟飯が被弾したのを間近で見たボージャック

「ど、どうしたってんだ？味方に弾を当てちまいやがった……」

彼もまた驚きを見せ、その場で動かず足を止めている

「……え？え？」

当人の悟飯も、あまりの突然の出来事に唖然とするばかり

しかもそれは、ボージャックやコタローはまるで把握していないことにである

（な、何が起こったの？これ……）

横腹に見事命中した真名の弾

しかし、体勢は少し崩れたものの、痛みが全く無いのだ

出血もゼロ、ダメージは欠片も見当たらなかった

その代わりに、被弾した箇所から何かが流れ出る

ドライアイスの煙を薄くして、光沢を纏ったような外見のそれ

他の者には見えておらず、悟飯にのみ見えていた

（わっ！わっ！）

それはいつしか、悟飯を完全に覆い尽くす

視界は遮られていないが、何か不思議な感覚が全身を駆け巡った

一体これは何なんだ

次は何が起こるというんだ

そんな考えが悟飯の頭の中を右往左往する

すると悟飯は、少し前にしたある会話を思い出した

（も、もしかしてこれが……真名さんの言っていた特別製の弾が……）

“悟飯！聞こえっか悟飯！”

（え！？）

そんな時、いきなり頭の中へ響く声

“まさかたった一年で、オラの声を忘れたりなんかしねえだろ？”

（え！？え！？）

辺りを見渡すが、姿は全く見えない

“オラから、オメエに伝えてぇことがある”

（ま、まさか……）

悟飯は弾の飛んできた方向、即ち真名達の方を見やる

そこでは真名がこちらの視線に気付き、すぐさまウインクを返してきた

（やっぱり……じゃあこれは、この声は……）

“ちょっとした都合で一回きりしか言えねえ、しっかり聞いててくれ”

（……お父さん！）

今は亡き自らの父、孫悟空

突如として聞こえてきた彼の声に、悟飯は知らず知らず涙を浮かべていた

第８２話　残された最後の一手　当たれ！狙うは彼ただ一人（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「今回はちゃんと、予告通りに投稿だな」

クウネル
「次もそうなりたいところですね」

エヴァ
「で、今回のゲストは誰を呼んであるんだ？」

クウネル
「はい、今回はこのお二人です」

トランクス
「エヴァンジェリンさん、クウネルさん、お久しぶりです」

ベジータ
「そいつか、不老不死を得た化け物ってのは」

クウネル
「さくらさんのリクエストより、ベジータさん&トランクスさんです」

エヴァ
「ベジータはこのコーナー初登場だったな」

クウネル
「ですね、お父さんは少々前に出ましたけど」

ベジータ
「なんだ、強いと聞いたから来てみればただのガキじゃないか」

エヴァ
「……何？」

ベジータ
「おいトランクス、本当にこいつなんかが向こうの地球ではトップクラスの実力なのか？」

トランクス
「ネギ君はそう言っていましたけど……」

ベジータ
「……ちっ、期待させやがって」

エヴァ
（プチッ）

ベジータ
「一勝負でもしてやろうと思ってたが、急にバカバカしくなっちまったぜ」

エヴァ
「（ブチンッ！）な、なにおおっ！」

ベジータ
「何だ、闘る気か？」

クウネル
「まあまあエヴァンジェリン」

エヴァ
「離せクウネル！こいつには一発上級魔法でもぶち込んでやらなきゃ気が済まん！」

クウネル
「あなたがこんな扱いなのは、このコーナーじゃいつものことじゃないですか」

エヴァ
「だからだよ！何度もされればいい加減、こっちだってストレス溜まるわ！」

ベジータ
「おーおー、身体は小さいクセして喚き声だけは人一倍出しやがるな」

エヴァ
「このおおおおっ！」

トランクス
「エヴァンジェリンさん落ち着いてください、父さんもこんな所まで来て何やってるんですか」

ベジータ

「……ふん、命拾いしたなチビ助」

エヴァ
「ぐぐぐぐぐ……」

クウネル
「えー、ではコーナーを進行させますか。今回の話なんですが……」

エヴァ
「……そこの奴が一回も出なかったな、前回あんだけやる気でいながら」

ベジータ
「ふん、出ようと思っても出られないどこかのチビよりかはマシだがな」

エヴァ
「……」

ベジータ
「……」

クウネル
「えっと、もしもし？睨み合っていないで続きを……」

トランクス
「クウネルさん、何かこれ以上続けるのはすごい危ない気がします」

クウネル
「……ですかね、では続いて次回予告に入ります、聞こえてますか

二人ともー？」

エヴァ＆ベジータ
「……ちっ！」

トランクス
「さ、さて、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「龍宮真名の弾丸により、突如聞こえてき……」

ベジータ
「聞こえてたカカロットの声、一体あいつは何をしやがったんだ？」

エヴァ
「！」

トランクス
「そ、それについての説明もされるみたいです」

クウネル
「そして悟飯君はどうなるのか、そこにも期待したいところですね」

ベジータ
「次回は俺様も活や……」

エヴァ
「活躍なんて私的には全っ然期待してないが、こいつも一応出るんだとさ」

ベジータ
「！」

トランクス
「じ、次回の更新予定は土曜日頃です」

クウネル
「早ければ金曜日になるかもなので、その時は活動報告等を使ってお知らせいたします」

エヴァ
「では読者の諸く……」

ベジータ
「この小説を見ているお前達！じか……」

エヴァ
「次回のネギドラ！も……」

クウネル&トランクス
「お、お楽しみに！」

エヴァ&ベジータ
「ぐぐぐぐぐ……」

ベジータ
「やいクソガキ！どこまで俺の邪魔をしやがる！」

エヴァ
「それはこっちのセリフだ！ゲストのくせして偉そうにするんじゃない！」

ベジータ
「……気が変わった、殺しはしないでおくが半殺しにしてやる」

エヴァ
「上等だ……吸血鬼の真祖を舐めた報い、今ここで味わうがいい！」

クウネル
「あーあ、やっぱり始まっちゃいましたか」

トランクス
「……あ、次回は僕も登場予定だよ」

注・喧嘩の内容は、皆様のご想像にお任せします

第８３話　孫悟飯覚醒！届いた父のメッセージ（前書き）

土曜日予定ですが、急いで書き上げました。何とかペースが戻って本当に一安心です、ハイ。
ではどうぞ！

第８３話　孫悟飯覚醒！届いた父のメッセージ

（よかった、ちゃんと……彼に届いたか……）

悟飯へウインクを返した後、真名は安堵からか微笑

そのまま、ゆっくりと瞼を閉じていく

「ちょっ、たつみー姉ちゃん！？」

「ちょっと眠るだけさ、大分疲れたからな……後は頼む……」

そう言うと、真名の両瞼は完全に落ち切った

このまま永遠の眠りにつくじゃないか、と嫌な予感がよぎるコタロー

身体をずらして背中合わせを解き、左腕に彼女の背を乗せて顔を覗き込んだ

「たつみー姉ちゃん！？」

「……すー、すー」

が、耳に入ってくる呼吸音

真名は本当に、ただ眠りに入っただけ

「……ホンマに寝とるだけかいな」

コタローはやや苦笑すると、左腕を落として彼女をそっと寝かす

そして顔を上げ、見つめるは己の親友

（たつみー姉ちゃんが何したか知らへんけど……勝てよ、悟飯！）

“まず始めに言うとこれは……オラが界王様の作った不思議な弾に、急いで念じて詰め込んだもんだ”

（界王様が……じゃあやっぱり、真名さんがあの時見せてくれた弾丸……）

“だからオメエと会話は出来ず一方的にオラから話すことになる、その辺は勘弁してくれ”

（……充分だよ、お父さん）

この一年間、聞きたくても聞けなかった父の声

それが聞けただけでも、悟飯の喜びはひとしおであった

（なんだあいつ、撃たれた途端ボーっと突っ立ったまま動かなくなりやがって……）

無論、悟空の声はボージャックの耳には入ってこない

何が何やら理解出来ず、悟飯の様子をただ伺うのみ

真名が悟飯に向けて撃った先程の弾

中には、悟空から悟飯へ向けてのメッセージが込められていた

この弾を作ったのは、真名が瞬間移動で援護に向かう直前

真名が使ういつもの弾丸を一発拝借し、北の界王が術をかけて特別製の弾を生成

そのかけた術は、『かけた物体に対して強く念じたことを、そのまま中に閉じ込めておく』というもの

それを右手で握り締めた悟空が、悟飯へ伝えるメッセージを頭の中で強く念じる

最後に、『物体が当たった対象に、中に込めてあるものを外傷無しで直接送り込む』という術を界王がかけて完成である

（本当に手元が狂って当てちまったか……それとも、何か攻撃とは違う術を込めたか……）

そうとは知らないボージャックは、悟飯が動かないのをいいことに頭の中で結論を急ぐ

（仮に後者だとしても、何の術か分からない以上迂闊に攻められん……一体、あの女は何を……）

だが逆に、それは悟飯にとって最高のチャンスタイム

父、孫悟空からのメッセージを誰にも邪魔されず聞いていられるのだから

“オメエ達の戦いはずっとあの世から見てた、確かにあいつ、ボージャックはかなり強いみてえだな”

（そうなんです、僕なんかじゃ全然……それにピッコロさんやベジータさんも……）

悟空には届いていないのだが、悟飯は自然と会話のように悟空の言葉を心の内で返す

父と話せているような気がする、という錯覚が悟飯の中で出来ていた

“まだオラは見てないから分かんねえが、フルパワーのベジータでも多分勝てないと思う”

そうなんです、と悟飯は漏らす

悟空が弾に念じてる時点ではまだ起こってないが、事実ベジータはそのあとボージャックに敗北を喫していた

“だから悟飯、オメエが奴に勝つしかねえんだ！”

（……）

しかしこれには、悟飯は言葉を返せず沈黙する

“既に真名から聞いたと思うがもう一度言う、怒れ今以上に！そして全力を奴にぶつけろ！”

（しようとしましたよ……けど、無理なんです……）

真名からその言葉を聞き、悟飯は自分に出来る限り怒った

あの時、セルとの戦いと同じくらい怒ろうと精一杯

だが出来なかった

超サイヤ人の壁を、目の前の敵の強さを、どう怒っても超えられなかった

決して見せてはいけなかった思い、一種の『諦め』

それが悟飯の胸の内で突如、沸騰しきった鍋物の如く零れ始める

（あの時みたいには、いくらやってもなれないんです……）

“悟飯……もしかしたら今のオメエは、『そんなの無理だ』って諦めかけてんのかもしれねえ”

（！……そうです、僕にはこんなの……）

胸の内で思っていたことを、そのまま言い当てられた悟飯

これには一瞬動揺したが、すぐに言葉を返す

（お父さんがいなきゃ、やっぱり……僕……）

“けどな悟飯、これだけは言っておく……”

次は何を言ってくれるのだろう

僅かに空いた言葉と言葉との間で、そんなことを悟飯は考える

生前あんなに優しかった父だ

励ましの言葉をくれるのだろうか？

『最後まで諦めるな』とか『もっと頑張れるはずだ』とか

そういったものが頭に浮かんできた

だが、

“甘ったれてんじゃねえっっ！！”

（っ！）

次に飛んできたのは、怒りに近いものが込められた凄まじい怒号

聞こえてくる声量もハンパなく大きく、文字通り頭の中でガンガンと響く

（お父……さん？）

“オメエがやらねえで、誰が地球を守るってんだ！”

（！！）

“今はベジータよりも強くなったトランクスにも、勝機が無いわけじゃない……けどそうじゃねえだろ！”

（……）

“仮に勝ったとしても、あいつが未来に帰ったらその後はどうする！今度は他の仲間……ピッコロやベジータにオメエはおんぶやだっこか！”

（……そうだ……）

“それが違うってことくらい分かってんだろ！それだったらオラは何のために死んだ！”

（そうだよ、お父さん……）

肝心なことを忘れていた

（お父さんは僕に、地球の未来を……）

“オメエが地球を！みんなの未来を守れるって信じて！オラは全て

を託して死んだ！そうだろっ！”

（……はい）

それに自分が本当に欲しかったのは、単なる励ましの言葉ではない

“だから勝て！オメエ自身が奴に勝たなきゃ何にもなんねえ！”

（……はいっ）

自分のことを、怒鳴り散らしてでも叱咤する言葉

ピッコロならいつでもくれそうだが、そうじゃない

自身の父からも、それがどうしてももらいたかった

“オメエが地球を守れ！守るんだ悟飯！”

これが悟空からの最後の言葉

（……はい！）

全身を覆っていた不思議な煙は消え、

バチッ！バチバチッ！

「……ん？」

何か火花のようなものが、悟飯の身体から弾け出す

ベジータと真名が倒れてから時折出ていたのだが、こうしてちゃんと見るのはボージャックは初めて

しかもその時より断然多く、さらには激しくバチバチとその音を鳴らしていた

「な、何だあれは!?しかも、小僧の気が……」

驚きを見せるボージャックだけが、それは悟飯の外見だけにじゃない

気が明らかに、現在進行形で上がっている

それも、自らの域に達しようとするほどに

「お父さんが……」

「……何?お前の親父?」

「僕に、甘ったれるなと言ってた……」

バチバチッ!バチバチバチッ!

(さらに気が……まずいっ!)

考えたくないが、このままでは負けるかもしれない

上がり続ける悟飯の気に動揺せずにはいられず

「くたばれえええええっ!」

ボージャックはついに、悟飯へ向かって飛び出した

右掌に光球を作り出し、頭目掛けて叩きつけにかかる

「だだだだだだだだだだだだだああっ！」

「！？」

しかしそれを阻む、突如横から飛び込んできた無数の気弾

「ぬ、ぬおおおおおっ！」

ボージャックの動きはその場で止められる

「あ、あの野郎があああっ！」

彼は気弾と気弾の僅かな間から、それを確かに見た

「だだだだだだだだだだだだだああっ！」

両足を震わせながら何とか立ち上がり、気弾を撃ってきているベジータの姿を

「くそがああっ！」

激昂し、怒りにまかせてボージャックは手の中の光球を

「今度こそ……死ねえええっ！」

気弾の雨を浴びながらも、正確にベジータへ真っすぐ投げつけた

威力はベジータの気弾とは段違い、それらを飲み込みながら猛然と迫る

「どうだああっ！あの世で後悔しやが……」

「父さーーんっ！」

「なっ！？」

ベジータが被弾するさまを予見していたボージャックにとって、またも予想外の事態

飛んできた何者かが叫びながら、当たる直前にベジータを抱え上げて救出した

光球はただ、無人になったその場所で空しく爆発する

「ト、トランクス……」

「これであの時の分はチャラですね、父さん」

「……ちっ」

息子、トランクスの腕の中

やや恥ずかしそうな表情を見せながらも、ベジータはそこで変に暴れるような真似はしなかった

トランクスはそのままコタロー達の横へ降り立ち、目線を上空へ上げる

「どうだボージャック！これでさっきのような手は使えまい！」

ボージャックが“保険”と称した三名は今、トランクスのもとへ全員が集結していた

これでは気功波を放とうが、即座にトランクスの手によって防がれてしまう

つまり悟飯は他の仲間を気にせず、思う存分戦える状態

トランクスごと仕留めるようなのを作ろうとすれば、逆に悟飯へ大きな隙を与えることになる

「ぐぐぐぐぐ……」

ボージャックの焦燥する様子が、さっきよりさらに分かりやすく見て取れた

「僕に地球を……」

バヂバヂンッ！バヂンッッ！

「！？し、しまった！」

そのため悟飯のことを完全に失念

慌ててそちらへ目を向けたが

「守れって言ってたーーーーーーー！！」

もう遅い

「ぬ、ぬぐううううっ！」

顔を上げ、両拳を握り締めて咆哮する悟飯

爆発的な上昇を見せた気は、悟飯の身体に収まりきれず猛烈は風となって放出

堪らずボージャックは両腕を前に出し、直撃を避ける

風が収まったのは、それからすぐのこと

「な……な……」

風音が止むや否や、ボージャックは別の音を嫌でも耳にした

それは、より一層全身から弾ける火花

バチバチと断続的に鳴り響くこの音は、ボージャックを威圧させる

「……」

その孫悟飯は、黙って目の前の敵を睨みつけていた

頭髪は先ほどよりも細かく逆立ち、溢れてくる気はとどまることを知らない

「……行くぞ、ボージャック」

再び超サイヤ人の壁を越えたその戦士は、静かにそう口にした

第８３話　孫悟飯覚醒！届いた父のメッセージ（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「大分本編は凄まじい展開だな……」

クウネル
「まあそれは後々ちゃんと話すとして、先にゲストの紹介をしましょう」

エヴァ
「だな、それで今回のゲストはどうなっているのだ？」

クウネル
「はい、今回は五月雨さんのリクエストでこのお二人です」

１３号
「人造人間１３号だ」

ブロリー
「……ブロリーです」

エヴァ
「あれ？二人とも例の巨体状態じゃないのか？」

クウネル
「作者曰く『そっちで揃えると１３号が書くの大変』ということな

ので変身前のお二人をお呼びしました」

エヴァ
「……多分リク主はでかい方の二人を期待してたと思うぞ？」

クウネル
「まあそれは置いといてですね……」

エヴァ
「いやいやいや！そこは結構大事じゃないのか！？」

クウネル
「じゃあ聞きますが、でかい方の二人をゲストに呼んだらこのコーナーはどうなります？」

エヴァ
「……あ、ダメだなそれは」

クウネル
「でしょ？」

13号
「おい、早く進行させてくれ、俺はお前達と違って忙しいんだ」

エヴァ
「機械人形が何をほざくか……まあそれでも一理あるか、クウネル」

クウネル
「はい、さて今回の話ですが……」

エヴァ
「ついに孫悟飯が変身完了だな」

１３号
「そのようだな、あの強さは俺のコンピューター内のデータを遥かに上回っている」

クウネル
「まあなんといっても、龍宮さん達の頑張りのおかげですね」

エヴァ
「映画版では孫悟空本人が言っていたが……なるほど、こういう風に作者は内容を変えてきたか」

クウネル
「『死んでいるのに現世に戻って敵に殴りかかる』という描写が、作者としてはやはり違和感を感じたんだとか」

注・→のセリフの意味が分からない方は、実際にＤＶＤをご覧になることをお勧めします

エヴァ
「まあかなり異例だったしな、いくら孫悟空でもあそこまで無茶をやらかすのは……ん？」

ブロリー
「孫悟空……ソンゴクウ……」

エヴァ
「おい、どうしたブロリー？」

ブロリー
「ソンゴクウはカカロット……カカロット……カカロット!?」

エヴァ
「げ、まさかこれって……」

クウネル
「あーあ、エヴァンジェリンが悟空さんのことを話すから」

エヴァ
「いやいや!お前だって話に加わってただろ!」

クウネル
「『孫悟空』という単語を出したのはあなただけです」

ブロリー
「カカロットオオオオオオオオッッ!!」

エヴァ
「ぬわあああああああっ!」

ブロリー
「カカロットはどこだあああああああっ!!」

エヴァ
「そ、孫悟空はここには来てない!だから伝説の超サイヤ人化は止めろ!」

ブロリー

「カカロットを出せえええええええっ！！」

エヴァ
「おいクウネル！こいつ何とかしろ！」

クウネル
「えーっと……無理です」

エヴァ
「おい！」

クウネル
「一応、策が一つだけあるといえばあるんですが……」

13号
「……一人を囮にして、残った者だけでコーナーを進めるのか？」

クウネル
「あ、正解。流石ですね」

13号
「これまでのデータを見る限り、同じようなケースが数件起こっている」

クウネル
「そうそう、そうなんですよ……というわけでエヴァンジェリン、あとはよろしく」

エヴァ
「はあああああっ！？」

ブロリー
「カカロットはどこだあああああっ！」

エヴァ
「ぬおわっ！っておいクウネルと１３号！飛んで逃げるな！」

クウネル
「大丈夫大丈夫、だってあなた不死身ですもん」

１３号
「……さらばだ」

エヴァ
「こらあああああっ！」

ブロリー
「カカロットおおおおおっ！」

クウネル
「というわけで次回予告です」

１３号
「……さて、次回のネギドラ！は……」

クウネル
「超サイヤ人２へ覚醒を遂げた悟飯君」

１３号
「ついにボージャック戦決着……ということらしい」

クウネル
「この大会編も、大分終わりが見えてきましたね」

１３号
「ああ、それだけでゆうに半年は経過している」

クウネル
「というわけで次回の更新は来週の火曜日」

１３号
「感想やリクエストも、募集中だ」

クウネル
「というわけでみなさん、次回のネギドラ！も……」

１３号
「……お楽しみに」

第８４話　響き轟く断末魔　ボージャック戦決着！　（前書き）

サブタイでも分かりますが、ようやく終わりました。本当に長かったです……まあ、その辺りはあとがきの方で詳しく触れますので。

ではどうぞ！

第８４話　響き轟く断末魔　ボージャック戦決着！

「ピ、ピッコロ殿……この気はもしや……」

「……うむ、悟飯のだ」

超サイヤ人２へと再び覚醒した悟飯

その凄まじい気は、地上に残る戦士達にもひしひしと伝わってきていた

「セルと戦った時のと同じ……あいつめ、ついにやったか」

「これが、超サイヤ人を越えた者の気でござるか……」

モニターを見やると、映るのはただ真っ黒一色

悟飯達のいるエリアに設置されていたカメラは、墜落したサタンのマシンがぶつかって粉砕

そのため今の状況を知ることが出来るのは、気を察知出来るごく僅かな者のみ

この場で言えば、ピッコロ、楓、刹那、あやか、クリリン

ようやく目を覚ましたアスナ達と、ついさっき神殿から戻ってきた餃子と茶々丸の十人

いや、あと彼らに加えてもう一人

「み、皆さん！」

「ネギ先生！」

たった今ここへ帰還した少年も加え、十一人である

初めの声と、その声の主を見たあやかの声

二つの声に反応し、残りの者もそちらへ顔を向けた

「戻ってきたのか、ネギ」

「色々心配させてすみません……」

慌てて走ってきたのか、ややネギの呼吸は荒い

「その慌てよう、やはりネギ坊主も悟飯殿の気に気付いたでござるか」

「あんな凄い気、いくら僕でも見過ごすわけありませ……ってそれもありますけど違うんです！」

「？」

疲れを見せながらも冷静に答えるネギだが、ふと肝心なことを思い出し声をあげた

そもそもそのことを言いに戻ってきたところで、悟飯のあの気を

感知したとのこと

「してネギ坊主、その肝心なこととは何でござるか？」

「はい、それが古老師が……」

「古が！古がどうしたって！？」

すると突如、クリリンが声を荒げてその身を起こす

ネギから漏れた古という言葉に、反応しないはずがなかった

「クリリンさん、変に暴れちゃだめです！まだ傷は治しきれてないんですよ？」

「なあネギ！古が一体どうしたってんだよ！？」

隣にいた夕映の制止も聞かず、さらには席から降りてネギに詰め寄っていく

かなりフラフラした足取りだが、それでも気合いでネギのすぐ正面まで近づいた

「なあ！」

「じ、実は古老師が突ぜ……！？」

ネギが報告しようと再び口を開いたところで、いきなりの大きな振動

これには思わず、続きを言おうとしていた口も動きを止める

「な、何これ!?今までのより全然大きいじゃん!」

「ちょっと夕映!どういうことよこれ!」

この会場にいて、下からの振動を受けたのは一度や二度じゃない

天津飯の新気功砲に始まり、数多くの戦士が地下からここ地上を揺らしていた

しかし、今回はまるで大きさが違う

今までのを震度3前後と表現するなら、これは震度5以上

会場内に残る一般客も、大多数がパニック状態である

「朝倉さんもハルナも落ち着くです!おそらくこれは、悟飯さんとボージャックとの戦闘による影響です」

「「それでこんなに!?」」

(悟飯君……)

ネギの顔はモニターの方へと向けられるが、やはり悟飯の姿は見られず

(……頑張って!)

それでも拳をギュッと握り、悟飯の勝利を強く祈る

見れば他の者も皆、同様のことをしていたのが目に入った

「だあああああああああっ！」

「ずあああああああああっ！」

上空を高速で飛び、転々と鳴り響く両者の咆哮と衝撃音

準決勝第四試合、トランクス対ピッコロのとほぼ同じ光景がそこには広がっていた

「うっわ、何やこれ……全然欠片も見えへん」

「パワーもスピードも僕より断然上……やっぱり凄いです、悟飯さん」

しかし、レベルはそれを遥かに上回る

疲労もあるといえばあるが、コタローは完全に二人を見失っていた

悟飯と同じ境地に達してるトランクスは、ちゃんと状況を把握している模様

残る真名は気絶中

ベジータはトランクス程ではないにしろ、コタローよりは大分確認出来ていた

「なあトランクスさん、凄い凄い言われてもよう分からんって……どっちが勝ってるんや？」

戦況が全く分からないもどかしさ

それに我慢できず、コタローはトランクスに身体を向けて尋ねる

「この勝負圧倒的に……」

「圧倒的に？」

「……悟飯さんが優勢だ」

そう答えたトランクスの表情は、自信に満ち溢れていた

「ぐごおおっ！」

「だだだだあっ！」

それと時をほぼ同じくし、コタローの目に両者の姿が捉えられる

傍目から見れば互角とも取れそうな先程までの空中戦

ところが実際は、パワー、スピード共に劣るボージャックがやや守勢に回されていた

ジリジリと追い込まれ、そして完全に拮抗が崩れたのがついさっきである

攻撃を受けきれず、頬に叩き込まれた一発の鉄拳

そこから怒涛のラッシュを悟飯は繰り出した

「ぬぐぐぐぐ……」

向こうの方が実力は上であるため（ボージャックとしては認めたくないのだが）、下手にカウンターを狙っても失敗するだけ

ボージャックはガードしてそれに耐え、反撃のチャンスを窺う

（俺に致命的な一撃を与えるには、こんな手数で攻める技じゃさほど効果はない……それは奴も分かっているはずだ……）

ならば、大技に移る僅かな隙を突くしかない

残っていた理性を総動員し、何とかその結論に辿り着いた

（冷静に、冷静になるんだ俺……向こうが予想以上の強さだからって、それを欠いてどうする……）

威力はやや弱めとはいえ、ダメージは少なからず確かにある

目の前のむかつくガキを、さっさと殴り返して殺してやりたい
そんな欲求を、もはや爆発寸前ともいえる状態でボージャックは堪えていた
（反撃が……反撃が出来る隙をギリギリまで待……）
「ふん、銀河戦士のボスなんてそんなもんか」
（！？）
だがそこまで読み切っていた悟飯は、わざと彼に聞こえるようボソリ
これを聞き流して平静を保つ余裕は
「……くそがあああああああっ！」
今のボージャックには既に無い
両腕によるガードを解除し、悟飯の顔面へ右ストレートをぶつけにいった
「死ねごらあああああああっ！」
「こんな攻撃……」
しかし、悟飯はそれを難なく見切って顔を横へずらす
顔の左側を拳が通過、その直後に悟飯も動いた

身を屈めてボージャックの懐へ入り込み、拳には今までに無いくらいの力を込め

「当たるかあああああああっ！」

腹のど真ん中へそれを叩き込む

「ご、ごばあああっっ！」

いや、叩き込むという言い方では誤りだろう

悟飯の拳は、ボージャックの腹を『貫いた』のだから

「ご、ごがががが……」

彼の背中から生える悟飯の拳

あまりの驚愕に両目は見開いており、大きく開かれた口からは鮮血が溢れていた

「……そしてこれで終わりだ！」

悟飯はそう叫ぶや否や、拳を引き抜いて数メートル後退

下がりながら両手に気を集め、それらを腰の右側にやって構えをとる

「か……め……」

たちまち一つの青白い光が、両手で造った空間に出来上がった

「こんな……こんなガキなんかに……」

一方、出血多量、腹部の大傷で息絶え絶えのボージャック

普通ならもう、動くことすらままならない状態だろう

だがボージャックは、それでもまだ戦意を失っていなかった

「ごふっ、この俺が……」

引き抜かれた直後、その傷を押さえていたことで血塗られた自らの両手

それらを腰元までグイっと引き寄せ、全身に残る気を全て注ぎ込む

こちらの手には、右手と左手それぞれにエメラルドグリーンの光

「負けるなんてこと……」

「は……め……」

両者の光の輝きが最大になったのは、合わせたかのように同じタイミング

「波ーーーーーーーーーーーー！！」

「あるわけねえんだあああああっ！！」

そして放たれたそれらは、二人の間のちょうど中央でぶつかった

気を気がぶつかり合うこの衝撃に、周囲の空気は揺れ轟音が響く

「ぐおおおおおおおっ！」

腹に走る猛烈な激痛

それに必死で耐えながら、ボージャックは吠えた

口と傷から溢れ出る血は、止める様子をまるで見せず

彼の真下の地面は、少し前から紅色に染まり始めている

「ふんぐうううううううっ！」

次に感じたのは、自分の気功波が押されてきている感覚

確かに目の前に見える青白い光が、こちらへ迫っているのがよく分かった

「ぬがあああああああああああああっ！」

理性はもう欠片として存在せず、白目を向いてただひたすらに怒号を轟かし抗う

それでも、両者の力の差が縮まることはもう一度としてなかった

「うおおっ！？う、うおおおおおおおおおおおおっ！」

悟飯のかめはめ波が、ボージャックをついに飲み込む

最初は両掌

続いて両腕

最後に全身

ボージャックの断末魔は、自らが消え去るその直前まで

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！」

周囲へ轟々と響き渡った

断末魔が聞こえなくなってすぐ、悟飯のかめはめ波も消滅

「……終わった」

悟飯の変身は自然に解除され、ゆっくりと下の地面へ降りていく

その一連の状況を見るトランクス達

「なあトランクスさん、これって……」

「ボージャックの気がどこにも感じられない、完全に消えた」

「ってことは悟飯は！」

「……勝ったんだ、奴に」

コタローの顔は歓喜で満ち溢れた

「悟飯！」

脚や腕の痛みなどお構いなしに、コタローは飛び起きて悟飯へと駆け寄る

しかし左脚はやはり上手く動かず、ややけんけん気味になって移動した

悟飯の両足が地に着くと、それに少し遅れて到着する

「コタロー君……」

「やったな悟飯！お前あいつに勝ったんや！」

「うん、本当に良かっ……」

「悟飯！？」

言い終わるより先に、悟飯は脱力し仰向けに倒れた

ドサッと音を立て、背中を地に預け天を仰ぐ

「ははは、もう全然力出ないや……」

「俺が肩貸したろか？」

「いいよ、コタロー君大怪我してるし……少しすれば多分動けるから」

「そうか？」

「うん……」

コタローの申し出をやんわりと断ると、悟飯は空へ向かって小さく呟いた

それこそ、間近にいるコタローにさえも聞こえないほど小さく

「……お父さん、僕やったよ」

よくやった悟飯！

そんな父の声を、悟飯は天から聞いたような気がした

第８４話　響き轟く断末魔　ボージャック戦決着！　（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「おいクウネル！」

クウネル
「どうしたんですか、エヴァンジェリ……うわ、随分とボロボロですね」

エヴァ
「貴様が前回私を放置するからだろ！あの暴君の相手をしてた私の身にもなれ！」

クウネル
「すいませんすいません、ちゃんと今回はまともなゲストを呼びましたから」

エヴァ
「本当にちゃんとしたのだろうな！？絶対だな！？」

クウネル
「はい、というわけで今回は……」

葉加瀬
「や、やっと出られた……」

ブリーフ
「よかったのう葉加瀬ちゃん」

ブルマ
「父さんはもっと酷いじゃない……」

クウネル
「葉加瀬さん、ブルマさん、ブリーフ博士の三人です」

エヴァ
「ハカセとそいつはこのコーナー初登場だな」

クウネル
「はい」

エヴァ
「『本編キャラにも関わらず、最近出番が皆無』な三人を集めたわけだな」

葉加瀬
「違いますって！研究者三人組として呼ばれたんです！」

クウネル
「というか葉加瀬さんは今何してるんです？会場内にはいるんですよね？」

葉加瀬
「茶々丸が千雨さん達のとこへ行った後、ブルマさんがいる席を見つけて隣にお邪魔してます」

エヴァ
「まあそれじゃ出番無いわな」

葉加瀬
「あ、でもその後ネギ先せ……」

クウネル
「ではブリーフ博士は？」

ブリーフ
「ん、わし？わしなら家で留守番しとるけど……」

ブルマ
「父さんいっつもこんな感じなのよね」

エヴァ
「『存在は確認されてるが、台詞一切ゼロ』か、よくよく考えればプーアルと同じなんだな」

ブリーフ
「別にわしは気にしてないけどね」

クウネル
「さて、そろそろコーナーを進行させますか」

エヴァ
「だな」

クウネル
「さて、今回の話なんですが……」

エヴァ
「ようやくボージャック戦終了、本当に長かったな」

葉加瀬
「ですよね、引き延ばしすぎって読者の方からもご指摘がありましたし」

クウネル
「あの時大分ドキッときたらしいですよ、作者」

エヴァ
「結局指摘を受けてから、今回まで二カ月弱経っているがな」

葉加瀬
「でも削るとこは削りましたよね、龍宮さんの過去話とか」

エヴァ
「あの世編へ繰り越すことにしたあれか」

クウネル
「もしそれを挿れていたら数話分さらに喰ってましたからね……以前もここで触れましたが」

ブルマ
「なんにせよ、次回でいよいよ大会編もおしまいね」

エヴァ
「大会編は第３０話からだったから……げ、次回分も合わせて合計５６話」

葉加瀬
「初期の文字数の少なさを考えれば、普通に倍以上の長さですね」

ブルマ
「もしかして三倍近くいってるんじゃない？」

注・計算してませんが、多分いってます

クウネル
「本当に、ここまで長かったですよね……」

エヴァ
「さて、では続いて次回予告に……っておい、ジジイ」

ブリーフ
「ん？呼んだ？」

エヴァ
「少しは会話に加われ、じゃなきゃこのコーナーに出た意味ないだろ」

ブリーフ
「いや、だってわし別に喋りたくて来たんじゃないし」

エヴァ
「じゃあ何故来た？」

ブリーフ
「そりゃあ、わしやブルマを水竜君がリクエストして……」

エヴァ
「……出たくても出れない奴の気持ちを少しは考えろよ」

クウネル
「そういえばまだリクエストが無い本編キャラが数名いましたね、主役側で」

エヴァ
「もう二週目に入ったにも関わらず、だ」

葉加瀬
「私とブリーフさんは今回出ましたから、えっと……うわ、パイクーハンさん除いて二人も残ってます」

ブルマ
「ホントだ、このコーナーに一回も出てなくてリクエストも貰ってない」

クウネル
「ちなみに名前を出してないのはわざとです」

ブリーフ
「うーむ……じゃあ次回予告とかいうのくらいは一応やってみるかのう」

エヴァ
「そうしろ、というわけでクウネル」

クウネル

「はい、続きまして次回予告です」

葉加瀬
「さて、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「戦いは終わり、地上へと帰還する孫悟飯達」

クウネル
「そこでネギ君から、衝撃の事実が告げられます」

ブリーフ
「本編で言いかけてたアレじゃな」

ブルマ
「そしてその話ではなんと！」

葉加瀬
「私とブルマさんが数か月ぶりに登場します！」

エヴァ
「次回の投稿予定は金曜日だ」

クウネル
「感想やリクエストも募集中です」

注・特に、先ほど言われた未リクの二人

葉加瀬
「さて皆さん、次回のネギドラ！も……」

エヴァ&クウネル&ブルマ&ブリーフ
「お楽しみに！」

エヴァ
「ところで、お前達三人がメインになる話が後々あるって聞いたが本当か？」

ブルマ
「そうよ」

ブリーフ
「らしいのう」

葉加瀬
「ふっふっふ……この世界の科学技術と私達三人の頭脳をフルに生かし、なんと茶々まフゴっ！？」

クウネル
「これ以上はネタバレなのでストップです、どうぞお楽しみに」

第８５話　古の身に何が！？全て終わり、皆は会場を去る（前書き）

第８５話投稿！ようやく大会編終了です！しかし書いてみると文字数がとんでもないことに……読んでみれば分かるかと。

ではどうぞ！

第８５話　古の身に何が！？全て終わり、皆は会場を去る

トンネルから出てきた数人の人影

それぞれ満身創痍の（一人を除く）彼らは、ゆっくりと仲間のいる場所へと向かう

一人は片手片脚の怪我に痛みを覚えながら

一人は気を失った少女を抱えながら

そして最後の一人は、それを見る仲間達に笑みを見せながら

「悟飯さん達ですわ！」

「てことはホンマに勝ったんや！」

最初にあやか、次に木乃香が感嘆の声をあげた

「悟飯君！」

最後にネギが一同の前に躍り出て、大声で親友の名を呼ぶ

「ネギ君！」

悟飯が言葉を返したのは、客席に到着して足を地につけたのとほぼ同時だった

疲労困憊の悟飯だが、すぐにネギの下へ駆けだす

「勝ったんだよ……ね？」

「……うん、かなり危なかったけど」

それを聞き、ようやくネギは安堵して息を吐いた

「悟飯、見事だったぞ」

「ピッコロさん……」

そこへ、再びマントとターバンを纏ったピッコロがネギの隣に並ぶ

少しながら木乃香に治してもらったようで、粗方目立つ傷は無くなっていた

「よくまた、あの壁を超えられたな」

「……お父さんの、おかげですよ」

「何？悟空だと？」

「はい、実はあの時……あれ？」

悟空からメッセージを受けた一連の経緯

それを話そうとしたところで、悟飯の身体が大きく傾く

咄嗟にネギが手を伸ばし、倒れる前に支えた

「ご、悟飯君！？」

「大分疲労したようだな、無理もない……その話はまた後日でいい、今はゆっくり休め」

「はい……」

ピッコロに諭され、悟飯はそのまま近くの席に座りこんだ

一方トランクスも真名を降ろすと、ハルナ達の近くの席へ

「ねえトランクスさん、ベジータさんどしたの？」

「ああ、父さんなら……」

隣に座るハルナが、この場にいないベジータに気付いて尋ねる

トランクスの答えを要約すると

『お前らは先に行っていろ、俺は少し休んでから一人で帰る』

とベジータが言って、肩を貸してもらう等の助けを受けるのを断固拒否したらしい

これに『無理しちゃダメです』とトランクスが反発して一悶着あったそうだが、ここはあまり意味がないだろうと思ったか話すのは割愛した

「わわっ！コタ君どしたんその怪我！？」

また、木乃香はコタローの見るに耐えない大怪我に声を裏返す
特に骨折した右腕は、既に内出血でかなり変色していた
「モニターに映ってなかったんか?ちょいとあいつにやられてな」
「すぐ治療せんと!夕映ー、手伝ってー!」
しまっていた杖を慌てて取り出し、後ろに振り返って夕映を呼ぶ
「ウチは右腕やるから、夕映は左脚お願い。夕映は火傷の治療出来る?」
「程度にもよりますが……コタローさん、痛みはまだあるですか?」
「痛くないわけないやろ……」
「じゃあまだセーフです、私でも何とか治せます」
夕映はコタローから具合を聞くと、すかさず杖を構えて準備
残り少ない魔力を引き出し、対象の治療へと取りかかった
「プラクテ　ビギ・ナル……」
「ゆ、夕映!」
が、突如のどかが叫び声をあげる
それに反応し、夕映は焦った様子で顔をのどかの方へ

「どうしたですか！？」

「た、龍宮さんの顔が何か青いの！」

「え！？」

見れば確かに、横に寝かされている真名の表情は青かった

どこか身体が異常であることは明確である

（そういえば、龍宮さんは敵にやられて頭を強く打っていたような……）

夕映は呪文詠唱を中止

確認も兼ねてコタローに目を向けて訊いてみた

「コタローさん、途中から龍宮さんとは一緒にいたですよね？」

「お、おう」

「その時、どこか痛みを訴えたりとかしませんでしたか？頭とか」

「えっと……」

過去の記憶を掘り返すコタロー

「あ、そういや少し痛そうにしとったような……」

「それを早く言うです！」

「いっっづ！？」

ようやく思い出し、言うや否や激痛

本気でないものの、夕映は杖の先端で患部をはたいていた

そこからすかさず、真名のもとへ移動

「……あなたのは後回し、龍宮さんのを優先するです」

「痛ったあ……なにも叩かんでもええのに……」

コタローは涙目で悪態をつくが、夕映は反応一つせず治療に入る

「プラクテ　ビギ・ナル　治癒〈クーラ〉」

しかし実際、真名の方が重体だったのは事実

あのまま誰も気付かず、下手をすれば本当に命の危険もあった

まあ幸いこうして早めに治療が出来たため、夕映でも普通に治せたわけなのだが

「……よし、もうこれで大丈夫なはずです」

「良かった……」

のどかは安堵の表情

気付けばその隣には、真名の身を案じてか楓と刹那が

「しかし龍宮も無茶なことを……」

「刹那殿こそ、腕一本でそのまま戦おうとしてたでござらぬか？」

「ああ、あれか……」

人のことは言えぬと指摘する楓に、刹那は自嘲気味に笑みを漏らした

「結局は、まだまだ拙者らも修行不足ということでござるな」

「そうだな……ところで楓はまだ、ピッコロさんのところで修行を続けるのか？もう大会は終わったわけだが」

「あいあい、それは刹那殿もでござろう？」

「……もちろん」

互いに正面から目を合わせ、二人は凛とした顔で頷く

と、ここで楓はあることを思い出した

顔色が戻った真名の顔を一瞥し、向かうはネギの方へ

あのことを彼女は、いや、ここにいる全員がまだ聞いていない

「ネギ坊主、いいでござるか？」

「どうしました？楓さん」

「先ほど言いかけたことについての続きを聞きたいのでござるが……」

「あっ！」

そう、古のことである

「そ、そうだった！なあネギ、古に何があっ痛！」

思い出したクリリンが再び近づいて問い詰めるが、胸部に激しい痛み

木乃香の魔力節約のため完治はまだしておらず、骨折が数か所残されたままだった

ネギに心配されるがクリリンは、平気平気と痩せ我慢

「いいから早く話してくれ、な？」

「は、はい……」

気を失ったままの真名を除き、ほぼ全員が既にネギの方へ視線を向けている

楓とクリリンの声を聞き、そういえばそうだったと思い出していた

ネギは言いにくそうにしながらも、ゆっくりと口を開く

「実は、さっき……」

「やっぱり、まだ飛行機の中に入ったままだったのね」

「えっと、ここに古老師を入れるんですか？」

「そう」

事の起こりは数分前

古の遺体を別の場所に移すと言って、皆のもとを一時離れたネギ

そこで、向こうからこちらへやって来たブルマと葉加瀬に遭遇した

どうも二人は亀仙人達と同じ客席にいたようで、事態そのものは概ね把握していた

ブルマはネギが抱える古の亡骸を確認すると、こっちへ来て、と案内

会場の外まで移動すると、ポケットからホイポイカプセル
スイッチを押して放り、今日の移動に使った飛行機を出す
そしてすかさずその中から別のカプセルを探し出し、とあるマシンを引っ張り出したのだ
「簡単に説明するとこれは冷凍マシン、ドラゴンボールのことは悟飯君から聞いてるわよね？」
「はい……」
「それを使ってその子を生き返らせるにしても、それまでの間このままってわけにはいかないでしょ？」
だからこの中で身体が腐らないように保持させておくの
そう言うとネギはすぐに納得
「なるほど……それじゃあ、前にもこれを使ったことが？」
「ええ、二回くらいね」
ピッコロ大魔王復活時と、サイヤ人襲来時
これらの戦いで死者が出た際、その死んだ者達を中へと当時収容していた
目の前にあるマシンは、サイヤ人戦の時に積んでそのまま残っていたものらしい

「お、ちゃんと動く……よしよし」

「それじゃあ、入れますね」

横にあるスイッチを入れ、カパッと開かれる透明のハッチ

ネギは優しく古をその中へ仰向けに寝かせた

「これでいいんでしょうか？」

「オッケー、後はハッチを閉め直して……」

ブルマはもう一度スイッチを押してハッチを閉め

「冷凍ガスを出すだ……あれ？」

別のスイッチを押すが、マシンの中では何も起こらない

これには思わず、彼女も首をかしげてしまった

「ガスが出ない……どうしちゃったのかしら？」

「ブルマさーん、何かガスが外に漏れちゃってますよー」

「え！？嘘！」

すると、マシンの反対側に回っていた葉加瀬が故障箇所を発見

数か所ひび割れが見られ、本来内部に出されるべき冷凍ガスがそ

こからだだ漏れであった

「あっちゃー、四、五年近くメンテしてなかったから……」

「えっと、ブルマさん？古老師は……」

そこへ、ネギが不安げな表情で尋ねる

それを見ると、ブルマは急いで行動を起こした

「すぐに修理するから大丈夫よ、えっと工具は……」

飛行機の中に入って修理道具を探し始める

「私も探すの手伝いましょうか？」

「平気平気、葉加瀬はそこでマシン見てて」

葉加瀬は飛行機の外に残された

「あれ？どこやったかしら……」

中から聞こえるブルマの声、どうも捜索は難航中の模様

「……葉加瀬さんは確か、のどかさん達と一緒でブルマさんの家にお世話になってたんでしたっけ？」

「はい、ブルマさんとそのお父さんからは色々勉強させてもらってます」

今度その成果をお見せしましょう、フッフッフ……

そう言ってあやしく笑う葉加瀬にネギはやや動揺

しかしながら、彼の顔には少し笑みが戻っていた

「そうですか……ってあれ!?」

「どうかしまし……ってええ!?」

が、直後それは豹変

驚くネギの視線の先を追い、葉加瀬も同様に驚きの声をあげた

「く、古老師が!古老師が!」

「消え……た?」

マシンの中はいつの間にかもぬけの殻

寝かされていた古の姿はそこに欠片すらない

「い、一体何が!?古老師はどこに!?古老師!?」

「ネギ先生落ち着いてください!」

そこにいたはずの者がいつのまにか消えた

そんな事態に慌てふためくネギを、比較的まだ落ち着きを残していた葉加瀬が制す

「ここにいても始まりません、手分けして辺りを探してみましょう！」

「は、はい！」

言うや否や二人は、古を探しに駆け出した

「……ということがあったんです」

「古がいきなり消えたでござるか！？」

「すみません！僕が傍にいながらこんなことになってしまって……」

一通り話し終えると、ネギはすかさず頭を低く下げる

それを聞き、ピッコロを除いて殆どの者が動揺した

「え、それって……」

そしてその内の一人、クリリンがボソッと言葉を漏らす

「すみませんクリリンさん！僕、本当に何て言ったらいいか……」

その声を聞くと、ネギは反射的にクリリンへ身体を向けてまた頭を下げた

それはさっきよりさらに低く、申しわけなさからか涙が溢れる寸前である

しかしクリリンが発した次の言葉で、思わずネギはその頭を上げた

「いや、違うんだよネギ」

「え？」

クリリンには、というかクリリンとその仲間達には思い当たる節が一つ

「確信はないんだけどよ、もしかしたら古は……」

さらに、その次の瞬間である

“クリリーン！ネギ坊主ー！それにみんなー！”

「え！？古老師！？」

「やっぱり！」

皆の頭の中に、今は亡き古の声が聞こえてきたのは

「何これ!?くーふぇの声がガンガン響いてくんだけど!」

「古ちゃんどこ!?どこにいんの古ちゃん!」

朝倉がこの事態に対して素直に思ったことを述べ、ハルナが首を左右にブンブンと振る

“あ、ちゃんと聞こえてるみたいアルな”

「……なるほどな、そういうわけか」

「ピッコロさん、ひょっとしてこれは……」

一方、既にこの事態を完全に理解したピッコロ

腕を組みながらそれを聞いていたところへ、夕映が近づいて恐る恐る訊いてみる

「む?お前も知っているのか」

「一応話だけは占いババさんから……ということはやはり!」

「ああ、だろうな」

“ハルナー、いくら私探してもそこからじゃ見つからないアルよー”

「古老師!一体今どこにいるんですか!?」

会話が成立出来ているのが分かると、ネギはすぐ古に向けて口を開いた

何故いなくなったか、というか何故普通に喋れているのか

訊きたいことは山ほどあったネギなのだが、古の答えに思わず目を点にする

“私アルか？飛行機の中アル”

「……え？飛行機？」

“いやー私もびっくりしたアル。『天国行き』って巨大なおっさんに言われたと思たら、いきなり横から青いゴキブリみたいなのが現れて乗せられたヨ……“

「え？え？」

“今は大界王星とかいう、悟飯のお父さんもいる修行場へ向かてるところネ”

「大界王星？悟飯君のお父さん？古老師、もっと分かりやすく……」

事の次第が把握出来てないネギは、古から次々と放たれる言葉にただあたふた

というか、ネギ達側の者殆ど（夕映は除く）が同じ様子であった

「おい古、その青いゴキブリというのは北の界王と名乗らなかったか？」

“お、流石ピッコロは鋭いアルな、そうアルよ”

「『目の前の死体が突然消える』、『天国とも地獄とも違う別の場所に向かっている』、ならばそれしか答えは残っていまい」

「え？北の界王？それって確か……」

悟飯が昔自分やコタローに話してくれていた

それを思い出し、口にしようとしたところで

「つまり古菲さんはあの世で修行する道を選んだということです、悟飯さんの御父君と同じく」

夕映が説明に入った

「大界王星についても話は聞いたことがあるです。東西南北四人の界王を統括する大界王様がお住みになっている星で、あの世の武道家がこぞって修行に勤しんでいるとか」

“おおっ！夕映詳しいアルな！”

「ええっと、じゃあ古老師は……」

「『あの世でも元気にやるから心配するな』ということを私達に伝えにきた、ですよね古菲さん？」

“ありゃりゃ、台詞全部取られちゃたネ……”

古はハハハと苦笑すると、コホンと一つ咳払い

“まあそういうわけで、みんなは私の事気にしないで残り一週間を楽しむアル。こっちはこっちで満喫するアルし”

また古は笑うが、今度は苦笑でなく純粋な笑み

それじゃあ最後に、と前置きし

“一週間後、ドラゴンボールで生き返ったらまた会おうアルな！ばいばいアルー！”

こう元気よく言ったところで、古からの通信は終了した

「古老師……」

「古……」

ネギとクリリンが感慨深そうに呟くと、すぐに口の端を上げる

「……あの人らしいですね」

「だな、あいつ死んでるってのに……一年前の悟空を思い出しちまったよ」

二人につられてか、残りの者も小さく笑みを見せた

「……さて、帰るか」

それから少々時間が経って、こう口にしたのはピッコロ

大会も銀河戦士の乱入によってメチャクチャ

決勝戦を今更やり直すなど、もはや無理であろう

それは他も同じ意見だったのか、皆が二つ返事で了承した

「えー、ウチまだみんなの傷治せてへんよ？」

ただし木乃香一人を除いて

「お前の魔力はもう、トランクスと俺の治療で底をついただろ」

「あと俺の右腕な」

ピッコロは首だけを木乃香へ向け、コタローは右腕を回す

「あ、コタ君だめやって！腫れはもう引いとるけど、骨自体はまだくっ付けきれてないん……ふえ？」

コタローにまだ動かさぬよう言おうとするが、突如木乃香は目眩

先ほどの悟飯のように身体をフラつかせ、客席の背もたれにその

身を預けた

「お嬢様！？」

それを見て刹那がすぐさま駆け寄り、そのまま顔を覗き込む

治療の順番をトランクスやピッコロに譲っていたため、まだ身体にはゴクア戦のダメージが

痛みが激しく走るのも構わず、木乃香のもとへ急行

「すー、すー、すー」

「……お嬢様？」

寝息を立て、木乃香は眠っていた

「あ、夕映っちの時と同じだ」

「休憩も一切無しであれだけ治癒魔法を酷使したんだ、こうなってもおかしくはなかろう」

朝倉は昨日の夕映の姿を今の木乃香と重ね、ピッコロは落ち着いた様子で木乃香を見下ろす

「まだ治りきってない怪我人は俺、悟飯、ネギ、刹那、コタロー、楓、それにクリリン……ベジータを入れなくて合計七人か」

ピッコロは夕映の方へ顔を向けるが、『こんなに沢山は無理です』とあっさり返答された

「ならばデンデに頼むしかなさそうだな……お前達、神殿まで自力で飛べるか？」

「だ、大丈夫です……」

「魔力は残ってるので飛ぶくらいなら」

「少し休みましたし無理をすれば平気かと……それに翼もありますし」

「傷は痛むけど気は充分やし、『飛べ』って言われたら普通に俺は行けるで」

「拙者は問題ない、皆と比べれば比較的軽傷でござるし気も大分回復した」

「……悪い、俺無理だわ」

おのおのが言い終わると、ピッコロはしばし思考

一応言っておくとピッコロは余裕、まあ言うまでもないかもだが

「……トランクスにあやか、それとそこのロボは手を貸せ。クリリン、刹那、悟飯の三人を頼む」

「え！？僕大丈夫ですって！」

「私もさっき平気だと！」

自らの名を言われ声をあげる二人だが、ピッコロが鋭い眼光ですぐに黙らせる

「悟飯、ゆっくり休めを俺はさっき言った筈だぞ？それに刹那もその身体では無理だ」

いいからあいつらに手を貸してもらえ

半ば命令口調でそう言われ、二人は渋々それに従った

トランクスは悟飯を、あやかは刹那を、茶々丸はクリリンをそれぞれ背負う

「あ、ピッコロ殿、真名はどうするでござるか？一応夕映殿が治療をしたはしたでござるが……」

「そういえばこいつもいたな……どこかまだ負傷してるのか？」

真名のことを忘れていたピッコロがこう口にすると、夕映が再び近づいてチェック

すると一部骨折箇所があると分かり、真名も神殿行きが決定

ちなみに彼女を背負うことになったのはヤムチャ、自分から進んで手を挙げた

『まったく役に立てなかったから』とは言っているが、別の理由である可能性の方が濃厚

真名がネギの生徒で十四歳であることは、今の彼は全く知らない

「木乃香さんはとりあえず、私やハルナと一緒にブルマさんの家へ行っておきますね」

「分かりました、治してもらったらすぐに向かいます」

刹那はあやかに背負われながらのどかに、お嬢様をお願いします、と最後に一言

のどかはコクリと頷いた

「よし、それでは行くぞ」

そしてピッコロ達は会場を去り、デンデのいる神様の神殿へ

残った者達も、では自分達も帰ろうかと会場内にいる他の仲間と合流

すぐに彼らもまた、ここバトルアイランド2を跡にする

かくして彼らの、大波乱の天下一大武道会は終わりを告げたのだった

「あ、あれ？あいつらはどこ行ったんだ？」

余談だが、サタンはマシンが墜落した際にその衝撃で気絶

彼が目を覚ましたのは、一同が帰って一時間以上もあとのことである（ベジータもとっくに帰った）

「ミスターサターン！ご無事ですかー！」

「あ、プロデューサー！」

「連絡が来なくて心配だったので、勇気を出して様子を見に……あれ？あの悪人どもはどこに？」

「え、ええっとだな……そ、そうそう！あんな奴ら私があっという間に……」

その翌日、サタンは全世界の新聞の一面を飾った

第８５話　古の身に何が！？全て終わり、皆は会場を去る（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「今回のは随分遅めの投稿だな……」

クウネル
「文量が倍近くになっちゃいましたから」

エヴァ
「次回で終わりといった手前、二話に区切るなんて出来んしな」

クウネル
「まあそういうことです」

エヴァ
「それでクウネル、今回のゲストはどうなってるんだ？」

クウネル
「はい、今回はこの三人です」

さよ
「うっ、やっと出させてもらえました……」

お化け
「みなさんお久しぶりです、お化けです」

閻魔
「閻魔大王だ」

エヴァ
「ようやく相坂さよか……」

クウネル
「二件も来たので、折角だからなのでまとめて呼んでみました」

お化け
「おかげで賑やかになりましたね」

さよ
「そうですね」

エヴァ
「でも二回目の出演が完全に未定になったぞ」

お化け&さよ
「あ」

エヴァ
「気付いてなかったのかお前ら……」

クウネル
「まあそれはともかくとしてコーナーの進行を、今回の話ですが……」

エヴァ
「さっきも触れたが文量が半端ないな、文字数にすれば普通に七〇

〇〇字オーバーだぞ」

闇魔
「総まとめということで、あるだけ書いてたらこんなになったらしいぞ」

エヴァ
「危うく投稿予告破るとこだったし……」

クウネル
「でもこれで、大会編無事終了ですね」

さよ
「結局本編で出番一回も貰えなかったです……シクシク」

クウネル
「でもあの世編なら、さよさんだって活躍出来るかもじゃないですか」

さよ
「え？」

エヴァ
「あ、ホントだな。占いババと時々あの世に行ったりしてるんだろ？」

さよ
「は、はい……本編第１０話にもあるとおり、付添いとかで一緒に……」

お化け
「よかったじゃないですかさよさん！」

さよ
「そ、そうですね！私きっと活躍出来ますよね！」

クウネル
「ええ、きっと大丈夫ですよ」

注・大丈夫です

さよ
「やったー！朝倉さん、私やりましたよ！ついに目立てますよ！」

エヴァ
「いや、今朝倉はここにおらんだろ……」

闇魔
「よほど嬉しかったんだろうな」

クウネル
「そう言えば闇魔大王さんは、さよさんと面識が？」

闇魔
「ああ、占いババの用事は基本的に私にだからな、一日復活させる者の受け渡しとか」

エヴァ
「あいつに天国行きの宣告もしたんだったな」

闇魔
「あの時は闇魔帳にデータが無くてかなり焦ってしまった……でもまあ、ここに来てからの行いを考えれば普通に天国行きだ」

クウネル
「結局大界王星に行っちゃいましたけどね」

さよ
「みなさーん！そろそろ次回予告をしましょうよー！」

エヴァ
「テンション高いな、まあ出番確定で嬉しいのは分かるが……」

クウネル
「それでは続きまして、次回予告です」

お化け
「さて、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「以前言ったと思うが、一度ここで番外編を挟むぞ」

クウネル
「内容は今のところ秘密です、というかまだちゃんと決まってません」

エヴァ
「おい！」

お化け

「でもとりあえず、以前水竜さんが感想で意見をくださった『あとがきコーナーのゲスト一覧』は確定です」

さよ
「次回の投稿予定は、来週の水曜日です！」

エヴァ
「いつもより一日先なのは……文字数の検討がつかないからか？」

闇魔
「らしいぞ」

クウネル
「というわけでみなさん、次回のネギドラ！も……」

エヴァ＆さよ＆お化け＆闇魔
「お楽しみに！」

エヴァ
「それで相坂さよ、お前なんで朝倉達に放置されたんだ？」

さよ
「実はですね……」

クウネル
「それについては本編でいずれやりますので、どうぞお楽しみに」

お化け↑知ってる
「別にそこまで凄い理由とかじゃないんですけどね……」

闇魔
「ちなみに、あの世編では私も出るぞ」

番外編2　あとがきコーナーゲスト一覧＋α（前書き）

番外編第二弾です。長い間待たせてしまって本当にすいません、ようやく完成しました。
前回はエヴァとクウネルだけでしたが、今回はゲストも数名呼んであります。
ではどうぞ！

番外編2　あとがきコーナーゲスト一覧＋α

クウネル
「どうも読者の皆様、クウネル・サンダースです」

エヴァ
「エヴァンジェリンだ」

悟飯
「孫悟飯です」

クウネル
「本編の大会編が終了、というわけで番外編第二弾です」

エヴァ
「今何気にゲスト紹介すっ飛ばしたよな……」

クウネル
「今回は我々に加えてゲストに、大会編で大活躍だった孫悟飯君をお招きしています」

悟飯
「どうも」

エヴァ
「まあ順当にＭＶＰはこいつだよな、敵五人中二人撃破でその内一人ボスだし」

悟飯

「ありがとうございます、てことは今からこの三人で進行していくんですね」

クウネル
「いえ、違います」

悟飯
「え？」

エヴァ
「どういうことだ？クウネル」

クウネル
「実は悟飯君以外にもう一組、今回はゲストをお呼びしているんです」

エヴァ
「ほう」

悟飯
「一組ってことは、一人じゃなくて数人ですよね？」

クウネル
「はい、現在はあちらに隠れてスタンバイ中です。そろそろ呼んでみましょうか」

～あちら～

？？？1
「ねえ、ホントに私達あんなことするわけ？」

？？？2
「やっぱり私恥ずかしいよー」

？？？3
「しょうがないじゃないですか、あれだけあの人にやれと言われたわけですし……」

クウネル
「皆さーん、もう出てきていいですよー」

？？？2
「ひゃあっ、呼ばれちゃったよ！」

？？？4
「……もう腹を括るしかないアルって」

？？？5
「まあ仕方ないでござろう、折角招かれたのだしこれくらいのことは……」

？？？3
「ですよね……」

？？？1
「……ああもうっ！分かったわよ！やればいいんでしょ！」

？？？2
「ううう……」

エヴァ
「おい、全然出てこんぞ」

悟飯
「何かトラブルでもあったんでしょうか？」

クウネル
「変ですねえ……あ、出てきますよ」

？？？1～5
「とおうっ！」

シュバッ！

スタタタタッ！

エヴァ
「……え？」

注・感づいた方はどうぞ脳内再生であの曲を

？？？５
「……アイヤーーーーー！」

バッ！

？？？４
「バカイエロー！」

バーン！

？？？５
「……忍忍忍忍忍忍っ！」

バッ！

？？？５
「バカブルー！」

バーン！

？？？１↑頭を一回ぐるっと回しました

（あああもうっ！なんでこんなこと……）

バッ！

？？？１

「バカレッド！」

バーン！

？？？２

「……たりゃあああああっ！」

バッ！

？？？２

「バ、バカピンク！」

バーン！

夕映↑一人だけ後ろ向き

（しかしながら、やはりこのポーズの意図は理解しがたいです……）

バッ！

？？？３

「……バカブラック！」

エヴァ

「……」

悟飯
「……」

古
「みん！」

楓
「な！」

アスナ
「そ！」

まき絵
「ろっ！」

夕映
「て！」

バンッ！

バンッ！

バーーーーーーン！

古&楓&アスナ&まき絵&夕映
「まほら戦隊　バカレンジャー！」

……シーン

エヴァ

「な、何やってるんだお前ら？しかもそのポーズって……」

アスナ
「ほらーー！やっぱりスベったじゃない！」

まき絵
「結局恥かき損だよーー！」

古
「折角木乃香にバカレンジャーの衣装作ってもらたアルのに……少しもったいなかたアルな」

夕映
「皆さんはまだマシですよ、私なんて二か月前（第７０話分参照）からこんな恥ずかしいポーズの練習を一人で……」

楓
「ううむ、やはり問題はこのポーズなのでござろうか……ん？」

悟飯
「……か、カッコいい！」

バカレンジャー全員＆エヴァ
「えええええっ！？」

クウネル
「うわあ、ホント見事に反応しましたね……」

エヴァ
「ちょっと待て孫悟飯！お前の目はふし穴か！？」

アスナ
「これのどこがいいっていうのよ！」

まき絵
「そうだよ！ポーズだってすんごくダサダサだし！」

夕映
「実際にそれをやった私達が言うのもアレなわけですが……」

悟飯
「だって正義の味方みたいじゃないですか！僕そういうの憧れちゃいます！」

エヴァ
「いやいやいや、このポーズの創主は悪人集団だってば」

古
「……まあいいアルか、完全にスベった気まずい雰囲気よりはましネ」

楓
「そうでござるな……ところでクウネル殿、拙者達のこのコスチュームなんでござるが……」

クウネル
「あ、終わるまで着ててください」

楓
「やはり……」

注・ちなみに着てるのは『ネギま!?』のバカレンジャーの衣装です

悟飯↑キラキラした瞳
（僕もいつか、こういう恰好を一度でいいからしてみたいなあ）

クウネル
「というわけで、今回はこの総勢八人でお送りいたします」

エヴァ
「やっと始まったか……で、今回の番外編は何やるんだ？」

クウネル
「はい、ます始めはこれです！」

『あとがきコーナー　歴代ゲスト一覧表』

夕映
「水竜さんから要望があったやつですね」

クウネル
「そうです」

古
「結構回数重ねてたアルよね、あのコーナー」

アスナ
「確か私といいんちょの試合があった第３７話から始まって……」

楓
「ピッコロ殿と刹那殿の試合があった第３９話からゲストを呼び始めたでござる」

まき絵
「それで前回が第８５話なわけだから……ええっと……」

悟飯
「コーナー自体は４９回、ゲストが出たのが４７回になりますね」

まき絵
「そ、そうそう！」

クウネル
「というわけでゲスト一覧表です、どうぞ！」

第３９話　占いババ、アックマン

第４０話　ピッコロ大魔王、学園長

第４１話　タカミチ

第４２話　ラカン、リクーム

第４３話　美空、バータ

第４４話　千鶴、ネカネ、チチ

第４５話　アキラ、カリン

第４６話　カモ、ウーロン、プーアル、アーニャ

第４７話　茶々丸、ハッチャン

第４８話　茶々丸、田中、アラレ

第４９話　風香、史伽、ウミガメ

第５０話　フェイト、フリーザ

第５１話　まき絵、バクテリアン

第５２話　チャチャゼロ、ドラキュラマン

第５３話　ランチ

第５４話　アスナ、鶴仙人

第５５話　ザジ、ミスターポポ、あやか

第５６話　ヤムチャ、美砂

第５７話　朝倉、アナウンサー

第５８話　千雨、界王

第５９話　真名、桃白白
第６０話　餃子、ココネ、美空
第６１話　ブルマ、刀子
第６２話　ピアノ、シンバル、タンバリン、ドラム
第６３話　トランクス、円
第６４話　悟空、クリリン
第６５話　ボンゲボンゲ、イノシカチョウ
第６６話　月詠、クウラ、サウザー、ナッパ
第６７話　楓、ムラサキ曹長
第６８話　バーダック、ターレス、ベジータ王
第６９話　ピラフ一味、高音、ガンドルフィーニ
第７０話　夕映、ギニュー
第７１話　ネギ、デンデ
第７２話　亀仙人、悟飯（爺）、牛魔王
第７３話　神様、シャークティ

第７４話　悟飯、ビーデル
第７５話　千草、ブラック将軍
第７６話　プーアル、桜子
第７７話　カリン、ヤジロベー
第７８話　夏美、スケさん
第７９話　アスナ、古、ジャッキーチュン
第８０話　亀仙人、カモ、ブルマ、アーニャ
第８１話　占いババ、高音
第８２話　トランクス、ベジータ
第８３話　ブロリー、１３号
第８４話　ブルマ、ブリーフ、葉加瀬
第８５話　さよ、お化け、闇魔大王

アスナ
「な、長っ……」

楓
「さぞかし調べるのに苦労したでござろうな……」

夕映
「一回紙に書いてまとめてから打ち直したそうです」

クウネル
「あと『ブルマが三回出てるじゃん』と気付いた方、どうかスルーでお願いします」

注・これ書いてみるまで素で気付いてませんでした

エヴァ
「ゲスト一覧表をやると決まった時点で逐一書いておけば良かったものを……」

クウネル
「塵も積もれば、ってやつですかね」

まき絵
「でもこれで、誰が何回出たかも一目瞭然だね」

悟飯
「そういえば僕達の仲間の中で、まだの人が二人いるんでしたっけ」

クウネル
「正確には『出てもいないし、リクエストももらってない』のが二人です」

古
「えっと、さっきの一覧表に名前が無いのは超とサツキと刹那とコタローと……」

クウネル
「あ、その四人はもうリクエストもらってます」

アスナ
「じゃあパル？」

エヴァ
「あいつも既にリクされてる、作者が感想の返信でちゃんと書いてるぞ」

まき絵
「分かった！サタンとかいうあのおじさん！」

悟飯
「サタンさんもリクされてます、五月さんと一緒に」

クウネル
「あとまき絵さん、一応言っておくとサタンさんはクリリンさんと歳一緒です」

まき絵
「え！？ホント！？」

注・らしいです

夕映

「あの二人しかいないじゃないですか……」

楓
「でござる」

エヴァ
「お、ブラックとブルーはもう分かってたか」

夕映
「そりゃまあ」

楓
「身内でござるから」

まき絵
「え、じゃあ何？まだ分かってないの私達三人だけ！？」

エヴァ
「そうだよ」

アスナ
「ちょ、ちょっと待って！ええっと、夕映ちゃんと楓さんの身内ってことは……ああっ！」

古
「分かたアル！」

エヴァ
「ようやくか……」

まき絵
「え？え？誰？」

エヴァ
「ってお前もいい加減気づけ！」

アスナ
「本屋ちゃんと！」

古
「ピッコロアル！」

まき絵
「……あ！ホントだ！」

夕映
「そういうことです」

エヴァ
「しかしピッコロは意外だよな、あいつメインキャラなのに」

悟飯
「まあこの作品自体、登場キャラクター数がかなり多いですからね」

アスナ
「おかげで書き忘れが起こって、そのままずっと放置されるキャラとかが出てくるのよね」

クウネル
「五月さんとか、さよさんとか……最近までは葉加瀬さんとかもそ

んなでしたね」

アスナ
「あと私ね、気失ったままどんどんストーリーが進んでいって……」

エヴァ
「それは前にお前がゲストで出た時も触れただろ」

アスナ
「だって絶対おかしいじゃない！何なのよこの扱い！」

夕映
「でもアスナさん、ちゃんと終盤で目を覚ましましたよね？」

アスナ
「目が覚めた描写があっただけで台詞ゼロよ！？出番無しと全然変わらないじゃない！」

楓
「まあ後半は対ボージャック戦の描写が中心だったのでござるし、仕方な……」

アスナ
「にしては楓さん、ピッコロさんとめっちゃ喋ってたじゃん！」

クウネル↑本編読んで確認
「あ、ホントですね。戦線離脱のキャラの中ではトップクラスで喋ってます」

アスナ

「解説とかばっかりして、●塾の雷●かっての！私にも出番よこしなさいよーーー！」

まき絵
「ちょっ、アスナ落ち着いて。何か台詞に伏せ字入ったよ！？」

夕映
「それにそのネタ、多分十代の読者の九割が『？』になるかと」

アスナ
「むきーーーー！」

エヴァ
「いい加減にしろ神楽坂明日菜！おい、誰かこいつ止め……」

夕映
「眠りの霧〈ネブラ・ヒュプノーテエイカ〉」

アスナ
「グガーーーー」

エヴァ
「って早！」

クウネル
「お見事です夕映さん」

夕映
「伊達に占いババさんのところで修行してないですよ」

エヴァ
「ん？神楽坂明日菜の魔法完全無効化〈マジックキャンセル〉はどうした？」

夕映
「アスナさん自身を対象に取ると無効化されてしまうので、対象を取らずに発動させたです」

エヴァ
「というと？」

夕映
「空間的に発動させて、『発動箇所の周囲にいる者を、誰これ構わず眠らせる』ようにしました」

まき絵
「スカーーー」

古
「あ、まき絵も寝てしまってるアル」

夕映
「まあ、まき絵さんはそのための犠牲ということで」

エヴァ
「何気に酷いこと言うな、綾瀬夕映」

注・何かおかしなところあったらスイマセン

クウネル

「えっと、では続きまして番外編企画第二弾」

『天下一大武道会　ベストバウトトップ３』

クウネル
「です」

悟飯
「えっと、何ですかこれ？」

クウネル
「天下一大武道会で行われた対戦に、作者が勝手に順位を付けて紹介する企画です」

エヴァ
「誰得だよその企画……」

クウネル
「では早速、第３位です」

『準決勝第３試合　●クリリンＶＳネギ・スプリングフィールド○』

古
「おっ、クリリンの試合アルな」

クウネル
「『ネギの新技登場』、『気を操った巧みな攻撃によるクリリンの奮戦』等が主な理由だそうです」

エヴァ

「そういえばあの魔力版魔閃光、銀河戦士と戦ってた時に一回も使わなかったな」

夕映
「どうも作者さんがスッカリ忘れてて、思い出した時にはもう退場してたんだとか」

エヴァ
「おいおい……」

クウネル
「続きまして第2位」

『準決勝第二試合　●犬上小太郎ＶＳ長瀬楓○』

楓
「拙者のでござるな」

クウネル
「『楓の新技登場』、『まほら武道会では無理だった二人の再戦が実現出来て良かった』、『何気に獣化コタローが小説初登場』が選考理由です」

エヴァ
「こっちの新技はちゃんとボージャックに使ったよな」

楓
「結局簡単に破られてしまったでござるがな……まだまだ修行が足りぬでござるよ」

悟飯
「でも二人の戦いは見てて凄かったです！」

古
「いやいや、私としてはやはりクリリンの試合の方が良かったと……」

悟飯
「コタロー君のですよ」

古
「クリリンのアルよ、この順位おかしいアル」

悟飯
「コタロー君のですよ」

古
「クリリンのアルよ」

クウネル
「もしもし？続きやりますよ？」

エヴァ
「構わんでいいからさっさとやれ」

クウネル
「そうですか？……では注目の第１位！」

『準決勝第四試合　○トランクスＶＳピッコロ●』

エヴァ

「まあ普通にそうなるよな」

夕映
「文字数からしても凄い熱の入れようでしたからね」

クウネル
「『サブタイ通り、超戦士対超戦士の戦いは書いててテンション上がった』、『ピッコロの影分身』、『トランクスの超サイヤ人2』、『全試合中最長』が選考理由です」

楓
「確かにピッコロ殿の影分身は、拙者も本当にビックリしたでござるよ」

夕映
「私としてはトランクスさんの超サイヤ人2に驚いたですかね」

クウネル
「ただその両方とも、銀河戦士戦では活躍の場が少なかったんですよね」

エヴァ
「影分身はボージャック戦の序盤だけ、超サイヤ人2もすぐ解除しちゃったしな」

古↑悟飯の頬を引っ張ってる
「クリリンのアルーーー」

悟飯↑古の頬を引っ張ってる
「ピッコロさんとコタロー君のですーーー」

エヴァ
「ってお前らまだやってたのか！？子供同士の喧嘩か！」

夕映
「一応二人とも、まだ『子供』と形容される年齢ですけどね」

楓
「しかし、古はクリリン殿と出会って変わったでござるなー」

クウネル
「まあ、基本はいつもの古菲さんですがね」

エヴァ
「……では次の企画にいくか、クウネル」

クウネル
「あ、ちなみに次のが最後の企画です」

悟飯↑やめた
「え！？」

古↑もうやめた
「もう終わりアルか！？」

エヴァ
「まあ前回がキャラ紹介だけで終わってたくらいだしな、三つでも充分多いか」

クウネル

「というわけで、番外編最終企画はこちら！」

『どうする！？やっちゃう！？ネギドラ人気投票！』

アスナ
「ふあああああっ……ん？人気投票？」

夕映
「げ、もう起きたですか？アスナさん」

アスナ
「うん……あれ？何で私寝ちゃってたんだっけ」

古
「覚えてないアルか……ってまき絵はまだ寝てるアルし」

まき絵
「クカーーーー」

アスナ
「私普段から早起きだからかな……こっちに来てからも天津飯さんと早朝修行結構してたし……」

エヴァ
「とりあえずお前は黙ってろ……さてクウネル、大体見当はつくが一応説明しろ」

クウネル
「はい、読んで字の如く『この作品の人気投票をやるかどうか』を読者の皆様に提案してみる企画です」

悟飯
「あ、『人気投票をやるお知らせ』ではないんですね」

クウネル
「そうです、『とりあえず読者の皆様に一回提案してみよう』というのがこの企画です」

エヴァ
「賛同者皆無のまま勝手に始めて投票ゼロじゃシャレにならんからな……」

楓
「それで、概要はもう決めてあるのでござるか？」

クウネル
「まだかなりアバウトですが、一応あるにはあります」

エヴァ
「じゃなきゃこの企画自体出来んだろ……」

クウネル
「というわけで、こちらがネギドラ人気投票概要（草案）です」

ネギドラ人気投票

・実施期間　正式に『やる』と小説内で書かれた日～まだ未定

・投票手段　小説の感想ページに書き込むｏｒ作者カゲシンへ、ユーザーページからメッセージを送る

・投票ルール？　好きなキャラを七名分まで書いて投票が出来る

・投票ルール？　『七名分』なので、同じキャラの名前を書いてもよい（例　悟飯、悟飯、悟飯、悟飯、悟飯、ネギ、ベジータ）

・投票ルール？　ただし同じキャラは一回の投票につき最大五名分まで、悟飯×６とかネギ×７はダメ

・投票ルール？　投票出来るのは、一話更新ごとに一名様一回

・投票ルール？　一回目の投票と二回目の投票でキャラが一部かぶっても良いが、それでもお一人様一キャラへ合計最大五票

・投票ルール？　投票出来るのは本編登場キャラだけ、あとがきコーナーのみの登場キャラはダメ、プーアルはぎりぎりセーフ

・結果発表　投票締め切り後特番的な感じにして番外編で発表、上位にランクインしたキャラは全員ゲスト出演確定

クウネル
「という感じです」

エヴァ
「私へ投票が出来ないのはとりあえず置いとくとしてだな……投票期間の『まだ未定』ってなんだ？」

クウネル
「いや、本当にまだ未定なんですって。『一か月間とか日時的にする』とか『あの世編終了までやる』とか『一定の票数溜まるまでやる』とか『いっそのこと最終回になるまで投票続行』とか、作者としても色々考えてるんですよ」

楓
「最終回までは流石に長すぎでござろう……」

夕映
「ああ成程、その点についても読者の皆様の意見を仰ぎたいと」

クウネル
「そういうことです」

エヴァ
「『一回につき七名まで投票』はまあ、キャラ数を考えれば妥当だな」

クウネル
「まあぶっちゃけ、得票数を稼ぐ意味でもそうしたんですけどね」

夕映
「つまりまとめると……」

・そもそも人気投票をやるかどうか

・もしやるとすれば投票期間はどのようにすれば良いか

・それ以外の事項についても、何か変更をした方が良い点があるか

夕映
「『上記三点について、読者の皆様のご意見を募集する企画』だと」

クウネル
「つまりはそういうことです」

注・読者の皆様、ご意見お待ちしています

古
「よろしく頼むアルよー」

エヴァ
「……さて、これで今回の番外編企画も全て終了か」

楓
「あっという間だったでござるな」

アスナ
「え？ゲスト一覧以外何かやったっけ？」

夕映
（ここは言わないでおく方が良さそうですね……）

アスナ

「ちょっとー、なんで黙ってるのよー？」

エヴァ
「では最後に、恒例の次回予告だ」

アスナ
「ねえったらー」

クウネル
「さて、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「いよいよ本編はあの世編に突入だ」

古
「私が大界王星でガンガン修行するアルよ！」

楓
「悟空殿やパイクーハン殿、その他あの世のキャラクター続々登場でござる」

アスナ
「え、何それ！？それって古ちゃんがその間出まくりってことじゃない！」

夕映
「アスナさん、それが終わればちゃんと私達の出番もあるですから……」

アスナ

「納得いかない！」

エヴァ
「おい綾瀬夕映、もう一回やれ」

夕映
「はいです」

アスナ
「ちょっ！夕映ちゃん何する気よ！？」

悟飯
「次回の投稿予定は来週の木曜日です」

エヴァ
「これまた随分……」

クウネル
「パソコンの使用時間に制限がかけられて、執筆にかなり影響してるんだとか」

注・こんなのばっかで本当にすいません……

古
「でも、火曜とか水曜に出来たらその日に投稿するアルよね？」」

注・はい、活動報告等でお知らせいたします

エヴァ
「では読者の諸君、次回のネギドラ！も……」

クウネル&楓&古&悟飯
「お楽しみに！」

アスナ↑少し思い出した
「二度も喰らってたまるもんですか！」

夕映
「は、速いです！」

まき絵
「ムニャムニャ……ネギくーん、餃子くーん……」

番外編2　あとがきコーナーゲスト一覧＋α（後書き）

いかがだったでしょうか？

というわけですので、皆様からのご意見お待ちしています。

あ、ちなみに『あの曲』というのは『参上！ギニュー特戦隊』のことです。分かりづらかったならスイマセン。

第８６話　今日からここが修行の場　大界王星へ古到着（前書き）

早く書けたので水曜日に投稿です、なんとかこれからもこのペースでやれたら良いんですが……

さて、この第８６話からあの世編です。大会編も終わって心機一転、頑張ります。

それと今回は重大なお知らせが！詳細はあとがきコーナーで。

ではどうぞ！

第８６話　今日からここが修行の場　大界王星へ古到着

「さーて、着いたぞ」

「おおおおっ！ここが大界王星アルか！」

ネギ達へメッセージを告げて数分後

閻魔大王の館からの飛行機に揺られながら、ようやく古と界王は到着した

飛行途中に見えた蛇の道等にも、多大に興奮していた古

目的地であるここ大界王星に着くや否や、さらにテンションはハイになっていた

「そうじゃ……今日からドラゴンボールで生き返るまでの一週間、お主はここで生活しながら修行するんじゃ」

「ここには強い奴がいっぱいアルよね！？」

「うむ」

「うううう……ワクワクが止まらないアル！」

古は嬉しさのあまりその身を震わせ、それを見て界王はフフフと微笑む

（本当に、あいつの言った通りじゃわい……）

実はこの古の大界王星行き、そうさせてやろうと考えたのは界王自身ではなかった

他でもない悟空である

その経緯は、ほんの十数分前……

「……なあ界王様」

「ん？何じゃ悟空」

悟飯の勝利を見届け、地球の危機が去ったことに安堵していた一同

そんな時何か思い出したか、悟空は後ろにいた界王へ振り返って尋ねる

「古、だったっけ？あいつはもう天国行っちまったのかな？」

「ああ、あのクリリンと一緒におった娘か……」

死んだ者は必ず閻魔大王の館へ向かい、天国行きか地獄行きかを決められる

これは全宇宙どこでも同じであり、善人悪人共に例外は無い

悟空やパイクーハンといったあの世の武道家達も、やはり一度はそこを介して大界王星へ行った

「そうじゃのう……時間的に考えれば、そろそろ閻魔の奴が判決を下しとる頃か」

「そっか……そこでなんだけどよ、今からでもこっちに連れて来るって出来ねえかな？」

「なぬ？」

悟空の提案を聞き、界王はあっけにとられた表情

逆にパイクーハンは『ほう、成程な』と、どこか納得したようなそれ

「あいつってオラみてえに修行好きっぽいからさ、ここへ連れて来て修行させてやればきっと大喜びすると思ってよ」

「修行好き……そういえばそうじゃったのう」

ネギ達がやって来てから二週間、ちょくちょく皆の様子を観察していた界王

その中でも特に古はそれが顕著で、印象に残っていたことを思い出す

「じゃがここの連中はレベルが高いぞ?あの子がついていけるか……」

「心配ねえって、真名だってここでメキメキ実力を上げたんだ。古にだって当然出来るさ」

「俺もそう思います界王様。別次元の地球から来たという彼女らの上達ぶりには、目を見張るものがあるかと」

それこそ、こちらの地球人と比べて段違いに

途中で会話に入ってきたパイクーハンはこう言うと、チラリと悟空に視線を向けた

悟空はそれを無言の頷きで返し、パイクーハンは視線を再び界王へと戻す

「それに界王様、このタイミングで期待のルーキーが入るのは喜ばしいことの筈では?」

「え!?じゃ、じゃがそれまではあと一週間しか……」

「オラがその間一緒に修行してみっちり鍛える、きっと面白えことになるさ」

「ううむ……」

パイクーハンの発言を聞き、そこからすぐに彼の意図を察した界王
既に悟空もパイクーハンと同じ考えのようであり、界王は思わず口を結び黙り込む
（確かに、彼女達の上達ぶりにはワシも心底驚いておる……じゃが、まさかそこまで一気に強くなるなんてことは……）
「界王様、早くしねえと古が閻魔様に天国へ連れてかれっぞ」
ついには悟空にもせかされる始末
そこから数秒ほどして、ようやく界王は口を開いた
「……まあ、他の北の銀河の仲間達にとってもいい刺激になるじゃろう」
「おっ、それじゃあ……」
「じゃがしかし！一週間後のメンバーは決して贔屓目なんかでは決めんぞ、ちゃんと各々の力量を見た上で判断する。良いな？」
「ああ、つまり古をこの一週間でしっかり鍛え上げればいいわけだろ？」
その言葉を聞き、待ってましたとばかりに悟空は笑みを浮かべる
悟空としては、要は古がここに来ることが決定すればそれで良かった

そうと決まれば早速行こう、とそのまま界王の腕をガッシと掴む

「閻魔のおっちゃんのとこへ瞬間移動だ」

次の瞬間、パイクーハンの視界から悟空と界王は消えた

そして丁度ギリギリのタイミングで、古の前に二人が登場

そのまま理由を説明し、すぐに彼女に肉体を与えた

大界王星へは悟空の瞬間移動で一気に行っても良かったのだが、『飛行機に乗って色々見てみたいアル！』という古の要望で移動は飛行機

悟空は一人瞬間移動でさっさと帰還し、界王と古の二人だけで乗ってきたというわけだ

「さて、ますは他の者との顔合わせじゃな」

ついて来い、と界王は古の先を歩いていく

「あ、待つアルよー！」

慌てて古はあとを追った

石材か何かで舗装された幅二メートルにも満たない一本の道、そこを二人は歩いていく

両脇には緑の芝、そこで数組の武道家達が組み手をしてるのが目に入った

「あ、北の界王様！」

「どうも、こんにちは！」

彼らは界王が目に入るや否や、たちまち組み手を中断し会釈

界王はそれらをウムウムと首を縦に振って返し、そのまま進んでいく

「随分みんなに尊敬されてるアルな」

「そりゃワシは栄えある北の銀河の界王じゃからな、それをお主は青いゴキブリなどと……」

「それについては悪かたアルって……」

飛行機でネギ達へ喋っていた際の、『青いゴキブリ』発言

閻魔大王の館で会った時は胸に押し留めていたのだが、あの時は

ついうっかり口に出してしまった

会話終了直後に古が見た界王のあの表情は、今でも脳裏にすぐ浮かび上がってくる

まあそんなこんなで、二人が足を止めたのはそれから一、二分もした頃

白を基調とした神殿風の建物を前にし、界王が大声で叫んだ

「おおーい！皆の者ー！連れて来たぞー！」

その直後

「界王様遅っせーぞ！」

「お待ちしていました、界王様」

「お、後ろにいるその子が……」

「うおおおっ！？」

建物の中から数十名の戦士が次々と姿を見せ、古を驚かせる

人間と同じような姿の者もいれば、獣やその他人外の容姿を持つ者

背丈も古の半分位のから、果ては倍近くはあろうかというのまで

さらにはパステルカラーの皮膚の色や、頭部からニョキッと生える触覚等様々

宇宙各地から来てるだけあり、皆が一堂に会するこの光景は正に圧巻

古の予想を遥か斜めにいっていた

「ワシが管轄する北の銀河の武道家達、つまりお前の先輩じゃな」

すると界王はその内の何名かの簡単な紹介を始める

「あいつはミゴレン、七千年前に自分の星を襲ってきた極悪エイリアンと最後まで勇敢に戦った戦士じゃ」

「よろしくー」

「よ、よろしくアル」

青色の体毛で、犬型の顔をした戦士ミゴレン

といってもちゃんと二本足で立っており、背は大体古より頭一つ大きいくらい

古は少しづつ心を落ち着かせながら、彼に言葉を返す

「それでもってその右隣にいるのがオリブー。お前と同じく地球出身の戦士でな、こっちの地球では神話にまで名を残しておる」

「また地球出身の仲間が増えて嬉しいぜ、よろしくな」

「ウ、ウム」

ミゴレンより数段大きな体躯の持ち主、オリブー

地球出身なだけあって容姿はもちろん完全な人間で、髪は背中まで伸びるクセのある金髪

古のいる地球でのギリシャ神話の人々を連想させる白い服からは、隆々とした筋肉が顔を見せていた

「そして一番前におるのが孫悟空、お主もついさっき会ったじゃろ？オリブーと同じく地球出身で孫悟飯の父親、現在北の銀河で一番の実力の持ち主じゃ」

「おっす、オラ悟空！オラのことはクリリンから色々聞いてんだろ？」

「勿論アル！」

あらかた緊張が解けたのか、古はいつもの元気のある声で返事

それが容易に見て取れた悟空は、ニッと笑って古の方へ歩を進める

ちなみにであるが、北の銀河の面子を集合させたのは悟空

瞬間移動で大界王星に戻ってから、急いで集めて回ったらしい

「今日から一週間、オラがみっちり修行に付き合ってやる」

「本当アルか！？」

「ああ、絶対強くしてみせる。一週間後の大会へ出られるくらいにな」

「？」

一週間、つまりここにいる間中ずっと修行の相手をしてくれるという悟空

それに歓喜しない古ではない

が、次の言葉には理解がすぐに追い付かず首をひねった

「……大会？」

「あれ、界王様まだ言ってなかったんか？」

「あ、スマン。言い忘れとった」

「え？何アル何アル？こっちでも大会やるアルか？」

ようやくある程度把握したのか、古は悟空と界王を交互に見ながら尋ねる

「そうさ、あの世一武道会。あの世で一番の武道家を決める大会だ、期日はちょうど一週間後」

「おおっ！」

するとオリブーが前に出て、二人に代わり説明

当然、古は感嘆の声をあげた

「私も出られるアルか！？」

「代表選手は各銀河で四名づつ、それに入れなければ客席で応援だ」

「よ、四人……」

古は悟空やオリブーを始めとし、北の銀河の面々を見やる

これだけの数の中から、出られるのはたったの四名

それがかなりの狭き門であるというのは、古も容易に想像がついた

「そう、たったの四人じゃ。といっても前大会ベスト８の悟空とオリブーは確定みたいなもんじゃから、実質残り二枠の取り合いになるな」

「むむむ……」

続く界王の言葉に、顔を苦くする古

正直言うと、少々自信がなくなってきた

他の者の気を感じてみると、自分より上が殆ど

期日まで僅か一週間、彼らを超えて残り二枠に入れるのか？

不安が古の頭を駆け巡る

「なーに、心配すんなって！今から頑張りゃいいんだからよ！」

そんな彼女の肩に、悟空が笑いながら手をかけた

どこか不思議と安心感を覚え、古は表情を緩ませて悟空を見上げる

「んじゃ、早速修行始めっか！ちゃんと手合わせしてオメエの実力も分かっときたいからな」

「……」

さらには、どこか自分と近いものまで感じた

（……そういえば前にクリリンが言てたアルな、『お前の姿を見てると悟空のことを思い出す』って）

こういう、いつでも明るく前向きなところ

そして純粋に、強い者と戦うことに楽しさを覚えるところ

『我只要和強者闘』

これは古の座右の銘、意味は『私が望むのは、ただ強者との闘いのみ』

そう、悟空もまた同じ志（こころざし）を持つ者

だからこそ、今の自分がどれだけ自分らしくないのか

彼と自分を見比べて簡単に分かる

（ははは、そうアルよな……私は私らしく、アル！）

「どうした古、武道大会出てえんだろ？」

「……当たり前アルよ！」

古はまた、いつもの古に戻っていた

「そうこなくっちゃ……よし！行くぞ古！」

「了解アル！」

拳を作り、そのまま右腕を天へ突き出す

「じゃあ界王様！オラ達はいつもの場所で修行してっから！メシの時間になったら呼びに来てくれ！」

「死んでるのに腹が減るアルか？」

「こっちのメシは最高にうめーぞ！あとでオメエも一緒に食おうな！」

すぐに二人は駆け出し、この場を跡にした

あの世一武道会まで、残すはあと一週間

第８６話　今日からここが修行の場　大界王星へ古到着（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、人気投票が正式に決定いたしました」

エヴァ
「おい、さらっと何気なく言うなよ……」

クウネル
「というわけで今回のあとがきコーナーは、ゲストに刹那さんとヤジロベーさんの剣士コンビをお招きして……」

刹那
「私達の紹介もあっけなくされちゃいましたね……」

ヤジロベー
「俺は別に構わねえけどな」

クウネル
「『ネギドラ！人気投票』について、読者の皆さまにご説明しようと思います」

エヴァ
「じゃあ今回本編トークは無しか？」

クウネル
「まあそういうことです」

刹那

「したら文字数が凄いことになりそうですしね……」

クウネル
「あ、でも次回予告はやります」

ヤジロベー
「どうでもいいからさっさと始めようぜ」

クウネル
「はいはい……というわけで、正式に決まりましたのがこちらです！」

ネギドラ！人気投票

・実施期間　2月2日～3月18日（仮）

・投票手段　小説の感想ページに直接書き込む感想投票ｏｒ作者カゲシンへメールを送るメッセージ投票

・投票ルール？　好きなキャラを七名分まで書いて投票が出来る

例）悟飯、ネギ、コタロー、トランクス、刹那、楓、ピッコロ

・投票ルール？　『七名分』なので、同じキャラの名前を書いてもよい

例）悟飯、悟飯、悟飯、ネギ、ネギ、ベジータ、ベジータ

・投票ルール？　ただし同じキャラは一回の投票につき最大五名分まで、悟飯×６とかネギ×７はダメ

例）悟飯、悟飯、悟飯、悟飯、悟飯、ピッコロ、トランクス

・投票ルール？　投票出来るのは、一話更新ごとに一名様一回

・投票ルール？　一回目の投票と二回目以降の投票でキャラが一部、もしくは全部かぶっても良いが、それでもお一人様一キャラへ合計最大五票

・投票ルール？　投票出来るのは本編登場キャラだけ、あとがきコーナーのみの登場キャラはダメ、プーアルとかはぎりぎりセーフ

・結果発表　投票締め切り後、キリが良い時に特番的な感じにして番外編で発表

上位にランクインしたキャラは全員ゲスト出演確定

クウネル

「……どうですか？刹那さん」

刹那
「いや、いきなり私にふられても……」

エヴァ
「基本的には、番外編2で出した草案と殆ど変わっていないな」

クウネル
「ですね、『ここはこうした方がいい』的な意見が無かったのでそのまま変えていません」

エヴァ
「せいぜい実施期間がちゃんと決まったくらいか……でもなんか（仮）ってあるぞ？」

クウネル
「ああ、それは保険的な処置です」

刹那
「保険？」

クウネル
「実施期間そのものについては、葵さんが感想でくださった意見をそのまま採用しています」

ヤジロベー
「だな、一ヵ月半だし」

クウネル
「しかし『短いかもしれない』という可能性も否めないので、とり

あえず（仮）という書き方にしておきました」

エヴァ
「てことは場合によって延びるのか？」

クウネル
「はい、おそらく半月単位ほどで。でも基本的には一ヵ月半で終了させるみたいですよ」

刹那
「ちゃんと票が集まるといいですね……」

クウネル
「感想投票については、ぶっちゃけ本編の感想が無くても別に構いません。投票だけとかでも大歓迎です」

ヤジロベー
「ホントにぶっちゃけたな」

エヴァ
「……コホン、というわけで『ネギドラ！人気投票』は本日2月2日から早速開始だ」

刹那
「読者の皆さん、清き一票（七票？）をよろしくお願いいたします」

注・よろしくお願いします！

クウネル
「では最後に、次回予告です」

刹那
「さて、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「孫悟空と古菲のあの世での修行が本格的にスタートだ」

クウネル
「どうも最初に、お二人が実戦形式の組み手をするみたいですよ」

ヤジロベー
「ははっ、そりゃ結果見えてんじゃねえか」

刹那
「そしてそんな古達のところに、とある二人組が登場です」

エヴァ
「次回の投稿予定は来週の火曜日だ」

クウネル
「執筆具合によってはこれより早く出来るかもです、今回みたいに」

ヤジロベー
「またそん時は活動報告で知らせるってよ、見る奴いんのか？」

刹那
「では皆さん、次回のネギドラ！も……」

エヴァ&クウネル&ヤジロベー
「お楽しみに！」

クウネル
「ところで刹那さんは、この人気投票で御自分は何位くらいに入ると思いますか？原作人気投票最多一位獲得者として」

刹那
「そ、そうですね……悟飯さん達もいますし、トップ５くらいまでに入れれば……」

ヤジロベー
「おい、聞いたか？『トップ５くらいまでに入れれば』だってよ」

エヴァ
「人気キャラは余裕だなー、投票されない私や不人気キャラへの嫌味か」

刹那
「え！？ち、違いますよ！」

注・投票、お待ちしてます

第８７話　もう一人のニューフェイス　南銀河の英雄現る！（前書き）

なんでこんなに早く書けたか自分でも不思議でなりません……というわけで、一日空けの第８７話投稿です。
早速投票いただけました、ありがとうございます！こちらも執筆ビシビシ頑張りますので。
ではどうぞ！

第87話　もう一人のニューフェイス　南銀河の英雄現る！

「おっし、まずは気を目いっぱい開放してみろ」

界王星とは比べ物にならない広さをもつ大界王星

そこのとある一か所

昨日も悟空が修行に勤しんでいた場所で、二人は向かい合っていた

「はあああああああっ！」

悟空に言われ、古はすぐさま全身から気を開放する

白めの気のオーラが見てとれ、足元の芝はヒラヒラと揺れた

（やっぱりクリリンや天津飯よか気は小さい……だがこの年で大したもんだ）

悟空はそれを間近にし、落ち着いた様子で見定めていく

「……よし、気の大きさは大体分かった。次は実際にオラと組み手だ」

そう言うと棒立ちの姿勢から一転、戦うための構えに入った

それを見て古もすぐ構える

「最初はオメエの気の大きさに合わせる、そこから少しづつ上げて

くからな」

「分かったアル！」

笑顔で意気揚々と答えた古

その後すぐキリリと表情を引き締め、悟空を見据える

（いい構えだ……クリリンの体術の師匠をやってただけのことはある）

一方悟空は古に感心しながらも、一気に飛び出すために右足へ力を込める

（見せてもらうぞ古、オメエのその技を！）

「てりゃあああああっ！」

「だりゃあああああっ！」

最初に動いたのは古、それにほんの少し遅れて悟空

ほぼ同時に二人は飛び出し、中央でぶつかった

「だだだだだだあっ！」

そこから悟空は、連続で拳を打ち出し猛攻

古は後手に回りそれらを防いでいく

これが全力の悟空の攻撃なら、一秒と持たずに古はやられていた

しかし今の悟空の気は、古と同等程までに抑えられている

そのためパワーやスピードもそこまで彼女と変わらず、攻撃の対処もまんざら不可能ではなかった

「今アル！」

「おっ！？」

いや、古は完全に守りきれている

むしろ、今から反撃へ移ろうと仕掛けていた

悟空の右ストレートを、左腕で下から押し上げて軌道を上へ

空いた右脇へすかさず

「アイヤアアッ！」

気を込めた左拳で崩拳を放つ

（どうアル！）

が、その拳は空を切った

正面には既に、悟空の姿は皆無

直後、古は視界の右端にいる悟空を捕捉する

「こっちだ古！」

（なっ！？い、いつの間に！）

自分へと襲い掛かる左の手刀を、咄嗟に右腕を肘から上げて防いだ

と同時にビリリと走るのは、威力が上がった攻撃による衝撃

（ぐっ、さっきより重いアル……）

「お、今のをよく防げたな……そんじゃこっから、さっきより少し気を上げっぞ」

「……来るアル！」

悟空から感じられる気の大きさが、開始当初のそれから比べ三割程上昇

速さと重さを増したラッシュが、即座に古へ次々と繰り出される

「そらそらっ！どうした古！」

「ぐぐ、ちょと難しくなてきたアルな……」

古の顔には、やや焦りが見え始めてきた

しかしながらも、一手一手に対して対処を確実にこなす

何発かに一発喰らう攻撃も、避け方が良いのかダメージは最小限

再び反撃を

つまりは、自らが得意とするカウンターが決められる機をうかがっていた

これには悟空も思わず、攻撃の最中ながらも感心してしまう

「やるじゃねえか古、オラ驚えたぞ！」

「伊達にクリリン相手に修行してないアルよ、それに……」

話しかけてきたことで、ほんの僅かだが生まれた悟空の隙

右拳の引きが僅かに遅れ、そのまま左拳の突きも遅れを見せる

古は言葉を返しながらもそれを見抜き、見逃さなかった

といっても常人では判別はほぼ不可能、コンマ数秒単位での隙である

「中国拳法得意中の……」

素早い足捌きで全身を左へずらし、攻撃を回避

右を通過した悟空の左腕を、右手で掴みながらその動きを制し……

「得意アル！」

左肘で渾身の肘鉄を鳩尾に叩き込んだ

確かな手ごたえ、今度は外していない

（やたか！？）

古は顔を上に向け、悟空の顔を覗き込む

「……んー、気の大きさがそんくれえだと、やっぱ攻撃もこんなもんか」

「げげっ！」

悟空の顔はいたって涼しげだった

「けど今の動きはなかなかだったな、三割増ししてもここまで戦えんのか……」

よーし、と悟空は張り切った様子でそう口にすると、後ろへ下がって構え直す

「今度は一気に、オメエの気の倍でいくぞ！」

「まだ上がるアルか……上等アル！」

また上昇を見せる悟空の気

それに一瞬たじろぎながらも、古はすぐ気を取り直して彼同様構え直した

（さっきは気を攻撃箇所に集中されてダメージが無かたアルが……

それより早く当てれば！）

ダメージ付きの有効打を今度こそ決めてやろうと心の中で意気込む

「「たあああああああっ！」」

両者の組み手は、古が体力切れでダウンするまで二時間半にも及んだ

「やっぱりスゲエな古は、まさかこんなに持つなんてオラ思わなかったぞ！」

「でも結局ダメだたアルよ……けど、次は絶対決めてやるアルからな！」

芝の上に寝転ぶ古と、その左隣にしゃがみ込んで話しかける悟空

古の体力を回復させている間、二人はこうして会話を交わしていた

どうも悟空としては一時間くらいでダウンかと予想していたようで、今回の結果には大満足

しかし古としてはあの肘鉄以降まともに攻撃が決まらず、ややご不満の様子であるようなのだが

「よし、その意気だ！そうでなくっちゃ、修行なんてつまんねえだけだかんな！」

「しかしトランクスといい悟空といい、クリリンの知り合いは強…ん？」

すると、悟空が何かに気付いたのか顔を右に古もそれに合わせて上体を起こし、同じ方を向いた

「どしたアル？」

「こっちへ誰か来る……」

「え？あ、ほんとアル、大きい気と小さい気が一つづつ」

疲労困憊だった古は、悟空に言われてようやく把握

確かに集中して気を探ってみると、こちらへ二つの気が接近していた

「悟空の知り合いアルか？」

「小さい方は前に感じたことがある気だ……けど、大きい気の方は初めてだな」

大きい気、これは決して謙遜の意味で言った言葉ではない

実際とてつもなく大きい気なのだ、それこそ古のが可愛く感じられるほど

少なくとも、楓や刹那と一対一で戦っても普通に勝てる力量であろう

「邪悪な気は感じねえから大丈夫だとは思うが……それにしても一体誰だ？」

悟空が首をかしげていると、ついにその両者が姿を現した

「お、いたいた」

「ウガ？」

一人はピンク色の肌をした男、身長は古とそこまで変わらない

大きめのサングラスに黒の帽子、赤い唇が特徴的である

「なんか少し界王様に似てるアルな……触角とか服とか」

また、古の言う通り頭には二本の触角

着ている服も界王のと色違いを思わせる形状だった

「あ、思い出した。あっちの小さい方は界王様だ、南銀河の」

「え？界王様は一人だけじゃないアルか？」

「いや、あの界王様は北銀河のだろ？それ以外に西と東と南にもいんだよ」

「久しぶりだな、孫悟空」

「ウガーー！」

こうする間に南の界王ともう一人の男は、二人の目の前へ

南の界王が胸を張りながら悟空へと喋りかける

「あの世一武道会以来だから、かれこれ一年ぶりになるか」

「だな」

「隣にいる娘が噂に聞いた新入りか……ところで北の界王はどこだ？」

南の界王は古を一瞥すると、きょろきょろと辺りを見回した

どうも彼の用事は北の界王にあったようである

「界王様なら今いねえぞ、多分他の奴の修行でも見てるんじゃねえか？」

「なんだ、おらんのか……お前の所へ行けば会えると思ったのだがな」

いないと分かると途端に張っていた胸を戻し、南の界王は残念そ

うな表情

「……ところで南の界王様、隣にいる奴誰だ?」

「ウガーー!」

今がタイミング的に良いと感じたのか、悟空は隣にいる大男を指差して尋ねてみた

身長は南の界王の倍近くで、二メートル少々あるピッコロよりもうんとデカい

全身ライトブルーの肌、顔には白を基調とした覆面(マスク)をかぶっている

下は紫のズボンで、上は白い布がマントのように一枚かかっているのみ

髪の毛は茶色のようだが、頭のカリフラワー風な形の帽子で隠れてよく見えなかった

さっきからウガー!ウガー!と吼え、色々なポーズでポージング中

「随分腕の立つ奴みてえだけどよ……」

「おっ、分かるか孫悟空!そうだよなあ、普通分かっちゃうよなあ……」

すると南の界王のテンションはたちまち上がり、さっきまでの様子が嘘のよう

すぐにペラペラと隣の大男について説明をし始めた

「こいつはうちの新入り、パポイだ。つい最近こっちへ来たばかりでなあ……」

どうも南の界王は、彼(パポイ)の自慢をしに来たようである

断る理由もないので、二人は仕方なくだが南の界王の話に耳を傾けた

「すんごい強いんだぞ、なんせ南銀河一の英雄と称されるほどだ」

南の界王は再び胸を張り直し、両手を腰にやる

「前回のあの世一武道会に出場していれば、ダントツで優勝だったろうな」

「ウガーー！ウガーー！」

パポイも調子に乗ってきたのか、さらに素早い動きでポージング

「折角だしこいつの武勇伝も聞かせてやろう、まずこいつが十才の頃……」

この後数十分に渡り、南の界王によるパポイの自慢話は続けられた

「……とまあこんなところか、これでお前達もパポイの偉大さが分かっただろ」

（お、終わったアル……でも、確かに凄いアルな）

ようやく終わったことに安堵する古

しかしながら話はちゃんと全て耳に入れてあり、パポイの凄さを一応ながら実感した

そして悟空はというと

「っておい、孫悟空！人が話してる最中に寝てるんじゃない！」

「……ふえ？あ、話はもう終わったんか？」

今の今まで寝ていた

最初の数分を聞いて眠くなってきたらしく、いつのまにやら夢の世界へ

南の界王は話すことに夢中、パポイは調子に乗ってウガーと叫えながらポージングすることに夢中

そして古は南の界王の話を聞くことしか頭に無かったため、皆が気付けてなかったようである

「ふ、ふん！強がりおって……まあいい、大会では覚悟しとくんだな！帰るぞパポイ！」

「ウガーーーー！」

悟空の態度に苛立ちを覚えながらも、南の界王は必死に平静を維持

踵（きびす）を返し、パポイを引き連れてそそくさとこの場を跡にした

そしてまた、悟空と古だけが残される

「さてと……時間も結構経ったし、再開すっか！」

「……しかしよくあんな時に寝られたアルね」

首をポキポキと鳴らし、悟空はすっくと立ち上がった

古も脚に力を入れてすぐに起立

南の界王の話を聞いているうちに、ある程度体力も回復した様子である

「じゃあ次は気功波系でもやってみっかな……かめはめ波は出来るんだったよな？」

聞こえてないのか聞き流したのか、悟空は古の呟きに構わず準備

腕回しや屈伸をしながら、古へと確認をとった

「当然アル！じゃなきゃクリリンから貰ったこの道着、恥ずかしくて着られないネ！」

肉体をもらうついでに修復してもらった亀仙流の道着

さっきの組み手のせいかやや汚れがあるが、古は誇らしく悟空へそれを見せつける

「よし！それじゃ修行……」

「再開アル！」

結局この日の二人の修行は、休憩を挟みながら延々と続行

『メシの時間じゃぞ』と界王が呼びに来るまで、両者は汗を流していたという

といっても、その汗の殆どは古のである

「明日こそは！明日こそは決めてやるアル！」

「はっはっは！オメエ、そういうとこもオラとそっくりだな！」

あの世一武道会まで、残すはあと六日と少し

第87話　もう一人のニューフェイス　南銀河の英雄現る！（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「今回の投稿は奇襲このうえないだろ、予告出来てなかったし……」

クウネル
「まさかここまで書けるとは思ってなかったみたいですからね、作者も」

エヴァ
「まあ早いのはいいことだ、ウム」

クウネル
「読者の皆様の投票チャンスも増えますからね」

エヴァ
「そういえばさっそく投票来てたな、二人から」

クウネル
「ですね、『ゼロじゃなくて本当によかった』と作者もホッと一安心だそうです」

エヴァ
「今後もちゃんと集まらなきゃ結局はダメなわけだがな」

クウネル

「さて、では今回のゲストをお呼びしましょう」

エヴァ
「今回は誰なんだ？」

クウネル
「はい、今回はこの三人です」

男狼
「よっし！俺様もついに出られたぜ」

クリリン
「古のやつ、あの世でも元気にやってんのかな……」

コタロー
「本編で出番無くて暇やーー」

エヴァ
「また随分と昔のリクを引っ張り出してきたな……」

クウネル
「コタロー君がリクされてるのこれだけですから」

男狼
「大会では出番一つ無く負けちまったからな……」

コタロー
「あれ？お前大会出とったん？」

男狼

「出てたよ！予選で緑のに負けちまったけどな！」

エヴァ
「……映画版であいついたっけ？」

クウネル
「『っぽい奴』がいたので、出たということに作者が勝手にしました」

注・そういうことで一つよろしく

クウネル
「ではコーナーを進行させますか、さて今回の話ですが……」

エヴァ
「まさかのパポイ登場、だな」

クリリン
「あいつ誰だ？作者が考えたオリキャラか？」

クウネル
「一応原作でも名前は出てます、アニメではちゃんと姿見せましたし」

コタロー
「かなりマイナーな奴やな……絶対読者の何割か確実に分かってないやろ」

クウネル
「まあ、前回出たミゴレンとかもかなりマイナーなんですけどね」

注・アニメ見てない方、すいません

エヴァ
「では続いて、次回予告だ」

クリリン
「なんかペース今回早いな……」

コタロー
「せやな……」

男狼
「さて、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「大界王星の修行二日目に突入だ」

クリリン
「修行に励む二人のところへ、パイクーハンが様子を見にやって来るみたいだぞ」

コタロー
「さらにはたつみー姉ちゃんも登場や」

クウネル
「次回の更新予定は来週の水曜日です」

男狼
「また例によって火曜や月曜になるかもな」

エヴァ
「人気投票は絶賛受付中、一回投票した者もまた投票出来るからな」

クリリン
「詳細は第８６話のあとがきコーナーに！」

クウネル
「皆様の投票、心よりお待ちしています」

注・お待ちしています！

コタロー
「さてと、そんじゃ読者のみんな、次回のネギドラ！も……」

エヴァ＆クウネル＆クリリン＆男狼
「お楽しみに！」

コタロー
「え！？狼男やのうて男狼！？」

男狼
「そうだ！俺は普段はこのように狼で、月を見ると人間に変身するのだ！」

コタロー
「なんやそのめちゃくちゃ……」

クリリン
「俺も初めて会った時そう思った」

クウネル
「次回もそんなメチャクチャな方をお呼びします、お楽しみに」

エヴァ
「え！？ゲスト予告！？」

第８８話　久方ぶりの再会　褐色少女二人組（前書き）

予告通り投稿です、よかった遅れなくて……
ではどうぞ！

第８８話　久方ぶりの再会　褐色少女二人組

「プハー！食った食った！」

「ごちそうさまアル！」

「お前達朝からよく食うのう……」

古の大界王星生活、二日目

古は起きると早速、悟空に誘われて共に朝食

炒飯、シュウマイ、餃子、鳥の南蛮焼き、フカヒレスープ、それに肉まん

界王が用意していたそれらを、二人はものの十数分でたいらげた

「それにしても、ここの料理は美味いアルなー！」

「だろ？それにみんなタダだから、思う存分食いまくれるしな」

昨日の夕食以降、古はあの世での食事を多大に気に入ったらしい

料理は連絡一つで天国から送られてくるらしく、全て無料

また、種類も和食、洋食、中華と様々

「じゃあ古、朝の修行始めっか」

「待ってましたアル！」

二人は座っていた椅子から立ち上がった

「おいおい、少し食休みしてからでも……」

「平気平気！なあ古？」

「ウム！早く修行するアル！」

そのまま界王の言葉も軽く流す

既に修行のことしか眼中にないこの二人

早速舞空術で浮上し、昨日と同じ修行場へ飛んで行った

「じゃあ界王様！昼飯の時間になったら教えてくれー！」

「頼むアルよー！」

界王へそれぞれ一言、次の食事のことについて言い放ちながら

「まったく、食い意地の張った二人じゃわい」

ちなみに言っておくが、死人に『空腹』という概念は存在しない

その昔、悟空が蛇の道を食事一切無しで何十日も走ったのが一番分かりやすい例だろうか

あくまであるのは、『満腹』から『平常』の間のみ（一応消化はされる）

つまり死後の世界では、食事をとらなくとも特に問題は無いのだ

しかし悟空に言わせれば

『いやいや、腹のモン無くなったらすぐ食って力（りき）つけねえと。そうじゃなきゃオラ、修行なんてやってらんねえぞ』

だそうだ

他のあの世の武道家も、ある程度は食事をとることがある

しかしこうして一日三食を毎日守り、あそこまで食うのは悟空くらい

彼の思考パターンには死んでもなお、『食い物を消化しきった＝飯』が完璧に固定されていた

また、共に修行する古もそれに染まりつつあるのは目に見えて明らかである

「まあ、良いか……ワシもオリブー達の様子でも見てくるかな」

そして界王もこの場を跡にし、悟空達とは逆方向へ歩き始めた

「かぁ……めぇ……はぁ……めぇ……」

両手を腰の右側にやり、気を溜める古

昨日の大会予選でのトランクス戦と同じく、そこに現れたのは青白い輝き

古は真っすぐ視線を向け

「よし、来い古！」

「波ーーーーー！」

クリリン直伝のかめはめ波を、上空へと撃ち出した

その先には、両腕を交差させて身構える悟空の姿が

ボオオオオンッ！

狙い通りに飛んだ古のかめはめ波

悟空へ命中すると爆発し、彼の姿を覆い隠す

「……どうアルかー？」

古は構えを解き、両手を口元に当てて声を上空の悟空へ

それから一秒もせず、両手を腰に添えた悟空がスーッと降りてきた

「ダメだダメだ、こんなかめはめ波じゃ全然効かねえぞ」

ダメージは無し、着ている道着にも傷らしき傷すらついていない

「もっと気をコントロールして、全身から集めて撃ち出すんだ。そうすりゃ今のオメエの気の大きさでも、まだ威力は充分に上がる」

「難しいアルな……」

クーは眉をひそめ、目の前に両手を持ってきて気を込めてみる

かめはめ波とは違う黄色の気がうっすらと灯った

「力が小さい分こういうことで補わねえと、他の奴らにはまず勝てねえぞ」

古の洗練された体術は、昨日の組み手で確認済み

このことから、古の代表入りには

『いかに他の能力を底上げ出来るか』が課題になると悟空は言う

そのためこうして現在、気功波系の特訓に勤しんでいたというわけだ

「それじゃあもう一ぺん撃ってみろ」

「……分かたアル！」

悟空は再び空へ昇り、古は出していた気を身体に戻す

そして大きく息を吸い、吐く

古は深呼吸で心を落ち着かせると、さっきと同じように両手を腰元へ

（修行でクリリンが見せてくれたように、気を全身から……）

頭の中でクリリンが、かめはめ波を撃つ様子をイメージした

それを自分なりに真似て、全身から気を集束

「かぁ……めぇ……」

現れた青白い光は、先ほどよりも少し輝きを増している

（全然気が抜けないアル……こんなのをクリリンはアッサリやってのけるアルからな……）

やはり自分の師匠兼弟子は流石だ

そんなことを心の端で思いながらも、段々と大きさをさらに増すかめはめ波

「おっ、いいぞ古！それだそれだ！」

「はぁ……めぇ……」

そしてついに、発射準備は完了

「波ーーーーーーー！」

古の咆哮と共に、パワーをグンと上げたかめはめ波はたった今放たれた

凄まじい音を立てながら、上にいる悟空へ突き進む

ドゴオオオオオンッ！

段違いの爆発が上空で炸裂した

それから数秒後、悟空はまたも地面へ舞い戻る

やはりダメージはゼロ、ただし……

「凄えな古！やりゃ出来るじゃねえか！」

飛んできたのは絶賛の言葉だった

「え？やたアルか？」

「ああ！さっきのよか断然、今の方が威力は上だったぞ！」

ハッハッハと悟空は笑い、古の頭をグシャグシャと撫でつける

少々力が強かったが、されて古も悪い気はしなかった

「けど本番はこれからだ、もっともっと強くなってかねえとな」

「当然アルよ！」

すると

「精が出るな、悟空」

「「！？」」

背後から突如男の声

気配すら、今の今まで感じずにいた悟空と古

いきなりのそれに、驚きながらもバッと振り返る

そこにいたのは、長身の一組の男女

「やあ古、久しぶり」

「あ、真名！あれ？そっちの緑のは……」

「パイクーハンだ、お前の名は確か古菲だったか？話は色々真名から聞いているぞ」

「オメエらどうしたんだ急に？」

「ちょっとお前達の様子を見にな」

悟空らと同じくあの世で修行に励む、パイクーハンと龍宮真名の両名だった

「真名はずっと前からここで修行してたアルか!?」

「まあね、ネギ先生達と別れてからずっとになるかな」

二週間ぶりに顔を合わせることとなった古と真名

銀河戦士との戦いで真名が現れたのは、古が死んだ後ちょうど入れ違いの形になっていたのである

そのため今回の再会には歓喜（特に古）

気付けばこのように、悟空達も入って四人で会話を交わしていた

「あ、そう言えばさっきのはどうやったアル？いきなり出てきたアルけど」

そんな中、古は先ほどのことを思い出して真名に尋ねる

ああ、と声を漏らすと、真名は口元を軽く上げて話し始めた

「あれは『瞬間移動』という、ちょっと特殊な技でね」

「瞬間移動！？」

「そうさ……遠く離れた気を探り、そこへ瞬時に移動する」

「す、凄いアル！」

「応用を利かせて相手の背中を瞬時に取ったり、攻撃を避けたり…
…中々便利な技とは思わないか？」

まるで新品の玩具を自慢する子供のように、真名は古へ喋り続ける

ボージャック戦でかなりの健闘を見せた技、『瞬間移動』

真名自身もこの技はかなり気に入ったらしい

でなきゃこんな風に話す彼女の姿など、そうは見れないだろう

気付けば、古の目はキラキラと輝いていた

「それ、どうやって覚えたアル！？」

「そっちの彼に教えてもらったのさ」

ズイズイと距離を詰める古

真名は右の人差し指で悟空をピッと指差した

途端に、古の身体は悟空へと向けられる

「それほんとアルか！？」

「え？ああ、確かに教えたけどよ……」

「私にもそれ教えるアル！」

『〇〇ちゃんが持ってる玩具、私にも買って！』

そういうことを言う子供と同じような顔を、彼女は今していた

しかし悟空は首を縦に振ることはなく

「やっても多分間に合わねえぞ、オメエだったら多分一年近くかかるだろうし」

「えええっ！？」

むしろスパッと、『事実上無理』であると言ってのける

当然古は納得がいかず、悟空に説明を要求

少しニヤつく真名を横目に、悟空はそのわけを話すこととなった

彼曰く、『瞬間移動習得にはどうも相性があるらしい』とのこと

そもそもこの技の本来の使い手はヤードラット星人、地球人ではない

そのため他の星の者、地球人やサイヤ人全員が簡単に覚えられるかというとそうじゃないそうだ

悟空も習得に半年以上かけており、『結構大変だった』らしい

その点彼女、真名の習得技術は異常な程である

まあ以前も触れたが、完璧かといえばまだそうではない

しかしながら、二週間でここまでやったのは称賛に値するだろう

「でも真名だって私と同じ地球人アル！私にもまだ可能性は……」

「真名は特別なんだって、それにそっちばっかに集中して、肝心の大会に出られなくてもエエんか？」

「うっ」

古はギリギリまで粘ったが、悟空の最後の一言で口を閉じる

覚えられるか分からない（しかも十中八九無理）技ばかりに熱中し、大会出場を逃しては元も子もない

「瞬間移動がなくたって古はうんと強くなれる、それはオラが保証するからよ」

「私としてもそうして欲しいな、お前とも再戦したいし……第一、まだ出場圏内にすら入れてないんだろ？」

少し悔しそうな顔を見せた古だが、そこへすかさず悟空がフォロー

さらには真名も加わるのだが、ここで古は肝心なことに気づくのだった

「そうアルな、私も真名とはまた戦っ……え！？真名も出るアルか！？」

「あれ、言ってなかったか？」

「初耳アルよ！」

キョトンとした顔の真名に、古は酷く驚いた様子で言葉を続ける

「っていうか真名は出れるアルか！？生きてるのに！」

「問題無いよ、ほら」

真名が生きたままここに来たということは、さきの会話で確認済み

大丈夫なのかと疑問を抱く古に、真名は一枚の紙をどこからか出して差し出した

それは片面カラー印刷されたポスターで

『北の界王一周忌記念　あの世一武道会開催！』

上部にこうデカデカと書かれている

さらに中央には、悟空やパイクーハンといったあの世の武道家達の写真が数枚

それぞれが激しく拳を交わす様子が映し出されており、かなりの躍動感にあふれていた

「今回の大会は数か月前から予定されていたらしくてな、ちゃんとこういうポスターがあるんだよ」

「へえ……」

感心しながらマジマジとポスターを眺める古

そんな彼女の視界に真名の左手が入り込み、人差し指でとある一点を示した

「ここだ、大会出場選手の条件が書いてある」

こう言われ、古の目の先はそちらへ

『・出場条件　大界王星において修行中の武道家で、界王の許可を得た者』

「つまり私はこの条件をクリアしているわけさ、ちなみに私は西銀河代表で出場確定済みだ」

「そうだたアルか、じゃあ何としても大会に出て戦……！？」

古は目を見開き、ポスターから視線を外してその対象を真名へ

聞き違いかなと一割ほど思いながら、先ほど聞こえた言葉を彼女へと返す

「……西銀河代表？」

「そうさ、師匠が西銀河代表なんだから当然だろ？」

聞き間違いじゃなかった

「だから、俺はお前のことを弟子だなんて一回も……」

「けど西の界王様は今朝、私に出場権をくれましたよ？」

「お前はあいつと同じ地球出身なんだから、北銀河代表でいいだろ」

「既に確定した出場権をドブに捨てるなんて真似、私はしませんよ」

さらに、古そっちのけで真名とパイクーハンの会話が進む

「おおっ、スゲエな真名！じゃあオラや古とは敵同士になるわけか！」

「そういうことさ、もし当たったらお手柔らかに」

「え？え？」

ついには悟空も加わり、古一人が孤立

今遭遇したこの事態を、弱い頭で古は必死に整理する

（真名が大会に出る、これはいいアル……けど、西銀河代表で出場確定!?え?だってまだ一週間もあるアルのに……それで確定ってことは、今真名の強さは……）

それでも何とか、ある一つの事実にたどり着こうとしていた

（つまり……真名は私よりもさらに格段に……）

そんな中

「じゃあよ、今からいっちょ古と組み手してみてくれよ!」

「え?」

「構わないよ、というか私もしてみたかった」

「ええっ!?」

突拍子もない悟空の発言で、急遽手合わせが決まってしまうのだった

第８８話　久方ぶりの再会　褐色少女二人組（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「人気投票は順調に票が集まってるようだな」

クウネル
「ですね、さらに伸びることを期待しましょう」

エヴァ
「さて、今回のゲストは誰なんだ？」

クウネル
「はい、今回はこの四名です」

銀角
「兄者！ついに俺達も出演ですね！」

金角
「ああ」

チャオ
「どうも、はじめまして」

超
「やあやあエヴァンジェリン」

クウネル
「金角銀角コンビに、超さんとチャオさんです」

エヴァ
「またマニアックな奴らを……アニメに一話限り登場の地味キャラもいいとこじゃないか」

クウネル
「でも、超さんが今回このコーナー初登場ですよ」

エヴァ
「それだったら、今出ずっぱりあいつとの共演リクもあるだろうが」

超
「まあ、こっちの方が古いリクだたしネ」

金角
「早くやろうぜ」

エヴァ
「まったく……読者の中でこいつら知ってるの何人いるんだよ」

注・ドラゴンボール（古い方）の第７９話に出てます

クウネル
「さて、今回の話ですが……」

エヴァ
「大界王修行生活二日目だな」

超
「ウム、古はやはり修行してる時が一番楽しそうネ」

クウネル
「ちなみにこの『大界王星修行生活、二日目』というフレーズですが、作者が書いてて何気に黄金伝説をイメージしたそうです」

チャオ
「うわ、すっごくどうでもいい……」

エヴァ
「しかし超鈴音、お前一体どこにいるんだ？あの世にもいないんだろ？」

超
「まあネ」

銀角
「なんか感想でもちょくちょく質問されてるよな」

金角
「今ここで言えねえのかよ？」

超
「ちょっとそれはストーリーの進行上無理ヨ、作者もちょくちょく言てるガ」

エヴァ
「これでどうでもいい場所にいたらマジで批判が来るぞ……」

注・どうでもいい場所じゃないのでご安心ください

クウネル
「まあそれはさておき、続きまして次回予告です」

金角&銀角
「さて！次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「古菲対龍宮真名、まほら武道会に続いて二回目の戦いだな」

クウネル
「今回は龍宮さんも、完全に全力で戦うみたいですよ」

金角
「あの龍宮って女、もう出場が確定しちまったんだろ？」

銀角
「凄いっすね、兄者」

金角
「ああ」

チャオ
「とにかく二人の好勝負を期待したいわね」

超
「ちょとそれは難しいヨ、なんせ龍宮さんは昨晩……」

クウネル

「これ以上はネタバレなのでストップ、詳細は次回で」

エヴァ
「人気投票は今も継続中だ、今以上に諸君らの投票を待っているぞ」

注・投票よろしくお願いします、前に一回投票した方も是非

金角
「次回の更新予定は来週の月曜日だ」

超
「週明けカ……」

クウネル
「それより早く出来そうだったら活動報告で予告しますね」

チャオ
「じゃあみんな、次回のネギドラ！も……」

エヴァ＆クウネル＆超＆金角＆銀角
「お楽しみに！」

エヴァ
「確かこの二人、不思議な瓢箪を持ってるんだったな」

金角
「そうさ、『名前を呼ばれて返事をしなかった奴を吸い込む』俺達自慢の瓢箪だぜ」

銀角
「孫悟空のせいで、チャオの村の奴に取られちゃいましたけどね……」

チャオ
「当たり前よ！」

クウネル
「というわけで今回その瓢箪をお借りしてきました」

エヴァ
「ええっ！？貴様一体何やってんだ！」

クウネル
「早速やってみますか、エヴァンジェリンエヴァンジェリンエヴァンジェリンエヴァンジェリンエヴァンジェリン」

エヴァ
「ちょ、ちょっと待て！はい、はい、はい、はい、はい！」

クウネル↑面白くなってきた
「エヴァンジェリンエヴァンジェリンエヴァンジェリンエヴァンジ

エリンエヴァンジェリンエヴァンジェリンエヴァンジェリンエヴァンジェリンエヴァンジェリンン……」

エヴァ

「はい、はい、はい、はい、はい、って誰かこいつ止めろ！」

第８９話　両者再戦！真名、驚異のパワーアップ（前書き）

久しぶりの朝投稿です、テスト勉強の合間を縫って何とか三連休のうちに完成出来ました。この前よりはマトモに書けたかと、前回後半グダグダでしたからね……

ではどうぞ！

第８９話　両者再戦！真名、驚異のパワーアップ

「気絶すっか、『参った』って言った方が負けだかんな」

「了解……では古、始めるか」

「……来いアル！」

急遽悟空の提案により行うこととなった、古と真名による実戦組み手

五メートルほどの距離を空け、真名と古は向かい合った

そこからやや離れた場所からは、悟空とパイクーハンが見物に洒落込んでいる

「それにしてもパイクーハン、真名の奴一体何したんだ？」

「お、やはり分かるか悟空……」

彼女達には聞こえない声で、こっそりと会話を交わす両者

「昨日の真名とは全然違え……内に秘めてる気が、まるで別人みてえにデッカくなってやがる」

「まあそういうことだ、でなきゃ西（ウチ）の界王様も出場権を与えるわけがないだろ？」

「こりゃあ、今の古には荷が重いかな……」

こんな会話がされてるとは露知らず

少女二人は互いに構え、相手の出方を伺っていた

「一応言っておくが、私は銃も羅館銭も使わない……今回の大会だとどちらも禁止されてるからな」

「……分かてるアル」

以前両者が戦った舞台、まほら武道会

そこでも一応、飛び道具の禁止は一応されていた

しかしそこでの飛び道具とは『銃火器』『矢尻のついた弓矢』等のこと

そのためそれに該当しない、投石・投げ縄の類は使用可能

真名はそのルールに従い銃を使わず、五百円玉を指で弾いて飛ばす『羅漢銭』なる技で古とは当時戦った

ところが今回開催されるあの世一武道会では、それすらも禁止されているという

大会前の手合わせなのだから、大会ルールにのっとるのは至極当然のことであるのだが……

（銃も無し、羅漢銭も無し……真名はどうやって戦う気アル？）

古はどうしてもこのことが気になって仕方ない

体術オンリーの戦いなら自分はまず勝てる

これはまほら武道会当時も自負していたことだ

（銃専門だた真名が、たった二週間のにわか体術仕込みで私を超えるなんてまず無いアルし……）

しかし真名は既に、大会へ出場確定状態

となれば体術以外に、どこか他を圧倒する何かがあると自然に思いつく

（だとしたらおそらく気功波系、少なくとも遠距離系統の可能性が濃厚アルが……）

「どうした古、来ないのか？」

（真名のこの余裕は何アルか！？）

両者の現在の間は五メートル

一応離れてはいるが、詰めようと思えば一秒とかからない

ならば今真名が取るべき行動は

『距離を詰められぬよう攻撃』か『さらに下がって距離を取る』

普通に考えればこの二つのどちらか

だが真名は一切動かず仕掛けず、古をただ見据えるのみ

上記二つの行動のうち、どちらともする気配が微塵として感じられない

（しかもさっき私へ攻撃を誘ったアル、これは一体……）

「来ないんだったら……」

「！？」

次の瞬間、真名の姿が消えた

直後

「こっちから行かせてもらおうか」

「しまっ……」

古の背後に彼女は現れる

そのまま、気を込めた左の手刀を勢いよく振るった

瞬間移動を用いた奇襲

距離が近ければ気を探る時間も殆ど掛からず、動作もほんの少しで済む

ボージャック戦でも行ったこれは、見事古にも成功した

「ぐっ！」

避けきることも防ぐことも出来ず、手刀は古の背に命中

しかし僅かに身体をずらし、何とかダメージを少しながら軽減させる

（これが瞬間移動……移動速度速すぎアルよ！）

「まだだっ！」

そこから真名はさらに追撃

体勢を崩した古へ、お次は右の掌底

その先には頭部、完全にノックアウト狙い

（二発もやすやすとは喰らわんアル！）

だが古も動いた

横目で掌底が顔へと飛んでくるのを見やると、反射的に腰をひねって右肘を上げる

僅かな差でそれは、顔と真名の掌底との間へ

「む！？」

真名の攻撃は、古の上腕へと打ち込まれた

（良い反応だ、伊達にこっちでも修行してなかったようだな……だが！）

「ぬおおっ！？」

ところが、突如としてそのガードは崩れる

真名が追加で気を込め、さらに強く押した

元々の体勢自体が良くなかった古は、これに一秒と持たず

（何アルか今のは！？パワーがまるで桁違……）

身体ごと横に飛ばされる

下は芝生でダメージは少ないだろうが、倒れ込めば格好の餌食

すぐさま左手を伸ばし、受身の体勢に……

「残念、これで終わりだ」

「なっ！？」

……取ることすら出来なかった

ドグッ！

「ごぼっ！」

瞬時に回り込まれ、腹へ高速で飛んでくる真名の右膝

抉るようにそれは中央へとめり込み

「つ、強過ぎ……アル……」

古の意識はブラックアウト、完全に刈り取られた

瞬間移動で回り込んでから、この間たったの五秒弱である

「……まあ、こんなものか」

「おい真名、古の奴大丈夫か？」

「心配無いよ、軽く気絶させただけさ」

古の気絶により組み手終了、結果は真名の完全勝利

それを見て悟空、そしてパイクーハンが彼女達へと駆け寄った

「それじゃあ、起きたら古によろしく」

「ああ」

古との勝負がついて数分後

用事も済み、真名とパイクーハンは瞬間移動で帰ろうとしていた

古はあと数分もすれば目覚めるらしく、今は芝生の上に仰向けで寝かせている

「それにしても驚えたな、まさかオメエも精神と時の部屋で修行してたなんてよ」

「半日だけだがね」

昨日他の怪我人と共に、デンデのいる神殿へと運ばれた真名

治療は瞬く間に完了し、真名は目を覚ました

この時悟飯以外の皆にも、自分があの世で修行中だと説明

残りの一週間もこっち（あの世）で過ごす気満々だった真名は、そのまま瞬間移動で帰還

……しようとしたところで楓に声をかけられる

『真名も精神と時の部屋で修行してみてはどうでござる？』

こう言われ、真名はあの世で悟空から聞いたことを思い出した

さらにネギ、コタロー、楓、刹那も入ったと知り（あとあやか）、迷わず部屋の中へ

そこで半日間修行し、出た時にはもう真夜中

少し休んだらどうかとデンデやポポに言われたが、構わず今度こそ瞬間移動で帰還

その数時間後に西の界王へ実力をお披露目し、出場権を手に入れたというわけだ

「でも何で半日だけなんだ？時間はあったんだし、二日分丸々修行しても……」

「楓達も半年だけ入ったと聞いたからな……教えてくれた楓にも悪いし、公平になるよう私もそれに合わせた」

あとそれともう一つ、と真名は続ける

「こっちはまだ女子中学生なんでね、無闇に歳は取りたくない」

「ははっ！そういやオメエまだ十四って言ってたもんな……でもそれホントか？」

「さてね」

意味深に口元を上げて笑みを見せると、真名は右手の指を二本額へ

悟空もそうだが、遠くへ移動する場合はこうやって気を探らなければ瞬間移動は出来ない

「また暇があったら来るよ」

「悟空、お前も自分の修行を怠るなよ」

「分かってるって！」

西の界王の気を探り、真名とパイクーハンはここから姿を消した

昨日と同じく、残ったのは悟空と古の二人

移動した真名達の気を遠くで感じた悟空は、自然と腕を組んで考え込む

視線の先には、もうじき目を覚ますであろう古がいた

「しっかし、精神と時の部屋か……古もそこで修行させてやりてえけど、死んでちゃ無理だかんな……」

これについての話はしとかないでおくか、と悟空は一人うんうん頷く

さっきの瞬間移動のように、ガッカリされてしまってはかなわない

「まあもう少ししたら、界王様とかに頼んで重力特訓なんかをやるとして……他にも何か決め手が欲しいんだよな……」

この一週間を使っての、北銀河代表への古養成計画

悟空としてはある程度イメージはあったのだが、さっきの真名を見て少々不安になった模様

「やっぱり根本的に気の大きさが足んねえかんな……」

近距離は自慢の中国拳法、遠距離はクリリン直伝のかめはめ波

戦闘スタイルとしてはこれでいい、一番古に合っているだろう

しかしそれを十二分に発揮するための力、気が古にはまだ足りていなかった

中国拳法は技術としては文句無し

ただ代表選手の動きについていけるほどのスピード、ダメージを与えられるパワーが無い

かめはめ波も、結局のところは気の大きさがモノをいう

「何かねえかな……一気にこう、ドドーン！と力（りき）が上がるような……」

「う、ううん……ありゃ？真名はどこ行たアルか？」

そうこうする間に、古は意識を取り戻し目を覚ました

上体を起こして辺りを見渡し、この場にはもういない真名を探し始める

「お、目ぇ覚めたか古、真名ならパイクーハンと一緒にもう帰ったぞ」

「そうアルか……ううむ、まさか真名があそこまで強かたとは……」

体力的には問題無いようで、古は両脚に力を入れてすぐに立ち上がった

「まあ、とにかく修行あるのみアルね！」

「……だな」

先ほどの大敗をものともせず、古は意気揚々と身体を動かし始める

古のやる気満々な姿を見て、悟空も自然と腕組みを解いていた

（やっぱ、やたらめったら考えるなんて性に合わねえな……修行してく中で見つかりゃいいか）

「さあ！修行再開するアル！」

「よっし！いっちょやっか！」

悟空は首を数回鳴らし、古と距離をとって構えをとる

「とりあえず次は、昨日もやった組み手でもすっか」

「どんどん気を上げてくやつアルね……」

「ああ、今度はさらに持つといいな」

「持たせるどころか、何としても一発決め……あ」

「どうした？」

古も構えをとり、準備万端だった両者

しかし古がとあることに気付き、一時中断

何事かと思って尋ねた悟空へ、古は口を開く

「……そういえば今何時アル？」

「え？あ、そういやそうだな……」

悟空は自分の腹に意識を向け、空き具合を確認

満腹ではなくなったが、完全に消化しきったわけでもない

「……とりあえず、まだ昼飯の時間じゃ無さそうだ」

死んでもなお、悟空の腹時計は正確である

「そうアルか、私どれくらい気失ってたのか分からなかたアルから……」

「そういうことだったんか、まあ時間になったら界王様がちゃんと呼びに……あああっ！」

「っ！？どしたネ！？」

突然何かを思い出し、大声をあげて叫ぶ悟空

これには当然ながら古も驚いた

「そういやあった！最近全然使ってねえからオラすっかり忘れてたぞ！」

「な、何がアルか！？」

この事態に全くついていけず、古はただハイテンションになった悟空に戸惑うばかり

一応ながら尋ねてみたが、返答する気配ゼロ

「そうと決まれば早速……お、あったあった！」

さっきの真名と同じように額に指を当て、気を探った

するとすかさず古に近づき、空いた左手で古の肩を掴む

「え！？どこ行くアル！？」

「界王様んところだ」

「まだ昼ご飯じゃないアルのに！？」

「いいからいいから……それっ！」

「おおっ！？」

未だ混乱冷めやらぬ古を連れ、悟空は瞬間移動

行き先は彼の言うとおり

「やっほー、界王様」

「ぬおおおっ!?なんじゃ悟空、いきなり現れおって!しかも古まで!」

北の界王、近くにはオリブーら北銀河の武道家達の姿も

「ちょっと頼みたいことがあってよ……」

「え?え?何するアル?」

「……武道会へ出るための、オメエの新技の習得だ」

あの世一武道会まで、あと六日弱

第８９話　両者再戦！真名、驚異のパワーアップ（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「今回もちゃんと投票が来たようだな」

クウネル
「はい、この調子でどんどん来て欲しいですね」

エヴァ
「……そういえば『上位にランクインしたキャラは全員ゲスト出演確定』とあったが、どのくらい呼ぶつもりなんだ？」

クウネル
「今のところトップ１０までを予定してるらしいです」

エヴァ
「ふうん……するとまた最多出演人数記録更新になるな」

クウネル
「この前の番外編の１，５倍になりますね」

エヴァ
「まあそれはいいとして、今回のゲストはどうなってる？」

クウネル
「はい、今回はこのお二人です」

サタン
「ワーーーッハッハッハ！アイアーム、ナンバーワーーン！」

五月
「呼んでいただきありがとうございます」

クウネル
「ミスターサタンさんと、四葉五月さんです」

エヴァ
「おお出た出た、馬鹿の世界チャンピオン」

サタン
「はっはっは！お嬢ちゃん、そんなこと言っちゃいけないぞ！」

エヴァ
「いや、だってお前馬鹿だし、雑魚だし」

五月
「まあまあエヴァさん……」

クウネル
「五月さんは大会編、出番があまり無くて残念でしたね」

五月
「別に気にしてませんから……それに私が出たところで、皆さんのお役に立てるとは思えませんでしたし」

エヴァ

「おお、流石四葉五月……神楽坂明日菜とは大違いだな」

クウネル
「このコーナーや番外編で大暴れでしたもんね」

サタン
「さあさあ！さっさとコーナーを進行だ！ここからは私が仕切らせてもらうぞ！」

エヴァ
「断る、でなきゃ縊り殺す」

サタン
「っ！？」

クウネル
「さて、今回の話ですが……」

エヴァ
「古菲ＶＳ龍宮真名、あっさり決着だな」

クウネル
「まあ精神と時の部屋で修行したわけですしね、単純に考えても戦闘力は楓さんとほぼ同等……」

五月
「しかもただの肉弾戦だけで終わらせましたね」

エヴァ
「前回の予告では本気を出すと書いてた気がするんだが……」

注・『肉弾戦』としては本気でした

エヴァ
「じゃあまだ他にも色々とパワーアップしているわけか……気功波系統とか」

クウネル
「そのようですね」

五月
「あと、なんか話の最後でフラグ的なのが……」

エヴァ
「でも普通に考えてそれくらいしか方法ないよな」

クウネル
「まあ確かに……読者の方は分かりましたか？」

注・もし分かりづらかったらすいません

エヴァ
「まあ今度に期待だな」

クウネル
「では続きまして、次回予告です」

五月
「さて、次回のネギドラ！は……」

サタン
「はっはっは！次回はこのミスターサタン様が登場だぞ！」

エヴァ
「はあっ！？何だそれ！？」

クウネル
「どうもこの回で一時あの世編は終了、下界にいるネギ君達の話になるようです」

エヴァ
「あのタイミングでか！？」

クウネル
「ある程度時間軸が進んだらまたやりますから……それに人気投票期間中、ずっと悟空さんや古菲さんばっか出すわけにもいかないでしょ？」

エヴァ
「た、確かにそうだな……」

五月
「サタンさんが出るってことは、千雨さんや茶々丸さん絡みの話なんですか？」

クウネル
「はい、それと五月さんが登場する話も後々書く予定らしいですよ」

サタン
「というわけだ、楽しみにしていろ！」

エヴァ
「次回の投稿予定は金曜日だ」

五月
「早く投稿出来ることになったら活動報告でお知らせします」

クウネル
「感想&投票もお待ちしています、人気投票の詳細は第８６話をどうぞ」

サタン
「それじゃあ読者の諸君、次回のネギドラ！も……」

エヴァ&クウネル&五月
「お楽しみに！」

エヴァ
「しかし今回は何事もなく普通に終われたな」

クウネル

「そうですね」

サタン
「まあ、なんといってもこのミスターサタン様のおか……」

エヴァ
「やはりサツキの力は偉大だ、こういう感じで毎回やれればいいんだがな」

五月
「いえ、私は別に大したことなんて……あ、お土産に肉まん持ってきたんですけど食べます？」

クウネル
「あ、いただきます」

エヴァ
「気がきくな、私も貰おう」

サタン
「じゃあ私も」

五月
「たくさんありますからね」

モグモグモグモグモグ……

第９０話　『博士』聡美はご満悦！？新生茶々丸誕生！（前書き）

第９０話投稿です。なんだかんだでユニーク８万＆ＰＶ６０万突破していました、読者の皆様ありがとうございます。
人気投票もどうかよろしく、投票お待ちしています。
ではどうぞ！

第９０話　『博士』聡美はご満悦！？新生茶々丸誕生！

～サタンシティ・サタンの屋敷～

「サタン様ーー！サタン様にお客がお見えですよ！」

「お、ちうちゃんわざわざありがとう……で、誰が何の用に？」

「何でも出版社やテレビ局の方が取材に来たって……」

「ああ、そういえばそういう約束だったな……支度をするから少し待つように伝えてくれ」

「分かりましたー！」

こう言って私は作り笑顔を保ちつつ、あのおっさんの部屋を跡にした

というわけで久しぶり、ちうこと長谷川千雨だ

大会が終了してなお、私は何故かまだこの屋敷のメイドを続けていた

まあネギ先生や神楽坂、その他もろもろが私のことを忘れて帰っちまったせいなんだけどな

連絡先も聞けなかったし（というか会話すら出来てない）、ボケ

ロボも屋敷（こっち）へ帰ってきていない

なんでも電話で連絡して休みを取ったらしい、他の同僚やビーデル様からそう聞いた

そのせいで『茶々丸と修行が出来ない』とか言ってビーデル様のご機嫌は斜め

しかもそのしわ寄せが私に来るんだぞ？たまったもんじゃねえってのの

あいつめ、帰ってきたら覚えてろよ……

え？何で今回私の一人称小説になってるかって？

んなこと知るかよ、たまには作者も三人称小説以外が書きたくなったんじゃねえの？

まあこんな悪態を突きながらも、私は報道陣がたむろする玄関へと足を戻す

「あの、ミスターサタンは？」

「ミスターサタンはどちらに？」

「すみませーん、サタン様は支度中ですのでもう暫くお待ちくださーい」

「あ、そうでしたか」

「分かりました」

しっかし凄い数だよな……

ビデオカメラだけでもひぃ、ふぅ、みぃ……十台以上はゆうにあるな

それを担いでるのに加えて、テープレコーダー持った記者、写真を取るつもりのカメラマン

かれこれ五十人弱はいる

昨日も凄かったけど、一日明けた今日でもこれかよ……

あの化け者共を倒したってことで、昨日はホント大騒ぎ

四方八方を報道陣に囲まれ、インタビューの嵐

あのおっさん、よくもまあ『自分が倒した』なんて大嘘つけるよな

あ、ネギ先生達とその仲間が倒したっていうのは私とビーデル様は把握済みだから

「やあやあ諸君、待たせたな」

来た来た、馬鹿の世界チャンピオン……

普段トレーニング時に着ている道着

それに加えてご大層に、チャンピオンベルトを腰に巻きつけていた

「おお！ミスターサタン！」

「お待ちしてました！」

「では早速、昨日の戦いについて詳しくお聞かせください！」

昨日あんだけ聞いといてまだ聞く気かよ！

「ウチの雑誌ではミスターサタンの特集を組もうと思ってるんです！しかも二号連続！」

「何！？だったらウチは三号連続だ！」

「こっちは一冊丸々ミスターサタンだ！」

ちょっと待て！あんたら週刊誌とかの記者だろ！？

そんなにこのおっさんの事を書きまくる気か！？ってか書く材料あんのか！？

「まあまあ落ち着きたまえ、ここじゃなんだから場所を変えよう……」

あんたも普通にスルーするなよ！

てかどのツラ下げてそんな口きく！？

まあこんなこと言えるわけもなく、私達一同は客間へ

確かに玄関じゃ狭いだろうが……にしてもここも派手な造りなんだよな

ビーデル様曰く、『去年辺りからどんどん家にお金が入ってきた』ってことらしいが……

だからってあちこち装飾尽くめはないだろ、しかも宝石

「よいしょ、ではどの辺りから話すとするかな……あ、もう下がっていい、仕事に戻ってくれ」

「はーい、かしこまりましたー、失礼しまーす」

入った後すぐおっさんに命じられ、私は客間から退出

戸を閉める前に報道陣と、仕方なくだがおっさんにお辞儀し作り笑顔を向けた

そんでパタンと戸を閉めると、

「ミスターサタン、あいつらはセルのように空を飛んだり不思議な技を使っていましたが……」

「ハッハッハ！あんなのは何てことない、セルと同じでちゃちなトリックさ」

「今回の参加選手の中にも、似たようなのを使ってた者が複数いたようですが……」

「セルゲームの時にもそんな奴がいただろ？同じだ同じだ」

「それじゃあ、やはりトリックだけで強さは大したことなかったと？」

「まあな、セルの方がまだマシだったくらいさ」

「一体、どのように戦われたんですか？出来れば、昨日のインタビューの時より詳しくお願いします」

「そうだなぁ、まずマシンから華麗に脱出した私は……」

おっさんの嘘八百が次々と飛び出し、ドアを隔てて私の耳へ

ああもう……なんかどうでもいいや

おっさんの言うとおりにするのも癪だが、仕事に戻るか

「……にしても茶々丸の奴、休み取ってまでホントどこ行ったんだ？」

この呟きの後私はビーデル様に発見され、トレーニングルームへ強制連行

他の奴には見せたくないって理由から、私が特訓に付き合うハメになってしまった

こらボケロボ！さっさと帰ってきやがれ！

～西の都・カプセルコーポレーション研究室～

「うーむ、やはり何度見ても凄いわい……この子を作った超君というのも余程天才なんじゃのう」

「『麻帆良の最強頭脳』って呼び名があったくらいですから」

「ちょっと父さんに葉加瀬、手休めてないで作業に戻ってよ」

「「はーい」」

どうも読者の皆様、ハカセこと葉加瀬聡美です

今まで殆ど空気だった私ですが、ようやくちゃんとした出番が回ってきました！

ああ、ここまでホントに長かった……ってゴホンゴホン、いけないいけない

今は大事な作業中なのでした

大会が終わってブルマさんの家へと帰還した私達

スヤスヤ眠る木乃香さんをベッドに寝かし、宮崎さんや早乙女さんと今日のことについて語り合っていました

それから数十分ほどして、私はブルマさんブリーフさんと共に今の作業に入ったわけです

そもそもの始まりは一週間ほど前

何時も通りブリーフさんと研究室に篭っていた際、私はあるものを発見したんです

それは一枚の設計図

超さんの未来技術を吸収した私でも、それは驚愕に値する代物でした

訊いてみたところ、この世界の天才科学者が作ったものだとか

さらに詳しく調べてみると、研究室のコンピューターの中にも似たようなデータが

それはホイポイカプセル同様、私の科学者魂を極限まで奮い立たせたのです

何としてでも試してみたい、データを取って麻帆良に帰っても研究したい

私はそう決意したのです

しかし残念ながら、これを一から作ってやるというのは無理と判明

コストがとんでもなくかかる上に、時間的にも数カ月掛かってしまうそうです

それが発覚した時点で、帰還予定日までは残り二週間

私の我儘だけで、麻帆良へ帰るのを遅らせるわけにはいきません

しかし、あくまで無理なのは『一から作る』こと

そう！元となる本体やＡＩがあれば、時間的にはなんら問題は無かったのです！

そして大会当日、再会が叶ったのはまさに天命

予選の最中、修理をするついでにカプセルコーポレーションの地図データをインプット

大会が終わったら来るようにと約束を交わしました

ブルマさんの知り合いのクリリンさんを運ぶという仕事が出来てしまったものの、その後真っ先に私のもとへ

うん、さすが私の自信作！

事情は修理中に説明してあったので、着くや否や研究室へ

もうかれこれ丸一日近く経っているでしょうか

夜も全く寝てないので目の下には隈

あ、ブルマさんとブリーフさんは仮眠取りましたよ？
お二人にも『少し寝たら』と言われはしました
しかし私としては、一秒でも早く完成させたいのです
この気持ちから、仮眠も一切取らず今に至ります
そのせいか実はかなりグロッキー、半ば精神力だけで動いている私がいます
「さてと、これで大体終わったかのう」
「後はこの人工スキンを付けてあげるだけね」
「あ、それ私がやります」
ですが！ついにその努力が報われる時が！
「生みの親として、最後の仕上げは私にやらせてください」
「確かにその方がいいのう」
「じゃあ頼むわ葉加瀬、でも無理しちゃ駄目よ？」
「平気ですって」
伊達にマッドサイエンティストと呼ばれてません！

作業はラストスパート、そして一時間後……

「お、終わった……」

ついに！ついに完了です！

「お疲れ様葉加瀬」

「頑張ったのう」

ありがとうございます！

こうお礼を言いたかったのですが、感動のあまり上手く言葉が出ませんでした

ですがお二人のご助力が無かったら、これは絶対に成し得なかったことでしょう

本当に感謝しています、ブルマさん、ブリーフさん

「じゃあ終わったことだし、早く動かしてあげましょ」

「はい、右胸のスイッチを押して……」

私は疲労困憊の身体に鞭を打ち、最後の最後の作業へ

仰向けで眠る我が至高の傑作

その右胸に掌を当て、体重を乗せてグイッと押し込んだ

さあ！

『　起動スイッチＯＮ　』

今こそ目覚めるのです！

『　絡繰茶々丸、起動します　』

システムボイスと共に開かれた両眼

その身を起こし、私へ視線をやって口を開く

「……ハカセ、仰っていた強化改造は終了したのでしょうか？」

「バッチリよ、茶々丸」

私は茶々丸へ向けて、満面の笑みを浮かべていた

さてと、こうしちゃいられない

さっき最後と言いましたが、まだ大事なのが残ってじゃないですか

それを思い出した私は、茶々丸に服を渡した後そそくさと次の準備へ

「おや？葉加瀬君、終わったんだから早く寝たらどうかね？」

いえいえブリーフ博士、そうはいかないのですよ

「まだ肝心な、動作テストが残っていました……ハルナさんやトランクスさんもいることですし、早速模擬戦闘でもしてデータを……」

「ハカセ、随分とお疲れのようですが大丈夫ですか？」

「少しは休みなさいよ」

お気遣い結構、まだまだ私は動けます！

ノーパソとカメラ（こちらの世界で調達）を手に取り、私は研究室を出ようと前進

「ほら茶々丸ついてきて、それじゃあレッツご……」

あれ？

「ハカセ！？」

なんか変です……

目の前の視界がグニャグニャ……

それに何だかフラフラして……

バタン！

「ちょっ！」

「葉加瀬君！？」

う、動け私の身体！

早く！早く新生茶々丸のテストを！

しかし私の身体は全く言うことをきかず

「やっぱ……茶しすぎた……」

「部屋に運……寝かせ……げ……の…」

「わた……運び……ょう……」

薄れゆく意識の中で、三人の声だけがポヤポヤと聞こえてきました

ああ……もうダメ

「……むにゃむにゃ……テスト……」

結局私は疲労に耐え切れず、その場でダウン

「……はっ！？」

部屋のベッドの中で目を覚ました時には、既に日が沈みかけている頃でした

第９０話　『博士』聡美はご満悦！？新生茶々丸誕生！（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「今回からぼーや達側へ話がシフトだな」

クウネル
「はい、といってもまだネギ君とかの出番は先になりますが」

エヴァ
「さて、今回のゲストはどうなってるのだ？」

クウネル
「はい、今回はこの方々です」

ピラフ
「わっはっは！」

マイ
「ピラフ一味！」

シュウ
「再登場！」

ハルナ
「私はようやく初出演ね」

クウネル
「ピラフ一味のお三方と、早乙女ハルナさんです」

エヴァ
「またこの三バカか……何かめんどくさいんだよなこいつら」

ピラフ
「なにおう！？」

クウネル
「しょうがないじゃないですか、ハルナさんのリクって彼らと一緒の分しかなかったんですから」

エヴァ
「まあ良いか、所詮は小悪党。どうせ大したことも出来まい」

ピラフ
「ぐぐぐぐぐ、言わせておけば……」

マイ
「ピ、ピラフ様落ち着いてください」

シュウ
「あんなの無視無視、ね？」

クウネル
「さて、ではコーナーを進めますか。今回の話なんですが……」

エヴァ
「初の一人称小説だったな」

ハルナ
「だよね、いっつも三人称のしか書いてなかったのに」

クウネル
「実は千雨さんのあの話なんですが、以前水竜さんから頂いたアイデアが元になっているんです」

エヴァ
「ああ……そう言えば感想であったな、そんなの」

ハルナ
「つまり、千雨ちゃんの心境を沢山書けるように一人称にしたってこと？」

クウネル
「そういうわけです」

ピラフ
「じゃああの葉加瀬とかいうのも一人称にしたのは？」

クウネル
「『半分一人称半分三人称って何か自分的に気持ち悪い』ってことで葉加瀬さんのも千雨さん側に合わせました」

シュウ
「いつも書くのと違ってやりにくかったんじゃないですかね……」

注・情景描写を文字数の割にあまり書かずに済んで楽でした

エヴァ
「っておい！」

クウネル
「まあ今回の第９０話は結構特別でしたからね。次回からはまた三人称のに戻ります」

注・今後もやるかは今のところ未定です

ハルナ
「あとは茶々丸ちゃんのとかびっくりしたわね……」

クウネル
「以前このコーナーで葉加瀬さんが予告していた内容になりますね」

エヴァ
「『設計図』と『コンピューターのデータ』ってことは、あいつらのか？」

クウネル
「そういうことです、読者の皆様も察しがついたとは思いますが」

注・分かりましたでしょうか？

マイ
「どれくらいの強さになったかは、結構気になるところですね」

ハルナ
「まあ、それは次の話に期待だよね」

クウネル
「では続きまして、次回予告です」

ピラフ
「さて、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「夕方になってようやく目を覚ましたハカセ」

クウネル
「夕食前のハルナさん達を無理やり連れ出し、茶々丸さんのテストを強行します」

ハルナ
「茶々丸さんのパワーアップぶりは、読んでみてからのお楽しみ！」

シュウ
「じ、次回の更新予定は来週の水曜日」

マイ
「感想＆投票は随時受け付け中です」

注・投票お待ちしています！

ハルナ
「まあそういうわけで、次回のネギドラ！も……」

エヴァ＆クウネル＆ピラフ＆シュウ＆マイ
「お楽しみに！」

ピラフ
「何!?絵に描いた物を実体化出来るだと!?」

ハルナ
「そうよ」

ピラフ
「よーし気に入った!このピラフ一味にスカウトしてやる!」

ハルナ
「え!?なにそれ!?」

マイ
「世界征服を夢見る、ピラフ様を筆頭とした私達一味のことだ」

ピラフ
「早速仕事だ!このピラフマシンをガンガン量産しろ!」

ハルナ
「ちょっ勝手に決め……（あれ?でもちょっと面白そう）……了解!」

スラスラスラスラ

ハルナ
「完成！まあざっとこんなもんね」

ピラフ
「おおおっ！」

シュウ
「一気に十六台も……」

ハルナ
「少し設定を変えて、人が乗らなくても自動で動けるようにしといたから」

マイ
「凄い！ピラフ様、これらを使えば……」

ピラフ
「ああ！私達の世界征服も夢ではないぞ！」

ウイーン×１６

ズシーンズシーン×１６

ピラフ
「……え？」

マイ

「……何かこっちに向かってきてません？」

シュウ
「……しかも腕を振り上げて」

ハルナ
「やっべ、また暴走しちゃった……ごめーん、何とかして逃げてー」

ピラフ＆シュウ＆マイ
「ええっ！？」

ハルナ↑飛行用ゴーレム召喚
「逃げてる内に時間が経って消えるから、多分」

ズシーンズシーン×１６

ズシーンズシーン×１６

ピラフ＆シュウ＆マイ
「ぎ、ぎえええええええええええっ！」

エヴァ↑飛行中
「……やっぱりあいつらってあんなオチなのな」

クウネル↑同じく飛行中
「ですね」

第９１話　推参！ハルナのゴーレム軍団　相手は茶々丸ただ一人（前書き）

そろそろ連載して一年経つな、とか先日思っちゃいました。今のペースだと合計９３、４話……当初の目標（１００話）からすると大分狂っちゃいましたね（汗）

ではどうぞ！

第９１話　推参！ハルナのゴーレム軍団　相手は茶々丸ただ一人

「では早速始めましょう、お二人のご助力に感謝します」

「いや、ご助力って……」

「葉加瀬が無理やり連れて来たんじゃない……」

西の都から少し離れたところにある岩場

トランクスやヤムチャ、ハルナが大会に備え修行に活用していた場所である

そこには現在、男女合わせて四人が二対二の形で向かい合っていた

「以前の茶々丸と同じと思ったら大間違いですよ?早乙女さん、ヤムチャさん」

その内の一人、葉加瀬聡美が妖しく笑みを浮かべる

丸一日徹夜し、さっきのさっきまでベッドで眠っていた彼女

目を覚ますやすぐに飛び起き、茶々丸を捜索

程なくして、庭園で猫達と戯れているのを見つけることが出来た

そんな彼女の手を引き、続いて探したのはテスト相手

リビングに行くと、夕食直前だった一同を発見し、

『すみませんブルマさん、ちょっとお二人をお借りします！』

と言って茶々丸に担がせ、ハルナとヤムチャ両名を都の外まで強制連行したのだった

ちなみにヤムチャが来てたのは、のどか達と遊びに来ていたプーアルのお迎えのため

そのまま、ついでの形で夕食を御馳走になろうとしてたようである

「そんなに強いのか？気を感じられないから全く分らないんだが……」

ロボットのため気を探れず、イマイチ『強い』かどうかの実感が湧かないでいるヤムチャ

一応、天下一大武道会に出場してネギと戦い、負けたことまでは知っていた

「もちろん！私の最高傑作ですから！」

葉加瀬は腕を組み、誇らしげに胸を張る

「……まあ、実際にやってみれば分かるか」

渋々ながらも、ヤムチャは茶々丸を見据えて構えた

隣にいるハルナもアーティファクトを出してページをめくり、どのゴーレムにするかを吟味する

「うーん、どれにしよっかな……ねえ葉加瀬、私何体くらいゴーレム出していい？」

とりあえず優先順位は決まった模様

数の確認をとり、その分だけ優先順位の上の方から出すつもりだろう

それに対し葉加瀬は、フッフッフと笑いながら眼鏡に手を当てた

「別に何体でも構いませんよ、お好きな数だけどうぞ」

「え！？言っとくけど五、六体は普通にいるわよ！」

「そのくらい分かってます」

余程茶々丸の強さに自信があるのか、葉加瀬はこの余裕を全く崩さない

「茶々丸さんもそれでいいの？」

「はい、どうぞ」

念のため茶々丸に訊いても即答された

「……そこまで言うなら見せてやるわ！パル様自慢のゴーレム軍団を！」

自分達は完全に舐められている

それを察したハルナは、ページを開いて高らかに叫んだ

まるで、後悔させてやると言わんばかりに

「出でよ！炎の魔人〈インフェルノ・アニキ〉！剣の女神〈ツルギ・タン〉！宇宙帝王フリーザ！荒野狼ヤムチャ！赤いマグマ・ジース！狂乱の美戦士ザーボン！」

激しい光とともに出現したのは、ハルナが『自信作』だと誇る六体のゴーレム

赤い巨躯に黒い紋様を施した魔人、炎の魔人〈インフェルノ・アニキ〉

両手はその名の通りの女神、剣の女神〈ツルギ・タン〉

白中心のボディィに冷酷な目つき、宇宙帝王フリーザ

ハルナの隣にいる男と姿形は全く一緒、荒野狼ヤムチャ

一風変わった戦闘服と不可思議なポーズ、赤いマグマ・ジース

ジースと同じような服装で肌や髪は緑、狂乱の美戦士ザーボン

どれも二週間の間、ヤムチャやトランクスの修行相手となった者達である

前半二人はハルナが元いた世界で創作したゴーレム
残りの四体は、のどかのアーティファクトを活用した共同制作のそれ

「どうよ葉加瀬！私の自信作達は！」

ヤムチャ（本物）も合わせ、計七人の大軍団
それら全てが、ターゲットを茶々丸一人に定めた

「自信作……成程、満更デタラメってわけじゃなさそうですね」

ですが、とさらに葉加瀬は続ける

「それでも私の茶々丸には勝てません、さあ茶々丸！」

「はい」

自信満々に目の前の一同を指差し、茶々丸へ戦闘開始の令を告げた
ここにきて茶々丸もようやく構える

「では皆さん、参ります」

「さあ、来やがれ！」

「頼むわよみんな！」

ヤムチャとハルナも、それを迎え撃つ体制だった

ボオンッ！

「「……え？」」

しかしその直後、ハルナのゴーレムの一体が爆発し消滅する

消えたのは赤いマグマ・ジース

さっきまで彼がいた場所には

「ええっ！？」

「……まずは一体」

右拳を伸ばした茶々丸の姿があった

「イ、炎の魔人〈インフェルノ・アニキ〉！」

「ファファファファアアッ！」

いきなりの先制攻撃に一同は困惑

それでもいち早く我に返ったハルナが、すぐさま自分のゴーレムへ指示を飛ばす

炎の魔人はその名の通り、拳に炎を纏って茶々丸へ殴りかかった

「効きません」

「ファ！？」

だが茶々丸は、それをものともせず右掌で受け止める

現在の炎の魔人の拳はかなりの高温

にも関わらず、茶々丸はまるで堪えていなかった

「うっそ！何で！？」

「これで二体です」

「ブァファアアッ！」

驚くハルナをよそに、そのまま反撃に移る茶々丸

炎の魔人と茶々丸、腕のリーチでいえば炎の魔人が勝る

そのためこのままでは茶々丸の攻撃は届かなかった

そこで左手から遠距離攻撃を放ち、炎の魔人を粉砕する

放ったのは、やや黄色がかったエネルギー球

今回の改造で新たに備え付けられた、新生茶々丸の機能の一つだった

「……三体」

「ごがあああああっ！」

そこから茶々丸は返す刀で、さらにザーボンも蹴散らす

前の二体もだが、こちらもたった一発で消滅

このことから、攻撃力はヤムチャらを遥かに上回ることが嫌でも分かった

「ハルナ、一対一じゃ確実にやられちまう！こうなったら……」

「了解よヤムチャさん……行け！荒野狼ヤムチャ！」

味方の数を一気に半分近く減らされたハルナ達

もう互いに把握しているのか、すかさず次の策を実行する

茶々丸へ飛び出したのは、荒野狼ヤムチャと本物のヤムチャ

「「狼牙風風拳！」」

計四本の腕による攻撃が、高速で襲いかかった

「どうよ！これなら茶々丸さんでも防ぎきれ……なっ！？」

しかしハルナの目には、まるで予想外の光景が映る

「フッフッフ……このくらいのスピード、今の茶々丸なら屁でもありません」

「そういうことですので、すみません」

打撃音は一切響かず、聞こえてくるのは空を切る音のみ

茶々丸はヤムチャ二人の攻撃全てを、腕一本使うことなく完全によけきっていた

しかもその表情からは、幾分かの余裕すら感じられる

「く、くそおおおっ！」

ヤムチャは憤慨し、気をさらに高めて狼牙風風拳のスピードとパワーを上げた

それに合わせ、ゴーレムの方のヤムチャも

既にハルナや葉加瀬のような、常人の目では捉えきれないほどの攻撃である

「こう言っては失礼かもしれませんが……」

それを茶々丸はやはり

「……足元がお留守です」

「がっ！」

完璧に見切っていた

やや身体を屈め、隙だらけの脚へ軽く蹴りを入れる

それは脛の中央を捉え、ヤムチャ（本物）は痛みに顔を歪めた

同時に攻撃の手も止まって体制も崩れ

「ぐごおおっ！」

「これで四体……いえ、三体と一人です」

茶々丸の拳を無抵抗のまま腹へ喰らわされる

ヤムチャは膝をついて崩れ落ち、次に狙うはゴーレムのヤムチャ

「続いて、四た……！？」

「キエエエエッ！」

ところが拳を振り上げ攻撃しようとしたところで、彼女の方へ何かが飛来した

薄紫に光る二つの円盤

一週間前ヤムチャを恐怖させた、フリーザゴーレムのデスソーサー

「ちょっ、フリーザ！それは流石にマズいってば！」

「キエエエエエエッ！」

ハルナが焦って制止命令を出すが、フリーザゴーレムは攻撃の手を止めない

（しまった！あの時から全然特訓でも使わなかったから、調整とかも全然してなかったんだ……）

問答無用で殺人技を使用するこのフリーザゴーレム

おそらく備考で隅に書いたフリーザの性格が原因なのだろう

あの時もハルナの命令をまるで聞かなかった

そのためそれ以降の特訓では無意識の内に封印

無論、備考で書いた性格も変えられていない

「茶々丸さん逃げて！それはホント洒落にならない！」

半ば葉加瀬に挑発され、『使えるゴーレムを粗方出す』という理由からフリーザゴーレムをつい出してしまったハルナ

茶々丸へ向け、慌てて大声で叫んだ

「……データベースより確認。『デスソーサー』、クリリンさんの『気円斬』の類似技で追尾機能を搭載した、フリーザが持つ技の一つ」

「分析してる場合じゃないって！」

しかし茶々丸は、やはりと言っていいのかてんで冷静

ヤムチャゴーレムへの攻撃を中断し、デスソーサーと正面から向かい合う

「対処方法検索……確認、パターンBを実行します」

両手を前方に出し

「……今です」

身体を横にして受け流しながら、なんと二つのデスソーサーを

「うっそ！？」

「フフン、どうです私の茶々丸は」

掴んだ

そしてデスソーサーを掴んだまま、茶々丸は突進

「今度こそ、四体目」

その内の一つを、剣の女神へ投げつける

有無を言わさず真っ二つ、消滅した

「そして、五体目」

「ギエエエェェッ！」

続いてもう片方をフリーザゴーレムに投げ返し、こちらも命中して消滅

「最後にこれで」

二体の消滅を確認すると、茶々丸は足を止めて方向転換

最後に残ったヤムチャゴーレムを見据えて駆け、再び拳を振るう

「ろ、狼牙風風け……」

ボワンッ！

「六体目です」

せめてもの抵抗と、狼牙風風拳を仕掛けようとしたヤムチャゴーレム

だがその拳は掠ることすらなく、茶々丸の一撃を鳩尾に受けて消滅した

「ハルナさんのゴーレム六体消滅、及びヤムチャさん戦闘不能……」

周りにゴーレムがいないことと、近くでヤムチャが蹲っていることを確認

「……ハカセ、模擬戦闘終了です」

茶々丸は葉加瀬に振り返り、そう口にする

「バッチリよ茶々丸！」

この時の葉加瀬の顔は、今までに無いほどの満足気な表情だった

第９１話　推参！ハルナのゴーレム軍団　相手は茶々丸ただ一人（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「今回のゲストはどうなっているんだ？」

クウネル
「はい、今回はこのお二人」

ピッコロ
「あの茶々丸とかいうの、かなりデキるようだな」

のどか
「凄かったですね……」

クウネル
「ピッコロさんと宮崎のどかさんです」

エヴァ
「リクが最後の最後になってようやく来た余り者コンビか……」

クウネル
「正確に言えば夕映さんもリク来てないんですけどね」

エヴァ
「確か作者が自分で出したんだったな」

2014

クウネル
「はい、ではコーナーの進行を……って、もう始まっちゃってますね」

ピッコロ
「ほう、魔力を動力源とするロボットか……」

エヴァ
「正確にはガイノイドと言うそうだ、まあ機械的なことは私もよく分からんがな」

のどか
「ネギ先生達よりも強くなったんでしょうか……」

エヴァ
「まあその辺りは、いずれ本編で触れるだろう」

ピッコロ
「少なくとも、クリリンや天津飯レベルよりは格段に上だな」

エヴァ
「しかしあそこまで茶々丸をパワーアップさせるとは……ゲロといいブルマ親子といい、あっちは天才ばかりだな」

のどか
「私達の地球の科学技術より何歩も先を行ってますからね……」

クウネル
「ちなみにこの茶々丸さんの強化案、連載当初から決めてたみたいですよ」

エヴァ
「ハカセをカプセルコーポレーションに飛ばしたのはそういうわけか」

クウネル
「らしいです」

のどか
「あと、ハルナのゴーレムで何体か初登場のがありましたね」

エヴァ
「完全に偏ってたよな、あれ」

クウネル
「まあドドリアさんやグルドさんとかばっかりだったら、それはそれで気味が悪いですが」

ピッコロ
「あのゴーレムは今後出番があるのか？」

クウネル
「今のところ未定です、ゴーレムのチョイスも半分ネタみたいなもんでしたしね」

エヴァ
「しかもみんな瞬殺だったし……」

クウネル
「では続きまして、次回予告です」

のどか
「さて、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「テストも終了し、家へと帰還した茶々丸達」

ピッコロ
「今度こそ夕食のようだな」

のどか
「時間的にも暗くなりましたからね……次のには私やブルマさん、ベジータさん達も登場します」

クウネル
「そして時を同じくして、別の場所でも激しい戦いが巻き起こります。お楽しみに」

エヴァ
「次回の更新予定は来週の火曜日だ……って、いつもなら月曜じゃないか？」

クウネル
「『学年末のテストが始まったので、月曜に出来る自身がない』とのことです」

エヴァ
「以前テストに関係なく週二投稿してたのはどこのどいつだよ……」

のどか

「でも何か、一部評価的にかなり危ないのがあるとか」

注・出来る限り頑張ります

ピッコロ
「……これはどっちのことを言ってるんだ？」

クウネル
「おそらく両方かと」

のどか
「感想や人気投票の投票は随時受付中です」

エヴァ
「最近投票がメッキリ減ったからな……作者の奴かなり焦ってるんじゃないか？」

注・皆様の投票お待ちしています！詳細は第８６話のにあります！

エヴァ
「……まあ、そういうわけだからよろしく頼む」

クウネル
「それでは読者の皆さん、次回のネギドラ！も……」

エヴァ＆ピッコロ＆のどか
「お楽しみに！」

クウネル
「それにしても、エヴァンジェリンとピッコロさんってホント似てますよね」

エヴァ
「は？」

のどか
「確か本編でもネギ先生が言ってましたね」

ピッコロ
「そんなに俺がこいつと似てるのか？」

クウネル
「『目つきが怖い』、『修行はスパルタ』、『弟子は英雄の息子』、他にも例を挙げれば結構出てきますよ」

のどか
「ホントですね」

クウネル
「あとは……ほら、『弟子に対してツンデレする』とか」

エヴァ&ピッコロ
「その言い方はやめろ！」

2020

第９２話　これぞ科学の力！明かされし強さの秘密（前書き）

予告より一日早く投稿です。何とかテスト勉強の合間を縫って書けました、テストの方は少しアレでしたが（笑）

ではどうぞ！

第９２話　これぞ科学の力！明かされし強さの秘密

「へー、それじゃあ大成功だったわけね」

「はい、これもブルマさん達のおかげです」

場所は戻り、ブルマ宅の食卓

茶々丸のテストが終了し、日も暮れてきたので帰還した葉加瀬達

テーブルへとついて夕食をとりながら、今回の成果を話していたところだった

ちなみに、現在食事中なのは四名

葉加瀬、ヤムチャ、ベジータ、トランクスである

のどかやブルマらは、葉加瀬達が出掛けている間に完食

その時ベジータとトランクスは重力室でトレーニングをしており、葉加瀬達とほぼ同時刻にここへ姿を見せた

「でも……ハルナさんには悪いことしちゃいましたかね」

そしてハルナなのだが、現在はのどか達と自室

ハルナのゴーレムは、ダメージの一パーセントを術者（つまりハ

ルナ）へ還元する

今回出したゴーレムは全部で六体

しかもどれもが、一撃KOされるほどのダメージ

ハルナが受けた還元ダメージは今まで以上のものがあった

一応『木乃香ゴーレム』なるものを創ってみたが、あまり回復しなかったらしい

そうさせてしまった罪悪感からか、ハルナに茶々丸も同伴

ベッドの上で寝込むハルナに、のどかと一緒につきっきりだそうだ

「そんなに酷い怪我なの？」

「出血はないので大丈夫といえば大丈夫なんですが、かなり全身が痛いとかで……」

スープを口に運びながら、葉加瀬はブルマの問いを返した

「……けど僕も興味があるな、その茶々丸ちゃんには」

すると、葉加瀬の向かいの席に座っていたトランクスが口を開く

その隣には、山盛りに詰まれた夕食をガツガツと食しているベジータがいた

「ヤムチャさんやハルナちゃんのゴーレム達が束になっても楽勝だ

ったんでしょ？」

「そうなんだ、何だってんだよあの強さは……」

葉加瀬の隣に座るヤムチャがやや悔しそうに言葉を漏らす

葉加瀬曰く、改造前の茶々丸の強さはヤムチャより下

そんな彼女に今回手も足も出なかったことは、やはりヤムチャも少々ショックだったようだ

「そりゃまあ、父さんや葉加瀬と協力して完成させたんですもの。ヤムチャくらいになら余裕で勝てないと」

「ヤ、ヤムチャくらいってなんだよ！」

それをフフンと鼻で笑うブルマ

ヤムチャは彼女に顔を向けて眉をひそめた

「あんた一年前、人造人間に殺されかけたじゃない。だったら今の茶々丸に勝てるわけないわ」

今回、茶々丸の強化改造で非常に大きな役割を果たした物が二つある

まず、Ｄｒ．ゲロが書いた１７号の設計図

一年前、クリリンとトランクスがＤｒ．ゲロの研究所から持ち帰ってきたものだ

そしてもう一つが、コンピューターに残っていた１６号のデータ

セルと戦った際の故障を治しに来た時のが、そのまま現存

全身を隈なくスキャンしていたため、各構造の原理も完全網羅

エネルギー無限装置こそ無理だったものの、その他はほぼ全て茶々丸に搭載された

さきのテストでも見せたエネルギー弾、飛躍的向上を見せた身体能力

それに加えて舞空術や瞬動もお手の物

今までの魔力ジェットよりも、燃費は数十倍にまで良くなっている

さらに１６号の中には、対悟空戦に備えてか戦闘データも大量に存在

これも茶々丸の中にコピーし、大パワーアップを果たしたというわけだ

「それじゃあ今のあいつには、１６号や１７号並みの実力があるってことか！？」

「ヤムチャさん達とのデータしか取れてないので、そうとはまだ言い切れませんね」

ブルマから簡単な説明を受け、ヤムチャは思わず目を見開く

彼が口にした言葉に、葉加瀬は顔を向けて答えた

「同等、もしくはそれ以上の実力者と戦ってみないことには……そこでなんですけど」

そして、そんな身近にいる実力者の方へと顔を向け直す

「明日にでも、茶々丸のお相手をしてもらえませんか？トランクスさん」

「僕かい？」

「はい」

トランクスの強さは言わずもがな

テスト相手にはこれ以上に無い相手である

ここでは言わないが、さっきもしトランクスがいればヤムチャを誘うなど彼女は絶対にしなかった

本当はこの後すぐにでもやりたかったが、現在茶々丸はハルナ達の部屋

それに加え、トランクスもベジータとの修行で疲れているだろうと考慮した結果である

「相手自体は全然構わないんだけど、明日か……」

「何か用事でも？」

「ちょっと約束がね、だから午後からでもいいかい？」

午前中までには終わるだろうから

トランクスは少し申し訳なさそうに葉加瀬へそう言った

「はい、ありがとうございます！」

葉加瀬の顔には笑みが浮かぶ

茶々丸は明日まで休暇をとっているので、日程的にもなんら問題は無かった

「そうと決まれば……ハグハグハグハグハグ」

「え？」

続いて、目の前の食事を猛スピードで食べ進める

「ど、どうしたの？そんな急にたべ……」

「ごちそうさまでした！」

トランクスが訊き終わるより先に、葉加瀬は夕食を食べ終えた

と同時にガタッと椅子から立ち上がり、近くに置いておいたパソコンらを抱えて部屋の外へ

その様は正に意気揚々としており、一同の視線はそこへと注がれる

「葉加瀬、どこ行く気よ？」

「ちょっと研究室まで。今日のテストのデータまとめと明日の準備を」

「また！？朝にでもすればいいじゃない、もう少し寝てなさいよ！」

「平気でーす」

声をかけたブルマの顔も見ず、空けたドアをバタンと閉めた

「……呆れた、普通あそこまでするか？」

「茶々丸ちゃんが強くなったのが余程嬉しいんでしょうね、葉加瀬」

ブルマは口の端を上げ、フフッと笑う

外はもうすっかり暗くなり、夜は次第に更けていった

「そんなのずるいよ！」

そして時を同じくし、とある山の中

そこにある、とある家のとある一室では

「何がずるいと言うんです！」

「二週間も一緒だったなんてずる過ぎだよ！だから今夜は私となの！」

枕を持った二人の少女が口論を交わしていた

「あ、あの、二人とも、喧嘩は……」

それを一人の少年が、オドオドした様子で仲裁に入ろうとし

「あんた達いい加減にしなさいよ！」

別の少女が、口論する二人の間に割って入る

「いつまでそんなバカバカしいことで揉めてんのよ！」

「真正のバカのあなたに、そんなこと言われたくありませんわね」

「な、なんですって！？」

しかし一人に挑発され、彼女も激昂

たちまち挑発してきた少女、雪広あやかへと掴みかかった

「言わせておけば何よその言い草！」

「お黙りなさいアスナさん！私達のところへ泊まりに来た身で、何をそんな生意気な口を利くんです！」

するとあやかも負けず、自分を掴んできたアスナを逆に掴み返す

「ここはあんたの家じゃないでしょ！」

そう、とある山とはパオズ山

とある家とは悟飯の家のことで、とある一室とはネギ達が貸してもらっている部屋

床には五人分の布団が既に敷かれており、この場にいる皆も寝巻きであった

そもそもの事の発端は昨日、大会が終わって帰ろうとしてた時のこと

『あ、俺っちどうやって帰ろう……』

このカモの発言である

カモは現在悟飯の家に居候中の身

しかし悟飯、ネギ、コタロー、あやか

この四人が皆神様の神殿へ行ってしまった為、帰る手段がなくなってしまったのだ

妥協してピッコロの所にしようにも、その彼も神殿へ行ってる最中

そんな時だった

『そう言えばカモ君ってどこで寝泊りしてるの？ネギ君も一緒なんでしょ？』

まき絵がカモへと近づき尋ねたのだ

カモが喋るオコジョだというのは、既にアスナから話を聞いている

それに対しカモは

『東地区のパオズ山にある悟飯の兄貴の家でさぁ、ここからじゃ遠すぎて俺っちの足だけじゃあ……ていうか周り海だし』

と答えた

つまり、カモは悟飯宅（ここ）の場所を教えてしまったわけだ

すると天津飯が、家の場所を知ってるから連れて行ってやろうと提案

それにすかさずまき絵が

『私も行く！』

と声高らかに宣言

こうしてカモを持った天津飯と、まき絵を背負ったアスナは一路パオズ山へ

さらには到着してカモを送り届けた際に

『今度泊まりに来ていいですか？』

『別にいいだぞ、いつでも遊びに来てけれ』

チチとこんなやり取りをして、約束まで取り付ける

今日はみんな疲れてるだろうからと、その日は流石に自重

そして一日過ぎた本日、今に至るわけである

ちなみに、まき絵はともかく何でアスナも泊まっているのかなのだが

『いいんちょとまきちゃん二人だけは何か危ない気がするから、監視的な意味で一緒に来た』

とのことである

「大体あなたに濡らされたあの服！チチさんにお返しする時どれだけ恥ずかしかったと思ってるんですの！」

「今それは関係ないでしょうが！」

取っ組み合った二人は、ついには布団に倒れこんで大乱闘

「雪広あやか流合気柔術……」

「させるかあっ！」

気功波は当然ながら使っていないが、寝巻きの襟や袖等を掴んでドッタンバッタンと暴れまわった

そんな超接近戦なインファイトであるため、アスナも咸卦法を使う暇が無い

大会の予選でも分かるが、咸卦法抜きだと両者の実力はほぼ伯仲

故に決着着かずの戦いが延々と続けられた

「二人ともやめてくださいよ！」

ネギがさらに焦った様子で声をあげるが

「このおおっ！」

「ふんっ、こんな攻撃ごときで……」

二人の耳には入らない

「……ちょっと俺便所、多分暫く戻らん」

「あ！コタロー君待って！」

部屋の隅で布団に包まっていたコタローも、やかましさに耐え切れず部屋から退避

ネギの制止の声に耳一つ貸さなかった

「ネギくーん、今の内に私と一緒に寝よー」

「え！？ちょっとまき絵さん！」

また、漁夫の利を取る様な形でまき絵がネギへと迫るが

「「こらそこ！」」

「うひゃっ！」

二人に鬼のような形相で睨まれ、阻まれる

「まき絵さん！抜け駆けなど許しませんわよ！」

「うわわっ！ちょっ、タンマ！」

さらにはあやかが手を伸ばし、まき絵の袖を掴んでくる始末

麻帆良の時とは比べ物にならないその力に、思わず制止の声を発した

「今の二人強すぎだって！巻き込まれたら私死んじゃうよ！」

「問答無用！ネギ先生と一緒に寝るのは私です！」

「あんたまだそれ言ってるの！？」

「ネギくーん！助けてー！」

「あわわわわ……」

断固としてネギと共に寝るのを切望し続けるあやか

そんな彼女とマジ喧嘩を行うアスナ

それに巻き込まれたまき絵

そして彼女らをただ、あたふたと見ることしか出来ないネギ

この大騒ぎは、かれこれ数十分に渡って続けられた

ちなみにその夜、コタローは部屋に戻らず悟飯の部屋で寝た

「コタロー君、戻らなくていいの？」

「あんなとこで寝れるか」

第９２話　これぞ科学の力！明かされし強さの秘密（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「前回分までので、主人公側のキャラは全部もう登場出来たな」

クウネル
「そうですね、というわけで今回のゲストはこのお二人」

アックマン
「よう吸血鬼の嬢ちゃん、久しぶりだな」

ナム
「はじめまして」

クウネル
「アックマンさんとナムさんです」

エヴァ
「……え？そんなリクエストあったか？」

クウネル
「ありましたよ、ほら」

エヴァ↑感想ページ確認中
「……去年の八月！？」

クウネル
「かにみそーッ！！さんからのれっきとしたリクエストです」

アックマン
「いくらなんでも遅らせすぎだろ……まあ、俺としてはまた出られたからいいけどよ」

注・今更になってすいません、かにみそーッ！！さん

クウネル
「そういえば、ナムさんはこのコーナー初登場ですよね」

ナム
「はい、リクエスト感謝します」

エヴァ
「それと本編にも一回だけ出たよな、茶々丸達ので」

クウネル
「かなり初期でしたよね」

注・ちなみに第１３話です

アックマン
「ちなみに、俺の初登場は第１０話だ」

エヴァ
「別にお前には聞いてないだろ……」

クウネル

「さて、それではコーナーを進めますか。今回の話ですが……」

エヴァ
「茶々丸の強さの説明回か……これってやる必要あったか？」

クウネル
「まあ、ちゃんと『１６号と１７号の』と明記されてはいませんでしたし」

アックマン
「けど結構読者分かってたと思うぞ」

エヴァ
「ここでもゲロの名前が出たしな」

クウネル
「念のためですよ、念のため、それに詳しく作者も解説したかったそうですよ」

エヴァ
「まあ別にいいが……なら後半のあれについて聞こうじゃないか」

クウネル
「ネギ君達のですか？」

エヴァ
「他に何がある」

クウネル
「前回、予告もしたじゃないですか」

エヴァ
「いや、これはダメだろ！絶対読者は違うのを予想してたって！」

ナム
「『激しい戦いが巻き起こります』ですか……おそらく私も普通の勝負を想像しますね」

エヴァ
「ほら見ろ！」

クウネル
「いや、私に言われましても……」

注・予告した時点でこれ書くつもりでした

アックマン
「俺は別にこういうのも好きだけどな、せっかく日常的な話が書けるわけだし」

クウネル
「それに明日（本編時間軸中）も戦闘話は確実に一つ入りますしね、トランクスさんの」

エヴァ
「そうだったな……だが、アレを覚えてる読者いるのか？」

注・以前大会中にフラグを立てたやつです

クウネル

「では続きまして、次回予告です」

ナム
「さて、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「大会が終了してから二日目の朝」

クウネル
「占いババさんの館にいる夕映さん達が、ある情報を耳にします」

アックマン
「勿論、俺も登場するぜ！」

エヴァ
「やっぱり……だがこれで、相坂さよが久しぶりに登場か」

クウネル
「ですね」

アックマン
「あと俺もな」

エヴァ
「くどいぞ貴様！」

ナム
「次回の更新予定は金曜日」

クウネル

「感想や投票もお待ちしています」

アックマン
「じゃあ読者のみんな、次回のネギドラ！も……」

エヴァ&クウネル&ナム
「お楽しみに！」

エヴァ
「ところでアックマン、ぶっちゃけ綾瀬夕映の成長具合はどうなんだ？」

アックマン
「ん？かなり頑張ってるな、二週間前と比べたら見違えたぜ」

クウネル
「回復魔法も習得してましたからね」

アックマン
「そっちに関してはノータッチだがな、俺は主に戦闘系」

注・その話もいずれやるつもりです

第９３話　手渡されたプレミア　早朝修行の夕映（前書き）

三月になって初の投稿です。初めて投稿したのが去年の三月六日、明後日で丁度連載一周年になります。流石に次の話をその日にってのは無理ですが、出来る限り早期完成を目指します。

ではどうぞ！

第９３話　手渡されたプレミア　早朝修行の夕映

占いババの一番弟子、綾瀬夕映の朝は早い

「それじゃあ今日は、魔法薬の調合でもやってもらおうかのう」

時間は早朝四時

夕映はその数十分前に起床し、瞑想をして眠気を覚ましていた

そして今は占いババと共に、館の中にある妖しげな倉庫の中

「とりあえず最初はこれかの、材料や作り方は書いてあるから作ってみろ」

「はいです」

一昨日の晩、仮免ながら一応占いババから合格を授かった身である夕映

占い料代わりの館の雑用も二週間やりきっており、ここにいる理由はもう無いかと思われた

だが、やはり夕映の向学心は高く

『あの時回復は殆ど木乃香さんに任せっきりでしたし、戦闘面においても到底皆さんには敵いません。ならもっと、自分に出来る精一杯の修行をしたいと思ったんです』

と、再び館での居候と修行を決意する

大会会場で再会出来たネギに、教えを請うという選択肢もあるにはあった

しかし、ネギはネギでここでの修行に懸命に励んでいる

これに気付いた夕映は、結局のところまたここに身を寄せることになった

それ以上に、師匠として占いババを非常に敬愛している面も大きいのだが

占いババも、以前のように雑用もすることを条件に了承

その場にいたアックマンも、少なからず喜んでいたようである

「えっと、これですね……」

水晶に乗った浮遊中の占いババ

彼女が指差した先にあった本棚の本

それを夕映はさっと取り出した

大きさは幼児向けの絵本くらいで、厚さはせいぜい教科書程度

表紙にかぶった埃を丁寧に払い、そこに書かれている文字を見やる

『まず三日は治らない、一撃必殺腹下し』

「……占いババさん、これは？」

怪訝そうな表情で占いババへ尋ねると

「ワシが昔作って書いたやつじゃよ」

あっさりと答えが返ってきた

「三百年近く前じゃったかな、試しに作って弟に飲ませたら大成功してのう」

「占いババさんの弟さんって……確か武天老師様ですよね、通称亀仙人の」

「そうじゃよ、あいつもガキじゃったのう……スケベはあの時からとっくにじゃったがな、フォッフォッフォ！」

「ははは……」

思わず苦笑する夕映

「おっといかん、話が逸れたな……ほれほれ、早くせんか！」

「あ、すみません！」

本を取ってから動いてないことに気付き、慌てて倉庫の中央にある木机へ向かった

木机の上には、ヤモリやら蝙蝠やら定番ともいえる材料が数個
それを挟んだ先には、妖しい色の液体が入った瓶や壺が幾つも並んでいる
「どれどれ……」
本の背を机に当て、早速開いて中を確認した
紙はなかなか上質なのか、やや傷んではいるが読めないこともない
(流石占いババさん、さっき三百年前とか言ってたですよね……その時からこんなものを)
字の方も、少々殴り書きだが何とか読める
夕映は書いてある手順に従い、棚から数種類の瓶を取り出した
「……出来ましたです」
「よし」

そして約一時間後、完成

小型の丸底フラスコの中にある、オレンジジュースのような色の液体がそれ

占いババは栓をしたそれを受け取ると、懐に仕舞いながらボソッと呟く

「それでは早速、効き目がちゃんとあるか誰かに試してみるかのう」

「え！？」

「フォッフォッフォ、冗談じゃよ」

聞き捨てならぬ発言に夕映は眼を見開くが、すかさず占いババの笑い声が飛んできた

この人が言うと、全然冗談に聞こえない

夕映は二週間の修行生活を通して、本当にそう感じ取っていた

「しかしよく完成できたのう……そういえば途中から何やら別の本を出しとったが」

「ああ、これのことですね」

そう言うと夕映は、木机から一冊の本を手に取る

「世界図絵（オルビス・センスアリウム・ピクトゥス）、魔法関連のことについて書かれた百科事典です」

「ほう」

占いババは興味有り気に声を漏らし、夕映は説明を続けた

「以前調べてみたところ、私達の世界とここの世界でも魔法に関しての共通点が多々見受けられました」

そこで先ほど、作業が手詰まった際に利用したのです

そうしたらこれと極似した魔法薬の記事があったので、写真での説明入りもあったこちらも少々参考に

もちろん基本的には、占いババさんの書物のを忠実に作りましたですよ

「それにここまで出来たのも、そもそもは占いババさんの今までのご教授の賜も……わっ！」

と、ここまで説明すると占いババが水晶に乗ったまま急接近

眼前に顔がどアップで迫り、思わず仰け反り後ろに数歩下がる

「ちょっとそれ、ワシにも貸してみろ」

「え？」

すると一つの要求と共に、占いババの細い腕がスッと伸びた

「師匠命令じゃ、ちょっとそれ寄越せ」

「え、は、はいです」

夕映は本を差し出すと

バッ！

「よし、ふむふむ……ほうほう……」

「あの、占いババさん……私は次に何をすれば」

素早く奪い取って熟読を開始

まだ使い方を教えてないというのに、まるで自分の物であるかのように使いこなす

両目とアーティファクトのページが、それぞれ目まぐるしく動いた

「占いババさん！」

別に自分のアーティファクトを読まれること自体は構わない

ただ、指示も何も無しで修行が成り立たないのは勘弁

午前中に出来る修行は、早朝の内の数時間と限定

元の地球に帰るまで、残り僅か一週間弱

時間が酷く惜しい夕映は、少しながら占いババへ声を荒げる

「……年齢詐称薬、か」

「は？」

しかし、返ってきた言葉は

「……少し用事ができた、朝の修行はこれで終了じゃ」

「ええっ！？」

とても彼女自身、納得がいくものではなかった

「というわけでここから早く出てってくれ、今からここはワシ一人じゃ」

「ちょっ、待ってください占いババさん！」

「ほれほれ」

「占いババさん！」

背中をグイグイと押され、抵抗むなしく夕映は外へ

「それとこの本、暫く借りとくゾイ」

バタン

ガチャン

「占いババさん！」

扉は閉まり、内側から鍵を掛けられる

夕映はさらに声を大きく発するが、今度は返事すら無かった

「……はあ」

次に夕映の口から出たのは、諦めの意を示すため息

ああなってしまっては、もう仕方が無いか

そう結論付け、渋々ながら夕映はその場を後にした

「とまあ、そういうことが数時間前にありまして」

「ふーん、だからババさんの姿がさっきから見えないわけだ」

そして時は少々流れ、午前十時前である

食堂のテーブル上にあるクッキーを頬張りながら、朝倉は夕映の話を聞いていた

現在、雑務も一段落して軽いティータイムの様子

さらにその横にはさよも

先ほど説明を省いてしまったが、この二人もここに残ることを決定

理由としては主にさよ

『ここだと話せる相手が沢山いて楽しいので、私は夕映さんとこっちに残ります』

朝倉に館でこう言い、『さよちゃんが残るなら私も』という流れである

ちなみにだが夕映と朝倉がここへ帰還直後、さよは酷くしょぼくれていた

理由は簡単、二人に置いてきぼりにされたから

大会当日の朝、出発の時間になってもスヤスヤと眠り続けていたさよ

いくら起こそうとしても起きず、やむを得ず二人は一足先に出発

その際、さよのマブダチであるお化けに

『起きたらさよちゃんに事情説明しといて、それとついでに会場へも案内よろしく』ｂｙ朝倉

と言っておいたのだが、その後思いがけないトラブルが発生

『おい、仕事で闇魔のトコまで行くからついて来い』

『え!?ちょっと待ってください、私さよさんに……』

『つべこべ言わずにさっさと来い!』

占いババがお化けを館から連れ出したのだ、しかも有無も言わさず

その日占いババは一日中出掛ける事となっていたため、仕事も休業

アックマンは修行をしに地獄へ

その他のメンバーモ、久々の休みを満喫しに外へ遊びに

当然客だって来ないので、館の中はさよただ一人

『……ふあああ、よく寝……あれ?』

故に目覚めたさよは何も出来ず、一日を無駄に過ごしてしまったというわけだ

「それで夕映さん、この後はどうされるんですか?」

「そこなんです、いつもやる雑務は粗方片付けてしましましたし…何か指示を貰おうにもそれが出来ない状況ですから」

しかしまあ、夕映がその後夢見の魔法を使って記憶を見せてあげたので、このように今ではそこまで気にしていないのだが

「だったらアックマンと修行してればいいじゃん、今までだって結構付き合ってくれてたし」

「アックマンさんは今日不在です、閻魔様から頼まれ事があったらしくて」

朝倉の提案にも夕映は首を振り、再びため息

「頼まれ事って？」

「何でも大界王星の武道家で、『地獄の悪人と戦って武者修行する』と言った人がいたとか、それの立ち会い人らしいです」

「……ねえ、それってもしかして」

「おそらく古菲さんです」

「やっぱり……」

ホントにらしいことやってるね、と朝倉は苦笑した

その隣ではさよが

（今度占いババさんに頼んで、古菲さんに会いに行ってみようかなぁ……）

と仲間（死んでるという意）に会うことを考えている模様

すると一同がいるこの食堂に突如

フォッフォッフォッフォッフォ

「「「!?」」」

聞き覚えのある不気味な笑い声

「「あ!」」

「占いババさん!」

声がした方を向くと、やはり予想通り

水晶に乗った占いババが、満足げな表情で入ってきた

その手には、大量の青い飴玉が入った透明な瓶が一つ

「も、もう完成させたですか!?」

「まあのう」

占いババはニヤニヤと笑いながら、ススッと夕映の方へ接近

「お主のおかげでいい物が手に入った、感謝するぞ」

「は、はあ、どうもです」

めったに見ない占いババのこんな態度に、夕映は困惑しつつも軽く頭を下げる

その当人である占いババは、持っていた瓶をテーブルの上に置き

「これはその礼じゃ、特別にお主にくれてやる」

懐から小さな紙を数枚夕映へ手渡した

「……これは？」

「あの世一武道会のチケットじゃ、かなりのプレミア物じゃぞ」

「なんと！」

「「あの世一武道会？」」

占いババの説明に夕映は驚き、朝倉とさよは首をかしげる

「ねえ夕映っち、そのあの世一武道会って何なの？」

「アックマンさんから聞いたことがあるです……今から一年前に大界王星で行われた、あの世一の武道家を決める大規模な武道大会だったと」

「うむ、そうじゃ。今年も開催することが決まってな、一昨日閻魔のトコへ仕事に行ったら数枚くれおったわい」

「なるほど……」

夕映は左手に持つチケットに目をやり、枚数を数えた

「言っておくが、ワシの分はあらかじめ抜いてあるからな」

「……全部で九枚、ここにいる三人を除けば六人分ですか」

夕映は朝倉とさよを見やり、九枚の内三枚を右手に移し変える

「好きな奴を誘うんじゃな、当日になったらワシがあの世まで一緒に連れて行ってやる」

「好きな奴を、と言われても……」

十人以上この世界に来ている夕映のクラスメイト達

しかもそれ以外にも、ネギ、コタローと知り合いは多数

それに、大会会場で知り合った悟飯達のことも無視出来ないだろう

自分だけの独断で六人を選ぶのは、流石に夕映にも抵抗があった

「まあ時間はあるし、じっくり考えて決めるんじゃな」

「ううむ……」

そんな風に、夕映が考えを巡らせている頃

「じゃあ始めようか、刹那ちゃん」

「はい、よろしくお願いします！」

別の場所では、二人の剣士が戦いを始めようとしていた

第９３話　手渡されたプレミア　早朝修行の夕映（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「今回のゲストはどうなっているんだ？」

クウネル
「はい、今回はこの方」

ドスコイ
「ドスコイ！ドスコイ！」

クウネル
「ネギ君達のお陰で死亡フラグを回避した相撲取り、ドスコイさんです」

エヴァ
「またマニアックなキャラを……でもまあ、リクエストされたわけだしな」

クウネル
「作者もこれが来るとは思ってなかったようです」

ドスコイ
「ドスコイ！ドスコイ！」

エヴァ

「……ところでお前」

ドスコイ
「ドスコイ？」

エヴァ
「ドスコイ以外何か喋れないのか？」

ドスコイ
「ドスコイ！ドスコイ！」

エヴァ
「……（怒）」

クウネル
「えっと、『登場した際にドスコイ以外喋らなかったので、このコーナーでもドスコイしか喋りません』とのことです。作者によると」

エヴァ
「よし、今すぐ追い返せ」

ドスコイ
「ドスコイ！ドスコイ！」

クウネル
「可哀想じゃないですかエヴァンジェリン、ドスコイさんも悲しんでますよ」

エヴァ
「最近無口キャラがめっきり出なくなったと思えば、お次はこれか

！ていうか悲しんでるかどうかなんて、ドスコイの四文字だけで伝わるか！」

クウネル
「仕方ないですよ、変に独自に口調を考えるのもアレですし」

エヴァ
「だったら前みたいに別キャラもついでに呼べ！」

クウネル
「だってココネさんや餃子さんと違って、親しい人も全然……」

エヴァ
「いいから呼べ！もしくは追い返せ！」

クウネル
「……仕方ありませんね、それではこの方をお呼びしましょう」

ビドー
「ん？なんだここ？」

クウネル
「実際にはドスコイさんを絞め殺していた筈の人、銀河戦士ビドーさんです」

エヴァ
「うわ、すっごいこじつけ」

クウネル
「呼べと言ったのはあなたでしょ」

ビドー
「おい、俺は一体何すりゃいいんだ？」

クウネル
「えっとですね、かくかくしかじか……」

ビドー
「成る程な……ボージャック様を差し置いてやるのは気が引けるが、折角だしやってやるか」

クウネル
「ありがとうございます」

ドスコイ
「ドスコイ！ドスコイ！」

クウネル
「ではコーナーを進めましょう、さて今回の話ですが……」

エヴァ
「あのババア、普通に魔法薬とか調合出来たんだな」

クウネル
「この小説ではそういう設定みたいですね」

ビドー
「あの夕映ってのも出来てるみたいじゃねえか」

ドスコイ

「ドスコイ！ドスコイ！」

クウネル
「魔法関連の知識はあのアーティファクトでばっちりですしね、材料さえあれば簡単なのは可能のようです」

エヴァ
「初めて作る年齢詐称薬を、ああも短時間で完成させたババアも化け物だがな」

クウネル
「でもエヴァンジェリンもそのくらい出来ますよね？」

エヴァ
「材料さえあればな。痲帆良にはそれが無いので作ったことは一度も無いが」

ドスコイ
「ドスコイ！ドスコイ！」

ビドー
「でも凄えなその薬、好きに歳を変えられるんだろ？」

エヴァ
「あくまで幻術の一種だがな……ていうかあのババア何粒飲むつもりだ？一粒あたり七、八歳程度しか変わらんのに」

クウネル
「では続きまして、次回予告です」

ドスコイ
「ドスコイ！ドスコイドスコイドスコイドスコイ！」

エヴァ
「お前は少し黙ってろ！」

ドスコイ
「ドスコッ！……イ」

クウネル
「……コホン、では改めまして次回予告です」

ビドー
「さて、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「場所は移って西エリアの荒野地帯」

クウネル
「そこでトランクスさんと刹那さんが、剣術の手合わせを行うようです」

ビドー
「トランクスっていうと、ゴクアが散々怒りを爆発させてたあいつか」

エヴァ
「ゴクア戦では発揮しなかったが、この手合わせで久々にご披露というわけだな」

クウネル
「これは楽しみですね」

ビドー
「次回の更新予定は来週の水曜日だ」

エヴァ
「感想等も随時待ってるぞ」

クウネル
「では読者の皆さん、次回のネギドラ！も……」

エヴァ&ビドー
「お楽しみに！」

エヴァ
「ところで作者、学年末のは結果どうだったんだ？この小説の更新にも影響してたようだが」

クウネル
「『以前よりマシ、けど酷いのには変わりない』とのことです」

ビドー
「大丈夫なのか？それ」

注・先生に呼び出し喰らわない程度に頑張ります！

エヴァ
「志低っ！」

第９４話　激突！二人の剣士　手合わせという名の真剣勝負（前書き）

遅くなりましてすみません、第９４話投稿です。今回は少々長めになりましたので、どうかご勘弁を。

ではどうぞ！

第９４話　激突！二人の剣士　手合わせという名の真剣勝負

「それじゃあ、一応確認しておくわね」

西の都を出て少し先にある荒野

そこには現在、四人の男女の姿があった

「まず一つ、首から上を狙っての攻撃は厳禁。当然フェイントも無しね」

「ウチのアーティファクトでも、そういうのは流石に治せんさかいな」

「はい」

「分かってますよ、お嬢様」

ブルマ、木乃香、トランクス、刹那である

二日前、バトルアイランドにて手合わせの約束を交わした刹那とトランクス

その際同席していたブルマと木乃香

この場にいるのはその四名のみ

葉加瀬と茶々丸は、午後から行うトランクスとのテストに備えて

の調整中

ハルナは未だ体調が万全でなく、のどかと共に自室待機

ベジータは重力室で修行で、ブリーフ夫妻は遠出自体好きではない

よって、この四名のみなのである

「それと二つ、どっちかが大怪我したら即終了。私達が強制的にストップをかけるわ」

「あくまで『剣の稽古』の名目での手合わせやからな、無理したらあかんえ」

「勿論それも」

「承知の上です」

既に両者は準備万端

互いに剣を鞘から引き抜き、距離をとって向かい合っていた

目は正に真剣そのもの

『手合わせ』というよりは、もはや『決闘』と表現してもおかしくないだろう

「「はあああっ！」」

二人はほぼ同時に声を発し、気を開放

全身、そして両手で握る刀に気が滾ってくるのが目に見えて把握できた

（流石トランクスさん……まだ超サイヤ人になっていないというのに、凄まじい気だ）

そんな中刹那は、トランクスから発せられる気を自身の肌でひしひしと感じとる

その気が持つのは、圧倒的威圧感

向こうがまだ全力でないと分かっていながらも、気圧されてしまうのは極道理なことだった

（しかし……無謀だというのは分かっているが、出来れば本気のトランクスさんとも戦いたい）

自分に大怪我を与えてしまうのを危惧しているのだろう

超サイヤ人よりも、普通の形態でいる方がそういう加減をするのは簡単だ

（だが私だって、神鳴流の名を背負った剣士だ！）

確かに銀河戦士と戦った際は、醜態を晒してしまったのかもしれない

完全フルパワーとはいえないゴクア相手に、弄ばれていたかもしれない

けれども、このままでいることは絶対に自分でも許せない

誇りある剣士のままでありたい、いや、戻りたい

そのために、なんとしてでも

（……トランクスさんを、正真正銘本気にさせてみせる！）

手加減されたままでこの勝負を、終わらせたくないのだ

柄を持つ手に自然と力が込められる

鋭い眼光でトランクスをキッと見据え

「行きますよ、トランクスさん！」

「ああ！」

「たあああああっ！」

地を足で蹴り、咆哮と共に刀を振り上げ攻め込んだ

～カプセルコーポレーション・研究室～

「……そろそろ、刹那さんとトランクスさんの勝負が始まった頃でしょうか」

「あれ、もうそんなに時間経ってたっけ？」

ケーブルに繋がれて仰向けに寝ている茶々丸が声を漏らし、コンピュータのキーを叩く葉加瀬がそちらへ顔を向ける

「はい、既に時刻は十時〇五分を示しています」

「そっか……私も少し興味はあったけど、やっぱりこっちを優先的にやりたいしね」

「それにカメラを渡してブルマさんに撮影を頼もうにも、おそらくまともな映像は期待できないかと」

「そういうこと」

茶々丸が自身のアイカメラを通したりして撮影すれば話は別であるが

「でも確かに気になるのよね……刹那さんの剣の腕がピカ一なのは勿論分かってるけど、トランクスさんと比べると基本能力にめちゃくちゃ差があるわけだし」

「……試しにシミュレーションをしてみましょうか？一昨日の大会

で戦闘能力等のデータがある程度収集されているため、一応可能といえば可能ですが」

「ホント？じゃあちょっとお願い」

「分かりました、シミュレーション開始……終了」

この間、僅か五秒弱である

「どう？」

「トランクスさんが初めから超サイヤ人で戦った場合、刹那さんの勝率は〇パーセント。これは揺らぎありません」

「……じゃあ他の場合は？」

「トランクスさんが変身を行わなかった場合ですね。この場合は少々変わって、刹那さんの勝率は……」

「斬空閃！」

「くっ！」

トランクスの剣の刀身に、刃状の気が音を立ててぶつかる

「まだまだああっ！」

愛刀『夕凪』に気を乗せ、刹那はもう一度斬空閃を放った

戦いの初め、接近戦で刃を交える二人

剣の腕はやはり、刹那が上

パワーやスピードこそトランクスには及ばないが、それを技術で目一杯カバーしていた

そうでなければあの超対戦の序盤、ゴクアと戦って生きていられる筈もなかったのだから

トランクスはトランクスで、久々の剣を使った戦闘で四苦八苦

前にトランクス自身も口にしていたことなのだが、彼はちゃんとした剣術使いとの戦闘経験がほぼ皆無

あの後ゴクアと対戦した時も、互いの実力差にそぐわない戦いぶりであった

無論フリーザを見事一刀両断した点からすれば、充分評価に値する腕というのは違いのないこと

ただし剣の心得がきちんとあり、なおかつ常人を超える力を持つ

者が相手であれば話は変わってくるのだ

そこからトランクスは、超サイヤ人にはならぬものの反撃

剣撃に加え、気功波を織り交ぜた戦いを展開させた

『気功波を使っちゃいけない』とは言われていない

これを見てブルマ達は少々驚いてしまったようだが、続行された

その際刹那は異様なまでに近づき、さらなる接近戦を試みていたのだが即中断

数歩分の距離を空けて下がり、こちらも斬空閃で応戦

そして現在に至る

（マズいな……気弾で撃ち落そうにも、あの技自身にそれを切り裂かれてしまう）

ならば急いで接近を、とトランクスが考える矢先

「斬岩剣！」

（別の技！）

刹那は刀で地を割り、砕いた岩片をこちらへ飛ばしてきた

本来これは文字通り、岩のように防御が硬い敵へと直接打ち込む技

しかしこのように応用も可能で、遠距離攻撃兼牽制としても機能する

ゴクア戦でもそれは試されており、効果のほどは実証済み

そしてそこから、さらに技を繋げた

「斬空連閃！」

（さらに攻撃だって！？）

一振り一振りの速度を上げ、連続で気の刃を夕凪から撃ち出す

ただの斬空閃と違い、一つ一つは小さく低威力

だがさっきの斬岩剣と相まって、無数の攻撃陣が形成されトランクスへ襲い掛かった

（地上じゃもう逃げ場がない……なら上だ！）

これは流石に凌ぎきれぬと悟ったトランクスは一転、舞空術で空へ

横へ広がるように飛んできた気の刃や岩片は、宙にいる者にまでは襲ってこない

飛び上がりながらトランクスは、剣を持たない左掌に集め

「はあああっ！」

地上の刹那へと数発気弾を発射した

質より量を優先し、撃ち出されたそれら
ダメージを与えるのが目的ではない
真の狙いは目晦まし
（今だ！）
剣に再び気をやり、トランクスは刹那のいる地上へ急降下をしかけた
（これで一気に……！？）
が、何かに反応し突如その足を止める
直後、上空にいる自分の下へと
「っ！」
ギィィィン！
「……待っていましたよ、あなたが空へ逃げてくれるのをね」
翼を生やした刹那の刃が飛んできた
してやったりといった表情で笑みを見せ、つばぜり合いの夕凪にはより一層の力が感じられる
「そうか、そういえば空中戦は……」

ここでトランクスが思い出したのは、予選でピッコロと戦った刹那の姿

「そう、私の……十八番（おはこ）です！」

合わせていた剣を離し、切り返して横薙ぎに夕凪を払う

「ぐっ！」

それをトランクスは瞬時に防御

再び金属音が響き

「だだだだだあああっ！」

（さ、さっきよりもずっと速い！）

続けて無数のそれらが空中で激しく鳴り響いた

翼を広げ、烏族の力を開放した刹那の戦闘能力は上昇

一太刀すら喰らっていないトランクスではあったが、これには感嘆せざるを得ない

（これは、もう……）

「斬鉄閃！」

鋭い斬撃が、トランクスの左肩へ斜めに向かう

それを受け止めるトランクス

「でやああっ！」

瞬く間に刹那は次の攻撃へ

素早くトランクスの右に回り込み、右半身へ切りかかった

（……やるしかないか！）

ギィィィィィィン！

「！！」

刹那はまた、その威圧感溢れる気を肌で感じ取る

しかも今までよりずっと鋭く、重く、大きなそれ

攻撃はまたも防がれたが、今度は度がまるで違う

トランクス自らも、身体を刹那の方へと向けて正面から受け止めたのだ

その剣も、刹那の攻撃の重みを受けながらも微動だにしない

さっきまでとは比べ物にならないパワー、スピード

そして

「……ようやく本気になってくれましたか、トランクスさん」

「ああ、さっきまで手を抜いててすまなかったね……だが今からは違う」

黄金色に輝く、超サイヤ人特有の気

「だあああああっ！」

「くうっ！」

トランクスは刀身と全身に気を込め、爆発させるように放出

文字通りの気流が突風となって刹那に襲い掛かり、両者を無理やり引き離した

「ここからが、正真正銘僕の本気だ！」

そして今までとは逆に、トランクスから攻めへ打って出る

その身を黄金色へと変える、トランクスの剣

自らの剣を気で炎のように燃え上がらせ

「だあああああっ！」

先程吹き飛ばされ体制を崩す刹那へ、速く重い一撃を放った

その一閃は空気をも切り裂き、刹那を狙う

が

「ぐ、ぐううううっ」

「……まさか、これも止めるなんてね」

ギリギリで命中には至らず

吹き飛ばされながらもトランクスから目を離さずにいた刹那は、瞬時に防御体制

左手で夕凪の峰に手を沿え、受け止めきることだけを考えたようなそれ

事実、片手だけで受けていれば間違いなくそのまま負けていた

「ありがとうございますトランクスさん……これで私も、悔いなく最後まで戦える」

「僕もだよ刹那ちゃん、僕も君とこうして剣を交えるのは最高に楽しい」

「それは光栄です……ね！」

「むっ！」

グイグイ押されてきた刹那は、舞空術で真下へ高速移動

トランクスの剣は遥か頭上を通り過ぎる

そのまま翼を併用してで旋回し、距離をとって再びトランクスと
同じ高度へ舞い戻った

「ならば私も、この技で勝ちに行きます！」

続いて夕凪を上段に構え、今まで以上に気を集中させる

そこにはバチバチと火花

いや、雷（いかずち）が現れ、覆い始めた

「……来い！僕も全力をぶつけよう！」

トランクスも同様に剣を構え直し、刹那を正面から迎え撃つ

「神鳴流　決戦奥義……」

刹那は駆け、夕凪を振り上げた

刀身を覆っていた雷は止まることなく増し、その威力を青天井に
上げ続ける

一方のトランクスも、同じく剣を振り上げた

こうして、それぞれの持つ最強の剣技が今

「真・雷光剣！」

互いのフルパワーをもって

「シャイニングスラッシュ！」

上空で炸裂する

「「だあああああああああっ！！」」

これは、ブルマと木乃香がいる地上にまで波及した

「ひゃあああっ」

「な、何よあれ！」

空気は激しく振動し、強風と衝撃が襲い掛かる

二人は首が痛くなりながらも、勝負を見届けるため上空を見上げていた

しかしこれには耐え切れず、手を前に出し顔を背ける

この突風と衝撃は、終息まで数秒を要した

「……せ、せっちゃんはどうなったん！？」

そこからいち早く手をどけ、木乃香は再び上空の二人へと視線を向ける

「！！」

木乃香の目に入ったのは、互いに背を向け合う両者の姿

それぞれの肩口からは血が噴き出し

「せっちゃん！」

その量がトランクスよりも多かった刹那が、ヒューと落下を始めた

「あかん！このままじゃ！」

「ちょっ、木乃香！」

木乃香は刹那のもとへひた走る

無論、華奢な身体の木乃香がそのまま刹那を抱きとめれば、ただではすまない

しかし、そんなことを微塵も考えず木乃香は走った

刹那と木乃香、両者の距離が迫る

二十メートル

十メートル

「せっちゃん！」

（お、お嬢様……）

ここにきて、ようやく刹那も木乃香を目視

自分を受け止めようとしていることが分かり、顔を青ざめさせた

（ダ、ダメです！危険すぎます！）

この距離なら、多少痛いだろうが死にはしない

そのことを伝えたいが、声が上手く出てくれなかった

「今、ウチが受け止めたる！」

木乃香は覚悟を決めた表情で、真上にいる刹那へ手を伸ばす

五メートル

四メートル

三メートル

（だ、だめ！このちゃん！）

そしてあと一メートル

「せっちゃん！」

パシッ

「……え？」

ここで、刹那の落下が止まる

彼女の翼を、一本の腕がガシリと掴んでいた

刹那と木乃香は視線をその腕の主へやる

「あ、危なかった……ごめん、大丈夫？刹那ちゃん」

そこにはもう片方の手で傷口を押さえる、少々焦った様子のトランクスがいた

「少しふらっとしただけなので大丈夫です……それより、こちらこそすみません」

「いいんだ、僕としてもいい勝負が出来たと思っている……ありがとう」

トランクスは一言礼を言って刹那を引き上げ、自らの腕の中へ

半泣き状態の木乃香のもとへ、ゆっくりと着地した

第９４話　激突！二人の剣士　手合わせという名の真剣勝負（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「今回は予告より一日遅れての投稿か……」

クウネル
「まあ大目に見てあげましょうよ、作者も色々と忙しい時期みたいですし」

エヴァ
「いや、投稿ペースを遅らせている今の状況でさらに遅れるのは私的に……」

クウネル
「では早速、今回のゲストをお呼びしましょう」

エヴァ
「っておい！人の話を……」

クウネル
「このお二人です、どうぞ」

朝倉
「いえーい、これで二回目だね」

さよ

「私もです、良かったですね朝倉さん」

クウネル
「報道部コンビの朝倉和美さんと相坂さよさんです」

エヴァ
「……そういえば互いに二回目だな」

朝倉
「そういうこと」

さよ
「前回の時よりも、もっとゲストとして頑張りますね」

クウネル
「ありがとうございます、それでは今回の話なんですが……」

エヴァ
「桜咲刹那とトランクスのタイマン勝負か」

朝倉
「私も生で見てみたかったなー」

さよ
「勝負の存在自体私達知らなかったですもんね、本編だと」

エヴァ
「ていうか、何か互いに危ない攻撃連発してなかったか？」

クウネル

「首から上は攻撃してませんよ？」

エヴァ
「いや、確かにそうではあるが……トランクスの攻撃が命中したら普通に胴体とか真っ二つだろ」

朝倉
「でもほら、木乃香がいるから安心じゃん」

エヴァ
「剣での勝負なのに一部で気功波使ってるし」

クウネル
「剣だけの勝負で一定量の文字数書く自信が無かったんだと思います」

朝倉
「だから葉加瀬達のトコも入れたんだ……」

さよ
「でも結局、今回はいつもより量が多めになりましたよね」

エヴァ
「もっと計画性を持って書けよ作者……」

注・終わり方も何か中途半端ですみません

朝倉
「つまり次回はこの続きってことよね、別のキャラ達へ場面転換とかせずに」

注・そういうことです

クウネル
「というかこの刹那さん対トランクスさん、前編後編に分ける考えも多少あったみたいです」

エヴァ
「それはいくらなんでも長すぎだろ……」

クウネル
「そういうわけでこの一話に収めた結果、文字数がいつもより1，2倍ほど多めになっちゃいました」

朝倉
「でもまあ、量が多いのは読者のみんなにとってはいいんじゃないの？」

エヴァ
「投稿が遅れるのはそれ以上に問題だと思うがな」

クウネル
「では、続きまして次回予告です」

朝倉
「ねえねえ、前みたいに本家風な次回予告しないの？私またやりたいんだけど」

エヴァ
「もうしないぞ、前にやったら著しく総合評価が下がったんで作者

が懲りたらしい」

さよ
「さて、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「戦い、というか手合わせが終了し、治療後一旦西の都へ帰還した四人」

朝倉
「そして午後からは、茶々丸さんとトランクスさんの戦いだね」

クウネル
「ですがそこに、思いもよらぬ人物が乱入します」

さよ
「多少変わるかもしれませんが、ご期待ください」

エヴァ
「おい、それ言っちゃダメだろ……」

朝倉
「次回の更新予定は来週の月曜日」

クウネル
「また延期になるようなことがありましたら、活動報告でお知らせいたします」

エヴァ
「ないのが一番いいけどな」

朝倉
「それと人気投票も、締め切りが大分近づいてきたみたいね」

エヴァ
「このままの票数だと少々心もとない、皆の投票を待っているぞ」

さよ
「よろしくお願いします！」

クウネル
「感想投票だけだと順位が発表前に普通に分かっちゃうので、出来ればメッセージ投票もお願いいたします」

朝倉
「『メッセージ投票来ました』ってことにして票を捏造すればいいじゃん」

クウネル
「お、それはグッドアイデ……」

エヴァ&さよ
「絶対だめだ（です）！」

朝倉
「じょ、冗談だって冗談」

クウネル
「では読者の皆さん、次回のネギドラ！も……」

エヴァ&朝倉&さよ
「お楽しみに！」

エヴァ
「ちなみに人気投票なんだが、中間順位はどうなってるんだ？」

クウネル
「こちらです」

エヴァ↑紙を見てる
「……ふむふむ、成る程」

朝倉↑同じく見てる
「ＤＢ勢が人気あるね、やっぱり」

さよ↑同じく
「あ、私にも票が入ってます」

クウネル
「発表が楽しみですね」

注・そういうわけですので、どうか投票よろしく

エヴァ
「作者やっぱり必死だな……」

第９５話　科学の力は仲間を超えた　茶々丸、これが真の実力だ（前書き）

お待たせしました、第９５話です。
ちょっと諸事情で忙しいので前書きは短めに、すみません。
ではどうぞ！

第９５話　科学の力は仲間を超えた　茶々丸、これが真の実力だ

「へー、じゃあやっぱりトランクスさんが勝ったわけか」

「お二人は怪我、大丈夫なんですか？」

「大丈夫だよ」

「お嬢様がすぐ治してくださりましたから」

勝負は終わり、四人はカプセルコーポレーションへと帰還していた

トランクスと刹那の肩の傷は、勝負終了後すぐに木乃香が治療

幸い負傷個所はそこを除いて殆ど見られなかったため、短時間で完了した

ソファに腰掛けハルナ、のどか、それにトランクスと刹那の四名が会話を交わしている

ハルナの調子は大分戻った模様

また、葉加瀬と茶々丸は未だ研究室の中

ブルマは昼食の支度に取り掛かり、木乃香もその手伝いに行ってしまった

「でもやっぱ凄いよね刹那さん、途中まではほぼ互角だったわけでしょ？」

「いや、超サイヤ人になっていなければ僕が負けてたさ」

「そ、そんなトランクスさん……」

刹那が少々照れくさそうにトランクスへ顔を向ける

だが、トランクスの予想はあながち間違いでもない

あの勝負と同時刻、二人の勝敗についてのシミュレーションを実行していた茶々丸

結果（刹那の勝率）は

『初めからトランクスが超サイヤ人なら０％』

『初めは普通で途中から超サイヤ人なら７％』

『初めから終わりまでずっと普通のままなら６１％』

である

このことから、剣の腕に関しては刹那が圧倒的に優れていることが容易に理解出来る

それに両者が喰らった攻撃も、あの最後の一撃ずつのみ

「機会があれば、また一緒にどうかな？といっても残りはあと五日

くらいか」

「え！？は、はい！トランクスさんがよろしければ私は全然……」

トランクスから再戦を申し込まれ、予想してなかったのか刹那動揺

少々慌てた様子で言葉を返すが

「ただし今度からは竹刀かなんかで、かな」

「……あ、そうですね」

次のトランクスの言葉で冷静さを取り戻した

今振り返ると、あの勝負は少々やりすぎた

真剣でやり合った方が実戦感覚で行えるため、良いといえば良い

ただ、やはり怪我の危険性があまりにも大きすぎる

二人程の力量になればなおさらだ

事実あの時も、下手をすれば腕の一本や二本飛んでてもおかしくはなかった

そのたびに木乃香に頼り、彼女の泣き顔を見るというのは二人にとっても勘弁である

『もー！二人のアホアホアホー！やり過ぎや無理し過ぎやーー！』

こう木乃香に泣きながらポカポカ叩かれたのは、二人も記憶に新しい

それを肝に銘じ、ウンウンと心の中で頷いた

バンッ！

「「ん？」」

すると突如、けたたましいドアの音と共に二人の少女

「終わったみたいですね！トランクスさん！」

「こちらもたった今、最終調整が終了いたしました」

葉加瀬と茶々丸が姿を見せる

「では昼食が済み次第、新生茶々丸のテストのお相手をお願いします」

「そんな約束してたんですか？ていうか新生茶々丸って……」

眼鏡のフレームに指を当て、トランクスの方を向きながらキラリと目を光らせた葉加瀬

刹那はこの状況がよく分かっておらず、少々怪訝な表情

それを見て取ってか、ハルナ達が口を開く

「あ、そうか、まだ刹那さんは詳しいこと知らなかったんだっけ」

「実は、ハルナが怪我しちゃったのは……」

「みんなー、お昼ご飯出来たわよー」

「はよ来てやー」

が、キッチンの二人に阻まれた

「……とりあえず、お昼にしようか」

こう言ったのはトランクスである

「成程……人造人間の力を得てパワーアップした茶々丸さん、ですか」

「そうらしいのよね、刹那さんって人造人間のことは確か……」

「ピッコロさんから話は聞いてます」

一気に時と場所は変わり、お昼過ぎ

昼食を食べ終えた一同は、庭園の方へと移動していた

メンバーは午前の四人に加え、ハルナ、のどか、葉加瀬、茶々丸が加わっている

本来ならいつもの如く西の都を出て例の荒野まで行くのだが、今回はある理由が

「いやーそれにしても悪いね葉加瀬、私のためにわざわざここでやってもらっちゃって」

ハルナがこの勝負を見たかったから

病み上がりである彼女に、西の都の外まで遠出させるのは少々酷

ほぼ完治はしているのだが、念には念を

茶々丸がそのことを思ってか、調整中に葉加瀬へ進言したらしい

「大丈夫ですよ、今回は体術系を中心にテストしますから。余程大暴れしない限りこっちでも問題ありません」

無論、ブルマ達からも了承済みである

「そういうわけですのでトランクスさん、気功波系統は自重お願いします」

「わかった」

ノートパソコンのキーを叩きながら、葉加瀬はトランクスへ一応ながら忠告

トランクスは短くそれを返すと、正面の茶々丸を真っすぐ見据えた

「ではトランクスさん、よろしくお願いいたします」

「こちらこそよろしく」

とりあえず現在、トランクスは超サイヤ人にはならず普通の状態

茶々丸の強さを完全には把握出来てないため、様子見ということだろう

互いに構え、葉加瀬からの開始の言葉を待つ

(早乙女さんのゴーレムとヤムチャさんを瞬殺、か……茶々丸さんは一体どれほどのパワーアップを……)

ハルナやのどかもだが、刹那は一同の中で最もこの様子を注視していた

やはり刹那も茶々丸からは気を感じられず、真の力がいかほどかというのは判別しがたい様子

(トランクスさんがどれほど本気を出すかというのもあるが……とにかく、これを見ればある程度は分かるはずだ)

「それでは……始め!」

「こちらから行かせていただきます」

「来い！」

そしてノーパソから顔を上げ、葉加瀬は勝負の開始を告げる

と当時に、茶々丸は正面からトランクスへと突っ込んだ

それをトランクスが迎え撃つ

（くっ、思ってた以上に速い！）

腹部を狙ってきた茶々丸の右拳を、左掌でバシンと音を立てて受け止めた

だが、これで茶々丸の猛攻は終わらない

「まだです」

次にトランクスを襲ったのは左脚によるハイキック

一旦拳を引いて身を離し、身体を回転させたことによる回し蹴り

トランクスの顔の左側面を狙うが

「……お見事」

上体をやや右寄りに反ってかわされる

茶々丸の蹴りは空を切り、否応にもそこには隙が出来た

「はああっ！」

当然それを見逃すトランクスではない

瞬時に右手へ気を集め、気合砲

茶々丸の胸部へ素早く打ち込んだ

「っ！」

避けられず命中

「……ダメージ少量、戦闘続行は充分可能です」

（威力が足りなかったか……）

しかし、茶々丸はダウンせず踏ん張る

上記の通りフルパワーでなかったのもあるが、これだけではない

茶々丸は避けれないまでも、多少ながら身を引いてダメージを軽減

また、根本的な防御性能も以前と比べ並ではないのだ

「続けます」

茶々丸は引かず、またも攻撃

今度は手数を増やした猛ラッシュ

先ほどと違い一撃一撃に威力は無いが、そう簡単に隙を作らせない

（やっぱり速い、まさかここまでとは……ぐふっ！）

「トランクスさん！？」

思考に意識を向け過ぎたか、トランクスの頬を茶々丸の一撃が捉えた

トランクスが一撃を貰った

ヤムチャと共に彼と修行していたハルナ

自分達の時は決して起こり得なかったその事態に、思わず声をあげた

そこを一気に畳み掛けようとする茶々丸だが、そこは流石トランクス

すかさず体勢を立て直し、残りの攻撃は全て防いでいく

しかし、決して余裕とは言えない状態

防御態勢に回っていたのだが、次第に後退していった

「何で何で！？あのトランクスさんが！」

「押されてる……」

「うひゃあ、茶々丸さん凄いわー」

素人目で見ても、この凄さは容易に分かる

そして当然、直接戦いに身を置く者となれば尚更

（そ、そんな……完全に私や楓を超えている……）

刹那は、ハルナ達三人以上に驚愕していた

彼女や楓はトランクスには到底及ばない、無論当然のことではあるが

肉弾戦だけでは普通の状態で問題なく戦われ、気功波を織り交ぜた戦いでようやくといったところ

当然超サイヤ人にでも変身されれば、本気を出されずとも敗北する

しかし、茶々丸はそんな彼女達の実力を明らかに超越していた

「ぐっ、まだまだあっ！」

それに対してトランクス、彼も同じ攻勢に回る

茶々丸とほぼ同等のスピードで、彼女を攻め立てた

この時点でトランクスの後退はなくなり、両者譲らずの接近戦

攻撃はまさに電光石火

辛うじて刹那が目視出来る程度で、ハルナらはもう無理

『何かが高速で動いている』

そう捉えることしか出来なかった

「驚いたよ、まさかここまで強いなんてね……今のネギ君達の中だと一番強いんじゃないかな？」

「恐縮です」

動きは決して鈍らせることなく、二人は拳と共に言葉を交わす

「……私自身も驚いているんです、トランクスさんとこうして互角に戦えている今の状況に」

「そうか、じゃあそろそろ僕も……」

刹那ちゃんの時と同様、本気を出してみるか

こう呟くと、トランクスは全身へ意識的に気を込める

（……ついに来ますか）

トランクスを覆っていた気が、次第に黄金色を帯び始めた

茶々丸に内蔵されたパワーレーダーも、著しい数値の上昇を自身のコンピュータに知らせる

（ここは一旦後退、距離を取って向こうの様子を……）

こう判断を下してから、最後に打った右拳

それを防がれるとすぐ、足に力を入れて後ろへ下がった

そうしながら茶々丸は、アイカメラでトランクスの全身を捉える

やはり彼の髪は逆立っており、色は金

（超サイヤ人に変身後は、確か変身前と比べ戦闘能力は数十倍……）

これで両者の実力差は圧倒的と言わざるを得ない

それでも茶々丸は冷静に、今の状況を整理する

（私の残りエネルギーを一気に総動員したとして、どれほど相手になるかどうか……）

少なくとも向こうが気功波系、例えば気弾等を撃ってくることはない

ならば、距離を適度に保ちつつのヒットアンドアウェイ戦ぽ……

バシュンッ！

……バシュン？

「茶々丸ちゃん危ない！」

「！？」

飛んでくるはずが無い攻撃、気弾

それがいきなり、茶々丸の左横から高速で飛んできた

茶々丸から見て正面でトランクスの叫び声

つまり撃ったのはトランクスではない

「くっ！」

茶々丸は咄嗟に左手へエネルギーを集め、手刀

計算した通りの正確な動きでそれを振るい、軌道を横にずらすような形で気弾に叩きつけた

チュドン！

狙い通り気弾は逸れ、近くに誰もいない芝生に着弾し爆発

直後茶々丸とトランクス、そして刹那は気弾が飛んできた方へ顔を向ける

『どこから来たか』すら把握しきれなかった葉加瀬やハルナ達も、三人に遅れてその方へ

「なっ、危ないじゃないですか！」

こう声を荒げたのはトランクス

「ほう、やはりトランクスに一撃喰らわせたのもまぐれじゃなかったってことか……面白い」

気弾を撃った男はフフッと笑い、堂々とした様子でこちらへと歩み寄る

「つまり今撃ったのは、私の力量を改めて確かめるためだった、ということでしょうか？」

「そうだ……代われトランクス、次は俺に相手をさせろ」

続いて茶々丸の問いを返すと、トランクスのすぐ隣にまで接近

肩をグイと押して無理やり後ろへ下がらせた

「午前中お前がいなくて修行が退屈だったんだ……これくらいは当然だ」

「父さん！」

トランクスの父、ベジータ

息子の言うことも耳にかけず、彼は茶々丸の前に立ちはだかった

第９５話　科学の力は仲間を超えた　茶々丸、これが真の実力だ（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「今回のゲストは誰なんだ？」

クウネル
「はい、では早速登場していただきましょう」

亜子
「ようやくウチも初登場やな」

ヤムチャ
「またハルナ達の同級生と共演か……」

クウネル
「和泉亜子さんとヤムチャさんです」

エヴァ
「和泉亜子が初めて、そっちのヘタレが二回目だな」

ヤムチャ
「なっ！だから俺はヘタレじゃ……」

エヴァ
「いや、だってお前」

クウネル
「ストップですエヴァンジェリン、このままだと第５６話のと同じ展開になりかねません」

エヴァ
「……あれはある意味黒歴史だよな」

クウネル
「そういうこと言うのもやめてください、まだアレ残ったまんまなんですから」

亜子
「えっと……コーナー進めんでエエの？」

クウネル
「そうですね、では進めましょうか、さて今回の話ですが……」

エヴァ
「流石私の茶々丸、だな」

ヤムチャ
「一言目でいきなり自慢かよ……」

クウネル
「でも一気にネギ君達側でトップクラスの実力になったのは確かに凄いことかと」

亜子
「トランクスさんってめちゃくちゃ強いんやろ？」

エヴァ
「ヤムチャなど全然問題にならんな」

ヤムチャ
「……まあ、分かり切ったことだから別にいいけどよ」

クウネル
「そういえばヤムチャさんは、今回の勝負を見に来てないようですね」

ヤムチャ
「俺だってブルマの家に年がら年中行ってるわけじゃないしな、大会終わって修行の必要なくなったし」

亜子
「でもなんか最近、トランクスさんトコの話ばっかりやな」

クウネル
「一応ネギ君達や夕映さんのも挟んではいますが……確かに若干多めですね」

エヴァ
「いや、若干どころじゃないから」

注・あと一、二話程でトランクス達の分にはちゃんとケリをつけます

エヴァ
「すると次はどいつの話だ?クリリンか?それともピッコロ?」

クウネル
「あの世編に戻すというのも考えられますね」

注・それは読んでからのお楽しみということで

エヴァ
「……本音は？」

注・まだどっちにするか決めてません

ヤムチャ
「なんなんだこの無計画作者……」

クウネル
「では続きまして、次回予告です」

亜子
「さて、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「突如茶々丸とトランクスの勝負に乱入してきたベジータ」

クウネル
「一同を無理やり黙らせて、茶々丸さんと戦うつもりのようです」

亜子
「なんでそないなことするんやろな？別に茶々丸さんに恨みがあるわけでもないのに……」

ヤムチャ

「ま、その辺も次回説明するんだろうさ」

エヴァ
「次回の更新予定は金曜日……お、ちょうど人気投票の締切日か」

クウネル
「ですね、というかそうなるように作者が逆算した節がありますし」

亜子
「票の集まり具合はどないなっとるん？」

クウネル
「まだベスト１０に絞り切れていません、ある一定のところで票数がかぶってる状況みたいです」

エヴァ
「同率で１０人以上になったらどうするんだ？」

注・決めてません

ヤムチャ
「いや、そこは決めとけよ……」

エヴァ
「お前はどうせ入らないからいいだろ」

クウネル
「というわけですので投票お待ちしています、過去に投票された方も是非」

亜子
「待ってるで」

エヴァ
「では読者の諸君、次回のネギドラ！も……」

クウネル&ヤムチャ&亜子
「お楽しみに！」

ヤムチャ
「何！？いきなり強くなることが出来るアイテムだって！？」

クウネル
「その通りです。亜子さん、アレを」

亜子
「はいな」

エヴァ
「これって時系列的にまだ出てないやつだろ、出していいのか？」

クウネル
「まあその辺はご愛敬で、ラカンやその他も今までに出してますし」

ヤムチャ
「これって……注射器か？」

亜子
「そうや、この濃縮還元ドーピング魔力スープをお尻にプスッと刺してやな……」

ヤムチャ
「……随分針が太くないか？」

亜子
「直径1，8センチや」

ヤムチャ
「やっぱり俺遠慮しようかな……って何するんだ！」

クウネル↑右腕を掴む
「まあまあ」

エヴァ↑左腕を掴む
「遠慮するな」

亜子
「ほないくでー」

ヤムチャ
「ちょっ！待っ！」

ブスッ！

ヤムチャ

「ぎゃあああああああああっ！」

第９６話　ベジータ狼狽す　どこの世も女は強し（前書き）

お待たせしました、１日遅れることになりホント申し訳ないです……

延長して本日まで投票受付中ですので、どうぞよろしくではどうぞ！

第９６話　ベジータ狼狽す　どこの世も女は強し

「ロボ女、俺と戦え。異存は無いな？」

「私は別にいいのですが……」

茶々丸は葉加瀬を見やる

やや困った表情でノーパソの画面を見つめていた

「ハカセから許可を頂きませんことには、少々不都合が」

「おい、俺はこいつと戦うぞ。文句は言わせん」

ベジータが葉加瀬へ言い放つ

すると葉加瀬は眉をひそめ、ノーパソからベジータへ視線を向けた

「そんなこと言われても困ります、折角さっきまでトランクスさんとやって良いデータが取れてたのに……」

「俺が代わりにやるんだ、問題なかろう」

「相手が代わったらまたデータの取り直しになっちゃいます。そういう無駄手間をかける位なら、最後までトランクスさん相手にテストを……ひっ！」

言い終わるより先に、突如吹き荒れた突風
それが葉加瀬を含め
「うわっ！」
「きゃっ！」
「くっ！」
周囲のギャラリー達、すなわちハルナら三人にも襲いかかる
「ごちゃごちゃぬかすなっ！」
さらにその直後、ベジータの怒号が辺り中に響いた
突風の原因は言うまでもなく、彼から放出された膨大な気である
「さっきも俺は言ったぞ！文句は言わせん！」
「父さん！いい加減に……」
「黙れトランクス！あのロボ女を見てると、あいつを思い出してむしゃくしゃするんだ！」
「え？」
「でやあああああっ！」
「あ！」

トランクスが止めようとするものの、やはりベジータは無視
有無を言わさず、茶々丸へ飛び掛かった
茶々丸も、戦うしかないと判断したか構えをとる
「だだだだあっ！」
ベジータは右手を突き出し、そこから気弾を無数に連射
茶々丸は腕を交差させ、防御態勢
気弾は全て着弾し、爆発音と共に煙が上がる
「べ、ベジータさん！ここでの気功波は危険すぎます！戦うなら体術だけで……」
「貴様らに当たらなければ問題ない！」
刹那が叫ぶが、やはりベジータは聞く耳持たず
すかさず高速で、茶々丸のいる爆煙の中へ突入
「だあああっ！」
茶々丸の背後まで移動し、背中へ蹴りを放った
しかしそれは予想されていたのか、手を後ろに回した茶々丸がそのまま防ぐ

「……ベジータさん、せめて場所を変えるわけにはいかないでしょうか？」

「断る、お前は今すぐここでぶっ倒すん……だっ！」

「ぐっ！」

当然、茶々丸に言われてもベジータの行動は止まらない

続いて左の掌底を叩き込んだ

これは見事直撃

前につんのめるような形で茶々丸はダウンを奪われる

さらに追撃を狙ったベジータだが、それを茶々丸は何とか回避

身体を転がして右拳を避け、すぐさま起き上がった

「そうだ、そうこなくっちゃ面白くない」

（まだベジータさんは超サイヤ人にはなっていない……それでもこの強さですか）

『気功波使用禁止』という縛りがないのもある

しかしそれを除いても、やはりベジータの強さは驚異的な物

茶々丸はトランクスの時よりも、一層警戒を強めた

「言っておくが、俺は女だからって手加減はせんぞ。といってもロボットだ、女じゃないか」

「あービックリした」

「ベジータさん凄く怖かったよぉ……」

「のどかさん、大丈夫ですか？」

そんな中、ハルナ達は密かに庭園から避難していた

ベジータはああ言ったものの、絶対当たらないなんて保証はどこにも無い

あんな攻撃、刹那やトランクスはともかくハルナやのどかが当たれば即死ものだ

「んでどうする？一応ここからも見れるっちゃ見れるけど……」

今ハルナ達がいるのは、ガラス一枚を隔てた外である

まだ危険ではあるが、見れないこともない場所

「私はもう少し、二人の戦いを見ていきます」

「わ、私はやめとこうかな……」

刹那はまだ残る気のようだが、のどかはそうではない様子

まあ無理もないが

「トランクスさんはどうされますか？」

「残るよ、この中で父さんをまともに止められそうなのは僕だけだからね」

「私もです、このまま茶々丸を置いていくなんて……」

三人の後を追うようにして、同じく脱出したトランクスと葉加瀬

こちらは、二人とも残るつもりらしい

「それでは早乙女さんは？」

「うーん……」

ハルナは数秒悩んだうえ、開口

「……私もやっぱやめとく、のどか一人ってのもアレだし」

「ハルナ、別に私のことは気にしなくても……」

「いいのいいの、それに二人の戦い凄過ぎて、見てても全然分かんないしね」

ハルナはケラケラと笑うと、のどかの手を引いて皆から離れる

「じゃあ刹那さんトランクスさん、葉加瀬と茶々丸さんのことよろしく」

「そ、それでは失礼します」

角を曲がったところで、二人の姿は消えた

「……それにしてもベジータさん、凄い暴れ様ですね」

刹那は再び、庭園内の二人の戦いに目をやる

超サイヤ人にこそなっていないものの、気功波撃ち放題のやりたい放題

いつのまにか茶々丸は防戦一方へと追い込まれていた

ちなみに庭園内の生き物達は勝負が始まる前、動物的本能からかとっくの昔に退避

「茶々丸さんとは殆ど初対面だったわけですよね……茶々丸さんはベジータさんに何かしたんですか？」

「僕が思いだす限り会話とかも一切したことは……あ」

「……どうしました？」

「何か心当たりが？」

刹那と葉加瀬両方が顔をトランクスに向け、ほぼ同時に尋ねる

トランクスは、少し前にベジータが言った言葉を思い出していた

「いや、さっき父さんが茶々丸ちゃんのことを『あいつを思い出してむしゃくしゃする』って……」

聞いた直後、刹那もどういうことなのか即座に把握

「それって……まさか１８号さんのことじゃ」

「……多分そう、ていうか刹那ちゃん知ってたんだ」

「ピッコロさんから少しだけ」

「１８号さんって誰ですか？」

一年前、ベジータは屈辱的敗北を喫した（本人からすれば三年前）

敵は、Ｄｒ．ゲロ制作の人造人間１８号

トランクス曰く『かわいい女の子タイプ』の人造人間である

向こうはスタミナが無限大であるのをいいことに、疲労していくベジータを次第に圧倒

終いにはメタクソに叩きのめされ、さらには両腕まで蹴折られたベジータが精神と時の部屋に入り、超ベジータへとパワーアップを遂げたのもある意味彼女が切欠

結局新たな敵『セル』の参入により、ベジータが彼女と再戦することはなかったのだが

とまあ、以上のような説明をトランクスは葉加瀬へ

葉加瀬はふんふんと頷き、黙ってその話を聞いていた

「つまりベジータさんは、茶々丸さんをその１８号さんと重ねてしまっていると」

「茶々丸ちゃんも詰まる所、人造人間みたいなものだからね。まあ外見は全然似てないんだけど」

「……それって、要するに八つ当たりですよね？」

「うーん……そういうことになっちゃうのかな？」

刹那は顔をしかめ、トランクスは苦笑する

すると

「でやあああああっ！」

「ぐううっ」

「ちゃ、茶々丸！」

上へ飛び上がっていた茶々丸が、ベジータに回り込まれ背中へ右ストレート

勢いよく地面へ叩きつけられて再びダウン

葉加瀬はガラスぎりぎりまで近付き、茶々丸の名を呼んだ

「褒めてやるぞロボ女、お前の力は完全にあいつ以上……だが、ここまでだ！」

ベジータはこれを機に超サイヤ人へと変身

茶々丸へと掌を突き出す

見れば茶々丸の身体はあちこち損傷

彼女自身、もう後がないのはすぐに分かった

「行くぞ！」

「マ、マズいです！」

「トランクスさん！」

「ああ！」

刹那に言われ、意を決してトランクスは庭園へ

既に勝敗は決しており、これ以上の戦いは無用

ベジータのことだ、修理不可能なほどの攻撃をしてもおかしくない

そんな彼を止めるべく、トランクスは中へ足を踏み入れた

が

ツカツカツカツカツカ

「父さん！もう勝負はつ……え？」

それを抜き去り、一足先に中へ入っていく者が一人

刹那でもない、葉加瀬でもない

また、ハルナやのどかが戻ってきたわけでもない

青筋を浮かべたその女性は、入ってベジータを見上げるや否や

「こらあああっ！ベジータ！」

「なっ！？」

「あんた一体何してくれてんのよおおっ！」

躊躇なく彼へ大声で怒鳴り散らした

「茶々丸大丈夫!?」

「御心配には及びません……何とか歩くくらいなら可能です」

こうして、茶々丸とベジータとの戦いに終止符

ベジータは戦闘をやめ、慌てて葉加瀬が茶々丸へ駆け寄る

「とにかく研究室に戻って修理しなきゃ!」

「お手数お掛けしてすみません」

二人はゆっくりと庭園から退出

残ったのは、ベジータやトランクスを含めた四人だけ

「いい加減にしなさいよ!ウチの庭こんなメチャクチャにして!」

「ふん」

先ほど大声を上げたブルマは、未だ怒りを込めて怒鳴り続けた

どうも帰る途中のハルナ達に出くわし、事情を聞いて飛んできたらしい

ベジータは超サイヤ人を解除して下へ降りたものの、腕を組んでそっぽを向いていた

「『ふん』じゃないでしょ！誰のせいでこうなったと思ってんの！？」

ブルマはさらにベジータへ近付き、グイっとその怒り顔で睨みつける

「……おい、近寄りす」

「おまけに茶々丸ちゃんにあんな大怪我させるし！何考えてんの！」

「……」

言い返そうとするベジータだが、それすらもさせずブルマはガミガミと続けた

その様子を、中に入ってきたトランクスと刹那は唖然とした様子で眺める

「凄いですねブルマさん、ベジータさん相手にあそこまで……」

特に刹那が一番顕著

依然会った時とイメージが著しく違ったせいなのであろう

「……そうじゃなきゃ、父さん相手に何年もいられないよ」

クリリンに、『ある意味じゃフリーザよりも怖い』と言わしめたほどである

「とにかく！今すぐ庭園（ここ）を元通りに直しなさい！」

「ふん、何で俺がそんなことをしなきゃいかんのだ。お前がやればいいだろう」

「……」

「ん？」

すると、突如ブルマは沈黙

気になりベジータは顔をしかめた

直後、怒りそのままだが少し落ち着いた様子で再び開口

「……ああそう、じゃあ今夜はあんた夕飯いらないわけね」

「何！？」

「今夜は刹那ちゃん達が泊まるみたいだしちょうどいいわ」

ブルマは踵を返し、スタスタと庭園から出て行く

「お、おい！待てブルマ！」

悟空を始め、サイヤ人はみんな大食漢

無論、サイヤ人の血１００％のベジータも例外ではない

これにはたまらず狼狽し、ベジータは後を追った

「だったらあのロボ女にもやらせて……」

「ふっかけたのはあんたでしょ！？ハルナから全部聞いてるわよ！」

遠くで聞こえてくるのは、ベジータの抗議とブルマの怒声

庭園内に残るは、トランクスと刹那の二人

「……僕達も戻ろうか」

「そうですね……」

二人は苦笑し、他の皆と同じく庭園を跡にした

第９６話　ベジータ狼狽す　どこの世も女は強し（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「結局今回も一日遅れ、しかも締め切り延長とか……」

クウネル
「まあ最近はよくあることですし」

エヴァ
「それってどうなんだよ……まあいい、今回のゲストはどうなってるんだ？」

クウネル
「はい、今回はこの三人」

ベジータ
「くそっ、ブルマめ……俺にあんな仕事を押しつけやがって」

ナッパ
「ハッハッハ、ベジータもすっかり丸くなっちまったな」

ラディッツ
「カカロットみたいになってもしらんぞ」

クウネル
「サイヤ人地上げ屋トリオこと、ベジータさん＆ナッパさん＆ラデ

ィッツさんです」

エヴァ
「またこいつ出すのかよ……私こいつ好きじゃないんだが」

クウネル
「ベジータさんのリクは結構来てるんですから我慢してください」

エヴァ
「ちっ！」

ベジータ
「ふん、俺は別に好かれようと好かれまいと構わん」

ナッパ
「そういやラディッツは初登場だったな」

ラディッツ
「まあな」

クウネル
「ナッパさんとベジータさんは二回目ですね」

ナッパ
「へっへっへ、前回みたいに恥は絶対かかねえぞ」

エヴァ
「月詠に秒殺喰らってたな、そういえば」

クウネル

「ではコーナーを進めましょう、今回の話ですが……」

エヴァ
「今回はこいつが……ププッ」

ベジータ
「ほう……どうやら殺されたいらしいな」

ナッパ
「べ、ベジータ落ち着け！」

ラディッツ
「そ、そうだ！お前らしくもない」

クウネル
「というか本当にやめてください、コーナーめちゃくちゃはホント私も勘弁なんですから」

ベジータ
「ならこれが終わった後だ……俺様を怒らせたことをたっぷりと後悔させてやる」

エヴァ
「……ふん、若造が」

クウネル
「頼みますからホントやめてください」

ナッパ
「あんたも毎回大変だな」

クウネル
「同情ありがとうございます」

エヴァ
「こいつはこいつで結構めちゃくちゃにしてるぞ」

クウネル
「……コホン、続きまして次回予告です」

ラディッツ
「さて、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「次回は番外編第三弾！」

クウネル
「連載一周年記念も兼ねまして、人気投票の結果発表を行います」

ラディッツ
「そいつは楽しみだな、俺は何位に入ってるんだろうか」

ナッパ
「ははっバカだな、お前なんかが入ってるわけないだろ」

エヴァ
「お前ら二人とも入ってないぞ、ていうか参加資格満たしてないし」

クウネル
「そのため次回の更新は来週の金曜日とさせていただきます」

ベジータ
「第二弾と同じ感じか」

エヴァ
「水曜日、とか言って延期延期はマズいしな」

クウネル
「木曜とか水曜に出来るようでしたら報告いたします」

エヴァ
「というわけで読者諸君、今日（三月十九日）が投票締め切り最終日だ」

ベジータ
「もうこれっきりだ、延長の予定は一切ない」

ラディッツ
「今回の件はスルーかよ……」

クウネル
「皆さんの投票、心よりお待ちしています」

ナッパ
「それじゃあ、次回のネギドラ！も……」

エヴァ&クウネル&ベジータ&ラディッツ
「お楽しみに！」

ベジータ
「そういえばこの前、フラフラしてたヤムチャを見かけたな」

クウネル
「前回のやつですね」

エヴァ
「そういえばあいつどれくらい強くなれたんだ？コーナー終了してすぐ帰ったわけだが……」

クウネル
「どうも気と魔力が反発して逆に弱くなったとか」

エヴァ
「うわ……」

番外編３　人気投票結果発表＋連載一周年（前書き）

お待たせしました、番外編第３弾投稿です
前回に輪をかけてさらにすごいことに……数キャラがネタ化しちゃいました、すいません。
１００００字オーバーという、今までに例を見ない長さです。
ではどうぞ！

番外編3　人気投票結果発表＋連載一周年

クウネル
「どうも読者の皆様、クウネル・サンダースです」

エヴァ
「エヴァンジェリンだ」

クウネル
「今回は番外編第3弾」

エヴァ
「先日行われた、人気投票の結果発表をするぞ」

クウネル
「あとついでに、連載一周年のお祝いも兼ねてます」

エヴァ
「ついでかよ、まあ本編で全然触れてなかったからな……」

クウネル
「少々遅れましたがね、正確には今月の六日付けで一周年だったわけですし」

エヴァ
「あと何気にこれが丁度百本目なんだよな、プロローグや番外編も含めると」

注・狙ってやったわけじゃありません、ホント偶然です

クウネル
「とまあそういうわけで、連載一周年&通算百本もお祝いするわけです」

エヴァ
「当初は通算『百話』が目標だったよな……」

注・……そこはどうか大目に

エヴァ
「……コホン、では早速結果発表に移るとするか」

クウネル
「ですね」

エヴァ
「今回の人気投票、投票総数なんと１２６票！」

注・こんなに来るとは思ってませんでした

クウネル
「読者の皆様、本当にありがとうございます」

エヴァ
「では、まずは第１０位だ」

クウネル
「１０位の方は二名いらっしゃいます」

エヴァ
「てことは合計ゲストは11人になったのか」

クウネル
「そういうことです、ではモニターと中継が繋がってますので……」

エヴァ
「ちょっと待て！」

クウネル
「なんです？」

エヴァ
「ここに呼んでないのか！？」

クウネル
「『ちょっとそれっぽくしてみよう、尺も長めに書きたいし』という作者の考えで、こういう方式を取ることにしました」

エヴァ
「じゃあそいつらはいつ来るんだよ！」

クウネル
「発表後すぐにこちらへ来ていただくようになってます」

エヴァ
「……もういい、続けろ」

クウネル
「分かりました、では改めまして……モニターと中継が繋がってま

すので呼んでみましょう」

エヴァ
（この調子だと文字数どんだけかかるんだよ……）

クウネル
「地獄にいるボージャックさーん」

エヴァ
「え！？あいつが１０位か！？」

クウネル
「違います違います、レポーターの仕事をお願いしただけです」

ボージャック（第２１位　１票）
『……呼んだか？』

エヴァ
「うっわ、凄い無愛想」

クウネル
「そちらにいらっしゃる第１０位の方をお呼びいただけますか？」

ボージャック
『……ちっ』

エヴァ
「なあ、ホントに合意の上で頼んだんだよな？」

クウネル

「ぶっちゃけますと、本人を挟まず闇魔大王経由で半ば無理やり」

エヴァ
「おい」

ボージャック
『ほら、さっさと来いよ』

？？？
『おやおや、随分とお怒りですね……1票だけだったのがそんなにご不満で？』

ボージャック
『うるせえ！』

クウネル
「得票数5票で第１０位、フリーザさんです」

フリーザ（第１０位　5票）
『どうも読者のみなさん、私への投票ありがとうございます』

クウネル
「では続きまして、もう一人の第１０位の方の紹介です」

エヴァ
「早っ！」

フリーザ
『ちょっ、お待ちなさい！もう私の紹介は終わりなんですか！？』

クウネル
「とりあえず今から会場の方までお越し願います」

フリーザ
『納得いくわけないでしょう！今すぐさらに私の紹か……』

パッ！　↑画面を切り替えた

クウネル
「サタンシティにいる千雨さんと茶々丸さーん」

エヴァ
「……あとでどうなっても知らんぞ」

クウネル
「どうせ上位の方々が抑えてくれますから」

千雨（第２１位　１票）
『ん、もう私らの出番か？』

茶々丸（第１７位　２票）
『そのようです』

エヴァ
「……なあ、私もう誰なのか検討がついてしまったんだが」

クウネル
「あ、やっぱり分かっちゃいました？」

エヴァ

「分かるよ」

サタン（第１０位　５票）
『はーはっはっは！読者の諸君、私への投票感謝するぞ！』

クウネル
「得票数５票で同じく１０位、ミスターサタンさんです」

茶々丸
『おめでとうございます、サタン様』

ちう
『おめでとうございまーす！』

サタン
『いやー、ありがとうありがとう！』

クウネル
「ではサタンさん、今から会場の方へお越し願います」

サタン
『もう私の紹介は終わりなのか？まあいい、そっちでさらに目立ってやるぞ！はっはっはっは……』

パッ！

クウネル
「続いては第９位の方の紹介です」

エヴァ

「なあ、ところで気付いたんだが……」

クウネル
「なんですか？」

エヴァ
「さっきの二人が獲得した５票って、読者一名の投票による５票だよな？」

クウネル
「……」

エヴァ
「そんなので普通にベスト１０に入れたんだな」

クウネル
「……まあそこは、気にしない方向で」

エヴァ
「おいおい」

クウネル
「さあさあ、どんどん行きましょう。大界王星にいるパイクーハンさーん」

パイクーハン（第１７位　２票）
『ああ、こちら大界王星のパイクーハンだ』

エヴァ
「あ、お前にも２票入ってたんだ」

パイクーハン
『まあな、結局票足らずでレポーター止まりだが』

クウネル
「では早速、第9位の方をお呼びいただけますか？」

パイクーハン
『分かった、おーい出番だぞ』

？？？
『お、もうオラの番か？』

？？？
『違うネ、私の番アルよ』

？？？
『なんだ、まだなのか……なあパイクーハン、ついでにオラもそっちに出」

パイクーハン
『待て待て待て！まだお前は出てくるな！』

？？？
『なんだよ、しょうがねえな……』

エヴァ
「……おい、そろそろいいか？」

パイクーハン

『あ、スマンスマン』

？？？

『みんな、投票ありがとアル！』

クウネル

「得票数６票で第９位、古菲さんです」

古（第９位　６票）

『いやー、まさかランクインするとは思てなかたアルよ』

エヴァ

「まあ、クリリンと一緒に結構出てたからな」

クウネル

「それと、投票期間中にあの世編だったのも大きかったかと」

エヴァ

「投票自体も複数人からちゃんと貰ってるし、これは普通に喜んでいいだろ」

古

『そういうわけで、今からそっち行くアルなー』

クウネル

「はい、お待ちしています」

？？？

『なんだ古、出掛けんのか？だったらオラが一気に瞬間い……』

パイクーハン
『お前はここにいろ！ていうか自重しろ！』

？？？
『分かった分かった、そう怒んなって……』

パッ

クウネル
「……以上、１０位から9位までの発表でした。ここで一旦区切ります」

エヴァ
「ところでクウネル」

クウネル
「はい？」

エヴァ
「今私達がいる会場はどういう設定なんだ？」

クウネル
「あとがきコーナーと一緒でご都合主義の塊空間です、でないとフリーザさんや古菲さん呼べませんし」

エヴァ
「……了解」

バンッ！

サタン
「はっはっは！待たせたな！」

フリーザ
「……おい、さっきのはどういうつもりだ？」

クウネル
「おっと、お二人が到着したようです」

エヴァ
「しかも二人揃って同時にかよ……」

フリーザ
「この俺に対してあんな待遇、許されるとでも思っているのか！」

エヴァ
「いや、順位が順位だし。しかも正確には票が入ったのは早乙女のゴーレムの方だぞ」

フリーザ
「ぐぐぐぐ……もう許さん！この会場ごと貴様らを消し去ってやる！」

エヴァ
「え！？ちょっ、何考えてるんだお前は！」

フリーザ
「煩い煩い煩い！そおらっ！消えて無くな……」

クウネル

「アデアット、イノチノシヘン」

エヴァ&フリーザ
「ん？」

悟空（クウネル）
「やめろフリーザーー！」

フリーザ
「へぶっ！」

サタン
「な、何だ!?急にそこの兄ちゃんの姿が変わって……トリックか!?」

クウネル↑解除
「いえいえ、何でもありません。どうぞお気になさらずに」

エヴァ
「あーあ、折角呼ばれたのに完全にノビてる……」

フリーザ
「……」

エヴァ
「ていうか、いつ孫悟空のを採ったんだよ……あ、ゲストで来た時か」

クウネル
「そういうことです」

バンッ！

古
「お待たせアル！」

クウネル
「あ、古菲さんも来ましたね」

古
「ありゃ？なんか一人気絶してるアルけど……」

エヴァ
「気にするな、ただの自業自得だ」

クウネル
「それでは気を取り直しまして、発表再開です」

サタン
「今度は8位の発表か」

クウネル
「いえ、同率の方が三人いらっしゃったので正確には6位です」

エヴァ
「また並んだのか！？」

クウネル
「はい、ではモニターと中継が繋がってるので呼んでみましょう」

古
「次は誰アルかな……」

クウネル
「神様の神殿にいるコタロー君と刹那さーん」

コタロー（第２１位　１票）
『はいはーい』

刹那（第２１位　１票）
『はい、こちら桜咲刹那です』

エヴァ
「おい刹那、『トップ５くらいまでに入れれば』とか言っといてその順位になった気分はどうだ？」

刹那
『……調子に乗っていたと反省してます』

クウネル
「でもまあ、票すら入らなかった楓さんとかと比べれば充分……」

コタロー
『あ、クウネルさん、それ禁句や。楓姉ちゃんそのこと気にしとったさかい』

エヴァ
「まあ０票は堪えるよな……長瀬楓だけに言えたことではないが」

クウネル

「ちなみに今回の結果発表ですが、レポーターも含め出演するのは票が入った方だけです。私とエヴァンジェリンは例外ですが」

エヴァ
「じゃあ今回あいつ（楓）やその他0票メンバーは……」

クウネル
「一切出ません、さっきパイクーハンさんと一緒に龍宮さんが出なかったのもそのためです」

コタロー
『……そろそろ二人呼んでもエエか？』

クウネル
「あ、すいません。どうぞ」

サタン
「三人の内二人がいるのか？」

クウネル
「はい、それともう一人の方も割と神殿の近所に」

？？？
『あ、師匠〈マスター〉、どうもです』

？？？
『そっちにはフリーザが行ったと聞いたが大丈夫か？』

エヴァ
「心配いらん、早々に始末した」

クウネル
「得票数7票で同率6位、ネギ君とピッコロさんです」

ネギ（第6位　7票）
『皆さん、投票ありがとうございます！』

ピッコロ（第6位　7票）
『俺はてっきりもう少し下の方かと思ってたんだが……まあ、悪くないな』

エヴァ
「ぼーやは意外と票が伸びなかったようだな、この作品でも一応主役なのに」

クウネル
「まあ大会編では結局途中退場でしたからね、少々活躍不足だったかと」

古
「そういえばもう一人の主役の悟飯はまだ出てないアルな」

エヴァ
「まあ大会編の締めを飾ったのはあいつだしな、もう少し上位だろ」

クウネル
「ピッコロさんはやはり、トランクスさんとの準決勝の影響ですかね」

エヴァ

「かもな、あと銀河戦士戦では戦線離脱後も出番は結構あったし」

ネギ
『じゃあ僕達もそちらへ向かいます』

古
「早く来るアルよー」

ピッコロ
『それじゃあ二人とも、行ってくる』

コタロー
『おう、行ってらー』

刹那
『お気をつけて』

パッ

クウネル
「では続きまして、残るもう一人の第6位の紹介です」

エヴァ
「さっき近所の近所と言ってたよな？まさかとは思うが……」

クウネル
「カリン塔にいるアスナさんとまき絵さーん」

エヴァ
「やっぱり……」

まき絵（第２１位　１票）
『はいはーい、こちらカリン塔』

アスナ（第１３位　３票）
『神楽坂明日菜と佐々木まき絵よ』

クウネル
「では早速ですが第６位の方をお呼びいただけますか」

まき絵
『りょうかーい、ほらほら猫ちゃん出番だよ』

？？？
『じゃからワシのことはカリンと呼べと何度も……』

まき絵
『ほーら、ゴロゴロゴロ』

？？？
『あうっ』

エヴァ
「またこのパターンか……」

クウネル
「得票数７票で同じく６位、カリン様です」

カリン（第６位　７票）
『うむ、まあそういうわけじゃ』

古
「……この猫、本編出てたアルか？」

エヴァ
「一話だけな」

サタン
「なんでそんなのがこの私より票数が多いんだ！」

クウネル
「えっと、集計データによりますと……カリン様に丸々5票入れた方が一名いらっしゃいますね」

エヴァ
「それと2票入れたのが一人な」

カリン
『べ、別にいいじゃろ！ワシ一人に5票もくれる熱心なファンがいたということじゃし！』

エヴァ
「でもそれでぼーややピッコロと同格って……」

カリン
『と、とにかく！今からそっちに行くからの！』

クウネル
「はいはい、了解しました」

パッ

クウネル
「以上、6位の方三名でした」

エヴァ
「やはり下位の方は少々票が不安定状態だったようだな」

古
「もう少し投票期間延ばしてもよかた思うアルけど」

クウネル
「今回タイミング的にちょうど良かったんですよね、本編も区切りがついてましたし」

エヴァ
「まあそうだが……」

クウネル
「下手するとあの世一武道会直前まで投票期間を引っ張ることになりかねなかったですから」

エヴァ
「それは長すぎだ」

古
「そうなってたらいつ頃まで先だたアル？」

クウネル
「『それすら予想出来ない』とのことです」

エヴァ
「どんだけ一週間の間に話を詰め込む気だ作者は……」

カチャ

ネギ
「師匠〈マスター〉、お待たせしました」

ピッコロ
「……おい、そこに倒れてるのはフリーザじゃないのか？」

カリン
「なんじゃなんじゃ、折角招待されたというのに……酒でも飲みすぎたか？」

エヴァ
「違う、こいつがぶっ飛ばした」

クウネル
「いやー、お恥ずかしい」

ネギ
「ええ！？」

クウネル
「さて、ネギ君達も来ましたし続きといきますか」

ネギ
「ちょっと、どういうことですか！？」

エヴァ
「後で私が詳しく話してやるよ」

クウネル
「モニターと中継を繋ぎまして……パオズ山にいる木乃香さんとあやかさーん」

木乃香（第１３位　３票）
『はいなー』

あやか（第２１位　１票）
『こっちは準備オッケーですわ』

ネギ
「へー、会場からはこういう風になってたんですか……」

エヴァ
「パオズ山ということは……なんだ、案外票は少なかったか」

カリン
「ワシも意外じゃのう」

クウネル
「では、そちらにいる第３位の方をお呼びいただけますか？」

エヴァ＆カリン
「え！？」

古＆ネギ

「3位!?」

クウネル
「ああ、言ってませんでしたっけ、第3位の方が同率で三名いらっしゃるんです」

エヴァ
「どんだけ混戦になってるんだよ……」

木乃香
『なんや、もう誰なのかみんな分かってるみたいやな』

あやか
『もったいぶる必要もありませんわね』

???
『あ、もう出て大丈夫ですか?』

あやか
『ええ』

???
『えっと……こんにちは、孫悟飯です』

クウネル
「というわけで得票数9票の第3位、孫悟飯君です」

悟飯（第3位　9票）
『投票ありがとうございます、これも読者の皆さんおかげです』

古
「まあ、この上位ランクインは予想出来たアルよね」

ピッコロ
「当然だ、大会編でボージャックを倒したのは他でもない悟飯なんだからな」

ネギ
「僕も今以上に頑張らないと……」

カリン
「しかしその悟飯と同着の者が二人、そしてさらに上をいく者が二人か……」

エヴァ
「そこらへんは私も気になってるんだ、おいクウネル」

クウネル
「はいはい、というわけで悟飯君、今から会場の方へお越し願います」

悟飯
『分かりましたー』

パッ

クウネル
「さて、続いてあそこですね……」

ネギ

「へー、クウネルさんのアーティファクトで……」

エヴァ
「そういうことだ」

ピッコロ
「指定した人物を完全コピーか……なかなか興味深いな」

クウネル
「カプセルコーポレーションにいる、のどかさんとヤムチャさんとプーアルさーん」

古
「お、今度は本屋達がレポーターやるアルか」

のどか（第17位　2票）
『は、はーい、こちらカプセルコーポレーションです』

ヤムチャ（第21位　1票）
『おいのどか、ちょっと緊張しすぎじゃないか？』

プーアル（第17位　2票）
『そうです、もっとリラックスリラックス』

のどか
『す、すみません、私こういうこと初めてで……』

クウネル
「レポーター向きなハルナさんやブルマさんが、1票も入らず呼べなかったんですよね」

エヴァ
「だったらその制度を始めからやめれば……」

？？？
『ヤムチャ、もういいだろ、そろそろ出せ』

ヤムチャ
『おっおい、勝手に出てくるなよ』

のどか
『う、打ち合わせしたのと同じようにお願いし……』

？？？
『知るか、もう中継が繋がってるなら別に構わんはずだ』

？？？
『父さん、折角こうやって出られたんですから……』

クウネル
「えー、得票数９票で同じく第３位、ベジータさんとトランクスさんです」

エヴァ
「親子そろって同順位か」

ベジータ（第３位　９票）
『ふん、言っておくが俺は３位になったくらいで満足なんてしてないからな』

トランクス（第3位　9票）
『父さん、折角皆さんから投票してもらったのにその言い方は……』

ヤムチャ
『そうだベジータ、ブルマや天津飯のことも考えてやれよ』

ベジータ
『煩い！3位ということは、この俺よりも上が二人もいやがるってことだろ！』

ピッコロ
「まあ確かにそうかもしれんが、主役を張ってる悟飯と並び、ネギに勝てたんだからそのくらいは……」

ベジータ
『知るか！結局俺より上の奴がいることに変わりないだろう！』

トランクス
『まあまあ、次の人気投票をやるまでに頑張って活躍すればいいじゃないですか』

エヴァ↑ひそひそ
「……この人気投票またやるのか？」

クウネル↑ひそひそ
「いえ、今のところ未定なんですけど……」

ベジータ
『ちっ……だが次は、必ずこの俺が1位になってやる』

ネギ↑ひそひそ
「……流石トランクスさん」

カリン↑ひそひそ
「上手い具合にベジータを抑えたようじゃの」

ベジータ
『おい、何をコソコソ話してやがるんだ？』

ネギ
「い、いえ！何でもありません！」

クウネル
「ではベジータさんとトランクスさん、会場の方までお越し願います」

ベジータ
『……いいだろう』

トランクス
『じゃあ留守番よろしくね』

のどか
『は、はい、いってらっしゃい』

パッ

クウネル
「以上、第3位の方三名でした」

エヴァ
「残るは1位と2位だけか」

ネギ
「僕はてっきり、悟飯君が1位だと思ってたんですけど……」

古
「なかなか面白い展開アルな」

悟飯
「僕も残りの発表が楽しみです」

ネギ
「あれ!?悟飯君!?」

ピッコロ
「もう到着していたのか」

悟飯
「はい、ついさっき。そういえばあそこにフリーザが倒れて……」

エヴァ
「無視しておけ」

悟飯
「は、はあ……」

古
「あ、二人も来たみたいアル」

ベジータ
「ああ、来てやったぞ」

トランクス
「随分と賑やかですね、残るは二人ですから全部で十一に……あ、フリーザが倒れt」

エヴァ
「無視しろ」

クウネル
「ではお二人も来ましたし、いよいよ上位二名の発表です」

ピッコロ
「まさか同票で1位が二人、なんてことはないよな？」

クウネル
「それはありません、ご心配なく」

古
「じゃあまずは2位からアルね」

クウネル
「はい、ではモニターと中継が繋がってますので……」

エヴァ
「今までの展開からすれば、その場所でおおよそ誰か分かってしまうんだがな……はてさて」

クウネル

「占いババの館にいる、夕映さん、さよさん、お化けさーん」

エヴァ
「何！？」

夕映（第１３位　３票）
『はいです、ようやく私達の番が回ってきたですね』

さよ（第１３位　３票）
『もう待ちくたびれちゃいましたよー』

お化け（第２１位　１票）
『でもこうして任されたんですし、頑張りましょう』

さよ
『そうですね』

エヴァ
「ちょっと待てクウネル！」

クウネル
「はい？」

エヴァ
「あいつか！？まさかのあいつなのか！？」

クウネル
「あいつ……と言いますと？」

エヴァ

「あのババア以外に誰がいる！」

悟飯
「え！？占いババさんが２位！？」

ネギ
「占いババさんって、確か夕映さんに魔法とかを色々教えてくれているあの……」

古
「予想外すぎアルよ！」

ベジータ
「そ、そんな俺もよく知らんような奴に、この俺は負けたというのか……」

トランクス
「と、父さん！落ち着いてください！」

ピッコロ
「これは、流石に……」

エヴァ
「おいクウネル！これは一体どういうことだ！」

クウネル
「あの、何を勘違いして……」

エヴァ
「とぼけるな！あそこと中継が繋がってるということは、どう考え

ても2位は……

夕映
『占いババさんですか？占いババさんならこっちにはいませんけど』

エヴァ
「……何？」

夕映
『占いババさんは得票数4票で第12位です』

さよ
『悔しいからってこのお仕事のオファーも断って、どこかフラフラと出掛けてしまいました』

エヴァ
「じゃあ何か！？まさかのアックマンなのか！？」

お化け
『アックマンさんは票すら貰えてませんでした』

クウネル
「第2位の方なんですが、関係人物がことごとく0票だったんですよ」

ピッコロ
「なるほど、それで苦肉策として占いババの館へ呼んだわけか」

クウネル
「そういうことです、夕映さん達側にトップ10入りした人がいな

くてちょうど良かったですしね」

？？？

『なあ、そろそろ俺出てきてもいいかな？』

夕映

『あ、ちょっと待ってくださいです……ああ言ってますがどうします？』

クウネル

「いいですよ、どうぞお呼びください」

夕映

『許可出たです、いいですよ』

？？？

『よおみんな、なんか俺だけこんなんで悪いな……』

ベジータ

「なん……だ……と？」

ピッコロ

「ほう」

古

「おおおっ！」

クウネル

「得票数１０票で第２位、クリリンさんです」

クリリン（第2位　10票）
『読者のみんな、応援ありがとな』

ネギ
「クリリンさんが……悟飯君を抜いて2位」

エヴァ
「1票差という僅かな差ではあるが……それでもまさかこいつが2位とは」

クウネル
「まあ、理由は言うまでもありませんけどね」

古
「やたアルなクリリン！二人そろってベスト10入りアル！」

クリリン
『ああ！』

カリン
「この二人間の話は、作者もかなり気合入れて書いてたしのう」

クウネル
「集計してみて作者本人もかなり驚いたらしいです」

ベジータ
「ぐ、ぐぐぐぐ……」

トランクス
「父さん、たった1票差なんですから、ね？」

悟飯
「クリリンさん、おめでとうございます」

古
「おめでとアル！」

クリリン
『ありがとな悟飯、それに古も……じゃあ今からそっち向かうな」

クウネル
「はい、お待ちしています」

パッ

ベジータ
「あんな、戦闘力は俺からすればゴミみたいなあいつに……」

トランクス
「で、でもほら！父さんは初登場がクリリンさんより大分後でしたし」

ネギ
「もう少し投票期間が長かったら、クリリンさんも抜いてたかも！」

ベジータ
「この俺が……この俺が……」

エヴァ
「……おいクウネル、ベジータの様子がかなりヤバくなってきたん

だが」

クウネル
「もしかしたらこのまま、超サイヤ人2に目覚めたりして」

エヴァ
「なってたまるか！」

ピッコロ
「さて、残るは1位のみだが……」

カリン
「もうあいつしか残っとらんじゃろ」

ネギ
「ですよね」

クウネル
「もう読者の皆様もお分かりですね？では再び中継を大界王星へ繋ぎましょう」

エヴァ
「やはり奴の人気は絶大だったか……」

クウネル
「さあ、ネギドラ！人気投票栄えある第1位……」

サタン
「お、いきなりもう発表か」

ネギ
「あれ、そちらの方は？」

サタン
「……最初の方からずっといたんだけど」

クウネル
「得票数は２位以下を大きく引き離しなんと１８票！孫悟空さんです！」

悟飯
「やっぱりお父さんだ！」

ベジータ
「くそおっ！またしてもカカロットに……」

シーン

古
「……ありゃ？」

エヴァ
「おい、どういうことだ？奴がモニターに姿を見せんぞ」

クウネル
「おかしいですね……悟空さーん、孫悟空さーん」

シーン

トランクス

「……やっぱり返事がないですね」

古
「ていうかいつの間にかパイクーハンもいなくなってるアル」

ピッコロ
「いや、待て」

カチャカチャカチャカチャ

ピッコロ
「……何か離れたところで音が聞こえるな」

ネギ
「あ、ホントですね」

カチャカチャカチャカチャカチャ

ピッコロ
「それと、少しづつだが近づいてきている……」

界王（第２１位　１票）
『ほれ悟空！さっさとせんか！』

パイクーハン
『もう呼ばれてるんだぞ！」

？？？
『んな堅えこと言うなって、あと一杯この特盛りカツ丼食い終わってからでも……』

界王＆パイクーハン
『だめじゃ（だ）！』

悟飯
「あ、画面に出てきました」

クウネル
「えー……第1位の孫悟空さんです」

悟空（第1位　18票）
『ふぉっふ！ふぃんふぁふぇんふぃにふぃふぇっふぁ？』

エヴァ
「台無しだ！何言ってるかサッパリ分からん！」

悟空
『ふぃはー、ふぉへにひふぇも……』

エヴァ
「とりあえず口の中のものを片付けんか！」

悟空
『ふぁふぁっふぁふぁふぁふぁっふぁ』

ゴクン！

悟空
『……ぷはー、これでいいか？』

エヴァ
「ちゃんと噛めよ……」

悟空
『んじゃ改めて……おっす！みんな元気にしてっか？』

悟飯
「はい！」

ベジータ
「１８票……俺の、倍だと……」

トランクス
「父さん！」

クウネル
「約一名除いてですが」

エヴァ
「しかし、少ない登場回数ながら堂々の１位……まあ投票を開始したのは、出ずっぱりのあの世編からなんだが」

古
「実は私最初から分かってたアルがね、同じく大界王星いたわけアルし」

悟空
『あの世編でまた活躍すっから、これからもよろしくな！』

クリリン

「お、やっぱり悟空が1位だったのか！」

古
「あ、クリリン来たアル」

クリリン
「よう、そういや入り口近くでフリー」

エヴァ
「無視だ」

クウネル
「……ではでは、早速会場の方へお越し願います」

悟空
『分かった、えっとみんなの気は……ここか！』

パッ

悟空
「よっ」

エヴァ
「……間近で見るとやはり凄いな」

悟空
「ありゃ、あそこにいんのフ」

エヴァ
「無視」

クウネル
「ではでは、下の方に結果一覧を表示しますね」

第１位　孫悟空　１８票

第２位　クリリン　１０票

第３位　孫悟飯　９票
トランクス　９票
ベジータ　９票

第６位　カリン　７票
ネギ・スプリングフィールド　７票
ピッコロ　７票

第９位　古菲　６票

第１０位　フリーザ（ゴーレム）　５票
ミスターサタン　５票

第１２位　占いババ　４票

第１３位　相坂さよ　３票
綾瀬夕映　３票
神楽坂明日菜　３票
近衛木乃香　３票

第１７位　絡繰茶々丸　２票

宮崎のどか　2票
パイクーハン　2票
プーアル　2票

第21位　犬上小太郎　1票
お化け　1票
界王　1票
桜咲刹那　1票
佐々木まき絵　1票
長谷川千雨　1票
ボージャック　1票
ヤムチャ　1票
雪広あやか　1票
ランチ　1票

クウネル
「なお、同順位の方々は50音順で記載しています」

ベジータ
「俺が、5番目だと……」

トランクス
「父さん！あれは50音順です！」

エヴァ
「レポーター含めて、票が入った者は大体出たようだな」

クウネル
「『折角なので』とのことです、ランチさんと占いババさんは例外

になりますが」

クリリン
「ランチさんは何でなんだ？」

クウネル
「作者の都合、というか書き忘れです」

エヴァ
「おい」

注・上の一覧書いててようやく思い出しました（汗）

悟飯
「んじゃあ全員揃ったし、乾杯でもすっか」

悟飯
「はい！」

ベジータ
「……ふん」

クウネル
「いいですね、ついでに連載一周年のお祝いもしちゃいましょう」

クリリン
「お、シャンパンあるじゃん！」

エヴァ
「そんなのがあったのか？」

注・初めから置いてありました（ということにしといてください）

カリン
「まあ……そういうことにしとくかの」

ネギ
「僕と悟飯君、それと古老師は未成年なのでジュースですね」

古
「中国には酔拳いうものがアルあるが……」

エヴァ
「別に戦いはせんだろ」

ピッコロ
「そういえばトランクス、お前確か歳は……」

トランクス
「向こうで三年経ったので、もう二十歳は過ぎてます」

ピッコロ
「そうだったな」

クリリン
「というかお前はどうなんだよピッコロ、悟飯と四つしか変わんないだろ」

ピッコロ
「俺はナメック星人だから水以外は口にせん、形だけだ」

クウネル
「皆さんグラスを持ちましたね。では悟空さん、軽い挨拶と乾杯の音頭を」

悟空
「え？オラがやるのか？」

クウネル
「栄えある第1位ですから」

悟空
「難しそうだな……うーん……」

エヴァ
「さっさと始めろ」

悟空
「分かった分かった……おし」

エヴァ
（あまりに酷かったら私が代わりにやるぞ）

クウネル
（折角なんですから、そのままさせてあげましょうよ）

エヴァ
（……まあ、今回は特別だしな）

悟空

「まず読者のみんな、おめえ達の応援のおかげでこの小説もめでたく一周年だ。人気投票にもいっぺえ入れてくれたし、あんがとな」

エヴァ
（お？）

悟空
「それとおめえら、オラと古はあの世だから別々になっちまうが、それぞれの場所でみんなが頑張んなきゃ意味がねえ。これからも頑張っていこうな」

エヴァ
（なんだ、意外と出来るじゃないか）

クウネル
（ですね）

悟空
「最後にエヴァとクウネル、本編出れなくて悔しいと思ってるかもしんねえが、あとがきコーナーをこれからも頼む。おめえ達だってこの小説立派に支えてんだ」

エヴァ
「あ、ああ……」

悟空
「んじゃ人気投票の成功と、連載一周年を祝して……」

一同
「「「「「「「「「「「「乾杯！」」」」」」」」」」」」

悟空
「みんな、これからもよろしくな！」

悟空↑ひそひそ
「……サンキュー界王様、オラいきなり言われたもんでびっくりしちまって」

界王
“まったく、折角の大舞台なのにワシに頼りおってからに……”

悟空↑ひそひそ
「だってよ、いきなり考えろなんてオラ無理に決まっ……」

エヴァ
「ほう、やけに上手いと思ったらそういうことだったか（怒）」

悟飯
「お父さん、それはちょっと……」

悟空
「やべっ！」

エヴァ
「こら待て逃げるな！ん、邪魔だどっか行け！」

ドガッ！↑キック

フリーザ
「……」

番外編3　人気投票結果発表＋連載一周年（後書き）

クウネル
「えー、なんだかエヴァンジェリンは忙しそうなので、我々だけで次回予告を進めましょう」

トランクス
「父さんほら、次回予告ですよ！」

ベジータ
「知るか、お前達だけでやってろ」

トランクス
「テーブルの御馳走はすぐには無くなりませんから！」

ベジータ
「やかましい！」

ネギ
「ベジータさん、荒れてますね……」

ピッコロ
「まあ人数は充分に揃ってるんだ、別にいいだろ」

クウネル
「さて、次回のネギドラ！は……」

古
「私が久々に登場するアルよ！」

カリン
「だそうじゃ、つまりあの世編再開じゃな」

ネギ
「本編で夕映さんが言ってた、地獄での武者修行の模様を描写するみたいです」

ピッコロ
「しかし随分と無茶なことを……地獄はお前が考えてるほど甘くないぞ」

古
「承知の上、だからこその武者修行アルよ！」

クリリン
「確か一緒に、アックマンとかいうのも同伴してたんだっけか？」

古
「そうアル！なんとアックマンは驚くことに、あの……」

クウネル
「ここからは、次回までのお楽しみということで」

古
「むむむ、もっと喋りたいアルよー」

ピッコロ
「次の話になれば、思う存分出て喋れるだろ」

クウネル
「投票はもう終了しましたが、感想やゲストリク等は随時募集中です」

カリン
「次回の更新予定は、来週の水曜日じゃ」

古
「じゃあみんな、次回のネギドラ！も……」

クウネル＆クリリン＆ネギ＆ピッコロ＆カリン
「お楽しみに！」

サタン
「……空気って、つらいですね」

フリーザ
「……」

第９７話　パープルコメット古と相討つ　青き嵐と赤き溶岩（前書き）

第９７話投稿、本編再開です。今回から再びあの世編を何話かやります、それと少々マニアックなキャラが出ますのでご注意を。

ではどうぞ！

第97話　パープルコメット古と相討つ　青き嵐と赤き溶岩

トランクスやベジータ、茶々丸が戦っていた一方

「はあっ、はあっ、はあっ……」

こちらはあの世

「く、くそお……こんなガキなんかに……」

場所は悪人の巣窟、地獄

全体として禍々しい風景

赤味がかった空に、針山や血の池がお似合いのように映えている

そのとある一か所で、アックマン立ち会いの下激しい戦いが繰り広げられていた

それは、地獄に巣食う悪人を相手とする一種の武者修行

「おいジース、もう限界だろ？さっさと俺と代わるんだな」

「う、うるさい！まだこれからだ！」

現在、地に両足をついている者は七人

まず、この勝負の立会人でもあるアックマン

地獄生まれでもある彼は、今回閻魔大王から直々に頼まれたそうだ

両腕を組み、じっくりと様子を眺める

「流石だな嬢ちゃん、あいつら相手にまだ息一つ上がってねえ」

「伊達に、クリリンや悟空に稽古つけてもらってないアル」

そして今回の勝負の切欠となった少女、古

『悟空以外とも戦って修行したいアル！』という言葉が事の始まり

しかし実際のところ、悟空含めどの武道家達もあの世一武道会を目前に控えている身

しかも北の界王はまだ代表メンバーを決めておらず（前日ギリギリまで皆の様子を見て決めたいらしい）、悟空とオリブーの残りである二枠を狙って熱心に修行へ励んでいた

故に、古の相手をしている余裕は無いのだ

かといってオリブーはオリブーでやはり個人の修行に邁進しており、相手をしてもらうのも悪い

そこで界王が提案したのが、この『地獄武者修行』である

古は新しい相手と手合わせが出来、悟空も自分に合わせた修行を目一杯行える（界王個人としては、後者の理由の方が重要）

古は喜んで了承した

悟空は危ないんじゃないかと少々危惧していたが、界王が『信用出来る立ち合い人をつけるから大丈夫』と説得

ちなみに、それがアックマンだということは悟空は知らない

というか地獄で修行していること自体も、アックマンがあの世関係者に頼んで内緒にしてもらっている

残りの五人は、その武者修行の相手として閻魔大王に召集された者達

まずギニュー特戦隊メンバー、ジースとバータ

白髪のロングに赤い肌がジース、全身青肌の長身がバータだ

満身創痍で息も絶え絶え、辛うじて立っている状態

また、残りのメンバーであるグルドとリクームは、既にぶちのめされ気絶中

つまり正確には、召集されたメンバーは計七人となる

「もう結果は見えてると思うがな」

「そうそう」

「これ以上やっても無駄だぜ」

「黙れお前達！ギニュー特戦隊の力はこんなものじゃない！」

そんな彼ら二人を後ろで笑っている三人、彼らもこの武者修行に参加させられた者達

フリーザの兄、クウラを主とするクウラ機甲戦隊の構成員

空色の肌で金髪のサウザー

濃い緑の肌で巨漢黒髪のドーレ

両生類を思わせる外見で茶色のネイズ

サウザーは同じ星系出身のジースへ嫌味を言い放ち、残り二人も嫌らしい笑み

焦りのせいもありジースは酷く激昂し、額に血管を浮かばせて怒鳴り声をあげた

「落ち着けジース、お前の言う通りまだこれからだ……まだ勝負はついてない」

「……すまない、バータ」

しかし、まだ冷静さを残すバータがこれを宥めた

ジースも少々だが熱が冷め、呼吸を整える

「おいガキ！まだ俺達二人の本気はこれからだ！」

「覚悟しやがれ！」

「ウム！来るアル！」

ジースとバータは再び古を見据え、突撃体制

構えを崩していなかった古だが、二人の気合の入った様子にさらに警戒する

「パープル！」

「コメット！」

「む？」

「「アターーーーーーック！」」

ジースとバータは意を決して突撃

ジースは赤、バータは青の気を全身に纏い古へ突っ込んだ

（さっきより早いアル！）

「「だだだあああああっ！」」

「むむっ！」

瞬く間に古へ接近し、嵐のような連続攻撃を左右からそれぞれ炸裂

それを古は、どちらにも均等に目を配り防御する

「くそっ！」

「まだだジース！さらにいくぞ！」

二人はさらに猛攻、次第に空中戦へと発展

時折左右だけでなく上下からも攻撃するが、一撃すら与えられない

「……改めて思うが、あの娘なかなかだな」

その光景を見て、サウザーが感心した様子で声を漏らす

「ジースやバータの戦闘力は完全に俺達以下、しかしそれでも高い戦闘力には変わりない……ああもあしらうとは……」

「グルドとリクームも、開始早々やられちまったわけだしなぁ」

それに自然とドーレ、

「どう見積もっても、戦闘力６桁は確実か……」

そしてネイズが加わってきた

この武者修行、まず始めに戦ったのは特戦隊四人全員

といってもアックマンがそのように口にしただけで、実際のところ『笑わせるな』と四人から一笑

遊んでやるか、とリクームとグルドの二人が古と対峙

その数秒後、グルドが声も発さず崩れ落ちる

一方のリクームも、劣勢は火を見るより明らかに

慌てて援護に飛び掛かったジースとバータだが既に遅し

甲斐なくリクームもすぐ倒れることとなったのだ

そこから仕方なく二対一になったわけだが、結果は冒頭の通りジース達には笑ってみせていた三人だが、実際のところ少々驚いた模様

（だから言ったんだよ……四人全員で相手をしろって）

気を探る能力を長年の修行中に身に付けたアックマンは、この古の戦いぶりを始めから予想出来てたようだが

（こりゃあの二人が勝つのは……お、あの技を使う気か）

「こうなったらあれしかない！」

「行くぞジース！」

「むむ、何する気アルか？」

見ればジースとバータは古から離れ、彼女の前方で二人向かい合う

こちらから攻めるかどうか

古がそう考えながら動きを止めたその刹那に

「パープル！」

「コメット！」

二人は気を体表に出して中央へ突進、そしてそこで共に高速回転

「なっ！？」

やがて二人の気の色が合わさった紫色の輪が出来上がり、

「「クラーーーーーーッシュ！」」

その輪から五月雨の如く、同じ紫色の気弾が放たれた

それらは周囲一面に散弾され、当然古に対しても襲いかかる

「わわわわっ！？」

予想外の攻撃に古は狼狽

圧倒的物量で向かってくる気弾を、気を上げて高速で避けまくった

しかし全てはかわしきれず、動きこそ止まらぬものの数十発に一つは頬等を掠る

アックマン以下四名は、巻き添えを喰わないためにさらに上空へ

退避

地上で気絶してるリクームやグルドに何発か当たってるようだが、それには誰一人として気付かなかった

「「はっはっは！どうだ！」」

あの高速回転の中、古の様子が見れているジース＆バータは上機嫌

（このまま避け続けていれば、じきに疲れが出てこちらに分が出てくる……）

（それにこの技は、長年の特訓の末生まれた俺達二人の最強技……目を回すことなんかねえんだよ！）

見え始めた正気に、二人はニッと笑みを浮かべた

しかし、それから十数秒が経とうとした頃

（やはり真名の羅漢銭より断然数が多いアルな……けど！）

「「何！？」」

（刹那のあの技よりは遅い……これくらいなら、私も見切れるアル！）

古はその五月雨の中を、掻い潜りながら猛然と突撃する

避けながら弾道と速さ、それに威力を把握した古は恐れずに向かった

避けられるものは避け、必然的に当たりそうなものは気を込めた右手で弾く

ピッコロが大会予選で見せたのと、ほぼ同じ方法

彼と比べれば動きにスマートさは欠けるが、反撃に打って出るには充分

これには二人も焦らざるを得ない

「ま、マズいぞジース！」

「くそお……なら、パターンBだ！」

見る見るうちに縮む両者間の距離

やむを得ず、二人は攻撃方法を変えて迎え撃つ

気弾の発射をやめ、その分回転速度の上昇にエネルギーを分配

向かってくる古を見定め、そのままぶつかりに突っ込んだ

「む！？」

それを見て古は足を止め、

「「これならどうだあああああっ！」」

「こういう回転攻撃は……」

当たる直前、僅かに飛び上がって二人の上へ

「「し、しまった！」」

「上からの攻撃が弱点アル！」

方向転換されるよりも早く、下へお得意の崩拳を打ち降ろした

「ぐべえええっ！」

「ジース！」

二人のうち、当たったのはジース

合体回転は解かれ、地面へ叩き落とされる

残ったのは、相棒を失ったバータ一人

「こ、このおおおっ！」

最後の抵抗として右拳を飛ばすが

「よっ」

かわされ

「せやっ！」

「ぐぼっ！」

カウンターを腹へ決められ

「これで……終わりっ！」

「のわあああっ！」

組んだ両手を背中に叩き込まれ、同じく地面へと落ちた

チュドンと音がし、地上で土煙が舞い上がる

「ふー、やっと終わたアルよ……」

古は息を吐き、突然起きあがっての奇襲を警戒しながらゆっくりと降下

しかし二人は気絶しており、それは杞憂として終わる

遅れて、アックマン達も降り立った

「さあ！次はそこの三人アルな！」

疲れも殆ど感じさせず、古が意気揚々と指差したのはクウラ機甲戦隊

見ればその三人も、既に戦闘準備に入っていた

ギニュー特戦隊のとは違うものの、やはり一風変わったファイティングポーズをとる

「さっきの四人とはわけが違うぞ、総合力は向こうが何倍も上だ」

「分かってるアルよ、そのくらい」

一応ながら忠告するアックマンだが、古にはする必要もなかったか

先ほどよりもさらに気を高め、三人と対峙した

「……やはり三人同時アルか」

「あの馬鹿共とは違うんだ……お前が強者と分かった以上、最初から全力で行かせてもらおう」

サウザーは気絶する特戦隊の四人を一瞥し、再び古と目を合わす

直後、三人は合わせたかのように同タイミングで叫んだ

「「「行くぞ！」」」

「来いアル！」

そして武者修行第二戦、対クウラ機甲戦隊が開戦……

「ほっほっほっほっほ、ようやく見つけましたよ」

「げ！」

「ん？」

「「「なっ！？」」」

……するかと思われたその矢先

「ギニュー特戦隊の皆さんがいないので、どこへ行ったのかと探してみれば……」

思わぬ人物の乱入により、一同の動きは止まった

岩壁の上に姿を見せ、フワリと降りてくるその者に皆は目を奪われる

「成程、地獄の片隅でこんなことをしていたわけですか」

「何であいつがこんな時に……」

「凄い気ネ……一体何者アルか？」

眉をひそめて額に手をやるアックマンに、視線はそのままで古が尋ねる

「……おそらくお前も、名前は知っている筈だ」

「？」

白を基調にして、所々紫が入る体表

自らの身長近くありそうな尻尾が、重力に逆らって軽く浮かぶ

そう、彼の名を古は知っていた

正確に言えば、聞かされた

クリリンから昔の話を聞かせてもらった時だ

悟空との出会いから、セルとの最終決戦まで数々と

それまでに多くの名が挙がったが、古が一番覚えていたのはその名

「奴の名は……フリーザ」

「フリーザ!?」

他でもない、クリリンの命を奪った宇宙帝王の名だった

第97話　パープルコメット古と相討つ　青き嵐と赤き溶岩（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「無事締め切り通りに投稿だな」

クウネル
「番外編はこのコーナーみたいに台本的な書き方になるので、少し感を取り戻すのに苦戦したとか」

エヴァ
「まあ無事守れたからいいがな……さて、今回のゲストはどうなってる？」

クウネル
「今回はこのお二方」

ランチ
「よお、また来てやったぜ」

真名
「久しぶり」

クウネル
「ランチさんと龍宮真名さんです」

エヴァ

「銃使いコンビか」

クウネル
「ちなみに今回、ランチさんは初めから凶暴な方でお送りします」

エヴァ
「前回呼んだ時みたいなめちゃくちゃはごめ……」

ランチ
「おい」

エヴァ
「ってうお！いきなり銃を向けるな！」

ランチ
「番外編、ランクインした俺を登場させないってのはどういうことだ？」

クウネル
「ですから、作者の構成ミスで……」

ランチ
「知るか！お前ら責任取れるんだろうな！？」

エヴァ
「なんでそうなる！おい龍宮真名、何か言ってやれ！」

真名
「……私は、１票も貰えなかったしな」

エヴァ
「お前もそれ気にしてるの！？」

クウネル
「まあまあランチさん落ち着いて、それについては後でちゃんと話をしましょう。ね？」

ランチ
「……分かったよ、ただし！うやむやにして逃げようとしたら承知しねえからな！」

クウネル
「え……」

エヴァ
「しようとしてたのか……」

クウネル
「……コホン、ではコーナーを進行しましょうか」

エヴァ＆真名
（誤魔化した……）

クウネル
「さて、今回の話なんですが……」

エヴァ
「少々ＤＢ側でマニアックな部分があったな」

真名

「クウラ機甲戦隊、そしてパープルコメットクラッシュのことだな」

クウネル
「ちなみに分からない方に解説いたしますと、クウラ機甲戦隊は劇場版ドラゴンボールZに登場した敵キャラで……」

真名
「パープルコメットクラッシュはアニメ版のみに登場したジース&バータの合体技だ」

エヴァ
「まあその点を考慮してか、説明描写が入っていたな……あれで初見の者が理解するかは分からんが」

ランチ
「別にいいんじゃねえか？そもそもアックマンとかいうのを出す時点で、マイナーな人向けな感じするし」

エヴァ
「そういえば今回も出てたな……準レギュラーにしては出番多すぎだろ」

クウネル
「というか登場キャラがかなり多いこの小説だと、レギュラーとか準レギュラーの判別がかなり難しい気が……」

真名
「あと、戦闘力による見解が小説中で初登場だな」

エヴァ

「『戦闘力六桁は確実』ってところか、確かに初めて見たかもだな」

クウネル
「原作のＤＢでも、人造人間編に入って見なくなりましたからね」

真名
「実は作者、『小説序盤で設定的にネギ達の戦闘力を出そうとしたが、うまく決まらず頓挫した』というエピソードがあったらしい」

エヴァ
「……理由は？」

真名
「『セル編終了時のクリリンや天津飯の戦闘力がまるで分からないから下手に数字が出せない、というか書かない方が戦闘力差を気にせず伸び伸びと書けるよな』とのことだ」

クウネル
「ネギ君達も、超インフレ的に戦闘力上がってますしね」

エヴァ
「つまりは設定に束縛されたくなかったわけか……まあ、分からなくもないが」

クウネル
「では続きまして、次回予告です」

ランチ
「さて、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「一同の前に突然姿を見せたフリーザ」

クウネル
「その彼と古菲さんとの間で、何やらいざこざが起こるようです」

真名
「大切な男を一度殺した奴だ、古が何もしないなんてことは普通にあり得ないな」

ランチ
「次回の投稿予定は来週の月曜日」

クウネル
「感想等、お待ちしています」

真名
「では、次回のネギドラ！も……」

エヴァ＆クウネル＆ランチ
「お楽しみに！」

ランチ
「さて、じゃあさっきの件だが……」

クウネル
「分かりました……ではこうしましょう」

エヴァ
「？」

クウネル
「次回のこのコーナー、エヴァンジェリンの代わってあなたに司会をやってもらいます」

ランチ
「ほう」

エヴァ
「なっ！？ちょっと待てクウネル！」

真名
「流石だな、自らの出番を減らしてまで責任をとろうなんて……」

エヴァ
「こいつが勝手に言ってるだけだ！私は一切知らんぞ！」

ランチ
「面白そうじゃねえか、乗った」

クウネル

「では早速、次回の打ち合わせを……」

エヴァ

「おい！待てお前ら！どこへ行く！」

注・次回のあとがきコーナーをお楽しみに！

第９８話　貫け！怒りの鉄拳　赤い炎をそこへ乗せて（前書き）

今回少々、あとがきコーナーで悪ノリしてしまった感が……お気を悪くされましたらすみません。

ではどうぞ！

第９８話　貫け！怒りの鉄拳　赤い炎をそこへ乗せて

～約一週間前～

「それでその隙に、宇宙中から集めた特大元気玉をぶつけたんだ」

「おおおっ！」

場所はカメハウス

大会に備えての修行中、『少し休憩』と一息入れていたクリリンと古

その時古は、いつものようにクリリンから昔の話を聞いていた

「つまり悟空だけじゃなくクリリンやピッコロ、みんなの協力でそのフリーザとかいうのを倒したわけアルね！」

今日聞いていた話は、宇宙の帝王フリーザとの戦い

三日前はサイヤ人との戦い

二日前はナメック星についた直後のこと

そして昨日はギニュー特戦隊との戦い、と時系列に沿って話を聞かされていた

故に、戦いが終結したと先程の話から解釈した古は、一層テンションを上げる

「いや、実はこれには続きがあってさ……」

「？」

だが、クリリンはそれを肯定しない

その続きを話すべく、再び口を開いた

「その元気玉を喰らったフリーザなんだが……生きてたんだよ」

「ええっ！？」

予想出来なかった展開に

驚く古をよそに、話しづらそうにしながらも話をクリリンは続けた

「あの時は焦ってさ……だって俺ら四人共、フリーザはもう死んだんだって安心しきってたから」

「それで……どうなたアルか？」

「ピッコロは、フリーザの攻撃から悟空をかばって重傷……それで、俺は……」

「……クリリンは？」

「悟空への見せしめだったと思うんだが……殺されたんだ、フ

リーザに」

「!?」

「念導力かなんかで、身体の内側からボーンってな。でもまあ、あれがなかったら悟空も超サイヤ人には……」

この時あまりにも衝撃的すぎたのか、その先の話はてんで耳に入らなかった

前に魔族の手下に殺された話も聞いたが、それ以上の衝撃

『フリーザ』

その名は、古の胸に深々と刻み込まれたのだ

そして

「あいつが……フリーザ……」

当人と古は、この地獄という場所で対面を果たすこととなった

「ああ……一年前にセルとかがやって来るまでは、地獄の悪人の中ではトップクラスの実力者」

さっきお前が戦ったギニュー特戦隊とかを引き連れて、時折悪さをしてたもんだ

と、アックマンは古の呟きに対しそのまま答える

「よっ、と……おやおや、特戦隊のみなさん」

フリーザは地に両足をつけ、周囲で倒れている特戦隊の四人に目をやった

気絶していることは目に見えて明らか

それを確認すると、続いてアックマン達五人の方へ視線を移す

「全員やられてるみたいですが……機甲戦隊の方々が？それともアックマンさん？」

「違えよ、こいつの修行相手として付き合ってもらったんだ」

アックマンはフリーザの問いを返すと、古の肩にポンと手をやった

フリーザは彼女を見て、ほう、と一声

「初めて見る方ですね……頭に輪もあるようですし、新入りですか？」

「『地獄の』じゃねえぞ、こいつが生前悪いことやった風に見えるか？」

「フフフ、それもそうですね……」

「とにかく、今日は大人しく帰ってくれないか？」

「それは少々納得いきませんね、見物くらいなら構わないでしょう？見たところ次に戦うのは機甲戦隊の皆さん……少々興味があるんですよ」

慣れ親しんだ様子で、アックマンとフリーザは会話を交わしていく

実際、フリーザが地獄にやって来てから既に四年

地獄へ頻繁に出入りするアックマンとは、少なからず交流があったようである

「んなこと言われても……おい嬢ちゃん、どうする？」

「……」

別にあいつが見てても構わないか？　とアックマンが古へ確認をとる

しかし古は顔を俯かせたまま、一言も喋らずただ沈黙

「おい、嬢ちゃん？」

「……あいつが……あいつが、クリリンを……」

いや、小さくだがボソボソと呟いていた

そして次第に肩が震えだし、近くにいたアックマンはすぐそのことに気付く

「おい、まさか変なこと考えてないよな？」

「クリリンを……クリリンを殺した！」

「っ！待て嬢ちゃん！」

ほんの一瞬だった

肩を掴んで止めようとしたアックマン

が、それよりも早く古は飛び出した

その表情は怒り一色

気で全身を覆い、崩拳を打つために駆けながら右拳を引く

フリーザはその様子を、両腕を組みながら見据えた

「これこれは、なかなかお転婆なお嬢さん……」

古の気迫にも一切動じず、彼女の突撃をそのまま迎え入れる

「喰らうアル！」

接近した古は、すぐさまフリーザの腹目掛けて崩拳

しかし、これをフリーザはヒラリと回避

左足を軸とし、右足を弧状に後ろへ引いて身体を反転させた

「くっ！」

「けど、少々悪戯が過ぎますかね」

そこから尻尾を振るい、古の後頭部を背後から狙う

「危ねえ嬢ちゃん！」

「まだアル！」

だが古は、即座に身を屈めて攻撃を避けた

彼女の頭上を、フリーザの尻尾がビュンと音を立てて通り過ぎる

「……ほう」

「でりゃあああっ！」

すかさず反撃に移り、古は全身を右へ回転

顔を狙っての、右の回し蹴り

「無駄ですよ、その程度のスピードじゃ私には当たらな……」

これに対しても、フリーザは余裕を崩さず避け

（今アル！）

ギュンッ！

「づっ！？」

……いや、避けきれなかった

古の蹴りは軌道上で突如スピードが上昇

さらには今までに見ない赤い気が現れ、フリーザの顎を少しなが
ら捉える

さっきまでの古の攻撃速度に合わせた、紙一重ギリギリの回避行動

圧倒的余裕からそれを行っていたフリーザは、このいきなりの状
況変化に対応が間に合わなかった

（よし、まだ練習段階だたが出来たアル！）

古は体勢を崩したフリーザに対し、身体を正面に向けて追撃

攻撃の度に赤い気を灯しては、一撃一撃にそれを乗せて打撃技を
繰り出す

「せやせやせやあああっ！」

「……」

それをフリーザは、無言で次々と回避

眉をひそめ、笑みを浮かべていた口元はキュッと引き締めた

両腕は未だ組んだままだが、先程とは比べ物にならない速さ

古の攻撃を、掠らせることすら許さない

（くっ、ならもっと出力アップ！）

このままじゃ有効打を与えるのは不可能

それを確信した古は、さらに赤い気を噴出させて能力の向上を図る

（ぐっ！）

ビリリと痛みが走るが、構わずフリーザを攻め立てた

「だりゃりゃりゃりゃあああっ！」

「……」

しかし、やはりフリーザには当たらない

（だったら更に、上げるまで……）

「（あの技はまさか……）お、おい待て嬢ちゃん！それ以上は危険過ぎる！」

「黙るアル！」

技の正体に気付いたアックマンは止めさせようと叫ぶが、古は声を響かせ一蹴

（ぐぐぐっ……クリリンを！クリリンを！）

身体に走る痛みなど、もはや古は気にもかけていなかった

常時全身を赤い気で包んだまま、古はフリーザへ猛攻する

そうして、経つこと数秒

「……調子に乗らないことだね」

「え？わっ！」

ついにフリーザが動いた

組んでいた両腕を解き、左手で古の右手首を瞬時に掴む

「ぐ、ぐがががが……」

さらにそのまま、力を込めてギリギリと締めつけた

古はこれに抗うが、押しても引いてもびくともしない

ならば、と左拳を顔面へ放つのだが

「まだ、分からないのかな？」

「くっ！う、うぎぎぎぎ……」

右手で難なく掴まれ、同じようにされながら上へ持ち上げられた

（だ、だったら……）

「おっと、そうはさせないよ」

蹴りをしようとする古の両脚に、先打ってフリーザの尻尾が伸びる

膝を中心としてグルリと巻き取られ、四肢の自由を完全に封じられた

「僕に蹴りを当てたのは褒めてあげよう……けど」

（ま、マズ……）

フリーザが右脚を踏み込み、力を入れる

しかし、古にそれを対処する術は無く

「所詮君は……こんなものなのさ！」

「ぐはあっ！」

無防備な腹の中心へ、半ば本気の威力で放ったフリーザの蹴りが決まった

「そらっ！そらっ！そらっ！」

「ぐっ！ぐぼっ！ぐばあっ！」

続けて、さらに三発

「おいフリーザ！もうその辺で止めとけ！」

「まだまだ……悪い子にはお仕置きを、ね！」

「ぐぶうっ！」

アックマンの制止を聞き流しながら、さらにもう一発

「……どうだい？さっき自分のしたことが、いかに愚かなことかよく分かっただろ？」

「……」

一旦攻撃の手を止め、拘束を続けながらもやんわりとした口調で古へ話し掛ける

しかしながらそれには、おぞましく怒りが含まれていると容易に見て取れた

「僕に土下座して心から謝れ、そうすれば……今なら許してやらんでもない」

顔を古の目の前まで近付け、冷酷な目つきで彼女を見つめる

「さあ、言え……『土下座します』と、『心からフリーザ様に謝り

ます』と」

「……かアル」

「何？」

すると、ずっと黙っていた古が開口

小さく何か口にしたが、フリーザの耳に入ったのは極一部

「おい、今何と言っ……」

「んなことして、たまるかアル！」

「ふぐっ！」

訊き返そうとしたフリーザだが、言い終わる前に古の額が顔面へ飛んできた

鼻っ柱にぶつけられ、流血こそしないものの痛みでフリーザは思わずひるむ

さらには両腕の拘束も緩み

「クリリンの……」

右拳を引き抜いた古は、すかさず赤い気を目いっぱい乗せ

「……仇アル！」

「ぶぼおおっ！」

フリーザの左頬を、思い切り殴りつけた

尻尾も両脚から離れ、地面擦れ擦れで水平に吹っ飛ぶ

先程自身が上にいた岩壁へ、ドガンと叩きつけられた

「……ど、どうアル！」

全身に襲い掛かる痛みに耐え、古は何とか立ったままフリーザの方を見る

ガラガラと崩れ落ちる瓦礫の中

「……やってくれるじゃないか」

「なっ！？」

平然とした佇まいで、フリーザが起き上がった

殴られた頬を軽く撫でると、続いて身体についた土をはたき落とす

激突した際ぶつけたのだろうか、最後に後頭部へ手をやった

「き、効かなかったアルか……」

「いや、効いたよ。常人で言うところの、『柱の角に頭を思い切りぶつけたくらい』の痛み、かな？」

フッフッとフリーザは笑うと、一変して古を睨みつける

その表情には、遠巻きに見ていた機甲戦隊の面々すら恐怖した

「つまりは普通に痛かったのさ……そう、今のは痛かった……」

両足の幅を広げ、膝を折るようにして思い切り踏み込む

直後

「痛かったぞーーーーっ！！」

「くっ！」

フリーザは全速力で、古へ頭から突撃した

第９８話　貫け！怒りの鉄拳　赤い炎をそこへ乗せて（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

ランチ
「今回ゲストは誰が来てんだ？」

クウネル
「はい、今回はこの方」

パラガス
「パラガスでございます」

クウネル
「以前出演されたブロリーさんの御父君、サイヤ人のパラガスさんです」

パラガス
「本当はブロリーと一緒に出たかったのだが……」

クウネル
「出なくて正解だったと思いますよ？」

ランチ
「ああ、元司会が酷い目に遭ってたな」

パラガス↑確認中
「……あ、ホントですな」

クウネル
「さてさて、ではコーナーを進めましょうか。今回の話ですが……」

ランチ
「前にクリリンと一緒にいたガキ、それとあの宇宙人との戦闘話だったな」

パラガス
「しかしあの娘、なかなかの戦闘力……おそらく私をゆうに超えている」

ランチ
「……こいつの戦闘力って、ちゃんとした設定あったか？」

クウネル
「無いみたいですが、普通のサイヤ人はフリーザさんを殴るなんて無理でしょ」

ランチ
「まあ、そうか……」

パラガス
「そう言えば聞いたんだが、この話にはボツにしたものがあったそうだ」

ランチ
「ボツにした？」

パラガス

「正確には、『ノリで書こうと思ったけど、自重した展開』だ」

クウネル
「あ、それ私だいたい分かりました」

ランチ
「な、何だよ？」

パラガス
「では実際に、それを今から見てみましょう」

「そちらのお嬢さんは？」

「こいつは古菲つって、ちょっとした事情で地獄まで修行に来た地球人のガキだ」

「地球人ですか……そう言えば昔、孫悟空と一緒にいた地球人を殺したことがありましたっけ」

「！！」

「お、おい、嬢ちゃん？」

「私の尻尾を切るという何とも無礼な真似をしてくれましたが、最後は無抵抗のまま爆発させて……ボン！ってね」

「……のことアルか……」

「……何？」

「クリリンのことアルかーーーーー！」

パラガス
「……というのを書こうと思ったことが一時期あったそうで」

クウネル
「うわ、予想通り」

ランチ
「……それは流石に駄目だよな」

クウネル

「まあ実際、書くのはちゃんとやめたわけですしね」

ランチ
「けど、何か他にもパロディ臭いものが……」

クウネル
「え、どこです？」

ランチ
「ほら、フリーザが起き上がった後に言ったセリフ」

クウネル
「……ああー」

パラガス
「これまた随分と微妙なところを……」

ランチ
「だろ？多分九割以上の読者が気付かないと思うんだけどよ……」

クウネル
「……まあこういうパロディは、番外編2でやった前例もありますし」

ランチ
「あれはまだ伏字だから分かるけど、今回はあまりにも分かりにくすぎるぞ」

注・分かった方は、感想ページで報告してくださると嬉しいです

クウネル
「ヒントとしましては、『ランチさんのところと同じ誌上の作品』です」

ランチ
「いや、それでもかなり厳しいって……」

注・分かりにくくて本当にすみません

クウネル
「では続きまして、次回予告です」

パラガス
「さて、次回のネギドラ！は……」

ランチ
「フリーザがぶっちぎれたみたいだな」

クウネル
「はい、そして古菲さんは大ピンチ。その時あの人物が動きます」

パラガス
「あの人物、というのが少々気になるな……」

クウネル
「それは読んでからのお楽しみ」

ランチ
「次回の投稿予定は来週の月曜……あれ、金曜じゃねえか？」

クウネル
「『春休みの課題に勤しみます』とのことで」

パラガス
「感想等は絶賛受付中」

クウネル
「では皆さん、次回のネギドラ！も……」

ランチ&パラガス
「お楽しみに！」

エヴァ
「ってこらあああああっ！」

クウネル
「あ、来ましたね」

エヴァ
「この私を差し置いて、何普通に始めてるんだ！」

ランチ
「だって前回決まったことだろ？」

エヴァ
「だからこいつが勝手に決めただけだ！ていうか貴様！私は『元司会』じゃない！現在進行形で司会だ！」

パラガス
「おやおや、かわいいお嬢さんだ」

エヴァ
「……こいつは？」

クウネル
「ブロリーさんの御父君、パラガスさんです」

パラガス
「パラガスでございます」

エヴァ
「……ほう（ギロリ）」

パラガス↑ｇｋｂｒ
「……何ですかな？その殺気溢れる表情は……」

エヴァ
「息子の始末は親が……だよな？」

パラガス
「お、お助けくださいお助けください！」

エヴァ
「待てこらあああっ！」

注・次回から司会は、ランチ→エヴァに戻ります

第９９話　古、絶体絶命！？怒髪天フリーザ（前書き）

余裕がありましたので昼投稿、これを書いてる現在学校の昼休みです。こんな感じでまた投稿したいですね、『余裕を持って書き終われば』ですが。

ではどうぞ！

第９９話　古、絶体絶命！？怒髪天フリーザ

「ぐぐっ……うわあああっ！」

古が勢い良く吹っ飛ぶ

先程の一撃で、ある種の箍が外れてしまったフリーザ

怒りを表情へ顕著に表わせ、頭から突撃

避けても追尾してくるだろうと推測した古は、両掌を重ねて正面から受け止めた

が、それは明らかな失敗

疲労とダメージから、古は足の踏ん張りがてんで利いていない

そもそもそれ以前に、両者の間にパワーの差がありすぎた

「逃がさんぞ！」

自分から離れていく古を、フリーザは見逃すことなく追撃

高速で古の背後まで回り込み

「そらっ！」

「ぐぅああっ！」

縦に回転した回し蹴り（むしろ踵落とし）で、腹へ強烈な一撃が炸裂

背中から叩き落とされ、その衝撃で地面にいくらか亀裂が走る

続けて躊躇なく顔面へ拳を飛ばしたが

「きえぇぇぇっ！」

「くっ！」

紙一重で古は回避

顔を横にずらして避け、すぐ横の地面に拳がめり込む

「ま、まだアル！」

すかさず古は行動

足で地を蹴り、地面を滑るようにしてフリーザから距離をとった

そこから気力で立ち上がり、敵の攻撃に備えるべく身構える

しかし

「どこを見てるんだい？」

「し、しまっ……」

疲れでフラついていた隙を突き、フリーザは一瞬で背後へ

古は声を聞き、咄嗟に身体を右に反転

そのまま反射的に右肘を打ち込んだ

パシンッ

「おやおや、さっきよりも元気が無いねえ」

「あ、あああ……」

肘はフリーザの掌の中で、小気味いい音を立てる

その振り向きざまに、古が見たフリーザの顔

まるで、『獲るべくして獲る獲物』を見据える一匹の大蛇

冷酷な目つきから飛ばされるその視線から、網膜を通し古の全身へ信号を送り出した

目の前の相手は脅威、とてつもなく危険だと

変身したボージャックを目の前にしたあの時とは、また少し違った感覚

「……まだアル……」

しかしボージャック戦同様、古は自らの身体を奮い立たせ動く

左拳に赤く気を乗せ、殴りかかろうとした瞬間

「……まだアル！まだ勝負は終わてないア」

「終わりだよ」

フリーザの人差し指から、光線が飛び出した

「っ！？」

「おっと、地球人の心臓は反対側だったか」

「……ぐぷぁっ！」

光線が当たった先は、古の右胸

古は込み上げる血液をそのまま吐血

そこからフリーザか何かするわけでもなく

バタリと、仰向けに地面へ倒れ込んだ

「とは言っても、胸を撃たれたんだ……さぞ苦しいだろうな」

「ぐ、ぐぐぐぐ……フ、フリー……」

「早速、トドメといこうか」

胸部に走る痛み、血の味で満ちた口内

そんな中、古は必死に声を絞り出す

しかしフリーザは耳も貸さず、再び人差し指の先端を古へ

「このフリーザを愚弄した代償、それは……お前の命だ」

「ま……負けて……負けてたまるかア……」

「じゃあね」

今まで数多くの命を、死へといざなってきた光線

『デスビーム』と名をもつその技を、放とうとしたその刹那

「死……」

ガシッ！

「そこまでだ、フリーザ」

ある一人の手が、フリーザの腕を掴んで引き寄せた

当然指の先端は狙っていた古から逸れ、やむなく技は中断

「……さっきまで外野で怒鳴ってたと思ったら、今度は実力行使か」

「分かってたことだろ、俺がみすみすお前の人殺しを見逃すと思ったか？」

フリーザが憎たらしげに見たその先

そこには今回の武者修行の立会人、アックマンその人が立っていた

さらに引き寄せ、ギリギリとフリーザの腕を締め上げる

といっても、フリーザは痛みに顔をゆがめることはない

せいぜい軽く動きを制限され、本気で暴れれば普通に外せる程度か

「もう充分やった筈だ、今お前に嬢ちゃんを殺させるわけにはいかねえ」

「そう言われただけで、納得してやめるとでも?」

「これ以上やるってんなら、俺が相手になるぜ」

「っ!」

威圧するフリーザへ、アックマンは眉一つ変えずに言い返した

すると今度は、逆にフリーザの顔色が悪くなる

「しかもいつもの手合わせみたいな戦い方じゃない、本気でお前を殺しにいく……俺の技、長年地獄にいるお前が知らないわけないよな?」

「ぐっ……」

「あの技を撃つのも、闇魔にチクるのもやめといてやる……だから

この場は見逃せ、そして二度と嬢ちゃんに手を出すな」

「ぐぐぐっ……」

「ア、アックマ……グプッ」

「喋らない方がいいぜ嬢ちゃん、それ以上の血は流石に危ない……
……で、どうなんだ？」

「ぐぐううううっ……」

口から一層血がこぼれ出す古を、アックマンは横目で見ながら忠告

再び視線を戻し、腕を締め上げたままフリーザへと言った

顔を怒りと悔しさで歪めたのち、フリーザが取った行動は

「……ここから立ち去ればいいんだろ、だったらその手を離せ」

悔しながらも、アックマンの要求の承認

するとアックマンは素直にも、掴んでた手を離す

しかし油断は出来ないでいるのか、すぐに飛びかかれる体勢

古にまた攻撃しようとすれば、すかさず止めに入るだろう

「どうした、早く行けよ」

「く……くそがあああああっ！」

この、やり場の無い怒りにフリーザは咆哮

最後にアックマンをこれでもかと睨みつけ、猛スピードでこの場から飛び去った

この際、辺りに一面に爆風が吹き荒れる

それが収まる頃には、フリーザの姿は完全に消えていた

「ようやくいなくなったか……」

やれやれといった様子で、アックマンはフリーザが飛んで行った方を見やる

「来たのがセルとかじゃなくて助かったぜ、まあセルだったら嬢ちゃんと一瞬即発にはな……そうだっ、嬢ちゃん！」

慌ててアックマンは古の方へ振り返った

意識はまだあるが、出血のせいで気や体力の減りが著しい

治療を急がねばならないだろう

アックマンは駆け寄り、古を抱き上げた

「とりあえず気は俺のを送り込むとして、問題は全身の傷か……」

古の容体を改めて確認した後、アックマンがチラリと見たのは地獄のとある一角

そこは地獄の一部関係者くらいしか知らない、かなり特別な場所

あとそれを知っているのは、せいぜい孫悟空くらいか

（緊急事態なんだ、しょうがねえ……ゴズとメズには悪いが、一つアレを採って食わせるか）

ここから全速力で飛べば、十秒とかからない

なら充分間に合うだろう、とアックマンは舞空術で浮上

「お前ら、わざわざ呼んだのに悪かったな、また別の日に頼む。じゃあな！」

サウザー達に一声掛けると、アックマンはこの場を跡にした

（にしても、フリーザを相手にしてああも戦うとは……大会まであと五日、本当に分かんねえかもな）

自分の予想以上の戦いぶりを見せた少女、古を抱えてニッと笑いながら

～閻魔の館～

「……い、おい、古！」

「……むにゃ？」

「お、ようやく目ぇ覚ましたか」

それから、経つこと数十分

いつの間にか寝てしまっていた古は、悟空に呼ばれ目を覚ました

気付けば、既に彼女がいる場所は地獄ではない

閻魔の館、そこの壁際に置かれたソファの上だった

「閻魔様から、古を迎えに来いって言われてよ。瞬間移動で飛んできたんだ」

「わざわざすまなかたアルな……よっと」

少々寝起きで全身がだるいが、古は力を入れて身体を起こす

（アックマンは……いないアルね）

続いて辺りを見回すが、アックマンの姿は無し

大方、ここまで運んだ後すぐに帰ったのだろう

（……ん？身体が普通に動くアル）

フリーザから受けたダメージも、自ら使った技の反動の痛みも一切無い

残っているのは、道着に付いた土埃や血糊程度

（ちょと意識朦朧であんまし覚えてないアルが、あの実を食べたおかげアルかな……）

「それにしても古、随分道着がボロボロだな……けど見たところ傷はねえみてえだし、一体地獄で何があったんだ？」

「え！？」

身体中をあちこち見ていた古だが、そこへ悟空が尋ねた

確かに今の古の状態は異常

道着は地に擦れたりもしてかなりボロボロ、胸部には穴まである
だが傷と言えるようなものは一切無いのだ
付着している血も、返り血とは付き方が違う
「えっと、実はアッ……！あーゴホンゴホン！」
「？」
先程の出来事を話そうとした古だが、ここで修行前に交わしたアックマンとの会話を思い出した
「へー、昔悟空と戦たことがあるアルか」
「大分昔な。だからリベンジに向けて、今も地獄（ここ）で修行してるんだ」
「今度の大会は出ないアルか？悟空も出るアルよ」
「いや、今の俺じゃまだあいつとは戦えねえ……それに、俺には参加資格がないからな」

「そうアルか……」

「あ、そうそう言い忘れてた。俺がお前の修行の立ち会い人をやったってのは、あいつには内緒な。それと修行してることも」

「……いつかちゃんと戦う日が来るまで、アルね？」

「そういうこった、何か嬢ちゃん口軽そうだが頼むぜ」

「むむ、私口は堅いアルよ」

（危ない危ない、麻帆良祭の超の時みたくうっかり喋りそうになたアル……）

わざとらしく咳払いした後、古は悟空に背を向け口を手で押さえる

実際古は前科持ちで、口の軽さは証明済み

「どうした古？何か言いかけてたけどよ」

「い、いや！何でも！」

「？」

そこから深く悟空が追求して来なかったのが唯一の救いか

「つ、つまりアルな……」

古は悟空の方へ向き直し、先程起こった出来事を改めて話し出した

ただし、アックマンのことは何一つ口に出さずに伏せたままで

「……おめえフリーザと戦ったんか！」

「クリリンを殺したと本人から聞かされてて……我ながら無茶したアル」

申し訳なさそうに古が顔を俯かせる

あの時は熱くなっていたが、冷静に考えれば無茶をやったと本人でもすぐ自覚出来た

「そんで、何発かは攻撃当てれたけど結局勝てなくて……」

「ボロボロになって死にかけたところで、地獄にあった不思議な実を食べて事無きを得たのアル」

全て言い終わると、悟空は腕を組んで難しい表情

両目も瞑り、うーんと唸る

（やぱり、怒られるアルかな……）

「……ま、無事に帰って来れたなら問題ねえか」

「え？」

が、直後悟空は両目を開けいつもの顔で古に笑いかけた

さらには右掌で、古の背をバンと叩いてやる

「古、身体の方は平気か？例の技も結構無理して使ったんだろ？」

「だ、大丈夫アルよ。さっきも言たアルが、地獄にあた木の実食べてほぼ全快アル」

「だったら大界王星戻って、早速オラと修行だな」

負けちまったなら、修行してもっと強くなればいい

それが、今おめえに出来る一番の方法だ

と、悟空は言葉を続けた

「……ウム！もっと強くなって、あいつをギャフンと言わせてやるアルよ！」

「ははっ、その意気だその意気だ。けど、今度また地獄で修行する時は気をつけろよ？まあ、その立ち会い人の奴が結構信頼できるみてえだから大丈夫とは思うけどな」

「分かてるアルよ」

「フリーザより強え奴も沢山いんだ……兄貴のクウラとか、セルとか、あとオメエを殺したボージャックとかもな」

「うっ、ボージャック……肝に命じとくアル」

しかし最後にはちゃんと忠告をし、悟空は額に指を当てる

そうしながら、部屋の中央で職務に励む閻魔へ顔だけを向けた

「じゃあな閻魔様！近い内にまた古が世話になっから！」

「うむ、だが本当に無茶はせんようにな……もし最悪の事態になりでもしたら、界王様に合わせる顔が無くなる」

「「分かってるって（アルよ）！」」

ピシュンッ！

「まったくヒヤヒヤさせおって……気を失ってる娘をアックマンが連れて来た時は、思わずギョッとしたわい」

瞬間移動で目の前から消える悟空と古

それを見届けた閻魔は机に肘を乗せ、悪態をつく

「あの、閻魔様。次の魂がお待ちです」

「ん？ああ、スマンスマン。ええっと、お主の名前は……」

だがすぐさま係員の鬼に声をかけられ、仕事に戻るのであった

時刻は既に夕方

あの世一武道会まで、あと四日と少し

第９９話　古、絶体絶命！？怒髪天フリーザ（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「まったく、前回は散々だったな」

クウネル
「いいじゃないですか別に、一回くらい司会譲ったって」

エヴァ
「そんなことしたら、私の出番が減ってしまうだろうが」

クウネル
「でも前回それなりに出ましたよね？」

エヴァ
「それなりじゃ満足せんのだ……ところで、今回のゲストは誰なんだ？」

クウネル
「はい、今回はこのお二人」

超
「また会たネ、エヴァンジェリン」

ピッコロ
「もう二回目か……」

クウネル
「宇宙人コンビということで、超鈴音さんとピッコロさんです」

エヴァ
「こいつら、比較的最近このコーナーに出てなかったか？」

クウネル
「三回目になっちゃうキャラが増えてきてまして」

エヴァ
「ううむ……そろそろ三週目に突入か」

クウネル
「になりそうです」

ピッコロ
「ところでお前はどこにいるんだ？ネギ達が心配してたぞ」

超
「それについてはシークレット、というか既にこれは何度も言てることネ」

クウネル
「ではコーナーを進めましょうか、さて今回の話ですが……」

エヴァ
「あいつは一体どこまで目立つ気だ？」

クウネル

「……アックマンさんのことですか？」

エヴァ
「他に誰がいる？」

ピッコロ
「アックマンか……フリーザを相手にああも振る舞えるとはな」

超
「そもそも作者がアックマンを好きになたのは、彼が出てくる某格ゲーが始まりらしいヨ」

クウネル
「そういえばＩＦストーリーで撃ってましたね、フリーザさん相手に」

エヴァ
「だがいくら技が強力でも、当たらなくては意味が無い……つまり奴の実力は」

注・とりあえず古よりは強いです

エヴァ
「だろうな、どんだけ地獄で修行してるんだあいつは……」

ピッコロ
「だがそのくらいでなければ、立ち会い人としても務まらんだろ」

超
「特戦隊とかにフクロにされて終わってしまうからネ」

エヴァ
「……ところで、あいつはアクマイト光線を撃ったことがあるのか？」

クウネル
「と言いますと？」

エヴァ
「いや、フリーザが技のことを知ってたようだし。それにセリフからして、地獄中に浸透してる感じだったろ？」

超
「何でも栽培マンやセルジュニアに撃って爆殺させたらしいネ、地獄の鬼に襲いかかろうとしてたところを」

エヴァ
「あいつらも地獄に行ってたのか……」

ピッコロ
「栽培マンはともかくセルジュニアまで……ということは奴の実力は、セルジュニアに少しは食い下がれるほどの……」

超
「いや、アクマイト光線を知らずに舐めきって飛びかかった結果ヨ」

エヴァ
「じゃあ結局あいつはどれくらい強いんだ」

注・古以上、セルジュニア以下ということで

エヴァ
「範囲がとてつもなく広いぞ！？作者絶対細かく決めてないだろ！」

クウネル
「まあまあ……あとは、地獄にある例の果実ですね」

超
「これ、アニメ観てないと読者分からないヨ。しかも『改』じゃなくて『Z』」

ピッコロ
「しかも出たのは一話きり……だったか？」

クウネル
「確かそうだったかと」

エヴァ
「あれって、回復効果あったか？」

クウネル
「そこらへんかなり曖昧なため、ある程度作者の捏造設定入ってます」

エヴァ
「おい」

ピッコロ
「だが、あいつの今後に大きく影響したのは確かだろうな」

クウネル
「ですね、では続きまして次回予告です」

超
「さテ、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「再び舞台はシフトし、この世編だ」

クウネル
「日付は変わりまして三日目、どうやら次はピッコロさんの出番みたいですね」

ピッコロ
「ああ、楓と二人で修行する話らしい。刹那と木乃香はブルマのところへ泊ったからな」

超
「そこへネギ坊主達も合流、なかなか面白くなりそうネ」

クウネル
「次回の更新は木曜日です」

エヴァ
「……来週の、か？」

クウネル
「いえ、今週のです。金曜日に用事が入ったそうなので頑張って書き上げるつもりのようですね」

超
「感想やゲストリク、待ってるヨ」

ピッコロ
「では、次回のネギドラ！も……」

エヴァ＆クウネル＆超
「お楽しみに！」

クウネル
「あと、次回はついに第１００話です」

超
「このコーナーにも私の協力によって、凄いゲストを呼ぶネ！」

ピッコロ
「ほう」

エヴァ
「詳しいことは、この作品の感想ページにて。だ」

第１００話　これはせめてもの礼　恩返しの楓とネギ（前書き）

ついに第１００話です！ようやく到達いたしました！当初の予定から遅れること一か月以上……しかし何とか出来てよかったです。
にも関わらず、本編は普通の話……何か特別な話でも書けば良かったですかね？なんかすいません（汗）
ではどうぞ！

第１００話　これはせめてもの礼　恩返しの楓とネギ

「「「だだだだだだだだだあああああっ！」」」

「だだだだだだだだだあああああっ！」

ピッコロが修行場として使用する、とある場所にある山の中

ある時は滝に打たれながら瞑想し

またある時は身体を動かし汗を流す

そして今回は

「どうした楓！一対三でこのザマか！」

（これが、重りを外したピッコロ殿……スピードがまるで違うでござる！）

楓を相手にし、一対三の組み手を行っていた

いや、正確に言えば

「ぜやあああっ！」

「ぐっ！」

（むむ、向こうもやられ始めてきたでござるな……）

三対九、である

楓と刹那が精神と時の部屋に入ってた際の半日間

ピッコロは楓に教えを請うことなく、独自で彼女の影分身を会得した

元々、影分身とは勝手が違うものの分身自体は使えていたピッコロ形として覚えるのには、半日あれば充分だったようだ

三日前の天下一大武道会準決勝では、トランクス相手にそれを披露最大で七体の影分身を造り出す、八つ身分身までも使用することが出来た

しかし、やはり独学のままでは不充分だと思ったそうで

『楓、俺の影分身を見てもらえないか？お前から見て俺のはどうなのか感想が聞きたい』

『面白そうでござるな……いいでござるが、折角だし影分身を使った多人数組み手などどうでござるか？』

と、影分身の練習も兼ねて楓と組み手を行うこととなった

楓としても、半年あの部屋で修行してパワーアップを遂げた身である

しかも、刹那と木乃香は昨日から出掛けて二人きり

そのため、思う存分戦うことが可能

ピッコロと、改めてサシで拳を交わしたくなるのも無理は無かった

「だあああああっ！」

「なんのっ！」

パワー分散が顕著にならないよう、ピッコロが出した影分身は二体

対して楓は八体、これで自身もそれぞれ加えて三対九

基本、ピッコロ一人の相手を楓三人が行うようにし、現在に至る

「どうだ楓、刹那も予選でこの状態の俺と戦ったんだ」

「成程、刹那殿のあの技をかわしきるのも無理は無いでござる……な！」

「おっと」

楓達三人の連撃をいなしながら、余裕そうに口を開くピッコロ（本体）

対して楓（本人）は、動じることもなく攻撃を続けた

顔を狙った掌底は、難なく顔をずらして避けられる

「そらあっ！」

「ぐふっ！」

そこからカウンターで、逆に楓の腹部へ掌底を打ち込んだ

しかし本体のため、消滅は無い

もしこれが影分身なら、一発消滅してもおかしくは無かった

それほど、重り（リミッター）を外したピッコロの一撃は速く重い

しかし気を集中させていたため、ダメージは何とか軽く済んだ

「ほう、今のを耐えたか」

「「せやあああああっ！」」

感心するピッコロの背後から影分身が迫るが

「甘い！」

「うぐわっ！」

「ぶっ！」

裏拳でぶっ飛ばし撃破する

二体の内一体は消滅

もう一体は、ぶっ飛ばした一体がぶつかっただけで消滅には至らず
しかしこれで、ピッコロ（本体）の動きを止める者は一時的だが
いなくなり
「爆力魔波！」
「「ぐわあああっ！」」
影分身への援護を許してしまうこととなった
放たれた爆力魔波は、ピッコロの影分身と交戦する楓のそれ二体
を直撃
「はあああっっ！」
その隙を見逃さず、ピッコロ影分身は強力な気功波攻撃を撃ち込む
この連続攻撃に、楓影分身二体とも消滅
「まだまだああっ！」
「ぐっ！ぐわああっ！」
三対一が一対一となったため、当然残り一体も耐えきれず消滅
瞬く間に、総勢三対九だったのが三対五にまで変化した
楓本体が持ち直し、ピッコロ本体を止めに入ったのはこの直後

しかし、このあまりにも崩れたパワーバランスの前には

「ま、負けたでござる……」

「ふむ、思ったよりも時間が掛かってしまったな」

数分と持つことはなかった

この場に残っているのは、立ったままのピッコロ二人と地に伏す楓

既に楓は疲労困憊で、再び立ち上がって戦うには難しい状態

開始から十数分

影分身を展開し合った多人数組み手は、こうして決着が着けられた

まだ息が荒れてすらいないピッコロは、影分身を解除し楓を見下ろす

この構図は奇しくも、初めて両者が手合わせしたあの時とほぼ同じ

「それに影分身が一体倒されてしまった……強くなったな、楓」

「あれは、拙者の影分身による連携が少々まさってただけのこと……自力では到底ピッコロ殿には至らぬでござるよ」

しかし、戦いの内容としては大分良くなっていた

三対五になった後楓は、残りの気を駆使してピッコロの影分身一体に集中攻撃

長年の成果による影分身との連携攻撃は、ピッコロ影分身へ有効打を叩き込むことに成功

本体と残りの一体に攻撃されながらも、一体を消滅させるまでに至る

まあその後は、本体含めたピッコロ二人の攻撃に為す術なく破れてしまったわけなのだが

「それに、拙者らが狙った一体は僅かだが気の練りが足りず防御力が低かった……やはり我流でござるな」

最後に、楓は負けながらもニヤリと笑い

「言ってくれるじゃないか……」

ピッコロもつられて口元を釣り上げた

立つこと自体は何とか可能なようで、楓はゆっくりと立ち上がる

「だがお前が言うんだ、本当にそうなんだろうな」

「あいあい、けどコツを掴めば簡単でござるよ」

「コツ、か……出来れば教えてもらえないか？」

「うーむ、少々厄介でござるな……今のピッコロ殿に影分身を教えて完全にマスターされたら、拙者の立場が無くなってしまうでござる」

もしそうなれば分身一つ消滅させることすら、さらに難しくなるだろう

『影分身』という土俵自体ではピッコロの上に立つ楓

追い付き追い越されそうな予感がしたのか、今更ながら躊躇いを見せた

「いや、別にお前がダメだと言うなら強制はせんぞ。この技そのものを覚えられただけでも、充分収穫だったからな」

「ふむ……」

が、この時ピッコロ意外に謙虚

無理にでも教えさせようとする気は無い模様である

口元に手を当て、数秒楓は熟考

「……いや、やはりピッコロ殿には礼がしたいでござる。ここまで拙者やネギ坊主達を強くしたのは、何よりピッコロ殿のおかげでござるからな」

出した結論は、『恩を返すという意味で教える』

よくよく考えればピッコロは、格下の自分達と二週間も修行を共にしてくれた

『修行相手として欲しい』と言ってはいたが、あまりにも離れすぎていた実力差

本当は一人で修行したとしても、さほど変わらなかったのではないのだろうか

無論、楓の影分身を見て盗んだという成果はあった

しかしどう見積もっても、やはりピッコロの方が圧倒的に自分達へ尽くしてくれている

恩を返さぬまま麻帆良へ帰ることは、楓には出来なかった

「……そうか、すまんな」

「いやいや、あと数日もすれば元の世界へ帰る拙者の、いわゆる置き土産でござるよ」

体力が少しながら戻ったのか、楓は呼吸を整え伸びをする

「それでは、早速始めるでござるか」

「もう平気なのか？」

「影分身を出せるだけの気はある、これなら教えるには充分でござる」

時刻はもうじき、正午に差し掛かろうとしていた

その同時刻

「ブルマさんの家のお泊まり、楽しかったなせっちゃん」

「はいお嬢様、しかし少々長居してしまいましたね……」

刹那は木乃香をおぶって飛行中

昨晩泊まったブルマ宅を跡にし、ピッコロ達の所へと帰還していた

「朝食を頂いたらすぐ帰る予定だったのに……ピッコロさん達はどうしてるんでしょう？」

「あの二人のことやし、やっぱり修行してるんちゃうかな？もしそうやったら、すぐウチの魔法で怪我治したろ」

ピッコロと楓が拳を交わす光景を思い浮かべながら、真っすぐ二人は向かっていく

木乃香がいる関係上飛行速度は遅いが、到着まであと十数分と言ったところか

「でも驚いたなせっちゃん、ブルマさんってベジータさんよりも強いんやね」

「ははは、間近で見てた私の方がもっと驚きましたよ……ん？」

昨日の夜のベジータとブルマのやり取り

庭をメチャクチャにした罰としてこき使おうとするブルマと、それに渋々ながら従うベジータ

あのシュールな光景はやはり忘れられないのか、ついつい思い出し笑いをする二人がいた

が、そんな時刹那が何かに反応して後ろを振り返る

高速で自分達の方に接近してくる五つの気

「刹那さーん、木乃香さーん」

「あ、ネギ先生、それに悟飯さん達も」

ネギや悟飯、それにコタローとあやかを加えたいつもの修行メンバーだった

ちなみに五つ目の気の正体は、ネギの服のポケットに入っているカモ

刹那達の横にまで来ると、速度をやや落とし並列状態で飛行を続ける

「ネギ先生達もピッコロさんのところへ？」

「はい、あれ？刹那さん達はどこか行ってたんですか？」

「ブルマさんのお宅にお嬢様と泊まってたんです、昨日はトランクスさんと剣の稽古をしてたのでそのままついでに」

「それとな、茶々丸さんがめっちゃ凄かったんよ」

並列飛行を続けながら、刹那達は簡単に昨日の出来事をネギ達に話す

特に茶々丸のパワーアップについては、一同大層驚いてた様子だった

「そんな強くなったんや茶々丸姉ちゃん、確か大会予選ではネギにボロ負けやったろ？」

「はっきり言って今の茶々丸さんは、私や楓以上ですよ」

「え！？ホンマか！ううう、俺も茶々丸姉ちゃんと戦ってみたい

……」

その中でもコタローは顕著で、自分より格上と知りながらも戦う気満々

おそらく古に言えば、同じような反応を彼女はとるだろう

先日茶々丸を倒したネギも、表情にはあまり出さぬものの興味が湧いていたようだ

「そういや悟飯君達は、ピッコロさん達にどんな用事なん？」

すると木乃香が思い出したように、悟飯へ顔を向けて尋ねる

既に大会は終了

修行をしないというわけではないが、合同でする意義は今はもうあまりない

ということは、修行以外で何かしら理由があるということだろう

「はい、ネギ君が持ってた魔法の道具をピッコロさんに見せてあげようと思って」

「魔法の道具……ですか？」

「こっちの世界に来る時、ポケットの中にいくつか入ったままだったんです」

けど、チチさんにお部屋を貸していただいた時にしまってそのまま

大会に向けての修行とかで忙しくて、すっかり忘れてたんです

と、続いてネギが答えた

「ピッコロさんは一応魔法の心得があるようですし、何か一つくらいお礼にあげられる物が無いかなって。何もお礼出来ずに麻帆良へ帰るのはアレですし」

ネギも楓と同じようなことを考えていたようだ

「あ、そろそろだよネギ君」

悟飯に言われ、一同はゆっくりと高度を落としていった

第１００話　これはせめてもの礼　恩返しの楓とネギ（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「今回でこの作品、ついに１００話突破だな」

クウネル
「はい、というわけで今回は凄いゲストをお呼びしました」

エヴァ
「前回もそう言ってたな……確か超鈴音の協力で呼ぶとかどうとか」

クウネル
「はい、というわけで今回のゲストはこの三人」

悟空（少年期）
「オッス、おら悟空だ。ん？ここどこだ？」

ベジータ
「これが……ガキの頃のカカロット……」

古
「今とあんまし変わってないアルな……背格好以外」

クウネル
「ベジータさんに古菲さん、そして子供の頃の孫悟空さんです」

エヴァ
「って、超鈴音の協力というのはカシオペアのことか！？」

クウネル
「他に何が？」

エヴァ
「さらっと言うなさらっと！」

悟空（少年期）
「なあなあ、ここどこだ？オラ腹減っちまったぞ」

エヴァ
「ここに来てまで食い物食う気か……」

悟空（少年期）
「何か食いもんねえのか？」

クウネル
「これなんかどうでしょう？タカミチが以前持ってきたインスタントラーメンです」

エヴァ
「そのネタ古すぎるぞ！」

注・第５３話のあとがきコーナー参照

悟空（少年期）
「お、全部オラが食っていいのか？」

クウネル
「どうぞどうぞ」

悟空（少年期）
「わーい！いっただっきまーす！」

クウネル
「というわけで、今の内にコーナーを進めましょう」

古
「……あのまま放っておくアルか？」

クウネル
「だってあの悟空さんにコメント求めても無理ですし」

ベジータ
「あのカカロットはいつ頃のカカロットなんだ？」

クウネル
「ウーロンさんがパンツを手に入れた直後辺りです」

エヴァ
「随分と昔のを呼んできたな……」

クウネル
「というわけで、今回の話ですが……」

エヴァ
「あまり話が進まなかったな」

クウネル
「……そういうこともあるでしょう」

古
「しかもネギ坊主達、合流出来てないアルし」

ベジータ
「予告を破ったということか」

注・文字数の関係上そうなりました、すいません

エヴァ
「別に少しくらい長くしても問題なかろう」

注・そうすると、次どこで話を切ればいいか分からなかったんです（汗）

クウネル
「まあ、次の話に期待ですね」

悟空（少年期）
「なあ、あのラーメン全部食っちまったぞ。もう他にねえんか？」

エヴァ
「早っ！」

クウネル
「流石悟空さんですね……って、あれ？」

悟空（少年期）

「しかも他の食おうとしたら、ガチガチで全然旨くねえしよ」

エヴァ
「インスタントのをそのまま食うなよ！」

悟空（少年期）
「いんすたんと、って何だ？」

エヴァ
「……もういい」

悟空（少年期）
「そういや、おめえ達男か？それとも女か？」

クウネル
「古菲さん、ベジータさん。悟空さんから離れることをお勧めします」

ベジータ
「ん？」

古
「何アルか？」

クウネル
「いいからいいから」

エヴァ
「貴様何を言ってるんだ？確かに私の身体は十歳のままだが、それでも見れば普通に分か……」

パンパン

エヴァ
「!?」

悟空（少年期）
「あ、おめえは女か」

エヴァ
「……き、貴様あぁぁぁああっ！」

悟空（少年期）
「わわっ！何だ何だ!?」

エヴァ
「貴様は一体何を考えてるんだ！」

悟空（少年期）
「え、だって女には付いてねえんだろ?……あ、もしかしておめえ付いてねえけど男なのか?」

エヴァ
「んなわけあるか！バカか貴様は！行動そのものについて言ってるんだよ！」

クウネル
「ほら、離れてなかったらやられてたかもですよ」

古

「……あれは流石に私でも怒るアル」

ベジータ
「俺だったら蹴り返してやるな」

エヴァ
「そんなことしないと男女の区別がつかないくせして、貴様よくもまあ二児の父親なんかやってられるな！」

悟空（少年期）
「虹？虹には父ちゃんがいんのか？」

エヴァ
「だーかーらー！」

クウネル
「ほらほらエヴァンジェリン、落ち着いてください」

エヴァ
「落ち着いてられるか！こんなのがぼーやや孫悟飯よりも年上なんだぞ？絶対おかしい！」

クウネル
「それについては私も否定しません」

ベジータ
「俺もだ」

古
「同じくアル」

エヴァ
「そらみろ！」

クウネル
「しかしこのままだと、絶対あなた悟空さんに乱暴するでしょ？」

エヴァ
「それ以外どうしろと！？」

クウネル
「とにかくコーナーを終わらせましょう、話はそれからでもいいでしょ？」

エヴァ
「……ちっっっ！！」

古
「エヴァにゃん荒れてるアルな……」

クウネル
「多分あんなこと初めてされたんでしょうね、当然かもですが……では続きまして、次回予告です」

古
「さて、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「……ピッコロや長瀬楓と合流したぼーや達」

クウネル
「私達の世界の魔法道具をいくつか、ピッコロさんに見せるつもりのようですね」

古
「ピッコロの反応はどうアルかな？」

クウネル
「それは、見てからのお楽しみです」

ベジータ
「次回の更新予定は来週の月曜日だ」

エヴァ
「お、何かペースが上がってきたな」

クウネル
「とりあえず予定ですがね」

古
「感想とかもよろしくアル、じゃあ次回のネギドラ！も……」

エヴァ＆クウネル＆ベジータ
「お楽しみに！」

悟空（少年期）
「ぜってー見てくれよな！」

エヴァ
「貴様は黙ってろ！」

エヴァ
「……ところで、作者がまた何か馬鹿なこと考えたらしいな」

クウネル
「はい」

ベジータ
「何のことだ？」

エヴァ
「この小説の連載ペースをさらに落としかねない行為だよ」

古
「詳しくは、作者（カゲシン）の活動報告参照アル！」

悟空（少年期）
「なあなあ、ところで飯もう出ねえのか？」

エヴァ
「帰れえええええっ！」

第１０１話　魔法道具大炸裂！？初めて目にした彼の姿　（前書き）

今回はギャグ的な内容が強くなってしまいました……どうしてこうなった！？
というわけで、第１０１話です
ではどうぞ！

第１０１話　魔法道具大炸裂！？初めて目にした彼の姿

「ほう、これが魔法の杖か……」

「初心者用のですけどね、本来なら魔法技術の上達に合わせてちゃんとした杖を使うことになります」

ネギ達一行は、無事ピッコロらと合流に成功

さっそく目的の、魔法道具のお披露目をしていたところだ

まず初めは、魔法初心者が使う初心者用の杖

タクトのような細い棒で、先端には三日月の形にあしらった魔法石

ピッコロはそれを手に取り、興味深そうに眺めていた

「……そういえば、ネギは杖を使わないのか？今までそれらしき物を見たことがないんだが」

「使うは使うんですけど、元いた世界に置いてきてしまってて……だから今は代わりにこれを」

ネギは下げていた手を上げ、その指に填められた指輪をピッコロに見せる

「杖と同じで、これも魔法発動体を役目を果たしてるんです」

「杖に頼らず使える魔法も、あるにはあるんスけどね。身体強化魔法の『戦いの歌』とか」

ポケットから出て肩に登ったカモが、ネギに続いて補足で説明した

「けどまあ、やっぱり無い分には困っちまうわけさ。準決勝戦ではそのせいで苦戦しちまったしな」

「まあね、あの技が無かったら負けてたかもしれないし……」

大会準決勝でネギはクリリンと戦い、カモの言ったとおり苦戦

理由は、魔法発動体である指輪を試合の途中でクリリンに奪われたから

戦闘系魔法を殆ど封じられてしまったのだが、何とか最後には逆転

精神と時の部屋で独自に編み出した『魔力版魔閃光』で、クリリンのかめはめ波を押し返し勝利した

古と共にその試合を見届けていたピッコロは、かなり感心した様子であったという

「今度からは気をつけなくちゃ」

「ところでネギ、お前や木乃香が使う魔法というのは誰にでも出来るのか？」

ピッコロが用いる魔術は、あくまでナメック星人だけが使える固有のもの

ネギ達が使う魔法にも興味があるのか、ピッコロはネギに尋ねてみた

「え？そうですね……やはりある程度才能が無いと厳しいみたいです、もちろんその人の努力にもよりますが」

「血縁に魔法使いがいれば使えることが多いッスね、兄貴や木乃香嬢ちゃんはその典型でさあ」

また一般人の中にも、夕映のように使える者が出る時もある

「それとアーティファクトはあくまで契約主の魔力とかによるものなんで、従者の才能は一切関係ないッス」

と、カモ再び補足説明

「ふむ……悟飯、お前は試してみたか？」

続けて、ネギの隣に立つ悟飯へ目を向けるピッコロ

「はい、初めの練習としてはその杖に火を灯すみたいなんですけど……僕は全然駄目でした」

ネギが魔法具の存在を思い出したのは、ちょうど昨日の晩

その際悟飯に呪文を教えてやらせてみたのだが、欠片たりとも火が付くことはなかった

ちなみに言うと、あやかも不成功

まあ現在は使えるようになってる夕映も、初めは全く出来てなかったのだが

「悟飯の兄貴は多分血筋的な問題っスね、両親が二人ともまんま戦士系みたいっスから」

「そっか……ちょっと残念だな」

「それに悟飯の兄貴だったら魔法の射手〈サギタ・マギカ〉覚えて十数本撃つより、今覚えてる気弾を一発ぶっ放した方が断然強力だって」

他にも回復といった戦闘補助魔法もあるが、これになるとさらに難易度は上

悟飯にはおそらく無理だろうと判っているのか、カモは悟飯の方に飛び移り納得させた

一応悟飯も昨日の段階で、そのことはそれなりに把握していた模様

特に駄々をこねることもなく、素直にカモの言うことに耳を傾ける

「ピッコロさんも試しにやってみますか？」

「面白そうだな、やってみるか……確かお前達の魔法には、事前に詠唱があったな」

「はい、火を灯す魔法は『プラクテ　ビギ・ナル　火よ灯れ（アールデスカット）』です」

ピッコロは初心者用の杖を、根元の方を握って持ち直した

こうして見ると、なかなかシュールな光景である

「イメージとしては、杖の先端に魔力を思いっきり集中させるような感じで」

「分かった、プラクテ　ビギ・ナル……火よ灯れ（アールデスカット）！」

その日、とある山で山火事が発生した

いきなり現れた巨大な炎に、燃やされていく木々

しかしその時山にいた何者かによって、すぐ炎は沈下

被害は最小限に収まり、山火事を目にした者もごく少数に留まったという

「はあっ、はあっ、はあっ……危なかったでござる」

「危うく山全部が焼けてしまうところでしたわ……」

「お嬢様、お怪我はありませんか？」

「ウチは大丈夫やえ」

上から順に、楓、あやか、刹那、木乃香

「まさかこんなに火が出ちまうとはな……」

「けどまあ、周囲数メートル焼けただけで済んでよかったで」

「ピ、ピッコロさん……」

「……」

続いてカモ、コタロー、悟飯、ピッコロ

これにネギを加えた一同の協力で、先ほどまでメラメラと燃えていた炎は沈下

幸い川が近くにあり、主に楓達の影分身によるものが大きかった

ピッコロは魔法発動に成功したのか

そして、山火事の原因は何だったのか

これについては言うまでもなかろう

当人は未だ右手に杖を握り締めたまま、焼けてしまった木々を無言で眺めていた

「す、すみませんピッコロさん！僕が場所も考えずこんなところで！」

その後ろではネギが、自責の念に駆られたか何度も何度もピッコロへ頭を下げている

確かに、燃える物が多い山林の中で炎属性の魔法は危険極まりない

しかし本来『火よ灯れ（アールデスカット）』はその名の通り、ただ明かりを付けるための魔法

ここまで大きな事態になると誰が予想出来よう

ピッコロの魔力容量は、ネギの予想を大きく超えていたのだ

それと『魔力を思いっきり集中させるような感じで』というネギの言葉どおりに従い、コントロール一切無しで魔力を注ぎ込んでしまったのも一つの要因か

「本当にすみません！僕のせいでこんなことに！」

「……いや、いいんだネギ。悪いのは俺だ」

「ち、違います！悪いは全部僕なんです！」

ピッコロはネギに背を向けたまま言葉をこぼし、ネギは変わらず頭を下げ謝り続ける

「俺が杖から炎を出し、その炎が木々を焼いた。この事実には変わりない……」

「ピッコロさん！」

ピッコロは重い足取りで、ネギ達から離れるように歩き始めた

「すまん、少し一人にさせてくれ……この杖も返そう」

「ちょっと待ってください！」

それに対し、慌てた様子でネギがピッコロを追う

このままピッコロを行かせては、かなり色々とマズい

折角今までの礼をしようと来たというのに、これではまるで逆である

「ほ、ほら！まだ見せてない魔法道具が何個か残ってます！」

即座にこれしか浮かばなかった苦しい理由で、ピッコロを引き留めようとするが

「いや、もう充分だ……色々気を利かせて、すまんかったな」

本人は全く足を止める気はなく、山林の奥へと入っていく

「そんなこと言わないでください！えっと、カシオペアっていうタイムマシンとか、今は使えませんけど……あ、あとこれ！これです！」

必死にピッコロを止めようと、ネギはポケットから魔法道具を出しながら説明

カシオペアは、世界樹がこの世界に存在しないため論外

言いながらそれに気付くネギだが、もう一つのこれはまだ大丈夫

飴玉が入った瓶を突き出し、さらに大声で張り上げた

「これを使うと、飲んだ人が幻術作用で見た目の年齢が変わって見えってわわわっ！」

が、直後木の根っこに足を引っ掛ける

「ん？ってうおお！？」

ネギの奇声に反応し、思わず振り返るピッコロ

その際、倒れ込むネギにそのまま押し倒された

そして、何という偶然だろうか

「あ、瓶の蓋が！」

その衝撃で、ネギの手に握られた瓶の蓋が外れ

「む、むぐっ！？」

それに入っていた飴玉の内二つが、ポーンとピッコロの口の中へ

色は青色

「す、すいませんピッコロさ……」

ボムンッッ！

「うわっ！」

謝ろうとしたネギだったが、突如ピッコロの全身から爆発音のような音と白い煙

ネギは目を手の甲で隠し、それらから逃れようとする

が、元々二メートルを超える長身であるピッコロ

全身から出た煙の量は多く、ネギごと彼ら二人を覆い尽くした

「ピッコロさん！」

「兄貴！」

「大丈夫でござるか！？」

慌てて悟飯、カモ、楓が駆け寄る

それに少々遅れ、残りの面々も

「ごほっ、ごほっ……何なんだ今のは……」

「「「「「え？」」」」」

煙の中から声

しかし、一同は思わず耳を疑った

聞こえてきた声が、ピッコロのそれと違ってたから

幼い印象を覚えるような、やや高めの子供声

ただカモとコタローは、もしかして、とあたりを付けたのか皆ほど動揺していない

すると次第に煙が晴れ、見えてくる二人の姿

「ピ、ピッコロさん、もしかして飲んじゃったんですか？」

まずネギ、こちらは問題ない

外傷も何もなく、下に位置するピッコロへ話しかけている

「さっきの飴玉か？確かに二つほど口にしてしまったが……ん？」

そしてピッコロ、こちらも外傷等はない

ただ自分が発している声の違和感に、今ようやく気付いた

「声が違う？おいネギ、どういうことか説明し……」

「ピ、ピッコロ殿！」

「ピッコロさん！」

先程のネギの説明をよく聞いてなかったピッコロは、自らの上に位置するネギへと尋ねる

けれど、横からの楓と悟飯の声にそれは遮られた

煙は完全に晴れ、二人の姿は完全に確認出来ている

それ故に、楓を含め一同は目を丸くしているのだ

「ど、どうした？お前らそんな顔して……」

「か、身体が！」

「身体？……！？」

悟飯に言われ、ピッコロは手で身体をペタペタと触る

直後、自身の身体に起きた異常事態を完全に把握した

「なっ、なっ、なっ……」

彼、ピッコロことマジュニア

この世に生を受けたのは、孫悟空がピッコロ大魔王を打ち破った直後のこと

故に『神と同化して元通り一つになった』というのを考慮に入れなければ現在十五歳

また彼が飲み込んでしまった飴玉、年齢詐称薬

年齢補正は、一粒あたりおよそ七歳前後

これ二粒を口にしたピッコロの身体年齢はちょうど

「何だこれはーーーーー!?」

卵から孵って間もない姿と化していた

記憶と、大半の戦闘力をそのまま残して

第１０１話　魔法道具大炸裂！？初めて目にした彼の姿　（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「まったく、前回は酷い目に遭ったな……で、今回のゲストは誰なんだ？」

クウネル
「はい、今回はこの三人」

千鶴
「あらエヴァンジェリンさん、随分お久しぶりね」

ブルマ母
「こんにちはー……あら、素敵な殿方」

クウネル
「クウネル・サンダースとお呼びください」

しずな
「読者のみなさん、こんにちは」

クウネル
「というわけで、那波千鶴さん、ブルマさんのお母さん、しずな先生です」

エヴァ

「またやり辛そうなゲストを……」

ブルマ母
「まあこの子、お人形さんみたいで可愛いわね」

エヴァ
「気安く頭を撫でるな！」

クウネル
「というわけでコーナーの進行を、今回の話ですが……」

エヴァ
「最近段々、迷走してる気がする」

クウネル
「……ピッコロさんとか、ですか？」

エヴァ
「そうだよ、何故にああいう展開になる？」

クウネル
「『尺が足りなかったので、文字数稼ぎでギャグ要因になってもらった』とのことです」

しずな
「まあ確かに、山火事部分が無いと文字数がかなり少なくなってたわね」

エヴァ
「苦情来ないといいんだけどな……特にグニティとかから」

クウネル
「感想で『あまりピッコロさんをネタにして欲しくない』って言ってましたもんね」

注・グニティさん、すみません（汗）

エヴァ
「けどまあ、『ピッコロが魔法を使う』という点は中々面白かったな」

クウネル
「これも初期段階から考えてたアイデアのようで、さらには悟飯君とかにも使わせようかとも考えたことがあったとか」

エヴァ
「けど流石に自重して、使えるのはピッコロだけになったと」

クウネル
「そうみたいです」

しずな
「他のキャラクターで、出来そうな人っていないのかしらね」

クウネル
「可能性的に言えばデンデくん、ポポさん、占いババさんとかじゃないですか？」

エヴァ
「あのババアは元々魔法使いだがな……って、まさか作者させる気

か！？」

クウネル
「今のところ未定です、ピッコロさんが魔法を今後の展開に生かすのかどうかも」

エヴァ
「了解……って、そういえばあの二人どうした？」

ブルマ母
「へー、そうだったの、私今まで全然知らなかったわ」

千鶴
「そうなんです、是非やってみてくださいね、ホホホホ」

エヴァ
「おいこら！何やってるんだお前ら！」

ブルマ母
「あ、エヴァンジェリンちゃーん。さっき千鶴さんが教えてくれたんだけど、風邪をひいたときはお尻に葱がいいんですって」

エヴァ
「何でここでそんな話をする！？しかもそっち！貴様これで二回目だろ！」

千鶴
「あら？そうだったかしら」

エヴァ

「そうだよ前科一犯！おばさん同士の井戸端会議か！」

千鶴
「……おばさん？」

クウネル
「あ、地雷踏みましたね」

しずな
「しかもどこから出したのかしらあの葱……」

エヴァ
「な、なんだよその手は……」

千鶴
「エヴァンジェリンさん、ちょっとあなた風邪気味じゃないかしら？」

エヴァ
「は？別に私はいたって健こ……」

むんずっ！

千鶴
「絶対風邪よ、だって顔色悪いじゃない」

エヴァ
「いや、それはお前が凄い剣幕で近づいて来……ってオい！」

千鶴

「さあさあ、早くしないと余計悪化しちゃうわ」

エヴァ
「どこへ連れてく気だ!?ていうかその葱は!?」

千鶴
「やあねぇ、さっきブルマさんのお母さんに話したことに決まってるじゃない」

エヴァ
「なっ!?……おいクウネル!こいつ何とかしろ!」

クウネル
「合掌、お悔やみ申し上げます」

エヴァ
「するな!それと口に出すな!」

しずな
「あとは私達に任せてね」

ブルマ母
「行ってらっしゃーい」

エヴァ
「お前ら二人も見送るな!しかもしずなはそんなキャラじゃなかっただろ!?」

千鶴
「じゃあ皆さん、あとはよろしく」

エヴァ
「離せーーーー！」

クウネル
「というわけで、次回予告です」

ブルマ母
「さて、次回のネギドラ！は……」

しずな
「魔法薬で子供の姿になってしまったピッコロさん」

クウネル
「それを見て木乃香さんが何か思いついたようです」

ブルマ母
「あと、後半では夕映ちゃんも登場するわよ」

しずな
「次回の投稿予定は来週の月曜日」

クウネル
「珍しくペースを上げたため反動が来たようです」

しずな
「大丈夫なのかしら……」

クウネル
「まあそういうわけですので、ご了承ください」

ブルマ母
「それじゃ、次回のネギドラ！も……」

クウネル＆しずな
「お楽しみに！」

エヴァ
「はあっ、はあっ、はあっ……助かった」

クウネル
「お帰りなさいエヴァンジェリン、葱刺されました？」

エヴァ
「すんでの所で逃げてきた……村上夏美とあの犬に同情するよ」
しずな
「実際にやると色々危険だそうなので、みんなは真似しないでくださいね」

第１０２話　子供ピッコロ捕獲作戦　なった記念にはいチーズ（前書き）

今回は完全なギャグ回です、ピッコロがブウ編並に壊れてます。
こういうのは前のあやかの時で懲りたと思ったのに……どうしてこうなった！？（二回目）
お目汚しすみません……
ではどうぞ

第１０２話　子供ピッコロ捕獲作戦　なった記念にはいチーズ

「ピ、ピッコロさんなんですか！？」

「……それ以外に誰がいる？」

「わー、やっぱり並べて見ると似とるなぁ」

場所は一気に変わり、上空にある神様の神殿

偶然に偶然が重なり、年齢詐称薬によって姿が変わってしまったピッコロ

一同は大いに驚いたが、その後木乃香がこう言った

『なあなあ、このピッコロさんみんなに見せに行かへん？』

これにはピッコロ、大いに抗う

こうして悟飯達に見られただけでも、彼自身としてかなりの羞恥ものクリリンやヤムチャ、ベジータ達に見られたら何を言われるか知れたものではない

また、ネギの生徒達も同義である

しかし木乃香は木乃香で、『誰かに見せへんと勿体ないやん』と猛反発

数十分に渡る協議の末、同じナメック星人のデンデならまだ許せるという結論に達した

これでもかなり嫌だったのには変わりないが

かくして一同は、一路神様の神殿へ

一度抱いてみたかった木乃香だが、ピッコロは頑なに断り自身の舞空術で

残りの面々もいつも通りに移動し、到着

こうして今に至るというわけだ

デンデも初めて見るこのピッコロ姿に驚いてる模様

ただし自身もナメック星人のため仲間の幼少期の姿を見たことがあり、ネギ達ほどではなかったようだが

ピッコロは現在、新たにマントを小さく作り直して装着中

まるで『ピッコロの子供』であるかのような容姿で、その場で不貞腐れていた

「おい、もういいだろ?さっさと元に戻る薬を寄越せ」

腕を組んだまま、ピッコロはネギらの方へと向き直る

さっき口にしてしまった青い飴玉とは違い、赤いのを食べれば元に戻る

それを既に知っていたピッコロは、早く戻りたいのだと一同に急かす

「えー、もう少しくらいええやん。どうせ数時間したら勝手に元戻るんやし」

「良くない！この身体だと色々違和感がありすぎる！」

しかし木乃香は赤飴玉を渡す気はないようで（出発前に木乃香が預かった）、笑顔のまま後ろ手に隠した

ピッコロは抗議するが、聞く耳持たず

身体が縮んだとはいえ、ある程度の戦闘力は残ったままのピッコロだ

本来なら多少乱暴して奪ってやりたいのだが、木乃香相手だとそれはタブー

下手に木乃香に怪我でもさせれば、刹那が何をしてくるか分からない

前に一度修行中に突き飛ばしてしまったことがあったのだが、その際の刹那大激怒

あの怒りの表情には思わず彼も気圧され、今でも印象に残っている

（それに普段の身体ならまだしもこの身体だ、下手をすると刹那に一太刀浴びせられかねん……くそっ、俺も甘くなっちまったもんだぜ）

「ほら、ポポさんももっと近くで見いひん？」

「やめろ木乃香！」

そんな風にピッコロが考えてるも露知らず、木乃香は遠巻きに見ていたミスターポポを手招き

ポポはゆっくりと歩を進め、ピッコロの目の前まで接近した

「これが、ピッコロの昔の姿……デンデの前の神様が、言ってたとおりの姿……」

「くそっ、あのジジイめ……やはり神殿（ここ）から見ていやがったか」

舌打ちするピッコロだが、ポポはそのまま話を続ける

「前の神様、『自分の小さい頃にどことなく似てる』言ってた……それに、今の神様にも似てる……タイプは違っても、やっぱり同じナメック星人」

「他のナメック星人もやっぱり、ピッコロさんやデンデ君と同じなん？」

「はい、子供とか若い人とかも、みんなピッコロさんやデンデ君に似てましたよ」

「そういえば悟飯殿は、クリリン殿らとナメック星に行ったことがあると申してたでござるな」

「そう、昔神様が乗ってきた宇宙船のことをポポが教えた。それで悟飯達ナメック星行った」

「なあなあ、ナメック星人ってピッコロさんみたいにみんな強いんか？」

「強いと言えば強いけど、今の僕達なら全員勝てちゃうかな」

ポポを言葉を皮切りに、一同の中でいつの間にかナメック星人関連の談議が始まった

ナメック星へ行ったことのある悟飯と、先代地球の神と長年暮らしてきたミスターポポ

木乃香達の問いに、二人は自らが知る限りのことを答えていく

「……おい」

ピッコロそっちのけで

「……おい」

「確か前のナメック星はフリーザに消されたんですよね？今はどうされてるんですか？」

「ドラゴンボールで別の星を見つけて暮らしてます、お父さんが一

回瞬間移動で行ったことがありますね」

刹那の問いに悟飯が

「ポポさん、先代の地球の神っていうのは……」

「そう、ピッコロと一年前に同化した神様。地球にドラゴンボール出来たのもその神様の代から」

ネギの問いにポポが答えた

「……おい！」

反応を見せない一同に向かってピッコロは声を荒げ

「ん？どないしたんピッコロさん？」

ようやく木乃香が気付き、振り返る

「だから早く薬を寄越せと何度も！」

「……やっぱりダメなん？」

「それも何度も言った！」

「うーん……けど勿体ないなぁ……」

木乃香は人差し指を下唇にあて、不満そうな顔

それに対しピッコロは、イライラを抑えつつ木乃香カの返答を待

った

しばし考えたのち、木乃香はようやく口を開く

「……ほな、最後に記念撮影しよ？」

「は？おい待……」

ピッコロが言い終わるより先に、木乃香はポポの方に向き直った

「ポポさーん、どんなんでもええさかいカメラあらへーん？」

「……ちょっと探してくる」

ポポはしばし考えたのち、神殿の中へと駆ける

「ネギくーん、せっちゃーん、誰でもええからピッコロさん抑えてー」

「こら木乃香！お前何考えて……」

「それならば、拙者が影分身で」

「おい楓！」

ポポが戻るまでの間、ピッコロが逃げるとも限らない

木乃香が笑顔を崩さず皆へ指示を飛ばすと、早速楓が動いた

影分身七体に自身を加えた八人体制で、ピッコロを逃がさぬよう

がっちと抑え込む

力は今のままでもピッコロが充分勝るが、体格的な面も考慮するとこれはかなり厄介

多少無理でもしなければ、脱出は難しい状態だった

「木乃香！今すぐ楓を止めろ！もしくはミスターポポ！」

「だってそうせんとピッコロさん逃げてまうやん？心配せんと、写真撮るだけやって」

「撮ったのをどうするつもりだ！」

ピッコロは木乃香へ怒鳴るのだが、木乃香は動じず笑顔のまま近づく

悲しきかな、木乃香は二週間の間でピッコロの怒号に完全に慣れていた

しかも彼女がこっちへ近づいてきたため、『無理をして脱出』が事実上不可能に

この至近距離で無理をすれば、間違いなく木乃香が巻き込まれる

「あったあった、昔先代の神様と写真撮った時のフィルムカメラ」

「何で神殿にそんな物があるんだ！」

「ナイスやポポさん、じゃあ早よ撮ってまお」

「わかった」

すると、ポポが年代物のカメラを手に持って神殿から姿を見せてきた

木乃香がサムズアップで応じると、ポポはこちらへ歩を進める

「悟飯！ネギ！コタロー！刹那！この際あやかでもいい！こいつら何とかしろ！」

「写真くらいいいじゃないですかピッコロさん、僕誰にも言いませんから」

「……じゃあ、悟飯君がそう言ってるので」

「同じく」

「お嬢様に逆らうわけには……」

「私では、楓さんを引き剥がすのは無理ですわ」

そして皆が、木乃香側についた

「ポポさん、それちゃんと動くん？」

「大丈夫、さっき少し操作してみたら使えた」

「よかった……コタロー君、影分身一体出してシャッター押してくれはる？」

「別にええで」

コタローが出した影分身は、ポポからカメラを受け取って操作法を簡単に説明される

その間ネギと刹那がさらに抑え込みに入り、ピッコロは完全に拘束された

「ほないくでー」

コタロー（影分身）が声を発すると、隣にいたポポも一同のもとへ

悟飯やあやか、デンデらもピッコロの周りに集まる

「ハイ、チー……」

「やめろおおおおおおっ！」

パシャッ！

ピッコロが咆哮する中、小さくシャッター音が彼らの耳に入った

そしてその頃

「成る程、円生樹の実ですか……アックマンさんも随分と無茶やったですね」

「いやいや、それ以上に古ちゃんが無茶してるって……」

「アックマンさん、死んでる人がまた死んだらどうなっちゃうんですか？」

「この世からもあの世からも完全に消滅するんだ、多分ドラゴンボール使っても無理だな」

こちらは占いババの館、地下闘技場の選手控え室

今日はアックマンがこちらに顔を出しているので、夕映達三人は早速会いに

昨日の古が行った地獄武者修行について、色々聞きたかったのだろう

アックマンは地獄であったことをそのまま、彼女達へと話していた

「だから幽霊の嬢ちゃん、お前さんももう一回死なないように気をつけろよ」

「わ、分かりました……」

さよはブルルと身体を震わせ、アックマンの言葉に頷く

すると、今度は朝倉が

「でさ、アックマンの予想としては古ちゃん出られそう？」

と、シャーペン片手に古の現状について尋ねてみる

大会選手枠のことや、各銀河の選手層等々

界王や閻魔とコンタクトがとれるアックマンを使い、朝倉はこの数日で色々と情報を収集していた

おそらく大会当日、他の面々に披露して解説なりするつもりなのだろう

といっても、その役目は殆ど夕映に取られそうな気がしないでもないが

「うーん……悟空とオリブーはしょうがねえにしても、残りの二枠ならまだ充分狙えると思うぜ。悟空から直接指導を受けてるし、新たな技も習得中だ。それと……」

「円生樹の実の効力、ですね？」

「おっと、台詞取られちまったか……そういや前に円生樹のことも話したな」

「はいです」

円生樹の実

古が昨日口にして生命の危機を回避した、地獄の木にのみ実る果実

本来は閻魔大王のみが口に出来る特別なものだ

普段は地獄の鬼のゴズとメズが、他の者が食べないよう見張っているとのこと

しかし過去に悟空に食べられたりと、ちゃんと警備が機能しているのかと聞かれればやや苦しい

まあ、今まで彼とアックマン以外には取られたことがないので、充分といえば充分か

「夕映っち、円生樹の実ってどんなのなの？」

「昔サイヤ人のターレスが用いた、神精樹の閻魔大王版とでも言いましょうか。要はパワー増強効果を持った果実です、あとアックマンの話を聞く限り体力回復効果もあったようですね」

「そういうことだ。言っておくが、俺はちゃんと二人から許可とったぜ」

死にかけの少女（古）を抱えながら、『死に掛けだから円生樹の実をくれないか』なんて言われたら、流石にゴズとメズも見殺しには出来ない

ハハハと笑うアックマンに、朝倉は苦笑する

「……つまり、古ちゃんはその実を食べたから多少なりともパワーアップしたと」

「ああ、といっても他のあの世の武道家達も充分強敵だ……最終的には結局、今後の嬢ちゃん次第だろうな」

「うーん、やっぱりそうなっちゃうか……あ、そういえば夕映っち」

「何です？」

「チケットの残り六枚だけどさ、誰にするか決めた？」

朝倉は昨日のことを思い出し、夕映に顔を向けて尋ねた

占いババから与えられた、あの世一武道会の客席券計九枚

夕映と朝倉とさよを除き、残りは六枚

『知り合いと行け』と占いババに言われたのだが、ことはそう単純ではない

どう考えても六枚では足りないのだ

なのである程度今の内に絞らねばならず、朝倉とさよはそれを夕映に委ねていた

「それについては昨晩いろいろ考えたんですが、やはり私の一存で決めるというのは如何なものかと思いまして……」

「じゃあどうする？」

「とりあえず知り合い全員にこの事を先に話して、皆で話し合って決めるのが一番いいと思うのです」

どうですか？と夕映は朝倉に訊き返す

「……私はそれでいいと思うよ。さよちゃんは？」

「はい、私もそう思います」

それを聞き、夕映はホッと息を吐く

続いて脇に置いていた箒を手に取り、部屋の外へ

「よかった、反対されたらどうしようかと思ってたです……なら、善は急げですね」

「あれ、早速行くの？」

「占いババさんからはもう許可を取りました、というわけでカメハウスまで行ってきます」

夕方までには戻りますから、とこう一言

夕映は部屋から出て、バタンと扉を閉めた

「えっと、カメハウスの方向はこっちでしたね……」

外へ出ると箒に乗り、そのまま一路カメハウスへ

「その後はパオズ山、次に西の都……普通に地球一周しちゃうですね」

帰りには疲れるであろうことを覚悟し、夕映は高速で飛ばした

第１０２話　子供ピッコロ捕獲作戦　なった記念にはいチーズ（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、今回からゲストが三週目に突入します」

エヴァ
「ストック的に限界が来たか」

クウネル
「そういうことです、『未登場、もしくは一回だけ』の方のリクエストが殆ど無くなってしまいました」

エヴァ
「でも既にブルマやベジータは三回出たよな？」

クウネル
「まあそれは突っ込まない方向で、というわけで今回のゲストはこのお二人」

超
「うむうむ、またまた出られて喜ばしい限りネ」

古
「私も超と競演できて嬉しいアル！」

クウネル
「中華コンビということで、超鈴音さんと古菲さんです」

エヴァ

「お前は１００話目ので出たばっかりだろ……」

古
「丁度超も三回目になるから呼ばれたアル」

超
「ナイスなタイミングだたヨ、私も何気に最近出演頻度多いガ」

クウネル
「ではコーナーの進行を、今回の話ですが……」

エヴァ
「ノリが此処とあんまり変わってなかった気がする」

クウネル
「……あ、やっぱりですか？」

エヴァ
「そうだよ」

超
「確かに、ピッコロさんが完全にネタキャラ化されてたヨ。あと木乃香さん少し黒かたシ」

古
「作者疲れてるアルのかな？」

エヴァ
「『これとは別に新連載書いてみよう』とか酔狂なこと考え始めたくらいだし、有り得るな……あと性懲りもなくアックマンか」

クウネル
「夕映さんの話を書くと基本セットでついてきてますね」

超
「そういえば古、円生樹の実はどんな味だたネ？」

古
「うーん、フラフラだたからあまり記憶が……けど、抵抗無く口にして飲み込めたアル」

超
「とりあえず、普通に食べられる味いうことカ……是非、一度私の手で調理してみたいヨ」

エヴァ
「やめとけ、闇魔が何言うかわからんぞ」

クウネル
「では続きまして、次回予告です」

古
「さて、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「一日明けて、今度は四日目……って午後はどうした！？」

クウネル
「夕映さんが皆さんに言って回るだけなので省略、その話を聞いた後の皆さんの様子を書くみたいです」

古
「行ける人数はあと六人……クリリンには是非、というか絶対来て欲しいアルよ！」

超
「その前に、古は大会出場権を手に入れないとネ」

古
「そ、そうだたアルな……これからもさらに修行するアル！」

クウネル
「ちなみに補足ですが、あの世一武道会の開催は上記の書き方だと七日目ということになります」

エヴァ
「そして、ドラゴンボールを集めて回るのはその翌日。ということか」

クウネル
「はい、読者の皆さま及び作者が混乱しないようここに書き残しておきます」

超
「作者も混乱しかけてたのカ……」

エヴァ
「ん？そうするとお前、かなり時間が無いんじゃないか？」

クウネル

「あと丸三日ですね」

古
「ホ、ホントアル……済まぬ、私先に帰るアル！」

エヴァ
「あ、こら！勝手に帰るな！」

古
「もし代表落ちたら、クリリンに合わせる顔が無くなてしまうアルー！」

エヴァ
「……ホントに帰ったよあのバカイエロー」

超
「まあそういうわけで、次回の投稿予定は来週の水曜日」

クウネル
「感想等も待ってますね」

エヴァ
「では読者の諸君、次回のネギドラ！も……」

クウネル&超
「お楽しみに！」

エヴァ
「第一あの作者、ユーザーページの自己紹介で『他の凄腕作者さん達と違って同時連載は無理ですが』とか書いてるんだぞ？絶対無謀すぎる」

クウネル
「けどこの小説の執筆と並行して、書き貯めを始めたらしいです」

超
「もうする気満々なのカ？」

注・ご意見をお聞かせください、ちなみにネギま小説です

第１０３話　行くか行かぬかどうするか　一夜明けた仲間達（前書き）

朝投稿です、今回短めですがご了承ください。ホントすいません。
ではどうぞ！

第１０３話　行くか行かぬかどうするか　一夜明けた仲間達

「あの世一武道会、か……」

早朝、海上にポツンと一つある小さな島

亀仙人らの家『カメハウス』が建つその島の砂浜で、一人クリリンは立っていた

古がやって来てから毎日の習慣となった、中国拳法の型の稽古

彼女と離れて以降も、これは一人で毎日継続

そうして朝食前に軽く汗を流し、今に至る

「古に、会えるってことなんだよな……それに、悟空にも」

昨日昼過ぎ頃、ここカメハウスに夕映が突然訪問

この時クリリンや亀仙人、五月らは数日後開催されるあの世一武道会の存在を初めて耳にした

占いババの協力で自分達も観に行くことが出来ること

そして人数に限りがあり、夕映達を除いて残りは六人だけであるということも

「知り合い全員に聞いて回ってみる、ってあいつ言ってたけど……」

夕映曰く、近い内に行きたい者全員を集めて話し合いで残り六人を決めたいとのこと

無論、クリリンは行きたいと即答した

また、悟空との再会を切に願う亀仙人も同様

五月やウミガメらは、二人のことを思ってか辞退

人数は少しでも少ないほうが、話し合いにしろ何にしろ行ける確率は上がる

「他のみんなは、何て言ったんだろうな……」

自然と、西の都やパオズ山のある大陸の方へとクリリンは顔を向けた

「あと六人、か……てことは私達全員が行くのは無理なわけよね」

「ハルナ、それ昨日も言ったよ」

「一応父さんと母さん除いて、全員『行きたい』とは言っておいたけど……」

それから数時間ほど後になり、西の都のカプセルコーポレーションリビングに集まってハルナやのどか、ブルマにトランクスが会話を交わしていた

夕映が説明した後訊いた際、一同全員が『行きたい』と回答

特にベジータが顕著で、『あの世でカカロットと決着をつけてやる』と躍起になっていたのが思い出される

しかし仮にするとしても、必然的にそれは大会の前後

前にそんな大勝負をするのは論外

だが後は後で大会後の疲労が必然的に残るため、良いとも言いにくい

なので『それは難しいのでは……』と夕映が言葉を漏らしたのだが、ベジータはてんで聞いちゃいなかった

「ベジータさんの前で言ったのはやっぱり失敗じゃなかった？」

「けどベジータさん、悟空さんに会いたがってたし……」

「ベジータのことだわ、話し合いの場に暴力を持ち込んできてもお

かしくないわね」

「というか絶対しますね、その時は母さんお願いします」

「トランクスも頼むわよ？力的な意味であいつ抑えられるのはあんたと悟飯君くらいなんだから」

どうやらベジータが居ぬ間に、彼に対することで話し合ってる模様

因みにベジータは重力室で、葉加瀬とブリーフが作ったトレーニングロボを使って修行中

「けど、絶対倍率高いよね……まず私達だけで八人だし……」

のどかの言う八人とは、この場にいる四人

それと葉加瀬、ベジータ

最後に、夕映が訪れた際ちょうど遊びに来てたヤムチャとプーアルを合わせた八人のことを指す

「ネギ先生やクリリンさんも、行きたいって言ったと思うし」

「だよねー、それと他の皆が大体ＯＫしたら……普通に三倍以上いくんじゃない？」

「まあ、基本話し合いで決めるみたいだけどね」

「でもそうしたら、ネギ君とかは普通に通るだろうしもっと狭くなるわよ？」

「「「うーーん……」」」

四人の話し合いはもう暫く続いた

「何？あの世一武道会だと？」

「はい、あの世で行われる武道大会です。お父さんや古菲さんが出るそうですよ、あと龍宮さんも」

「龍宮も！？」

「興味深いでござるな……」

それとほぼ同時刻で、ピッコロ達三人が修行に利用している山奥

そこには悟飯が訪れ、あの世一武道会のことを彼らへと話していた

昨日あちこち知り合いのいる場所を回った夕映だが、ピッコロが修行している山奥の場所までは知らず

仕方なくパオズ山で悟飯達に話した際、後でピッコロ達にも話しておくよう要請

そして翌日になった今日、こうして悟飯はやって来た

「ウチら全員見に行けるん？」

「いえ、どうもチケットに限りがあるらしくて……夕映さん達のを除いて残り六枚だと」

「そうなんかー、ほならちょっと難しいなー」

頬に手を添え、笑みを残したまま木乃香は眉を八の字に変える

「そんで、つまり夕映は知り合い全員に聞いて回ってるっちゅーことやな？」

「そうみたいです」

「どうやって残り六人を決めるでござるか？」

「『行きたい人みんなを集めて、話し合いで公平に決めようと思うです』って」

「なんや夕映らしいなー」

木乃香はさらに笑うと、顔を上向きにしピッコロと目を合わせる

「ピッコロさんは行ってみたいん？」

「行けるものなら行ってみたいな、楓が言うとおりやはり興味深い」

「そういうことで、拙者もピッコロ殿に同じくでござる」

「私は、その、お嬢様と一緒に行けるのであれば……」

「それじゃあ、四人とも『行きたい』でいいですか？」

最後に悟飯が確認をとると

「ええよー」

代表して木乃香が答える

彼女もその大会に興味深々の様子

「分かりました、それじゃあ失礼します」

「もう帰るでござるか？」

「夕映さんへこのことを伝えに、占いババさんの館まで」

「その話し合いとやらはいつ頃になるんだ？」

「大会が三日後ですから、明日か明後日中にはするそうです」

悟飯は行きと同じく、舞空術で浮上

占いババの館へと一直線に飛んで行った

「へー、古ちゃんがあの世でも武道大会にねえ……」

「そして悟空も、か……何としても観ておきたいところだな」

また、他の知り合いへ伝令を頼まれたのは何も悟飯だけではなく

「餃子さんとまき絵さんはどうですか？」

「天さんと一緒になれるなら行く」

「あの世ってことは、やっぱりお化けとかいるのかな？」

天津飯達へは、ネギがその役目を担っていた

先日アスナ達が泊まりに来た際、場所は教えてもらい把握済み

「夕映さん曰く『足はちゃんとあるので、お化けと言うのは少々違う気がする』だそうですよ。一応武道大会ですし」

「うーん……でもちょっと怖いなぁ、くーふぇに会いといえば会いたいんだけど」

「でも結構狭き門ッスからね、残りの枠はたった六枠でさあ」

「他のみんなも行きたいって？」

「らしいぜ」

カモがネギの肩にまで登る

「けどまあ、行きたいって言わなきゃ何も始まらねえッスしね。四人ともどうッスか？」

「俺は行ってみたい。悟空もだが、界王様にも会って色々話をしたい」

「さっきも言ったけど、天さんと一緒なら行く」

「面白そうだし、私も行きたい」

「私は……うーん……ごめんパス、異星人って聞いてなんか怖い想像しちゃった」

四人の返事を聞き、ふんふんとカモが頷く

「了解、四人中三人ッスね。じゃあ兄貴、夕映嬢ちゃんトコ行って報告に行きやしょう」

「うん、それじゃあ皆さん、修行中のところすみませんでした」

「いや、別にいい。それより、大会の情報感謝する」

「いえいえ、それじゃあ詳しいことが決まったらまた来ます！」

悟飯と同じく、ネギも一路占いババの館へ

飛んでいく様子を、天津飯達は姿が見えなくなるまで見送った

「あ、三人とも来たですね」

「「お待たせしましたー」」

「ふー、探すの疲れたで……」

それから数十分し、悟飯達は占いババの館へ到着

飛んできた悟飯にネギ、そしてコタローを夕映が出迎えた

「コタロー君、千雨さん達に会えた？」

「会えたっちゃ会えたけど、中入るまでが大変やったわ……下手に警備の奴らぶっ飛ばすわけにもいかへんし」

疲れた様子でコタローは息を吐く

『サタンのメイドをしている』と大会予選中に茶々丸から聞いていたネギ

そのため悟飯に話すと、おそらくサタンシティに二人は居るのだろうと推測

コタローに地図を渡し、彼にはそこへ行ってもらっていた

「ちょっと遠出になるさかい、面白そう思って引き受けたけど……これやったらピッコロさんとこ行った方がマシやったで。というかむしろ、ネギなら屋敷の外でカードの念話使えばそれで事足りとったやん」

「それは、まあ……」

余程二人に会うのに骨が折れたのか、コタローはジト目でネギを睨む

ネギも申し訳なさそうに、額にいくらか冷や汗が浮かぶ

「……まあそれはいいとして、皆さんの返事はどうだったですか？」

それを見てか、夕映がとっさに話題を切り換えた

「あ、えっと……アスナさん達は四人中三人、まき絵さんだけがパスだと」

「ピッコロさん達は、四人とも全員」

「こっちは二人ともパスやて。茶々丸姉ちゃんは仕事大事言うて、千雨姉ちゃんは『そんなさらに非常識な所行きたくない』って断ってきたわ」

「了解しました、すると全員合わせて……二十五人ですね」

「その中で六人、ですか……」

「それでその話し合いですが、明後日の午前中にはしようかと思ってるです。ちょうど大会前日ですし、午後は各々が準備に使えます」

夕映は、あらかじめ考えてあった案を三人に提案

三人は文句一つなく頷くが、直後コタローが尋ねる

「じゃあ、場所はどないすんや？」

「ブルマさんのお宅の一室をお借りします。既に昨日、尋ねた時にブルマさんにお願いをして了承してもらえましたです」

これに夕映は淡々と答えた

また西の都は皆が点在する場所の中間にあるため、集まるのには色々と都合がよい

これについても、三人は納得

「ではネギ先生達には、これについての報告をお願いするです。私

もカメハウスとカプセルコーポレーションに今から向かいます」

「はい」

「分かりました」

「茶々丸姉ちゃん達はどっちも行かんさかい、俺は直で帰宅か……」

それでは、の夕映の一言で四人は四散

各々、仲間の場所へと飛んで行った

そして、一日空けて五日目

（……ついに、この時が来たか）

ある一匹の生物が動き出そうとしていた

第１０３話　行くか行かぬかどうするか　一夜明けた仲間達（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「今回のゲストは誰なんだ？」

クウネル
「はい、今回のゲストはこの三人」

バーダック
「よお、また来てやったぜ」

セリパ
「ここか、バーダックが言ってたのは……」

トーマ
「初めて見たぜ……」

クウネル
「悟空さんの御父君バーダックさんと、そのお仲間さん達です」

エヴァ
「この前来たリクエストのだな」

クウネル
「はい、ちなみに『他にも仲間いたんじゃね？』と思った方はスルーでお願いします」

エヴァ
「要するに、書き切れないと思って事前に切ったわけか」

クウネル
「まあそういうことです」

バーダック
「トテッポとパンブーキンも連れてきてやりたかったぜ……」

クウネル
「どうかご勘弁願います」

エヴァ
「かなりマイナーな部類に入るからな……ぶっちゃけ作者も、あのテレビスペシャル観たのは一度きりらしい」

クウネル
「それではコーナーの進行を、今回の話ですが……」

エヴァ
「短い」

クウネル
「……久しぶりに目標ボーダーの文字数割りましたからね」

バーダック
「あと話が単調すぎた気がするぞ」

トーマ

「大会に行きたいか行きたくないかを延々書いただけだしな」

セリパ
「この話、あってもなくても一緒だったんじゃないか？」

クウネル
「でもまあ、次の話への繋ぎの役目も果たしましたし」

エヴァ
「それだけじゃん」

クウネル
「……」

エヴァ
「『もしかしたら新連載するかもしれないので準備』と称して、これと並行して書き貯めを始める始末だし……最近こっちが疎かになってる気がするけどな」

バーダック
「そっち書いてなかったら、これも昨日か一昨日くらいには出来ただろうに」

クウネル
「……作者も色々大変なんですよ」

トーマ
「いや、勝手に自分で仕事増やして追い込んでるだけだろ」

クウネル

「……では続きまして、次回予告です」

エヴァ
「おい、話を流すな」

クウネル
「さて、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「ったく……本編にもあったように、四日目は終了して五日目だ。最近時間の経過が早いな」

クウネル
「そこは突っ込まないでください……場所はブルマさん宅の巨大庭園」

バーダック
「のどかとかいうガキが、そこでとある不思議な生物と出会うみたいだ」

セリパ
「さらにはダチのハルナも巻き込んで一騒動」

トーマ
「……という内容らしい」

クウネル
「次回の投稿予定は来週の月曜日です」

エヴァ

「では、次回のネギドラ！も……」

クウネル&バーダック&セリパ&トーマ
「お楽しみに！」

エヴァ
「それで、その書き貯めとやらの状況はどうなってるんだ？」

クウネル
「結構頑張ってます」

バーダック
「いや、具体的な数字を出せよ」

クウネル
「……現在、プロローグから第四話まで書き終えました。文字数にすると合計一万数千字ほど」

エヴァ
「はあっ！？」

セリパ
「頑張りすぎだろ……」

第１０４話　参上！アグレッシブ宇宙蛙　対面する少女二人（前書き）

今回はついに、あのキャラが登場です。『いつになったら書けるんだよ（汗）』と、このシリーズ書いててずっと思ってただけ筆がガンガン進みました。

ではどうぞ！

第１０４話　参上！アグレッシブ宇宙蛙　対面する少女二人

「ニャー」

「ミャー」

「ふふ……よしよし」

西の都、カプセルコーポレーション

ブルマの家でもあるそこには、自然豊かな巨大庭園がある

この世界の地球では、五大都市の一つとして数えられる西の都だ

そんな大都会にあるそれは、より一層存在感を際立たせる

「ニャー」

「あ、表紙引っ掻いちゃダメだよ？」

カプセルコーポレーションの立派な私有地でもあるその中には、

現在一人の少女が猫達と戯れていた

猫達は全てここの家主、ブリーフ博士によって飼われている

故に遊び場は基本ここになることが多く、そこに少女、宮崎のどかは遊びに来ていたのだ

ベンチに座って膝に一匹黒猫を乗せ、その背を優しく撫でる

脇には読書用に一冊の本があり、それに別の白い猫が乗ったので思わず呼び掛けた

「ニャー」

「……あなたも撫でてもらいたいの？」

「ニャー」

「じゃあはい、こっち来てー」

猫の言葉が分かるわけではないが、大方白猫の思うところを察したのどか

膝の黒猫をゆっくりと降ろし、白猫の方を抱え上げてそっと乗せる

「ほーら、気持ちいい？」

「ニャー」

背を撫でてながら声をかけると、白猫は嬉しそうに鳴き声をあげた

「……もうこんな生活も、あと数日しかないのかー」

猫の鳴き声に対し柔らかい表情でほほ笑むと、続いて残念そうな顔で空を見上げる

正確に言えば今日と明日、あの世一武道会のある明後日

それと最後に、ドラゴンボールを収集する三日後を残すのみ

「勿論元の世界には帰りたいけど……ブルマさん達とも、お別れなんだよね……」

見ず知らずの自分やハルナ、葉加瀬を助け今も住まわせてくれている

日数としても、もうじき二十日

これだけ永く共に生活し、ブルマらを『家族』と同じように思う彼女が既にあった

「また会える時が来たらいいな……でも……」

「ミャー」

「ニャー」

「……ごめんね猫ちゃん、こんな辛気臭い話しちゃって」

顔を伏せるのどかだったが、その時目に猫達の姿が入る

無垢なその顔でミャーニャーと鳴かれ、のどかの顔の陰りが僅かながら消えた

「のどかー、やっぱりここに居たのね」

「あ、ハルナ」

すると後ろから彼女を呼ぶ声

振り返ると、いたのはこちらへ歩いてくる親友早乙女ハルナ

真後ろにまで来て足を止め、少し屈んでのどかの肩に顔を寄せる

「どうしたの、ちょっと表情暗いわよ？……もしかして、ブルマさん達とのお別れのこととか考えてた？」

「うん……何でわかったの？」

「何年あんたの親友やってると思ってんのよ」

さも当然のようにハルナは答え、フフンと笑ってみせる

「……ハルナは、お別れ悲しいなーとか思わないの？」

「そりゃ私だって思うわよ……けどね」

のどかの正面に回り、ハルナは芝生（ベジータの手によって修復済み）の上に座り込む

「今の内からそんな顔見せてたら、ブルマさん達はどう思うかなー？」

「！」

「ブルマさん達だって私達と同じなのよ……考えちゃうのは仕方な

いかもだけど、そうやって顔に出すのはやめときなって」

「……うん」

「『あと三日しか』じゃなくて、『あと三日も』あると思えばいいのよ。楽しむだけ楽しも？」

「そうだね……ありがとハルナ」

顔の陰りは完全に消え、のどかは笑みをハルナに向けながらベンチから立ち上がる

そのまま、ハルナの隣に腰を下ろした

「隣……いいよね？」

「勿論。あああ、日射しが気持ちいい……」

ハルナはグッと伸びをすると、バタンと身を倒して芝生の上に背を預ける

それに釣られ、のどかも同じく

「……ハルナ、絶対またここに来ようね」

「……ええ」

顔を横にし、互いに親友の顔を見て笑う両者

再び顔を天に上げ、庭園の透明屋根越しに見える青空を見……

ピョン

「ゲロゲロ」

「……」

……ようとしたところで、のどかの視界が突如青緑に染まる

「ん？どうしたののど……げ」

鳴き声がしたのでハルナが横を見ると、のどかの顔の上には一匹のカエル

のどかの鼻の上あたりに飛び乗り、覗き込むようにしてのどかと目を合わせている

しかも体色は上記の通り青緑、そのうえ触覚つきという異色さである

「……ひゃあああああああっ！」

嫌いなもの：カエル

大のカエル嫌いの楓は、このように答えたことがある

だが『嫌いなもの』にカエルと答えない者は皆、カエルが顔に直接乗ってきても平気なのか

答えは当然否

のどかは叫び声を上げ、驚きのあまりそのまま固まって動けなくなってしまった

「と、取ってハルナーー！」

「え゛？」

親友に救助を求めるが、そのハルナも戸惑いを見せる

カエルがのどかと自身、それぞれに対し交互にギョロリと目を向けてくる

『取って』とはつまり『顔の上のカエルを掴み取ってどっかやって』の意であり、求められているのはカエルとの直接の接触

のどかよりは肝が据わったハルナも、身体を起こしてして近づくものの一時その手には躊躇いが見て取れた

「ゲロゲロゲロ、ゲロ」

「は、早くーーー！」

「りょ、了解！そりゃあ！」

だが再び親友の叫びを聞き、ついに腹を括って行動

極力触れないように、払うようにして左の手甲で裏拳を飛ばす

カエルをのどかから退かすには、これで充分

「ゲ、ゲロ！？ゲロロ！」

「え！？」

ではなかった

ハルナの攻撃を目視で確認するや否や、カエルは跳び上がってそれを避ける

ペチャ

「ゲロゲロ」

「う、うおおおおおっ！？」

着地位置は、突然の跳躍のために動きを途中で止めていたハルナの左手

湿っぽい感触が伝わり、ハルナは奇声をあげた

同時にブンブンと左手を振り、カエルを振り落とそうとするが

ピョン

「ゲロゲーロ」

ペチャ

「ぬわあああああっ！？」

それよりも早く、カエルはまたも跳び上がって場所を移動

続いてハルナの顔面にへばり付き、更なる大奇声が響き渡ったのだ

「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ……」

「ううう……」

「ゲ、ゲロゲロゲロ……」

そして現在ハルナとカエルは、一定の距離を空けて互いを見据え膠着状態

のどかはハルナの後ろに隠れ、アーティファクトの『いどのえ日記』を手に

ハルナはハルナで、同じく自身のアーティファクト『落書帝国（インペリウム・グラフィケース）』を構えて臨戦態勢

ただし、あくまでアーティファクトは『打撃武器』としての使用

目的で出したということをここに明記しておく

故に両者共、アーティファクトは開かずに閉じたまま持っている

図書館探検部が本を打撃武器として使用するというのも、何だかアレな話なわけだが

まあ仲間の夕映もやったことがあるし、とりあえず問題は無かろう（？）

「く、来るなら来なさい！次跳んできたらこいつで叩き落としてやるわよ！」

ハルナがアーティファクトを振り上げると、カエルは少しながら委縮

彼女らから視線を外さぬまま、じりじりと僅かに後退する

それを見て、しめたとばかりにハルナはカエルへと迫る

「ほらほら、叩かれたくなかったらどっか行きなさい！」

「ゲ、ゲロゲロッ！」

カエルより十数センチ程先で、ブンブンとアーティファクトを振って見せた

これにはカエルも顔に恐怖の色を表し、さらに後退

だがハルナから一定の距離は保ったままで、完全に逃げようとは

していない

「ああもう、どっか行きなさいってば！」

しつこいなと悪態をつき、ハルナはさらに振りを強める

「こちとら、顔にベチャッて貼り付けれて最悪な気分なのよ！いい加減にしないとホントに……って、のどか？」

と、そこでのどかがハルナの腕を掴んで止めた

「ちょっと待ってハルナ……カエルさん見てみて」

「ん？」

のどかに言われ、少し冷静になって目の前のカエルを改めて見るハルナ

「ゲコゲコッ、ゲーロゲロゲロロ！」

見ればカエルは、前足を正面に突き出して『待った』のジェスチャー

「ゲコゲコゲコッ！」

さらにその後、それを地面に付けて頭を伏せ

「……土下座？」

土下座までしてみせたのだ

「ほら、あんなに謝ってる……きっともうカエルさんも反省してるんだよ、許してあげよ？」

「そ、そう？」

人間染みたその動きに不信感を覚えながらも、ハルナはのどかの言葉に耳を傾ける

「きっとそうだよ、だから……ね？」

「まあ、のどかがそこまで言うんだったら……去れ〈アベアット〉」

ここまで言う親友の言葉を無下にするほど、ハルナも悪ではない

手を止めてアーティファクトを仕舞い、踵を返した

「……じゃあのどか、とりあえず顔洗いに行こ」

「う、うん……カエルさん、次からはこんなことしちゃ駄目だよ？」

「ゲッ、ゲコゲコゲコ！」

まだ湿っぽい感覚が残っているのか、ハルナらはすぐさまここを跡にしようとする

が、カエルはそれを許さなかった

「ゲロ！」

「な、何よ？」

二人が自分から離れようとするのが分かると、ピョンピョンと飛び跳ねて移動

庭園の出口へ向かう二人の前方へ回り込む

二人はやむなく足を止め、このカエルの行動にハルナは眉をひそめた

「まだ何か用でもあるっていうの？」

「ゲコ！ゲコゲコゲコ！」

「……私？」

ハルナが問うとカエルは指差し、その先にはのどか

のどかが自分の顔を指差して確認を取ると

「ゲロッゲロゲーロ！」

カエルは首を振り、『もう少し下だ』というジェスチャーを示す

その通りに、のどかが指を下方へ下げると

「……いどのえ日記？」

そのまま、まだ仕舞わず手に持ったままである自身のアーティファクトに辿り着いた

「ゲコゲコッ！」

これにはカエルも、うんうんと大きく頷く

「（前にこれを使って、猫ちゃん達とお話してるのを見てたのかな？）えっと、つまり……カエルさんは私達に何か伝えたいことがあるの？今やってるジェスチャーじゃ伝えきれないような」

「ゲコゲコゲコゲコッ！」

より大きく頷く

「だからさっきのどかに飛び付いたんだ……にしてもこのカエル凄いわね、人語を完全に理解してるし」

「うーん、困ったな……あのねカエルさん」

のどかはいどのえ日記を抱えたまま、カエルに近づいてしゃがみ込む

カエルも飛び掛かるような真似をする気はなく、それをのどかも何となく分かっていた

「これを使ってお話するには、カエルさんの名前が分からないと駄目なの」

「ゲロロ？」

「けどカエルさんは喋れないから、私達に名前を教えられないでし

よ？だから……ごめ」

「ゲココゲココ！ゲッコゲコゲコ！」

「……ん？」

言い終わる前に、カエルは再び二人に対しジェスチャー

前足の片方を正面に突き出し、小さくそれを前後させる

今度はどうも、『ここで少し待っていろ』と伝えているようだ

直後、カエルは近くの茂みにまで移動

そこへ入って数秒すると今度は

「ゲロゲロッ！」

一本の木の枝を前足二本で抱え、二人の下へ帰ってきた

「……木の枝？」

「まさかとは思うけど……」

ハルナがある一つの予想を思い浮かべると

「ゲコッ、ゲロロゲロ……」

「うわっ、ホントにやってるし」

「カエルさん凄い……」

それをまんまカエルは実行した

芝生が生えていない土の部分に枝を突き立て、引く

ガリガリと必死に地面を削り、時間を掛けて次々と文字を書き込んでいった

「こいつホントにカエルなの？えっと……」

ポテンシャルの高さに舌を巻きながらも、ハルナとのどかは書かれた文字を確認

「G……I……N……」

「Y、U……五つ合わせてＧＩＮＹＵだから……ギニュー？」

「ゲコッ！」

「カエルさんの名前はギニューっていうの？」

「ゲコオッ！」

カエル、もといギニュー

のどかに尋ねられた元特戦隊隊長の彼は、大声で鳴き返した

第１０４話　参上！アグレッシブ宇宙蛙　対面する少女二人（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「今回のゲストはどうなってるのだ？」

クウネル
「はい、今回はこのお二人」

最長老
「どうも読者の皆さん、お初にお目に掛かります」

ネイル
「同じく」

クウネル
「ナメック星の最長老さんと、ネイルさんです」

エヴァ
「最近来たリクエストだな、あと二人とも初登場か」

クウネル
「はい、現在最長老様は天寿を全うされて天国へ、ネイルさんはピッコロさんと同化されていらっしゃいます」

エヴァ
「流石ご都合主義空間といったところか……」

ネイル
「そういえば一時、私の本編登場が予定されてたことがあったらしい」

クウネル
「あー、はいはい」

エヴァ
「何!?」

クウネル
「ピッコロさんが年齢詐称薬を飲む話があったでしょう?あの時、『子供の頃のピッコロは同化前なのだから、小さくなった彼とは別にネイルと先代の神が現れてもいいんじゃね?』と執筆直前ギリギリまで考えてたそうでして」

エヴァ
「そこら辺はどうなるか微妙なところだしな……で、何で中止になったんだよ?」

クウネル
「『あの二人まで出すと話がすごくややこしくなるし、二、三話普通に喰っちゃいそうだから自重した』とのことです」

注・実際どうなるんでしょうね?

最長老
「しかし残念じゃったの、ネイル」

ネイル
「いえ、最長老様を差し置いて私一人だけが目立つというわけには参りません」

クウネル
「ではコーナーの進行を、今回の話ですが……」

エヴァ
「前回よりはとりあえず、グダグダ感が少々消えたようだな」

クウネル
「のようですね、あくまで我々の主観になりますが」

最長老
「それにしても、フリーザの手下のあやつが登場するとは……」

クウネル
「大分前になりますが、作者が活動報告内で書いたバトンの返信で一応フラグは立ててありました」

ネイル
「本当にようやくだったな」

エヴァ
「丁度五カ月か……あと、ギニュー何気に凄いな」

クウネル
「元が人ですからね、数年の間で結構訓練したみたいです」

注・そういうことにしないと、この話が成立しないので（汗）

エヴァ
「しかし顔面にカエルがペチャリか……うっ、考えただけで気持ち悪くなってきた」

クウネル
「ちなみに作者は幼少期、顔面にゴキブリが張り付いてきたという経歴を持ってます」

エヴァ
「そんなことは話さんでいい！」

クウネル
「では続きまして、次回予告です」

ネイル
「最長老様、どうぞ」

最長老
「うむ……さて、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「この話の続き、カエルギニューのストーリーがさらに展開されるぞ」

クウネル
「いどのえ日記を使って会話する三人、果たしてギニューさんの目的とは？」

ネイル
「そして娘達二人がどう動くか、そこが見所のようだな」

最長老
「次回の更新予定は、今週の金曜日」

エヴァ
「感想やゲストリク、あと第１０２話等で触れていた『新連載をやってみるかどうか』についての意見とかも募集中だ」

クウネル
「ではでは、次回のネギドラ！も……」

エヴァ＆最長老＆ネイル
「お楽しみに！」

エヴァ
「しかしアレだな……」

クウネル
「どうしたんですか？」

エヴァ
「こいつの声を聞くと何か苛々してくる」

最長老
「……はて？私が何かしましたかな？」

ネイル
「おい娘、最長老様に何という口を効くんだ！」

エヴァ
「いや、だからこいつ自身じゃなくて声がイラつくんだよ」

クウネル
「伝わらなかった方、すいません」

注・私は田中さんより、滝口さんの占いババの声の方が断然好きです

第１０５話　カエルギニューは何を思う？発動いどのえ日記！（前書き）

ＧＷボケみたいです、何をするにもダルくてダルくて……早く切り替えて執筆に集中しなければ（焦）

では、どうぞ！

第１０５話　カエルギニューは何を思う？発動いどのえ日記！

「えっと、ギニューさん……だよね？私達に伝えたいことっていうのは何？」

「ゲコゲコッ」

のどかはアーティファクト『いどのえ日記』のページを開き、カエルさん改めギニューへと問いかけた

するとページから光が溢れ、絵と文字が浮かび上がっていく

（やっぱりギニューさんで合ってたんだ……えっと、なになに……）

“いかにも、私の名はギニュー。とある事情でカエルの身体となってしまった、元は人型の異星人だ”

ページを見ると絵の部分には、かしこまった表情のギニューの顔が正面から描かれている（姿はカエルのまま）

“そこでお願いだ、地球に私の本来の肉体がある、この身体の持ち主の魂が入った肉体がな……私は何としてでも元の身体に戻りたい、探すのに協力してもらえないだろうか？”

「……とある事情ってどんな事情？」

「ゲコッ……」

そこへ、横から本を覗き込んでいたハルナが尋ねた

うっ、と苦しい表情をとるギニュー

出来ればその詳細は言いたくなかったのだが、のどかのアーティファクトの前には無力

“そ、それが……私には相手と身体を入れ替える能力があってだな……その、とある事故でカエルと身体を交換してしまって……”

すぐさま、表層意識がその本へと写される

「とある事故っていうのは？」

「ゲコッ……」

そしてハルナが追求をすれば

“ベジータと身体を交換しようとしたら、途中で孫悟空の邪魔が入ってカエルと……”

それも為す術なく二人に明かされることとなる

“カエルの身体では交換するための技名を言うことが出来ず、もう四、五年はこの姿で……”

「へー、ギニューさんってベジータさんと知り合いなんですね」

“ま、まあな……”

「ちょっと待ってのどか」

「え？」

“ギクッ！”

「ねえ、何でベジータさんの身体を取ろうとしたのよ？もしかしてベジータさん達の敵だったんじゃないの？」

“ううっ……”

さらにはハルナの鋭い指摘

ギニューはついに、思い出さんとしていたかつての主の姿を思い浮かべてしまった

円錐状の角を頭部に二本

肩部分が飛び出した戦闘服らしきものを着用

ピンクを基調とした肌

その全身像が、いどのえ日記へと描かれた

「ん？誰よこれ？」

しかし、この形態の彼のことをハルナ達は知らないが、すかさずのどかが何かに気付いた

「あれ？この頭にある紫の部分って……」

「あ、ホントだ、どっかで見たこと……ああっ！」

それに呼応し、ハルナも気付く

「「フリーザ！？」」

“そう、私はフリーザ様のかつての重臣……ギニュー特戦隊隊長、ギニューだ。ベジータや孫悟空と戦ったのもフリーザ様による指令、他の四人の隊員を死なせながら、私だけがこうして無様な姿で生きながらえているのさ”

「ちょっ、つまりあんた悪人ってことじゃない！」

“……否定はしない”

ページに映し出された文章を読み、続いてハルナは声を荒げた

フリーザの話は一応ながら、ブルマから聞かされたことがある

極悪非道の超悪人、今まで手に掛けてきた人々の数は計り知れない

無論、部下の者達も同様

数々の星を回り、戦い、殺し、奪う

もう少し詳しいことはベジータの方が知っているのだが、聞かせてくれと言いには行けず

だが、『フリーザ一派＝大量殺戮非道軍団』というイメージは二人の中で定着していた

“さっきも言ったが、私はギニュー特戦隊なる戦闘部隊を率いていた。普通の戦闘員だけでは征服に苦戦するような星を数々渡り歩き、戦って殺して奪っていったさ”

「……そんな悪人の頼み、聞けるわけないわよ」

「ハルナ……」

「だって元の身体で散々人を殺してきたんでしょ？戻したりなんかしたら、どうなるか分かったもんじゃないわ。それに、さっき言った能力でトランクスさんやベジータさんの身体を奪うことも否定出来ない」

「ゲロロ……」

“……そうだな、そう思われても無理はない。事実私は、お前達の仲間の身体を一時的だが奪った、ブルマとかいう女のと、孫悟空のをな”

ハルナが捲し立て、それに伴って次々とギニューの過去がアーティファクトの下に晒されていく

悟空と戦い、その余りの実力差に狼狽

それと共に湧き上がった、悟空のその強靭な肉体への酔拝

故に自らの元の肉体を捨ててまで、彼から奪った
だがその仲間達と戦って苦戦を強いられ、挙句の果てには元通りの身体へ
そこからベジータの身体を奪おうとするものの、前述の通りカエルへ
同情され逃げた後にブルマと邂逅
自分に対して良くしてくれた彼女を裏切って、身体を強奪
しかしながらまたも、このカエルの姿
その後ドラゴンボールでナメック星から地球に飛ばされ、この肉体での惨めな生活
それら全てが、余すところなく二人の目に飛び込んだ

「……決まりね、行きましょのどか」

「え？」

「さっきも言ったけど、こんな奴に元の身体をあげるなんて危険すぎるわ」

「で、でも……」

「こいつ昔、ブルマさんを裏切ったんでしょ？下手したら私達が狙われる」

「ゲコッ！ゲロロロッ！」

ハルナはのどかの腕を引き、ギニューを迂回して庭園の出口へ向かう

ギニューは必死に呼び止めるが、ハルナはもう聞く耳を持たなかった

「ま、待ってよハルナ！」

「何よのどか？あんたさっきからお人好し過ぎ……」

「これ、これ見て！」

「ん？」

しかし、のどかが逆にハルナを引っ張り返し、これを止める

必死にいどのえ日記を指差し、見るようハルナに急かした

“だが……もう、私には時間が無いのだ”

描かれていた絵は、ギニューが僅かながら涙を浮かべるそれ

何かあると悟ったハルナは、のどかの言うことに従いそのまま見続ける

“このカエルの身体は、もう寿命が近い……あと半年も生きられまい”

「え!?でも、さっきまであやって元気に……」

“発作がまだ出てないからな……どうも、心の臓の病らしい。ここの環境がこの身体に合ってなかったのか、それか元々この身体が弱っていたのか……”

次に出てきたのは、カエルを成り替わる前の自身の姿

“死ぬこと自体にはもう恐れはない……だが、せめて死ぬ前に一度だけでも元の身体に会いたい、そして、一時(いっとき)だけでもその身体でいたいのだ……”

「け、けど、あんたはフリーザの手下なんでしょ!?元の身体に戻った後、またカエルの身体に戻るなんて保障が一体どこに……」

「ゲロロロ」

“……フリーザ様は、もう亡くなられたのだろう?”

「え?」

“これでも地球に数年も住み続けたのだ、皆の会話からそのことは既に知っている。確かに私はフリーザ様の部下として、数多くの命を奪ってきた……だがこの身体を持って分かったのだ、フリーザ様や私達がしてきたことが、いかに悪であったのかを”

カエル

地球上、いや、宇宙上においてカエルとは強者なのか弱者なのか

言うまでもない、弱者だ

そしてカエルになる前、ギニューは強者だったと言えよう

フリーザ軍の幹部として位置付き、弱者を幾度となくいたぶった

だが、カエルとなった今はどうか

カエルを食する生物は、この地球上だけでも数え切れぬほどいよう

つまりギニューは強者と弱者、両方の立場となったことになる

故に、弱者には分からない強者の心情

そして、強者には分からない弱者の苦しさ

そのどちらもが、今の彼には理解出来ているのだ

“弱き者の辛さを知ってしまった今の私にはもう、過去の、フリーザ軍にいた頃のようにはもうなれない。いや、もうなりたくないんだ。そして過去にしてきたことも、今は心の底から悔いている”

その想いはカエルとして生きていく彼の心の中に、自然と芽生えていた

“君が持っているその本には、私の思ったことが嘘偽りなく書かれるんだったな……どうだろう？私のこの気持ちは、本物なのだろうか？その本に、君達にちゃんと伝わっているだろうか？”

ギニューは右前足を胸に当て、一歩一歩のどか達に近づいていく

両生類特有のギョロリと飛び出した眼、普通なら進んで眼を合わせたくはならないだろう

しかしながらその眼は、紛れもなく真剣そのもの

「ハルナ……」

「……分かったわよ、こうまで書かれてあるんじゃ信じるしかないわね」

「ギニューさん」

のどかはしゃがみ込んでギニューのすぐ傍まで接近

「はい」

アーティファクトのページを彼の方へ向け、正面から眼を合わせて話し出した

「ちゃんとページに出てます、だからギニューさんのその想いは本物ですよ」

「ゲロロ……」

「……私達で良かったら元の身体探し、お手伝いします」

「ゲ、ゲロロロ……」

優しく笑いかけるのどかに、ギニューは震えていた

いや

「ギ、ギニューさん!?」

「ゲロオォォッ!ゲロロオォォォ!」

大粒の涙を流し、泣いていた

天を仰ぎ、ひたすら鳴（泣）いていた

その小さな身体からは想像もつかぬほど、大きく

“ありがとう!本当にありがとう!こんな……悪人である私に……

私に……うおお〝お〝お〝お〝お〝っ!”

アーティファクトに映る心の中でも、彼は号泣だった

「ゲゴ、ゲゴッ……ゲゴ、ゲロロン……」

「あの……もう平気ですか？」

“す、すまない……私としたことが取り乱してしまって……”

ギニューが泣き止むまで、数分を要してしまった

それまでのどかは待ってあげ、落ち着いてきたところを見計らって声を掛ける

いどのえ日記内に返事が返ってきて、安心しホッと息を吐く

「いいんですよ、それじゃあ身体探しに行きましょうか」

「ゲロロ」

のどかは歩き出し、ギニューはその後を追う

「ハルナお待たせー」

「はいはい、ホントに探しに行くのね……ま、面白そうだから別にいいけど。悪だくみしてないって分かったわけだし」

出口に背を預けて待っていたハルナに手を振り、それをハルナも返した

とりあえず家から出ようか、と二人と一匹は家の玄関まで向かうが、ここでハルナは肝心なことを忘れていたのを思い出した

「あ、でも今カエルだから喋れないのよね。見つけたとしてもどう

やって元に戻るの？」

「あ」

“あ”

一瞬、一同の空気は固まり

「え？『カエルの言語翻訳機を作って欲しい』ですか？しかも直接喋るタイプの」

「はい……お願いします葉加瀬さん」

「ゲロゲロ」

次に、麻帆良マッドサイエンティストが閉じ籠もるカプセルコーポレーション研究室にまで足を踏み入れていた

第１０５話　カエルギニューは何を思う？発動いどのえ日記！（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「今回のゲストは誰なんだ？」

クウネル
「はい、今回のゲストはこの方々」

子ガメラ
「よう」

ウミガメ
「どうも、ウミガメです」

クウネル
「子ガメラさんとウミガメさんのお二人です」

エヴァ
「うわ、出たよ原作の出オチキャラ」

子ガメラ
「出オチとは何だ出オチとは！」

エヴァ
「いや、だってお前完全に一発キャラだったろ、登場回数一回だし」

ウミガメ
「アニメでどうだったかは、作者結構曖昧だったりしますけどね」

クウネル
「あと、口調は完全に作者の想像です、ご了承ください」

注・喋り方が凄く記憶的に曖昧なんです（汗）

子ガメラ
「そういうわけだ、よろしくな」

クウネル
「さて、ではコーナーを進めましょう。今回の話ですが……」

エヴァ
「……あいつ、改心してたんだな」

クウネル
「みたいですね」

子ガメラ
「けど、フリーザの手下だった奴がそう簡単に改心するのか？」

クウネル
「ベジータさんの例もありますし。あと凄いぶっちゃけ話になるんですが、『とある他サイトのＤＢ小説でもギニューが改心してる話があったし、まあ問題無いだろう』と作者が言ってました」

エヴァ
「うおいっ！それは別の意味で問題だろ！」

クウネル
「大丈夫大丈夫、改心の理由が殆ど一緒なだけです」

エヴァ
「だからそれは大丈夫じゃなかろう！」

ウミガメ
「でもまあ、あの状態から改心しようと思ったらだいたい理由は同じになりますよね」

クウネル
「そう、ナイスですウミガメさん」

エヴァ
「だーかーらー！」

注・その小説を読んだことがあって『パクリじゃないのか』とお気を悪くされた方すいません、しかし作者の力量ではこれが限界なんです

エヴァ
「ほら、作者も一応自覚してるぞ、何か果てしなく情けないが」

クウネル
「……では続きまして、次回予告です」

エヴァ
「おい」

子ガメラ
「さて、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「……葉加瀬から翻訳機を貰い、改めて身体探しへ出掛けた二人と一匹」

クウネル
「しかし地球上を闇雲に探し回るのは時間の無駄と判断」

ウミガメ
「そのため、ある場所へと進路をとったようです」

子ガメラ
「次回の更新は、作者の定期試験の兼ね合いもあって来週の月曜日だ」

エヴァ
「また遅れるのか……」

クウネル
「さらに言っておきますと、もう一話先の更新も一週間後になりそうです、ご了承ください」

ウミガメ
「こんな風に一々言わなくても、いっそのこと週一連載にした方が作者さんも気が楽なんじゃないですか？」

注・それは色々と悔しいので、基本は何としても週1，5スタイルでやります

エヴァ
「この先二週間は週一なんだがな」

クウネル
「では読者の皆さん、次回のネギドラ！も……」

エヴァ＆子ガメラ＆ウミガメ
「お楽しみに！」

エヴァ
「ほう、お前空が飛べるのか」

子ガメラ
「おう、武天老師さまも俺に乗って飛んだことがあるぜ。けど最近、全然乗ってくれないんだよな……」

ウミガメ
「飛び方に難がありますからね」

エヴァ

「どんな風に飛ぶんだ？」

クウネル
「『ヒント、元ネタであるガメラはどのように空を飛ぶか』」

エヴァ
「……あー、はいはい」

第１０６話　改めて一同出発　この広き地球へ（前書き）

今回あとがきがかなり長くなっております（携帯だと三ページ）、理由は本編中に。現在、試験期間真っ最中の作者です、頑張ります。

ではどうぞ！

第１０６話　改めて一同出発　この広き地球へ

「はい、出来ましたよー」

「あ、ありがとうございます葉加瀬さん！」

「ゲロゲロ！」

クラスメイト葉加瀬聡美に、『カエル言語翻訳機』の制作を依頼して一時間余

ちゃちゃっと葉加瀬はそれを完成させてみせ、どうぞとのどかに手渡した

「研究室内に似たような物の設計図があって助かりました、無かったらおそらく半日は掛かってましたね。ブルマさんやブリーフ博士が作るんだったら話は別でしょうけど」

本日両名は、会社の用事があって研究室には不在

そのため一人研究に勤しむ葉加瀬にお願いしてみたわけだが、何とか功を奏したようである

「首輪式になってますから、首に嵌めてボタンを押すとスイッチが入ります。電池切れは、少なくとも今日中には起こらないと思いますので」

「分かりましたー」

「ゲロゲロッ！」

「お待たせハルナー」

「ゲロゲロローー！」

「あら？意外と早かったわね」

そして二人は研究室を跡にし、一人先に家の外へ出ていたハルナと合流する

ハルナは屋外の庭でベンチに腰掛け、適当にブルマ宅から見繕った本を読んでいた

「うん、これが翻訳機だって」

「ゲロ」

「ふーん、首輪式なんだ……じゃあ早速付けてみよっか」

のどかが翻訳機を見せると、ハルナはそれを手にとって提案

二人も了承し、早速ギニューの首へと装着

ベンチの上へギニューが飛び乗ると、ベンチを降りてしゃがんだ
ハルナが取り付ける

「えっと、ここをこうよね……よし出来た！」

「ゲロゲロ！」

まず装着が完了

続いて、首輪中央にあるスイッチへと指を伸ばした

「スイッチは……これか！」

ポチ

『……あーあー……おおっ！喋れる！喋れるぞ！』

次の瞬間ギニューの口から、他でもない彼自身の声が飛び出した

『私の声だ！』

カエルと成り替わる前、特戦隊隊長時代のあの声が

「良かった……流石葉加瀬さんですね」

「ええ、にしても結構渋い声ね……それが地声なの？」

『そうとも！これが私、ギニュー特戦隊隊長ギニューの麗しき美声なのだ！』

（……いざ普通に喋らせてみると、結構テンション高いわねこの人）

カエルの身体とは思えないハキハキした動きで、ギニューはこの喜びを全身から表現

同時に翻訳機から発せられるハイテンションの言葉から、ハルナは思わず苦笑した

『はっ、いかんいかん！まだこれで終わりではない……肝心な私の身体探しが残っているではないか！』

「私は初めから覚えてましたよ？」

「……私も」

『いやーすまんすまん！では早速出発しよう！』

そうギニューが言うと、ハルナはアーティファクトを取り出してページを開く

そこから飛行用のゴーレムを召喚し、二人へ乗るように促した

『おおっ！こいつに乗って空の旅か！実に清々しい身体探しの旅になりそうだ！』

「いいから早く乗って、探せる時間あんまりないのよ？」

『はっはっは、分かってる分かってる……そらっ！』

ギニューは高らかに笑い、初めに見せたのよりさらに高い大ジャンプ

のどかやハルナの身体を介することなく、ピョコリとゴーレムの上へ乗って見せた

「すごーい……」

「あんたホントに病気持ちなの？」

『勿論だ、嘘は言ってないぞ！』

「……まあいいわ、それじゃ出ぱーつ」

ハルナの令を受け、ゴーレムは浮上

たちまち、西の都から飛び去って行った

それから飛び続け、約三十分後のこと

『で、まずどこから探しに行くんだ？』

このギニューの一言で、一気に身体探しの旅に暗雲が立ち込めた

「そうね……って、身体どこにあるか見当すらついてないの！？」

『当たり前だ、場所が分かってたら初めから君達に教えるに決まってるじゃないか！』

「あの……もしかしてギニューさんは、地球全体を探し回るつもりなんですか？」

『ん？違うのか？』

「「……」」

悟空やピッコロは数十分単位で地球を回ったり出来ているが、あれは彼らの飛行速度が常軌を逸しているから

ハルナのゴーレムだと時速百キロ強が限界といったところか

以前は数十キロが限界だったため、強化されたといえばされた

だがまず、一日で地球全体を回るのは不可能

「ギ、ギニューさん……ハルナのゴーレムだと地球全部は多分無理です」

『何だと！？』

「捜索時間を除いても、全部回るだけで何日かかるか分からないわ」

『……ちなみに訊くが、君達の時間の猶予は』

「今日含めて三日、下手すると私達明後日いないから二日ね」

『……』

ギニューは絶句していた

捜索時間を含めれば、今日だけで地球上の何分の一を探せるのだろうか

三日で見つけ出すなど、まさに紙のように薄い確率

いや、紙よりもずっと薄い

『……ど、どうすればいいのだ！？』

「山張って探すとかしかないわね」

「あ、でもギニューさんの身体のカエルさんって空は飛べないんですよね。泳いで渡るのもまず無いと思いますし、他の大陸にはいないんじゃないですか？」

『おおっ！』

のどかの推測にギニューは目を輝かせたが

「でもここの大陸だけでもかなり広いわよ?全体の八割近く占めてるし」

『……』

地図を広げながらハルナが漏らした言葉に、また口を閉ざす

結局のところ、捜索が困難であることが変わらないことが分かってしまった

『な、何かいい方法は無いのか!?私の身体を見つけ出すいい方法は!』

「うーんと、うーんと……」

今にも泣きついてきそうなギニュー

それにのどかは頭を抱え、必死に解決法を模索する

ハルナは『こりゃ無理か』と悟ったのか、半ば力の抜けた表情でゴーレムを操作中

「ハルナー、ハルナは何か思いつかない?」

「んー……無理」

『そんな薄情な!』

ギニューの悲痛の叫びにも、ハルナは殆ど反応せず

フーと口から息を漏らし、ギニューの方へ振り返る

「そもそも、探すのが私達だけってのが問題じゃない。アーティファクトだって、のどかが読心術で私はゴーレム召喚……ゴーレムは遠隔操作に難があるし、今回の捜索には向いてないのよ」

「じゃあ、ネギ先生達にもお願いしてみる？楓さんとかの影分身なら、距離が離れてても平気だったよね」

「焼け石に水よ、それで捜索要員が数十人に増えても結局は足りないわね。あとここからパオズ山ってそれなりに遠いし」

愚痴を吐くと、続いてのどかの提案も却下した

それに伴って、見る見るうちにギニューの顔が暗くなっていくのが分かる

『そうか、やはり私の身体を見つけるのは……無理か』

「そ、そんなことないですよ！」

『……すまない』

のどかが焦って励ますのだが、表情は晴れず

「とにかく、やれるだけのことはしましょう？しないことには何も始まらないんですから！」

『……そうだな』

「ねえハルナ、私達の知り合いがいる場所でここから一番近いのって何処ー？」

「……やっぱり探すの？」

「当たり前だよー！」

「はいはい……」

ハルナの方を見ると、既に顔の向きを正面に戻して操作を続行中のどかの言葉を受け、地図に目を降ろして確認した

「そうねえ……ネギ君達がいるパオズ山は大陸の東端、アスナ達がいる山は北部の方でやっぱり遠いわね。千雨ちゃん達は何処だったかあの時聞きそびれたし」

大会時に皆から住んでいる場所をハルナは聞いており、それを思い出しながら地図に×印を書き加える

「五月さんのところとかは？」

「カメハウスは……ちょっと厳しい、海を越えてかなりの距離を喰うわ」

「あと残ってるのって……」

脳内に浮かんだクラスメイトや知り合い達を、消去法で次々と削除

まだ可能性が残る者らをのどかは特定していく

「ピッコロさん達も距離的に無理、あと龍宮さんもあの世行ってるからアウトよ」

ハルナの言葉を聞き、さらに削除

「うーんと……あ」

それと所在が未だ分からない超も除き、残ったのは三人

その人物にたどり着き、のどかは嬉しそうに声を発した

「夕映！夕映がまだ残ってた！」

「あ、夕映か……」

「夕映ならきっと、いい考えを思いついてくれるよ！」

『学力』という物差しならば、のどか達二人には遠く及ばない夕映だが純粋な『頭の良さ』という点では、夕映は三人の中で群を抜いた存在といえる

事実、彼女の発言によって救われたことも少なくない

「いい考えねえ、まあ確かに夕映なら可能性が無いわけじゃないけど……」

「夕映のいる場所は？」

「えっと、ここから南西に少し行った……占いババの館、だったかな？」

『占いババの館？』

それなりに大陸の西側にあるため、まだその辺りの地理は把握してなかったか

館の存在を知らないギニューは、首を斜めに傾けた

「うん、夕映の魔法のお師匠さんの家で、そこで夕映が泊まり込みで修行してるの……そうだ、占いババさんに占ってもらうっていう方法があるよ！」

『おおおっ！』

ギニューに説明をしながら、のどかはすかさずこの方法に辿り着く

「あ、それいいわね……けど確か、そのババさんって占いで大金取るんじゃなかったっけ？」

大会時、夕映と話した会話の内容を思い出しつつハルナも発言

その占い料金も兼ね、館で雑用仕事をしてたのも聞かされた

まあ同時に『私の仕事は掃除の他に魔法薬の整理とかもあって、それもかなり魔法の勉強になったです』と、嬉しそうに話してもいたが

「うっ、そうだった……私達お金全然持ってない……」

が、当然金銭問題になればのどか達には苦しい

小銭程度はブルマがくれたが、到底『大金』とは程遠い

カプセルコーポレーションに戻ってブルマに出してもらえなくもないが、それはやはり迷惑が掛かるため抵抗がある

しかし、『占いババに占ってもらう』は今考えうる最善の策には変わりない

「ど、どうしよう……」

「……お金云々はとりあえず置いといて、まずはその館まで行ってみない？夕映の友達ってことで、タダでしてくれるかもしんないし」

「う、うん……そうだね」

悩むのどかに、ハルナは妥協案を出して一応だがこの場は解決

『よし、目標は決まった！南西、占いババの館に進路をとれ、全速前進だ！』

「はいはい……あんた何処の社長よ」

テンションが再び上がったギニューの指示のもと、一向は占いババの館へと赴き始めた

おまけ

～カメハウス～

アスナ&まき絵

「こんにちはー」

五月

「あ、アスナさんにまき絵さん、いらっしゃい」

アスナ

「約束通り、お昼御馳走になりに来たわよー」

まき絵

「五月ちゃんの手料理楽しみだなー、けど、出来るならネギ君とも一緒に食べたかったな……」

アスナ

「あいつはあいつで忙しいみたいだし、しょうがないわよ」

クリリン

「天津飯と餃子もよく来たな、折角だからお前達も食ってけよ」

天津飯
「え？いや、俺達はただ道案内でアスナ達に付き添っただけで……」

五月
「お二人の分も用意してますよ、遠慮せずにどうぞ」

餃子
「天さん、折角だから御馳走になろう？」

天津飯
「そうか？……じゃあ、お言葉に甘えて」

五月
「はい」

天津飯
「……ところで、武天老師様は？」

アスナ
「そうよあのスケベジジイ……次もまた変なことしようとしたら、こっちからぶちのめすつもりだったのよね」

まき絵
「アスナ、目が怖いよ……」

クリリン
「あれ？おかしいな……さっきまでは家の中にいたんだけど」

バッ！

亀仙人
「隙有りーーーー！」

アスナ
「え、嘘！？天井に張り付いてた！？」

まき絵
「アスナ危ない！」

亀仙人
「ほっほっほ、いただきじゃーーー！」

アスナ
「……なんてね」

ヒュパッ

亀仙人
「むっ」

天津飯
「上手い！ギリギリまで引き付けての残像拳！」

餃子
「そしてすかさず、武天老師様の背後を！」

クリリン
「そのまま手刀で、脳天へチョップを叩き込むつもりだ！」

アスナ
「飛んで火に入る……夏の虫よ！」

亀仙人
「ほっほっほ」

ヒュパッ

アスナ
「え？」

クリリン
「む、武天老師様も残像拳！？」

天津飯
「だがアスナとの実力差を考えれば、このタイミングから即興で瞬時にやるのはまず不可能……アスナの残像拳も、全ては武天老師様の想定の範囲内だったということか！」

亀仙人
「このワシを出し抜こうなどとは、甘いわ！裏の裏じゃ！」

まき絵
「そしてまた、アスナが背後を取られた！」

天津飯
「いや待て、この展開は……」

亀仙人
「パイパイもらったあああああっ！」

アスナ
「……ふ」

ヒュパッ！

亀仙人
「な、何じゃと！？」

クリリン
「また残像拳だって！？」

天津飯
「やはりか！」

餃子
「またアスナが背後を！」

アスナ
「アデアット……裏の裏の……」

亀仙人
「しまっ……」

アスナ
「そのまた裏よ！せりゃあああああっ！」

バッシイイィィィイインッ！

亀仙人

「ほげえええええええええっ！」

第１０６話　改めて一同出発　この広き地球へ（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「今回のゲストは、少々人数が多いらしいな」

クウネル
「はい、というわけで今回はこの四名」

桜子↑抱きかかえている
「いっえーーーい！また出られたーー！」

プーアル↑抱きかかえられている
「はい、僕も凄く嬉しいです！」

カリン↑抱きかかえられてる
「いやあ、また一緒に出演できるとはのう

アキラ↑抱きかかえてる
「フフ、そうですね」

クウネル
「『以前共演した二人』を二組合わせるという初の試み、椎名桜子さんとプーアルさん、そして大河内アキラさんと仙猫カリン様です」

エヴァ
「プーアルとカリンは別の奴とも共演してるから、こいつらは今回

で三回目か」

クウネル
「そういうことになりますね」

桜子
「えっへん！エバちゃん、ちゃんと私達また一緒に出られたよ！」

エヴァ
「ん？何の話だ？」

桜子
「ほらー、前にエバちゃん言ってたじゃん、私達がまた一緒に出るなんて無理って」

クウネル
「第７６話の時のですね」

エヴァ
「ああ、あったなそんなの……というか既に五ヶ月前か、言われるまですっかり忘れていたぞ」

注・私もすっかり忘れていました

クウネル
「さて、ではコーナーを進めましょうか、今回の話ですが……」

エヴァ
「感想で指摘されたにも関わらずグドグドだったな」

クウネル
「実は感想貰った時点で、既に八割以上書き終えてたんですよね、作者」

カリン
「あと、ストーリーもそこまで進まんかったの」

アキラ
「次回予告で言ってたことしか、本当にしてなかったね」

クウネル
「まあストーリー進行の遅さは、大会編でもよく見られましたし」

エヴァ
「成長しろよ作者……」

注・次回はもう少し気をつけてみます

桜子
「あと、今回はおまけがあったね！」

プーアル
「はい、でも何であんなことやったんですかね？」

クウネル
「これも作者の事情が含まれています」

エヴァ
「……というと？」

クウネル
「『アスナさん達がカメハウスで五月さんの料理を食べに来る』というのは大分前、大会編中にフラグというか約束があったんですよね」

エヴァ
「第４６話だな……こっちは九ヶ月前、作者も殆ど忘れてるだろ」

クウネル
「こういう風に大会編中で立てたフラグは、今やってる『復活までの一週間　この世編』で全部回収するプランが当時作者にはありまして」

カリン
「事実トランクスと刹那ちゃんとの剣の稽古も、ちゃんと書かれたしのう」

桜子
「でもでも、なんであんなおまけみたいな形で終わらせたのー？」

クウネル
「今言った続きになりますが、日数が七日ということで合計七つのイベントを用意して、そのままドラゴンボール回収話まで持っていくつもりだったんですね」

エヴァ
「つまり一日一イベントだな……あれ？だがそれだと……」

クウネル
「はい、途中で作者が消化の仕方を思いっきりミスったんです。当

初の予定だと……」

・大界王星で修行に励む古
・刹那とトランクスの剣術稽古
・パワーアップ茶々丸
・カメハウスへ行くアスナ
・年齢詐称薬
・ギニュー
・あの世一武道会

クウネル
「の七つを、一日一つづつ進める予定だったんですね」

プーアル
「けど、本編見ると『一日一つ』って感じじゃなかったですよ」

クウネル
「はい、茶々丸さんのは一日跨ぎで合計三戦しました。理由は主に古菲さんのあの世編?と、刹那さん達のイベントの日が確定してしまってたことです」

エヴァ
「で、さらには『アスナ&まき絵　悟飯宅に宿泊』やら『古菲　地獄武者修行』やら、途中でイベントをさらに追加してしまい……」

クウネル
「本数的に混乱してしまい、あろうことか四日目はイベントを何一つ起こさせず終了」

アキラ

「六日目は『チケット争奪&出発準備』っていうイベントで一日埋まりきっちゃってて……」

クウネル
「五日目は丸一日ギニューさんの話。こうしてアスナさんの話を突っ込む場所が無くなり、おまけとして無理矢理入れたというわけです」

エヴァ
「……いや、全部作者のせいだろこれ」

注・否定はしません

エヴァ
「潔いなおい……」

クウネル
「まあ他の六つと比べたら内容が今一つ練り切れてなかったらしいですし、一番やりたかったアレ（アスナ、亀仙人撃破（笑））がまんま書けたから良しとしておきましょう」

エヴァ
「仕方ないか……さて、そろそろ終わるかな」

カリン
「お前さんが自分から言うなんて珍しいのう」

エヴァ
「作者が中間試験期間の真っ最中なんだと、このコーナーもテスト終了直後の図書室で書かれている、前書きでも書いてるだろ」

アキラ
「それでもかなり文字数使ったね……」

エヴァ
「おまけの説明がかなり字数喰ったからな」

桜子
「さあさあ！その前に次回予告だよー！」

プーアル
「張り切っていきましょー！」

エヴァ
「で、相変わらずあいつらはテンション高いと」

クウネル
「では次回予告です、さて、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「占いババの館へと無事到着したギニュー達」

クウネル
「外で掃除をしていた朝倉さんと遭遇し、そのまま館の中へ」

桜子
「果たして、ギニューさんの身体の場所は占ってもらえるのか！？
って内容だね！」

プーアル

「次回の更新予定は来週の月曜日！」

アキラ
「今週で試験は終了するから、急いで週末中に書き上げる予定らしいよ」

カリン
「では読者のみんな、次回のネギドラ！も……」

エヴァ&クウネル&桜子&プーアル&アキラ
「お楽しみに！」

アキラ
「……ねえ、桜子」

桜子
「ん、なーに？」

アキラ
「……そっちの猫ちゃん、抱かせてもらっていいかな？」

カリン
（え！？）

桜子
「うん、いーよ」

プーアル
（え！？）

桜子
「けど代わりに、そっちの猫ちゃん抱かせてー！」

アキラ
「分かった、交換だね」

桜子
「わああっ！こっちの猫ちゃんもいい毛並みー！ほーら撫で撫で…
…」

カリン
「おおうっ！（ほほ、役得役得……）」

アキラ
「……ごめんね無理言って、やっぱり桜子の方が良かったかな？」

プーアル
「い、いえそんなことは、どうぞお構いなく……」

エヴァ
「……完全にあの二匹、ペット扱いだよな」

クウネル
「ですね」

第１０７話　金が無いならば勝て！　闘技場での戦い、開戦（前書き）

お待たせしました、一週間ぶりに更新です。
ネギま！の映画がこの夏ついに上映ですね、早く前売り券の購入準備をしなければ。読者の皆さんはご覧になりますか？
ではどうぞ！

第１０７話　金が無いならば勝て！　闘技場での戦い、開戦

「♪～♪～♪～」

占いババの館、その外

客が来てないタイミングを見計らい、朝倉和美は箒を手に掃除中

さらにその傍ら鼻歌

「フーフーフン　フーフーフン　フーフンフンフーン～♪」

ノッてきたのか、それは次第に

「そ～うＧｉｒｌｓ，ｂｅ～ａｍｂｉｔｉｏｕｓ～♪」

明確な歌詞となって口から漏れ始めていた

「シアワ～セ探そ……ん？」

が、突如聞こえてきた声にそれは中断

顔を斜めに軽く上げ、その声の出所を確認する

「やっほー朝倉ー！」

「あ、パル！」

ゴーレムに乗ってやってきた、ハルナ達だった

朝倉の名を呼び、腕を大きく振る

朝倉が振り返すのとほぼ同時に、ゴーレムは目の前に着陸した

ハルナに加え、のどかとギニューもそこから降りる

「なんだ、本屋も来たんだ……で、ここまで何の用？言っとくけど大会チケットは夕映っちが厳重に保管してるから、事前に取っちゃうとかは無理だよ」

「そんなんじゃないわよ、第一夕映に悪いし」

朝倉の言葉を否定しながら、ハルナはゴーレムを回収

パタンと閉じて去れ（アベアット）をすると、パクティオーカードをポケットに仕舞いながら朝倉の方へ向き直った

「ここって占いババの館よね、占いババさんって今いる？」

「あー、ババさんが目的ね」

「ちょっと占ってもらいたいことがあってさ」

「はいはい成程、大会の時に夕映っちから聞いたわけか」

納得した様子で朝倉がうんうん頷くと、館の入口へ前進

「案内するから着いてきて。確かババさんならまだいたと思うよ、夕映っちと魔法薬作りかなんかしてたみたいだし」

「魔法薬作りって……やるわね夕映」

「まるで本物の魔法使いみたい……」

その後ろをハルナ、のどか、少々遅れてギニューの順で続く

「しかもアックマン相手に戦闘訓練とかもしてるから、実力はバリバリ上昇中」

「「……アックマン？」」

「そっか、二人は知らなかったっけ、アックマンっていうのはここの……」

アックマンを二人（とギニュー）が知らぬことを把握した朝倉

説明しようと口を開いたところで突如

「いらっしゃいませ～～～～」

「うおおおおっ！？」

「お、お化け！？」

提灯を手にしたピンク色のお化けが、スッと正にお化けのような方法で目の前に出現した

ハルナは両目を見開き、のどかは顔を少なからず恐怖の色に染めて後退する

「お客様ですか～？朝倉さん」

「まあそんな感じ……ていうかその登場方法はやめなって、さよちゃんだってそんなことは流石にしないよ？ほら、二人も驚いてるし」

「自分元来お化けなもんでつい」

しかし朝倉は慣れ親しんだ様子でお化けと会話を交わし、さらには注意まで

元々さよとの親交で耐性がある程度あった朝倉だが、この環境下でさらにそれは強化された模様

「それはあんま理由になってないってば」

「すいません……」

「そういえばさよちゃんは？確か、私が掃除行く前までは一緒に遊んでたよね」

「占いババ様に呼ばれて倉庫の方まで、多分まだそこにいるかと」

「ふーん、何か面白い魔法薬でも出来たのかな……」

「あの……ごめん朝倉」

しかしこのままだと終わりが見えそうになく、話の切れ目を見計

らってハルナが割って入る

「あ、ごめんごめん、ババさんのところへ案内だったね」

朝倉もこれに反応、気を取り直して倉庫へと向かい

「はい到着ー」

一分と経たずに到着した

閉められた扉に近づき、コンコンと朝倉がノック

「ババさーん、夕映っちー、私だけどちょっといい？」

「ん？何の用じゃ？」

「誰かお客さんでも来たですか？」

倉庫の中からすぐ、占いババと夕映の返事が返ってくる

そして夕映の声を聞き、のどかもすかさず開口

「夕映ー、私だよー」

「あと私もねー」

ハルナもこれに続いた

「のどかにハルナ！？」

直後、倉庫の扉は勢いよく開け放たれる

三角帽子をかぶった夕映が、そこから嬉しそうな表情で飛び出した

「久し……あ、一昨日会ったばかりでしたね。どうしたですか急に？」

「いや、ちょっとそこにいる夕映のお師匠さんに用が……ね」

「ワシにか？」

ハルナはハハハと笑い、倉庫の奥にいる占いババへと視線を向ける

占いババは水晶玉に乗ったまま、一同の方へと接近

さらにはハルナの目の前数センチ尾まで近づき、両目を凝視

「な、何ですか！？」

「ふむふむ……どうやら、ワシに占ってもらいたいことがあるようじゃのう。しかも自分のことではなく他人のことを」

「え！？」

ハルナが今から言わんとしてたことを、ピタリと言い当てたのであった

「な、何で！？」

「このくらい、魔法を使わんでも分かるわい」

「『長年占い師をやってると、目を見るだけで大体のことは読める』とのことです」

最後に、目を丸くして驚くハルナへ占いババと夕映が補足して

「といっても流石にこれが限界じゃ、詳しい話は外で聞こうかのう」

「……とまあ、簡単に言うとこんな感じかしらね」

「ふむ、成程な」

「しかし驚いたです……生死不明とされていたギニュー特戦隊隊長、ギニューさんがこんな姿になっていたとは」

現在一同のいる場所は、館内にある屋外闘技場

そこでハルナとのどか、さらには翻訳機を付けたギニュー本人が占いババへと詳しい事情を話し出した

ギニューの名には夕映も反応したが、いどのえ日記に書かれたこ

とをのどかが説明

少々警戒の色を見せていた夕映も、すぐにそれを解くこととなる

『そう言えば君は、何故私や特戦隊のことを知っているんだ?』

「地獄と内通している知り合いがいて、地獄にいる悪人関連の話をよく聞かされてたんです」

『ということは、リクーム達のこともか?』

「はい、『隊長がいなくて少々寂しそうにすることもあるが、各人それなりに充実した日々を送っている』とのことです」

『そうか……』

五人で楽しくやっていた頃を思い出したか、ギニューは遠い眼をして感慨深そうな表情

リクーム、バータ、ジーズ、グルド

四人の顔が頭に浮かび、口元を釣り上げた

(あいつら、死んだ後も四人一緒になれたのか……俺も、近い内にそっちへ行くからな)

「そ、それで占いババさん……ギニューさんのこと、占ってもらえませんか?」

ここでようやく本題

のどかは意を決して、占いババへギニューの件を依頼する

「別に構わんが……金は持ってきてるんじゃろうな？」

「それはほら、私やのどかは夕映の親友だし、特別サービスで無料……なんてことは」

「通らんに決まってるじゃろ、アホかお前ら」

しかし料金について追及され、ハルナの言葉も一蹴

何とかならないの？と言わんばかりの目を夕映と向けたのだが

「……（フルフル）」

無言で首を横に振られた

金にシビアな占いババのこの性格は、余程のことが無ければ曲がらないことを夕映はよく知っていた

が、直後もう一つの案を思い出す

「……あ」

「何かあるの？夕映」

「そういえば一応、占ってもらうためにもう一つ方法があったです」

「それってどんなの？」

「『ワシの用意した五人の戦士と、五対五で戦って勝つ』という方法じゃが、どう見たってお主らでは無理じゃからのう、残念残念」

これを聞き、ハルナは何か確信したかニヤリと笑った

同時に、ポケットから自身のカードを取り出す

最後に確認を取ろうと、朝倉を手で招き寄せて小声で尋ねた

「ねえねえ朝倉、五人の戦士ってのはどのくらい強いわけ？」

「え、まさかパルやる気？」

「私のアーティファクトを使うのよ。言っとくけど、この世界に来る前より格段に強くなってるわ」

「あー、それなら五人確保出来るね」

「どうなの？まさか悟飯君クラスとかいるわけないわよね？」

「そんなのは流石にいないって、けどアックマ」

「よし決まり！」

朝倉が言い終わるより先に、ハルナは踵を返して占いババの目の前へ

？なのどかにカードをヒラヒラと見せて理解させ、ビシっと人差し指を突き付ける

「占いババさん、その五対五の勝負受けるわ！」

これには占いババ、意外そうな表情

「ほう、見たところ武術等の心得は無さそうじゃが？」

「心配ご無用、アデアット」

アーティファクトを取り出し、付箋をしていた一ページを開く

「出でよ、炎の魔人（インフェルノ・アニキ）！」

「ファッファッファッファッファ！」

筋肉隆々の巨体魔人が、今ここに姿を現した

「このゴーレムを使って戦わせてもらうわ、まさか断るわけないわよね？」

「……ふん、いいじゃろう」

多少驚きはしたものの、占いババの表情はさほど変わらず

むしろより嫌らしく笑みを見せ、水晶を操作して移動する

「では一人目の戦士を呼んでくる、ちょっとまっておれ」

（ふふん、強がっちゃって……こりゃ勝ったわね）

一方この光景を後ろから見たのどかは、嬉しそうにギニューと言葉を交わす

「良かったですねギニューさん、これに勝ったら占ってもらえますよ」

『ああ、だが……あの余裕そうな顔を見てしまうと、何か嫌な予感が……』

しかし、ギニューはどこか喜びきれずにいた

占いババのあの顔は、絶対的な自信故の顔

特戦隊隊長として戦ってきた自分も、敵に対し同じような態度を見せたことが幾度となくある

「待たせたな、まず一人目はこいつじゃ、頼むぞドラキュラマン」

「へいへい……ってうわ、何すかあの化け物!?」

そんなことを考えてる内に、占いババが一人目の戦士を連れて登場

かなり青白い（というか真っ青）な肌をし、ボクシンググローブとボクシングパンツを身に付けた吸血鬼

占いババ軍団先鋒、ドラキュラマンである

「お前の対戦相手じゃ、まあ頑張れ」

「無理無理無理無理！ぜってー勝てねえってあんなの！」

目の前の炎の魔人（インフェルノ・アニキ）を対戦相手と知るや、ドラキュラマン狼狽

必死に拒否するその姿を見て、ハルナはより一層自身の中で確信を深めていく

（あれは演技じゃない……これで決まり、私のゴーレム軍団の方が完全に格上！）

「人間相手ならまだしも、何であんな奴！」

「分かった分かった、それではのう、……」

すると、占いババがこっそりとドラキュラマンに耳打ち

「……ちっ、分かったよ」

渋々ながらそれを聞き入れたようで、ドラキュラマンは闘技場中央に立つ

次に、危ないから外へ出ろと皆を闘技場外へ占いババが誘導

この闘技場は、周囲を浅めの水所で囲まれた直径十数メートル程の円状になっている

そこから二本延びる通路を渡り、炎の魔人（インフェルノ・アニキ）とドラキュラマンを除いて一同は移動した

「ホントにいいんだよな！？」

「いいと言ってるじゃろうが！とっとと済ませろ！」

最後に占いババがドラキュラマンに怒鳴り散らし

（おそらく、何かあるんだ……負けわけがないと自信を持って言える、とっておきの隠し玉が……）

「まったく……では、始め！」

先鋒同士の戦い、炎の魔人（インフェルノ・アニキ）対ドラキュラマンの戦いが始まった

～館の奥～

「ほう、召喚術か……嬢ちゃんの知り合い、中々面白いことしてくるじゃねえか。俺の番までまだ大分ある、その間じっくり見させてもらうぜ」

第１０７話　金が無いならば勝て！　闘技場での戦い、開戦（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「今回のゲストは誰なんだ？」

クウネル
「はい、今回はこのお二人」

木乃香
「やほー、エヴァちゃん」

占いババ
「うむ、また来てやったぞ」

クウネル
「近衛木乃香さんと、占いババさんのお二人です」

エヴァ
「……あれ？お前もしかして今回が初めてか」

木乃香
「ようやえ、五か月以上も放置なんてひどいやん」

クウネル
「リクエスト自体は大分前、昨年の十二月上旬に戴いてました」

エヴァ
「だから宮崎のどかやピッコロと違ってネタにはされてなかったのか……リク自体はされてたわけだし」

クウネル
「昔の感想まで遡ってリクエストを探していたら、今回になってようやく発掘出来たという……」

エヴァ
「……随分不遇な扱いを受けたわけだな」

木乃香
「まあ出られたさかい、今となっては別にいいんやけどな」

クウネル
「では進行させましょうか、今回の話ですが……」

エヴァ
「冒頭の朝倉のあれって大丈夫なのか？」

占いババ
「そういえば何か歌っとったのう、何じゃあれは？」

クウネル
「数年前に発売された朝倉さんのキャラソンです、正確には千鶴さん夏美さんザジさんを入れて四人組でですが」

木乃香
「結構昔のネタやな……確かにＣＤ買ってない読者は、大半が分からへんかもな」

エヴァ
「それもあるが、私が言ってるのは歌詞の方だよ」

クウネル
「別に良いんじゃないですかね？『～』とか『♪』とか入れて、正確な歌詞にはしてないですし」

占いババ
「こういうことは作者、かなり疎いからのう」

注・もし何か問題があるようでしたら、感想の方で教えていただけると嬉しいです

エヴァ
「というか作者、この一つ前の話でもネタを入れていたよな」

クウネル
「全速前進ＤＡ！」

エヴァ
「そうそれ……って、出典元のをそのまま言うなよ」

木乃香
「それって何なん？」

クウネル
「とある動画サイトで人気になっている某社長の名セリフです、一応雑誌的に占いババさん達の後輩にあたりますね」

占いババ
「まあの」

木乃香
「なんやセリフにアルファベットとかついててカッコええな……全速前進ＹＡ！」

クウネル
「そうそう」

エヴァ
「そうそうじゃない！近衛木乃香、お前もそういうのはやめろ！」

木乃香
「はーい」

占いババ
「全速前進Ｊ……」

エヴァ
「言わせないぞ！？」

クウネル
「では続きまして、次回予告です」

木乃香
「ほないくで、さて次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「ついに開戦した、早乙女ハルナゴーレム軍団対占いババチームの

団体戦」

クウネル
「終盤までハルナさん達が優勢、このまま勝利かと思いきや……」

占いババ
「ほっほっほ、あいつに任せておけば安心じゃて」

木乃香
「という感じのお話や」

クウネル
「一体その人物とは……って、この小説ずっと読んでる人は分かりますよね」

エヴァ
「そのへんはまあ、察してくれ」

木乃香
「次回の更新予定は金曜日、週一から見事復活やな」

占いババ
「感想その他諸々、待っとるぞ」

クウネル
「では、次回のネギドラ！も……」

エヴァ&木乃香&占いババ
「お楽しみに！」

クウネル
「そういえば、第９３話で作った年齢詐称薬はどうされたんですか？」

占いババ
「ん？飲んだぞ、七、八十粒ほど」

エヴァ
「ホントに飲んだのかよ……」

木乃香
「頑張ったんやなー、それでどないやった？」

占いババ
「記念に写真を撮ったんじゃが、見るか？」

木乃香
「あ、見る見るー……うわ、今と全然ちゃうやん」

エヴァ
「どれどれ……うおっ！？」

クウネル
「随分とこれは……」

占いババ
「あの頃は、若かったのう……」

注・どんな姿かは皆様のご想像にお任せします

第１０８話　大将アックマン登場！　ゴーレム軍団大苦戦！？（前書き）

今回はまんまサブタイ通りの内容です、はい。
ではどうぞ！

第１０８話　大将アックマン登場！　ゴーレム軍団大苦戦！？

「ファッファッファッファッファ」

「ぐげえっ！」

「やった！」

炎の魔人（インフェルノ・アニキ）が、己が拳をブンと振るう

目の前にいた全身包帯巻きの男、ミイラ君にそれは命中

力をかなり加減したとはいえ、その威力は彼にとって強烈

吹っ飛ばされ、そのまま気絶となってしまった

ハルナもそれに歓喜、後ろにいたのどかも同じく

占いババはミイラ君の気絶を改めて確認し

「……うむ、またそっちの勝ちじゃな」

炎の魔人（インフェルノ・アニキ）の勝利を宣言した

「よっしゃ！これで四人目！」

「あと一人ですよ、ギニューさん！」

『あ、ああ……』

数分前、先鋒として登場したドラキュラマンをたったの三秒で撃退

続けて登場したスケさん等も、炎の魔人（インフェルノ・アニキ）の前にはとても太刀打ち出来ず

ついには副将ミイラ君までも見事打ち倒し、今に至っている

「どうしたのよ、辛気臭い顔しちゃって。この調子で次も私のゴーレムが勝てば、晴れて自分の身体の場所が分かるのよ？」

『いや、確かにそれは喜ばしいことなんだが……』

しかしギニューは、未だ占いババの余裕顔に対して疑念を抱かずにはいられなかった

ここまでは確かに、順調に勝ってはいる

だが、一向に焦りを見せない占いババ

これには、やはり何か奥の手があると考えたくなるもの

事実、このギニューの推測は大いに当たっていた

「……ハルナ」

「ん？どしたの夕映？」

すると今の今まで何も言わずに観戦していた夕映が、ここに来て

何か言いたげにハルナへと口を開く

「確かに私の見る限り、ハルナのゴーレムは強くなってるです。けど……」

「けど？」

「……これではまず、アックマンさんには勝てないです」

「アックマン？」

（やはりか！）

先程までの四戦、夕映はアックマンのことについては触れずただ無言で観戦

この時おおよそながらハルナのゴーレムの力量を見極め、こうして発言したのだ

「アックマンって、さっき朝倉が言いかけてた……」

「はい、ほぼ毎日あの人と稽古してる私には分かります、実力はハルナのゴーレムとは段違いです」

「そう褒められると照れるじゃねえか、嬢ちゃん」

「ア、アックマンさん！」

そして漸く、館の奥からアックマンその人が姿を見せる

闘技場中央まで歩を進め、自分と比べ二回りは大きい炎の魔人（インフェルノ・アニキ）と対峙

肩や指の関節をパキパキと鳴らすと、即座に構えた

「悪いが嬢ちゃん、これは婆さんから頼まれてる仕事だ。相手が嬢ちゃんの友達でも、ワザと負けるなんて出来ねえぞ」

「……分かってるです」

「よし、よく言った……婆さん」

「うむ」

夕映の躊躇なき返答に感心してみせると、アックマンは占いババに試合開始の合図を促す

（で、でもこっちはまだゴーレムを合計五体出せる……いくら私のゴーレムより強くたって、五連戦もすればバテバテの筈よ）

（さっきまでの四人の戦い方は、勝ちに行こうとするそれではなかった。つまりあのアックマンという者なら、一対五でも勝てるという自信……これは厳しいかもしれんぞ）

「お主ら、本当の戦いはこれからじゃぞ？始め！」

この合図とほぼ同時に、両者は目の前の相手へと全力で突撃した

「遅いぜ、木偶の坊！」

「ファア゛アアアアッ！」

「狼牙風風拳！はいやあああああっ！」

「中々速いが……足元がお留守だぜ！」

「ぬおおっ！？」

「そおら！」

「ぐわああっ！」

「けっ、変身してパワータイプになってもこれかよ」

「ぐぐぐぐぐ……」

「せやあっ！」

「ぐぼっ！」

「そらよっ！」

「ぬがあああっ！」

「行けジース！クラッシャーボールよ！」

「（コクッ）たあああっ！」

「こんな攻撃、避けるまでもねえ！」

バッシン！

「げっ、弾いた！？」

「お返しだ！」

「よ、避けてジース！」

「ぎゃあああああっ！」

「……さて、これでそっちもあと一人じゃな」

「く……」

時間にして十分足らず

一人辺り三分にも満たぬその早さで、ハルナのゴーレム軍団は撃破されてしまった

炎の魔人（インフェルノ・アニキ）は動きの遅さを突かれ

ヤムチャゴーレムは足元に出来た隙を突かれ

ザーボンゴーレムは力の比べ合いに完全敗北

そしてジースゴーレムは屈辱的に、自身の技を真似された攻撃を喰らって消滅した

「おや？さっきまでの余裕そうな顔はどうしたんじゃ？」

（マズい、まさかこんな目茶苦茶な強さだったなんて……）

「ハ、ハルナ……」

一対五という数的アドバンテージはもはや無い

アックマンは息一つ乱さず、闘技場中央に立っていた

次のゴーレムを出そうとアーティファクトのページを捲りながら、ハルナは焦燥

その空気は、隣にいたのどかにまで伝わってくる

『しかし、何という強さだ……最終形態へと変身したフリーザ様をナメック星で見たことがあったが、あいつはそれに匹敵する強さか

もしれん……』

「アックマンさんはそのフリーザ本人とも、地獄で手合わせしたことがあるくらいです。悟空さんと戦って負けたあの時、十八年前とは比べ物になりませんんです」

ギニューはアックマンの強さに、自身のかつての主を重ねて驚きを隠せず

夕映はそのギニューに、さも当然のように話してみせた

「ほれどうした？さっきの奴ら四体で全滅か？」

（戦闘タイプで残ってるのは剣の女神とフリーザだけ……フリーザはあれから調整して制御が効くようにしたけど、こいつらじゃとても……）

勝てない

それを嫌でも感じてしまったハルナは、アーティファクトを抱えていた左腕をダランと垂らす

（力の炎の魔人（インフェルノ・アニキ）、速さのヤムチャ、両タイプに切り替え可能のザーボン、そして総合的バランスに優れたジース……どのタイプのゴーレムをぶつけても、あいつにはてんで通じなかった……）

いくらフリーザゴーレムが強いといっても、同じハルナが作ったゴーレム

その強さは所詮、先程の四体の延長線上の強さでしかない

一線を画した強さでなければ目の前の敵、アックマンは超えられない

（今から新しいゴーレム……いや、結局は同じ……）

無論それを新たに作り出すことも、今のハルナでは叶わない

（駄目、アックマンを倒す手段が……無い……）

ペンを持つ左手まで下げ、ついには顔をも俯かせた

そのハルナの様子には、のどかも『勝てない』という事実を受け取らざるを得ない

「ハルナ……」

「ごめんのどか、それにギニューさんも……やっぱり私の力じゃ、とても……」

『まだだ！まだ諦めるな！』

しかし、彼はまだ諦めきってはいなかった

「え？ギニューさん？」

『まだあと一体、出してあいつと戦える筈だ！勝利の可能性が僅かでも残っているなら、それを信じて最後まで戦い抜け！』

「けど……」

『最強なんてものは存在しない、そんなものはまやかしだ！』

このことは、ギニューもよく理解している

自身がいた惑星一の強さだと思った時、目の前にフリーザが現れた

そしてフリーザが宇宙最強かと思い長年仕えてみれば、今度はそれを超える孫悟空の存在

地球に住みついてからも見た、戦いが進むごとに移り変わる強者達

ギニューは大声を張り上げ、ハルナを激励してみせた

「……出でよ、宇宙帝王フリーザ」

アーティファクトが、五度目の輝きを放つ

そこから現れたのは、ハルナのゴーレム軍団で最強のフリーザゴーレム

既に四体撃破されてダメージが身体に募る中

『おおっ！』

「ハルナ！」

「……やったろうじゃないのよ、頼むわよフリーザ！」

「……（コクッ）」

ハルナは気合いを振り絞り、最後の一体を召喚した

「ぐわあああっ！」

「フ、フリーザ！」

しかし、試合開始から一分弱

戦況は著しく酷いものだった

アックマンの打撃をモロに受け、フリーザゴーレムは床に叩きつけられる

だが何とか受け身をとり、消滅には至らず

「へっ、地獄で戦った本物はこんなもんじゃないぜ」

「ぐ、ぐぐぐぐ……」

（だが、他の四体と比べるとかなりの強さ……大将に置くだけのこ

とはあるな）

「きえええええっ！」

フリーザゴーレムは即座に立ち上がり、再び猛攻

両手両足による攻撃

「ずあああっ！」

「よっと」

さらには尾を鞭のように振るい、攻め立てる

「はっはっは！そうこなくっちゃな！おい婆さん、闘技場少しくらいぶっ壊しても問題ねえよな？」

「……程々にな」

「よしきた！」

アックマンはそれを防ぎつつ、横目で占いババを見ながら確認

了解を得るとアックマンは、舞空術に自身の翼を併用して真上に飛翔

未だ下に残るフリーザゴーレムに狙いを定め

「そらそらそらそらっ！」

両手から無数の気弾を放った

「フリーザ避けて！こっちも空中戦よ！」

「きえええええっ！」

ハルナもすぐにフリーザゴーレムに指示を飛ばし、こちらも舞空術で飛翔

気弾の雨を掻い潜り、反撃に出る

「でやっ！」

「おっと危ない……デスビームか」

「でやっ！でやっ！でやっ！」

右手の指先から紫の光線が、次々とアックマンへと襲来

それをアックマンは、やはりスイスイと避けていく

「どうした！こんなんじゃ当たらないぜ！」

「ぐぐぐぐ……」

「落ち着いてフリーザ！」

さらにはアックマンに挑発され、怒りによりフリーザの表情が一層険しく

ハルナも慌てて命令するが、収まりきれていなかった

「マズいですね……アックマンさんがまだ全力でないからもっていますが、いつやられても可笑しくない状況です」

『ハルナよ！他にフリーザ様の技で使えるものは無いのか！？』

「ちょっと待って……えっと、デスソーサーは危険過ぎるから駄目だし……あった！」

ギニューはハルナに振り返って叫び、ハルナも慌ててフリーザのページを見て確認

その端に『使える技』として箇条書きしていた内の一つを見つけ

「フリーザ！デスボール！」

「きえええええっ！」

命令し、すかさずフリーザゴーレムは指先にエネルギーを集中させて巨大球を作り上げた

自身の数倍の大きさはあるスパークの纏った赤黒いその球は、遠くから見るギニュー達をも驚かせる

『おおっ！そんな技まで！』

「前にカプセルコーポレーションに夕映が来た時、教えてもらって追加記入してたのよ」

「フリーザの最強技の一つ、デスボール……悟空さん達との戦いでは奮わなかったものの、本物が使えば星一つ消し飛ばすことも容易に可能です」

これにはアックマンも笑みを消し、表情を引き締め向かい合う

「むっ、デカいな……この技で決めに行く気か」

現在フリーザゴーレムとアックマンは、位置的にはほぼ同じ高さに浮遊

これならば地表にぶつかり、地球へ影響が及ぶことはない

「だがこの高さだと少々心許ない、もう少し上がらせてもらうぜ」

「……」

「フリーザ、あんたも上がりなさい」

しかし余波が地上の面々を襲うことは充分にあり得る

アックマンはさらに浮上し、フリーザゴーレムも黙ってそれに合わせて浮上した

既にハルナ達には、上空の二人は大分小さくなっている

「さあ来い！この一撃で勝負を付けようじゃねえか！」

「……だあああああああっ！」

フリーザゴーレムのデスボールが、構えるアックマンへと勢いよく放たれた

第１０８話　大将アックマン登場！　ゴーレム軍団大苦戦！？（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「今回のゲストはどうなってるんだ？」

クウネル
「はい、今回はこのお二人」

ネギ
「どうも師匠（マスター）、また呼んでもらってありがとうございます」

コタロー
「しかし最近出番無くて暇やなー、こっち出れたさかいマシやけど」

クウネル
「ネギ君とコタロー君です」

エヴァ
「最近更新ペースが以前より遅めだからな、お前達が最後に出たのはもう一か月前か」

ネギ
「はい……まあ、千雨さんとかと比べたら大分良いんでしょうけど」

クウネル
「一人称のアレを除いて出番なしですからね」

コタロー
「しかもあの世一武道会関連のイベントもオールパスやし」

エヴァ
「あいつ……出番欲しくないのか？」

クウネル
「元々人前で目立つのは好きじゃないようですからね、ドラゴンボール収集話辺りでの活躍に期待しましょう」

エヴァ
「……あいつが活躍出来るのか？」

クウネル
「ではコーナーの進行を、今回の話ですが……」

エヴァ
「……作者は『一話一ネタ』の方針でも固めたのか？」

ネギ
「え？今回何かパロディがありましたっけ？」

エヴァ
「あったよ、特に言及はしないがな、めんどくさいし」

コタロー
「あとパル姉ちゃんのゴーレム軍団って、フリーザのが最強なんやな」

クウネル
「今回のを書くにあたって、『大将戦はアックマンＶＳフリーザで組みたい→じゃあフリーザが一番強い』というのを急遽決定したそうです」

エヴァ
「まあ実際、炎の魔人を倒せる実力のヤムチャが苦戦したくらいだしな」

クウネル
「落書帝国（インペリウム・グラフィケース）といどのえ日記のコンボは作者もお気に入りのようですよ」

ネギ
「じゃあまさか、セルゴーレムとか悟空さんゴーレムとか……」

クウネル
「検討中だそうです」

エヴァ
「やめろ、見た目と実力にギャップがあり過ぎてなんか見てて残念になる」

注・まあ、とりあえず『検討中』で

クウネル
「では続きまして、次回予告です」

ネギ
「さて、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「このままでは負けると悟ったか、賭けに出た早乙女ハルナとフリーザゴーレム」

クウネル
「今回の話のラストにもあるように、必殺技デスボールで勝負を決めにかかります」

ネギ
「果たして技は成功するのか？そして勝負の行方は？」

コタロー
「っちゅー内容やな」

エヴァ
「次回の更新予定は来週の水曜日」

クウネル
「感想、リクエスト等々お待ちしています」

コタロー
「それじゃ、次回のネギドラ！も……」

エヴァ&クウネル&ネギ
「お楽しみに！」

エヴァ
「ところでお前達は今（五日目）何をしているんだ？」

クウネル
「そういえばそうですね……今回描写はされないようですし、教えてもらえますか？」

ネギ
「はい、いつも通り修行とか、悟飯君の勉強を見たりとかですね」

コタロー
「あとは家の手伝いやな、畑で野菜植えたりして育てとるところや」

ネギ
「この世界の野菜って凄いんですよ、植えたらほんの数日で収穫出来るんです」

エヴァ
「ん？その野菜ってもしかして……」

注・アレです

第１０９話　戦い終結　光と共にチェンジの叫び（前書き）

遅れてしまい本当にすみませんでした、次回以降は本当に気をつけます。
ではどうぞ！

第１０９話　戦い終結　光と共にチェンジの叫び

「……だあああああっ！」

ハルナの使役するゴーレム軍団

その中で一番の実力を誇るフリーザは今、アックマン相手に自身の最強技を放った

デスボール

スパークを纏った赤黒い球状のそれは、構えるアックマンへ容赦なく襲いかかる

「嬢ちゃんの親友も中々やるじゃねえか、本物のフリーザのにそっくりだ……」

そう、アックマンは構えたまま動かない

避けようとせず、ただ正面からデスボールを見据えたままなのだ

喰らっても耐えきれる自信があるのか、または何か技を放って撃ち合いに持ち込むつもりなのか

「……形は、な！」

後者だった

アックマンはガッシと両手を組み、そこに気を集中

一般人でも目視出来る程に気が集まると、今度は両手を解く

左右それぞれの、親指とそれ以外の四指

互いを繋ぐように青い気が延びる

手そのものを纏う気も合わせると、気で出来た一つの輪のよう

「キルドライバー！」

その輪をそのまま、アックマンはデスボール目掛けて撃ち放った

「頑張れフリーザ！」

「ぐぐぐぐぐう……」

下からのハルナの激励が聞こえたか、フリーザゴーレムはさらに力を込める

デスボールはキルドライバーをそのまま飲み込まん勢いで、さらにアックマンへと迫った

「……へっ、まだまだあああっ！」

が、アックマンはそれをさらに超える力をキルドライバーへ注いだのだ

青い光の輪は一層大きさを増し、デスボールを押し返す

いや、押し返してるというよりは

「!?」

デスボールに、光の輪そのものをはめ込もうとしてるように見えた

「そらあっ！もう一発！」

「っ！」

その予想は的中

壮絶な撃ち合いの中、アックマンはさらにもう一つのキルドライバーを発射

第一撃に続いて、これもまたデスボールにぶつかってはめ込み

「ぐっぐぐぐ……」

デスボールがアックマンへと向かっていくことはなくなった

空中で完全に動きを止められ、フリーザゴーレムがいくら操作しても断固として動かない

「はあああああっ！」

「!?」

そして次の瞬間、二つの光の輪は一気に収縮

小さくなったそれらはデスボールを力強く締め上げ

最後には

カッ！

ボオオオオオオオンッ！

「きゃあっ！」

「な、何なのこれ！？」

「おそらくフリーザゴーレムのデスボールが、アックマンさんの技によって空中爆発したです！」

両者の間で大爆発を引き起こした

距離をかなり取ったにも関わらず、地上にも爆風

腕で目元を覆う一同は、爆風が収まるや否や上空を再び見上げて確認する

「フ、フリーザ！」

「ぐわあああああああっ！」

飛び込んできたのは、鉛直下向きに叩き落とされるフリーザゴーレムの姿だった

爆発で怯ませ、同時に目晦ましを敢行したアックマンは一瞬でフリーザゴーレムの背後へ

反応されるよりも速く、気の込められた一撃をお見舞いした

『このまま落ちれば……マズい！湖でなく闘技場の床だ！』

「激突したらタダじゃ済まないです！」

「フリーザ！」

「……きえええええええっ！」

床に直接叩きつけられれば、消滅はまず免れない

落下していくなか、下を目視していたフリーザゴーレムは即座にそれを把握

最後の力を振り絞り、下に向けた両掌から念動力を発した

気はもう殆ど無いため、舞空術によるブレーキは追いつかない

『おおっ！』

「あ、危なかったです……」

「とわっ！」

ならばこっちだ、と念動力により衝撃を緩和

ゆっくりと手で床をつき、そのまま腕をバネのようにして跳ねて全身を立たせた

「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ……」

「粘るなおい……もう息切れしてんじゃねえか、気も尽きかけだしよ」

しかし、そのままアックマンと勝負再開といけるかとは別問題

息も絶え絶えな状態で、両足もガクガク

術師であるハルナもやや顔色が悪くなっており、両者共に限界が近いことが伺える

「ハルナ大丈夫？顔色悪いよ？」

「平気平気、ちょっと身体の節々が痛いだけ。大会前の特訓で、トランクスさんを相手にしててよくあったじゃない」

「ハルナ、私としてもあまり無理は……」

「平気だってば」

心配そうにする親友二人に余裕ぶった仕草を見せると、ハルナは再びフリーザゴーレムの方へ

再び指示を飛ばすべく、アーティファクト片手に向き直った

「（気が尽きかけだってんなら……）フリーザ！さっきみたくアックマンへ念力攻げ……」

「遅いぜ！」

「ぐわっ！」

「っっ！」

早速命令したのだが、アックマンはそれより数段速く攻撃

フリーザゴーレムの頬をダイレクトに捉え、頭から床へダウンを

奪う

それに伴い、ハルナへと痛みが走ったのも時を同じくしてのこと

『も、もういい！無茶をするな！』

「そ、そうだよパル！」

ついにはギニューもハルナを止めようとし、朝倉もそれに続いたが、ハルナはそんなギニューの言葉を聞き流し、朝倉の手も振り払う

だし、勝ち無しのままじゃ終われないわよ……」

茶々丸さんに負け……ヤムチャさんとも実質引き分けみたいなもん

「まだまだ……パル様自慢のゴーレム軍団、トランクスさんに負け

「でやああっ！」

「遅い！」

「ぐぶっ！」

「ううっ……」

その間にフリーザゴーレムがアックマンに殴りかかったが、かわされ腹にパンチ一発

当然このダメージも、ハルナへ痛々しく返った

「（あれだけの攻撃を受けてゴーレムが消滅しないなんて……自身へのダメージが限界を超えたにも関わらず、無理に我慢し続けてる証拠ではないですか！）ハルナ！今すぐフリーザを引っ込めるです！」

「平気……だってば……」

夕映の静止もやはり受けず、ハルナは続行の意を示し続けるのみ

もう我慢が出来ず、夕映は叫んだ

「アックマンさん！フリーザを場外に出してくださいです！」

「ちょっ、夕映……あんた何勝手なこと……」

これなら、フリーザゴーレムやハルナに戦い続ける意思があろうとも試合が終わる

「ギニューさんの身体の場所なら、私が占います！まだ未熟ではありますし、絶対成功するとはとても言い切れません……ですが、これ以上ハルナの苦しむ顔は見たくないです！」

「夕映……」

アックマンも、ハルナが限界なのは薄々分かっていた

夕映の言葉に、確かにそうだなと納得し、フリーザゴーレムの腕を掴んだ

狙うは場外

これで全て終わる

「ぐっ、ぐぐぐ……」

「……けど私は、最後の最後までやる！耐えてフリーＺ」

そうはさせんと、最後の抵抗としてフリーザゴーレムは必死に抗うが

「チェーーーーーーーーーーンジ！」

このギニューの叫びと、同時に飛び出した光

ドボン！

「ふむ……場外、じゃな」

そして湖から聞こえた水音

これで、決着はついた

（今の光……そうか、あれがジース達から聞いた……）

闘技場に一人立つのは、アックマン

数秒し、湖から上がってきたのは

「……プハッ！ぐおおっ！」

「ギ、ギニューさん……」

「なあに、これくらいの痛み……それより済まなかったな、これも元はと言えば私が原因だ」

咄嗟にフリーザゴーレムとボディチェンジで身体を入れ替え、無抵抗で場外に投げ飛ばされたギニューだった

「痛い痛い痛い痛い痛い！ちょっと夕映、治すなら早くしてってば

！」

「どの口が言うですかまったく……プラクテ　ビギ・ナル……」

「ギニューさん大丈夫ですかー？さっき凄く痛そうでしたけど……」

『問題ない、こうして無傷のカエルの身体に戻ったからな。しかし数年ぶりに使ってみたが、成功して良かった良かった』

一同は再び、館の屋内へと移動

夕映はハルナの傷の手当てにあたり、他の皆は談を交わしている最中

ギニューも既にフリーザゴーレムと身体を交換し直し、フリーザゴーレムはアーティファクト内に戻された

「治癒（クーラ）」

「あ～、効く効く効く効く～」

夕映の回復魔法は、ここでの修行をさらに積んだためかさらに向上

傷はたちまち治っていき、ハルナは安堵の表情を浮かべる

「しっかしすごかったねー、あれがボディチェンジか……」

「相手の身体を強制的に奪う技『ボディチェンジ』、傷ついた自身の身体を相手に押し付けたり、味方を装って陽動作戦を狙ったり……使い方は多種多様ですからね」

『だが奪った直後だと、身体の扱いがなかなか難しくてな……孫悟空達に敗れたのも、それが大きかったな』

「気をコントロールして戦う型（タイプ）でしたからなおさらですね」

「あのー、もしかして私とも身体を交換出来ちゃったりします？」

「それはちょっと難しいですね……て、さよさんいたんですか？」

「はい」

「といってもちょっと前からだよ？フリーザがデスボール撃ったあたりから」

「爆発した時はビックリして、思わず叫んじゃいました」

さらに夕映は、アックマン経由で得たお馴染みの知識を朝倉に披露

当の本人であるギニューや相坂さよも加わり、話は盛り上がりを見せた

「はい終了、まあこんなとこですね……しかしハルナ、今度からあんな無茶は止すですよ？」

「そうだよー」

「ははは、ゴメンゴメン……ちょっと私もムキになっちゃってたかな」

杖を仕舞いながら、夕映は眉をひそめハルナに警告

ハルナも振り返ってみてかなり危ないことをやっていたのを自覚したか、素直に謝り約束する

「さて、でも負けちゃったか……ごめんねギニューさん」

『いや、いいんだ……それにこちらこそ無理をさせてしまった、済まなかったな』

「それでハルナ、どうするです？さっきも言いましたが、私で良ければ占いますよ？」

夕映は着ていたローブからゴソゴソと水晶玉を取り出し、尋ねる

大きさは占いババの持つ水晶より小さく、手のひらサイズ程度

占いババがくれた御下がりの物のようで、布に何重にも包んで大切に持っていた

「それじゃ、やってもらおうかな」

「お願い夕映ー」

『うむ、よろしく頼む』

「はいです、プラクテ　ビギ・ナル……」

友からの了解を受け、夕映は早速詠唱を開始

たちまち水晶には光が灯り、呪文が進むにつれその光量は増して

いく

「我の求めし者・場所よ　精霊の力によりて今ここに示さん……聖玉の導き！」

『おおおっ！』

「すごいよ夕映ー！」

「さっすがー！」

以前、最終試練として朝倉達の前でやったのと比べ、大いに見違えた

無駄なく夕映の魔力は水晶へと注がれ

『これだ！私の元の身体だ！』

カエルの動きでピュコピョコ飛び跳ねる、ギニュー（カエル）の姿がそこには映っていた

第１０９話　戦い終結　光と共にチェンジの叫び（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「また締め切り破ったぞ作者……」

クウネル
「まあまあ、活動報告にもあった通り、今回色々あったらしいですし」

エヴァ
「それを何人が読んだのかも疑問だよな……というか、活動報告にまでネタを仕込む始末だし」

クウネル
「ではまずゲストの紹介です、今回はこの方」

スラッグ
「はっはっは！我こそ最強のナメック星人、スラッグ様だ！」

エヴァ
「こいつか、そういえば初登場みたいだな」

クウネル
「はい。あと、ピッコロさんを除けばナメック星人最強なのも事実です」

スラッグ
「何を言う！ピッコロなんぞ前に地球を攻めた時、俺様よりてんで弱かったぞ！」

エヴァ
「おい、こいつ地獄から何も見てないのか？」

クウネル
「ではコーナーを進行させますか」

エヴァ
「の前に、今回遅れたわけを聞かせてもらおう」

クウネル
「作者の携帯電話が水没してモチベーションがだだ下がりしたんです、というわけで今回の話ですが……」

エヴァ
「っておい！アッサリ言ってそのまま流すな！」

クウネル
「いや、でも理由が本当にそれなわけですし」

エヴァ
「というか作者！水没なんて間抜けな真似するな！」

注・防水携帯にしておけば……

エヴァ
「そうじゃないだろ！」

クウネル
「まあまあエヴァンジェリン、それより今回の話なんですが」

エヴァ
「それよりって……まあ、うむ、ようやくバトンにあったセリフ一つ目の登場だな」

スラッグ
「ボディチェンジか……確かに敵に回すと恐ろしい技だな」

クウネル
「実を言うとあのボディチェンジ、『アックマンさんと交換して自ら湖に飛び込んでゴーレム軍団の勝ちにする』というストーリー案もありまして」

エヴァ
「お、いいじゃないか、何で変えたんだ?」

クウネル
「ギニューさんに『諦めるな』的なセリフを言わせてしまったため、そんな手前それはダメだろと作者が判断したようです」

スラッグ
「じゃあ何でその『諦めるな』的なセリフを言わせたんだよ」

クウネル
「執筆当時『何かもう少し入れないと尺的に短くなる』という事態になったため、急遽突っ込みました」

エヴァ
「そしてそのまま次の話のストーリー展開に変更が生じた、と。何かそういうの多いな作者」

スラッグ
「それと、アックマンとかいうやつは変わった技を使ってたな」

クウネル
「あれは元々ターレスさんの技ですね、地獄で交流があった際に自力で会得した模様です」

エヴァ
「というより、原作でアクマイト光線以外ちゃんとした技がないしな」

クウネル
「ゲームでもあとはフォークを使った武器攻撃ばかりですからね、流石にそれは作者も使わせたくなかったようです」

エヴァ
「あと、また相坂さよが空気化してたな」

注・本当にすいません、登場人数が増えるとついついさよを書くのを忘れてしまう自分が……

エヴァ
「会話シーンに登場したのもいきなりだったしな」

クウネル
「コホン、では気を取り直して次回予告です」

スラッグ
「さて、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「綾瀬夕映の魔法を頼りに、ギニューの身体探しを再開させた一同」

クウネル
「ついに発見かと思いきや、予想だにしないハプニングが発生したようです」

スラッグ
「果たして、ギニューらの運命や如何に！？って内容だな」

クウネル
「次回の更新予定は、来週の水曜日です」

エヴァ
「今度こそ、水曜なんだな？」

注・今度こそ水曜です！

スラッグ
「いつも通り感想や質問、リクエストも待っているぞ！」

クウネル
「では皆さん、次回のネギドラ！も……」

エヴァ＆スラッグ
「お楽しみに！」

エヴァ
「ところでお前、手下達は連れて来なかったのか？」

スラッグ
「あ？」

クウネル
「リクエストに『スラッグ』としか書かれてなかったので、他の方々はお呼びしませんでした」

エヴァ
「ターレスの方は『ターレス軍団』なのにな……」

スラッグ
「まあ、俺様一人の方が目立つし別にいいぞ」

第１１０話　見つけたぞ我が身体　喜ぶ皆へ危機迫る（前書き）

最近ギニューばっか書いてたんで、ｗｉｉのゲームでもギニューを今まで以上に頻繁に使うようになりました。それなりにバランス良くて使いやすいんですよね、ギニュー（やや技の火力が低めなのが難ですが）

ではどうぞ！

第１１０話　見つけたぞ我が身体　喜ぶ皆へ危機迫る

「ねえハルナー、目的地まではあとどのくらいなのー？」

「うーん、あと数十分ってとこかしら」

『いやーそれにしても楽しみだ、ついに私の元の身体と再会出来るのだからな』

占いババの館での激戦、それが終わってから早一時間近く

親友綾瀬夕映の占いによって指し示された場所へ、一行はゴーレムに乗って飛行を続けていた

水晶に映ったのは、とある森の中

辺りに木々の生い茂るその中で、ギニュー蛙はピョコピョコと元気良く飛び跳ねていた

しかし外見が人型ということもあり、見た目的にはかなり不気味な光景

また、いる場所が単に『森の中』というだけでは厳しすぎるかと思われたが、そこは簡単に解決

ギニュー蛙が映る映像をズームアウトさせ、周囲の風景を確認

するとギニュー蛙のいる場所は、『聖地カリンの近くにある森』

ということが発覚したのだ

夕映は聖地カリンの場所を普通に把握しており、ハルナの持っていた地図に×印を一つ

そこへ向け、飛んでいる最中なのだ

「ていうか、本当なら夕映もついてきて欲しかったわよね。道案内として」

「しょうがないよハルナ、夕映は夕映で修行とかで忙しいんだし」

『お、あれがカリン塔か』

そんななか、ギニューが前方にそびえ立つ塔を発見

雲より上へさらに延びるその大きさは、正に圧巻

夕映に『目印になるので』と予備知識として教えられはしていたが、実際に見てみるとやはり驚いてしまうのどかとハルナ

「すごーい……」

「あれを一番下からてっぺんまで登ってくんだったっけ?よくやるわねそんなこと……」

感嘆する間も、ゴーレムは飛行を止めず進み続ける

カリン塔を目印としたまま、そのまま数十分飛行

「「ついたー！」」

そして、森の入口へと到着した

聖地カリンに直接、という手もあったが迷惑がかかりそうなので自重

平原との境目にゴーレムを着陸させ、アーティファクト内に回収

続いて森の方に身体を向け、両手を腰に当てる

「さて、この中にギニューさんの元の身体があるわけね」

『うむ、そのようだな』

「でもこの森も結構大きいよね、探すの大変かも……」

意気揚々に臨もうとするハルナとギニューだが、少々のどかはまだ不安げな様子

無理もない、この森一つに範囲を狭めたとはいえここもかなりの

広さ

三人だけで探し回るというのは、やはり難しいか

「大丈夫だって、こんな時のこれよ。パル様ゴーレム軍団全員集合！」

しかし、ハルナはそんなのどかの心配をアッサリと無用にさせた

フフンと笑いながらアーティファクトを開き、先ほど戦ってもらったばかりのゴーレム達をまとめて召喚

見開き二ページ分しかない入口から皆が窮屈そうにしつつも一斉に現れ、ハルナの前に整列する

「というわけでみんな、今から森の中に入って『蛙の動きをする怪しい人型の生き物』を探してきて頂戴。あ、それと森は極力荒らさないこと」

ゴーレムらはハルナに対して従順に従い、首を縦に一回振るや否や森へと突入した

「さて、あとは使役範囲を最大限まで広げるために私達が森の中に……って、ゴーレムもう少し増やしたほうがいいかしら」

ハルナは続いて羽ペンを手に取ると、得意の速筆でゴーレム制作を開始する

もはや、のどかとギニューは眼中に無し

故に、ハルナは気付かなかった

ビチャッ

「ちょっとギニューさん、いきなり肩に乗ってこないでよ。服がベトついて後が大変じゃない」

肩に湿っぽい感覚を覚え、ハルナはアーティファクトに目を向けたままギニューに抗議

が、

『いや、それは私じゃないぞ、というか……』

当の本人がそれを否定する

「じゃあ誰だってのよ？」

「ハ、ハルナ！うしろ！うしろ！」

「何よのどかまで、私は志村けんじゃないってｎ……」

さらにはのどかにまで言われ、どうしたんだと漸く後ろを振り向くと

「……」

「グルルルル……」

「……え？」

ハルナ達のいた地球では既に存在しえない超巨大生物が、涎を口から垂らしつつそこにはいた

「グガアアアアアッ！」

「「『うわあああああああっ！』」」

その超巨大生物、恐竜が咆哮すると、一同は叫び声をあげながら森の中へと駆け込んでいった

「あーびっくりした……なんで恐竜が現代にいるのよ……」

「図書館島で見たドラゴンも怖かったけど……やっぱり恐竜さんも怖かったよぉ……」

呼吸を整え、近くの木に身を預けるのどかとハルナ

森の中にまでは、あの恐竜も追っては来ず

しかしながら後ろを見ずただただ走っていた二人は、それに気付

くまでの約一分を走り続けていた

「……よし、もう追ってこないわね」

自分らが走ってきた方を見て、恐竜が追ってこないことを確認

「やっぱ護身用に一体はゴーレムを傍に置かないと危ないわね……

のどか、ちょっと周り見てて」

「う、うん」

気を取り直し、ハルナは羽ペンを再び構える

さっきのような事態を起こさないようにすべくのどかに見張りを

頼み、ゴーレム制作を再度開始

元々恐竜から逃げる前に少し描いていたため

「……出来た、出でよ！特攻自爆培養生物　栽培マン！」

完成までに三十秒とかからなかった

ネギよりも何周りか小さい体躯に、緑と黄緑色を組み合わせた体色

四肢にはいくつもの溝があり、頭部には血管が網目状

「確かそれって、アーティファクトをヤムチャさんへ最初に使った

時の……」

「そういうこと、外見が個性的だったから覚えてたのよ」

「……やっぱりちょっと怖いね」

「そこはまあ、我慢よろしく。即座に思いついたのがこれだったんだから」

「ギギギイィィ！」

真っ赤に染まる目を大きく開きながら、栽培マンゴーレムは鳴き声を発する

作りがまだ他のゴーレムと比べて甘いため、戦闘力としてはおそらく一番格下

だが、地球上に生息する一般生物から彼女らを守るには充分な強さだろう

とりあえずこれで一安心だと、二人はフーと息を漏らす

しかし

「さて、捜索再開ね」

「うん、じゃあ行きましょうギニューさ……ギニューさん！？」

「どったの？のど……あれ！？ギニューさんがいない！」

「きっとさっき恐竜から逃げた時に逸れちゃったんだよ！どうしよー！？」

肝心の宇宙ガエルの姿が無いことに気付き、『安心』という言葉は彼方へと消えていった

『……おーい、二人共どこだー』

その当人ギニューは、現在一人寂しくのどか達を捜索中

のどかやハルナの肩に乗らず、自力による移動のみで恐竜から逃げおおせていた彼

逃げ切れはしたものの、二人より大きく後れを取り、ついには姿をも見失う

『ううん、マズいことになった……森の中の肉食獣と出会ってしまえば、下手をしたら食われてしまう』

生い茂る森の中、見渡しは悪い

周囲に警戒をしつつ、ギニューは辺りをじっくり捜索していた

『この身体な故、叫んでも声の大きさはたかが知れているし……逆

に森の動物に見つかりかねん』

さてどうしたものか、とギニューはピョコピョコ跳ねながら移動を続ける

そうやって数分もした頃、ついにギニューは前方に人影をとらえた

『ん？おおっ！さっきのゴーレムではないか！』

だがのどかやハルナではなく、森に到着してすぐハルナが放ったゴーレムの内の一体

ザーボンゴーレムが左右に首を振りながら、森の中を進んでいた

『おーい！私だー！ザーボンー！』

喜びの笑みを見せながら、ギニューはザーボンゴーレムの方へ急いで駆ける

「……」

『（まさか気付いてないのか！？）おーい！私だー！乗せてってくれー！』

しかし、ザーボンゴーレムはギニューに対して眼中なし

ある一定方向へ向かって歩行を続け

「っ！」

『お、おい！待ってくれー！』

ついには走り出し、ギニューとの距離を離していった

この機を逃しては、次の合流はいつになるのか分かったものではない

ギニューは全力をもって、ザーボンゴーレムをひたすらに追う

と同時に、とある考えが頭の中を駆け巡った

（一体どうしたというんだ！？さっきまで普通に歩いていたのに急に走り出すなんて、なるで何か見つけたかのような……まさか！）

ザーボンゴーレムの姿を見失った後も、通った跡らしきものを見つけては追いかけ続ける

それから何分か経った後のこと

『はあっ、はあっ、ようやく追いつい……！！』

ギニューの予想は大当たり

『み……み……』

目の前にいるのは、走るのをやめて立ち止まっているザーボンゴーレム

そしてもう一人

『見つけたぞーーーーー！我が身体よーーーーーーーー！』

カエル座りのまま、うわの空でいるギニュー蛙だった

チェーーーーーーーーーーーンジ！！

「こ、この辺りだったわよね！？」

「う、うん……占いババさんの館で見たのと同じ光」

のどか、ハルナの両名

森の中のとある一角から放たれた光を目にし、急行

数時間前に見た光とそれは極似しており、あそこにギニューがいるのだと半ば確信していた

「ギニューさーん！」

「どこですかー、いるなら返事してくださーい」

樹木が半径数メートルほど生えておらず、少しながら開けた場所

確かこの辺だったとあたりをつけると、両手を口元に添えてギニューの名を大声で呼ぶ

互いに背合わせとなり、より声を広範囲へ

「おーい！ここだここだー！」

「ギ、ギニューさん！？」

すると数秒と起たず、木々の奥からガソゴソとかき分けてギニューが姿を見せた

さっきまでのカエルの姿でなく

「元の身体、見つかったんですね！」

本来の、ギニュー特戦隊隊長としての姿でだ

いどのえ日記でこの姿を予め知っていた二人は、今のギニューの身体がそれなのだとすぐに把握

まるで自分のことであるかのように喜び、すぐさま彼の方へと駆け寄る

「ああ……二人とも、本当にありがとう」

感涙のギニューであるが、溢れそうになる涙を堪えてのどか達に頭を下げた

そんなことしなくてもいいですと二人は言うが、それでもギニューは感謝の念が尽きなかった

「……でもその身体、カエルさんにまた返しちゃうんですよね」

「いいんだ、こうして一時(いっとき)戻れただけでも私は満足なんだ……もう思い残すこともない」

「ギニューさん……」

あとこのままもう少しだけいたら、またカエルにこの身体を渡そう

そうギニューは言うと、次にのどかからハルナへと視線を移す

「それでだ、あと一つだけ頼みたいことがあるんだがいいか？」

「私？」

この身体でいるのもあと少し

その間に、最後にギニューはあることをして生を終えたかった

「ああ、さっきのスケッチブックみたいな道具でジースを呼び出していただろ？」

「呼び出したというか、『ジースさんの姿を描いて、それをゴーレムとして召喚した』ですね」

「それでいい、そこで他の三人の隊い……！」

そこまで言ったところで、ギニューの表情が急変

「危ない！」

「え！？」

「きゃあっ！」

のどかとハルナを両腕で抱きかかえ、倒れ込むように地面へと伏せる

ボガンッッ！

「ぐおおおおおっ！」

「「ギニューさん！？」」

しかし完全には避けきれず、二人を庇うような形で背中に何かが直撃した

フリーザゴーレムと身体を交換した時よりも、その表情は酷く険しい

「ちっ、既に元に戻った後だったか……だがようやく見つけたぜ」

ギニューに攻撃した男

上空にいた彼は悪態を突きながら、三人の近くへと着地した

「ギニューさん！ギニューさん！」

「ちょっ！いきなり何てことするんですか！」

「貴様らは黙ってろ！」

「っ！」

そして抗議するハルナを一喝する

「折角あの時お情けで生かしてやったってのに……まだ懲りてないのか！ギニュー！」

「べ、ベジータ……」

ギニューのかつての敵、ベジータ

重傷の身であるギニューの方へ、彼はゆっくりと歩み寄ってきた

第１１０話　見つけたぞ我が身体　喜ぶ皆へ危機迫る（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「で、今回のゲストは？」

クウネル
「はい、今回はこのお二人」

アスナ
「いやー、それにしてもトランクスさん剣術も強いわねー、刹那さんと互角くらいかしら」

刹那
「いえいえ、パワーやスピードはトランクスさんの方が格段に上です。普通ならまだしも、超サイヤ人になってしまえば私に勝ち目は皆無ですよ」

クウネル
「アスナさんと刹那さんのお二人です」

エヴァ
「おい、さっきの会話は何だ？」

アスナ
「え？前に刹那さんやトランクスさんと合同で剣の稽古してたのよ」

刹那
「あの部屋に半年もいましたし、アスナさんと剣を交わすのは本当に久しぶりでしたね」

エヴァ
「……そんなの本編であったか？」

クウネル
「なかったですね、ただ以前頂いた感想で『明日菜ＶＳトランクスの剣の戦いをしてほしいなー』というのがあったため、事実上あったことにしました」

エヴァ
「……これも以前触れた作者の構成ミスか？」

クウネル
「いわゆるそれです」

エヴァ
「……」

注・こんな形になってすいませんｓｏｌａさん

エヴァ
「で、結果はどうだったんだ？まあ大方予想はつくが」

刹那
「元々の身体能力の差もありましたが、アスナさん二週間の間殆ど剣に触れてなかったみたいで……」

アスナ
「て、天津飯さん相手にそういうことは出来ないじゃない」

クウネル
「でも刹那さんは、ピッコロさんとの修行の合間に欠かさず続けてたみたいですよ」

アスナ
「うっ……」

エヴァ
「つまり、トランクスの完勝だったと」

刹那
「はい、アスナさんの魔法無効化能力（マジックキャンセル）も一応何度か使われたんですが、あくまで『剣』での手合わせでしたから」

アスナ
「またやりたいけど……時間が、ね」

エヴァ
「おい作者」

注・本当にすいませんでした

クウネル
「ではコーナーを進行させましょう、今回の話ですが……」

エヴァ
「まさかのベジータだったな」

アスナ
「何でベジータさんがパル達を追ってくるのよ」

クウネル
「それの説明は次話で」

刹那
「しかし、恐竜とは私も驚きました」

エヴァ
「そうそう、何気にあっちの地球では絶滅してないんだよな」

クウネル
「まあこちらの方にはドラゴンがいたりと、似たり寄ったりではありますが」

エヴァ
「いや、あいつらの地球にもドラゴンはいたぞ？」

注・何で途中から出なくなったんでしょうね

エヴァ
「構成的な関係じゃないのか？そもそもあいつはアニメオリジナルキャラだし」

アスナ
「ところで文章に『超巨大生物』ってあったけど、あの恐竜はどんくらい大きかったわけ？」

クウネル
「『Z』のOPで悟飯君を追いかけてるのと同じくらいです、というか同種ですね」

エヴァ
「他に浮かばなかっただけだろ……」

刹那
「あと気になったんですが、ギニューさんとの再会時点で栽培マンゴーレムはどこに？」

クウネル
「一応ハルナさん達の後ろに控えています、ただ描写が無いだけで」

エヴァ
「というか自爆させたらかなりヤバくないか？早乙女に帰るダメージ的に」

クウネル
「少なくとも次の話で自爆はしないらしいのでご安心を」

エヴァ
（あ、次回のあいつの末路が大体分かってしまった……）

クウネル
「では続きまして、次回予告です」

アスナ
「さて、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「ギニューを始末せんと、突如空から襲来してきたベジータ」

クウネル
「そうはさせまいとのどかさんとハルナさんが抵抗、しかし実力差は明白で……」

刹那
「それに対しギニューさんはどう動くのか」

アスナ
「そして三人の命運や如何に!?……って内容ね」

クウネル
「次回の更新予定は来週の水曜日、クライマックスなので文量を多めにしたいとのことです」

エヴァ
「感想に質問、リクエストも募集中だ」

刹那
「では、次回のネギドラ!も……」

エヴァ&クウネル&アスナ
「お楽しみに!」

アスナ
「しかしこのシリーズも随分と長引いてるわね、作者の更新速度が落ちたせいもあるけど」

刹那
「かれこれもう一カ月以上ですね」

クウネル
「『本来の予定では3、４話で終わらせるつもりだったんですが……』とのことです」

エヴァ
「また引っ張り癖か……」

注・最低でもあと二話以内で終わらせます！

第１１１話　狙われたギニュー　パルゴーレム必死の抗戦！（前書き）

今回はなんと、二話投稿になりました！一年（以上）ぶりです！
あとがきコーナーは一本だけにして１１２話の方に書いてます、あと１１２話の前書きも省略です。
ではどうぞ！

第１１１話　狙われたギニュー　パルゴーレム必死の抗戦！

「ただいまー、ちょっといい？」

「お帰りなさいブルマさん。どうぞどうぞ」

これは数時間前、ハルナ達が西の都を発ってから少し後のこと

会社の仕事をひとまず終えたブルマが、葉加瀬のいる研究室へ

「おいブルマ、早くしろ」

「分かってるわよ」

外にはベジータが、腕を組んだまま待機していた

「どうしたんですか？」

「なんだか、ベジータがいつも使ってる重力装置の調子がおかしいんだって。どっか壊れたのかもしれないし、修理用具と部品を持って行こうと思っ……あら？」

葉加瀬に答えながら、ブルマは棚の中を捜索

すると何かに気付いたのか、顔を葉加瀬へ

「ねえ葉加瀬、ここにあった部品……重力装置のとは関係無いんだ

けど、もしかして使った？」

「あ、すみません、大事な物でしたか？」

「いや、そういうわけじゃないんだけど……ちなみに何に使ったの？見たところそれらしき物は見えないけど」

「いえ、ちょっと宮崎さん達に『カエルの翻訳機』を作って欲しいと頼まれまして。作ったやつはもう渡しちゃいました」

「ふーん、カエルの翻訳機……え！？」

聞き終えた刹那、ブルマの中で嫌な予感が走った

「探してみたら設計図らしい物があったのですぐに作れました。あれってブルマさんが書かれたんですか？」

「え、ええ……」

さらにそれは加速する

確かに自分は数年前、とある惑星で作った翻訳機の設計図を『一応』書いて残してはいた

だが、あれはある意味自身にとっては良い思い出が無い

故に書いたものの研究室の奥底にしまい込み、そのまますっかり忘れていたのだが……

「……首輪型、よね？」

「はい」

「カエルって、大きさは？」

「このくらいでした、首に嵌めるタイプなのでちゃんとサイズは測って覚えてます」

大きさも一致

「……色は？」

「青緑でした、パステルカラーの。中々珍しい色ですよね、こっちの地球にはよくいるんですか？」

色も一致

「……他に特徴ってなかった？」

「そうですね……あ、触角！カエルなのに触角が生えてました！」

最後の一つも一致

「うそ、ってことは……」

「おいブルマ、何をしてる！さっさと重力装置を直せ！」

「それどころじゃないわよベジータ！カエル！ナメック星のあのカエルが！」

「カエル……何!?ギニューだと!?」

待ち切れず中まで入ってきたベジータに、ブルマは慌てて事態を説明した

そして現在

気の小さいハルナにのどか、そしてカエルギニューの捜索には困難を極めたがついに発見

要因としては、森での捜索をさせるためゴーレムを片っ端から一度に召喚したことが挙げられる

占いババの館では一体づつであったためさほど目立たなかったが、一気に七、八体も出れば流石に感知は容易

ぶっ飛ばしてパオズ山辺りまで探していたベジータだが、すぐさまカリン塔付近のこの森にたどり着いた

「しかも貴様のことをよく知らないこいつらを利用するとはな……よくもまあ考えたもんだぜ」

「……お前達、私から離れろ」

「ギニューさん、でも」

「そんな大怪我して……」

「いいから離れろ……ぐうっ、巻き添えを喰うぞ……」

近づいてくるベジータを見て、ギニューは痛みに耐えながらうつ伏せであるその身を起こす

そしてすかさずのどか達に離れるよう指示し、立ち上がってベジータと向かい合った

「この俺とやろうってのか？ガキ共を下がらせたのは戦うのに邪魔、と」

「いや、お前がフリーザ様をも超える実力であることは既に認知している。抵抗して戦ったとしても、勝つことはおろか逃げることすら叶わんだろう」

「ほう、なんだ分かってるじゃないか……」

ギニューの態度に、ベジータはやや拍子抜けしながらも感心してみせる

てっきり殺されまいと抵抗、さらにはボディチェンジや人質でも使ってくるのかと思っていただけにだ

だがボディチェンジの方はやはりまだ警戒しているのか、右拳は気を込めて握ったまま

あの技を使ってくるようなそぶりを少しでも見せれば、それより先に殴って止めるつもりでいた

「だが一つ頼みがある。私を殺すにしても、さっきまで私がいたあのカエルの身体で死なせてくれ」

ギニューはそのベジータの思惑にも気付いている

だが分かったところで、自分の力では打開することは不可能

ならばせめて、とギニューらから少し離れたところで佇んでいるあの宇宙蛙を指差した

「今カエルの身体には元のカエルの魂が入っているが、あっちは身体が弱っていてもう長くない……この身体を何年もの間守ってくれていたんだ、せめてあのカエルには少しでも長く生きｔ」

「断る」

「っ！？」

そしてベジータへ頼むも、一蹴

「それはつまり、『一回ボディチェンジを使うのを容認してくれ』ということだ。発動しておいて対象を俺や他の奴に瞬時に変えることもあり得る……あんな厄介な技、もう二度と使わせんぞ」

「……」

「それに『身体が弱っていてもう長くない』というのも随分都合のいい話だ、単にボディチェンジを使いたいがための嘘なんじゃないのか？」

この時、一人の少女が意を決して声をあげた

「そ、それは違います！」

「何？」

のどかだ

「今ギニューさんが言ったことは本当です！そのことは身体探しに出発する前……こうしてベジータさんと会うよりずっと前に、私達へ教えてくれました！」

「どうだか……予め俺と会うことを想定し、その時点から嘘を言っていたかもしれんだろう」

「な、なら証拠を見せます！」

のどかは服のポケットに手を伸ばし、パクティオーカードを手に取る

「アデアット！この本には相手の……」

ボンッ！

「きゃあっ！」

だがアーティファクトを取り出した直後、ベジータの放った小気弾が本に命中

狙いすましたように『本だけ』に当たり、のどかにダメージ等は一切ない

が、アーティファクトその者は微塵と化してしまった

「動くんじゃない、余計な怪しいそぶりも見せるな」

「そ、そんな……」

「ちょっと！単にのどかはベジータさんにさっき言った証拠を見せようと……」

「そんなことを言っておいて、お前のスケッチブックのような不思議な道具で俺の邪魔立てでもされたら適わんからな」

ハルナのアーティファクトについては天下一大武道会前、時折家の外から感じられた『無から突然現れた新たな力』によっておおまかに把握はしている

また大会後もちょくちょく使っていたようであるし、今回ハルナ達の捜索のカギとなったのもそのゴーレム達だ

だが、のどかのについては一切把握していなかった

効果は『読心術』であるため、直接見ないことには把握もくそも

ない

それに今その効果を説明されたからとて、ベジータからすれば実際に発動するまでは本当かどうかも分からない

また、発動されてもし嘘で違う効果だったら、それこそ自身にとって厄介なことになりかねない

以上のような理由から、ベジータはのどかのアーティファクトの使用を頑なに拒んでいた

「違います！そんなこと私しません……」

「ごちゃごちゃ言うな！貴様らは黙ってそこにいればいいんだ！」

そして抗議するのどかを一喝して黙らせる

「『ブルマの知り合いだから、お前達に俺が直接手を出すことはない』だなんて、そんなことは考えない方が身のためだ」

「「っ！？」」

「流石に殺しはせんが、ちょっとばかし痛い目にあっても文句は言えんぞ？嫌なら変な抵抗はしないことだな」

「うう……」

さらには暴力を盾にした脅しまで仕掛け、のどかを完全に抑え込んだ

こうされた以上、他に対抗手段を持たないのどかに出来ることはもう無い

あってもギニューの前に立って盾になるくらいだろうが、そんなことをしてもほぼ無意味に近かった

「……行きなさい！栽培マン！」

「ギギイィィッ！」

「何！？」

だが、ハルナはまだ別である

アーティファクトを出したままであったハルナは、後ろに控えさせていた栽培マンゴーレムに叫んで指示

栽培マンゴーレムは、ベジータ目掛けて特攻を仕掛けた

「パル様ゴーレム軍団ー！全員集合ーーー！」

その間にハルナは天を仰ぎ、大声をあげて森内にいる残りのゴーレムを呼び寄せる

「はあああああっ！」

「っ！ザーボンだと！？」

するとすぐさまベジータの背後から、つい先程までギニューと一緒にいたザーボンゴーレムが参上

栽培マンゴーレムと合わせ、前後からベジータへと襲い掛かった

「ギニューさん！のどか！今の内に逃げるわよ！」

「え！？ハルナ！？」

その隙にハルナはのどかの腕を引き、ギニューに近付きながら飛行用ゴーレムを召喚する

森の中を捜索するのには向いていないと思って召喚せず残していたが、これが功を奏した

「ほら！ギニューさんも！」

「私はいい、もう覚悟は出来ている……お前達だけでここから離れてくれ」

「そんなわけにはいかないわよ、ほら！」

先に二人が乗り、次にハルナがギニューへと手を差し伸べる

しかしギニューは動こうとせず、たまらずハルナ自身が無理矢理腕を引いてゴーレムへ乗せた

「とにかく飛んでベジータさんから逃げて！うんと遠くに！」

ハルナの指示を受け、ゴーレムはたちまち飛翔

自身で操縦はせず自動操縦（オートパイロット）にし、右手を高速で走らせアーティフ

ァクトとベジータらのいる下を交互に見据える

「やめろ！すぐに私だけでも下ろすんだ！私と一緒にいるだけで、どれほど危険な目に遭うか分からんのか！」

ボディチェンジの弱点

それは交換直後、慣れないためか身体の扱いに難が生じること

ギニューの今の身体は元のそれであるが、この身体を使っていたのは数年も前にまで遡る

故に上手く扱うことがまだ出来ず、舞空術すら不可能な始末

ハルナに下ろすよう命じるが、ハルナは地上へ視線一つ変えずに言葉を返した

「……だってギニューさん、ベジータさんに殺される理由が無いじゃない。自分が今までしてきたことは悪だったって認めて長い間カエルのまま悔いて、もう二度としないって心の底か誓って……なのに見殺しなんて、出来るわけないでしょ！」

「ハルナ……」

「ハルナの言う通りです、私も出来る限りのことをします……アデアット！ベジータさん！」

「のどか……」

アーティファクトは破壊されたが、カード自体は無事

そうであれば何度でもアーティファクトは出せる

のどかも自身のアーティファクトを出し、ベジータの名を叫んだ

「っ！来たよハルナ！」

「分かってる！」

と同時に、一同へ向けて飛んでくるベジータを目視

栽培マンゴーレム、ザーボンゴーレムは共に撃破

超サイヤ人化してないとはいえ、ベジータにとっては子供相手に戦うようなもの

さらには途中から合流してきたフリーザゴーレム達も容易く蹴散らし、空に逃げるハルナらを見つけて追いかけた

「馬鹿め！この俺から逃げられるとでも思ってるのか！」

「のどか、ベジータさんの次の動きは！？」

「しょ、正面から飛行用ゴーレムへ直接攻撃！」

「了解！」

いどのえ日記を介してベジータの動向を先読みしたハルナは、ベジータの方へ向けてページを光らせる

「出でよ！囮カモ君大行進！」

中から出てきたのは、数十匹に及ぶカモゴーレム

「なっ！？くそ！邪魔だ！」

戦闘能力は皆無だが、ベジータの前方を覆い隠して目晦ましを行った

気で動きが探れるとはいえ、鬱陶しく感じたベジータは一匹一匹を始末していく

その間にまた、ハルナ達は距離を稼ぐ

「のどか、次！」

「え、えっと……み、右に回り込んでギニューさん狙い！」

「出でよ！栽培マン×５！」

またも高速でゴーレムを描くハルナは、のどかの言葉に合わせ右側へ瞬時に召喚

と同時にベジータが現れ、そこへ栽培マンゴーレム達が飛びついた

「くっ、またこいつか……だだだだあああっ！」

また先手を打たれたことにベジータは下唇を噛みしめるが、気弾五連射で即刻撃破する

「ぐううううっ！……のどか、次！」

「こ、光線型の細い気功波でまたギニューさん狙い！」

「出でよ！盾の乙女×3、三天結盾（さんてんけっしゅん）！」

「はあああああっ！」

次にハルナが召喚したのは、大きな盾を手にしたゴーレム

ちょうど剣の女神（ツルギ・タン）の盾バージョンともいえるゴーレムで、それが三体

逆三角形に配置されて巨大な盾となり、召喚直後に放たれたベジータの気功波を防ぐ

『巻き添えでのどかやハルナが死なない程度に』と考慮していた結果、威力は弱め

かなりギリギリではあったが、これも防ぐことに成功した

（どうなってやがる！？戦闘力は圧倒的に俺の方が上、だが奴らは俺の攻撃をこうして防ぎ続けている、まるで俺の心を読んで動きを先読みしているかのような……心を読む？そうか！あっちのガキの本の能力は読心術！）

ベジータはこの不自然さに疑念を抱いたか、これまでのことに対し思考を巡らせる

結果、のどかのアーティファクトの能力を見事看破

「ハ、ハルナ……私のアーティファクトのこと気付かれちゃった……」

「げっ！やっば！」

このことはいどのえ日記を通し、のどか達にも伝わった

（なら話は早い、来ることが分かっててもどうしようもない攻撃で……潰す！）

「のどか、ベジータさんの次の行動は！？」

「き……気弾超連射、威力はさっきの数倍……」

「えええっ！？」

青ざめた表情で、のどかが日記の内容を口にした直後

「だだだだだだだだだあああああああっ！」

「うわ来たっ！」

ベジータが両手に気を灯し、容赦なく一同を狙い始める

「こ、殺すつもりはやっぱり無いみたいだけど、大怪我させることくらいはお構いなしで攻撃してきてるよー！」

「んなこと分かってるわよ！さらに召喚！盾の乙女×3、最初の三体と合わせて三天結盾さらに強化！」

ハルナは悪態を突きながらも筆を止めることはせず、追加でゴーレムを高速召喚

まだ消えずにいた三体のゴーレムと合わせ、さらに巨大な逆三角形の盾を形成した

それに次々と、ベジータの気弾攻撃が当たっていく

「ハ、ハルナー」

「……マズい、もう無理……」

ピシリ

盾の乙女の一体に、亀裂が走る

ピシリピシリピシリ

それを初めとして、次々と亀裂

もうこうなっては、盾の乙女も役には立たず

多大な破砕音と共に、六体全てが塵と化した

「きゃあああっ！」

「くっ！」

残りの気弾が、ハルナ達を襲う

「うおおおおおっ！」

「「っ！？」」

のどかは頭を抱えて身体を縮め、ハルナは奥歯を噛み締めて身構える

しかし突如後ろから襟首を掴まれて引っ張られ、後退

そのまま二人の前には、新たな盾となるかのように仁王立ちとなったギニューが

ボンッ！ボボボンッ！ボンッ！

「ぐおおおおお〝お〝お〝お〝っ！」

「「ギニューさん！」」

自分達へと飛んできた気弾を、手負いの身でありながら全て正面から受け止めた

だが、ベジータの攻撃はこれでは終わることはなく

「ハルナ！私達が乗ってるゴーレムにも当たってるよ！」

「マズい！このままじゃ消え……きゃああっ！」

流れ弾が飛行用ゴーレムにもいくつも命中

元々戦闘タイプでないため耐久力は低く、何発も当たらない内に消滅

足場を失った三名は体勢を崩し

「しまっ、アーティファクトが！」

そのまま自由落下を開始する

さらにはハルナが弾みでアーティファクトをカードごと手から離してしまい、絶体絶命

三人の中で、飛行手段を有する者はもうゼロ

「落ちっ！落ちっ！落ち……きゃん！」

「ったく、散々邪魔しやがって……こっちが読心術の本だな」

ベジータが接近してのどかの腕を掴んだが、残りの二人はそのまま落下

彼が掴んだのは、右手にのどか、左手にいどのえ日記だった

「は、早くハルナとギニューさんも！」

「わめくな、あいつはまた別の飛べる奴を呼べば済む話だろう、地上までは距離もあるし問題あるまい。それにギニューに至っては、助ける義理など俺には無い」

ハルナがアーティファクトを手から放したことを確認してなかっ

たベジータは、のどかの訴えを軽く聞き流す

そのまま左手に持ついどのえ日記のページを、やや興味を示しながら覗き込んだ

「心を読む、か……随分と厄介なことをしてくれたじゃ……！？」

それを見た直後、ベジータは表情を豹変させる

映し出されてたのは、のどかが最後に名を呼んだ人物

『は、早くハルナと“ギニューさん”も！』

ギニューの表層心理、心の中に他ならなかった

第112話　ギニューよ生きろ！早乙女ハルナの叫びの果てに

「ギニューさん！ギニューさんったら！」

「よ、よかった……お前は何とか平気そうだな……」

ベジータの攻撃によって、地上へと落とされることになったハルナとギニュー

その地上でギニューは地面に仰向けで横たわり、ハルナが彼の傍で必死に彼を呼び掛けていた

「そんなことはどうだっていいのよ！それよりなんであんなこと……」

ここで、両者の状況を整理しておこう

ギニューは前述の通り地面へ仰向けに横たわっており、口からは血

身体もベジータの攻撃を受けて酷くボロボロであり、出血箇所も多数

身につけているフリーザ軍戦闘服も半分以上が破損していた（身体を取り戻す以前からナメック星での戦闘で破損はしていたが、それ以上に酷い）

だがハルナはどうだろうか

ゴーレム消滅によるダメージは確かにあるものの、先程の落下に伴うダメージは殆ど無し

エプロンの前面には血がいくつか付いているが、それは彼女自身の血ではない

身体から出血している、ギニューの血だ

……もう分かっただろうか？

「……なんで私を庇うような真似なんてしたのよ！」

落下途中、ギニューはハルナを抱きかかえたまま落ちていったのだ

僅かにだが気は使えたため、地面に背を向けてそこへ気を集中

衝撃を出来る限り緩和させ、ハルナをほぼ無傷というところにまでもっていった

だが、直接激突したギニューはそうはいかない

元からあったダメージも相まって、その衝撃で今や瀕死状態

身体の骨はあちこち折れ、それが大事な場所に刺さったか吐血まで

「私は出（アデアット）でよしてたから防御力は上がってたし、ギニューさんがあんなことしなくても平気だったのに！」

「嘘を、つくな……お前もゴーレムをあれだけ破壊されてたんだ…

…もう身体のあちこちが悲鳴をあげてるんじゃないか？」

「っ！」

「図星か……ぐぷぁっ！」

「ギニューさん！」

顔を苦めたハルナに対しフフと笑うが、直後またも吐血

これにはハルナも耐えきれず、立ち上がってギニューのいる方とは反対へ歩き始めた

「お、おい……何処へ行く気だ？」

「落としたカードを探してくる、もしくはあのカエル」

「止めておけそんな身体で……こんな森の中だ、十分二十分ではまず見つかるまい」

「探してみなきゃ分かんないじゃない！」

「それにあのカエルだが……今のこの身体を渡すわけにはいかんだろう、そんなことをすればあのカエルの方が死んでしまう」

「……そうしなきゃギニューさんがこの場で死ぬのよ！？」

足を止め、ハルナはギニューの方を振り返って声を荒げた

「さっきも言ったろ、もう覚悟は出来ていると……もう、思い残す

こともない」

「そんなこと、私やのどかが絶対許さない！そうよ、のどか……あの子も探しに行かなきゃ……」

のどかがベジータに助けられたことを把握してないハルナは、さらに焦りを募らせていく

もう辛抱堪らず、森の奥へと進み始めた

「それは大丈夫だ、ベジータが助けたところを一瞬だが見た……だから今は動かずこの場にい……ごぱあああっ！」

「ギニューさん！もう喋らなくていいから！」

そこへギニューが心配ないとハルナへ教えるが、口内に血が満たされて三度(みたび)吐血

少しでも大人しくしておくよう、ハルナはギニューのもとに再び近づいてそう命じる

「ここでじっと静かにしてて！私が絶対に助けるから！」

「いいんだ、そんなことしなくても……私はもう充分生きた、後は死んで地獄に行き、特戦隊のみんなと楽しく過ごすさ……」

「そんなこと言わないでったら！」

「だからハルナよ、せめて私が死ぬまで傍にいてくれ……私の素性を知りながら…こんなに優しくしてくれたのは……地球ではお前と、

のどかが初めてなんだ……だから…ぐぽあぁっ！」

「ちょっと！ギニューさん！」

これで吐血四度目

量は前にも増して多くなり、顔色は悪くなっていく一方

紫色の彼の顔からは赤みが抜け、徐々に青紫色へと変わっていった

呼吸も早く短くなり、もう時間があまり残されていないことを如実に示す

「それと、ベジータのこと…だが……私が死んだ後も、恨まないでやってくれ……あいつが俺を始末しようとした…のは……至極当然のこと、なのだから……」

「違う！さっきも言ったけど、ギニューさんがベジータさんに殺されていいわけない！」

「最後に一つ……のどかに『ありがとう』と、伝えてくれ……本当に、嬉し…かっ……」

「ギニューさん！」

言い終わるより前に、ギニューの両目はゆっくりと下り、閉じた

怪我人であることも構わず、ハルナは両手でギニューを大きく揺する

「ギニューさん！ギニューさんってば！死んじゃ駄目！」

「……」

「ギニューさーーーーーーん！」

それでも起きぬギニューに、ハルナは両目に涙を溜め叫んだ

キーーーーーーーーンッ

「……何？この音」

ハルナの胸の中を『絶望』が支配していく中、空から聞こえてきたジェット機のように高速で風を切る音

もしやと思い見上げると、その音の正体は瞬時に目の前に着地してきた

グルグルと目を回したのどかの服の背中を、右手で掴んだベジータが

「……まだ気は微かだが残っている、か」

「……？」

ベジータはギニューのすぐ近くまで近付くと、空いた左手を伸ばす

「ちょっと！これ以上ギニューさんに何しようってんのよ！」

まだ何かするつもりか、とハルナはその身を両者の間に割り込ませるが

あっけなく背後に回られ、のどかと纏めて右手に背中部分を掴まれた

そして改めて左手をギニューに伸ばし

「こら！離しなさいよ！ギニューさんにそれ以上何もしな……え？」

「ガタガタぬかすな！……くそったれが」

身体の下に通して持ち上げ、そのまま左脇に抱え込む

次にカリン塔の方へ顔を向け

そこから首を遥か上空にまで上げ

「勘違いするなよ？今のこいつを殺しても後味が悪くなる……ただそれだけだ」

ハルナに顔も見せず小さく呟き

「……ベジータさん？それってどういう意っひゃあああああっ！？」

天高く向け、全速力でその場から飛び立った

自身が使うゴーレムとはケタ違いのスピード

さらには強烈な圧力が襲い掛かり

「……ふみゅぅ」

同じくベジータの右手に掴まれているのどか同様、ガクリと意識を掻っ攫われた

それから彼女らが目を覚ましたのは、目的地に到着して何分か経った後のことである

（……どこだ？ここは）

意識を失ったつい先程までいた、森の中の地面の上ではない

仰向けで寝ている自分の下側、背中の方に感じたのは地面の感触とはほど遠いものだった

（私はさっきまで森の中にいたというのに……そうか、ここがあの

世というやつか）

当たりをつけてみるが、やはりどこか不審な点があってならない

（だが何故私はこんな場所、ベッドの上のような所で寝かされているのだ？私はまず地獄行きの筈、なのにベッドの上などと……）

閉じた目を開けて身体を起こし、この状況をもっと把握しなくてはそう考えたギニューはひとまず、未だ重いままの両瞼を開きにかかる

「ん、んんん……」

一度ギュッと強くつぶった後、ゆっくりと開いて辺りの景色を確認

どうやらここは屋内のようだ

目に入ったのは白い壁、白い天井、そしてのどかとハルナの二人

（……何だと？）

もう一度言おう、白い壁、白い天井

そして、のどかとハルナの二人

よく事態を理解出来なかったギニューは、両目を擦ろうと右腕を上げようとする

「ギニューさん！」

「良かった！目が覚めたんですね！」

だがそれより前にのどかとハルナの両名が声をあげ、上げようとした右腕を再びベッドの上に預けた

「二人共、何故ここにいる……ここはあの世ではないのか？」

「そんなわけないじゃない！」

「ここは地球の神様が住んでる『神様の神殿』……らしいです、ベジータさんがここまで連れてきてくれたんですよ？」

「……ベジータが？」

ベジータから受けた傷は一切無く、痛みも皆無

そんな身体を起こしたギニューは、そのままベッドの上でのどかとハルナからこれまでの経緯を聞かされることとなる

いどのえ日記でギニューの心の中を読んだベジータは、ギニューのこれまでの想いを全て目の当たりにした

そこへのどかが必死に訴えかけ、反論が出来なかったベジータは悔しそうな顔をしながら一気に地上へ

その後劇中にあったように、ギニューとハルナを回収して一路神様の神殿へ

いた場所が整地カリンの近くだったため、到着には一分もかからず

デンデとポポに気絶した三人を預けると、理由も何一つ話さず飛び去ったらしい

ひとまずデンデがギニューを回復させ、ポポが神殿内のベッドの上へ

二人は間もなくして目を覚まし、デンデから話を聞かされたのち自分達も説明

こうして現在に至る、というわけだ

「そうか……あのベジータが」

「でも本当に良かったです……ハルナの方から『ギニューさんが死に掛けてた』なんて聞かされて、私本当に心配で心配で……」

「……済まなかったな」

泣きそうになるのどかの頭に手を伸ばし、ギニューは優しく撫でてやる

次に両足をベッドから降ろして床に付け、ゆっくりと立ち上がった

「ま、まだ寝てた方がいいですって！」

「なあに心配ない、この通り怪我は完治している。さて、そろそろ……」

ギニューの身体を気遣うハルナだが、彼の言う通り既に身体はデ

ンデによって全快済み

軽く伸びをした後、ギニューは両拳を握って力を込める

「「あ！」」

「ふむ……ようやく慣れてきたかな」

するとギニューの身体が浮遊し、空中で揺れることなく静止した

ボディチェンジで元の身体に戻ってから、もう一時間近く

流石に舞空術が使える程度には身体が馴染んできたのか、よしよしとギニューは笑みを見せる

着地した後首を数度鳴らし、神殿の外へ出ようと歩き始めた

「ここからさっきの森までは近いのか？」

「え？はい、まあ」

「ここはカリン塔の真上ですから……」

「そうか」

二人はギニューの後を追いながら、訊かれたことに対し素直に答える

と同時に、今からギニューがしようとしていることを察知した

「もしかしてギニューさん……」

「今から飛んで森に戻って、またカエルを捜しに行く気？」

「そうだ、完治したこの身体ならば渡しても問題あるまい」

恐る恐る訊いてみたが、的中

「もうお前達の手を借りるまでもない、今まで世話になったな」

「ギニューさん……」

三人はもう神殿の外に出ており、辺り一面青い空が広がっている

「じゃあな、もう二度と会うことは無いと思うが……お前達は達者で暮らせｙ」

「その必要、ない」

「うおっっと！」

では行くかと気を込めた瞬間

ギニューの目の前に突如、空飛ぶ絨毯に乗った肌の黒い人物が急に姿を現した

いきなりの登場に驚き、ギニューは思わず舞空術を中断してその男を見る

「何者だ！？ま、まさか……あなたが地球の神」

「違う、ミスター・ポポ。この神殿に住む神様の付き人、神様はあっち」

ポポはギニューの言葉を否定すると、ギニュー達の後ろにいるデンデを指差した

「あ、初めましてギニューさん。地球の神をしてます、デンデです」

デンデもギニュー達の方へ近づき、一礼

ギニューがそれに受け答えしてる間に、ポポはハルナの方に近付いてある物を手渡す

「落としたカード、これか？」

「あ、それそれ！ありがとうございますポポさん！」

ハルナとのどかがベッドの上で寝るギニューを看ていた時、ポポはハルナのパクティオーカードを捜索

ドラゴンレーダーも無しで地球上のドラゴンボールを七つ集めたほど

元々物探しに適した能力か何かを持っているようで、また捜索範囲が『付近の森の中』という狭さだけあって短時間で発見出来た

歓喜するハルナを見た後、ポポはギニューの方へ再び向き直る

「さっきの続き、いいか？」

「ん？あ、ああ……『その必要がない』というのはどういうことなんだ？」

声を掛けられ、ギニューも思い出したのか了承し話を聞き始めた

「さっきあのカードを探してた時、人の言葉喋るカエルと会った」

「っ！そ、それで？」

「少し話をして、お前のことを知ってるとポポ言ったら、伝言頼まれた」

「……伝言」

ポポはカエルから訊いた言葉を思い出し、一言一句違わぬよう反復する

「『今まで私の身体を守ってくれてありがとう。ついさっきあなたが来て、身体をまた交換してくれた時は本当に嬉しかった。あなたも身体が戻って喜んでいたし、これでまた元通りだと私は思った』」

「……」

「『けどあなたは言った、自分の身体を使って私に少しでも長く生きてほしいと。けどそれは私の望んでいることではない』」

「！！」

「『私は天から生を受け、今あるこの身体に宿って生きてきた。だ

から近い内に死ぬことが分かってても、私は私の身体のままで生き、そして死にたい。あなたはあなたの今ある身体のまま、生きてくれ』。そうカエル言ってた」

ポポの話を受け、ギニューは顔を伏せて沈黙した

少しして顔を苦め、伏せたまま口を開く

「私がやろうとしていたのは、あのカエルに対する冒涜だったということか……」

カエルの立場からすれば、それは明らかであったかもしれない

長年、どこの誰とも知らない身体を持ったままの生活

元の身体に戻りたい、こう思ったことは一度や二度じゃない筈だ

そこへ元の身体の持ち主がやってきて、身体を返してくれた

だが、それをまたすぐに交換し直そうとする

『元の身体に戻れた』という喜びを与えられた直後、いきなりで身勝手もいいとこ

ここにきてギニューはようやく、自分がやろうとしたことの愚かさに気付いた

今のこの身体も、元を正せば昔ボディチェンジで相手から奪ったそれ

故に『元の身体でいることの喜び』の真の意味を、今まで彼は履き違えていたのかもしれない

「そう、けどカエルは元に身体に戻れて心から喜んでた。これ本当」

「……」

「お前の話、あっちの二人からポポと神様聞いた」

ポポは首を回してハルナ達を見ると、再びギニューの方へ

彼女らもまた、ポポの話をただ黙って聞き入れていた

「今までしてきた悪いこと、カエルの身体になってから分かって反省して……けどそれだけじゃ駄目、またカエルに戻って死ぬだけじゃ駄目」

「……駄目、だと？」

「お前いっぱい悪いことした、この事実消えない。けどそれに代わって今からもっと罪償う、駄目と言ったのは、『カエルとなって何年も生き、カエルのまま死ぬ』では償いきれないということ」

「では一体、私はどうすればいいと言うんだ……」

「カエルが言ったこと忘れたか？『生きてくれ』、カエルはそう言った」

「『生きてくれ』……生きる……」

「この地球で、お前に出来ることきっとある。それを精一杯やって、罪もっと償う。お前にとっても、カエルにとっても、今まで手を掛けてしまった者達にとっても、そして……」

ポポはまたも、ハルナ達を見る

「お前のために一生懸命頑張ってくれたあの二人にとっても、これ一番の方法」

「そう……なのか？のどか、ハルナ」

ギニューは彼女らに訪ねたが、迷いなくその答えは返ってきた

「はい、私は信じます。ギニューさんがこれからうんと頑張って、罪を償いきることを」

「右に同じ。事実これが、一番いい解決方法なんじゃないですか？」

「お前達……」

「頑張りましょう？ギニューさん」

あの時

カエルの姿で、初めて彼女らと会った時

庭園で自分に見せてくれたあの笑みを、のどかはまた見せてくれていた

「う……う……う……」

そして耐えきれず、ギニューもまたあの時のように

「うおおおおおおおおおっ！済まない！本当に済まない！私のような極悪人を……私を……うおおおおお〝お〝お〝お〝お〝お〝お〝お〝！！」

号泣した

天高くあるこの神殿の、さらに天を仰ぎ

そして、カエルの時とはさらに段違いの大声をあげて

これが泣き止むまでには数分を要し

「どうですかー？ギニューさーん」

「うむ！完璧だ！」

ベジータ襲撃直前

ギニューがハルナに頼もうとしていたことを実行に移したのは、その直後のことであった

のどかのアーティファクトで容姿は完全に再現、さらにはギニューによる微修正も入れられた

本来なら再現が難しい声も、これまたギニュー監修のもと完全に

「ではいくぞ！」

ギニューの掛け声と共に、ギニューの周りにいた四体のゴーレムが動く

いや、ここは四体ではなく四人と形容しよう

それほど彼らには、ギニュー達による真剣さと情熱が盛り込まれた正に『本人』そのものとほぼ変わらないだから

一人逆方向を向くギニューの両端に、四人が二人づつに別れて正面を向いた

「……うおおおおあああああっっ！！」

バッ！

「リクーム！」

バーーーーンッ！

「……はあああああっ！ケッケーー！！」

バッ！

「バータ！」

バーーーーンッ！

「……はあああああああああああっ！！」

バッ！

「ジース！」

バーーーーンッ！

「……ほおおおおおおおおおっ！！」

バッ！

「グルド！」

バーーーーンッ！

「……こおおおおおおおおおおお…」

バッ！

「あっ、ギニュー！！」

バーーーーンッ！

「みん！」

「な！」

「そ！」

「ろっ！」

「て！！」

バンッ！

バンッ！

バーーーーーーーーンッ！！

「「「「「「ギニュー特戦隊！！」」」」」」

（リクーム、バータ、ジース、グルド……『本物』のお前達とも再びファイティングポーズをとれるその日まで待っていてくれ！私はいつか必ず、お前達のところへ絶対戻ってくるからな！）

第１１２話　ギニューよ生きろ！早乙女ハルナの叫びの果てに（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様一週間ぶりですね、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「今回まさかの二話投稿とはな」

クウネル
「ボリュームを増やすとは前回言いましたが、流石に一話に全部詰め込むとギャップが凄いことになってましたから」

エヴァ
「いつもの三倍強とかやりすぎだろ……」

注・頑張りました！

エヴァ
「さて、今回のゲストだが……お、あいつらか」

クウネル
「その通り、というわけでどうぞ」

ギニュー
「お前達ー！今回の俺はどうだったかー？」

リクーム&バータ&ジース&グルド
「最高ッスよ隊長ー！」

クウネル
「朱鳳鈴さんからのリクエストで、ギニュー特戦隊のみなさんです」

エヴァ
「大人数でゾロゾロと……」

クウネル
「ジースさんとグルドさんは、今回があとがきコーナー初登場ですね」

グルド
「おう」

ジース
「隊長！頑張って俺達で目立ってやりましょう！」

ギニュー
「もちろんだ！」

クウネル
「というわけでコーナーの進行を、今回の話ですが……」

エヴァ
「読者にストーリー展開を当てられたな」

クウネル
「ｓｏｌａさんにですね。まあ『カエルが死んで――』辺りのところは差異がありますが」

エヴァ
「それでも『ギニュー第三の人生』を当てられたら充分だろう」

注・ｓｏｌａさん、お見事でした

クウネル
「感想で書かれたのを読んだ時は、思わず作者もドキッとしたようで」

エヴァ
「返信にも『（汗）』とかモロに書いてあるしな」

ギニュー
「というわけで今後の話にも私は登場だ！楽しみにしててくれよ！」

注・アックマンみたいに準レギュラーの扱いになる予定です

リクーム
「にしても隊長、一人だけあんなに出てズルいッスよ！」

グルド
「俺達も準レギュラーに昇格したいぜー！」

エヴァ
「……どこをどうすればお前らが準レギュラーになれるんだ？」

クウネル
「まあ、お二人は本編でも扱いが少々……アレでしたから」

エヴァ

「本編で出たのはあの世編での武者修行だったか……うわ、活躍の「か」の字もない」

ジース
「俺達パープルコメットは！」

バータ
「やられはしたが結構目立ったぜ！」

グルド
「畜生……」

エヴァ
「そこの赤青は本編でそれなりに活躍、筋肉モヒカンも以前に一回此処に出演、ギニューは言うに及ばず……」

クウネル
「五人の中では一番不遇ですよねグルドさん、原作でもそんな感じでしたが」

グルド
「何で俺ばっかり……」

エヴァ
「お前ゲームでも使い辛いんだよな、動きはトロいし技は弱いし」

注・特戦隊五人の中では、グルドは一番使ってません

グルド
「ここでわざわざ言わなくてもいいだろ！？」

クウネル
「では、続きまして次回予告です」

リクーム
「さーてっ！」

バータ
「次！」

ジース
「回！」

グルド
「の！」

ギニュー
「ネギドラ！は……」

エヴァ
「五人で分けて言うな！……ったく、次は久しぶりにあの世編のようだな」

クウネル
「修行も総仕上げに入ってきた古菲さん」

ギニュー
「そして北の界王様がようやく、大会出場メンバーの選出を行おうとするらしい」

ジース
「聞いたかお前達！『修行』のシーンがあるらしいぞ！」

リクーム
「おおっ！てことは……」

グルド
「また地獄で俺達の出番が貰える！」

バータ
「やる気が出てきたぜー！」

クウネル
「あの、すみません……やるのは残念ながら大界王星での修行シーンです」

リクーム&バータ&グルド&ジース
「……え？」

エヴァ
「つまりお前達の出番は無しだ、残念だったな」

リクーム&バータ&グルド&ジース
「……」

ギニュー
「だ、大丈夫だぞお前達！きっとまた何処かで出番はある！……筈だ」

リクーム&バータ&グルド&ジース

「隊長ばっかり……けど！それでこそ俺達の隊長！」

ギニュー
「ありがとうみんな！お前達の分まで頑張るからな！」

リクーム&バータ&グルド&ジース
「うおおおおおおおおおっ！」

エヴァ
「暑苦しい奴らめ……あ、次回の更新予定は来週の月曜だ」

クウネル
「ではみなさん、次回のネギドラ！も……」

エヴァ&ギニュー&リクーム&バータ&グルド&ジース
「お楽しみに！」

ギニュー
「よーし！あとがきコーナーとはいえお前達と再会出来たんだ！特戦隊のファイティングポーズでもやって締めるか！」

リクーム&バータ&グルド&ジース
「さっすが隊長！やりましょう！」

エヴァ
「やめろ！本編とかぶるし文字数喰うし！」

クウネル
「ちなみにどうでもいいかもですが、本編でやったのは『Z』ｖｅｒ．ではなく『改』ｖｅｒ．です」

注・見比べると若干違うんですよね、まあ声優さんも総入れ替えですし

エヴァ
「ホントにどうでもいいなそれ！」

第１１３話　古の実力これ如何に？勝ち取れ大会出場権（前書き）

予告通りあの世編、久々（？）にまた古の話です。
あと、あとがきコーナーの内容を一部変えました。詳細は感想ページにありますので探してください。
ではどうぞ！

第１１３話　古の実力これ如何に？勝ち取れ大会出場権

「アイヤアイヤアイヤアイヤーーーー！」

「いいぞ古！いい動きだ！」

ギニュー騒動と時を同じくし、こちらは大界王星

いつもの修行場で組み手をし、汗を流す者が二名

孫悟空、古菲の両名である

「けどもっと出力を上げられる筈だ！今以上に気ぃ高めろ！」

「やぱり分かてたアルか……はあああああっ！」

悟空の言葉を受けて古の身体を覆っていた気は、さらに紅蓮のそれと化した

数値的に言えば二倍から三倍、といったところか

「そりゃそりゃそりゃそりゃ！」

「よーしそうだ！んじゃオラも、もう少しばかり力上げっぞ」

「来るアル！」

古に合わせて力を抑えていた悟空だが、古の戦闘力が上がったの

に対抗してやや解放

古と同等、いや、それ以上の速さと力を伴って反撃に打って出る

「でりゃあああっ！」

「ぐっ！まだまだアルー！」

上段の回し蹴りを腕で受け止め、ビリリと走った痺れに顔を歪ませる古

だが戦意は衰えることを知らず、お返しとばかりにこちらからも再び攻め返した

（地獄でのあの武者修行から古は一段と変わった、やっぱり円生樹の実を食ったのが大きいみてえだな……いや、それ以上にこいつの日々の努力の賜物か）

「うわの空アルよ悟空！」

「うおっと！悪い悪い」

初めにここへ来た時と比べて大きく成長した

そのことを嬉しく思う悟空だったが、言葉と共に顔前へ古の拳が飛んできたため慌てて掌で受け止める

（このパンチも重みが違う……これなら大会出場も夢じゃねえぞ、古！）

悟空は一旦古と距離を取り、構え直す

対する古も、その場で止まって悟空の動きを伺った

「……よし、じゃあオラも使うぞ！」

「お、ようやくアルね」

「おめえのも大会までまだ充分に伸びる……よく見て、感じて、もっと自分のもんにしてみせろ！」

「分かてるアル！」

「はあああああ……」

悟空が力を込めると、気の色が一気に変化

古と同様、紅蓮の気が全身を包み込む

いや、その気の密度は古のそれと比べ物にならないほど

「界王拳！」

北の界王より伝えられし伝説の技、界王拳

今ここに使い手が二人、技を発動したまま向かい合った

「行くぞ！古！」

「うむ！」

そして、数時間後

「はあっ、はあっ、はあっ……」

「うっし、一旦休憩にすっか」

「りょ、了解アル……」

互いに怪我等することもなく、一先ずではあるが組み手は終了

両名芝生の上にしゃがみ込み、一息つく

古はやはりだが疲労困憊、それを悟空が見かねて休憩を提案したと言った方がいいだろうか

悟空はまだまだ余裕そうで、座ってはいるものの汗は殆どかいていなかった

「けど凄えな古、たった一週間で界王拳をものにしちまってよ」

「いやいや、悟空みたいには使いこなせないアルよ……それに半ば詰め込みで覚えたようなものアルから、まだ全然駄目アル」

「まあ、真名に教えた瞬間移動もそれに近いしな……けど、前より戦術の幅がうんと広がった筈だ」

「確かにそれは言えてるアル」

悟空から（それに加え初期は、創始者である界王も）伝授された界王拳

真名が瞬間移動を覚えた時同様、古も呑み込みが早く早期習得に至っている

また、真名とは違って悟空が付きっきりで教えていたため、それの影響もかなりある模様

「……でよ古、実際今のところ何倍までいけるんだ？」

「あ、やぱりバレてたアルか」

「さっきの組み手でもまだフルパワーって感じじゃなかったかんな、ちょっと気になってよ」

アイヤーと呟き苦笑いしながら、古は頬を掻く

先ほどの組み手で古が使用した界王拳は、あくまで三倍止まり

さらに出力を上げることは一応可能なのだが、あえて古は使わず

「基本、限界まで使わず抑え目にしてるアル。これって無理しすぎると身体中が痛くて痛くて……」

悟空も体験していることなのだが、界王拳の多用及び乱用は身体への負担が大きい

なので使う際は、『今の自分なら何倍まで耐えられるか』を自覚する必要がある

だが古はその辺りのボーダーを上手く見極められていないようで、限界前後と思われるところまでは上げないようにしていた

唯一の例外が地獄でのフリーザ戦だが、古はあれからさらに力を上げているので参考にもならない

「はは、まあそこらへんは慣れだな慣れ。オラも初めの頃はよく分かんなくて、界王様に二倍までにしろとか言われてたしな」

「むむむ、界王拳を極めるのはなかなか大変アル……」

そんなこんなで会話を交わしていき、数分

ではそろそろ再開するかと古が言い、元より準備ＯＫだった悟空はよしと意気揚々に立ち上がる

古も疲れはそれなりに抜けており、界王拳を発動して戦闘態勢

じゃあオラも、と悟空が気を込めようとしたところで

「……ん？」

「誰か来るアルね、えっとこの気は……」

こちらへ向かってくる、一つの大きな気を両者共に感知

気の感じた方をそのまま向いてみると、すぐ近くまで飛んで来ておりそのまま目の前に着地

古もあの世修行初日に顔を合わせた男が、古の方へと歩み寄る

「やはり悟空と一緒にいたか……界王様がお呼びだぞ」

「あー、えー、確か名前は……」

「よおオリブー、久しぶりだな！」

「そうそう！オリブーアル！」

古は界王から教えられた彼の名前を必死に掘り起こすが、浮かばず悟空がその名を口にしたことで思い出し、胸のつっかえが取れた

北銀河ＮＯ．２、悟空と同じく地球出身の戦士オリブーである

「……で、界王様が私に何の用アルか？」

界王拳に関する指導は何日か前、悟空へと完全に引き継がれている

腹時計的にも食事の時間にはまだ早いと思われるし、第一それだったら悟空も一緒に呼ぶ筈だ

他に何があったアルかなと考えながら、古はオリブーに訪ねた

「大会がもう明後日に迫ってるからな、『そろそろ出場メンバーを決定したいので出たい奴は集まれ』とのことだ」

「お！ついに来たな古！」

悟空は嬉しそうに、掌で古の背をバンと叩く

古は表情にこそ出していなかったが、待ち望んでいたこの時に心震わせていた

（ついに来たアル……私が大会に出られるかどうかを賭けた、この時が）

だが自然と、拳を強く握りしめている

悟空とオリブーが彼女の心境を察することは容易であった

「……分かたアル、で、何処に行けばいいアルか？」

「お前が北銀河の仲間と初めて出会ったあの場所だ、もう他の奴らは大体集まってるぞ」

ついてこい、オリブーはそう言って再び舞空術で浮上

古はその後を追おうとするが、それを悟空が引き止めた

理由は簡単、瞬間移動を使った方が早いから

確かにそうだなと二人は笑い、降りて悟空の方に手を

「んじゃ行くか、界王様の気は……ここだ！」

三人は一瞬にして、この場から姿を消し移動した

『よーし、ではこれより大会出場メンバーの選出会を行うー』

建物の屋根の上に乗り、拡声器を使って周囲の人物へ呼び掛けているのはご存じ北の界王

しかしそんなことを言うまでもなく、出場希望の武道家達は既に界王の傍まで集まっていた

悟空の瞬間移動ですぐにやって来れた、古も同様である

「さあ、いよいよだな古」

「ううん、少し緊張してきたアルよ……」

『お主らみんな分かってるとは思うが、悟空とオリブーは前大会の成績を考慮して選出会の参加はパスで出場確定。従って残り二席を取り合ってもらうぞー』

「よっしゃー！」

「やってやるぜー！」

自分こそが出場してやるのだと、各々が意気込んだ様子で声をあげる

「うっひゃー、みんな張り切ってんなー」

「そりゃそうだろうさ、『あの世一武道会の出場メンバーに選出された』だけでも、ここでは充分なステータスになる」

それだけ自分の強さが証明されたことになるんだからな、とオリブーが腕を組んだまま口にした

『参加者はえーと、一、二、三、四……悟空とオリブーは数から省いて全部で十八人か』

拡声器片手に数を数える界王

程なくして数え終わり、続けて皆に拡声器で言葉を飛ばす

『まずは下準備じゃな……ほいっと』

直後、界王が術か何かを使ったのか一同に異変

「何だこりゃ!?」

「何時の間に!?」

「……何アルかこれ?」

彼らの身体にはそれぞれ、計六つの赤い玉が取り付けられていた

両肩、腹部、両もも、そして背中

すぐに界王が説明に入る

『今からお主達には他の奴らに付いてる赤玉を割り合ってもらう、全部割られたら失格じゃ。あとその玉には演出として、割れたら血糊がかかるように出来ておる』

「成程、攻撃箇所を限定させた実戦形式……」

「これなら簡単にみんなの実力を判断できるってわけだな」

『そういうことじゃ、下手にガチで戦い合わせて大怪我でもされたら適わんからのう。あと悟空とオリブー、お主らそこにいると紛らわしいからこっちに来い』

界王から指示が飛び、悟空とオリブーも屋根の上へ

そこからは、皆の戦う様子が良く見れそうであった

「なあ界王様、オラもアレ混ざっちゃ駄目か?何か面白そうなんだけどよ」

「駄目、お主が入ると他の者の試験にならんし。それにあの娘の援護でもされたらフェアじゃないじゃろ」

「そんなことする気はねえんだけどな……」

少し残念そうにする悟空をよそに、界王は再び拡声器を口元に当てる

『では皆の者……』

下にいる者達が一同に構え

『……始め！』

「うおおおおっ！」

「でやあああああっ！」

「そりゃあああっ！」

「行くアルよーー！」

開始の合図と共に、一斉に近くの者（てき）へと飛び掛かった

シュンッ

「お、やってるやってる」

「西の界王様の仰っていた通りだったな」

「よおパイクーハン！それに真名も！」

それから数分後、悟空達の前に真名とパイクーハンが瞬間移動で出現

今日やる選出会のことを西の界王がどこからか聞きつけたらしく、様子を見て来いと二人に命じたらしい

また、二人が個人的にそれを見てみたいというのも大きかったが

「どれ、残っているのは……ほう、もうあと四、五人くらいか」

「あいつも無事に残っているな……成程、以前手合わせした時より大分腕を上げている」

二人が見下ろすと、そこで戦い合っていたのはたった数人

赤玉を全て割られた者は既にそこから離れ、遠巻きに観戦中

「だあああああっ！」

「なんの、せやアルッ！」

パンッ！

「ぐっ！しまった！」

その中に彼女

古は見事残っており、未だに疲れを見せず戦いを続けていた

第１１３話　古の実力これ如何に？勝ち取れ大会出場権（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「何か作者が活動報告でとんでもないこと宣言してたな」

クウネル
「まあそれは置いておいて、今回のゲストのご紹介です」

悟空
「おっすエヴァ、それにクウネル」

バーダック
「カカロットよーーーー！」

ターレス
「へっ、こうも同じ顔ばっか揃うとはな」

クウネル
「神無さんからのリクエストで、同じ顔の悟空さん達三人です」

エヴァ
「ホント同じ顔だよな……あ、そういえばお前孫悟空との再会は初めてか」

バーダック
「カカロットよーーーー！」

エヴァ
「アニメでやった最期のセリフ連呼止めろ」

悟空
「おらカカロットじゃねえ！孫悟空だ！」

エヴァ
「お前も自重しろ」

ターレス
「サイヤ人はサイヤ人らしい生き方をしろ…」

エヴァ
「もはや会話が成り立ってないぞ！？」

クウネル
「最近作者がニコ動観まくってる影響かと思われます」

注・オススメのやつとかあったら是非教えてください

エヴァ
「ここでそれを頼むな」

クウネル
「さて、ではコーナーの進行を、今回の話ですが……」

エヴァ
「大会メンバー選出会開始、か……何話くらい続くんだこれ？」

クウネル
「この話も合わせて、約三、四話前後を予定しています」

悟空
「オラはもう大会始まるまで戦わねえからな、あとはこれの解説ばっかだぞ」

ターレス
「ところであの赤玉を割る形式なんだが、作者は何か参考にでもしたのか？」

クウネル
「一応、ただし玉の設置位置とかは一部変更してます」

エヴァ
「元ネタは……ああ、アレか」

クウネル
「はい、少し前にアニメ化したアレです」

悟空
「雑誌的にオラ達の後輩にあたるアレだな」

注・最近こんなのばっかな気がしてきました……

エヴァ
「気がしてきた、じゃなくて事実そうだろ」

クウネル
「では続きまして次回予告です」

バーダック
「さて、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「選出会も終盤、残る人数も僅か数人だ」

クウネル
「その北銀河の猛者達相手に、古菲さんが奮闘します」

ターレス
「果たして、古は大会メンバーに残れるのか！？って話だな」

悟空
「ちなみに言っとくと、残ってるのはみんなアニメでも登場してて名前もある奴らばっかだ」

バーダック
「予習として、あの世一武道会編のアニメを見直しておくといいかもな」

エヴァ
「いや、めんどくさいだろそれ……」

注・自分はこの前ＤＶＤ借りて予習しました！

エヴァ
「お前に訊いてないから……」

悟空

「じゃあみんな、次回のネギドラ！も……」

エヴァ&クウネル&バーダック&ターレス

「お楽しみに！」

～今日の〇〇～

かつて少年時代の悟空と激戦を繰り広げた男、ナム

そんな彼の村から少し離れた所にある砂漠で、またもギラン一族が悪さをしようと企んでいた

「へっへっへ、丁度いいところに金持ってそうな旅人がいやがるぜ」

「兄貴ー、やっぱりこの近くではやめときませんか？」

「そうっすよ、またこの前の小娘みたいな強い奴だったら……」

「馬鹿野郎！そんなことが何度もあってたまるか！行くぞ！」

「「……へい」」

「待て」

「「「ん？」」」

後ろから見知らぬ声

振り返るとそこにはやはり見覚えがない、頭部に黒角を二本生やした男が立っていた

さらに特徴を挙げるとすれば、全身を染める紫の肌であろうか

「て、てめえいつの間に！？」

「どうやら追剥ぎの類らしいな、そんなことはこの私が許さんぞ」

「何だと！？舐めやがって、お前らやっちまえ！」

「「うおおおっ！」」

シュンッ

「き、消えた！？ぐふっ！」

「うごっ！」

「どうしたお前達！？ぬげえっ！」

バタバタバタ

気絶し、地に伏す三匹のギラン

「ふう、これで良し……旅人よ、安心して旅を続けるがいい」

この一連の出来事など一切知る由もなく、旅人は一歩一歩進んで行く

そんな旅人をちらりと見やると、黒角の男は空高く飛んでいったのであった

第１１４話　選出会終了　揃った北銀河四戦士（前書き）

今回あとがきコーナーで重大発表（作者的に）が御座います、もしよければそちらの方も。

ではどうぞ！

第１１４話　選出会終了　揃った北銀河四戦士

あの世一の武道家を決める戦い、あの世一武道会

去年、『久しぶりに東西南北の四人の界王が揃ったから』という名目のもと開催されたのが始まり

ところがこの大会、想像以上に大盛況

そのためそれを見兼ねた大界王が『何か面白そうだし、これから毎年やるってのはどう？』と提案

これにより第二回あの世一武道会の開催が決定

よって各銀河が再び優勝を狙うべく、四人の戦士を選出

東、西、南、この三銀河はすでに決定済み

最後に残ったのが北銀河なわけだが、今それを選ぶべく選出会が行われていた

「せいやっ！」

「ぬうっ！」

現在残った戦士は、初め十数人もいたのが僅か四名

内二名が互いに向かい合って積極的に拳を交わし

（さて、どう動くか……）

（こちらから仕掛けるか？いや……こいつ相手に今はまだ危険すぎる）

残り二名は向かい合ったまま動かず

この選出会、残って大会出場権を獲得出来るのは二人

二組が既に他から独立して戦っており、さながらそれぞれ『勝った方が出場権獲得』というような形になっているようであった

「古ー！頑張れー！」

悟空の声援が飛ぶが、古は振り向くことなく戦いを続ける

言わばここは真剣勝負の場

そんなことをして隙を作るなど、愚行に他ならない

悟空もそのことは分かっており、こちらに反応を見せない古に対しても清々しい表情のままでいた

「さて、古が今戦っておるのはキドモか……ふふふ、こやつはなかなかに強力じゃぞ」

拡声器を下に降ろした界王が、古と積極的に拳を交わし合っている大柄のモヒカン男に眼をやる

彼の名はキドモ

ゴリラのような外見に白い羽、そして前述したモヒカン頭が特徴の戦士だ

見た目からしてパワータイプ、というより実際そのとおり

その剛腕は、北銀河の戦士の中でもかなり上位に位置するほど

身体に取り付けられた赤玉は、背中と両ものが割られ残り三つ

対する古は、左肩と背中が割られて残り四つ

「真名以外は皆知ってると思うが、奴は一年前のあの世一武道会に出場した実績を持っておる」

大会中では一回戦負けに留まっているものの、『選手として選ばれた』という点では大いに評価出来る

この選出会でも自身の馬鹿力を多大に発揮、次々と相手を倒していった

割られた三つも、最初大人数を一斉に相手したためのある意味事故

不意打ちで背中、巨体であるがために手が回りきらなかった左もも

その後古に右もものを割られ、今に至る

「今はああして戦えておるが、あれに一度捕まると脱出するのは至難の業じゃぞ」

「なあに、古なら大丈夫さ」

界王の言葉に、悟空は動揺の欠片も見せない

これを見て真名、パイクーハンの両名は

彼はよほど、今の古の実力を買っているのだな

こう推測した

事実、古もここまで見事勝ち残っている

「なあ界王様、あっちはもう勝負が付きそうだぞ」

「ん？おお、ホントじゃな」

次に、悟空が古とは別のもう一組に目を向けた

見れば互いに赤玉は、残り一つづつ

赤玉から出た血糊が身体中に付き、なかなかの迫力

片や、獣戦士ミゴレン

以前も界王が古に紹介したほどで、実力は確かなもの

青い体毛に犬型の顔が一番の特徴

故郷の星を襲ってきたエイリアンと、自らが敗れ死ぬ最期まで勇敢に戦ったという過去を持つ

残ってる赤玉は、左肩に一つ

片や、インディアン風の男サーテ

あとはギニューより薄めの紫肌と、額と胸元にある石のアクセサリーが特徴か

こちらは、悟空が大界王星へ初めて来た際に界王から紹介をされている

故郷の星を破壊せんとする巨大隕石から、自らの命と引き換えに守り切ったという過去を持つ

残ってる赤球は、腹部に一つ

「はあっ、はあっ、はあっ……」

「はあっ、はあっ、はあっ……」

勝負は完全に互角

今までに割れた五つの赤玉も、殆どがこの両者間の戦いによるもの

身体から溢れ出す闘気が、この戦いの凄まじさを物語っていた

「行くぞ！サーテ！」

「来いミゴレン！これで終わらせてやる！」

そして先にミゴレンが動き、サーテが迎え撃つ

ミゴレンは正面からサーテへと向かって駆け、右掌に気を溜め

「せやああっ！」

発射、狙うのは当然最後の赤玉がある腹部

これをサーテは、予想していたか簡単に弾き返し

「だだだだああっ！」

「だだだだああっ！」

一撃決着のインファイトへと持ち込んだ

サーテはミゴレンの左肩

ミゴレンはサーテの腹部をそれぞれ集中して狙う

「このおおっ！」

「くっ！」

これで決めるぞとばかりに、ミゴレンがサーテの腹を狙って右拳

かなりの気が込められており、威力は今まで戦ってたのより数段上

片手ではもしかしたら止めきれないかもと思ったか、サーテは両

手を使ってそれを受け止めた

これが、勝負を決定づけた

「今だ！」

「っ！？し、しまっ、ぐおっ！」

両手が塞がったサーテの顎へ、瞬く間にミゴレンの右足が下から蹴り込まれる

先ほどのミゴレンの攻撃、別に片手で止めきれなくとも普通なら問題はない

片手でも威力はそれなりに殺せており、喰らったところでたかがしれている

しかし、サーテにはどうしてもミゴレンの拳を『止めきる』必要があった

そう、腹部にある赤玉

もし止められなければ押し切られ、止めようとした自らの片手でそのまま赤玉を割ってしまうかもしれない

故に過剰に防御姿勢に入り、ミゴレンに次の攻撃を許す結果となった

『攻撃を避ける』、『こちらも拳をぶつけて迎え撃つ』という選択肢もあるにはあったが、彼の頭の中にあった一番確かな防御法は『両手で受け止めきる』

事実彼は、見事ミゴレンの『第一撃』は防げた

防いだ後の『第二撃』が来ることを、想定の範囲内へ自ら外してしまったことで

「はあああっ！」

パンッ！

蹴りを喰らって身体を浮かせた隙だらけのサーテに、ミゴレンは右掌で掌底

サーテの最後の赤玉をど真ん中に捉え、割った

「おおっ、勝ったのはミゴレンか」

「うん、やっぱみんな一年前よかずっと強くなってんな」

声をあげる界王に、感心する悟空

ミゴレンはそのまま脱力し、地面の上に座り込んでしまった

まだ戦っている古とキドモに攻撃することも無ければ、その逆も無い

そして古とキドモの戦いも、佳境を迎えようとしていた

「どぅりゃあああああっ！ようやく捕まえたぜ！」

「ぐっ、しまたアル！」

素早い動きでキドモを翻弄していた古

先ほどのミゴレン対サーテの戦いの間に左肩の赤玉も叩き割り、赤玉の数でいえば四対二と優勢

が、ついにキドモのその巨大な手に掴まれ、身動きが取れなくなるという事態に陥る

構図的に言えば、某巨大コング映画のあのシーンに近いだろうか（身長対比からすると、こちらの方はそれほど身長差は凄くない）

「このまま残り全部潰し割ってやる！」

「ぐぬぬぬぬ……」

キドモは古を両手で掴み直し、力を込め始めた

もしこのまま完全に握り潰されれば、キドモの発言通り赤玉は全て破裂

古の敗北は免れない

掴み直される際に突き出した両手をつっかえ棒代わりにし、今は何とか止めているがそう長くはもたないだろう

それほどまでに、キドモの力は今の古のパワーを凌駕していた

「ふっふっふ、やはり一週間ぽっちではあの程度が限界だったよう

じゃのう悟空」

「……」

古達の戦いに視線を戻した悟空と界王

界王はこれを見てキドモの勝利を疑わなかったが、悟空は違う

やはり動揺の欠片すら見せず、真剣な面持ちで二人を見下ろしていた

「……古の本気はあんなものじゃない、そういうことだろ悟空さん？」

そこへ真名が、そんな彼の思うところを察したか代わりに述べる

それに対し悟空は、やや驚いた様子で真名の方に顔を向けた

「え？真名、お前分かっちまったのか？」

「私の『魔眼』はしっかりと捉えているよ、古を包む赤い気を」

真名の左眼が、妖しい光を見せる

「理由は大方、『必要以上の気を消耗しないために』といったところか……確かに普通の目では見れないだろうが、私なら別さ」

悟空や古が使用する界王拳

本来使用時に赤いオーラを伴うのだが、ある程度熟練することで

それの発生を抑えることが可能となる

一番分かり易い例を挙げれば、ナメック星での悟空対フリーザだろうか

その目的は真名の言う『必要以上の気を消耗しないために』というのもあるが、他にももう一つ

『界王拳を使っている』というのを敵に分からせないため

真名とパイクーハンがやって来たのは、直接目で捉えてないものの気によって古は把握済み

『熟練』とまでは到底呼べぬものの、二倍前後なら今の古でも赤いオーラの発生を止められる

故に手の内を二人に見せたくなかったのか自然と界王拳をセーブし、全力とは呼べぬ力のままで戦っていたようなのだ

「はは、バレちまったらしょうがねえな」

「赤い気……すると悟空、お前が俺と大会で戦った時に使ったアレか？」

「……まあ、そういうことだ」

本当は大会当日まで秘密にしてても面白かったのだが、もうこうして完全に知られてしまった

観念して、悟空はパイクーハンの言葉を肯定する

そして

「おーい古ー！もう出し惜しみする必要なんてねーぞー！思いっきりやってやれーー！」

古へ向けて、界王拳を思いきり使えと大声で呼び掛けた

その直後

ボウッ！

「アイヤーーーー！」

「な、何だと!?ぬ、ぬぐぐぐ……」

今まで表へ出ずにいた界王拳の赤い気が、一気に噴出

そして爆発的に上昇したそのパワーで、キドモの両手を押し返す

焦ってさらに力を込めるキドモなのだが、再び抑え込むことは敵わなかった

両腕を伸ばしきり、完全に押し返した古はそこから脱出

「せりゃあっ！」

「ぐっ！」

そのまま縦に回転し、踵落としを右肩に決める

赤玉は当然割れ、残るは腹部の一つのみ

「これで決めるアル！」

拳に赤い気を集中させた古は、正拳突きを放つ

キドモ、これを正面から受け止める

右拳を左掌で

「ぬっ、ならばこっちアル！」

「させるか！」

続けざまに放った左拳も、右掌で

力と力、純粋な比べ合い

両者、共に脚に力を込め、踏ん張る

「ぬぬぬぬぬぬ……」

「うぐぐぐぐぐ……」

圧倒的身長差から、キドモが体重を上から乗せながらグイグイと

これにより古との力の差を埋め、どちらとも動かず拮抗

しかし、これで古は終わらなかった

「まだまだアルーーー！」

「な、何！？」

さらに勢いよく、全身から赤い気が噴出する

それと共に少しづつだが、キドモが後ろへ後ろへと押しやられていくのが見えた

（三倍、四倍、五倍……すげえぞ古、どんどん気が上がっていく！）

それに悟空が興奮するのもつかの間

「ぬおわあっ！」

押しやられてバランスを崩したキドモが、古に身体の前面を曝したまま仰向けに倒れ込む

そこへ古が間髪入れず攻め込み

「くっ……」

「せいやっ！」

再び防がんと伸ばしたキドモの右腕を右脚でバシンと蹴り飛ばし

パンッ！

右の肘を打ち降ろし、キドモの身体を赤玉の血糊で染めた

「ぐううっ……つ、強いじゃねえか嬢ちゃん」

「嬢ちゃんじゃなくて、古菲アル」

「古菲、か……へへ、俺の負けだ」

倒れていたキドモが、古の攻撃を受けた腹を押さえながら起き上がる

あくまで『赤玉を割る』ための攻撃であり、フルパワーで打ったわけではなかったためすぐに立てた

「俺の分まで大会、頑張れよな」

「もちろんアル！」

「やったな古！」

残った戦士は、古とミゴレンの二名

よって選出会は終了し、悟空や界王といった面々が屋根の上からここ地上へ

界王が二人の赤玉を取り外すと、悟空が嬉しそうに近付いて腕を古の首に回す

「へへっ、どうだ界王様？これなら文句ねえだろ」

「うむ。しかしよくここまで鍛え上げたのう悟空、たった一週間しかなかったというのに……」

「オラのおかげってわけじゃねえよ、今回の修行でとにかく一番頑張ったのは……古、何よりおめえ自身だ」

「悟空……ありがとアル！」

悟空は界王の言葉に謙遜すると、次に古に目をやり、両者ニッと笑った

少しして、座って休んでいたミゴレンもこちらへ

最後にオリブーもミゴレンの隣に立ち、さて揃ったなと界王が咳払い

「では悟空、オリブー、ミゴレン、そして古……お主ら四人があの世一武道会北銀河代表じゃ。代表の名に恥じぬよう、ベストを尽くして戦うんじゃぞ」

「おう！」

「「はいっ！」」

「ウム！」

あの世一武道会開催まで残り二日弱

決戦の日は、近い

第１１４話　選出会終了　揃った北銀河四戦士（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「今回のゲストは誰なんだ？」

クウネル
「はい、今回はこのお二人」

チュパカブラ
「……」

ギラン
「よう」

クウネル
「『ネギま！？』オリジナルキャラのチュパカブラと、元祖ＤＢキャラのギランさんです」

エヴァ
「久々に無口の奴か……」

チュパカブラ
「……」

クウネル
「ではコーナーの進行を、今回の話ですが……」

エヴァ
「……もしかしてあの世編はこの話で終了か？」

クウネル
「はい、終了です」

注・なんか終わっちゃいました！

エヴァ
「前回３、４話かかると言ったのはどこのどいつだ……」

ギラン
「なんかアッサリと終わっちゃったな」

クウネル
「まああくまで代表選出戦ですからね、あまりにも激バトルにしてダメージ大にするのもマズいですし」

エヴァ
「ミゴレンとサーテの戦いなんだが、ミゴレンの方にしたのは何か意図でもあるのか？」

クウネル
「最初にセリフ付きで登場させたので愛着が多少だが湧いている、とのことです。あとこちら（ネギま）側のキャラ約一名と大会で絡ませる予定だとか」

エヴァ
「まあ、獣系のキャラの方が技とか作り易いか……作者からすれば」

注・それも結構あります

エヴァ
「あと今回の話、読者はついていけたのか？登場キャラ的に」

クウネル
「読者の皆様を信じましょう」

注・ホントすみません、アニメ版のみのマニアックキャラばっかで

ギラン
「それと正確に言えば、俺自体はこの小説の本編に登場したことはないぜ」

注・ギラン一族であるため、ギラン本人は出したことがないのです

エヴァ
「いや、今の話の流れとまったく関係ないだろ」

クウネル
「一度作者が言っときたかったそうです」

エヴァ
「まあいいか……では、続いて次回予告だな」

ギラン
「さて、次回のネギドラ！は……」

エヴァ

「日時は翌日で舞台はこの世、いよいよチケット争奪戦だ」

クウネル
「残された六枚のチケット、果たして手にするのは誰なのでしょうか？」

ギラン
「けどするのって話し合いなんだろ？何か盛り上がりに欠けないか？」

クウネル
「……それだけで無事解決するとお思いですか？」

エヴァ
「おい、まさか……」

クウネル
「非戦闘要員もいるのでガチバトルは無いですよ？ただちょっと別のことを」

注・そういうことです

エヴァ
「さて、次回の更新だが……はぁ！？再来週の月曜か火曜！？何考えてるんだ作者！」

クウネル
「『期末考査が迫っていて、前回の結果が結果だっただけに書いてるどころじゃない』とのことです」

ギラン
「何だか去年の八月にあった『合宿原因による更新遅れ』を思い出すな」

エヴァ
「覚えてる奴皆無だろうがな……で、本気でその間更新無しか？」

クウネル
「流石にそれは作者も抵抗があるらしく、ある一つの案を実行するそうです」

エヴァ
「……それってまさか」

クウネル
「はい、書き溜めてた例のやつを代原として投稿します、ようするに作者の新連載スタートです」

注・ついに決心いたしました！

エヴァ
「ホントにやる気だったのか作者……」

ギラン
「で、どんな内容なんだ？」

クウネル
「『ネギま！と何か別の作品を組み合わせたクロスオーバー』、『ネギドラ！とは全然内容が違う』とだけ言っておきます、あとは投稿されてからのお楽しみです」

エヴァ
「あと『自己満度がネギドラ！以上』とか言ってたな、活動報告によると」

クウネル
「本編は完成済みなので、残りはあとがきコーナー等を少し考えて書くだけ。来週の月～金曜日にかけてプロローグと第１話を一日一本づつ投稿いたします」

ギラン
「あれ？プロローグと第１話ってことは二本じゃねえか」

クウネル
「第１話は？、？、？といった感じで区切って投稿されます。第２話以降もその方式の予定です」

エヴァ
「時間は？」

クウネル
「だいたい昼過ぎですね、あと活動報告にも近い内に詳細を書いておくとのことで」

エヴァ
「……まあそういうわけだ、来週一週間はそれで我慢してくれ」

注・よろしくです

ギラン

「じゃあ、次回のネギドラ！も……」

エヴァ&クウネル
「お楽しみに！」

チュパカブラ
「……」

～今日の〇〇～

「でやあああっ！」

「うわあああっ！」

とある街外れ

そこで二人の男が、互いに拳を交わしていた

だが、背の低い男の方が断然優勢

背の高い、山吹色の道着を着た方の男に次々と攻撃を浴びせていく

そんな攻撃を何発か受け

ボンッ！

「ちっ、もう終わりか……」

背の高い方の男は煙を上げ、跡形もなくその場から姿を消した

と同時に残った方の男は、自分がいるところからやや離れた場所にいる少女に顔を向ける

「おい！もっと強いやつは出来んのか！さっさと描け！」

「無茶言わないで下さいよ！これでもう限界ですってば……」

「こんなカカロット相手じゃ、てんで修行にもならんぞ！」

（ううう、トランクスさんがアスナや刹那さんのトコに剣の稽古に行ってなければこんなことには……）

「さっさとしろーーーー！」

「は、はいっっ！」

少女はやや涙目になりながら、男の修行のために再びペンを手に取った

第１１５話　引き抜け足下（そっか）の根菜類　チケットは我が手に（前書き）

お久しぶりです、テスト関係で一週間以上も開けてしまいすみませんでした。新連載なんか始めてしまいましたが、基本こっち中心で頑張りますので！

ではどうぞ！

第１１５話　引き抜け足下（そっか）の根菜類　チケットは我が手に

「せやせやせやせやあっ！」

「もっとだ古！もっと界王拳の気を全身から滾らせろ！」

「よしきたアルッ！」

選出会は終わり、翌日

栄えある北銀河代表として選ばれた悟空、古

「だだだだああっ！」

「（腕を上げたな、ミゴレン……）まだまだぁっ！こっちもいくぞ！」

そしてオリブーとミゴレンは、明日の大会へ向けての総仕上げに入っていた

無論、他の三銀河の選手も同様

西の銀河でも

「パイクーハン！今度こそ孫悟空に勝てよ！そして北の界王をギャフンと言わせてやるのだ！」

「言われなくてもそのつもりです、一年前のようにはいきません」

（流石師匠だ、こうして私の攻撃をかわしながらあの余裕……確率は低いと思うが、やはり大会では当たりたくないな）

南の銀河も

「ウガーーーー！ウガーーーー！」

「はっはっは！いいぞパポイ！その調子で優勝はいただきだ！」

「ウガーーーーーー！」

東の銀河も

「あんた！今度はベスト４くらいには何としても残りな！でなきゃ承知しないよ！」

（次こそ絶対勝つ……孫悟空に）

「ちょっと！人の話聞いてるのかい！？」

どの選手も皆、精一杯の汗を流していた

そしてその頃下界では

「よおっし！次は私の番ね！」

「アスナー、頑張りやー」

太陽から降り注ぐ光に汗を流しながら

「……決めた！これ！」

自身の足下、そこに多数ある中から一つを選び

「いくわよ……」

膝を曲げ、しゃがみ込んでそれの先端を両手でがっしと掴み

腕に力を込め、両脚を踏ん張らせ

皆が緊張の眼差しで見つめる中

「せりゃあああああああっ！」

ズボッ！

「……やったー！大当たりーー！」

「おおおっ！これはデカいっスね姐さん！」

パオズ山、悟飯宅の畑から大根を引き抜いていた

さて、『何故こんなことになってるのか』と訊かれれば少し時間を戻す必要があろう

そう、ブルマ宅で本日行われていた『誰がチケットをもらってあの世一武道会を見に行くか』を決める話し合いの頃まで

厄介事に発展させたのは、茶々丸やギニューの件に引き続いてまたもこの男だった

「だからこの俺が行くと言ってるだろうがっ！そしてカカロットと戦うんだ！」

断固として辞退することを拒否するベジータだ

「ベジータさん少し落ち着くです。ですから日程の関係上、悟空さんと戦うことはほぼ無理です」

「無理なことがあるか！」

前に説明しに来た際言ったにもかかわらず、やはり彼は夕映の言葉を無視して声を荒げる

「それに悟飯やあのガキはまだ分かるとして、何故クリリンなんかにまでチケットを渡すんだ！」

そして既に夕映から大会のチケットを受け取った、悟飯達三人をビッと指差した

悟飯とネギについては話し合いの最初で全員から（ベジータは渋々）承認され、いち早くチケットを獲得

悟飯は孫悟空の実子、ネギは古の先生兼弟子であるのでまあ当然だろう

だがその直後、夕映が思い出したようにクリリンにチケットを渡したのがベジータとしては我慢ならなかったのだ

「確かにそいつはカカロットと付き合いが長いかも知れんが、それ

だけの理由で六枚しかないチケットを渡す気か！」

「違うです、古菲さん本人の希望です」

「……何？」

ベジータの抗議に、夕映は予測して準備してたのかスラスラと答えていく

「以前古菲さんは大会へ向けて地獄で武者修行を行っていたのですが、その際地獄まで付き合ってくださった方に古菲さんが……」

『大会、もし出られたらクリリンにも見てもらいたいアルなー……まあ、あの世（こっち）の大会じゃちょと無理アルかな』

「と言ったそうです、つまりはある意味古菲さんのご指名なわけです」

しかも、ネギ等他の仲間をすっ飛ばして真っ先に『クリリン』である

「試合を見てもらう立場の古菲さんがそう言ってるんですから、それを無下にするわけにはいきません」

「ぐぐぐぐぐ……やかましいやかましい！とにかく俺は何としてでもあの世へ行ってカカロットと戦う！さっさとチケットを寄越せ！」

ベジータは席を立ち、怒りを全面に出したまま夕映の方へと歩き出す

『ブルマ達が見ている中、そこまで酷く自分に対して乱暴は出来ない』と容易に予測出来た夕映は

「そんな理由だからチケットを渡すわけにはいかないんです、とにかくまずは席に戻ってください」

少々を腰を引かせてしまったものの席から動くことはなく、そのままベジータを見据えて制止を促した

が、当然ベジータがそんな言葉一つで止まる筈もなく

「そっちから渡さないというなら、こっちにも考えがある……」

両手を使って、両指の関節をパキパキ鳴らし始める

「お、おいベジータ！相手はただの女の子だぞ！？」

「やかましい！」

「うごっ！」

「ヤムチャ様！？」

後ろから肩を掴んで止めようとしたヤムチャを肘打ちで黙らせ、前進

たまらず、今度はトランクスが飛び出した

「駄目です父さん！こんな場所で暴力なんか使っても無意味です！」

「そこをどけトランクス！」

「ベジータさんやめてください！」

さらには悟飯も駆け寄り、二人掛かりでベジータを止めに入る

夕映のもとへと向かう進行方向上に立ち、それぞれベジータの肩を抑え込んだ

だがこれによりベジータの怒りは急騰

皆が予想するより、さらなる斜め上の暴走

「いい加減にしろ！貴様ら二人が相手なら俺は容赦なく暴れてやるぞ！」

「「うわっ！」」

「待てベジータ！お前こんな狭い場所で超サイヤ人になるんじゃない！」

「おい！誰かベジータを止めろ！」

超サイヤ人になり、通常形態のままの二人を強く突き飛ばす

ピッコロ、天津飯の両名が叫ぶ中、悟飯らも超サイヤ人になって応戦

しようとしたところで

「……あんた達！いい加減にしなさーーーーい！！」

茶々丸の件と同じく、ブルマの怒声が響いた

このブルマの怒りを初めて目にした者達（主にネギ側）は、言葉が出ず

「ベジータ！あんたこの前ウチの庭園で大暴れしたばっかじゃないの！さらに家の中メチャクチャにするんなら、今度こそ食事抜きにしてやるわよ！」

「何！？」

「第一こんな長ったるしく話し合いしてても、ベジータみたいな我儘がいちゃ終わるわけないわ！もうこうなったら、残りはくじ引きで決めるわよ！」

「え？ですがブルマさんそれは……」

「何かしら？夕映ちゃん？」

「……いえ、何でもありません」

夕映すらもその迫力で黙らせた

そして仕方なく、残りの三枠を賭けてくじ引きを決行

しかし餃子が超能力を使おうとしたのを夕映やネギが感知し、通常のくじ引きはやむなく中止

じゃあどうするか、となったところで

「……えっと、５２センチですね」

「嘘！？ギリギリで足りなかったーーー！」

どういうわけか、『悟飯宅の畑で育てていた“良かっ種大根”が収穫時なので、それを抜いて抜いた大きさで決めよう』となったのである

「これで、残りはあと二人ですね」

アスナが引き抜いた大根はかなり大きかったものの、暫定トップ3の大きさには及ばず

ちなみに現在のトップ3

「よしっ、これで安全圏や！悟飯やネギと一緒に行けるで！」

一位　コタロー（畑仕事を手伝ってたので、どれが育ちのいい奴かアバウトではあるが知っていた）

「私は次のが分かれ目よね……」

二位　ハルナ（大根はフリーザゴーレムに抜いてもらいました）

そして三位

「よおしあと二人だ！ジース達に会えるぞーーー！」

昨日、別れ際にハルナ達から話を聞いて急遽参加していたギニューの三人

まだ畑から大根を抜いていない二人は

（なんだかやり辛いな、順番的に……）

（絶対引く！何が何でも一番デカいのを引いてやる！ギニューなんかに負けてたまるか！）

トランクスと、ベジータ

「じゃあ次は、トランクスさんお願いしますです」

「あ、うん分かった」

夕映に呼ばれ、トランクスが畑の方へ移動した

（さて、どれにしようかな……これにするか）

どれを抜くか少し悩んだが、程なくして手身近にあった一本の大根に目を付ける

「……それっ！」

ズボッッ！

「うおっ！トランクスさんのも結構デカい！」

抜いてみるとかなりの大きさ

もしや負けたかと焦るハルナだが、結果

「……５３センチ、ギリギリ四位です」

ギニューの記録５４センチにも僅かに劣り、チケットを逃す

この結果にはトランクスも苦笑いし、そのまま自身の父と番を交代させた

「えっと……じゃあ最後は父さんですね」

「よし」

ベジータは待ってましたとばかりに大根の方へ歩み寄る

大根は参加人数を計算して植えたわけではないのだが、丁度残り二本

（どっちだ……どっちを引く？）

左右交互に首を振り、地面から生える大根をそれぞれ見る

（ここで当たりを引かなければカカロットとは戦えん……どっちだ！？）

「ベジータさん、あなたが引いて終わりなんですから早くしてくださいです」

「やかましい！どっちが当たりか分からんくなるだろ！少し考えさせろ！」

生唾をゴクンと飲んだところで夕映の声が飛び、八つ当たりをかまして再び頭を悩ませる

（くそっ、見た目だけではサッパリ分からん……ここで外れを引くわけにはいかんというのに！）

おそらく、力による結果の捻じ曲げは出来ない

これで正真正銘最後のチャンス

ベジータは眉をひそめ、歯を食いしばり、拳を全力で握り締めて考えるに考える

これには夕映も、早くしろと続けて急かすことを躊躇わせ

悩みに悩み、悩みに悩み

三十分が経過した

（くそおおおっ！どっちだ！どっちを引けばカカロットと戦えるんだ！）

このまま放っておけば、おそらくこの時間は何時間にもなるだろう

だが、声を掛けることを皆が躊躇する

すると痺れを切らし、彼らがベジータへと言葉を発した

「父さん！そんなことで悩むなんて父さんらしくありません！」

「……トランクス？」

「そうですよ！お父さんなら悩んだりなんかせず、自分がこれだと思ったのをそのまま抜きます！」

「悟飯……」

先程もベジータを止めようと奮闘した、トランクス＆ベジータ

この言葉に、ベジータの心が揺らぐ

（俺らしくない……カカロットなら悩まない……）

直後に表情を引き締め、左の大根を睨みつける

（そうだ、俺はいったい何をしていたんだ……サイヤ人の王子たるこの俺が、たかが大根一本で心を躍らされるなどと……そんなことあってたまるか！）

右手を伸ばし、掴み

「これだあああああああああああっ！」

片手一本で引き抜いた

「「「「おおおおおおっ！」」」」

「すげえっスよベジータの旦那！文句なしの一番ですぜ！」

「やりましたね父さん！」

「負けたぜ、ベジータ……（スマンなみんな、いつか必ず会いに行くからな）」

コタローが引き抜いた７０センチの大根をも凌駕する、８０センチ強の超巨大大根を

「はっはっはっはっは！どうだ、見事当たりを引いてやったぞ！これがサイヤ人の王子たるこの俺の強運だ！」

ベジータは喜びと充実感溢れるその顔で、夕映の方へ移動して手を出す

「そらチビ助、さっさとチケットとやらを寄越せ！測るまでもまくこの俺が一番だ、文句あるまい？」

「……仕方ありません、そう決めたわけですし」

夕映は残る三枚の内一枚をベジータに手渡し、二番のコタローと三番のハルナにもそれぞれ渡していった

この二人もベジータほどではないにしろ、嬉しさで口元を緩ませる

「では全員決まったところで、明日の日程を説明しておくです。大会は開会式が午前九時からですので、集合時間は移動や手続き等の時間を考えて占いババさんの館へ七時半ご……」

「よしっ！そうと決まれば早速、カカロットとの勝負に備えて修行の最終調整を行う！後に続けトランクス！」

「あ、待ってください父さん！」

「ちょっと！人の話はちゃんと最後まで聞くです！」

ベジータと、彼を追うトランクス

彼ら二人は瞬く間に見えなくなり、夕映の叫びも虚空に響き渡る

「……ハルナ、あとで帰ったら伝達お願いしますです」

「了解……」

その後はつつがなく集合時間等の連絡事項を伝え、解散

選ばれた者らは皆、明日に備えて準備に勤しむこととなったのであった

ちなみに

「ふう、みんな帰ったか……僕達も支度しなきゃね、カモ君」

「そうっスね兄貴。……そういや一本残りやしたけど、これも抜いちまいやすか？」

「せやな。そんじゃ俺が抜くわ、それっ！」

ズボッ！

「うおっ！こっちもすげえデカいっス！」

「……ということは、あの時どらちを引いててもベジータさんは行けたということですの？」

「「「あ」」」

（あの時待った三十分って一体……）

第１１５話　引き抜け足下（そっか）の根菜類　チケットは我が手に（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「今回のゲストはどうなっているんだ？」

クウネル
「はい、今回はこのお二人」

セル
「やあやあ、この小説内では初めましてかな？セルだ」

フリーザ
「お久しぶり、フリーザです」

クウネル
「地獄悪人コンビ、フリーザさんとセルさんです」

エヴァ
「そんなリクあったか？」

クウネル
「ありました、二月中旬」

エヴァ
「またそんな化石ものを……」

クウネル
「いやいや、もっと古いのだってまだ眠ってますから」

エヴァ
「まあ確かにそうだが……」

クウネル
「ではコーナーの進行を、今回の話ですが……」

エヴァ
「例の新連載のせいかは知らんが、大分内容が雑になってないか？
一応オチはつけられたが」

クウネル
「かもです。というよりストーリーそのものが、作者の中でかなり
アバウトなまま書き始めたのでそのせいもあるかと」

エヴァ
「おいおい……」

セル
「しかし良かっ種大根とは、随分とまたマニアックなチョイスだな」

エヴァ
「これＴＶシリーズ未登場だからな、知らない読者も多くないか？」

フリーザ
「かもですね。一応説明しておきますと、昔ジャンプフェスタで公
開された新作ＤＢＺアニメに登場した野菜です。作中で登場した敵、

私の元部下のアボ&カドと戦う相手を決めるべく、くじ引き代わりとして使われました」

エヴァ
「つまり、今回と使われ方は殆ど一緒ということか」

注・はい

クウネル
「あと何気に、このコーナーでその伏線張ってたりしてます」

エヴァ
「それから今回の話を連想させた者は流石にいるまいな……」

セル
「では続いて、次回予告のようだ」

フリーザ
「さて、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「ついにあの世一武道会開催……の前に一回、また番外編をやるみたいだな」

クウネル
「このコーナーのゲストまとめ二回目と、読者様からいただいたリクエストを一件お送りいたします」

フリーザ
「投稿予定は来週の月曜日、番外編なので前のように日程に余裕を

持たせるようですね」

エヴァ
「ゲストはどうなっているんだ？また前回みたいな大人数だと、文字数とか凄いことになりかねんぞ？」

クウネル
「超さんの協力により、またとんでもない方々を二名呼ぶ予定になってます」

セル
「はてさて、誰になることやら……ん？もしや幼虫の頃のわたｓ」

エヴァ
「それはないから」

フリーザ
「では、次回のネギドラ！も……」

エヴァ＆クウネル＆セル
「お楽しみに！」

～今日の〇〇～

「はあっ、はあっ、はあっ……」

「では、少し休憩にしましょうか。身体への過度な負担は、あまりよろしくないかと思われます」

「そ、そうね……」

某街にある某豪邸

そこにある修行用の地下室で、二人の少女がさっきまで拳を交わし合っていた

と言っても、主に拳を飛ばしていたのはその片方

齢十歳程の小さな少女

もう片方、身長１７０を超える少女はそれを防ぎながら、小さい方の少女に稽古をつけていたようである

「ふー、疲れた……やっぱりそうすぐには強くなれないか」

「いえ、初めて修行にお付き合いさせていただいた二週間前に比べ、格段に強くなっていらっしゃいます」

「……ありがと」

スポーツドリンクに手を伸ばし、水分補給

小さい方の少女はそうしたが、彼女の隣に座る方の少女はそのそぶりすら見せない

彼女の方は汗一つかいておらず、というよりかかない体質であるためそのような必要が無かった

「早く私もうんと強くなって、あの時の変なおっさんを倒せるくらいまで強くなってやるんだから！」

「その意気です。いられる時間は残り僅かですが、私も出来る限りのお手伝いをさせていただきます」

「うん！ありがと！」

疲れも大分吹っ飛んだようで、少女は元気よく立ち上がる

「さあ、修行再開よ！」

「……はい」

背の高い方の少女も立ち上がり、再び両者向かい合った

（そう、あの時の二人みたいに私も強くなる！普通の人の目じゃ追えなくなるくらい速くなって、凄いパワーを手に入れて、あと手から光線撃ったり目からレーザー出したり……）

（何でしょう？なんだか『強くなる』ということに変な誤解をされかけているような気がします）

番外編４　ゲストまとめ２＆強さ比較＋α（前書き）

お待たせしました、番外編です。ではどうぞ！

番外編４　ゲストまとめ２＆強さ比較＋α

クウネル
「どうも読者の皆さま、今回なんと番外編第４弾！」

エヴァ
「（何か最近頻度が増してきた気がする……）『復活までの一週間編』の間のあとがきゲストのまとめ等をゲスト二人と共にお送りするぞ」

クウネル
「そういうわけで超さんの協力のもと、このお二人をお呼びしました」

悟天
「わーーい！よろしくねーー！」

トランクス
「いえーーーーい！」

クウネル
「ブウ編から引っ張り込んできました、孫悟天君とトランクス君です」

エヴァ
「こいつらかよ……こんなガキ共がゲストでコーナーが成立するのか？」

トランクス

「なんだよー、お姉ちゃんだって同じくらいちっさいじゃんか」

エヴァ
「何だと！？貴様八歳児のくせして偉そうに！」

トランクス
「だってほら、身長殆ど変わんないじゃん」

悟天
「あはは、ホントだ」

エヴァ
「いいや！それでも私の方がちょっとだけ高い！」

トランクス
「そんなわけないって」

エヴァ
「クウネル！」

クウネル
「はいはい、えっとなになに……公式データによりますとエヴァンジェリン１３０センチ、トランクス君１２９センチ、悟天君１２３センチとなってますね。確かにエヴァンジェリンの方が僅かですが勝ってます」

エヴァ
「はっ、見たかチビッ子め！」

トランクス

「でも、殆ど一緒ってことには変わりないじゃん」

クウネル
「確かに、というかあなたの身体って十歳のそれなんですよね？」

トランクス
「え！？俺より二つも上なの！？この身長で！」

エヴァ
「貴様、この私に捻り潰されたいか……」

クウネル
「あくまで『肉体年齢』がです、実際は６００をゆうに超えるの吸血鬼なわけでして」

トランクス
「そんな年上なのに少ししか変わらないの！？」

ブッチンッ！

エヴァ
「もう許さんぞ貴様ーーー！」

悟天
「うわっ、お姉ちゃんが怒ったー！」

暫くお待ちください

クウネル
「えー、というわけで早速進めていきましょうか」

エヴァ
（くそがっ、いつか見ていろこのガキめ……）

トランクス
（ちぇっ、別に止めなくたって俺ならやられたりなんかしなかったのに）

悟天
（このお兄さんが止めてくれなかったら今頃大変だったろうな……）

注・実際どうなってたかはご想像にお任せします

クウネル
「初めにもありました通り、まずはゲストまとめです。どうぞ」

第８６話　刹那　ヤジロベー
第８７話　クリリン　コタロー　男狼
第８８話　超　チャオ　金角　銀角
第８９話　五月　サタン
第９０話　ハルナ　ピラフ一味
第９１話　ピッコロ　のどか
第９２話　アックマン　ナム
第９３話　ビドー　ドスコイ
第９４話　さよ　朝倉
第９５話　ヤムチャ　亜子
第９６話　ベジータ　ナッパ　ラディッツ

第９７話　真名　ランチ

第９８話　パラガス　エヴァ（笑）

第９９話　ピッコロ　超

第１００話　悟空（少年期）　ベジータ　古

第１０１話　千鶴　しずな　ブルマ母

第１０２話　超　古

第１０３話　バーダック　セリパ　トーマ

第１０４話　最長老　ネイル

第１０５話　ウミガメ　子ガメラ

第１０６話　アキラ　カリン　桜子　プーアル

第１０７話　占いババ　木乃香

第１０８話　ネギ　コタロー

第１０９話　スラッグ

第１１０話　明日菜　刹那

第１１１話　なし

第１１２話　ギニュー特戦隊
第１１３話　悟空　バーダック　ターレス
第１１４話　ギラン　チュパカブラ
第１１５話　フリーザ　セル

クウネル
「となっています」

エヴァ
「おい待て、第９８話の『エヴァ（笑）』って何だ」

クウネル
「だってあの時の司会は私とランチさんでしたから」

エヴァ
「私はあんなの認めてないからな！」

悟天
「ねえねえ、何で第１１１話は『なし』なの？」

エヴァ
「ギニュー編で二本立てがあったからだ、ってお前達はギニューなんて知らな……」

トランクス
「ああっ！ギニューおじさんか！」

悟天
「その話でギニューおじさんが活躍したの？」

エヴァ
「え？……ちょっと待て、まさかこいつら」

クウネル
「はい、『本作から六年後の未来』から連れてきた二人です」

エヴァ
「おいおいマジか……」

悟天
「お兄ちゃんと一緒に変身したりして頑張ってるんだ」

トランクス
「しかも登場のポーズまで考えちゃったんだぜ？俺はあんなの、カッコ悪くて絶対出来ないな」

エヴァ
「あいつはその六年間で何を見出したんだよ……」

クウネル
「では続けてリクエスト企画、『登場キャラの強さ比較』です」

ラカン

「つーわけで、ここからは俺も登場させてもらうぜ」

エヴァ
「うおわっ！お前いつの間にここに来た！？」

ラカン
「ついさっきだ、というかこれ書いてる最中に『そういやラカンも出さなきゃだったな』と作者が急に思い出したらしい」

エヴァ
「計画性を持って書け作者！」

クウネル
「本来のリクエストでは『ラカン強さ表を使って』でしたが、数値表現が難しすぎるということで単に『上から強い順に並べる』だけになってしまいました、そこはご了承ください」

エヴァ
「また叩かれることにならなければいいがな……」

ラカン
「よーっし！つーわけでいくぞ！そら！」

注・もしかしたら携帯の方は見辛いかもです、すみません

悟飯（超２）≧トランクス（超２）

ボージャック

悟空（超１）≧悟飯（超１）

トランクス（超１）　ベジータ（超１）≧ピッコロ

ネギ（魔力暴走）

ビドー＝ゴクア≧ザンギャ

ブージン

茶々丸

悟空（普）≧悟飯（普）

トランクス（普）　ベジータ（普）　刹那（剣）≧楓＝真名≧刹那（格闘）

コタロー（獣化）　ネギ≧コタロー（普通）

アックマン

古

天津飯　クリリン

アスナ（咸卦法含む）

ヤムチャ　フリーザゴーレム≧その他のゴーレム（平均）

あやか

ギニュー

ラカン
「とまあ、おおまかに書けばこんな感じだ。実力がかなり拮抗してる奴らは不等号とか使って横に並べといたぜ」

エヴァ
「ということは、段落が変わった＝『＞』という解釈でいいのか？」

ラカン
「概ね問題ない、ちなみに上に書いてあるのは戦闘シーンがあった奴らだけだ。だからパイクーハンやオリブーは表の中に入れていない、そこは了解頼むぜ」

クウネル
「あと見て分かります通り、トランクス（普）～刹那（格闘）までがかなり団子状態です」

トランクス
「あれ？俺の名前が入ってる」

エヴァ

「あれはお前じゃない、まあ確かにお前でもあるがな」

トランクス
「？？？」

悟天
「ねえねえ僕達は？僕達はどの辺りに入るの？」

ラカン
「そうだな……」

トランクス&悟天
（ワクワク）

ラカン
「……分からん！」

トランクス&悟天
「えええええっ！？」

エヴァ
「おい、ちゃんと答えてやれよ」

ラカン
「だって原作でも比較対象が殆どいねえからサッパリじゃん？ヘタに決めると後々面倒になりそうだから作者もやりたくねえんだよ」

エヴァ
「それが本音か……」

ラカン
「とりあえず言えるのは、茶々丸＜トランクス　悟天＜ボージャックってことだけだな」

エヴァ
「前にアックマンの時も言ったが、範囲がアバウト過ぎるだろうが！」

クウネル
「ですが今回の企画で、アックマンさんの強さがより明確になりましたね」

エヴァ
「古菲とぼーや達の力量差がどれだけあるかがまだ微妙なところだけどな」

トランクス
「でもつまり、俺達そのアックマンとかいうのよりは強いんだよな！」

悟天
「うんうん！」

ラカン
「はっはっは！元気のいいガキ共だな！」

クウネル
「……さて、もうすることが無くなってしまいました」

エヴァ

「なんか今現在の文字数が凄く残念な状態なんだが……本編一話分にも達してないぞ？」

クウネル
「企画二つだけだとあんまりもちませんでしたね」

トランクス
「えー、もう終わりなのー？」

悟天
「もっとやりたいよー！」

エヴァ
「そんなこと言ってもだな……」

ラカン
「第二回登場人物紹介ーー！ドンドンパフパフドンドンパフパフ！」

エヴァ
「ってうおっ！何だいきなり！？」

ラカン
「企画がねえなら新しく作ればいいんだよ！というわけで以前紹介しなかったキャラを何人かここで簡単に紹介するぜ！」

エヴァ

「ちなみに若干行が空いてるのはどうしてだ？」

クウネル
「パソコンの前で作者が五分ばかし考えていた空白の時間を表してます」

エヴァ
「また分かり辛いことを……」

トランクス
「誰を紹介するの？」

クウネル
「見てからのお楽しみですよ」

ラカン
「折角だから一人づつ紹介するぜ！まずはこいつだ！」

孫悟空（ＤＢＺ）
ご存じ原作の主人公。一年前セルとの戦いで命を落とし、息子悟飯に地球の未来を託してあの世での修行に日々励む。あの世でも実力はやはりトップクラスで、今度行われるあの世一武道会ではパイクーハンと並んで優勝候補筆頭とも呼ばれる。また古の第二の師匠的存在であり、界王拳の習得に協力した。加えて真名には瞬間移動を教えており、少なからずネギ達側の戦力強化に一役買っている。

エヴァ
「そうそう、前の登場人物紹介では登場すらしてなかったから出来なかったんだったな」

クウネル
「ボージャック戦でも悟飯君に叱咤して再び超サイヤ人2へと覚醒させていますし、あの世のキャラとしては中々の活躍ぶりですね。あの世一武道会編にも期待しましょう」

ラカン
「次はこいつだ！」

パイクーハン（ＤＢＺ）
西銀河の武道家の中では一番の実力者で、悟空のライバル的存在。一年前のあの世一武道会では超サイヤ人の悟空と激闘の末敗れ（記録的には引き分け）、リベンジを果たすべく今まで以上の修行に励む。真名とはほぼ師弟のような関係を築き（本人はあくまで『修行仲間』として見ており否定している）、彼女からの信頼は厚い。

エヴァ
「そういえば二人が初めて会った話をいずれやるとか言ってたが、あれっていつやるんだ？」

クウネル
「ホントはあの世編でやる予定でしたが作者もすっかり忘れてたみたいで……あの世一武道会編のどこかで挟みます、多分」

ラカン
「次はこいつだ！」

アックマン（ＤＢＺ）
占いババ軍団で大将を務める地獄生まれの戦士、『地獄生まれ』なので別に死んではいない。十数年前に自分を倒した悟空との再戦を誓い、日々地獄での修行に明け暮れている（一応仕事とは両立）。さらには占いババに頼まれ夕映の修行の相手（戦闘面）も担当、夕映からは結構信頼されている。必殺技はアクマイト光線、最近は地獄の悪人の技もいくつか習得している。

エヴァ
「やはり載せてきたかアックマン……前回は普通に掲載をスルーされてたのに」

クウネル
「既にもう準レギュラーポジションを獲得済みですからね、載せずにはいられなかったみたいです」

悟天
「ねえねえ、アクマイト光線ってそんなに強い技なの？」

エヴァ
「お前にはまず効かないから安心しろ」

ラカン
「次はこいつだ！」

ギニュー（ＤＢＺ）
ギニュー特戦隊の隊長であり、フリーザの元部下。カエルの姿で数年地球で暮らしてきたが、のどか達の協力により元の身体を取り戻すことに成功した。自分のしてきた悪事を心から悔いており、今までの罪を償うべく頑張っていくことを決意する。とりあえず現在は神様の神殿に居候状態、あまり下界に降りられないデンデに代わり様々な仕事をこなす。

エヴァ
「『元部下』なのに、『元隊長』ではないんだな」

クウネル
「本人曰く、『我ら特戦隊の絆は永遠に不滅だ！』とのことです」

エヴァ
「しかし神殿に居候って……」

ラカン
「あそこにはピッコロも住んでるから、四人暮らしになってるわけだな」

エヴァ
「あいつからしたらいきなりのことで驚いただろうな……というか、神殿で生活してる様子が小説中で今まで一回も無いんだが」

悟天
「山籠りの修行を時々やってるんだって。兄ちゃんが言ってた」

クウネル
「楓さん達との邂逅は丁度その時で、そのまま今に至るまで山籠り続行中です」

ラカン
「まあぶっちゃけ、『ピッコロは神様の神殿で生活』っていう設定を作者が途中まで忘れてたんだけどな」

エヴァ
「おい」

ラカン
「お次はこいつだ」

ミスター・サタン（ＤＢＺ）
格闘技＆バカの世界チャンピオン。『セルゲームでセルを倒したのはサタン』という勘違いが世界中で起こり、さらには銀河戦士騒動もサタンが解決したことにされ、今もなお国民からの人気は衰えることを知らない。『可愛いから』という理由だけで千雨＆茶々丸を屋敷のメイドとして採用、千雨（ちう）が最近お気に入りになってきた。

エヴァ
「良いことが全然書かれていないな」

クウネル
「いえ、文無しだった千雨さんと茶々丸さんに住み込みの仕事を与えてくださってます。これは一応セーフかと」

エヴァ
「だが理由が……」

ラカン

「次はこの嬢ちゃんだな」

ビーデル（ＤＢＺ）
サタンの一人娘で、第２４回天下一武道会では少年の部優勝の実績を持つ。屋敷に突如現れた桃白白に立ち向かうもすぐ倒されるが、彼をアッサリと撃退してみせた茶々丸に憧れ格闘技の教えを請う。知り合いには一切内緒で（千雨除く）、地下のトレーニングルームにおいて毎日稽古を受けている。その甲斐あって現在の強さはサタンにほぼ並び、追い抜く日は近い。

エヴァ
「ちなみに桃白白は誰にサタン暗殺を頼まれたんだ？」

クウネル
「作者は特に決めてなかったそうです」

ラカン
「最後はこいつだ！」

龍宮真名（ネギま！）
バイアスロン部所属の銃の名手。『魔眼』なる特殊な目を持ち、刹那等と共によく退魔の仕事を行う。暫く行方不明であったがボージャック戦において突如参戦、生きたまま大界王星に飛ばされていたことが明らかとなった。パイクーハンとの修行、精神と時の部屋の修行を経てその実力は格段に上昇。また、悟空から瞬間移動を教わって不完全ながらも習得、転移魔法符代が浮いて本人的にはかなり嬉しい模様。

エヴァ
「こいつは前にも紹介しただろ？」

ラカン
「あの時はまだ本編未登場（プロローグ除く）で詳しく書かなかったからな、改めて掲載させてもらったぜ」

悟天
「バイアスロンって何？メロンみたいな果物？」

エヴァ
「そんなわけあるか。あと作者、このボケは無理やりすぎるぞ」

クウネル
「……さて、今度こそ今回の番外編全企画終了ですね」

トランクス
「なーんだ、もう終わりか」

悟天
「僕達また出られるかな？」

注・多分もう無理です

エヴァ
「では最後に次回予告だな」

ラカン
「さて！次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「ついに開催あの世一武道会！」

クウネル
「話の始めはネギ君達から、大界王星まで到着するところを描写した後開会式に入ります」

ラカン
「あとは尺があれば、『親子＆師弟感動のご対面』ってとこだな。いずれにしろこのシーンは作者が気合を入れて書くみたいだぜ」

トランクス
「投稿予定はまた来週の月曜なんだってさ」

エヴァ
「最近週一化してきてないか？」

注・違うんです！今週から学園祭に入っちゃって書く時間が無いだけなんです！何か体育館の耐震工事とかで前倒しになっちゃって！

エヴァ
「だが書いてて余裕が出来たらあっちの連載小説の原稿もやるんだろ？」

注・否定はしませんが学園祭はホントです！

エヴァ
「……」

悟天
「じゃあ、次回のネギドラ！も……」

エヴァ＆クウネル＆ラカン＆トランクス
「お楽しみに！」

エヴァ
「今さらなんだが、ギニュー登場後に人気投票やってたら順位大分

違ってたんじゃないか？」

クウネル

「本当は作者もその辺りの時期にしたかったらしいです、ただあまりにも時間が掛かりそうなうえ我慢が出来なかったらしく……」

ラカン

「来年の三月になったらまたやりゃあいいじゃねえか」

エヴァ

「……それまであと八カ月か」

注・これからも頑張ります！

番外編４　ゲストまとめ２＆強さ比較＋α（後書き）

強さ比較はもしかしたら違和感を感じ次第修正しちゃうかもです、
その点はご了承ください。

第１１６話　一同集結！開催、あの世一武道会（前書き）

お待たせしました、いよいよ今回からあの世一武道会編です。あと、同日に投稿したもう片方の連載小説ももしよろしければ……まあ、これとは全然別タイプなんですが。

ではどうぞ！

第１１６話　一同集結！開催、あの世一武道会

「うむ、では以上九名……と一匹に今から肉体を与えよう」

あの世、にある閻魔の館

そこの長である閻魔大王が今、目下にいる少年少女達（数名除く）へと術をかけた

「あ、身体から両足が！」

「地に足ついてなくて落ちつかへんかったからな……」

魂だけ取り出された霊体、いわゆる両足が無い状態だったネギ達にすぐさま足が

同時に霊体特有の透明感ある身体も、透明感が消えて元の身体と同じになる

また、こっちへ来る前から元々霊体だった相坂さよにも両足が

「閻魔のおじ様、私にまでありがとうございます！」

さよは当然歓喜し、これ以上ないくらい閻魔大王へ深々とお辞儀をして見せた

閻魔大王はそれを微笑で返し、続けて占いババに目を向ける

占いババは館に来た時点で身体が霊体ではなかったので、術をかけずそのまま

ところで、彼女が頻繁に仕事で使う、あの世とこの世を行き来する移動術

結構便利なのだが、自分以外は死者もしくは霊体だけの者でなくては一緒に移動が出来ないという欠点持ち

そのため同行者のネギ達八人＋カモは、一時的にだが肉体に幽体離脱を促す特別な薬を飲ませて連れてきた（さよは元々霊体であるため飲ませる必要なし）

『これ使えばいつでもあの世に遊びに行けるじゃん』と朝倉が口にしていたが、どうも身体に耐性が付くらしく一生の内一回か二回が限度らしい

ちなみにこれを飲んで霊体になった直後、さよが『お仲間が増えたみたいで嬉しいですー』と中々に縁起でもないことを口にしたのはいい思い出（？）だったりする

閑話休題

閻魔大王は占いババに二、三何かを伝え一同を送り出す

後で訊いてみると、『界王様や大界王様によろしく言っておいてくれ』という感じのことだったらしい

閻魔大王は立場上、職務を放棄してまで大会を見に行くのは不可能なためまあ当然かもしれない

そして職員の鬼の案内で館を別の出口から出て、現在

「うわあ！これが古老師も見たあの世の景色かー」

備え付けの飛行機、大界王星行きの直行便に乗って移動していた

悟空や古が乗ったのとは違い、普通に羽田とかにありそうなのを少し縮めたやや大きめのタイプ

ほんの十分前後しかない空の旅なのだが

「ガツガツガツガツ……おい、そこにあるのも早く持ってこい」

「何で私ばっかり！っていうか目的地にはすぐ着くんですから、そんなに食べなくても別に……」

「いいからさっさと持ってこい！今日俺は睡眠不足なうえ朝飯を食ってないんだぞ！」

ベジータはハルナを思いっきりこき使い、機内にある食料を次々と平らげていた

一応言っておくとベジータが朝食を食べていないのは、昨夜いつも以上に夜遅くまで修行していたため

いつも通りの時刻に寝たハルナはちゃんと起きて朝食を食べられたのだが、ベジータは約束の時刻ギリギリになってようやく起床（トランクスはキチンと早起き出来て朝食を食べられました）

朝食抜きのまま已む無く出発してしまったのである、とんだとばっちりにハルナ涙目

（ううっ、せめてトランクスさんかブルマさんがいてくれれば……）

しかし逆らうことはハルナには不可能なわけで

ベジータの前へと食事を運んでいく

すると

「お、見えてきたで！あれが大界王星やないか？」

「うん、きっとそうだよ！あそこにお父さんが……」

窓から大界王星が姿を見せてきた

これに歓喜する一同

（こ、これで解放された……良かったー！）

特に、ハルナ

が

「もう着いたのか、全然食い足りんぞ……おい、着いてからも食うからタッパーか何かに今すぐ詰めておけ」

（何でそうなるのーーー！？）

ハルナの理不尽な労働は続く

さて、ところ変わって悟空達

「いよいよだな、古」

「うむ！出るからには全力で頑張るアルよーー！」

大界王星にある建物の中に入り、大会会場へ

その建物の内の一部屋は、精神と時の部屋のような異次元空間

外から見た建物の大きさからは想像もつかない巨大な空間が広がる

まずは開会式をやるから、選手は試合場まで時間厳守で来るように

そう北の界王に口を酸っぱく言われていた

「オリブーとミゴレンは……あ、オラ達より先に着いてるみてえだな」

「真名やパイクーハンもアル」

部屋の入り口から会場まではある程度飛んで移動する必要があり、二人も舞空術で移動

その間に、会場から知り合い達の気を感じ取る

「前に会ったパポイっちゅーのも来てる……成程な、南の界王様が自慢したくなるのも頷けっぞ」

試合前で興奮してるのか、以前より大きく気を発しているのがここからでも分かった

他に誰が来てるかな、と悟空はさらに気を探る

（四人の界王様はもう全員集合、前の大会に出てた奴らの気もだいたいが揃ってる……ひょっとしてオラ達が一番最後か？）

一応朝食の量も（悟空や古からすれば）やや控えめに採ったので、それほどまで時間は遅れていない筈なのだが……

そんなことを考えながら、もう少し急ぐかと古に促して加速する
ほどなくして会場に到着すると、係員に連れられて試合場の入り口付近まで
どうやら開会式は以前よりも本格的に、選手入場から入るらしい
既にそこにはオリブーやパイクーハン、いつものメンバーが揃い踏み
やはり悟空と古が最後だったようで、これでようやく四銀河十六戦士が出揃った
「おお悟空に古、ちゃんと時間通りに来たようじゃな」
『来たのが最後』なだけであって『遅刻』ではない
そのため北の界王もその件では目くじらを立てて怒ることはなく
「では入場順を決めようではないか、まず最初はパイクーハン率いる我が西銀ｇ」
「あ、何勝手に決めようとしてるんじゃ！ワシら北銀河に決まってるじゃろ！」
「馬鹿を言うな！パポイ有する我ら南銀河だ！」
「あんたら『東西南北』ってことばを知らないのかい！東銀河が先だよ！」

すぐ四界王による、開会式の入場順争いへと発展した

『ご来場の皆様、お待たせいたしました！』

それから数分後

試合場の中心に立つキノコの頭（文字通り）の男が、マイク片手に観客へと声を発する

既に客席は満杯も満杯、割れんばかりの歓声が一面中に響く

『只今より、“北の界王一周忌記念　あの世一武道会”を開催いたします！選手入場！』

この男の言葉を受け、どこからか急に流れる行進音楽

先ほど界王達が争っていた試合場入り口からは、次々と各銀河の戦士（＋界王）が入場してきた

『まず東銀河！前大会ではベスト８が一人という残念な結果でした

が、果たして今回は雪辱を果たせるのか！？』

「（余計なお世話だよ、ったく）……いいかい、前にも言ったけど負けたら承知しないよ」

「……分かってる」

『続いて南銀河！前大会ではベスト４を一人残すというまずまずの成績、さらに期待の新人パポイ選手を加えて戦力は大幅にアップ！こちらも期待しましょう！』

「パポイ、遠慮することはないぞ、思いっきり暴れてやれ」

「ウガーーーーー！」

『お次は西銀河！優勝候補の一人であるパイクーハン選手を有する強豪、さらには他の三選手もかなりの実力者、層の厚さが魅力です！』

「はっはっは、いいぞ！もっと言え！」

（あの司会者はあんな頭で前が見えているのか？まあ、私には関係無いことだが）

（悟空……今度こそ俺が勝つ）

『そして最後は北銀河！前大会決勝でパイクーハン選手と激戦を演じた孫悟空選手がいます！もちろんパイクーハン選手と並ぶ優勝候補、二人の再戦は熱くなること間違い無し！』

「はは、なんだかこんなに褒められると照れちまうな……」

じゃんけんの結果入場順は、東→南→西→北

なんだか麻雀みたいな順番だが、じゃんけんによる偶然の結果なのである、あしからず

パイクーハン、悟空辺りが出てくると、一層客席からは歓声が飛び込んでくる

『悟空ＶＳパイクーハン』

この対戦カードを楽しみにやってきた観客はかなり多いのではなかろうか

それを証明するかのように何処からか

パイクーハン！パイクーハン！とパイクーハンコール

これに続いて、悟空！悟空！と悟空コールも聞こえてきた

（凄い数の観客アル、そういえばアックマンとかは見に来てるアルかｎ……！？）

「どうしたの？どこか身体の具合でも悪くなった？」

「い、いや、何でもないアル……」

天下一大武道会に負けず劣らずの歓声に驚きながらも、古は歩きつつ観客席のとある一角に目をやった

その直後彼女にとって信じられぬ光景が目に入り、身体をピクリと強張らせる

行進時古の後ろを歩いていたミゴレンが心配になって声をかけるが、平気そうな風を装って古は言葉を返した

その後改めて客席に目をやったが、なにぶんさっき見たのがチラ見に近かったため再び目視する事は叶わず

（いや、まさか……だってここってあの世アルよ？）

疑念を抱きつつも入場を完了させ、試合場の上に他の選手と並んで立った

『では続きまして、大界王様によるご挨拶です。大界王様、お願いいたします』

（大界王……そういえば今まで会ったことなかたアル、一体どんな凄い人アルかｎ）

「ハーーイ！みんな元気ーーー？」

「……アイヤ？」

キノコ男の言葉の後、上空から聞こえてきたのはかん高い老人の笑い声

それを耳にし、古を始めとして全員が上を見る

現れたのは白のランニング、上下お揃いのジャケット&ジーンズを着た一人の老人

顔にはグラサンと豊かな白髭、手にはラジカセ

そう、彼こそがこの大界王星の主

大界王その人なのである

流石に上記の服装は自重してくださいと四界王&キノコ男に言われ、渋々大界王としての正装に着替え直して簡単に一同へ挨拶

「今回もいい試合を期待してるから、みんな思いっきり頑張って頂戴ねー！」

本当に簡単な挨拶だった

（陽気な性格といいグラサンといい、なんか亀じいを思い出してしまうアルな……）

大界王の一連の行動で緊張がほぐれたか、古は小さく笑う

それは彼女だけではなかったようで、他の選手達も同じように大界王によって緊張がほぐれた様子だった

その後キノコ男から大会における試合ルールが説明されたが、前大会と同じだったため特に問題は無し

今回初出場になる古も、天下一大武道会と大差無いものであったため同じく

真名はフムフムと、パポイはウガウガと頷いていたのでこちらも大丈夫だろう

そのまま開会式は終了になろうとしたが、最後にもう一つとキノコ男が一同を呼び止める

これは前大会と全く異なりますがと前置きし、どこからか別の大会役員が運んできたホワイトボードに張られた対戦表に手の平を向けた

『今回の大会予選は単なる一対一ではなく、四名×４リーグによるリーグ戦形式で行います！よって出場選手は東西南北の銀河ごとに、今からご用意いたしますクジを引いてください！』

「リーグ戦アルか！？」

「……なあ古、りーぐ戦って何だ？」

「え？」

これには会場内の者達ほぼ全てがざわめく、ただ一人悟空だけ理由が違うが

数秒もすると、カブや大根の頭をした野菜頭のレフェリー達がクジの入った箱を持ってきた

第１１６話　一同集結！開催、あの世一武道会（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「今回は珍しく午後投稿か……で、ゲストは誰なんだ？」

クウネル
「はい、今回はこのお二人」

テオドラ
「うむ、読者の皆にとっては初めましてじゃの」

国王
「どうも、国王です」

クウネル
「ヘラス帝国第三皇女のテオドラさんと、ＤＢ世界の地球の国王さんです」

エヴァ
「また微妙なチョイスだな……」

テオドラ
「ん？ラカンが来ると聞いてたがおらぬではないか、ラカンはどこじゃ？」

クウネル

「前回突如として登場してそのまま帰りました」

テオドラ
「なんじゃ、おらぬのか……」

クウネル
「まあまあ、では気を取り直してコーナーの進行を、今回の話ですが……」

エヴァ
「あの世一武道会編開幕、か……冒頭でいきなりぼーや達が霊体状態なのは流石に驚いたぞ」

国王
「それまでの経緯をオールカットしてますね、説明は入れてますけど」

クウネル
「『そんなシーンまで明確に書いてたら開会式入るまでに一話分終わっちゃうから』とのことです」

テオドラ
「あと、またオリジナルアイテム&設定があったみたいじゃの」

クウネル
「幽体離脱の薬については、ジャンプに昔連載していた某天使ギャグマンガのアイテムを参考にしているみたいです。ただ単行本をなくしたため名前は忘れたそうですが」

エヴァ

「またマニアックなネタを……まあ、作品自体はアニメ化してるから少しは有名な方か」

テオドラ
「これを読んでる読者が理解出来るかは別問題じゃがの」

エヴァ
「で、再会シーンは結局無しと」

クウネル
「正確には延期です、次回にはおそらくやれるでしょう」

国王
「いいですなぁ、私も死んだ祖父母達とまた会ってみｔ」

エヴァ
「いや、別にお前の話は聞きたくないから」

テオドラ
「しかし予選をリーグ戦に変更とは思い切ったことをしたのう」

クウネル
「作者曰く『完全トーナメント式だとせいぜい2，3試合、しかしリーグ戦を混ぜれば4，5試合は書ける！』とのことです」

エヴァ
「ああ、古菲や龍宮真名のことな」

テオドラ
「えっと、四人リーグを四つじゃと総試合数は……うお、二十四試

合！」

クウネル
「当然ですが省略＆割愛はそれなりにやります」

エヴァ
「当たり前だ！」

クウネル
「……さて、では最後に次回予告です」

国王
「さて、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「リーグ戦のクジ引き、そしてクリリンや悟飯との再会だな」

クウネル
「リーグ戦の組み合わせは興味ありますね、もしかすると予選でいきなり悟空さんとパイクーハンさんの試合が見られるかもしれません」

テオドラ
「流石に無いじゃろ、展開的に。むしろわらわは古や真名の相手に注目したいのう」

クウネル
「では読者の皆様、次回のネギドラ！も……」

エヴァ＆テオドラ＆国王

「お楽しみに！」

～今日の〇〇～

「ふむ……今頃クリリンは悟空と会えたかのう」

海にポツンと浮かぶ島

そこの波打ち際に立つ、一人の老人の姿があった

「ワシも、出来ることなら行ってみたかったのう……」

老人はどこか寂しそうな面持ちで、水平線のさらに向こうを見やった

そんな彼の姿を見て、心配になったか一匹の海亀が近づく

（大丈夫かなぁ、昨日あった大根引き抜き大会で負けて以来ずっとあの調子……）

しかし老人は、海亀の接近に気付かない

そのまま再び、ボソボソと言葉を洩らし始めた

「行ければ悟空とも会えた、古ちゃんとも会えた、そして……」

（？）

数秒の沈黙の後、亀仙人の口元がいやらしく釣り上がる

「……あの世で年を取らぬまま、永遠にピチピチなギャルとも会えたかもじゃったのにのう」

（あ、なんだ、いつもと変わってないや）

海亀は安堵し、老人の元から離れて家の中へと入っていった

第１１７話　親子、ライバル、師弟再会　早乙女ハルナ阿鼻叫喚（前書き）

サブタイの後半が凄いことになってますが、内容的に合ってしまってるので何とも言えません。今回試合はありません、次の話からです。

ではどうぞ！

第１１７話　親子、ライバル、師弟再会　早乙女ハルナ阿鼻叫喚

突如キノコ男から明かされた、予選リーグの存在

周囲のどよめきが止まぬうちに、四人の界王にそれぞれクジの入った箱が配られた

『クジの仕方はいたって簡単。各銀河ごとに配られた箱の中には、A～Dのアルファベットが書かれたこのようなボールが入っています』

そしてクジの説明

キノコ男はポケットに入れていた見本のボールを取り出し、頭の上に掲げて一同に見せる

『それによって予選のAリーグからDリーグまでの選手を決定、つまり各リーグ東西南北から一人づつの参加となります』

（なるほど、つまり上手くいけば予選の段階で悟空と戦うことも可能というわけか……面白い）

（つまり師匠とは決勝トーナメントまで安全、と。それについてはホッとしたが、決勝トーナメントまでに三戦もしては手の内を全て晒しかねない……そこは注意が必要だな）

『決勝トーナメントに進出するのは各リーグ二名づつ、八人が出揃

い次第再び抽選を行って決勝トーナメントの組み合わせを決定します。一応言っておきますが引いた後のボールの交換はルール違反で失格となりますのでご注意を、ではどうぞ！』

この言葉を受け、各選手は次々と界王のもとへ歩み寄った

「よし、それでは誰から引くか？」

「んじゃあオラから引くかな……よっと、オラはＡだな！」

北銀河ではいの一番に悟空が箱へ手を突っ込み、抜き取るとボールに書かれてあるアルファベットを大声で読み上げる

「ば、バカ！そんなデカい声で言う必要ないじゃろ！」

客席はまだしも、近くにいた選手達の耳にはすぐ入り

（孫悟空はＡリーグだと！？）

（マズい！なんとしてもＡ以外のを引かなくては！）

（ＢかＣかＤ！ＢかＣかＤ！）

（……Ａ、来い）

各々が隠しきれない動揺をその場で見せた

といっても、分かったところで狙ったものを引けるわけでもなしすぐ沈黙し、クジを引き始める

「次は俺が引こう……Dだ」

「私は……Cアル」

「じゃあ僕は余りのBっと」

北銀河は、悟空がAミゴレンがB

古がCでオリブーがDとなった

この時点では対戦相手も分からずサッパリであったが、じきに三銀河の選手達も参加リーグが決定する

各銀河の界王からの報告を受け、対戦表に書き込んでくカブ頭のレフェリー

それを見てギャアと叫ぶ者、歓喜する者、落胆する者、小さく笑みを見せる者、ウガーーと雄叫ぶ者

各選手の反応は様々であった

『なお予選リーグの戦いは進行を早く進めるため、この本会場から少し離れたところに設置されております特別会場で4リーグ同時に行います。ご来場の皆様には、予選開始までに余裕を持って席の移動をなさることをお勧めいたします』

キノコ男が客席へ言葉を飛ばし、『ですがちゃんと全員分の席はご用意してありますので、怪我をしてもいけませんからお慌てにならないように』と最後に注意を付け足す

かくして、あの世一武道会の開会式は終了したのであった

そして

「なんや、予選は場所変えるんか」

「まあ確かに、試合場が一つしかないこの場所でチンタラ予選やってたら日が暮れるです。ここには太陽ありませんが」

「じゃあ早く移動した方がいいですね」

「ネギ君そんなに慌てない慌てない、さっき説明聞いてすぐゴーレム召喚して場所取り行かせたから」

「……ハルナ、ちなみにどのゴーレムに行かせたですか？」

「ん？えっと、人数分必要だったから炎の魔人（インフェルノ・アニキ）とヤムチャさんとフリーザとザーボンとジース達四人と……あと数合わせで栽培マン二匹」

「……後半のは下手したら大騒ぎになって消されますよ？」

「まっさかー」

「いや、マジで私は心配してるんですが……」

ピシュン！

「「え？」」

「お、やっぱりだ！古に言われてまさかと思ったけど、本当におめえら来てたのか！」

「お父さん！」

「カカロット！」

「悟空！それに……」

「ク、ク、ク、ク、ク……クリリーーーーン！」

「古！ってうわわわあっ！」

あの世の者とこの世の者

本来会うことを叶わぬとする者達が、この場で奇跡の再会を果たす

「へー、おめえ達そんな薬使ってここまで見に来たのか」

「身体に耐性がついてしまうため今回限りじゃがの、しかしお主にとってはこれほど良いタイミングもあるまいて」

「ああ、サンキュー占いババ！」

「でもお父さん、相変わらず元気そうで良かったです」

合流した悟空達と悟飯達はゆっくりと会場の外に向かって歩きつつ、そのまま会話を交わしていた

予選開始までは四十分近くあり、このようにゆっくりしていても今は全く問題は無い

いや、今日一日しかいられない悟飯達のことを考えれば、この限られた時間の間に出来るだけ話していたかった

特に悟空との再会を切に願っていた悟飯、クリリン、ベジータならなおのこと

『チチのやつは元気にしてるか？』『亀仙人のじっちゃんは相変わらずか？』『おめえ前よかさらに強くなったみてえだな』

一年前、最後に話したのと同じ、いつもと変わらぬ悟空

だがそれは彼らにとってこの上なく久しく、そして懐かしく感じてしまった

ベジータも悟空と会ってすぐに『この俺と戦え！』といきりたっていたが、今はそれも少しばかり影を潜めさせている

無論『戦いたい』という意志こそ無くなってはいないだろうが、今回ばかりは珍しく悟飯のことを思ってか、しつこく言わずにいた

「けど流石だな悟空、あのキノコ男にも優勝候補なんて言われちゃってさ。聞いた話によると去年の大会じゃあ、実質お前が優勝みたいなものだったっていうじゃないか」

「そうかもしれねえが今年は全然分からねえぞ、パイクーハンもうんと腕を上げてきているしな」

あの世でも変わらずトップに近い座へつき続ける悟空をクリリンが賞賛

しかし悟空は決して謙遜ではなく、思ったことをいたって正直に口にした

「いや、オラやパイクーハンだけじゃねえ。試合の組まれ方によってはオリブーやパポイ、それに真名や古……どいつにだって優勝の可能性はある、そんくれえ今年の大会はみんな頑張ってきてんだ」

「え？私もアルか？」

悟空の言葉の中に自分の名が出たことで、思わず古は目を見開いて自身を指差す

悟空は『ああ』と短く答えると、クリリンの腕を抱いてる方とは反対側の古の肩を軽く叩いた

「自信持て、確かに予選相手の中には前回ベスト8に入った強敵もいる……だが、オメエの持てる全てをぶつければ勝てない相手じゃねえ」

「悟空……」

「クリリンやネギ達も見に来てくれてんだ、恥ずかしくないよう思いっきり戦え」

「……そんなこと」

古の表情が、凛としたそれへ

さらに彼女の全身からは気が溢れ、前と両端の髪が上がる

「始めから分かってるアルよ、予選敗退のつもりはさらさらないアル」

(すげえ、古……さっきの開会式でも薄々感じてたが、やっぱり最後に会った時とは比べものにならない位気が上がってやがる)

この一週間で、いったいどんな修行を……

唖然とするクリリンだったが、気の放出をやめた古が再び柔らかい笑みに戻して彼に話しかけた

「そういうわけでクリリン、当然悟空もアルが私の応援もよろしく頼むアル！」

「……ああ、もちろんだ！」

「僕も応援してます古老師！頑張ってください！」

クリリンはまっすぐ古の瞳を見据えてそれに答え、ネギも呼応する

二人の誇れる弟子（内一人は師匠兼任）達の言葉に、古の表情はより柔らかくほぐれた

「ありがとアル、二人とも」

「にしても残念やなー、こんな凄い大会を楓姉ちゃんやピッコロさんとかに見せれんくて」

そんな時、ポツリとこう口にしたのはコタロー

入場した選手達を見定めて確信したが、この大会レベルは一週間前の天下一大武道会よりもさらに上をいく

悟飯やトランクスと同等、いやむしろさらにその上を行くであろう悟空とパイクーハン

他の選手らも、皆が数百年という単位で長き修行を積んだ各銀河歴代の英雄達

試合に加わらずとも、見るだけで自分にとって大きくプラスとな

れる

そう思うだけに、自身が尊敬する楓やピッコロに見せられないというのはやはり残念だったのだろう

「……ねえババさん、この世からあの世の様子を水晶に映すことって出来る？」

「出来るが絶対せんぞ、ワシだって試合は生で見たいんじゃ」

それを見かねて朝倉が占いババに訊いてみたが、アッサリ却下された

「じゃあ夕映っち……って、それは流石に悪いか」

「それ以前におそらく、私の力量ではそれは無理です」

「うーん、何とかこっちの様子を向こうに中継出来ないもんかなー……あ」

腕を組んでしばらく考えながら唸ってた朝倉だが、突如何か閃く

ネギの肩に乗るカモに手招きし、自身の肩の上へ

ボソボソと二言三言カモへ囁くと

「お、確かにその可能性は高いっスね！」

「やっぱりそう思う？」

「おう、全くだ！こりゃ向こうのみんなのために是非しなくちゃな！兄貴兄貴！ちょっといいっスか？」

カモは鼻を大きく鳴らし、ネギを大声で呼び寄せた

何の用かと訊こうとしたネギだが、有無を言わさず朝倉が腕を掴んで引っ張る

慌てるネギをよそに、そのまま建物の陰まで強制連行

一応さよに『一旦別行動、あとで合流するから』と告げてそのまま姿は見えなくなった

これにより、二人＋一匹が皆と再び合流するのは予選開始とほぼ同時刻にまで時間が空くこととなる

さて、そんなこんなで一同は会場の外まで移動

ここからは予選会場まで、何らかの手段で飛行して移動することを強いられる

別に悟空の瞬間移動に頼ってもいいのだが、やはり移動しながらゆっくりと話したい

しかし、殆どの者が飛行を手段を有している中で例外が一人

「あの、すいません。閻魔のおじ様に身体もらってから何か急に飛べなくなっちゃって……」

さよだった

どうも今までフワフワ飛行出来てたのは、霊体が故の特性によるものだったらしい

身体をもらって地に両足をつけてから、その能力がすっかり無くなっていた

そこで、じゃあ私のゴーレムを一体貸したげるとハルナが提案する

わざわざ私のためにすみませんと礼を述べるさよ

気にしない気にしないと笑いながらアーティファクトのページを捲る

が、その時事件は起きた

「えっと、空が飛べて場所取りに行かせてない奴は……っ！？」

「ん？どうしたですハルナ？」

「いや、今何かちょっと身体にビリリってあぎゃあっ！」

ハルナが周りから何の干渉も無しに、突如として顔を歪ませ声をあげる

いや、正確には干渉はあった

ハルナ達がいるここから、少しばかり離れた場所で

「悟空！大変だー！」

「オリブー、どうしたんだそんなに慌てて？」

そんな時、予選会場のある方角からオリブーが慌てて飛んでくる

「予選会場にフリーザ一味が現れたんだ！どうやら地獄から脱走したらしい！」

「何だって！？」

（！？）

「今パイクーハン達が鎮圧にあたっている。あいつらだけで大丈夫とは思うが、一応お前も今すぐ来てくれないか？」

「よし、分かった！オラに掴まれオリブー！」

「僕も行きますお父さん！」

「ちょっ、ちょっと待って悟空さん！それ本物と違……」

ピシュン！

ハルナが言い終わるより先に、悟空は悟飯とオリブー共々この場から姿を消した

「行っちゃった……マズいマズいマズい、これは非常にマズ痛ああっ！」

「だから言ったですよ私は……」

「呑気なこと言ってないで何とかし痛だだだっ！」

その後、コタローが悟空達へ事情を説明するため予選会場まで全速力で移動

しかし既に遅し

到着した時点でもう、パルゴーレム十体全てが見事に撃破済み

残りの皆が遅れてやって来た時、ゴーレムの主であるハルナは

「……あ、途中で痛みが来なくなったと思ったらやっぱり全滅したんだ」

ややグロッキーな状態で、クリリンの背の上にいた

『ではCリーグの方も参りましょう！まず北銀河代表の古菲選手！』

「よーし！いくアルよー！」

『対するは東銀河代表の……』

そして仲間達の見守る中、予選リーグが幕を開ける

第117話　親子、ライバル、師弟再会　早乙女ハルナ阿鼻叫喚（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「作者のやつ、前回投稿予定日書くのを忘れてたな」

クウネル
「気付いたのが三日くらい後になってのことでして、今さらの修正もアレだなと思ったらしいです」

エヴァ
「まあいつものペース通り金曜にやったんだし良しとしとくか、ところで今回のゲストは？」

クウネル
「はい、今回はこの四人」

ブルマ
「はーい、おっひさー！」

夏美
「どうもー」

コタロー
「うっす」

ヤムチャ

「最近本編中で俺への扱いが酷い気がする……」

クウネル
「コタロー君&夏美さん、ヤムチャさん&ブルマさんの四人です」

エヴァ
「おい、一人異様にテンションが低いぞ」

ヤムチャ
「だってよ……だってよ……」

夏美
「最後にヤムチャさんが出たのっていつだったっけ？」

クウネル
「かなり最近ですね、第１１５話に出演しています」

エヴァ
「えっとどれどれ……うわ、『ベジータ止めようとして肘打ち喰らう』とか」

ヤムチャ
「何で俺は活躍出来ねえんだよ……ハルナすらベジータにあんな仕打ち受けながらも要所要所では活躍してるってのに……」

コタロー
「でもヤムチャさん、パル姉ちゃんのゴーレムとしてもちょくちょく出とるやん」

ヤムチャ

「それも全部噛ませなんだよ……茶々丸の時も二人揃って散々だったし」

エヴァ
「足元お留守ってまた言われてたよな」

ブルマ
「まあ大会であんたに勝ったコタロー君よりも強いんだし、しょうがないわよ」

ヤムチャ
「けどよ……銀河戦士の時だってよ……」

エヴァ
「……何かこいつが出るたび、毎回似たような展開になってるんだが」

クウネル
「他にヤムチャさんに関するネタが無いんですよね、そのせいで書くの忘れててリクエストから実現まで半年経ちましたし」

夏美
「しかもまだコーナー全然進んでないよね」

コタロー
「あ、ホンマや」

クウネル
「ではさっさと進めましょうか、さて今回の話ですが……」

エヴァ
「作者はやっぱり早乙女ハルナが嫌いなんじゃないか？」

注・嫌いじゃありません

クウネル
「まさか『ゴーレムのダメージは術者も少し受ける』という原作設定が、本作でここまで生きるとは思いませんでしたね」

エヴァ
「あとはリーグ戦の組み合わせなんだが……まさか公開しなかったのは『まだ決まってない』からじゃないよな？」

注・ちゃんと決まってます

コタロー
「つまり出さなかったのは、『誰と誰が戦うかをギリギリまで秘密にしたいから』ってことなんか？」

注・はい

夏美
「ところでさ、何で悟空さん達止めに行ったのコタロー君だったの？ネギ君は別行動取っちゃったから仕方ないけど、ベジータさんいたよね？」

コタロー
「ベジータさんならタッパーに詰めてた飯食っとった」

エヴァ＆クウネル＆夏美＆ヤムチャ

「……」

ブルマ
「まったくもう、ベジータったら……」

ヤムチャ
「じゃ、じゃあ次は次回予告いくか！」

クウネル
「ですね」

夏美
「さて、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「予選Ｃリーグ第一試合、『古菲ＶＳ東銀河の戦士』をお送りするぞ」

クウネル
「今回意図的に名前を公開せずに終わりましたが、次回ついにその人物が誰か明らかに」

ヤムチャ
「つまり、『Ｚ』にも出たことがある奴ってことか？」

クウネル
「はい」

コタロー
「ついに菲部長の試合が見れるんか、どんだけ一週間で強くなった

んか楽しみやな」

ブルマ
「ちなみに今回作者が『本家風の次回予告もやりたい』って思ったらしくて、活動報告の方にそれを書くらしいわ」

夏美
「本家風の次回予告って、確かここで何回かやった後完全廃止になったアレのことだよね？」

クウネル
「はい、何か作者が書きたくて書きたくて限界を超えました」

エヴァ
「何だよそれ……まあ、とにかくそういうことらしい」

コタロー
「次回の投稿予定は来週の水曜日やな」

夏美
「じゃあみんな、次回のネギドラ！も……」

エヴァ&クウネル&コタロー&ヤムチャ&ブルマ
「お楽しみに！」

『～今日の〇〇～』は、ネタが尽きたので今回はお休みです

エヴァ
「早くも計画倒れか」

クウネル
「いっそのこと、こっちもリクエスト募集してみます？」

第１１８話　魚人戦士アークア　古を襲う水中地獄（前書き）

久々にサブタイネタバレになってしまいました、というわけで古の対戦相手は彼です。活動報告ご覧になった方は分かっていたでしょうが……

ではどうぞ！

第１１８話　魚人戦士アークア　古を襲う水中地獄

「あ、ちょうど始まったところか！」

「なんやネギ、ようやく着いたんか」

予選会場客席

何だかんだで全員分の席を一か所にまとめて確保した悟飯達

予選が始まって試合を観戦していたところで、ちょうどネギが合流

朝倉やカモと共に、空けておいてくれていた席に座る

「んでネギ、朝倉の姉ちゃんと何してたんや？」

「え？まあ……ちょっとね」

ネギはコタローの問いに言葉を濁し、その肩の上でカモはグフフと笑う

「ところで朝倉の姉さん、ゴーレムの方はどうでい？」

カモはそのまま朝倉へ顔を向け、やや小さめな声で会話

朝倉は手に持つ小型の機械を見ながらそれに応じた

「んー、今ようやく闇魔大王の館についたとこ。多分大丈夫とは思うけど、もう少し時間掛かっちゃうかなぁ……」

「うーん……まあ、本戦までに間に合えば充分っスかね」

そんな二人は別にして、ネギは少し遅れてきたため予選の状況を把握しきれていない

初めから見ていたコタロー達に、現状を訊く

するとコタローはCリーグの試合場を指差してすぐに答えた

「こりゃ菲部長の圧勝やな、向こうの奴は全然大したことないで」

「せやっ！」

「ぐっ！」

「そこアルっ！」

「ぐあ！」

古が拳を振るい、対戦相手が宙を舞う

一度古の攻撃を受け止めた直後、その防御の腕を撥ね退けられて腹に一撃を喰らった

しかし倒れることはなく、相手は何とか空中で体勢を立て直して着地

再び古と向かい合う

（しかし何なのかネこいつは……私の攻撃を何発か受け止めたりしてるくらいだからまあまあやれるようアルが、総合的な実力じゃ全然大したことないアル）

古は未だ界王拳を発動せず、完全に素のままで圧倒していた

何というか動きにキレが感じられず、攻めも全くせず受け身に回ってばかり

（中国拳法と同じカウンター系の技を使うと思たがそれも違う……やつの目的は何アル？勝つ気は無いのアルか？）

「ううう……」

相手はただ構えたまま、小さく唸るばかり

リーグ戦初戦のため情報も全く無く、焦ってはいけないと慎重に攻めていた古

だがいい加減、それも改めていい頃か

そう考えた古は

（長引かせてもしょうがない、もっと攻めるアル！）

迷わず特攻した

（！？）

先程の攻めと明らかに違うと気付いたか、相手はやや気圧されながらもそれを迎え撃つ

「やっ！」

右拳を軽く握り、鳩尾辺りを狙って崩拳

と見せかけてすぐさま引き、フェイント

防御がガラ空きの腹部に、こちらは力強く握った左拳を打ち込んだ

「う〝っ！」

「だだだだあああっ！」

怯んだその隙をさらに突き、今度は両拳を使ってボディや顔面を打つ

水色の肌に次々と出来る打撃痕

無表情でいた相手の顔も、止まることなく襲う痛みに歪み始めた

（イケるアル！このまま一勝いただきネ！）

しかし勝利を確信した古の耳へ突如、思いもよらぬ声が割って入った

「こらあああっ！あんたそんなガキ相手に何苦戦してるんだい！」

東の界王

このあまりにも一方的な状況に、流石に見ても立ってもいられなくなったか

試合場の縁に両手をつけ、身を乗り出して怒鳴り声を上げていた

「ひ、東の界王様、そんなに近付かれると危険です！どうかお下がりくださ……」

「やっかましい！」

「ひいっ！」

係員の一人がそれを見て止めに行くが、それすらも拳でぶん殴って黙らせる

そして改めて、こちらの方へ

「どうせ前の大会見てて知ってる奴が殆どなんだから、出し惜しみなんかするんじゃない！あの技だ！あの技を使うんだよ！」

（あの技アルと！？）

そのまま叫んだ言葉は、古を驚かせると同時に焦らせた

（奥の手を隠し持てるアルか！？なら出される前に一気に……）

古はさっさと勝負をつけようと、攻撃を続けながら右足へ気を集中

「たりゃあああああっ！」

「うお〝っ！

蹴り上げたそれは顎を捉え、相手を上空へと舞い上がらせる

その間に、古は両手を腰元へ

「（フルパワーで撃ち抜く！）かぁ……めぇ……はぁ……めぇ……」

界王拳こそ使わぬものの、狙うは通常状態で可能な最大威力のかめはめ波

しかし今取った行動、これ幸いとばかりに東の界王が叫んだ

「今だアークア！やれえええええええっ！」

「！？」

古は目を見開き、上空にいる彼を注視

「んんあああっ！んううおおおおあああああああああ〝あ〝あ〝あ〝っっ！」

「な、何アルK……なななあっ！？」

と同時に、響き渡るアークアの咆哮

加えて両目から飛び出した、閃光のように輝く凄まじい光

思わず古もかめはめ波を中断、両手で自らの目を覆い隠す

また、それは近くで見ていた東の界王も同じく

さらには、A，B，Dブロックの選手達

果てには客席や、大界王の所まで広がりに広がった

そして皆が目を開けた時、去年の大会を見た者を除けばほぼ全員が驚愕

なぜならそこには、傍目には到底信じられぬような光景があったのだから

「くっ、あの光は……しまった！アークアのあの技か！」

「おや悟空さん、古には彼のこと詳しく話してなかったのか？」

「ああ……そういうおめえは知ってたんか？」

「大会の始まる数日前から調べておいたさ、こういうことは念入りにやっておく主義でね」

（くっ、頑張れ古！ここで負けちまったらもう後がねえぞ！）

「あ、あれは一体！？古老師の周りが突然……」

「さっきまで完全に優勢かと思っとったのに、こら分からんくなったで」

「やはり使ってきたですか……」

「知ってるの！？夕映っち！」

「少し前にアックマンさんから聞いたことがあるです。去年のあの世一武道会で使用し、一時は悟空さんをも苦しめた……」

「「「悟空さんを!?」」」

「……あらゆる空間から即座に水を形成し変化させる、『水具現化能力』です」

（ぐぷ……気が付いたら周り中が水に……）

Cリーグ試合場

現在そこには、まるで周りにガラスでも張られたように長方形の形で多量の水が存在していた

アークアの持つ『水具現化能力』

これにより横はCリーグ試合場全域、縦は数メートルにまで全て水

ついさっきまで目を覆って視覚を使わなかっただけに、水に取り

込まれたときの驚きはひとしお

何とか息は吐き出さず口中に留めたが、古の肺活量をもってしても数分が限界

（あいつは何処にいるアル！？）

アークアによって作られた水は、濁りなく透明感あるそれ

周囲を見渡し、アークアを視界に捉えようとするが見つからない

（い、いかんネ、クリリンに教わったじゃないアルか……）

だが少しして己の過ちに気付き、切り替える

『確かに直接目で相手を捉えるのも大事かもしれない。けどもし視界から外れた相手にもそういう行動を取ったら、隙を作ってやられちゃうかもだろ？』

『むむむ、確かにさっきの実践組み手でもそうなてしまたアルな……』

『ここからは知り合いの受け売りなんだが……そういう時大事なのは見ることじゃない、感じることなんだ』

『見るのではなく、感じる……』

『そ、感じる。元々古は気の扱いもそこそこ出来てるし、慣れればすぐだぜ？』

（見るのではなく、感じる……上アルか！）

「はあああああっ！」

アークアの気を感知するのと同時に、彼がそのまま古へと襲い掛かった

水中であることをなんら感じさせぬ、鋭い右手刀

振り下ろされたそれを、古は紙一重で回避する

（さ、さっきと全然動きが違うアル！）

アークアの種族は元々、魚のような外見からも推測出来るのだが水中戦を得意とする種族

彼の持つこの能力は、その得意な水中戦にいつでも持ち込めるために長年掛けて会得した努力のそれ

正に今の彼は、水を得た魚

死んだ魚のような目をしていたさっきまでと一変

（しかも、今まで与えたダメージが……）

さらには、身体にあった打撃痕が見て分かるほど薄く

殆ど回復してしまい、完全にフルパワーの状態で彼は戦っていた

「だだだだだだだだだだだだだだあああああっ！」

（ううっ、水中で戦ってちゃ不利アル……）

この世界へ来る前の話になるが、古は一応水中戦を経験したことがある

魔力供給した状態でのネギと、サメの着ぐるみを被ったまま

あの時はネギとの実力差もあり問題無く勝ったが、今はとてもそうはいきそうになかった

やはり水中で戦う以上、水の抵抗が付き纏い動きを制限される

普通の格闘家より断然スムーズに立ち回りが可能な古でも、逆に動きが良くなる相手とでは話が別

当初格闘技術の分開いていた力量差は、完全に埋まりきった

（しかも酸素がこのままじゃ持たな…っ！？）

この状況を脱するべく考を巡らせる古へ、アークアの拳がついに捉える

あろうことか、箇所は腹部

慌てて左手で口を覆うが、遅かった

耐え切れず多量の息が吐き出され、焦りはより加速する

（ヤバっ、これじゃもう一分も続かないア……）

「はあああああっ！」

そこからアークアはさらに追い討ち

動きが鈍る古へ、拳の連打

（と、とにかくここは逃げなくては駄目アル！）

たまらず古は数発喰らいながらも後退し、そのまま水中からの脱出を図る

（使うしかないアルな……界王拳、二倍！）

その最中に追いつかれぬよう、赤い気を灯さぬまま界王拳を発動

相手に背を向けて横面から脱出するわけにはいかず、水面とアークアへ交互に視線を送りつつ上方向へ急上昇した

（早く、早く空気を……っ！？）

しかし古のこの急上昇は、古自身による急ブレーキで止められる

水面に続いてアークアの方を見た時、彼の姿が突如として消えていた

どういうことかと気を探りながら、再び水面の方を見上げてみれば

「ふふっ、ふはははははっ！」

（なっなっ、なあああっ！？）

一瞬で追いつき、古の上に位置して高笑いするアークアの姿が

気の探知すら追いつかなかった程の、高速移動

探知に関して古がまだ未熟なことを差し引いても、これは驚異的な速さ

（こ、これじゃあもう駄目アル……あの速さでは、おそらく今出来る最大出力に上げても追いつかれる……）

それに下手に上げ過ぎれば、残る酸素を一瞬で使い果たすことになりかねない

かといってこのまま水中で足踏みしていても、敗北は必至

（……完全に奴の土俵に持ち込まれたアル）

「マズい！このままじゃ古が負けちまう！」

「古老師！」

この古の劣勢は、客席から見てもすぐに分かった

口を固く閉じ、酸素不足で苦しそうにする彼女の姿が容易に見れる

クリリンとネギ、二人は耐え切れず声を荒げた

「確かにこのままやと菲部長の負けは避けられへん……ちなみにやけど、悟空さんはどうやってあの状態から逆転したんや？」

「太陽拳で目眩ましをした隙に水中から脱出、そのままかめはめ波で水を丸ごと吹っ飛ばしたと聞いてるです」

コタローの問いに夕映が答えると、途端にクリリンの顔が苦くなる

「くそっ、俺があいつに太陽拳を教えていれば……」

あの世にはクリリンと同じく太陽拳が使える悟空がいるし、加えて太陽拳は簡単な技のため我流で覚えることも比較的容易い

だがここまでピンチになりながら使わないということは、あの世

に行ってからも習得出来ていないのだろう

「ふん、俺なら目眩ましなんてチャチなことはせず正面からぶん殴りにいくがな」

「え!?けどベジータの旦那、見ての通り水中じゃあアークァってやつの独壇場っスよ?」

「奴の技は所謂『術』の一種だ、倒せはせずとも破ることは不可能じゃない。水中からの脱出が出来そうにないなら、それに賭けるしかあるまい」

(あれ?ベジータさんがいつになく真面目にやってるような……)

「おい、何か言ったか?」

「い、いえ別に……」

このベジータの策、奇しくもなんと

(こうなったら賭けアル!)

古自身が殆ど同じことを考えていた

アークアの猛攻を両手を交差させて防ぎながら、それを実行に移す決意を固める

（何とか隙を見つけて一発、五倍界王拳の崩拳をどてっ腹に打ち込んでやるネ！）

長期戦が不利なのは認知済み

おそらく二回目以降は警戒され成功は難しく、さらに言えば酸素不足で行動自体不可能というおそれもあった

一発勝負、これでどうにかして突破口を開くしかない

古は攻撃に耐えつつ、その機を得る策を考えるべく必死になって思考した

アークア本人の動きに隙は見られない

こちらから何らかのアクションを起こさねば、五倍界王拳崩拳を打つ機すら来ないだろう

（何か、何かいい方法はないアルか？水中で戦う魚人戦士……魚人……！）

その時古の中で、ある記憶が蘇った

（そうアル！あの方法ならもしかしたら……）

「超ー、ちょといいアルか？」

それは、麻帆良にいた頃の他愛もない出来事

女子寮内の自室で本を読んでいた古が、ルームメイトの超を呼ぶ

「どしたネ古？……おや、古が読書とは珍しい」

夕食の準備をしていた超が、エプロンを着けたまま古の前へ参上

何の用かと尋ねつつ、古の取っている『読書』という行動に対して珍しがっていた

「ゆーなが面白いからって貸してくれたアルよ、長編のバトル漫画アル！」

「ああ、漫画カ」

一般書籍でないことにやや納得した様子を見せる超

古の横に座ると、古は単行本内のとある1コマを指差した

「ここのシーンなのアルけど、どうして水中でえらに空気吹き込むと苦しくなるアル？」

「ほう、中々面白い質問ネ。魚の鰓（えら）というのはガス交換と浸透圧調節とアンモニア排出の三つの機能を備えていて……あ、ガス交換いうのは簡単に言えば呼吸のことヨ」

「ふむふむ」

「このケースだとガス交換機能に問題が起こるネ、えら呼吸だと水中内の酸素しか取り込めない仕組みになっていてだナ……」

「ふむふむ」

「つまり気体である呼気を吹き込まれても酸素を取り込むことが出来ず、ガス交換の邪魔になって窒息してしまうというわけヨ」

「ふむふむ」

「……古、私の言たこと分かたカ？」

「何となくだけど分かった気がするアル！」

「ハハ……まあ要するに私達で言えば、気管に異物が詰まってしまったようなものネ」

（これアル！確かあの本だとえらは首筋に……あたネ！）

首の周辺を念入りに確認し、発見

古は防御を解き、飛び掛かる

「だだだあっ！」

（ぐううっ！けど、ここで引いたら！）

アークアはがら空きになった古のボディへ拳を続けざまに放つが、止まることはなかった

口は閉じているものの、さっきの攻撃で鼻孔から零れる空気

それに焦りを覚えながらも、両手を回してアークアにしがみつく

えらを見据え、口を開け

「！？」

（喰らうアル！）

噛みつき、吹き込んだ

「ボォヴァアアア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ッッッ！！？」

アークアは白目を剥き、大口を開いて悶え苦しむ

さらには今まで水中から取り入れたと思われる酸素が、喉の奥から小さな気泡となって多量に吐き出された

（よし！今アル！）

古はアークアに回していた両腕を解き、後退

引いた右拳には紅蓮の気

両目には闘志の炎を灯し、アークアには持ち直す時間を与えず全力で

（五・倍・界・王・崩・拳！）

水の抵抗などものともせず

「ごっ、ぐがあああああっ！」

突き破らんとばかりに、腹へ思い切り打ち込んだ

直後、二人の周りにあった水に異変

アークアはさっきの一撃で、完全に意識を掻っ攫われた

それによってか突如、初めから何も無かったかのように水が消滅

古、そしてベジータの考えは大当たり

気絶したアークアにもはや為す術はなく、試合場の床目掛けて落下を開始

（やたアル！これでまず一しょ……う……ありゃ？何か頭が……）

だが、長時間無呼吸で水中にいた古も限界

『ふ、二人とも気絶！ダブルノックダウンです！Cリーグ第一試合、引き分けーーー！』

「……」

「……」

両者目を覚まさぬまま、試合は終わりを告げた

第１１８話　魚人戦士アークア　古を襲う水中地獄（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「今回のゲストは誰なんだ？」

クウネル
「はい、今回はこの三名」

茶々丸
「どうも、お久しぶりですマスター」

プーアル
「さあっ！今回も気合入れて頑張りますよ！」

ウーロン
「俺って何で毎回こいつとセットなんだろ……」

クウネル
「茶々丸さん、プーアルさん、ウーロンさんです」

エヴァ
「ウーロンが二回目で茶々丸が三回目……で、こいつは何気にもう四回目なんだが？」

クウネル
「普通に出演回数一位です」

プーアル
「やったー！」

ウーロン
「だから本編じゃ出られないんじゃねえの？」

エヴァ
「今はお前も出番無いだろ」

茶々丸
「それと、プーアルさんは必ずウーロンさんか桜子さんとセットになっているようです」

ウーロン
「なあプーアル、そいつってどんな奴なんだ？」

プーアル
「ヤムチャ様みたいに優しい人だよ」

クウネル
「あと毎回抱いてもらってますよね、嬉しそうに」

プーアル
「ちょっ、ちょっと！」

ウーロン
「へー、嬉しそうにねぇ……」

プーアル

「ち、違うんだってば！」

クウネル
「さて、ではコーナーの進行を、今回の話ですが……」

エヴァ
「第一試合の相手はあのアークアか……まあ、先週書いたあのネタバレ次回予告見れば一発で分かったがな」

茶々丸
「そうでなくてもチャプチャイさんと二択だったため、予想は容易に出来たかと」

エヴァ
「あと久々に別作品のネタを挟んできたな、というか私達側の世界にもあの漫画は存在する設定なのか……」

クウネル
「大分前にも〇塾関連のことをアスナさんが口にしてたでしょ？同じ出版社の」

エヴァ
「……ところで、アークアの身体にエラなんてあったか？アニメ見る限りでは確認出来んが」

クウネル
「『おそらく身体の構造はあの魚人達と殆ど同じだろうから、あることにしておいた』とのことです」

茶々丸

「そして試合結果は引き分け、これについては私も少々意外でした」

クウネル
「『一試合くらい引き分けを入れた方が混戦になって、リーグ戦が盛り上がりそうだから』とのことです」

エヴァ
「ふむ、つまりCリーグはあの二人に加えてもう一人くらいそれなりの実力者が入っているわけか」

クウネル
「そもそもあの世の武道家さん達はみんな強いわけですがね」

エヴァ
「……じゃあそろそろ、次回予告行くか」

プーアル
「はい！さて、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「（あ、戻ってきた）次は省略＋割愛を使って、何試合か一気にやる予定のようだ」

クウネル
「ちなみにネタバレしますと、悟空さんの試合とパポイさんの試合をお送りします」

茶々丸
「……それは言っても大丈夫なのでしょうか？」

ウーロン
「対戦相手までは言ってねえし、たぶん大丈夫じゃねえか？」

プーアル
「ちなみに組み合わせは既に決定済みですので、リクエストによる変更は出来かねます。そこはご了承ください」

注・予想とかはＯＫです

エヴァ
「では読者の諸君、次回のネギドラ！も……」

クウネル＆茶々丸＆プーアル＆ウーロン
「お楽しみに！」

～今日の〇〇～

「よおしっ！今日もいつも通り鍛錬に励むか！」

（あ、やってるやってる……）

カリン塔より遥か上空にある神様の神殿

そこでとある一人の黒角の男が、意気揚々と身体を動かし始めた

「随分と長期間別の身体でいたせいで、すっかりなまってしまったからな！」

（下界での人助けも頑張ってるし……のどかさんの言った通りだ）

そしてそれを、この地球の神である少年が隠れながら陰から見つめる

黒角の男の行いには、実際彼もかなり感心していた

（けど、アレが無ければなぁ……）

ただしある一点を除いて

数十分身体をふんふんと動かし汗を流すと、男は休憩

それも終えると、鍛錬を始める時よりさらに張り切った様子で

「よーし！では次はアレの練習だー！」

（始まった！）

神殿の中に入り、少ししてから神の付き人である黒肌の男を連れて出てくる

「またあの練習、するのか？」

「そうとも！元の身体に戻ったのだから毎日しっかりと練習せねばな！」

「……分かった、あと神様あそこ」

（うわっ！何てことを……）

黒肌の男は隠れている神の少年の場所を黒角の男に教え

「そんなところにおられたのですか神様！ささ、早速始めましょう！」

黒角の男は嬉しそうに近付き、神の少年を引っ張って連れていく

（うわーん！あの時軽はずみに『練習ですか？僕に出来ることなら』って引き受けるんじゃなかったー！）

その後黒角の男は、少しお待ちをと言って神殿から飛び立ち

一分もしない内に、下のカリン塔から仙猫一匹と肥満男性一人を抱えて戻ってきた

「よし、五人揃ったな！では今からファイティングポーズの練習を行う！」

これは、一日に何度か必ず行う黒角の男の日課である

第１１９話　驚くべき行動、真名　パポイの実力偽りなし　（前書き）

サブタイで誤解されるかもですが、真名ＶＳパポイではありません。今のうちに言っておきます。

ではどうぞ！

第１１９話　驚くべき行動、真名　パポイの実力偽りなし

「うう、まだ少しクラクラするアル……」

「しっかりせんか古、お主この後も試合有るんじゃぞ？」

「分かってるアルよ……」

引き分けの末、古とアークアの二人が目を覚ましたのはそれから数分ほど経った後のこと

北の界王が彼女の身体を起こして試合場から退場させ、今に至る

「……ところで、他の三リーグの試合はどだたアル？」

「お主の知ってる面子じゃと、パイクーハンとオリブーがそれぞれ一勝を挙げたぞ」

「つまり悟空や真名、あとミゴレンにパポイとかの試合はこれからというわけアルね」

「そういうことじゃな……ほれ、悟空やミゴレンの試合が始まるぞ」

界王がＡリーグの試合場を指差すと、そこにいたのは悟空

続けて指差したＢリーグの試合場には、ミゴレン

それぞれ意気揚々と試合場に上がり、対戦相手と対峙している

「折角じゃし近くまで見に行ったらどうじゃ？お主の番になったらワシが呼びに来てやろう」

「お、いいアルか？」

構わぬと界王は答え、再び悟空の方を指差した

「特に悟空の方は見ておいた方が良いぞ？」

「ん？どゆことア……ああっ！いきなりアルか！」

「そういうことじゃ」

悟空と向かい合う相手を見て古は目を見開き、まだ少しクラクラする頭をブンブン振った後すぐに走る

「それじゃ、番が来たら頼むアル！」

「うむ」

一言界王に告げたのち、Ａリーグ試合場の横まで到着

悟空、そして対戦相手の

「それじゃあお手柔らかに、悟空さん」

「はは、そういやオメエとちゃんと手合わせすんのは初めてだったな」

龍宮真名

彼ら二人を古は交互に見つめた

一方でDリーグでも、熾烈な戦いが幕を開けていた

「いけーパポイ！そんなやつ一捻りにしてしまえー！」

「ウガーーーー！」

南銀河、期待のルーキーのパポイ

これがあの世でのデビュー戦でもあり、南の界王は他の選手の試合の観戦を放棄して応援

「ふん、簡単に勝てると思うなよ？マーライコー！思い知らせてやれ！」

「グガアアアッ！」

対するは西銀河、前大会でベスト４の好成績を残したマーライコー

紫色の肌で巨大な体躯を持つドラゴン型の戦士で、そこから繰り出されるパワーもまた一級品

パイクーハンには負けてしまうが、西の銀河ナンバー2の実力者である

両者共に界王からの激励を受けて咆哮

ギラギラとした視線で、互いに相手を睨みつけ威嚇

次の瞬間

「ウガアーーーー！」

「グガアアアッ！」

正面から突進、勢いよく拳を突き出した

二人とも避けるつもりはさらさらなく

「「グウウッ！」」

それぞれの左頬を捉え、クロスカウンター

防御体勢一切なし、拳に込められた力全てがその一点で弾ける

「おおおっ！」

「どうだっ！？」

衝撃を頭にまで響かせ、両者数歩後退

「ウ……ガ……ウガーーーー！」

「グ……ギャオオオオオッ！」

が、共に踏ん張り体勢を立て直す

またも接近し今度は両手、五指を大きく広げて掴み掛かった

互いに相手の手を掴み、押し合い、力比べ

力強く踏み込む両足に接している試合場の床は、ビリシと音を立ててヒビが

「いけえええっ！パポイーーー！」

「負けるなマーライコーーーー！」

パワーとパワーのぶつかり合いは、まだ終わらない

一方、場所を戻してＡリーグ

「……参った」

「へ？」

「降参しよう、私の負けだ」

こちらはこちらで、予想だにしない決着を迎えていた

戦闘態勢を解いた真名は、両手を上げて悟空に対し自身の負けを宣言

悟空は真名が取った突然の行動に唖然とし

「ま、真名！？どゆことアルか！？」

見ていた古も理解が追い付かず、身を乗り出して真名に叫ぶ

真名は古の問いには一切答えず試合場を降りるが

「そうだぞ真名、わけがあんならちゃんとオラ達に話せ」

悟空が瞬時に追いつき、真名の肩を掴んで呼び止めた

「……悟空さん」

「オラもっと、おめえと決着付くまで戦いたかったぞ」

試合の内容としては、極々単純

真名の攻めを悟空が凌ぎ、反撃

その攻めを今度は真名が凌ぎ、こちらも反撃

その繰り返し

ちょうど悟空の反撃を凌いで区切りがついたところで、先程の降参宣言の場面にまで戻る

（これは、ちゃんと言うまで離してくれそうにないな）

諦めた真名は、観念した様子で口を開いた

「……さっきみたいに手を抜かれたまま長々と戦ってては、手の内を晒しかねないのでね。そもそも私は、悟空さんに勝とうという気がさらさら無い。第一勝つこと自体まず無理だ」

「けどよぉ……」

「これは一位と二位が決勝トーナメントに進めるリーグ戦、なら手堅く二位通過を狙うまで。残りの二人に勝てば私は、悟空さんが億一に負けでもしない限り確実に通過出来る」

もし決勝トーナメントでまた戦うことになれば、全力で戦いますよ

真名は最後にこう言い、壁に身を預けて他のリーグの試合の観戦にふける

「うーん……私だたらめったにない機会アルし、思いっきり最後まで戦うアルけどなぁ」

「……まあ、あいつがそう決めたわけだししょうがねえさ！」

古はまだ納得がいかない様子だったが、悟空は真名の考えを一応ながら理解し古を諭した

実際のところ、『最後まで戦いたかった』という意志は変わっていないのだが

「にしても古、おめえあのアークア相手によく頑張ったな！」

「引き分けアルがね……まあ残り二戦あるし、全力で突っ走るアル！」

「よし、その意気だ！……っと、なんか向こうが随分騒がしいな」

気持ちを切り替え次に臨もうとする二人

すると何やら、他のリーグの試合場辺りから騒ぎ声がガヤガヤと気になり二人はそっちへ移動

「すぐに運ぶんだ！」

「皆さん、通してください！」

そんな彼らの目の前を、担架を持った大会役員が大急ぎで通り過ぎた

どうやら試合中、選手に大怪我があったらしい

試合場所はDリーグ

まさかオリブーが!?と焦る二人だったが

「グウッ、グヌウウッ……」

「だ、大丈夫か?マーライコー」

担架で運ばれていたのはマーライコー

仰向けで寝かされ、西の界王が横に立ってついていく

見れば身体中傷だらけで、上腕部には骨折したと思われる青黒い箇所が一つ

相手の選手が担架で運ばれていないことを考えれば、かなり一方的にやられてしまったのだろう

「だ、大丈夫アルかな……?」

「一体誰があんなボコボコに……」

他の銀河の武道家ではあるものの、あの姿を見てしまっては心配せざるを得なかった

「パポイさ」

「っ!オリブー!」

「試合見てたアルか！？」

そこへ重苦しい顔つきでオリブーが、二人の傍まで歩み寄る

「ああ、パポイとマーライコーはこの後戦う相手だからな。ずっと見ていた」

オリブーは簡潔に、さっき起きた出来事を二人に話し始めた

「……そうだったのか、マーライコーのやつ……」

「本当に、あのパポイいうのは強かたのアルね……」

一通り話を聞き終わると、悟空と古の表情は一層重くなる

二人の戦いは、パワータイプ同士の見応えあるそれ

序盤は全く互角の戦い、勝利がどちらに転ぶかまるで分からない好勝負

と思われていた

しかし序盤のパポイの戦いは、本気のそれにあらず

南の界王に言われ本気の片鱗を見せると、すぐさま優劣は一方的に傾き始めた

力比べは難なく圧勝

押し倒したパポイは、そのままマーライコーにマウントパンチ

何発か喰らった後マーライコーは脱出するが、そこからもパポイはどんどんと追撃

さっきまで繰り広げられていた互角の戦いなど、この戦況からはとても想像がつかぬほど

ちょうどその時、自身の試合を終え、仲間であるマーライコーの試合をパイクーハンが見に来ており

『もういいマーライコー！ギブアップするんだ！』

こう警告したのだが、マーライコーは頑なに拒む

前大会ベスト４としての意地が、彼に『降りる』という選択肢を与えることを許さなかった

そしてその直後に突撃した際、パポイのカウンターを喰らって上腕を折られる

もはやマーライコーに勝つ術はなく、そこから猛ラッシュを受け

てダウン

１０カウントによって、試合が終了したらしい

「おそらくあの怪我では、以後の試合はまともに出来まい……マーライコーとは同じＤリーグで敵同士だったわけだが、やはり素直には喜べんな」

「マーライコー……」

前の大会で彼とは拳を交わしたことがあるだけあって、悟空の表情は三人の中で一番重かった

去年よりさらに強くなったあいつと、この大会で再び戦えるかもしれない

そのように、少なからず悟空は期待を寄せていた

「オリブーはまだ、パポイとは試合してないアルよね？」

「ああ、予定では第５試合……最後から二番目の試合で奴とはあたる」

「……無理すんなよ、オリブー」

「分かっているさ」

オリブーは、心配そうに自身を見てくる二人に対し笑って言葉を返す

すると、彼らのもとに少し慌てた様子で北の界王が走ってきた

「おーい古、次の試合じゃぞー！」

「あ、すまぬアル」

「んじゃあオラも、自分とこに戻るか」

「それがいい。勝ち抜けが確定するまでは、やはりそれぞれのリーグ戦に集中した方が良さそうだ」

界王の後を追ってCリーグ試合場に戻る古

それとオリブーの言葉を受け、悟空もAリーグ試合場へと踵を返す

「じゃあなオリブー、残りの試合も頑張れよ」

「お前もな悟空、油断するなよ？……決勝トーナメントで会おう」

「ああ！」

『さあCリーグ第3試合！北銀河からは古菲選手！』

「次こそは勝てやるアル！」

『対しましては南銀河、ジンキョウ選手！』

「よおしっ！」

『それでは、試合開始ーー！』

波乱の予選リーグは、まだ始まったばかり

第１１９話　驚くべき行動、真名　パポイの実力偽りなし　（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「今回のゲストは誰なんだ？」

クウネル
「はい、今回はこの方」

ジャッキー・チュン
「うむ、久しぶりじゃの」

クウネル
「二回目の出演となります、ジャッキー・チュンさんです」

エヴァ
「いや、四回目だろ。正体の爺の分含めて」

クウネル
「あくまで今回のゲストは『ジャッキー・チュン』さんです。そこはあまり深く掘り下げないようにお願いします」

ジャッキー・チュン
「よろしくの」

クウネル
「というわけでコーナーの進行を、今回の話ですが……」

エヴァ
「……また随分と『Z』観てなきゃ厳しい内容になったな」

クウネル
「これでもまだマシな方ですけどね、今後さらにあの世の武道家が登場しますから」

ジャッキー・チュン
「そんなこと言ったらワシなんて『Z』や『改』にも未登場じゃからもっと知られておらんぞ」

エヴァ
「いや、少なくともアークアやマーライコーよりは知られてるから大丈夫だろ。パイクーハンには負けるかもだが」

クウネル
「『Z』系列の格ゲーではかなりの登場率ですからね」

エヴァ
「あとは孫悟空と龍宮真名の試合なんだが、序盤の描写とか書けなかったのか？」

クウネル
「極力書かずアッサリ済ませたかったらしいです」

エヴァ
「まあ、『勝てないと割り切ってすぐに降りる』というのは確かにあいつらしいがな」

ジャッキー・チュン
「あと今回の話で、それぞれのリーグ内の選手がそれなりに把握できたのう」

クウネル
「各銀河一人づつのリーグ構成ですので、古菲さんが戦う西銀河の方も『分かる人には分かる』ようになりました」

エヴァ
「……『Z』未見の読者でも読みやすくなるようにしとかないと、後々大変にならないか？」

注・外見の説明描写とか頑張って書きます！

エヴァ
「にしてはマーライコーのが結構単純だったような……」

クウネル
「では続きまして、次回予告です」

ジャッキー・チュン
「さて、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「前半は古菲とジンキョウの試合だ」

クウネル
「前大会パイクーハンさんに瞬殺されたジンキョウさん、今回はとっておきの技を用意してきたみたいです」

ジャッキー・チュン
「後半はパイクーハンの試合じゃ、相手は……まあ、次回まで楽しみに待っておってくれ」

クウネル
「では、次回のネギドラ！も……」

エヴァ&ジャッキー・チュン
「お楽しみに！」

～今日の〇〇～

「ほほほ、どうですの？もう降参なさったらいかがかしら？」

「んなこと……してたまるもんですか！」

西の都、カプセルコーポレーション

その社内には、一部関係者を除いて絶対に立ち入り禁止としている部屋がある

そんな部屋の中に入り、ダラダラと汗を流して辛そうな表情をする少女が二人

本来の使用者が今日は出掛けているため、特別に家主の許可を貰って中に入っていた

やっていることは、簡単に言えば『我慢比べ』

立った状態から開始し、先に床へ突っ伏した方が負けという単純なルール

部屋の中央には何やら大掛かりなコンピューターが設置されており、そこにはデジタル数字でこう記されていた

『１５Ｇ』と

『ちょっと、二人とも大丈夫ー？そろそろ止めた方がいいんじゃない？』

「お気遣いありがとうございますわ……ですが、私は全っ然！余裕ですからご心配なく！」

「っ！」

二人の様子を外から見て気になったのか、天井付近のスピーカーから家主が放送で声を入れる

すると背の高い方、ロングの金髪の方の少女はわざと大声で家主へと言葉を返した

明らかに、隣にいるオレンジのツインの少女を意識して言い放った言葉

これにはあちらも堪えることは出来ず

「……私だって全っ然！余裕も余裕、大余裕ですから！」

同じように大声で言い放ち、意地の張り合いを続ける

ちなみに両者とも既に片膝をついており、どう考えても痩せ我慢であることは家主側からしても明白だった

そこからさらに、ツインの少女は続ける

「そうだわ……いっそのこと、十五倍から二十倍まで上げてもらおうかしら」

「なっ！？随分と思い切ったことを言いますわね……」

「あらー？……もしかして…耐えきれる自信がないの？」

「そっ、そんなわけありませんわ！わ…私だってそろそろ上げようかなと思っていたところです！」

「なら決まりね……すみませーん、お願いしまーす！」

『……ホントに大丈夫なの？』

「「大丈夫です（ですわ）！」」

『……』

ズンッッッッ！

「「っ！？」」

直後、数百キロ単位の重みがさらに二人へと襲い掛かった

たまらず二人とも両膝、続いて両掌を床についてこれに耐える

「……ちょっと、どうしたのよ？変な汗掻いてない？」

「何を、お馬鹿なことを……いたって健康的な汗ですわ」

「ふうん……まったく、強がっちゃって……」

「それはこっちの……セリフです、わ……」

両者歯を食い縛り、両手両脚をプルプル震わせながら、未だ意地を張ることをやめなかった

第１２０話　巨人化ジンキョウ　この日のために得た新技（前書き）

また短くてすみません、なかなか諸事情（あとがき参照）により執筆が……かなり個人的な事情ですが（汗）

ではどうぞ！

第１２０話　巨人化ジンキョウ　この日のために得た新技

「はあっ、はあっ、……こんな小娘なんかに……」

「どしたアルか？私の力はこんなものじゃないアルよ？」

予選Ｃリーグ

現在０勝０敗１分けの古は、二試合目

南の銀河代表のジンキョウとの試合に臨んでいた

選出会で戦ったキドモのような、パワー系戦士のジンキョウ

マーライコー並の巨体で、褐色肌にオレンジのモヒカンが特徴的

着ている服はアマレスのユニフォームのようなそれで、隆々とした筋肉は隠し切れずあちこちから見えている

そんな彼は序盤、荒ぶる剛拳の嵐を連続で古に放ってきたがそれを古は楽々と回避

少し前にやったアークアとの水中戦と比べればなんてことはなく、得意のカウンターを次々と打ち込むことに成功した

そのカウンターを恐れてジンキョウは攻めの手を弱めたが、今度は古が容赦なく猛攻

スピード、格闘技能で圧倒的に劣るジンキョウに防ぐ術はなくこれまた次々と成功

そして一方的な展開のまま、現在に至る

（うむ、こいつ弱いアルな……陸上のアークアより幾分かはましアルが、単なる力任せの戦い方しかしてこないアル）

だが、アークアのように何か技を隠し持ってるやもしれぬ

それを一応考慮して警戒を続けながらも、古はジンキョウを自身より明らかに格下として見ている節があった

（マズいぜ……この試合まで負けたら二敗目、勝ち抜けが１００％無くなっちまう！）

ジンキョウはこれで負けてしまうと、仮にアークア戦で勝っても１勝２敗

『３勝０敗が一人と１勝２敗が三人』になればまだ二位の希望もあったが、古ＶＳアークアで引き分けが起こったためその希望も完全に潰えている

つまりジンキョウ、崖っぷち

「……こうなったらとっておきだ！ここで負けるわけにはいかないんだ！」

「とっておきアルと！？」

ジンキョウは咆哮し、驚く古をよそに技の構えに入った

両拳を握りしめ、両足を床に力強く踏ん張らせ、気を高める

「うおおおおおおおおおおっ！」

（なら、使われる前に潰……っ！）

古はジンキョウのもとへと駆けるが、僅かに間に合わず

「はっはっは！どうだ！俺は一年前の大会の後から必死に特訓し、筋肉量を自在にコントロール出来る技を身につけたのだ！」

着ている服がはち切れんばかりにまで筋肉を増量させた、超巨体のジンキョウがそこにいた

「今の俺は最大限の十倍にまで筋肉量を増加させた！これではお前だって一溜りもあるまい！」

「……」

古は足を止め、構えたままジンキョウを見据える

「ふっふっふ、今の俺が恐ろしくて攻める気にもならないか……」

ジンキョウは古の様子を見て余裕綽々となり、ポキポキ両手の指を鳴らしながら不敵に笑みを浮かべ

「ならばこっちから行くぜーー！」

拳を振り上げ、突撃した

あの巨体になってもスピードは落ちることはなく

むしろ、少々だが上がっている

「喰らえええええっ！」

放ったジンキョウの拳は古を

「……三倍アル」

シュン

「何！？」

掠ることすらなく、陽炎のように揺らぐ古の残像だけを打ち抜いた

古の行き先は、到底目で追うことは叶わず

「ど、どこに消えやがった！」

「ここアル」

ジンキョウは狼狽する

そんな彼に、古は彼の足元付近から声を発した

表情を強張らせその方を見るが、遅し

「ぐおおっ！？」

真っ赤に燃えた右脚が、ジンキョウの両膝裏を一気に蹴り抜く

脚を払われ、あえなく仰向けに転倒

背中から伝わる衝撃を感じながら、ジンキョウは目の前に飛び掛かってくる古の姿を捉えた

右に握り拳を作り、攻撃態勢

「アイヤーーーー！」

（甘い！筋肉量を増加した俺の身体は、防御力も上がっているんだ！）

一発くらいどうってことないぜと心の中で豪語するジンキョウに、古は拳を打つ

（ふん捕まえて殴り合いに持ち込めばこっちのｍ！？！？！？！？）

中指だけ僅かに出した形の拳を

「ぐ…ぎ……」

鼻と口の間にある、縦に走っている溝にある経穴

人体の急所の一つ、人中穴へ

ジンキョウの目は白黒と反転を繰り返し、最後には白へ

「……いくら筋肉増やしたって、そこは無理アルよ」

『ジ、ジンキョウ選手気絶！古菲選手の勝ちです！』

古は気絶中のジンキョウをうんしょと担ぎ上げ、次の試合の進行のため試合場から降りた

「よっしゃー！古が勝った！」

「お見事です古老師！」

これには、クリリン&ネギも喜びを露わにする

他の面々も彼らほどテンションは高くないが、古の勝利に対しやはり嬉しい模様

「いやー凄いねくーふぇ、正に圧勝って感じ」

「ジンキョウさんは前大会一回戦負け、しかも一撃KOです。彼より格上のアークアさんと互角だったのですからまあ当然でしょう」

「でもあの大きな人、気絶しちゃいましたけど大丈夫でしょうか？」

「放っておいてもあの位平気じゃろ、勝手に目を覚ますわい」

朝倉が古を称賛し、夕映が補足

次にさよがジンキョウのことを少し心配するが、占いババが冷淡に返した

「あれ？そういえばベジータさんは？」

「パル姉ちゃん連れてどっか行ってもうたみたいやで？何処行ったかまでは知らんけど」

「ところで夕映嬢ちゃん、悟空の旦那のライバルだっていうパイクーハンはあん中の誰なんでい？」

「あそこですね、Bリーグで試合してる長帽子を被った方の人です」

続いてベジータの姿が見えなくなったことを気に掛けた悟飯に、その一部始終を僅かだが見ていたコタローが教え

カモが夕映にパイクーハンのことを尋ねると、彼女はホイとパイクーハンに指を差す

その方を見るカモにつられ、残りの皆もそちらを向いた

「相手は北銀河代表のミゴレンさんですね。獣人タイプの戦士で、母星を襲撃したエイリアンと最期まで戦い抜いたという過去を持ってるです」

「じゃあ結構強いんか？」

「代表に選ばれるくらいですからそれなりの強さはあるでしょうが、流石にパイクーハンさん相手じゃ無理ですね。ほら、もうすぐ終わっちゃいそうです」

「はあああああっ！」

「ぐううっ！」

パイクーハンの回し蹴りが、ミゴレンを再び捉えた

蹴り飛ばされ宙を舞うミゴレン

しかし場外に出る直前というところでなんとか舞空術を使って踏ん張り、改めて試合場に立ち直す

戦況は、先ほど夕映が言ったとおりパイクーハン優勢のまま全く動いていない

パイクーハンは真剣な面持ちでいながら、いたって涼しい表情

一方のミゴレンは幾度も攻撃を浴びせられ、倒れこそしないもののフラフラであった

（ここまで持ちこたえるとは……北銀河の奴等は相当腕を上げたようだな）

「まだまだ……負けてないもんね」

まだ心の底からは諦めてないのか、虚勢に似た意地を未だ張り続けるミゴレン

先程のBリーグ第2試合、ミゴレンは東銀河代表のチャプチャイ相手に見事勝利

また、パイクーハンは第1試合で南銀河代表のフーログに圧勝

この試合、互いに1勝0敗同士の対決となっている

各人3試合しかないことを考えれば、この試合は大きい

ここで勝って2勝0敗とすれば、確実に決勝トーナメントへの勝ち抜けがほぼ決定

3人が2勝1敗と並べば話は別だが、そのためにはチャプチャイがパイクーハンに勝利しなければ成り立たない

これはまず考えられないため、やはりここで勝てば勝ち抜け確定のようなもの

潔く真名のようにギブアップして次戦に備えるというのも可能だったが、ミゴレンはすごすごと引き下がりたくはなかった

たとえ勝率が紙のように薄くとも、最後まで戦いたかった

我が北銀河最強、孫悟空と勝るとも劣らぬ強さを持つパイクーハンと

強きを求め憧れる、一個人の武道家として

「でりゃあああああっ！」

力を振り絞り、猛烈と突進

ラッシュを次々とパイクーハン目掛けて放つ

しかし、パイクーハンは難なく回避をしていった

(技のキレが無くなってきた、そろそろ向こうも限界のようだな……ならば次の攻撃で決める！)

回避を続けながらパイクーハンは、右拳に気を集束

一撃で決着をつけるべく、力を溜める

数秒と経たずして、それは完了

「はああっ！」

「っ！？」

全身から気を放出してミゴレンを下がらせ

「せやあああっ！」

気を込めた拳を打ち出した

拳はミゴレンに、防がれることも避けられることもなく命中

胸部の中央、つまりは鳩尾を完璧に捉えた

「ごほおおっ……」

（勝負あっ……！？）

ミゴレンはこれを受け、身体をゆっくりと傾かせていく

が、時を同じくしパイクーハンには思いもよらぬ鈍痛が走った

走った箇所は左頬

そこには、カウンターを狙って高速で打ち込まれたミゴレンの右拳

獣『人』のためミゴレンの手は本来、普通の人間と全く同じ形状

である

しかし、今の彼の右腕全域に限っては違っていた

「……成程な、身体の一部を完全な『獣』として一時的に変化させる技か。スピードもパワーも大きく上がっていた」

「力を結構使っちゃうから乱用は無理なんだけどね……けど、一発当ててやったよ？」

「ああ、してやられたぜ」

「へへ、やりぃ……」

糸が切れたかの如くミゴレンの身体が急に倒れ、パイクーハンが右腕を伸ばし受け止める

『ミゴレン選手ノックアウト！パイクーハン選手の勝ちです！』

（さて、悟空達より遥かに劣るこいつでここまでの実力だ……オリブー、悟空、お前達がどれほどまで腕を上げたのか楽しみにしてるぜ）

空いた左手で自身の左頬を押さえながら、パイクーハンはそう心の中で呟いた

第１２０話　巨人化ジンキョウ　この日のために得た新技（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「また作者が投稿予定の書き忘れを……」

クウネル
「まあまあ、一応ペース的には正常なんですから」

エヴァ
「……で、今回のゲストは？」

クウネル
「この方々です」

超バーダック
「へっ、またカカロットと出られるとはな」

超悟空
「そういやこの姿で此処に来るんは初めてだったな、悟飯」

超悟飯
「はい、お父さん」

クウネル
「アイスさんのリクエストで、超サイヤ人状態のバーダックさん、悟空さん、悟飯君の三人です」

エヴァ
「おい待て、バーダックは原作・アニメでなったことないだろ」

超バーダック
「作者もそれを疑問に思ってネットで調べてみたらしいが、普通に画像検索とかしたら見つかったんでこうして出演出来たぜ」

エヴァ
「それ公式のじゃないし……」

クウネル
「さて、それはとりあえず置いといて」

超悟飯
「コーナーの進行ですね」

クウネル
「はい、今回の話ですが……」

エヴァ
「結局短かったな、二試合分詰め込んだのに」

超悟空
「まあ、どっちも実力差が結構あったみてえだしな」

超バーダック
「しかもジンキョウの新技ってのも、次回予告で前もって言ってた割には役立たずな始末だぜ」

クウネル
「あの展開は予告書いてる時点で確定してたらしいです、予告自体ある意味ネタですね」

エヴァ
「というか筋肉増量って、何処の妖怪兄弟の弟だよ……」

超悟飯
「それにしてもネギ君のお師匠さんはやっぱり凄いです、ピンポイントで人中穴に打ち込むなんて実戦じゃなかなか出来ませんよ」

超悟空
「そんなに人中穴ってヤベエ場所なのか？」

クウネル
「人体の急所の一つです。作者がネットで軽く調べた程度の知識なんですが、神経が集中してて下手すれば死ぬとか」

エヴァ
「そういえばＤＢ系列の武道大会だと、急所攻撃は眼球と金的だけだったな。つまりはルールの範囲内か」

クウネル
「かなり微妙なラインですけどね。人中穴自体は、作者が某『現在親子喧嘩真っ最中の格闘漫画』に影響して書いてみたらしいです」

エヴァ
「というか、下手したら相手が死ぬ攻撃をあいつが容赦なくするって……」

クウネル
「ＤＢキャラの耐久力を作者が心から信頼している証拠です」

注・そういうことでご勘弁願います

超悟飯
「じゃあ次は次回予告ですね」

超悟空
「さて、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「各リーグの第４試合をやるようだな、省略＆割愛をまたするつもりのようだが」

クウネル
「前半はフーログさん対チャプチャイさん、後半は龍宮さんの本気試合をお送りいたします」

超悟空
「お！本気試合ってことは、真名が思いっきり戦うんだな！？」

クウネル
「はい、相手もそれにふさわしくかなりの強者です」

超バーダック
「具体的には言えないのか？」

クウネル
「投稿までのお楽しみということで。一応ヒントを出すなら南銀河

の選手です」

エヴァ
（分かる読者には消去法で割り出せるよな……他の三人は既に出てるし）

超悟飯
「あと、次回の投稿予定は来週の金曜日です」

エヴァ
「二日遅れか……作者の奴、今度は何の用事だ？」

クウネル
「学校関連のイベントらしく、『車中泊含めて二泊三日、富士山登山に逝ってきます！』とのことです」

エヴァ
「……逝ってくるのか？」

クウネル
「こっちの字の方が自身の体力的に考えてしっくりきたそうで」

超バーダック
「それじゃ、次回のネギドラ！も……」

エヴァ＆クウネル＆超悟飯
「お楽しみに！」

超悟空
「ぜってえ見てくれよな！」

～今日の〇〇～は、またネタ切れが発生したためお休みです

エヴァ
「……しかし夏休み真っ最中なのだから、もう少し普段より投稿ペースを早く出来んのか？」

クウネル
「夏休み真っ最中に伴い、現在ニコ中真っ最中（動画的な意味で）の作者です」

注・小説の執筆時間に対しほぼ2：1になってます

エヴァ
「2はどっちだ？」

クウネル
「ニコ中の方です」

注・面白くてつい見ちゃうんです！〇イマスとかア〇マスとかアイ〇スとかアイマ〇とか！

エヴァ
「隠せてないぞ！？」

第１２１話　一対七の戦い　南のフーログと東のチャプチャイ（前書き）

お待たせしました、第１２１話です。富士山登山はしんどかったですね、あと飲み物高過ぎ。多分二度と行きません。

ではどうぞ！

第１２１話　一対七の戦い　南のフーログと東のチャプチャイ

『フーログ選手ー！いませんかフーログ選手ー！』

予選Ｂリーグ試合場

第３試合のパイクーハンＶＳミゴレンが終了し、お次は第４試合フーログＶＳチャプチャイの試合に進もうとしていたのだが、ここでトラブル

試合場に立ち、試合開始を待っているのはただ一人

ジンキョウよりさらに濃い肌の色をし、口周りへ豊かに髭を生やしたかなり小柄な男

チャプチャイのみである

つまり彼の対戦相手、フーログの姿が忽然と消えてしまっていたのだ

これでは大会の進行に差し支えるということで、キノコ男が周囲に向かってマイクで呼び掛ける

しかしながら、フーログの姿は見えず

「はっはっは！大方、チャプチャイの強さに恐れをなして逃げ出し

たんだろうね！」

「誰が東銀河の奴相手に逃げ出すか！」

また、Bリーグ試合場には東と南の界王の姿が

各銀河のホープであるアークアとパポイは現在それぞれ試合中なのだが、内容はかなり一方的

声援を送るまでもなく勝つだろうと決め込んだ二人の界王は、別リーグの応援をするかということでここまで足を運んでいた

「おい！最後にフーログを見た奴はいないのか！」

不戦勝による負け、結果予選敗退

こんな選手を出すことは南の界王としてもまっぴら御免なわけで、焦りを徐々に露わにしていく

周囲にいる他の銀河の選手達にまで訊いて回っていった

すると、パイクーハン戦で受けたダメージが多少回復したか

「んー、そういえばあいつ、パイクーハンとの試合が終わった後『トイレに行く』とか言ってたような……」

座り込んでいたミゴレンが立ち上がり、南の界王に証言する

「なんだと！？フーログの奴、腹でも壊したのか……？」

「逃げたに決まってんでしょ！ほらほら審判、さっさとウチのチャプチャイの不戦勝にしな！」

東の界王はさらに声を荒げ、チャプチャイに指を差しながらキノコ男に大声で要求を繰り返した

（前の大会みたいに決勝トーナメント出場がアークアだけなんてこと、させるわけにはいかないんだよ！）

キノコ男も、このままフーログが戻ってこない可能性が高そうだと推測したか

『え、えー、ではフーログ選手不在により……』

フーログの不戦勝を宣告

『チャプチャイ選手の不戦しょ……』

「待て」

しようとしたところで突如、ここから少し離れたところで声

Bリーグ試合場周辺にいた者は全員、顔をそちらへ

「危ない危ない、戦ってもいないのに負けにされちまうところだった……」

「フーログ！」

緑色のカエルの容姿に、聖歌隊のような白い服を着たこの男

フーログはスッと皆の目の前まで移動し、そのまま試合場に上がってチャプチャイと対峙した

「さて、それじゃあ初めてもらおうか」

「うわ、なんやあのカエルみたいなの」

「カエルみたいというよりカエルです、南の銀河代表のフーログさんですね」

（楓姉ちゃんは来んくて良かったんかもな……）

「前大会ではベスト8、カエルであることを生かした素早い身のこなしに加え、身体を数十倍にまで膨らませる技の持っています」

「ほんなら、あっちのちっこいおっさんは？」

「東銀河代表のチャプチャイ選手ですね、スピードはかなり速い上天津飯さんが使う四身の拳に極似した分身技を使います。あちらは前大会オリブーさんに負けて予選敗退してるです」

「にしても夕映嬢ちゃん、ホント詳しいな」

「伊達に占いババさんやアックマンさんから知識を吸収してないです」

「あ、始まりましたよ」

「ほあああああっ！」

「むっ」

試合開始直後、チャプチャイはいきなり仕掛けてきた

自身を一気に七体に分裂させ、フーログの周りを取り囲む

チャプチャイが使う分身は、楓やコタローが使うそれとは違う

先ほど夕映が言った通り天津飯の四身の拳に近く、七体全てが実体を持っている

前大会ではそれが仇となり、オリブーを攻撃しようとしたところで全員まとめて激突

その時はそのまま敗北となってしまったが、今回は一味違っていた

「ほあっ！」

「ほあっ！」

「ほあっ！」

「ほあっ！」

「ほあっ！」

「ほあっ！」

「くっ、ちょこまかと……」

激突として自滅などという無様な行いなど、全く見せる気配なし

「チャ、チャプチャイのやつ、以前とまるで違うではないか……」

「はっはっは！どうだい南の界王！あの時の敗北から一年、チャプチャイは七体分身状態でのコンビネーションの特訓に力を注いできたのさ！」

「けど僕には負けたけどね」

「うるさい！アンタとはちょっと相性が悪かっただけなの！」

チャプチャイの成長に少なからず驚く南の界王

それに対し東の界王は得意げになるが、ミゴレンの呟きには少々ムキになって反論する

その一方で、フーログは七方からチャプチャイの連打を浴びていた

「どうだいどうだい！チャプチャイは七体に分身してもスピードは変わらない！この勝負もらったね！」

「ぐぐぐ……」

一方的な試合展開に、南の界王は奥歯を噛みしめ眉をひそめる

彼としては、『優勝するのはパポイなんだから他の奴が負けても……』という考えもあるにはあった

が、彼が優勝したところで『南の銀河全体の強さ』が四銀河で一番になるのかと言われれば疑問に残る

前大会ではベスト８の内、西銀河の選手が三人

東と南銀河が二人で、東銀河が一人

このことから世間（あの世内）では、『西銀河は層が厚く、全体的に一番優秀なのではないか』という意見があったりしているのだ

無論優勝を勝ち取ることも大事だが、南銀河内での総合的な成績も同様に捨てがたい

故に南の界王はパポイ以外の皆にも、可能な限り好成績を納めてくれるよう切に願っていた

まあそれについては、他の三界王も殆ど同じ考えをしているのだが

「……そうだ！あの技だフーログ！身体を膨らませてあいつらを場外へ押し出してやれ！」

「あっ！あんた、またあんな卑怯な技を使わせる気かい！？」

「うるさい！ほれフーログ！」

そして去年フーログが使った例の技を思い出し、使えと指示

東の界王の野次を聞き流し、早くしろと急かす

（あの時はパワー自慢のマーライコーに投げ飛ばされたが、チャプチャイのパワーではそれも出来まい！）

しかし、フーログ使わず

素振り一つ見せず、ただチャプチャイ達の攻撃の防御を続けた

「な、何故だフーログ！何故使わないんだ！」

「情けなくて使いたくないんだろうさ！こっちとしては大助かりだけどね！いけーーーチャプチャイーー！」

「……」

フーログから答えは返ってこない

東の界王は安堵し、大声をあげてチャプチャイを応援

これにチャプチャイは応え、さらにフーログを攻め立てていった

南の界王にどんどん募られていく焦り

東の界王は逆に調子を良くし上機嫌

しかし、この二人の界王は今の試合状況を完全に把握出来てはいなかった

試合場周辺にいる者達でこのことが分かっていたのは、例の技を使わない当の本人フーログと

「……ミゴレン、だったな？」

「うん」

「お前にはこの試合、チャプチャイが優勢に見えるか？」

「……違うよね」

「ああ」

戦っている二人を、全くの別角度から見ていたパイクーハンとミ

ゴレンのみ

「フーログの奴、チャプチャイの攻撃をあれだけ受けながら全く気が減っていない」

「逆にチャプチャイは、攻め続けて疲れてきたのか自慢のスピードが落ちてきてるね」

「……勝負あったな」

「だああっ！」

「ほぐわあああああっ！」

「チャ、チャプチャイ！」

それから数分も経たず、チャプチャイの身体が宙を舞う

フーログのアッパーを受けて、高く舞い上がる

そして、積み上げられた他の六体のチャプチャイの上にボスンと

落ちた

『チャプチャイ選手全員気絶！フーログ選手の勝ちです』

「……ふん」

キノコ男が試合の終了を宣言すると、フーログはチャプチャイを一瞥した後試合場を降りる

試合は、フーログの見事な逆転勝利だった

いや、『逆転』と言っていいのかどうか

チャプチャイの猛攻をノーダメージで凌ぎきったフーログ

当然攻め続けているチャプチャイはスタミナ切れを起こし、疲労

スピードは目に見えて分かるほど落ち込み、そこからフーログの攻撃を受けて各個撃破

耐久力にそこまで自身の無いチャプチャイは、一体一体が全て一撃ＫＯ

さらには一体減るごとに、コンビネーションの質は落ちて見るに堪えない状態へ

結局チャプチャイは、完全にフーログの手の中で踊らされていた

「いやーよくやったぞフーログ！」

「チャプチャイ！あんたまたみっともない負け方して！」

南の界王は大層嬉しそうにし、降りてきたフーログを祝福

東の界王は大変激昂し、試合場に上がって一体一体に鉄拳

「うーん、最後の試合は1勝1敗同士でフーログとか……あれ、何処行くの？」

「ちょっと真名の試合を見てくる」

「ああ、最近弟子にしたあの子ね」

「弟子じゃない」

パイクーハンはAリーグ試合場の方に足を運ぼうとし、それを見たミゴレンは彼を呼び止めて会話を交わしていた

「相手が相手だからな、修行仲間として見ておく必要があると思っただけだ」

「素直じゃないなー、心配なら心配だって言えばいいのに」

「うるさい、勝ち抜けが確定してないお前は自分の心配でもしてろ」

「はいはい、お気をつけてー」

ダメージは殆ど回復したようで、ひょうきんに笑いながらパイクーハンに手を振るミゴレン

パイクーハンは彼から目を背けて舌打ちし、真名の試合を見るため一時この場を離れた

「よおパイクーハン、真名の試合見に来たんか？」

「勝ち抜けが確定して落ち着いたんで一応な」

「ちょうど今から始まるとこだ」

やってきたパイクーハンは、悟空の隣へ

腕を組み、すぐ悟空から視線を外して試合場に

試合場には真名と、赤黒い殻を身に纏った昆虫型の戦士が一人

『では参りましょう！西銀河代表の龍宮真名対南銀河代表のトルビー選手、試合開始ー！』

「だあああああっ！」

試合開始と同時に、トルビーは真名へと突撃した

第１２１話　一対七の戦い　南のフーログと東のチャプチャイ（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「作者が富士山登山という大無茶をやったせいで一週間も空いてしまったな」

クウネル
「一応登りきったらしいです、下山後に膝の関節痛と全身筋肉痛で苦しんでますが」

注・現在進行形で

エヴァ
「……で、今回のゲストは？」

クウネル
「はい、今回はこの方々」

千草
「どうも、久しいどすな」

ウミガメ
「また来ちゃいました」

スクナ

「……」

クウネル
「千草さんとウミガメさん、あとスクｎ……」

エヴァ
「おいこら待て！こんなの呼んでどうするつもりだ！？」

クウネル
「デカいキャラなら以前にもボンゲボンゲとか呼んだじゃないですか」

エヴァ
「こいつは鬼神だぞ！？」

クウネル
「リクエストには忠実に、これがあとがきコーナーです」

エヴァ
「変な所でこだわるな！」

クウネル
「まあそんなことはさておき、コーナーの進行ですね」

エヴァ
「おい！」

クウネル
「さて、今回の話ですが……」

エヴァ
「……結局龍宮真名の試合は次回に持ち越しか」

クウネル
「思ったよりフーログさん達の試合に尺を使ってしまいましたからね」

千草
「ミゴレンとかいう犬っころは結構お気楽な奴なんやな」

クウネル
「あれは１００％作者の想像です、だってセリフとか全く無かったですから」

注・そういうことで一つよろしく願います

ウミガメ
「あと、パイクーハンさんがなんだかツn」

エヴァ
「殴られても知らんぞ？」

ウミガメ
「……」

エヴァ
「それと、ミゴレンはチャプチャイにどうやって勝ったんだ？」

クウネル
「『対パイクーハン戦でも見せた部分獣化で身体強化→速さでチャ

プチャイを完全に上回る→次々と撃破→勝利』という流れだそうです」

ウミガメ
「あれ？じゃあなんでパイクーハンさんは、ミゴレンさんと戦った時に部分獣化を見て驚いてたんですか？」

クウネル
「ちょうどその時マーライコーさんの試合を見に行ってたので見てなかったんです」

千草
「パポイにやられたあの試合やな」

エヴァ
「何かややこしくなってきたな……」

クウネル
「では続きまして、次回予告です」

千草
「さて、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「龍宮真名とトルビーの試合をお送りするぞ、おそらく一話丸々消費だ」

クウネル
「前大会ベスト４のトルビーさん相手に、果たして龍宮さんはどう戦うのでしょうか？」

ウミガメ
「え！ベスト４！？それってめちゃくちゃ凄いじゃないですか！」

クウネル
「はい、詳しい活躍が知りたい方はアニメ『Ｚ』のＤＶＤ３４巻を是非ご覧ください」

エヴァ
「いや、あいつ全く活躍してないだろ」

ウミガメ
「大会ベスト４なのに！？」

エヴァ
「理由が知りたい奴はググれ、以上」

千草
「次回の投稿予定は来週の水曜どすな」

クウネル
「では皆さん、次回のネギドラ！も……」

エヴァ＆千草＆ウミガメ
「お楽しみに！」

スクナ
「……」

エヴァ

「にしてもこいつ全然喋らなかったな」

千草

「それはまあ、封印状態なんやから当然やろ」

エヴァ

「じゃあ何で連れてきた！？」

～今日の〇〇～

ある日一人の男が、仲間の空飛ぶ猫みたいな動物と一緒に考え事をしていました

その男は額などに傷がある、まあそれなりに顔立ちがいい男でした

その男は、自分の扱いに大層不満を抱いていました

「何で俺ばっかりこんな扱いなんだ……良い扱い受けてるあいつらだって、そんなに強いわけじゃないのに……」

男が言う『あいつら』とは、昔から共に戦ってきた戦友二人

現在あの世に日帰りで出掛けている坊主頭の彼と
仲間になる少し前に自分の脚をへし折った三つ目の彼のことです
「そりゃまあ、あいつらと俺を加えた三人の中じゃ、確かに俺が一番弱いかもだけどよ……」
このことを考えるたびに、いつも彼は弱気になってしまいます
とあるコーナーにゲストとして出張する時も、いつもこうです
司会の二人にも、度々呆れられていました
すると、仲間の空飛ぶ猫みたいな動物が突如口を開きます
「分かりました！あの二人と違う決定的な差が！」
「ホ、ホントか！？」
男は途端に嬉しそうになり、猫みたいな動物は続けます
「はい！他の二人は異世界から来た人を弟子に取っています！」
「……そ、そういえばそうだ！確かに俺だけ弟子を一人も取っていない！」
坊主頭の彼は、褐色肌のチャイナ系少女と
三つ目の彼は、オッドアイのツインテール少女と師弟関係を築い

ていました

男も一応触覚頭の絵描き少女と修行したりしていましたが、師弟関係と言える間柄ではありませんでした

「よし！そうと決まれば善は急げだ！今からでも誰かを弟子に取るぞ！」

男は意気揚々と立ち上がり、出発の準備を始めます

しかし、猫みたいな動物は何か気付いたのか呼び止めます

「あ、あの、すみません」

「何だ？」

「弟子に取るってことはやっぱり師匠的な人がいなくて、かつ自分より弱い人じゃなきゃダメなんじゃ……」

「当たり前じゃないか！だから俺よりそんな奴を一人ほど弟子に……あ」

男も気付きました

異世界から来た彼らは、殆どが誰かと師弟的な関係を築いていたのです

中でも男の戦友である緑色の彼は、異世界メンバーの内五人に稽古をつけてやるという凄まじさ

師匠的な存在がいないのと言えば、頭にアンテナを付けたロボ少女くらいしかいません

彼女には以前アッサリと負けており『弟子にならないか』とは到底言えません

あと絵描き少女も残ってはいましたが、これも困難

彼女は最近、自分の元恋人の夫に引っ張り回されていて誘うのはかなり難しそうでした

「……ならいっそのこと、戦闘経験皆無の奴でもふん捕まえて無理矢理弟ｓ」

「多分無理ですし無駄です、それ」

「……ちょっと俺トイレ」

男は猫みたいな動物と一旦別れ、トイレの個室にしばらく閉じ籠りました

第１２２話　突き破れ真名！ＶＳ鉄壁装甲戦士トルビー（前書き）

申し訳ございません、本当に申し訳ございませんでした。更新速度の早さくらいしか取り柄のないこの小説で、三週間以上も間を空けてしまうという体たらく……あとがきにも色々と書いてますが、今度二度と無いように精進いたしますので。

今回少々多めです、ではどうぞ！

第１２２話　突き破れ真名！ＶＳ鉄壁装甲戦士トルビー

（前大会ベスト４、トルビー……さて、どれほどの強さなことやら）

試合開始と同時に突撃するトルビー

それを真名は、重心を低く落とした構えをとって迎え撃つ

名前の通りビートル型の戦士であるトルビーは、背中の羽でブブブと低音を響かせ突進

「だあああああっ！」

拳を強く握り、殴りかかった

真名はそれを、横に跳んで回避

しかしトルビーは避ける真名の動きを横目で捉え、そのまま回し蹴りを放って追撃

「ぐっ！」

「まだだあああっ！」

真名は左腕を出して攻撃を防ぐが鈍痛

トルビーはさらに攻め立てる

次々と繰り出される拳の突きを、気を集中させた掌で真名は受け止めていった

（ぐっ、俺の攻撃を目で完全に追えていやがる！）

（単調な攻撃だから何とか耐えてはいるが、このままではジリ貧は必至……なら）

しかし防ぐことは出来ても、これでは反撃に打って出ることは至難

既に1敗している以上、この試合はどうしても落とせない

真名は一手、策を即座に考え実行に

拳を受け止めた後わざと大きく下がり、距離を空けてすぐさま空中へ退避した

「なっ！？逃がすか！」

（来た来た）

当然トルビーは後を追う

刹那が空中戦を得意とするのと同様に、トルビーもまたそれにおいてはかなりのやり手

先に飛び上がった真名よりも段違いの速さで猛追

が、真名はそれを待っていた

「悪いね」

ヒュン

「!?」

殴り掛かる直前というところで、トルビーの視界から真名が消える

残像拳でも高速移動でもないこの事象

「ど、何処に消えぐおおっ!?」

悟空直伝、瞬間移動

トルビーは背後を取られ、直後にそこへ掌底を喰らった

「さて、今度はこちらの番だ」

「よっし!こっから真名の反撃開始だ!」

「……」

ギリギリまで相手を引き付けての瞬間移動

ボージャック戦でも見せたこの作戦の成功に、悟空は歓喜

見れば真名は、トルビーに振り返らせる暇も与えず連撃を浴びせている

これで一気に局面はひっくり返ったと喜ぶ悟空だが、隣には厳しい表情のままの男が一人

「ん？どうしたパイクーハン？」

「やはり駄目だ。あいつに……トルビーに真名の打撃は通用しない」

「……どういう意味だ？」

「言ったとおりの意味さ、俺が前大会でトルビーと戦ったことは覚えているな？」

パイクーハンは厳しい表情を変えぬまま、悟空に話を続ける

前大会の準決勝第2試合で、パイクーハンはトルビーと対戦していた

結果は、パイクーハンが打撃二発をクリーンヒットさせ圧勝

「ああ、確か二、三発でアッサリ勝っちまってたな」

「あの時俺は、重りをつけた状態での最大攻撃を奴に放った。しかも、防御させる隙も与えない完璧なものをだ」

「だから、どういうことなんだ？」

「……その俺の攻撃なら、マーライコーやジンキョウ相手でも一発で倒せると言ってるのさ」

「！？」

パイクーハンの言葉に嘘は無かった

事実ジンキョウは前の大会で一撃ＫＯに成功しているし、マーライコーもタフさで言えばジンキョウと大差はない（総合的な実力ではマーライコーの方が断然上ではあるが）

加えて彼ら二人のタフさは、あの世の武道家の中ではオリブー級以上の者らを除けばトップクラスなのである

「つまりトルビーは……『俺の攻撃を無防備に近い状態で一発受けても倒れずにいられる』耐久力の持ち主なのさ」

「そ、そうだったんか……それでおめえ、真名のこと心配になって」

「マーライコーが負傷退場という予想外な事態になったからな、流石に西銀河で予選突破が俺だけになっては界王様も……！？」

さっきから聞こえていたのとは違う打撃音

それを耳にしたパイクーハンはすぐさま音のした方へ

その方、上空にいたのは平気そうな表情のトルビーただ一人

真名は床にまで叩き落とされ、直撃こそせず体勢を即行で立て直すが、やはり敵の防御力には驚きを隠せずにいた

「くっ、やはり反撃を喰らったか！」

「真名！負けんな！」

（負けるな、か……もちろん、負ける気はさらさら無い）

真名は悟空とパイクーハンの声を耳に入れつつ、上空にいるトルビーに視線を向け続ける

先ほど彼から一発貰ってしまったが、ダメージはそれほど重くない

問題は『自身の打撃が効かない』という一点

（となればやはり気功波系の攻撃、手の内云々と言う余裕はやはり

無いかな……）

真名の右手に気が集束され、一個の気弾が出現

「はっ！」

トルビーを狙い、放つ

しかし両者の間で距離は大分開いており、トルビーは難なく回避

そこから真名は続けざまに数発放ったが、これもかわされた

（なら……）

次に真名は高く右腕を掲げ、時間を掛けて気を集中させていく

トルビーからすれば、今の真名は隙だらけであり攻撃する大チャンス

だがこれは、真名が自分から進んで隙をさらけ出しているという状況

（……まさか、またさっきのように俺の攻撃を誘っているのか？）

トルビーは動くのに躊躇いを見せる

どうするかと上空でしばし思考

その間に、真名の右掌の気弾は大きさを増していった

（さっきされた消える技の正体も不明のまま、下手に攻めるのは危ないが……このまま大技を使われるよりかはよっぽどましだ！）

再び背中の羽を鳴り響かせ、トルビーは真名の方へと急降下

また背後を取られぬようにと周囲を警戒しつつ、空いた真名の右脇を左拳で狙う

「だあああああっ！」

ヒュン

攻撃が当たる直前、真名は再び瞬間移動

またもトルビーの前から姿を消し、掌に溜めていた気弾ごと背後へと移る

そのまま、気弾を彼へぶつけるべくブンと振るわれる真名の右腕

「喰ら……」

「同じ手を二度も喰らうか！」

「っ！？」

それはしかしながら、一足先に振るわれたトルビーの振り向きざまの手刀に打たれた

狙いは大きく逸れ、気弾は明後日の方向へ

次にトルビーが仕掛けた攻撃には、真名も瞬間移動等による回避のしようがなく

「ぐふぅっ！」

上空で貰った一撃よりうんと重いそれを叩き込まれ、試合場ギリギリの所まで吹っ飛ぶ

辛うじて舞空術ですぐに持ち直すが

「甘いっ！」

「ぐあっ！」

真名に休む暇も与えず、見事虚を突いたトルビーは追撃の一発を命中させた

今度は完全に場外へ飛び出したが、これまた舞空術で場外負けを何とか回避

場外の壁・床・人等に接触しなければ、一応はセーフ

といっても真名が焦りを見せているのは明らかであり

パイクーハンや悟空の心配は更に募ることとなる

「お、おいパイクーハン！真名の奴、このままじゃ負けちまうぞっ！」

上空に移動した真名とトルビーは、空中戦を展開

正確には上空に退避した真名を、瞬間移動する暇さえ与えずトルビーがピッタリと追ってきた形

（さっき真名がやった、わざと相手へ隙を見せることによる誘導作戦……相手が相手だ、あからさまにやって二度も通じる可能性が低いことはあいつだって分かっていた筈）

心配は募ると言ったが否、パイクーハンは少々違っていた

真名と三週間も修行を共にしてきた彼である

彼女の戦い方、使用する技の大半は把握している

それを踏まえてパイクーハンは、さっき真名が取った行動に違和感を覚えたのだった

（あいつは戦術面、戦い方を組み立てることに関しては、実力を鑑みなければ俺よりもずっと上。だがさっきの見え見えの攻撃誘導は流石に俺だってしない、対戦相手の実力を考えれば尚更……それに、あいつはまだアレを使って…）

思わず両目を閉じ、パイクーハンは考える

しかし直後、悟空の叫びにすぐさま両目を再び開いた

「あっ！真名がまた同じことやってっぞ！」

「何！？」

見れば真名は、接近戦で押し負けて再び試合場の床上に

そしてさっきと全く同じ行動を

右腕を高く掲げ、気弾を生成すべく気を集中させていた

隙だらけの状態で、トルビーの攻撃を誘いながら

今度はトルビー、迷うこともなく突撃

真名はまたも瞬間移動で回避、しかも移動場所はさっきと同じ

さらには攻撃方法も一緒で、トルビーにあっさりと防がれ

さっき以上の攻撃、ボディへの打撃連打から回し蹴りを喰らってしまう

「駄目だ！やっぱり当たらねえ！」

「前の二回で完全に覚えられたな、あの戦法じゃもうトルビーには……！？」

悟空はさらに狼狽し、パイクーハンは平静を保ちつつ現状を分析

すると、さらに思いがけぬことが二人の目の前で起こった

近付こうとするトルビーを気弾数発で牽制し、距離を取った真名

そこからまた、右腕を上へ

「あいつ、まだやる気か！？」

「真名ー！もうそいつはトルビーには通じねえー！他の作戦考えねえと負けちまうぞー！」

パイクーハンは両の眼を大きく見開き、悟空は辛抱堪らず大声でまた真名へ叫んだ

しかし真名は、やめない

トルビーはまたも突撃を仕掛け、あとはまたさっきと同じ

防がれ、カウンターを喰らい、吹っ飛ぶ

「何を考えているんだ、あいつは……」

「真名ーー！」

（おいおい、北銀河の孫悟空にまで言われてるじゃないか……）

「…まだまだ……」

「っ！」

真名は立ち上がり、またも右腕を上へ

これで合わせて四度目

真名は呼吸こそ乱れを見せるものの、表情は殆ど変えずトルビーの方を真っすぐ見据えた

（確かに俺へ有効な攻撃を当てるとしたら、ああいった気功波系の攻撃しかあいつには無いだろう、打撃も大した威力では無かったし、おそらくあれが本気だ）

「ほら……どうした？」

（だがお前のその戦法、動きは完全に見切った！この一撃で決める！）

トルビーの拳が今まで以上に力強く握られ、勢いよく飛び出せるよう両脚にも力を込める

「はあああああっ！」

そして地を蹴り、真名にとどめを刺すべく駆け出した

握られた右拳には、集束した気が薄白く発光

「喰らえーーーー！」

真名の鳩尾目掛け、打ち出す

「……させないよ」

ヒュン

「懲りずにまだ繰り返すか！」

予想通りというか、相も変わらずというか

姿をまたも消した真名にトルビーは心のどこかで呆れを覚えつつも、すぐ身体を左に反転

自身の死角に移動して仕掛ける真名の攻撃の手を、左手刀で止めに入ろうとする

それを止めた後はガラ空きの身体に、フルパワーの右拳を放って決着

だが

「なっ！？」

このトルビーの狙いは、『攻撃を止める』という第一段階の時点で阻止された

トルビーも信じられないというような目でパチクリさせ、自身の左腕を見やる

左腕は、真名の左手に手首を掴まれてその動きを止められていた

そのまま捻じ上げられ、真名が耳元で不敵に笑いながら囁く

「があっ！」

「フフ、何度も同じ行動を取っていたのは、何も私だけじゃなかったということさ」

「き、貴様まさか、このためだけにあれだけ俺の攻撃を……」

身体を左に反転させて左手刀、狙うは真名の右腕、そしてカウンター

このようにトルビーもまた、真名と同様に同じ動きを繰り返していたのだ

「一回や二回だけじゃ不安だったのでね、流石に大分ダメージを受けてしまったが……」

真名は右手をトルビーの背中、羽を開いて無防備と化していた内

側に直接突っ込む

ただし掌にあった気弾は気を散らして体内に戻したようで、突っ込んだのはただの右手

否、それは拳や掌底を打つための形状を全く成していなかった

背中に当たっているのは、まっすぐに伸びた人差し指一本のみ

親指は人差し指と直角になるよう立てられ、残りは折り畳んだ状態

トルビーからは死角であるが、おおよその形状は想像がついた

「それら全部、この一発でお返ししよう」

「さっ、させ……」

「バン」

人差し指先端からそれは放たれ、トルビーの背は爆ぜた

『た、龍宮真名選手の勝ちー！』

「いやーギリギリだったな真名、おらヒヤヒヤしちまったぞ！」

「なに、あれくらいしか倒す方法が思いつかなくてね」

試合場から降りてきた真名を、悟空が嬉しそうな表情で出迎えた

パイクーハンは悟空よりやや離れた位置で腕を組み、真名に向かって口を開く

「しかし真名、よくトルビーの弱点を見つけられたな」

「『堅い装甲とは、内部の弱い箇所を守るためにある』。現にあの一発を喰らわせた後、相手の力は著しく落ちて簡単に勝てましたよ」

「流石だな」

「いえいえ」

真名はトルビーに攻撃された箇所を軽く押さえつつ、近くの壁に身を預けた

悟空が次の試合は大丈夫なのかと心配してくれたが、問題無いと真名は軽く返す

「それより、二人はそろそろ予選最後の試合なのでは？」

「む、そう言えば……」

「あ、ホントだ次の試合オラじゃねえか！」

パイクーハンと悟空は真名の言葉で思い出し、元の場所へ移動

といっても悟空は真名と同じＡリーグであるため、少し真名から離れて試合場のすぐ近くに行っただけ

（私は第６試合……第５試合をそれぞれ行う間に体力も大分回復するだろうし、相手は現在全敗中の東銀河の選手、まあ問題は無い。師匠と悟空さんも二勝づつしているから勝ち抜けは確定で、古も私と同じく第６試合、すると今観るべき試合は……）

真名は移動する悟空から視線を外し、やや離れた場所にある別リーグの試合場に目をやった

「さて、ついに来たか……」

「ウガーーーー！」

『オリブー選手とパポイ選手、試合場までお上がり下さい！』

予選リーグ第４試合、全て終了

続いて、第５試合が始まる

第１２２話　突き破れ真名！ＶＳ鉄壁装甲戦士トルビー（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「……」

クウネル
「えー、今回は朝倉さんとさよさんをゲストにお招きしています」

さよ
「どうもお久しぶりです」

朝倉
「どもども、にしても……エヴァちゃんご立腹だね」

エヴァ
「当たり前だ」

クウネル
「今回、史上初の〆切二週間オーバーを記録しましたからね」

エヴァ
「しかもサブ連載の方の投稿を決めるまで報告すら無しだ、何考えてるんだ作者は？」

注・本当にすみませんでした、夏休みの課題とか休み明けテストとかが重なりすぎてしまって……あと活動報告にも書いたんですが、

スランプが少々

クウネル
「まあ、おそらくこんなことは二度と無いでしょう、多分」

エヴァ
「お前は毎回一言余計なんだよ！」

朝倉
「でも内容としては久々に５０００字超えでボリュームあったし、その点についてはまだいいんじゃない？」

さよ
「私達の出番は無かったですけどね」

エヴァ
「まあ、これ以上グチグチ言っても堂々巡りか」

クウネル
「では早速コーナーの進行を今回の話ですが……」

エヴァ
「トルビーの奴、龍宮真名にしてやられたな」

クウネル
「ちなみにトルビーさんはあの後すぐ悟空さんと連戦です、四人での総当たり戦なので」

朝倉
「うわ、可哀そ……」

エヴァ
「だが一応目立つ場面はあったし、『Z』のあれと比べればマシな方かもだな」

朝倉
「確かまともな戦闘シーンが無かったんだっけ？」

クウネル
「予選は割愛、一回戦は相手の自滅、そして準決勝はパイクーハンさんに秒殺されて終了でした」

さよ
「くーふぇさんと戦ったあのお魚さんより順位は上なんですね」

エヴァ
「作者的には納得いかないらしいがな」

クウネル
「では続きまして次回予告……の前に、読者の皆様はもう、私達の活躍を映画館でご覧になりましたか？」

さよ
「随分唐突ですね」

エヴァ
「繋げ方が無理やり過ぎる……」

クウネル
「ちなみに作者は公開初日に家族三人（来場者特典のため半ば無理

やり）と一緒に観賞、途中腹痛に苦しむというハプニングがありながらも何とか最後まで観たそうです」

エヴァ
「おい、（）の中」

朝倉
「確かクウネルさんも出てましたよね？」

クウネル
「はい、映画館で是非私の活やｋ……」

エヴァ
「いや、お前殆ど目立ってなかったから」

クウネル
「ラカンや詠春よりはマシです」

エヴァ
「あいつらはそもそも出……」

朝倉
「ちょっとちょっと、流石にこれ以上はやめた方がいいんじゃない？」

さよ
「過剰なネタバレはマナー違反ですー」

エヴァ
「『過度な』ネタバレに入るのか？これ」

クウネル
「あとはそうですね……桜子さんの声に違和感感じた方、挙手」

さよ＆朝倉
「はい」

注・はい

エヴァ
「超鈴音や古菲はまだ許せたんだがな……」

注・聞いてる内に自然に慣れる、というのも無理な話ですし

朝倉
「今回のでアニメ最後だしね」

さよ
「残念ですー」

クウネル
「では、今度こそ次回予告です」

朝倉
「さて、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「予選リーグ第５試合、オリブーＶＳパポイの試合だな」

クウネル

「互いに2勝0敗で迎えたこの戦い」

朝倉
「果たして、予選1位突破はどちらの手に！？」

さよ
「っていうお話です」

クウネル
「次回の投稿予定は来週の月曜です」

エヴァ
「あ、金曜じゃないのか」

クウネル
「一応余裕を見て、とのことで」

朝倉
「それでまた遅れたらどうすんだろ……」

さよ
「感想やこのコーナーのゲストリク、お待ちしていまーす」

エヴァ
「では、次回のネギドラ！も……」

クウネル&朝倉&さよ
「お楽しみに！」

※今回も休みます

エヴァ
「散々間を空けといてネタストック無しか！？」

クウネル
「はい」

第１２３話　オリブーの思惑　古、突破を賭けた最終戦へ（前書き）

予定より早く書けました。保険として一週間先と長めにしたんですが、無事に書き進められて一安心です。

ではどうぞ！

第１２３話　オリブーの思惑　古、突破を賭けた最終戦へ

「ただいまー」

「あ、ハルナさん」

処変わって、観客席

第３試合を終えた古は、次の試合が第６試合までと少々先

そのため真名等の他の知人の試合を中心に観戦していた一同

そこへやや疲れた様子で、少し前に席を立っていた早乙女ハルナが帰還してきた

「ハルナ、一体何処行ってたですか？予選だいぶ進みましたよ」

「ごめんごめん、ちょっとベジータさんにさ」

「ベジータさんと何してたんや？」

「『何処か食い物が手に入る売店はないか探しに行くぞ』って無理矢理連れてかれちゃって、何とか解放してもらったんだけど……疲れた」

（（ベジータさん、何やってるんですか？））

ネギと悟飯はこの場にいない彼へ心の中で突っ込みを入れた後、

気を取り直して予選会場に再び視線を向ける

「そういえば次は悟空さんの試合だったよね」

「うん、お父さんなら絶対勝……あ、もう終わってる」

「瞬殺でしたぜ、兄貴」

しかし見ればＡリーグ試合会場で立っていたのは悟空のみで、対戦相手のトルビーは既にバタリと床に倒れていた

さらに、目線を横にずらしてＢリーグの方も見てみるとパイクーハンの試合も決着

チャプチャイに分裂させる暇さえ与えず、一撃ＫＯを決めたようだ

「うーん、どの試合もアッサリ終わっちゃってつまんな……お、あっちの試合は随分白熱してるじゃん」

すると四リーグの試合を隈なく観戦していた朝倉が、Ｄリーグの試合場を指差し感嘆

並行して行われているＣリーグの方の試合はアークアの独壇場と化しており、少々つまらない

他の皆も朝倉につられ、Ｄリーグの方に目をやった

「予選内ではおそらく最も注目の対戦……オリブーさんとパポイさんの試合ですね」

ちゅー

夕映をは目を光らせ、手に持つ『抹茶コーラ』と書かれた紙パック飲料をストローで飲み始めた

「……夕映、それどこで買ってきたの？」

「この世界じゃ何処にも売ってなかったので自分で作りました」

「……」

「はあああああっ！」

「ウガアアっ！グウウウウ、ウガーーーー！」

「ぐぬううっ！」

その、ネギ達一行が注目するDリーグ予選会場

そこでオリブーとパポイ、両名が拳を振るい合っていた

殴っては殴られ、殴っては殴られ

試合が始まってから今の今までそれの繰り返し

小細工なしの肉弾戦を展開

パポイはまあ、基本的にこのような戦法を取るのでさほど不自然ではない

問題はオリブーの方

格闘術だけでなく気功波の扱いにも長けている彼が、パポイと同じようにただ拳で殴るだけという戦闘方法を取るのはかなり不自然であると言えた

そして純粋な腕力では、マーライコーを一方的に下したパポイの方がやはり上

ダメージは自然と、オリブーの方へ多く積み重なっていく

「ウガーーーー！」

つまりは現在、パポイ優勢

パポイは調子を上げてさらに猛攻し、オリブーを攻め立てた

これはノーガードで受けるのは流石に危険と判断したか、オリブーの方は両腕を交差させて防御に回る

あまりの力にその場で堪え切れず、一歩二歩と後退してようやく

止まった

「いいぞパポイー！オリブーなんぞ軽く一捻りだー！」

南の界王もこの試合は近くで観戦しており、気分は高揚

強く握った右拳を上に突き上げ、大声を発する

他の南の銀河の戦士達の状況を考えれば無理もない

Aリーグのトルビーは真名&悟空との連戦で二連敗し、予選敗退確定

Cリーグのジンキョウは現在アークアにボロクソにやられており（主に水中で）、全敗濃厚でさらに酷い

そしてBリーグのフーログは1勝1敗でまだ分からないが、こちらは予選第6戦のためまだ出番ではない

というわけで、南銀河大本命の彼に期待が寄せられるのは必然であった

「ウガ！ウガ！ウガ！ウガ！ウガアッ！」

「ぐううううっ！」

パポイの攻撃は再開

さらに攻撃力は上がっており、今度は回避行動も取り入れてオリブーはこれを凌ぐ

その拳や蹴りは、オリブーにかわされた際に当たった試合場の床を粉々に砕いた

（これは勝負あったな、これなら孫悟空やパイクーハンにだって……ふふふふ）

そう思い、南の界王の笑みがさらに濃くなったその時

「あああああっ！オリブーが負けておる！」

「すんげえパワーだな……オラが思ってた以上だ」

「お、ようやく来たか」

悟空の試合を見届けた北の界王が、悟空共々南の界王の前に姿を見せる

そして目の前で起こっている『オリブーの劣勢』という事態に驚きの声を上げ、そこへ南の界王がいやらしく笑いながら近づいた

「これがうちのエース、パポイの実力というわけさ。どうだ？驚いたか？こいつにお前のとこの選手で勝てるか？」

「ぐぐぐ……負けるなオリブー！負けるでないぞー！」

前大会で北の界王は西の界王とのいざこざが多かったのだが、今回はガラリと変わって南の界王

新戦力パポイの獲得

そして彼が西銀河ＮＯ．２のマーライコーを一方的に倒したことから、かなり調子づいているのは目に見えて明らかだった

さらには現在、北銀河ＮＯ．２のオリブーまで下そうかという勢い

北の界王に焦りと苛立ちを与えるには、今の南の界王の言動は充分過ぎる威力である

「そんなペーペーの新入りに嘗められてどうするー！一発お主の必殺技でも喰らわせてやらんかーい！」

「……」

しかし、オリブーは動かない

あくまで肉弾戦のみをつらぬく

なんで使わないんだとさらに声を荒げる北の界王をよそに、パポイの攻撃を耐え続けた

「オリブー！何をしてるんじゃー！」

「だあああっ！」

「ウガッ！」

だがこのまま黙っているだけのオリブーではない

大振りのパポイの一撃をスッと避け、そのまま腹部へカウンター

を叩き込んでみせた

そこから追撃、左右合わせて鉄拳三発

最後に回し蹴りでよろめかせ、その隙に距離を離して呼吸を整える

（やはり気功波の類を使わないとなると厳しすぎるな……だがこれで奴の手の内をある程度知ることが出来た、充分な収穫だ）

オリブーはこの試合、『全力をもってパポイを潰す』という考え等持ち合わせていなかった

二人は互いに2勝0敗

どっちが勝ったとしても予選通過には変わりない状況

よってこの試合、いくらオリブーが奮闘し勝利したところでパポイを落とすことは叶わない

そのためオリブーはこの試合を初めから、『見（けん）』と決め込んで臨んでいた

自身の『技』は極力使わず、相手に合わせて戦う消極的な戦い方

これでパポイの手の内を把握し、決勝トーナメントで再び対戦となった場合に備えるという考え

（今回の大会は孫悟空やパイクーハンだけじゃない、こいつもかなりの障害だ……大会優勝にはな）

オリブーは本気で大会優勝を狙い、作戦を決行していた

「ウガーーーーー！」

そんなこととは露知らず、パポイは再びオリブー目掛けて突進

試合場の中心で肉弾戦がまたも展開

マーライコーのような大怪我にだけはならぬよう、充分な注意を払いことは忘れない

オリブーはこの『見（けん）』の戦いを、自身が場外負けする最後の最後まで続けた

「ええっ！？オリブー負けちゃたアルか！？」

「ああ、けどオラには本気で戦ってるようには見えなかった。オラと戦った真名みたいに、まだ奥の手とかを残してるみてえに感じたな」

そして時は少し流れ、予選第６戦直前

オリブー対パポイの結果を聞かされた古は少々驚いた様子だったが、次の悟空の言葉を聞いてやや安堵を示す

「なんだ、そだたアルか……まあなんにせよ、これで悟空とオリブーは予選突破アルね」

「おめえとミゴレンも、この第６試合で勝てば予選突破だ。気合い入れてけ！」

「もちアル！」

オリブーと北の界王はＢリーグ試合場に赴き、ミゴレンの方を応援残る悟空から激励された古は気を引き締め、試合場へ上る

「さあ！行くアルよ！」

『それでは予選Ｃリーグ第６試合！北銀河代表古菲選手と、西銀河代表タピカー選手！』

予選Ｃリーグ、古の最後の対戦相手はタピカー

古より頭一つ以上小さく、ネギやコタローよりも下回るかなり小柄な体躯の持ち主

そして頭には先端にやや丸みのある、ブラックタピオカさながらの黒光りをする角が両端に縦方向へ二本

古が上がる前から既に試合場へ立ち、四肢を伸ばし柔軟する等し

て身体を温めていた

古はアークァに引き分けてジンキョウに勝ち、1勝1分け

タピカーはアークァに負けてジンキョウに勝ち、1勝1敗

勝った方がアークァと並ぶ2勝を得て、予選通過

両者共にこのことはバッチリと把握しており、絶対に負けられぬと気合が入る

古が試合場に上がるとタピカーはより高揚し、うずうずと両脚が今にも駆けださんとばかりに震えた

あとは試合の開始宣言を待つばかりであり

『それでは、始めてください！』

「はあああああっ！」

「おっ！？」

それが耳に入るや否や、タピカーの両脚が待ってましたと高速で動き出す

今はまだその場に留まっているだけだが、この脚の動きには古も両眼を見開いた

残像で脚が何本にも見えたかと思えば、直後にはその残像すら目で捉えられなくなるという超高速

（な、なんて速さアルか……こんなので攻めてこられたらまともに太刀合うのは至難アｒ）

ガッッッ！

「んぎっ！？」

古がどう戦うか頭を悩まし、それから一秒も経たず起こるいきなりの奇襲

突如目の前に黒い何かが接近したかと思えば、直後に鼻っ柱へ強烈な頭突き攻撃を決められた

「……ニッ」

「っ！ハイヤアアアッ！」

してやったりと悪戯な笑みを見せたタピカー、そんな彼の顔面へすかさず古の崩拳が飛ぶ

だが超高速の脚をフル稼働され、掠ることもなく距離を空けられた

「へっへっへ……」

「ぐぬぬぬう……今のは結構痛かたアル」

ボクサーのようなフットワークで軽く左右に跳ぶタピカーを睨みつけながら、古は左手を鼻へ

さっきの攻撃で骨折してないかを、あちこちに指を当てて触診

それは幸い無いようだったが、安堵し離した自身の手を見て『うわ』と両眉を寄せる

ヘモグロビン色素で着色された液体が、指の腹の至る所に斑点を作っていた

慌てて再び鼻の方へ持っていき、親指と人差し指で強く圧迫する

タピカーも、こんな状態の古に攻撃するのは躊躇いがあったのか左右に跳んだまま仕掛けてこず

十秒も経たず古は手を離し、最後に鼻を一啜りしてようやく落ち着きを取り戻した

（いかんいかん、初っ端から何やてるアルか私は……）

自身に渇を飛ばして気合を入れなおし、構えて全身に気を巡らす

（とりあえずはこちらも、スピードを上げて迎え撃つ！まずは二倍！）

（負けるな古！あいつだったらオメエが勝てない相手じゃねえ！）

改めて、予選Ｃリーグ第６戦、開戦

第１２３話　オリブーの思惑　古、突破を賭けた最終戦へ（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「予定より二日早くの投降か、中々調子いいじゃないか」

クウネル
「この調子で続くといいですね」

注・そうですね

エヴァ
「お前が言うな」

クウネル
「さて、今回のゲストはこのお二人」

ベジータ
「ふん、また来てやったぞ感謝しろ」

のどか
「ど、どうもです……」

クウネル
「ベジータさんとのどかさんのお二人です」

エヴァ

「また半年以上前のリクエストを……」

クウネル
「感想ページから昔のを引っ張り出すの大変なんですよ？結構」

エヴァ
「だったら貰い次第何処か別の場所にまとめて書き込んでおくとかだな……」

クウネル
「そういうの嫌いなんです作者」

エヴァ
「だからこの前みたいな無責任超遅延状態が起こったんだろうが！」

のどか
「あ、あの、とりあえず先に進みませんか？」

クウネル
「そうですね、さて今回の話ですが……」

エヴァ
「オリブーの行動が龍宮真名と被ってないか？」

のどか
「確かに、『手の内を見せないため全力を出さず負ける』ってところな同じかもしれませんね」

ベジータ
「ふん、甘いな」

エヴァ
「何？」

ベジータ
「仮にあの時パポイと戦っていたのが、龍宮真名とか言うあの肌黒女だとしよう。あの女はあそこまで、相手の強力な攻撃を何発も受けて場外負けにされる最後まで戦うと思うか？」

エヴァ
「む、確かに龍宮真名なら開始後すぐに実力差を理解し、降参して終わってもおかしくない。孫悟空戦と同じくな」

ベジータ
「あの女が取っている戦略は、『勝てない相手とは無理に戦おうとはせず、他の試合を有利に戦って勝とう』という考え方によるものだ」

クウネル
「対してオリブーさんのは、『再び対戦となった際にも有利に戦えるよう、ある程度のリスクは覚悟した上での見（けん）の戦略』と取れますね」

のどか
「この場合、どっちの作戦の方がいいんでしょうか？」

エヴァ
「どちらとも言えんだろう。ただ二人とも、それぞれ自分の力量を把握して上での作戦ということは確かなようだな」

クウネル
「では続きまして、次回予告です」

のどか
「さ、さて、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「古菲ＶＳタピカー、この試合で一本丸々消費だな」

クウネル
「光速とも言える脚を誇るタピカーさん相手に、古菲さんは負けじと界王拳で応戦」

ベジータ
「パワーはあの小娘の方が上だが、やはりスピードの差は大きいな。当たらなければ無いのと変わらん」

エヴァ
「だが確かタピカーには重大な弱点が……」

クウネル
「その点等々についても、次回にご期待ください」

のどか
「次の投稿予定は木曜日です」

クウネル
「というわけで皆さん、次回のネギドラ！も……」

エヴァ＆ベジータ＆のどか

「お楽しみに！」

エヴァ
「しかしお前、ぼーや達と一緒に大会観に行ったにも関わらず本編で出番無いな」

ベジータ
「ふん、今の現状を見ただけでモノを言うんじゃない。このチャンスをなんとしても生かし、カカロットとは戦って決着を……」

エヴァ
「いやいやいや、だから無理だろ」

ベジータ
「黙れ！俺にはとっておきの作戦があるんだ！」

エヴァ&クウネル&のどか
（作戦？）

ベジータ
「カカロット待っていろ！俺の力をとくと見せてやるからな！」

エヴァ
「……何する気だあいつ？」

クウネル
「さあ」

第１２４話　その速さは界王拳を超える　神速の脚タピカー（前書き）

お待たせしました、第１２４話です。実は最近また山に登ってきました、先週の金土日の三日間、台風吹き荒れるこの時期に。まあ土の時点で中止になったんですけどね、けど金は山の中でテント張って寝ました。……長々と世間話スミマセン。

ではどうぞ！

第１２４話　その速さは界王拳を超える　神速の脚タピカー

（古の奴、いきなり界王拳を……タピカーのあのスピードを見せ付けられたら、まあ仕方ねえか）

悟空は真剣な面持ちで、この古とタピカーの試合に目を向けていた

古の場合、二倍界王拳までならば特有の赤いオーラの放出の制御が可能

だが界王拳を極めた悟空の場合、目に見えずとも古の気の流れだけで『使った』ということは容易に把握出来た

（最初は二倍で様子を見て、そこからどんどん出力を上げていって戦おうって訳だな）

そして、古が今からしようとする行動も即座に推測する

（そうだ、それでいいんだ古）

「アイヤーーーー！」

古は試合場の床を蹴り、タピカーに向かって駆け出した

力いっぱい踏み込まれた床は、古の足の形に合わせたへこみを見せる

拳をギュッと固めた古は、タピカーから一時も目を離すことなく崩拳

だがそれは、どこかボクシングでいうフックに近い打ち方

タピカーが高速で左右のどちらかに避けてもその対応、つまり攻撃の軌道修正が普通の崩拳よりもし易いと考えた上での選択だった

（今度は見失わないアル！さあ！左右どっちでも好きに避けるヨロシ！）

「おっと！」

古の思惑そのままにタピカーは左足を強く踏み込み、古から見て左に跳ぶ

この初動を古は逃さず捉え、彼の動きに対応して拳をその方向に合わせて突き出した

ところが古の拳は手応えを一切感じることなく、肘が伸びきった所で漸く動きを止める

「なっ！？確かに今、あいつが避けた方へ攻撃を……ぶごっ！？」

タピカーが避けた方向、左方向にさらに首を回した刹那に左脇腹へ鈍痛

正体はいうまでも無く、突進してきたタピカーの頭部

古が捉えたあの初動から、拳が自身のいた場所へ届くまでの数瞬

その間だけでタピカーは古から少々離れた左横に位置し、気付かれる前にダッシュ頭突きを炸裂

二倍の出力では到底追いつけていないことを、これ以上なく古に知らしめた瞬間であった

古は痛みに怯みながらも即座に左の肘を落とすが、やはりこれも空を切る

再びタピカーは、古から少し距離を空けた所で左右に跳んでいた

（だったら三……いや、四倍まで一気に！）

「っ！」

ここでようやく、二倍を超えたことで古の身体に赤いオーラが姿を現す

タピカーもこの異変に少なからず危険を感じたか、左右のステップはそのままに警戒を強めた

「行くアルよーー！」

古は床をさらに強く蹴り出し、タピカーのもとに攻撃

先ほどと全く同じ攻撃を仕掛ける

（この攻撃方法が一番分かるアル！二倍から四倍に上げて、どこまであいつと縮まったかが！）

タピカーはこれに対し、前と同じく左に跳んで回避

スピードと威力を増した古の拳は、タピカーの身体を

ブンッ！

「ぐっ！またアルか！」

またも掠らすことさえ出来ず、古の視界から姿を消した

奥歯をギリリと鳴らした古だったが、収穫は０にあらず

「けど、これは喰らわないネ！」

バッ！

ビュンッ！

素早く横に飛び退き、向かって来ていたタピカーの頭突きの回避に成功

「なっ！？」

「やたアル！」

しかも飛んできた方向は、先ほどと同じ左横ではなく左斜め前

タピカーもこの回避行動には驚いたらしく、大きく見開いた眼を

古は一瞬だが横から見ることが出来た

（くっ、相手の動きが前より速かったから真横まで移動出来なかったうえ、俺の攻撃をあそこまで速く視界に捉えてくるとは！）

「（よし！四倍の動きでこれなら、五倍まで上げれば！）はあああっ！」

古はさらに出力を上げ、赤いオーラの放出量が増加

ブレーキをかけるタピカーへ猛然と迫る

「げえっ！？」

この、更なるスピードアップ＆反撃にはタピカーも振り返りざまに面喰らい、思わず硬直

足の高速回転は一瞬の遅れを見せ、距離を離すことなく古の連激の対処を強いられた

「アタタタタタタタタタタタタタタ！」

「うわわわわわっ！」

タピカーがいた場所は試合場の四隅の一辺であり、完全に追い込まれた形

何とか左右から飛んでくる古の両拳をかわし続けているが、それもじきに決壊するのは目に見えている

それほど、界王拳で強化された古の拳は速かった

「いけーーー古！このまま押し切れーーー！」

「せやせやせやせやせやあああああっ！」

「ぐっ……たああっ！」

だがタピカー、ここで奇策

前へ倒れ込むように身を伏せて古の拳をかわすと、そこから両足を使って床へ強力な蹴り

「あっ！しまたアル！」

床と水平に高速でタピカーは飛び出し、小柄である利点を生かして古の股下を潜り抜ける

古が慌てて振り返ると既に、タピカーの姿は反対側の端にまで移動しており

「はあああああああああ……」

再びその場において両足を高速稼働

（え、嘘！？今までのと比べて断然速……仕掛けられる前にこっちから！）

「ほあああああああああっ！」

空気の振動音まで聞こえてくるその速さ

界王拳の出力を五倍まで上げた古でさえも、捉えることに至難を極めるものだった

「うおっ！？」

攻撃しようと走り出した古だったが、中央辺りに来たところでタピカー行動開始

その黄金の足で試合場を駆け始め、古は思わずその場で動きを止める

タピカーはまず今いる所から、一つ左隣の隅へ移動

続いて、もう一つ左隣の隅へ

さらに、もう一つ左隣の隅へ

そしてまた、元の隅へ

これを、延々と繰り返していく

「え！？あれ！？ありゃりゃ！？」

最初の一、二周目まではギリギリ見えていた古も、スピードがさらに乗ってきた三週目以降はもう限界

音を頼りに追っても、それよりも早く動くタピカーに対しては無意味

「落ち着け古！気の動きを追って奴を感じ取れ！」

悟空が叫ぶ言葉に従おうにも、それすらやはり速すぎて追えない始末

「あわ、あわわわわ……」

古は右往左往するだけであり、試合の形勢は再びタピカーに傾き始めた

『龍宮真名選手の勝ち！これでＡリーグは全試合終了です！』

「よくやったな真名」

「さっきと比べればぬる過ぎる相手でしたよ」

一方Ａリーグ、真名は東銀河代表の選手相手に圧勝

息一つ乱さぬまま試合場を降り、パイクーハンが出迎えた

「ところで、古の試合は？」

「まだやっている、状況は見ての通りさ」

見た先にあったのは、高速で試合場内を駆け回るタピカーとそれに困惑する古

一目で古が劣勢だと把握した真名は、ふむと言葉を漏らしながら口元に手を添える

「スピードはトップギア状態……古は全く動きを追えていないようですね」

「だろうさ、タピカーのスピードは重りを付けた状態の俺とほぼ互角。まともに奴の動きを追える者は、あの世では数えるほどしかいやしない」

あの速さをもってすれば前大会でも、トルビーを倒してベスト４に食い込む余地も充分にあったんだからな

そうパイクーハンは続け、思い出したようにそこへ真名が呟いた

「……あの動きに見合うスタミナさえあれば、でしたっけ？」

「そうだ」

前大会でのタピカーの敗因は、スタミナ枯渇

試合開始前にパフォーマンスとして自慢のスピードを披露し、その後試合が始まって一分と起たずすぐに息切れを越してギブアップを宣言

これは恥以外の何物でもなく、大会後タピカーはさらなる特訓を決意する

それから今日までの一年間、ひたすら持久力の向上に努めていた

「俺やマーライコーも度々特訓に付き合っていたが、この一年であいつは確かに変わった。あいつの血の滲むような苦労は、俺や西銀河のみんなが一番よく知っている」

「つまり、古の勝ちは厳しいと？」

「あのトップスピードの維持時間はタピカーの残り体力を考えて残り約十数分、相手が何も解決策を見出せなければ間違いなくタピカーの勝ちだ」

「いやいやいや！ありえないでしょあのスピード！」

「速過ぎて全然見えないですよー！」

そしてこちらは、観客席

タピカーの驚異的なスピードを見せつけられ、まず朝倉とさよが仰天

（すっご、少なくとも私やのどかを追い回した時のベジータさんよか全然速いじゃない……まあ、アレは殆ど本気じゃなかったんだろうけどさ）

（何とかギリギリ見えなくもない、けど僕から攻撃して当てられる自信は……）

（俺なら獣化すれば、ってとこやな……こりゃ菲部長には厳しすぎるで）

ハルナは以前間近で見たベジータの動きと脳内で比べ、ネギとコタローは眉をひそめてタピカーの動きを懸命に追う

「これは予想外です……向こうのスタミナ切れであっさり勝つかと思っていたのですが、ここまで体力をつけていたとは」

夕映は額にいやな汗を浮かばせ、困惑

「古ーー！頑張れーーっ！」

クリリンは焦燥しながらも古を勝利を願い、大声で張り上げ続けた

また、カモは自身の位置を悟飯の肩の上に移す

「まったく凄ぇな、あの世の武道家ってのは……悟飯の旦那だったら、アイツとどう戦うッスか？」

この中で一番の実力者である悟飯に意見を仰ごうということらしい

カモの存在を横目でチラリと見て確認するとすぐ試合に視線を戻し、悟飯は答える

「そうだね……やっぱり相手の動きを見切れないことには厳しいよ。僕は普通に目で追えるから、掴まえて攻撃するのは難しくないけど……」

「菲部長には荷が重いと」

うんと悟飯は頷き、タピカーの動きを注視しながら試合を観続けた

タピカーは『一つ隣の隅へ』のみだった高速移動を、パターン変更

対角線上の隅へも高速移動を行うようになり、直線上に位置する古へ攻撃も仕掛け始める

複雑化したタピカーの動きに古の混乱は加速し、攻撃に対して防御もまともに出来ずダメージは蓄積

両の足で立ち続けることもかなわず、片膝を床についた

「おいおい！菲部長このままじゃ負けちまうッスよ！」

「古老師！」

「古！」

「古ちゃん！」

「くーふぇ！」

一同へ走る更なる動揺

だがその中で一人

（確かにタピカーさんは速い、あの動きは凄く速いんだけど……何か僕が思ってるのと違う気がするんだ）

悟飯は眉間にしわを寄せ、自身の中で起こった疑念の整理に努めていた

第１２４話　その速さは界王拳を超える　神速の脚タピカー（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「遅い、早いの次はまた『遅い』か」

クウネル
「前のよりはマシですけどね」

エヴァ
「あれがあまりにも酷過ぎるだけだろうが」

注・どうも執筆のペースが掴めず……すみません

エヴァ
「……で、今回は誰を呼んだんだ？」

クウネル
「はい、今回のゲストは……」

ポヨ
「やあ読者の皆様、お初にお目にかかるポヨ」

ザジ
「……私はかなり久々」

クウネル

「いいかげん出そうと作者がようやく決心した、ザジ&ポヨさんのレイニーディ姉妹。そして……」

ガッちゃん
「ペピポ！」

クウネル
「他作品からですがガッちゃん、以上の三名です」

エヴァ
「……最古のリクだな」

クウネル
「最古です、もうかれこれ一年以上経ってしまいました」

注・遅くなって本当にすみませんでした、水竜さん

ザジ
「……本人すら忘れてたりして」

クウネル
「完全に否定出来ないのが恐ろしいです……なんせ一年ですから」

エヴァ
「確かコイツの設定がリク貰った時点で把握し切れてなくて、後々変にならないよう先送りにしたんだったか？」

ポヨ
「そうポヨ、まあなんにせよ登場出来たので良しとするポヨが」

ガッちゃん
「ピペパ！」

エヴァ
「……ところでそっちのチビの言語が意味不明なんだが」

クウネル
「『ガッちゃん語』というらしいです」

ザジ
「……一応調べたものの、作者も書いてて意味不明らしい」

ガッちゃん
「ペピポ！」

クウネル
「ではコーナーの進行を、今回の話ですが……」

エヴァ
「結局終わらなかったな」

クウネル
「終わりまで書こうとしたら更に遅れてましたよ？」

エヴァ
「まあそれはそうなんだが……」

ポヨ
「しかし成程、弱点を補うべくスタミナを付けていたとは驚きだったポヨ」

ザジ
「あとは……龍宮さんが戦った東銀河の戦士って？」

クウネル
「名前も決まってないモブです」

エヴァ
「おまっ、モブって……」

クウネル
「いや、ホントに枠が埋まらなかったらしいんですよ。なので『まあ東はどうせ弱いんだし、名前無しのモブでも出して全敗させるか』という結論に至ったらしく……」

エヴァ
「……あ、もしかしてオリブーのいるDリーグもか？」

クウネル
「はい、つまり東代表で名前と試合場面があったのはアークアさんとチャプチャイさんだけなわけです」

エヴァ
「しかもチャプチャイもモブと同じく全敗か」

ポヨ
「東銀河からは噛ませ犬臭がプンプンするポヨ」

ザジ
「噛ませにすらなっていない気も……」

クウネル
「では続きまして、次回予告です」

ガッちゃん
「ピパ！ピポパッペポポポピペパ！」

エヴァ
「何でお前！？というかせめてアイウエオの段くらい合わせろ！」

クウネル
「そうしたら意味不明な言語じゃなくなるじゃないですか」

エヴァ
「ああもう、こういう奴と一緒だとホント調子狂うな……次回はタピカー戦決着、あと加えてもう一試合をやる予定らしい」

ポヨ
「……他に誰の試合が残ってたポヨ？」

ザジ
「あとはＢリーグとＤリーグ……ミゴレンＶＳフーログと、東のモブＶＳマーライコー」

エヴァ
「後者は成立自体無理だろ、マーライコー負傷退場だし」

クウネル
「いやいや、もしかしたら怪我を押してまで試合に……」

エヴァ
「予選敗退確定なんだから出る意味無いだろ、ということはBリーグの方か」

ポヨ
「まあどうにせよ、長かった大会予選リーグもあと一、二話で終了……ホントに長かったポヨね」

エヴァ
「作者の更新速度のせいもあるがな、天下一大武道会の時は一カ月も掛からんかったぞ」

ガッちゃん
「ピパポポペパピペパポピペパパ！」

エヴァ
「……？」

クウネル
「あ、どうやら次回の投稿予定を言ったらしいですね」

エヴァ
「だからなんで大事なトコばっかりこのガキに喋らせるんだ！」

ポヨ
「ではでは、次回のネギドラ！も……」

クウネル&ザジ
「お楽しみに！」

ガッちゃん
「ピペパ！」

エヴァ
「ちょっと待て！だから次の投稿はいつなんだ！？」

クウネル
「あ、それとサブ連載の方が今月中にはまた出来上がるみたいですよ」

エヴァ
「その時間をこっちに割かんか！」

第１２５話　高速タピカーに死角あり！？　速いが速くないとは何だ！（前書き

また遅くなってしまってすみません。定期試験は終了しましたので、今度こそペースを元に戻して書けるよう頑張ります！……なんか毎回似たようなこと書いてますね、ホントすいません。

ではどうぞ！

第１２５話　高速タピカーに死角あり！？　速いが速くないとは何だ！

「……どうしたですか？悟飯さん」

「あ、夕映さん」

何か違和感を感じた

古相手に驚異的速さで圧倒するタピカー

その速さは思わず悟飯も感心してしまうものなのだが、やはりどこか心の奥底で引っ掛かるものがあった

その沸き起こった疑念を払拭すべく、観戦をしながらも思考を巡らせる

そんな悟飯に、話し掛けてきた一人の少女

綾瀬夕映

他の皆の『古がこのままでは負けてしまう』という意の悩ましい表情とは、今の悟飯の表情は違う

それに勘付き、ススと身を彼の近くに寄せて話し掛けてきた

「いえ、ちょっと考え事を」

「それは見ていれば分かります、私が訊きたいのは『何を考えてい

たか』です」

そのまま夕映は、言葉を続ける

「悟飯さんがネギ先生のように聡明な御方だということは私も知っています、ましてや今は古菲さんの予選突破が懸かった重要な試合中、無関係なことをこんな時に考えているとは到底思えません。少なくとも古菲さんか対戦相手のタピカーさん、そのどちらかに関係することを考えていたのではないですか？」

能弁にスラスラと話す夕映、見事的中であった

「はい、まあ……何か、その、みんなタピカーさんのことを速い速いって言ってるじゃないですか」

「……それは、こうして試合を観た誰もが抱く率直な感想では？」

「そうだとは思うんですけど……どこか、違う気がするんです」

「どこか、とは？」

「それがちょっと、まだ良く分からなくて……」

「ふむ……」

夕映は悟飯の言葉を受け、やや顔を伏せ気味にして自身の頭を稼働させていく

（これは予想だにしない内容でしたね……まさか、目の前で起こっている事実を完全否定するようなことを考えていらっしゃったとは

……いや、これは否定ではないです、あくまでも悟飯さんは、『タピカーさんが速い』ことについてある程度認めてはいる……）

悟飯から出た言葉だけでは解決は難しいと判断した夕映は

（つまり悟飯さんが言いたいのは、『タピカーさんは速いが、速くない』……いやいや、これは完璧に矛盾しているです……ですが、数多くの戦いをくぐり抜いてきた悟飯さんが完全に的外れな指摘をされるとも思えない……別の視点で考えるです、私！）

自身の中にある情報も可能なだけ引き出しにかかる

（先ほど悟飯さんは、『どこか違う』と仰いました……つまり以前悟飯さんは『速い』敵と戦ったもしくはその敵の戦いを見た……そして、それと比較した際に違和感を感じた？）

悟飯が今まで戦ってきた敵

それは正にアックマンから得た知識そのものであり、ならばとその記憶の引き出しを片っぱしから開けにいく

（悟飯さんの初陣は、悟空さんのお兄様との戦いを除くとすればベジータさん達との戦い……栽培マン、ナッパ、ベジータさん……どれも違います、栽培マンは論外として他の二人も『速さ』ではなく純粋な『力』で悟飯さん達を圧倒していた……となれば次は……）

～地獄～

「おいおい、あの嬢ちゃん負けてるじゃねえかよ」

地獄のとある場所にセットされたテレビ

仕組みは悟空が天下一大武道会を観ていたそれと大差は無いが、強いて言えば映している世界が違う

映しているのはここと同じくあの世で、あの世一武道会の生放送の最中

諸々の事情で行けないアックマンは、近くの岩に腰掛けながら観戦をしていた

「折角こっちで武者修行させてやったってのに……こりゃ逆転は厳しいか？」

生でなくテレビを介しての観戦でも、古の劣勢は明らか

これまでに数度対面して古と面識のあるアックマンは、古の勝利を少なからず願いながらも半ば『無理か』と諦めている様子

そんな彼のもとへ突如

「おっ！面白そうなのやってるじゃなーい！」

「そういえば、今日開催だとかどうとか鬼共が言ってたな」

「おーいバータ！お前もこっち来てみろよー！」

やって来てテレビに興味を示す者が、数名

「何だお前らか……どこから嗅ぎ付けてきたんだ？」

「いやいや、偶然だって偶然！」

左からリクーム

「第一、知ってたんならフリーザ様も連れてくるに決まってるぜ」

グルド

「ほらほら！武道大会だってよ！お前みたいな奴が今戦ってるぜ！」

ジース

「あん？どれどれ……」

少し遅れてバータ

ギニュー特戦隊隊員四人、全員揃い踏みである

「まあ別に、騒いだりして観戦の邪魔しないんだったら文句は言わねえけどよ……今日は俺も非番だし」

「おおっ！流石太っ腹ー！」

アックマンは別段、彼らと一緒にいることに嫌悪感を感じたりはしない

十数年以上地獄でしてきた修行において、何気に一番世話になっていたのは彼ら四人だからだ

地獄に来た悪人はこれまでに多数、しかしアックマンの修行にわざわざ自分から付き合う奴は決して多くはなかった

アックマン自身それはまあ当然だろうと思っていた節があり、基本的には彼の方から喧嘩を売るような形で勝負に持ち込む方式

当初は彼ら四人に対しても同様であったのだが、少し前まで相手にしていたナッパ辺りとは比べ物にならない強さ

結果は当然ボロ負け

そこから何度も挑戦を重ねていったわけなのだが、三回目辺りからアックマンは彼らの態度が他の者達とは全く違うことに気が付いた

今までの例を挙げると

・ピッコロ大魔王

『ええいっ、しつこいな貴様も！消し炭にされたくないのなら帰れ帰れ！』

・ラディッツ

『またか……ちっ、何度も何度もやられにくるとはご苦労なもんだ

な』

という感じで、決してアックマンの再挑戦には良い印象を持っていない

だが彼ら四人はどうか

『おっ！まーたまた来たねぃ！』

『グヘヘヘ、もう一回俺様が遊んでやるぜ』

『おい待てよグルド、次は順番的に俺だぜ』

『順番なんていつも適当じゃねえか、ジャンケンで決めようぜ』

このように、アックマンが挑戦してくることに抵抗は一切無し

まあ当初彼らとしては『つまらないと思っていた地獄において、面白い遊び相手が出来た』というくらいにしか思っていなかったのだろう、毎回ボコボコにしては逃がすの繰り返し

だが幾度となく相手をしてくれた彼らによって、アックマンの実力は格段に上昇

一、二年も経った頃には、彼ら四人を完全に超えていた

そしてそれに感化されたか特戦隊の四人の実力も上がっていき、クウラ機甲戦隊に追いつかんばかりに成長

そうすると今度は機甲戦隊の三人までやって来る始末で、アック

マンは修行相手に困ることはなくなった

古の地獄武者修行で彼ら七人が相手をしてくれたのも、この長年の付き合いがかなり大きかったりする

閑話休題

四人はアックマンの後ろでしゃがみ込み、観戦に入る

リクーム、ジース、グルドは、展開される高レベルな戦いに興奮だが一方でバータだけはどこか納得のいかないような表情で、黙ってテレビ画面に視線を向けていた

「おい、どうしたバータ？浮かない顔して」

「いや、俺達が前に相手をしたガキと戦ってる奴なんだがよ……」

「グヘヘ、自分より速いからって嫉妬してんのか？」

対象はどうやらタピカー

ジースとグルドに応対しながらもやはり眉はひそめたままであり、言葉を続ける

「いや、違うんだ……ちょっとあいつの戦い方が変だと思ってよ」

「変たぁどういうことだ？」

リクームの問いに、バータはすぐ返答した

「ガキが上に逃げないのはまあ仕方ないとして……だとしてもなんであいつ地上ばっかで、上からも攻めていかねえんだ?俺だったら絶対そうするぜ」

(そうか!そういうことだったですか!)

「どうしたんですか?夕映さん」

これと時をほぼ同じくし、夕映の中でも疑問は氷解

悟飯が過去に戦ってきた敵、それらを記憶から順番に辿ってようやく答えを見つけ出すことに成功した

「分かったです!悟飯さんの言っていたことの意味がようやく!」

「え!?ホントですか!?」

「しかしもう時間が無いです、急がないと……」

夕映は席を立ち、移動

クリリンの席まで向かうと、グイと彼の袖を引っ張って自身の方に注意を向けさせる

「クリリンさん、古菲さんを勝たせるためにご協力願うです」

「え？俺？」

夕映はクリリンの耳元に顔を近づけ、ボソボソとその内容を伝達

聞き終えたあと、クリリンは信じられないと言わんばかりの顔を夕映に向けて反論

「ば、馬鹿っ！そんなことしたら向こうの思う壺じゃ……」

「そうじゃないです！とにかく今は詳しく説明している暇は無いのです！早く！」

「わ、分かったよ……スゥーー」

だが真剣に訴える夕映の気迫に押し切られ、クリリンは決行

大きく息を吸って、直後

「古ううぅぅぅーーー！！飛んで上へ逃げろおおおおおおおおっ！！」

古へ届かせるべく、近くにいた観客が思わず耳をふさぐほどの大声を響かせた

（クリリンの声！？というか上へってどゆことアル！？）

そしてその声は、周囲３６０。から轟く歓声の中から見事突破し、古の耳へ

『飛んで上へ逃げろ』というクリリンからの指示が、彼女には鮮明に聞こえた

（だってそんなの自殺行為に決まってるアルのに……けど、あれは確かにクリリンが言てたアル）

古やクリリン、さらには他の武道家達も今の状況からは間違いなくやらないだろう

スピードでは決して敵わないタピカー相手に、空中戦へ持ち込むという行動は

だが、現在古の頭の中に打開策は一切無し

ダメージも募りに募っており、じきに負けてしまうのは目に見えている

（だたらもう……やけくそアル！）

次の瞬間、古は五倍界王拳で一気に上空へ退避していた

（っ！）

そしてすぐさま、自分へ襲いかかってくるであろうタピカーの攻撃に対し身構える

（……）

身構える

（……）

身構えている

（……ありゃ？）

が、まったく攻撃が来ない

界王拳発動状態で防御力を上げたまま、下を見るとそこには

「……」

（え？）

悩ましい表情で、地上から動くことなく古を見上げているタピカーの姿があった

～観客席～

「ああっ！あいつ、全然古に攻撃してこねえぞっ！」

「やはりでしたか……まあ私の中でも、充分に確信はあったわけなのですが」

「どういうことだよ！？」

クリリンは未だ状況が掴めず、身体ごと横に向けて夕映へ詰め寄る

つまり、クリリンの予想はこうだった

スピードに優れるタピカーは、高速移動を繰り返すことで古を撹乱

その隙を突いてあらゆる方向から攻撃し、反撃させることなくダメージを与えていく作戦をとっている

それに対してもしも、古が空中へ逃げたとしたらどうなるか

下からもタピカーの攻撃が飛んでくるようになるため、単純に考えて攻撃方向は地上にいる時の倍

すると今以上に抵抗するのは難しく、さらに敗色が濃厚となってしまう

そう考えていたのだが、見事目の前で全く逆の現象が発生

理由を知る夕映へ、訊かざるを得なかった

「単純な話です、皆さんはタピカーさんを『速い』と称していました……ですが、あれは真の『速い』とは到底呼べぬ代物なのですよ」

「だから何でそうなるんだよ！」

「では訊きますがクリリンさん、先程までタピカーさんが見せていた高速移動……それを可能にしていたのは、一体彼の何によるものだったと思いますか？」

「そりゃあ、あの素早い脚の動きだろ？あれで試合場内を走り回れば、目で追うのは決して容易じゃねえ」

「そう、ではもう一つ訊きます……足の速い人というのは、正比例して舞空術のスピードも同様に速いのだと確実に言い切れますか？」

「え？」

「もっと分かりやすく言いましょう、『タピカーさんが『走行』ではなく『舞空術』という移動手段を用いた場合、地上時と同様の速

度を空中で出すことは可能だと思いますか？』」

「……あああああああっ！」

この時、クリリンの中で疑問は一気に氷解

何故今まで気付けなかったんだと心底驚き、再び試合場のタピカーを見やる

「ギニュー特戦隊のバータさん……彼は『速さ』を武器とした戦い方、空中戦が大の得意だったと聞きます」

「……」

「さっきも悟飯さんが仰ってました、タピカーさんはどこか違う気がすると……おそらくバータさんの戦い方と対比させて違和感を感じたのでしょう、攻撃の仕方が平面、つまりは二次元的な攻めであると」

「そうか……そうだったのか！だから奴は、空中にいる古に手が出せない！」

（もっとも、楓さんや刹那さんが使う『虚空瞬動』に類する技を隠し玉として残している可能性も一応ながらあったわけですが……その線も消えたですね、この状況ですぐ使わない手はないですし）

「勝てる！この勝負勝てるぞ古！」

空中では、タピカーお得意の高速攻撃も通用しない

それが分かるやクリリンからは焦りが消え、表情を緩ませて満面の笑みを見せる

まずは空中で体力の回復を待ち、そのあとで幾らでも策を練ればいいのだ

しかし、直後に夕映の発した言葉は、またもクリリンの考えを否定した

「……そして、勝負はあと一撃で決するです」

「え？」

「確かにタピカーさんは、容易に空中戦を仕掛けられません……ですが一回だけなら、地上同様のスピードで空中にいる相手へ攻撃が可能です」

「っ！そうか！」

「そうです、自慢の脚を使って思い切り『地面を蹴って飛び上がる』。古菲さんもかなり疲弊していますし、命中すれば向こうの勝ちでしょう」

「そしてかわせば古の勝……いや、おそらく古はもう避ける力も残ってない！」

「はい、飛んでくる方向が分かるとはいえそれは至難の業……となれば対抗策は一つ」

「……自分からも最大の攻撃をぶつけて、迎え撃つ」

（おそらく五倍じゃ押し切られる……もっと出力を上げなきゃとても無理アル！）

古は全身から気を滾らせ、それらを自身の右拳一点に集束させていく

全身、とりわけ右拳は炎に包まれたかのように紅く、紅蓮に燃えている

一方で地上のタピカーも、古同様に全身から気を練りだして一カ所に

言うまでもなくその箇所は、自身の黄金の両脚

（今までの特訓だと六倍ちょっとが限度……だたら、それに少し上乗せした七倍！）

使うのは、一発勝負その時のみ

ならば多少の無理も効くだろうと自身の中で勝手に結論付け、出

力を限界以上まで引き上げにかかる

「でやあああああああああああああっ！」

そして、タピカーがついに来た

フルパワーで床を蹴り、その身をミサイルさながらに真っすぐ伸ばして古に向かい飛んでいく

試合の序盤と同じく頭突き、しかもスピードは比べるまでもなくこちらが上

古も、『自分の方へ攻撃にきた』ということだけは目視で確認

「アイヤアアアアアアアアアッ！」

その確認と同時に迷うことなく、反射的に右拳をタピカーの方へ突き出した

この古の崩拳は、これ以上にないタイミングで見事

ゴガッッッッ！

「ぐうううううううっ！」

「うおおおおおおおおっ！」

タピカーのロケット頭突きに正面からぶつけ、純粋な力と力のぶつかり合いへ持ち込ませる

（もっと、もっと力を！フルパワーアル！）

（負けて、たまるかあああああっ！）

ここで退けば、もう後はない

二人はただガムシャラに、己が力の全てをこの一撃に注いだ

「「だあああああああああああああっ！」」

勝者と敗者、雌雄が決するその時まで

第１２５話　高速タピカーに死角あり！？　速いが速くないとは何だ！（後書き

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「投稿日を曖昧にしたら、随分とまた間が空いてしまったな」

クウネル
「ですね、まあ定期試験やらで忙しかったのは事実ですしやむを得ないでしょう。一応サブ連載の方を投稿して間はもたせましたし」

エヴァ
「で、今回のゲストは？」

クウネル
「はい、今回はこのお三方」

悟空
「オッス！おら悟空！」

チチ
「チチだ」

のどか
「み、宮崎のどかです」

エヴァ
「まあ前回のに比べれば大分新しい方か」

クウネル
「はい、というわけでコーナーの進行を。今回の話ですが……」

エヴァ
「次回予告ガン無視だったな」

クウネル
「尺的に限界でしたからね、すみませんが次回に持ち越させていただきます」

エヴァ
「地獄のアイツの描写が明らかに長すぎただろ……」

悟空
「？アイツって誰のことだ？」

クウネル
「あ、別に気にしなくて結構です。こっちの話ですから」

悟空
「ふーん」

エヴァ
「それと……あの時綾瀬夕映がわざわざクリリンに叫ばせたのは何でだ？」

クウネル
「『自分の声だと小さくて恐らく届かない』、『クリリンの声なら耳に入れる確率が高く、なおかつ指示に従う公算大』という二つの

理由によるものです」

エヴァ
「好きな男の声は聞き逃さないだろう、ということか……クックッ、よくもまあ咄嗟にそんな判断が出せたものだな、なあ？」

のどか
「な、何で私に話を振るんですか！？」

エヴァ
「第３２話」

のどか
「ふえええっ！？」

クウネル
「随分とまあ昔の話を……」

チチ
「クウネルさんクウネルさん、そろそろ次に進むんでねえだか？」

クウネル
「あ、そうですね、では続きまして次回予告です」

のどか
「さ、さて、じ、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「いい加減落ちつけよ……次回はついに大会予選終了」

クウネル
「古菲さんの試合の決着と、ミゴレンさんＶＳフーログさんの戦いをお送りします」

悟空
「へへっ、どっちもオラ楽しみでしょうがねえぞ！」

チチ
「次回の投稿は、金曜日を予定してるだ」

のどか
「皆さんからのご感想、お待ちしています」

クウネル
「あとはゲストのリクエストも募集中です、ストックが現在殆ど無くなってます」

エヴァ
「だからＤＶＤ借りてアンニンを補完して出せと何度も……」

注・お待ちしています！

チチ
「それじゃあ、次回のネギドラ！も……」

エヴァ＆クウネル＆のどか
「お楽しみに！」

悟空
「ぜってえ見てくれよな！」

～今日の○○～

木々が多く生い茂る、とある山の中

そこで激しく拳を交わし合う、高速で動き回る三つの影

一人は全身緑色の肌で頭から触覚を生やし

一人は背から純白の翼を目いっぱい広げ

一人は……たった今五人になって影が合計七つになった

「二人ともー、頑張ってやー」

そして、少々距離を離したところから三人の戦いを見守る黒髪の少女

どうやら翼を持つ少女と、五人になった少女を応援しているらしい

加えて、彼女の手には赤と青の飴玉が入った瓶が

「『二人が勝ったらもう一回年齢詐称薬飲んでもらう』って約束なんやさかい、絶対勝ってなー。ウチ、もう一回見たいねん」

「了解ですお嬢様！お嬢様のためならば、たとえ刺し違えてでも！」

「あいあい、このように具体的な目標があるとよりやる気が出るでござるな」

「負けてたまるかあああああああああっ！」

第１２６話　予選終了！　決意新たに全員集合（前書き）

今回で古菲ＶＳタピカー決着です。本当は前回で収めきる筈だったんですが、前にも触れました通り尺的な関係でこの話まで引っ張ることとなりました。

後半は所謂『繋ぎ』な内容です、あしからず。

ではどうぞ！

第１２６話　予選終了！　決意新たに全員集合

「「うわあああああっ！」」

古とタピカーの、力と力による正面からのぶつかり合い

試合の勝敗を賭け、互いに繰り出した最強の一撃同士

火花が飛び散らんばかりに激突したそれぞれの攻撃は、全くの互角

最終的にはその勢いに耐えられず、両者共に『吹っ飛んだ』

古は上空に、タピカーはさっきまでいた地上に向かって

「気を付けろ古！上にある天井にぶつかったら場外にされんぞ！」

（なっ！？）

そんな中、古は下から叫ぶ悟空の言葉を耳にする

前大会の決勝戦、悟空はパイクーハンと共に天井へ接触

このためその試合は引き分けとされ、前大会では『優勝者無し』

という異例の結果となったのだ

この試合場及び周りにある宇宙のような空間はすべて、大界王が

術を使って屋内に創ったもの

なので『天井』というものが、必然的に存在することとなる（中自体は随分と広くなったが）

（……え？天井何処ネ！？）

しかしこの空間は上にいけばいくほど光源が少なくなり、目視で天井の存在を確認しようとした古だったがそれは出来ず

（け、けどとにかくブレーキを……ううっ、動かんアル！）

続いて『とりあえず飛行中の我が身を止めれば大丈夫』という結論に至って実行しようとするが、ダメージが募ったその身体ではロクに静止行動もとれず

ドガンッッッッ！

「ぐあああああっ！」

数秒後、結局為す術なく衝突

背中から強い衝撃を受け、古はそのことを悟った

（ち、力及ばずアル…か……）

パラパラと下へ落ちていく天井の小片

それに続いて古も、半ばめり込んでいた天井から剥がれて真下へ落下を始める

すっかり力は抜け、身体を大の字にしたままグングンと

あともう少しすれば、このまま地上に激突

まあ自分は既に死人だし、死ぬことはないだろうと思いながら落ちる古

（……ふえ？）

しかしそんな彼女の落下は突如中断、空中で動きが止まる

気が付けば、古は二本の腕に抱えられていた

最初は悟空かと思ったが、否

彼よりも幾らか小さな腕、しかしながら彼女にとってはかけがえのない者のそれ

「……クリリン」

そこにいたのは、客席を飛び出したクリリン

間近から彼の顔を見て古の表情は緩み、ハハと笑う

「よくやったな古！大丈夫か！？」

「いやいや済まないアル、せっかく来てくれたのにこんな負け方を……」

「は？何言ってんだよ！違うって！」

「？」

そこから二、三言葉を交わすが、両者の間に存在する認識の違いを確認

あれを見ろよとクリリンが目線で指示し、古は首を回して下を見る

試合場の真ん中には、吹っ飛んできたタピカーが作ったクレーターが一つ

そしてその横には、仰向けにバタンと倒れて気を失っているタピカー本人

「……ありゃ？」

「古が天井にぶつかるより先に、あいつが下にぶつかってそのまますぐ気絶しちまったんだよ。審判の声、聞こえてなかったのか？」

「えっと、つまり……」

古は目をパチクリさせ、タピカーとクリリンを交互に見やる

さっきまで負けを確信していただけに、それはなおさら

「古の場外負けは無し……勝ったんだよ、お前が」

「勝った…私が……ふみゅう」

「お、おい！古！？」

喜びを胸の中で噛み締めると共に、緊張の糸がプツリ
さっきまでの疲れが一気に古を襲った
全身から脱力し、その身を完全にクリリンへと預ける
クリリンは慌てて、古を下へと運んで行くのであった

それから、十数分後

「……はい、まあだいたいこんなとこでしょう」

「ニャハハ、何だかこのところこういうのに頼りっぱなしアルなー」

大会予選は全カードを行い、無事に終了

決勝トーナメント開始まで数十分ほど休憩となり、古や悟空はネギ達と再び合流

代表選手のため各銀河ごとに割り当てられた控え室に入り、先ほどまでのダメージを夕映の治癒魔法によって時間をかけながら回復

させていた

ちなみに現在、控え室の中には大量の食べ物と皿が散乱

ここに入って時計を見た際『そういえばもう昼だな』と悟空が思い出し、係員に頼んでここまで食事を運搬、『ここで飯にしようぜ』と提案

古の治療の終了を待ちながらも、一同は昼食を開始した

明らかに量が多すぎな気もしたが、そこは大食民族（笑）サイヤ人の孫悟空

同様に息子の悟飯

さらには飯の匂いを嗅ぎつけたか、いきなり部屋の中に入り込んで皆と合流と相成ったベジータ

積まれた空皿の九割以上が、彼ら三人によるものだとここに明記しておく

まあ普段から彼らの大食ぶりを見ていたネギ、コタロー、カモ、ハルナ、クリリン、占いババに、知識として頭の中に入っていた夕映は別段驚くことはなく

さよは『よくそんなにお腹に入りますねー』と感心し、朝倉は『うっわ』と半ば引き気味に言葉を漏らした

治療を終えた古は『ようやく昼ご飯アル！』と悟空達の隣に並んで食べ物にがっつき、夕映も『お腹は別段空いてませんがとりあえ

ず』と手元にあったサンドイッチを一つ掴んで口に入れる

「アグアグアグ……それにしてもすっげえなオメエ、デンデみたいなこと出来んだな」

「私の腕では骨折のような大怪我になると無理ですけどね、傷の殆どが打撲や擦り傷の類でしたのでなんとかなりました」

骨付き肉にかぶりつきつつ悟空は夕映の魔法に感心した様子を見せるが、夕映の方はというと謙遜

木乃香にはまだまだ及ばぬことは自覚しており、まだまだ修行が足りないですと心の中で呟く

「それにしても古老師、さっきの試合本当に凄かったです！僕感激しました！」

「アグアグアグアグ……いやいや、今の私じゃまだまだアル。ネギ坊主やコタロにも勝てぬネ」

ネギと会話しながらも、悟空達に負けず劣らずの勢いで食べ進める古

「けどまあ、あの時の大会よりはうんと差を縮めた自身は有るアルがね……生き返った後にでも手合わせ願うアルか」

「はい、僕でよければ喜んで！」

ガチャリ

「その分だと、決勝トーナメントも大丈夫そうだな」

「やっほー」

「お？」

そんな時、ドアを開けて顔をのぞかせる二人の来訪者

いや、来訪者、というよりは帰還者というべきか

ネギ達と違い、初めからこの部屋に入ることが許されている二人

「よおオリブー！それにミゴレン！」

オリブーとミゴレン、北銀河代表の四人がこの一部屋に集結した

悟空は彼ら二人を笑顔で出迎え、二人もそれを受けて入る

「おお、君が孫悟空の息子の……」

「はい、孫悟飯です。始めましてオリブーさん」

オリブーは悟飯と

「あれ？もしかして君も僕と同じで、獣人系の星出身？」

「うんや、地球生まれの地球育ちやで？けど獣人は当たり、普通の人間とのハーフやねん俺。種族的には人狼（ウェアウルフ）な」

ミゴレンはコタローと、会うや否や会話を交わし始める

オリブーは悟空と何処となく似た悟飯の容姿に

ミゴレンはコタローの耳と尻尾に気付き、気になったか入ってすぐ話し始めた

「君の事は孫悟空から何度も聞いている。その若さで一年前、さらにはこの間だって地球の危機を救ったというじゃないか」

「そんな……あれはお父さん、それに他のみんなのお陰あってのことですから……」

「へー、やっぱり僕みたいに獣化出来るんだ」

「まあな、そっちみたいな完全獣化はまだ無理やけど」

そんな彼らを見ながら、古はあることを思い出す

（ありゃ？そういえばミゴレンの試合ってどうなたアル？）

自身のと同時進行していたあの試合

決着を見届けることなくクリリンに運ばれたため、古はこのことをまったく知らず

「あーミゴレン、ちょといいアルか？」

本人から訊こうと思い立ち、二人の会話に割って入る

「ん？どうしたn……あ！そうだそうだ、すっかり言うのを忘れて

たよ、予選突破おめでとう」

するとミゴレンも、本来ここへ来た理由を思い出したようでアハハと笑いながら右手を古に差し出す

応じない選択肢は無く、古も右手を伸ばして『う、うむ、ありがとアル』と返した

「けど今回は予選から幸先が良いねー、なんせ僕達の銀河から三人も決勝トーナメント進出だもん。あの西銀河だって二人だし」

「おおっ、するとやはり真名も無事突破アルか……って、三人？」

自身が第６試合に臨む以前の段階で、悟空とオリブーは勝ち抜けが確定済み

そして自分も勝ち抜け、２＋１は３

北銀河代表は四人、４－３は１

その残る１というのは言うまでもなく

「ミゴレン……負けちゃたアルか？」

「粘ってはみたんだけど、結局ね。まあ僕的にはベストを尽くせたし、悔いは無いかな」

古の試合の決着と前後し、ミゴレンＶＳフーログの試合も決着

フーログはミゴレンの攻撃を全て避け、隙を見計らっては強力な一撃を幾度となく成功

そこで追い込まれたミゴレンは最終手段として、自身の技『獣化』を全身に及ばせた

身体の大きさは倍以上にまでなり、床に四つ足をつけて完全に『人型』から『獣型』へ

短時間しかもたず、戻った後の反動も大きいためパイクーハン戦でも使用を見送っていたこの技だったが、完全に後が無いミゴレンに躊躇いは皆無

数倍にまで跳ね上がったパワー&スピードでフーログに襲いかかったが、それでも向こうの方が一枚上手

パワーを如何なく発揮すべく接近戦、そこへ持ち込むためのスピードで高速接近

そのどちらも封殺するため、弾幕を張るように両手から気弾を無数にミゴレンへ叩きつけた

気弾は一発一発どれもが、ダメージを募らせていたミゴレンにとっては速すぎ、重すぎる代物

近付けもせず、耐えられもせず

最後には場外に押しやられ、獣化が解けた状態でミゴレンは自身の場外負けを認識したのだった

「けど僕は次の大会があるし、全然気にしてないからさ。僕の分まで頑張ってよ」

しかしミゴレンに、その敗北を引きずっている様子は見られない

むしろケロッとした表情で、次の戦いへ進む古に激励

「当然アル！やるからには相手が誰だろうと、全身全霊をもって戦うのみ！」

「ははっ、その意気だぞ古！もしオラと当たったら、そん時はよろしくな」

「俺も同じくだ、ここから先は同じ銀河同士の戦いもありうる……俺も遠慮は一切しないし、お前もそんな必要はないぞ」

「もちアル！」

古は高揚し、悟空とオリブーの言葉も受けさらに戦意を高ぶらせる

そして、それに合わせたかのように

『えー、御会場の皆様にお知らせいたします。決勝トーナメント開始まで、残り十五分となりました。それに伴いまして只今より、開会式を行った本会場に場所を移し、第一試合の組み合わせ抽選を行います』

「む？今から抽選アルか？」

「よし！良いぐれえに腹も膨れたし、行ってみっか！」

控え室のスピーカーから流された、キノコ男による放送

これは一同を部屋の外、抽選の行われる試合会場の方へと駆り立てたのだった

第１２６話　予選終了！　決意新たに全員集合（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「結局遅れてしまったな……まあ今までに比べれば二日遅れはまだマシか」

クウネル
「というわけで早速ゲストのご紹介、本日はこの方」

ヤム飯
「よお」

エヴァ
「……宮崎県知事？」

ヤム飯
「違う！それにあの人はもう知事じゃない！」

クウネル
「ヤムチャさんと天津飯さんがフュージョンした、ヤム飯さんです。というか貴方がボケるなんて珍しいですね」

エヴァ
「何でこんな不人気キャラを……」

ヤム飯

「ちょっと待て！不人気とは何だ不人気とは！」

エヴァ
「だって例の『Ｚ２』以降、出演回数０だろ？あのゴタンすらカードダスで出てるぞ」

ヤム飯
「うっ……い、今はまだ充電期間中なんだ！また機会が来れば、ゲームだろうとカードだろうと漫画だろうと、颯爽と登場して大活躍を見せてやる！」

エヴァ
「それじゃあコーナーを進めるか、クウネル」

ヤム飯
「！」

クウネル
「はい、さて今回の話ですが……」

エヴァ
「古菲の勝利は予想通りとして……ミゴレンＶＳフーログを回想だけで済ませるとは思わなかったぞ」

クウネル
「元々はちゃんと描写するつもりだったそうなんですが、なんか書いてるうちにああなっちゃったらしいです」

エヴァ
「まあストーリーの大筋はそのままなわけだし、幾らかマシか」

クウネル
「そういうことにしといてください」

ヤム飯
「ところで少し気になったんだが、タピカーはアークアにどういう風に負けたんだ？」

エヴァ
「おお、そう言えば負けたことになってたな」

クウネル
「『試合開始後すぐに水フィールドを展開→タピカーは得意の脚で水を掻いて水中を高速移動→ある程度アークアとやり合う→身体が小さいため肺活量も小さい→すぐ苦しくなってＫＯ』という流れだとか」

エヴァ
「いや、速く動けるんだったらすぐに水中から出ろよ」

クウネル
「『アークアの土俵でも互角以上に戦えている』ことで調子に乗ってたんでしょう、多分」

ヤム飯
「まあ要するに、調子に乗っていい気になってるとロクなことが無い。ってことだな」

エヴァ
「お前が言うな。……いや、正確にはお前の内の半分か」

クウネル
「では続きまして、次回予告です」

ヤム飯
「さて、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「試合を本会場に移し（そういえば予選は別会場という設定だったな、すっかり忘れていた）、開始された決勝トーナメント」

クウネル
「（作者も書いてる途中まで忘れてたらしいですよ）抽選により第一試合のカードが決定、予選を勝ち抜いた選手達の激闘が開始されます」

ヤム飯
「次回の更新予定は金曜日だ、といってもまた遅れるかもな」

エヴァ
「十中八九なるだろ」

クウネル
「感想やリクエスト等々、お待ちしています」

ヤム飯
「それじゃあ、次回のネギドラ！も……」

エヴァ&クウネル
「お楽しみに！」

クウネル
「そういえばだいぶ前に出演された超サイヤ人のバーダックさん、どうやら公式だったらしいですね」

エヴァ
「今更そのことを掘り出すか……」

注・調べ不足でした

第１２７話　開幕の決勝トーナメント　トップバッターは誰だ！？（前書き）

今回、『本編が短い＆あとがきが長い』という状態になっております。いつもと比べてバランスが変です。
次回は多分直します、すみません。
ではどうぞ！

第１２７話　開幕の決勝トーナメント　トップバッターは誰だ！？

『御会場の皆様、大変お待たせいたしました！ただ今からあの世一武道会決勝トーナメント、一回戦第１試合の組み合わせ抽選を行います！』

場所は予選から移り、開会式が行われた本会場

その中央にあるただ一つだけの試合場に、キノコ男が立ってマイク片手に大声を張り上げる

そしてマイクを持たないもう片方の手には、予選のリーグ決めに使われたのと同じ箱

『私が持っておりますこの箱の中には、厳しい予選を勝ち抜き決勝トーナメントへと進出した、栄えある八名の選手の名前がそれぞれ書かれたボールが入っております！』

キノコ男はその箱を高く掲げ、選手、観客含め一同に示した

『各試合開始前に大界王様によってこの中からボールを引いていただき、対戦する選手を決定します！というわけで大界王様、早速お願いいたします！』

「はーあーい」

大界王は高台に置かれた自身用の席から降り、ゆっくり舞空術で飛行しながら試合会場に降り立つ

キノコ男は両手で箱を持ち直して大界王へスッと差し出し、大界王は自身の右手をその中へ

どれを引こうか悩みながら、ガサゴソと箱を中をかき混ぜかき混ぜ

「じゃあこれにしようかしらね……はい、一人目はパイクーハンちゃん、いい試合頼むわよー！」

中から一個取り出してそこに書かれた名を読み、ボールを掲げて彼のことを呼んだ

「ほう、いきなりか……」

「頑張るんだぞパイクーハン、誰が相手になっても捻り潰してやれ！」

決勝へ進んだ八名の選手と各銀河の界王は現在、会場中央にある試合場周辺の芝生の上に立って出番を待っている状態

パイクーハンは名を呼ばれ、西の界王は激励する

（誰が相手になっても、か。私としてはいきなり師匠とあたるのは、出来ればやはり勘弁願いたいんだがな……とはいっても七分の一だ、そうそうなるものじゃないか）

真名は壁に背を預けたまま、相手が自分にならないことを願いつつパイクーハンに視線を送る

次に残り三銀河の面々に目を向けると、慌てる者と堂々とする者にほぼ二分

慌てる者は三界王、堂々とする者は残りの選手六名

（まあ確かに、初戦で師匠とぶつかりたくはないだろう……例外を除けば皆がほぼ敗北確実なうえ、その例外である数名だって勝てたとしても初戦から大きく消耗してしまう）

大会において良い結果を出したい界王達にとっては、初戦でのパイクーハンとの対戦はやはり嫌なもの

良い結果を出したいのは選手達も同様であるが、界王達と違って皆が覚悟を決めていた

（……これは私も、腹を括っておいたほうが良さそうだな）

自分一人だけ気後れしていては、とても話にならない

真名は自身の気持ちに整理をつけ、二個目のボールを引こうとする大界王の方に再び視線を戻す

既に大界王は一個目のボールをキノコ男に渡し、箱の中で手をしきりに動かしていた

「さーてっと、パイクーハンちゃんの対戦相手は……（ここでいきなり悟空ちゃんとだったらある意味面白そうだけど）……じゃあこれ、はいっ！」

箱の中に手を入れること数秒、これだと決めた大界王はズボッと勢いよく抜き取って目の前まで

次にボールを器用に右手だけで回して名前が書かれた面を自身の正面に

「（ま、こんなとこかしらね）第1試合は、パイクーハンちゃん対……」

そして読み上げる

会場にいる半数以上の者が、この間にゴクリと生唾を喉元に送らせた

「……アークアちゃん！第1試合はパイクーハンちゃん対アークア

ちゃんよ！」

「はっはっは！東の界王よ！早くも前大会と同じく、一回戦での全員敗退が確定したな！」

「ぐっぞおおおおおっ！なんだってウチはこうも毎回くじ運が悪いんだい！」

「くじ運というより、元々選手達のレベルが低いんじゃないか？」

「何だって南の界王！もう一回言ってみな！」

（とりあえず悟空やオリブーといきなりあたらずに済んだか……ホッ）

組み合わせが決定され、二名の選手は試合の準備をお願いしますと一同に与えられた五分ほどの合間

西の界王は手堅く手に出来るであろう一勝に歓喜し、東の界王は敗北濃厚な試合となったことに絶望し絶叫

南の界王は西の界王に便乗して東の界王をからかいに入り、北の界王は一人輪に加わらずどこか安堵の表情をしていた

一方、選手達

パポイはやることがなくて暇だからとウガーウガー叫びながらポージング

フーログは抽選が行われた時点から、姿を見せていない

真名は抽選時と変わらず、ただ壁に身を預けて試合の開始を待つ

オリブーは両腕を組み、特に何もせず立ったまま

パイクーハンは試合前ということで、少々身体を動かして試合に備える

そしてパイクーハン同様、数分後に試合を控えているアークアは

「孫、悟空……古、菲……」

「ん？」

「どしたアル？」

会話をしていた悟空と古のもとに行き、二人の横から話し掛けていた

「俺、お前と前に約束……した、次は勝つって」

「ああ、オラちゃんと覚えてっぞ」

「それと……お前とも、引き分けじゃなくて、ちゃんと決着……つけたい」

「同じくアル！」

アークアは予選Cリーグ、2勝1分の一位通過

負けこそしなかったが、唯一勝ち星をつけられなかったのが目の前にいる古菲である

アークアは悟空と同様、古に対しても再戦の意欲を燃やしていた

しかし二人のどちらかとあたるよりも先に、パイクーハンとの対戦が決定する

パイクーハンの凄まじい実力について大いに理解している悟空は、そのアークアとの再戦がこの大会中叶わぬことであろうを少々残念に思っていた

口には出さぬが、これは古も同じく

らしくないと思いながらも、試合を控えているアークアに気を悪くさせないよう遠回しな会話を実行する

「しかし残念アルなー、実は私、明日には此処からサヨナラしてしまうアル。あ、もし都合がつくなら明日の早朝にでも……」

しかし次のアークアの言葉、これで場の空気が一変

「……必要ない」

「？」

「俺が勝ってお前達も勝てば……二回戦で戦えるかもしれない」

今アークアのいる場所は、断じて水中ではない

しかし彼の眼は、いつもの死んだ魚のようなそれではなかった

『ではお二方、準備の方は宜しいですかー？』

試合場に上がった、パイクーハンとアークア

それぞれ相手を見据えて向かい合い、臨戦態勢

キノコ男は試合場の上には立たず、『実況席』なるものを試合場からやや離れた場所に設置して着席

自身の前には『実況』、加えて隣に着席する大界王の前には『解説』と書かれた物がそれぞれある

そこからスタンド型のマイクを使い、二人に向かって話していた

「問題ない、いつでも初めてくれ」

「……こっちも」

両者から同意の返答をもらい、キノコ男は声をあげた

『それでは第一回戦第1試合、始めてください！』

ゴワアアアアアアンッ！

「はあああああああっ！」

「んんんんあああああ〝あ〝あ〝あ〝あ〝っっっ！」

試合開始の合図として鳴り響く、会場の銅鑼

同時に二人の咆哮も響き、決勝トーナメントの幕が開けた

第127話　開幕の決勝トーナメント　トップバッターは誰だ！？（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「まさか投稿予定を作者が守るとはな……すんごく短いけど」

クウネル
「では今回のゲストをご紹介、今回は凄いのが来ましたよ」

エヴァ
「は？」

ナギ
「よお」

エヴァ
「！？」

ボージャック
「もう出番がねえのかと思っていたが……まさかこっちで御呼ばれとはな」

セル
「私は、初めましてかな？お初にお目にかかる、読者の諸君」

クウネル
「紅き翼リーダーのナギに、ボージャックさんとセルさんです」

エヴァ
「こんなリクエストあったのか！？」

クウネル
「はい、これです」

エヴァ↑確認中
「去年の一月とか……えっと、『ボージャック&フリーザ&セル&スクナ&フェイト&ナギ、とりあえずネタが尽きたらこれを使うといいでしょう。数は減らしてもいいですが』まさに今のタイミングなわけだ」

クウネル
「そういうことです」

ナギ
「ホントは俺、番外編かなんかで出ても良かったんだけどよぉ、もう先約がいるみてーじゃん？ラカンとかも時系列無視で普通に出てるし、折角だから出ちまおーかなーって」

ボージャック
「ちなみにこいつ以外の五人の中で俺達が選ばれたのは、『まだ一回もこのコーナーに出てないから』らしい」

セル
「フリーザとあの少年がセットで出ると、前回共演した時の件（第５０話のやつ）もあって色々面倒になりそうだしな。案の定呼ぶのはやめたというわけだ」

エヴァ
「で、スクナは論外と。以前呼んだ時の結果がアレだし」

クウネル
「そういうことです。ではコーナーを進行させましょう、今回の話ですが……」

エヴァ
「さっきも言ったが短い、ここ最近のやつだと一番文量が少ないんじゃないか？」

クウネル
「否定は出来ませんね、ただ中途半端に始めて次の話まで試合を持ち込むのが作者的には嫌だったとか」

セル
「つまり以前書いた天下一大武道会編の予選～準決勝のように、キッチリ一試合一話でまとめたかったわけだな？」

クウネル
「はい、予選リーグでは結構混み込みな内容になりましたからね。決勝トーナメントからはサブタイにちゃんと全部『○○○ＶＳ○○○』を付けたいそうです」

ボージャック
「そうすると大会終了までの話数も大まかだが分かるな、八人でトーナメントをするんだから試合だけで最低七話だろ……」

クウネル
「いえ、おそらくトランクスさんとピッコロさんの時みたく前後編

に分かれる試合が幾らか組まれるので、十話前後は掛かるかと……」

ナギ
「あと、あの肌黒嬢ちゃんの回想シーンも丸々一話くらい使うんだろ？」

エヴァ
「そういえばそんなこと言ってたな大分前……ということは年内終了は」

クウネル
「無理です、『遅くても連載二周年到達前には』と作者本人は言ってましたけど」

エヴァ
「そういえばもう連載して一年半以上か……二年目入ってからまだ３０ちょっとしか話数が無いな、去年の今ぐらいだと６０話は書いてるのに」

注・下手すりゃ去年の半分で終わりそうな勢いです、いやマジで

ナギ
「作者の奴今高二だろ？このまま高三突入したらもっとヤバいんじゃねえか？」

セル
「確かに」

注・……これからも応援よろしくお願いします

エヴァ
「逃げるなよ」

クウネル
「あっちも色々忙しいんですって、勉強とかサブ連載とかニコニコとか」

エヴァ
「最後の一つはホントいい加減にしろ！観ようと思ったらアイ○ス動画なんて湯水のように湧き出るぞ！」

クウネル
「あ、それについては大丈夫です、最近ア○マス動画観るのやめました」

エヴァ
「……じゃあ今は何を観てるんだよ？」

クウネル
「アニメキャラがパ○プロでトーナメントする動画観てます」

エヴァ
「そっちはそっちは1シリーズの総再生時間がヤバすぎるーーー！」

ナギ
「ニコニコってそんなに面白いのか？」

ボージャック
「俺はよく知らねえ」

セル
「私としては嫌いではない、ここにいる五人の中では私がダントツで一番人気だからな。さすが私だ」

エヴァ
「『お前』というよりお前の『声』だろ、まあ人気そのものは否定せんが」

クウネル
「では続きまして、次回予告です」

セル
「さぁて次回のぉ、ネギドラ！はぁ……」

エヴァ
「（その話題になったからって急に変えるなよ……）決勝トーナメント一回戦第１試合、パイクーハンとアークアの試合だ」

クウネル
「試合前、悟空さん達に『俺が勝てば』と発言したアークアさん。果たしてどんな試合が展開されるんでしょうか？」

ボージャック
「あれだけ言ってのけたんだ、ただの強がりじゃねえとは思うが……」

ナギ
「そういや俺って、こいつとめちゃくちゃ相性いいな。俺の雷魔法効きまくりだし」

エヴァ
「水中戦に持ち込まれたら無理だろ、二人揃って感電するし」

セル
「そういえばぁ確かぁ、地獄でこぉの私と戦った時に奴がした攻撃はぁ……」

エヴァ
「っ！ああ成程、そういうことか」

クウネル
「けど流石にそれだけじゃないでしょうね、他にも何か秘策があると私は予想します」

ボージャック
「次回の投稿は木曜日の予定だってよ、ちょっと縮まったな」

エヴァ
「守れればの話だけどな」

セル
「感想やリクゥエスト等々ぉ、諸君から貰えるぅのを楽しみにしていぃよう」

エヴァ
「……いい加減それやめろ」

ナギ
「んじゃあそういうわけで、次回のネギドラ！も……」

エヴァ&クウネル&セル&ボージャック
「お楽しみに！」

ナギ
「そういえば元々、俺達がリクエストされた理由って何なんだ？」

クウネル
「要約すると『強いキャラ片っぱしから集めたんで、最後はバトルしようオチになるだろう』というのが理由になります」

エヴァ
「結局せずに終わったけどな」

ナギ
「けど折角来たんだし、俺は別に今からやってもいいぜ？おーい、どっちでもいいから俺の相手してくれよー」

エヴァ
「今回ただでさえ文字数多いんだからやめろ」

セル

「よーしいいだろう、私が相手だ……ぶるぅあああぁぁぁぁぁぁ！！」

エヴァ
「やかましい！」

第１２８話　反する二つが今ぶつかる！パイクーハンＶＳアークァ（前書き）

遅くなりましてすみません、ネギドラ！第１２８話投稿です。
あと今回は諸事情により、あとがきコーナーの投稿を一日送らせていただきます、こちらについてもすみません。
一話にまとめたらちょっと長めに……ではどうぞ！

第１２８話　反する二つが今ぶつかる！パイクーハンＶＳアークァ

「……ふぅ、危ないところだった」

北の界王一周忌記念　あの世一武道会

その決勝トーナメントにおける初っ端、一回戦第１試合

現在はそれの開始直後なわけだが、パイクーハンは上空に浮かんでいた

「いきなり例の技を使ってくるとはな……」

パイクーハンは自身の真下、つまりは試合場の方を見やる

そこには既に、アークァの技によって多量の水が長方形型にタプンタプンと鎮座していた

本来アークァが水具現化能力を使う場合、『溜め』の関係上数秒ほどタイムラグが生じる

しかし今回アークァはその隙を突かれぬよう、試合場に上がって開始までの間に『溜め』を実行

アークァの行う『溜め』は、例えるなら『開始直後にフルパワーのかめはめ波をぶちかまずために思いっきり溜めるアル！』という感じの『溜め』とは違い、気の上昇等による前兆が殆ど無い

あえて挙げるなら『目が釣り上がってウウウウと唸る』くらいだ

が、抽選直後から今回は目がそれであり、会場中に響く歓声によって唸り声はかき消されていた状態

見事パイクーハンの虚を突くことに成功し、彼が自身へ攻撃を仕掛けるより先に技を発動することに成功した

ちなみにこれは対タピカー戦でも使っていた方法なのだが、パイクーハンがその試合を観ていなかったのも成功した要因の一つか

（奴は今あの水の中。自分から出て上空にいる俺へ攻めてくるとは到底思えん、となれば取ってくる策は……）

直後

（来たっ！）

『おおっと！ここでアークア選手の攻撃です！』

バシュンバシュンと水面を突き破る音と共に、幾つもの気弾が飛び出した

得意とする水中に身を隠し、その中からの遠距離攻撃

パイクーハンの予想通りの攻撃が、こちらへ向かって飛んでくる

しかしこんなもの、パイクーハンにとっては恐れるに足らず

『すごいすごい！目にも止まらぬ速さで、パイクーハン選手が攻撃をかわしていきます！』

アークアにとって気の扱いはどちらかと言えば不得意な部類に入り、飛んできた気弾も低スピードで低威力

かわすことに何ら不都合はなく、パイクーハンは避けるなり弾くなりして難なく攻撃を無力化

次々と気弾は飛び続けるが、幾らでもかわし続ける自信がパイクーハンにはあった

……異変が起きたのは、そんな攻撃が開始して一分少々過ぎてからのこと

（さて、いい加減次の手を打ってきてもいい頃だが……）

『おおおっ!?あれは一体なんでしょうか!?』

「!?」

気弾の発射が突如として止み、パイクーハンを襲う別の攻撃

間欠泉の如く、いやそれ以上の勢いで噴き上がる多量の水

巨大な水柱が何本も、パイクーハンに向かってきた

「くっ!」

破壊せんと気功波を放ったパイクーハンだが、気を練る時間もあまり取れず撃ったためか迎撃は失敗

水柱は気功波を飲み込み、そのままパイクーハンを襲う

「うおおおおっ！」

『凄い凄い凄い！アークア選手の水柱攻撃！虚を突かれたパイクーハン選手はそのまま喰らってしまいました！』

『やるわねーアークアちゃん、水を具現化するだけじゃなく水そのものを操る技もあったわけね』

『さらにそのまま、パイクーハン選手を水中へ引きずり込みにかかります！』

とはいっても、パイクーハンもこのままでは終わらない

引きずり込まれようとする際、気を全身から使って身体を高速回転

スピードはまさに、竜巻（トルネード）を彷彿とさせるそれ

自身が得意とする技の一つである『ハイパートルネード』で、周りを覆っていた水全てを水飛沫にして四散させた

「水を操る、か……確かに強力な技かもしれんが、あんな攻撃ではこの俺には通じんぞ！」

直撃したとは言っても、パイクーハンにダメージはほぼ無し

水中にいるアークアへ向けて激を発し、改めてこちらから攻撃態勢に入る

右掌に気を収束させ、気功波を放つ構え

この攻撃で、具現化された水もろとも吹き飛ばしてしまうつもりなのだろう

対するアークアも、気功波発射される前に再び水中から攻撃

またも水面が怪しく揺れ、そこから多量の水が飛び出した

「同じ手は二度と喰わん！」

あの水柱攻撃は性質上、下から真上へただ真っすぐに向かって攻撃する直線攻撃

つまりある程度の距離を空けて横に移動すれば避けられるのだ

先程襲ってきた一回の攻撃だけでその特徴を把握したパイクーハンは、攻撃が来ると分かった刹那に大きく移動を図る

案の定水柱はパイクーハンの横をそのまま通り過ぎ、不発

そこからさらに何本か別の水柱が上がってきたが、これも回避した

その間にパイクーハンは準備が完了

「はあああああああっ！」

アークアが潜む真下の水目掛けて、強力な気功波を撃ち込んだ

～この世～

「せやあああああっ！」

「よっ、と」

パシイッッ！

「攻撃後の立て直しが遅い！」

「え！？」

バシンッッッ！

「きゃああっ！」

さて、アークアとパイクーハンの試合が行われているちょうど同時刻

西の都、カプセルコーポレーション内の中庭で汗を流す男女が二人

「まだまだ！もう一回お願いします！」

「よし！来い！」

方や、剣道で使われるような竹刀を両の手で持つ青年

方や、身の丈に合わぬほどの大きさを誇る巨大ハリセンを片手でブンブン振り回す少女

先ほど少女が青年目掛けて放った縦切りの攻撃は、難なくガードされてカウンター

ガラ空きとなった右脇に、剣道で言うところの『胴』を叩き込まれる結果となった

「はああっ！」

「おっと、今度はこっちが隙だらけだよ！」

「なんの！」

そこから休む間もなく再開

横薙ぎの攻撃をかわした後に青年はカウンターをまたも試みるが、ちょっとは学習したか少女はこれを凌ぐ

しかし両者の実力差が顕著であることに変わりはなく

「そこ！」

バシンッッ！

「きゃっ！」

さっきと同じ箇所にまたも、攻撃が決まった

「よし、そろそろ一旦休憩にしようか」

「アタタタ、了解です……やっぱり動きが全然違いますね」

そして、ちょうど区切りがついたか稽古は一時中断

青年、トランクスは竹刀を下ろして少女に声を掛け

少女、神楽坂明日菜は打たれた箇所を抑えつつトランクスの提案に賛成した

以前行われた、刹那とトランクスによる『手合わせという名の真剣勝負』

その件以降もトランクスは刹那と何度か相手をしていたのだが、その際に刹那が『アスナさんも誘ってみてはどうでしょう？』と提案

トランクスは了承し、その翌日に三人での合同稽古を敢行

これはアスナにとってもなかなかの収穫だったようで、『また是非』と再度やることを約束

その日というのが今日、ちなみに刹那は木乃香に頼まれごとがあり参加出来ず

故にベジータとハルナを送り出した後、こうして稽古を続けていたというわけ

それと二人が本来の剣を使用してないのは、前述のトランクスVS刹那戦で真剣を使ってガチ勝負したら木乃香にめちゃくちゃ怒られたから

あの件以降真剣を使うのはよそうという結論になり、刹那もトランクス同様竹刀を使用（アスナは使い慣れているのを理由にアーティファクトのハリセン）

ただし一応ということで、それぞれ武器に重りをつけて重量的には元のと似せて行っているのだが

「それにしても父さん、向こうで厄介事でも起こしてなきゃいいんだけど……」

「ですよね……まだ会って数回ですけど、とにかく凄い人だってのはよく分かります」

身体を休めながら、今頃試合を観戦しているだろうベジータ達の（というかベジータのみ）

ことを心配しだす二人

しかしチケットを手に入れられなかった彼らには、事態を把握することは叶わない

そう思っていると

「……ん？」

「どうしたんですか？トランクスさ……」

彼方から、何かがこちらへ飛んでくる

「な、何ですかあれ？」

「さあ……ただ僕の見た限りでは、飛行型の小型カメラとかに見えるけど」

全長二十センチに満たない小さな機械

その前方にはカメラのファインダーのような部分が見受けられ、トランクスは先ほどのように推測した

しかし辺りの気を探ってみる限り、操縦者らしき者は近くにいないとなればかなりの遠隔操作型、製作にはかなりの科学技術が伴うだろう

Ｄｒ．ゲロ亡き今、この地球内で一番の科学技術を有しているのは言うまでもなくカプセルコーポレーション

作れないこともないだろうが、社内であのようなものを開発・販売した覚えはどこにも無い

ここからさらに十数年以上先、トランクスのいた未来でも同様にである

何だろうと二人が考えている間に、その謎の機械はさらにこちらへ接近

まさか攻撃する気ではなかろうかと警戒する二人だったが、それは杞憂に終わった

その機械の側面に、紙が一枚貼ってあったのだ

それに気付き、魔法無効化（マジックキャンセル）持ちのアスナが近付いて読み上げる

「『只今、あの世一武道会の映像を配信中。ＴＶとかパソコンとかにアダプタをこれから繋ぐと見れるよ。観に行けないみんなのために色々頑張ったんだから、感謝してよね。ｂｙ朝倉』……はぁ？」

～あの世～

『さあ！一回戦第１試合は予想以上の大激戦状態！アークア選手の大技が炸裂しております！』

実況のキノコ男は声を張り上げ、今目の前で起こっている戦いに興奮していた

先程パイクーハンが放った強力な気功波で、下に溜まっていた水は四散してほぼ消滅

アークアは得意のフィールドを失い、これで勝負あったかと思われた

しかし、未だにアークアはパイクーハン相手に喰らいついている

確かにパイクーハンの攻撃で、『下に溜まっていた水』は消滅したパイクーハンへ攻撃するために上がっていた、数本の水柱は無事

当然普通の水柱なら上がった後、重力に従いそのまま下へ落ちていくのが常

だが、この水柱達はそれに抗ったのだ

水柱の内の一本に身を潜めていたアークアの力で、その姿を『水柱』から『水竜』へと変えることで

それは古との戦いでは使わずにいた、今大会のとっておきとしていたアークアのもう一つの能力

自身が具現化させた水を、液体としての範囲で自由に変化させる
『流体操作能力』

これによって現れた水竜は、計五体

パイクーハンの周りを取り囲むように陣をとり、包囲する

『あれはなかなかメンド臭いわねー、水竜達の身体は水で出来てるから普通の攻撃は殆ど通じないし』

一体一体の動きはさほど速くなく、パイクーハンも彼らの攻撃をかわしつつ反撃を何度も実行

しかし大界王の言うとおり元々の素材が水なため、普通の打撃ではダメージは皆無

気功波で対抗しても、完全に消滅しなかったものはアークアが回収して再び水竜達の身体の中に取り込むという始末

流石に今の状況から追加で水を具現化して戦力を増加させるのは、彼自身に掛かる負担が大きいのか行っていない

それでも、水竜達はパイクーハンの体力を少しづつであるが削ってきていた

（こんなタイプの相手と戦うのは初めて……対策が思いつかん、どうする！？）

とはいっても、パイクーハン側に収穫が無いのかと言えばそれは嘘

気功波による対抗は、こちらも少しづつだが水竜達の身体を削り取っている

現に五体の竜の内何体かは、一回り二回りと大きさが縮んでいた

『このまま続けていれば両者の根競べ……けどもしどっちかがこの状態を打破する策を見つけてしまえば、それで勝負は決着ね』

『ああっと！パイクーハン選手が上空へ退避して水竜達から距離をとりました！』

と、ここでパイクーハンが動く

普通に攻撃しても殆ど通じず、アークアが中にいる一体を狙っても他の四体が総攻撃で阻む

気功波で削れることは削れるが、自身の気がもつかどうかわからない

以上のことから、パイクーハンは一つの結論に達したのだった

（相性が最悪なのは把握済み……だが、この技で一気に決めてやる！）

迂闊に後を追うのは危険と思ったか、アークア含め五体の水竜は様子見ということで地上から動かない

それによって生まれた僅かな隙を突き、技の準備に入った

「はあああああああああ……」

睨みつけるような視線をアークアへ向けたまま、上体を正面から見て左右に倒しながら揺れる

前大会の決勝戦を見た者は、誰もが皆この独特な動きにあの技を思い出されることとなった

『あ、あの動きは！』

『パイクーハンちゃんの必殺技よ！』

サンダーフラッシュ

そのあまりの威力に、悟空を決勝戦でこれ以上なく追い詰めたことで有名となった技

三回目を放つまで悟空に『全然スキがねえ』とまで言わしめた、彼の最強技

決勝を待たずして、一回戦で早くもこの技を使うことをパイクーハンは決意

『し、しかしパイクーハン選手のあの技は果たして！アークア選手に通用するのでしょうか！？』

（そう、サンダーフラッシュの『炎』に対し、奴の竜達は『水』……）

実況するキノコ男の言うとおり、結果がどうなるかは技を放つ自

分ですら確証が持てない

「（だがやってやる！あいつらを正面突破出来なくて、何が俺の最強技だ！）……サンダー！」

けれどパイクーハンは逃げない、自身の最強技が勝利するのを信じた

倒していた上体を元に戻し、伸ばした両腕の先にある強く握られた両拳が目の前でぶつかる

「フラーーーーーッシュッッ！」

その先から、まるで地獄の炎を思わせるような紅蓮の業火が渦を巻いて飛び出した

「はあああああああっ！」

対してアークアも、自分が入っているのを除いた全ての竜を向かわせて真っ向勝負

『炎』と『水』

反する二つの攻撃が、中央で激しく蒸気を吹き上げつつぶつかり合う

本来ならば、文字通り火を見るより明らかなこの勝負

だが忘れてはならない

アークアの目の前で業火を放っているのは、他でもない前大会フ
ァイナリスト

西の銀河、パイクーハンだということを

「……だあああああああああっっっ！」

「っ！？」

『炎』が、『水』に打ち勝った瞬間だった

水竜達は瞬く間に消え、未だ勢いに衰えを見せることのない炎は
最後の一体とアークアを襲う

慌ててアークアは脱出するが、抜け殻となった水竜は言うに及ばず
為す術もなくサンダーフラッシュの餌食となり、他の水竜と同様
に消え去った

上へ飛び上がりながらその様子を見下ろすアークアには容赦なく

「これでもう、お前を守る竜達はいなくなったぞ！」

勝負に終止符を打たんとパイクーハンが迫る

「……まだだあああっ！」

アークアは最後まで抵抗した

パイクーハンが迫るまでの僅かな時間

最初のような多量は無理にしても、右手に収まるほどの少量だが何とか水を具現化

それらを瞬時に水の刃へと変え、パイクーハンに放つ

「ぐうっ！」

攻撃は当たり、切られた頬や腕から流れる血

だがそれだけ、致命傷には至らずだ

アークアの最後の攻撃を受けきったパイクーハンは、右手刀を腹目掛けて振り抜いた

元々の小柄な体躯も相まって、アークアの耐久力は参加した武道家の中でもかなり低い

そのまま試合場の脇、場外へ

叩きつけられ、気絶

このたった一撃で、アークアは沈んだ

『しょ、勝負あり！アークア選手、健闘するも虚しく場外！パイクーハン選手の勝ちです！』

試合の決着をキノコ男が告げ、こうして第１試合は終了したのだった

そしてその終了から五分ほど経った頃

水浸しになったり、焦げ跡が付いたりした試合場の整備

それを係員が額に汗して行う中、目を覚ましたアークアは再び悟空と古のもとへ

「……ごめん、負けた」

「そんなしょぼくれんなってアークア！」

「そうアルよ！」

試合前にああ言っておきながら、結果は実質の一撃ＫＯ

悔しそうに、そして申し訳なさそうに二人へ謝るが、二人は笑顔で言葉を返した

「おめえ、前よかうんと強くなったんだな！それ見られただけでもオラ嬉しかったぞ！」

「あんな凄い技私初めて見たアルよ！」

「……ありがとう」

一方で界王達も、予想以上のアークアの善戦に驚きを隠せず

「おお西の界王、パイクーハンは大丈夫じゃったか？」

「……切り傷からの出血はもう完全に止まったし、気の消耗も準決勝までには回復する。正直ああなるとは思ってもみなかったが、特に問題は無い」

「しかしあたしゃ驚いたよ……負けたのは仕方ないとは言え、アークアがあのパイクーハン相手にあそこまで粘るなんてね」

「ふん、結局負けは負けじゃないか。うちのパポイなら完勝しとったわい」

整備が終わるまでの間、四人揃って言葉を交わし合っていた

「まあ気にすんなって！古は仕方ないとしても、オラ達はどうせこの後もここでずっと一緒なんだ。次の大会やその次の大会、闘(や)れる機会は幾らでもあるさ」

「そう……だな……今度は、必ずお前と戦って……勝つ」

「あ、終わたみたいアルよ！」

見ると、さっきまであくせく働いていた係員達の姿は既に無い

実況席ではキノコ男が再び抽選箱を取り出し、準備に入っていた

『それでは試合場の整備も終わりましたので、続けて第2試合の抽選を行います。大界王様、お願いします』

『はーい』

手を箱の中に入れた大界王は、最初ほど時間をかけることもなく一個目を引き抜く

『まず一人目は……あら、新しく来たルーキーちゃんね。龍宮真名ちゃんよ』

「ほう、私か」

呼ばれた真名は寄り掛かっていた壁から身を離し

（お、真名か……オラやっぱり、もう一回ちゃんと勝負してぇんだよなー）

（あの時みたいにはいかないアル！相手が私になたらギャフンと言わせるネ！）

（トルビーとの試合は少しだけ見ていたが、なかなか興味深かったな……相手にとって、不足はなかろう）

（ウガー）

彼女の相手となるかもしれぬ残りの選手達は、それぞれが真名や実況席へと視線を送る

『そして、真名ちゃんの相手は……ほいっと』

大界王はすぐに二個目を引き、読み上げた

『……あら、またまた面白い組み合わせね、フーログちゃんだわ。第2試合は、真名ちゃん対フーログちゃんよ！』

第１２８話　反する二つが今ぶつかる！パイクーハンＶＳアークァ（後書き）

クウネル
「どうも読者のみなさん、一日遅れのあとがきコーナーです」

エヴァ
「予告から遅れるわこのコーナーをさらに先延ばしにするわ……」

クウネル
「まあまあ、というわけで早速ゲストのご紹介」

フリーザ
「今回はあのガキはいない、と……まあいいでしょう」

クウラ
「フリーザと一緒に出る羽目になるとはな……」

クウネル
「フリーザさんとクウラさんのお二人です」

エヴァ
「ここに来るのも随分久々だなお前ら」

フリーザ
「そうですね、でもまあ私は本編の方でも少々出させていただきましたし」

クウラ

「サウザー達三人が出たのに、なんで俺だけが……」

クウネル
「登場してたら話がさらに別方向へ突っ走っていたからかと」

エヴァ
「ただでさえフリーザ&アックマンというトンデモ状況だったしな」

クウネル
「ではコーナーの進行を、今回の話ですが……」

エヴァ
「作者が考えたオリジナルの能力で、アークアがパイクーハン相手に善戦していたな」

クウネル
「対悟空さん、対古菲さん、さらに対パイクーハンさんと三戦連続水中戦にするのはどうも抵抗があったらしくて」

クウラ
「さらに言えば、描写外でもタピカーやブージン相手に使っているな」

フリーザ
「マンネリ化防止の意味もあったわけですね」

クウネル
「……まあ一応、水中戦になった時の話も考えてたらしいんですけど」

エヴァ
「あったんかい！」

クウネル
「局所的に抜粋しますと……」

パイクーハン
『くっ！水中ではサンダーフラッシュが出せん！』

パイクーハン
『ならばこれだ！ハイパートルネード！』

キノコ男
『おおっと！試合場のど真ん中に大渦が渦巻いております！』

パイクーハン
『なああっ！？大渦の中を泳いでいるだと！』

アークア
『……このくらい、朝飯前』

クウネル
「みたいな感じで」

エヴァ
「……で、最後の決着は？」

クウネル
「『バーニング・シュート（全身を炎で纏って突進する技）を使って水を沸騰させ、そのまま全部蒸発させる』です、流石に無理ある

だろってことでやっぱり非水中戦になりました」

エヴァ
「……まあ、妥当な判断だったな」

フリーザ
「それにしても、あの水竜達の扱いは見事なものでしたね」

クウラ
「ああ、しかも水竜一体一体を全て自身の手によって完璧に操っている」

クウネル
「水竜の中に自分が入るというのも、『操作していて隙がある本人を狙われる』という欠点を補えますしね」

フリーザ
「描写が少なかったので訊きたいんですが、あの水竜達はどんな攻撃が出来るんですか？」

クウネル
「高圧力の水を噴射したり、高速で自分の身体を叩きつけたりですね。アークアさんがすぐ水竜達の身体に戻すので、アフターケアもバッチリです。」

エヴァ
「お前らな……水竜水竜連呼するのやめろ」

クウネル
「いや、だって水竜ですし」

エヴァ
「……水『龍』にしなかったのはやはり意図的なのか？作者」

注・変換したら『竜』の方が先に出たので、そのまま使いました

クウネル
「別にいいじゃないですか、『水竜は凄かった』と誉めてるんですから」

エヴァ
「文句言われても知らんぞ……」

クウネル
「では、続きまして次回予告です」

フリーザ
「さて、次回のネギドラ！は……」

エヴァ
「第２試合、龍宮真名対フーログだな」

クウネル
「互いに予選では、手の内を隠しつつ二位突破となった二人。この試合で両者の本気が観れることを期待しましょう」

フリーザ
「特に後者は、前大会でフラグを立てたわけでもなければ強キャラとして描かれたわけでもない……どういう戦いをするか注目ですね」

クウラ
「『七人は初めから確定で、余り1として適当に』という考え方も出来るが……なんにせよ八人の中では一番異色だな」

エヴァ
「次回の更新予定は来週の火曜日だ、今度こそは守れよ！」

注・頑張ります！

クウネル
「では、次回のネギドラ！も……」

エヴァ&フリーザ&クウラ
「お楽しみに！」

エヴァ
「ところで、第2回人気投票をやる予定だというのはホントか？」

クウネル
「出来ることならしたいみたいです、ランキングの変動とかも興味あるみたいですし」

フリーザ
「よろしいじゃありませんか！今度は１０位からさらにランクアップを……」

エヴァ
「いや、多分無理だから」

第１２９話　真の姿現る！？真名ＶＳフーログ（前編）（前書き）

また遅れました、報告まで忘れてすみません……。今回あとがきがありませんが、前後編に分かれたこともありますし、前編分はカットで後編にまとめてやりたいと思います（トランクス対ピッコロではそれぞれやりましたけど）

前後編ということで、続きは出来る限り早く投稿できるよう頑張ります（何日までに、とは言うのが厳しいですが）

ではどうぞ！

第１２９話　真の姿現る！？真名ＶＳフーログ（前編）

『フーログ選手ー？いらっしゃいませんかフーログ選手ー？』

第一回戦第２試合　真名対フーログ

真名は既に試合場へ上がって準備万端

しかし、フーログはまだ姿を見せていなかった

予選での対チャプチャイ戦も合わせて、これで二回目

キノコ男は放送で呼び掛けるが、反応はなし

『フーログちゃんまた遅刻なの？トイレにでも籠ってるんじゃなぁい？』

『あ、来ました！』

しかし今回は、そこまで来るのに時間はかからず（遅刻には変わりないが）

フーログは慌てる様子もなく会場に姿を見せ、スタスタと試合場に向かって歩を進めた

『つ、次からは気をつけてくださいよ？』

「……」

フーログは無言のまま、試合場に上がって真名と対峙

真名の方も別段気にすることはなく、実況席に目配せをして試合開始の合図を促す

『そ、それでは！両者揃いましたので……試合開始ぃっ！』

キノコ男の宣言と共に、両者は同時に動いた

～観客席～

「今度はたつみー姉ちゃんの試合やな」

「うん、龍宮さん勝てるといいんだけど……」

一同は予選と同様、全員が揃って近くの席に着席

真名の試合を見下ろしながら、ネギがふと言葉を零す

現在対戦中の両者は、様子見ということもあるのか小技の応酬

まだ互いに、『仕掛ける』気配は見られずにいた

「……それにしても、パルは大変だねぇ」

そんな中朝倉が、自身の隣にある空席の方に顔を向ける

予選に引き続き、ハルナはベジータに強制連行

同じようなことをこの本会場でもする羽目となったのか、試合が開始されてからも戻ってきていなかった

「でさ夕映っち、フーログさんってどんな感じの選手なわけ？」

「身のこなしの素早いことを生かした接近戦型、例えるならタピカーさんを少々バランス良くした感じですかね。攻防のバランスはなかなかと聞いています……しかしどうも、今大会では大きく基本戦術を変えてきたみたいですね」

夕映が見た先では、フーログがついに真名に『仕掛け』始めた

「はあああああっ！」

後方に大きく飛んで距離をとったフーログは、真名へ向かって気弾を多量に連射

真名は一つ一つを注視しながら回避行動をとり、避けきれないものは気功波で撃ち落とす

予選でトルビーにも見せた、自身の右手を銃に見立てた形で放つそれ

今大会では銃器はおろか、まほら武道会で見せた羅漢銭の使用も禁止

そのため大会前に練習してみると、普通に気弾を放つよりも命中率が格段に高いことが発覚

真名もこれが気に入ったか、パイクーハンとの特訓で攻撃する際も基本この攻撃法に

現在、狙ったフーログの気弾全てを撃ち落としていた

『真名選手！防戦一方！フーログ選手に押し切られてしまうのか！？』

（確かに、このままじゃキリがないな……なら）

真名は空いている左手の指二本を額に当て、瞬間移動

一瞬でフーログの背後をとり、右手を構える

『真名選手！フーログ選手の後ろに回りこんだーー！』

（このタイミングなら！）

フーログは両手を気弾発射のためフル回転させており、中断して真名の攻撃を防ぐにもタイムラグが大きい

命中を半ば確信し、真名は撃った

そして、目の前からフーログが消えた

「！？」

「こっちだ」

真名の背には直後、フーログの拳が炸裂する

「ぐあああああっ！」

いつの間に後ろへ回り込んだ！？

そう思考する間に、真名は試合場床に叩きつけられた

『しかしフーログ選手！その攻撃を避けてカウンターです！』

『今のはちょっと、効いたんじゃないかしら』

追撃を免れるためにすぐさま身を起こし、フーログを視界に捉え

て体勢を立て直す

向こうが攻めるより先に、銃の右手から気弾を三、四発

が、全て手刀で難無く落とされた

真名は攻撃を続けるが、この後はフーログも気弾で応戦

手数はフーログの方が圧倒的に多く、真名の攻撃を全て撃ち落として残りは真名に

結局、つい先ほどとほぼ同じ状況に戻された

(はは、やってくれるじゃないか……しかもあれで、てんで本気じゃないんだからな)

真名は自身の左眼、魔眼を妖しく光らせながら苦笑い

彼女は攻撃の回避を続けながら、フーログのとある一点を凝視していた

(彼の化けの皮を剥がすには、やはりやるしかなさそうだ……)

あの時と同じように

～三週間前～

そう、前に孫悟空の息子にも言ったことだ

ネギ先生達共々光に飲み込まれた私は、目が覚めたらあの世に飛ばされていた

とはいっても、自分のいた場所が『異世界』かつ『あの世』であると気付いたのは少々先のこと

仰向けで寝ており、背には芝生の感触

周りはガヤガヤと騒がしく、それで目が覚めたと言っても良かっただろう

「おっかしいなー、大界王星では初めて見るぞ」

「それに頭にも輪が無いし……」

「お、気が付いたみたいだ」

閉じられていた両瞼はそれほど重くなく、目の前の事態を確認しようとゆっくり開く

「おい、大丈夫か？」

そこで真っ先に視界へ入ったのは、私の顔を近距離から覗き込んでいる竜人だった

竜人とは言っても、二足歩行であることを除けば残りの要素はほぼ全て竜

薄紫の肌で巨躯、突然の状況に私は言葉を詰まらせる

彼が西銀河ＮＯ．２、マーライコーと知ったのもこれまた少々先

「この辺じゃ見ない顔だな、どこの星から来たんだ？」

「とりあえず、界王様を呼んだ方がいいんじゃないか？」

次に、私の左右から聞こえてきた声

そちらにも目をやると、完全に絶句

喋っていたのは、人型ではあるが竜人とも獣人とも呼べない異形のそれ

刹那と何度か仕事をした時に目にした、妖の類に一番近い印象を感じたか

次の瞬間には、私は跳ね起きて彼らから距離をとり、両手に銃を持って構えていた

入ってる弾丸にはあらかじめ、退魔の術を装填済み

威嚇の意味も込め、狙った先は頭部

何人かは酷く慌てた様子を見せたが、下ろす気はさらさらない

もし襲いかかってくるようなら、容赦なく撃つ覚悟だった

「おいお前達、何を騒いでいる？」

「おおっ、いいところに来てくれた！」

すると、今度は別の場所から声

目の前にいた奴らは一斉にそちらの方を向き、歓喜の表情

全身緑色の肌に黄色い厚めの唇、それを除けば私と同じく完全な『人』

加えて、内に抑えている凄まじい量の気を感じ取った

そう、今日に至るまで共に修行を続けた我が師、パイクーハン

彼は私の方、両手に握られた銃を見ておおまかに事態を把握

刹那、私の目の前から姿を消す

気が付けば私は背後から投げ技を喰らい、叩きつけられた直後に腕を捻じられ抑え込まれた

ちょうど、私が全力を振り絞ってきても脱出を食い止められるギリギリの力で

「かなり加減したとはいえ、今の投げを受けても気絶はせず、か。そういった武器に頼っていながらも、多少は心得があるようだな」

両手の銃は奪われ、遠くに投げ捨てられる

懐にまだ他の銃はあったが、この体勢での使用は不可

この状況に私は多大な危機感を抱かずにはいられず、決断したんだ

実に数年ぶり

修学旅行の時の刹那ほどではないが、『なる』のには少しばかり抵抗を感じたかな

「っな!?」

急激に私の魔力は高まり、その力をもって一瞬の内に拘束を振りほどく

そのまま懐の銃を出して即射撃、再び戦闘を開始した

……まあ結局、一分足らずでまたも抑え込まれてしまったわけだが

その後、誰かが西の界王様を連れてきて三人で情報交換

事態を完全に把握した私は、漸く拘束から解放された

そして何の縁か

『虚を突いたとはいえ、俺の拘束を一度外した』

ということで目に留まり、私も他にすることが無かったので手伝いとして修行相手をすることに

まあつまり何が言いたいかというと、今の私がいるのも『これ』のおかげだということさ

私の中に半分流れる魔族の血

それによる一時的な変身、『魔族化』のね

「!?」

真名へ向け気弾を次々と放っていたフーログは、彼女の変化にいち早く気付いた

『何だ何だ何だ何だーーー!?真名選手の様子が!』

『ふむ……面白くなってきたわね』

古が界王拳を使った時と優るとも劣らぬほど、全身から魔力（古の場合は気）が吹き出している

そしてその魔力波に染められるかのごとく、彼女の髪全てが変色を始めたのだ

白、いや、眩く輝かせる白銀の髪へと

（何だあれは!?前にあいつを見た時は、あんな変身はしていなかっ……）

続いてフーログの全身に走る、悪寒

先ほどから光を放っていた真名の左眼、魔眼も著しく変貌

煙とも霧とも違う青白いものが瞳からは溢れ、そのまま左眼はフーログを見据えていた

フーログは気弾の雨はそのままにしながらも、異様な変身を見せた真名の動向により一層注意を注ぐ

そして以前と比べ楽々とかわす真名は、再び左手を額に

反撃が、始まった

～観客席～

「ちょっ、何か龍宮が変身したんだけど！？」

「髪の毛が私みたいに真っ白になっちゃいましたー！」

これを受けて、客席中は大騒ぎ

無論、真名のあの姿を初めて見たネギ達も同様

大半の者は大慌て、唯一の例外がコタロー

（半魔族（ハーフ）、か……ちゅーことはあの左眼もやっぱり、魔族と契約云々やのうて完全な遺伝モンか……）

自身の変身と似通った点があったのを早々に見つけ、状況を彼らの中では一番早く把握

とは言ってもコタローも、表に出してないだけで少なからず驚いていた

変身の件もそうだが、それ以上に真名のパワーアップに

加えて、動揺を内に抑えて多少ながら冷静さを取り戻した者が一人

夕映である

変身による真名の能力上昇を納得した様子で見た後、今度は別のことを考え始めていた

（……やはりフーログさんの戦い方が不自然です、龍宮さんの攻撃の命中を過剰なまでに恐れています）

現在真名は、瞬間移動を多用した撹乱作戦を実行

移動して一発射撃、直後に再び瞬間移動

つまりは、ヒットアンドアウェイ戦法

様々な方向から方向を繰り出し、隙有らば懐に潜り込んでさらに強力な一撃を喰らわせんとするもの

これに対しフーログはただ、身を大きく翻して回避するのが殆どきところ……予選で何処かを負傷して、それを庇ってるですか？）

（多少のダメージを覚悟してでも、ここは現状回復のために動くべ

夕映の疑念は晴れぬまま、試合は更なる展開を見せる

「どうです？全力を出して戦いたくても、縛りを課してる現状では無理だというのは」

「……っ！」

魔力、そして気にはまだ枯渇は暫く見えそうにない真名

攻撃を続行しながら、フーログに対し問いかけていた

『先ほどとは打って変わって、真名選手がフーログ選手相手に攻め立てております！』

『けど、フーログちゃんにダメージは無い……まだ分からないわね』

フーログは無言のまま、ただ真名の銃撃をかわし続ける

真名としても命中率を上げるためにはもう少し接近したいところだが、それはせずに中距離を維持

移動場所にヤマを張られ、こちらの攻撃に先んじての攻撃を浴びることを阻止するため

「確信に至ったのは、そう……私の背中に攻撃を打ち込んだ時」

真名はフーログの斜め右後ろに移り、頭部めがけて射撃

背を大きく反らし、フーログはこれを避けた

「威力が、気弾のそれに反してかなり『期待外れ』だった。おそらくあれ以上の攻撃は容易いはず、では何故それをしなかったか」

避けた直後にフーログは気弾を放つが、それによりも速く真名は瞬間移動

今度は上空、フーログの真上に移動する

「簡単なこと。あれ以上の威力の打撃攻撃をすると……」

「はあああああっ！」

「おっと」

「！？」

フーログは真上にいた真名に気弾

しかし真名は攻撃をせず、現れてすぐに瞬間移動でまた姿を消す

ワンテンポのズレ

フーログは体勢の立て直しを遅らせることとなり

「縛りの範囲を超えるから」

「っ！」

『おおおっ！真名選手の攻撃が命中しました！』

お次の真名の攻撃の回避に失敗、ついに捉えた

やむなくガードに使った右手に被弾し、あがる煙

爆発後すぐさま、フーログはそれを庇うように袖の中へと仕舞い込む

その間にまた真名は場所を移っていた

「なぜそんなことを？『本来のあなた』ならこの程度のダメージ、何とも無いに決まっている」

「……黙れえぇっ！」

攻撃を回避しつつ、フーログは叫びながら上空へ高速で上昇

それを見た真名は、逃がさず瞬間移動で後を追う

「（声まで変えてあるのか、凄いな）まだ証拠はありますよ。予選1試合目と比べての戦術変更、気弾の色、南の界王やパポイとの明らかな別行動……『あなたが本物のフーログじゃない』というね」

「口から、出まかせをっ！」

真名は右手をフーログに伸ばしたが、撃つより先にフーログは左手で彼女の手首を掴んだ

密着した今の状態では瞬間移動を図っても二人揃って移動し、回避の意味を成さない

してやったりと笑みを浮かべるフーログに、真名は未だ冷静さを維持

残る右手を使って袖越しに殴ろうとするフーログへ顔を近づけ、ボソリと呟いてみせた

「実況席。早乙女が何かを言いに行こうとしてますよ」

「何！？」

フーログは並々ならぬ動揺を見せ、思わず攻撃を中断してまで視

線を下へ

『おや？何やらフーログ選手がこちらの方を見ていますが……』

実況席にいたのは、試合開始前と変わらずキノコ男と大界王の二人だけだった

やられたっ！そう心の奥底で叫びながら、フーログが視線を戻した先には

「残念、では公開タイム」

真名が左手を銃の形に変えており、顔面へ成す術もなく撃ち込まれた

『決まったーーーー！真名選手の攻撃が、フーログ選手にクリーンヒットです！』

実況はこう叫ぶが、真名の本意は別にある

右手の時と同様に、被弾直後爆発して煙をあげるフーログの顔面だが本来真名のこの攻撃では、ここまで大きく煙は出ない

つまり、煙の発生元は別

『フーログ選手！あの攻撃をまともに受け、まだ戦えるんでし……おや？』

煙が晴れていくにつれ、隠れていたフーログの姿が露わに

そこには既に、彼の一番の特徴である緑色の体表は存在していなかった

普通の人間同様の肌色を見せ、顔もカエルのそれにあらず

やはりこちらも一般的な人間の顔立ちであり、頭髪もあって色は黒

『あああああっっと！一体何が起こったというのでしょう！？』

キノコ男も思わず実況席から身を乗り出し、上空へと指を差しながらマイク片手に声を荒げる

指を差されている当人は半ば開き直った様子で、フーログと偽るために身に着けていた聖歌隊風の白い服を脱ぎ捨てた

その下に着込んでいたのは、隆々とした筋肉が浮き彫りになるまで密着された作りの紺の上下

続けて左手に着けられたままのカエルの手も外し、下に落とす

「早乙女のゴーレムを着ぐるみ代わりに……ゴーレム自体が持つ魔力が邪魔をして、他の面々も感知には至らなかったと」

「そういうことだ、加減に大分苦労したがな」

「よくもまあメチャクチャなことを……ちなみに本物はどちらへ？ベジータさん」

「気絶させて便所の用具入れだ、おそらくこの大会が終わるまでは

起きんだろうな」

ベジータはフッと笑い、悪びれた様子もなく真名へと答えを返した

第１３０話　真の姿現る！！真名ＶＳベジータ（後編）（前書き）

今回はわりと早めに書けました（それでも一週間以上空きましたが）、第１３０話を投稿いたします。テストに加え、美術の作品提出とかでも忙しい自分がいます（焦）

ではどうぞ！

第１３０話　真の姿現る！！真名ＶＳベジータ（後編）

～観客席～

『な、なんということでしょう！真名選手の攻撃直後、フーログ選手の中から別の人物が姿を現しました！』

「え！？ベジータさん！？」

「なんでベジータさんがおんねん！」

「全然気が付かなかった……」

予想だにしなかった、ベジータの登場

真名の変身に対しての驚きを大きく上書きし、悟飯ら少年三人は大きく声をあげた

（まさかのベジータさん……確かにそれならあの気弾中心の攻め方も納得がいくです、ベジータさんの得意戦法ですしね）

しかし、と夕映は納得しながらも残りの疑念についても思考を進める

（それだとあの、攻撃命中を異様に避けた戦法の解決には至ってないです。服が破れてバレる危険性があるにしてもあれはオーバーすぎ……それに先程お二人は、何やら話してたようですｇ……）

が、その思考はすぐに中断

ふと視線を外して別の場所を見ると知り合いの姿が目に入り、半ば反射的に事の原因を把握したのだ

ちょっと席を外させてもらうですと一同に告げ、夕映は立ち上がる

そしてその知り合いの方へ、前進

向こうが気付いて逃走を図るが、問題はない

覚えたての身体強化魔法を使い、瞬く間に捕獲

有無を言わさず後ろ手に取り、絞り上げた

「さて、どういうことか説明してもらえるですか？ハルナ」

「痛い痛い痛い痛い！あんたいつからアスナみたいな馬鹿力になっ、わかった！話すからそれストップ！」

夕映はハルナから手を離し、さあ話すですと正面から彼女の顔を見据える

加えて、逃げてもまたすぐに捕まえるですよ？と言わんばかりの表情である

「はあっ、はあっ……いやホント、偶然だったんだってば」

「いいから話すです」

「……実は……」

～約二時間前～

「ねえベジータさん……いい加減客席戻りません？やけ食いならあっちでも出来るんですし」

「うるさい！」

予選会場の入り口付近

何店かあった出店で片っ端から食べ物を入手したベジータ

このままでは悟空と試合が出来そうにない現状に憤慨しながら、ガツガツと口の中に放り込んでいた

ちなみにあの世では金銭の概念が殆どないため、出店の食べ物は無料支給

しかし客一人ごとに量的制限は当然設けられており、ベジータはハルナを開放する気はさらさら無い

（うーマズい、このままじゃ予選が終わっちゃう……これじゃ一体何のために、ベジータさんと同行するのを我慢してまで来たのやら）

「ガツガツガツ……くそ、もう無くなりやがった。おい、向こうの店からまた焼きそばもらってこい」

「もう無理ですよ……揃って二人分さっきもらったばっかなんですから」

「ゴーレムに行かせればいいだろうが、これなら何人分だろうと貰い放題だ」

「そこまで普通します！？」

この時ハルナは確信した

このままでは大会終了までずっと、ベジータの食料調達係にされて今日一日が終わってしまうであろうと

（な、なんとかしてこの場から逃げないと……）

「おい、どうした？さっさとしろ」

すぐに動こうとしないハルナにベジータは苛立ちを覚え、声の中に怒りを数割増しで投入

ハルナはゆっくりとベジータから離れながら

「ちょ、ちょっとお手洗いに……」

「ほう、それはちょうどいいな。俺も行こうと思っていたところだ」

適当な理由を言って逃走を図るが、不発

意図を読んだかそうでないか、ベジータもハルナの後を追う

（……もっとも俺がついていかずに逃げおおせたとしても、気を探ればすぐに捕まえられるわけだがな）

どうやら前者だったようだ

予選会場内に入るとハルナは、壁に張られた案内図を見てトイレのある方向へ、当然ベジータも一緒

そして到着、前方に『ＴＯＩＬＥＴ』の表記を確認する

「（ううん、仕方ない……とりあえずは個室の中で、これからどうするか考えて……）……あ」

「ん？」

すると彼らより先に、その中へ駆け込む者が一人

うートイレトイレと腹を押さえながら、向かって右にある男性用トイレへ

「おい、あいつを知ってるのか？」

「……ベジータさんも開会式見てましたよね？確か古ちゃんとは別

の銀河の代表で……名前は確か、えっと……」

「つまり、この大会に出ている選手というわけか」

「……ベジータさん？何笑ってるんですか？」

気付けばベジータは、何やらご機嫌そうに薄ら笑いを浮かべていた

フッフッフと笑いながら少しして、ベジータも中へ

「おい、お前は少しここで待っていろ。それと、誰かこっちに来たらすぐに知らせるんだ、いいな？」

「は？」

これ以上は何も言わず、ベジータはハルナをその場に残したまま入っていく

「ベジータさんったら一体何考えて……」

おい

わっ！なんだアンタ！？

ちょっと協力してもらおうか

ちょっ、待っ！ウギャアアッ！

……

「……え゛？」

トイレの中は途端に静まり返り、ハルナの口から濁り気味の声が漏れる

だいたい何が起きたのか、想像に難くない現状況

「べ、ベジータさん？」

「よし、見張りはもういい。さっさとお前も中に入ってこい」

ベジータ以外の声は聞こえてこず

どうやら現在、男性用トイレの中で『意識がある』人物は彼だけの模様

多少の抵抗を感じながらも、ハルナも入室

そこには、予想通りの光景

「お前のあの道具を使って、今すぐこいつの着ぐるみを作れ」

「あの、私が作れるのはゴーレムだけなんで着ぐるみはちょっと……」

「なら俺がかぶったり装着出来るような形状のゴーレムを作れ、これなら問題ないだろ」

「……けどそれって、バレたら色々とヤバいんじゃ」

「しないのか？だったら」

「やらせていただきます！」

ベジータの襲撃を受けたフーログが、トイレの壁に背を預けて気絶中であった

「……それで、ベジータさんの指示に従ったと？」

「だってしょうがないじゃん！あんたあの状況下にいて、ベジータさん相手に断れる！？」

「まあ、分からないでもないですが……」

「でしょ！」

ハルナは半泣きになりながらも、これまでの経緯の説明を完了

思わず夕映も同情の念に駆られたが、やはりこれは色々とヤバかった

「さて、問題はこの後どうなるかですけどね」

夕映は一旦ハルナから視線を外し、試合場の方へ

予想外のハプニング発生のため、試合は一時中断

実況席付近では四人の界王も全員集結

急遽、この第2試合の扱いについて話し合いが行われることとなったのだった

～実況席付近～

「だーかーら！普通に失格が一番無難だって言ってるじゃないか！」

「そうだそうだ！」

真っ先に挙がった意見として、『ベジータを反則負けにし、真名を勝ち上がらせる』というもの

これに賛成するは、東の界王と西の界王

特に西の界王は、自分のところに真名が所属するだけあってより強く主張

一方で、北の界王

「うーむ、しかし予選そのものはベジータ自身で勝ち上がってきたわけじゃし……それにワシのところの三人が、『このままやらせろ』とうるさいんじゃが」

彼自身はそこまで失格を良しとは思っておらず、何より自分のところの選手もそれを希望しているという状態

ちなみに残る南の界王は、『結局パポイが優勝するんだから、どっちでもいい』とのこと

「ダメだダメだ！今大会の参加資格として、『大界王星において修行中の武道家で、界王の許可を得た者』とハッキリこのポスターに書かれてるんだ！そんなこと認めるか！」

西の界王はどこからか一枚の紙を取り出し、北の界王に突きつける

それは以前真名が古にも見せた、あの世一武道会のポスター

そこには出場条件として確かに、西の界王が言ったようなことが書かれていた

「第一自分の担当銀河でない星の者を参加選手にするなんて、卑怯ではないか！」

「……お主も人のこと言えんじゃろが」

「何だと！それを言ったらそっちだってよそ者を！」

「古はよそ者でも、地球出身じゃからいいんじゃもーん」

……話がいつの間にか脱線

とりあえずこのままいくとズルズル行きそうなため、東・南の界王がそれぞれ止める

さて一方で真名とベジータは、試合中断と言われ仕方なく地上に降りて試合場で待機

真名は魔族化を一時的に解いて息をフーと吐き、ベジータは長々と話している界王達にイライラしながら腕を組む

（さて、常識的に考えればベジータさん失格で私の勝ち上がり。準決勝戦は対戦カードを抽選をし直して組むから未確定ではあるが、師匠との対戦をまたも避けられる可能性がある）

しかし問題が一つ、と真名はある人物を注視

彼ならばこの半ば確定ともいえる現状をもしかしたら

いや、その気になればほぼ確実に覆そうとしてくるだろう

（まあ元よりあの人と当たった時点で、勝ち上がりは絶望な状態だったわけだが）

あえてベジータの正体を明かす真似をしたのは、一応ながら先を見据えてのこと

おそらくあのまま劣勢が続けば、ベジータは誰に言われずともパワーを上げて結局正体は判明していただろう

ならばもし反則が取られて真名が勝つケースが発生した場合、序盤の内から正体を明かしてしまった方が体力を温存することが出来る

（希望的観測でしかないんだがな……なんせあの方なら、十中八九やりかねない）

「ねえねえ、さっき小耳に挟んだんだけど、あのベジータちゃんって悟空ちゃんのお仲間さんなのよね？」

（そらきた……）

「いいじゃない出しちゃいましょうよー、悟空ちゃんやパイクーハンちゃんとの対決とか見たいじゃない！というか出しなさい、大界王命令よ！」

四人の界王の間に突如割って入ってきたのは、他でもない大界王だった

『えー、会場の皆様にお伝えいたします。フーログ選手の中身が別人だった件についてですが、大界王様の強いご希望もあり、南銀河代表とは別にして特別枠での大会参加が正式に決定いたしました』

キノコ男はこめかみ辺りに流れる汗をハンカチで拭きながら、界王達の協議（というかもはや大界王の独断）によって決められた決定事項を実況席のマイクで観客達に伝達する

一部の西・南銀河の者達からは不満の声もあったが、それを遥かに上回る残りの者達による歓声が完全にかき消した

『つきましては只今より、中断をしておりました第2試合を再開いたします。お二方、準備の方はよろしいですか？』

「……構わないよ」

「俺もだ」

真名は半ば諦めた表情をしつつもパイクーハンの前ということもあってか、再び魔族化して自身の全力が出せる態勢

ベジータは今まで力を出せずにいた鬱憤を晴らすかの如く、全身から燃え上がるような気を滾らせる

「さっきまでの俺と、同じだと思わんほうが身のためだ」

「承知してますよそんなこと」

『それでは、始め！』

（私の勝率は幾ら残っているのやら……多少は粘らせてもらおうか）

キノコ男の宣言と同時に、真名はベジータに右手を向けつつ左手を額に

攻撃と防御、どちらも瞬時に行える万全の構え

ベジータを決して視界から外さぬよう、今日一番の集中力で注視

寸分違わぬ狙いを彼の頭部に定めて撃ち、攻撃の命中を確認するよりも先に瞬間移動で今いる場所から離れた

（なんせ、移動先は対戦相手の近くだけとは限らないんでね）

真名はベジータから大きく距離をとり、移動した先は

「ちょっとごめんよ」

「おわわっ！びくりしたアル！」

古菲の真横

足を着かないギリギリの場所で静止し、試合場にいるベジータを見やる

瞬間移動に要した時間はほんの一瞬、ベジータが動いてないこと

もあって見失うことはなかった

（私以外の人が間近にいるんだ、下手に攻撃も出来まい。まあ流石にずっといるわけにもいかな……！？）

真名は自分の眼を疑いかけた

普通に考えて、もし試合中に対戦相手以外に負傷を負わせることになったらどうなるのか

ベジータだってわからないでもあるまい

ところがどっこい、これが現実

真名と古、二人まとめて飲み込まんほどの大きさの気功波

それが躊躇なく飛んできた

（何故迷いもなくこんな攻撃が撃てる！？）

幸い真名の左手は額にまだあったので、驚愕を残しつつも瞬間移動で上空に退避

（それにしてもメチャクチャだろあの人は……っ、しまった！古が！）

慌てて真名は視線を、先ほどまでいたあの場所へ

見れば気功波は二人の後ろにいた入場ゲートの一角を破壊し、爆煙をあげている

らしくなく冷や汗が流れかけたが、僅かに視線をズラすとそれは杞憂となって終了

全身から赤い気を出しながら、古菲は両目を大きく見開きながらも無傷で芝生の上に身を預けていた

（ギリギリで回避していたか……良かっ）

「よそ見をしてていいのか？」

「！？」

次に真名の五感が彼女へ伝えたのは、二つ

聴覚が、こちらへ接近してくるベジータの声を

視覚が、こちらへ飛んでくるベジータの拳を

突然すぎて瞬間移動での回避は叶わず、右手を銃から普通のパーに戻して受け止めた

「そらそらそらそらそらあああっ！」

ベジータの攻撃は続く

当然右手一本だけでは捌き切れるわけもなく、瞬間移動用にと額に当てていた左手もやむを得ず動員

攻防一体であった真名の先程の構えは、本気のベジータによって

いとも簡単に崩された

戦いは空中での接近戦に突入

『私に苦手な距離は無い』と以前古に豪語したこともあった真名だが、今のベジータ相手では別問題

距離を取ろうと何度も試みるが、猛然と攻め込むベジータはそれを許さない

両者の間にある基本能力の差を自慢の眼、動体視力を用いて補ってはいてもやはり限界間近

既に数撃が真名の身体を捉え、直撃ではないもののそれだけで体力を大きく奪われた

「中々粘ってるじゃないか……だが！」

ここで、ベジータは勝負を決めにかかる

気を全身から放出して真名を無理やりに後退

しめたと真名は瞬間移動&右手銃の構え

しかしそのどちらも、結局は未発動終い

反応もほとんど出来ず、構えた次の瞬間にはベジータの拳が自身の腹を抉っていたのだから

身体がベジータの拳から離れ、場外の芝生へとふっ飛ばされる直前

真名の眼には、髪と気を黄金に染めたベジータが確かに映った

（そうだった、まだ向こうにはあれがあった……うぐっ！）

地上に叩きつけられ、背中に走る激痛

『真名選手、場外！ベジータ選手の勝ちです！』

（手の内を先に出し尽くした私の負け、か……）

「一足先に待っているぞ！カカロット！」

「ああ！オラもこの後の試合、ぜってー勝つかんな！」

かくして、ハプニングあり決意ありの第2試合は決着したのであった

『さあ、続きまして第3試合の抽選です！大界王様、どうぞ！』

『はーい』

試合場の整備、加えてベジータがぶっ壊した入場ゲートの修復も終了

始まった三度目の抽選、大界王が箱の中に手を入れる

各銀河の界王や選手、そして観客の視線が大界王一点へ向けられた

ちなみにベジータは暫く試合が無いのが分かってるため、またハルナを強制連行して食べ物を調達しに出店へ直行である

「そろそろオラ達も、試合がしてえところだな」

「そアルな、誰が相手だろうとどんとこいアル！」

「誰が相手だろうと、か……決勝トーナメントが始まる前に言ったことが、まさか現実になるとはな」

「「？？」」

悟空と古は戦意を高ぶらせ、自分の出番はまだかと待ちわびている状態

次にオリブーが隣で微笑しながら言葉を漏らしたが、二人は意味が理解できず頭へ疑問符

それに気付いたオリブーは一瞬表情を強張らせた後、北の界王と顔を合わせて今度は悟空達へ

「お前達まさか……今の状況が分かってないのか？」

「何がだ？」

「アル？」

「……予選通過者で、まだ試合をしてないのは何人だ？」

「んっと、八人いたのが試合を二回やったから……」

「四人アルよね？」

「俺達北の銀河代表で、試合をしてないのは合計何人だ？」

「んなの、ここにいる三人に決まってんじゃねえか！」

「そうアル！」

『えっと一人目は……はい、オリブーちゃん！頑張ってね！』

「それじゃあ訊くが、俺達三人は全員一回戦を通過することが可能か？無理だろ」

「「え？……ああああああっ！」」

数秒考えた後、二人は驚きのあまり大声をあげていた

そう、まだ一回戦を戦っていないのは四人

悟空、オリブー、古、そしてパポイ

どう組み合わせても、北の銀河代表同士の試合が1カード組まれてしまうのだ

大半の者は第2試合の組み合わせが決定した時点でそれを理解していたが、ここにいる二人は違った

「もし俺の対戦相手がパポイだった場合はお前達二人が、そうでなかったらその呼ばれたお前達どっちかと俺が……」

『二人目は……おおっ！ようやく来たわね、悟空ちゃんよ！第3試合はオリブーちゃん対悟空ちゃん！』

「……互いを敵として戦うわけだ、よろしく頼むぞ悟空」

オリブーの眼が、明らかに数瞬前と変わっていた

第１３０話　真の姿現る！！真名ＶＳベジータ（後編）（後書き）

クウネル
「どうも読者の皆様、あとがきコーナーの時間です」

エヴァ
「前編ではまさかのあとがき完全放棄か」

クウネル
「また定期試験が近付いていて大焦りの作者です」

エヴァ
「まあこのコーナー書くのも結構時間かかってるしな、本編も最近一話一話のボリュームが増えてるし」

クウネル
「というわけでゲストのご紹介、今回はこの方」

ターレス
「おい、何で俺の部下達が来てねえんだよ？」

クウネル
「悟空さんそっくりのサイヤ人、ターレスさんです」

エヴァ
「……リクエストは確か『ターレス軍団』だったよな？」

クウネル
「他の部下を出すと手間が掛かるだろうということでカットしまし

た」

エヴァ&ターレス
「おい」

クウネル
「ではコーナーの進行を、今回の話ですが……」

エヴァ
「やってくれたな」

クウネル
「はい、見事にやってくれました」

ターレス
「あの触覚が生えたような女も苦労してんな」

エヴァ
「しかもフーログ本人の出番は、トイレに駆け込んで襲撃されて、とたったこれだけだし」

クウネル
「ちなみに服そのものはフーログさんから剥ぎ取ったオリジナルですので、現在トイレで気絶中のフーログさんは全ｒ」

エヴァ
「言わんでいい！」

ターレス
「んで、大会に正式参加が決まって圧勝ってわけか」

クウネル
「あと、龍宮さんの魔族化がこの小説で初登場しましたね」

エヴァ
「……そういえば以前、『ボージャック戦で魔族化しなかったのは何でですか?』という質問が感想に来ていたな。単に作者が忘れてただけだが」

クウネル
「では最後に、次回予告です」

ターレス
「さて、次回のネギドラ!は……」

エヴァ
「同じ銀河同士の対決、孫悟空とオリブーの試合だ」

クウネル
「龍宮さん同様、予選ではあえて自ら負けて手の内を隠していたオリブーさん」

ターレス
「カカロットを相手に、ようやくそれが拝めるってわけだ」

エヴァ
「次回の投稿は来週いっぱいまでにはしたいそうだが……いかんせんテストが近いため、無理かもしれん」

クウネル

「その場合はサブ連載の方を投稿すると思いますので、一週間ほど経ちましたら活動報告をご確認ください」

ターレス
「それじゃあ、次回のネギドラ！も……」

エヴァ&クウネル
「お楽しみに！」

クウネル
「そういえばちょっと前の話になりますが、アックマンがあなたの技を使ってましたね」

ターレス
「ああ、あの悪魔野郎か。地獄に来てすぐ喧嘩売られたんで何度か返り討ちにしてやったら、いつのまにか覚えてやがったんだよ」

エヴァ
（……するともしかして、あの四バカ共の技も何個か使えるのか？）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1618k/

ネギドラ！　ネギパーティー＋α　異世界へGO！？

2011年11月20日05時42分発行